

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 179

# 百間川原尾島遺跡 6

旭川放水路(百間川)改修  
工事に伴う発掘調査 XV

2004

国土交通省岡山河川事務所  
岡山県教育委員会

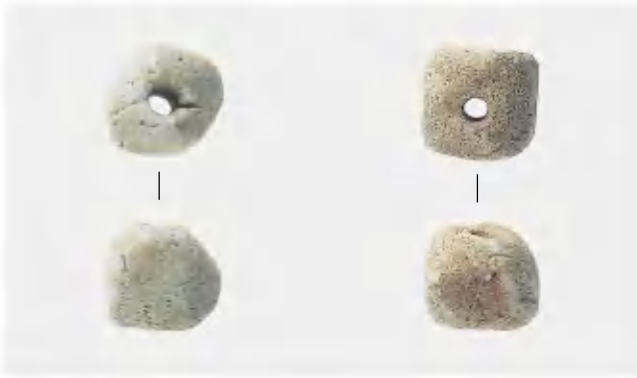


1 11～15 B・C区弥生時代後期遺構検出状況（南上空から）



2 11～14 B・C区弥生時代後期遺構検出状況（上空から、上が北東）





1 「ファイアンス状の物質」製の玉



3 銅鏃・鉄鏃



2 旧河道2出土遺物（赤色顔料付着土器）



4 土器棺墓出土土器

# 序

百間川（旭川放水路）は、承応3年（1654）の大洪水を契機に、岡山城下を洪水から守るため、当時岡山藩の政治顧問であった熊沢蕃山が越流堤と放水路を組み合わせた「川除けの法」を考案し、その治水技術論の積極面を踏襲するとともに上道郡の洪水防御と百間川下流の新田開発を目的として後の郡代津田永忠が設計・施工を行い、貞享3年（1686）に完成したといわれ、その後、幾多の洪水から岡山のまちを守ってきました。

しかし、一方で百間川沿川では通水能力が小さく、また、堤防が弱いことなどから、幾度となく氾濫に見舞われてきました。

このため、国土交通省（旧建設省）では地元の方々をはじめとする関係者のご理解とご協力を賜り、昭和49年（1974）から百間川の本格的な改修に着手し、百間川を横切る水路、道路の整備から築堤、低水路掘削、排水機場建設など百間川の景観が一新しました。

今後は、支川砂川での残工事の促進を図るとともに放水路の主目的である旭川の洪水を確実、かつ安全に流下させるため、河口水門の増築、分流部の改修及び河道掘削を行うこととしています。

改修事業により新たに生み出された河川敷は、スポーツ・レクリエーション・自然観察の場として憩いの場を創出し、市民の方々に広く利用されています。

百間川の遺跡群は、通称大曲と呼ばれている岡山市米田の百間川中流部（江戸期以前の海岸線）より、岡山市原尾島にある百間川橋梁の上流までの広い範囲に点在しています。

百間川の遺跡調査は、改修工事に先立ち、工事により改変する部分について記録保存するため、昭和52年から岡山県教育委員会に発掘調査を委託し、実施しているところです。

本書にかかわる調査は平成7年度および10～13年度に実施され、報告書作成作業は平成15年度に行われたものです。発掘された出土品は、縄文時代から中世までの幅広い時代にわたっており、この地が古代から営々と連なる人々の活動の場であり、人間活動に適した豊かな風土であったことを物語っています。

本書は、百間川遺跡群の報告書としては15冊目、百間川原尾島遺跡としては6冊目に当たり、本書が埋蔵文化財に対する理解の増進と、学術、文化等に資するため、広く活用されることを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表します。

平成16年2月

国土交通省 岡山河川事務所  
所 長 渡 部 秀 之

# 序

岡山県のほぼ中央部を南北に貫流し児島湾に注ぐ旭川は、その下流域に広大な沖積平野を形成し、肥沃な穀倉地帯を生みました。この岡山平野の各所と平野を望む周囲の各丘陵には、この地域の歴史を物語る縄文時代から中世に至る数多くの遺跡が知られています。

また、江戸時代の初め頃には岡山城下を洪水から守るため、人工的に旭川の左岸から放水路（百間川）を分岐させ、操山丘陵の北裾から東端を南下させて児島湾に注ぐように築造されたことも、広く知られているところです。

この旭川放水路（百間川）の本格的な改修工事は、当時の建設省によって昭和49年度から着手されていますが、岡山県教育委員会は河川敷内に所在する遺跡の取り扱いについて建設省岡山河川工事事務所（現国土交通省岡山河川事務所）と事前に保存協議を重ね、やむをえず破壊される部分については記録による保存処置をとってまいりました。

発掘調査は、昭和51年度の確認調査に引き続いて翌年度から本調査に着手し、本年度で丸26年を経ました。この間の調査成果は、縄文時代から中世に至るまで、県下は言うに及ばず全国的にも非常に注目されています。これらの成果は順次報告書にまとめ、昭和55年から刊行・公開しておりますが、本書は百間川遺跡群の報告書としては15冊目、百間川原尾島遺跡では6冊目に当たります。

本書に収録した調査区では、弥生時代後期の竪穴住居の周囲に外溝をもつ住居群や百間川原尾島遺跡では初めての調査例となる弥生時代前期の竪穴住居、さらに弥生時代前期の旧河道や古墳時代の大溝から出土した多量の木製品等の発見が特筆されます。そのほかにも、弥生時代後期の土壙からは、海外との繋がりを示す「ファイアンス状の物質」製の玉が出土していて、大変注目されます。

本報告書が文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施及び報告書の作成にあたりましては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方から数々の御教授と御指導を賜り、また国土交通省岡山河川事務所をはじめ関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成16年2月

岡山県古代吉備文化財センター  
所長 正岡 睦夫



# 例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）と岡山県の委託契約に基づき、平成7（1995）年度、及び平成10（1998）年度から平成13（2001）年度に発掘調査を実施した、百間川原尾島遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化課が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 本報告書は百間川原尾島遺跡の報告書としては6冊目に当たり、報告書名の「百間川原尾島遺跡」は岡山市原尾島に所在する原尾島遺跡のうち、百間川の河川敷にかかる遺跡範囲をさす。
- 3 発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当し、本報告書に掲載した発掘調査の地区・担当者・期間等は、本文の表1に示す通りである。
- 4 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、次の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは、終始有益な御指導と御助言を賜った。記して深く感謝の意を表す次第である。  
池葉須藤樹（元岡山市立犬島中学校校長）  
亀田修一（岡山理科大学教授）〈平成14年度から〉  
近藤義郎（岡山大学名誉教授）  
角田 茂（元岡山市立岡輝中学校教諭）〈平成12年度まで〉  
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課長）  
西川 宏（岡山理科大学非常勤講師）〈平成13年度〉  
水内昌康（元岡山県文化財保護審議会委員）  
山本悦世（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教授）
- 5 本報告書の作成は、平成14（2002）年度に岡山県古代吉備文化財センター柳瀬昭彦・小嶋善邦・松尾佳子・稲谷知子が担当した。
- 6 本文の執筆は、調査と整理を担当した小嶋・松尾、調査を担当した宇垣匡雅・柴田英樹・高田恭一郎・物部茂樹、整理を担当した柳瀬・稲谷が分担して行い、文責は各項目あるいは遺構ごとの文末に示した。
- 7 本報告書の編成は、調査関係者の意見をもとに整理担当者が分担して行い、全体編集は小嶋が担った。
- 8 本報告書に関係する遺物のうち、一部について鑑定・同定あるいは分析を次の諸氏ならびに機関に依頼し、有益な御教授を得るとともに、そのいくつかについて報文をいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

「ファイアンス状の物質」の分析 肥塚隆保（独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所）  
花粉分析・プラントオパール分析 パリノ・サーヴェイ株式会社  
土器の胎土分析 白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）  
花粉分析・寄生虫卵分析 環境考古研究会

動物遺存体の分析	富岡直人（岡山理科大学理学部）
炉の土壌分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
赤色顔料の分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
鉄滓の鑑定	大澤正巳（九州テクノリサーチ）
石材鑑定	妹尾 護（倉敷芸術科学大学国際教養学部）
木製品の樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社、環境考古研究会

9 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

10 本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 百間川遺跡群の各報告書は、基本的に小字を基にした調査区を節で扱ってきたが、本報告書の対象範囲の大半が丸田地区に属するため全体を一調査区とし、これまで項で扱ってきた例えば「調査区の概要」「弥生時代前・中期の遺構遺物」等を節で扱う。
- 2 本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は基本的に磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏6°30′を測る。
- 3 本報告書に使用した高度は、すべて海拔高度である。
- 4 本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は次のとおり統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。

遺構 竪穴住居・建物・柱穴列：1/80、井戸・土壙・溝断面：1/30、土器棺墓：1/20

遺物 土器・瓦：1/4 石器・石製品：1/2、1/3 木器・木製品：1/4 金属製品：1/2、1/3

土製品：1/3 ガラス製品：1/1 骨角製品：1/2 玉類：1/1

- 5 本書の遺構配置図に示す遺構名は、原則として下記に示すように略称を用いた。  
竪穴住居：住 建物：建 井戸：井 土壙：土 土器棺墓：墓
- 6 遺構番号は、全体にわたって遺構の種類ごとに1から通し番号を付した。
- 7 遺物番号のうち土器・瓦以外のものについては、その材質を示すため番号の頭に次に示す略号を付した。なお、遺物番号は各種類ごとに通し番号とした。

石器・石製品：S 木器・木製品：W 金属器・金属製品：M 土製品：C

ガラス製品：G 骨角製品：B ファイアンス状の物質品：F

- 8 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のために口径の推定が困難なものである。
- 9 遺構図における、被熱範囲や炭の分布範囲については下記のスクリーントーンで表現し、そのほかのものに関しては、個別に掲載している。

被熱範囲…  炭の範囲… 

- 10 土層断面図等に使用した土色は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものもあるが、各調査者の記述に従った。
- 11 本報告書第2図に掲載した地図は、国土地理院発行1/25000地形図の和気・西大寺・岡山北部・岡山南部を複製・縮小し、加筆したものである。
- 12 本報告書の時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。また、弥生時代から古墳時代前半期の時期区分は、「百間川原尾島1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39で採用した土器編年に基づき、百・後・IIなどの略称も使用している。



## 編年対比表

遺跡				百間川	雄町 <sup>(註1)</sup>	上東・川入 <sup>(註2)</sup>
時代						
弥生時代	前期	津島	百間川前期Ⅰ			
		門田	百間川前期Ⅱ	雄町 1		
			百間川前期Ⅲ	雄町 2 船山 3		
	中期	南方	百間川中期Ⅰ	高田 雄町 3		
		菰池	百間川中期Ⅱ	船山 5 菰池 雄町 4		
				前山Ⅱ	前山東 雄町 5	
		仁伍	百間川中期Ⅲ	雄町 6	上東・鬼川市 0	
		後期	上東	百間川後期Ⅰ	雄町 7 雄町 8	上東・鬼川市Ⅰ
					百間川後期Ⅱ	雄町 9 雄町 10
	グランド上層		百間川後期Ⅲ	+	上東・鬼川市Ⅲ	
	酒津		百間川後期Ⅳ	雄町 11 雄町 12	才の町Ⅰ 才の町Ⅱ	
	古墳時代	前期	玉泊六層	百間川古墳時代Ⅰ	雄町 13	下田所
				百間川古墳時代Ⅱ	雄町 14	亀川上層
		後期	玉泊六層	百間川古墳時代Ⅲ	雄町 15	-
						川入・大溝上層

註1 正岡睦夫「雄町遺跡－弥生式土器、土師器－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972年 pp.110～113

註2 柳瀬昭彦「川入・上東－川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年 pp.171～181

# 目 次

巻頭カラー図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 地理的・歴史的環境 .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	2
1 旧石器時代 .....	2
2 縄文時代 .....	3
3 弥生時代 .....	3
4 古墳時代 .....	4
5 古代以降 .....	4
第2章 調査及び報告書作成の経緯 .....	7
第1節 発掘調査の契機と経過 .....	7
第2節 調査および報告書作成の体制 .....	10
第3節 報告書作成の経過 .....	13
第3章 発掘調査の概要 .....	15
第1節 調査区の概要 .....	15
第2節 弥生時代前期の遺構・遺物 .....	17
1 竪穴住居 .....	19
2 土壌 .....	21
3 溝 .....	23
4 水田 .....	25
5 旧河道 .....	26
第3節 弥生時代中期の遺構・遺物 .....	36
1 溝 .....	37
2 水田 .....	40
第4節 弥生時代後期の遺構・遺物 .....	41
1 竪穴住居 .....	44
2 竪穴住居排水溝および周溝 .....	60
3 建物 .....	70
4 井戸 .....	71
5 土壌 .....	88

6	土器棺墓	118
7	炉	122
8	溝	124
9	水田	141
10	土器溜り	148
11	そのほかの遺構	150
第5節	古墳時代の遺構・遺物	151
1	竪穴住居・カマド	154
2	建物・柱穴列	166
3	井戸	170
4	土壇	176
5	溝	177
6	土器溜り	195
第6節	古代以降の遺構・遺物	199
1	建物	202
2	井戸	205
3	土壇	217
4	溝	249
5	道および溝	262
第7節	包含層出土遺物	265
第4章	まとめ	275
第1節	遺構・遺物の概要	275
第2節	弥生土器焼成土壇について	283
第3節	淡路型甕について	285
第4節	弥生～古墳時代の集落変遷	293
付載	自然科学分野における鑑定報告	301
付載1	岡山県原尾島遺跡出土ファイアンス状玉について	301
2	百間川原尾島遺跡の花粉分析・プラントオパール分析	305
3	百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析	315
4	百間川原尾島遺跡における環境考古学分析	319
	遺構一覧（観察）表	
	遺物一覧（観察）表	
	新旧遺構名称対照	
	報告書抄録	
	写真図版	



# 目 次

第1図	遺跡位置	1	第39図	溝17 (1/30)	39
第2図	百間川周辺遺跡分布 (1/50,000)	2	第40図	溝18・19 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	39
第3図	設定グリッドと調査区位置 (1/4,000)	8	第41図	溝20・21 (1/30)	40
第4図	平成7年度調査区 (1/100)	9	第42図	溝22・23 (1/30)	40
第5図	調査区位置 (1/5,000)・ 調査区北東壁断面 (1/60)	15	第43図	水田畦畔 (1/30)	40
第6図	微高地下がり断面 (1/60)	16	第44図	弥生時代中期水田全体図 (1/500)	40
第7図	対象調査区位置および周辺遺構配置 (弥生時代前期、1/2,000)	17	第45図	対象調査区および周辺遺構配置図 (弥生時代後期、1/2,000)	41
第8図	弥生時代前期遺構配置 (1/500)	18	第46図	弥生時代後期遺構配置図① (1/500)	42
第9図	竪穴住居1 (1/80)・ 出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	19	第47図	弥生時代後期遺構配置図② (1/500)	43
第10図	竪穴住居2 (1/80)	20	第48図	弥生時代後期遺構配置図 (11～14B・C区) (1/300)	43
第11図	竪穴住居2出土遺物 (1/4・1/2)	21	第49図	竪穴住居3 (1/80)・出土遺物 (1/4)	44
第12図	土壌1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	21	第50図	竪穴住居4 (1/80)・ 出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	45
第13図	土壌2 (1/30)	21	第51図	竪穴住居5 (1/80)	46
第14図	土壌3 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	22	第52図	竪穴住居5出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	47
第15図	土壌4～6 (1/30)	23	第53図	竪穴住居6 (1/80)	48
第16図	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	23	第54図	竪穴住居6柱穴見通し図 (1/80)	49
第17図	溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	24	第55図	竪穴住居6出土遺物① (上段：覆土から、下段：柱穴から) (1/4)	50
第18図	溝3・4 (1/30)	24	第56図	竪穴住居6出土遺物② (1/3・1/2・1/1)	51
第19図	溝5 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	24	第57図	竪穴住居7 (1/80)	52
第20図	溝6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	25	第58図	竪穴住居7出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1)	53
第21図	溝7～12 (1/30)	25	第59図	竪穴住居7土器溜り出土遺物 (1/4・1/3)	54
第22図	水田畦畔 (1/30)	26	第60図	竪穴住居8 (1/80)・ 出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1)	55
第23図	弥生時代前期水田全体図 (1/500)	26	第61図	竪穴住居9 (1/80)・出土遺物① (1/4)	56
第24図	旧河道1 (1/60)	26	第62図	竪穴住居9出土遺物② (1/4・1/3・1/2・1/1)	57
第25図	旧河道2 (1/100)	27	第63図	竪穴住居10 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)	58
第26図	旧河道出土遺物① (1/4)	28	第64図	竪穴住居11 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)	59
第27図	旧河道出土遺物② (1/4)	29	第65図	竪穴住居12 (1/80)	59
第28図	旧河道出土遺物③ (1/4)	30	第66図	竪穴住居排水溝および周溝配置図 (1/300)	60
第29図	旧河道出土遺物④ (1/4)	31	第67図	竪穴住居排水溝および周溝断面図 (1/30)	61
第30図	旧河道出土遺物⑤ (1/3・1/2)	32	第68図	竪穴住居排水溝および周溝模式図	62
第31図	旧河道出土遺物⑥ (1/4)	33	第69図	溝26出土遺物 (1/4)	63
第32図	旧河道出土遺物⑦ (1/4)	34	第70図	溝27出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1)	63
第33図	旧河道出土遺物⑧ (1/6・1/4)	35	第71図	溝28出土遺物 (1/4)	64
第34図	対象調査区位置および周辺遺構配置 (弥生時代中期、1/2,000)	36	第72図	溝29出土遺物 (1/4・1/3)	65
第35図	弥生時代中期遺構配置 (1/500)	37	第73図	溝32出土遺物 (1/4)	65
第36図	溝13 (1/30)・出土遺物 (1/4)	38	第74図	溝33出土遺物① (1/4)	66
第37図	溝14・15 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)	38			
第38図	溝16 (1/30)	38			

第75図	溝33出土遺物② (1/1) ……………	67	第120図	土壙19出土遺物② (1/4・1/3・1/2) ……………	97
第76図	溝34出土遺物 (1/4) ……………	67	第121図	土壙20 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	97
第77図	溝35出土遺物 (1/4) ……………	67	第122図	土壙21 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	98
第78図	溝36出土遺物① (1/4) ……………	68	第123図	土壙22 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	98
第79図	溝36出土遺物② (1/3・1/2) ……………	69	第124図	土壙23 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	99
第80図	溝37出土遺物① (1/4) ……………	69	第125図	土壙24 (1/30) ……………	99
第81図	溝37出土遺物② (1/3・1/2) ……………	70	第126図	土壙25 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	100
第82図	溝38出土遺物 (1/4) ……………	70	第127図	土壙25出土遺物② (1/4・1/3・1/2) ……………	101
第83図	建物 1 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	71	第128図	土壙26 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	102
第84図	井戸 1 (1/30)・出土遺物① (1/4・1/3) ……………	72	第129図	土壙27 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	103
第85図	井戸 1 出土遺物② (1/4) ……………	73	第130図	土壙27出土遺物② (1/4) ……………	104
第86図	井戸 1 出土遺物③ (1/4) ……………	74	第131図	土壙28 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	105
第87図	井戸 1 出土遺物④ (1/4) ……………	75	第132図	土壙29 (1/30) ……………	105
第88図	井戸 1 出土遺物⑤ (1/4) ……………	76	第133図	土壙30 (1/30) ……………	105
第89図	井戸 1 出土遺物⑥ (1/4) ……………	77	第134図	土壙31 (1/30) ……………	106
第90図	井戸 2 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	78	第135図	土壙32 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	106
第91図	井戸 3 (1/30) ……………	78	第136図	土壙33 (1/30) ……………	106
第92図	井戸 4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	79	第137図	土壙34 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	107
第93図	井戸 5 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	79	第138図	土壙35 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	107
第94図	井戸 6 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	80	第139図	土壙36 (1/30) ……………	107
第95図	井戸 7 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	81	第140図	土壙36出土遺物 (1/4) ……………	108
第96図	井戸 7 出土遺物② (1/4) ……………	82	第141図	土壙37・38 (1/60) ……………	108
第97図	井戸 7 出土遺物③ (1/4) ……………	83	第142図	土壙39 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	109
第98図	井戸 8 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	84	第143図	土壙40 (1/30) ……………	109
第99図	井戸 9 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	85	第144図	土壙41 (1/60) ……………	110
第100図	井戸10 (1/30) ……………	86	第145図	土壙42 (1/60) ……………	110
第101図	井戸11 (1/30) ……………	86	第146図	土壙43~45 (1/30) ……………	110
第102図	井戸11出土遺物 (1/4) ……………	87	第147図	土壙46 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	111
第103図	井戸12 (1/30) ……………	88	第148図	土壙47 (1/30) ……………	112
第104図	井戸13 (1/30) ……………	88	第149図	土壙48 (1/30) ……………	112
第105図	土壙 7 (1/30) ……………	88	第150図	土壙49~51 (1/30) ……………	112
第106図	土壙 7 出土遺物 (1/4) ……………	89	第151図	土壙52 (1/30) ……………	113
第107図	土壙 8 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	89	第152図	土壙53 (1/30) ……………	113
第108図	土壙 9・10 (1/30) ……………	90	第153図	土壙53出土遺物 (1/4・1/3・1/1) ……………	114
第109図	土壙 9 出土遺物 (1/4) ……………	90	第154図	土壙54 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	115
第110図	土壙11 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	91	第155図	土壙55 (1/60) ……………	115
第111図	土壙12 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	92	第156図	土壙56 (1/30) ……………	115
第112図	土壙13 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	93	第157図	土壙57 (1/30) ……………	115
第113図	土壙14 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	93	第158図	土壙58 (1/30) ……………	116
第114図	土壙15 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	94	第159図	土壙59 (1/30) ……………	116
第115図	土壙16 (1/30) ……………	94	第160図	土壙60 (1/30) ……………	116
第116図	土壙17 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	95	第161図	土壙61 (1/30) ……………	117
第117図	土壙17出土遺物② (1/3) ……………	95	第162図	土壙62~64 (1/30) ……………	117
第118図	土壙18 (1/30) ……………	95	第163図	土器棺墓 1~3 (1/20) ……………	118
第119図	土壙19 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	96	第164図	土器棺墓 1 出土遺物 (1/4) ……………	119

第165図	土器棺墓 2 出土遺物 (1/4) .....	120			
第166図	土器棺墓 3 出土遺物① (1/4) .....	121			
第167図	土器棺墓 3 出土遺物② (1/4) .....	121			
第168図	炉 1・2 (1/30) .....	122			
第169図	炉 2 出土遺物 (1/4) .....	123			
第170図	炉 3 (1/30) .....	123			
第171図	溝39・40 (1/30) .....	124			
第172図	溝41 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	124			
第173図	溝42 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	124			
第174図	溝43 (1/60) .....	125			
第175図	溝43出土遺物 (上層) ① (1/4) .....	125			
第176図	溝43出土遺物 (上層) ② (1/4・1/2) .....	126			
第177図	溝43出土遺物 (下層) ① (1/4) .....	126			
第178図	溝43出土遺物 (下層) ② (1/4) .....	127			
第179図	溝43出土遺物 (下層) ③ (1/4・1/3・1/2) .....	128			
第180図	溝44・45 (1/60) .....	128			
第181図	溝44出土遺物 (1/4・1/3・1/2) .....	129			
第182図	溝45出土遺物 (上層) (1/4) .....	130			
第183図	溝45出土遺物 (下層) (1/4・1/2) .....	131			
第184図	溝46・47 (1/60) ・出土遺物 (1/4) .....	132			
第185図	溝48 (1/60) ・出土遺物 (1/4) .....	132			
第186図	溝49・50 (1/30) .....	133			
第187図	溝51 (1/60) ・出土遺物 (1/4) .....	133			
第188図	溝52 (1/60) .....	134			
第189図	溝53・54 (1/60) .....	134			
第190図	溝53出土遺物 (上段：上層、 下段：下層) (1/4・1/3) .....	135			
第191図	溝54出土遺物 (1/4・1/2) .....	136			
第192図	溝55 (1/30) .....	136			
第193図	溝56・57 (1/60・1/30) .....	137			
第194図	溝58 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	137			
第195図	溝59・60 (1/30) .....	138			
第196図	溝61 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	138			
第197図	溝62・63 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	138			
第198図	溝64 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2) .....	139			
第199図	溝65 (1/30) .....	139			
第200図	溝66 (1/30) .....	139			
第201図	溝67 (1/30) .....	140			
第202図	溝68 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	140			
第203図	溝69 (1/30) .....	140			
第204図	溝70～72 (1/30) .....	141			
第205図	溝73・74 (1/30) .....	141			
第206図	水田耕土出土遺物 (1/4・1/2) .....	141			
第207図	対象調査区および周辺遺構配置図 (弥生時代後期末洪水砂埋没遺構、 1/2,000) .....	142			
第208図	弥生時代後期末洪水砂埋没遺構配置図① (1/500) .....	142			
第209図	弥生時代後期末洪水砂埋没遺構配置図② (1/500) .....	143			
第210図	大畦畔 (1/30) .....	144			
第211図	小畦畔 (1/30) .....	144			
第212図	島状高まり (大畦畔) (1/30) .....	144			
第213図	微高地下がり (1/60) .....	144			
第214図	地形測量図と稲株痕跡密度 (13～15 B・C区) (1/300) .....	145			
第215図	水路 7 (1/30) .....	147			
第216図	土器溜り 1 出土遺物① (1/4) .....	148			
第217図	土器溜り 1 出土遺物② (1/4) .....	149			
第218図	土器溜り 1 出土遺物③ (1/4・1/3・1/2) .....	150			
第219図	対象調査区および周辺遺構配置図 (古墳時代、1/2,000) .....	151			
第220図	古墳時代遺構配置図① (1/500) .....	152			
第221図	古墳時代遺構配置図② (1/500) .....	153			
第222図	古墳時代遺構配置図 (11～14 B・C区) (1/300) .....	153			
第223図	竪穴住居13 (1/80) .....	154			
第224図	竪穴住居14 (1/80) ・出土遺物 (1/4) .....	154			
第225図	竪穴住居15 (1/80) ・出土遺物 (1/4) .....	155			
第226図	竪穴住居16 (1/80) ・出土遺物 (1/4) .....	156			
第227図	竪穴住居17 (1/80) .....	156			
第228図	竪穴住居18 (1/80) ・出土遺物 (1/4・1/3) .....	157			
第229図	竪穴住居19 (1/80) ・出土遺物 (1/4) .....	158			
第230図	竪穴住居20 (1/80) ・出土遺物 (1/4・1/3) .....	159			
第231図	竪穴住居21 (1/80) ・出土遺物 (1/4・1/3) .....	160			
第232図	竪穴住居22 (1/80) ・出土遺物 (1/4・1/3) .....	160			
第233図	竪穴住居23 (1/80) ・出土遺物 (1/4) .....	161			
第234図	竪穴住居24 (1/80) ・出土遺物 (1/4) .....	162			
第235図	竪穴住居25・26 (1/80) ・ 出土遺物 (1/4・1/1) .....	163			
第236図	竪穴住居27 (1/80) .....	164			
第237図	竪穴住居28 (1/80) ・出土遺物 (1/4) .....	165			
第238図	カマド 1 (1/30) .....	165			
第239図	カマド 2 (1/30) .....	165			
第240図	カマド 3 (1/30) .....	166			
第241図	建物 2 (1/80) .....	166			
第242図	建物 3 (1/80) .....	167			
第243図	建物 4 (1/80) .....	168			
第244図	建物 4 柱穴間距離 (1/100) .....	168			
第245図	建物 5 (1/80) .....	169			



第246図	柱穴列 1 (1/80) .....	169	第291図	溝97 (1/30) .....	193
第247図	柱穴列 2 (1/80) .....	170	第292図	溝98 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	193
第248図	井戸14 (1/30) ・出土遺物① (1/4・1/3) .....	171	第293図	溝99～101 (1/30) .....	193
第249図	井戸14出土遺物② (1/4) .....	172	第294図	溝102・103 (1/30) .....	194
第250図	井戸15 (1/30) ・出土遺物① (1/4・1/3) .....	173	第295図	溝104 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	194
第251図	井戸15出土遺物② (1/4) .....	174	第296図	溝105 (1/30) .....	194
第252図	井戸16 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	174	第297図	溝106～108 (1/30) .....	194
第253図	井戸17 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	175	第298図	土器溜り 2 出土遺物① (1/4) .....	195
第254図	井戸18 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	175	第299図	土器溜り 2 出土遺物② (1/4) .....	196
第255図	土壌65 (1/30) .....	176	第300図	土器溜り 2 出土遺物③ (1/4) .....	197
第256図	土壌66 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	176	第301図	土器溜り 2 出土遺物④ (1/4) .....	198
第257図	土壌67・68 (1/30) .....	176	第302図	対象調査区および周辺遺構配置図 (古代以降、1/2,000) .....	199
第258図	土壌69 (1/60) .....	177	第303図	古代以降遺構配置図① (1/500) .....	200
第259図	土壌70 (1/30) .....	177	第304図	古代以降遺構配置図② (1/500) .....	201
第260図	土壌71 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	177	第305図	古代以降遺構配置図 (11～14B・C区) (1/300) .....	201
第261図	溝75 (1/30) .....	177	第306図	建物 6 (1/80) ・出土遺物 (1/4) .....	202
第262図	溝76 (1/30) .....	178	第307図	建物 7 (1/80) .....	202
第263図	溝77 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	178	第308図	建物 7 出土遺物 (1/4・1/3) .....	203
第264図	溝78 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	178	第309図	建物 8 (1/80) .....	203
第265図	溝79 (1/30) .....	178	第310図	建物 8 出土遺物 (1/4・1/3) .....	204
第266図	溝80 (1/60) .....	179	第311図	建物 9 (1/80) .....	204
第267図	溝80しからみ (1/20) .....	179	第312図	建物10 (1/80) .....	205
第268図	溝80出土遺物① (1/4) .....	180	第313図	井戸19出土遺物① (1/4・1/3) .....	205
第269図	溝80出土遺物② (1/4) .....	181	第314図	井戸19 (1/30) .....	206
第270図	溝80出土遺物③ (1/4) .....	182	第315図	井戸19出土遺物② (1/4) .....	207
第271図	溝80出土遺物④ (1/4) .....	183	第316図	井戸20 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) .....	208
第272図	溝80出土遺物⑤ (1/4) .....	184	第317図	井戸21 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) .....	209
第273図	溝80出土遺物⑥ (1/4) .....	185	第318図	井戸22 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	210
第274図	溝80出土遺物⑦ (1/8・1/6・1/4) .....	186	第319図	井戸23 (1/60) ・出土遺物① (1/4・1/3) .....	211
第275図	溝80出土遺物⑧ (1/4) .....	187	第320図	井戸23出土遺物② (1/4) .....	212
第276図	溝80出土遺物⑨ (1/4) .....	188	第321図	井戸24 (1/60) ・出土遺物① (1/6・1/4・1/3) .....	213
第277図	溝80出土遺物⑩ (1/3・1/2) .....	188	第322図	井戸24出土遺物② (1/4) .....	214
第278図	溝81 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	189	第323図	井戸24出土遺物③ (1/4) .....	215
第279図	溝82 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	189	第324図	井戸24出土遺物④ (1/4) .....	216
第280図	溝83 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	190	第325図	土壌72・73 (1/30) .....	217
第281図	溝84 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	190	第326図	土壌74 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) .....	217
第282図	溝85 (1/30) .....	191	第327図	土壌75 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	218
第283図	溝86・87 (1/30) .....	191	第328図	土壌76 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	218
第284図	溝88 (1/30) .....	191	第329図	土壌77 (1/30) .....	218
第285図	溝89 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	191	第330図	土壌78 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	219
第286図	溝90 (1/30) .....	191	第331図	土壌79 (1/30) .....	219
第287図	溝91 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	192	第332図	土壌80 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	219
第288図	溝92 (1/30) .....	192			
第289図	溝93 (1/30) ・出土遺物 (1/4) .....	192			
第290図	溝94～96 (1/30) .....	192			

第333図	土壙81 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	220	第376図	土壙131 (1/30) ・出土遺物 (1/3) ……………	238
第334図	土壙82 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	220	第377図	土壙132 (1/30) ・出土遺物 (1/2) ……………	239
第335図	土壙83 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	221	第378図	土壙133 (1/30) ……………	239
第336図	土壙84 (1/30) ……………	221	第379図	土壙134 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	239
第337図	土壙85 (1/30) ……………	221	第380図	土壙135 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	240
第338図	土壙86 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	222	第381図	土壙136・137 (1/30) ……………	240
第339図	土壙87~90 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	223	第382図	土壙138~140 (1/30) ……………	241
第340図	土壙91 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	223	第383図	土壙141 (1/30) ……………	241
第341図	土壙92・93 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	224	第384図	土壙142 (1/30) ……………	241
第342図	土壙94 (1/30) ……………	224	第385図	土壙143 (1/60) ……………	242
第343図	土壙95 (1/60) ・出土遺物 (1/4) ……………	225	第386図	土壙144 (1/30) ……………	242
第344図	土壙96・97 (1/30) ……………	225	第387図	土壙145 (1/30) ……………	242
第345図	土壙98 (1/30) ……………	226	第388図	土壙146 (1/30) ……………	243
第346図	土壙98出土遺物 (1/4) ……………	226	第389図	土壙147 (1/30) ……………	243
第347図	土壙99 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	226	第390図	土壙148 (1/30) ・出土遺物 (1/3) ……………	243
第348図	土壙100 (1/30) ……………	226	第391図	土壙149 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	244
第349図	土壙101 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	227	第392図	土壙150~152 (1/30) ・出土遺物 (1/3) ……………	244
第350図	土壙102 (1/30) ・出土遺物 (1/3) ……………	227	第393図	土壙153 (1/60) ・出土遺物 (1/3) ……………	245
第351図	土壙103 (1/30) ……………	228	第394図	土壙154 (1/60) ……………	245
第352図	土壙104 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	228	第395図	土壙155・156 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	246
第353図	土壙105 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/2) ……………	228	第396図	土壙157 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	246
第354図	土壙106 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	228	第397図	土壙158 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	247
第355図	土壙107 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	229	第398図	土壙159~161 (1/30) ……………	247
第356図	土壙108 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	229	第399図	土壙162・163 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	248
第357図	土壙109・110 (1/60) ・ 出土遺物 (1/4・1/3) ……………	230	第400図	土壙162出土遺物 (1/3) ……………	248
第358図	土壙111 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	231	第401図	土壙164 (1/30) ……………	249
第359図	土壙112 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	231	第402図	土壙165 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	249
第360図	土壙113 (1/60) ……………	231	第403図	土壙166 (1/30) ……………	249
第361図	土壙114・115 (1/30) ……………	232	第404図	溝109 (1/30) ・出土遺物 (1/3) ……………	249
第362図	土壙116 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	232	第405図	溝110 (1/30) ・出土遺物 (1/3) ……………	250
第363図	土壙117 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	233	第406図	溝111 (1/30) ・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	250
第364図	土壙118 (1/30) ……………	233	第407図	溝112 (1/30) ……………	250
第365図	土壙119 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	234	第408図	溝113・114 (1/30) ……………	250
第366図	土壙120 (1/30) ……………	234	第409図	溝114出土遺物 (1/4・1/3) ……………	251
第367図	土壙121 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	235	第410図	溝115 (1/30) ……………	251
第368図	土壙122 (1/30) ……………	235	第411図	溝115・116 (1/30) ……………	251
第369図	土壙123 (1/30) ……………	235	第412図	溝115出土遺物① (1/4) ……………	251
第370図	土壙124 (1/30) ……………	236	第413図	溝115出土遺物② (1/4) ……………	252
第371図	土壙125・126 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	236	第414図	溝115出土遺物③ (1/4・1/3) ……………	253
第372図	土壙127・128 (1/30) ……………	237	第415図	溝116出土遺物 (1/4) ……………	254
第373図	土壙129 (1/30) ……………	237	第416図	溝117 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	254
第374図	土壙129出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	238	第417図	溝118 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	254
第375図	土壙130 (1/30) ……………	238	第418図	溝119 (1/30) ……………	254
			第419図	溝120 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	255
			第420図	溝121・122 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	255

第421図	溝123～126 (1/30) ……………	255	第438図	溝139・140出土遺物 (1/4・1/3) ……………	264
第422図	溝127 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	256	第439図	包含層出土遺物① (1/4) ……………	265
第423図	溝128 (1/30) ……………	256	第440図	包含層出土遺物② (1/4) ……………	266
第424図	溝128出土遺物 (1/4) ……………	257	第441図	包含層出土遺物③ (1/4) ……………	267
第425図	溝129 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	257	第442図	包含層出土遺物④ (1/4) ……………	268
第426図	溝130 (1/60) ……………	257	第443図	包含層出土遺物⑤ (1/4) ……………	269
第427図	溝130杭列 (1/60) ……………	258	第444図	包含層出土遺物⑥ (1/2) ……………	270
第428図	溝130出土遺物① (1/4) ……………	258	第445図	包含層出土遺物⑦ (1/3・1/2) ……………	271
第429図	溝130出土遺物② (1/4) ……………	259	第446図	包含層出土遺物⑧ (1/3) ……………	272
第430図	溝130出土遺物③ (1/3) ……………	260	第447図	包含層出土遺物⑨ (1/3・1/1) ……………	273
第431図	溝131 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	261	第448図	主な淡路型甕出土遺跡 (1/100万) ……………	287
第432図	溝132 (1/30) ……………	261	第449図	淡路型甕変遷図 (1/8) ……………	288
第433図	溝133 (1/30) ……………	262	第450図	百間川原尾島遺跡出土搬入土器 出土状況 (遺構出土土器のみ) (1/1, 250) ……	290
第434図	溝134 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	262	第451図	弥生時代後期集落の変遷 (1/2, 500) ……………	295
第435図	道1・溝135～140 (1/80・1/60) ……………	263	第452図	弥生水田の変遷 (1/4, 000) ……………	297
第436図	溝136出土遺物 (1/4) ……………	263	第453図	古墳時代集落の変遷 (1/2, 500) ……………	299
第437図	溝138出土遺物 (1/4・1/3) ……………	264			

## 表 目 次

表1	百間川原尾島遺跡調査一覧 ……………	9	表3	百間川遺跡群出土の搬入土器 ……………	287
表2	旭川放水路 (百間川) 改修工事に伴う 発掘調査報告書一覧 ……………	13・14			

## 写 真 目 次

写真1	軽便鉄道跡 (西南西から) ……………	16	写真4	足跡検出状況 (上から) ……………	146
写真2	軽便鉄道橋脚 (東から) ……………	16	写真5	溝130 作業風景 (南西から) ……………	260
写真3	水田層足跡掘り下げ (南東から) ……………	146	写真6	溝130 杭列断面 (南東から) ……………	260

## 図 版 目 次

巻頭図版1	1 11～15B・C区弥生時代後期遺構検出状況 (南上空から)	2 16・17B・C区弥生時代前期遺構全景 (上空から、上が北東)	
	2 11～14B・C区弥生時代後期遺構検出状況 (上空から、上が北東)	3 竪穴住居1 (南西から)	
巻頭図版2	1 「ファイアンス状の物質」製の玉	図版2	1 竪穴住居2 (南東から)
	2 旧河道2出土遺物 (赤色顔料付着土器)		2 土壙3 (北東から)
	3 銅鏃・鉄鏃		3 溝6 (北東から)
	4 土器棺墓出土土器	図版3	1 旧河道1・2 (上空から、上が北東)
図版1	1 14～18B・C区弥生時代前期遺構全景 (西上空から)		2 W1出土状況
			3 W2・4出土状況
			4 W5・8出土状況

- 5 W9 出土状況
- 図版4 1 弥生時代前期水田（上空から、上が北東）  
2 溝8～12（東から）  
3 弥生時代中期水田（南東から）
- 図版5 1 11～15B・C区弥生時代後期遺構全景（上空から、上が北東）  
2 21～25B・C区弥生時代後期遺構全景（同上）
- 図版6 1 竪穴住居3（東から）  
2 竪穴住居3 P4（南から）  
3 竪穴住居4（南西から）
- 図版7 1 竪穴住居5・10（北東から）  
2 竪穴住居5（南西から）  
3 竪穴住居5作業台出土状況（北東から）
- 図版8 1 竪穴住居5作業風景（南から）  
2 竪穴住居5壁面被熱状況（南東から）  
3 竪穴住居5炭化材出土状況（北から）
- 図版9 1 竪穴住居6（南から）  
2 竪穴住居6遺物出土状況（東から）  
3 竪穴住居6 P96鋤先出土状況（東から）  
4 竪穴住居6 P85（南西から）  
5 竪穴住居6 P91（南西から）
- 図版10 1 竪穴住居7（南西から）  
2 竪穴住居7 P4（南西から）  
3 竪穴住居7 P16（南から）
- 図版11 1 竪穴住居7遺物出土状況（南東から）  
2 竪穴住居7土器溜り（東から）  
3 竪穴住居7土器溜り（北東から）
- 図版12 1 竪穴住居8（南西から）  
2 竪穴住居9（南西から）  
3 竪穴住居9遺物出土状況（南東から）
- 図版13 1 竪穴住居10（南東から）  
2 竪穴住居10 P4（南東から）  
3 竪穴住居11（南東から）
- 図版14 1 竪穴住居排水溝および周溝（北西から）  
2 竪穴住居排水溝および周溝（竪穴住居5付近）（北西から）  
3 竪穴住居排水溝および周溝（竪穴住居6・7付近）（北西から）
- 図版15 1 竪穴住居排水溝および周溝（C-D断面北側）（南から）  
2 竪穴住居排水溝および周溝（E-F断面付近）（南西から）  
3 竪穴住居排水溝および周溝（A-B断面南西側）（南西から）
- 図版16 1 溝27遺物出土状況（南西から）  
2 溝29遺物出土状況（西から）  
3 溝37遺物出土状況（北から）
- 図版17 1 井戸1第5層遺物出土状況（南西から）  
2 井戸1木製品出土状況（南西から）  
3 井戸1遺物出土状況（南西から）
- 図版18 1 井戸2（東から）  
2 井戸4（北東から）  
3 井戸6（西から）
- 図版19 1 井戸7炭層検出状況（南西から）  
2 井戸7（北東から）  
3 井戸7（南西から）
- 図版20 1 井戸9（西から）  
2 井戸11（南西から）  
3 井戸13（南から）
- 図版21 1 土壌7（南西から）  
2 土壌7断面（南西から）  
3 土壌12（南東から）
- 図版22 1 土壌11炭層検出状況（東から）  
2 土壌11製塩土器・炭検出状況（東から）  
3 土壌14（南西から）
- 図版23 1 土壌19（南西から）  
2 土壌25（南西から）  
3 土壌26（西から）
- 図版24 1 土壌27（南東から）  
2 土壌36（南西から）  
3 土壌39（東から）
- 図版25 1 土壌46（北から）  
2 土壌53（南東から）  
3 土壌53玉出土状況（南東から）
- 図版26 1 土器棺墓1～3（北東から）  
2 土器棺墓1（東から）  
3 土器棺墓3（南西から）
- 図版27 1 炉1・2検出状況（南西から）  
2 炉1・2（南西から）  
3 炉3（南から）
- 図版28 1 溝43（北東から）  
2 溝43土器出土状況（北東から）  
3 溝44（北東から）
- 図版29 1 溝51～53（南西から）  
2 溝62・63（北東から）  
3 溝70～72（南から）
- 図版30 1 13B・C区弥生時代後期末水田（北から）  
2 13C区微高地と水田境（南西から）  
3 14・15B・C区弥生時代後期末水田（西から）

	4	21~25B・C区弥生時代後期末水田 (北西から)		3	井戸20(手前)・21(北から)
	5	22・23B・C区弥生時代後期末水田 (北東から)	図版43	1	井戸20(東から)
	6	22~24B・C区弥生時代後期末水田 (南東から)		2	井戸21(東から)
	7	22・23B・C区弥生時代後期末水田 (北東から)		3	井戸22砂利敷き(南東から)
	8	27B・C区弥生時代後期末水田(北東から)	図版44	1	井戸22断面(東から)
図版31	1	竪穴住居9粘土塊出土状況(南から)		2	井戸23(北から)
	2	土壌24粘土塊出土状況(南から)		3	井戸23断面(北から)
	3	粘土配置(南西から)	図版45	1	井戸24上層(南から)
図版32	1	11~13B・C区古墳時代全景(北西から)		2	井戸24(南から)
	2	竪穴住居15・16(西から)		3	土壌82(南西から)
	3	竪穴住居15(北東から)	図版46	1	土壌86(西から)
図版33	1	竪穴住居19(北西から)		2	土壌95(東から)
	2	竪穴住居20(南から)		3	土壌107(南西から)
	3	竪穴住居20土器出土状況(南から)	図版47	1	土壌109・110(南東から)
図版34	1	竪穴住居22カマド(南東から)		2	土壌116(北東から)
	2	竪穴住居23(南東から)		3	土壌119(南から)
	3	竪穴住居23カマド(南西から)	図版48	1	土壌127(南から)
図版35	1	竪穴住居24(北東から)		2	土壌129(南西から)
	2	竪穴住居24カマド(東から)		3	土壌157(南から)
	3	竪穴住居24遺物出土状況(南から)	図版49	1	土壌159~163(東から)
図版36	1	竪穴住居24炭化材(東から)		2	土壌162(北から)
	2	竪穴住居25・26(北東から)		3	溝115石組み(東から)
	3	竪穴住居26カマド(南西から)	図版50	1	溝128(北から)
図版37	1	竪穴住居28(北西から)		2	溝130(南西から)
	2	建物4(南から)		3	溝130杭列(南東から)
	3	建物5(南から)	図版51	1	土壌3出土遺物
図版38	1	井戸14(南西から)		2	旧河道出土遺物①
	2	井戸15(北西から)	図版52		旧河道出土遺物②
	3	井戸17(北から)	図版53	1	旧河道出土遺物③
図版39	1	溝80(南から)		2	竪穴住居3・4・10・11出土遺物
	2	溝80木製品出土状況	図版54	1	竪穴住居5出土遺物
	3	溝80W22出土状況		2	竪穴住居6出土遺物
	4	溝80W26出土状況	図版55	1	竪穴住居9出土遺物
	5	溝80M43鋤先出土状況		2	竪穴住居7出土遺物
図版40	1	11~13B・C区古代以降遺構全景(北西から)	図版56	1	竪穴住居7土器溜り出土遺物
	2	13~15B・C区古代以降遺構全景(北から)	図版57	1	溝33出土遺物
図版41	1	建物6・7(西から)		2	溝37出土遺物
	2	建物9(南から)	図版58	1	溝26~29・36出土遺物
	3	建物10(北から)		2	井戸1出土遺物①
図版42	1	井戸19上層(西から)	図版59		井戸1出土遺物②
	2	井戸19曲げ物出土状況(東から)	図版60		井戸1出土遺物③
			図版61		井戸7出土遺物①
			図版62		井戸7出土遺物②
			図版63		井戸4・6・8・9出土遺物
			図版64		井戸11出土遺物

図版65	1 土壙7出土遺物		2 溝80出土遺物①
	2 土壙12出土遺物	図版82	溝80出土遺物②
図版66	1 土壙14出土遺物	図版83	溝80出土遺物③
	2 土壙19出土遺物	図版84	溝80出土遺物④
図版67	土壙25出土遺物	図版85	1 溝80出土遺物⑤
図版68	1 土壙26出土遺物		2 井戸19・22・24出土遺物
	2 土壙8・11出土遺物	図版86	1 溝130出土遺物
図版69	1 土壙27出土遺物		2 溝115・128・131・139出土遺物
	2 土壙53出土遺物	図版87	土器溜り1出土遺物
図版70	1 土壙36出土遺物	図版88	土器溜り2出土遺物①
	2 土壙46出土遺物	図版89	土器溜り2出土遺物②
図版71	土器棺墓1～3出土遺物	図版90	1 石製品①
図版72	1 炉2出土遺物		2 石製品②
	2 溝43(上層)出土遺物	図版91	1 石製品③
図版73	溝43(下層)出土遺物①		2 石製品④
図版74	1 溝43(下層)出土遺物②	図版92	1 石製品⑤
	2 溝44出土遺物		2 石製品⑥
図版75	溝45(上層)出土遺物	図版93	土製品①
図版76	1 溝45(上層および下層)出土遺物	図版94	1 土製品②
	2 溝53出土遺物		2 土製品③
図版77	竪穴住居14・16・19・21・22出土遺物	図版95	木製品①
図版78	1 竪穴住居20出土遺物	図版96	木製品②
	2 竪穴住居24出土遺物	図版97	木製品③
	3 竪穴住居23・28出土遺物	図版98	木製品④
図版79	井戸14出土遺物①	図版99	木製品⑤
図版80	1 井戸14出土遺物②	図版100	木製品⑥
	2 井戸15出土遺物	図版101	1 金属製品
図版81	1 井戸16・17出土遺物		2 玉類

# 第1章 地理的・歴史的環境

## 第1節 地理的環境

岡山県には、東から吉井川・旭川・高梁川の三大河川が存在している。そのひとつである旭川は、中国山地を源とし、吉備高原の山間部に細長い谷底地形を形成しながら南流して、瀬戸内海へと達する。その際、岡山県の中・北部で丘陵を削りながら南下することとなり、多くの土砂が運ばれ、長い年月を経て河口付近に沖積平野を形成した。それが広義の岡山平野である。旭川が平野部において現在のような流路となったのは、文禄3（1594）年に宇喜多秀家が岡山城築城の際、川の一部を堀に見立てるよう付け替えてからである。しかし、このような不自然な流れの影響で、岡山城下は度々洪水の被害を受けることとなる。そこで洪水を回避する手段として、放水路としての百間川が考案された。百間川は、時の城主池田光政の命を受けた津田永忠が、熊沢蕃山の治水論「川除の法」を取り入れて工事の指導・指揮にあたり、寛文9（1669）年から貞享4（1687）年にかけて造られた人工河川である。すなわち、岡山市竹田付近の東岸堤防筋に「荒手」と称する洪水の越流堤を設け、そこからあふれ出た水を操山丘陵の北麓に沿って東流させ、さらに丘陵の東端を回って南流させて海へと注がせる、つまりバイパスの機能をもたせたのである。その長さは、約7～8km（現在は約13km）にわたる。

この百間川が位置する旭東平野（旭川東岸の平野）は、西には旭川が流れ、北に竜の口山丘陵、南に操山丘陵、さらに東を芥子山および山王山丘陵で囲まれた南北3km・東西5.5kmの地勢を呈する。一方、操山丘陵の南側に広がる平野は、その大部分が近世以降の干拓により形成され、弥生・古墳時代には浅い海が広がっていたと考えられる。

旭東平野を流れる百間川が、現在のような流路となったのは、前述のように17世紀後半以降である。それ以前、この地を流れる河道は人工的な制約を受けることなく、大きくはふたつの流れとして存在していた。ひとつは祇園から賞田・雄町を南東方向へと流れ、乙多見から長利へ、いまひとつは中原から新屋敷へと南下し、藤原で南東方向へと流路を変えて兼基・長利へ至る。これらふたつの自然河道は、縄文時代後期後半以降長い年月の間蛇行を繰り返すことにより土砂堆積を伸長し、周辺の沖積化を促した。この作用により、弥生時代には比較的安定した複数の自然堤防が形成され、人々が長期間定住できる環境になったと思われる。現在、ふたつの流路は、この地域を流れる中小の用水路としてその名残をとどめている。

なお、旭東平野の北東部にあたる湯迫・四御神一带は、旭川の堆積作用が及ばなかった地域であり、広い範囲にわたって後背湿地であった<sup>(1)</sup>と考えられ、近世以前の遺跡はほとんど分布していない。

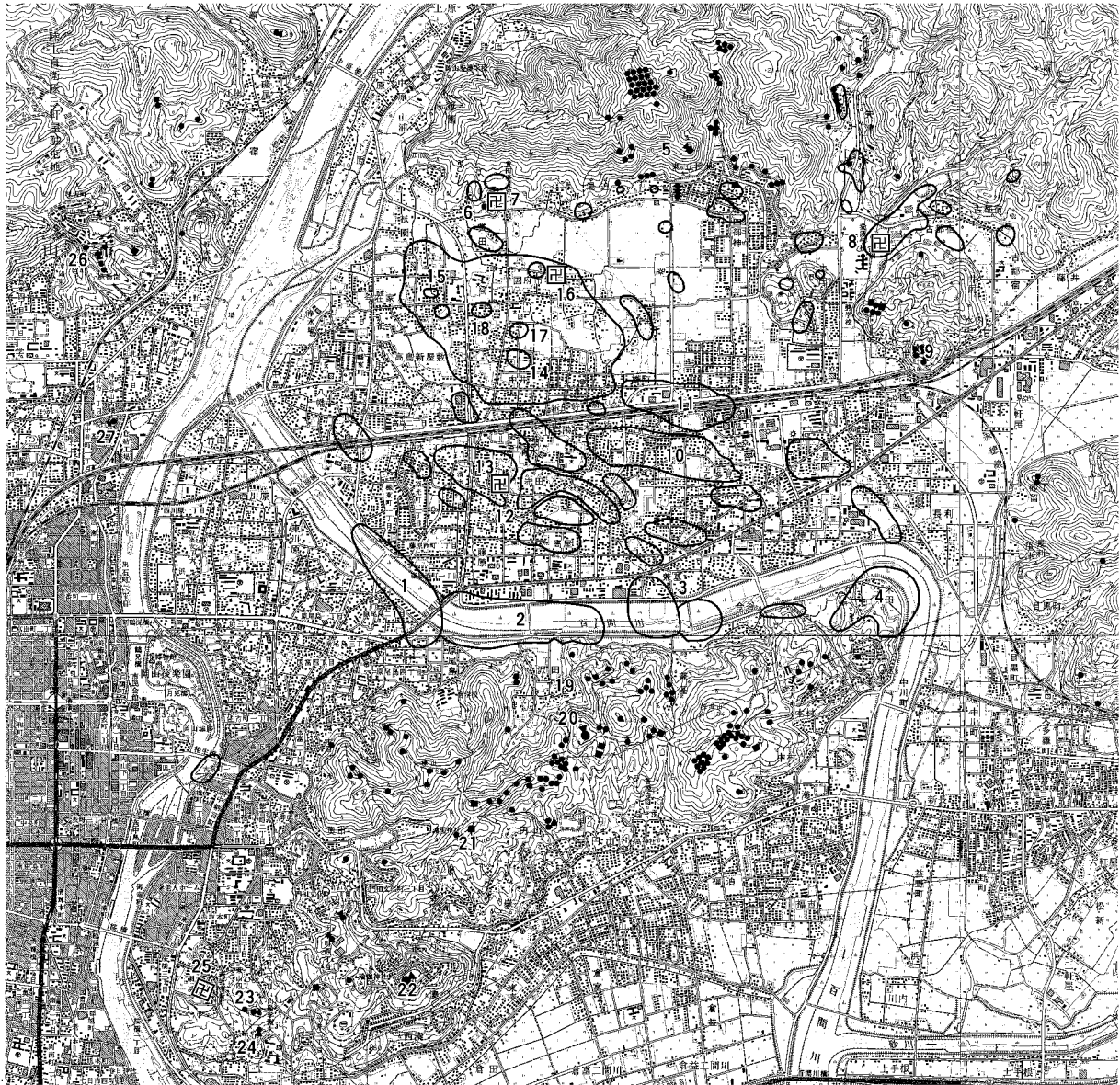


第1図 遺跡位置

## 第2節 歴史的環境

### 1 旧石器時代

旭東平野における最古の遺物は、操山旗振台北遺跡から出土したナイフ形石器<sup>(2)</sup>がある。これは後期旧石器時代で、旭東平野周辺では他にこの時期の遺構・遺物は確認されていない。



- |              |               |            |
|--------------|---------------|------------|
| 1 百間川原尾島遺跡   | 10 乙多見遺跡      | 19 沢田大塚古墳  |
| 2 百間川沢田遺跡    | 11 雄町遺跡       | 20 金蔵山古墳   |
| 3 百間川兼基・今谷遺跡 | 12 赤田遺跡       | 21 旗振台古墳   |
| 4 百間川米田遺跡    | 13 幡多廃寺       | 22 秦茶白山古墳  |
| 5 備前車塚古墳     | 14 中井・南三反田遺跡  | 23 網浜茶白山古墳 |
| 6 唐人塚古墳      | 15 備前国庁跡（県史跡） | 24 操山109号墳 |
| 7 賞田廃寺       | 16 成光廃寺       | 25 網浜廃寺    |
| 8 居都廃寺       | 17 ハガ遺跡       | 26 一本松古墳   |
| 9 宍甘山王山古墳    | 18 南古市場遺跡     | 27 神宮寺山古墳  |

第2図 百間川周辺遺跡分布 (1/50,000)



## 2 縄文時代

1970年代前半まで、この時期の遺物は2か所のみで確認されていたに過ぎない。ひとつは、百間川遺跡群を調査する端緒となった事柄で、一般国道2号線の百間川橋脚部工事に伴って出土した晩期土器を近藤義郎氏が確認したこと。いまひとつは、山陽新幹線建設工事に伴い調査された雄町遺跡出土の晩期土器<sup>(3)</sup>である。

その後1977年から、百間川改修工事に伴う発掘調査が継続的に行われるようになり、この時期の遺構・遺物が広く知られるようになった。現在までもっとも古い時期を示しているのは、百間川沢田遺跡から出土した中期土器片2点である<sup>(4)</sup>。しかし、この中期の土器片は摩滅が著しく、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性が考えられる。

後期の遺構・遺物では、百間川沢田遺跡の高縄手B調査区東側微高地下部で、後期の遺物を包含する堆積が確認される<sup>(4)</sup>。その後、百間川原尾島遺跡から後期後葉と認識される焼土面と土器溜りが検出<sup>(5)</sup>され、同様に百間川沢田遺跡で、多数の炉・土壙・ドングリ貯蔵穴が確認された<sup>(6)</sup>。これらのことから、この段階から沖積地への人の移動があったと考えられ、少なくとも一定期間の定住が始まっていた蓋然性は強い。

晩期の遺物は、雄町遺跡をはじめ百間川遺跡群すべてから出土している。なかでも、百間川沢田遺跡からは多量の土器に伴って、サヌカイト製の打製石鍬や石包丁形打製石器の出土がみられ、遺物面から農耕の可能性が示唆されている<sup>(6)</sup>。また、百間川沢田遺跡で検出された貝塚からは、鹿角製の鳥形短剣や指輪形角製品が出土しており<sup>(7)</sup>、当時の人々の豊かな精神文化を伺い知ることができる。このように、遺物面からは多くの情報を得ることができるのに反し、遺構との関連においてはいまひとつ不明であり、特に集落の具体的なあり方については、明確ではない。

## 3 弥生時代

前期の遺跡は、雄町遺跡・百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡・百間川米田遺跡など、縄文時代晩期から続くものが多い。しかし、いずれの遺跡も前期前葉の時期が欠けている。その後の、百間川沢田遺跡で検出された前期中葉の環濠集落<sup>(6)</sup>は、比較的短時間の集落のあり方を示す一例として、全国的にも著名である。幅4m、深さ2mの環濠は、直径約100mの範囲をめぐっており、内側からは竪穴住居4軒、円形周溝墓2基が検出されている。環濠の外側には土壙墓もみられ、なかには木棺の痕跡を残すものも認められた。そのほか、環濠とは旧河道を挟んだ隣の微高地には、窪地に長方形区画の水田が2面確認されている<sup>(6)</sup>。百間川原尾島遺跡でも、同時期の水田が1面検出され<sup>(8)</sup>、その後の調査でも面的に広く検出されているなど、前期水田の情報が増えつつある。

中期の遺跡では、前述の遺跡の他に赤田遺跡<sup>(9)</sup>・乙多見遺跡<sup>(10)</sup>などがある。赤田遺跡においては、高杯で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川遺跡群では、当該期の中心的な存在となりうる百間川兼基・今谷遺跡をあげることができる。他の遺跡に比べて、遺構遺物共に豊富であり、特に大地調査区で検出された28棟にも及ぶ建物群や、その周辺から出土したガラス溶滓などはこの遺跡の特異性を示している<sup>(11)</sup>。これらの事象と関連するのかどうかは不明であるが、百間川兼基・今谷遺跡の南に位置する操山丘陵の谷部（向山口・鳥坂山）からは、3口の銅鐸が出土している<sup>(12)</sup>。

後期になると集落の数が飛躍的に多くなり、集落が立地する微高地間にあたる低位部には、連綿と

水田が営まれるようになる。この時期の水田は、後期末に周辺一帯を覆った洪水砂によって良好な形でパックされており、当時の景観を復元するのに大変有効である。水田は、百間川の河川敷だけでも百間川原尾島遺跡の西端から東へ、微高地を挟みながら約3km下流の百間川今谷遺跡にまで続いている。さらに最近の調査で、百間川西岸の原尾島交差点付近まで水田の広がりが確認されている<sup>(13)</sup>。また、この水田と有機的な関係にある用排水路の存在も確認されており、当時の灌漑・土木技術の高さや水田を維持・管理するための、より上位の共同体組織の存在などが想定される。この時期、百間川遺跡群のなかでは、百間川原尾島遺跡が母村的な集落であると考えられ、当報告書の資料追加によってさらに具体的な集落構造が明らかになってきた。

## 4 古墳時代

集落の立地する場所は、弥生時代の集落が分布する範囲と基本的には一致する。百・古・Ⅲの時期から住居に竈が取り付けられる例があり、この時期から竈の導入が始まったと考えられる。また、百間川原尾島遺跡からは、布堀溝を伴う建物が検出されており<sup>(5・14)</sup>、他の掘立柱建物とは異なる上部構造を有していると思われ、興味深い事例である。

百間川遺跡群における当該期の水田は、近年まで明確な遺構が検出されていなかった。しかし、最近調査された原尾島遺跡・沢田遺跡において、洪水砂上部の堆積層の一部が、古墳時代初頭には水田に利用されていることが判明した。また、原尾島遺跡では古墳時代後期の水田が2面検出されており<sup>(13)</sup>、古墳時代の水田について新たな知見が加わりつつある。

旭東平野周縁の丘陵には、古墳が多く築かれている。なかでも操山丘陵には操山109号墳（74～76m・前方後円墳）、網浜茶臼山古墳（92m・前方後円墳）、湊茶臼山古墳（150m・前方後円墳）、金蔵山古墳（165m・前方後円墳）、旗振台古墳（27m・方墳）などがあり、これらの古墳は金蔵山古墳までの系統性が認められ、その後方墳へと変容する首長墓の変遷をとらえることができる。また、竜の口丘陵には三角縁神獣鏡13面等が出土した備前車塚古墳（48.3m・前方後方墳）が、山王山丘陵には宍甘山王山古墳（68.5m・前方後円墳）など初期の古墳が築かれている。

後期古墳は、北方に竜の口古墳群、南には操山古墳群が位置する。これらの群集墳は、前段階同様丘陵上に築かれ、横穴式石室を主体部としている。しかし、このように丘陵上に築かれる古墳が多く存在する一方、中井・南三反田遺跡（備前国府推定地）<sup>(15)</sup>では、11基もの古墳が平野部に築造される例が明らかとなっており、今後は平野に築かれている埋没古墳にも留意する必要がある。

## 5 古代以降

旭東平野では、賞田廃寺・成光廃寺・居都廃寺（井寺廃寺）・幡多廃寺・網浜廃寺の5か寺が古代寺院として知られている。この5か寺はいずれも、古代の行政区画である上道郡に属し、1郡内での古代寺院の集中率が高いことで知られている。このうち、賞田廃寺<sup>(16)</sup>と幡多廃寺<sup>(9)</sup>は発掘調査が行われており、出土瓦の検討・寺域の復元等が論じられている。特に、瓦当文様の比較・検討により、網浜廃寺を除く4か寺の有機的な関係が明らかとなっており、それは上道郡を本貫とする上道氏の動向と重なる部分が多い。また最近、賞田廃寺において史跡整備に伴う発掘調査が行われており、地方寺院では希有な双塔式伽藍であることが判明している<sup>(17)</sup>。これは、賞田廃寺と幡多廃寺が、建物の基壇に壇上積基壇を採用していることなどと考え合わせて、当時の上道氏の興隆ぶりを示している

といえる。

国府市場字国長には、1959年に県指定史跡となった備前国庁跡がある。国府所在地は、『和名類聚抄』では御野郡内に在ると記されているが、旧御野郡内にはそれに相当する遺跡が発見されていない。従来より、国府所在地については諸説があるが、おおむね国府市場周辺に比定されているようである。近隣に所在する雄町遺跡では、今まで確定的な遺構・遺物は確認されていないが、奈良～平安時代の掘立柱建物や溝が検出され、硯・緑釉陶器・灰釉陶器が出土している<sup>(3・18)</sup>。また、南古市場遺跡で奈良～平安時代の掘立柱建物が検出されたり<sup>(19)</sup>、ハガ（高島小）遺跡では、平安時代前期の掘立柱建物と平安時代後期の瓦が確認され<sup>(20)</sup>、最近の調査では東西南北に方位を合わせた方形区画遺構や奈良三彩・羊形硯が出土<sup>(21)</sup>するなど、国府推定地をより明確に補強する材料が増えつつある。

さて、百間川遺跡群に目を転じてみると、古代では百間川米田遺跡が遺構・遺物の量・質共に最も豊富である<sup>(22・23)</sup>。奈良時代の遺構では、掘立柱建物14棟・「船曳」を目的とした道路遺構を挙げることができる。遺物では「上三宅」と墨書された須恵器杯や、「市」と墨書された丹塗り土師器、椀、円面硯、銅製帯金具（丸鞆）、石帯（巡方）、緑釉陶器、塼仏がある。これらの遺構・遺物から、奈良時代における、郡の倉院あるいは国府の外港に付属する倉庫群や官営の市場の存在が想定される。また、同遺跡出土の底部外面に「官」の逆字が刻印されている須恵器杯も特筆されよう。関連性は不明ながら、同様の須恵器が岡山市の前池内5号墳<sup>(24)</sup>・高梁市の佐内古墳<sup>(25)</sup>・山手村の道金山窯跡群<sup>(26)</sup>からも出土しており、何らかの官衙関連施設と関係があるのか興味深い。平安時代の遺構としては、治水遺構群の検出が注目される。遺物としては、緑釉・灰釉陶器、風字硯、卒塔婆がある。一方、百間川原尾島遺跡では、奈良時代末期～平安時代初頭にかけての幅12～13mの大溝が検出されている。その一端は当報告書でも触れているが、この溝からは墨書土器や人形・斎申などの木製模造品が出土している<sup>(5)</sup>。これらの出土品は、平城京の大祓に関連した律令的祭祀跡から出土する遺物と類似したもので、同遺跡が国府に隣接する場所に位置することからも、この溝が国庁指導で行われた儀式跡と考えられ、備前国府の祓所に比定できる。

中世の集落としては、百間川原尾島遺跡<sup>(5・14)</sup>や百間川米田遺跡<sup>(23・27)</sup>でみられる。前者では、鎌倉～室町時代にかけての建物群が検出されていて、当時の集落の在りようが徐々に解明されつつある。その集落の概要は、条里制地割によって規制されており、室町時代に入ると屋敷地を取り囲む溝あるいは堀の出現がみられる。また、同時期に比定される土壙墓群の中には、青磁・白磁の碗や皿、湖州鏡などの舶載品が副葬されているものがあり、集落内での階層差が存在していた。そして、この集落は16世紀におこった洪水によって廃絶したことなどがおもな点である。後者では、鎌倉～室町時代の大溝が検出されており、その規模や地理的条件などから運河の可能性が示唆できる。そして、この大溝の北側には長期にわたって営まれた集落が検出されており、建物の規模や種類、集落構成などから海に近い農村集落と考えられる。その他、同遺跡においては橋梁の存在を外すことができない。現在までのところ、東西800mの範囲に3本の橋梁が架けられていたことが分かっており、当時の陸上交通が水上交通に劣らず発達していたと考えることができる。また、これらの橋梁は再度の改修を経ながら長期間維持されていることが発掘調査から判明している。その管理の主体に関しては明らかではないが、柿経などの仏教関係遺物の多さや、僧坊名あるいは僧名を墨書した白磁、東大寺瓦の存在などから、付近に寺院・僧侶の存在した可能性が示唆されており、橋梁の管理に関してもそれらの関与があった蓋然性が高いといえよう。

以上、この章については、註23の第1章を基調にして、部分的に書き改めたものである。

(松尾)

註

- (1) 石田寛『岡山県の地理』(株)福武書店 1978
- (2) 鎌木義昌「岡山市域の無土器時代遺跡と遺物」『岡山市史・古代編』岡山市 1962
- (3) 高橋護・正岡睦夫他 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972
- (4) 二宮治夫他「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1985 \*以下、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』のうち百間川遺跡群の報告書については、発行機関名を省略する。
- (5) 柳瀬昭彦他「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 1996
- (6) 平井勝他「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 1993
- (7) 柳瀬昭彦他「百間川沢田遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』119 1997
- (8) 宇垣匡雅他「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 1994
- (9) 出宮徳尚・根木修他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 1975
- (10) 正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』3 岡山県教育委員会 1973
- (11) 高畑知功他「百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 1982
- (12) 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版 1961
- (13) 柳瀬昭彦他「原尾島遺跡・沢田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』153 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 2000
- (14) 平井勝他「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97 1995
- (15) 桑田俊明「中井・南三反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92 岡山県教育委員会 1994
- (16) 出宮徳尚『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1971
- (17) 『賞田廃寺発掘調査現地説明会資料』岡山市教育委員会 2002
- (18) 正岡睦夫「雄町遺跡出土の硯と歴史時代の須恵器について」『岡山県埋蔵文化財報告』7 岡山県教育委員会 1977
- (19) 『南古市場(高島公)遺跡現地説明会資料』岡山市教育委員会 1992
- (20) 草原孝典「ハガ(高島小)遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1998』岡山市教育委員会 2000
- (21) 「ハガ(高島小プール)遺跡発掘調査現地説明会資料」岡山市教育委員会 2001
- (22) 井上弘他「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52 1982
- (23) 物部茂樹他「百間川米田遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164 2002
- (24) 中野雅美他「前池内遺跡 山陽自動車道に伴う発掘調査」8 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1994
- (25) 田仲満雄「高梁市佐内古墳出土の遺物について」『古代吉備』8 古代吉備研究会 1980  
鎌木義昌「第三章 夜明前の高梁」『高梁市史』高梁市 1979
- (26) 亀田修一・伊藤晃・和泉弘幸・石田義人「官」逆字押印須恵器について－備中道金山窯跡採集資料を中心に－  
『鎌木義昌先生古希記念論集 考古学と関連科学』鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会 1988
- (27) 岡本寛久他「百間川米田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989

## 第2章 調査および報告書作成の経緯

### 第1節 発掘調査の契機と経過

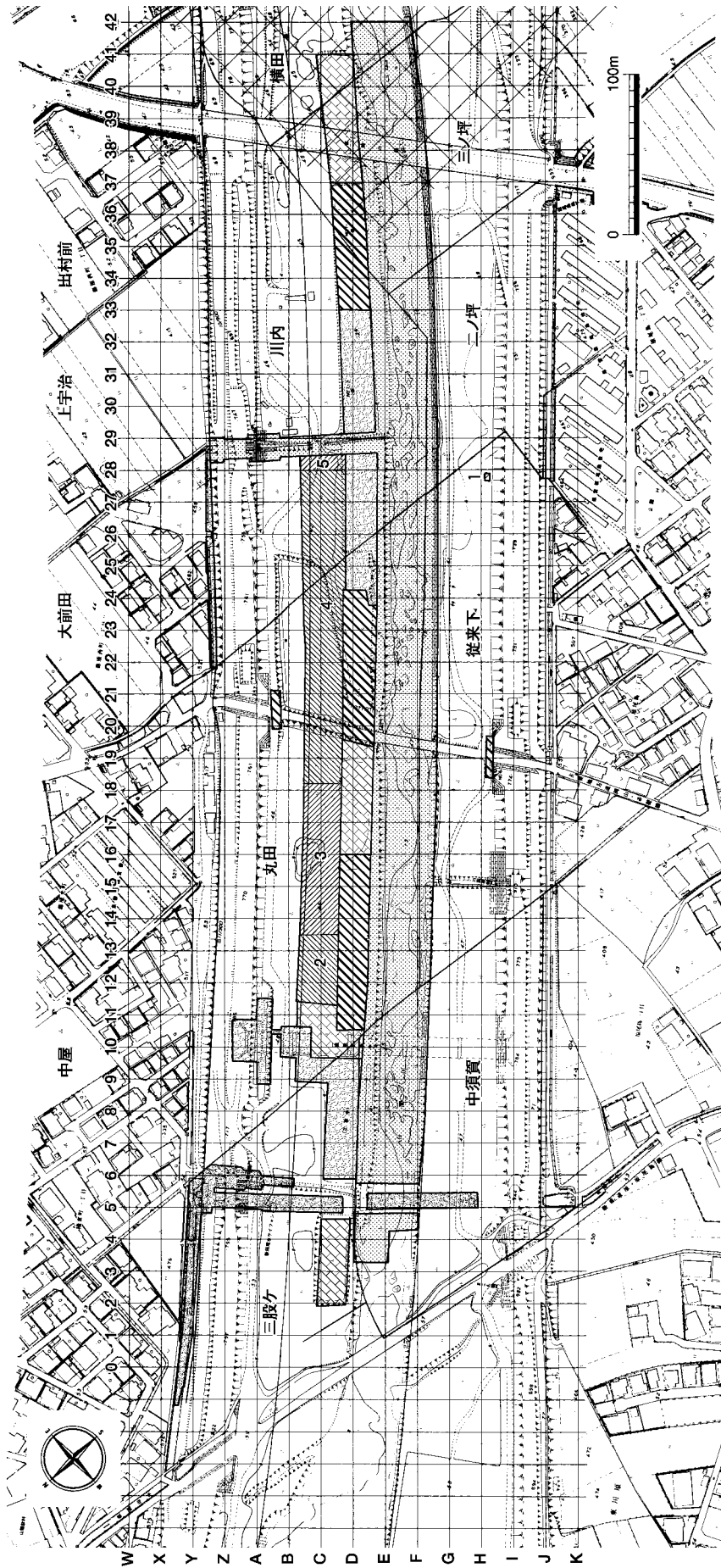
百間川が旭川の放水路として江戸時代の初め頃に造られた人工河川であることは、第1章でも触れた。その百間川の大規模な改修工事の計画構想は、昭和の初め頃からあったらしいが、建設省（現国土交通省、以下同）が本格的に改修計画を打ち出したのは昭和43（1968）年のことである。当時、百間川の河床下に遺跡（散布地）が存在することは、昭和25（1950）年頃から周知され、昭和40（1965）年度に岡山県教育委員会が発行した『岡山県遺跡地図』にはA・B両地点の範囲が記載されている。地名表の遺跡名は、それぞれ百間川A遺跡・同B遺跡となっており、前者は一般国道2号の百間川橋を含み上流の祇園用水路付近まで、後者は百間川橋の下流で河道が東方向へわずかに屈曲する付近が示されている。

改修工事計画を知った岡山県教育庁文化課は、当時の建設省岡山河川工事事務所に対し、事前に文化財の保護に遺漏のないよう要望するとともに、以後計画の進捗状況に合わせて遺跡の取り扱いについて協議を重ねた。その結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了したのちに改修工事を施工することで合意した。

また、岡山県教育委員会は、当時の建設省に対して文化財保護法第57条の3に先だつ事前協議の文書の提出を求める一方、この協議の基礎資料となる百間川遺跡（関連遺跡を含む）の範囲確認調査計画概要を提出した。その後昭和51（1976）年4月になって、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）岡山河川工事事務所長から事前協議の文書が岡山県教育委員会に提出され、これに基づいて協議を重ねた。そして、同年9月1日付けで同局長から確認調査の依頼文書が提出され、同年11月1日から岡山県教育委員会が確認のための調査を実施するに至った。

確認調査（第1次調査）は、低水路部分の遺跡の確認および古地形の復原と新田サイフォン（百間川A遺跡の北側に隣接する祇園用水を切り替えて、低水路に直交させてその下を潜らせる施設）部分の一部について、翌年3月31日まで実施された。その結果、岡山市原尾島（第1微高地）、同沢田（第2微高地）、同兼基・今谷（第3微高地）の3か所に遺構が多く認められる大規模な微高地が拡がり、その部分が遺跡であることが判明した。そして翌年度からは、確認調査の成果を基に当時の建設省の工事計画に先だつかたちで本調査を進め、現在も継続中である。この間、各微高地間にも弥生時代後期の水田が存在することや、新たに岡山市米田一帯も遺跡であることが判明し、発掘調査の範囲は当初より増加し、現在に至っている。

岡山市原尾島の百間川原尾島遺跡は、昭和52（1977）年度以降、おもに低水路と樋門や橋脚橋梁の調査を実施し、平成14年（2002）度末までの調査総面積は約38,000㎡にもものぼる。そして、これらの報告書は、左岸用水路・新田サイフォン・新田樋門調査区分が「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39、低水路（3～41、D～F区）・土手樋門調査区分が「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56、同じく低水路（5～9・B～D、24～28・CD）・原尾島橋



- 今回報告調査地区
- 発掘調査報告39  
(百間川原尾島遺跡1)
- 発掘調査報告56  
(百間川原尾島遺跡2)
- 発掘調査報告88  
(百間川原尾島遺跡3)
- 発掘調査報告97  
(百間川原尾島遺跡4)
- 発掘調査報告106  
(百間川原尾島遺跡5)

※図中の調査地区番号(1~5)は、表1の番号に対応

第3図 設定グリッドと調査区位置 (1/4,000)

脚橋梁調査区分が「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88、また低水路（10～15、19～24C D）調査区分が「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97、さらに低水路（10・11B C、37～40・B～D）・原尾島橋脚調査区分が「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106として、刊行している。

本報告書掲載の対象になったのは、低水路護岸部の11～28・B C調査区と右岸の堤防階段基礎部分であり、調査の範囲（地区）、担当者、期間、面積、遺物数等は表1のとおりである。

表1 百間川原尾島遺跡調査一覧

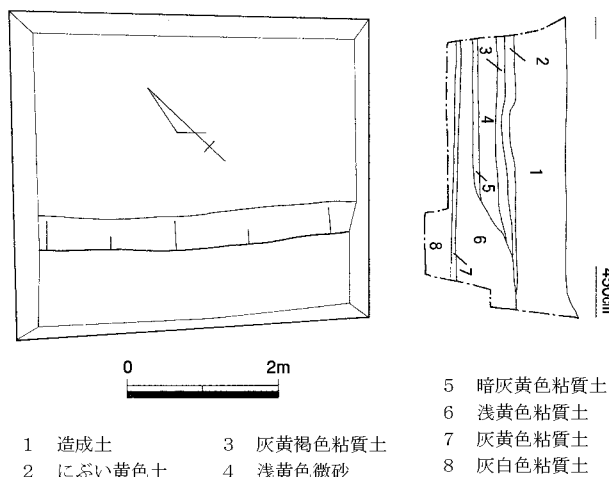
番号	調査地区	調査担当者	調査期間	調査面積	遺構数	遺物数
1	27H	山磨・中務	H 7.11.15～17	20	1	1
2	11～13B・C	宇垣・物部・大森	H 10.10.2～H 11.3.31	1,050	224	330
3	13～18B・C	柴田・高田・土師	H 11.4.1～H 12.3.31	2,100	132	113
4	18～27B・C	柴田・松尾・窪津	H 12.4.1～H 13.3.31	4,680	144	55
5	27・28B・C	高田・小嶋・藤田	H 13.4.1～27	310	24	1
計				8,160㎡	525	500箱

低水路護岸部の調査は、原尾島橋下流の左岸部分幅約23.6m、長さ約345mの範囲（約8,140㎡）を、調査員3名で約2年半の期間を要している。初年次の調査地区は、とくに弥生時代後期の遺構密度が高い微高地から縁辺にかけての範囲で、10軒以上の一部重複または拡張された竪穴住居と、それらの住居内から外にかけて付設された溝や住居の周辺を巡る外溝などが交錯し、予想外に調査期間を要した。そのほか、井戸や土壇、土器溜まりも多く、それらに伴う遺物も完形に近い土器を含めて多量に出土し、その量は全体の6割を超える。二年次の調査区は、低位部と微高地とがほぼ半々を占める。低位部はおもに弥生時代後期後半～末の水田区画が展開し、微高地との境付近では古墳時代後期の大溝がほぼ南北方向に存在していた。微高地の肩部には、弥生水田に伴う灌漑水路が一部重複して、数条認められている。微高地上の遺構は、おもに弥生時代の竪穴住居・井戸・土壇が多く、前期に遡る遺構も一部認められている。密度は高くない。三年次の調査区は、二年次に引き続く微高地上と微高地肩部から低位部にかけての部分で、後者の範囲が2/3を占める。どちらもおもに弥生時代後期の

遺構、とくに後者では弥生後期水田が展開した。また、四年次は三年次調査区と樋門間の約300㎡ほどであり、おもに弥生後期水田に調査を要した。

そのほか、平成7年11月の右岸河川敷の堤防階段基礎部分（27H）の調査は、約4.3×4.6mの範囲を実施した。ここでは、第4図のようにおもに弥生時代後期末の洪水砂に覆われた水田、および鳥状高まりの一部が認められている。

ただ、遺物は弥生後期土器の細片が少量出土したに過ぎない。（柳瀬）



第4図 平成7年度調査区（1/100）

## 第2節 調査および報告書作成の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）から委託を受け、昭和52（1977）年度から実施しており、現在も継続している。

本報告書に掲載した百間川原尾島遺跡は、平成7（1995）年度・平成10～13（1998～2001）年度に調査を実施した第3図の範囲を対象とし、発掘調査は各年度ごとに、調査員2名・3名・3名・3名・3名の各1班の体制で対応している。遺物の整理・報告書の作成は平成14（2002）年度に実施し、調査員3名が当たった。

岡山県教育委員会は、発掘調査と報告書の作成事業の遂行に当たり、遺跡の保護・保存ならびに調査・報告書作成の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

### 旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会 委員

池葉須藤樹	（元岡山市立犬島中学校校長）
亀田修一	（岡山理科大学教授）＜平成14年度から＞
近藤義郎	（岡山大学名誉教授）
角田 茂	（元岡山市立岡輝中学校教諭）＜平成12年度まで＞
出宮徳尚	（岡山市教育委員会文化財課長）
西川 宏	（岡山理科大学非常勤講師）＜平成13年度＞
水内昌康	（元岡山県文化財保護審議会委員）
山本悦世	（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教授）

次に体制を記す。

### 発掘調査

平成7（1995）年度	次 長	高塚 恵明
岡山県教育委員会	次 長（文化課本務）	葛原 克人
教育 長	森崎岩之助	〈総務課〉
岡山県教育庁	課 長	丸尾 洋幸
教育次長	黒瀬 定生	課長補佐（総務係長）
文化課	総務主幹	井戸 丈二
課 長	大場 淳	主 査
課長代理	樋本 俊二	主 任
参 事	葛原 克人	〈調査第三課〉
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑 知功	課 長
主 任	若林 一憲	課長補佐（第二係長）
岡山県古代吉備文化財センター	文化財保護主幹	（調査担当）山磨 康平
所 長	河本 清	文化財保護主査
		（調査担当）中務 和彦



平成10（1998）年度

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 平岩 武

文化課

課長 高田 朋香

課長代理 西山 猛

参事 正岡 睦夫

課長補佐(埋蔵文化財係長) 松本 和男

文化財保護主任 大橋 雅也

主事 三宅 美博

岡山県古代吉備文化財センター

所長 葛原 克人

次長 大村 俊臣

〈総務課〉

課長 小倉 昇

課長補佐(総務係長) 安西 正則

主査 山本 恭輔

〈調査第三課〉

課長 柳瀬 昭彦

課長補佐(第三係長) 岡本 寛久

文化財保護主査 (調査担当) 宇垣 匡雅

文化財保護主任 (調査担当) 大森 充宏

文化財保護主事 (調査担当) 物部 茂樹

平成11（1999）年度

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 宮野 正司

文化課

課長 松井 英治

課長代理 佐々部和生

参事 正岡 睦夫

課長補佐(埋蔵文化財係長) 松本 和男

文化財保護主任 大橋 雅也

主任 奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 葛原 克人

次長 大村 俊臣

〈総務課〉

課長 小倉 昇

課長補佐(総務係長) 安西 正則

主査 山本 恭輔

〈調査第三課〉

課長 柳瀬 昭彦

課長補佐(第一係長) 山磨 康平

文化財保護主査 (調査担当) 土師 忠満

文化財保護主任 (調査担当) 高田 恭一郎

文化財保護主任 (調査担当) 柴田 英樹

平成12（2000）年度

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 宮野 正司

文化課

課長 松井 英治

課長代理 佐々部和生

課長代理(埋蔵文化財係長) 松本 和男

文化財保護主査 福本 明

主任 奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 能登原 巧

〈総務課〉

課長 小倉 昇

課長補佐(総務係長) 安西 正則

主査 山本 恭輔

〈調査第三課〉

課長 柳瀬 昭彦

課長補佐(第一係長) 浅倉 秀昭

文化財保護主任 (調査担当) 柴田 英樹

文化財保護主任 (調査担当) 窪津 幸司

主事 (調査担当) 松尾 佳子

平成13（2001）年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 國貞 忠克

文化課

課長 松井 英治

課長代理(埋蔵文化財係長) 松本 和男

課長代理 藤井 守雄

主任 奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 能登原 巧

〈総務課〉

課長 安西 正則

総務係長 田中 秀樹

主任 小坂 文男

〈調査第三課〉

課長 柳瀬 昭彦

課長補佐(第一係長) 下澤 公明

文化財保護主査 (調査担当)藤田 裕文

文化財保護主査 (調査担当)高田恭一郎

文化財保護主事 (調査担当)小嶋 善邦

報告書作成

平成14（2002）年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 三浦 一男

文化課

課長 西山 猛

課長代理(埋蔵文化財係長) 松本 和男

課長代理 宮田 正彦

文化財保護主任 尾上 元規

主事 浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 藤川 洋二

〈総務課〉

課長 安西 正則

課長補佐(総務係長) 田中 秀樹

主任 小坂 文男

〈調査第三課〉

課長 (報告書担当)柳瀬 昭彦

課長補佐(第一係長) 下澤 公明

文化財保護主事 (報告書担当)小嶋 善邦

文化財保護主事 (報告書担当)松尾 佳子

〈9月29日から〉

主事 (報告書担当)稲谷 知子

〈9月28日まで〉

報告書作成協力者

大石 敦子・松尾 和子・山本千恵子・

河内 一美

(柳瀬)

### 第3節 報告書作成の経過

報告書の作成期間は、調査員3名で平成14（2002）年度の通年が当てられた。これは整理対象となる百間川原尾島遺跡の、遺構総数と出土遺物総数および整理の難易度等から割り出された。今回整理対象となった調査区部分の遺構は、微高地上から低位部に営まれた弥生時代後期から古墳時代と中世をそれぞれの中心時期とする集落と、集落周辺のとくに弥生水田である。なかでも原尾島橋に近い微高地部分は、弥生後期の住居群が密集して検出されるなど遺構密度が非常に高く、同時に遺物数においても整理対象遺物箱数約500箱のうち7割近くを占める。

まず、遺物整理にあたっては一括性の高い井戸と土壌の出土遺物の復元作業から順次始め、いっぽう、遺構に伴わない例えば包含層や溝あるいは河道内の堆積遺物などについては、特殊遺物などの選別抽出を併行して実施した。遺構図面の整理は、とくに堅穴住居が密集する辺りの住居外周を巡る溝の切り合い関係が複雑であり、それらの解釈のための図面整理・調整・遺構トレースなどに予想以上の期間を要した。

また、報告書担当と調査担当を交えての全体打ち合わせ会議や全体編集会議を数回実施し、極力全体の統一・調整などを計った。そして、当事業の埋蔵文化財保護対策委員会では7月・10月・2月に報告書整理状況を報告し、各委員から御指導・御助言を賜った。

なお本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査の報告書としては15冊目であり、参考までに次にI～XVまでの報告書名を掲載しておく。（柳瀬）

表2 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査報告書一覧(1)

番号	編 著 者 名	書 名	シリーズ名・番号	発行年月
I	江見正己・伊藤 晃・浅倉秀昭 柳瀬昭彦・中野雅美・内藤善史 他	百間川原尾島遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告39	1980 11
II	井上 弘・下澤公明・松本和男 岡田 博・浅倉秀昭・福田正継 江見正己・中野雅美・内藤善史 平井泰男・島崎 東 他	百間川沢田遺跡 1 百間川長谷遺跡 百間川岩間遺跡 百間川当麻遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告46	1981 11
III	高畑知功・正岡睦夫・井上 弘 下澤公明・渡辺 光・山磨康平 浅倉秀昭・岡本寛久・江見正己 中野雅美・内藤善史・平井泰男 島崎 東・光永真一・平井典子 他	百間川兼基遺跡 1 百間川今谷遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告51	1982 11
IV	井上 弘・松本和男・岡田 博 二宮治夫・平井泰男・光永真一	百間川当麻遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告52	1982 11
V	正岡睦夫・高畑知功・平井泰男 島崎 東・光永真一・井上 弘 下澤公明・渡辺 光・岡田 博 二宮治夫・岡本寛久・中野雅美	百間川原尾島遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告56	1984 3

表2 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査報告書一覧(2)

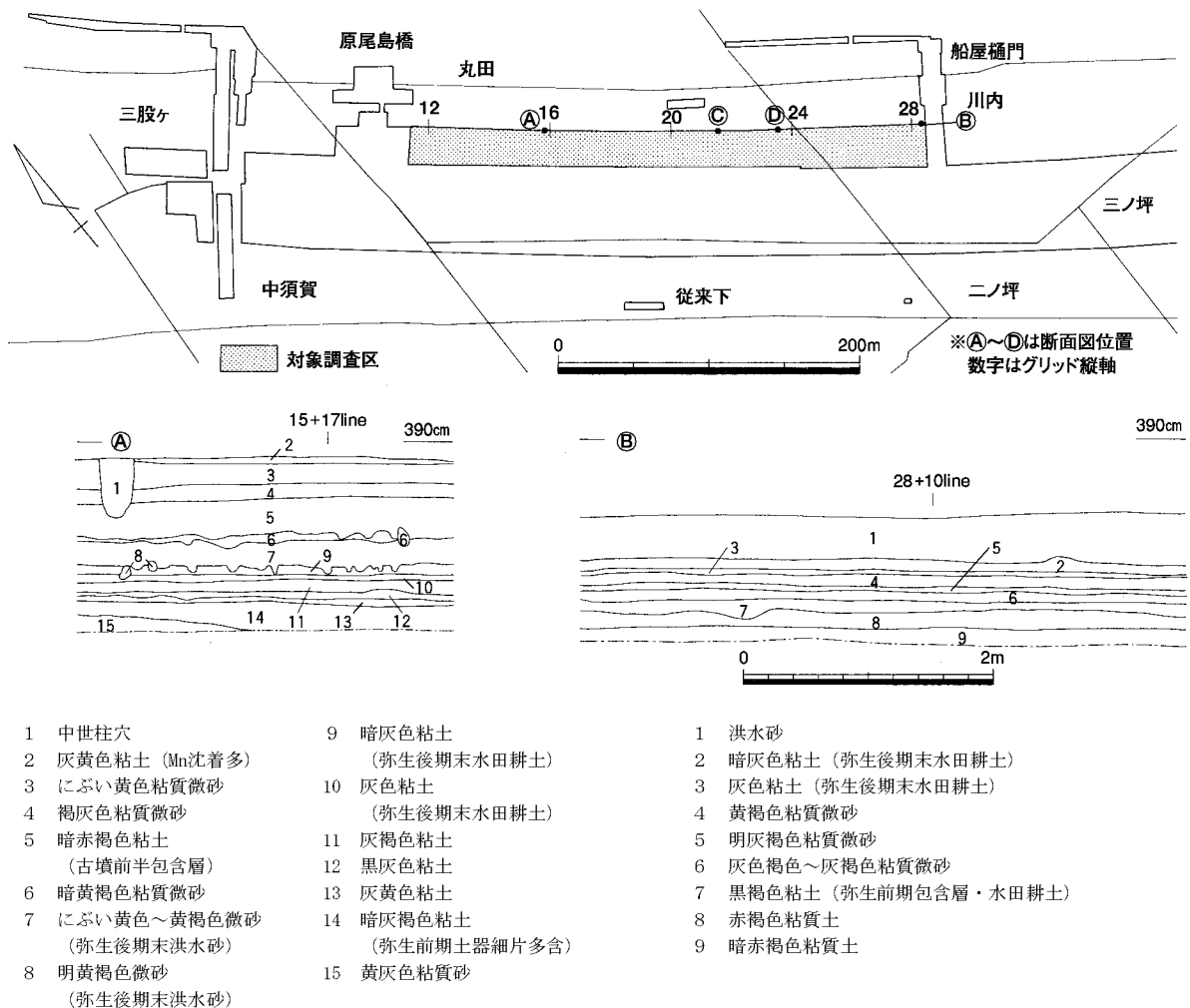
番号	編 著 者 名	書 名	シリーズ名・番号	発行年月
VI	二宮治夫・正岡陸夫・井上 弘 下澤公明・柳瀬昭彦・山磨康平 岡田 博・高畑知功・浅倉秀昭 岡本寛久・江見正己・中野雅美 平井泰男・島崎 東・光永真一 他	百間川沢田遺跡 2 百間川長谷遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告59	1985 3
VII	岡本寛久・平井 勝・柳瀬昭彦 井上 弘・宇垣匡雅・平井泰男 江見正己	百間川米田遺跡 3 (旧当麻遺跡)	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告74	1989 9
VIII	平井 勝・井上 弘・柳瀬昭彦 浅倉秀昭・古谷野寿郎・岡本寛久 江見正己・宇垣匡雅・阿部泰久 高田恭一郎	百間川沢田遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告84	1993 3
IX	宇垣匡雅・平井 勝・江見正己 柳瀬昭彦	百間川原尾島遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告88	1994 3
X	平井 勝・岡本寛久・高田恭一郎	百間川原尾島遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告97	1995 3
XI	柳瀬昭彦・高田恭一郎・岡本寛久 平井泰男・井上 弘	百間川原尾島遺跡 5	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告106	1996 3
XII	平井 勝・柳瀬昭彦・岡本寛久 宇垣匡雅・浅倉秀昭・江見正己	百間川兼基遺跡 2 百間川今谷遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告114	1996 3
XIII	柳瀬昭彦・弘田和司・平井 勝 高田恭一郎・山磨康平・根木智宏 澤山孝之	百間川兼基遺跡 3 百間川今谷遺跡 3 百間川沢田遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告119	1997 3
XIV	物部茂樹・山磨康平・井上 弘 宇垣匡雅・中野雅美・根木智宏 柳瀬昭彦・松尾佳子	百間川米田遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告164	2002 3
XV	小嶋善邦・宇垣匡雅・高田恭一郎 柴田英樹・物部茂樹・松尾佳子 柳瀬昭彦・稲谷知子	百間川原尾島遺跡 6	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告179	2004 2

## 第3章 発掘調査の概要

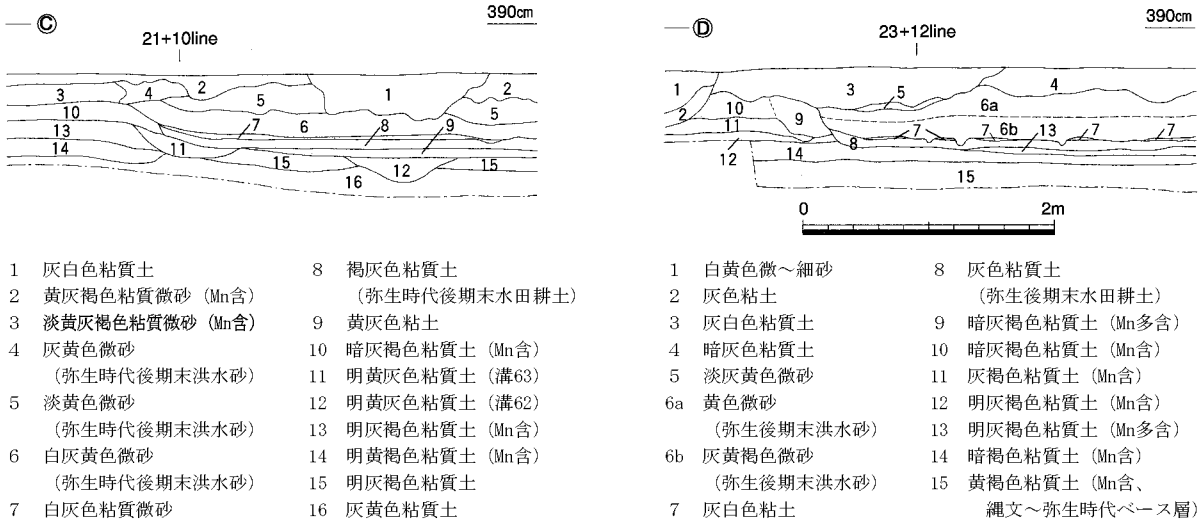
### 第1節 調査区の概要

本報告にかかる調査区は、岡山市原尾島にある百間川橋の下流約15mから船屋樋門間の左岸側、幅約23.6m、長さ約345m部分（グリッド11～28・BC、小字は丸田と川内）が対象である。この調査対象部分は低水路掘削及び護岸施設工事に伴うもので、工事終了後はこの地点での左岸法線（対岸からの低水路幅約80m）が完成することになる。つまり、左岸の河川敷に特別な施設（例えば樋門に付属した水質浄化施設）等が計画されない限り、この地点での高水敷下の遺跡は保存される。

この調査地区の地形は、弥生時代においては2つの微高地とそれに挟まれた低位部とに大別される。前者のうち、上流部の微高地は原尾島橋を中心として幅約140mほどの間が安定した基盤をもち、既調査結果において遺構密度が高く、とくに弥生時代後期から古墳時代前期にかけての母村的な集落で



第5図 調査区位置 (1/5,000)・調査区北東壁断面 (1/60)



第6図 微高地下がり断面 (1/60)

あることが判明していて、その一部である本報告にかかる調査区についても例外ではない。また、下流部の微高地はグリッド16～21+10mライン付近までが居住区、断面Cから断面D付近までが微高地およびその縁辺を田面に開墾した水田区であり、後者の場合は開墾の名残ともいべき島状高まりを伴う。島状高まりの見られない断面B付近は、後期水田層下約30cmに前期水田層が認められている。

一方、低位部の中心は幅約17～18m、深さ2m（底で海拔0.2m位）前後の自然河道が存在し、その堆積土層中の遺物から、河道が8割位まで埋没するのが弥生時代前期後半、その上層部分がほぼ水平に堆積するのが中期中葉～末と推定される。そして、その後上位に後期中葉にかけて約40～70cmの新たな堆積があり、その段階で両微高地間の低位部（海拔2.8m前後）が水田に開発され、後期末になって水田面が大洪水による25～40cmの厚さの砂で埋没したと看取される。

本調査区の古墳時代以降は、微高地と低位部との比高差は縮まったものの、基本的には微高地と低位部との利用形態も踏襲されていたようで、古墳集落は大溝や井戸の一部を除いてやはり弥生以前の微高地上に展開し、中世集落の占地範囲においても同様である。

なお、本調査区のほぼ中央の20ライン付近には、岡山市西大寺と同後樂園を結んだ西大寺軽便鉄道跡（明治44年～昭和37年操業）の橋脚基礎（花崗岩の切石積）が認められている。近代遺構とはいえず珍しいので、参考資料として次に写真を掲載した。（柳瀬）



写真1 軽便鉄道跡（西南西から）



写真2 軽便鉄道橋脚（東から）

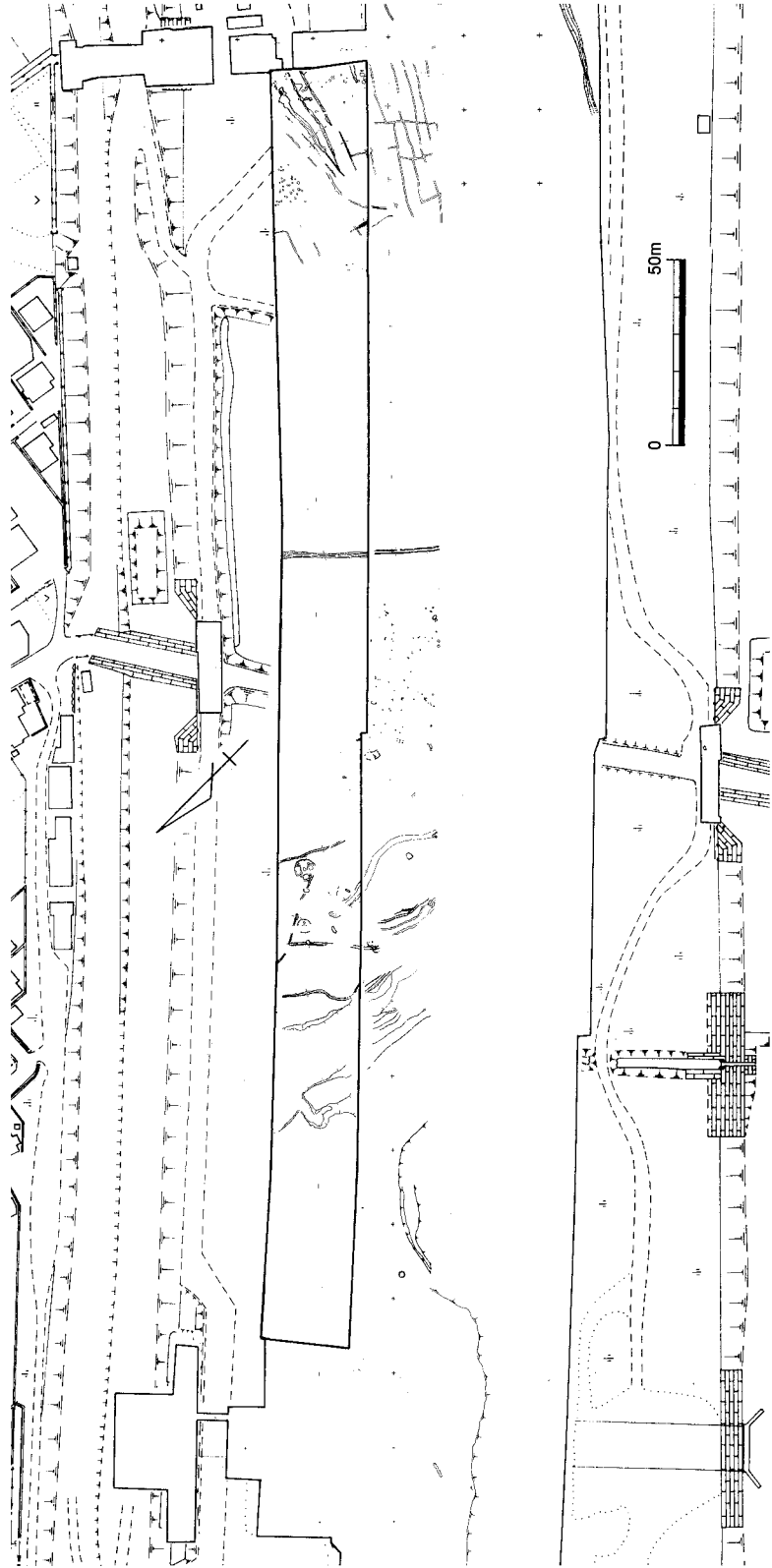
## 第2節 弥生時代前期の遺構・遺物

## 弥生時代前期の概要

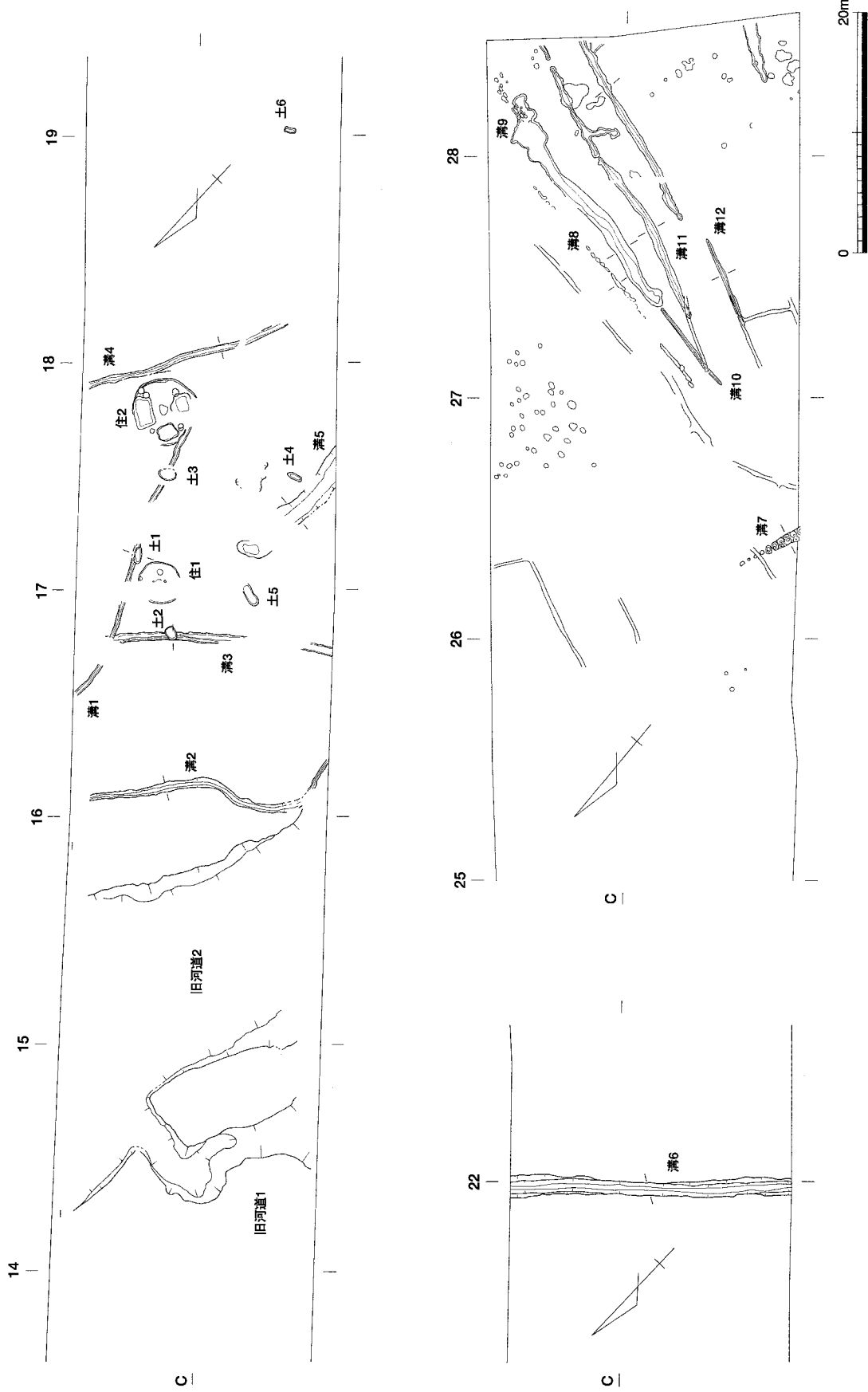
当該期では、調査地西端と中央において旧河道を挟んだ2つの微高地が認められ、東端では水田が検出された。前者の微高地では、当調査で明確な遺構は確認されなかったが、中央では竪穴住居2軒や土壇6基、溝12条が検出された。水田は以後の開墾のためか微高地からかなり離れた地点でしか認められなかった。この田面は東西に細長い区画であることが、以前の調査で判明しているが、今回は部分的にしか検出できなかった。これは、地形が北西方向だけでなく北東方向にかけても高くなっていることが一因であると思われる。旧河道はその堆積状況から、当初比較的流速があったと思われるが、この時期の間で著しく流れが滞っていくと思われる。

掲載した遺物は、土器122点、石製品32点、土製品2点、木製品10点である。この内一部は縄文時代晩期と弥生時代中期のものも含まれている。特に注目されるのは、旧河道から出土した木製品である。

(柴田)



第7図 対象調査区位置および周辺遺構配置（弥生時代前期、1/2,000）



第8図 弥生時代前期遺構配置 (1/500)



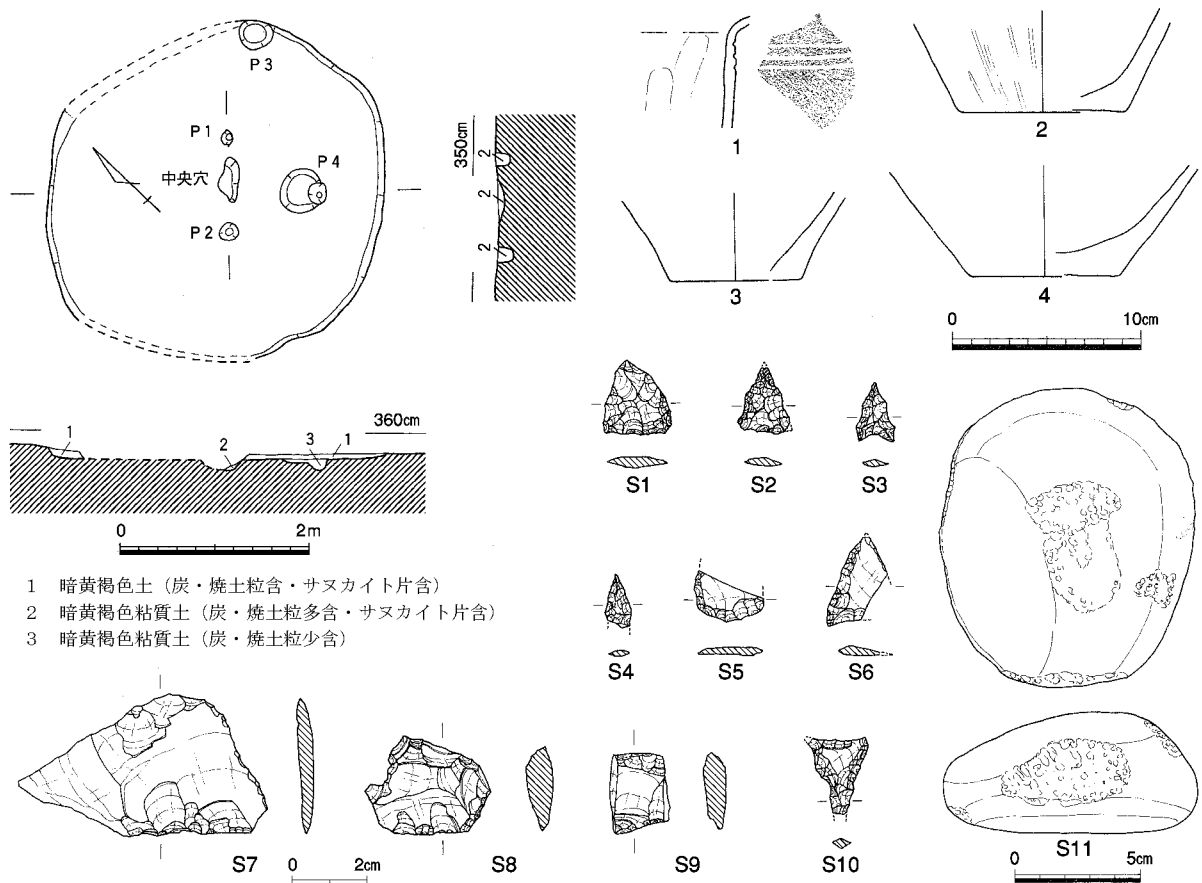
# 1 竪穴住居

## 竪穴住居1 (第8・9図、図版1-3)

16・17C区に位置する竪穴住居である。基盤層上面で検出したもので、弥生時代中期の溝14・15に住居の大半を切られる。平面形は径3.6m前後のほぼ円形を呈するものと考えられ、検出面からの深さは5cm前後と浅い。埋土は1層でサヌカイト片を含む。床面はほぼ平坦で、5本の柱穴を検出した。このうち、ほぼ中央のものを中央穴と考え、その両脇の小柱穴で上屋を支えたものと想定している。この支柱穴の規模は、径15cm、深さ16~18cm、柱間は2mを測る。

図示した出土遺物は弥生時代前期の土器と石製品である。1は甕で、「く」の字状に外反する口縁部の外面に3本のヘラ描平行沈線を施す。2~4はほぼ平底の底部である。S1~6は石鏃、S8・9は楔形石器、S10は石錐で、いずれもサヌカイト製である。S11は敲石である。

以上のことから、住居の時期は百・前・IIと考えられる。 (高田)



第9図 竪穴住居1 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

## 竪穴住居2 (第8・10・11図、図版2-1)

17B区で検出した竪穴住居で、前述の竪穴住居1とは約10mの距離を置く。弥生時代中期の溝19に住居の北西半を切られるが、平面形はほぼ円形を呈するものと考えられる。規模は径5.84m、検出面からの深さ20cmを測る。埋土は、少量の水晶片と多量のサヌカイト片を含む基盤土のブロックで充填されるもので、人為的な埋め戻しが想定される。床面には中央穴と4本の支柱穴、3基の貯蔵穴を有

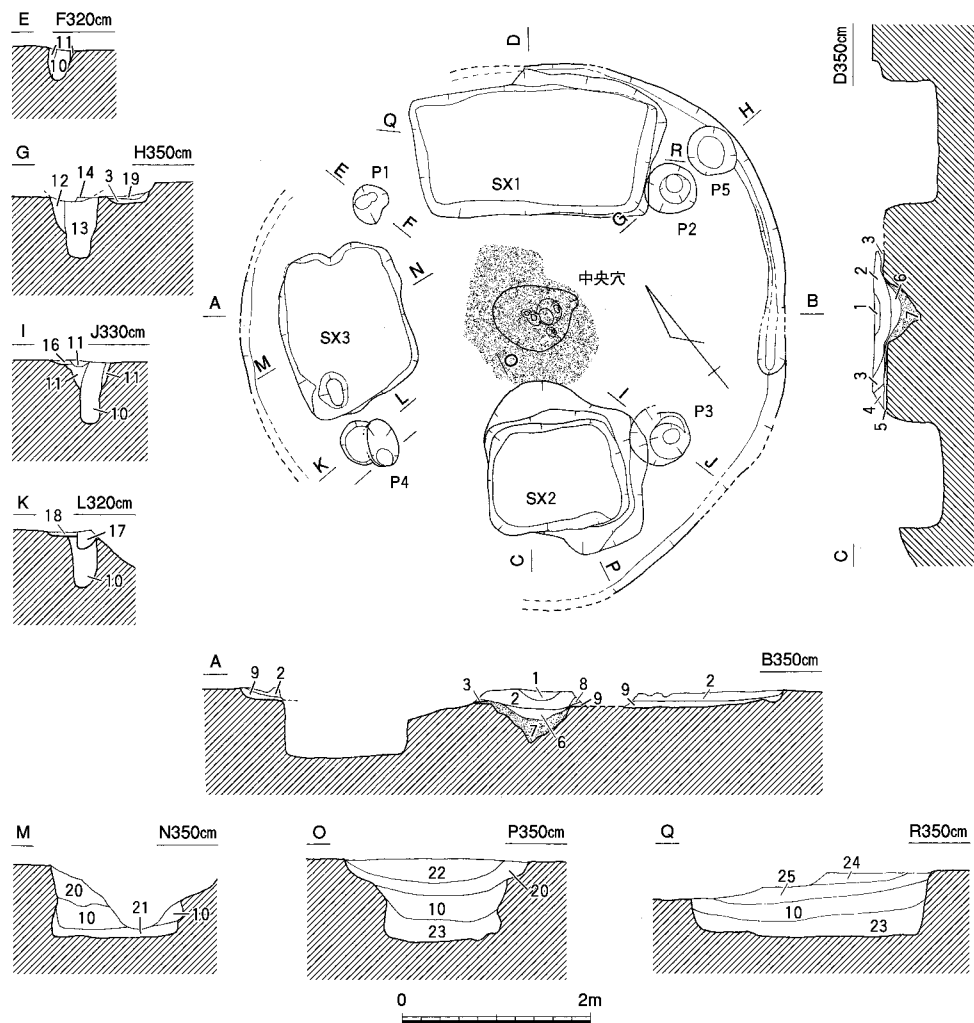
第3章 発掘調査の概要

する。また南東側の壁体に沿って浅い溝を検出したが全周はしない。中央穴の掘り方は逆円錐形を呈し、その下半には大量の炭がみられる。主柱穴は径が60cm、深さも60cm前後を測り、いずれも地面にめり込むような柱痕跡をもつ。貯蔵穴は南東部を除く各主柱穴間に位置し、平面形はほぼ方形を基本とする。規模はSX1が2.7×1.55mと最大で、SX2・3はほぼ同規模である。壁は垂直かやや袋状を呈し、底面は平坦でいずれの海拔高も2.5mと揃う。埋土にはサヌカイト片を含む。

遺物は土器片と石製品が出土している。5～7は壺、8・9は甕の口縁部で、8は逆「L」字状を呈する。S12～14は石鏃、S15・16は石錐でいずれもサヌカイト製である。S17はスクレイパーと考えられる。12は中央穴、7～10とS13・16・17は貯蔵穴からの出土である。

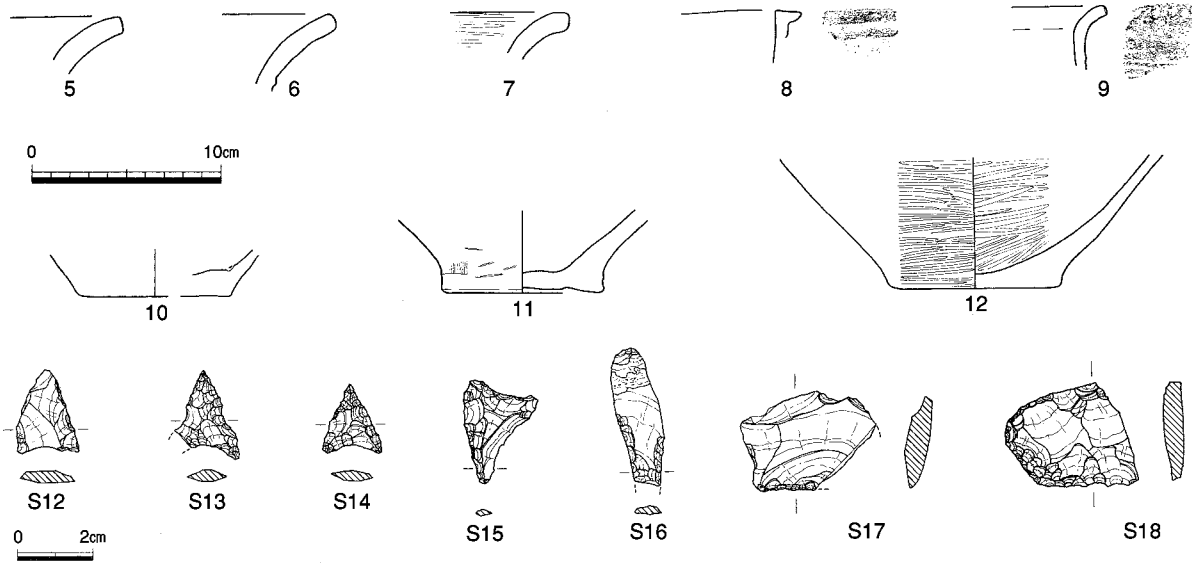
以上の検出状況から、住居の時期は百・前・Ⅲと考えられる。

(高田)



- |                      |                       |                     |
|----------------------|-----------------------|---------------------|
| 1 褐灰色粘質土             | 10 暗黄褐色粘質土 (炭・焼土粒含)   | 19 灰黄褐色粘質土 (炭・焼土粒含) |
| 2 にぶい黄色土塊充填 (炭・焼土粒含) | 11 にぶい黄褐色粘質土 (炭・焼土粒含) | 20 暗灰黄色粘質土 (炭粒少含)   |
| 3 暗灰褐色粘質土 (炭・焼土粒含)   | 12 灰黄褐色粘質土 (炭・焼土粒含)   | 21 黒褐色粘土 (炭粒少含)     |
| 4 黄色砂質土              | 13 暗灰褐色粘土 (炭・焼土粒含)    | 22 赤褐色粘質土 (炭・焼土粒少含) |
| 5 灰黄色微砂              | 14 暗褐色粘質土 (炭・焼土粒少含)   | 23 黒灰褐色粘土 (炭粒含)     |
| 6 灰褐色粘質土 (炭・焼土粒含)    | 15 灰褐色粘質土 (炭・焼土含)     | 24 暗灰褐色粘質微砂         |
| 7 炭層                 | 16 灰褐色粘質土 (炭多含・焼土含)   | 25 灰黄褐色粘質土          |
| 8 暗灰褐色粘質土 (炭・焼土粒含)   | 17 暗黄褐色粘土 (炭・焼土粒含)    |                     |
| 9 にぶい黄色土塊            | 18 暗灰褐色粘質土 (炭・焼土粒含)   |                     |

第10図 竪穴住居 2 (1/80)



第11図 竪穴住居2出土遺物 (1/4・1/2)

## 2 土壙

### 土壙1 (第8・12図)

17B区に位置する土壙で、基盤層上面で検出した。竪穴住居1に近接し、溝1に切られる。平面形は歪な長楕円形を呈し、長径138cm、短径54cmを測る。底は平坦で、北側に一段浅くなる箇所がある。

遺物は土器片とサヌカイト製の石器が出土した。13は削り出し突帯を施す壺の頸部で、S19は石鏃である。

土壙の時期は、出土遺物と検出状況から百・前・Ⅱと考えられる。

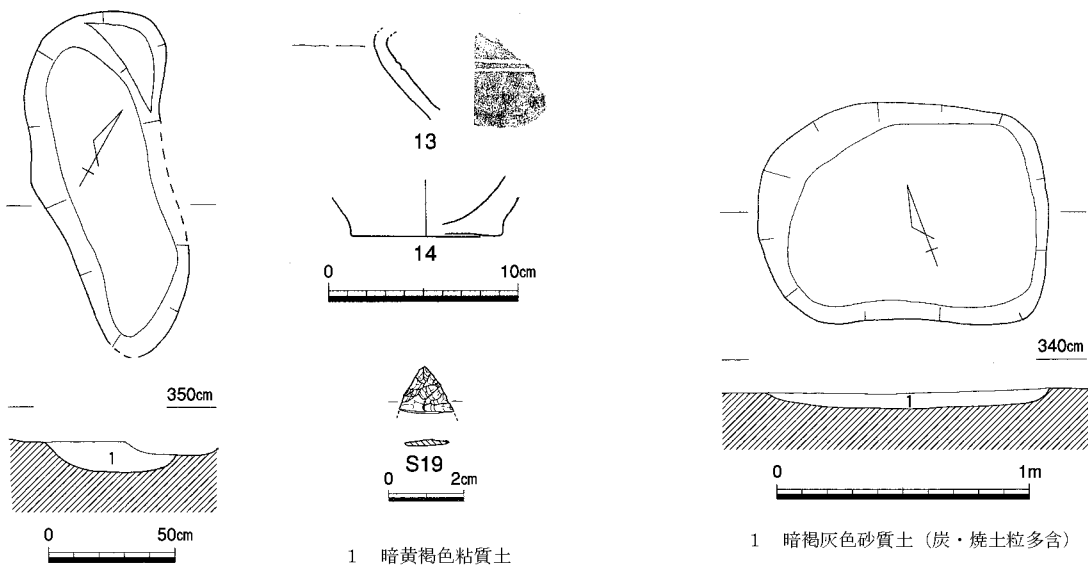
(高田)

### 土壙2 (第8・13図)

16B区の基盤層上面で検出した土壙で、溝3を切る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸116cm、短軸86cm、深さは6cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、炭と焼土を顕著に含む。

出土遺物には少量の土器片がある。土壙の時期は、検出状況から前期と考えられる。

(高田)



第12図 土壙1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

第13図 土壙2 (1/30)

土壌3 (第8・14図、図版2-2. 51-1)

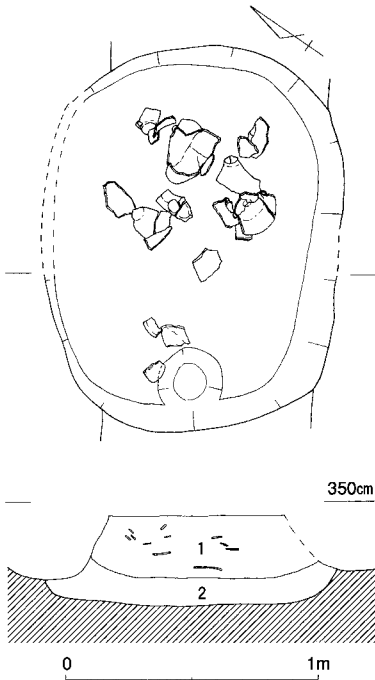
17B区に位置する土壌で、弥生時代中期の溝17・18に切られ、前期の溝1を切る。平面形は長楕円形を呈し、長径156cm、短径115cmを測る。検出面からの深さは35cmで、ほぼ平坦な底から急斜に壁が立ち上がる。埋土は2層で、まとまった量の土器片や炭・焼土を上層に含む。

遺物は土器片とサヌカイト製の石器が出土している。図示した土器は、壺16~18、甕15・19・20・23、蓋21・22である。

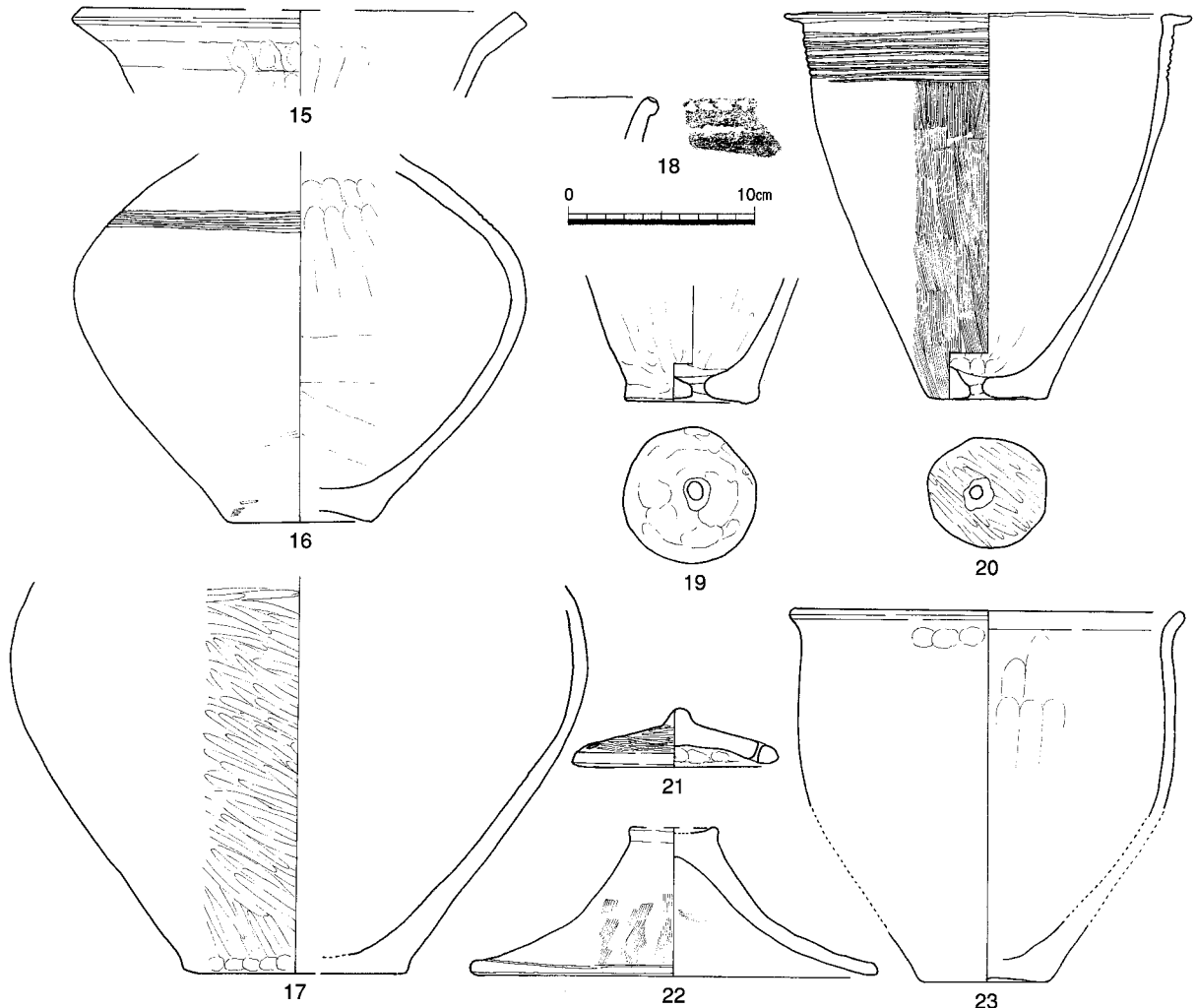
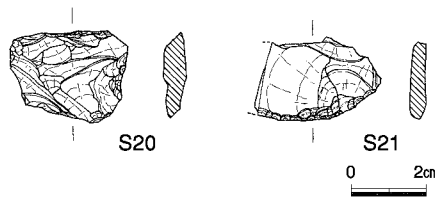
16は肩部に多条化したヘラ描平行沈線を施す。20は逆「L」字状を呈する口縁部下に6条のヘラ描平行沈線を施す。S20は

楔形石器、S21はスクレイパーである。

土壌の時期は百・前・Ⅲと考えられる。(高田)



- 1 暗黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒多含)
- 2 にぶい黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含)



第14図 土壌3 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

**土壌4** (第8・15図)

17C区に位置し、弥生時代中期の溝18底面で検出した土壌である。平面形は不整な隅丸長方形状を呈し、長軸130cm、短軸48cmを測る。断面形は「U」字状で、検出面からの深さは75cmを測る。埋土は基盤土ブロックと炭を多量に含む暗青灰色粘土である。

出土遺物はないが、検出状況から弥生時代中期以前と考えられる。(高田)

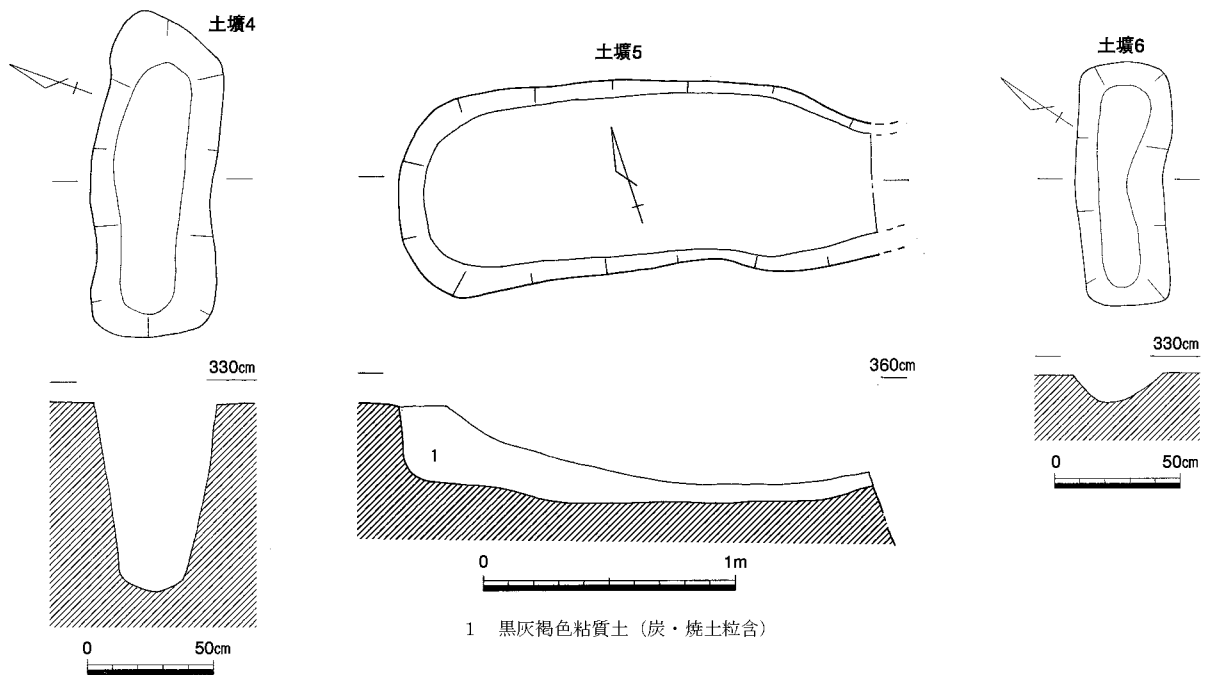
**土壌5** (第8・15図)

16・17C区で検出した土壌で、弥生時代中期の溝14・15に切られる。平面形は長楕円形を呈するものと考えられ、長さ185cm以上、幅77cmを測る。ほぼ平坦な底から壁が急斜に立ち上がり、深さは50cmを測る。

出土遺物には少量の土器細片がある。時期は検出状況から弥生時代中期以前と考えられる。(高田)

**土壌6** (第15図)

19C区で検出された平面長方形の土壌である。検出面での長さは98cm、幅は35cm、深さは11cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。検出状況から後期よりも古い可能性があるが、出土遺物が認められなかったことから、遺構の明確な時期は不明である。(柴田)



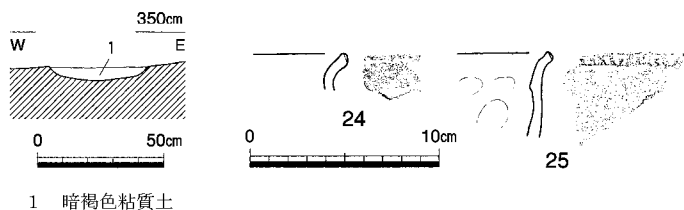
第15図 土壌4～6 (1/30)

**3 溝**

**溝1** (第8・16図)

16・17B区をほぼ南北方向に流走する溝で、土壌1や3に切られる。幅40cm前後、深さ5cmを測り、平坦な底から壁が緩やかに立ち上がる。

溝の時期は、前期か。(高田)



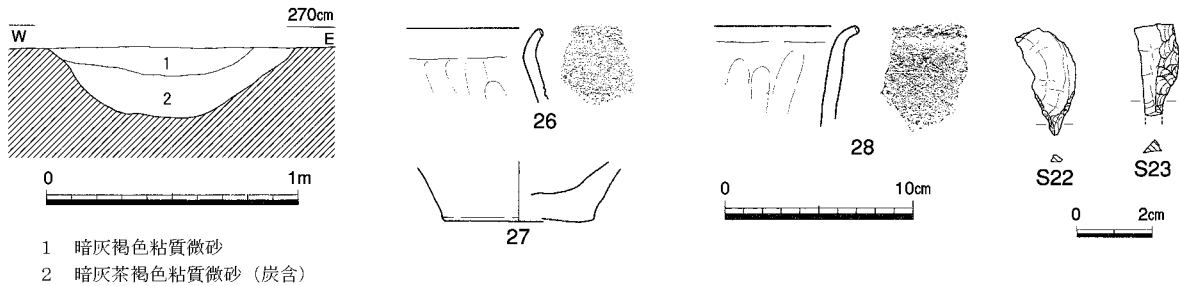
第16図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝2 (第8・17図)

16B・C区で検出した溝である。旧河道2の東岸の微高地端部を蛇行し、南側は『百間川原尾島遺跡5』の「溝1」に続くと考えられる。規模は幅100cm、深さ30cm前後を測り、断面形は逆台形を呈する。出土遺物は土器片と石製品である。S22・23はサヌカイト製の石錐である。

溝の時期は、出土遺物と検出状況から前期と考えられる。

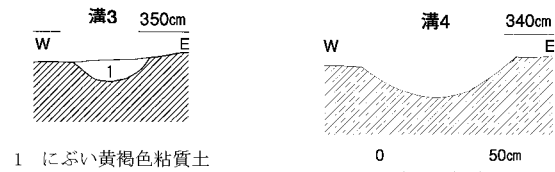
(高田)



第17図 溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

溝3 (第8・18図)

16B・C区で検出した溝である。北東—南西方向に直線的に流走し、南側は『百間川原尾島遺跡5』の「溝2」に続くと考えられる。幅30cm、深さ8cmを測り、底は丸みをもつ。



1 にぶい黄褐色粘質土

第18図 溝3・4 (1/30)

出土遺物はないが前期と考えられる。(高田)

溝4 (第8・18図)

17・18B・C区の基盤層上面で検出した溝である。北東—南西方向にほぼ直線的に流れるが、南側は後世の溝等で切られて不明である。最も残りの良い部分での溝の規模は、幅60cm、深さ17cmを測る。底は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。

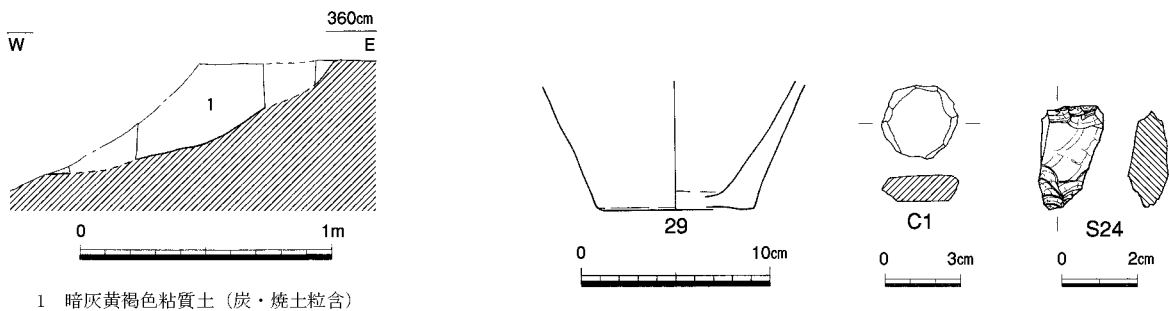
遺物は土器片とサヌカイト片が出土している。検出状況から前期に属すると考えられる。(高田)

溝5 (第8・19図)

17C区で検出した溝である。その北側は弥生時代後期の溝53に重なり、南側は『百間川原尾島遺跡5』の「溝10」に続き、大きく蛇行しながら北から南に向かって流走するものと推定される。幅2m前後に復元され、検出面からの深さは45cmを測る。底は平坦面をもたず、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、土器片と土製円板C1・サヌカイト製の楔形石器S24・サヌカイト片が出土している。

時期は、弥生時代中期の溝18に切られることなどから前期と考えられる。

(高田)



1 暗灰黄褐色粘質土 (炭・焼土粒含)

第19図 溝5 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

溝6 (第20図、図版2-3)

ほぼ22ライン上を同一方向にのびる溝である。掘り方上面は後期水田でほとんど削平されているが、北東端は鳥状高まりの下で検出され、そこでは幅1.9m、深さ1mを測る。断面形は逆台形を呈する。

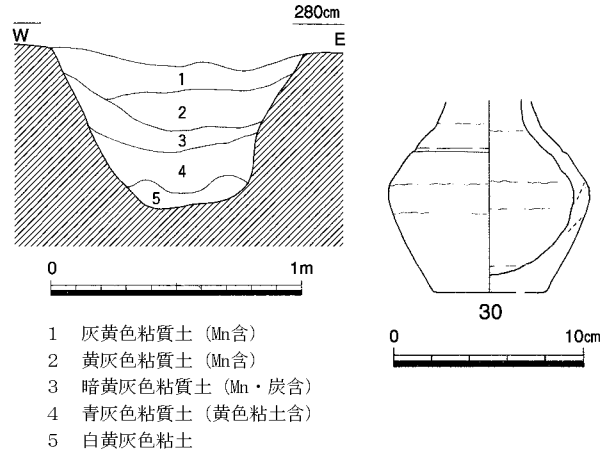
出土遺物は少ないが、壺30が出土しており、時期は前期と思われる。(柴田)

溝7~12 (第21図、図版4-2)

26~28B・C区で検出した溝群で、南北方向に流れる溝7を除き、溝8~溝12はほぼ東西方向に流れている。一部ピット状の窪みのみ検出

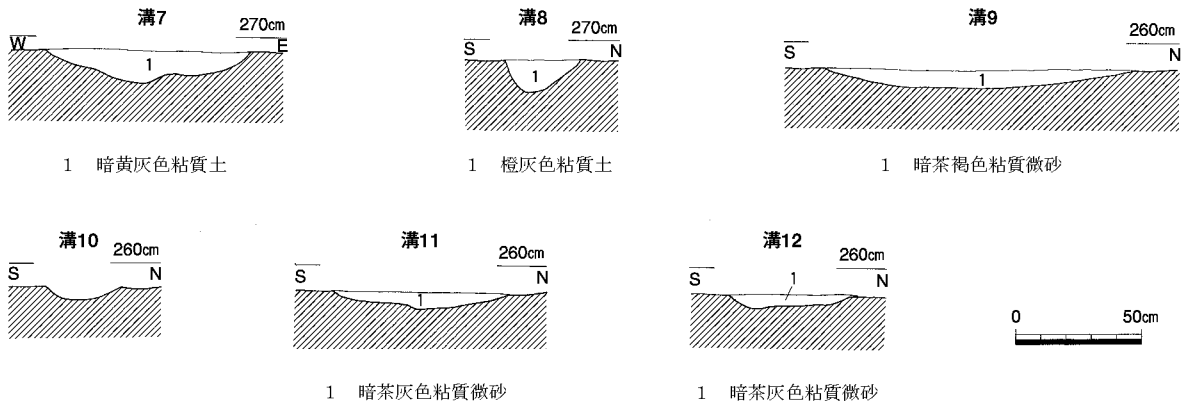
した箇所や所々途切れている溝もあるが、その深さが一様でなく、また底面が凸凹していたことが原因と推察できる。なお、溝7・溝11・溝12は調査区外に延びているものと考えられる。溝の幅は溝7が約100cm、溝8が約40cm、溝9が120~220cm、溝10が約20cm、溝11が約100cm、溝12が60~80cmを測る。全体的に遺物の出土量は少なく、図化することが不可能な土器片ばかりであったが、その示す時期や検出状況から弥生時代前期に比定できるとと思われる。

東西方向に流れる溝8~溝12をおおよその境にして、その北側から弥生時代前期水田が顕著に検出されないことや、溝群の北側にピット群が存在することから、これより北側に弥生時代前期の微高地が広がっている可能性を指摘できる。(松尾)



- 1 灰黄色粘質土 (Mn含)
- 2 黄灰色粘質土 (Mn含)
- 3 暗黄灰色粘質土 (Mn・炭含)
- 4 青灰色粘質土 (黄色粘土含)
- 5 白黄灰色粘土

第20図 溝6 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第21図 溝7~12 (1/30)

4 水田

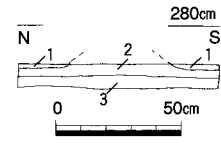
水田1 (第8・22・23図、図版4-1)

調査区の下流側、26・27B・C区で検出した。『百間川原尾島遺跡3』で検出している弥生時代前期水田層と考えられる暗灰褐色土層が26ラインより東にみられることから、その上層の淡灰褐色土を少し残し、数センチ単位で掘り下げていった。その結果、幅20~30cmの暗茶灰色を呈する畦畔が認められた。ただし、『百間川原尾島遺跡3』のように水田の区画がはっきりと分かるものが少なく、畦

畔の検出状況も断続的であることから、これより東側あるいは28ラインより下流側に広がっている可能性は少ないと思われる。

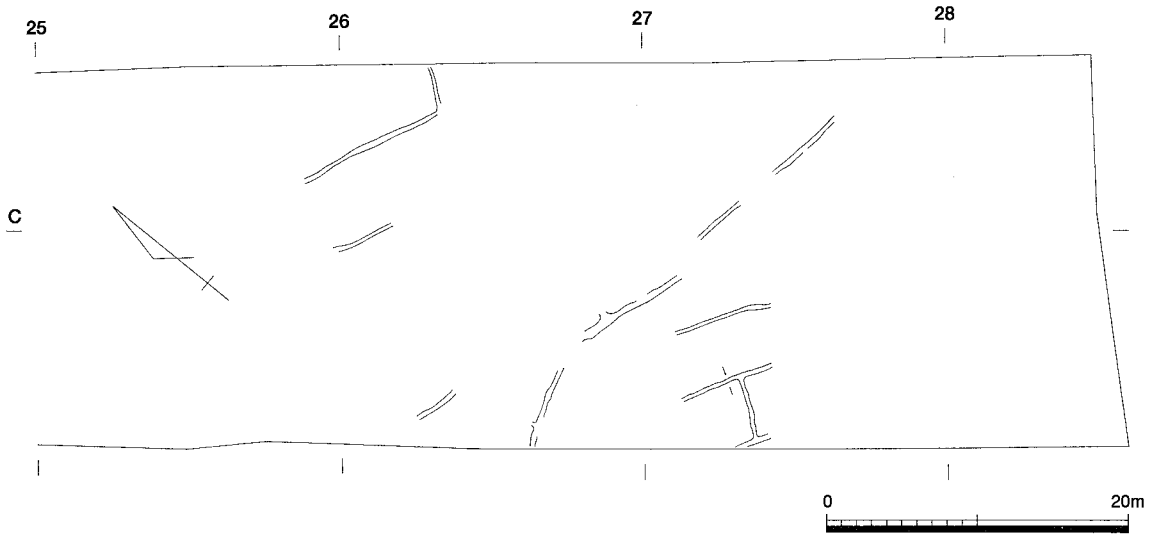
海拔高での水田面の高さは26B区付近が2.7m、27B区付近が2.6m、27C区付近が2.6～2.5mで、東南に向かうほど低くなり、その差は15cmほどである。畦畔の幅は20～30cm内外で、高さは削平されているためか、1cm程しか認められない所や、その痕跡しか確認できないものばかりであった。

水田層中には遺物が認められないが、検出面や過去の調査成果から弥生時代前期と推察される。(松尾)



- 1 暗灰褐色粘質土
- 2 黒褐色砂質土
- 3 暗灰色粘質微砂

第22図 水田畦畔 (1/30)



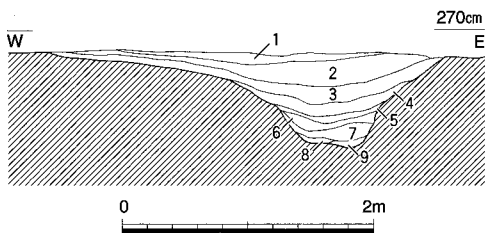
第23図 弥生時代前期水田全体図 (1/500)

## 5 旧河道

旧河道1 (第8・24・26図、図版3-1. 51-2)

14B・C区で検出された旧河道である。後述する旧河道2の右岸から分岐し、平面L字形を呈する。弥生時代後期の水田面下約40cm、標高250cm付近で検出できた。幅は3.5～4m程度で、深さは75cmを測るが、屈曲部を境にして南に向かって急に浅くなり、その先はたわみを認めるのみである。旧河道2との分岐点での底面は標高119cm、屈曲部底面は134cmを測る。洗掘等による地形と考えているが、そのままあるいは手を加えて何かに利用していた可能性も考えられる。

遺物としては、ほぼ完形の小形壺60が屈曲部中央の標高145cmで横たわって出土している。この他



- 1 灰黄色粘質土
- 2 灰緑色粘質土
- 3 暗灰色粘質土 (下面有機物層)
- 4 明灰緑色粘質土
- 5 暗灰色粘質土 (下面有機物層)
- 6 暗灰色粘質土
- 7 明灰緑色粘質土
- 8 暗灰色粘質土
- 9 灰色粘質土

第24図 旧河道1 (1/60)

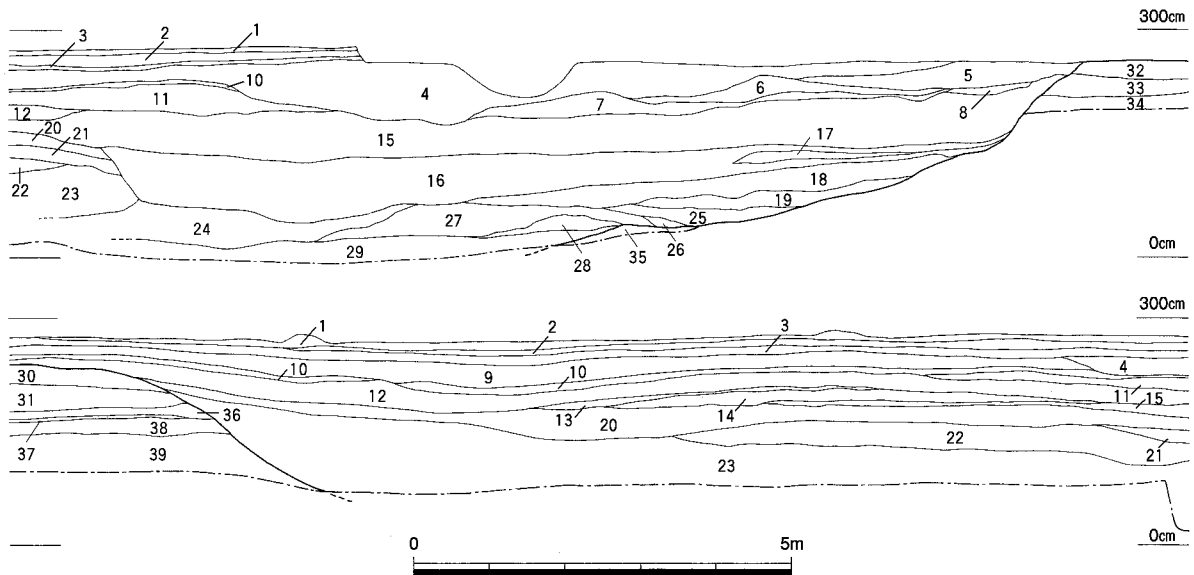
にも、堆積土中から壺や甕の破片なども出土している。遺物の時期は百・前・IIと思われる。旧河道2の滞水時期とほぼ同時期の河道と考えられる。(柴田)



旧河道2 (第8・25~33図、図版3-1~5. 図版51-2. 52. 53-1)

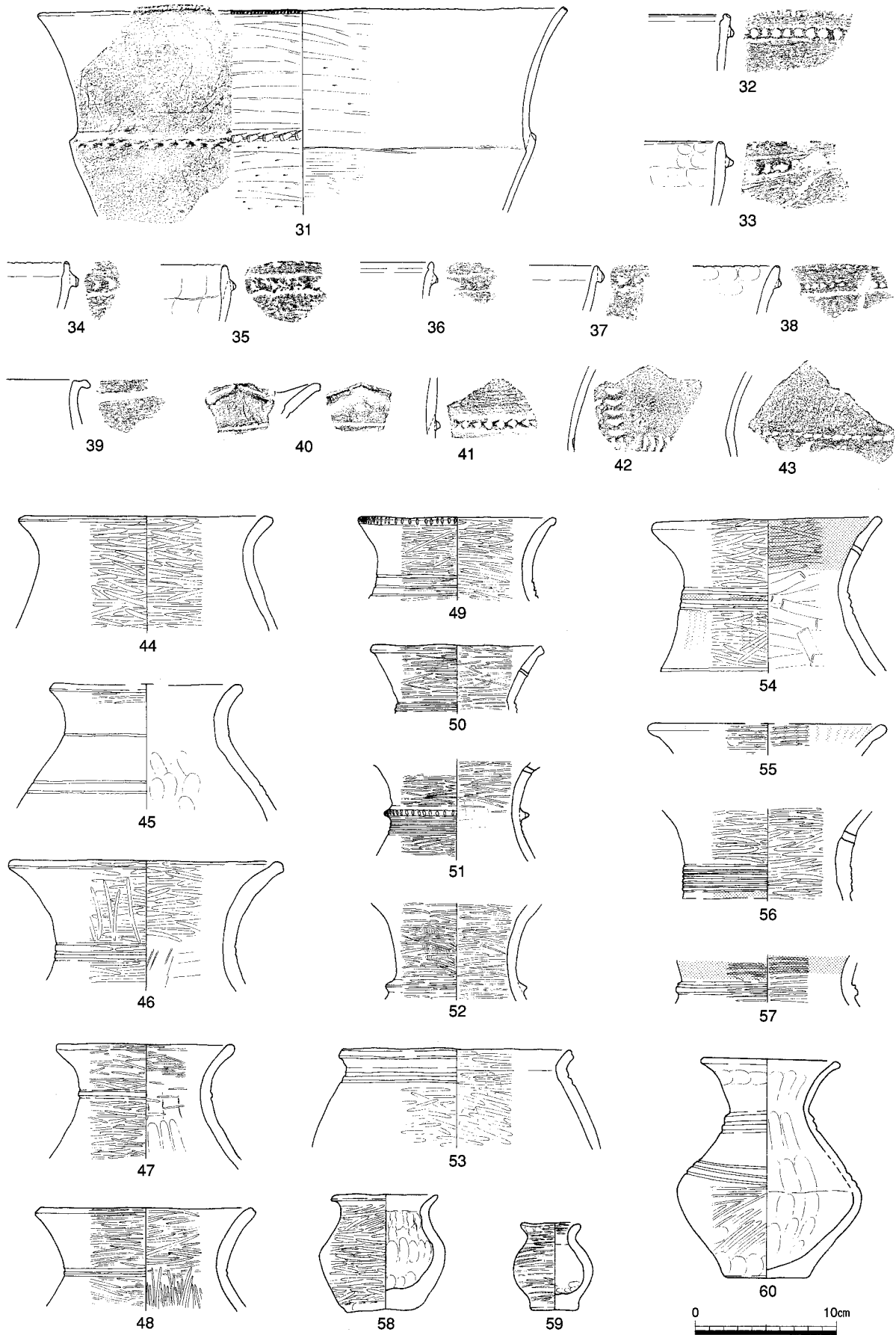
北東から南西方向に流走する旧河道で、14~16ライン間で検出された。これまでの調査区内では、流路が蛇行する部分も確認されているが、上端はほぼ真っ直ぐ延び、低水路幅は17m前後であるが、今回の調査区では北端の低水路幅が広がっている。このことから、この地点が蛇行する河道の湾曲部となる可能性も考えられる。低水路上端は弥生時代後期の水田面下約30~40cmで検出され、標高は東側で260cm、西側で240cmを測る。河床については、標高0m付近まで掘り下げたが、以下砂層が続く上に湧水が激しいため確認はできなかった。東肩は後期水田で削平されているが、ここから東には幅7~13mにわたる高水敷が存在し、微高地に至ると推測される。一方、西肩は13~20m幅で湿地が広がり微高地に至ると考えられる。

1層は後期の水田層で、数層の間層を挟んでこの低水路が検出される。4~12層(上層)は比較的砂層が目立ち、115~122などの中期の土器に交じって78・103・112の前期の土器も出土している。13~17層(中・下層)は粘質土である。特に15・16層は厚く堆積し、倒木や多くの縄文~弥生前期の土器、

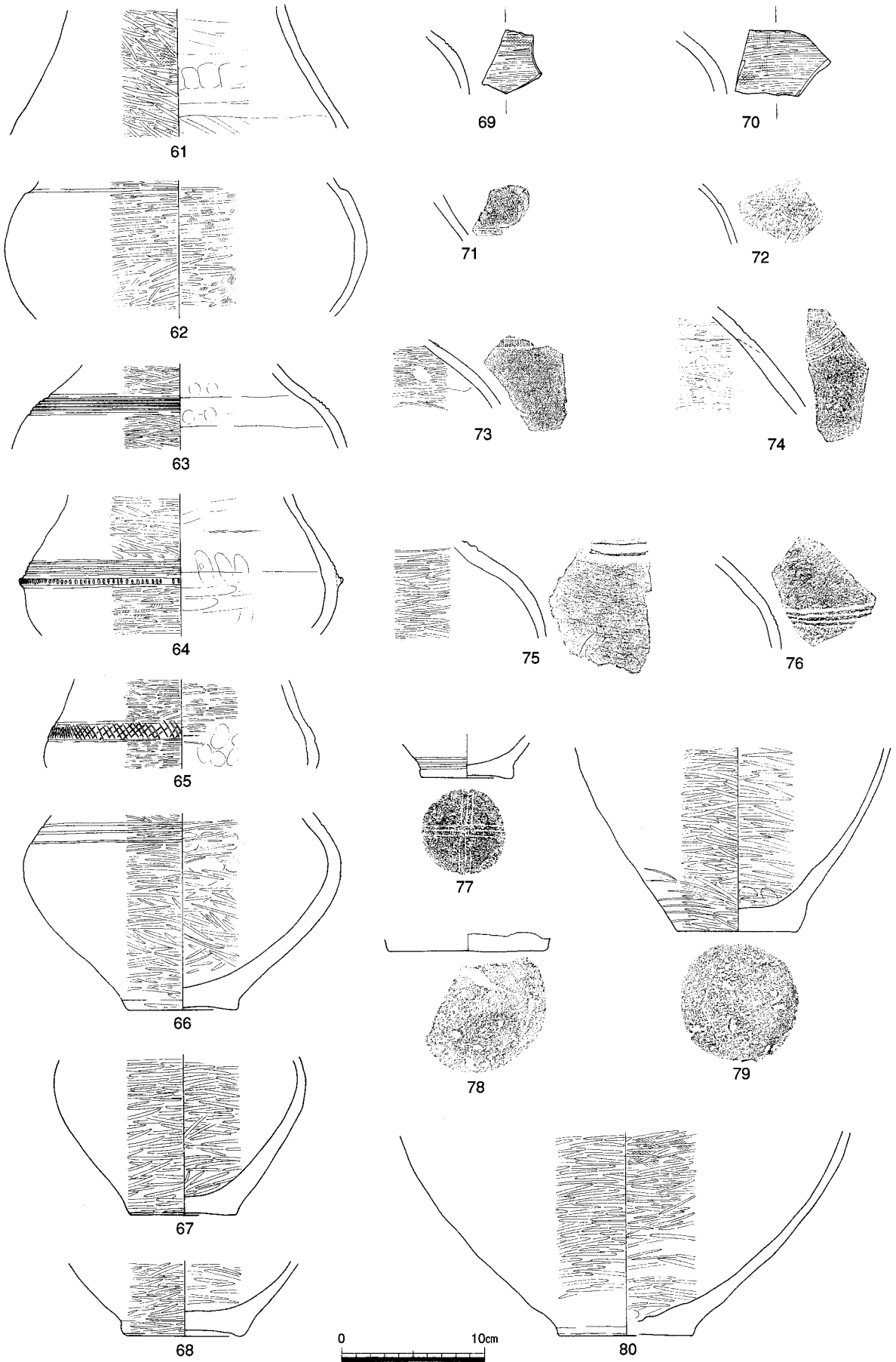


- |                         |                            |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 黄灰色粘質土                | 21 淡灰色粘質微砂                 |
| 2 灰褐色粘質土                | 22 灰色粘質微砂                  |
| 3 暗褐色粘質土                | 23 灰白色粗砂~灰黒色粘質微砂の互層(植物体含)  |
| 4 淡灰黄色粗砂・粘質微砂の互層        | 24 灰白色細砂~灰黒色粘質微砂の互層(植物体含)  |
| 5 灰黄色粗砂・粘質微砂混じり         | 25 灰白色細砂(植物体含)             |
| 6 暗黒灰色粘質微砂              | 26 暗黒灰色粘質微砂(植物体含)          |
| 7 灰白色粗砂~微砂              | 27 灰白色粗砂~暗黒灰色粘質微砂の互層(植物体含) |
| 8 暗黒灰色粘質微砂              | 28 暗灰色粘質微砂・細砂混じり(植物体含)     |
| 9 淡黄灰色粘質微砂              | 29 灰白色粗砂(植物体含)             |
| 10 暗灰黒色粘質微砂             | 30 暗灰黄褐色粘質微砂               |
| 11 淡灰黄色粗砂・粘質微砂の互層       | 31 暗灰色粘質微砂(炭含)             |
| 12 淡灰色粘質微砂・細砂の互層        | 32 淡灰褐色粘質微砂                |
| 13 暗灰黒色粘質微砂             | 33 灰黄褐色粘質微砂                |
| 14 灰黄褐色粘質微砂             | 34 淡灰黄褐色微砂                 |
| 15 暗黒灰色粘質微砂(植物体多・土器含)   | 35 灰緑色粘質微砂                 |
| 16 黒色粘質微砂(植物体多・土器・木器含)  | 36 淡黄色粘質微砂                 |
| 17 灰色粘質微砂               | 37 淡灰褐色粘質微砂                |
| 18 淡黒灰色粘質微砂・粗砂混じり(植物体含) | 38 灰黄色粘質土                  |
| 19 淡黒灰色微砂・粗砂混じり(植物体含)   | 39 暗灰色粘質微砂                 |
| 20 灰白色細~灰黒色粘質微砂の互層      |                            |

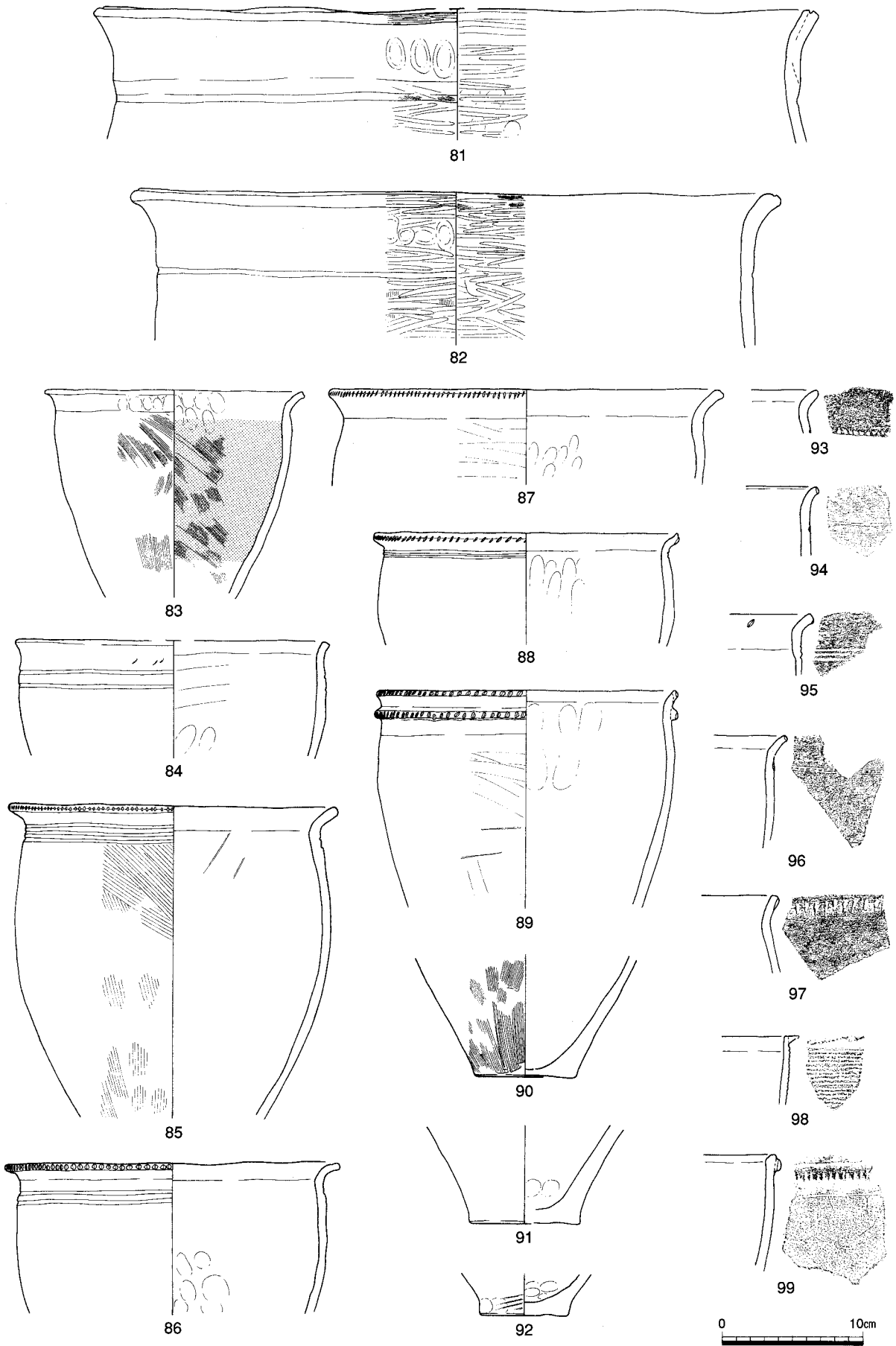
第25図 旧河道2 (1/100)



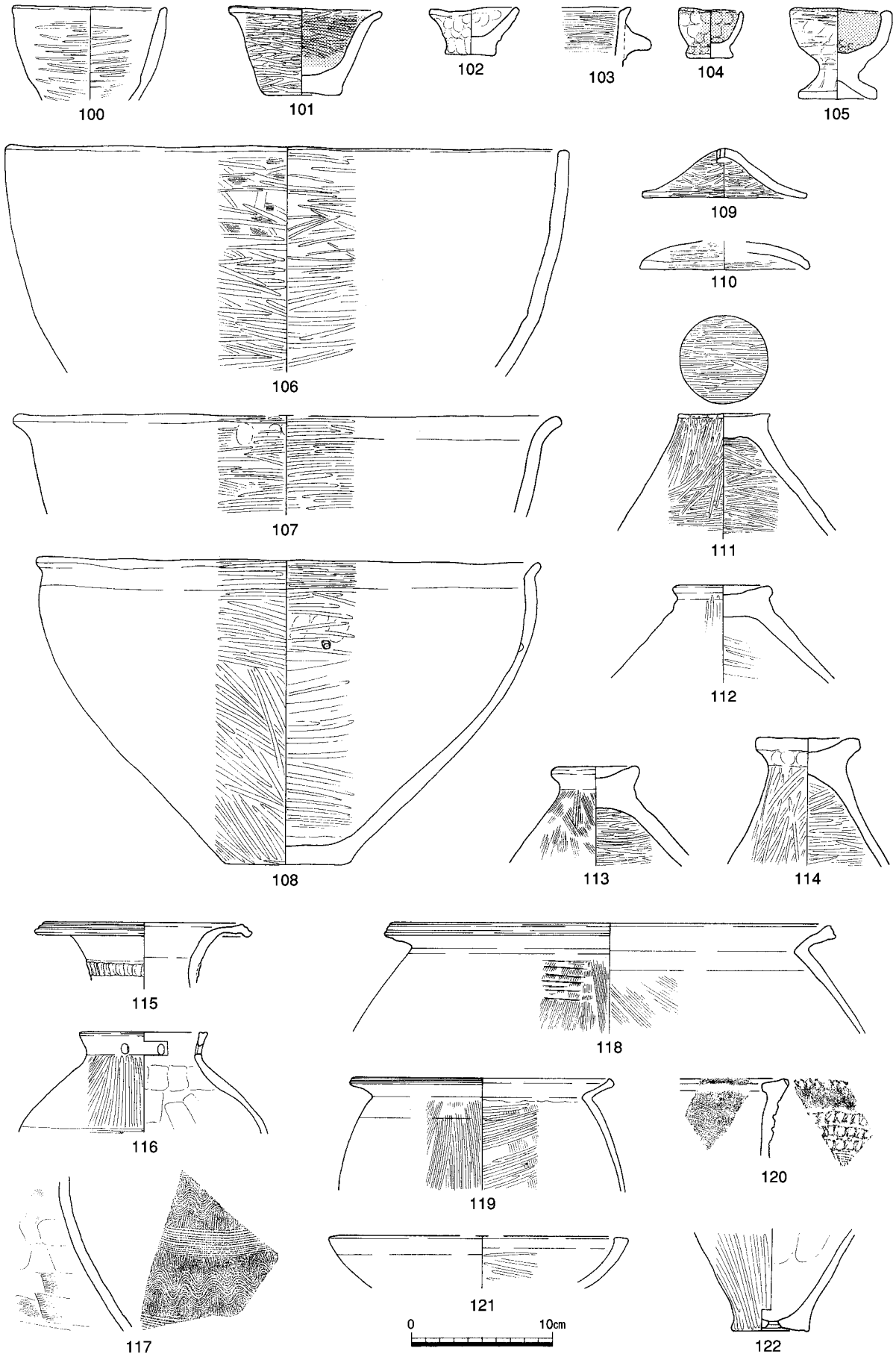
第26図 旧河道出土遺物① (1/4)



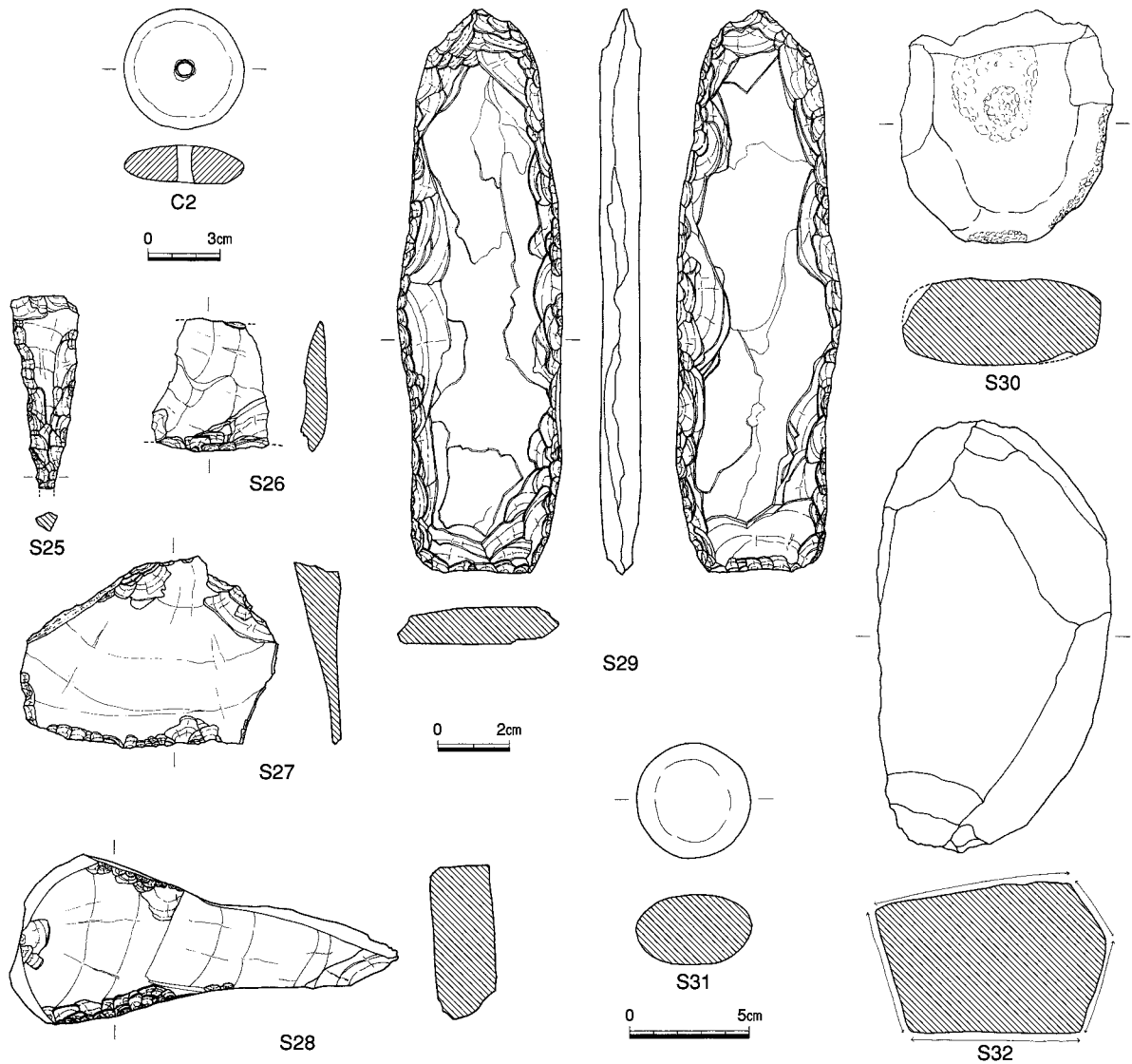
第27図 旧河道出土遺物② (1/4)



第28図 旧河道出土遺物③ (1/4)



第29図 旧河道出土遺物④ (1/4)

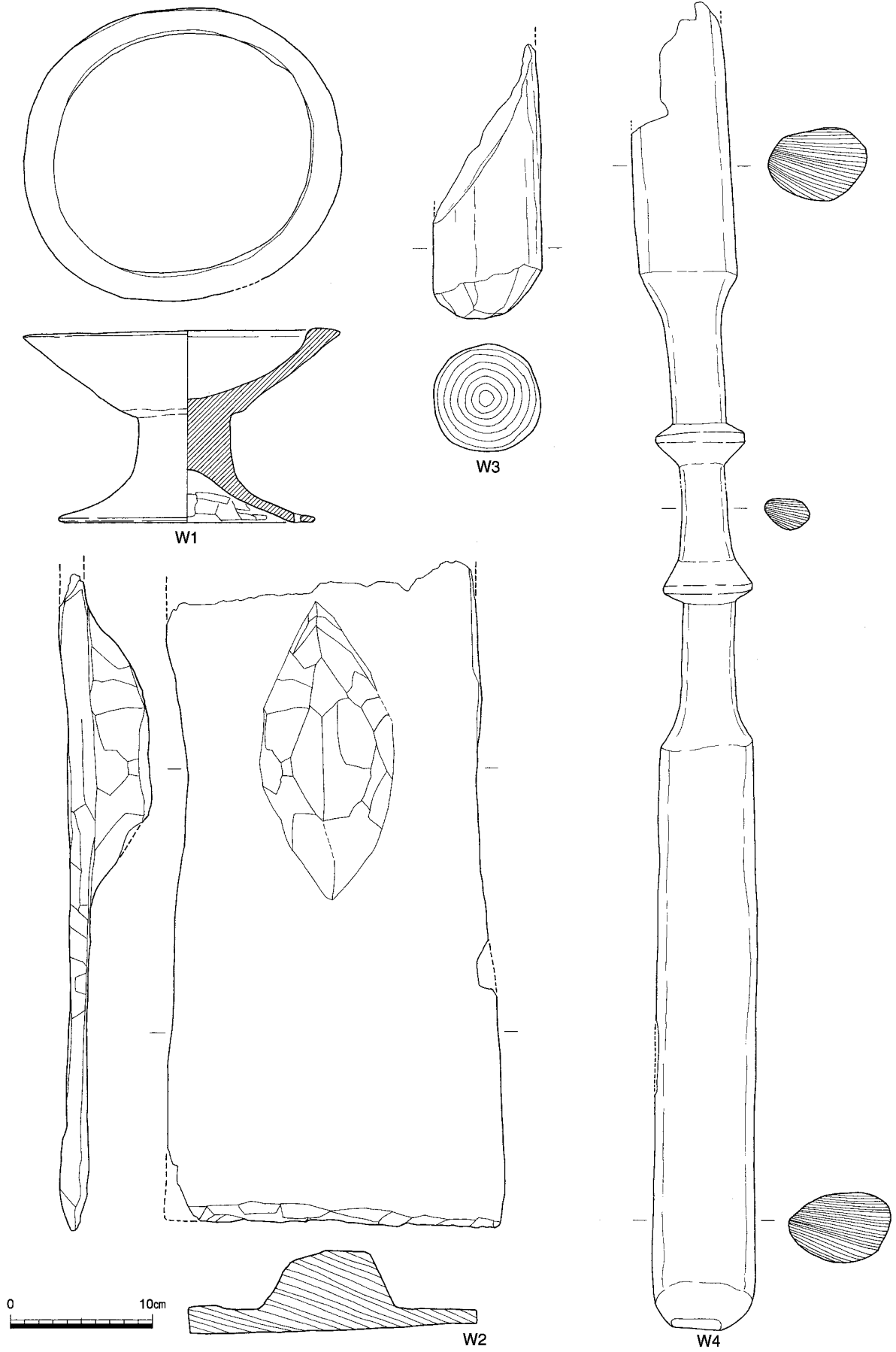


第30図 旧河道出土遺物⑤ (1/3・1/2)

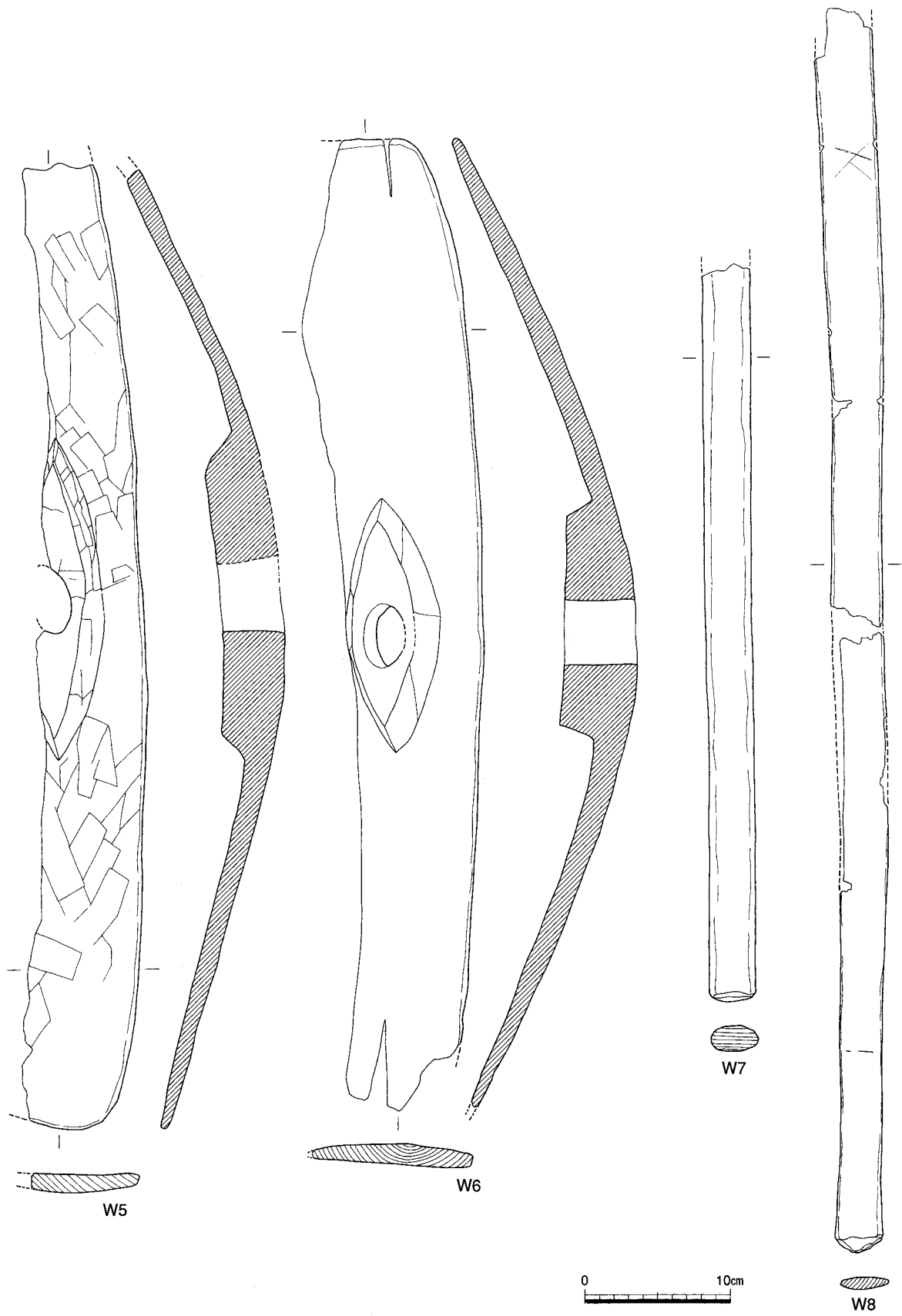
食物残滓と思われるクルミ、ハイガイ、イノシシや鳥類の骨などもこの層に含まれている。一方、18～29層（最下層）は砂層が卓越しており、比較的流速のある状態であったと考えられる。この最下層からは、前期の土器48・50・51・55～57・59・62・63・65・66・68・69・71～75・79・81・82・86・87・89・94・97・99・101・105・109・111・113の他に縄文晩期の土器31・40・43、石製品S27・29・30・32なども出土している。また、この層には植物遺体も多く、左岸側上部の18・19層からは木製品W1～10が出土している。

上記の河道出土物のほとんどは、低水路中央から左岸の間に集中して認められており、このことは流速や方向などの流路の状態もしくは縄文～弥生前期の生活拠点が左岸域にあったことを示唆する。また、河道は前期の間に流速を著しく弱め、あまり流れの無い川と化し、中期には非常に浅い川ないしは氾濫原であった可能性が高いようである。周囲には径70～80cm、最大周2.05mの広葉樹が茂っていたことも推測される。

縄文土器は晩期中葉から後葉にかけての深鉢の破片が多く、浅鉢も出土している。左岸近くでは百・前・Ⅱが多いが、最下層では百・前・Ⅰのものも一定量含まれる。百・前・Ⅲは比較的少ない。



第31図 旧河道出土遺物⑥ (1/4)



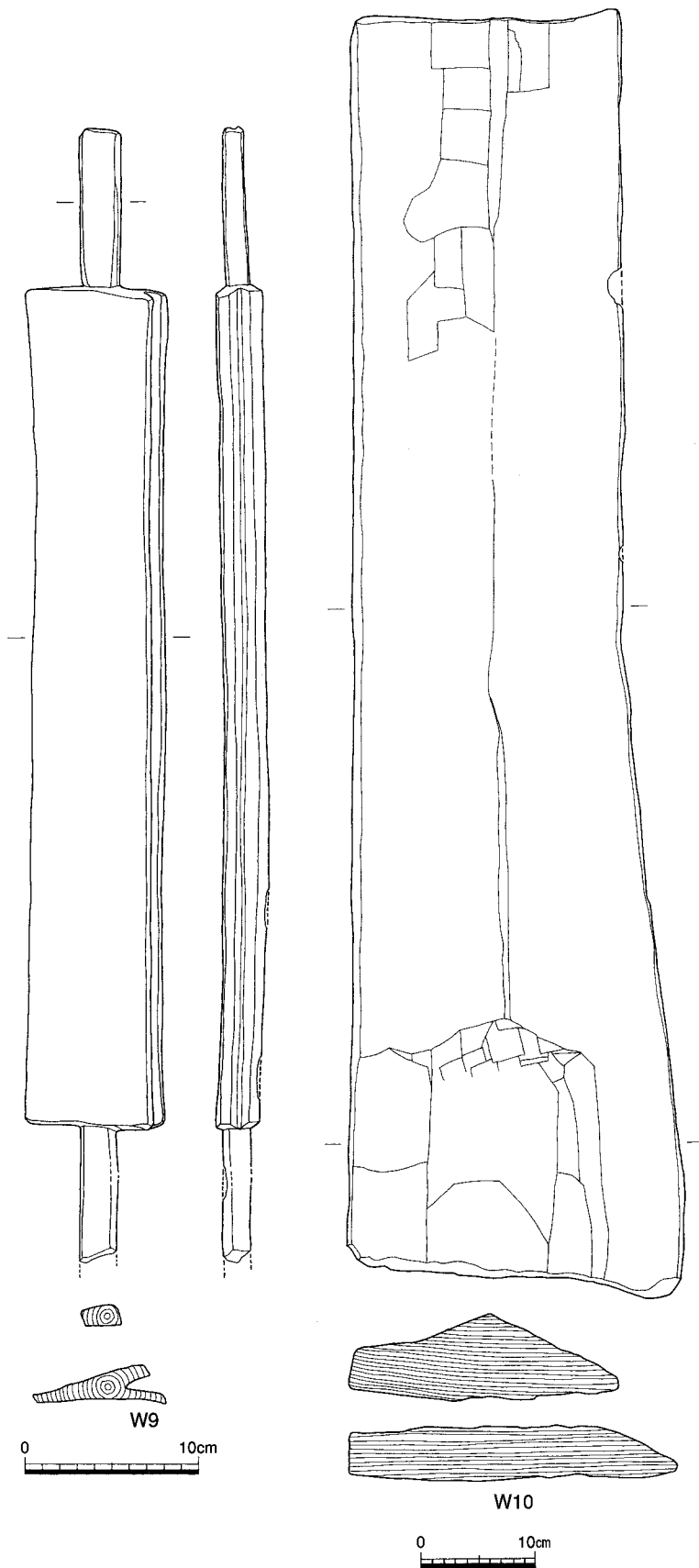
第32図 旧河道出土遺物⑦ (1/4)



壺には、おもに外面や内面に黒色顔料を塗布（46・49・51・52・54・56・57・63・69・70・73・76）あるいはそれによって模様を施しているもの（54・55）が認められる。69や70ではそれと共に赤色顔料（ベンガラ）の部分的な付着が確認されている。鉢106の外面も黒色顔料が塗布されている。

一方、甕83や小形鉢101、小形台付鉢104・105の内面には赤色顔料（ベンガラ）が見られ、顔料容器の可能性もある。

W1は高杯で、脚部裾に2個1対の小孔（径4mm）が2組穿たれている。器形としては高槻市安満遺跡出土の木製黒漆塗り高杯に類似する。W2は広鋏未製品で大まかな形ができているが、W10は広鋏の素材と思われ、2～3点に分割する以前の段階と思われる。W3・4は竖杵で、特にW3は表面が全面炭化している。諸手鋏はW5・8が組み合わせたままの状態出土しており、W6・7も出土状況から組み合わせになる可能性が高い。W9は織機具とされるが、緯打具か布（経）巻具であるかは不明である。さらに、兵庫県玉津田中遺跡出土例では、器種の再検討を要する出土状態が確認されている。（兵庫県文化財調査報告第135-5冊、1996）。（柴田）



第33図 旧河道出土遺物⑧ (1/6・1/4)

### 第3節 弥生時代中期の遺構・遺物

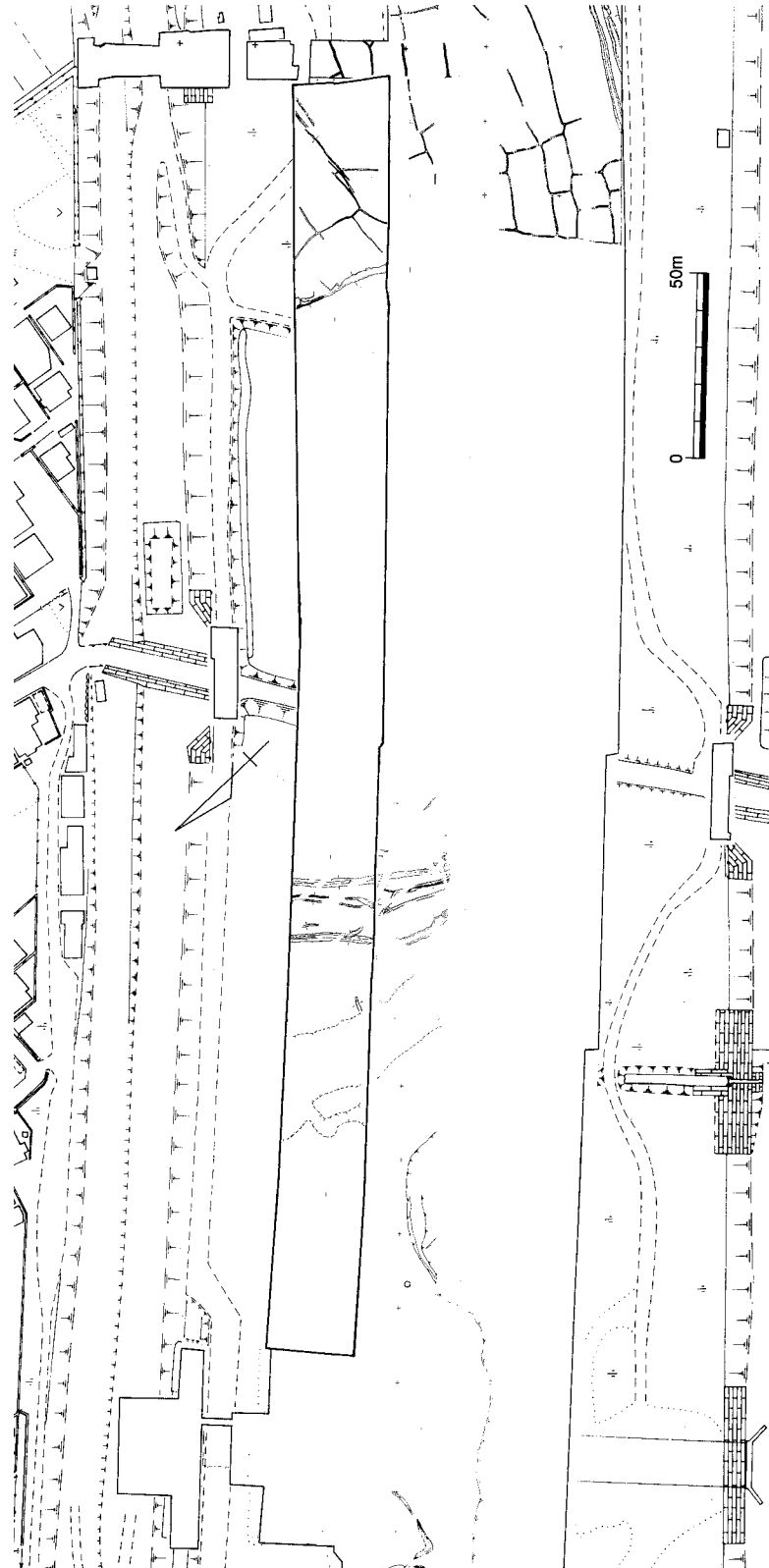
#### 弥生時代中期の概要

中期の地形は基本的に前期と大きな変化は無いが、旧河道については、かつての低水路部はかなり堆積が進み、河床が非常に浅くなっており、氾濫原になっている可能性がある。この低位部を挟んで2つの微高地と東端に水田が確認された。

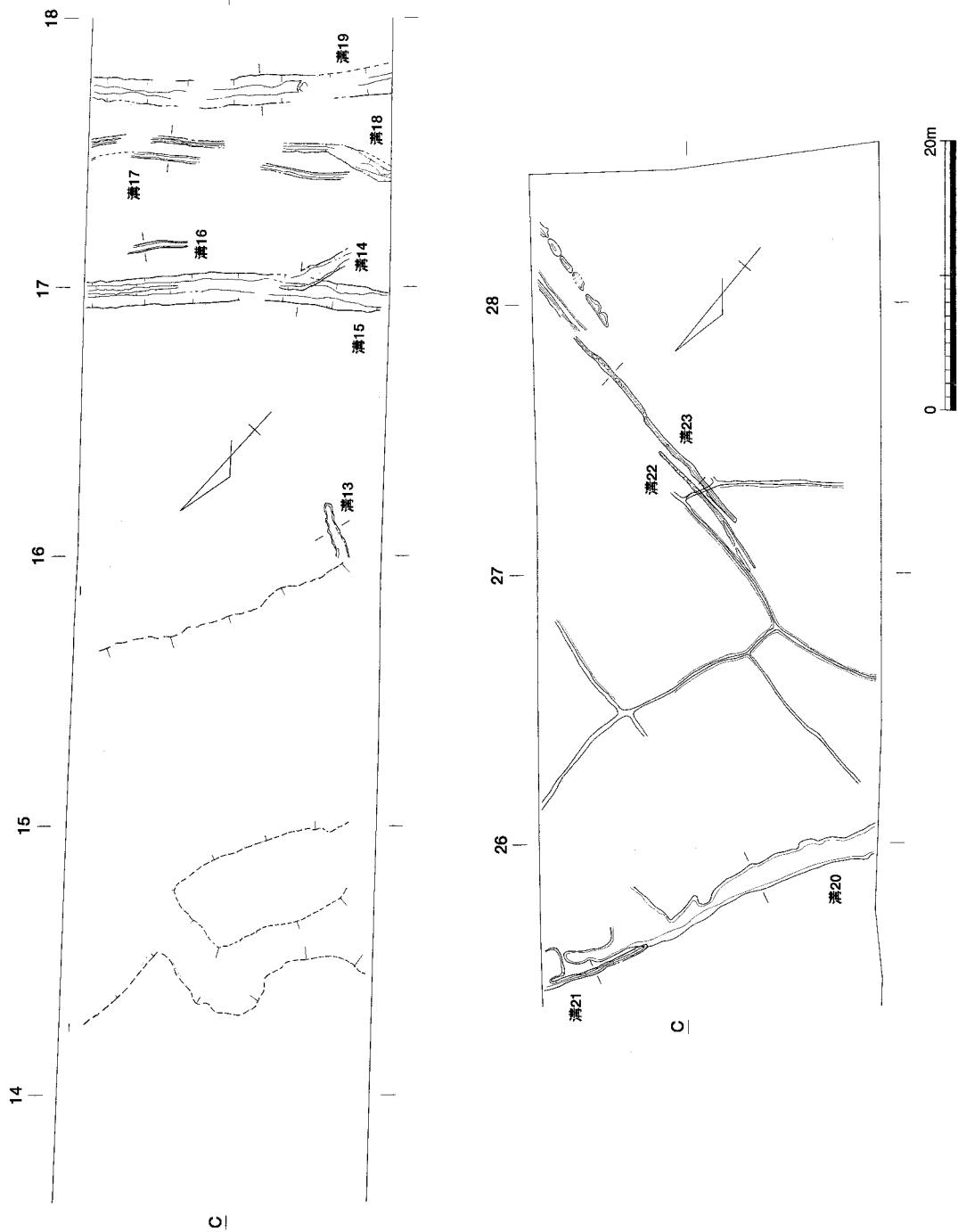
西の微高地については前期同様に明確な遺構は確認されなかった。東の微高地では溝11条が検出された。遺構の確認状況を見ると、少なくとも調査範囲では微高地の土地利用に変化がうかがえ、遺物の出土量もそれを示唆している。河川などの環境変化も集落の展開に影響を及ぼしたと推測される。

掲載した遺物は、土器11点、石製品7点である。

(柴田)



第34図 対象調査区位置および周辺遺構配置（弥生時代中期、1/2,000）



第35図 弥生時代中期遺構配置 (1/500)

## 1 溝

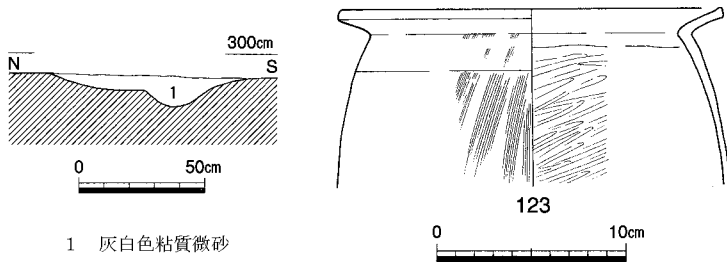
### 溝13 (第35・36図)

15・16C区で検出した溝である。旧河道2の東岸に位置し、旧河道に流れ込むものと考えられる。規模は幅80cm、深さ10cm前後を測る。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は土器片とサヌカイト片が出土している。甕123は「く」の字状に外反する口縁をもつ。

溝の時期は、百・中・IないしはIIと考えられる。

(高田)



1 灰白色粘質微砂

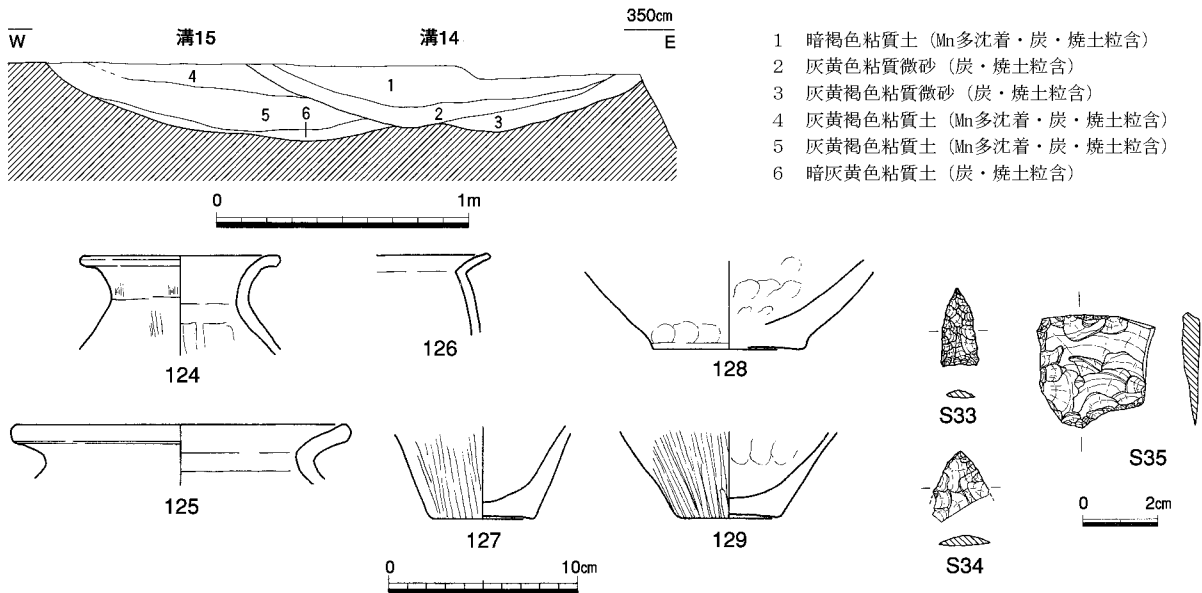
第36図 溝13 (1/30)・出土遺物 (1/4)

なっている可能性がある。検出面からの深さは、溝14が25cm、溝15が30cmを測り、いずれの底も丸く、壁が緩やかに立ち上がる。直線的な溝15の南側は『百間川原尾島遺跡5』の「溝3」に続き、溝14は「溝6・7」のいずれかに続くものと考えられる。

遺物は同時に掘り上げたものが多いが、土器片と石器が出土した。土器は壺124、甕の口縁部125・126、甕の底部127～129である。石製品はサヌカイト製の石鏃S33・34と楔形石器S35である。

溝の時期は、検出状況と出土遺物から中期と考えられる。

(高田)



第37図 溝14・15 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

溝16 (第35・38図)

17B区に位置する溝で、溝14・15に平行する。後世の遺構に切られるなど不明な部分が多いが、全長7.5m、幅55cm、深さ5cmを測る。

溝の時期は、検出状況から中期と考えられる。

(高田)

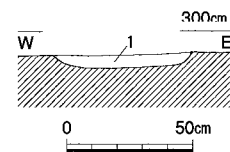
溝17 (第35・39図)

17B・C区に位置する溝である。北東—南西方向に流走し、溝18と平行するが、南端で重なる。溝の規模は幅55cm、深さ30cmを測り、断面形は「U」字状を呈する。

出土遺物は少量の土器片とサヌカイト片がある。

溝の時期は、検出状況から中期と考えられる。

(高田)



1 暗灰黄褐色粘質土

第38図 溝16 (1/30)

溝18 (第35・40図)

17B・C区を北東—南西方向に流走する溝である。溝17とは約1m前後の間隔をおいて平走するが、南端で重なる。またこの部分では前期の溝5を切っている。断面形は椀形で、幅80cm、深さ27cmを測る。遺物は土器片と石器が出土している。図示したものは甕の底部133とサヌカイト製石錐S37である。

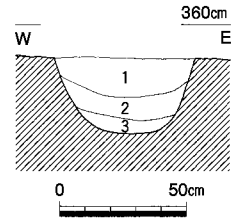
溝の時期は、検出状況から中期と考えられる。

(高田)

溝19 (第35・40図)

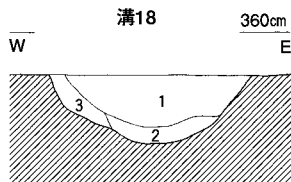
17B・C区を北東から南西方向に直線的に流走する溝で、南側は『百間川原尾島遺跡5』の「溝9」に続く。溝の規模は幅110cm、深さ16cmを測る。底は平坦面をもたず、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は土器片とサヌカイト製石器がある。甕の口縁部130は多条の平行ヘラ描沈線を施す。溝の時期は百・中・Iと考えられる。

(高田)

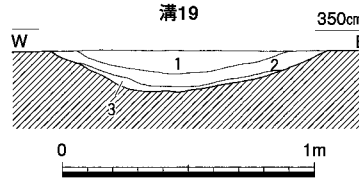


- 1 暗褐色粘質土
- 2 灰黄色砂質土
- 3 褐灰色粘質土

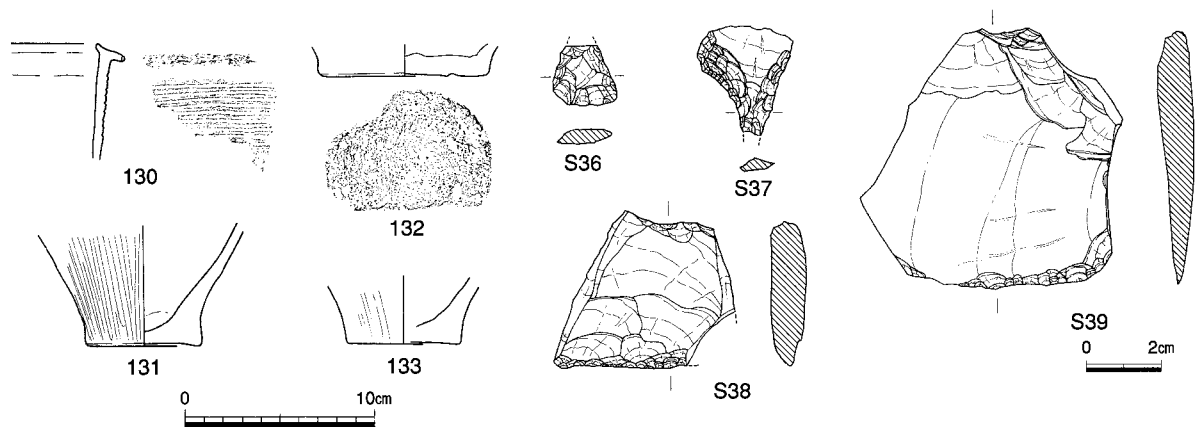
第39図 溝17 (1/30)



- 1 褐灰色粘質土
- 2 褐灰色粘質土
- 3 灰褐色粘土



- 1 暗灰黄褐色粘質土
- 2 暗黄褐色粘質土
- 3 灰褐色粘土～粘質微砂



第40図 溝18・19 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

溝20 (第35・41図)

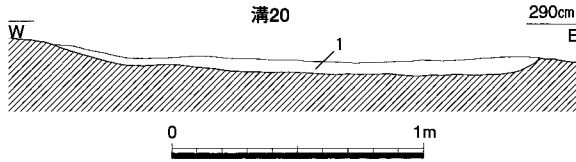
25・26区境で検出した北東—南西に流れる幅100～200cm、深さ4～10cmを測る溝であり、途中25B区半ばで東側へ分岐するが、そこから先は明瞭でない。溝の方向は後期水田に伴う島状高まりと同じである。弥生時代後期水田層およびそれに伴う島状高まりを除去した後に検出したことや、弥生時代中期水田面とほぼ同じ高さであったことから、中期水田と同時期であると思われる。

(松尾)

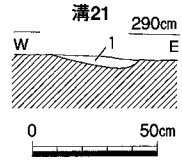
溝21 (第35・41図)

25B区にて検出した溝で、北東—南西に流れる。南西端は溝20を切っているが、北東端は溝20の続きかと思われるたわみにつながっているようで、その前後関係は判然としない。規模は幅が約50cm、深さは約3cmを測り、断面形は皿状を呈する。時期は弥生時代後期水田層およびそれに伴う島状高まりを除去した後に検出したことや、溝20との関係から弥生時代中期に比定できる。

(松尾)



1 灰白色粘質微砂 (黒褐色ブロック含)

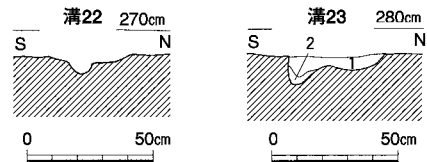


1 灰白色粘質微砂

第41図 溝20・21 (1/30)

溝22・23 (第35・42図)

27 B・C区を東西に流れる溝である。規模は溝22が幅20～60cm・深さ3～5cm、溝23が幅30～40cm・深さ5～10cmを測る。溝22・23からは土器の小片が出土しており、それらの土器の特徴は弥生時代中期を示すものである。このため溝22・23を中期の溝として掲載したが、検出状況では前期水田層を除去した後に確認しており、前期に遡る可能性も考えられる。(松尾)



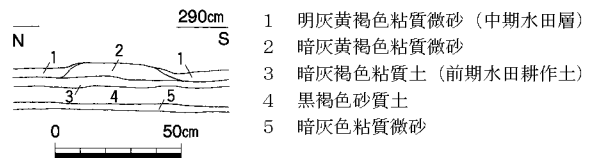
1 暗灰褐色粘質微砂  
2 灰茶褐色粘質微砂

第42図 溝22・23 (1/30)

2 水田

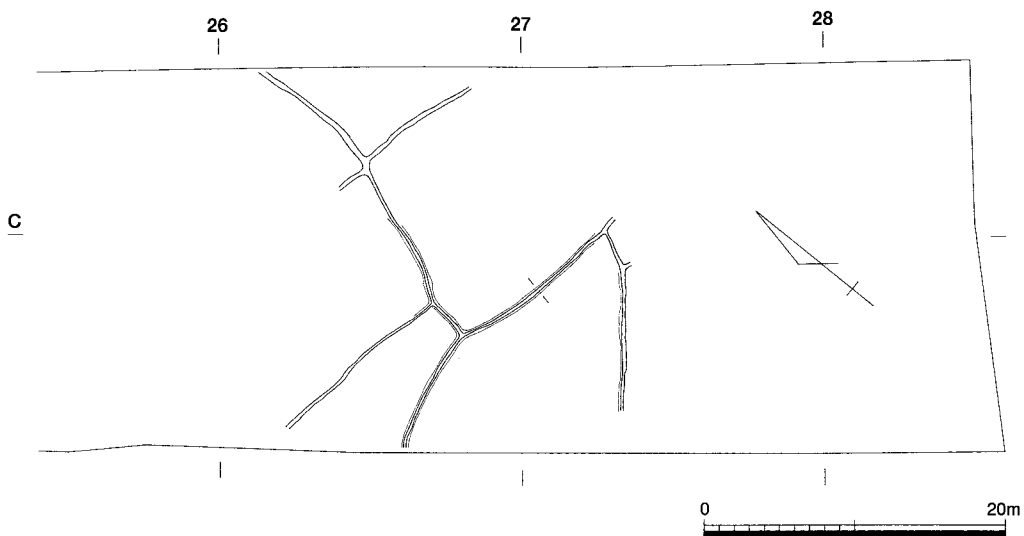
水田2 (第43・44図、図版4-3)

中期水田は、調査区の下流側26・27 B・C区で検出した。26ライン付近から東に中期水田層と考えられる明灰黄褐色土がみられることから、数センチ単位で掘り下げを行った。その結果、幅30～50cmほどの暗灰黄褐色を呈する畦畔を検出した。水田面の高さは南に向かうほど若干低くなるが、その差はわずか3cm余りである。畦畔の高さは1cm程でその痕跡しか認められない部分もあった。水田の保存状態はあまり良くなく、27ラインより下流側は検出できていない。水田層中より遺物の出土はないが、検出面や過去の調査成果から弥生時代中期に比定できる。(松尾)



1 明灰黄褐色粘質微砂 (中期水田層)  
2 暗灰黄褐色粘質微砂  
3 暗灰褐色粘質土 (前期水田耕作土)  
4 黒褐色砂質土  
5 暗灰色粘質微砂

第43図 水田畦畔 (1/30)



第44図 弥生時代中期水田全体図 (1/500)

## 第4節 弥生時代後期の遺構・遺物

### 弥生時代後期の概要

調査区は2つの微高地、その間と東側に広がる低位部にまたがる。

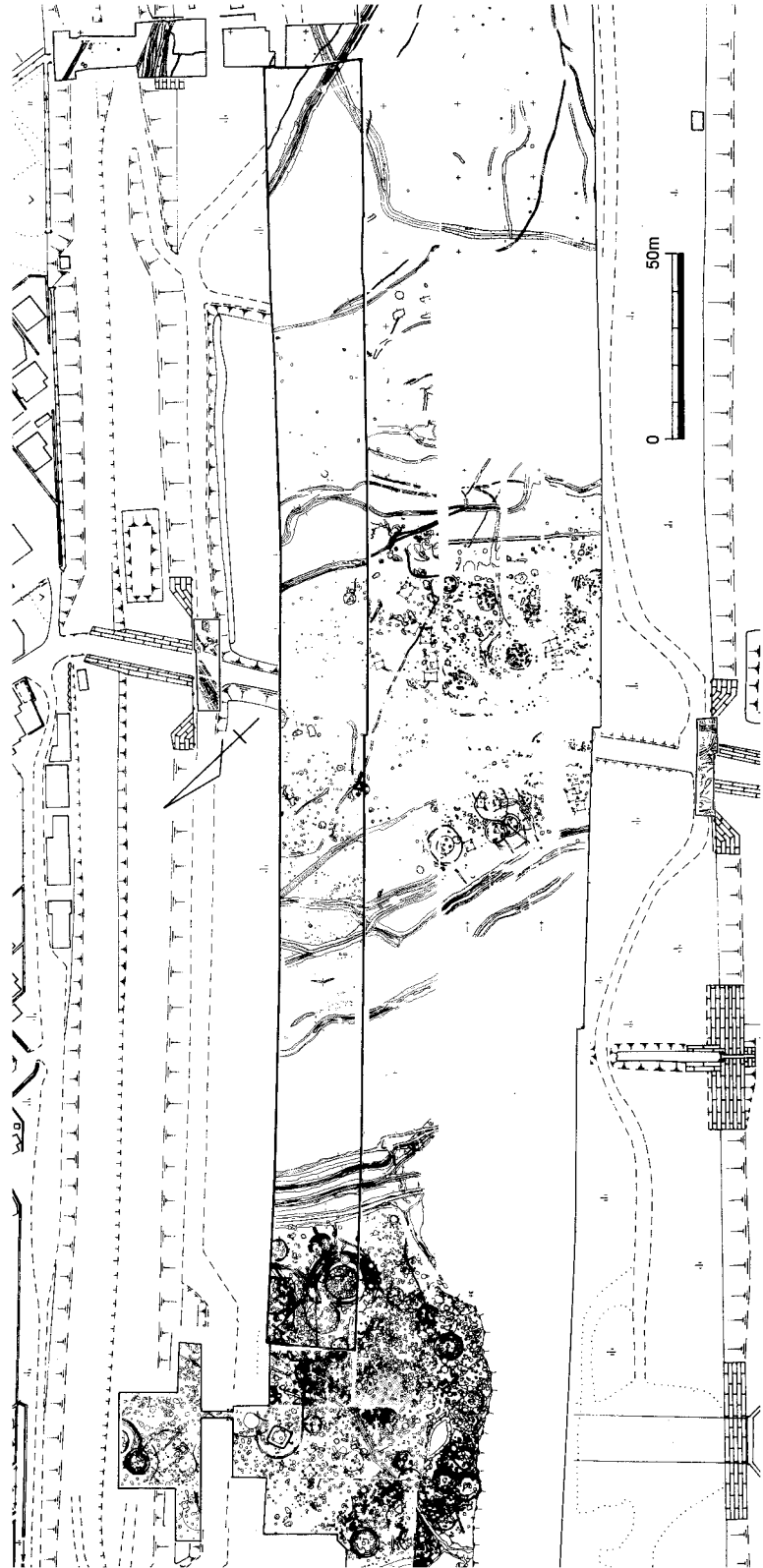
低位部は基本的に水田として利用されており、後期末の洪水砂で覆われる水田を広範に検出し、それに先行する水田に伴うとみられる溝・水路も検出した。

東側の微高地は遺構密度が低く、竪穴住居2棟、井戸2基などを検出したにすぎない。既調査の微高地南側部分よりもさらに遺構密度が低くなっている。

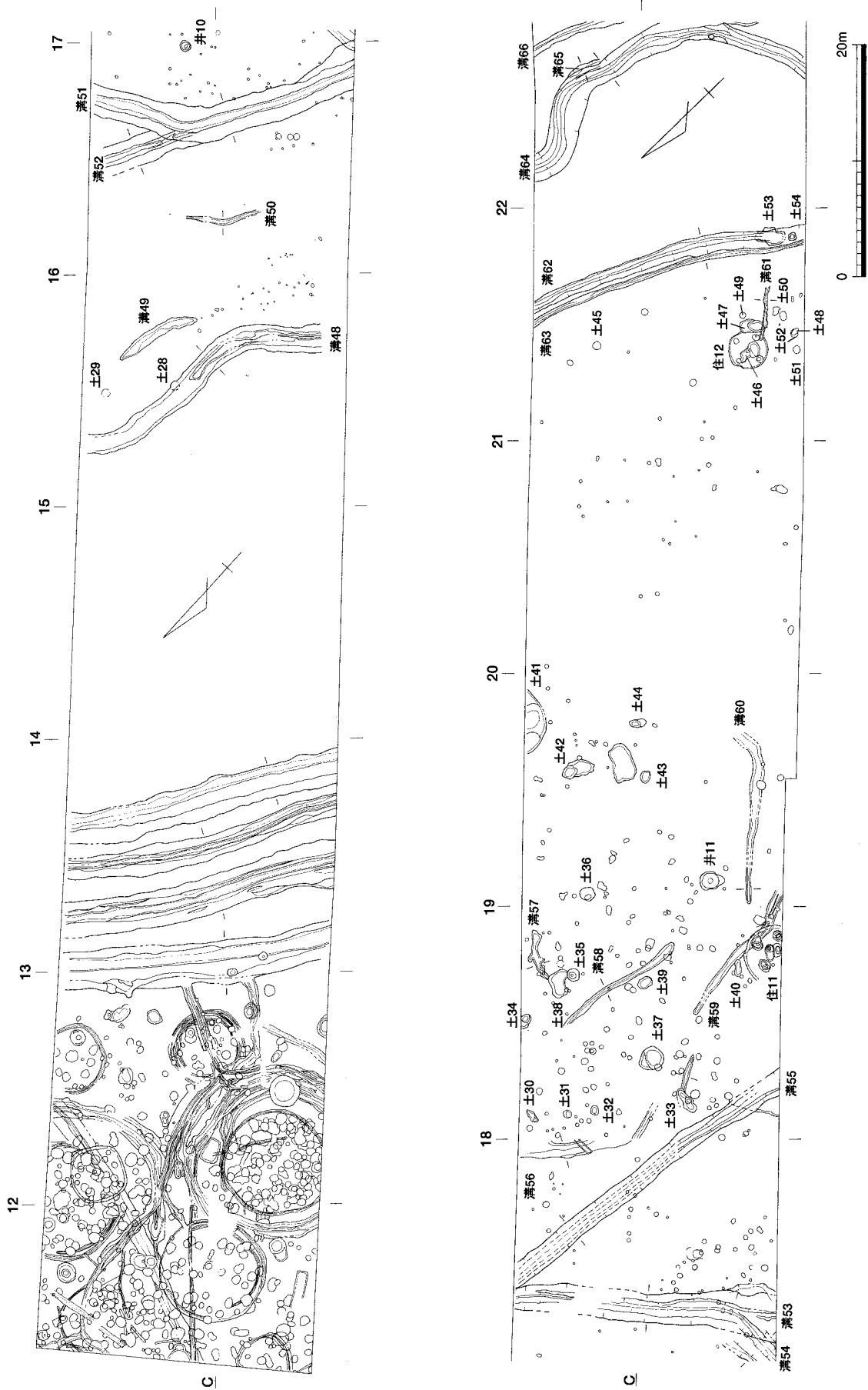
一方、西側の微高地は百間川原尾島遺跡の中心となる部分であるが、今回の調査部分はとりわけ遺構密度が高く、竪穴住居8棟、建物1棟、井戸6基、土器焼成土壇1基、土器棺墓3基など、多数の遺構を重複した状態で検出した。

とりわけ、竪穴住居のうちの3棟は径が9mを越える大形のもので、周囲に周溝をめぐらせる特異なものを含んでいる。

後期前半以降、大規模な集落が形成され、それが古墳時代前期に継続する状況を示している。(宇垣)

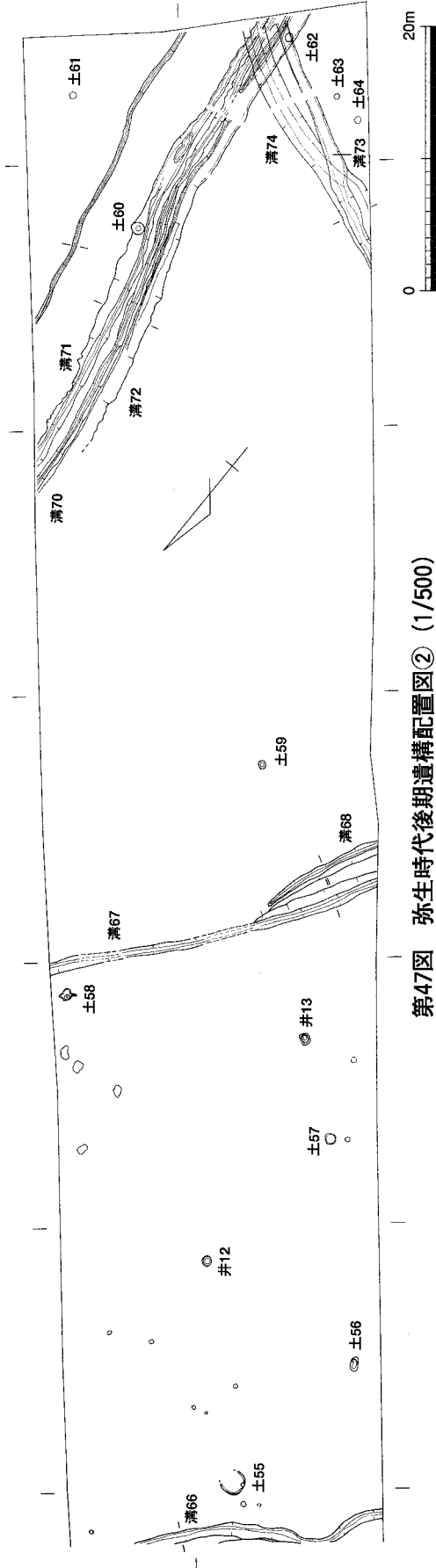


第45図 対象調査区および周辺遺構配置図(弥生時代後期、1/2,000)

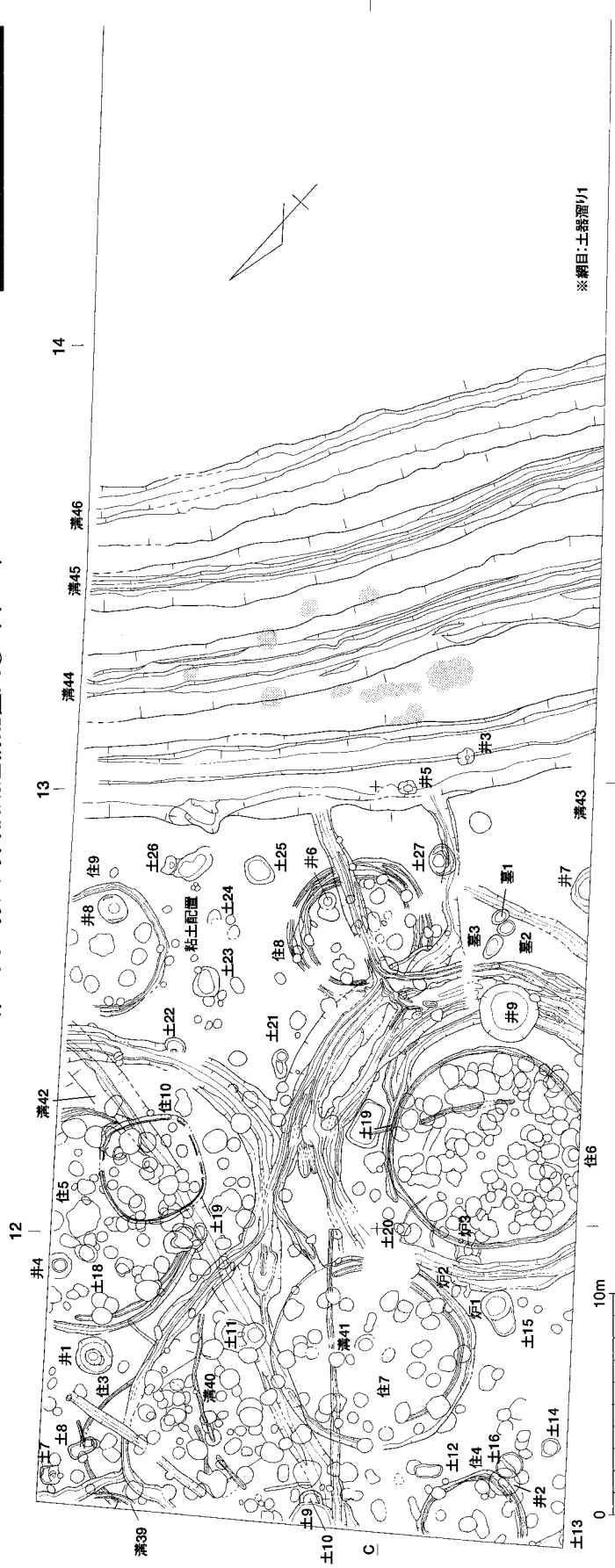


第46図 弥生時代後期遺構配置図① (1/500)





第47図 弥生時代後期遺構配置図② (1/500)



第48図 弥生時代後期遺構配置図 (11~14B・C区) (1/300)

## 1 竪穴住居

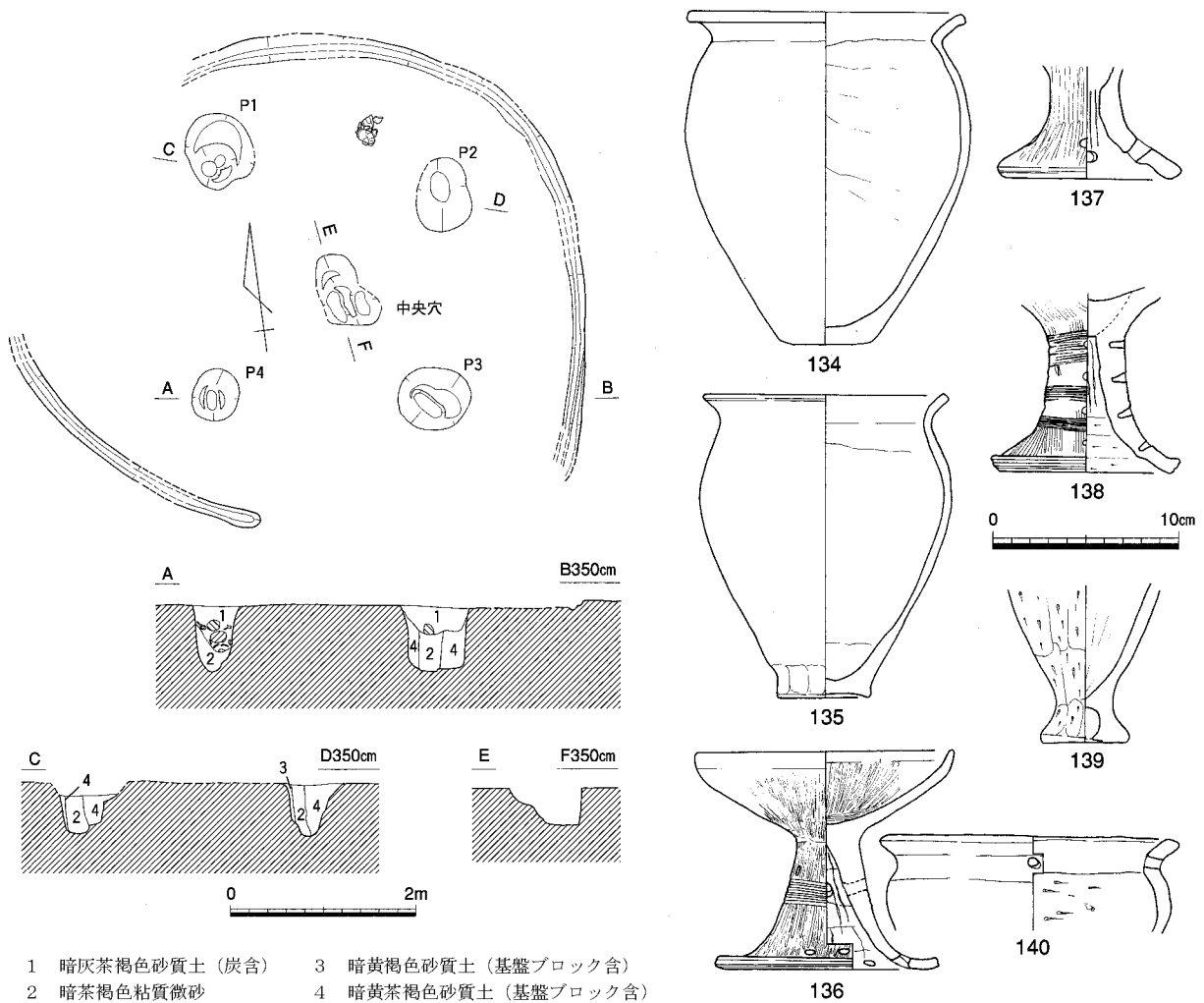
### 竪穴住居3 (第48・49図、図版6-1・2. 53-2)

調査区の北隅、11B区で検出された竪穴住居で、床面と壁体溝、柱穴等が確認できた。平面形は不整円形で、径が542cm、床面積は27.36㎡を測る。柱穴は4本で、柱間は225~250cmである。P3では粘土化した柱痕跡が残存しており、長さ36cm、幅10cmを測る根がらみの痕跡も認められた。平面形が不整な中央穴はややP3寄りに位置している。

床面で甕134・135と高杯136が出土したほか、P4では台付鉢137・高杯138・製塩土器139などが柱の抜き取り跡から出土している。

出土遺物から、遺構の時期は百・後・IIの古段階と考えられる。

(柴田)



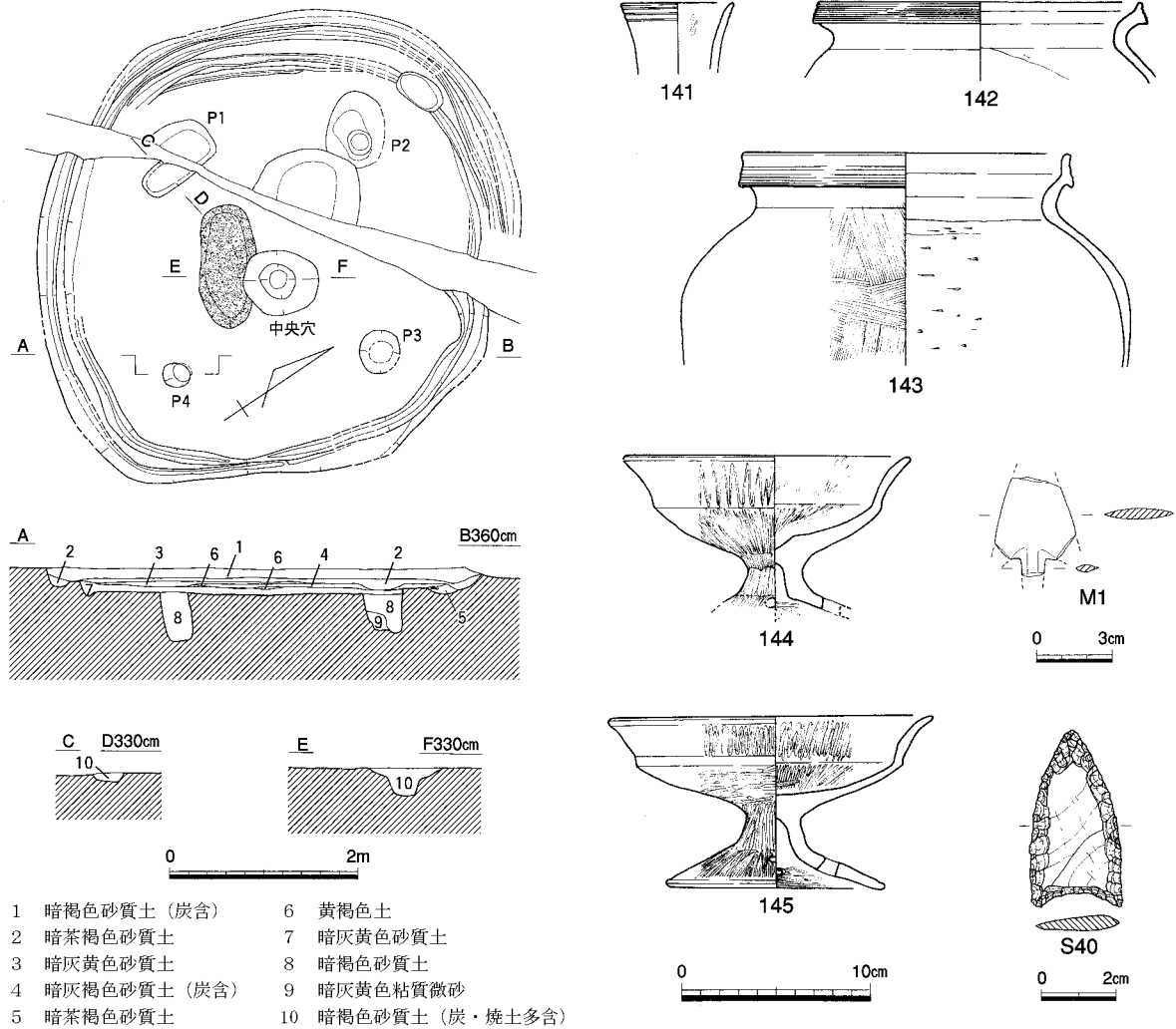
- 1 暗灰茶褐色砂質土 (炭含)
- 2 暗茶褐色粘質微砂
- 3 暗黄褐色砂質土 (基盤ブロック含)
- 4 暗黄茶褐色砂質土 (基盤ブロック含)

第49図 竪穴住居3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

### 竪穴住居4 (第48・50図、図版6-3. 53-2)

調査区の北西隅、11C区で検出された竪穴住居で、一部は『百間川原尾島遺跡5』において「竪穴住居5」として報告されている。

平面形は隅丸方形で、検出した壁体溝や以前の調査結果などから、2~3回程度の拡張が行われたと推測される。拡張時には床面に土を入れてかさ上げしている。径は最大520cm、最小で416cmを測り、



第50図 竪穴住居4 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

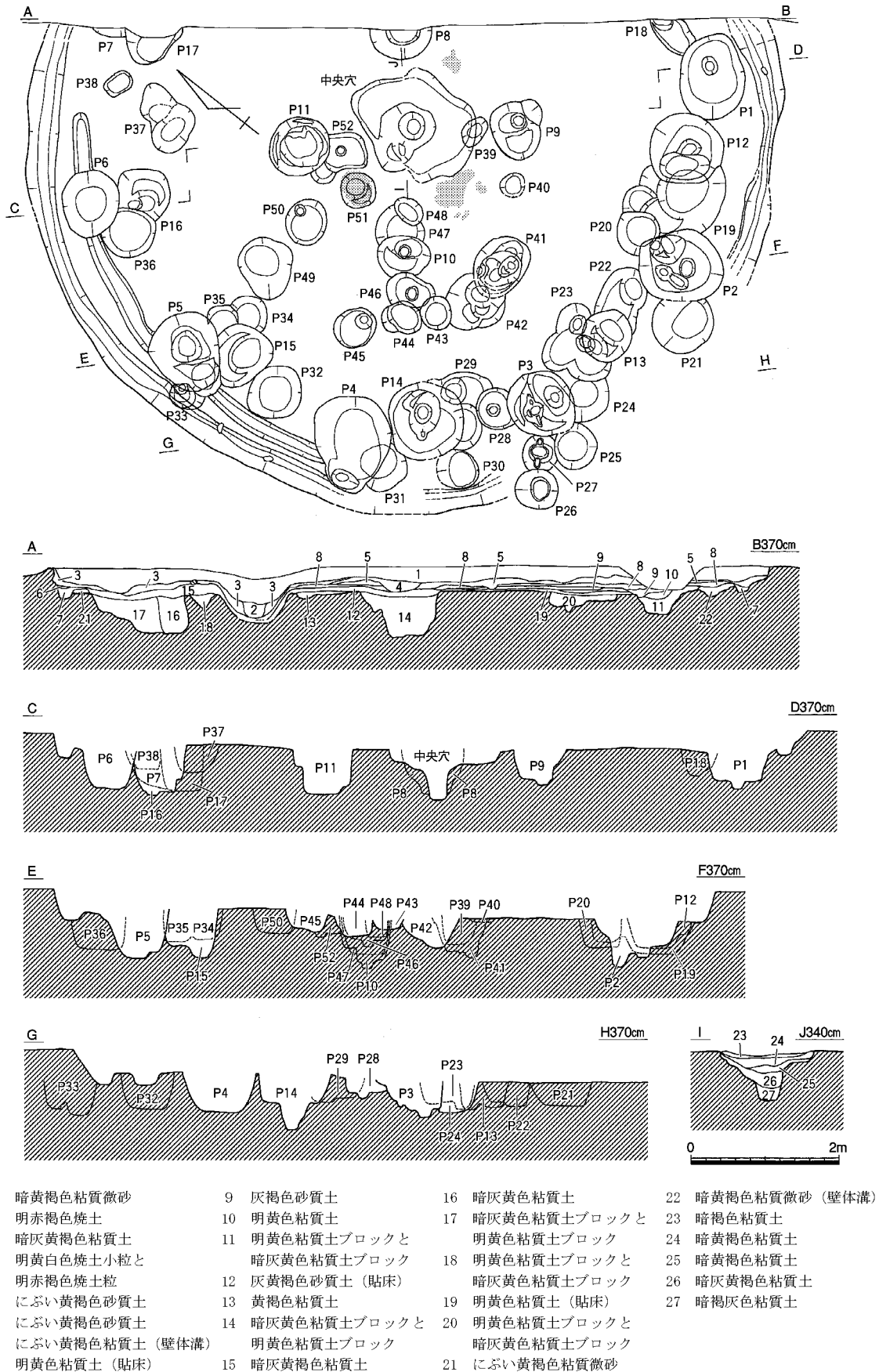
床面積は20.92㎡程度である。柱穴は4本で、柱間は208～210cmである。西寄りに位置する中央穴は円形で、埋土には炭や焼土が含まれている。この南には楕円形の浅いくぼみがあり、炭が堆積していた。

貼床土などから、直口壺141、甕142・143、高杯144・145、銅鏃M1、石鏃S40が出土している。以前の調査では鉄鏃も出土している。

出土遺物から、遺構の時期は百・後・Ⅲと考えられる。(柴田)

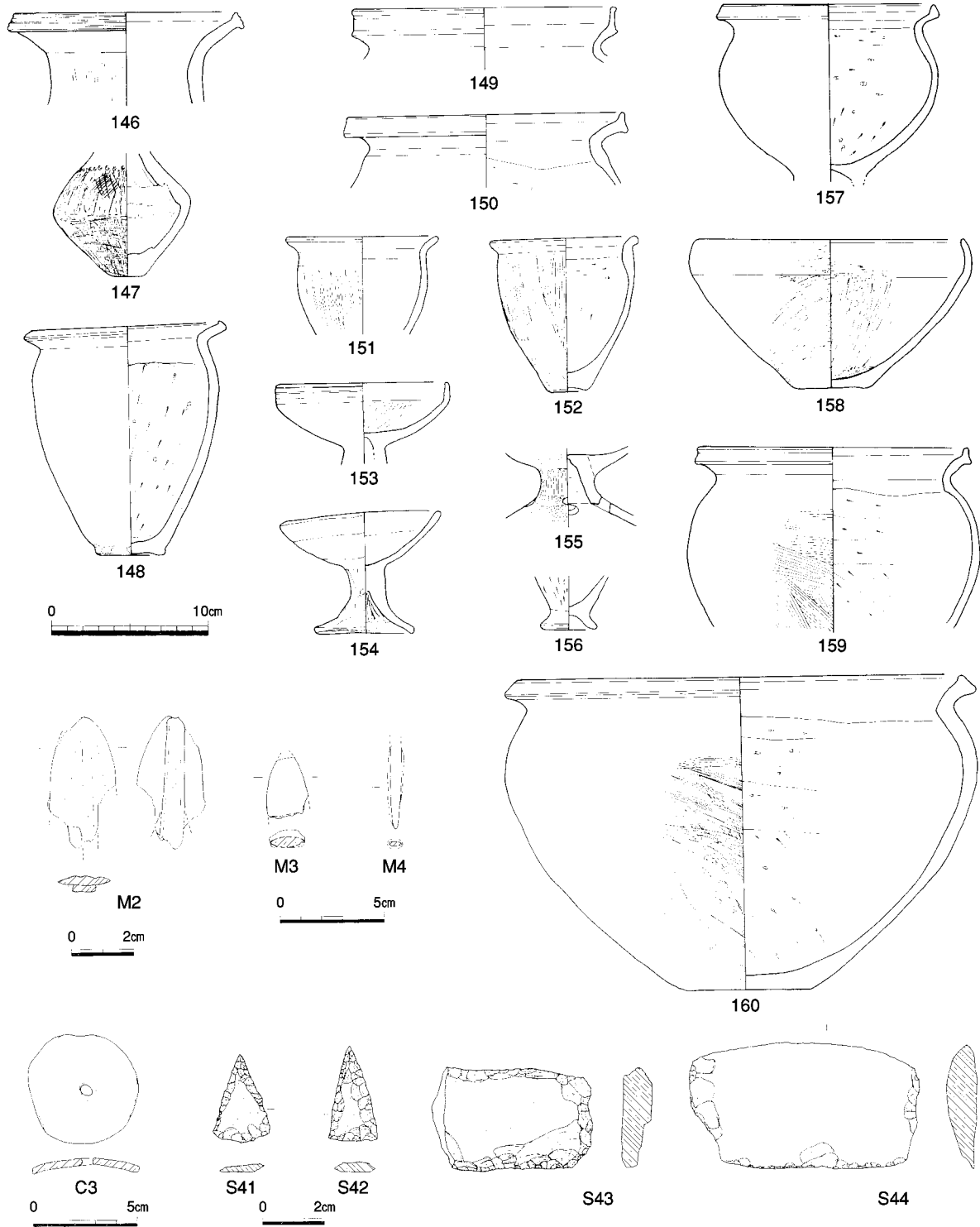
竪穴住居5 (第48・51・52図、図版7. 8. 54-1)

11・12B区に位置する大形の竪穴住居である。北東側の約1/3が調査区外となり、南側は竪穴住居10に切られる。2回以上の建て替えが推定され、最終段階の住居は焼失住居である。平面形は円形を呈するものと考えられ、北西—南東長で1024cmを測る。覆土と床面に大量の炭や焼土、炭化材がみられ、壁体は被熱で硬化し、特に西側と南東側が顕著である。壁体溝は2条で、このうち内側のものはP4～6付近のみ認められ、これら柱穴に切られる。中央穴は175×145cm、深さ15cmの落ち込みの中央がさらに径70cm、深さ50cmの円形に落ち込むものである。この周囲の貼床は3面を数え、それぞれの上面で1箇所ずつの被熱面を検出している。40本前後の柱穴のうち最終住居に伴う主柱は、壁体に



第51図 竪穴住居 5 (1/80)

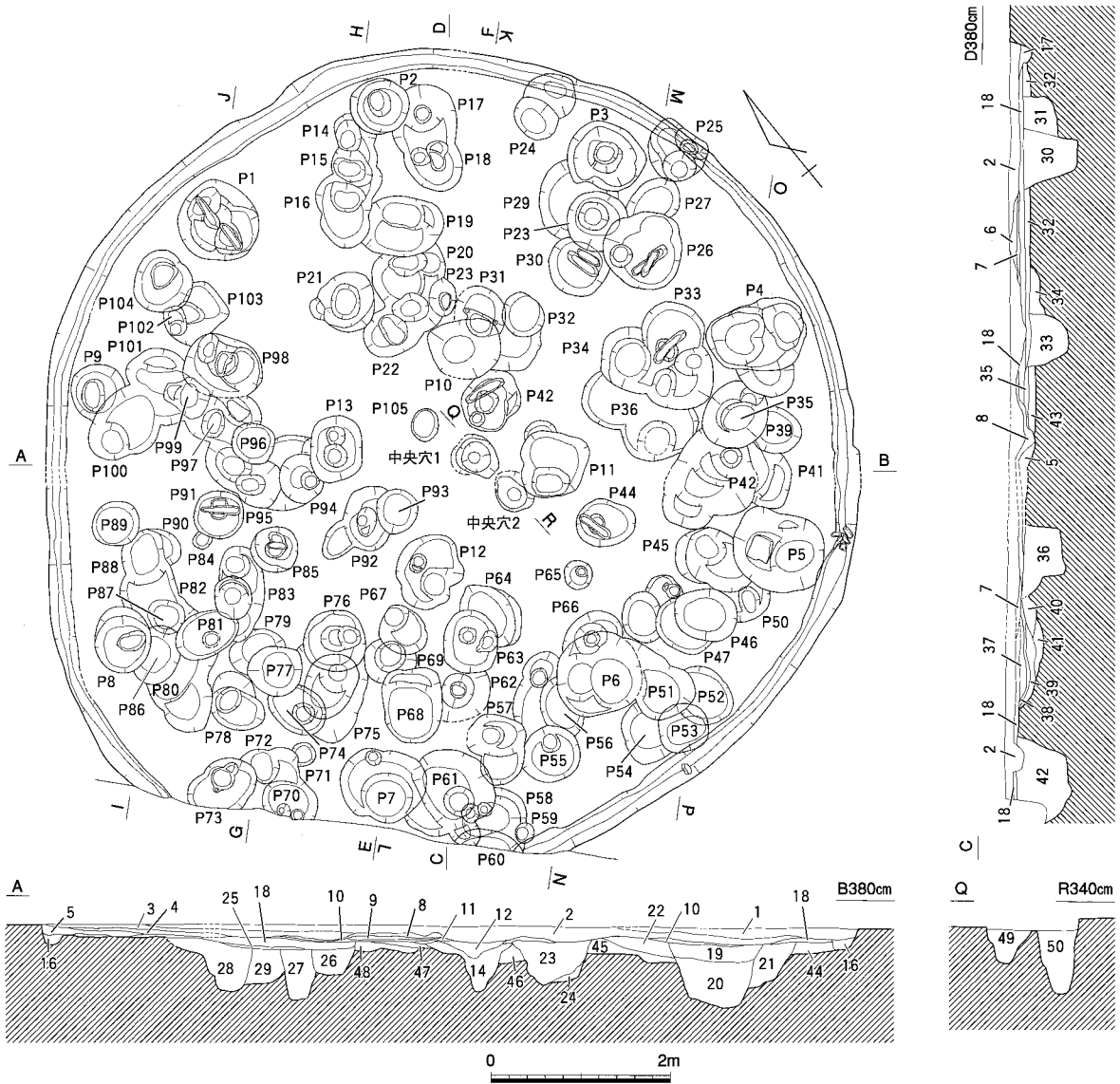
沿うP 1～7の7本と、中央穴周辺のP 8～11の4本と考えられる。柱間は200～270cmを測り、壁体際のほうが広い。壁体際の支柱本数は10本程度に復元される。このような壁体際が多柱穴+中央穴付近の4本という柱穴配置は、当遺跡における径9m以上の大形住居にみられるものである。銅鏃M 2とヤリガンナM 3は柱穴内、石鏃S 41・42は中央穴周辺の貼床内、鉄鏃M 4と紡錘車C 3、石庖丁S 43・44は覆土からの出土である。住居の時期は、百・後・Ⅲと考えられる。(高田)



第52図 竪穴住居 5 出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

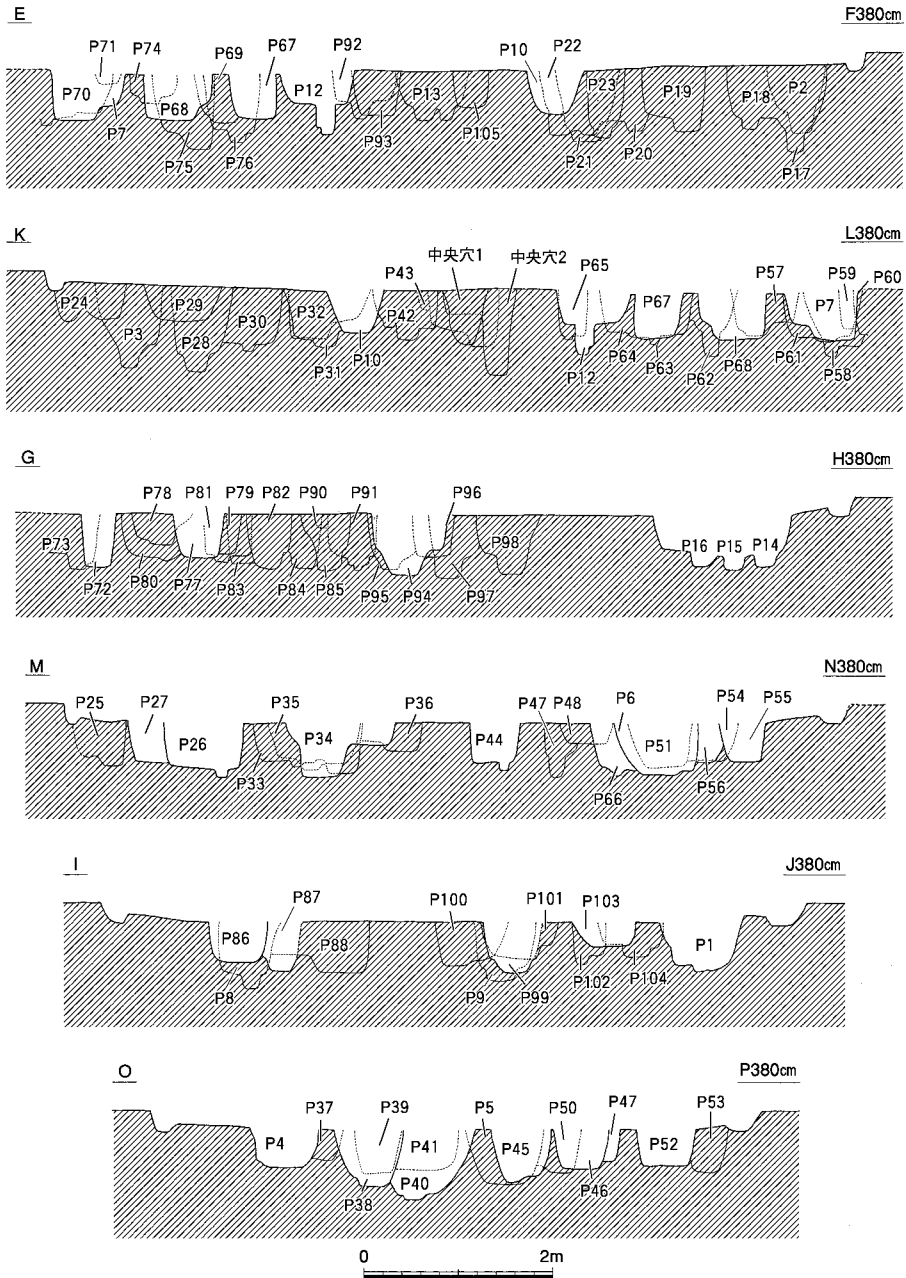
竪穴住居6 (第48・53～56図、図版9. 54-2)

12C区において検出した円形の竪穴住居である。南西端部は『百間川原尾島遺跡4』調査区に入っている。径9.05mときわめて大きい。検出面からの深さは18cmと浅いが、弥生時代末の洪水堆積層に起源をもつとみられる古墳時代包含層の下面高との関係からみて、深くても30cm程度であったとみられる。明瞭な炭化材や壁面の焼土化は認められなかったが、中央部および南端付近の覆土(1・2層)中には焼土・炭片の広範な広がりが見られたため「焼失」住居と判断した。



- |           |            |             |              |             |
|-----------|------------|-------------|--------------|-------------|
| 1 暗褐色粘質土  | 11 褐色粘質微砂  | 21 暗灰黄褐色粘質土 | 31 暗黄褐色粘質土   | 41 黒褐色粘質微砂  |
| 2 暗灰褐色粘質土 | 12 茶褐色砂質土  | 22 黄褐色砂質土   | 32 灰黄褐色粘質微砂  | 42 暗黄褐色粘質微砂 |
| 3 暗灰褐色粘質土 | 13 黒褐色砂質土  | 23 暗黄褐色粘質土  | 33 黒褐色粘質微砂   | 43 黄褐色砂質土   |
| 4 暗灰褐色粘質土 | 14 暗茶褐色粘質土 | 24 暗黄色粘質土   | 34 暗灰黄褐色粘質微砂 | 44 暗黄褐色粘質微砂 |
| 5 暗灰褐色粘質土 | 15 黄褐色砂質土  | 25 灰褐色粘質微砂  | 35 黄灰色粘質微砂   | 45 黄褐色粘質土   |
| 6 黄褐色粘質土  | 16 暗灰褐色粘質土 | 26 暗黄褐色粘質土  | 36 暗黄褐色粘質土   | 46 暗黄褐色粘質微砂 |
| 7 暗褐色粘質土  | 17 黄褐色粘質土  | 27 暗灰黄褐色粘質土 | 37 灰黄褐色砂質土   | 47 灰黄褐色粘質微砂 |
| 8 黒褐色砂質土  | 18 黄褐色粘質土  | 28 暗黄褐色粘質土  | 38 黄褐色砂質土    | 48 黄褐色粘質微砂  |
| 9 黄褐色粘質土  | 19 暗黄褐色粘質土 | 29 灰黄褐色粘質土  | 39 暗黄灰色粘質微砂  | 49 暗黄褐色粘質土  |
| 10 褐色粘質土  | 20 暗黄褐色粘質土 | 30 暗灰褐色粘質土  | 40 暗黄褐色粘質微砂  | 50 暗黄褐色粘質土  |

第53図 竪穴住居6 (1/80)



第54図 竪穴住居6柱穴見通し図 (1/80)

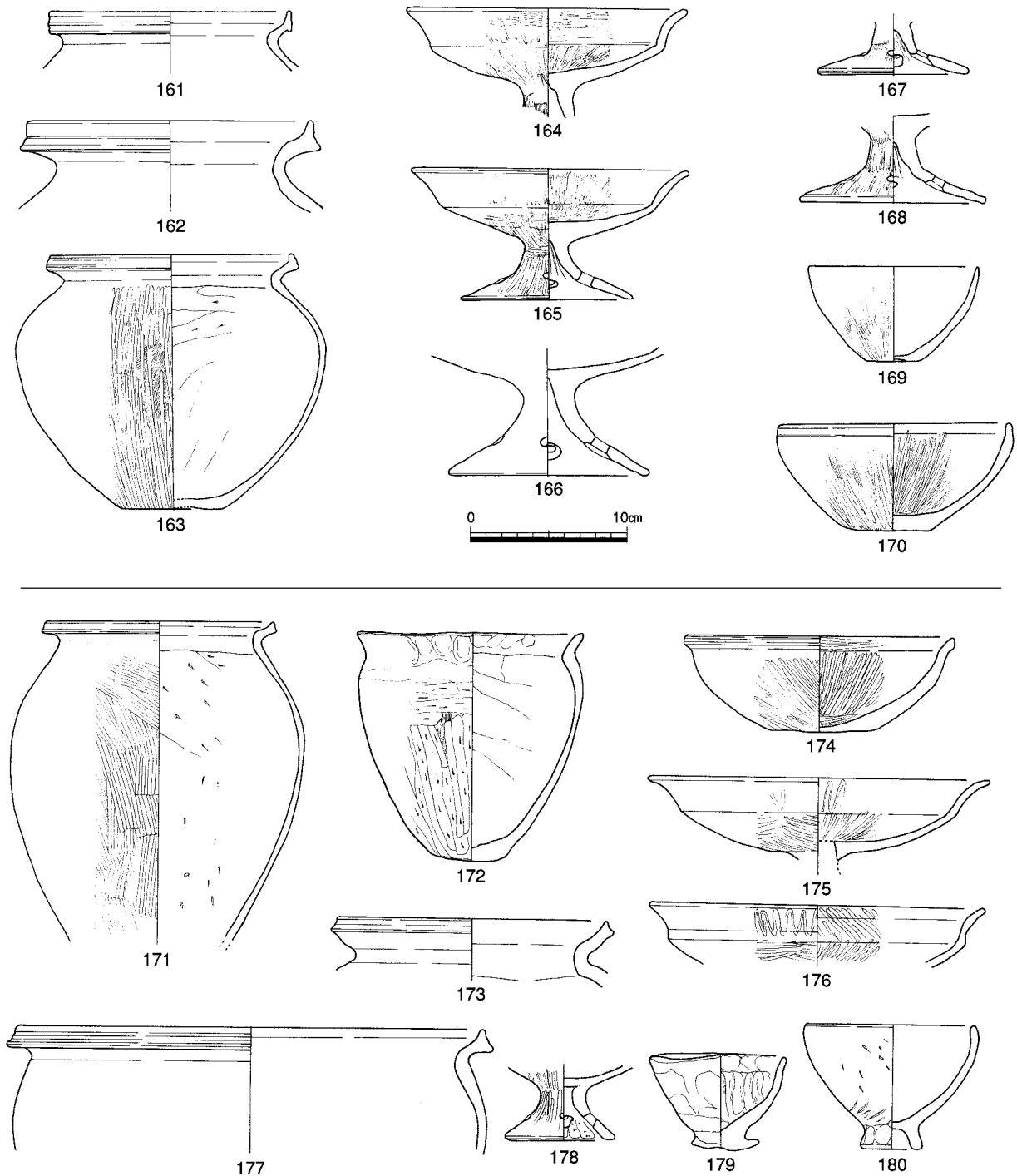
壁体溝は周縁の1条のみで、拡張の痕跡は認められなかった。中央穴は2基認められ、中央穴2が先行する。床面には若干の土器小片、壁溝中に円礫が認められた程度で、遺物量はきわめて少ない。図示した遺物のうち高杯他163～166・168は覆土中の炭層とほぼ同レベルにまとめて置かれたかのような状態で出土した。熱を受けた痕跡は認められず、「焼失」後に置かれたとみられる。

床面には多数の柱穴が掘り込まれており、その数は100基を上まわる。通常の竪穴住居にくらべて格段の多さであり、この住居が相当の長期にわたって使用されたことをうかがわせる。これらのうちP1・30など10基の柱穴底には長さ25cm、幅6cm前後の溝状のくぼみが形成されていた。そのうち2基ではその部分に暗灰色粘土が認められ、礎板の痕跡と判断した。ただしそれと同じ棒状の粘土がくぼみを伴わずに所在する例や、方形板状の礎板とみられる例もあり、一部の柱穴において礎板が圧痕

や粘土化によって確認できたものであり、本来は他の柱穴にも礎板が設けられていた可能性が高い。

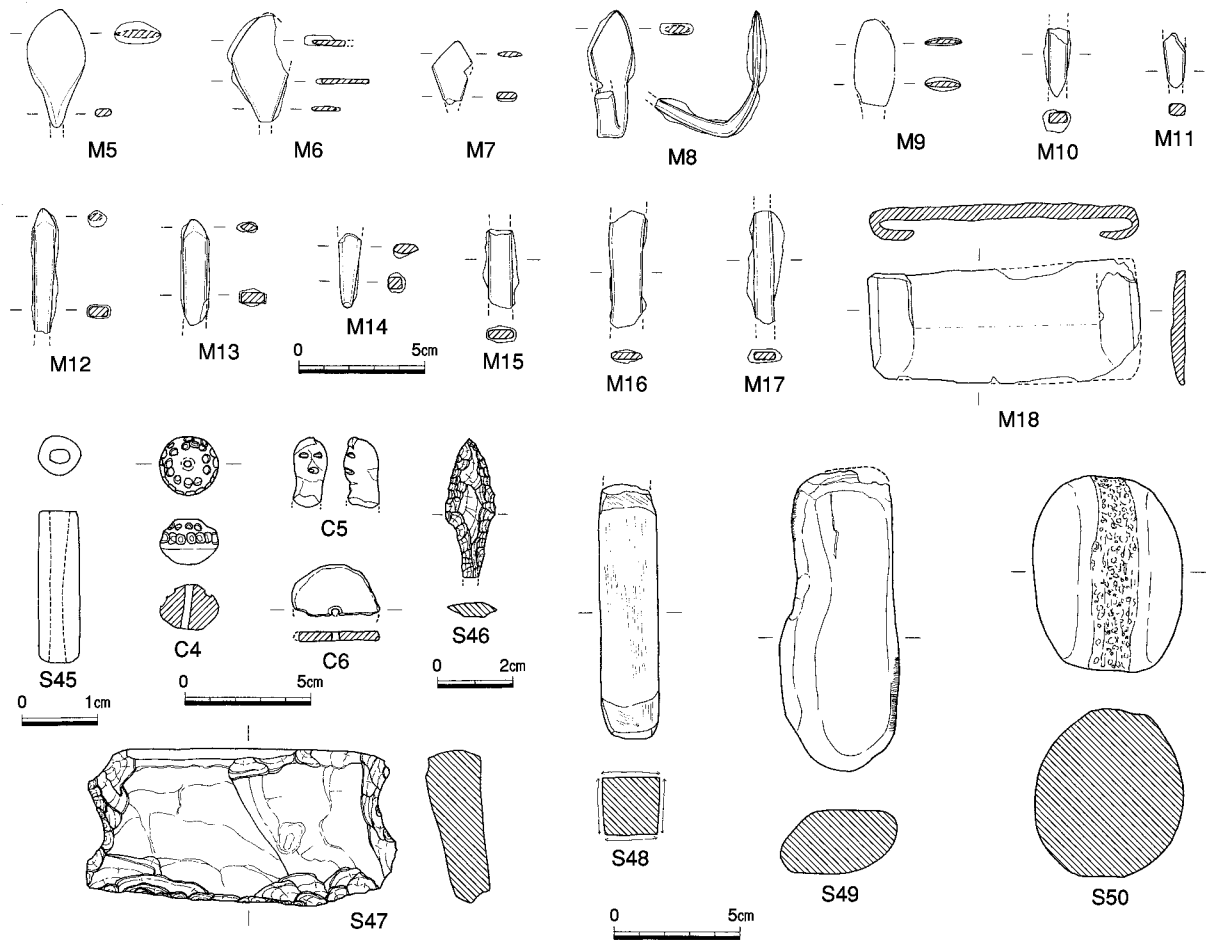
柱穴の数が多すぎるため柱配置の復元はきわめて困難であるが、最終段階の柱はP 1～9が外周に配され、P 10～13の4本が内側に方形に配置される構造であったとみられる。

小片ではあるが柱穴出土土器から住居の構築は百・後・Ⅱ、上記の高杯164～168から同Ⅲに廃絶したとみられる。覆土および柱穴埋土中から比較的多くの鉄器が出土しており、鉄鏃M 5～7、鋤鍬先M 18などがある。M 8は曲げられたヤリガンナであろう。M 9・12・13などヤリガンナの破片も多い。M 11・14は鉄鏃の基部と推定する。C 5は人面表現のある土製品、S 45は碧玉製管玉である。(宇垣)



第55図 竪穴住居 6 出土遺物① (上段：覆土から、下段：柱穴から) (1/4)

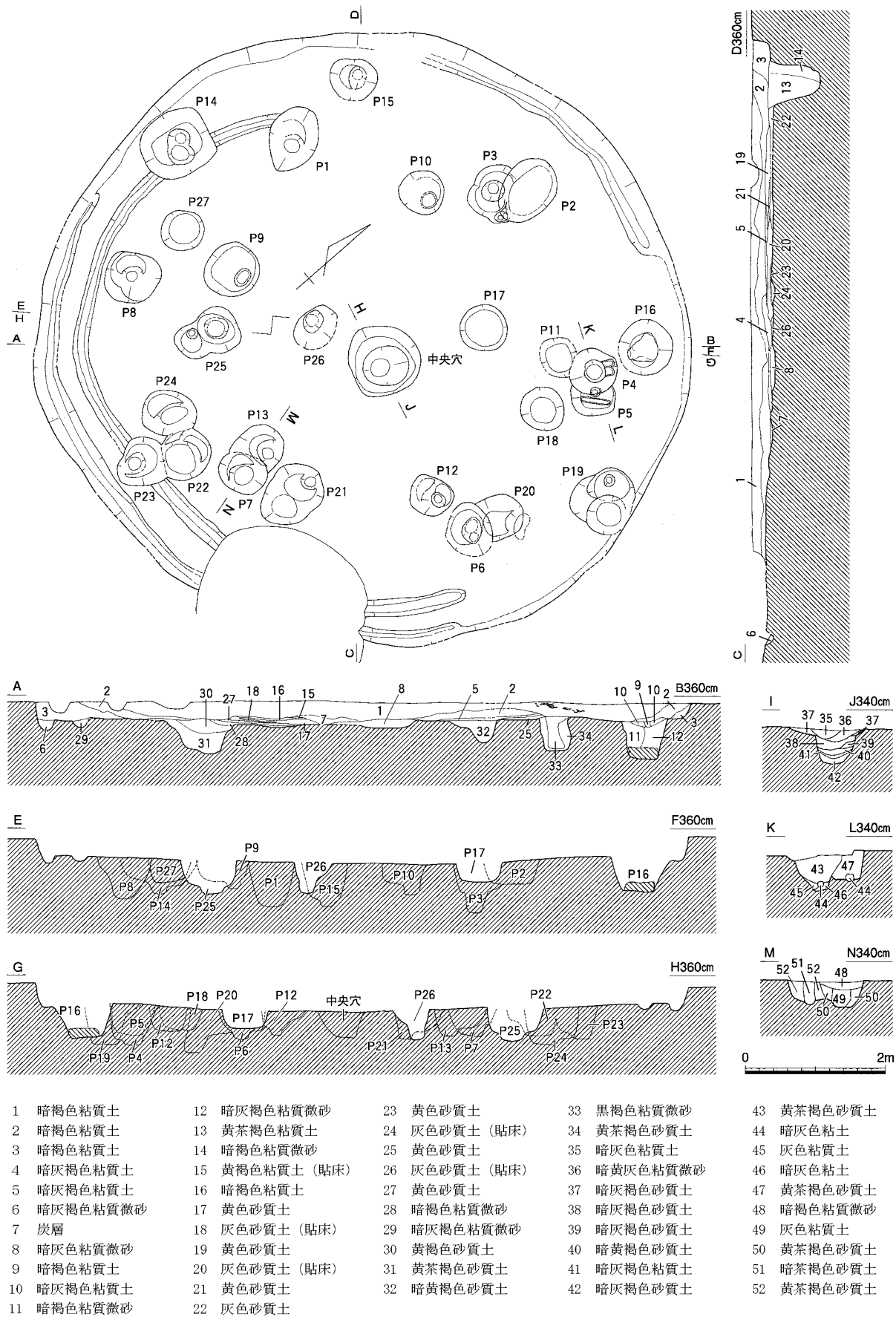




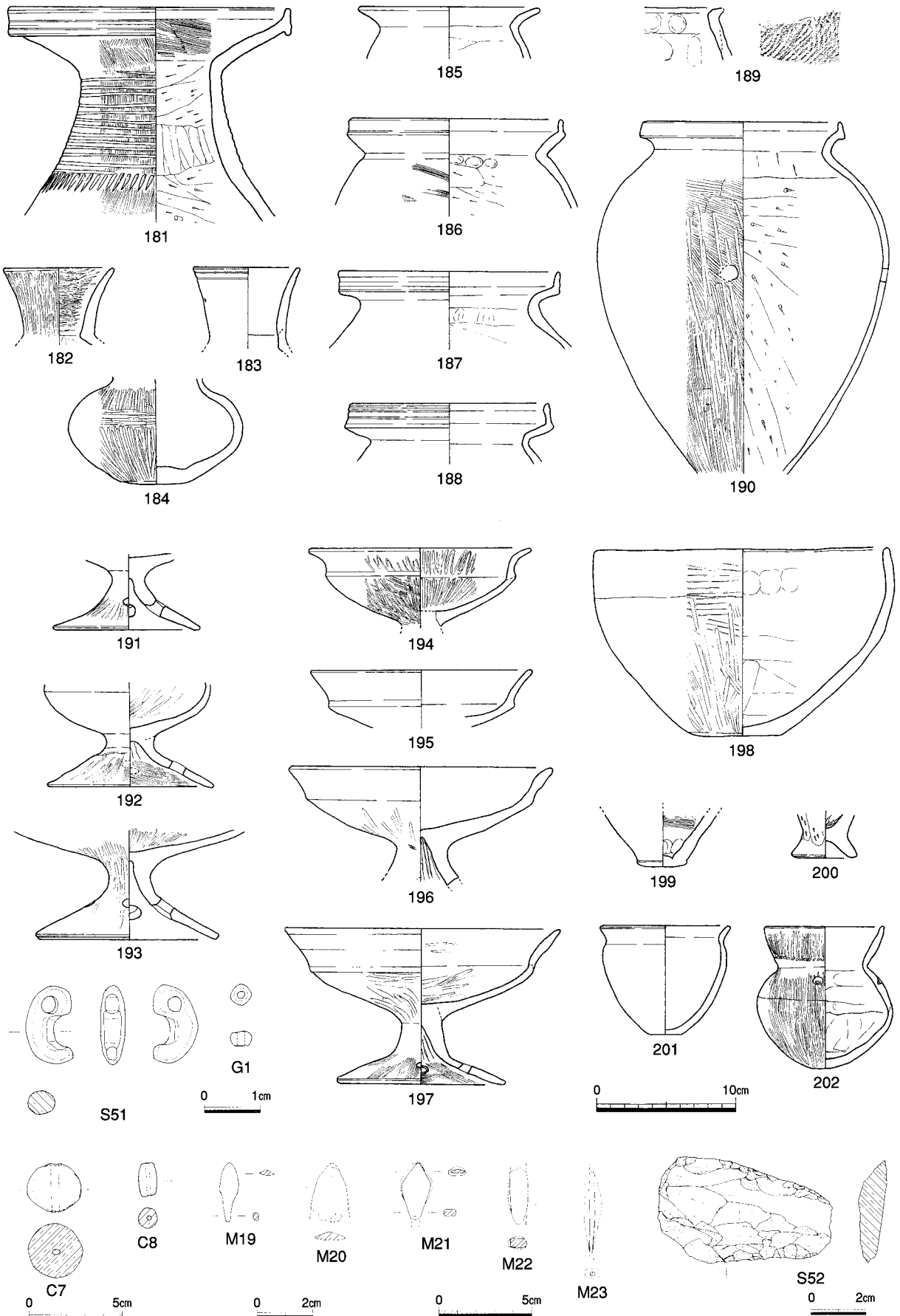
第56図 竪穴住居6出土遺物② (1/3・1/2・1/1)

竪穴住居7 (第48・57～59図、図版10. 11. 55 - 2. 56)

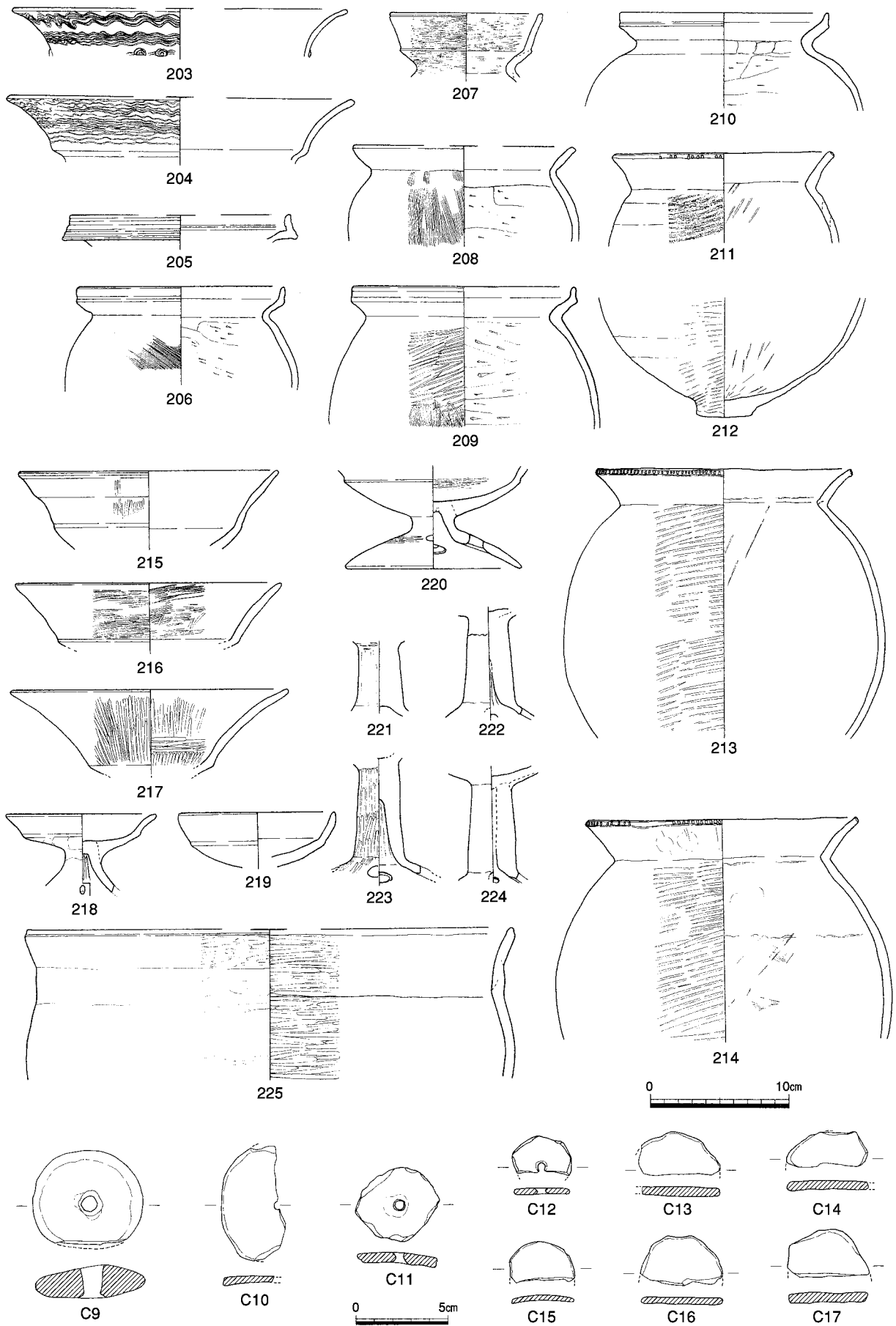
竪穴住居7は11B・C区、竪穴住居5の南西4.9m、竪穴住居6の北1.8mに位置する大形住居である。1回以上の拡張が認められ、最終段階に規模が最大になる。最終段階の住居は直径9.3～8.6mを測る。床面で中央穴と、柱穴27基を検出した。調査時において、P1が前段階の住居の壁体溝を切っていることなどからP1～8の8基、6カ所を主柱穴と考えたが、他の大形住居と同様に壁面から非常に近い位置にP14～16・19・23の柱穴を検出しており、これらと内側の2あるいは4個などの組み合わせも有効で認められた。同規模の建て替えが行われたと考えたい。P4・5では直径10cm前後の丸太の根がらみが確認された。床面は広く焼土粒で覆われ、住居の肩口部分では、周囲から内部へ焼土粒が流れ込んでいる状況がある。炭化材は北西部に僅かに残存し、焼失住居と考えられる。前段階の住居は推定径約7.4m、P9～12の5本柱と考えられる。大形住居の時期を示す遺物としてP1から出土した185・189の甕、および床着の197高杯と198鉢がある。202小型丸底壺は混入である。S51翡翠製管玉、P23出土明緑青色G1ガラス小玉、C7土玉、C8は貼り床から出土。M19・20銅鏃は、それぞれP24・22から出土。M21～23鉄鏃、S52はP1出土サヌカイト製スクレイパー。住居の時期は百・後・Ⅲ。また、住居廃絶後の埋没過程で土器溜りが形成されていた。この土器溜りからは畿内系と考えられる203・204の口縁部外面に櫛描き波状文と円形浮文が施されている二重口縁壺や221～224の高杯の脚柱部と、211～214の「淡路型甕」と想定できる甕が一括して出土した。(物部・小嶋)



第57図 竪穴住居 7 (1/80)



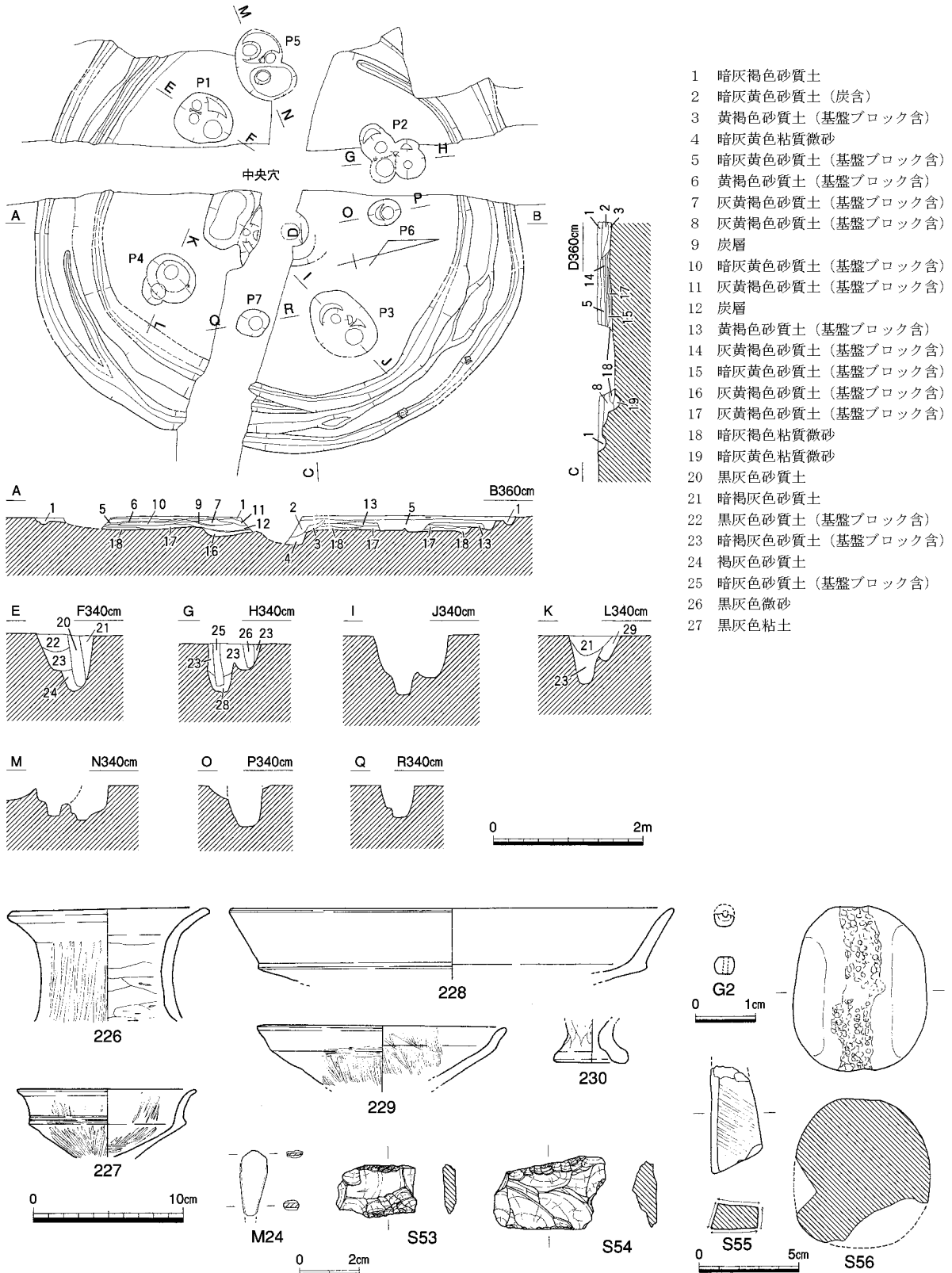
第58図 竪穴住居7出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1)



第59図 竪穴住居7土器溜り出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居 8 (第48・60図、図版12-1)

12B・C区、微高地の東端寄りで検出された竪穴住居で、住居6を取り巻く排水溝に切られている。平面形は円形で、検出した壁体溝から2回の拡張が行われたようである。拡張時には床面に土を入れ



第60図 竪穴住居 8 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1)

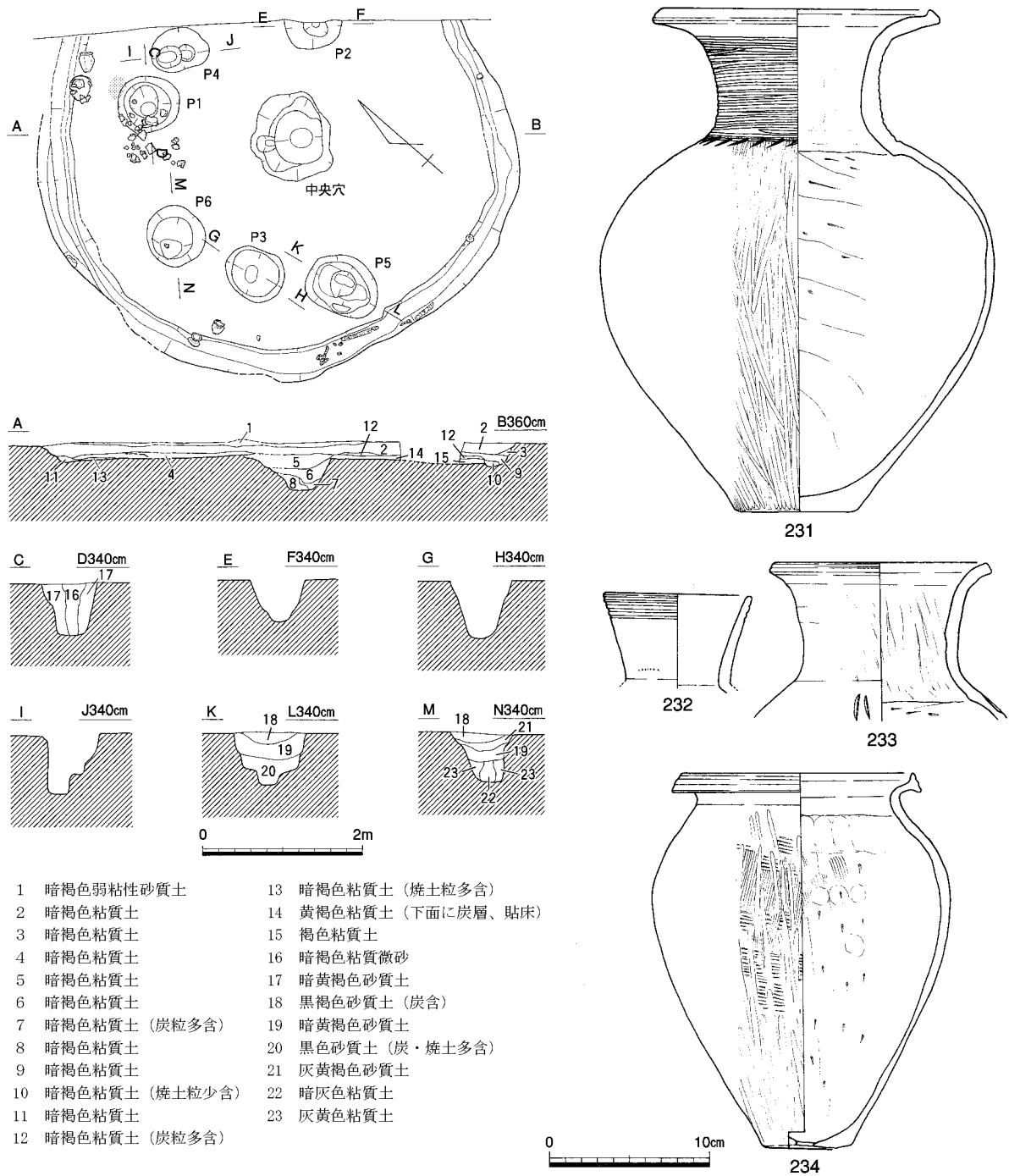
第3章 発掘調査の概要

てかさ上げし、柱穴も若干移設している。

径は最大664cm、最小で496cmを測り、床面積は33.12㎡程度である。支柱穴は4本で、柱間は210cm前後である。中央穴は円形と思われ、この南には楕円形の浅いくぼみが隣接している。P3は百・後・IIの井戸6に切られている。

覆土中からは壺226、高杯227・228、製塩土器230、楔形石器S53・54、鉄鏃M24、砥石S55、ガラス小玉G2、P2からは高杯229、P3からは石錘S56が出土している。

出土遺物や切り合い関係などから、遺構の時期は百・後・IIにおさまると考えられる。(柴田)



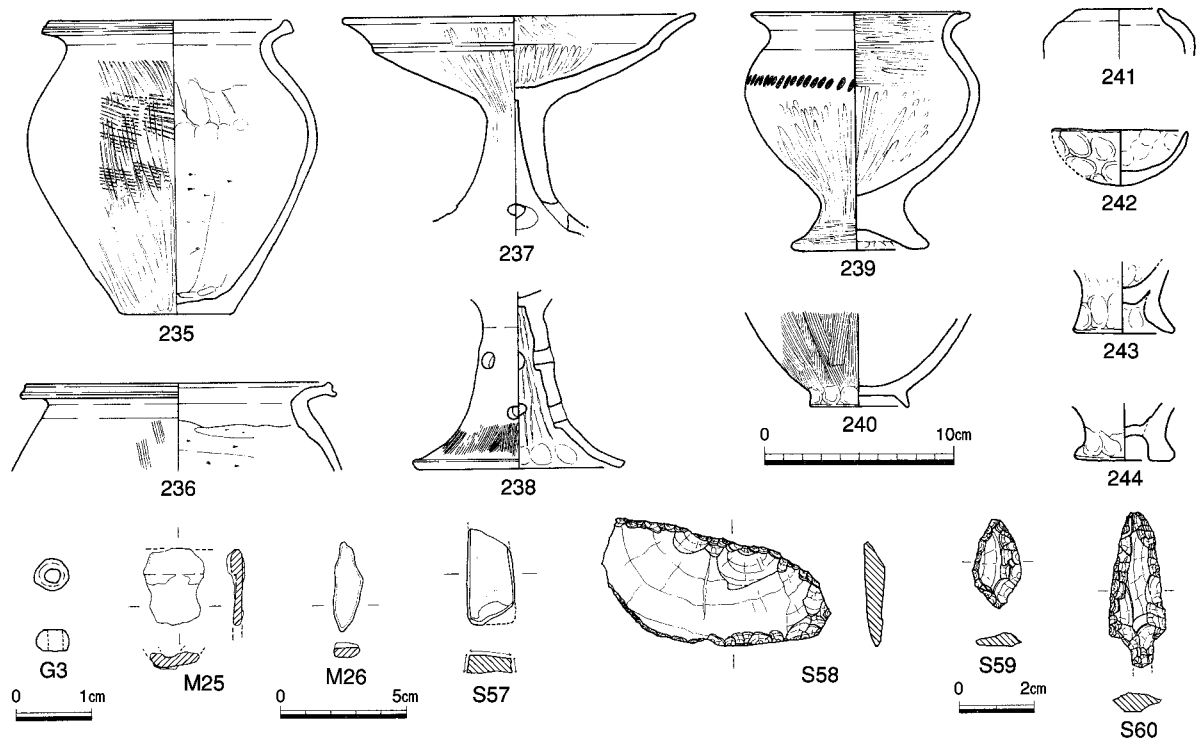
第61図 竪穴住居9 (1/80)・出土遺物① (1/4)

竪穴住居9（第48・61・62図、図版12-2. 3. 31-1. 55-1）

微高地東縁部で検出した円形の竪穴住居で、住居の埋没後、中央穴の南東側（平面図方位記入位置）に井戸8が掘削されている。住居の径5.97m、検出面からの深さ22cmを測る。

壁体溝は南部で幅40cmと広くなる。床面遺物は住居西半の壁溝付近に多く、ほぼ完形の甕2点（234・235）と壺231、またP1付近には小規模な土器溜まり（239他）が形成されていた。南壁体溝上の覆土中からは炭化材や長さ20cmの粘土塊などが出土した。

6基の柱穴を検出したが、井戸8の掘削により南東部の柱穴は失われているとみてよい。P1～3と井戸部分の4本柱、P4～6および井戸部分・調査区外の5本柱の2つの組み合わせを考慮することができるが、両者の先後関係は不明である。図示した土器のうち甕234・235では胴部に成形時のタタキが認められる。出土土器から百・後・Ⅱに位置付けられる。（宇垣）



第62図 竪穴住居9出土遺物②（1/4・1/3・1/2・1/1）

竪穴住居10（第48・63図、図版13-1・2. 53-2）

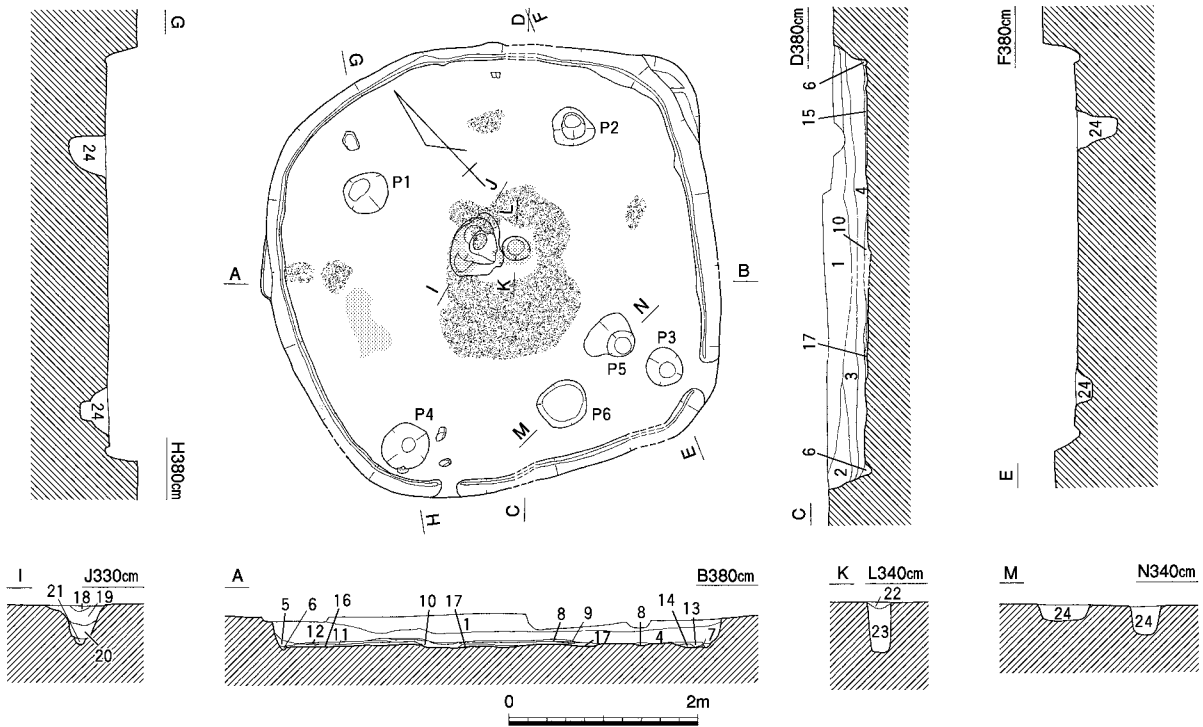
12B区で検出した隅丸方形の住居で、竪穴住居5の南部を切って構築されている。南北4.70mを測り、検出面からの深さ40cmと比較的深い。

中央に小規模な中央穴2基が設けられている。南東側のものが廃絶時まで使用されたようで、それを取りまく形に貼床が2～3cm高くなっており、その上面には炭の薄層の広がりが認められた。この部分ではそれを含めて4枚の炭薄層が貼床中に認められた。

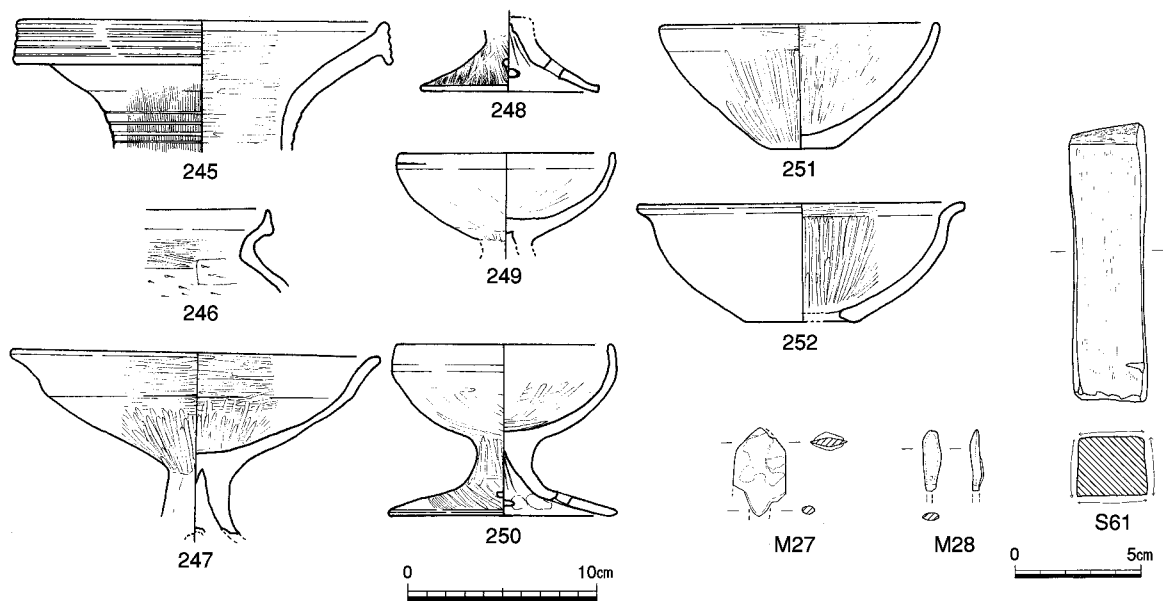
柱穴は5基を検出した。北東側の2基から方形の配置になるとみられるが、南側の3基はいずれも小規模で浅く、また壁溝に近く、あるいはやや特異な構造であったのかもしれない。

出土土器はいずれも覆土からで、床面からは出土していない。これらは百・後・Ⅲに位置付けられるものであるが、住居の平面形からすれば、百・後・Ⅳに下る可能性が強いと考えている。銅鏃M27・28、砥石S61は床面からの出土である。（宇垣）

第3章 発掘調査の概要



- |                              |                         |
|------------------------------|-------------------------|
| 1 灰褐色弱粘質土 (焼土粒含)             | 13 黄褐色弱粘質土 (貼床)         |
| 2 灰褐色弱粘質土                    | 14 灰褐色弱粘質土              |
| 3 灰褐色弱粘質土 (焼土粒含、基盤ブロック少含)    | 15 黄褐色弱粘質土 (貼床)         |
| 4 暗灰褐色弱粘質土 (炭・焼土粒含、基盤ブロック少含) | 16 灰褐色弱粘質土 (住居建設当初の整地土) |
| 5 褐色弱粘質土 (焼土粒含、基盤ブロック多含)     | 17 灰褐色弱粘質土 (住居建設当初の整地土) |
| 6 暗褐色粘質土                     | 18 暗灰褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含)    |
| 7 褐色粘質土                      | 19 暗黄褐色粘質微砂 (炭・焼土塊多含)   |
| 8 黄褐色弱粘質土 (貼床)               | 20 炭・焼土塊層               |
| 9 灰褐色弱粘質土 (上面に炭層) (焼土粒含)     | 21 暗黄褐色粘質土              |
| 10 灰褐色弱粘質土 (上面に炭層) (焼土粒含)    | 22 炭・焼土層                |
| 11 黄褐色弱粘質土 (貼床)              | 23 暗黒褐色粘質微砂 (炭・焼土含)     |
| 12 黄褐色弱粘質土 (貼床)              | 24 暗褐色粘質微砂 (炭含)         |

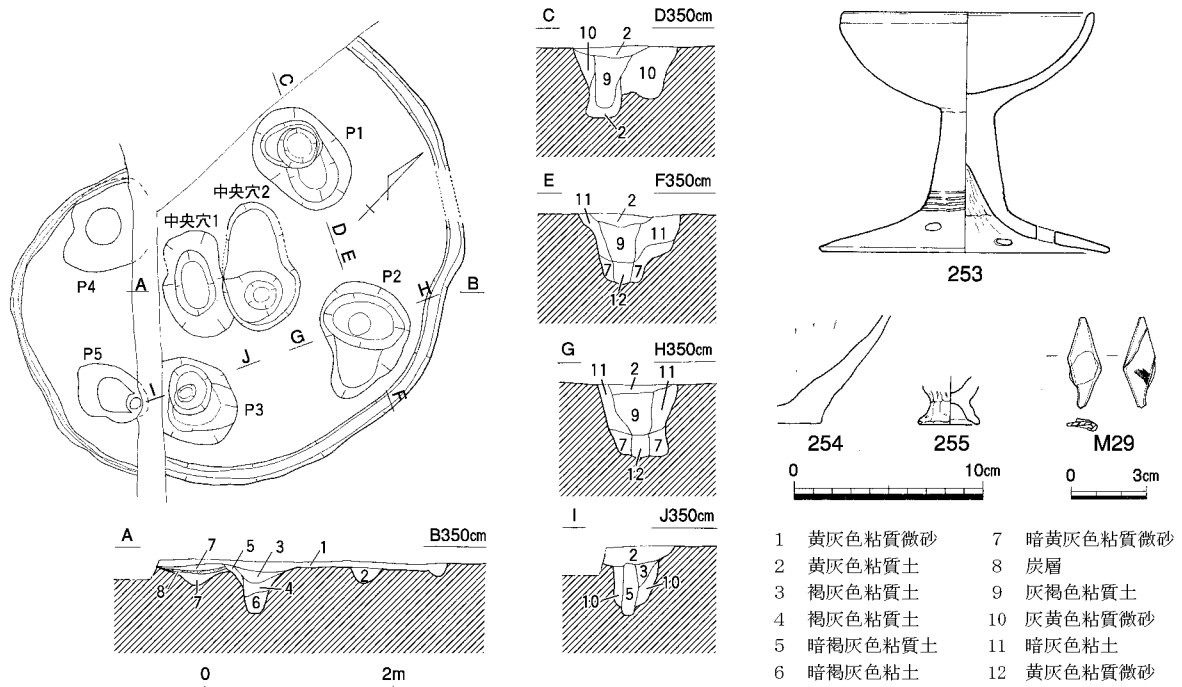


第63図 竪穴住居10 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)



竪穴住居11 (第46・64図、図版13-3. 53-2)

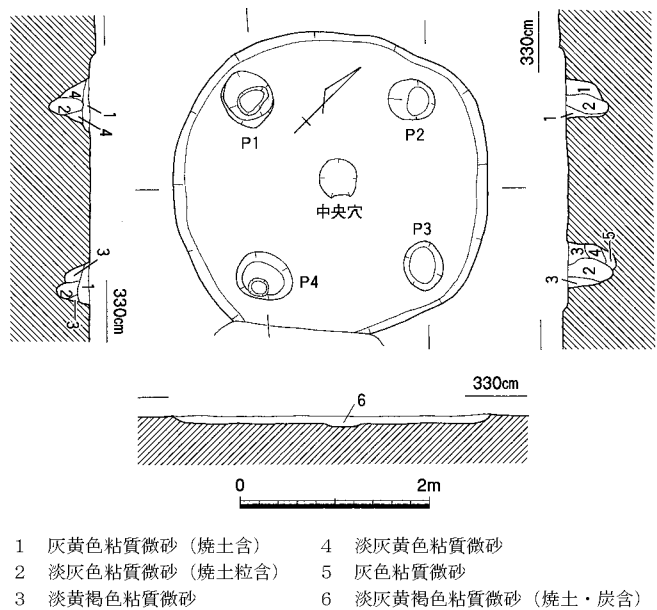
18C区に位置する住居で、『百間川原尾島遺跡5』「竪穴住居8」の続きに相当する。平面形は、幅約20cm・深さ約15cmの壁体溝が巡る不整形な円形を呈し、その直径は最も広い部分で4.8mを測る。既報告とは若干のずれがあるものの、支柱はP1～4の4本と考えられる。柱穴の掘り方は長径約120cm、短径約85cm、深さ約70cmを測り、住居の規模に対して柱穴が大きいことを指摘できる。中央穴1は深さ約20cmと比較的浅く、多量の炭を含むことから炉に関するものと考えられる。中央穴2は中央穴1を切って造られ、深さ約60cmを測る。住居床面から出土している253から百・後・IIの時期に比定できる。(松尾)



第64図 竪穴住居11 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居12 (第46・65図)

東の微高地の端、21C区で検出された竪穴住居で、柱穴等が確認できた。平面形は円形で、径が333cm、床面積は10.4㎡を測る。壁体溝は確認できなかった。柱穴は4本で、柱間は176cmである。各柱穴では粘土化した柱痕跡が認められる。平面円形の中央穴はわずかに北寄りに位置している。なお、約20cm上で検出された土層46は当住居の中央穴上に位置し、調査では確認できなかったが、住居は拡張され、この土層は中央穴に隣接する土層の可能性が高い。この点から住居の時期は百・後・IIと思われる。(柴田)



第65図 竪穴住居12 (1/80)

## 2 竪穴住居排水溝および周溝

### 遺構の概要（第66図）

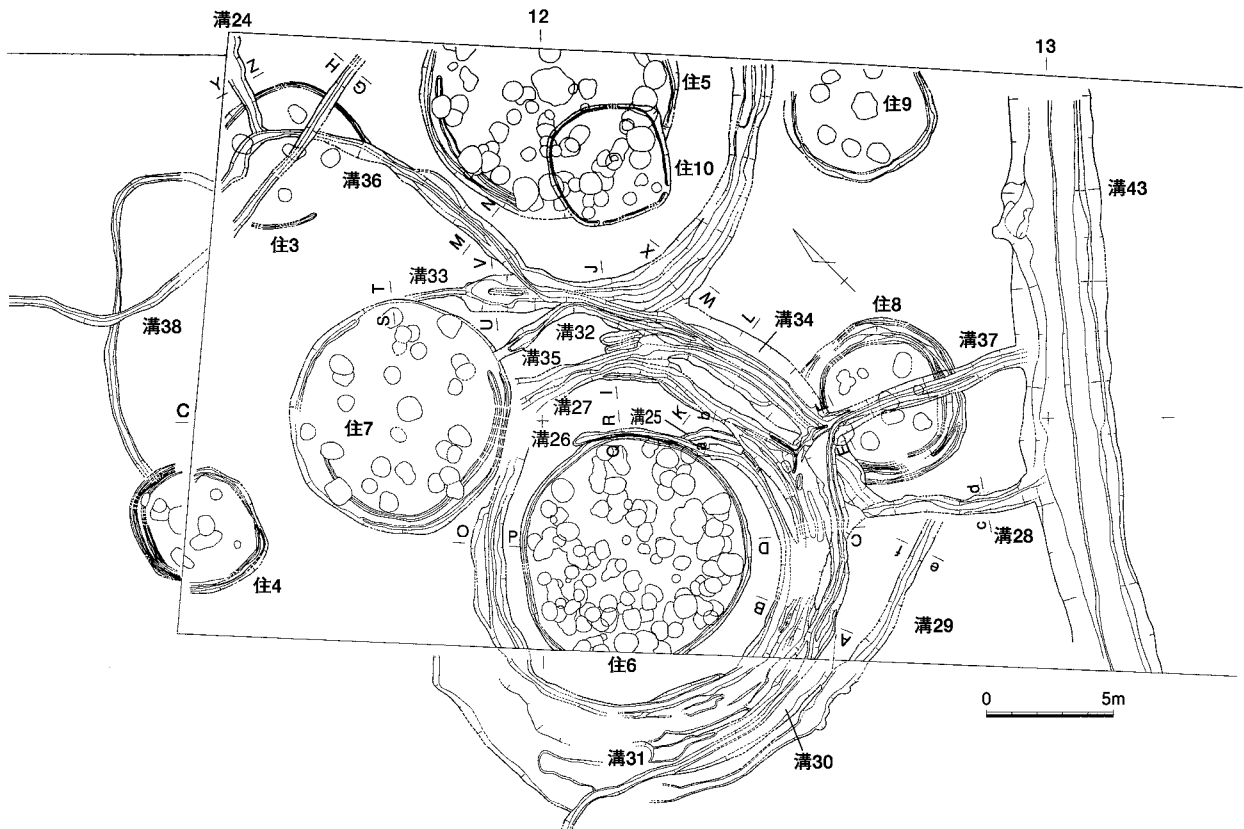
11～13BC区で検出した竪穴住居群のうち、最も大形の住居5・6には周溝がめぐることが判明した。周溝は複数回の掘り直しや拡張の跡が顕著に認められ、その存続期間がかなり長いものであったと推定される。形状はかなり異なるが複数の周溝をもつ例として『百間川原尾島遺跡3』「竪穴住居8」がある。

検出した溝は単に周溝として機能するだけでなく、西側に所在する中小の竪穴住居を発する溝が接続し、最終的に住居群の東側、微高地東縁に設けられた大溝－溝43に流下・合流する。これらは微高地東部に所在する大小の竪穴住居群の有機的な関連を明示する遺構であり、少なくとも南北40m、東西30m以上の広がりをもつ遺構群であることが明らかになった。

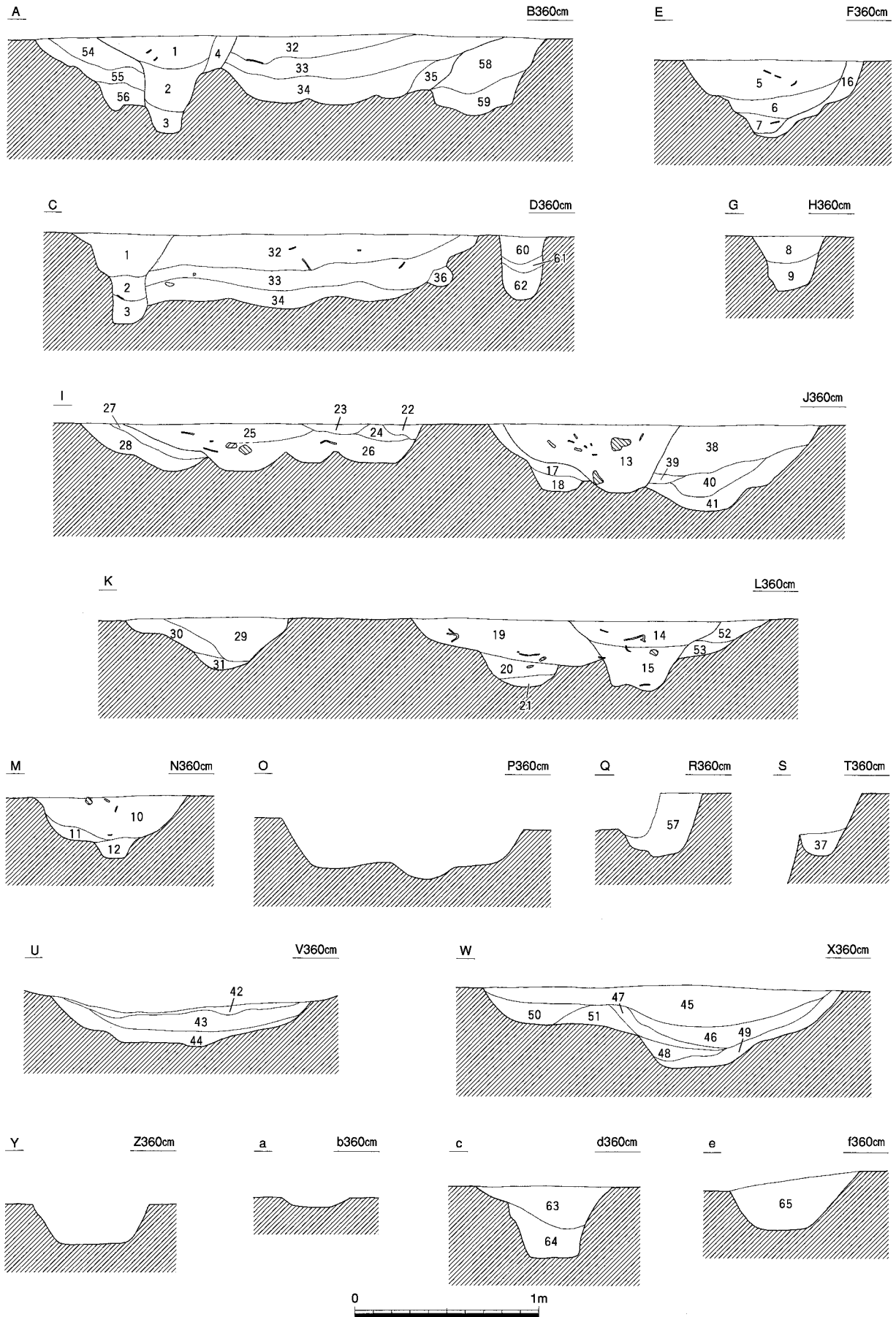
よく似た埋土からなる溝が幾重にも重複し、また、それらが前後する時期の遺構と重複したり削平を受けていたことなどのため、その変遷を追究することはかなりむずかしく一部には不明な箇所も生じることとなった。以下、これらの溝を順次記載する。 (字垣)

### 溝24（第66～68図、図版14. 15）

調査区の北隅で検出した幅63cm、深さ22cmの溝で、南北方向をとる。百・後・IIの古い段階の土器を伴う竪穴住居3を切って掘削されている。南端は溝36に切られる形となるが、もとは溝36に接続していたとみられる。出土土器はいずれも小片であるが百・後・IIの時期を示す。後述の様相から、北側延長上に竪穴住居が所在する可能性が強い。 (字垣)



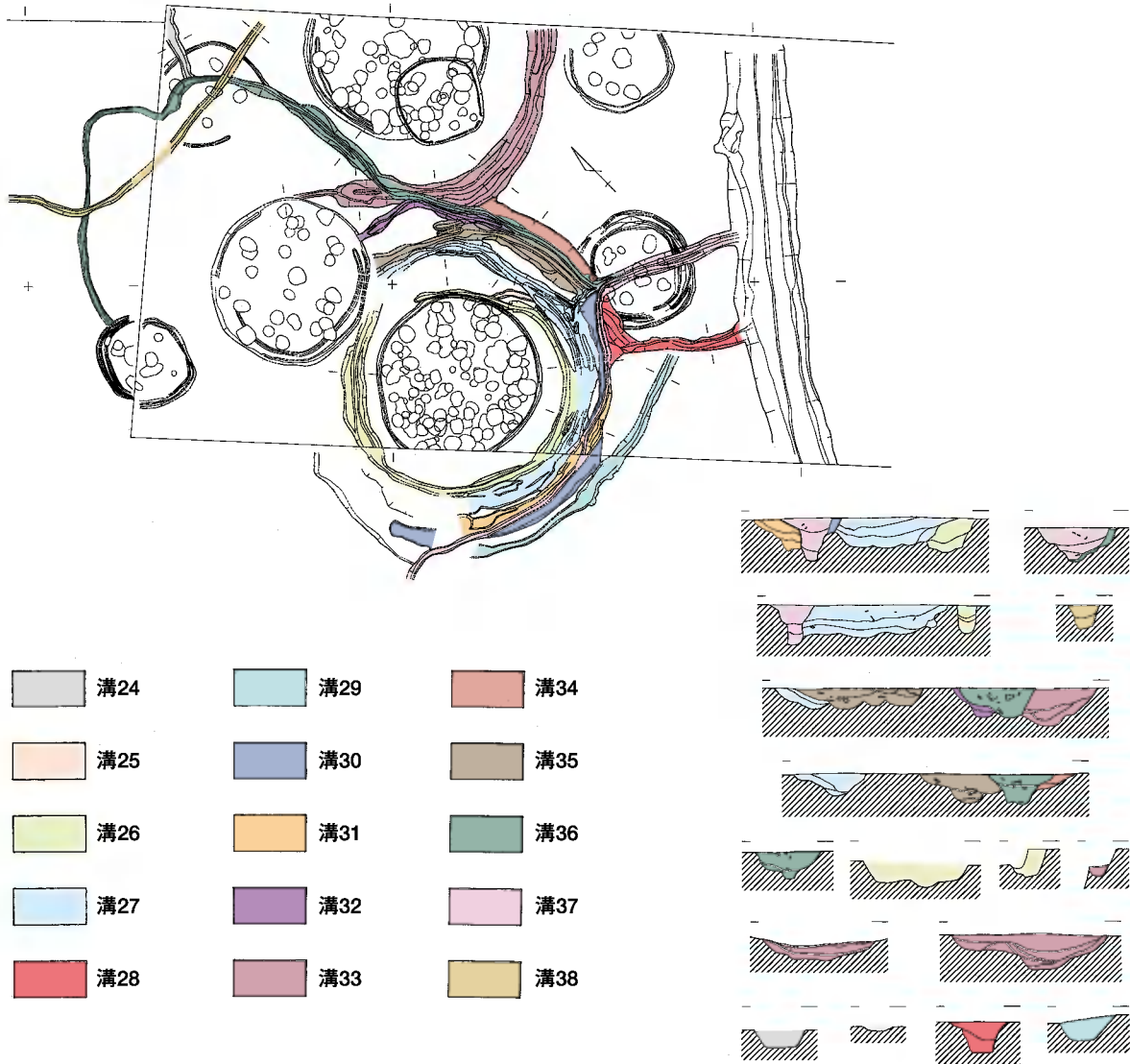
第66図 竪穴住居排水溝および周溝配置図（1/300）



第67図 竪穴住居排水溝および周溝断面図 (1/30)

### 第3章 発掘調査の概要

- |                     |                     |                    |
|---------------------|---------------------|--------------------|
| 1 暗褐色粘質土 (焼土粒少含)    | 23 暗褐色粘質土 (焼土粒多含)   | 45 褐色粘質土 (炭・焼土少含)  |
| 2 暗褐色粘質土 (焼土粒少含)    | 24 暗褐色粘質土           | 46 暗褐色粘質土 (炭・焼土含)  |
| 3 暗褐色粘質土 (焼土粒少含)    | 25 暗褐色粘質土           | 47 暗褐色粘質土 (炭・焼土多含) |
| 4 褐色粘質土             | 26 暗褐色粘質土           | 48 暗褐色粘質土          |
| 5 褐色微砂質土 (炭・焼土粒含)   | 27 暗褐色粘質土           | 49 暗褐色粘質土 (炭・焼土少含) |
| 6 暗褐色微砂質土 (炭・焼土粒含)  | 28 暗褐色粘質土           | 50 暗褐色粘質土 (炭片・焼土含) |
| 7 暗褐色微砂質土           | 29 黒褐色微砂質土 (炭・焼土多含) | 51 褐色微砂質土          |
| 8 灰褐色粘質土 (焼土粒極少含)   | 30 黒褐色微砂質土 (炭・焼土含)  | 52 暗褐色粘質土          |
| 9 褐灰色粘質土 (焼土粒極少量含)  | 31 黒褐色微砂質土 (炭・焼土含)  | 53 暗褐色粘質土          |
| 10 灰黄色粘質土 (炭少含)     | 32 暗褐色粘質土 (焼土粒少含)   | 54 暗褐色粘質土          |
| 11 褐灰色粘質土           | 33 暗褐色粘質土 (焼土粒含)    | 55 暗褐色粘質土          |
| 12 灰褐色粘質土 (炭少含)     | 34 暗褐色粘質土 (焼土粒少含)   | 56 暗褐色粘質土          |
| 13 暗褐色粘質土 (焼土粒少含)   | 35 暗褐色粘質土           | 57 暗褐色粘質土          |
| 14 暗褐色微砂質土 (炭片・焼土含) | 36 暗灰褐色粘質土          | 58 暗褐色粘質土 (焼土粒多含)  |
| 15 暗褐色微砂質土 (炭・焼土含)  | 37 暗褐色粘質土           | 59 暗褐色粘質土          |
| 16 暗褐色砂質土           | 38 暗褐色粘質土           | 60 暗褐色粘質土          |
| 17 暗褐色粘質土           | 39 暗褐色粘質土           | 61 暗褐色粘質土          |
| 18 暗褐色粘質土           | 40 暗褐色粘質土 (炭粒・焼土粒含) | 62 暗褐色粘質土          |
| 19 暗褐色微砂質土 (炭片含)    | 41 暗褐色粘質土           | 63 褐色弱粘性砂質土        |
| 20 暗褐色微砂質土 (炭・焼土含)  | 42 暗褐灰色粘質土 (焼土粒多含)  | 64 暗褐色粘質土          |
| 21 暗褐色粘質土           | 43 黄灰色粘質土 (炭・焼土含)   | 65 暗褐色粘質土          |
| 22 暗褐色粘質土           | 44 褐灰色粘質土 (炭極少含)    |                    |



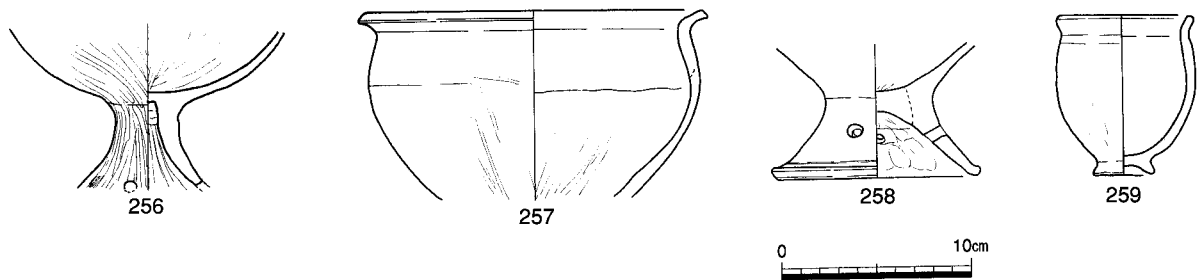
第68図 竪穴住居排水溝および周溝模式図

溝25 (第66～68図、図版14. 15)

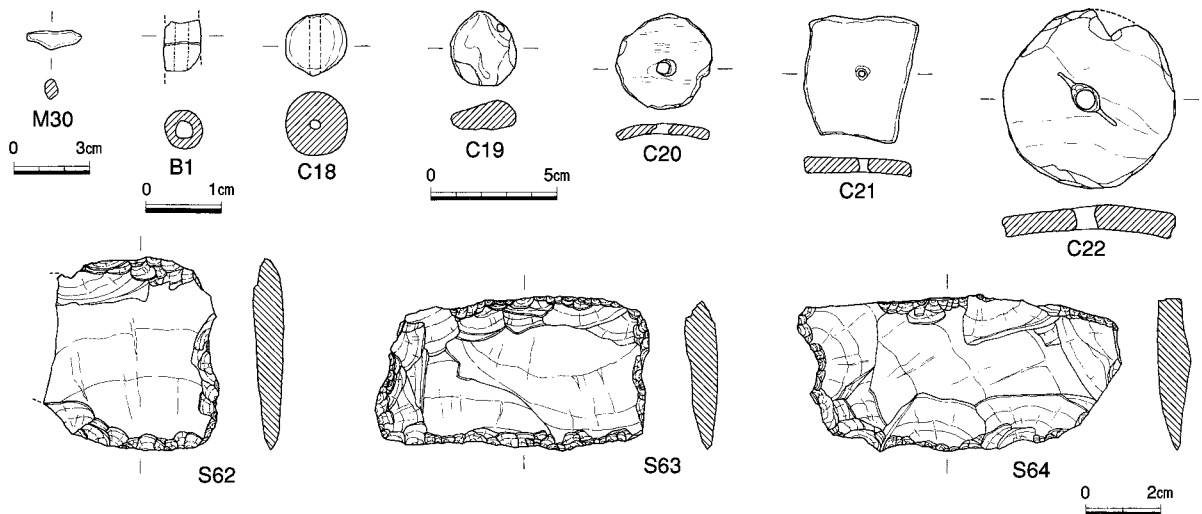
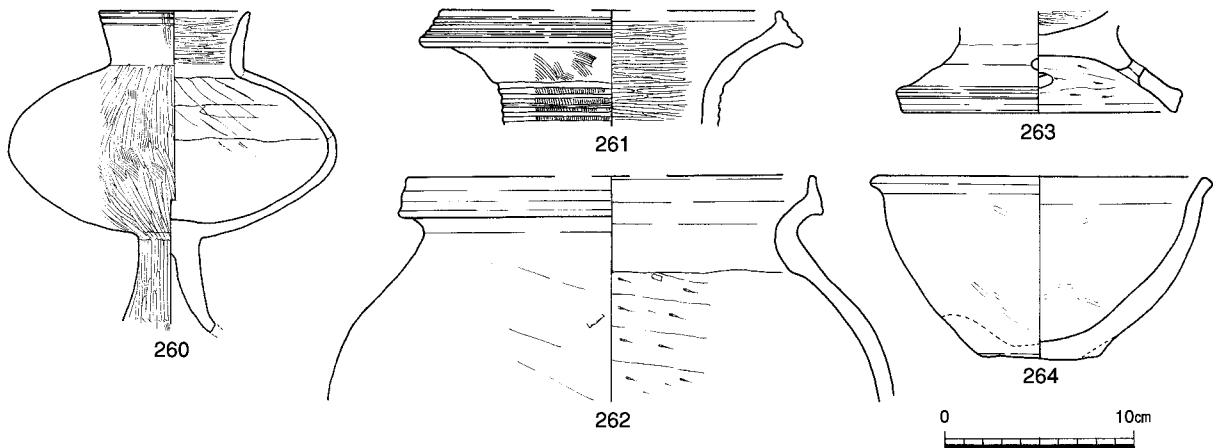
竪穴住居6の東外側で検出した短い溝で、西を溝26、東を溝27によって切られる。基盤を下げて検出したため深さは5cmで、幅37cmを測る。竪穴住居6から外側へのびる形となっており、住居の古い段階で排水の機能をはたしたものとみられる。百・後・Ⅱの土器片が出土している。(宇垣)

溝26 (第66～69図、図版14. 15. 58-1)

竪穴住居6の北端に発し、「の」字形に住居を取りまく溝である。第69図に示すように百・後・Ⅱの土器が出土している。住居北西側では幅広くなるが、この部分では百・後・Ⅲの遺物も出土しており、後の時期の溝が重複しているとみられる。中世の井戸19のため北側への接続関係は明確でないが、



第69図 溝26土遺物 (1/4)



第70図 溝27出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1)

古い段階の溝35を経て溝28に続く可能性が考えられる。なお、溝の始まり部分は住居に切られる形になるが、暗渠などによってこのような形で住居に接続していた可能性も考えられる。(宇垣)

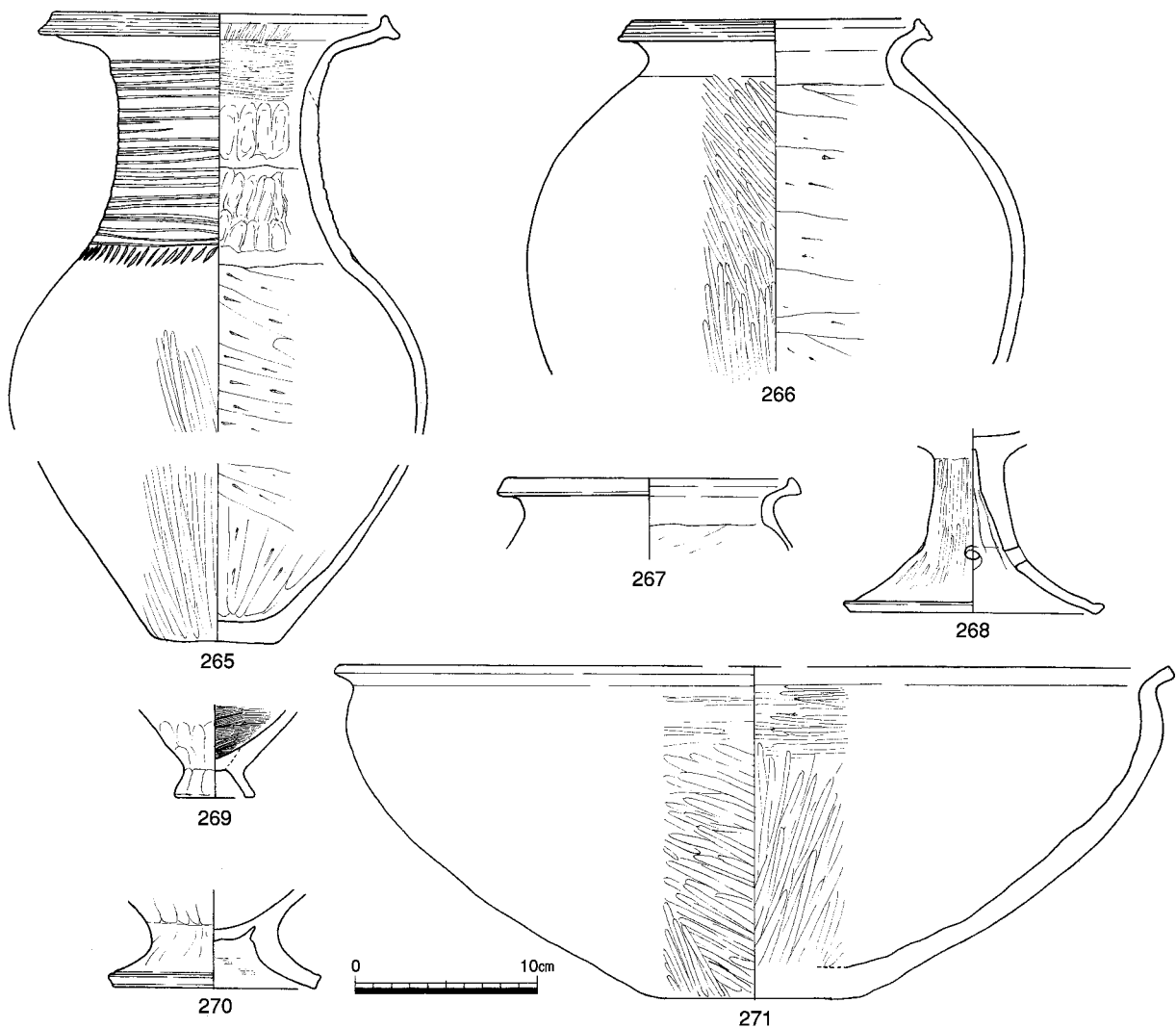
溝27 (第66～68・70図、図版14. 15. 16-1. 58-1)

竪穴住居6の西側では明確でないが、それ以外をC字形に広くとりまいており、東中央で外に出ていく。幅1.7(復元)～0.9m、深さ38cmを測る。断面図に示すように底面は波打った形となっており、3本前後の溝に区分することも可能であるが、個別の溝ではなく、比較的短期間のうちに流路の変更、あるいは数度の拡張がなされた後に埋没したとみられる。第70図に示すように百・後・Ⅱの土器が出土しており、ごく少量百・後・Ⅲの土器が含まれていた。土器以外に土器片有孔円盤C20～22、小形の石包丁S63・64、管玉B1などが出土している。(宇垣)

溝28 (第66～68・71図、図版14. 15. 58-1)

周溝と溝43をつなぐ溝で、竪穴住居6の南東方向に設けられている。同様の機能をもつ溝に溝37があるが、それに先だつて機能した溝である。幅74cm、深さ39cmを測り断面は逆台形をなす。

この溝に溝29が接続する。それ以外の溝との関係は溝37の掘削と新しい溝の重複によってわかりにくい。溝34が接続していたとみられ、溝35もその可能性を考える。北西端部は北に向かうが、屈曲



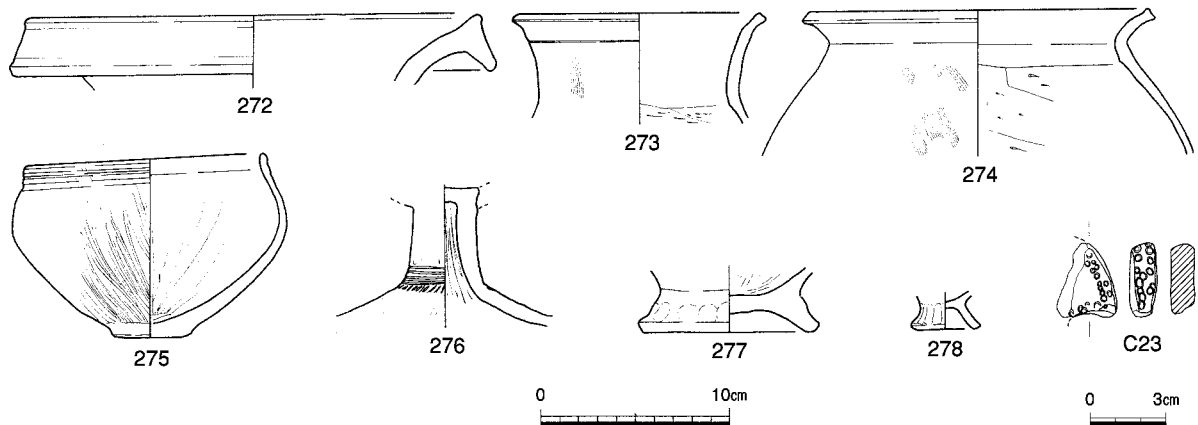
第71図 溝28出土遺物 (1/4)

部で肩が南側にも広がって扇形になっており、南からもいずれかの周溝が流入していたとみられる。

第71図に示すように長頸壺265、鉢271などが出土している。百・後・Ⅱである。 (宇垣)

**溝29** (第66～68・72図、図版14. 15. 16-2. 58-1)

周溝群のうち最も東外側をめぐる溝で、竪穴住居6の西側からはじまり上記溝28に接続する。幅70cm、深さ32cmを測り、断面は逆台形を呈する。第72図に示す遺物が出土しており百・後・Ⅱの時期を示す。この溝に限ったことではないが、後の時期の周溝よりも外側に位置しており、周溝群は必ずしも一定の方向へ拡大あるいは掘り直しがなされていったものではないことを示している。出土遺物のうちのC23は分銅形土製品の破片で、上面および端面に円形刺突文が施される。 (宇垣)



第72図 溝29出土遺物 (1/4・1/3)

**溝30** (第66～68図、図版14. 15)

南側の調査区から続く『百間川原尾島遺跡4』「溝4」が、溝37と完全に重複し掘削されているため遺存状態は良くない。『百間川原尾島遺跡4』の調査区では溝の南半部が、本調査区では溝37周溝部分の北側に北半が残る。検出範囲の中央、井戸9に近接する部分では溝27との間に地山が細長い土手状をなして掘り残されている。検出面からの深さは20cmである。遺物は小片で時期を限定しえないが、溝37がこの溝を踏襲することから、百・後・Ⅲと推定する。 (宇垣)

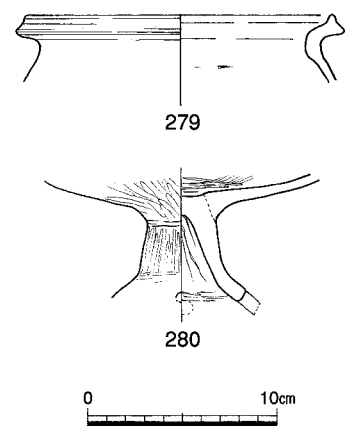
**溝31** (第66～68図、図版14. 15)

上記溝30と同様、南から続く周溝『百間川原尾島遺跡4』「溝6」で、溝37に切られる。本調査区では溝37の南側に紡錘形をなして残存する。この部分よりも東側にはのびず、溝37が完全に重複しているとみられる。検出面からの深さは40cmで、溝30よりも深い。 (宇垣)

**溝32** (第66～68・73図、図版14. 15)

竪穴住居7の東縁中央を起点とし、竪穴住居6の北東側をめぐる、溝37に先行する溝(溝37古段階)に接続して東外側へ向かったとみられる。溝37はこの溝南端の埋土を切って設けられる。また、この溝は溝34・35埋土を掘削して設けられるようである。竪穴住居7の排水溝とみてよい。

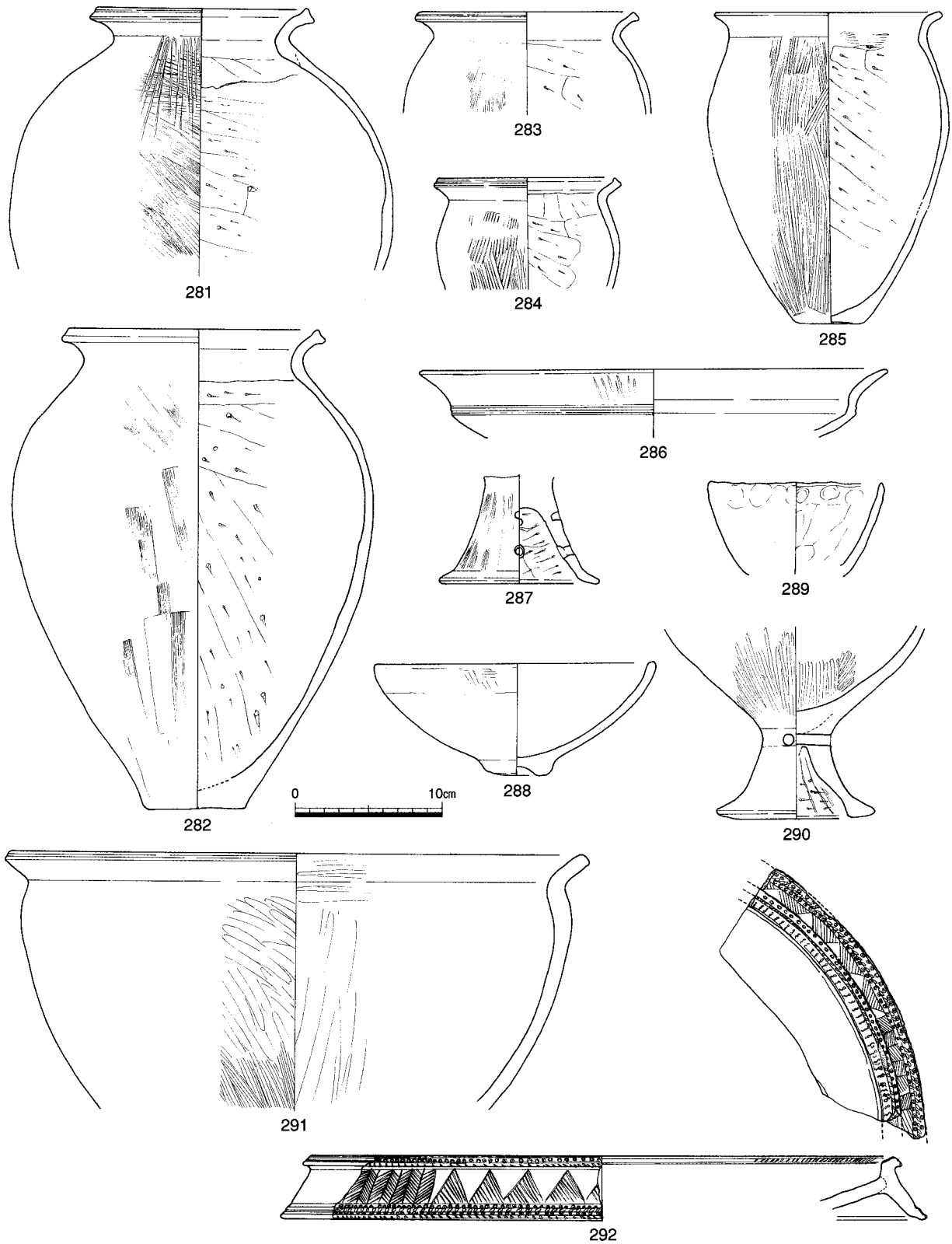
断面は逆台形をなし、幅83cm、深さ38cmを測る。第73図に示す出土土器から百・後・Ⅲの遺構と判断できる。 (宇垣)



第73図 溝32出土遺物 (1/4)

溝33 (第66~68・74・75図、図版14. 15. 57-1)

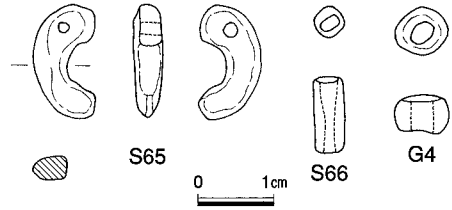
竪穴住居5の南側を半円形にめぐる溝である。竪穴住居7の北東やや外側を起点とする。この付近では溝はきわめて浅く細い。住居7の東側で急に広くなり、この部分では、炭・焼土が多量に堆積し



第74図 溝33出土遺物① (1/4)



ていた。翡翠製勾玉 S65、碧玉製管玉 S66はこの部分からの出土である。埋土が溝36のそれと等しかつたため、両者が一連のものであると考え掘り下げを行ったが、底面の形状や出土土器などの検討の結果、溝36に切られていると判断するに至った。この交差部分よりも東側では溝はさらに広く深くなっており、幅1.95m、深さ44cmとなる。また、この部分では、部分的な溝の掘り直しも認められる。



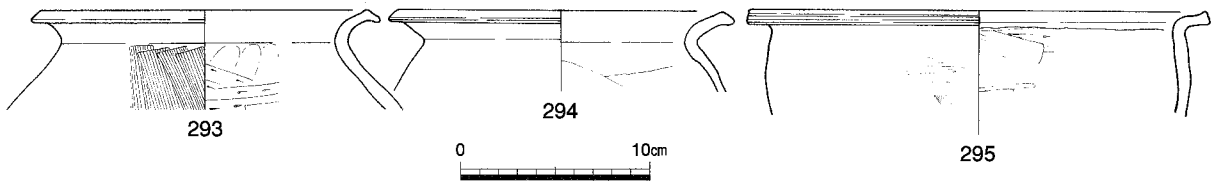
第75図 溝33出土遺物② (1/1)

出土土器のうち292は器台の口縁部で、口縁拡張部には鋸歯文と綾杉文を施す。出土土器からこの溝は百・後・Ⅱと判断できる。(宇垣)

溝34 (第66～68・76図、図版14. 15)

竪穴住居6の東側の周溝群のうち最も外側をめぐる溝で、内(西)側は溝32によって掘削される。検出面からの深さは20cmで周溝群のなかではやや浅い。

第76図に示す出土土器から百・後・Ⅱの遺構とみられる。溝32に南端を切られるが、もとは溝28に接続していたとみられる。また、この溝の北端と溝33との関係は土質に大きなちがいが認められず、



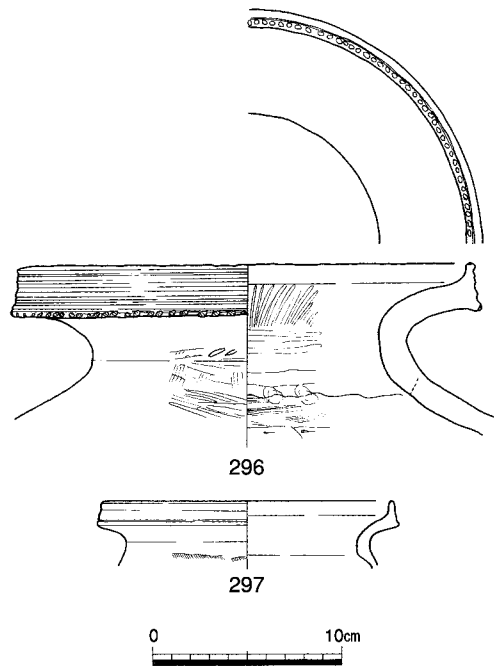
第76図 溝34出土遺物 (1/4)

切り合い関係を確認できなかった。一方が埋没しきらないうちにもう一方が掘削された可能性も考えられる。(宇垣)

溝35 (第66～68・77図、図版14. 15)

竪穴住居6東側をめぐる溝で、溝32の内側、溝27の外側に位置する。溝27を切り、溝32に切られている。北端は浅く不明瞭になる。南端は溝28、37のいずれに接続していたのか確証を欠くが、溝の年代から28に流れていた可能性が考えられる。北部の底面には複数の溝底が見られ、南部も断面に示すように一段深くなっており、複数回の掘り直しがなされたとみられる。なお、北部では溝27と埋土が直接切り合うことになるが、中央以南では溝27との間に基盤層が細長く掘り残されている。

出土土器は壺296、甕297などがあり、百・後・Ⅱの新しい段階からⅢにわたる。(宇垣)

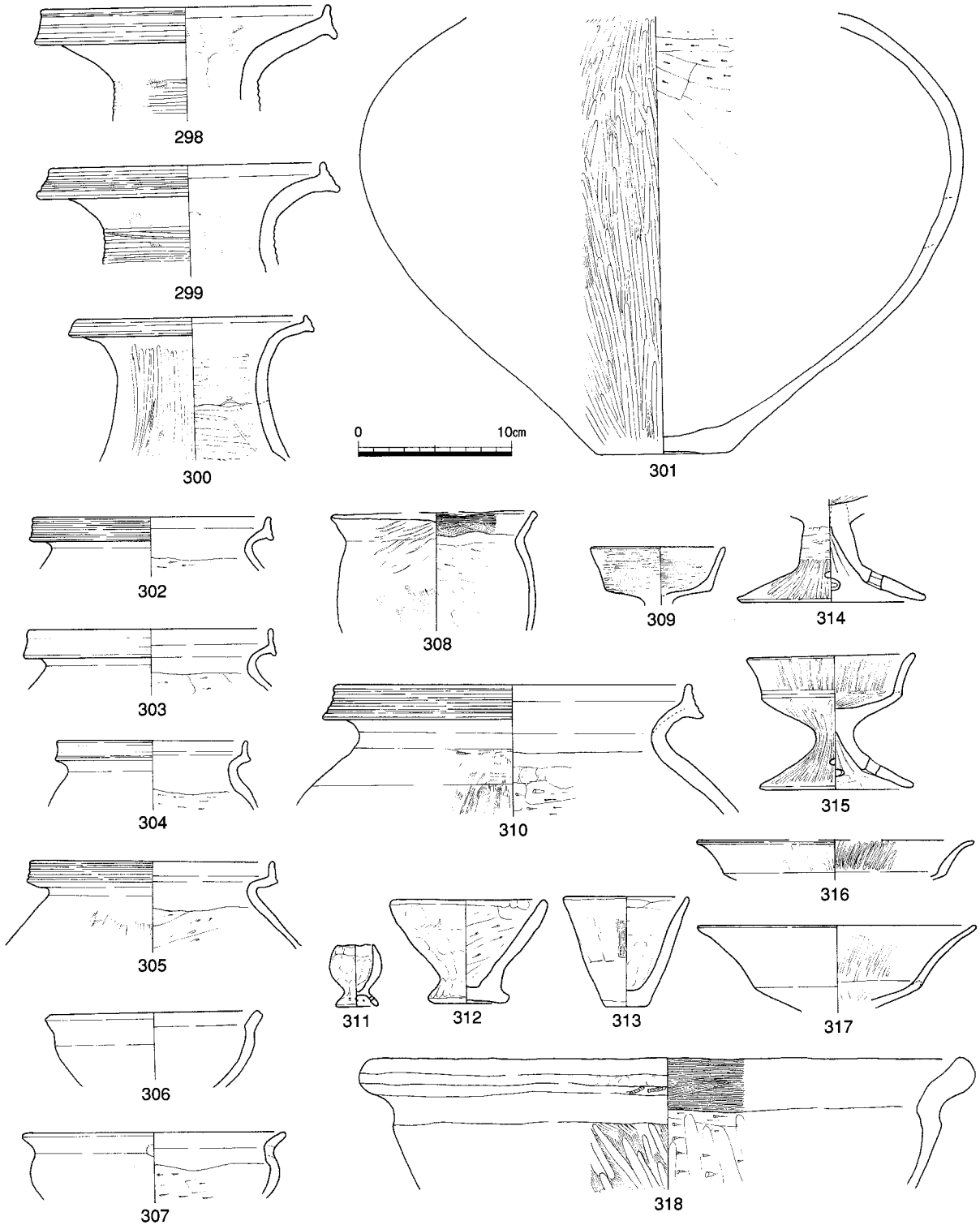


第77図 溝35出土遺物 (1/4)

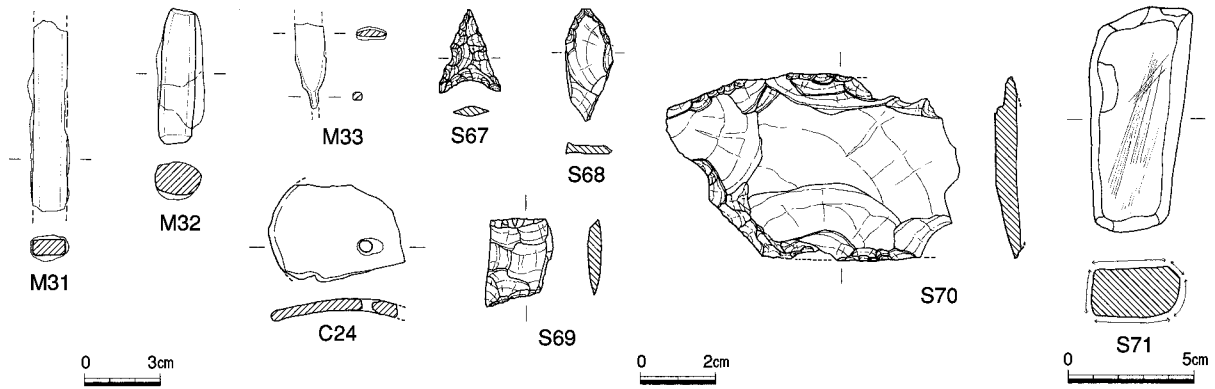
溝36（第66～68・78・79図、図版14. 15. 58-1）

竪穴住居4の北東側から出て大きく北に迂回したのち南に流下して溝32に合流し、最終的に溝37古段階につながる溝であり、その総延長は約52mを測る。竪穴住居4の排水溝とみてよい。

先に述べたように溝33との切り合いが明確でなかったが、最終的にそれを切っていると判断でき上記のように理解した。調査区北部では狭いが南下するにしたがって幅が広くなり、住居5の西側で幅



第78図 溝36出土遺物① (1/4)

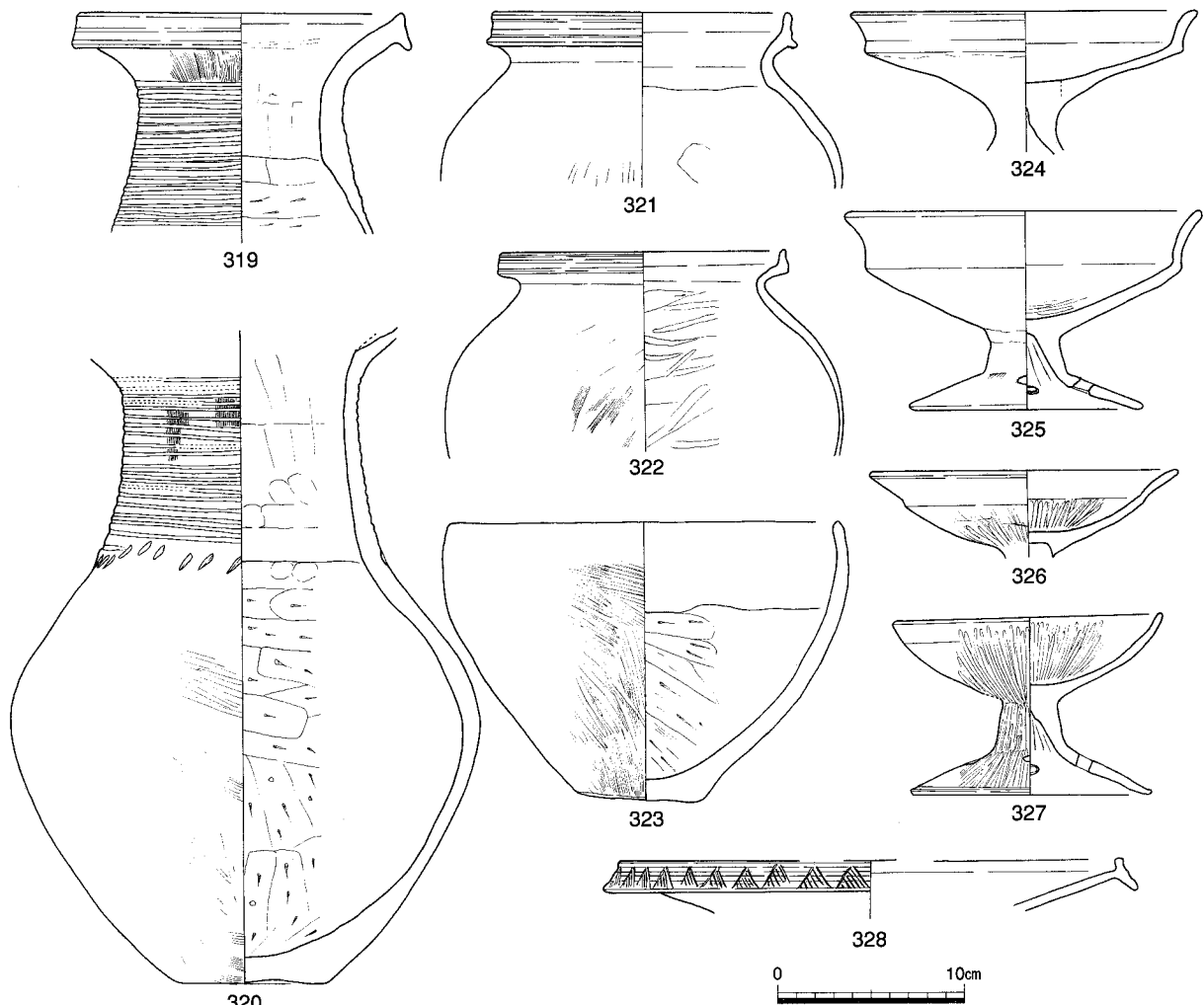


第79図 溝36出土遺物② (1/3・1/2)

83cm、深さ34cmを測る。

出土遺物は比較的多く、第78図に示した土器が出土した。長頸壺298～300、甕302～305、高杯314～317に示されるように、遺構の埋没は百・後・Ⅲである。311はミニチュアの台付き鉢である。

土器以外の遺物として鉄器M31～33、土製有孔円盤C24、石鏃S67、楔形石器S69・70、砥石S71などがある。鉄器M31はヤリガンナとみられる。M32・33は器種不明である。(宇垣)



第80図 溝37出土遺物① (1/4)

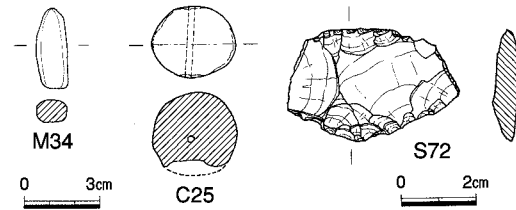
溝37 (第66～68・80・81図、図版14. 15. 16-3. 57-2)

竪穴住居6の南西7mの位置からはじまり竪穴住居6の周溝群の中を通り、住居6の東側で屈曲して大溝43へ抜ける溝である。

溝36と同様の機能と見るなら、『百間川原尾島遺跡2』『竪穴住居16』、あるいは『百間川原尾島遺跡4』『溝8・11』を経て別の住居に発した可能性が考えられる。

住居6南半の周溝群のなかでは最も新しく、溝30・31が完全に埋没してから掘削されている。また、周溝群から東外側の溝43へ出る部分では溝32南端埋土を切っており、溝32から出ていた溝37古段階を掘り直している。

出土遺物のうち鉢323、高杯327は溝の周溝群部分北部、埋土上層から出土したもので完形に近い出土状態であった。鉢323は口縁部を丸くおさめてやや内傾させる鉢で、内面下半にはヘラケズリを施しており、通常の鉢とはやや異なり、搬入品の可能性がある。M34は鉄器片、C25は土製丸玉である。図示した出土土器から溝の時期は百・後・Ⅲと判断できる。(宇垣)

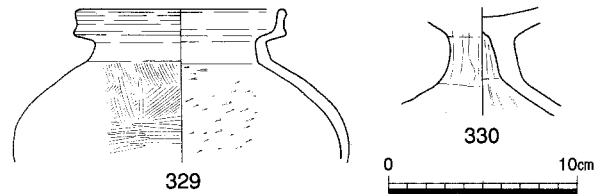


第81図 溝37出土遺物② (1/3・1/2)

溝38 (第66～68・82図、図版14. 15)

調査区の北端で検出した東西方向の溝で、幅40cm、深さ30cmを測り、竪穴住居3および

溝36を切る。北西側の調査区で検出した溝『百間川原尾島遺跡5』『溝12』・『百間川原尾島遺跡3』『竪穴住居5外周溝』の東部分にあたる。『百間川原尾島遺跡3』『竪穴住居5外周溝』は百・後・Ⅳの竪穴住居5の外側を丸く取り巻いてから南東に出ていくことが判明しており、上記の溝群とは別グループ・別時期の住居排水溝である。検出した総延長は54mである。おそらく竪穴住居5の北側を通り、最終的に溝43に流れ込むと推定される。(宇垣)



第82図 溝38出土遺物 (1/4)

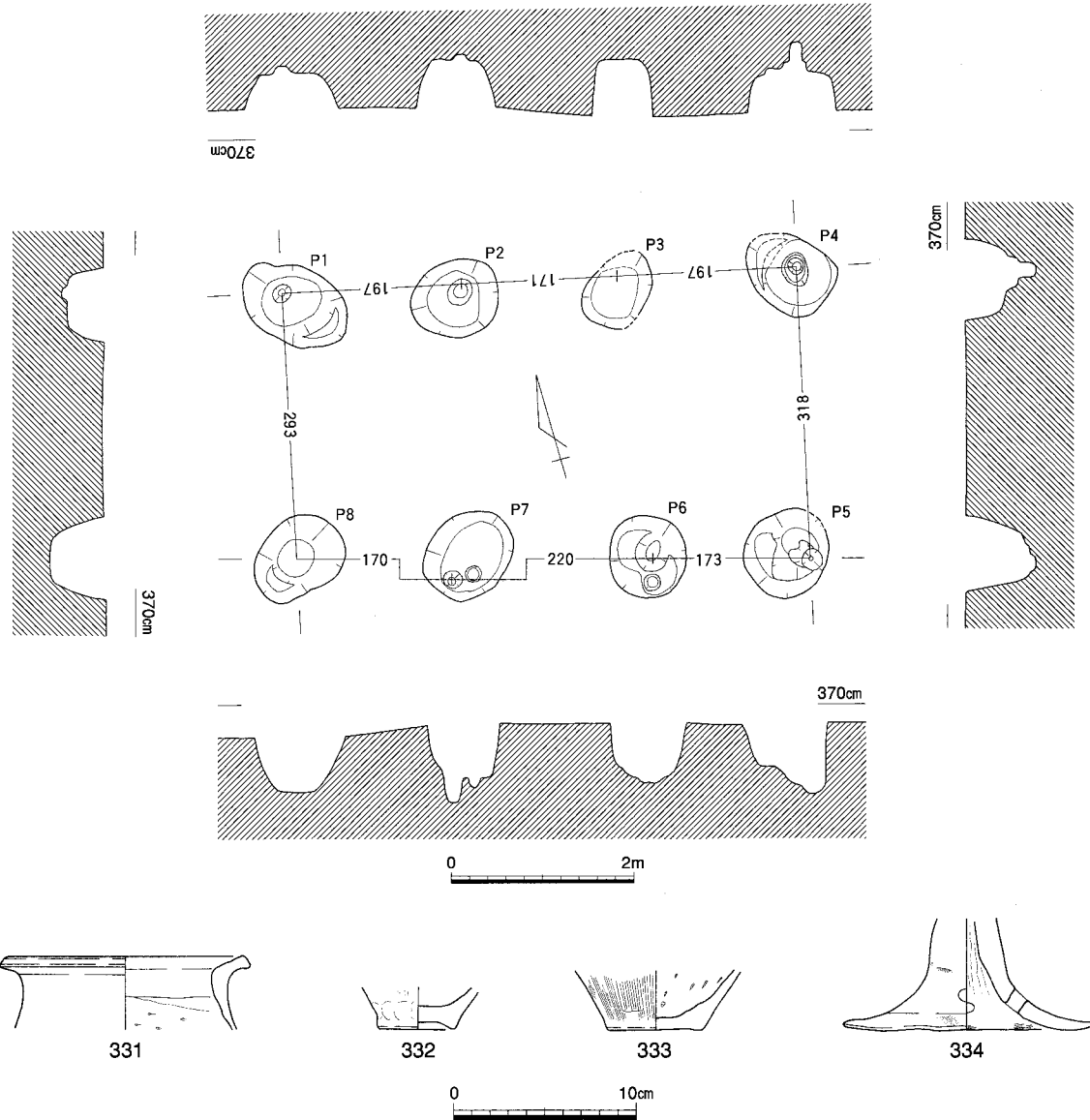
### 3 建物

建物1 (48・83図)

調査区の北東隅近くで検出した大形の建物で、東西方向をとる。梁間1間で3.18m、桁行は3間で5.62mを測る。柱穴の径は90cm前後、検出面からの深さ70cm前後である。柱穴底には径約20cmの柱痕がみられ、その位置は比較的ばらつきが少なく、よく通ると言える。

柱穴埋土からの出土土器は百・後・Ⅱとみられるが、必ずしもそれが時期を示すとも考えにくい。百・後・Ⅱの竪穴住居3を切っており、それよりも新しくなることは確実である。他にも多くの柱穴を切る一方、他からあまり切られていないことからすれば、むしろ後期の後半まで下降する可能性が強いのではないかと考えている。

この建物1付近には比較的多くの柱穴が所在している。別の建物を復元するに至らなかったが、この建物の軸線に近い配置で南側に柱穴が並ぶか見え、先行するやや不規則な柱配置の建物が所在する可能性もある。(宇垣)



第83図 建物1 (1/80)・出土遺物 (1/4)

#### 4 井戸

##### 井戸1 (第48・84~89図、図版17. 58-2. 59. 60)

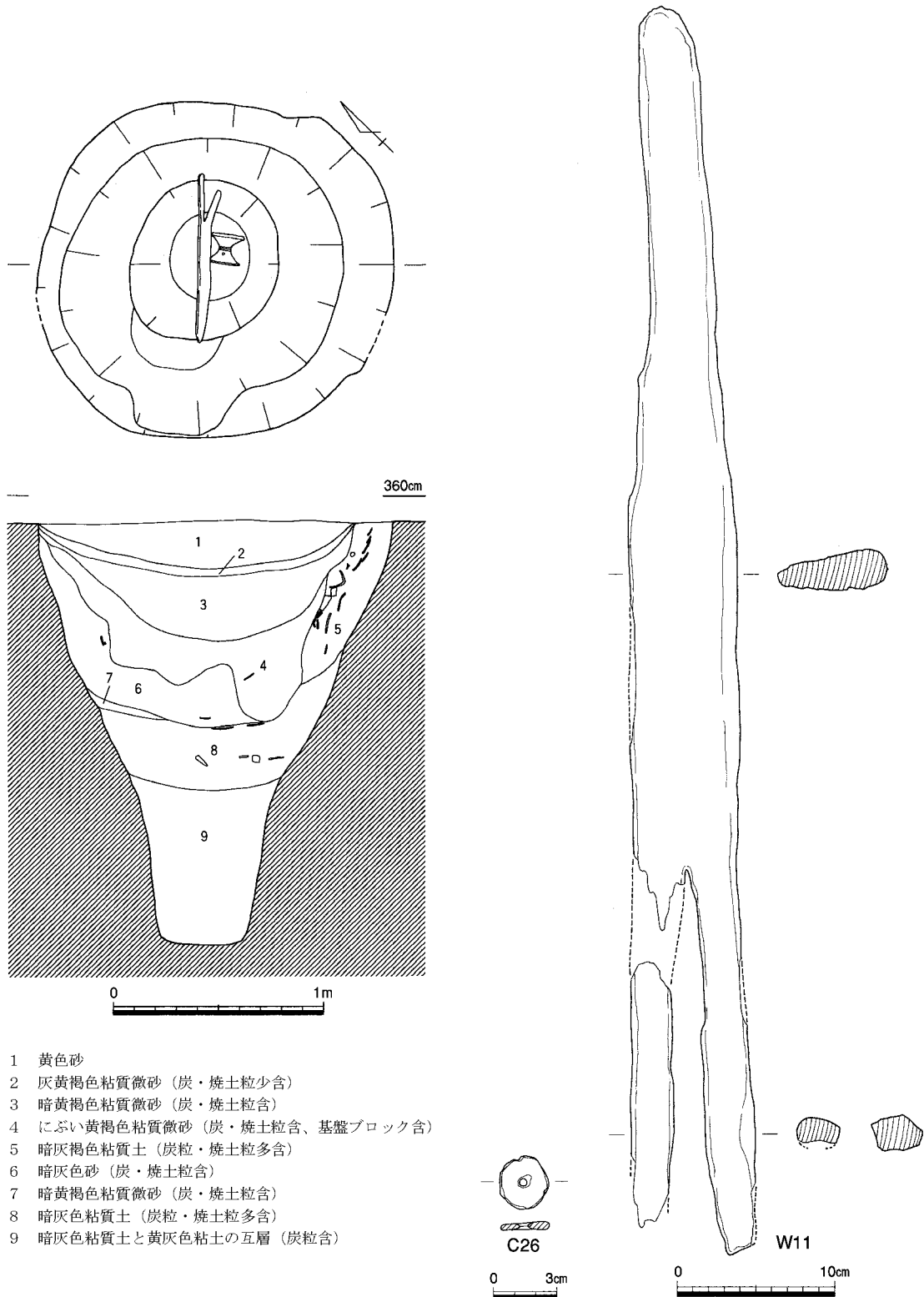
11B区で検出した井戸で、竪穴住居5の北西側に接する位置にある。平面形はほぼ円形を呈し、長軸で170cmを測る。検出面からの深さは201cmで、底面の海拔高は145cmである。断面形は海拔210cmより下位で細い筒状を呈し、それ以上が逆「ハ」の字状に開く。壁は数段に落ち込み、南西側には縦長の窪みとその下部に平坦面がみられる。埋土は上・中・下の3層に大別できる。上層(第1~3層)はレンズ状の堆積で、少量の遺物を含む。中層(第4~8層)は炭・焼土・基盤ブロックが顕著で大量の土器片を含み、東側から流れ込むような出土状態がみられる。下層(第9層)は粘土と粘質土の互層で遺物をほとんど含まない。

出土遺物は弥生土器、土製品、加工木である。342は大形壺で、肩~胴部外面に籠目が認められる。いずれも左右下がりの帯で、交差状態が観察できる箇所がある。横位のもの認められない。351と

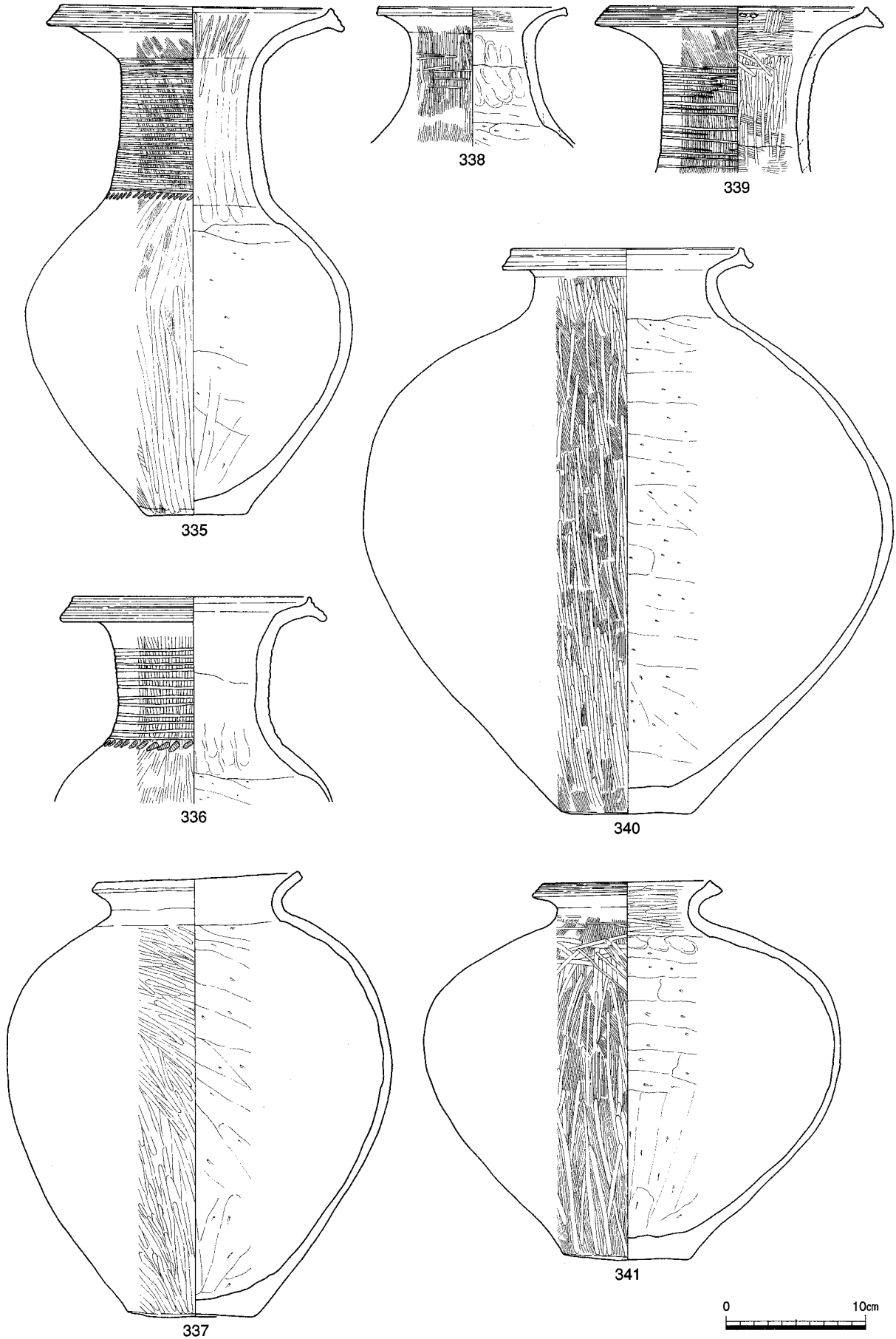
352の甕の底部には焼成後穿孔がみられる。高杯の杯部と脚部の接合方法が観察できるもののうち、365は円盤充填で、366～370は別づくりである。完形の器台389は第9層中位での出土である。C26は土器片転用の紡錘車、W11は用途不明の加工木で第8層から出土している。

井戸の廃絶した時期は、土器の特徴から百・後・Ⅱと考えられる。

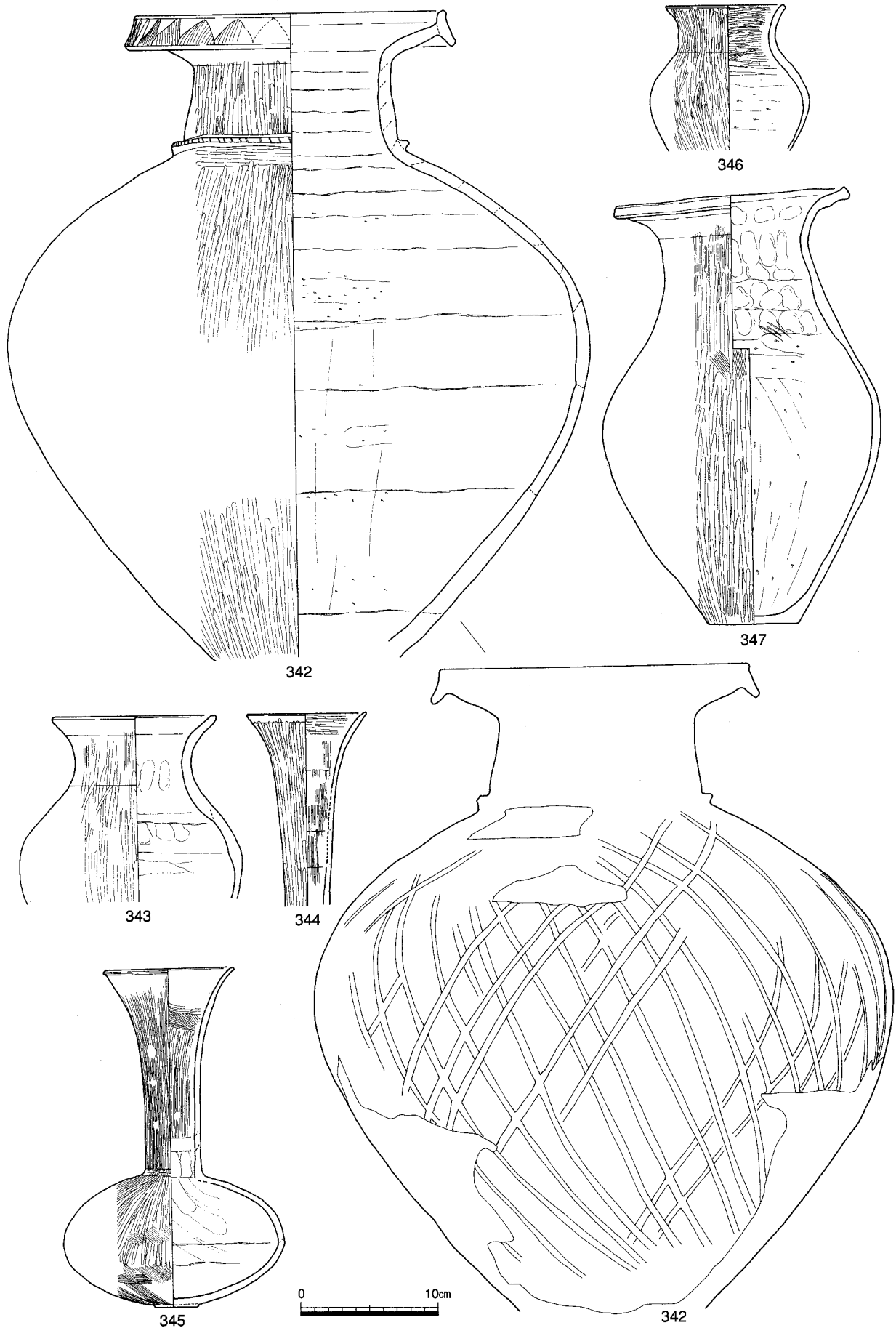
(高田)



第84図 井戸1 (1/30)・出土遺物① (1/4・1/3)

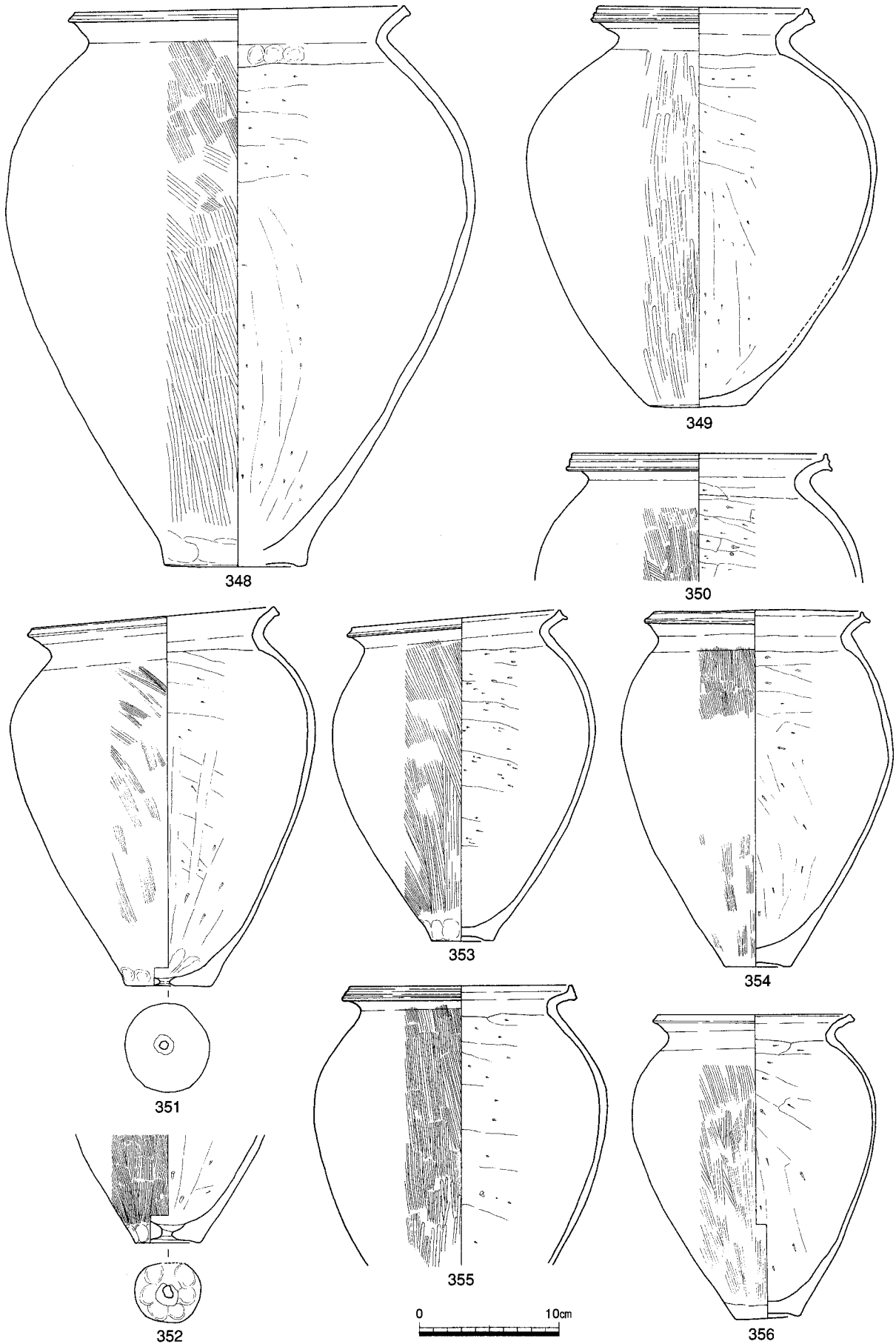


第85図 井戸1土遺物② (1/4)

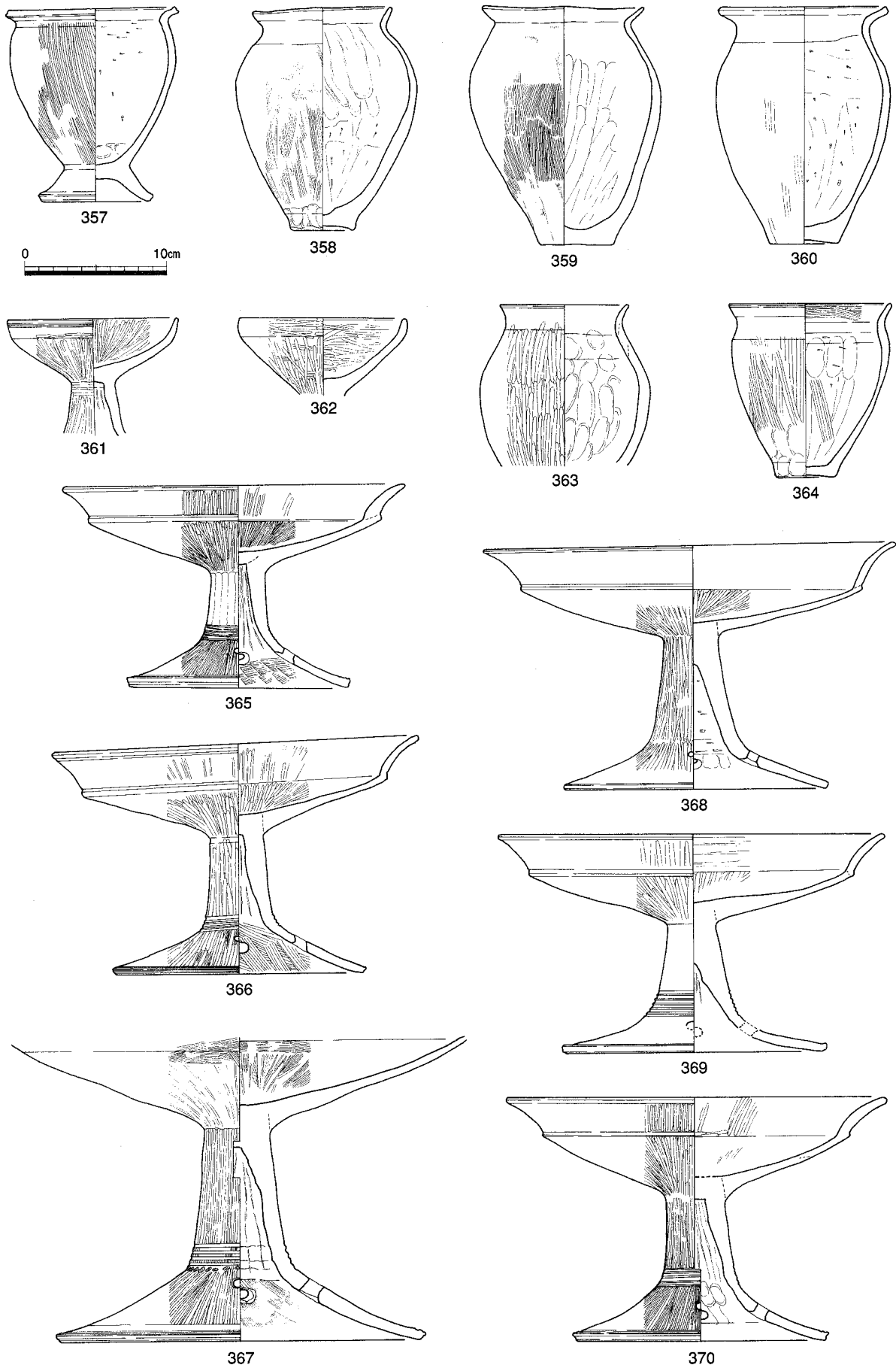


第86図 井戸1 出土遺物③ (1/4)

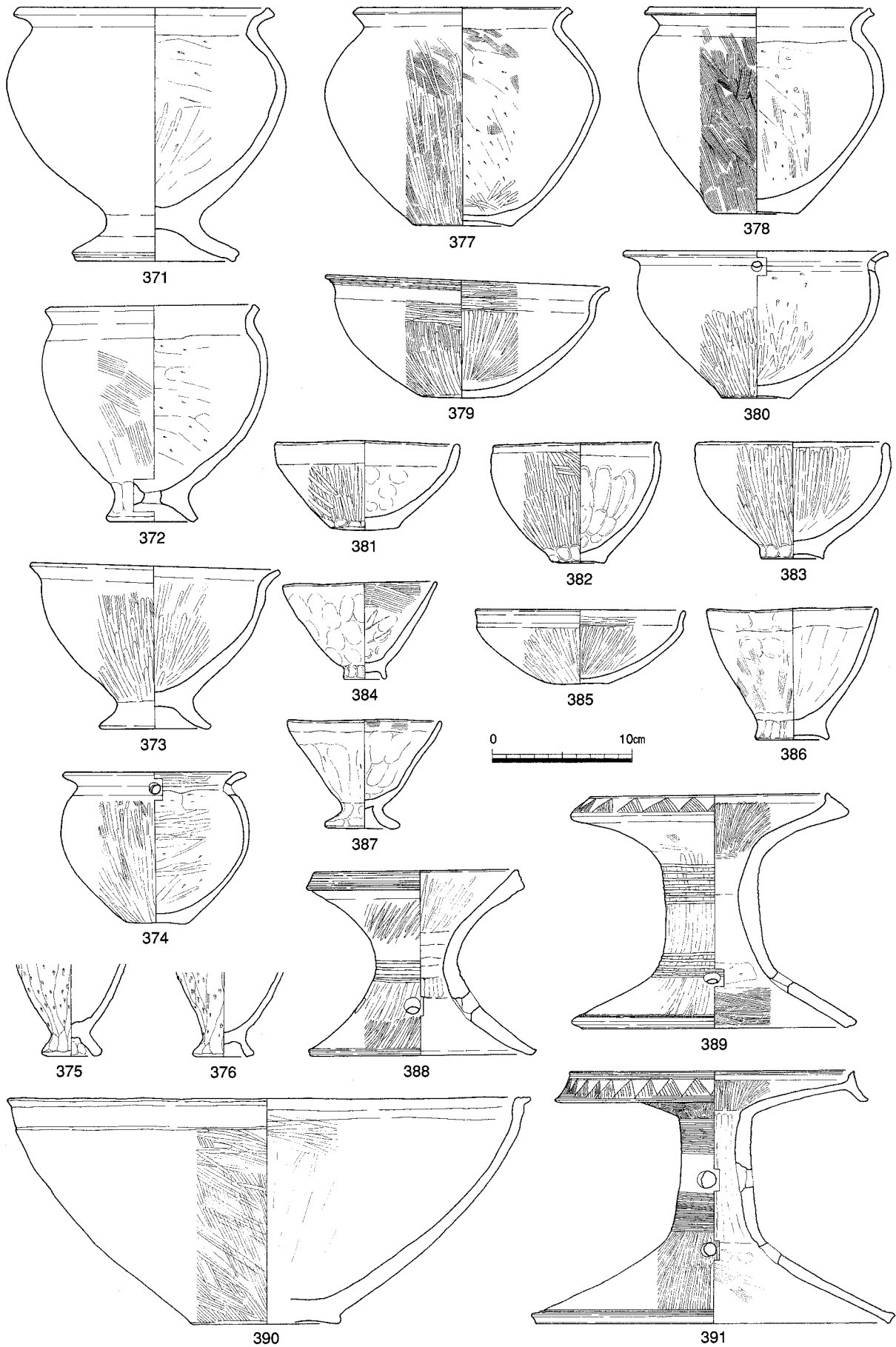




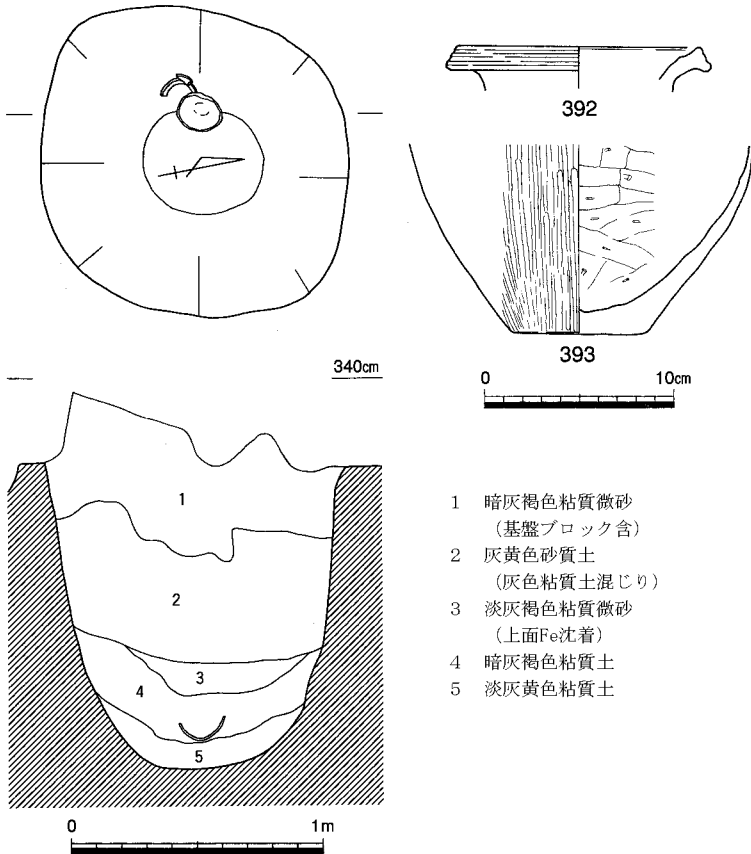
第87図 井戸1 出土遺物④ (1/4)



第88図 井戸1 出土遺物⑤ (1/4)



第89図 井戸1出土遺物⑥ (1/4)



第90図 井戸2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

- 1 暗灰褐色粘質微砂  
(基盤ブロック含)
- 2 灰黄色砂質土  
(灰色粘質土混じり)
- 3 淡灰褐色粘質微砂  
(上面Fe沈着)
- 4 暗灰褐色粘質土
- 5 淡灰黄色粘質土

井戸2 (第48・90図、図版18-1)

調査区の北西隅、11C区で検出された井戸である。百・後・Ⅲの竪穴住居4に切られていることが確認された。掘り方平面形は円形で、径125cm、深さ151cmを測る。底面は「U」字形を呈し、海拔184cmまで達している。

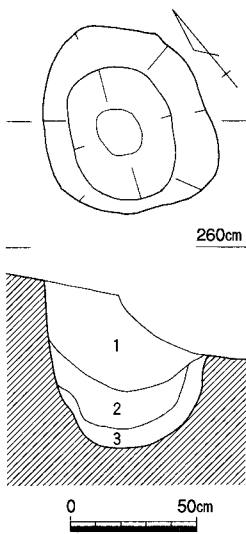
1層は基盤ブロックを含んでおり、人為的に埋められた可能性も考えられる。底面付近の5層上面で壺の口縁部392と甕の底部393が出土しているほかには、小片がわずかに出土しているだけである。遺構の切り合い関係等から、遺構の時期は百・後・Ⅰと考えられる。(柴田)

井戸3 (第48・91図)

13C区の住居域南東縁に位置し、溝43と重複する。溝43の掘り

下げ後、その底面で検出した。平面形は径約70cmの円形を呈し、検出面からの深さは約65cm、底面海拔高は1.8mである。埋土はグライ化した粘質土である。

遺物は土器小片がごく僅かに出土したのみで、それらのなかの甕口縁部の破片は、百・後・Ⅱの特徴を持つ。井戸3は検出状況からすれば、溝43に切られていると思われるが、その逆である可能性も否定しきれず、溝43の新古2時期の間に入る可能性もある。(物部)



- 1 黄灰色粘質土 (炭粒含)
- 2 灰色粘土 (炭粒含)
- 3 淡緑灰色粘土

第91図 井戸3 (1/30)

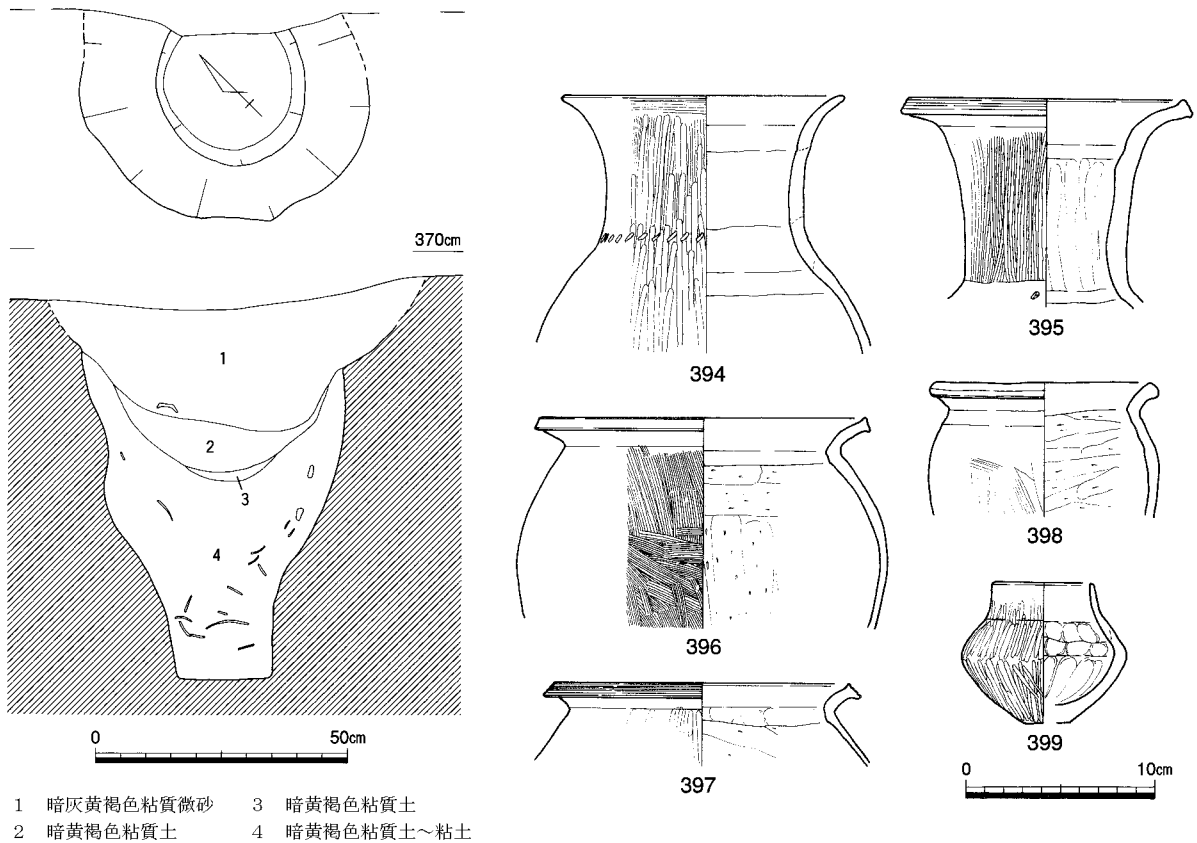
井戸4 (第48・92図、図版18-2.63)

11B区で検出した井戸である。調査区境に位置し、一部が調査区外となる。竪穴住居5と重複し、この住居の貼床等が井戸上部に落ち込むように観察できた。平面形はほぼ円形を呈すると推定され、長軸で115cmを測る。検出面からの深さは140cmで、底面の海拔高は200cmである。壁は急傾斜で落ち込むもので、特に底面付近ではほぼ垂直近くになる。埋土は土器片を含む1層であり、人為的な埋め戻しが想定される。

出土遺物のうち、394と395は長頸壺である。394は頸部から緩やかに外反する口縁の端部を丸く収め、頸部と胴部の境目に刺突文を施す。395は逆台形の頸部となる。396~398は甕で、いずれも「く」の字状の口縁となる。399は小形の直口壺である。

井戸の廃絶時期は、百・後・Ⅱと考えられる。

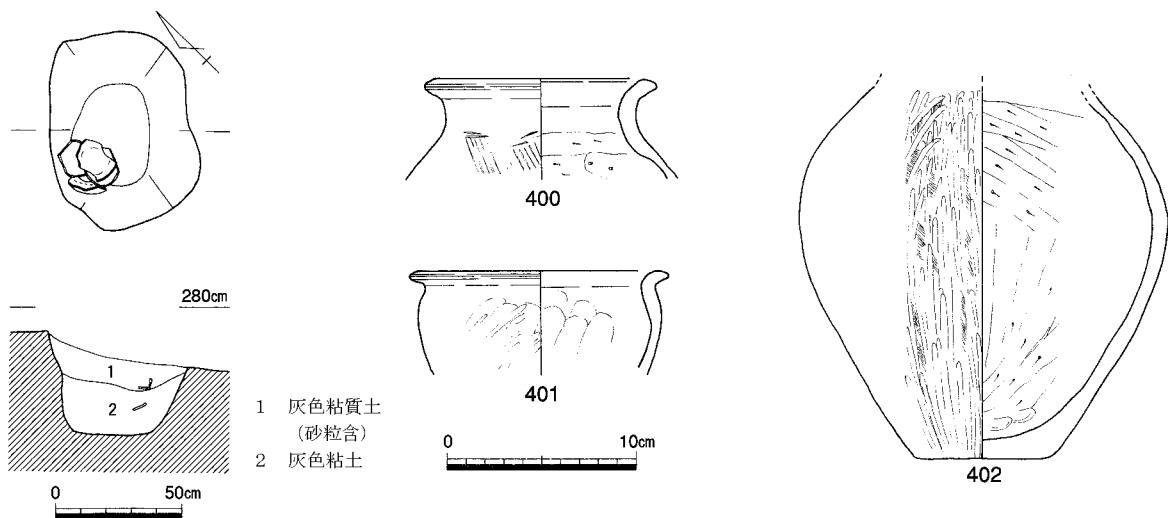
(高田)



第92図 井戸4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

井戸5 (第48・93図)

井戸5は12・13C区、井戸3の北約3mに位置する。井戸3と同様に溝43と重複しているが、溝43掘り下げ途中で検出し、溝43の埋土下層を切っていることを確認した。このことから、井戸5は少なくとも溝43の下層溝より新しいと判断できる。検出面での平面形は、80×60cmの楕円形を呈し、検出面からの深さ約40cm、底面の海拔高2.3mを測る。遺物は400・402甕、401鉢など、土器片が少量出土した。それらの特徴から井戸5の時期は百・後・Ⅱと考えられる。(物部)



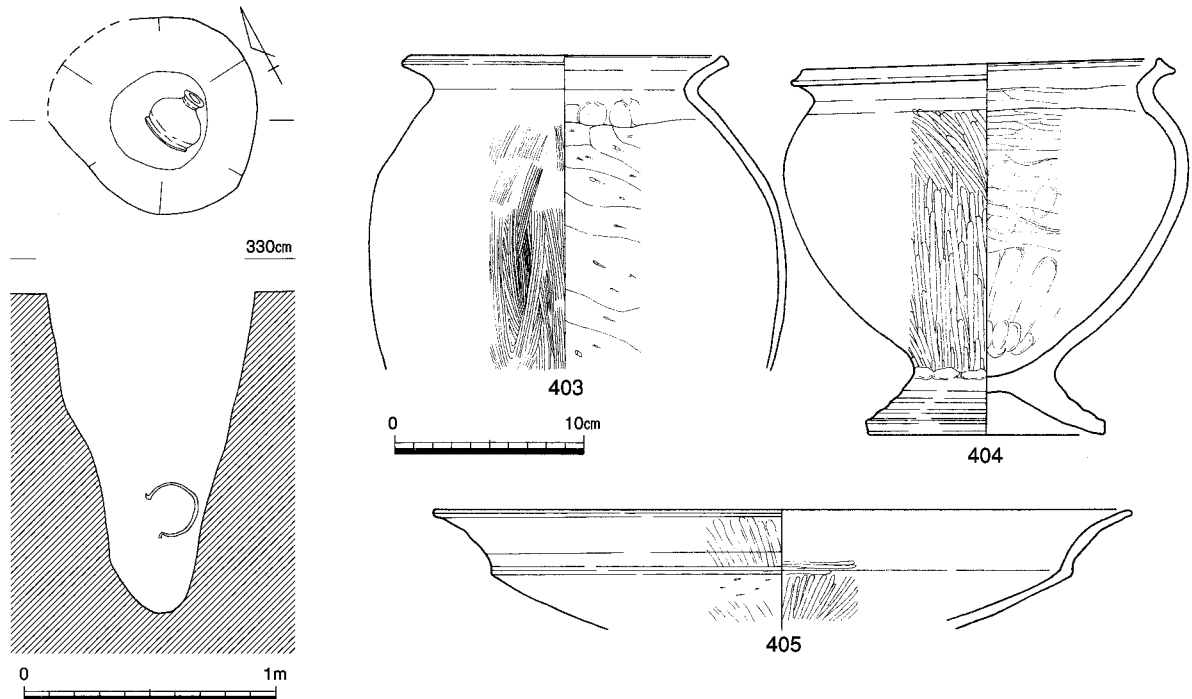
第93図 井戸5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

井戸6 (第48・94図、図版18-3. 63)

12B区、微高地の東端寄りで検出された井戸である。百・後・Ⅱの竪穴住居8の柱穴を切っていることが確認された。掘り方平面形は円形で、径83cm、深さ127cmを測る。底面はかなり狭くなっており、海拔188cmまで達している。

底面から30cm上部で、完形の台付鉢404が口縁部を斜め下に向けて出土している。ほかには図示した甕403、高杯405や小片が出土している。

出土遺物や住居との切り合い関係から、遺構の時期は百・後・Ⅱにおさまると考えられる。(柴田)



第94図 井戸6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

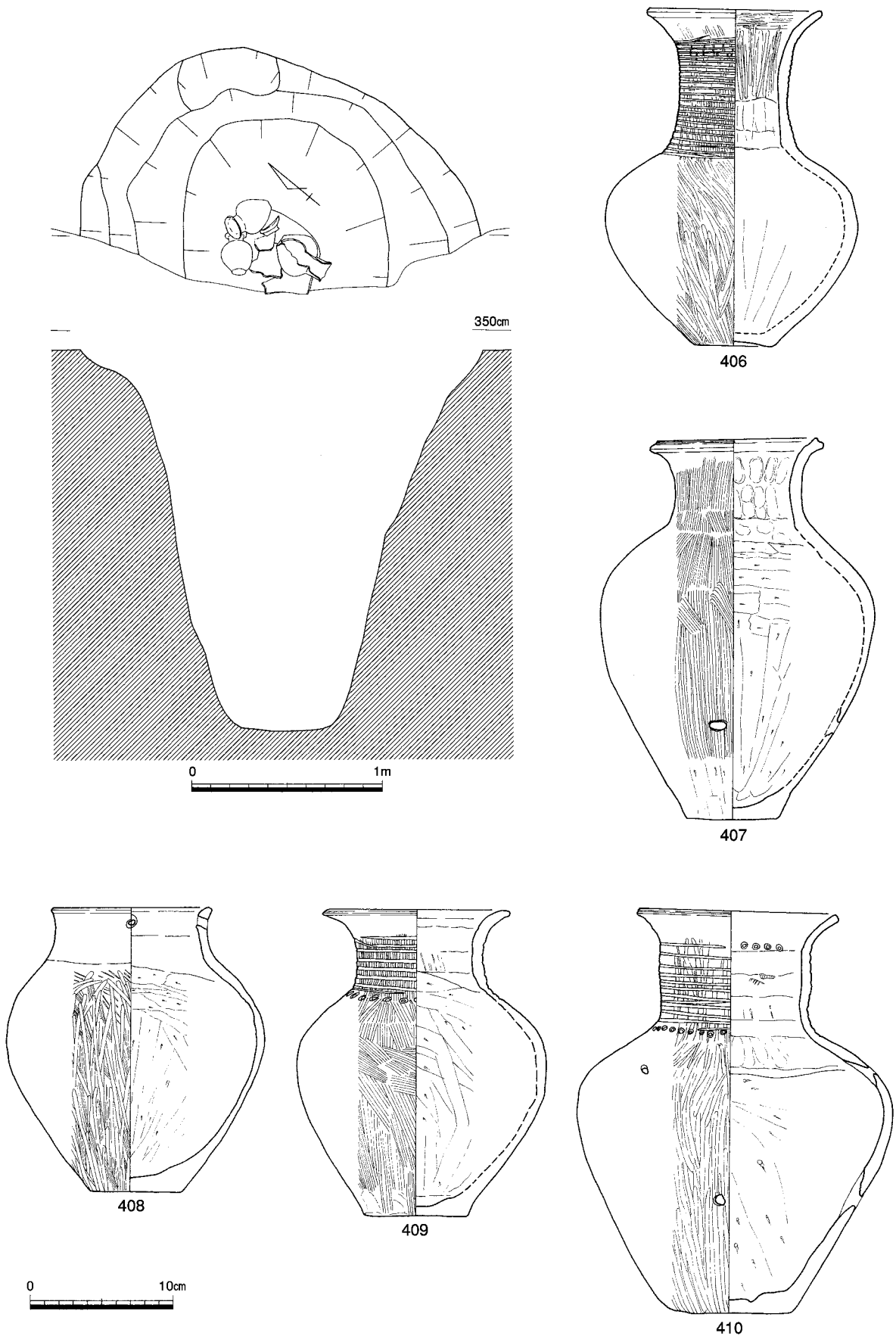
井戸7 (第48・95~97図、図版19. 61. 62)

12C区の調査区境で検出した井戸である。その南半は『百間川原尾島遺跡4』の「井戸6」として報告している。平面形は、円形から楕円形を呈するものと推定され、長軸で210cmを測る。壁は急傾斜で数段に落ち込むが、上部の一部に大きく広がる箇所がある。底は平坦で、検出面からの深さ210cm、海拔高141cmを測る。埋土は、井戸中位の海拔230cm前後に薄い炭層があり、上層が褐色土、下層が黄灰色粘質土である。平面図に図示した土器の出土状況は、炭層より下位のものである。

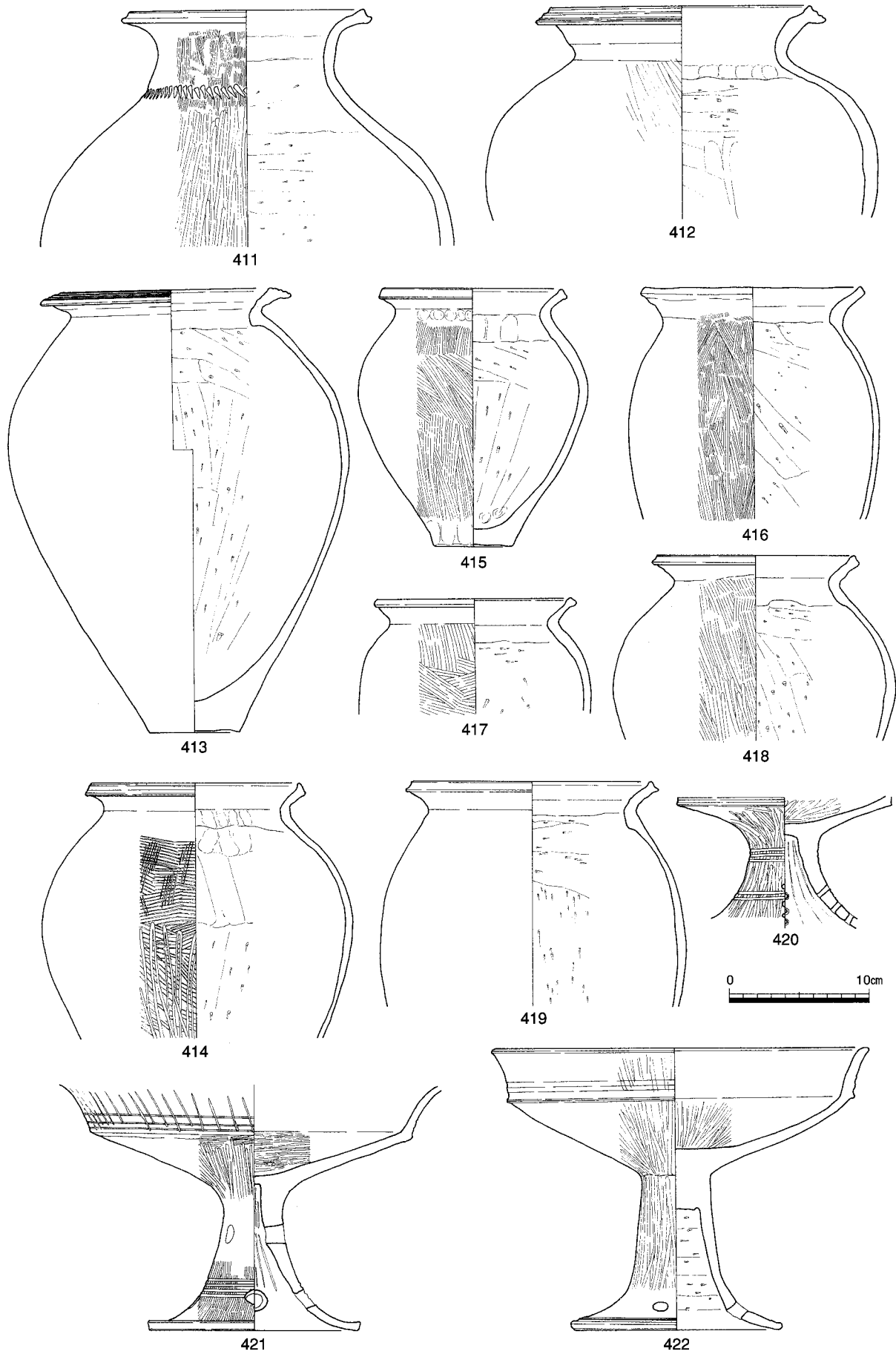
遺物はすべて弥生土器である。器種は壺、甕、高杯、鉢、器台、製塩土器である。406~411は壺で、長頸と短頸があり、口縁端部を丸く収めるものとやや肥厚させるものがある。408は短頸壺でわずかに外反させる口縁短部の直下に円孔を穿つ。407は胴部やや下部に1箇所、410は肩部と胴部に計2箇所の焼成後穿孔を施す。412~419は甕で、口縁端部を顕著に肥厚させ凹線を施すものと、ヨコナデによる凹部をもつものがある。420~422は高杯で、杯部と脚部の境に円盤充填するものと、杯部と脚部を接合させるものがある。423~426・430・431は鉢、427・432・433は器台、428・429は製塩土器の脚部である。中でも器台は既報告と合わせて、計4点の出土がみられる。

井戸の廃絶した時期は、土器の特徴から百・後・Ⅱと考えられる。

(高田)

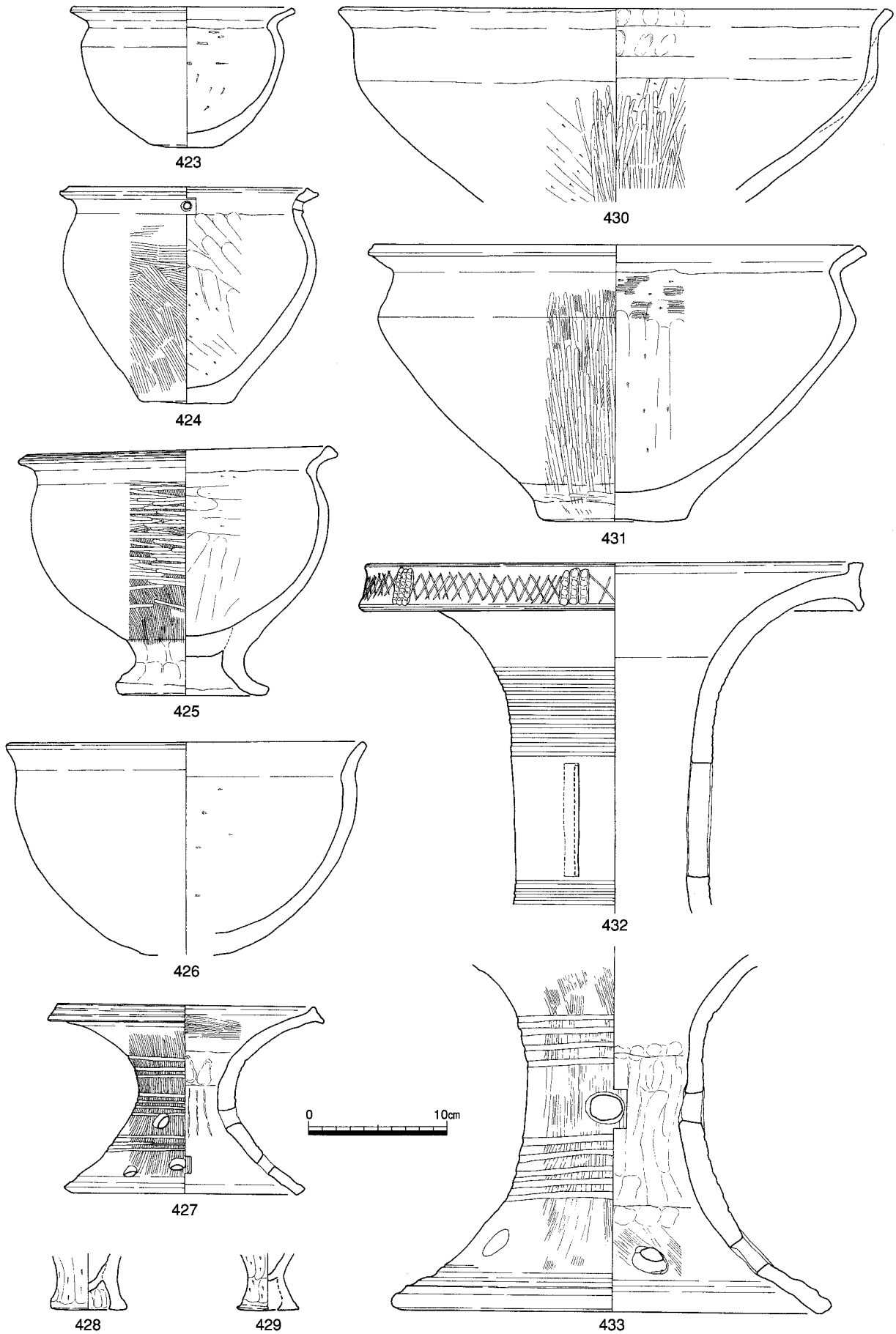


第95図 井戸7 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第96図 井戸7出土遺物② (1/4)





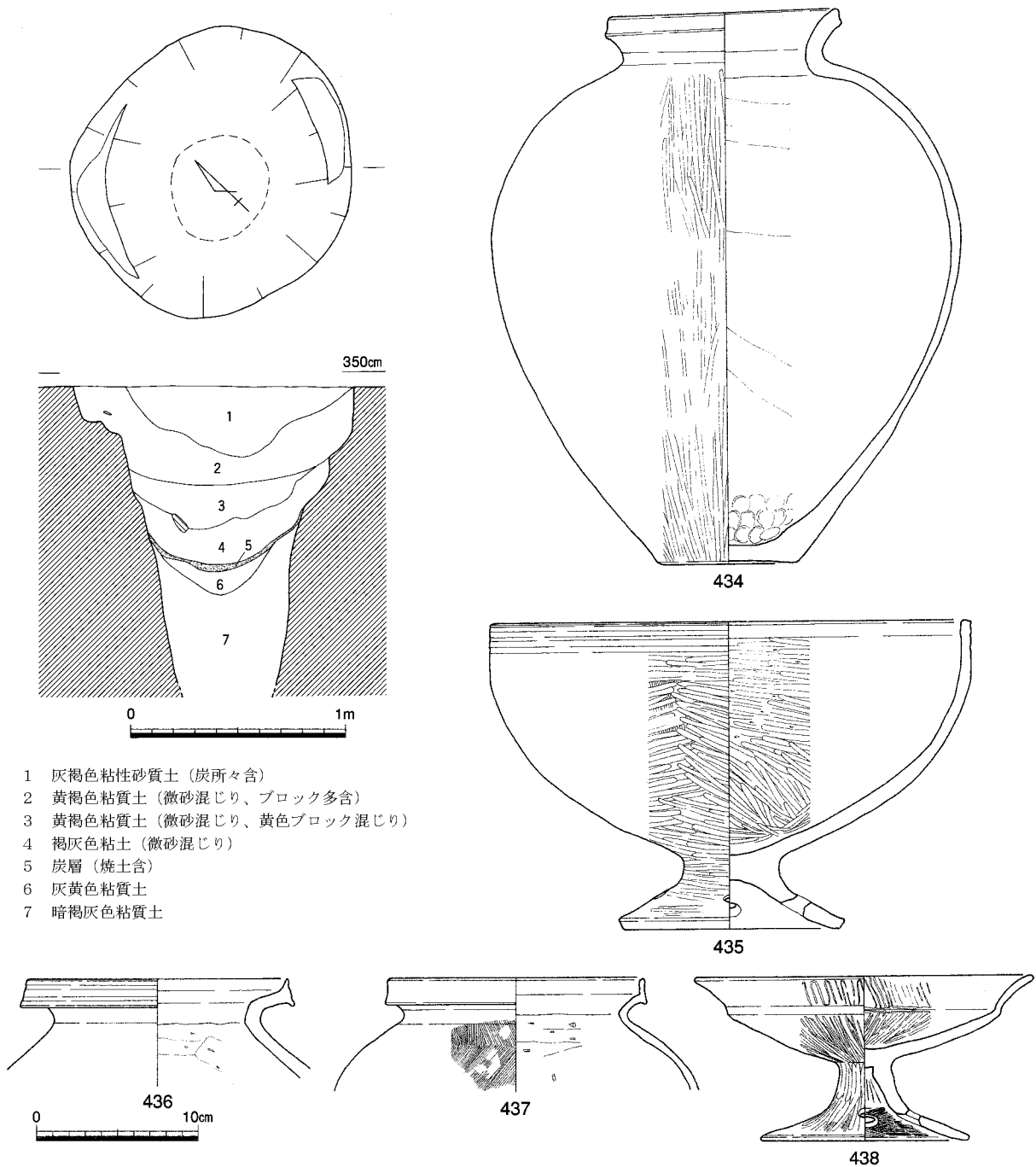
第97図 井戸7出土遺物③ (1/4)

井戸8 (第48・98図、図版63)

12B区西側、竪穴住居9の東部分で検出したやや小形の井戸で、住居の埋没後に掘削されている。上面径は136cmを測る。深さは検出面から142cmで掘り下げを断念せざるをえなかったため不明であるが、以下はそれほどの深さはないと考える。

埋土下層(7層)は粘質土で、中層には厚さ3cmの炭層(5層)が広がる。上層(2・3層)、特に2層には基盤層である黄色土のブロックが多数含まれており、井戸の機能が失われ埋没が進んだ段階で埋め戻されたとみられる。

出土遺物のうち壺434・台付鉢435・高杯438はおもに中層からの出土で、完形～ほぼ完形に復元で



第98図 井戸8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

きた。これらの遺物から、この井戸の年代は百・後・Ⅲと判断できる。(宇垣)

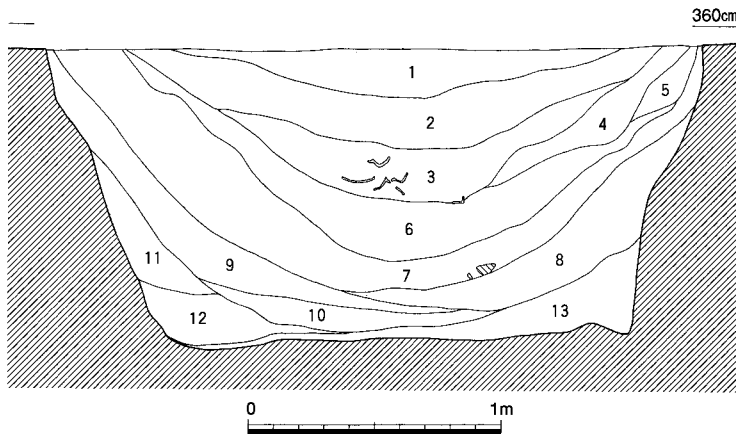
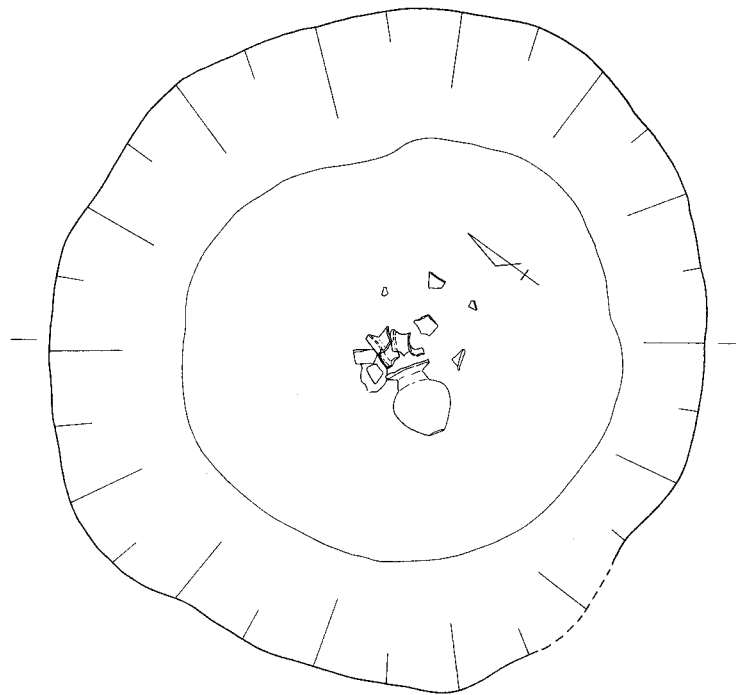
井戸9 (第48・99図、図版20-1. 63)

12C区のほぼ中央、竪穴住居6の東側に所在しており、竪穴住居6をとりまく周溝群を切る。

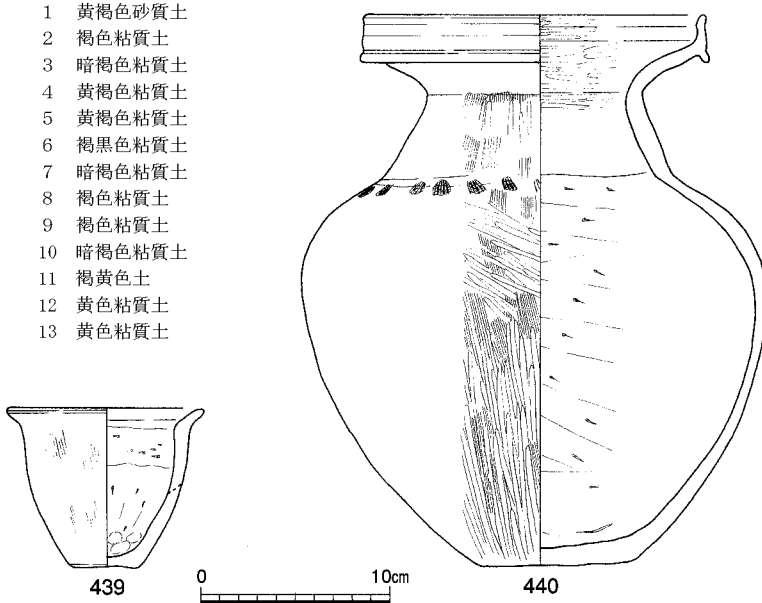
上面の径2.70mと通常の井戸よりも格段に大きい一方、深さは検出面から119cmしかなく、平坦で径1.7mと広い底面をもつ。通常の井戸とは異なる性格の遺構の可能性が強いが、ここでは一応井戸に含めた。

埋土のうち1層は弥生時代後期末の洪水堆積砂層の可能性はある。また、2・3・7層は地山の黄色土のブロックを多量に含んでおり、遺構の廃絶の過程で意図的に埋め戻された可能性が強い。これらのうち3層下面には焼土層が広がり、その上方に小規模な土器溜まりが形成されていた。壺440が完形であるのに対し、他は小破片で、小形の鉢439が実測可能であったにすぎない。

壺440の形状から、この井戸は百・後・Ⅳに位置付けられ、洪水砂形成前に廃棄されたとみられる。(宇垣)



- 1 黄褐色砂質土
- 2 褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 黄褐色粘質土
- 5 黄褐色粘質土
- 6 褐黒色粘質土
- 7 暗褐色粘質土
- 8 褐色粘質土
- 9 褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 褐黄色土
- 12 黄色粘質土
- 13 黄色粘質土



第99図 井戸9 (1/30)・出土遺物 (1/4)

井戸10 (第46・100図)

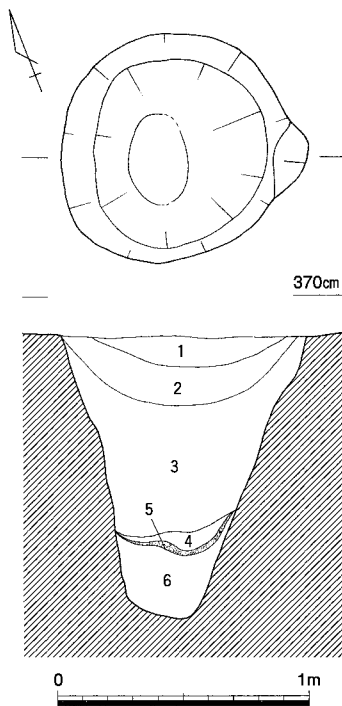
16B区で検出した井戸である。中期と考えられる溝15を切っている。平面形はほぼ円形を呈し、東西径で97cm、深さ113cmを測る。底面の標高は242cmで、同じ微高地上の他例と比較して最も高い。埋土では下位層の5層が顕著な炭層である。

出土遺物は少量の土器片のみであるが、検出状況から後期と考えたい。(高田)

井戸11 (第46・101・102図、図版20-2.64)

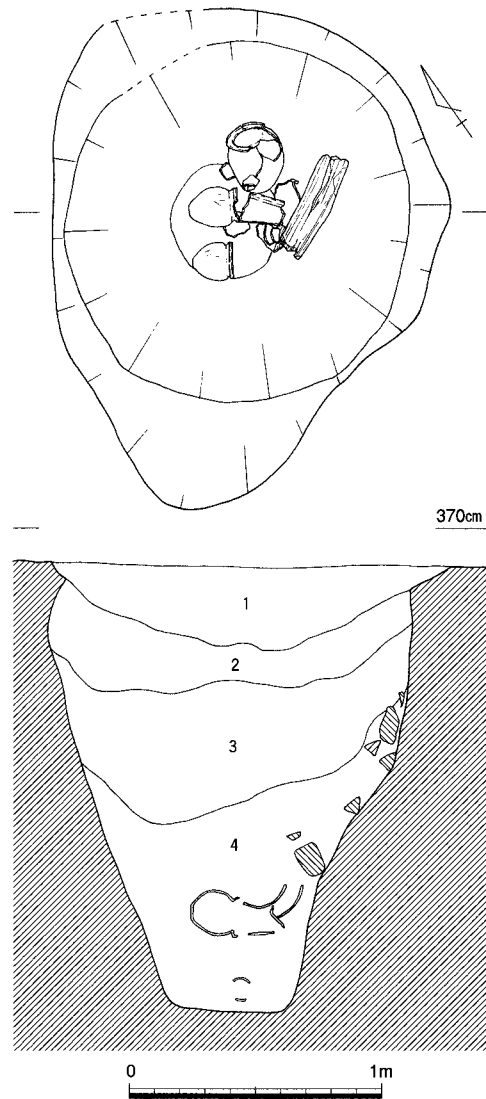
19C区で検出した素掘りの井戸で、平面形は長軸190cm、短軸150cmの不整形な円形を呈する。検出面から深さ約10cmまではなだらかであるが、そこから底面までは急角度に落ち込む。井戸中の堆積土は、1～3層までは砂層で遺物をほとんど含んでいない。それに反して最下層である4層は粘質土で、上半に約15cm大の礫を数個含み、下半から底面までの間で遺物の大半が集中して出土している。出土遺物には土器の他に、長さ46.2cm、幅4.5cmの木があったが、加工痕などはみられなかったため、図化していない。

出土土器には広口壺441、二重口縁甕442・443、くの字状口縁甕444・446・447、高杯445、鉢448がみられる。やや古い様相を呈する土器が散見できるものの、壺441や甕442の諸特徴から百・後・IVの時期に比定することができる。(松尾)



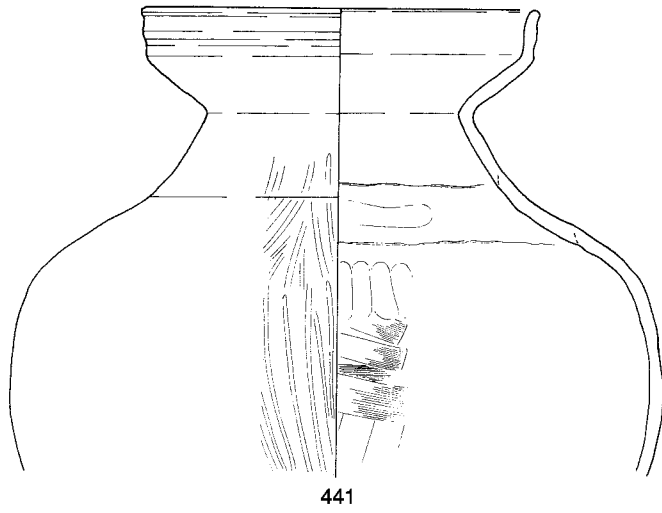
- 1 にぶい黄褐色砂質土
- 2 灰黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 3 暗灰褐色粘土 (炭・焼土粒含)
- 4 灰色粘土 (炭含)
- 5 炭層
- 6 黒灰色粘土 (にぶい褐色粘土塊含)

第100図 井戸10 (1/30)

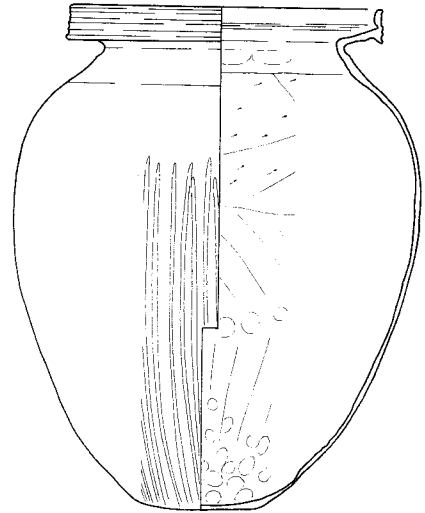


- 1 淡黄灰色細砂
- 2 淡灰色粘質微砂
- 3 淡茶灰色粘質微砂
- 4 灰色粘質土 (土器・木片含)

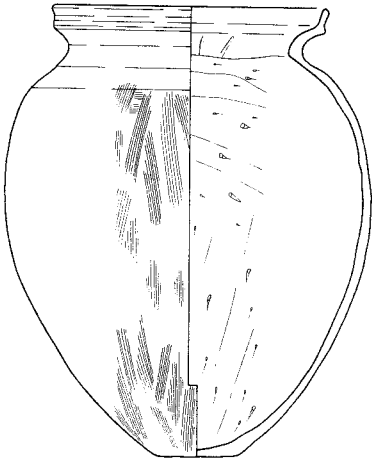
第101図 井戸11 (1/30)



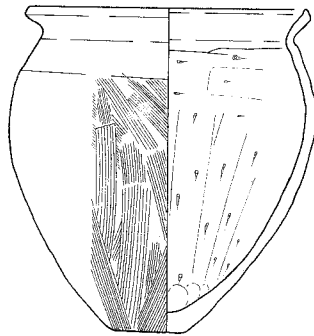
441



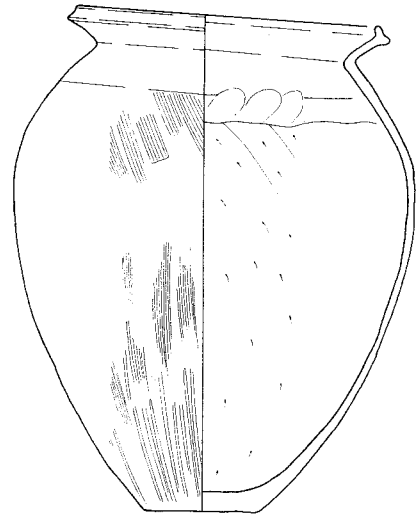
442



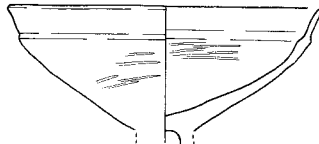
443



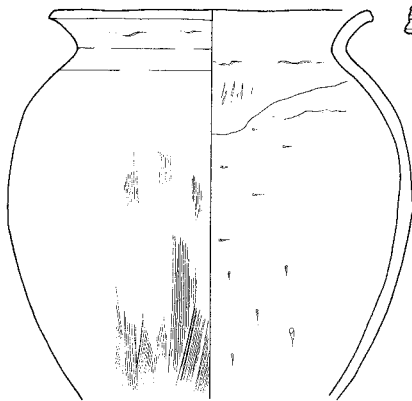
444



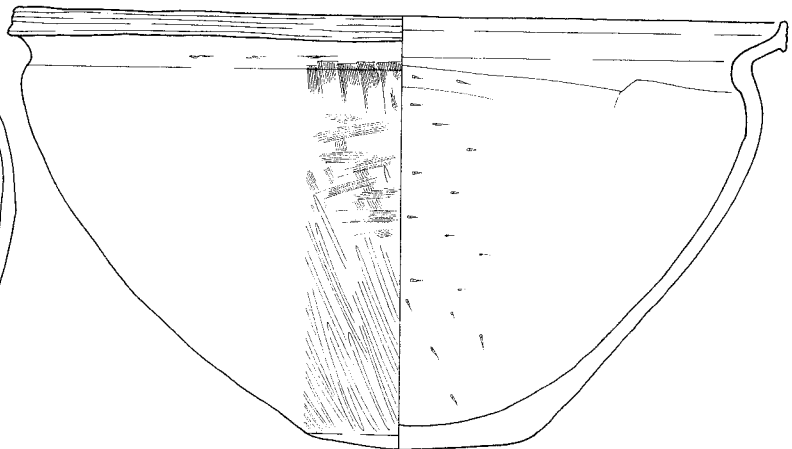
446



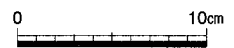
445



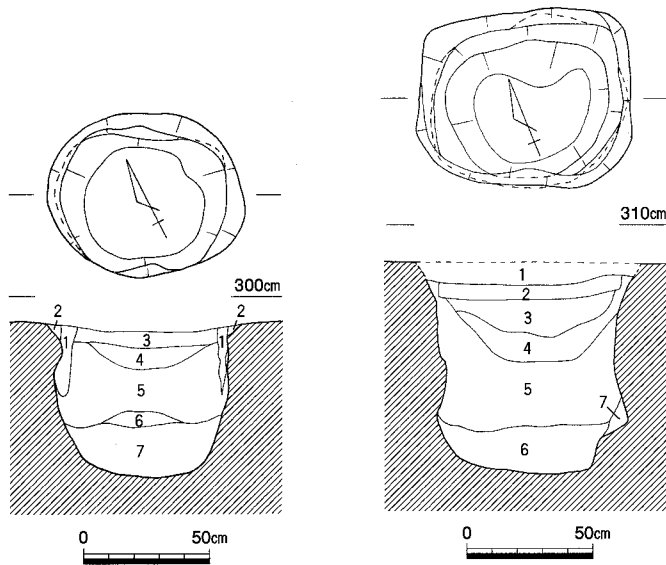
447



448



第102図 井戸11出土遺物 (1/4)



- 1 淡黄色微砂
- 2 灰色粘土
- 3 淡灰色粘土 (上部Mn多含)
- 4 灰色粘土 (Mn少含)
- 5 暗灰色粘土 (炭少含・Mn含)
- 6 白灰色粘土 (Mn多含)
- 7 褐灰色粘質土

- 1 白灰黄色微砂 (洪水砂)
- 2 暗灰色粘質微砂
- 3 暗灰褐色粘質微砂
- 4 灰黄色粘質微砂
- 5 暗灰色粘質土
- 6 暗灰黄色粘質土
- 7 灰色粘質土

第103図 井戸12 (1/30)

第104図 井戸13 (1/30)

した。その為弥生後期水田の畦畔が一部途切れている。平面形は隅丸方形を呈し、長辺83cm・短辺67cmを測る。断面形は、検出面から深さ約83cmの底面までほぼ直角に落ち込むが、底面付近はやや袋状を呈す。井戸中の堆積土は、5～7層の粘質土層が堆積した後に、1～4層の微砂層がレンズ状に堆積している。

遺物の出土は皆無であるが井戸12と同様、百・後・Ⅲには完全に埋没していたと考えられる。(松尾)

井戸12 (第47・103図)

23C区にある井戸である。平面形はほぼ円形を呈し、直径約75cmを測る。断面は検出面から約60cmの深さまでほぼ直角に落ち込んでいる。井戸中の堆積土は2～7層が粘土で、1層のみが微砂である。この微砂は、井戸の周縁に沿ってみられることから、当初この井戸には木製の井戸側などによる補強がなされていた可能性も考えられる。

遺物の出土は皆無であるが、弥生後期水田が本格的に営まれる百・後・Ⅲには完全に埋没し、その機能は失われていたと推察される。(松尾)

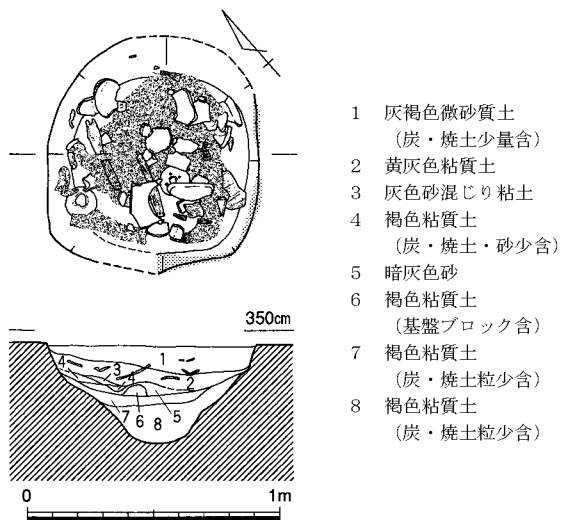
井戸13 (第47・104図、図版20-3)

弥生後期水田層が陥没し、そこへ1層の洪水砂が流入した状態で検出

5 土壙

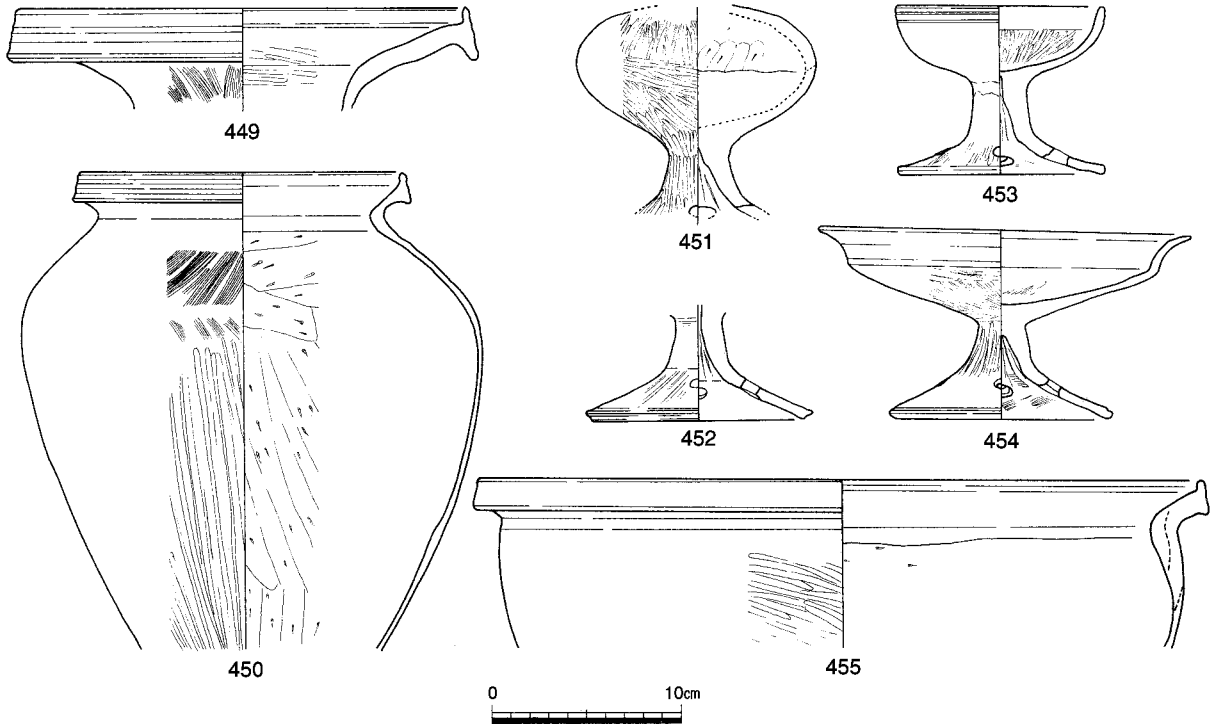
土壙7 (第48・105・106図、図版21-1・2、65-1)

調査区北東隅で検出した推定長さ94cm、幅84cm、深さ38cmの土壙である。長軸を北東-南西方向にとり、南側の壁面上部が焼けている。遺物のうち脚付壺451、高杯454、甕450などは明黄褐色・褐灰色など発色の異なる破片が接合しており、甕450では内面に黒斑状の炭素吸着を示す破片も接合する。また、5～8cm前後の小片には鱗状の薄い剥離を示す破片も認められる。これらは『百間川原尾鳥遺跡3』土壙1出土遺物とほぼ同様の特徴をもっており、弥生土器焼成土壙と判断できる。遺構の南半のみよく焼けている点も共通す



- 1 灰褐色微砂質土 (炭・焼土少量含)
- 2 黄灰色粘質土
- 3 灰色砂混じり粘土
- 4 褐色粘質土 (炭・焼土・砂少含)
- 5 暗灰色砂
- 6 褐色粘質土 (基盤ブロック含)
- 7 褐色粘質土 (炭・焼土粒少含)
- 8 褐色粘質土 (炭・焼土粒少含)

第105図 土壙7 (1/30)

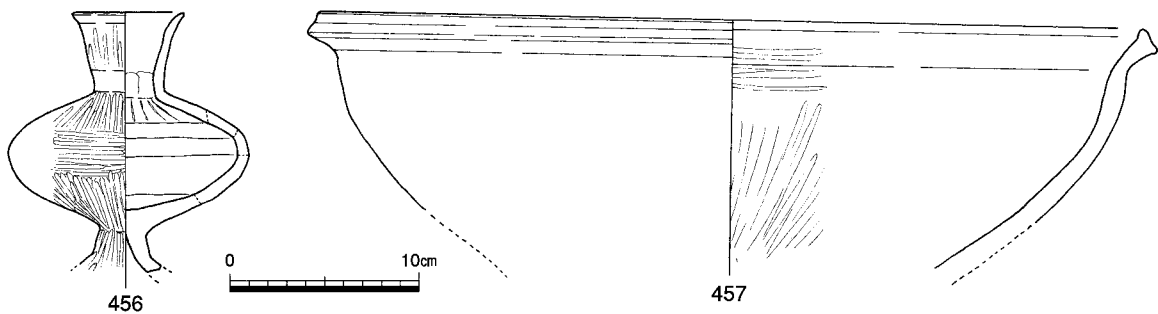
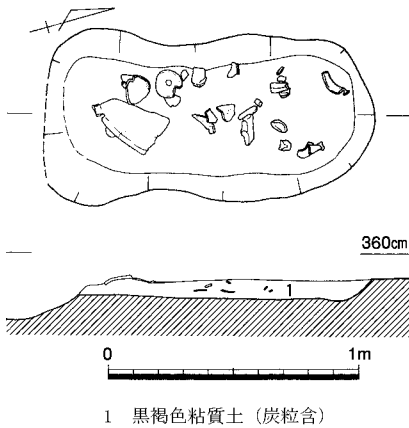


第106図 土壙7出土遺物 (1/4)

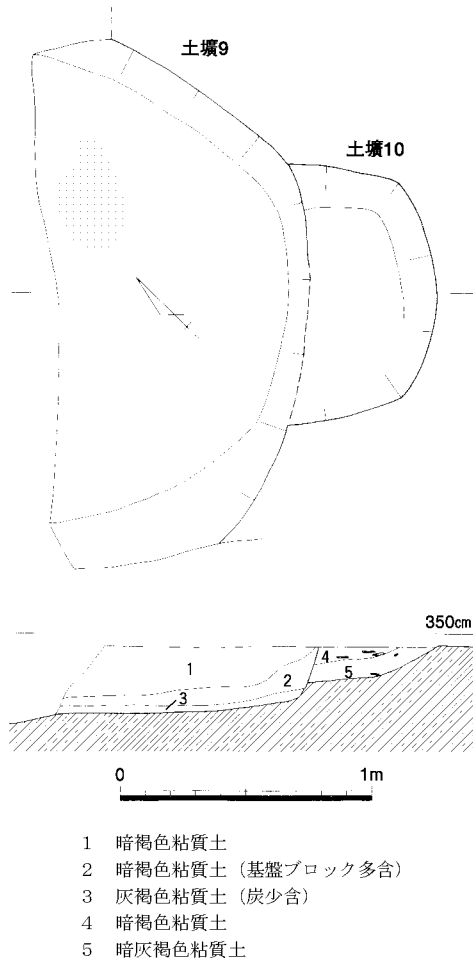
る。遺構下部は平底ではないが、中層に炭層・4層が広がり、その上方に土器破片の集中が見られることからすれば、やや深く掘った後に埋め戻して底面を整え焼成土壙として使用した可能性が考えられる。鉢や長頸壺の破片も出土しており、小形品に限ったとは考えられないが、図示したものを含めて高杯など小形品の比率が高く、その焼成を主体するものであったと考えて良い。遺構の時期は百・後・Ⅲ。(宇垣

土壙8 (第48・107図、図版68-2)

土壙8は11B区土壙7の南東約1mに位置する。平面形は130×70cmの不整長方形を呈し、検出面からの深さは9cmと浅い。埋土中に炭粒や焼土塊・土器片が混入していた。**456**はにぶい赤橙色を呈する台付直口壺、**457**は口径43cmの鉢で胎土は砂粒を多く含む。この他に甕・高・杯・小形の鉢の破片が少量出土した。これらの土器の特徴から土壙8の時期は百・後・Ⅲと考えられる。(物部)

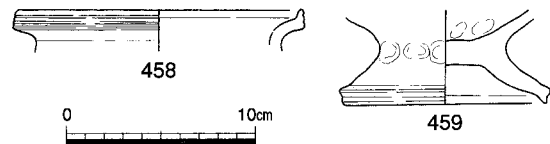


第107図 土壙8 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第108図 土壌9・10 (1/30)

- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土 (基盤ブロック多含)
- 3 灰褐色粘質土 (炭少含)
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗灰褐色粘質土



第109図 土壌9出土遺物 (1/4)

**土壌9 (第48・108・109図)**

土壌9は11B区、調査区の西端に位置する。西半分が削平されているが、平面形は直径2m前後の円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは27cmを測る。底面はほぼ平坦である。底面中央やや北東寄りに橙色に変色した被熱面が確認され、その北～東側に炭が散っていた。埋土中には土器片が多く混入していたが、小片が多い。458は甕の口縁部、459は台付鉢の台部である。土壌9の時期は百・後・Ⅲと推定される。 (物部)

**土壌10 (第48・108図)**

土壌10は11B区に位置し、土壌9によって北西側半分を削平されている。平面形は一辺1m前後の方形もしくは長方形を呈すると推測される。検出面からの深さは約13cmと浅い。土壌10の時期は、わずかに出土した土器小片と土壌9との切り合いから、後期後半の範疇と考えられる。 (物部)

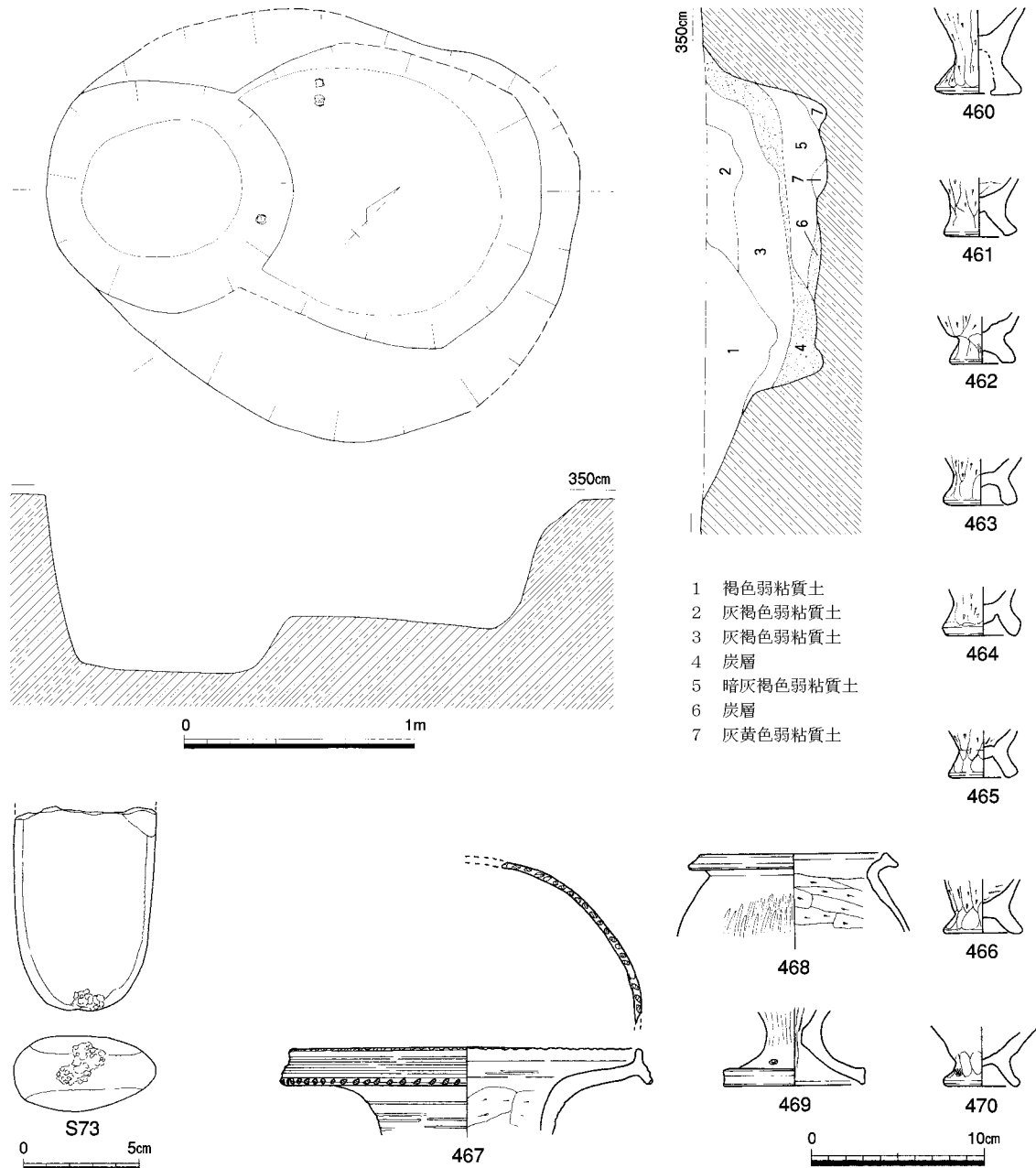
**土壌11 (第48・110図、図版22-1・2. 68-2)**

土壌11は11B区、竪穴住居7の北東約1mに位置する。検出面では230×190cmの楕円形を呈していたが、掘り下げていくと、直径約1m、検出面からの深さ約80cmを測る円形の土壌と、170×130cm、検出面からの深さ約60cmの楕円形の土壌がひょうたん形に連なったような形態であることが判明した。円形部分と楕円形部分が切り合い関係ではなく、一体のものであることは、埋土下層に確認される炭層(第4層)が土壌全体にわたって認められたことから明らかである。この炭層は製塩土器片を多量に含み、厚さは厚いところで15cmを測る。土壌の北側肩部付近から確認され、南に向けて下がり、楕円形部分の南端から円形部分にかけては土壌底面に接している。出土した製塩土器はすべて脚部の破片であり、底径2分の1以上の破片を数えると46片ある。底径は3.9~4.5cmである。製塩土器以外の土器は少なく、壺・甕・高杯の小片が20点ほど出土しているのみである。467は口縁下端部にきざみ目を巡らす長頸壺、S73は炭層から出土した(細粒)花崗閃緑岩製の叩き石の破片である。

以上のことから、土壌11の性格は不明であるが、何らかの目的で掘削された後、その機能を失い、埋没過程の早い段階に、製塩土器破片とともに炭が、おそらく土壌の北側から流入もしくは廃棄されたものと考えられる。このような炭と製塩土器片の関係は、あるいは付近で行われた製塩作業を示唆するのかもしれない。

土壌11の廃絶時期は百・後・Ⅱと考えられる。 (物部)





第110図 土壌11 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

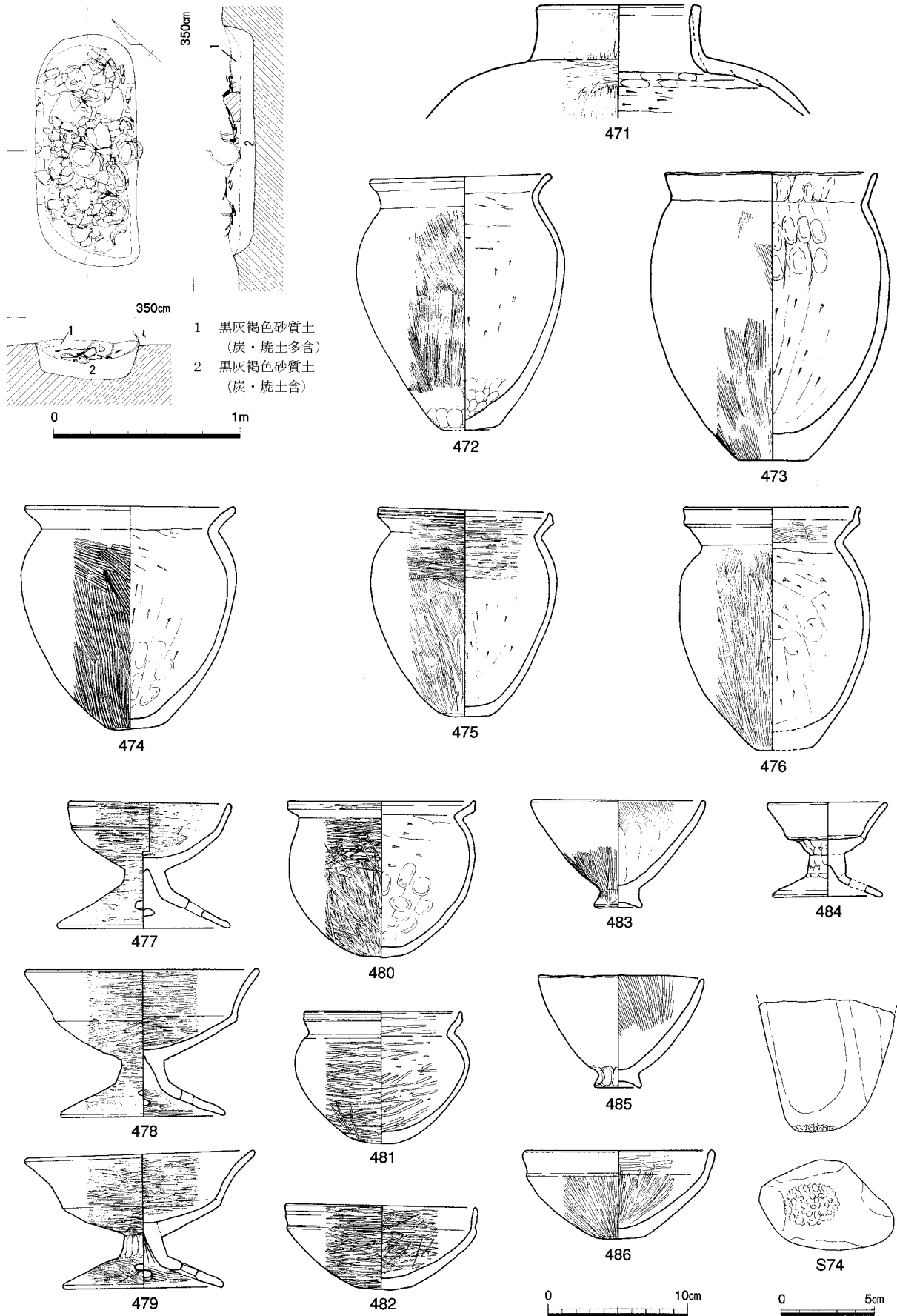
土壌12 (第48・111図、図版21-3. 65-2)

調査区の北西隅、11C区で検出された土壌である。掘り方平面形は長方形で、長さ125cm、幅55cm、深さ21cmを測る。底面は平坦で、断面は逆台形を呈する。埋土には炭や焼土が含まれ、特に1層からは完形に近い甕や鉢、高杯、叩き石 S74などが出土した。甕は土壌中央に集中している。

471は短頸の直口壺で、肩が張っている。甕は口縁部が「く」字に屈曲し、端部を丸くおさめる472～474と、上方に拡張する475・476があり、後者の外面にはヘラミガキ、内面にはハケメが施されている。高杯には、杯部が碗形の477と口縁部が外反する478・479、小形の484がある。鉢には、口縁部が「く」字に屈曲し端部が上方に拡張する480・481と、口縁部が上方に伸びる482・486、台付の483・485がある。

出土遺物から、遺構の時期は百・後・IVと考えられる。

(柴田)



第111図 土壌12 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土壌13 (第48・112図)

調査区の北西隅、11C区で検出された土壌である。南北両端は調査区外で、掘り方平面形は不明である。幅は82cm、深さは26cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形を呈する。1・2層は炭や焼土を含み、図示した壺487の他に甕胴部や高杯脚部の破片が出土している。

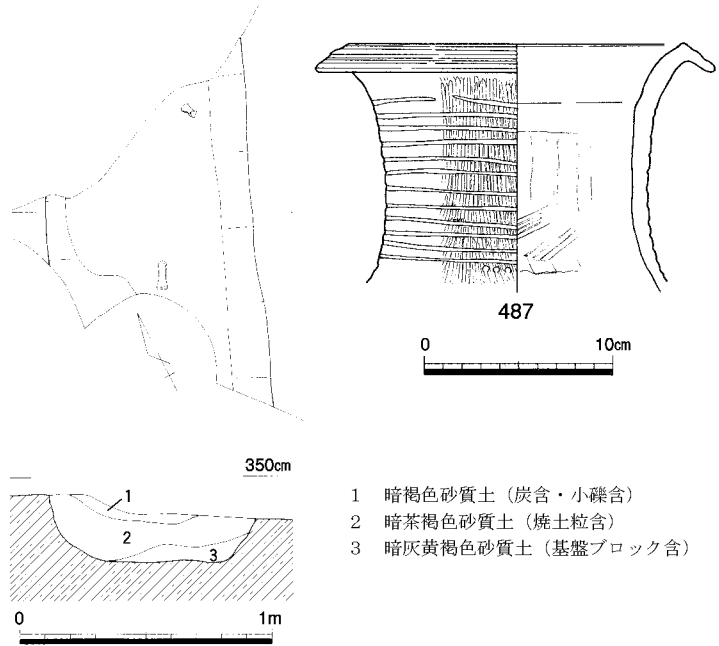
出土遺物から、遺構の時期は百・後・Ⅱと考えられる。(柴田)

土壌14 (第48・113図、図版22-3.66-1)

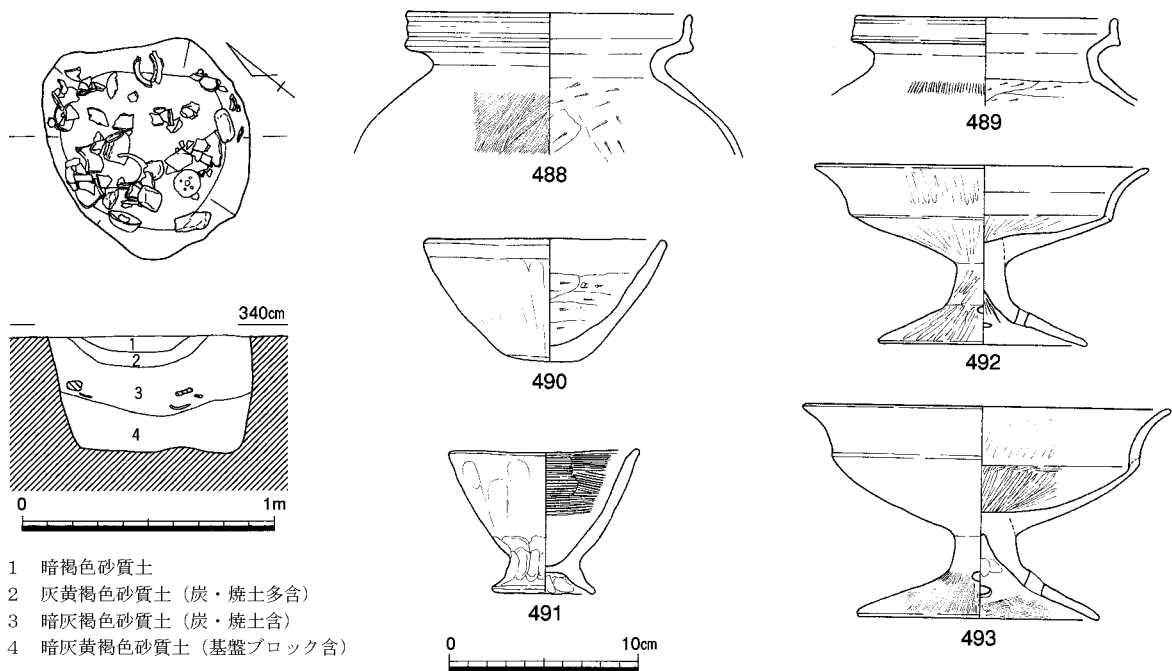
調査区の北西隅、11C区で検出された土壌である。掘り方平面形は不整形で、長さ80cm、幅88cm、深さ46cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形を呈する。2・3層は炭や焼土を含み、特に3層では土器が出土している。

甕488・489は口縁端部が上方に立ち上がり、外面には強いナデが施される。高杯は短脚で口縁部が強く外反し、493の杯部は492より深い。鉢490の内面にはヘラケズリが認められ、491は台付で内面はハケメが施される。

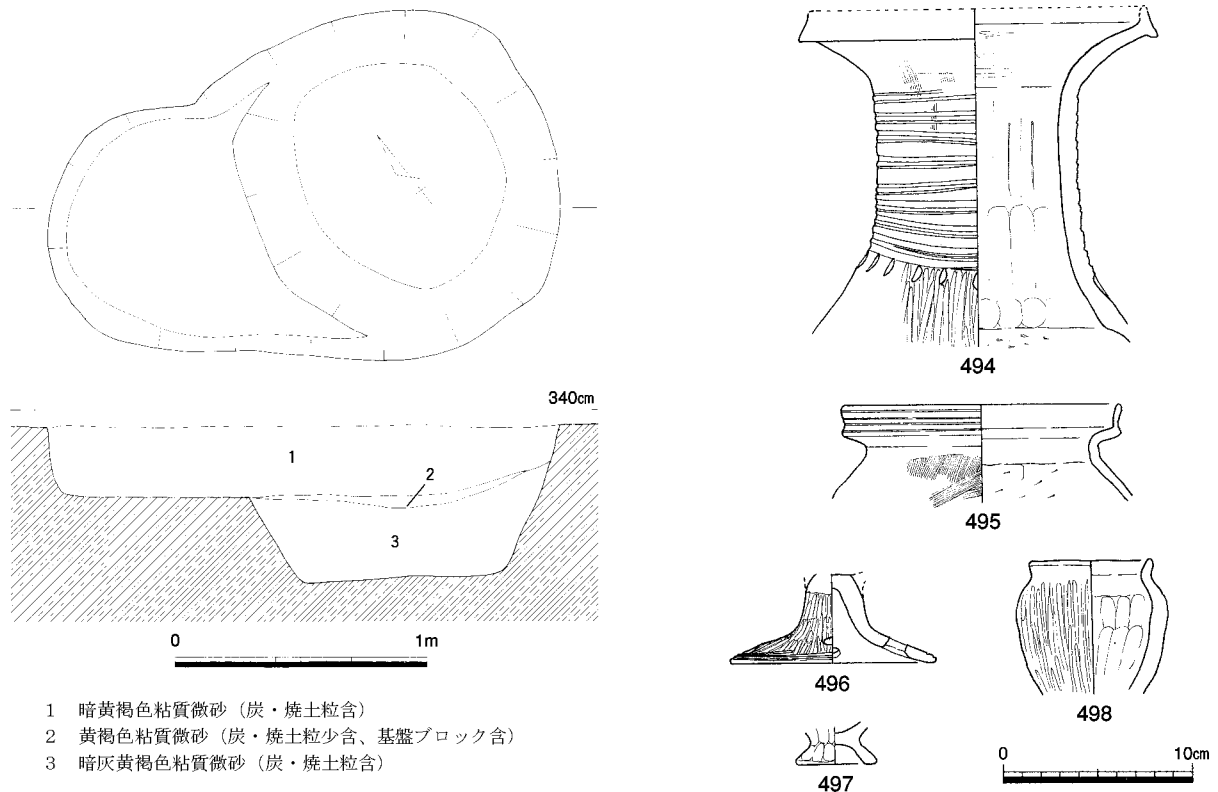
出土遺物から、遺構の時期は百・後・Ⅲと考えられる。(柴田)



第112図 土壌13 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第113図 土壌14 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 暗黄褐色粘質微砂（炭・焼土粒含）
- 2 黄褐色粘質微砂（炭・焼土粒少含、基盤ブロック含）
- 3 暗灰黄褐色粘質微砂（炭・焼土粒含）

第114図 土壙15 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙15 (第48・114図)

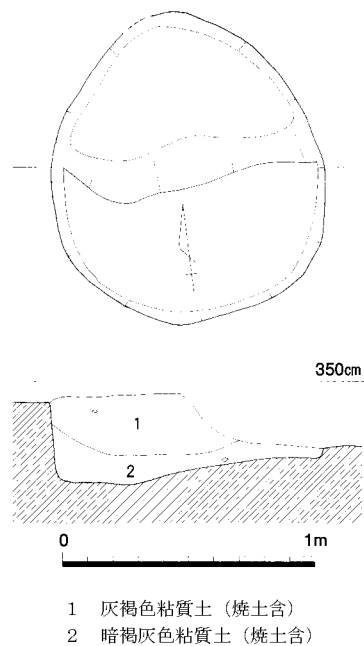
11C区に位置し、堅穴住居6の北西部の周溝に接する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸204cm、短軸139cmを測る。壁は直線的な急斜に落ち込み、いずれも平坦な二段の底面となる。検出面からの深さは、浅い方が27cm、最深部で63cmを測る。二つの土壙が切り合っている可能性も想定しながら掘り下げたが、明確にし得なかった。

出土遺物は弥生土器で、主に第1層から出土した。

時期は出土遺物から、百・後・Ⅲと考えられる。 (高田)

土壙16 (第48・115図)

土壙16は11C区に位置し、井戸2を切る。平面形は130×110cmの楕円形を呈する。土壙底面は、北半分が一段深く、10cm程の段差がつく。埋土中には焼土粒を含んでいる。遺物は甕・高杯・鉢などの土器片が少量出土したのみである。それら土器の特徴から土壙16の時期は百・後・Ⅳと考えられる。 (物部)

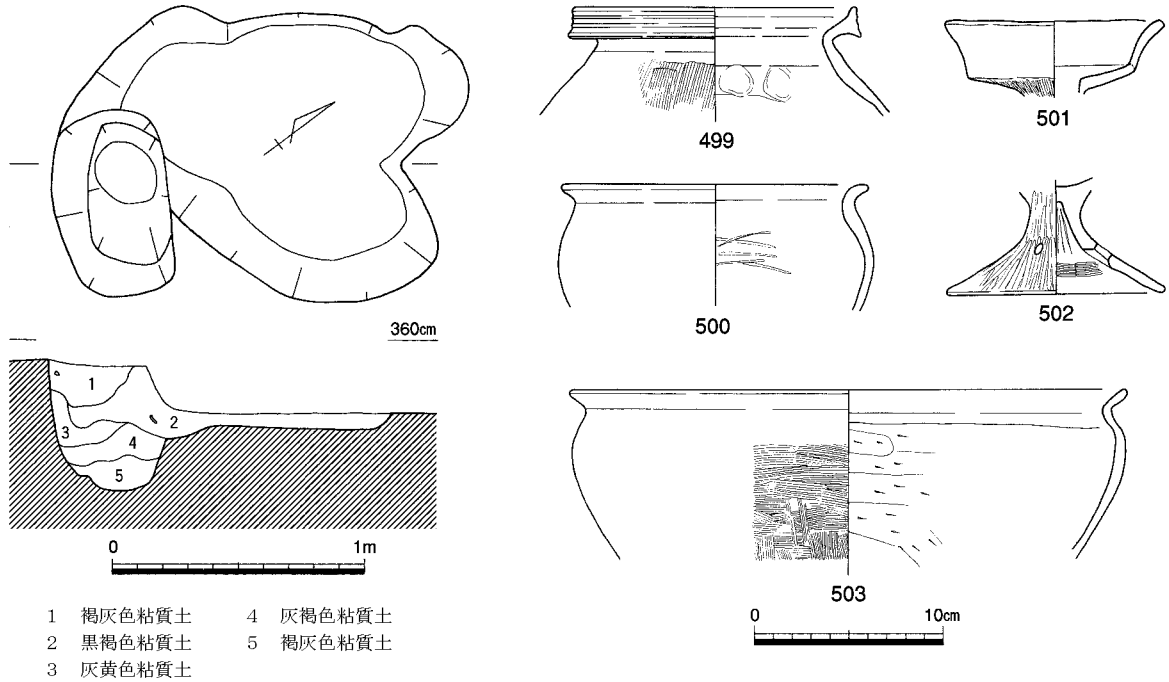


- 1 灰褐色粘質土（焼土含）
- 2 暗褐灰色粘質土（焼土含）

第115図 土壙16 (1/30)

土壙17 (第48・116・117図)

土壙17は11・12B区に位置する。堅穴住居10の西側に隣接し、堅穴住居5の肩口と埋土を切り込んでいる。平面形は凸凹した不定形であり、およそ140×120cmを測る。土壙南端に柱穴状の窪みが付く。埋土中には土器片が混入しているが、量は多くない。499～503は橙～にぶい黄橙色を呈する甕・高杯・鉢である。C27は円筒形を呈すると考えられる土錘で、色調は橙色。土壙17の時期は土器の特徴から



第116図 土壌17 (1/30)・出土遺物① (1/4)

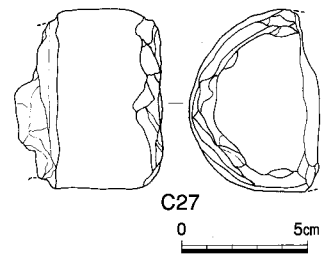
百・後・Ⅲと推定される。

(物部)

土壌18 (第48・118図)

土壌18は11B区に位置し、竪穴住居5の埋土を切っている。平面形は90×70cmほどの楕円形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。土壌底面の西半分が円形に窪んでおり、その底面を覆うように厚さ4cm前後の黄色粘土が認められた。黄色粘土上面は平坦ではなく、凸凹が著しいので、貼り床とは言い難く、あるいは、黄色粘土を保管していたものが、その大半を使用した後、放棄された状況を表すのかもしれない。遺物はほとんど無いが、高杯の小片から、時期は百・後・Ⅲと考えられる。

(物部)

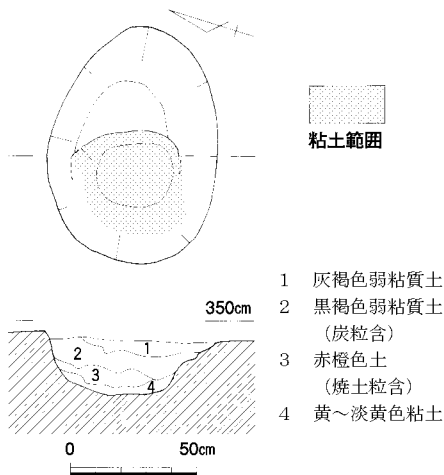


第117図 土壌17出土遺物② (1/3)

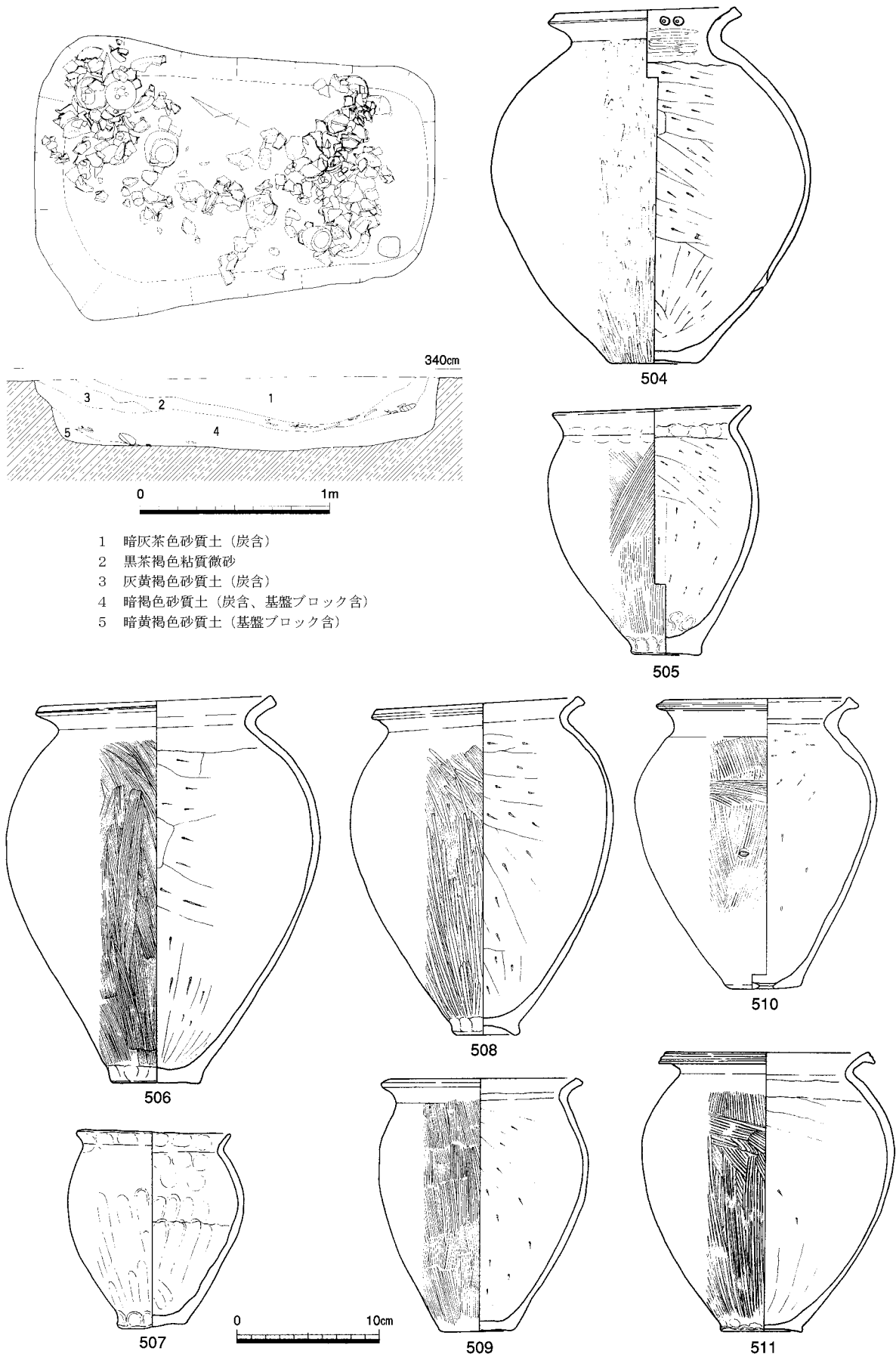
土壌19 (第48・119・120図、図版23-1. 66-2)

12B区で検出された土壌である。竪穴住居6とその排水溝との間が他の部分よりも広がっている地点に位置し、住居の北東壁に接している。掘り方平面形は長方形であるが、北側がやや広がっている。長さ211cm、最大幅150cm、深さ38cmを測る。底面は平坦で、断面は逆台形を呈する。埋土には炭が含まれ、特に2・4層からは土器や金属器などが出土した。

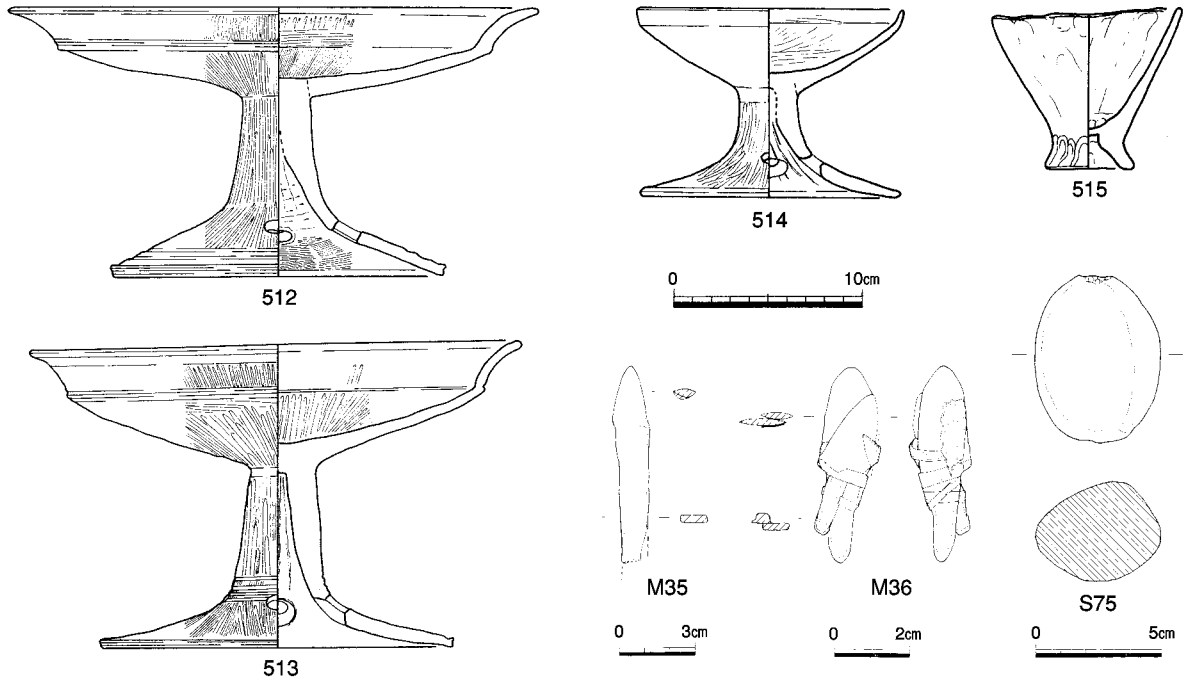
4層の遺物には甕507・509などがあり、北隅から南に向けて投棄された状況を示し、土壌中央まで及んでいる。また径1～3cmの円礫が多く混じっている。2層の遺物には壺504、甕505・506・508・511、高杯512～514、ヤリガンナM35、銅鏃と鉄鏃が各1点細い樹皮でくくられているM



第118図 土壌18 (1/30)



第119図 土壌19 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第120図 土壌19出土遺物② (1/4・1/3・1/2)

36、石錘S75などがある。これらは4層の堆積後一定の期間をおいて南側と北隅に投棄されている。

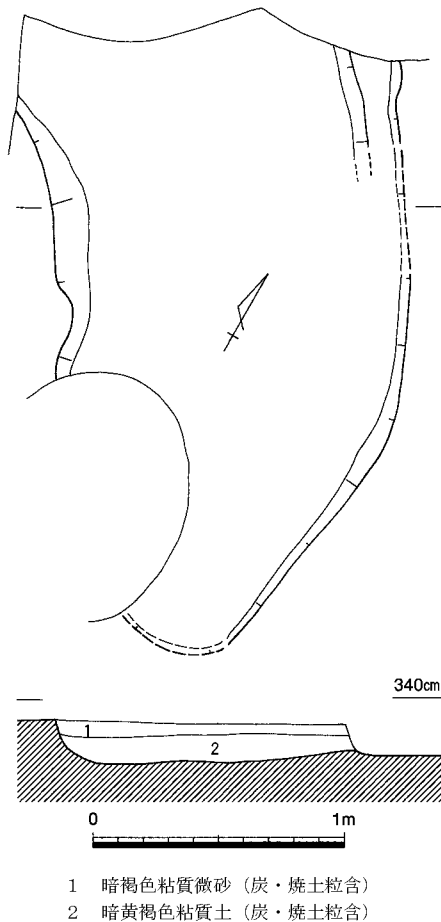
出土遺物から、遺構の時期は百・後・Ⅱの新段階と考えられる。(柴田)

土壌20 (第48・121図)

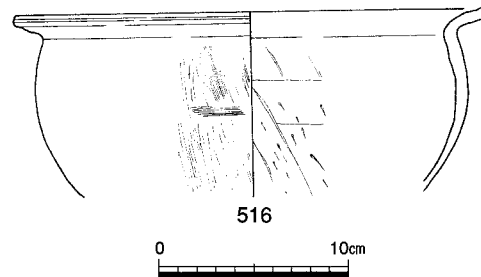
12C杭の南1mに位置する土壌である。東側を竪穴住居6に切られ、西側も竪穴住居6の周溝や井戸19に切られるため、全体の形状や規模は不明である。検出時の規模は、長軸259cm、短軸153cmで、検出面からの深さは、残りの良い箇所では15cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。

出土遺物は少量の弥生土器のみである。図示したものは、鉢である。

時期は、百・後・Ⅱと考えられる。(高田)



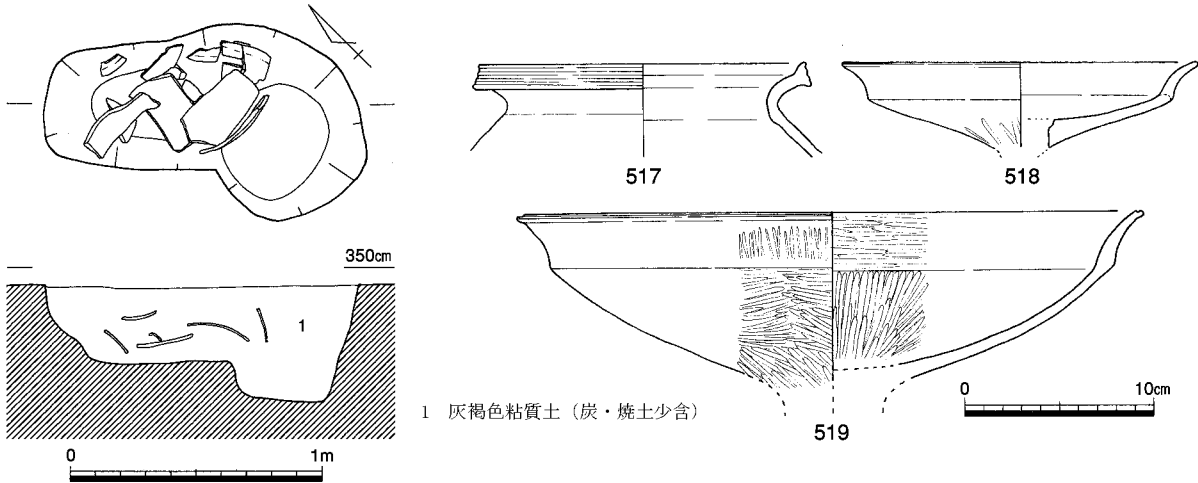
- 1 暗褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 2 暗黄褐色粘質土 (炭・焼土粒含)



第121図 土壌20 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙21 (第48・122図)

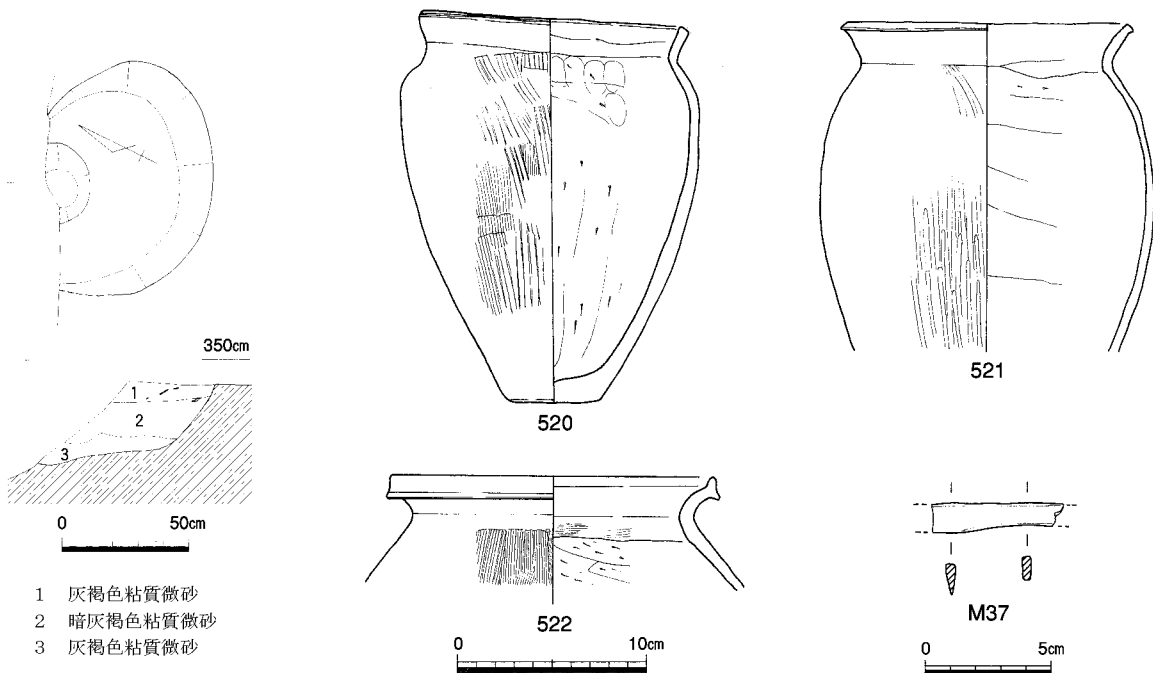
土壙21は12B区に位置する。長方形と円形の土壙が接続したような形態であり、円形部分の方が長方形部分よりも14cmほど深い。遺物は比較的大きな土器片がまとまって出土した。そのうちの9割は519高杯の杯部の破片と、図示しなかったが、大形の壺の体部片8点である。519は数片に割れていたが接合すると4/5程度復元された。また、壺体部片は大きなもので30×20cmを測る。土器棺の一種の可能性もあるが、これらの土器片は規則的に配置された状態ではなく、性格は不明である。時期は519高杯の特徴から百・後・Ⅱと考えられる。(物部)



第122図 土壙21 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙22 (第48・123図)

土壙22は12B区、土壙21の北東約4mに位置し、溝33に北西側を切られている。平面形は80~90cmのおおよそ円形を呈すと推測される。底面の北寄りに径30cm程の浅い窪みがある。520甕は5/6程



第123図 土壙22 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

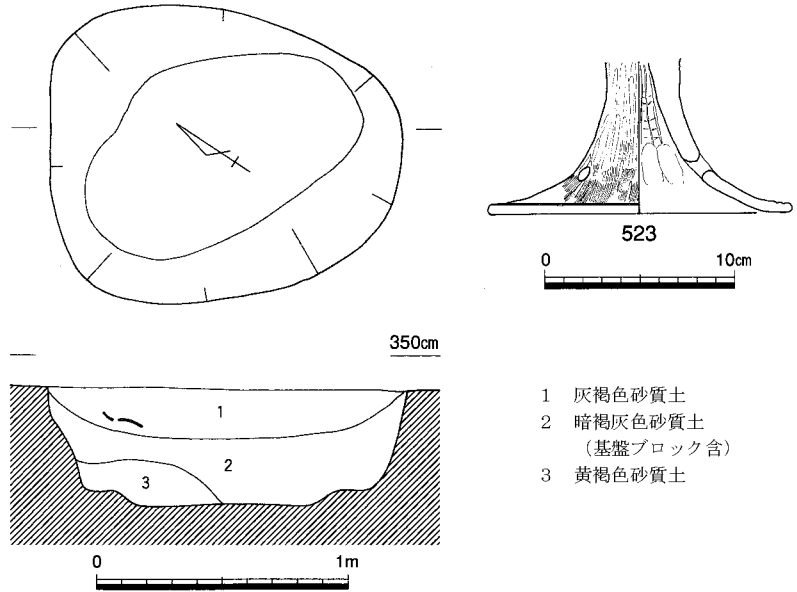


度に復元された。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は面を持つ。M37鉄製刀子は混入の可能性がある。そのほかに図示しなかったが高杯・鉢・製塩土器の小片が少量出土した。

土壙22の時期は土器の特徴から百・後・Ⅲと考えられる。(物部)

**土壙23** (第48・124図)

12B区で検出した土壙である。竪穴住居9の南西約1.5mに位置する。黄褐色



第124図 土壙23 (1/30)・出土遺物 (1/4)

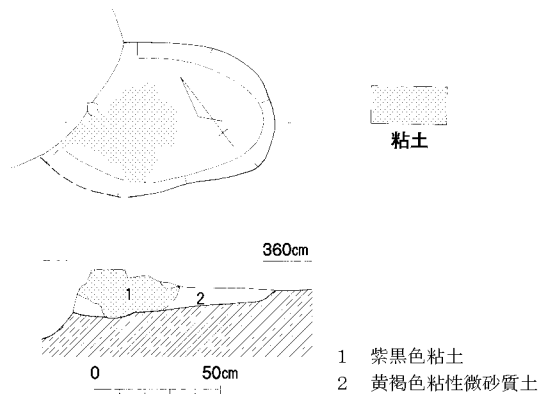
の基盤層上面まで掘り下げて検出したもので、平面形は楕円形を呈する。その規模は長軸141cm、短軸118cmを測る。検出面からの深さは46cmで、海拔高は291cmとなる。底面は壁際に狭い段を持つ箇所が見られるが、ほぼ平坦である。壁は直線的に急斜に落ち込む。

出土遺物は、少量の弥生土器である。いずれも破片で、図示したものは高杯の脚部である。

土壙の時期は、出土遺物から百・後・Ⅱと考えられる。(高田)

**土壙24** (第48・125図、図版31-2)

土壙24は12B区に位置する。土壙の北～西部は中世の遺構によって削平を受けている。平面形は長軸推定1m、短軸60cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは約20cmである。土壙内部から長軸50×短軸40×厚さ20cm程の粘土の塊が検出された。部分的に中世の柱穴と土壙により削られているが、形状は角の丸い算盤玉状を呈する。表面は凸凹が著しい。色調は紫黑色を呈し、胎土は1mm大以下の砂粒を僅かに含むが精良である。この粘土については胎土分析を行った(付載3)。出土遺物は土器が少量あるが、すべて細片である。そのうち高杯脚裾端部の丸い形状から、土壙24の時期は百・後・Ⅲ以降と推測される。(物部)

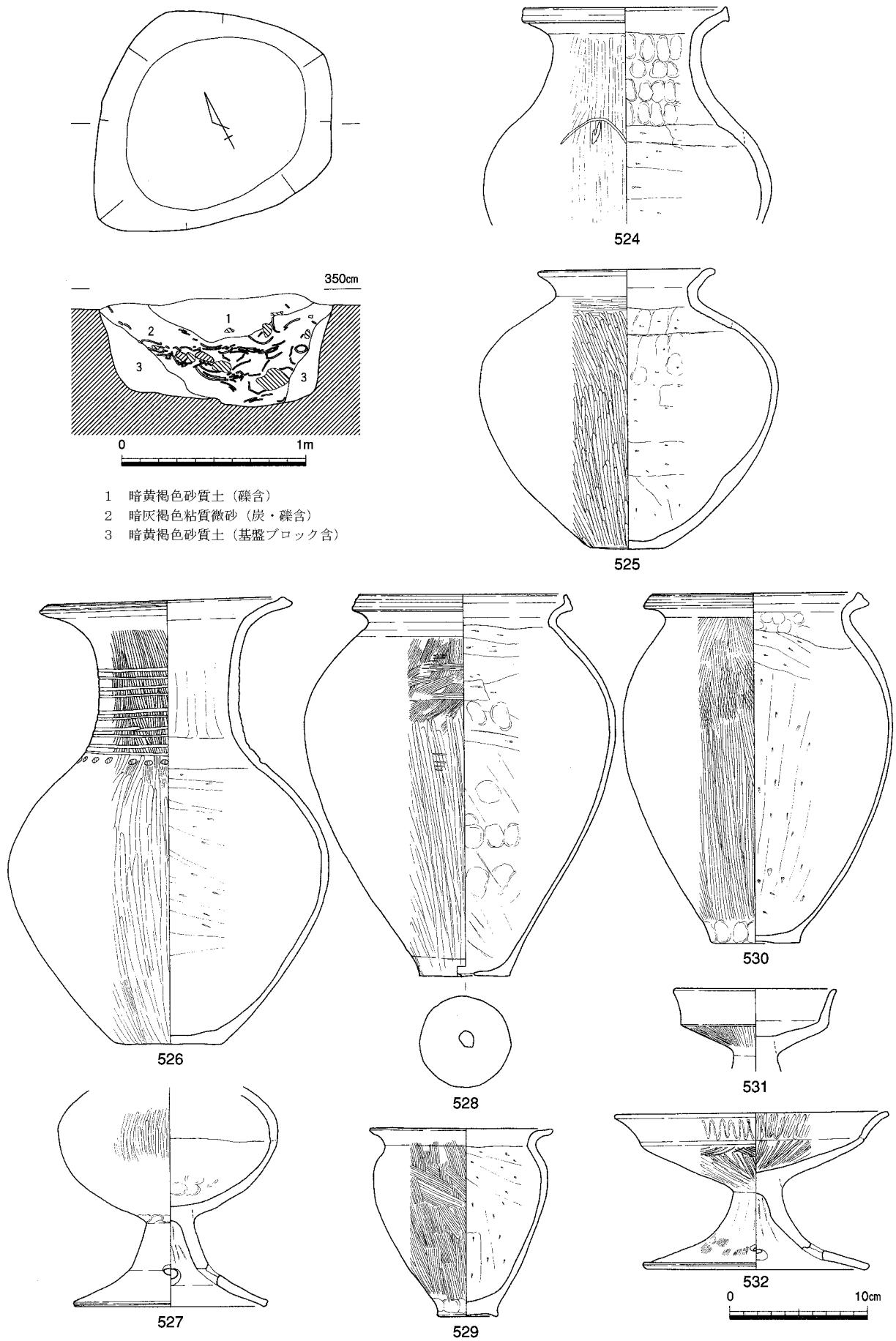


第125図 土壙24 (1/30)

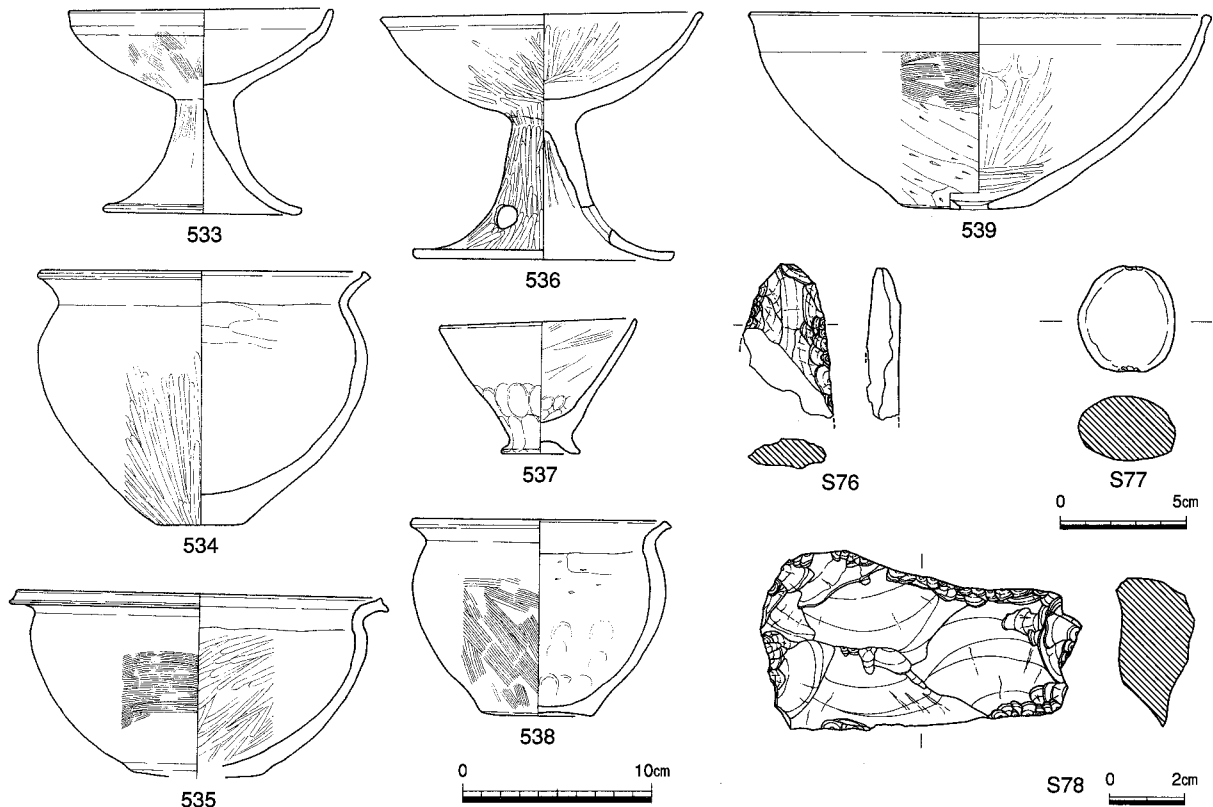
**土壙25** (第48・126・127図、図版23-2.67)

12B区、微高地の東端寄りで検出された土壙で、竪穴住居8の東に位置する。掘り方平面形は不整形で、長さ126×120cm、深さ62cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形を呈する。2層には炭や礫が含まれ、石器や多くの土器が出土している。

壺には長頸壺524・526と短頸壺525、台付壺527がある。524の頸部は内傾しており、口縁端部は上下に小さく拡張する。526は頸部がやや外傾して、口縁端部は上方にわずかに肥厚する。527の



第126図 土壌25 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第127図 土壙25出土遺物② (1/4・1/3・1/2)

脚部は高杯と似ており、裾が「ハ」字形に開き、屈曲部にスカシ孔が施されている。甕には、口縁端部が上方に拡張する528と上方に肥厚する530、口縁部が強く屈曲する小形の529がある。高杯は、小形の531、口縁部が外反する532、杯部が碗形の533・536がある。脚部はいずれも裾が「ハ」字形に開く。鉢は、口縁部が屈曲し外反する534・535・538、体部から口縁部にかけて斜めに開く台付の537と内湾して開く539がある。S76は石槍、S77は石錘である。S78は石核と思われるが、石包丁として使用された可能性もある。

出土遺物から、遺構の時期は百・後・Ⅱと考えられる。(柴田)

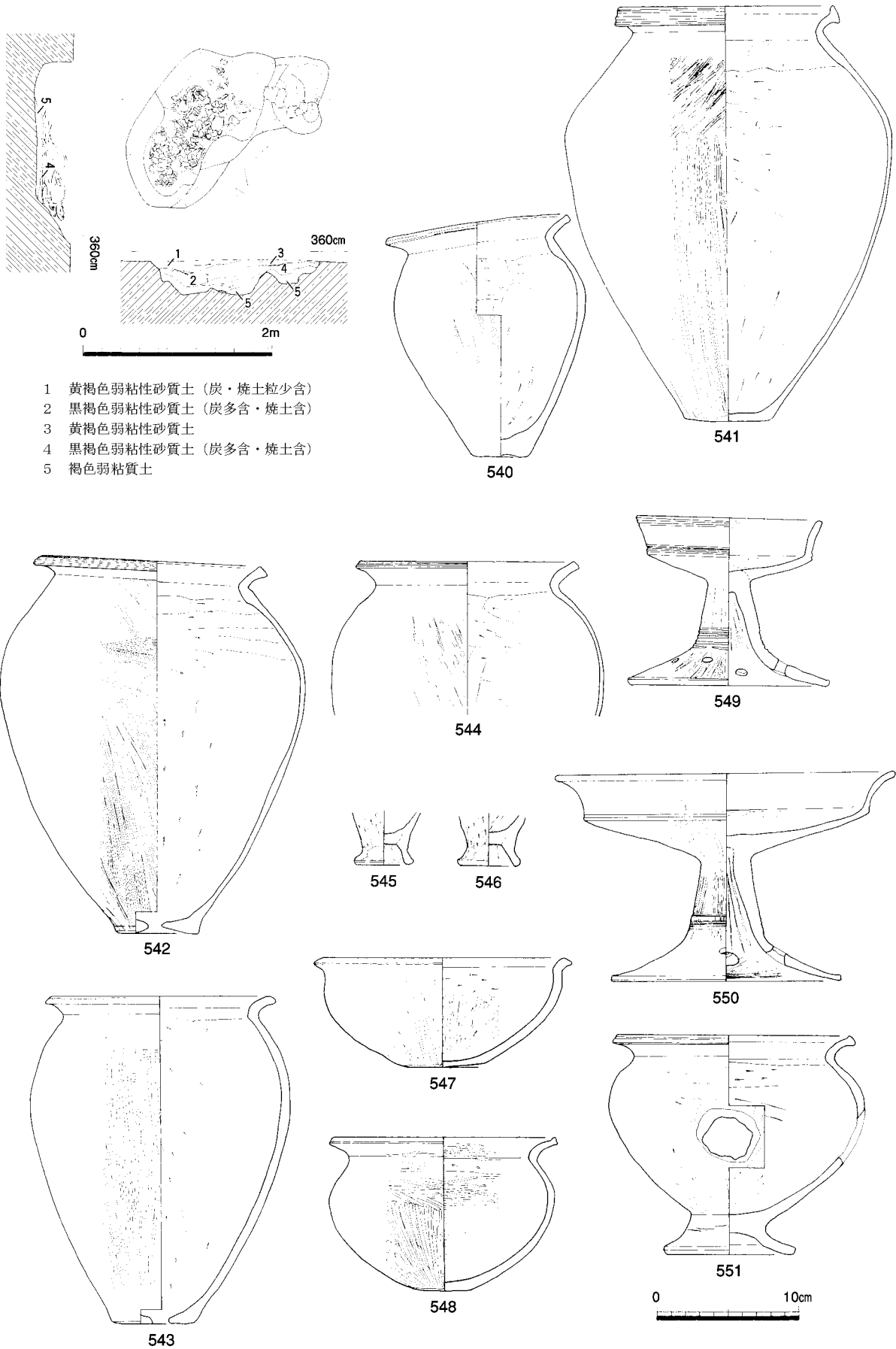
**土壙26** (第48・128図、図版23-3. 68-1)

土壙26は12B区、竪穴住居9の南約2mに位置する。検出面での平面形は約2×1mの不整長方形状を呈し、深さは約35cmを測る。土壙の北東側に不正形の小土壙が付属する。不整長方形土壙内部にはやや南に偏って大量の土器がぎっしり詰まった状態で検出された。完形に近く復元されるものも数点あったが、大半は3分の1以下にとどまる。器種は6割が甕で最も多く、残りを高杯・鉢・製塩土器が占め、壺は少量であった。埋土中には多量の炭や橙色の焼土粒が多く認められた。また、焼土粒が集中して堆積した部分は認められたが、土壙壁面等が被熱した形跡は無かった。551台付鉢の体部には直径3cmほどの内部からの穿孔が認められる。549・550高杯は短脚気味になるものの脚裾端部は面を持つ。土壙26の時期は土器の特徴から百・後・Ⅱと考えられる。(物部)

**土壙27** (第48・129・130、図版24-1. 69-1)

土壙27は12C区、竪穴住居8の南約1mに位置し、溝28を切っている。平面形は直径120cmの円形を呈する。土壙底面は中央から北寄りをさらに深く掘削しており、検出面からの深さは約40cmを測る。

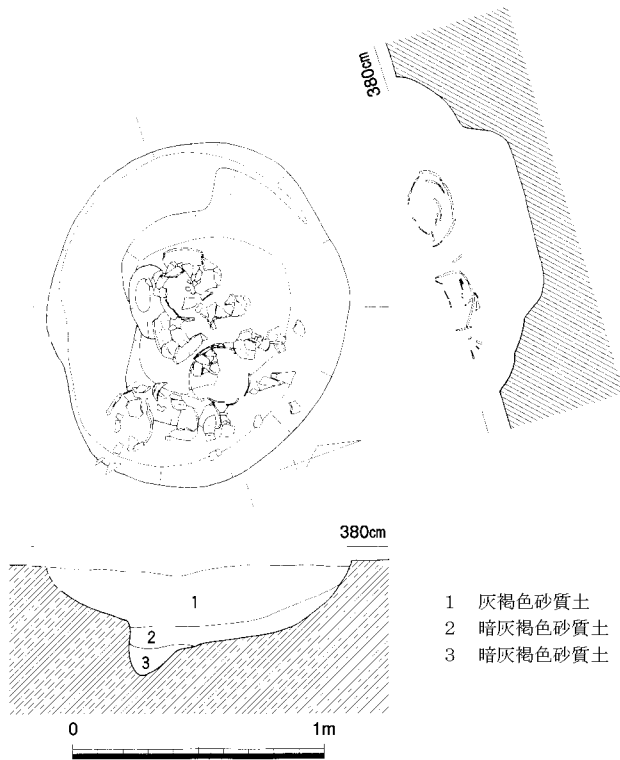
第3章 発掘調査の概要



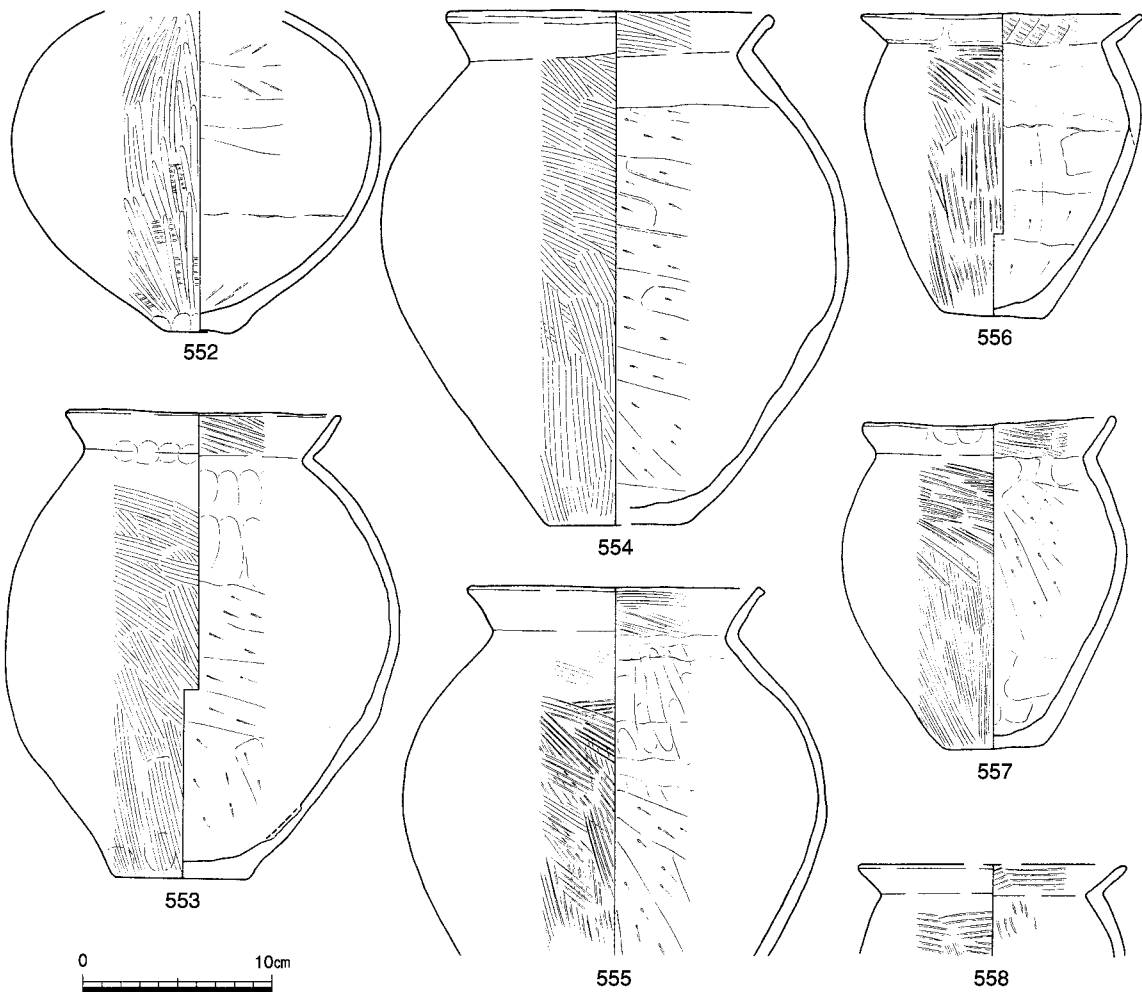
第128図 土壌26 (1/60)・出土遺物 (1/4)

埋土は、基盤層より若干暗い程度で、その識別は比較的難しかった。

出土土器片は埋土上層に集中したが、個体ごとのまとまりをもっており、上下に別個体が重なり合う状況もほとんど無かったことから、この土壌下半部が埋まった、あるいは埋めた段階に、土器を土壌中央に寄せ並べた可能性も考えられる。土器は比較的大型の破片で勘定すると40個体以上が確認され、その半分は甕、ついで高杯であり、壺・鉢は少ない。そのほか800片を越える後期前半の時期を含む土器小片が埋土中に混入していた。掲載土器のうち、2分の1以上に復元されたのは553～555・557・559甕と571高杯、574鉢である。注目されるの

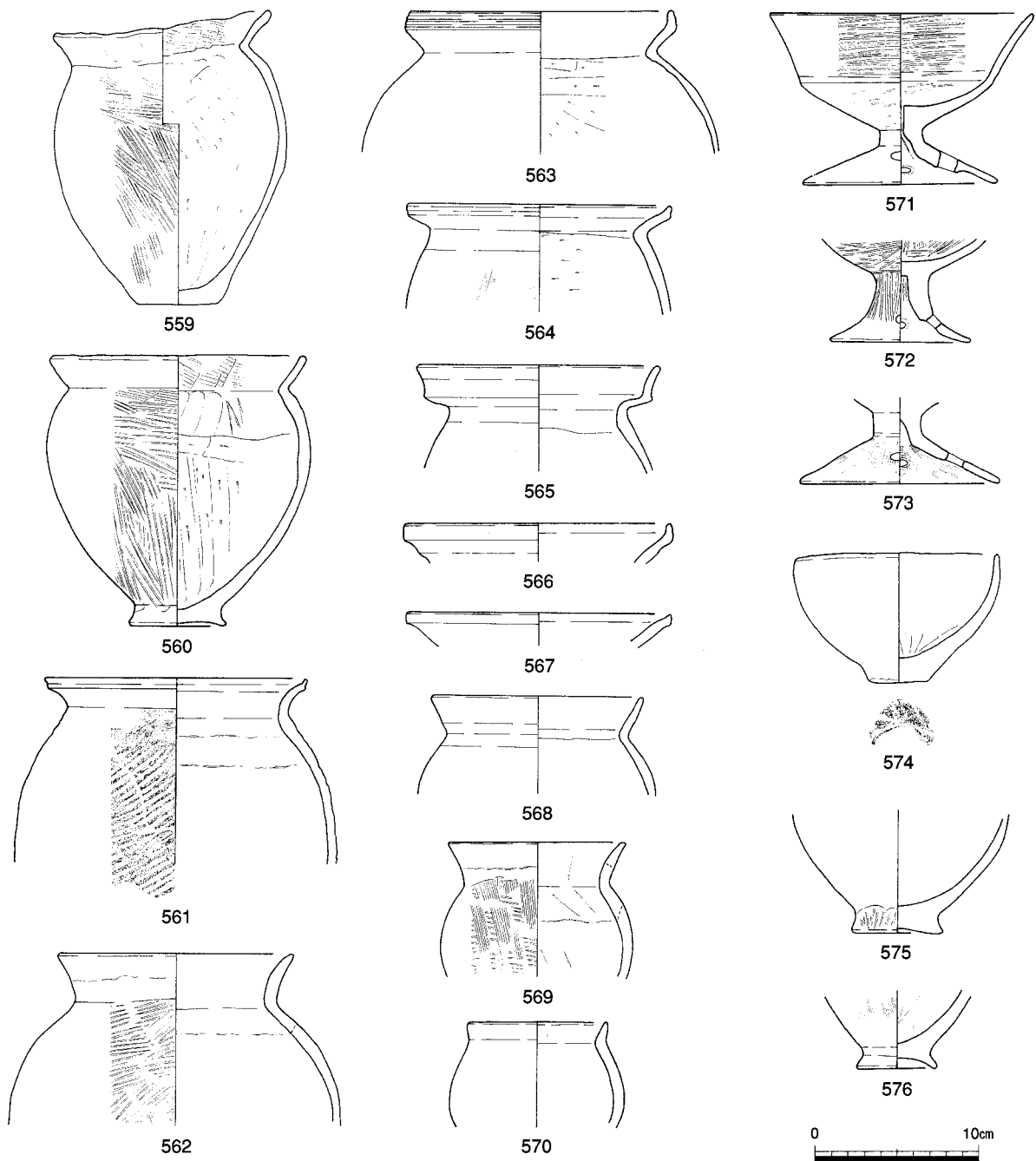


- 1 灰褐色砂質土
- 2 暗灰褐色砂質土
- 3 暗灰褐色砂質土



第129図 土壌27 (1/30)・出土遺物① (1/4)

は、胎土・色調・調整・形態がほぼ一様な「く」の字口縁の甕が多数出土していることである。553～560甕は白っぽい色調を呈し、外面は粗いハケメ、内面は頸部までヘラケズリののち、肩部ないし胴部上半までユビ押さえやユビナデを施す。口縁部内面には外面と同一工具によるヨコ方向のハケメ。底部外面はヘラケズリ、またはヘラケズリ後ナデかハケメである。口縁端部は丸くおさまるものもあるが、小さな粘土を貼り付けたり、指でつまんだりして僅かに肥厚させ、くせを持たせている。体部には押圧による窪みが点々とあり、やや粗雑な印象を受ける。561・562・569甕の外面にはタタキメが残る。574鉢の底部外面には木葉痕がある。出土土器の特徴から土壌27の時期は百・後・Ⅳと考えられる。(物部)



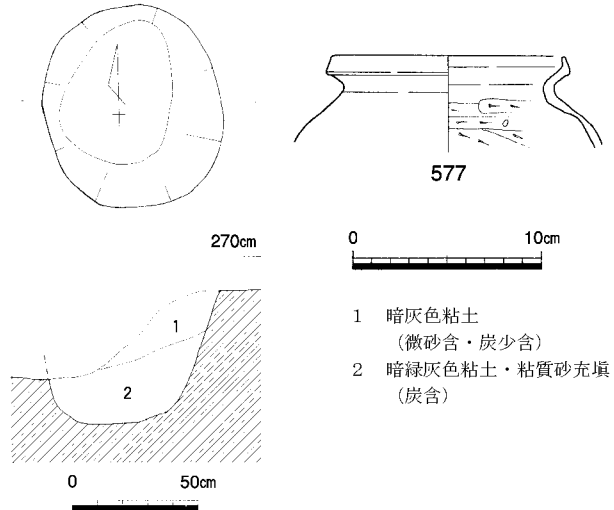
第130図 土壌27出土遺物② (1/4)

土壙28 (第46・131図)

15B区に位置する土壙である。後期末の水田耕土除去後、溝48の掘り下げ途中に検出したもので、溝より新しい。平面形は本来、径80cm前後の円形を呈するものと考えられ、検出面からの深さ52cm、底面の海拔高は205cmを測る。断面形は「U」字形である。埋土は砂と粘土で充填するものである。

遺物は少量の弥生土器片が出土している。図示したものは甕である。

時期は百・後・Ⅲと考えられ、土壙29との関連が想定される。(高田)



第131図 土壙28 (1/30)・出土遺物 (1/4)

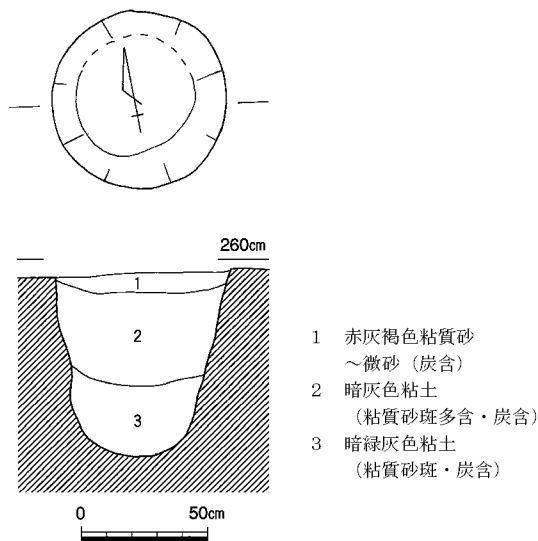
土壙29 (第46・132図)

土壙28の北東5mに位置する土壙である。土壙28と同様に後期末の水田耕土除去後に検出したものである。平面形は径70cmの円形を呈し、検出面からの深さは74cm、底面の海拔高は182cmを測る。断面形は「U」字形で、埋土は砂と粘土で充填するものである。

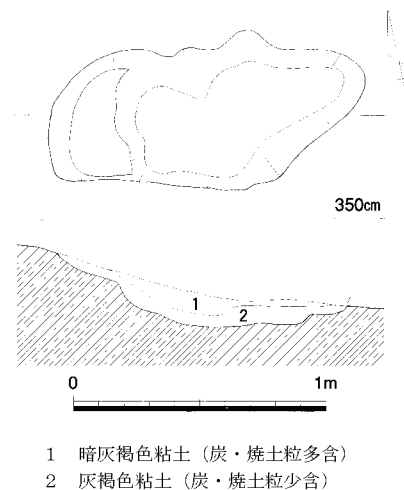
遺物は少量の弥生土器片が出土している。時期は弥生時代後期と考えられる。(高田)

土壙30 (第46・133図)

18B区に位置する土壙である。古代の溝130に切られ、その溝底面で検出した。後述する土壙31・32と約2m前後の距離をおいて並ぶ位置にあり、埋土や検出状況が類似する点など、関連が想定される。土壙の平面形は上部を掘削されているためか、不整なものである。その規模は長軸118cm、短軸55cmを測り、底面最深部の海拔高は308cmである。底面の形状も不定で、中央がやや平坦となる外は凹凸がある。埋土は粘土であり、上層は炭と焼土を顕著に包含する。出土遺物は少量の弥生土器片のみで、詳細な時期は不明だが、検出状況等から後期としたい。(高田)



第132図 土壙29 (1/30)



第133図 土壙30 (1/30)

**土壙31** (第46・134図)

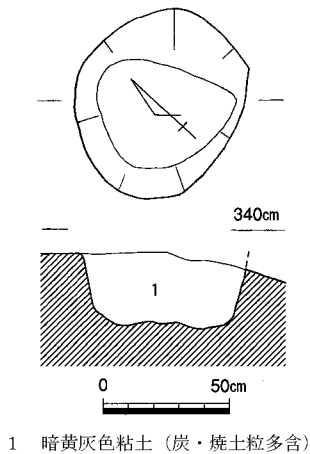
土壙30の南西2.2mに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径75cm、短径67cm、検出面からの深さ28cmを測る。断面形は箱形を呈し、壁が垂直近くに落ち込む。底面はほぼ平坦で、海拔高300cmを測る。埋土は粘土であり、炭と焼土を顕著に包含する。出土遺物は弥生土器と考えられる土器細片のみである。

時期は土壙31・32との関連から後期と考えられる。 (高田)

**土壙32** (第46・135図)

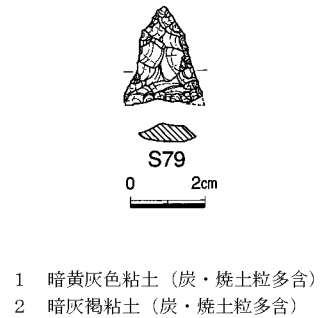
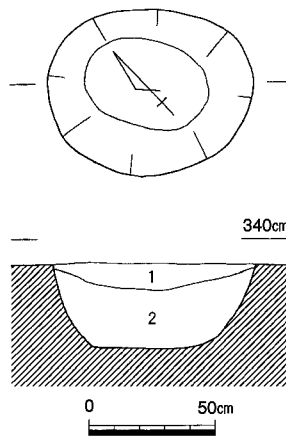
土壙31の南西1.5mに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径82cm、短径67cm、検出面からの深さ33cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁が急斜に落ち込む。底面は平坦で、海拔高は297cmを測る。埋土は粘土であり、炭と焼土を顕著に包含する。

出土遺物は、弥生後期と考えられる土器片と石器がある。このうち図示したものはサヌカイト製の石鏃S79である。以上のことから、土壙の時期は後期と考えられる。 (高田)

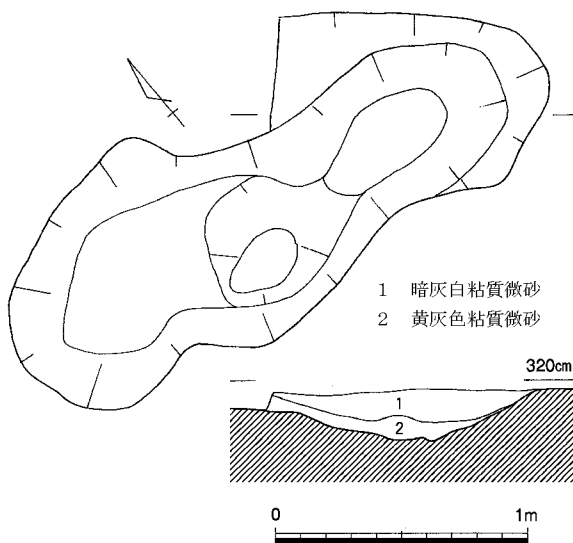


1 暗黄灰色粘土 (炭・焼土粒多含)

第134図 土壙31 (1/30)



第135図 土壙32 (1/30)・出土遺物 (1/2)



第136図 土壙33 (1/30)

**土壙33** (第46・136図)

18C区に位置する土壙で、古代の溝に切られて検出された。掘り方平面形は不整楕円形で、長さは235cm、幅は概ね70cmを測る。検出面からの深さは20cm程度である。底面は凹凸が著しく、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物が無いため、詳細な遺構の時期は不明であるが、検出状況などから後期の可能性もある。 (柴田)

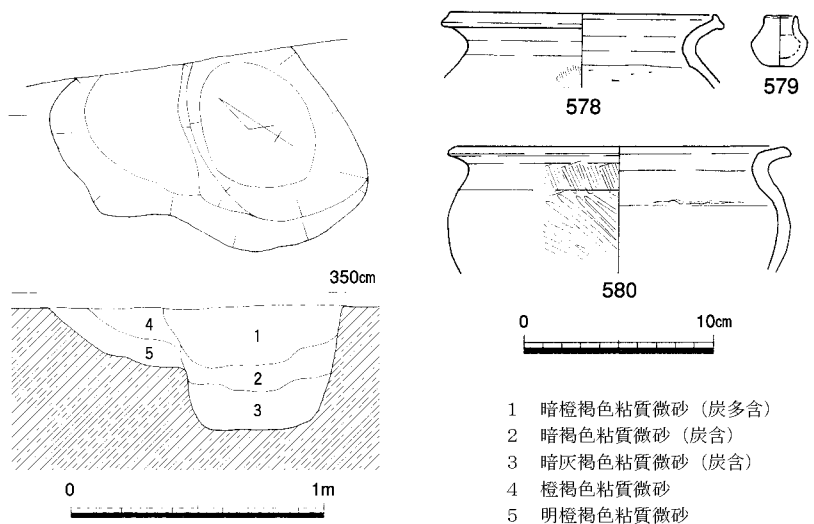
**土壙34** (第46・137図)

18B区で検出した土壙で、その北東側は調査区外に延びている。平面形はいびつであるが、本体は南東側の隅丸方形部分で長辺約70cm・短辺約60cmを測る。断面形は本体部分が

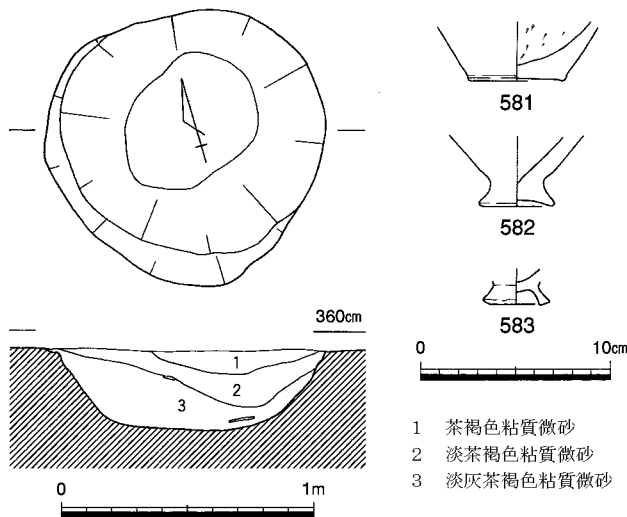


逆台形を呈し、それに取り付く様に北西部がなだらかに落ち込んでいる。土壌中の堆積土は微砂で、1～3層中に土器および炭を多含していた。

出土遺物は図示した手捏ねの壺579、甕578、鉢580などのほか高杯などがあり、これらの土器の諸特徴から百・後・Ⅱの時期を当てはめることができる。(松尾)



第137図 土壌34 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第138図 土壌35 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌35 (第46・138図)

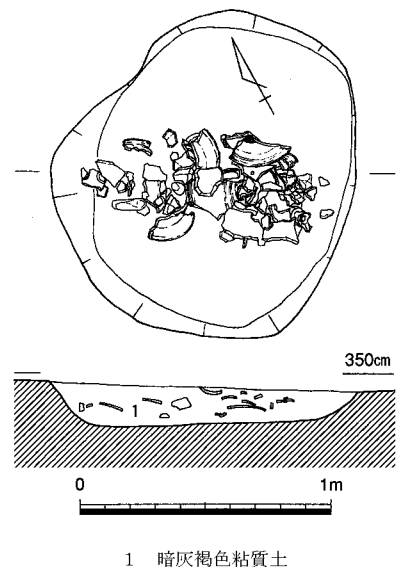
18B区で検出した土壌で、土壌38の南東隅を切っている。平面形はほぼ円形を呈し、直径約110cmを測る。断面形は検出面から深さ約30cmまでなだらかに落ち込む。土壌中の堆積土はレンズ状に堆積し、2・3層には焼土・炭・土器片を含んでいる。

出土遺物は土器のみで、いずれも細片であり、かろうじて581～583 3点の底部を掲載した。詳細な時期決定はできかねるが、いずれも弥生時代後期の範疇に収まるものと考えられる。(松尾)

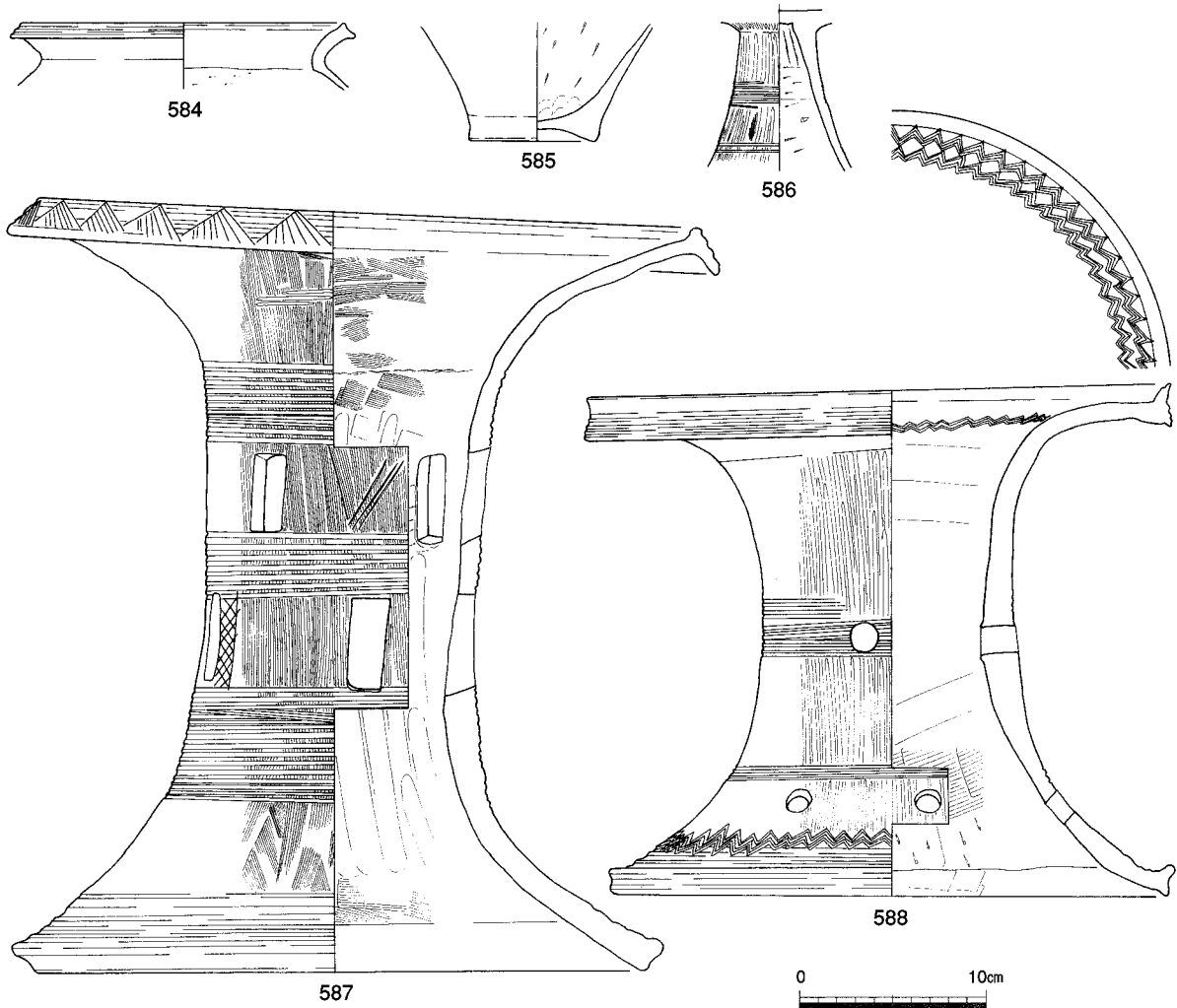
土壌36 (第46・139・140図、図版24-2. 70-1)

19B区で検出した土壌で、多くの土器がまとまって出土した。平面形は不定型な円形を呈し、直径120～130cmを測る。深さは比較的浅く、検出面から底面までは約15cmほどである。土層は単層で、土器や5cm大の礫が比較的短期間に廃棄された様子を示す。

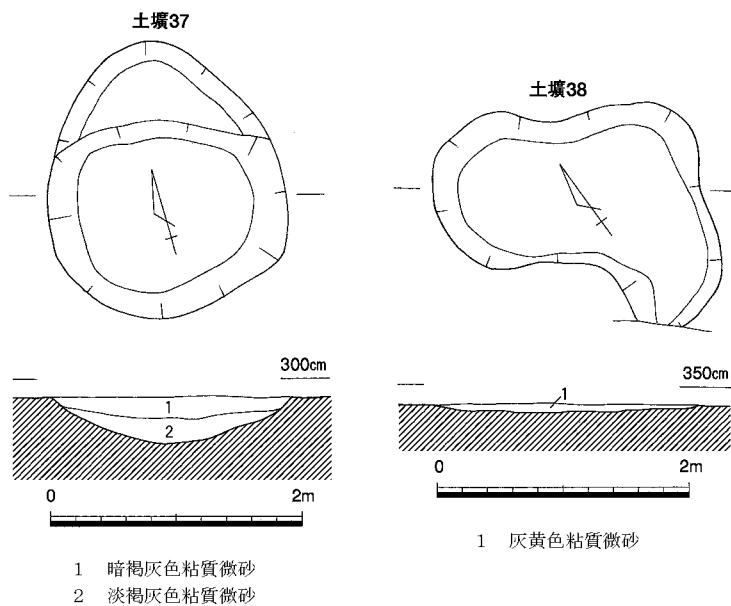
出土遺物はそのほとんどが土器で、584～588を図示した。器種としては、甕・高杯・器台、図示していないが鉢があり、壺の欠如を指摘できる。587・588の器台筒部にクシ描き沈線文が施されており、方形透かしあるいは円形透かしがみられる。また、587の筒部にはヘラによる線刻が観察できる。諸特徴から百・後・Ⅱに比定できる。(松尾)



第139図 土壌36 (1/30)



第140図 土壙36出土遺物 (1/4)



第141図 土壙37・38 (1/60)

土壙37 (第46・141図)

18C区で検出した土壙である。平面形は卵形を呈し、長辺220cm・短辺190cmを測る。断面形は北側が浅く、肩部から60cmの所より緩やかに落ち込む。土層はレンズ状に堆積しており、鉄分の沈着が著しい。土器などの遺物は皆無であるが、検出状況から弥生時代後期の範疇に収まるものと考えられる。(松尾)

土壙38 (第46・141図)

18B区で検出した不整形な土壙である。南部分は土壙35に切られており、東側にある溝57を切っ

いる。断面の深さは浅く、底面との境も不明瞭である。

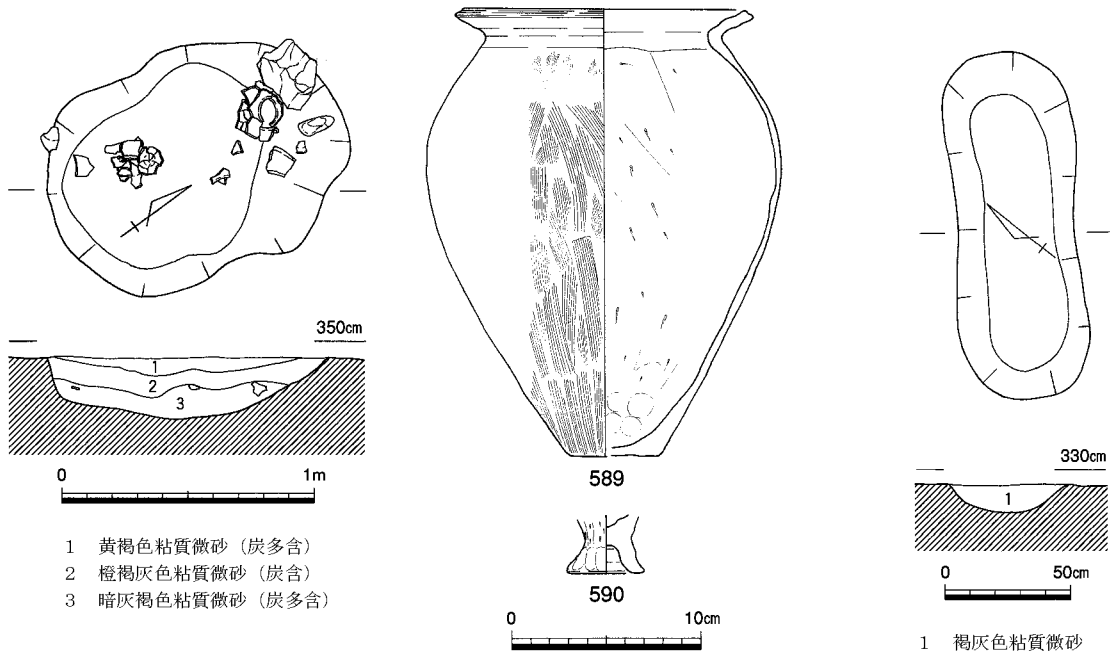
出土遺物が皆無いため詳細な時期は確定できないが、検出状況や周辺の遺構との関係から弥生時代後期の範疇に収まるものと推察される。(松尾)

**土壌39** (第46・142図、図版24-3)

18C区で検出した土壌で、平面形は不整形である。長辺120cm・短辺80cmを測る。断面はゆるやかに傾斜し、検出面から約23cmで底面となる。遺物はそのほとんどが土器で、出土状況にいくつかのまとまりがみられたが、時期差などはとくに抽出できなかった。589の甕・590の製塩土器脚部を図化した。その他に壺・高杯・鉢などの細片が出土している。これらの土器の特徴から百・後・Ⅱの時期を当てはめることができる。(松尾)

**土壌40** (第46・143図)

18C区で検出した土壌である。平面形は隅丸の長方形を呈し、長辺140cm・短辺50cmを測る。断面の深さは浅く、埋土は単層である。出土遺物は図化できるものがなかったが、土器片が数点みられる。それらの諸特徴から百・後・Ⅱに比定できる。(松尾)



第142図 土壌39 (1/30)・出土遺物 (1/4)

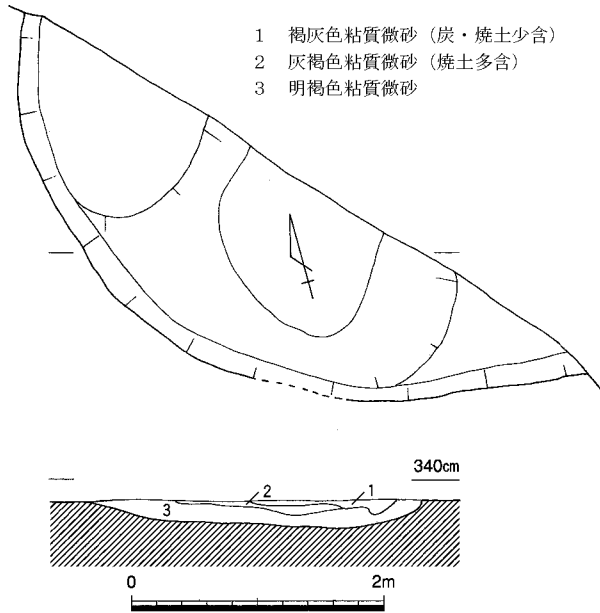
第143図 土壌40 (1/30)

**土壌41** (第46・144図)

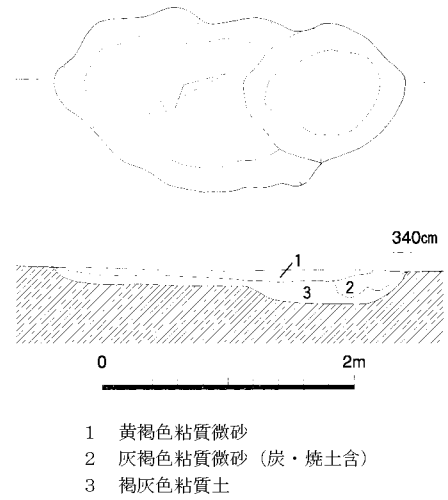
19B区で検出した土壌で、北東部分は調査区外に延びているものと考えられる。その範囲は判然とせず、焼土・炭の多く含む範囲を土壌と判断し、掘り下げをおこなった。断面は底面との境が明確でなく、ゆるやかに傾斜する。遺物の出土は図化不可能な土器片数点のみで、その帰属時期は確定しがたいが、検出状況から弥生時代後期の範疇と思われる。(松尾)

**土壌42** (第46・145図)

19B区で検出した不定形な土壌である。南側からゆるやかに下がり、北側が直径約20cmの円形に窪む。埋土には炭・焼土を含む。遺物は図化不可能な土器片が数点で、検出状況等から弥生時代後期の範疇に入るものと推察される。(松尾)



第144図 土壌41 (1/60)



第145図 土壌42 (1/60)

**土壌43 (第46・146図)**

19B区で検出した円形の土壌で、長径95cm・短径75cmを測る。断面は、検出面から深さ約10cmの底面まで急角度に落ち込み、底面は比較的平坦である。出土遺物は土器の細片が数点あるのみで、帰属時期の明確なものはない。検出状況から弥生時代後期と思われる。(松尾)

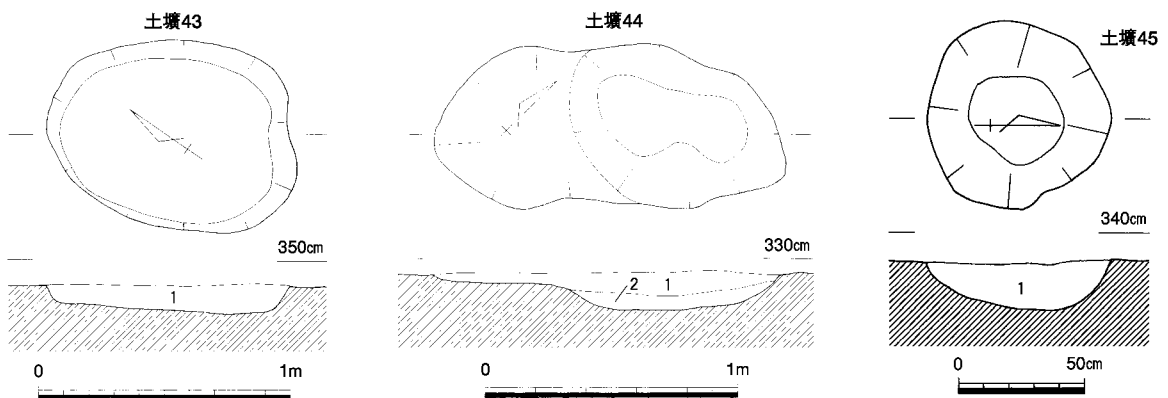
**土壌44 (第46・146図)**

19B区で検出した不整形な土壌で、長辺135cm・短辺60cmを測る。断面は南西側がなだらかに下がり、中央付近でもう一度下がる。埋土はレンズ状に堆積する。出土遺物は皆無で、帰属時期は明確でないが、検出状況から弥生時代後期と判断できる。(松尾)

**土壌45 (第46・146図)**

21B区、微高地の東端で検出された土壌である。掘り方平面形は円形で、径75cm、検出面からの深さは18cmを測る。断面形は皿状を呈する。

出土遺物が皆無であるため、遺構の詳細な時期は不明である。(柴田)



1 淡灰黄色砂質土 (マンガン粒少含)

1 黄褐色粘質微砂 2 暗灰褐色粘質土

1 灰黄色粘質土 (炭含)

第146図 土壌43~45 (1/30)

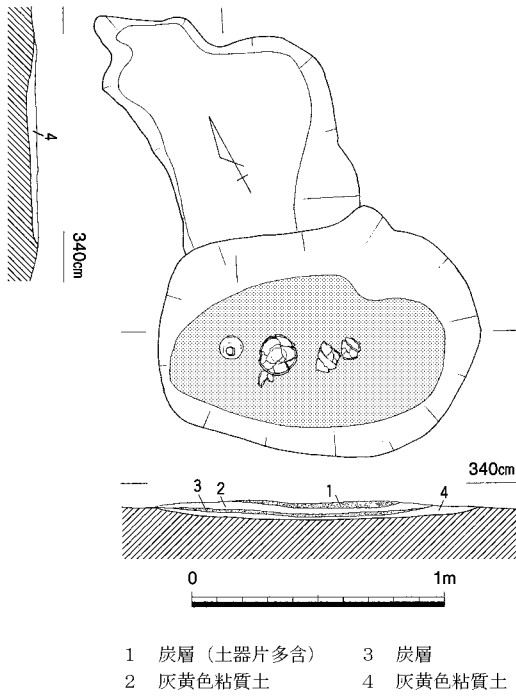
土壌46 (第46・147図、図版25-1. 70-2)

21C区、微高地の東端で検出された土壌で、竪穴住居12の中央穴上部に位置している。

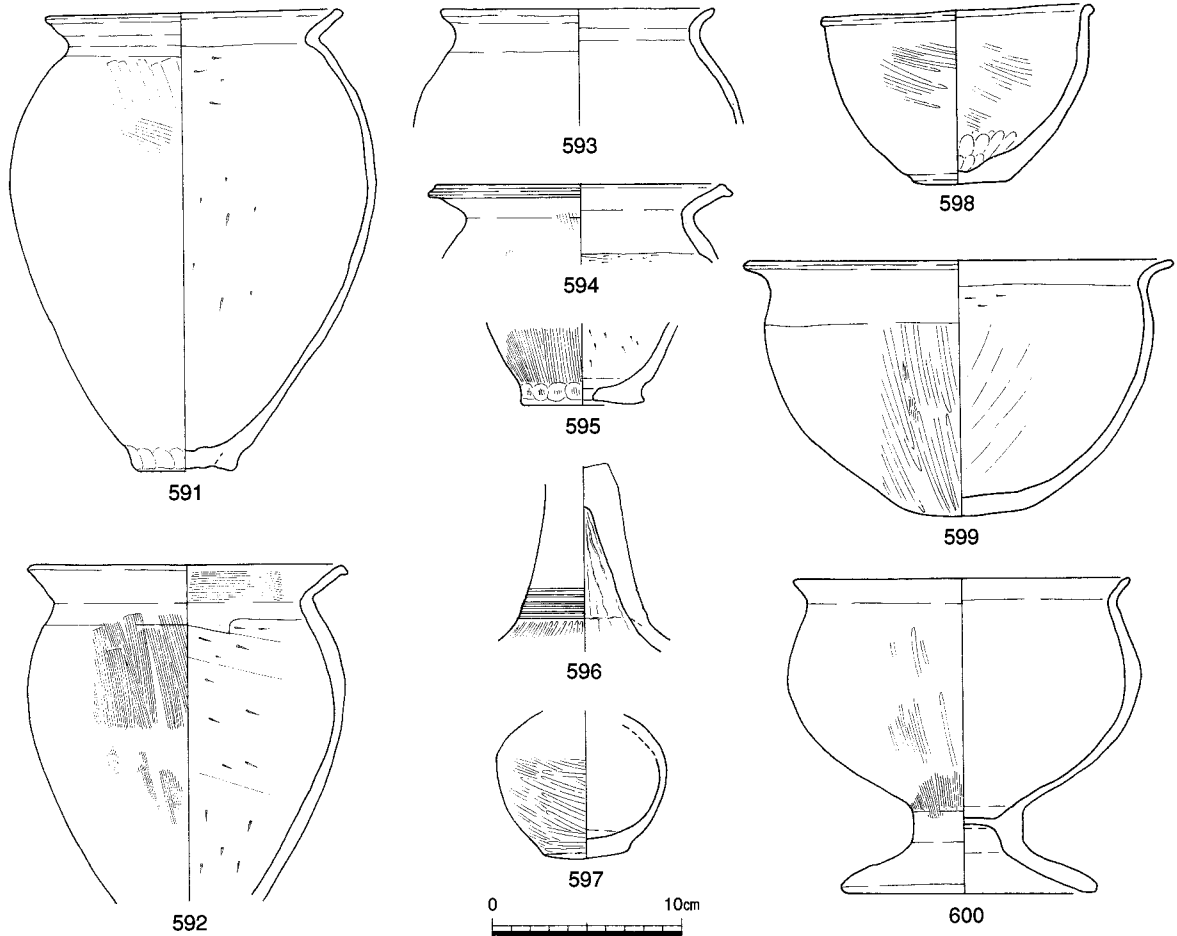
確認できなかったが、竪穴住居12が拡張された可能性を想定し、その中央穴脇の土壌である可能性が考えられる。掘り方平面形は、楕円形の浅い土壌に不整形のくぼみを取り付くものである。楕円形の土壌は長さ130cm、幅90cm、検出面からの深さは5cmを測り、埋土には2つの炭層が認められる。不整形のくぼみについては、長さが77cm、幅は70cm、深さは3cmを測る。

壺597、鉢598は楕円形の土壌から出土しており、この土壌周辺にも甕591~595、高杯596、鉢599、台付鉢600などが確認されている。

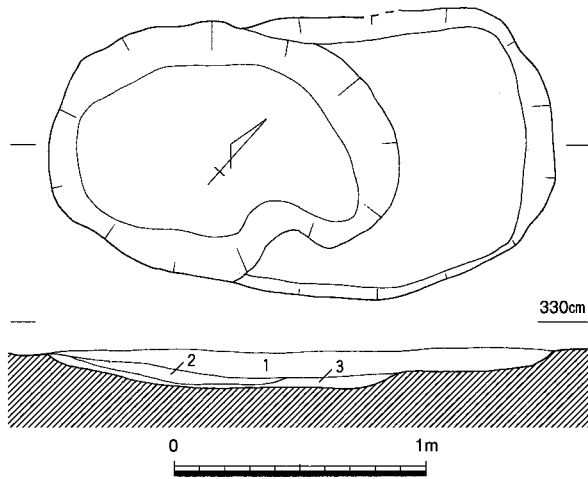
出土遺物から、遺構の時期は百・後・Ⅱと思われる。(柴田)



- |              |          |
|--------------|----------|
| 1 炭層 (土器片多含) | 3 炭層     |
| 2 灰黄色粘質土     | 4 灰黄色粘質土 |

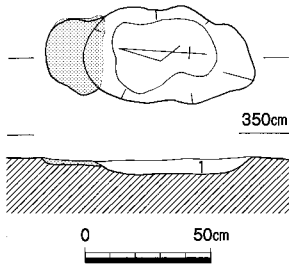


第147図 土壌46 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰黄色粘質微砂 (炭・焼土含)
- 2 黒褐色粘質微砂 (炭極多含・焼土含)
- 3 暗灰黄色粘質微砂

第148図 土壌47 (1/30)



- 1 暗灰褐色粘質微砂

第149図 土壌48 (1/30)

掘り方平面形は楕円形で、長さは68cm、幅は35cm、検出面からの深さは4cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土には炭や焼土などは認められない。

北側に30×25cmの範囲の焼土面が接しているが、相互の関連性の有無については明らかではない。出土遺物が皆無であるため、遺構の詳細な時期は不明である。

土壌49 (第46・150図)

高杯や製塩土器の小片が出土しており、遺構の時期は後期前半と考えられる。

土壌50 (第46・150図)

21C区、微高地の東端で検出された土壌である。掘り方平面形は楕円形で、長さは74cm、幅は50cm、

土壌47 (第46・148図)

21C区、微高地の東端で検出された土壌である。土壌46の東約1mに位置しており、土壌46と同様、拡張された竪穴住居12に関わる土壌である可能性が考えられる。掘り方平面形は、不整楕円形で南西側の床面がわずかにくぼんでいる。長さは200cm、幅は110cm、検出面からの深さは15cmを測る。埋土には炭や焼土が多く含まれる。

出土遺物などから、遺構の時期は百・後・IIと推測される。

土壌48 (第46・149図)

21C区、微高地の東端で検出された土壌である。

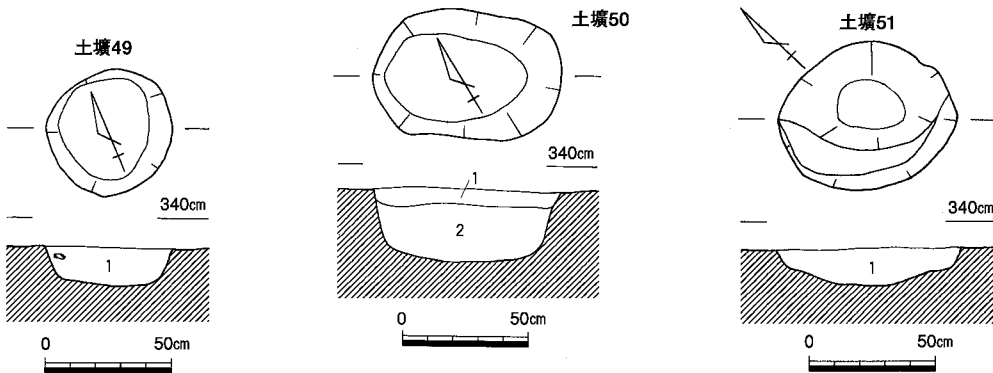
掘り方平面形は楕円形で、長さは68cm、幅は35cm、検出面からの深さは4cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土には炭や焼土などは認められない。

北側に30×25cmの範囲の焼土面が接しているが、相互の関連性の有無については明らかではない。出土遺物が皆無であるため、遺構の詳細な時期は不明である。

土壌49 (第46・150図)

21C区、微高地の東端で検出された土壌である。掘り方平面形は円形で、径51cm、検出面からの深さは14cmを測る。断面形は皿状を呈する。

埋土には炭や焼土が含まれており、拡張された竪穴住居12に関わる遺構である可能性が考えられる。



- 1 黄褐色粘質土 (炭・焼土含)

- 1 淡灰黄色粘質微砂
- 2 橙褐色粘質土

- 1 黄褐色粘質土 (炭・焼土含)

第150図 土壌49～51 (1/30)

検出面からの深さは29cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は2層確認できたが、ほぼ水平堆積の状態を示しており、人為的に埋められた可能性も考えられる。

高杯などの土器小片が出土しており、遺構の時期は後期前半と考えられる。(柴田)

**土壌51** (第46・150図)

21C区、微高地の東端で検出された土壌である。掘り方平面形は楕円形である。長さは70cm、幅は59cm、検出面からの深さは14cmを測る。

掘り方の南西側は段を形成し、底面は狭くなり北東に寄っている。断面形は若干凹凸があるものの「U」字形を呈する。埋土には炭や焼土が含まれる。

高杯の脚裾部や製塩土器などの小片が出土しており、遺構の時期は百・後・Ⅱである。(柴田)

**土壌52** (第46・151図)

21C区、微高地の東端で検出された土壌である。掘り方平面形は楕円形で、長さ72cm、幅は64cm、検出面からの深さは15cmを測る。底面はほぼ水平である。2層の堆積後には、土壌の中央付近に炭や焼土が認められる。

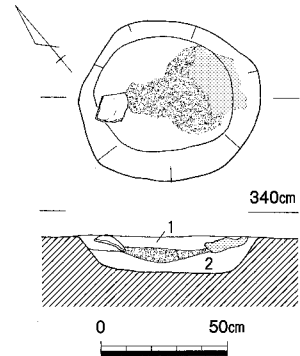
甕の口縁部や胴部、壺、高杯などの破片が出土しており、遺構の時期は百・後・Ⅱである。(柴田)

**土壌53** (第46・152・153図、図版25-2・3.69-2)

21C区で検出した土壌である。微高地の縁辺部を巡る溝62を掘り下げる途中で検出したことから、その平面形は不整形である。そのため、特に東と西の端は明瞭なプランを検出できていない。検出状態では長辺約85cm・短辺約50cmを測る。断面も明瞭でないが、南側の一部が溝62より外へ広がっているために、部分的ではあるが土層断面を実測することができた。それを観察する限り、断面形は比較的ゆるやかに落ちていることがわかる。

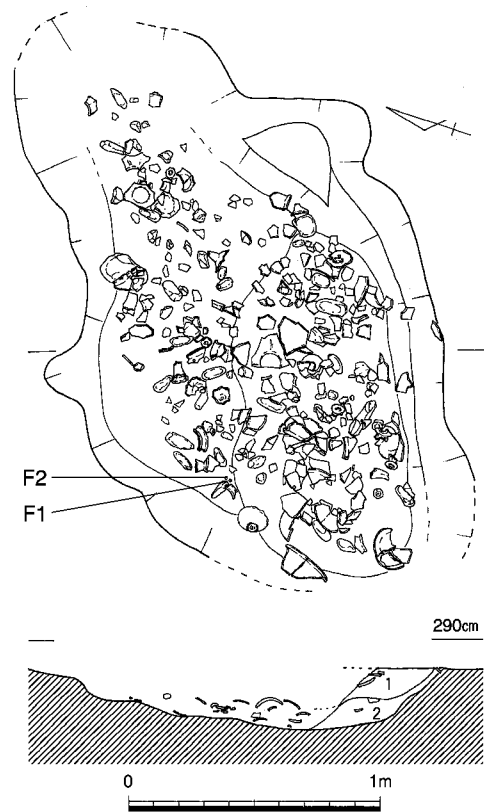
出土遺物は土器・玉・石製品がある。601～626は土器である。601・602の壺は口縁部にS字状浮文やヘラ描き鋸歯文などが施文されている。610～613の高杯は、杯部と脚部が別造りのものが多数。624～626は手づくねである。F1・F2は玉で、材質は付載1で詳細に述べられているように、ファイアンス状物質製であるという鑑定指導結果を頂いている。S80は砥石兼用凹石で石材は砂岩。遺構の時期は土器の諸特徴から、おおむね百・後・Ⅲに比定できる。

この土壌は、前述の様に溝62を掘り下げる途中でそ



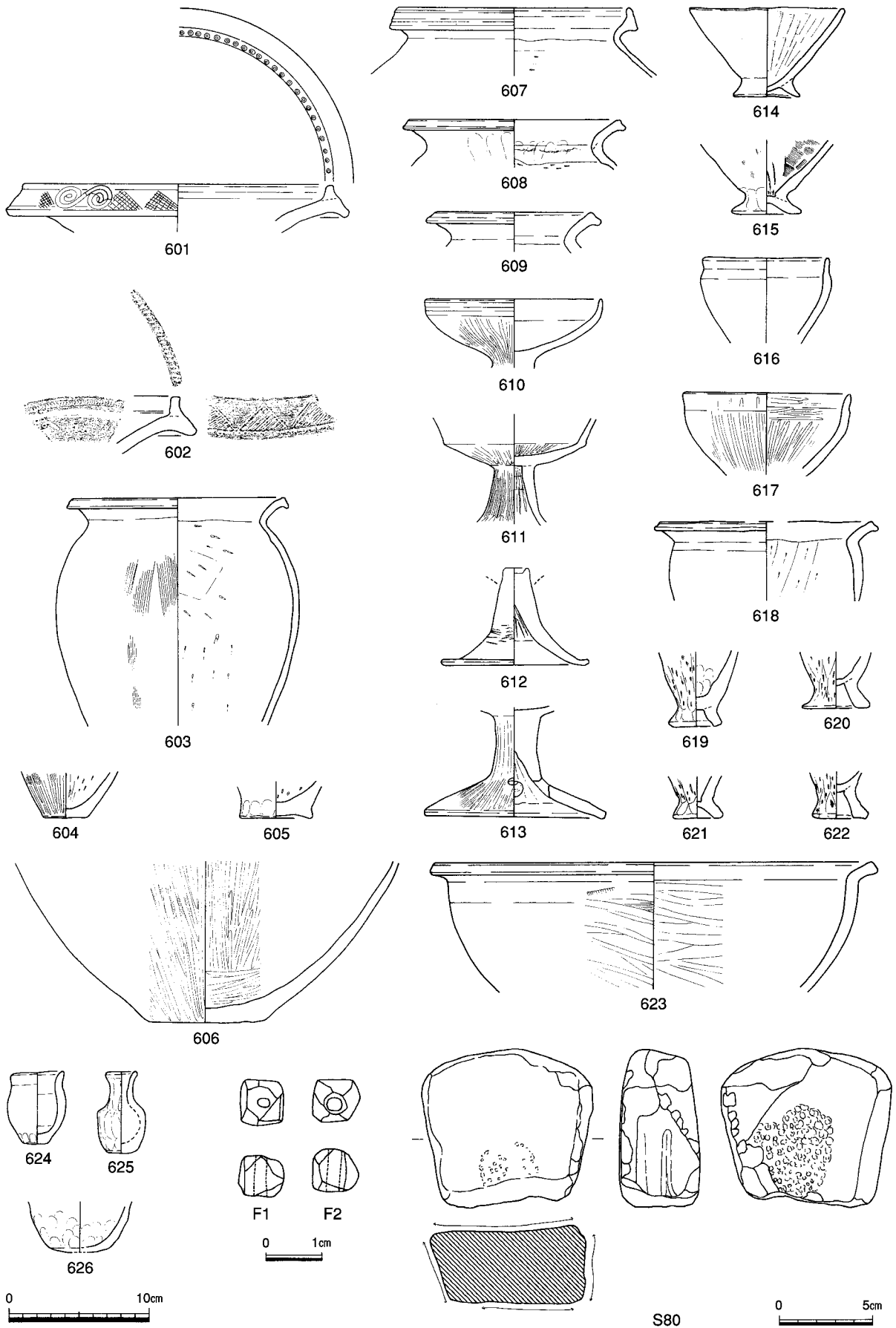
- 1 暗褐色微砂混じり粘質土 (炭・焼土多含)
- 2 暗灰褐色粘質土

第151図 土壌52 (1/30)



- 1 灰色粘質土
- 2 暗灰色粘質土 (炭含)

第152図 土壌53 (1/30)



第153図 土壌53出土遺物 (1/4・1/3・1/1)



の存在を確認したのであるが、底面のレベルが溝62よりも20cm程深いことや、この周辺のみ土器がまとまって多くみられること、土器の出土状態などから溝62を切って掘られた単独の遺構と認識できる。(松尾)

土壙54 (第47・154図)

21C区で検出した土壙

で微高地の縁辺部を巡る溝62を掘り下げる途中で平面形を確認した。一辺約70cmの隅丸方形を呈する。断面形は検出面から約30cmの深さまで急角度をもって落ち込み、底面は比較的平坦であった。

出土遺物は土器が主なもので、底面よりやや浮いた高さから出土している。627・628の高杯の諸特徴から百・後・Ⅱに比定される。(松尾)

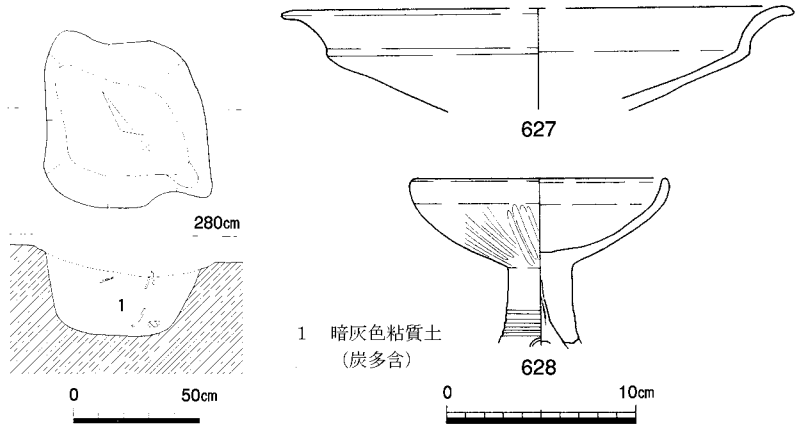
土壙55 (第47・155図)

23C区で検出した土壙で、東側の一部を近代の溝により削平されている。平面形はほぼ円形を呈していると思われ、直径約170cmを測る。断面形は検出面から深さ約17cmまで比較的ゆるやかに傾斜し底面は平坦であるが、土層断面を測量した所のみ10cmほど窪んでいた。土壙内の埋土はいずれも微砂で1層のみに土器片を含んでいる。

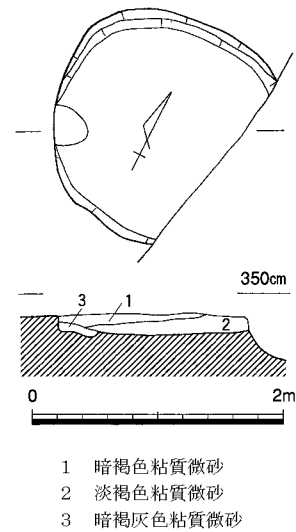
図化可能な土器片はなく詳細な時期は不明であるが、鳥状高まりを下げる過程で検出したことや、出土した土器破片から推察される帰属時期などを勘案すると、弥生時代後期前半の範疇と考えられる。(松尾)

土壙56 (第47・156図)

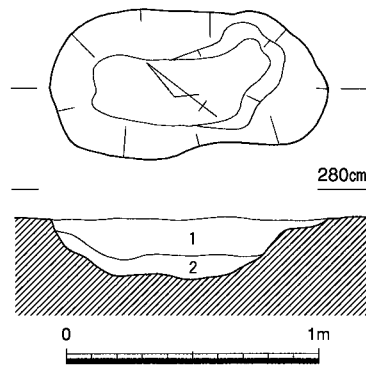
23C区で検出した土壙である。平面形は不整形な楕円形を呈し、長辺約110cm、短辺約55cmを測る。断面形は、北西部が検出面から深さ約20cmの底面まで比較的急に落ち込むのとは対照的に、南東部は深さ5cmの所で一度傾斜が変化する。埋土は1・2層共に粘土で、2層にのみ炭を少量



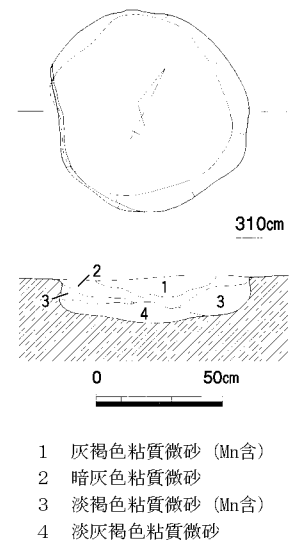
第154図 土壙54 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第155図 土壙55 (1/60)



第156図 土壙56 (1/30)



第157図 土壙57 (1/30)

含む。

この土壌は弥生後期水田層を除去した後に、23B・C区に設定した下層確認トレンチ内で検出したもので、弥生時代前期の基盤層よりは上面で検出している。土器などの遺物がまったく出土していないので明確な時期決定は不可能であるが、弥生時代後期前半以前であることは間違いない。(松尾)

**土壌57 (第47・157図)**

24C区の島状高まりを掘り下げる際に検出した土壌で、平面形は直径約80cmの円形を呈する。断面は検出面から深さ10cm程の底面までほぼ直角に落ち込み、底面はやや凸凹している。土壌内の埋土は1～4層共に微砂で、マンガング粒を少量含んでいる。出土遺物は、実測不可能な土器片1点のみで詳細な時期は不明であるが、検出状況から弥生時代後期前半の範疇に入るものと推察される。(松尾)

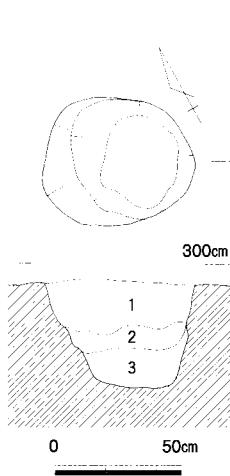
**土壌58 (第47・158図)**

24B区にある土壌で、ほぼ南北に延びる島状高まりを掘り下げる途中で検出した。平面形は不整形で、浅い落ち込みの中に直径約37cmを測る円形の掘込みがある。この円形の部分は、検出面から深さ約22cmで、浅い落ち込みの底面からは約15cmを測る。土壌内の埋土は粘質土である。

出土遺物がなく明確な時期決定はできないが、検出状況から弥生時代後期前半と思われる。(松尾)

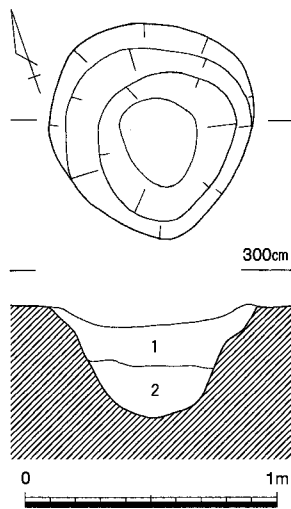
**土壌59 (第47・159図)**

25C区で検出した土壌である。25B・C区をほぼ南北に延びる島状高まりを掘り下げる際に確認した。平面形はほぼ円形で、長径約60cm・短径約50cmを測る。断面形は逆台形で、東側は2段落ちとなるが、西側は検出面から約40cmの深さまで急角度に落ち込んでいる。土壌内の埋土は、1・2層が粘質土で、3層が粘土である。比較的しっかりした土壌だが出土遺物はまったく無く、詳細な時期は不明である。しかし、弥生時代後期水田に伴う島状高まりを掘り下げる際に検出したことから、後期水田が本格的に営まれるようになる百・後・Ⅲの時期よりは確実に古いと考えられる。このことから、弥生時代後期前半の範疇に収まると考えてまず間違いない。(松尾)



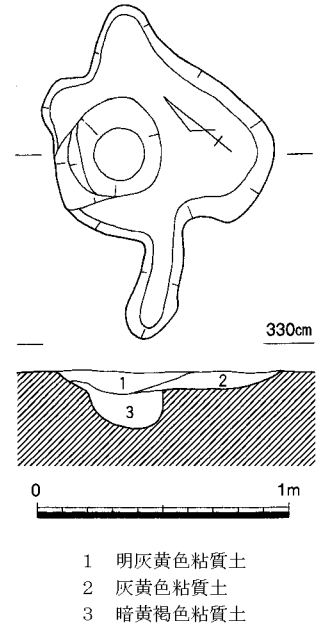
- 1 橙褐色粘質土
- 2 褐灰色粘質土
- 3 暗灰色粘土

第159図 土壌59 (1/30)



- 1 暗灰色粘質土
- 2 暗褐色粘質土

第160図 土壌60 (1/30)



第158図 土壌58 (1/30)

不明である。しかし、弥生時代後期水田に伴う島状高まりを掘り下げる際に検出したことから、後期水田が本格的に営まれるようになる百・後・Ⅲの時期よりは確実に古いと考えられる。このことから、弥生時代後期前半の範疇に収まると考えてまず間違いない。(松尾)

**土壌60 (第47・160図)**

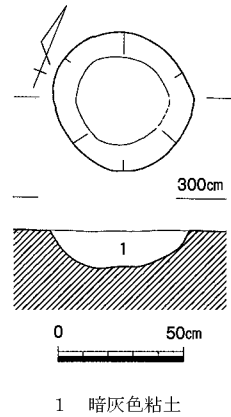
27B区で検出した土壌である。27B・C区および28C区に位置する、ほぼ南北に延びる島状高まりを完全に除去した後に確認した、島状高まり掘削痕跡東肩で検出した。平面形はほぼ円形で、長径約85cm・短径約80cmを測る。断面形は、検

出面から深さ約35cmまで急角度に落ち込みほぼ円錐形を呈しているの  
で、底面は比較的狭い。土壌の埋土は1・2層共に粘質土。出土遺物は  
図化不可能な甕形土器の破片1点である。この土器片の示す時期や土層  
観察の結果、この土壌が完全に埋没した後に弥生時代後期水田層が堆積  
していることから、弥生時代後期前半の範疇と考えられる。(松尾)

**土壌61** (第47・161図)

28B区に位置し、平面円形を呈した土壌である。弥生時代後期末の水  
田層を除去後検出された。径52cm、検出面からの深さ14cmを測る。埋土  
は1層のみで人為的に埋めた様子は見られなかった。

遺物は皆無であったが、検出状況等から弥生時代後期前半の範疇に入  
ると考えられる。(小嶋)



第161図 土壌61 (1/30)

**土壌62** (第47・162図)

28C区に位置し、27～28B・C区に所在する弥生時代後期末水田の大畦畔を掘り下げ後に検出され  
た土壌である。

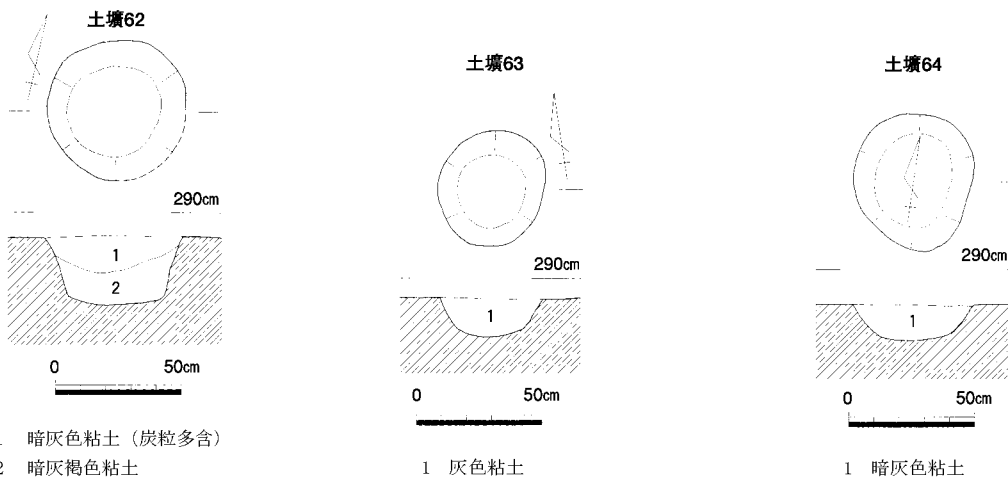
平面形は径54cmの円形を呈している。深さは検出面から27cmを測り、底面はほぼ水平である。埋土  
は2層からなり、第1層の暗灰色粘土からは炭粒が多数検出されている。溝73との先後関係であるが、  
この土壌が溝73を切っていることから土壌の方が後出である。このことから時期は弥生時代後期前半  
に比定される。(小嶋)

**土壌63** (第47・162図)

土壌62と後述する土壌64の中間に位置している。弥生時代後期末の水田層を除去した後検出されて  
いる。深さは14cmを測り、平面形は径44cmのほぼ円形を呈している。埋土は灰色粘土の1層のみであっ  
た。時期は弥生時代後期に比定される。(小嶋)

**土壌64** (第47・162図)

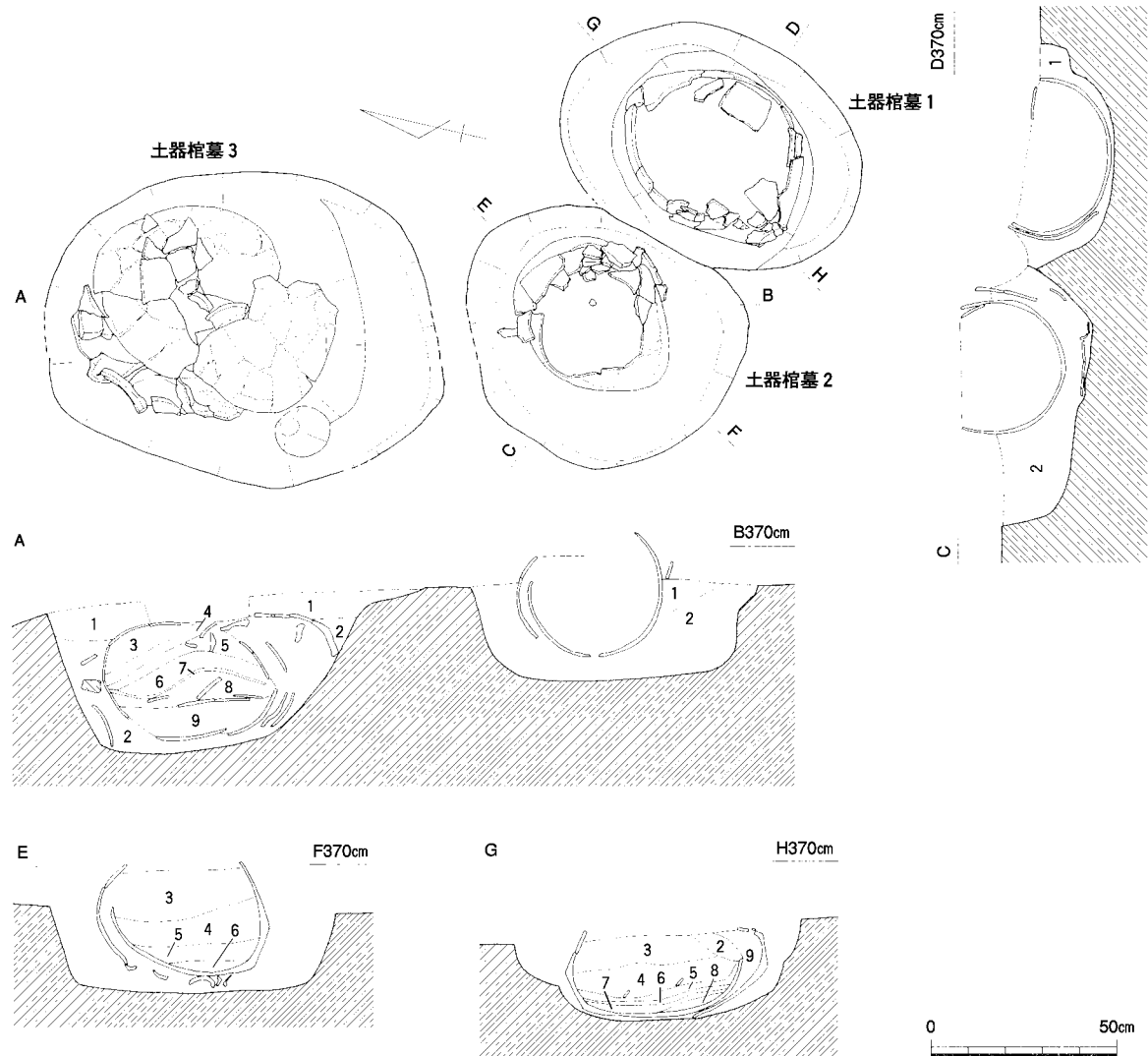
土壌63の西側約2mに位置している。規模は長軸52cm、短軸47cmの平面やや楕円形を呈し、検出面  
からの深さ14cmを測る。土壌61・63と同様に弥生時代後期末の水田層を除去した段階で確認されたも  
のである。出土遺物は甕細片1点のみで明確な時期は確定できないが、弥生時代後期前半に収まると  
考えられる。(小嶋)



第162図 土壌62～64 (1/30)

## 6 土器棺墓

12C区の東部、竪穴住居6の東、竪穴住居8の南にあたる部分で近接して配置された3基の土器棺墓を検出した。百間川原尾島遺跡においては土器棺墓は小範囲に集中し、それが点在するあり方を示すが、ここに示す土器棺墓1～3もその特徴に合致している。土器棺墓群は百間川原尾島遺跡微高地中央部付近で多くが検出されているが、本例は微高地東端部に所在する群である。



### 土器棺墓 1

- 1 暗褐色粘質土（基盤ブロック含）
- 2 黒褐色微砂質土
- 3 淡褐色砂質土
- 4 黄褐色砂質土
- 5 灰黒色粘土
- 6 褐灰色粘土
- 7 灰黒色粘土
- 8 褐黒色粘土
- 9 暗灰色粘土

### 土器棺墓 2

- 1 褐色粘質土
- 2 褐色粘質土
- 3 灰褐色微砂質土
- 4 暗灰褐色微砂質土
- 5 灰褐色粘質土
- 6 灰褐色粘質土（炭少含）

### 土器棺墓 3

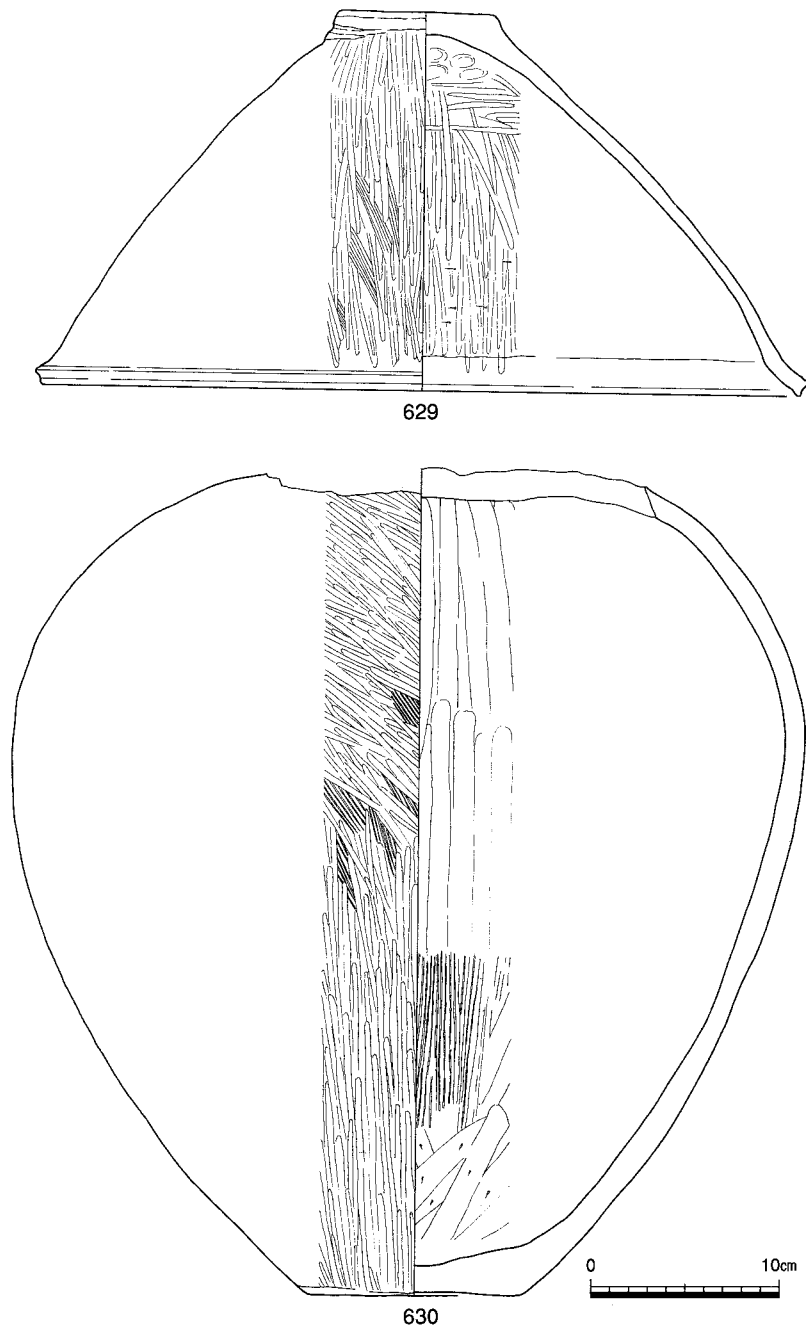
- 1 灰褐色粘性微砂質土
- 2 暗褐色粘質土（基盤ブロック含）
- 3 灰褐色微砂（下面に鉄分）
- 4 にぶい黄色微砂
- 5 褐黄色微砂
- 6 にぶい褐色微砂（焼土粒少含）
- 7 暗緑灰色粘土
- 8 にぶい褐色粘質土
- 9 暗褐色粘質土

第163図 土器棺墓 1～3 (1/20)

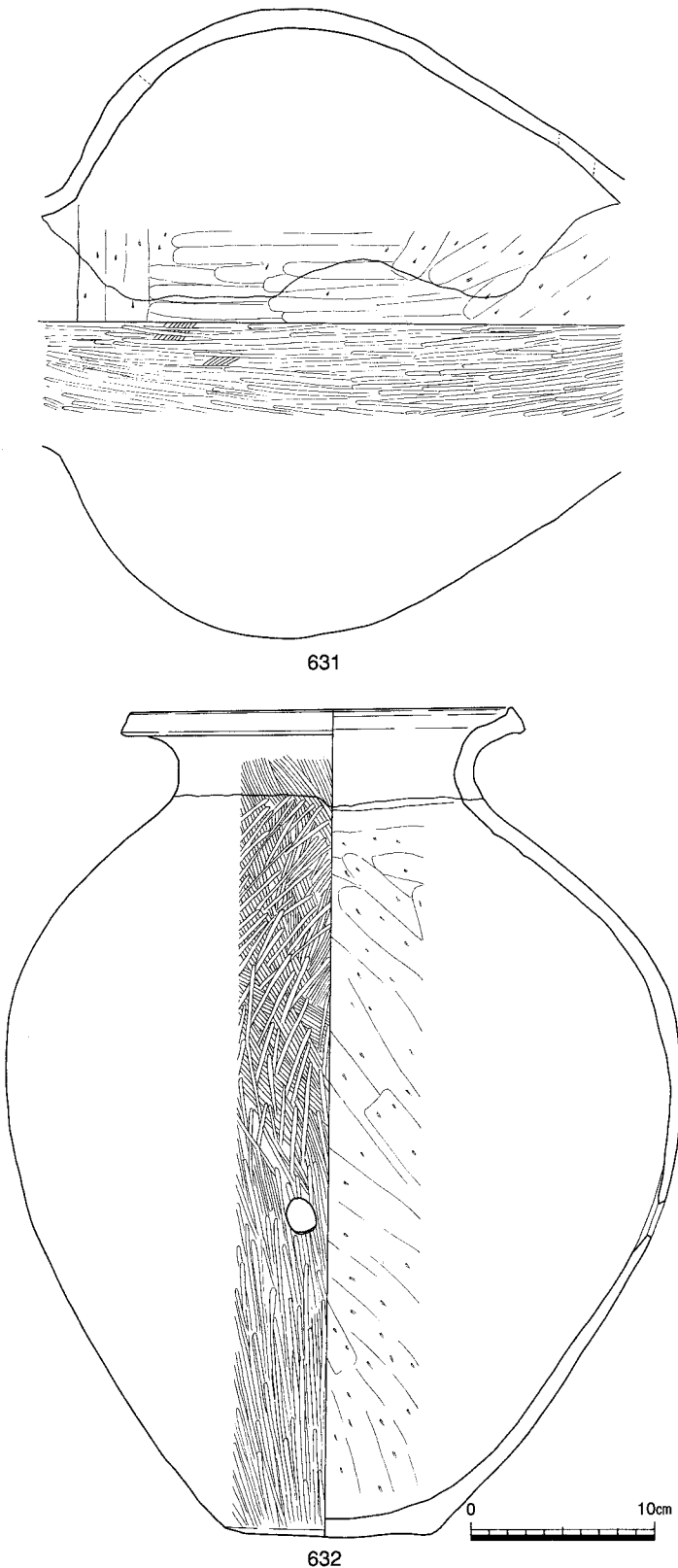
土器棺墓1 (第48・163・164図、図版26-1・2・71)

3基のうち南東端に所在し、墓壙は土器棺墓2の墓壙と接し重複している。重複範囲が小さいため判断がむずかしかつたが、土器棺墓2よりも先行すると判断した。棺身には頸部以上を割り取った壺胴部630を使用している。軸線を北東-南西方向にとり、底部を北東に、開口部を北西斜め上方に向ける。蓋には大形の鉢629を用いる。

土器の器面の状態は良い。棺内流入土は精査したが、歯牙、副葬品などは認められなかった。これは後述の土器棺墓2・3においても同様である。遺構の時期は土器棺墓1～3のいずれも百・後・Ⅱであり、短期間に形成された土器棺墓群とみられる。(宇垣)



第164図 土器棺墓1 出土遺物 (1/4)



第165図 土器棺墓2 出土遺物 (1/4)

**土器棺墓2** (第48・163・165図、  
図版26-1.71)

3基の中央に所在する。土器棺墓1と同様に上部は若干削平を受けている。

軸線は土器棺墓1と同様に北東-南西方向をとるが、土器棺墓1とは逆に棺身底部を南西、開口部を北東に向ける。

棺身には壺632が用いられ、頸部下端から一部頸部下方にかけての部分を打ち欠いて口が形成されている。作り出された口の長径は20cmを測る。打ち欠かれた口縁部・頸部下方の破片は墓壙の底面、棺身の下側に敷くように置かれていた。また、棺身の墓壙底に接する側には径1.8cmの孔が設けられている。穿孔は外側からなされたものである。

棺蓋には壺胴部を縦方向約1/3に割って作り出した大形の部材631を使用する。(宇垣)

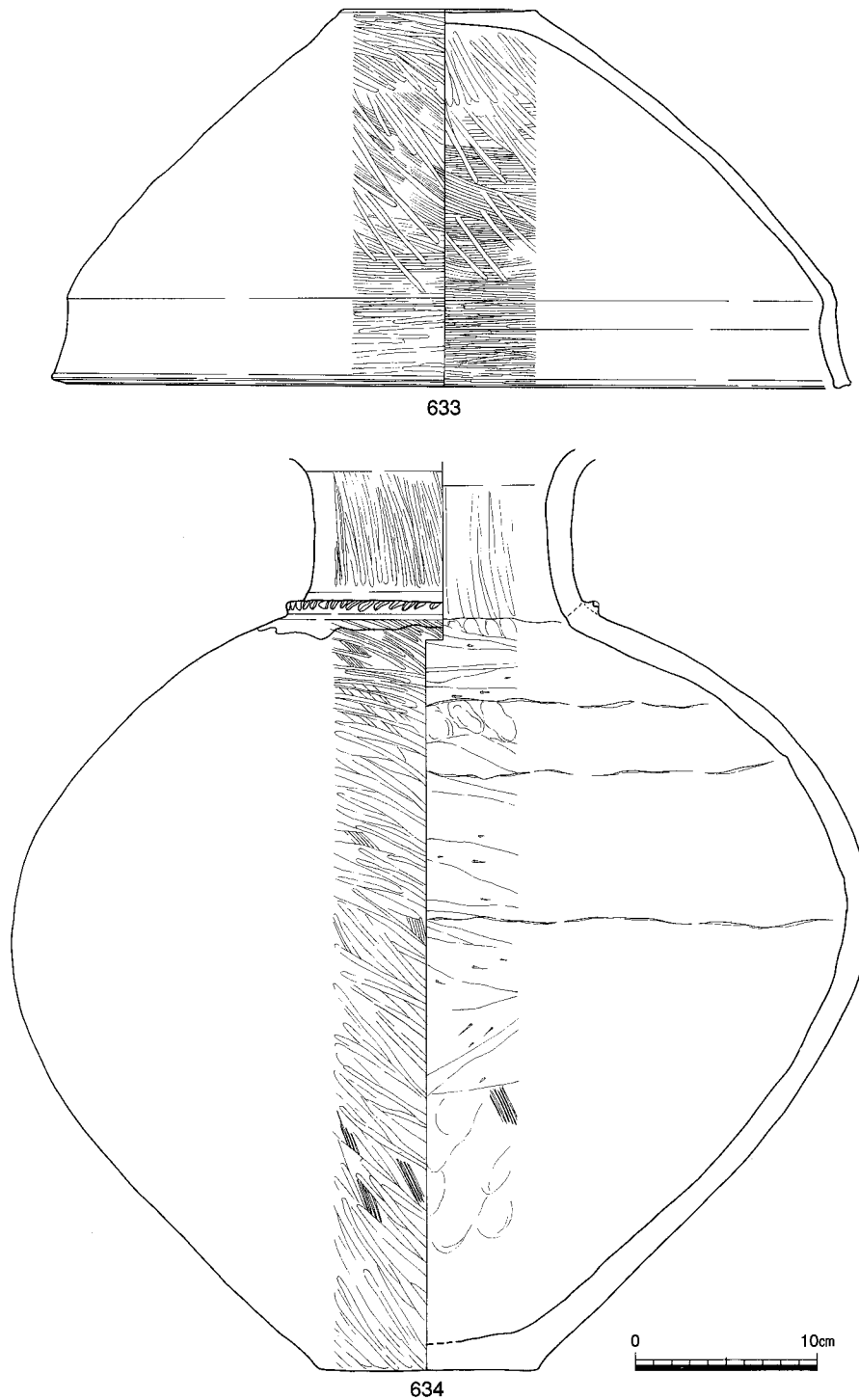
**土器棺墓3** (第48・163・166・167、  
図版26-1.3.71)

3基のうち北端に所在する大形の土器棺墓である。墓壙は広く、他よりも深い。

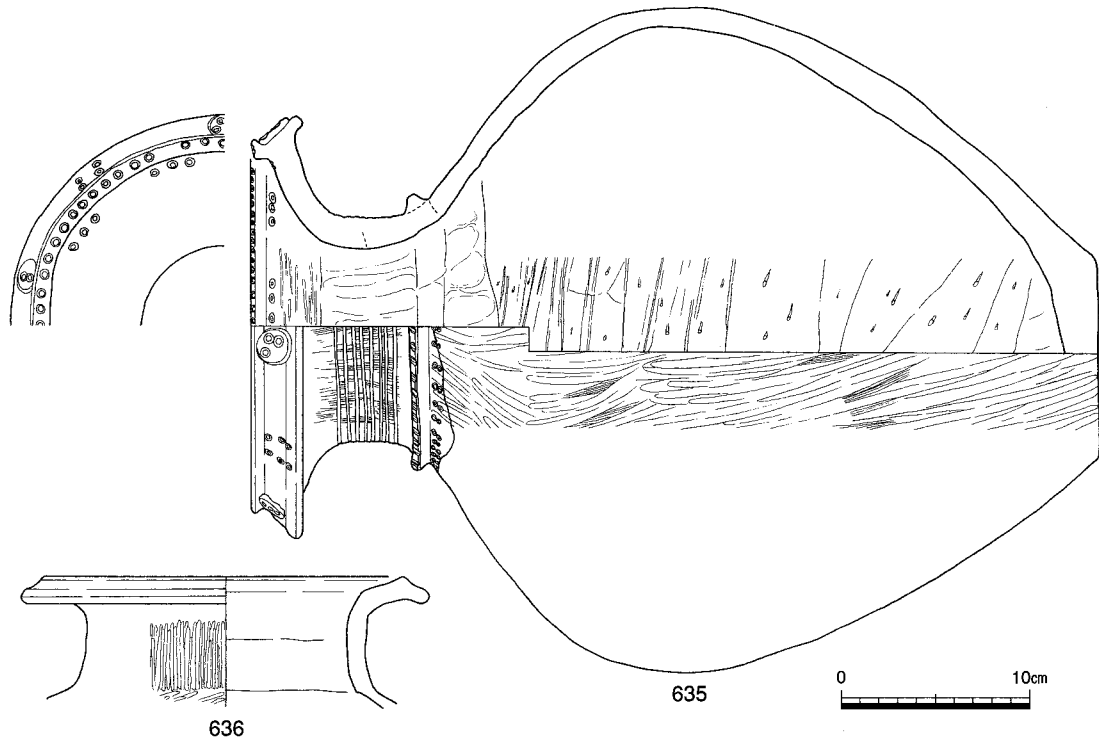
棺には3個体の土器が用いられていた。棺本体には大形の壺634が使用され、その開口部の蓋に鉢633が用いられ、さらにその南西上側は壺635の頸部以上をはずし、胴部を縦方向に割って形成した大形の部材で二重に覆われていた。635の口縁部は棺身の西側に置かれ、他に壺636の口縁部がそれとともに出土した。

棺身634の軸線は南東-北西方向をとり、開口部を南東にむける。開

口部の大きさは破片の落下のため一部不明確であるが19cmを測る。また、接地面側の胴部下半には欠落部があり、穿孔がなされた可能性がある。全体にかなり土圧を受け、胴部の破片が棺内に落ち込んでいたため明確ではないが、棺身片が大きくずれた箇所が見られ、あるいは底部の穿孔の際に胴部が割れ、それを置き直したのかもしれない。鉢633は器表に焼成時の剥離が顕著で器表の荒れはなく、ほとんど使用されていない可能性が考えられるのに対し、壺634はやや器表の荒れが認められる。また、壺635の外表面にはススの付着が見られる。(宇垣)



第166図 土器棺墓3出土遺物① (1/4)

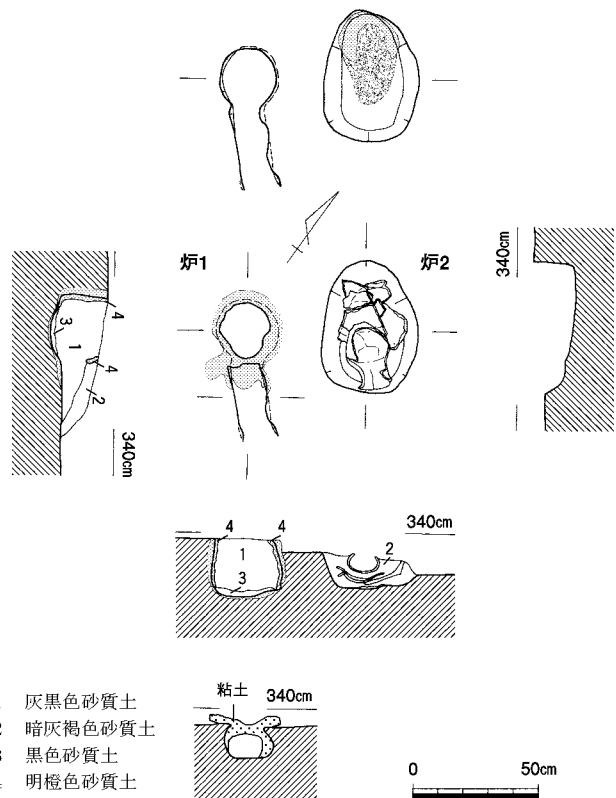


第167図 土器棺墓 3 出土遺物② (1/4)

## 7 炉

### 炉1 (第48・168図、図版27-1・2)

調査区の北西隅、11C区で検出された炉で、比較的良好な状態で検出された。竪穴住居6と7の間に位置し、東には20cm隔てて炉2が並んでいる。掘り方平面形は鍵穴形で、壁面には厚さ1~1.3cmの精製粘土を貼っている。径23cmを測る円形の燃焼部の北東部分に、長さ34cm、幅13cmの焚口が取り付く。壁はやや内傾して立ち上がる。円筒状に延びる燃焼部の上端での内法は現状で18cmである。床面は皿状にくぼみ、炭が堆積している。燃焼部壁面と床は被熱により厚さ2~3cmにわたって明橙色を呈し、特に奥壁や上部では5cmと厚くなっている。焚口部の床面は平坦で、現状では水平に延びているが、前端は住居6の排水溝で失われており、立ち上がることも推測される。燃焼部上に容器を掛けて使用したと推測されるが、目的は限定できなかった。



第168図 炉1・2 (1/30)

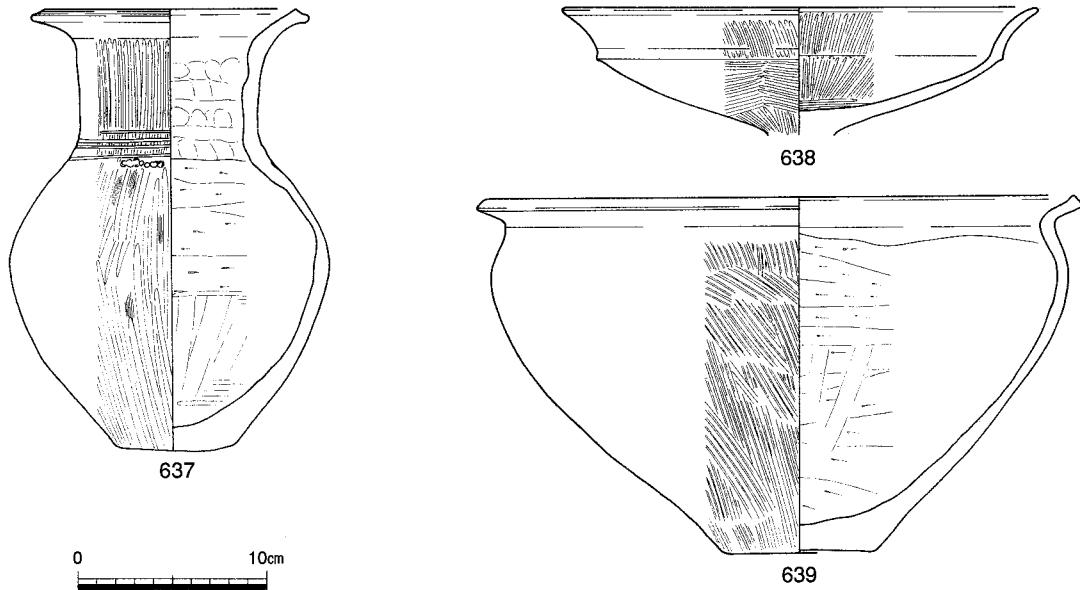


古墳時代初頭で規模はやや大きいですが、類似する遺構が鹿田遺跡で報告されている。出土した甕や高杯の口縁部などの小片や、検出状況などから、時期は百・後・IIと思われる。(柴田)

炉2 (第48・168・169図、図版27-1・2、72-1)

調査区の北西隅、11C区で検出された炉で、竪穴住居6と7の間に位置する。西には20cm隔てて炉1が並んでいる。炉1のような構造の遺構を破壊した状態と推測され、北西の床面付近は円弧を描くように被熱面が確認され、炭の堆積も認められる。破壊の後に鉢639の破片、その上に高杯638の破片、さらに壺637を置く行為が認められる。何れも口縁部を焚口方向に向けている。

出土遺物から、遺構の時期は百・後・IIと思われる。(柴田)

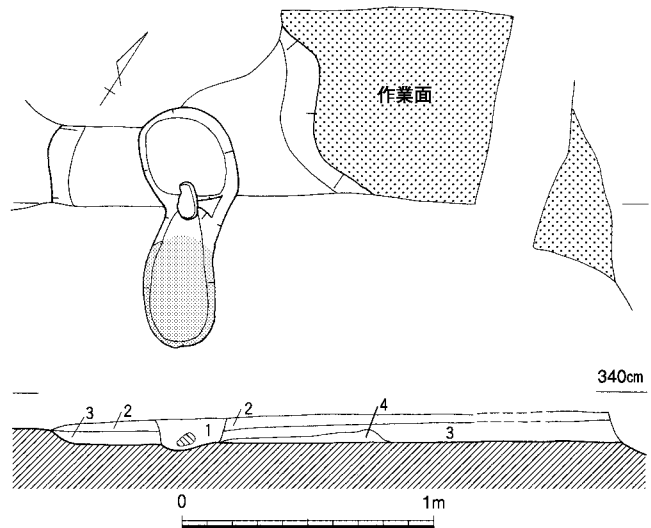


第169図 炉2 出土遺物 (1/4)

炉3 (第48・170図、図版27-3)

11C区で検出し、炉跡1・2の南東側約1.5mに位置する炉跡である。平面形は円形と長楕円形が連結したような形状を呈し、長さ90cm、幅は円形側で36cm、長楕円形側で27cmを測る。円形と長楕円形の連結部はやや高まり、やや傾いた状態の細長い礫を検出している。検出面からの深さは、円形側で12cm、楕円形側で2~3cmを測り、両者の海拔高はほぼ等しい。長楕円形側の底面のみ被熱して明赤褐色を呈する。また、この炉跡の周囲は比較的締まった土がみられ、炉跡はこの浅い堆積を切って築かれている。

削平された住居のカマドの下部とも考えられるが、詳細は不明である。(高田)



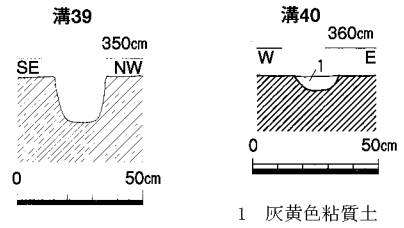
- 1 暗灰黄褐色粘質土 (炭・焼土粒・焼土塊含)
- 2 灰褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 3 暗灰黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 4 暗黄褐色粘質土 (炭・焼土粒少含)

第170図 炉3 (1/30)

## 8 溝

### 溝39 (第48・171図)

11B区の調査区北隅に位置する。検出時の規模は長さ2m、幅20cm、深さ18cmを測り、断面形は「U」字形を呈する。溝は弧を描き、その両端は調査区外となる。また、竪穴住居3と切り合い、溝が新しい。時期は後期と考えられる。(高田)



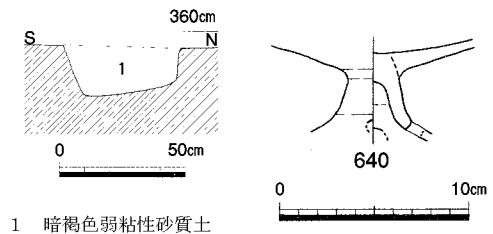
第171図 溝39・40 (1/30)

### 溝40 (第48・171図)

溝40は11B区に位置する。およそ東西方向に緩やかに弧を描いて、途切れ途切れではあるが、長さ9mほど延びる。検出面での幅15cm、深さ6cmの細く浅い溝である。竪穴住居7の外周を巡るような位置関係にあるが、定かでない。出土遺物はなく、多くの柱穴を切って検出されたことから、後期後半の範疇と考える。(物部)

### 溝41 (第48・172図)

溝41は11・12B・C区に位置する。竪穴住居7を切って北西-南東に直線的に約14m延び、いったん途切れ、およそ南北方向に向きを変えて、竪穴住居6を切って約7m延びる。遺物は少量で、溝41の時期は640高杯の特徴から百・後・Ⅲ以後と考えられる。(物部)



第172図 溝41 (1/30)・出土遺物 (1/4)

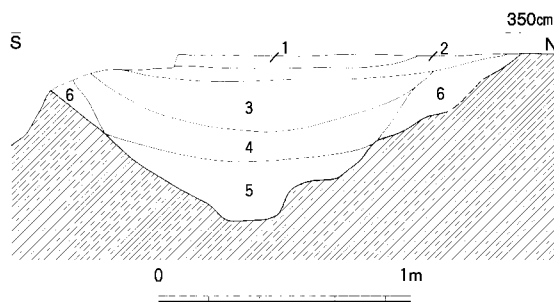
### 溝42 (第48・173図)

11・12B・C区を東西方向に直流する溝で、基盤層上面で検出した。規模は幅190cm、検出面からの深さ66cmを測る。断面形は上部碗形、底面付近が「U」字形となる。出土遺物には後期前半の土器片がある。微高地上を貫流することと、後期の遺構すべてに切られることから、遺物は混入として、溝の時期は後期よりも古くなるものと考えたい。(高田)

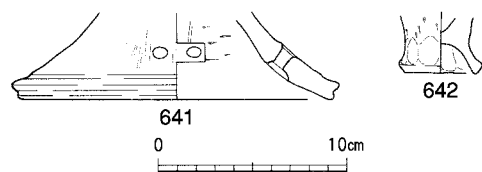
### 溝43 (第48・174~179図、図版28-1・2、72-2、73、74-1)

微高地部と低位部の境界に掘削された大規模な溝で、後述の溝44~47と軸線を同じくし、南流する。先行する溝の埋没後、再掘削がなされており、ここでは前者を下層溝、後者を上層溝と呼ぶ。再掘削

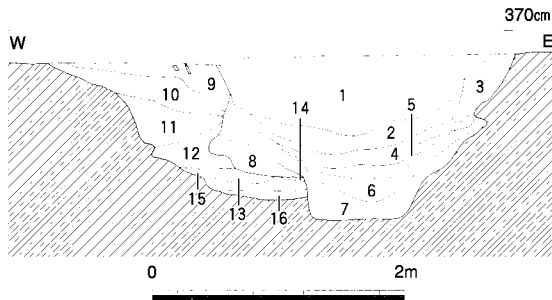
された上層溝は断面が台形を呈し、上幅240cm、深さ130cmを測る。溝壁面の中程、2.8m付近で断面が外側に突出しえぐれを示しており、この高さが再掘削時の水面の位置を示すとみられる。砂、砂質土によって徐々に埋没し、最終的に弥生後期末の洪水砂(1層)によって埋没し



- 1 暗灰黄褐色粘質微砂(下面に炭層)(炭・焼土粒含)
- 2 にぶい黄色粘質微砂(炭・焼土粒少含)
- 3 暗褐色粘質土(上部Mn沈着)(炭・焼土粒少含)
- 4 暗黄褐色粘質土(炭・焼土粒少含)
- 5 暗灰黄褐色粘質土(炭・焼土粒少含)
- 6 暗黄褐色粘質土(炭・焼土粒少含、基盤ブロック含)



第173図 溝42 (1/30)・出土遺物 (1/4)

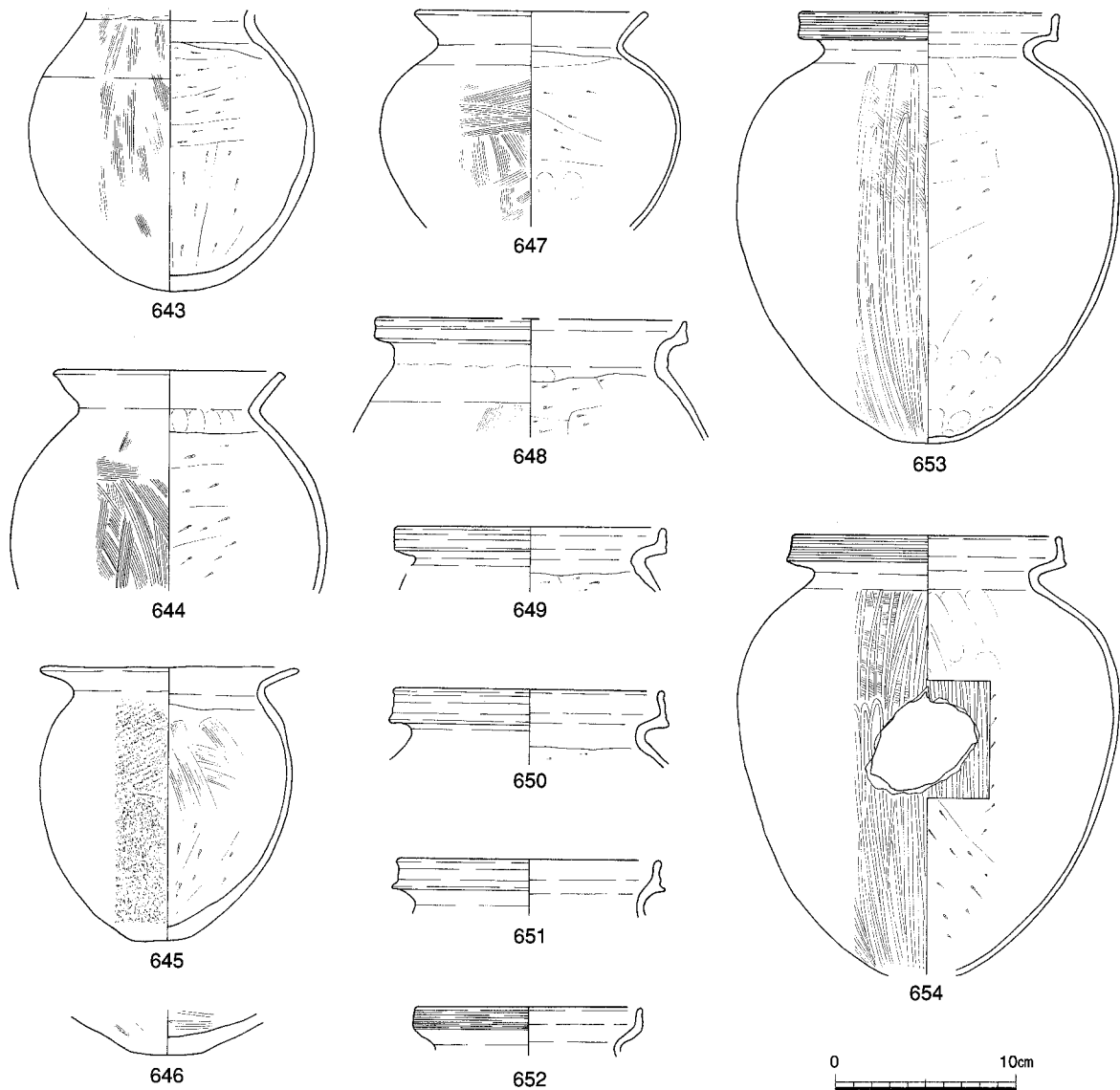


- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| 1 黄褐色弱粘性砂質土       | 9 褐色砂質土 (基盤ブロック含)   |
| 2 淡褐色砂質土          | 10 暗褐色弱粘性砂質土        |
| 3 褐色弱粘性砂質土        | 11 暗褐色砂質土 (基盤ブロック含) |
| 4 灰色砂             | 12 褐灰色弱粘性砂質土        |
| 5 淡灰色砂            | 13 黄色砂質土 (基盤ブロック含)  |
| 6 暗灰色粘質砂と淡灰色砂の互層  | 14 黄色砂質土 (基盤ブロック含)  |
| 7 淡灰～淡黄色砂         | 15 灰色粘質土            |
| 8 淡灰色粘質土 (礫・土器多含) | 16 黄色砂 (下面にFe沈着)    |

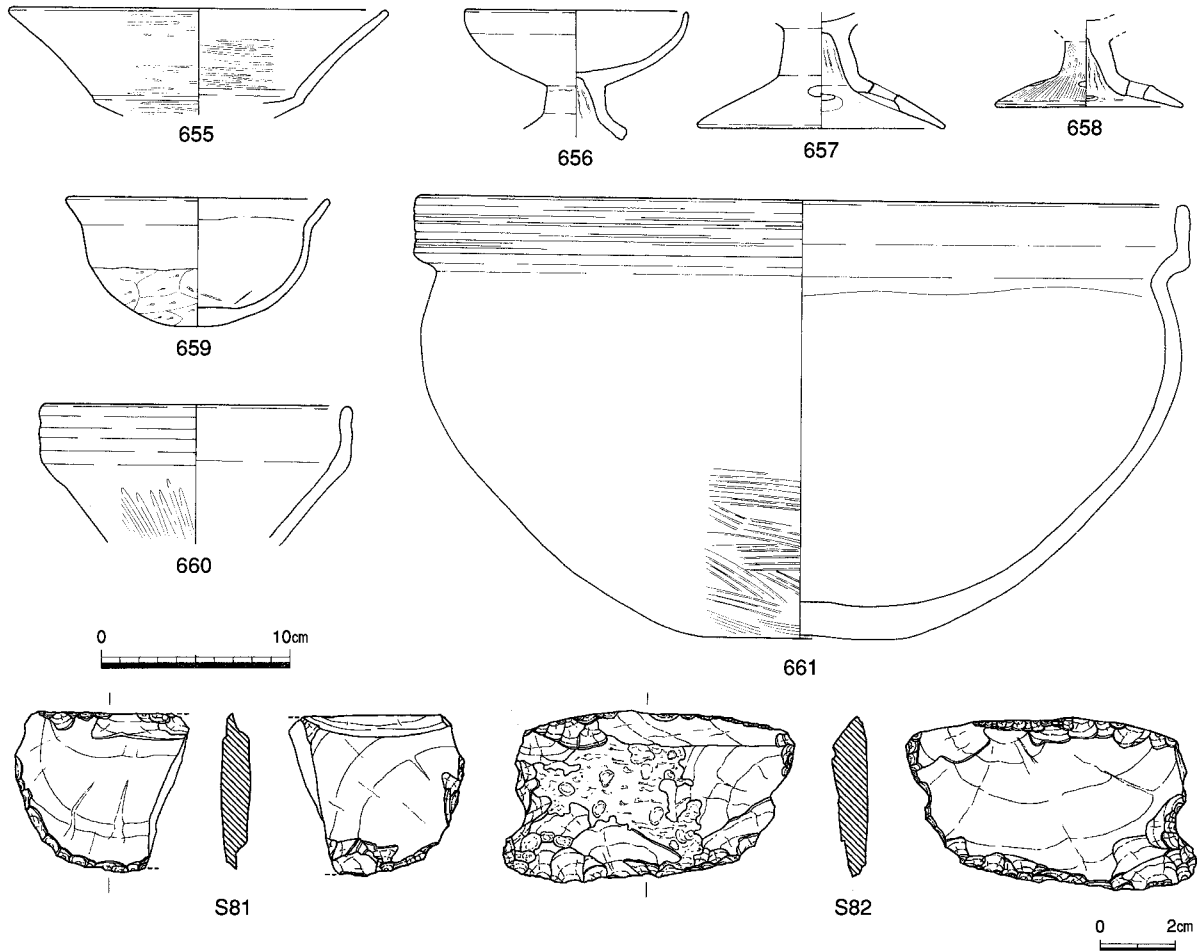
第174図 溝43 (1/60)

ている。1層から古墳時代前期の甕647・652～654が出土しているが、これらは埋没後に混入したものと考えられる。あるいは検出できなかった該期の溝が重複しているのかもしれない。上層溝の時期は甕649～651などに示される百・後・Ⅳと考える。645は外面にタタキが施される。654は胴部に穿孔がなされている。スクレイパーS81、石庖丁S82は上層溝からの出土であるためここに示した。

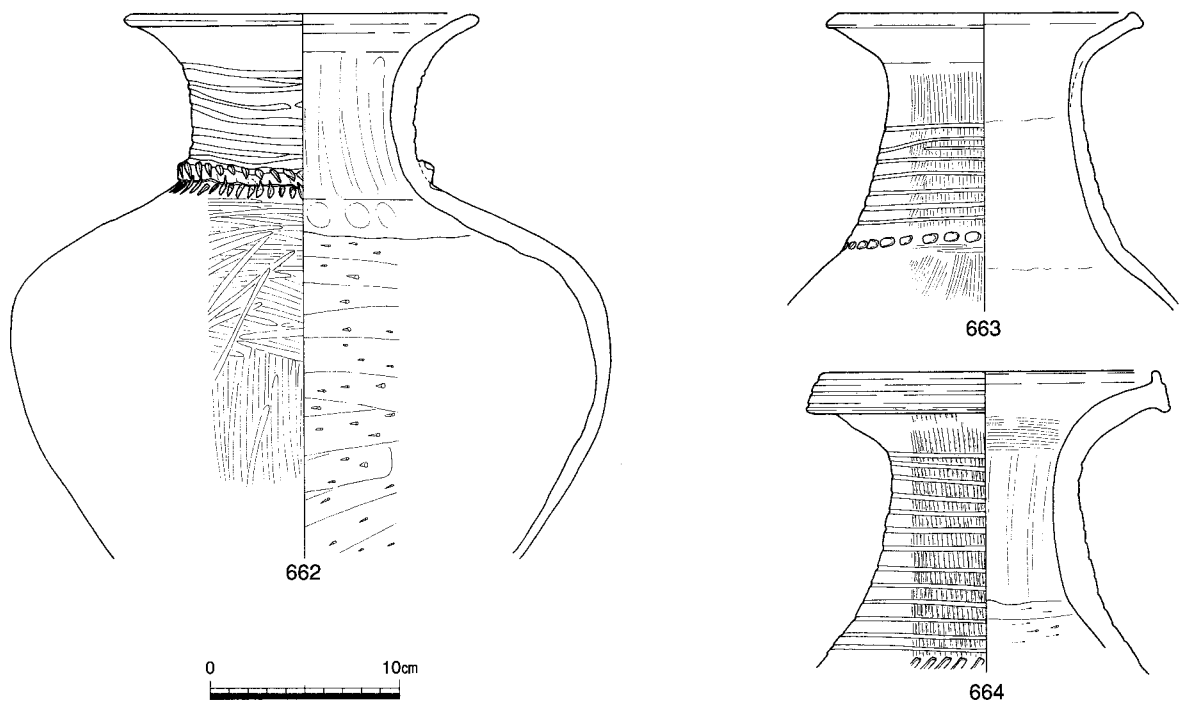
上記に先行する下層溝は上層溝の西側に残存する(9～16層)。深さ110cm



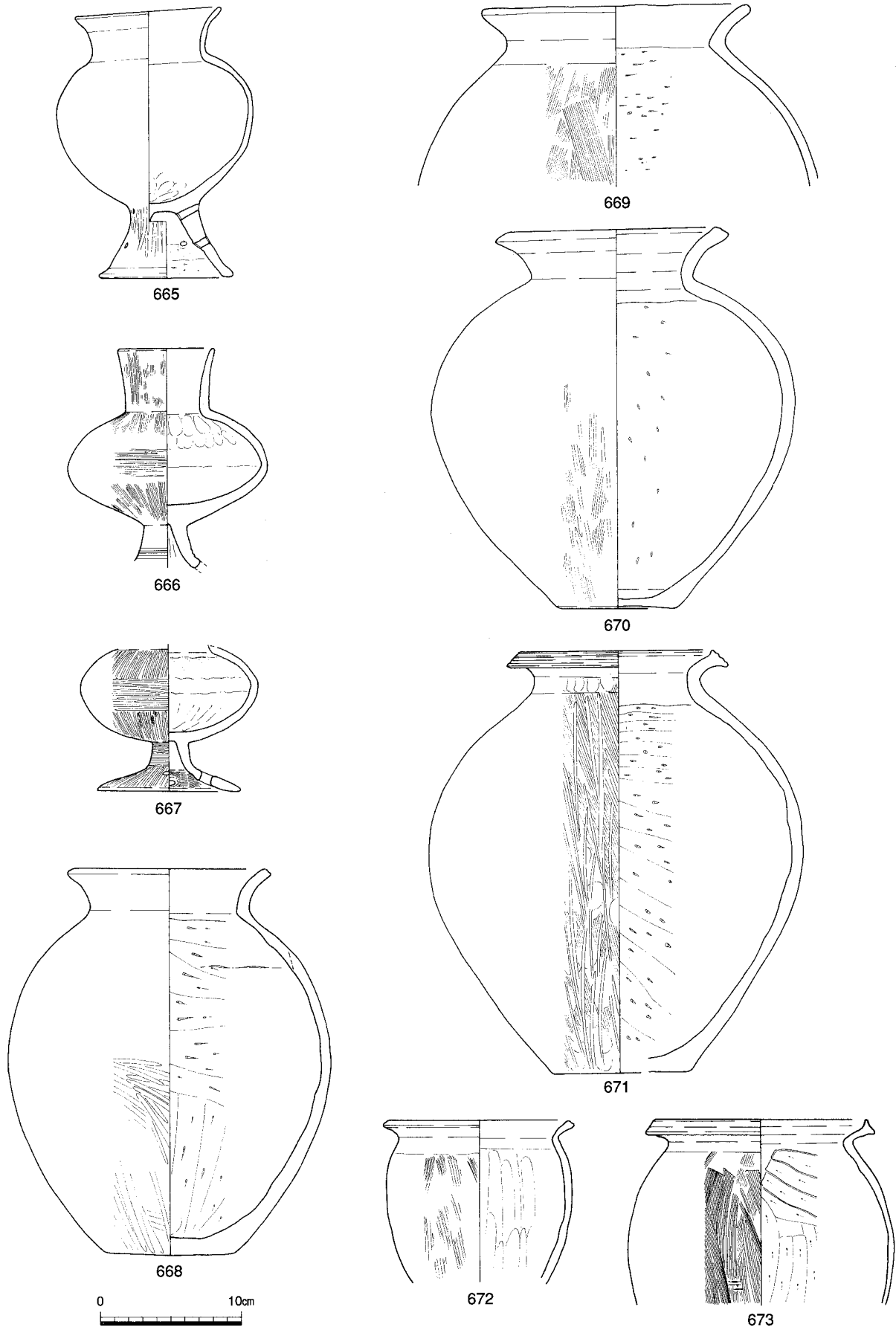
第175図 溝43出土遺物(上層)① (1/4)



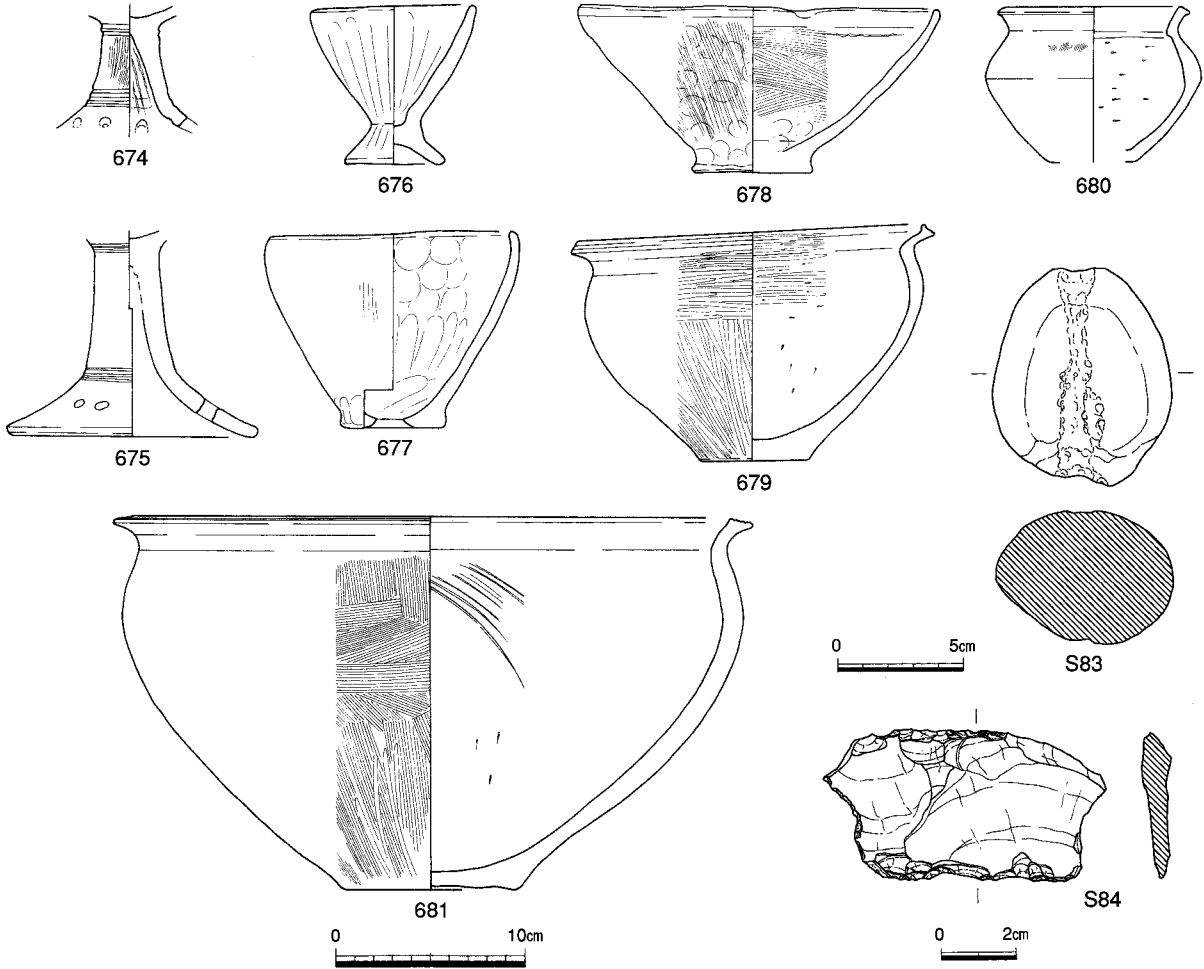
第176図 溝43出土遺物（上層）②（1/4）



第177図 溝43出土遺物（下層）①（1/4）

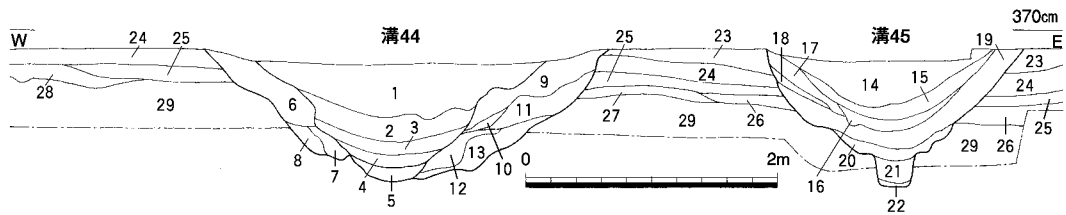


第178図 溝43出土遺物（下層）②（1/4）



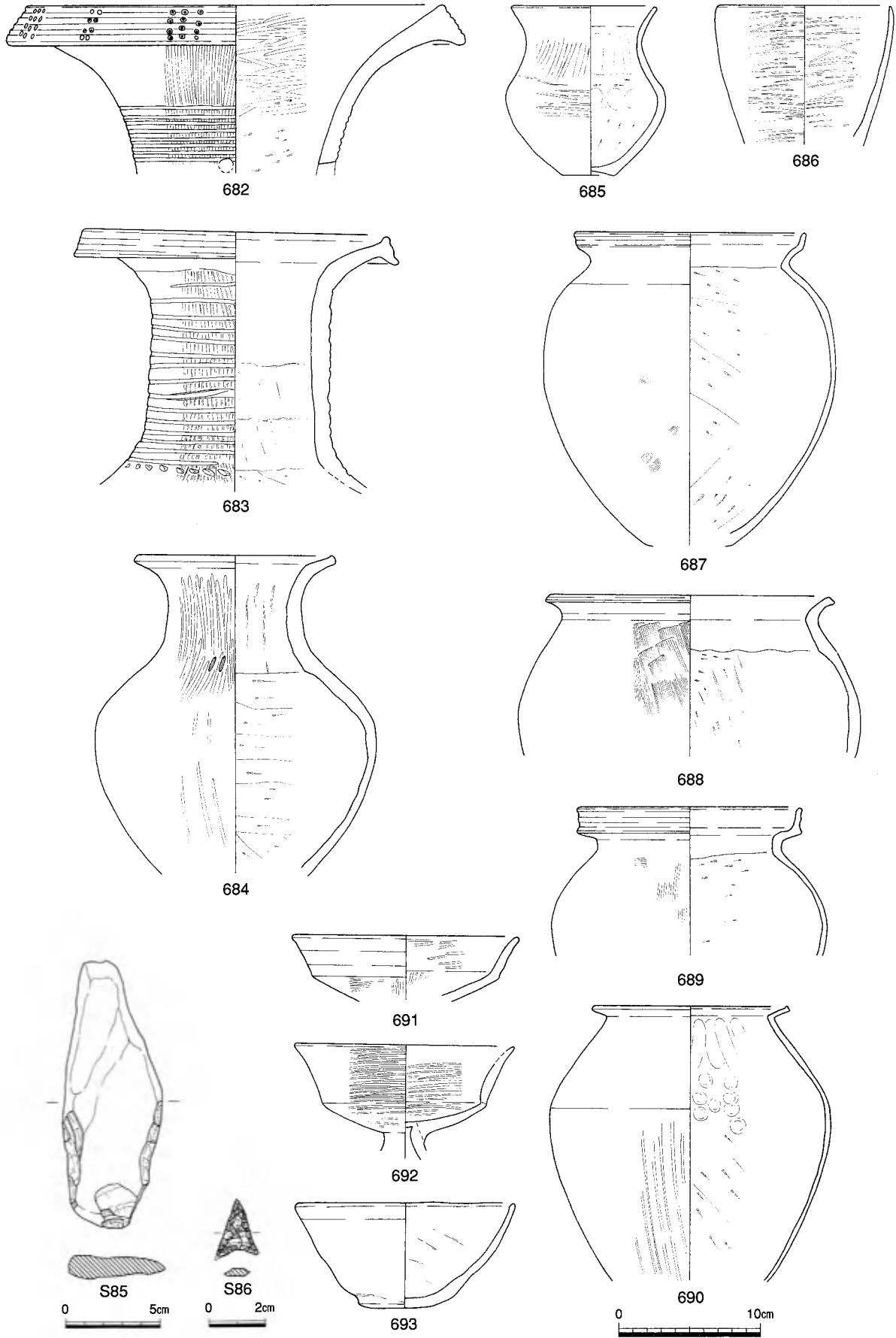
第179図 溝43出土遺物（下層）③ (1/4・1/3・1/2)

を測り、幅約250cmに復元される。堆積土の中層以上には微高地基盤層のブロックが含まれており、機能を失った後に、埋められた可能性が考えられる。堆積土中には遺物が含まれているが、とりわけ土壙42西側ではえぐれ込んだようになっており、その部分では西側から土器がまとまって流入したかのような土器溜まりが形成されていた。いずれも百・後・Ⅱに位置付けられる。(宇垣)

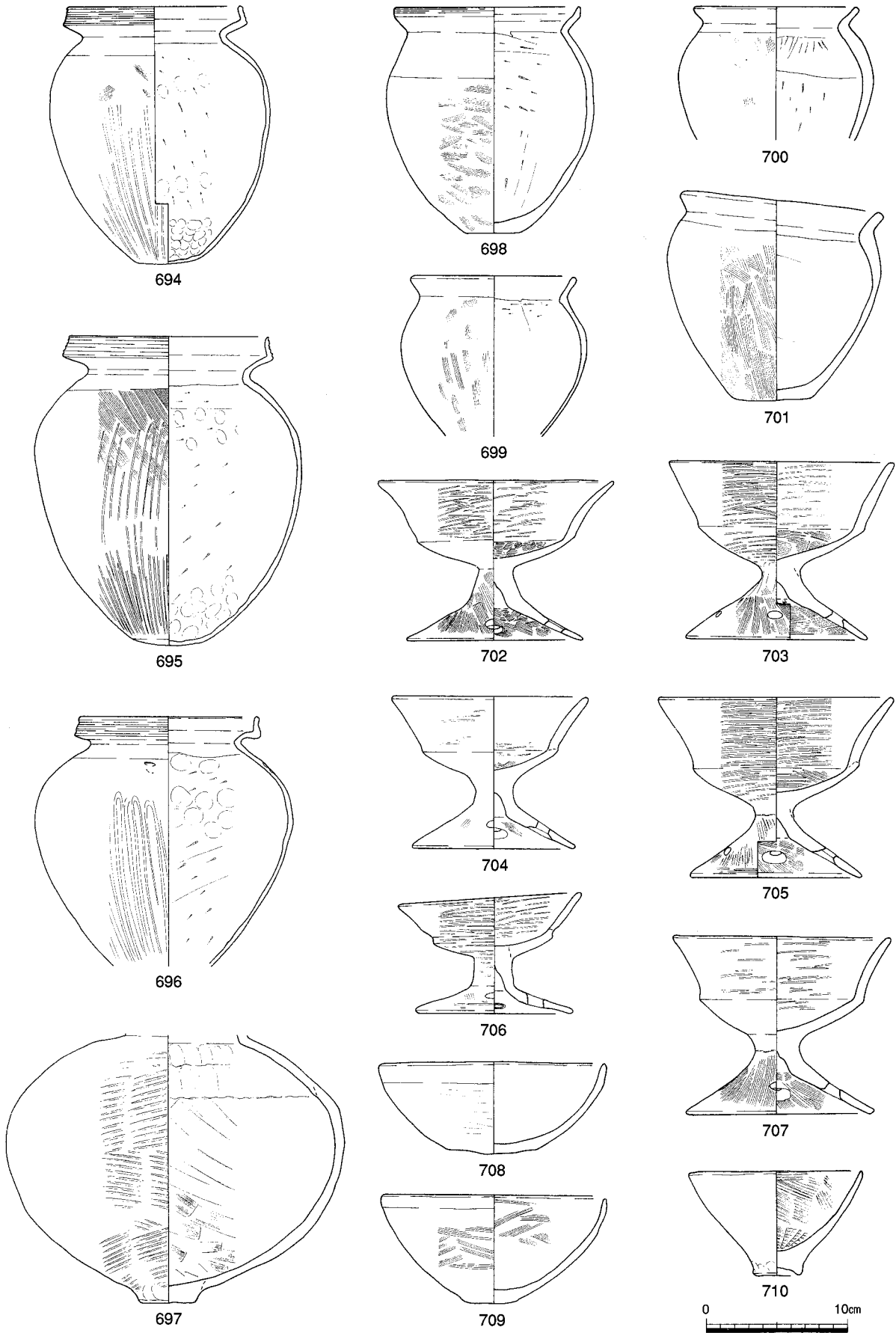


- |                     |               |                    |
|---------------------|---------------|--------------------|
| 1 にぶい黄褐色微砂          | 11 にぶい黄褐色粘質微砂 | 21 暗褐色粘質微砂         |
| 2 褐灰色微砂 (浅黄色微砂斑含)   | 12 灰色粘質土      | 22 灰色粘質微砂          |
| 3 緑灰色と浅黄色微砂薄層の互層    | 13 黄灰色粘質土     | 23 にぶい黄褐色土         |
| 4 褐灰色微砂             | 14 にぶい黄褐色粘質微砂 | 24 灰茶褐色土           |
| 5 灰色粘質砂             | 15 灰褐色粘質微砂    | 25 にぶい黄色土 (Fe沈着)   |
| 6 黄褐色粘質土            | 16 暗灰色粘質微砂    | 26 暗黄褐色粘質微砂        |
| 7 黄灰色粘質土            | 17 灰黄色粘質微砂    | 27 暗橙褐色砂質土         |
| 8 灰黄褐色粘質土           | 18 明灰黄色粘質微砂   | 28 暗黄灰褐色砂質土        |
| 9 黄褐色粘質微砂 (浅黄色微砂含)  | 19 灰色粘質微砂     | 29 にぶい黄色粘質砂 (Mn沈着) |
| 10 黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含) | 20 褐灰色粘質微砂    |                    |

第180図 溝44・45 (1/60)



第181図 溝44出土遺物 (1/4・1/3・1/2)



第182図 溝45出土遺物（上層）（1/4）



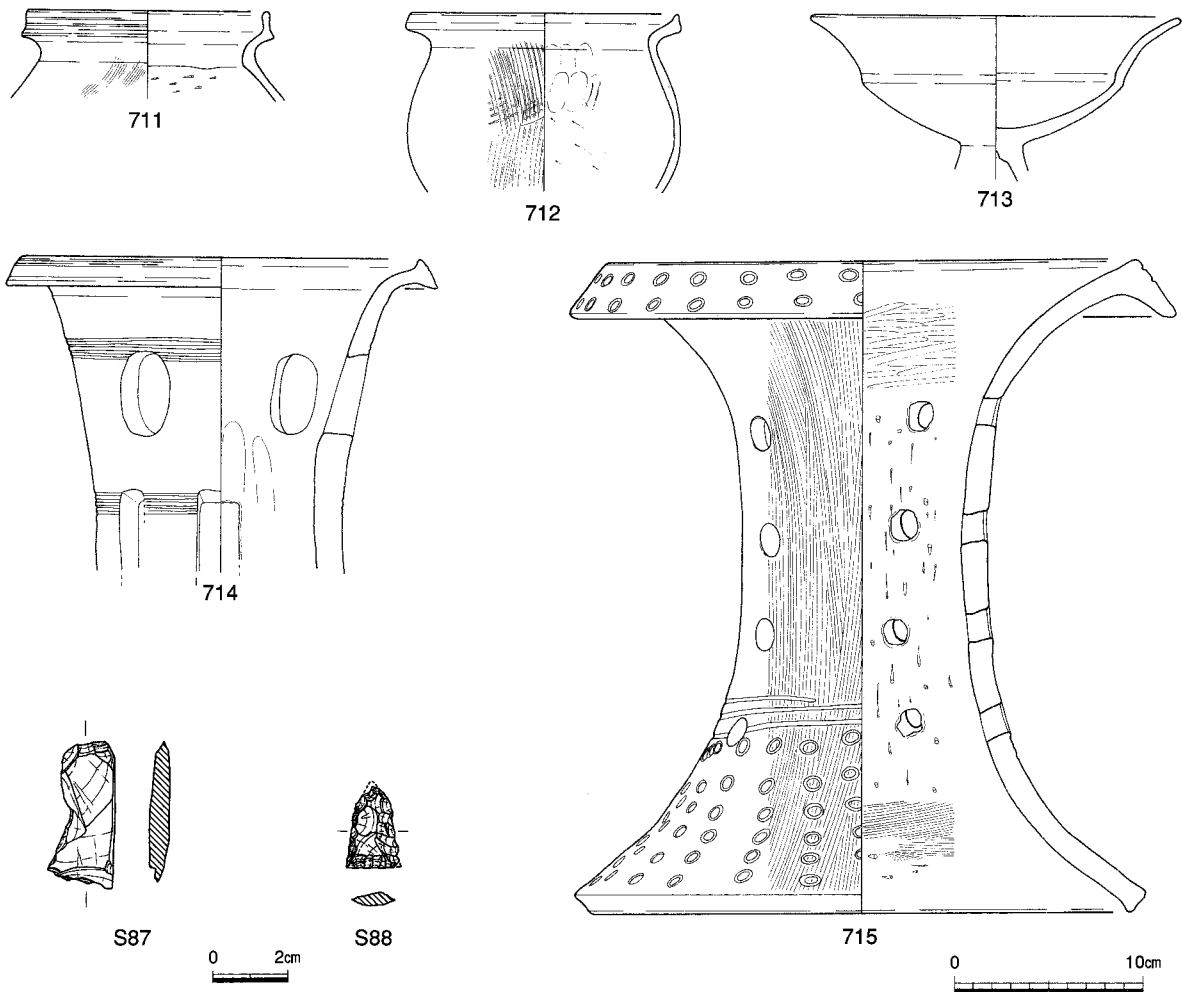
溝44 (第48・180・181図、図版28-3, 74-1)

13B・C区に位置し、溝43・45・46とともに調査区内で平行して流れる4条の溝のひとつとして検出した。西側の溝43とは1~3.5m、東側の溝45とは1.5~2mの距離を置く。南側は『百間川原尾島遺跡5』の「溝15」につながる。数度の改修が推定され、最終的には後期末の洪水砂で埋没している。第180図の第1~5層がこれにあたる。溝の最大規模は幅321cm、深さ110cmを測り、洪水砂埋没段階の幅は235cmである。既報告では洪水砂埋没段階に本溝と溝43をつなぐ溝が検出されるなど、周囲の溝と有機的関係にあり、幹線用排水路として機能していたものであろう。(高田)

溝45 (第48・180・182・183図、図版75, 76-1)

13B・C区を直線的に流走する溝で、溝44の東側に位置する。その南側は『百間川原尾島遺跡5』の「溝17」につながる。溝の規模は幅205cm、深さ110cmを測る。断面形は椀形で、その底面が一段深く「U」字形に落ち込む。埋土は上・中・下層に分けられ、第180図の第14~16層が上層、第17~20層が中層、第21・22層が下層である。この上層は後期末の洪水砂と酷似しているが、他の溝の洪水砂段階と比べて著しく浅いことから、溝が廃絶した後の堆積の可能性が高い。

出土遺物は弥生土器とサヌカイト製の石製品がある。上層の遺物は断面位置付近でまとまって出土している。高杯の出土割合が比較的高い。下層遺物の時期は百・後・Ⅲと考えられる。(高田)



第183図 溝45出土遺物 (下層) (1/4・1/2)

溝46 (第48・184・213図)

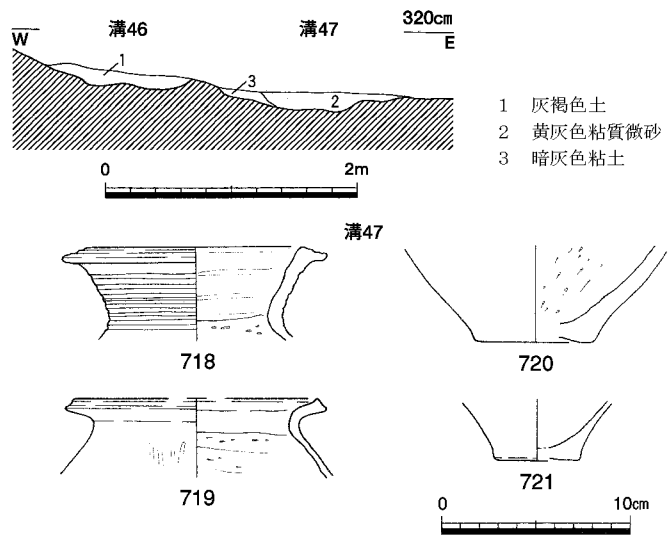
13B・C区、微高地と水田の境界付近で検出された溝である。第213図の8層は水田層と思われ、洪水砂に覆われた水田よりも古く、溝47よりも新しい。溝46は8層に対応する水路と推測される。

幅は115cm、深さは10cmを測るが、13B区では2～3条の流路が認められることから、複数回掘り直されていると思われる。出土遺物などから、遺構の時期は百・後・I～IIと思われる。(柴田)

溝47 (第48・184・213図)

13B・C区、微高地と水田の境界付近で検出された溝である。第213図の8層よりも古く、溝46よりも古い可能性が高い。幅は150cm、深さは20cmを測る。後期における開田当初は、この溝が微高地端部に掘削され、水路として機能していたと推測される。

出土遺物などから、遺構の時期は百・後・Iと思われる。(柴田)

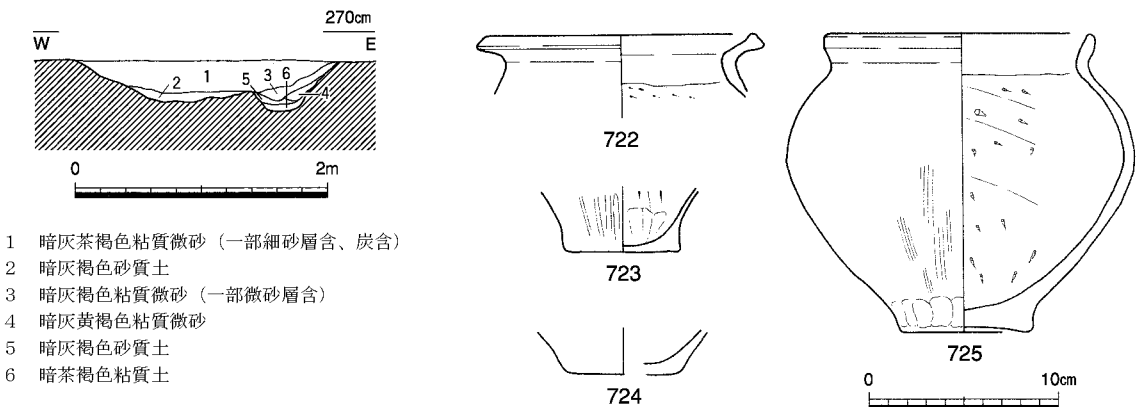


第184図 溝46・47 (1/60)・出土遺物 (1/4)

溝48 (第46・185図)

15B・C区を蛇行しながら南北方向に流走する溝である。後期末の水田耕土除去後の旧河道2上で検出したものである。先述した土壙28と切り合い関係にあり、土壙よりも古い。溝の規模は幅210cm、検出面からの深さ35cmを測る。底面の形状は、北半部分は細かい凹凸があるもののほぼ平坦で、断面逆台形を呈する。南半部分は溝状の落ち込みが見られる。埋土は砂と粘質土によるもので、これは旧河道2の上層埋土に酷似する。出土遺物は弥生土器片とサヌカイト片である。

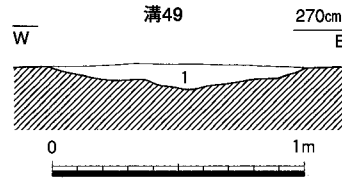
溝の時期は百・後・IIで、検出状況から旧河道2の最終流路と考えられる。(高田)



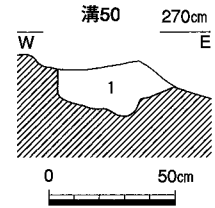
第185図 溝48 (1/60)・出土遺物 (1/4)

溝49 (第46・186図)

15B区で検出された溝で、幅は100cm、深さは10cmを測る。溝48のような流路の一部と考えられる。壺の小片などが出土しており、遺構の時期は後期におさまると思われる。(柴田)



1 暗灰褐色粘土 (炭含)



1 灰色粘土 (炭・焼土粒少含)

第186図 溝49・50 (1/30)

溝50 (第46・186図)

16B・C区に位置する溝である。古墳時代の溝80に大半が切られているため、検出長は北東—南西方向の約6.5mを測るに過ぎない。検出時の規模は幅45cm、深さ22cmである。

出土遺物は、少量の縄文土器片と弥生土器片、サヌカイト片である。

溝の時期は、検出状況から弥生時代と考えられる。(高田)

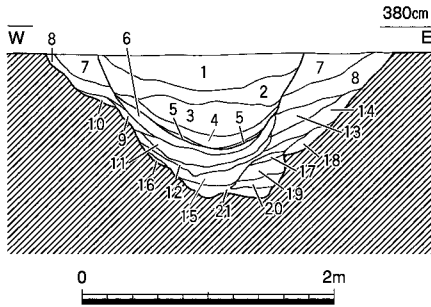
(高田)

溝51 (第46・187図、図版29-1)

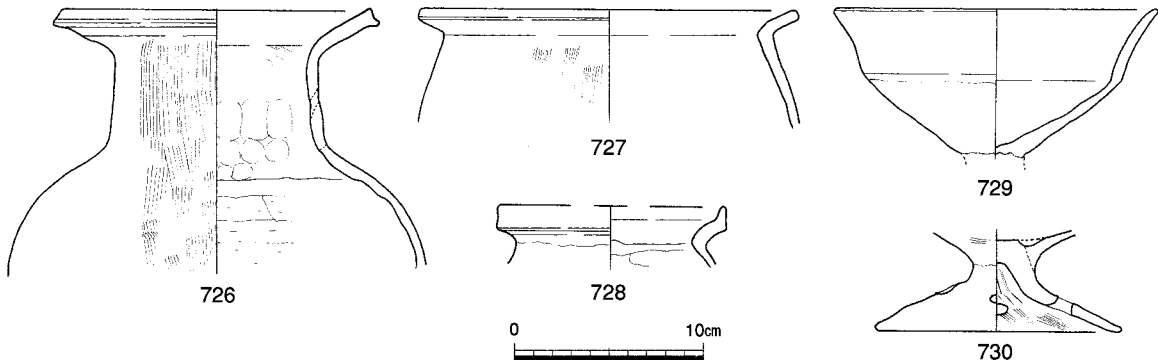
16B・C区で検出された溝で、東から延びてきて調査区内で屈曲し、南へ真っ直ぐのびている。掘削当初の上端幅は280cm、深さは100~120cmを測り、土層からは数回の掘り直しが認められる。南へのびる部分と同一方向の溝52がその一部と思われる。掘り方上方は「ハ」字に開き、底部付近は狭く、壁は急に立ち上がる。洪水砂で埋没する際の上端幅は160cm、深さは75cmを測る。この時の断面形は「U」字形を呈する。

洪水砂で埋没する以前の埋土からは、甕728、高杯730など百・後・IVの土器が出土している。一方、最終流路の埋土中に含まれる土器には、壺726、甕727に加えて高杯729がある。この高杯が溝の埋没時期の上限を示すと思われる。(柴田)

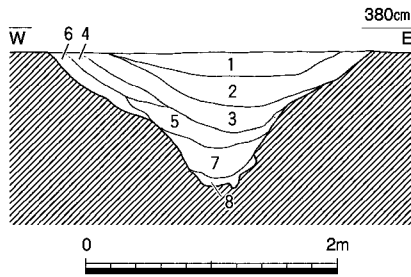
(柴田)



- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| 1 灰黄褐色微砂           | 12 黒灰色～暗黄灰色粘土 (炭粒含)  |
| 2 灰黄褐色微砂           | 13 灰黄色粘土             |
| 3 にぶい黄色微砂          | 14 褐灰色粘土             |
| 4 黄灰色微砂            | 15 暗黄灰色粘土 (炭・焼土粒含)   |
| 5 灰色粘質微砂           | 16 明灰褐色粘質微砂          |
| 6 黄褐色粘質微砂          | 17 明黄褐色粘質微砂ブロック      |
| 7 にぶい黄褐色粘質微砂       | 18 灰オリーブ色粘質微砂        |
| 8 赤褐色粘土 (焼土粒少含)    | 19 暗黄灰色ブロックと暗黄褐色ブロック |
| 9 灰褐色粘土            | 20 にぶい黄色微砂           |
| 10 灰黄色粘質微砂         | 21 暗灰色粘土             |
| 11 暗黄灰色粘土 (炭・焼土粒含) |                      |



第187図 溝51 (1/60)・出土遺物 (1/4)



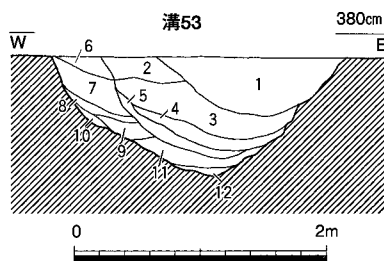
- 1 灰黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒多含)
- 2 灰黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒少含)
- 3 灰黄褐色粘質微砂
- 4 暗灰黄褐色粘質微砂
- 5 暗褐灰色粘質微砂 (炭・焼土含)
- 6 暗黄褐色粘質微砂 (Mn含)
- 7 暗灰黄色粘土 (炭・焼土含)
- 8 暗灰色粘土 (灰色微砂斑含)

第188図 溝52 (1/60)

第189図の第1～4層が上層、第5層が下層で、第6～12層は溝54埋土であるが、調査時は溝54との重複部分を下層として同時に掘り下げている。溝53の規模は幅195cm、深さ100cmを測り、断面形は碗形を呈する。出土遺物は、弥生土器、土製品、石製品、サヌカイト片がある。C28は高杯の脚柱部を転用した砥石と考えられるものである。また、745の壺底部には貝殻の圧痕がみられる。遺物の時期は、下層が百・後・Ⅱ～Ⅲ、上層が百・後・Ⅳと考えられる。

溝54 (第46・189・191図)

前述の溝53と流路をほぼ重複する溝である。溝は北東から南西方向に直流し、調査区端近くで西に向きを変える。その続きは『百間川原尾島遺跡5』の「溝19」につながる。第189図の第1～7層が溝54で、この部分での規模は幅270cm、深さ95cmを測る。断面形は上開きの「V」字形を呈し、底面



- 1 灰黄褐色砂質土 (下面暗灰黄褐色粘質微砂斑含)
- 2 灰黄褐色砂質土 (にぶい黄色微砂斑含)
- 3 にぶい黄色微砂～赤黄色微砂
- 4 にぶい黄褐色微砂と暗灰黄色粘質微砂互層
- 5 暗灰黄色粘質土 (炭・焼土粒含)
- 6 灰黄褐色砂質土
- 7 灰褐色砂質土
- 8 灰褐色砂質土 (黄色微砂基盤塊含)
- 9 灰褐色粘質土
- 10 灰黄色砂質土
- 11 暗灰褐色粘質土 (炭・焼土粒含)
- 12 暗灰黄色粘質土 (炭・焼土粒含)

溝52 (第46・188図、図版29-1)

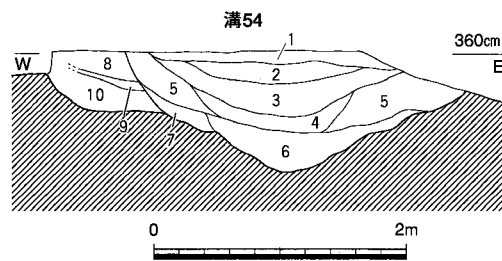
16B区で検出された溝である。北から南へのびているが、C区以南では溝51に踏襲されている。掘り方上方は皿状に開くが、底部付近は狭く、壁は急に立ち上がる。上端幅は260cm、深さは180cmを測り、土層からは掘り直しが認められる。

出土遺物には高杯などの小片があり、それらの特徴や溝51との切り合い関係などから遺構の時期は百・後・Ⅱ～Ⅲと思われる。(柴田)

溝53 (第46・189・190図、図版29-1. 76-2)

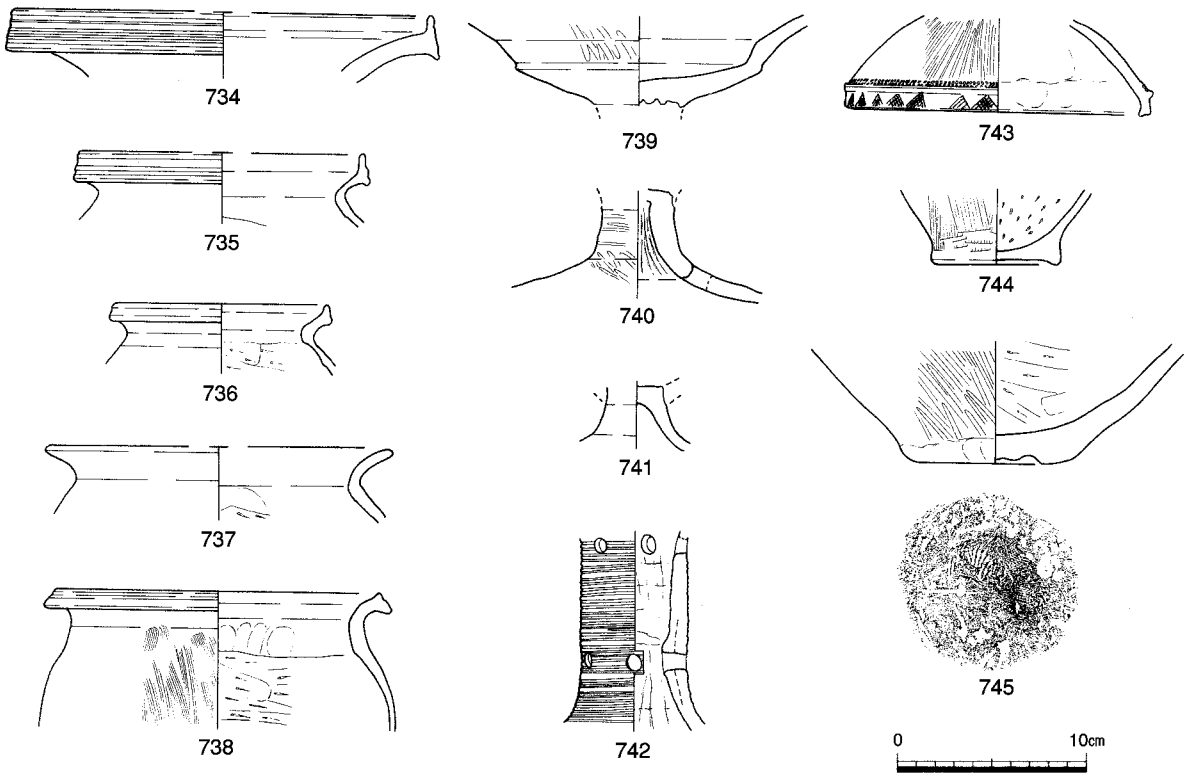
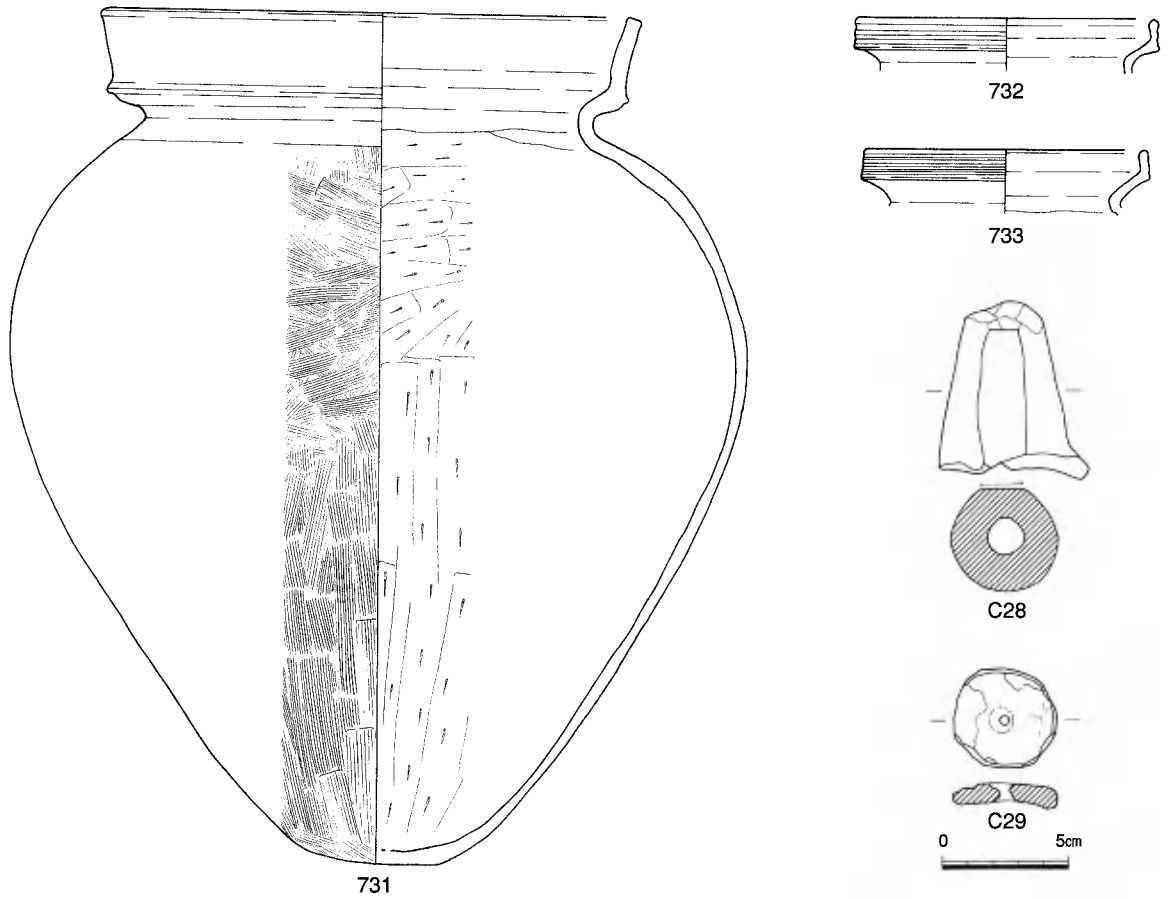
17B・C区に位置する溝で、北東から南西方向に直線的に流走する。後述する溝54の流路にほぼ重なるが、南端部で溝54と分かれる。調査は、後期末の洪水砂での埋没部分を上層、それ以下を下層として掘り下げた。上層は『百間川原尾島遺跡5』の「水路2」、下層は「溝21」につながる。

第189図の第1～4層が上層、第5層が下層で、第6～12層は溝54埋土であるが、調査時は溝54との重複部分を下層として同時に掘り下げている。溝53の規模は幅195cm、深さ100cmを測り、断面形は碗形を呈する。出土遺物は、弥生土器、土製品、石製品、サヌカイト片がある。C28は高杯の脚柱部を転用した砥石と考えられるものである。また、745の壺底部には貝殻の圧痕がみられる。遺物の時期は、下層が百・後・Ⅱ～Ⅲ、上層が百・後・Ⅳと考えられる。

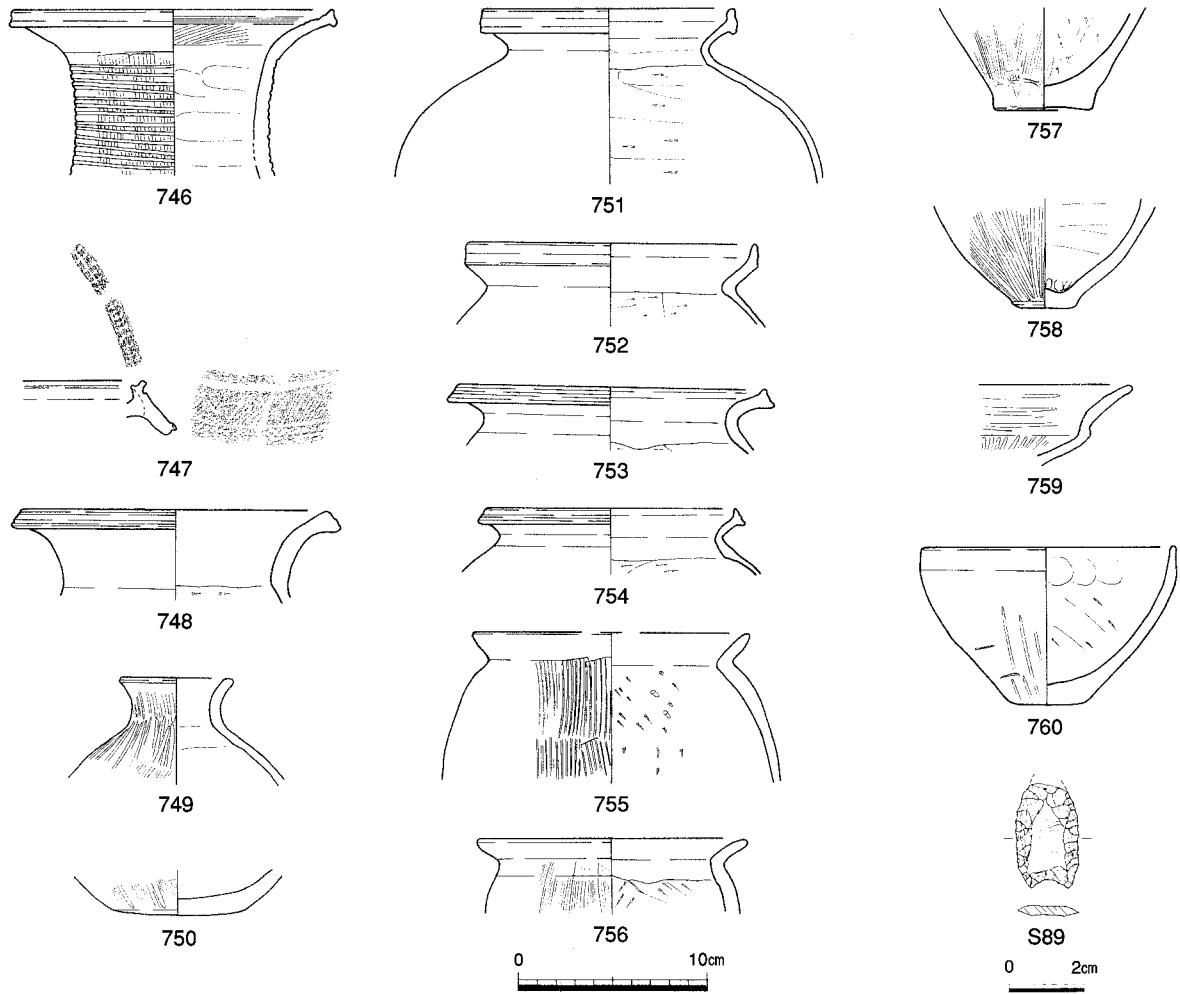


- 1 にぶい黄色微砂
- 2 灰黄褐色砂質土 (にぶい黄色微砂斑、炭・焼土粒含)
- 3 灰黄褐色砂質土 (浅黄色微砂斑多含、炭・焼土粒含)
- 4 黄灰色粘質微砂 (浅黄色微砂斑少含、炭・焼土粒含)
- 5 灰黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 6 黄灰色粘質微砂 (黄褐色粘質土基盤塊含、炭・焼土粒多含)
- 7 暗褐灰色砂質土 (炭・焼土粒含)
- 8 黄褐色土 (炭・焼土粒含)
- 9 黄灰色砂質土 (炭・焼土粒含)
- 10 灰黄色土 (炭・焼土粒含)

第189図 溝53・54 (1/60)



第190図 溝53出土遺物（上段：上層、下段：下層）（1/4・1/3）



第191図 溝54出土遺物 (1/4・1/2)

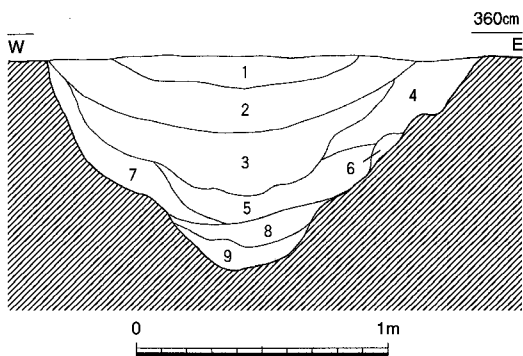
は浅い溝状に一段低くなる。壁が数段に落ち込むことと合わせ、数回の改修が想定される。

出土遺物は、弥生土器、石製品、サヌカイト片がある。S89はサヌカイト製の石鏃である。

遺物の時期は百・後・Ⅱ～Ⅲと考えられ、『百間川原尾島遺跡5』において「溝19」が水田層下の「溝17・18」に続いていくことと合わせ、開田期の用水路と考えられる。(高田)

溝55 (第46・192図)

17・18B・C区を南北方向に直線的に流れる溝で、本来は後期末の洪水砂埋没の溝であるが、上部に古墳時代後期の溝81がほぼ重なる。第192図の第1～7層が溝81で、第8・9層が溝55である。溝の南端は『百間川原尾島遺跡5』の「水路3」につながる。底面の海拔高は267cmを測る。出土遺物は弥生土器片とサヌカイト片である。(高田)



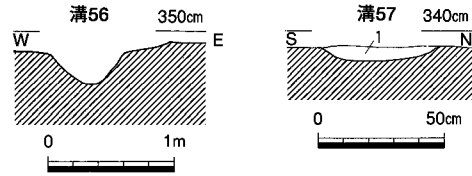
- |           |                   |
|-----------|-------------------|
| 1 灰褐色土    | 6 灰色粘質土           |
| 2 暗褐色粘質微砂 | 7 灰黄褐色粘質土 (炭・焼土含) |
| 3 黒灰色粘土   | 8 にぶい黄色微砂 (炭・焼土含) |
| 4 暗褐色粘土   | 9 暗褐色粘質土 (炭・焼土粒含) |
| 5 灰黄色粘質土  |                   |

第192図 溝55 (1/30)

溝56 (第46・193図)

17B区隅に位置する溝である。18ラインに沿うように検出したが、両端は不明瞭である。規模は幅110cm、深さ32cmを測る。断面形は「V」字形を呈し、東肩が一段浅くなる。

検出状況から後期と考えられる。(高田)



1 灰黄色粘質微砂

第193図 溝56・57 (1/60・1/30)

溝57 (第46・193図)

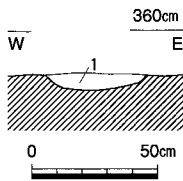
18B区、調査区の端で検出された溝である。微高地上に位置しており、東西に細長い土壙状の遺構である。

検出面での掘り方平面形はやや湾曲し、部分的に張り出しが認められる。長さは440cm、幅は46cm、検出面からの深さは6cmを測る。断面形は皿状である。

出土遺物が認められないため、遺構の詳細な時期は不明である。(柴田)

溝58 (第46・194図)

18B・C区で検出された溝である。微高地上に位置しており、南北方向にほぼ真っ直ぐのびている。北側は後世の削平によって失われており、南側は浅くなって収束する。

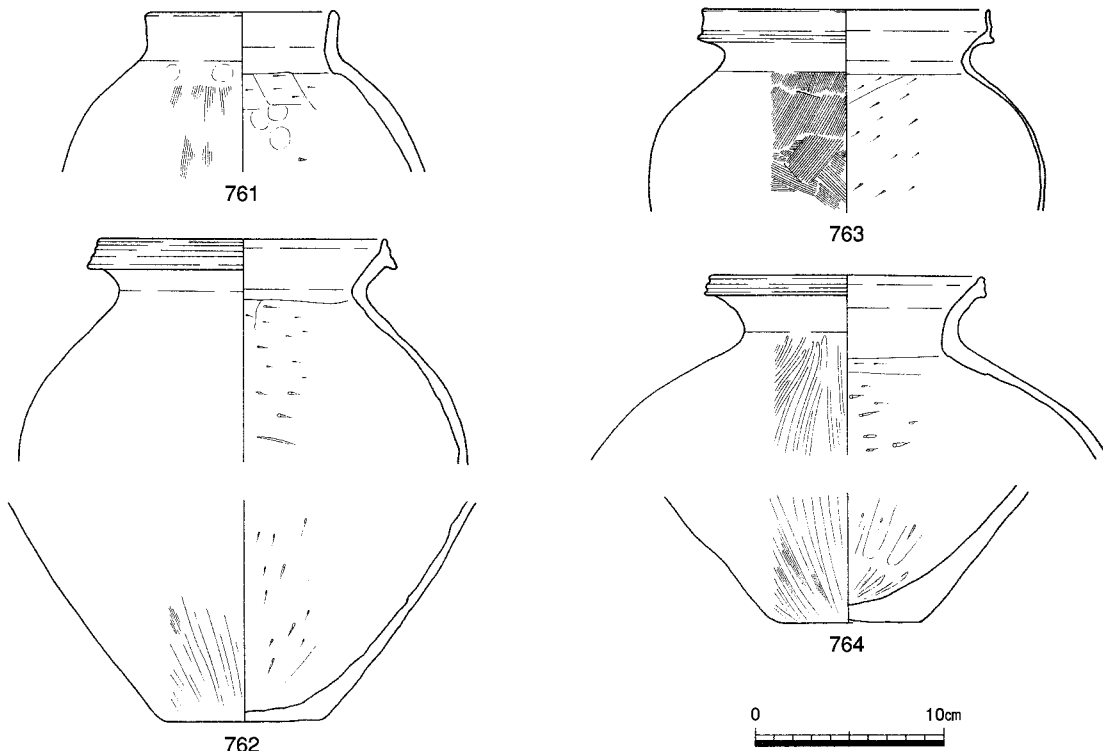


1 橙褐色粘質細砂

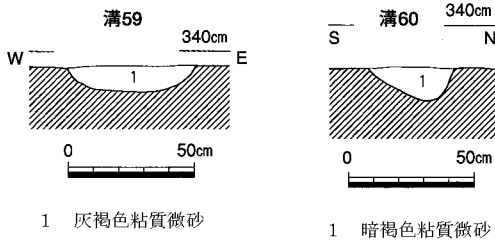
検出した長さは12m、幅は39cm、検出面からの深さは7cmを測る。断面形は皿状である。

出土遺物には、図示した短頸の直口壺761と壺764、甕762・763のほかにも、鉢や高杯の破片も認められる。

出土遺物などから、遺構の時期は百・後・Ⅲと思われる。(柴田)



第194図 溝58 (1/30)・出土遺物 (1/4)



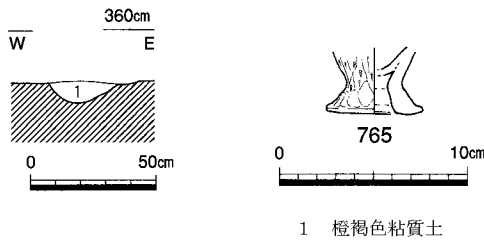
第195図 溝59・60 (1/30)

溝59 (第46・195図)

18C区で検出された溝で、既に報告されている溝の続きである。微高地上に位置し、南北方向にほぼ真っ直ぐのびる。北側は一旦収束するが、18ライン付近で再び検出される。幅は51cm、検出面からの深さは11cmを測る。出土遺物は無いが、百・後・IIの住居11に切られることが判明している。(柴田)

溝60 (第46・195図)

19C区で検出された溝である。微高地上に位置しており、北西から南東方向にのびている。西側は収束し、東側は若干屈曲する様子を見せるが検出はできなかった。幅は34cm、検出面からの深さは14cmを測る。断面形は「U」字形である。



第196図 溝61 (1/30)・出土遺物 (1/4)

時期を示すような遺物は出土しておらず、遺構の詳細な時期は不明である。(柴田)

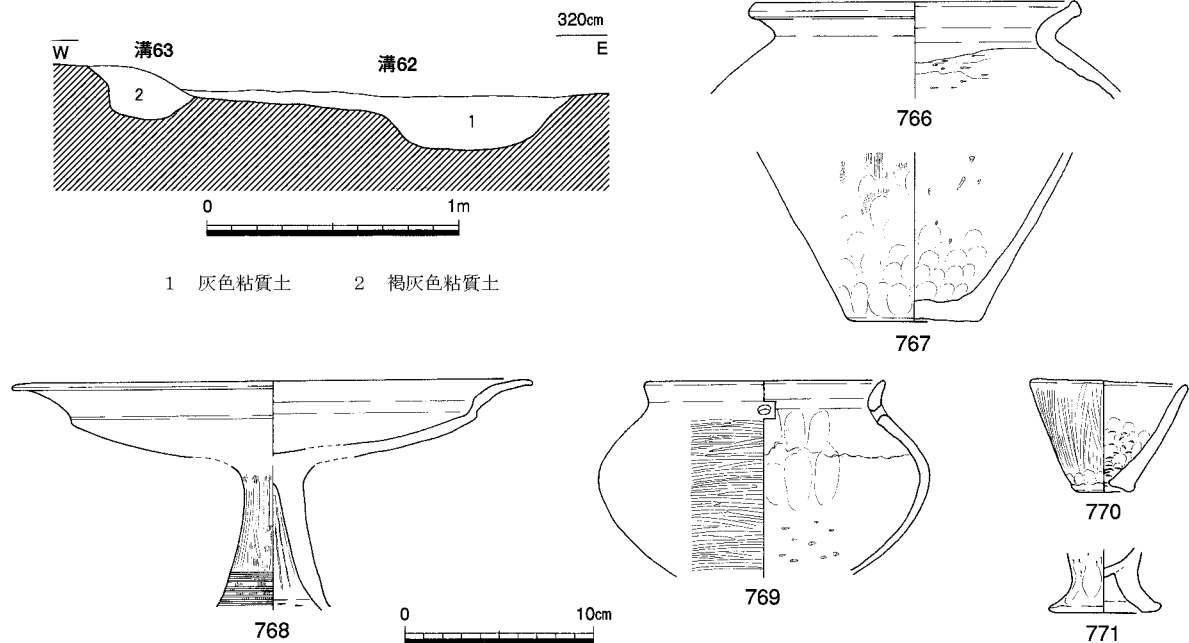
溝61 (第46・196図)

21C区で検出された溝である。微高地の東端に位置しており、北西から南東方向にほぼ真っ直ぐのびる。西側は収束し、東側は検出できなかった。幅は28cm、検出面からの深さは9cmを測る。断面形は「U」字形である。

出土遺物には、図示した製塩土器765のほかにも、高杯の破片も認められる。これらから、遺構の時期は後期前半と思われる。(柴田)

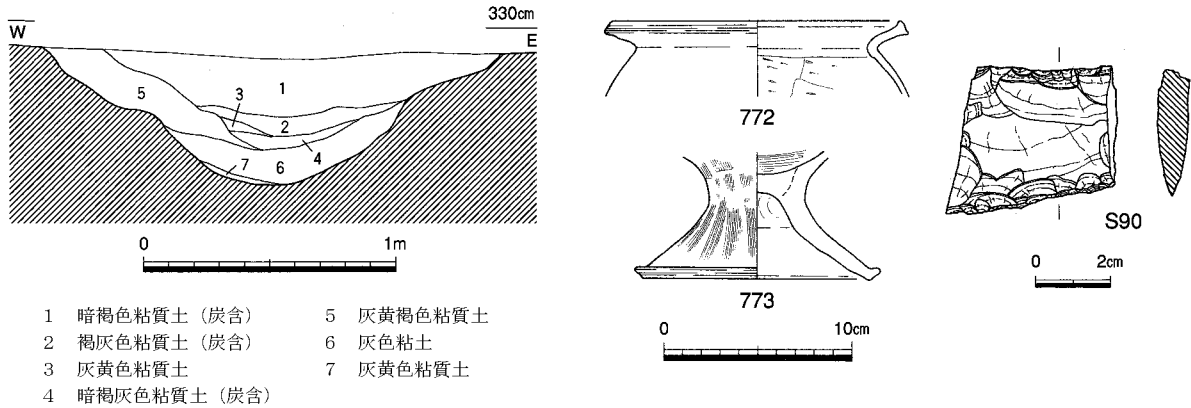
溝62 (第46・197図、図版29-2)

21B・C区で検出された溝である。微高地と水田との境に位置しており、ほぼ南北方向に真っ直ぐのびている。幅は110cm、検出面からの深さは20cmを測る。洪水砂に覆われた後期水田除去後に検出



第197図 溝62・63 (1/30)・出土遺物 (1/4)





第198図 溝64 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

され、溝63を切っている。出土遺物には、甕766・767、高杯768、鉢769、製塩土器770・771などがある。これらから、遺構の時期は百・後・IIと思われる。(柴田)

溝63 (第46・197図、図版29-2)

21B・C区で検出された溝である。微高地と水田との境に位置しており、ほぼ南北方向に真っ直ぐのびている。幅は50cm、検出面からの深さは15cmを測る。洪水砂に覆われた後期水田除去後に検出され、溝62に切られている。

時期を示す遺物は無いが、遺構の時期は後期と思われる。(柴田)

溝64 (第46・198図)

22B・C区で検出された蛇行する溝で、洪水砂に覆われた水田より古い。B区では鳥状高まりの中央を流走し、C区では次の鳥状高まりの西側縁辺を流走している。鳥状高まりの形成に影響している可能性が高いと考えられる。幅は2m前後、検出面からの深さは50cmを測る。掘り方上半は皿状に開き、底面は「U」字形を呈する。またB区では、埋没時に洪水砂が堆積している様子が認められた。

出土遺物には甕772・台付鉢773・石包丁S90のほかにも土器片があり、遺構の時期は百・後・II～IIIと思われる。(柴田)

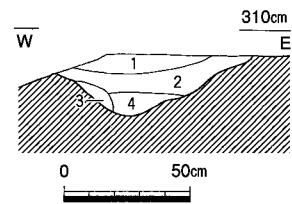
溝65 (第46・199図)

22B区で検出された溝で、溝64の一時期の流路であると考えられる。出土遺物は、壺や甕の小片が認められ、遺構の時期は百・後・IIと思われる。(柴田)

溝66 (第46・47・200図)

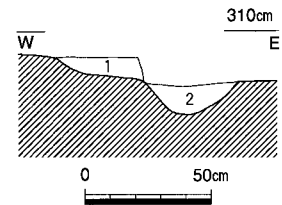
22B・C区で検出された蛇行する溝で、洪水砂に覆われた水田より古い。鳥状高まりの東側縁辺を流走しており、初期の開墾の様子を示唆、あるいは溝64とともに鳥状高まりの形成に影響している可能性が高いと考えられる。幅は80cm前後、検出面からの深さは20cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。

出土遺物には甕や高杯の土器片があり、遺構の時期は百・後・IIと思われる。(柴田)



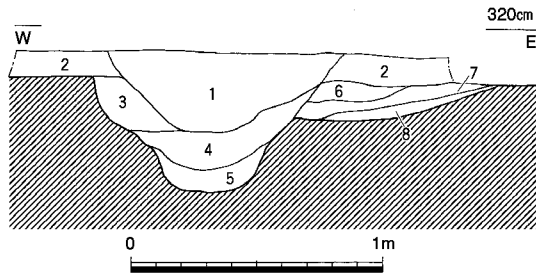
- 1 灰橙色粘質土 (炭含)
- 2 褐灰色粘質土
- 3 灰黄色粘質土
- 4 灰色粘質土 (炭少含)

第199図 溝65 (1/30)



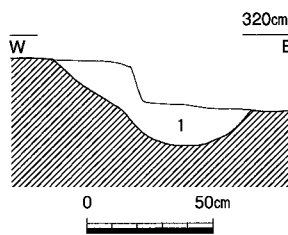
- 1 黄灰色粘質土 (炭含)
- 2 暗褐灰色粘質土

第200図 溝66 (1/30)

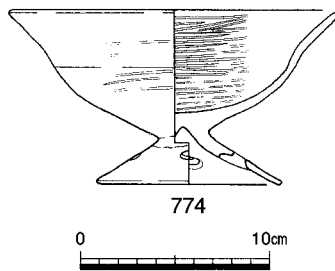


- |           |            |
|-----------|------------|
| 1 淡黄褐色微砂  | 5 暗灰褐色粘質微砂 |
| 2 灰褐色微砂   | 6 黄褐色微砂    |
| 3 茶褐色粘質微砂 | 7 黄褐色粘質微砂  |
| 4 暗灰色粘質微砂 | 8 淡黄褐色粘質微砂 |

第201図 溝67 (1/30)



- 1 暗灰色粘質微砂



第202図 溝68 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝67 (第47・201図)

25B・C区で検出された溝で、洪水砂に覆われた水田より古い。ほぼ真っ直ぐにのびており、B区では鳥状高まりの東側縁辺を流走し、C区では鳥状高まりの中央を流走している。鳥状高まりの形成に影響している可能性が高いと考えられる。幅は160cm、検出面からの深さは45cmを測る。掘り方上半は皿状に開き、底面は狭く箱形を呈する。出土遺物は無いが、遺構の時期は後期前半と思われる。(柴田)

溝68 (第47・202図)

25C区で検出された溝で、鳥状高まりの東側縁辺に位置している。北端は収束しており、ほぼ真っ直ぐ南にのびる。幅は90cm、検出面からの深さは35cmを測る。周辺の溝とは異なり、耕作の痕跡を示す可能性が高いと考えられるが、洪水砂に覆われた水田の耕作土とは若干異なると思われた。掘り方上半は緩やかに開き、底面は「U」字形を呈する。

出土遺物には高杯774があり、遺構の時期は百・後・IVと思われる。(柴田)

溝69 (第47・203図)

27・28B区で検出された溝で、ほぼ南北方向にのびている。断面形は「U」字形を呈し、幅は38cm、検出面からの深さは12cmを測る。

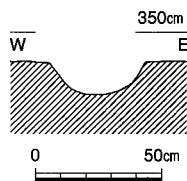
洪水砂に覆われた水田よりも古く、出土遺物は無いが、後期におさまると思われる。(柴田)

溝70 (第47・204・212図、図版29-3)

26・27B~28C区で検出された溝である。鳥状高まり(大畦畔)の下層をそれと同じ方向に流走しており、初期の開墾の様子を示唆すると思われる。幅は44cm前後、検出面からの深さは30cmを測る。出土遺物は無いが、遺構の時期は後期におさまると思われる。(柴田)

溝71 (第47・204・212図、図版29-3)

26・27B~28C区で検出された溝で、溝70に切られている。鳥状高まり(大畦畔)の東側縁辺を流走しており、初期の開墾の様子を示唆すると思われる。幅は55cm前後、検出面からの深さは20cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。



第203図 溝69 (1/30)

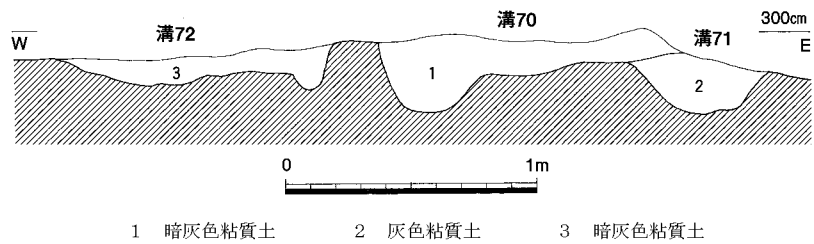
出土遺物には弥生土器片が少量あり、遺構の時期は後期におさまると思われる。(柴田)

溝72 (第47・204・212図、図版29-3)

27B~28C区で検出された溝で、洪水砂に覆われた水田の耕作土下層で検出されている。鳥状高まり(大畦畔)の西側縁辺に位置しており、

初期の耕作痕跡と思われる幅は110cm前後、検出面からの深さは10cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。

出土遺物は皆無であるが、遺構の時期は後期後半の可能性がある。(柴田)



第204図 溝70～72 (1/30)

溝73 (第47・205図)

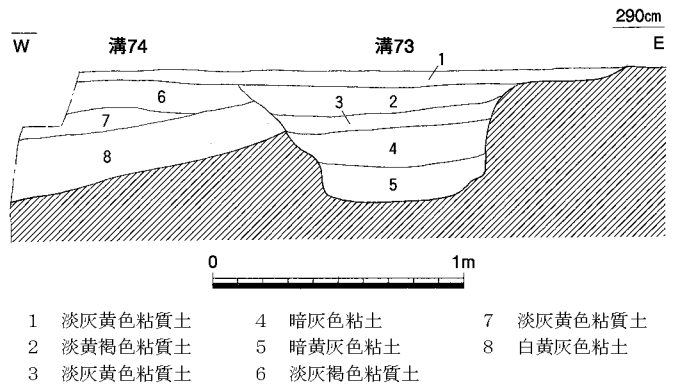
27・28C区にて検出した溝で、「百間川原尾島遺跡3」「溝66」の続きである。27C区では溝74の肩を切って2つの溝はほぼ併走するが、28C区に入る手前でやや南寄りに流路を変える。断面はほぼ逆台形を呈し、深さは西へいくほど深くなる。埋土はほぼレンズ状に堆積している。

出土遺物は皆無であるが、溝70～溝72よりも下層で検出したことや、弥生中期水田層よりは上層で検出したことから、弥生時代後期前半の範疇であると推察される。(松尾)

溝74 (第47・205図)

27・28C区にて検出した溝で「百間川原尾島遺跡3」「溝67」の続きである。27C区では溝73に切られる形で交差しほぼ東西に流れる。断面はなだらかに落ち込み、埋土はレンズ状に堆積する。

出土遺物は皆無であるが、溝73と同様の理由により弥生時代後期前半の範疇である。(松尾)



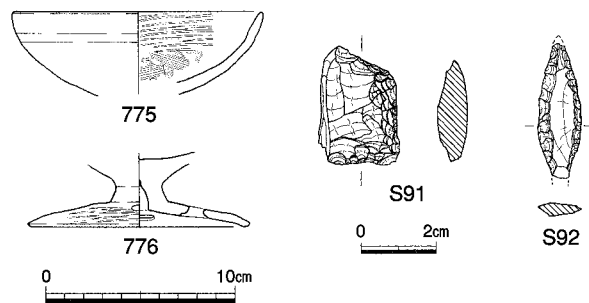
第205図 溝73・74 (1/30)

9 水田

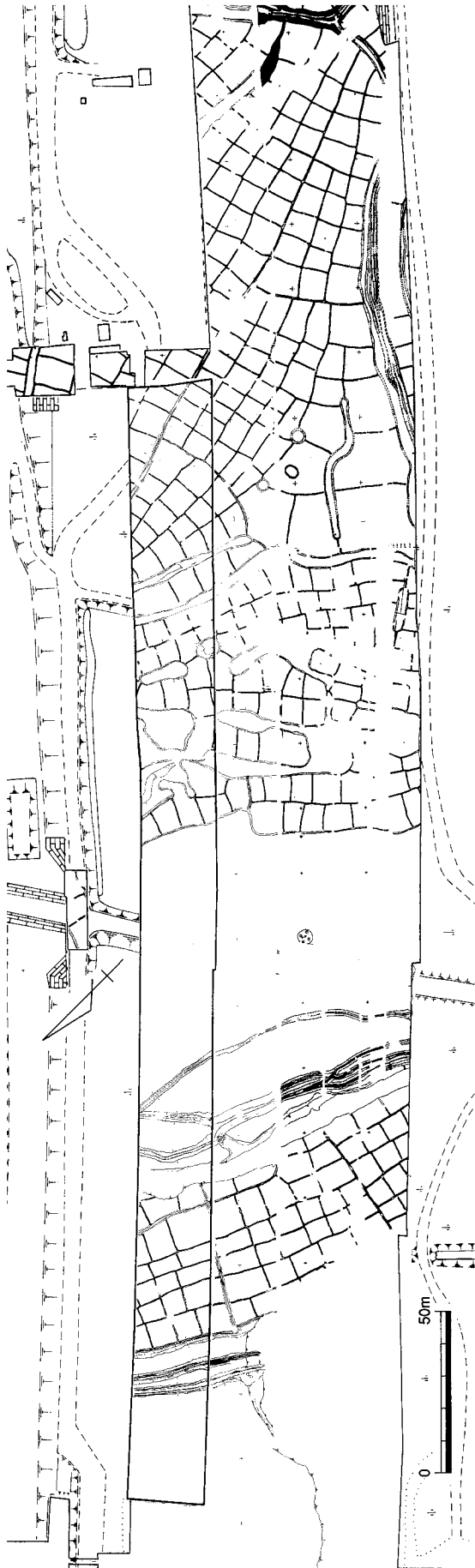
水田3 (第206～215図、図版30)

13～16B・C区 (第207・208・210・211・213・214図)

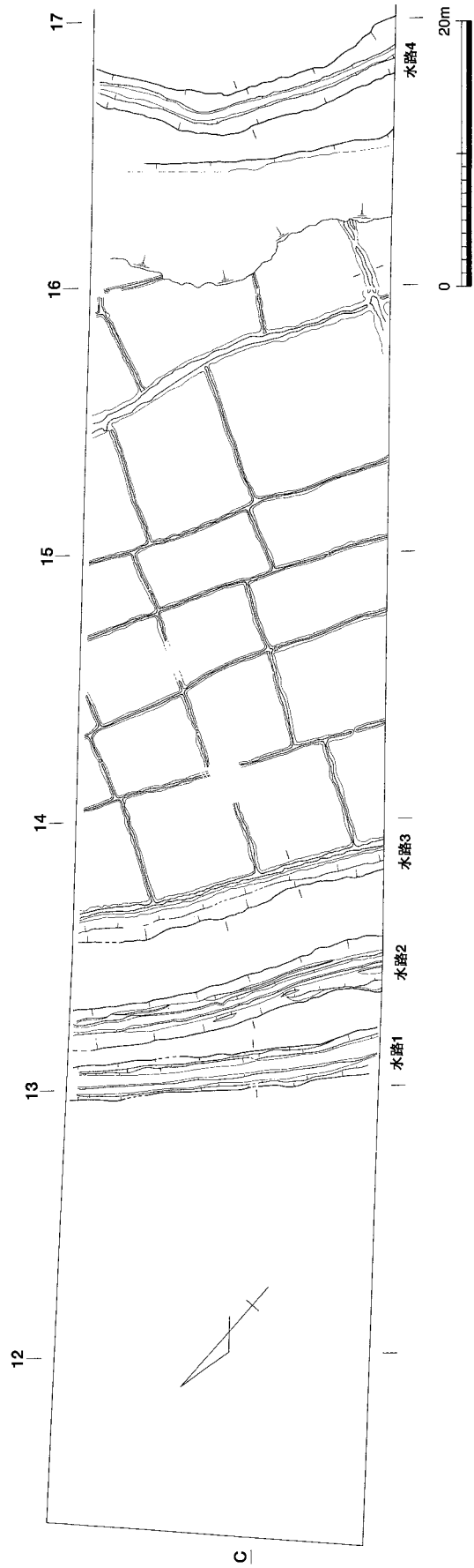
ここでは25区画の田面が検出された。この水田は弥生時代前期の河道が存在していた低位部に営まれており、最後は洪水によってもたらされた砂によって埋没している。旧河道右岸の肩口付近では幅100～150cm、高さ5～10cmの大畦畔が設定されているが、ほとんどが幅40cm、高さ5～10cm程度の小畦畔によって、方形あるいは長方形に区画されている。1区画の面積は最大で133.5㎡、最小で35.7㎡を測り、概ね50～70㎡が平均的な大きさとなっている。旧河道中央から左岸側(15ライン以東)の区画は大きく、右岸側は比較的均整がとれているが、中央部では細長い区画となる特徴が認められる。これは水田経営時



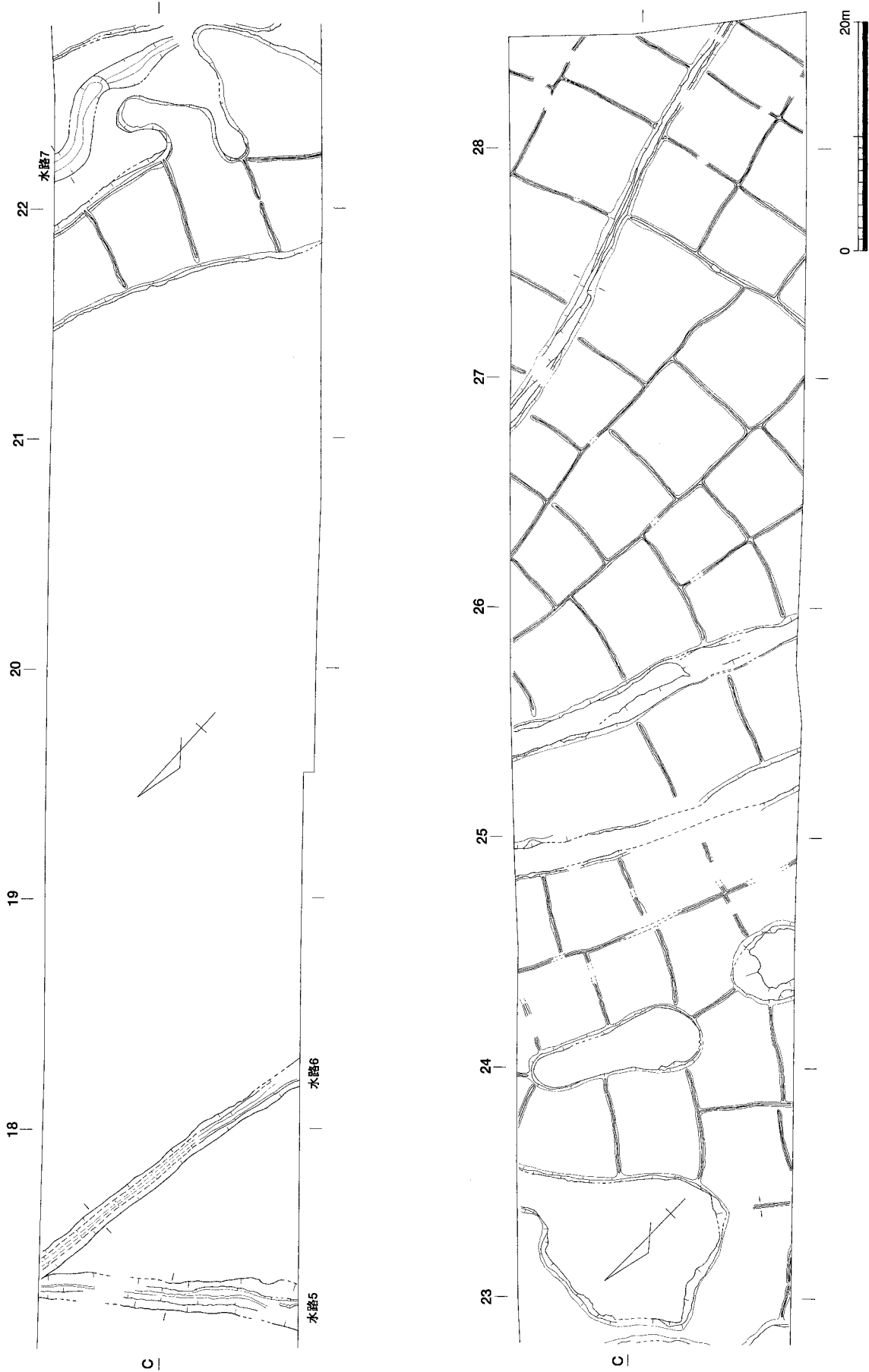
第206図 水田耕土出土遺物 (1/4・1/2)



第207図 対象調査区および周辺遺構配置図（弥生時代後期末洪水砂埋没遺構、1/2,000）

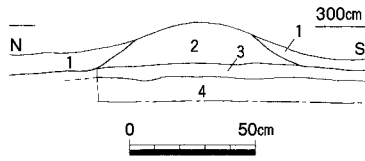


第208図 弥生時代後期末洪水砂埋没遺構配置図①（1/500）



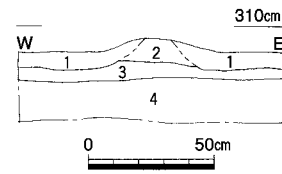
第209図 弥生時代後期末洪水砂埋没遺構配置図② (1/500)

第3章 発掘調査の概要



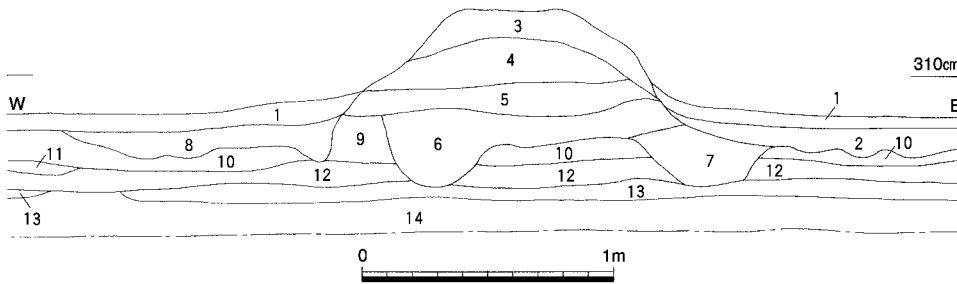
- 1 黄灰色粘質土 (Mn粒含) (水田層)
- 2 褐灰色粘質土 (Mn粒多含)
- 3 灰褐色粘質土 (Mn粒多含)
- 4 暗褐色粘質土

第210図 大畦畔 (1/30)



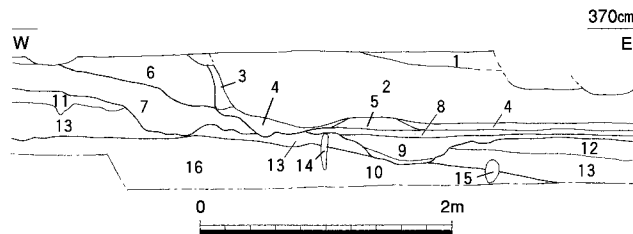
- 1 灰色粘質微砂 (水田耕土)
- 2 暗灰褐色粘質微砂
- 3 灰黄色粘土 (水田耕土下層)
- 4 暗赤褐色粘土 (炭・焼土粒含)

第211図 小畦畔 (1/30)



- |                    |                |            |
|--------------------|----------------|------------|
| 1 淡灰色粘質土 (後期水田耕作土) | 6 暗灰色粘質土 (溝70) | 11 暗灰黄色粘質土 |
| 2 白灰色粘質土           | 7 灰色粘質土 (溝71)  | 12 黄灰色粘質土  |
| 3 淡黄色粘質土 (Mn含)     | 8 暗灰色粘質土 (溝72) | 13 褐灰色粘質土  |
| 4 黄色粘質土 (Mn含)      | 9 褐灰色粘質土       | 14 暗灰褐色粘質土 |
| 5 灰黄色粘質土 (Mn含)     | 10 灰黄色粘質土      |            |

第212図 島状高まり (大畦畔) (1/30)

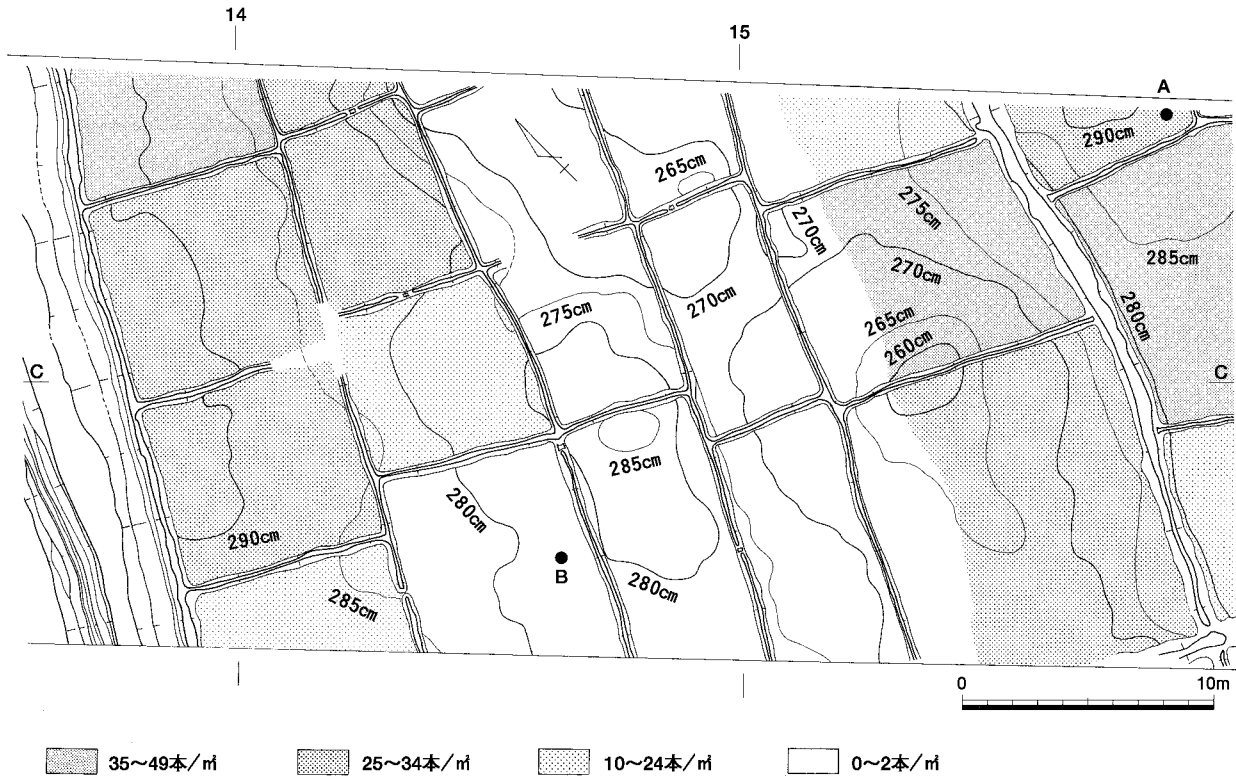


- |                             |                           |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 黒色土                       | 9 黄灰色粘質微砂 (暗灰色粘土塊含) (溝47) |
| 2 洪水砂                       | 10 暗灰色粘土 (溝47)            |
| 3 にぶい茶褐色砂質土                 | 11 にぶい黄色土                 |
| 4 褐灰色粘質微砂 (弥生後期末水田耕作土)      | 12 灰黒色粘土 (灰白色微砂薄層含)       |
| 5 褐灰色粘質微砂 (弥生後期末水田耕作土、Fe多含) | 13 暗黄褐色粘質微砂 (Mn沈着)        |
| 6 にぶい黄褐色土 (Mn沈着)            | 14 暗褐色粘質微砂                |
| 7 灰茶褐色土 (焼土粒含・Mn沈着)         | 15 暗黄褐色粘質土                |
| 8 黄茶褐色砂質土 (にぶい黄色微砂小斑含)      | 16 にぶい黄色粘質微砂 (Mn沈着)       |

第213図 微高地下がり (1/60)

の微地形を反映していると考えられる。

なお、検出時において、田面の東西での高低差は著しく、第214図のように近接する区画間で最大30cmもの比高が認められ、同一区画でも5~10cm程度の比高が認められるほどである。この数値は旧河道上という基盤の軟弱さと上層の土圧による二次的要因の影響も大きいと思われるが、本来いくらかの高低差が似た状態で存在していたことは、両微高地に水路が設置されていることや区画形態など



第214図 地形測量図と稲株痕跡密度 (13~15B・C区) (1/300)

からも明らかである。

耕作土の厚さは4～6cmを測り、田面には砂が堆積した円形や楕円形の小穴などが検出されている。径7cm程度の円形あるいは楕円形の小穴はこれまで「稲株痕跡」と推定されているもので、田面だけでなく畦畔上にも認められる。区画ごとのその分布密度状況は第214図に示すとおりで、中央部の区画列にはほとんど確認されないことがわかる。また、その東に隣接する区画列では、同一区画内において明確に粗密の差が認められる。このような状態は、当遺跡のほかに百間川今谷遺跡大地調査区(『百間川今谷遺跡2』1996)でも確認されている。これらの小穴すべてあるいはその多くが「稲株痕跡」で、残存条件が同じであると仮定すれば、比較的大きく生長したイネが全面に生育する区画と、部分的に生育する区画、イネが生育していない区画が同一時期に存在したことになる。つまり休耕田の存在など、埋没直前の水田区画利用が一様ではないことを示すと思われるが、当時の集落規模・人口、小穴の形成と残存過程などさまざまな観点で、根本から慎重に検討する必要がある。

上記のような「稲株痕跡」の分布状態に反して、その分布がほとんど認められない部分の畦を中心に、長さ20～25cmの足跡(指の部分は未確認)が残存している。この埋土は、「稲株痕跡」とされている小穴のものよりも細かくかつ灰白色を呈する点で異なる。15ライン東西の畦では特に顕著に確認でき、多くが北から南へ歩行していることが判明した。足跡が集中して認められる畦畔と田面については、『百間川原尾島遺跡2』でも同じ列付近の区画で確認されている。

足跡の深さは約3cmを測り、比較的その形が明瞭なものも多い。ここから推測される足跡の多い田面の状態は、乾燥状態や逆に極度にぬかるんだ状態であった可能性は低く、適度な軟らかさもちつつ形状も保持できる状態であったと思われる。一方で足跡の認められない田面は、乾燥状態であったか、同一条件下であれば歩行していない可能性が考えられる。また、足跡が集中している畦畔はその



写真3 水田層足跡掘り下げ（南東から）

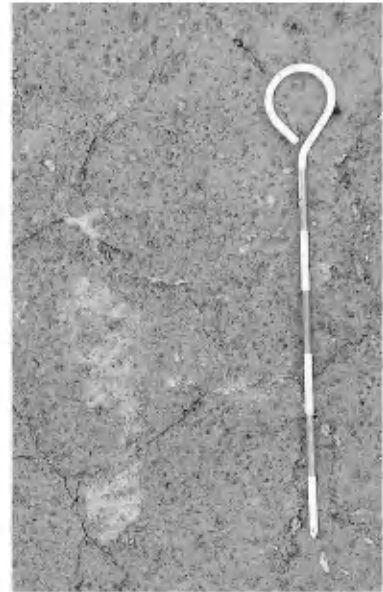


写真4 足跡検出状況(上から)

保水機能を維持できないほどであったと思われる。これは裏返せば、歩行時期が水田に水を張っている期間ではなかったか、この区画列には水を張る必要が無かった時期であったと想定される。水口が開いていることもこれに関係していると考えられる。

この水田では、第214図のA・B両地点で植物珪酸体分析等を実施し、その結果を付載2に示している。いずれの地点でも、水田耕作土（A-5、B-1）とその直下層（A-6、B-2）からイネ属の植物珪酸体が多く認められ、直下層の方が多という傾向が看取されている。さらに、B地点の耕作土中の含量はA地点の約5倍、直下層では7倍近くにも及ぶことも確認されている。この点は、当水田の累積状態を示唆すると考えられる。耕作土を除去した後に検出される古い時期の溝の存在などから、直下層は継続する水田層であると推測している。またA地点は、土壙28・29の存在から微高地の端部がこの付近までのびていた可能性があり、B地点より遅れて開墾された結果が両地点の含量に較差を生じさせていると思われる。

#### 21～28B・C区（第207・209・212図）

ここでも、最後は洪水によってもたらされた砂によって埋没している56区画の田面が検出された。この地域については、少なくとも26ライン以東では既に弥生時代前期から水田が営まれている。21～22B・C区の微高地東肩口から27ラインまでは不整形な島状高まり7箇所が認められるが、27ライン以東では島状高まりはほとんど無く、小畦畔で整然と区画された田面が広がっている。この相違は、開墾時の地形が影響していると思われ、田面高や水田下層の溝、井戸、土壙などの検出状況がそれを示唆していると考えられる。小畦畔は西の水田同様、幅40cm、高さ5～10cm程度を測り、区画の平面形はほぼ方形を呈する。1区画の面積は最大で105.9㎡、最小で29.8㎡を測り、概ね40～70㎡が平均的な大きさとなっている。

田面高については、微高地から25ラインの島状高まりまでの区画とそれ以東の区画とで差が認められる。前者では、調査区北東壁沿いの区画が最も高く、ほぼ標高298～300cmを測り、概ね北西側に向かって1～2cmずつ低くなるが、最低でも標高295cmである。一方後者では、標高294cmを最高にして南側に低くなり、最低で288cmを測る。耕作土の厚さは4～6cmを測り、田面には砂が堆積した円形



や楕円形の小穴などが検出されているが、比較的少ない。径7cm程度の円形あるいは楕円形の小穴は、これまで「稻株痕跡」と推定されているものである。その分布密度状況については、1㎡あたり25本以上が認められるのは4区画のみで、10～24本が9区画、3～9本が5区画である。ただし、この分布密度状況については、いずれも1区画内全面に分布しているものは無く、局所的なものである。足跡については明確なものは少なく、また可能性のあるものも少ない状況であった。

島状高まりは、21～26ライン間で7箇所を検出した。この区間では、水田耕作土下層や島状高まり下層で井戸や土壌、溝などが検出される。これは、開墾以前はここまで微高地がのびていたことを示すものである。水田域の拡大が、地形の微細な凹凸や溝などを反映しながら行われたものと考えられる。高さは水田面から約40cmを測るが、これは最終時期の状態であり、長い耕作期間で高さが増していることもわかっている。その中で、洪水起源の砂と思われる層が島状高まりの中にわずかに確認できる場合があり、災害後の復旧作業が行われていたこともうかがえる。(柴田)

#### 水路1 (第174～176・208図)

既述している溝43の最終段階である。掘り方上方は湾曲しながら大きく開き、底部は箱形を呈する。底面は標高約220cmを測り、水田面より70cm低い。底面まで砂層で埋没しているが、数回にわたる洪水によって埋没している可能性もある。水田と直接関係する箇所は以前の調査を含め確認できなかった。(柴田)

#### 水路2 (第180・181・208図)

既述している溝44の最終段階である。掘り方は「V」字形を呈する。底面は標高253cmを測り、水田面より約40cm低くなっている。底面には10cm程度の堆積が認められ、その上は洪水によると思われる砂層で埋没している。埋没水田に最も近い時期まで機能していた水路の可能性はある。水田と直接関係する箇所は以前の調査を含め確認できなかった。(柴田)

#### 水路3 (第184・208図)

溝46として既述しており、微高地と水田畦畔の間に検出されている。水田への水供給のほかに微高地からの流入水に対する排水路の機能も考えられる。(柴田)

#### 水路4 (第187・208図)

既述している溝51の最終段階である。当初の掘り方は「V」字形を呈しており、底面は標高約245cmを測り、水田面より45cm低くなっているが、洪水による埋没時には40cm程度の堆積が認められる。その際の底面は標高285cmで、水田面とほぼ同じである。これは、水路の維持管理が既に徹底されていない状況を示すか、もしくは季節に関係する可能性が考えられる。下流では水田との関係が捉えられている。(柴田)

#### 水路5 (第189・190・209図)

既述している溝53の最終段階である。掘り方は「U」字形に開き、底面は標高約280cmを測り、水田面とほぼ同じである。底面近くまで洪水によると思われる砂層で埋没している。水田と直接関係する箇所は以前の調査を含め確認できなかった。(柴田)

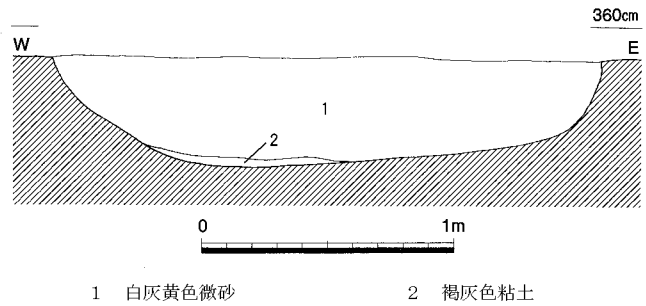
#### 水路6 (第192・209図)

溝55として既述している水路である。微高地中央を南北に流走している。掘り方上方は湾曲しながら大きく開き、底部は「U」字形を呈する。底面は標高約266cmを測り、上層は古墳時代の溝が踏襲している。(柴田)

水路7 (第209・215図)

既述している溝64の埋没最終状態である。鳥状高まり上で検出され、埋土は洪水による砂層であるが、水田上の砂層と同じかどうかは不明である。

南端は収束しており、水路としての機能は既に無かった可能性が高いと考えられる。(柴田)

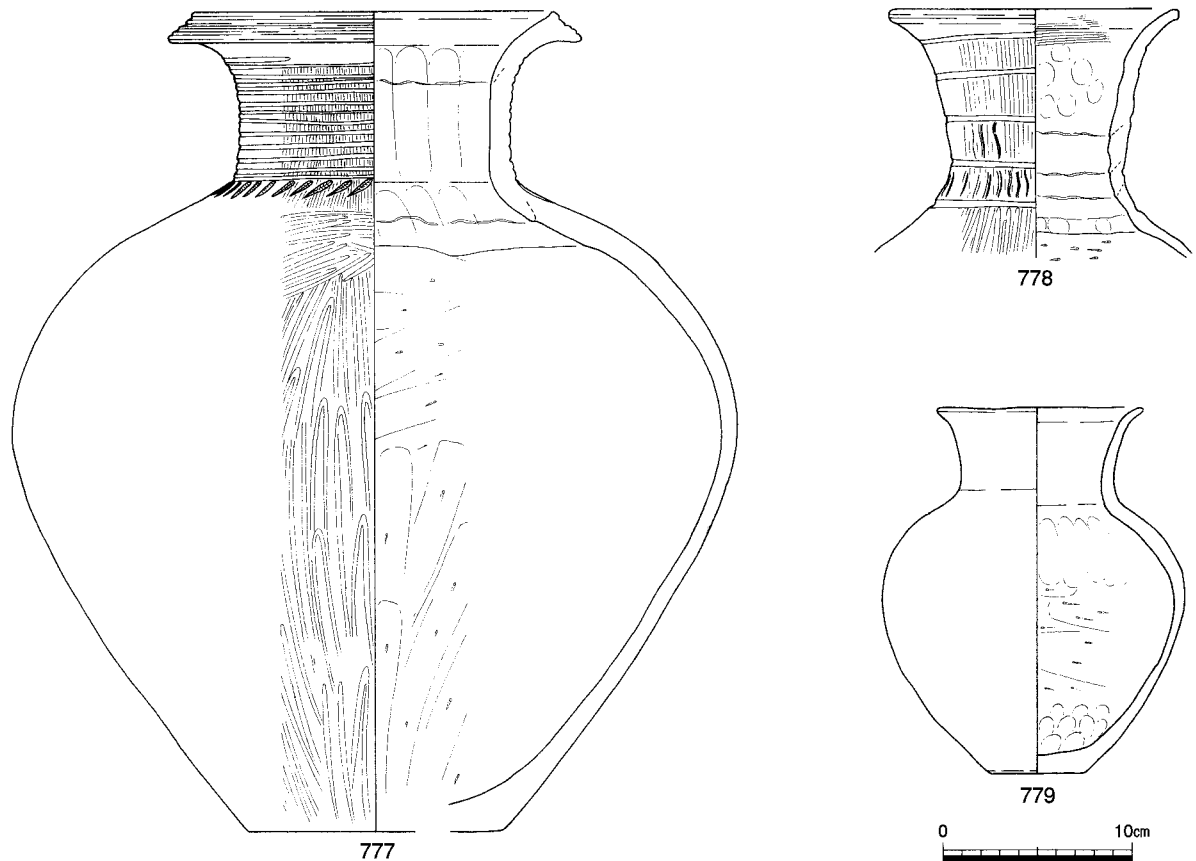


第215図 水路7 (1/30)

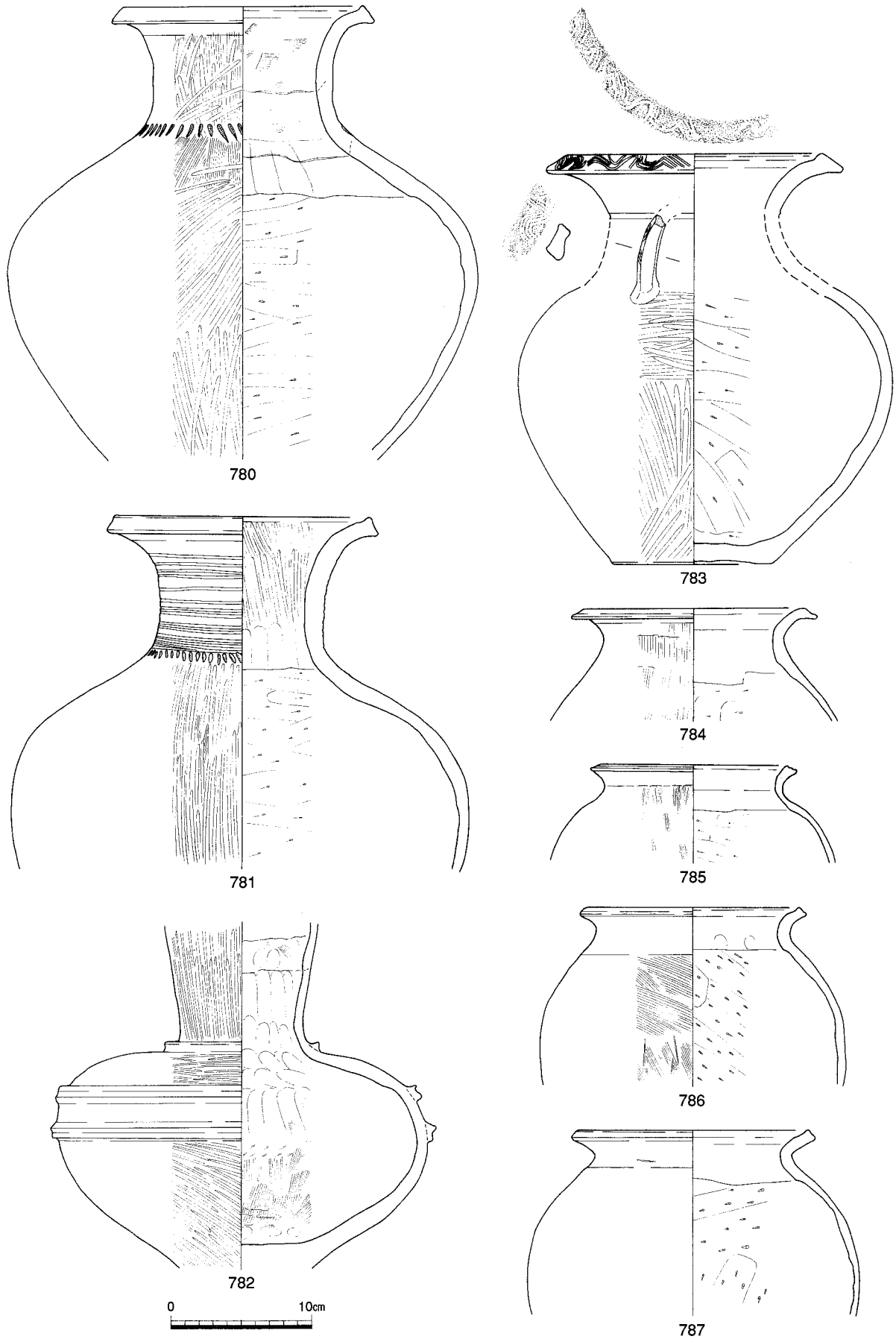
10 土器溜り

土器溜り1 (第48・216~218図、図版87)

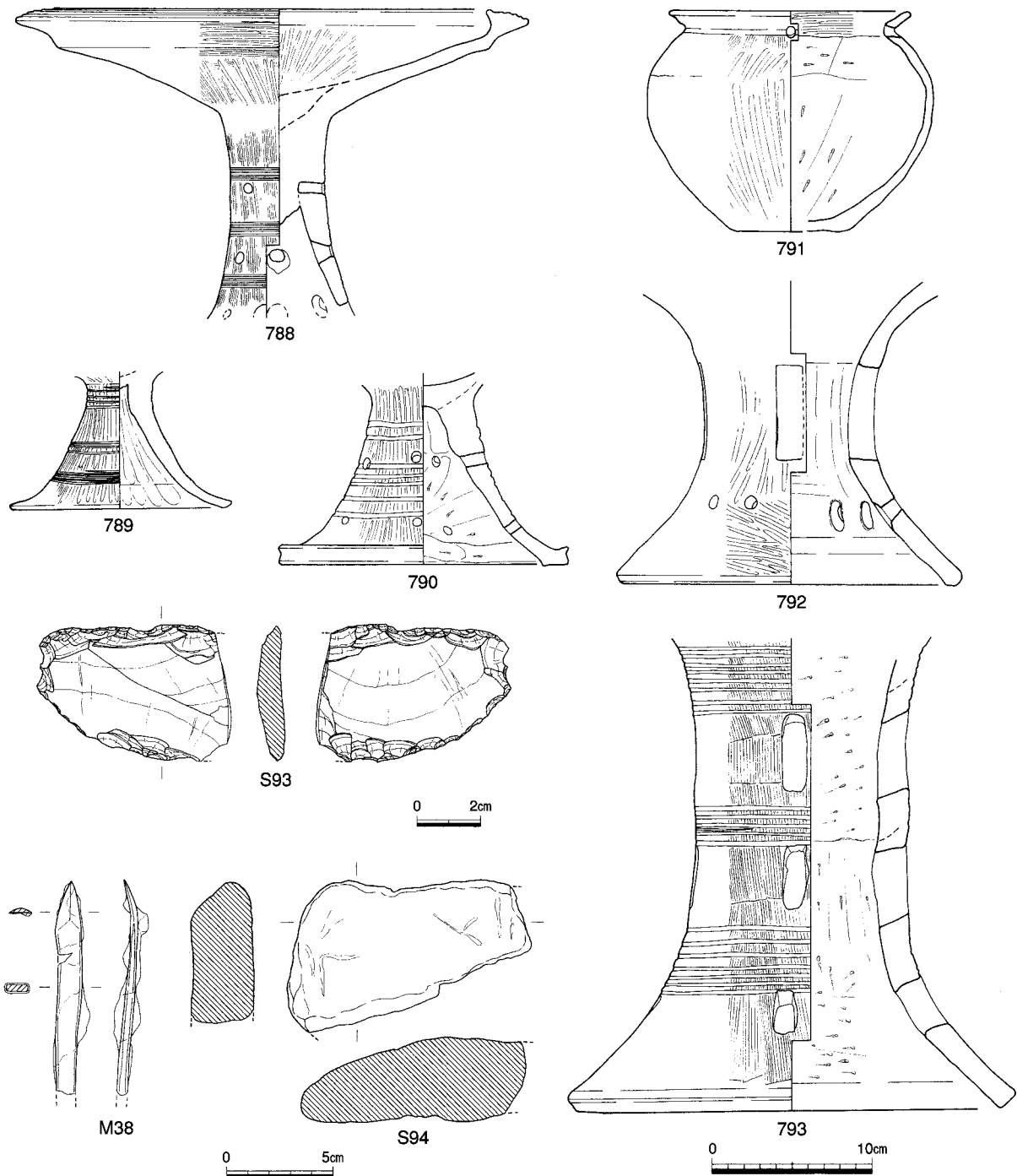
13CD区東半、微高地東端部において土器溜りを検出した。土器溜りは9箇所に分かれ、それぞれ北東-南西方向にのびる細長い帯状を呈する状態で検出したが、土器溜りの間には溝43~46が存在することが判明した。したがって、もとは長さ13m、幅6m前後の広がりを持ち、それが溝の掘削によって分断されたと判断できる。上記の溝の堆積土、特に上層から出土した大形品はこの土器溜りから流出・再堆積した可能性が強いと考えており、溝43上層出土の782・788・S94および793もこれに含めて掲載した。直口壺782、高杯788、不明石材S94の3点は近接して出土したもので、直口壺782は胴部に2条の突帯をめぐらせている。底部は焼成時に剥離を生じており、そのため廃棄された可能性がある。特殊壺出現以前の突帯をもつ壺として重要な資料である。S94は軟質の石材で、石材は不明で



第216図 土器溜り1 出土遺物① (1/4)



第217図 土器溜り1 出土遺物② (1/4)



第218図 土器溜り1出土遺物③ (1/4・1/3・1/2)

あるが百間川付近の丘陵の岩石や、遺跡に持ち込まれた円礫などとは異なる。表面は強い熱を受けて黒色を呈する。鋳型と判断するのはむずかしいが、今後、類例に留意する必要がある。(宇垣)

## 11 その他の遺構

### 粘土配置 (第48図、図版31-3)

12C区の東端、土壌26西側で粘土塊の集積を検出した。掘り方は検出できず、伴っていないとみられる。径20cm前後の灰色の球形粘土塊3点が規則的に置かれていた。土器製作用の粘土とみられ、その分析を付載3に示している。今回の調査では他に土壌24などで粘土塊を検出している。(宇垣)

## 第5節 古墳時代の遺構・遺物

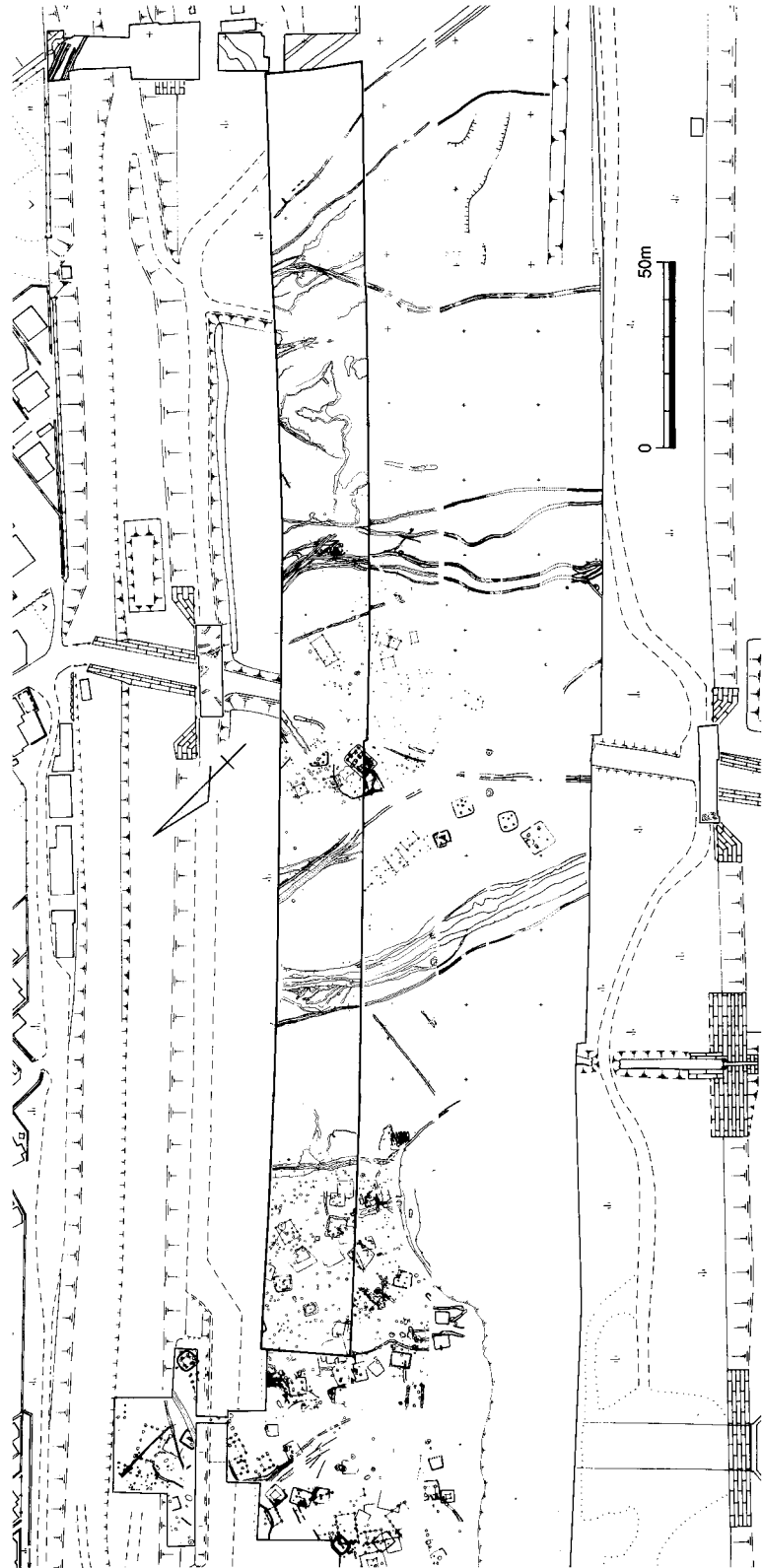
### 古墳時代の概要

弥生時代後期末の洪水砂の堆積によって微高地と低位部との比高差は、小さくなり、以後、徐々に解消傾向へと向かうが古墳時代において微高地と低位部の関係は弥生時代後期とほとんど変化はない。西の微高地は依然として居住域として利用され、今回の調査では、竪穴住居14軒、井戸2基、多数の柱穴など、前期から後期を通じて、多少の増減はあるものの各時期の遺構を検出した。

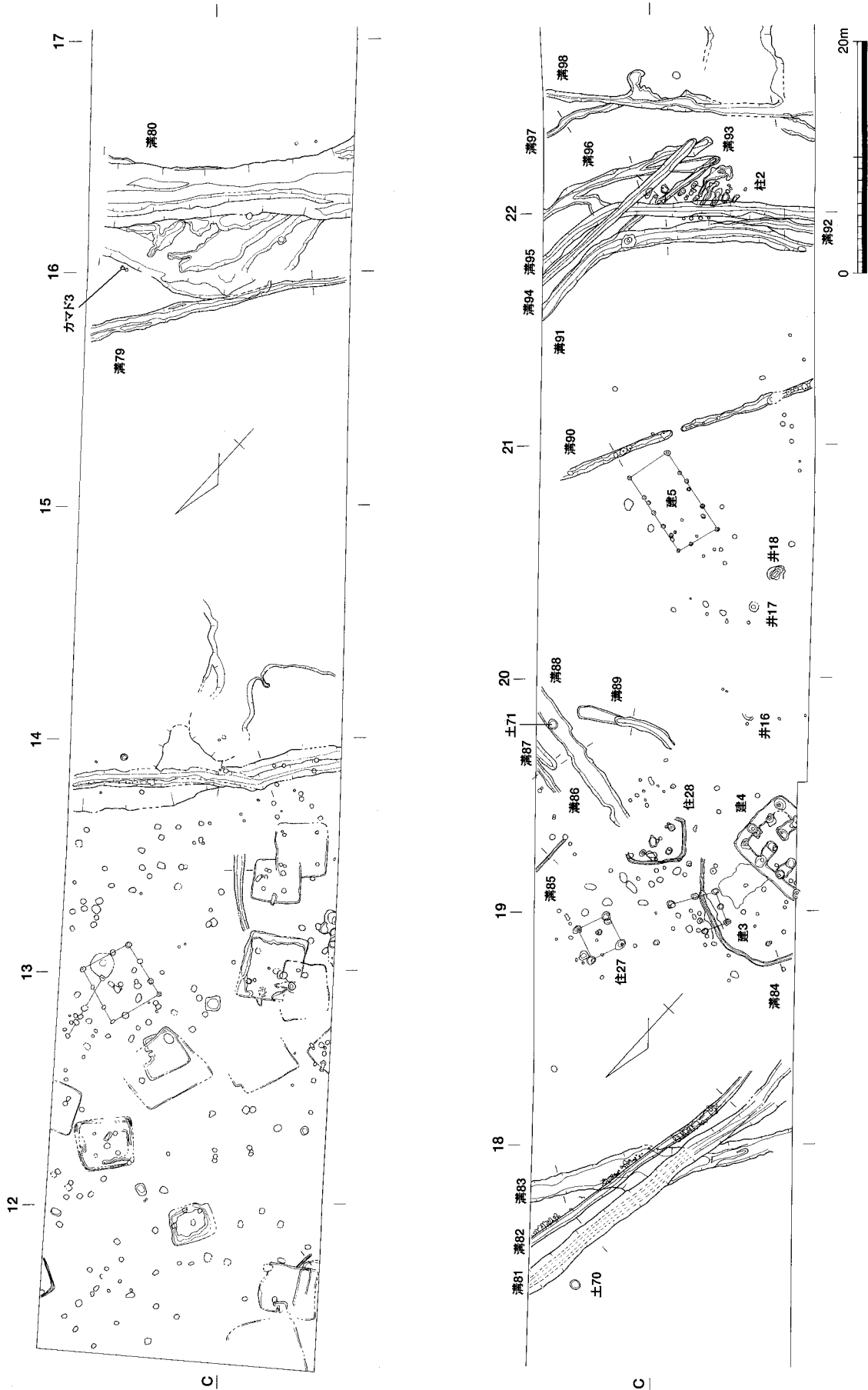
一方、東の微高地では前期の竪穴住居2軒、掘立柱建物2棟、井戸3基などを検出したが、中・後期では建物1棟、溝を確認したにとどまった。

低位部では、厚く堆積した洪水砂の上に古墳時代の包含層が確認されるが、鉄・マンガン層を伴う水田層、あるいは畦畔等は検出されず、水田利用は不明である。

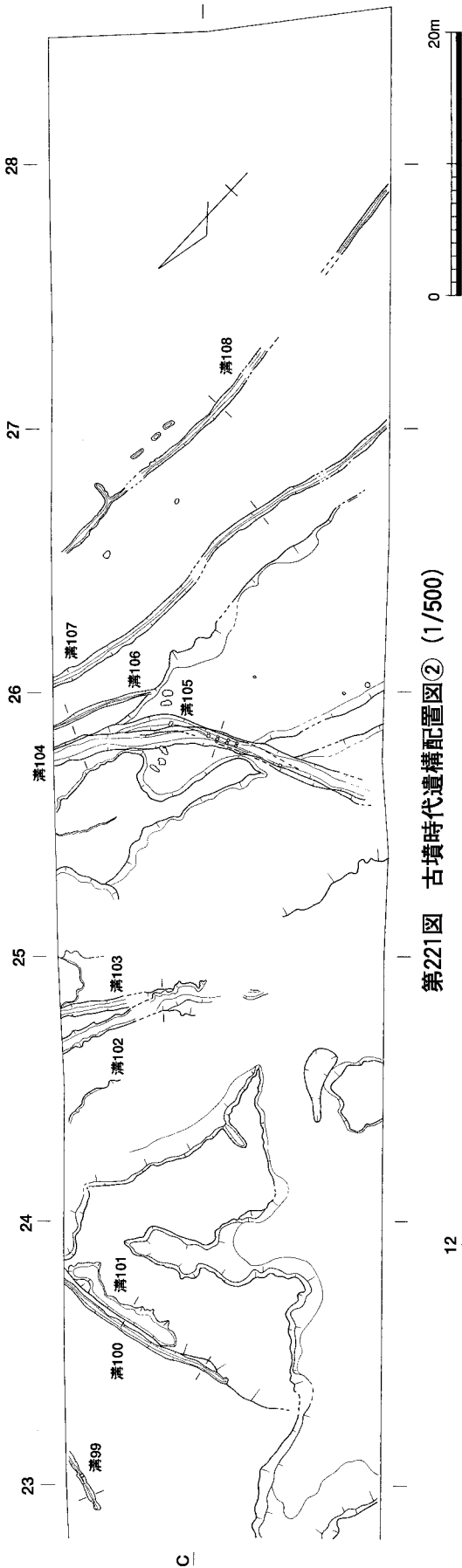
遺物では古墳時代後半の製塩土器、羽口、土錘、鉄製紡錘車、鉄製鋤先等が出土した。（物部）



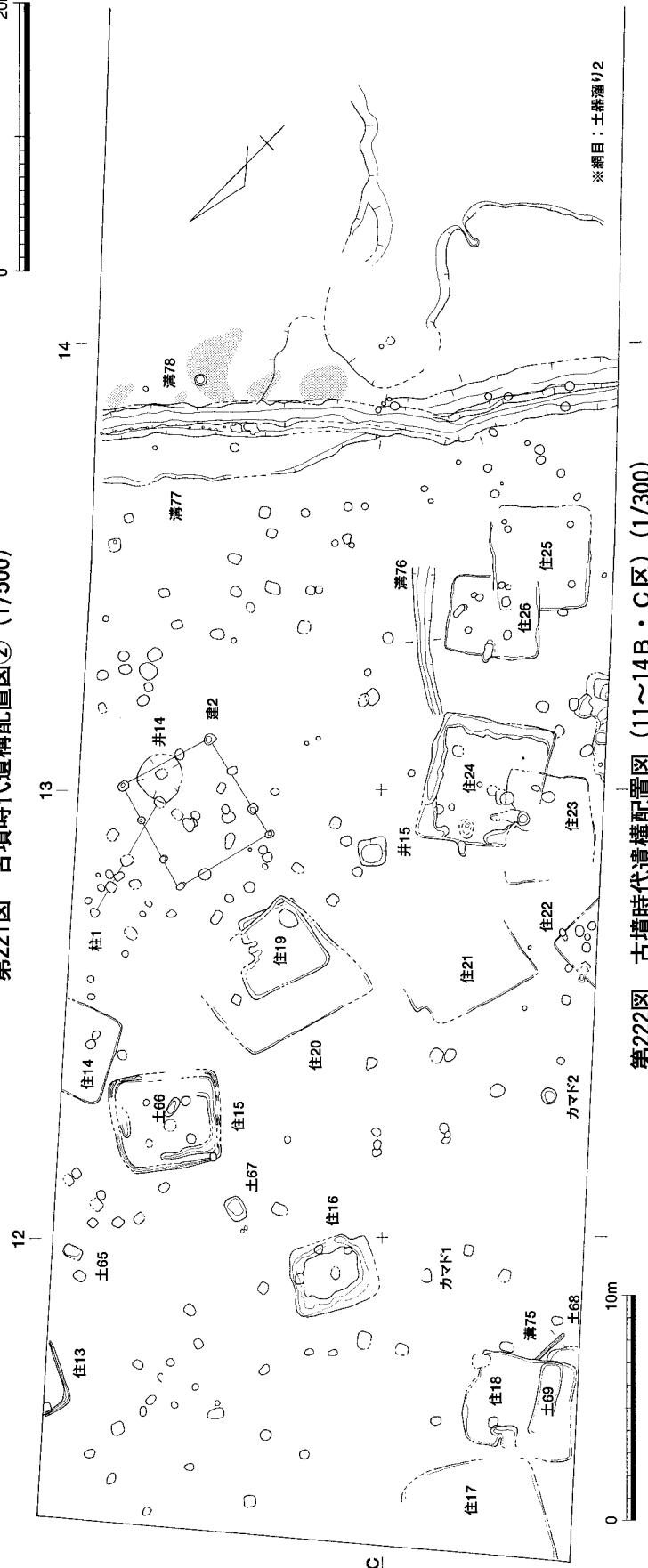
第219図 対象調査区および周辺遺構配置図（古墳時代、1/2,000）



第220図 古墳時代遺構配置図① (1/500)



第221図 古墳時代遺構配置図② (1/500)

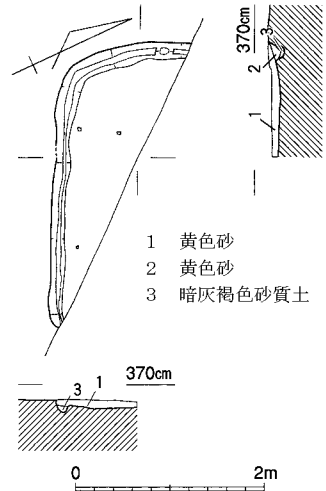


第222図 古墳時代遺構配置図 (11~14B・C区) (1/300)

1 竪穴住居・カマド

竪穴住居13 (第222・223図)

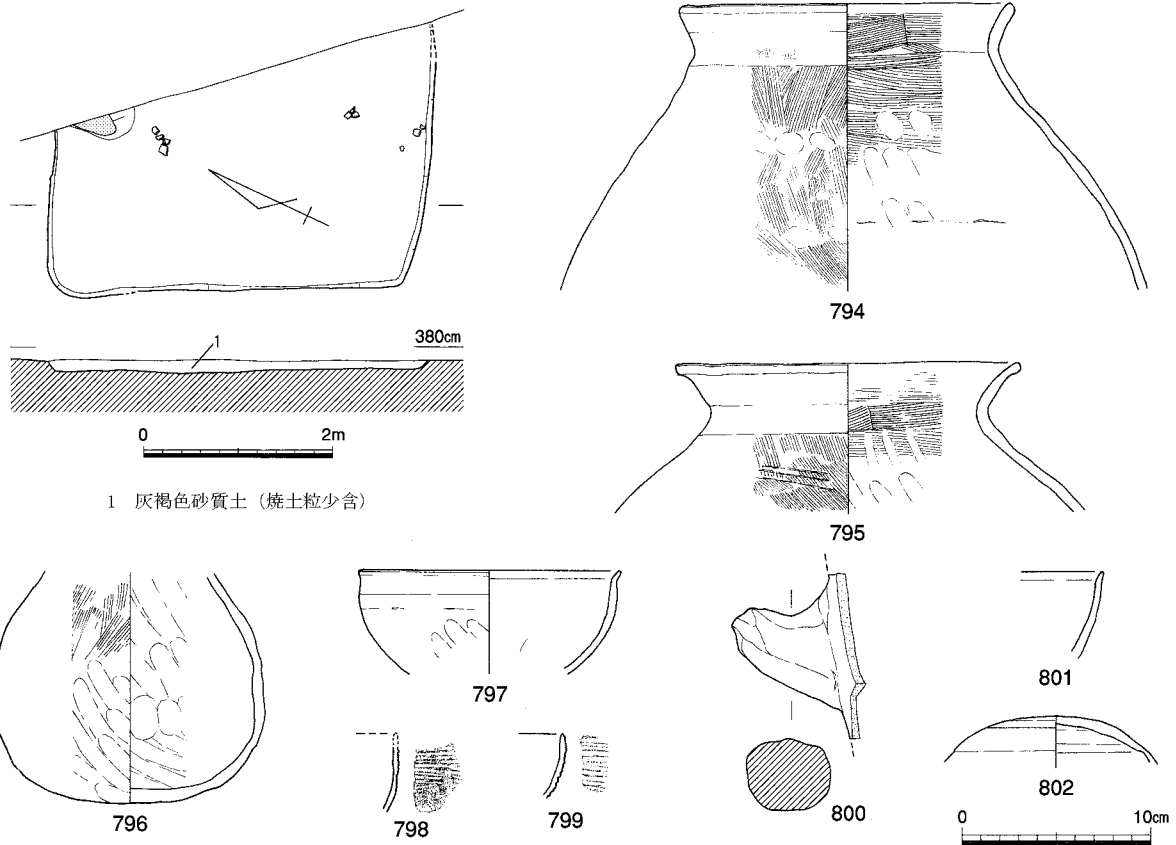
竪穴住居13は調査区北西端部11B区に位置する。隅丸方形の竪穴住居と考えられるが、大半が調査区外になり、検出されたのは西角部分である。壁体溝を持つ。調査範囲内では柱穴は確認されない。床面海拔高は355cmを測る。検出面から床面まで黄色砂が堆積している。遺物はその砂中から、土師器か弥生土器か判断が難しい土器細片が数十点出土した。須恵器は含んでいない。竪穴住居13の時期は古墳時代前半期と考えられる。(物部)



第223図 竪穴住居13 (1/80)

竪穴住居14 (第222・224図、図版77)

竪穴住居14は竪穴住居13の南東約10m、12B区に位置する。住居の北東側半分は調査区外になる。住居の平面形は一辺約4mの方形を呈すると考えられ、北西辺ほぼ中央に竈の痕跡と思われる焼土面を確認した。柱穴は精査したが検出されなかった。床面海拔高は358cmを測る。出土遺物には土師器と須恵器がある。794・795は甕で、795は床面に接地していた。796は小形の壺であろうか、内面はユビナデが著しい。床面遺物である。竪穴住居14の時期は須恵器・製塩土器の特徴から5世紀末～6世紀初め頃と推定される。(物部)

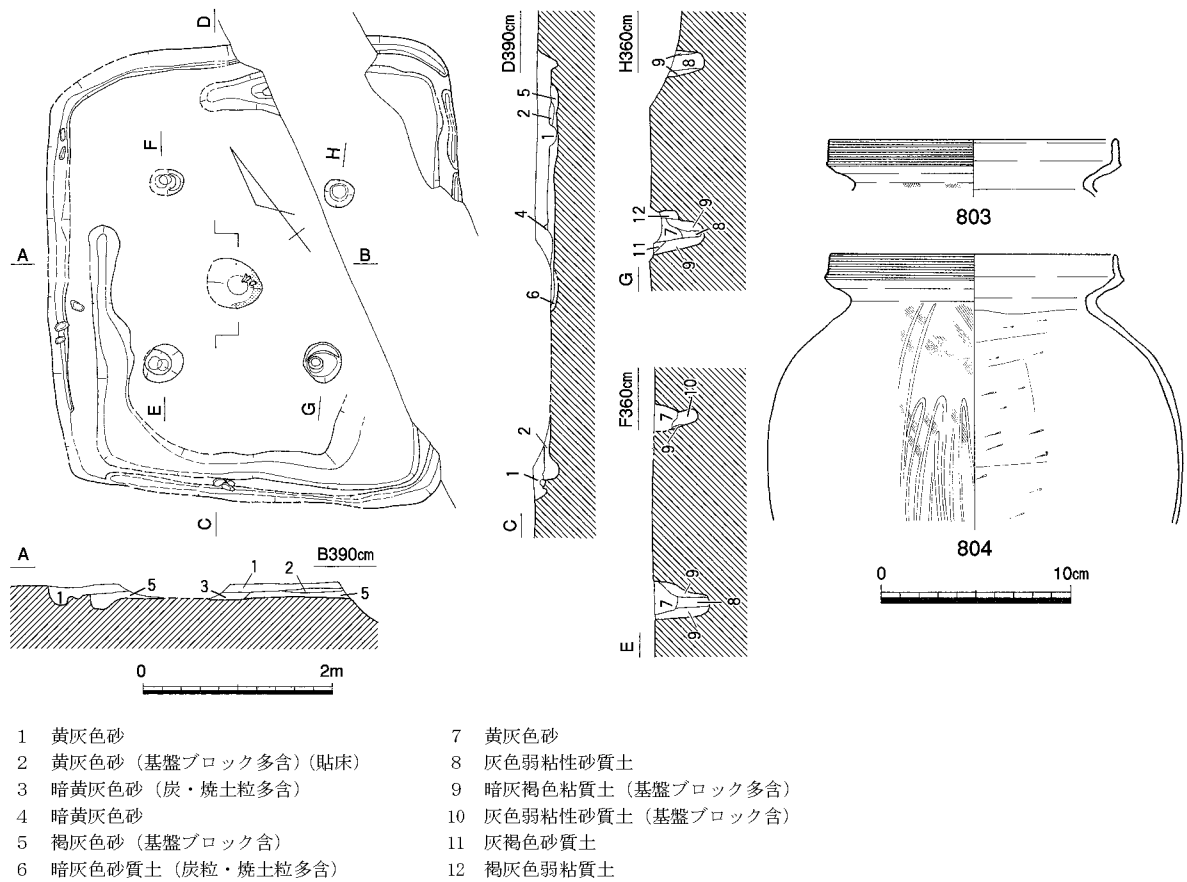


第224図 竪穴住居14 (1/80) ・出土遺物 (1/4)



竪穴住居15 (第222・225図、図版32-1・2)

竪穴住居15は12B区に位置し、竪穴住居14の西に隣接して検出された。方形の住居で、新・古の二時期あり、土層から拡張であることが確認出来る。新段階の住居は480×440cmを測る。古段階の住居を褐灰色砂で埋め、その上面に黄灰色砂を部分的に貼って、床を整えている。壁体溝が巡り、支柱穴は4個で、古段階の柱穴を踏襲していると考えられる。浅い中央穴を持ち、その南側壁面に被熱痕跡を確認した。埋土は黄灰色砂である。古段階の住居は440×360cmを測る。北角で途切れるが、浅い溝が巡る。幅20~90cmで、広かったり狭かったりするいわゆる竪穴住居の下部構造状を呈する。埋土中には土器小片が200片近く混入する。803甕は埋土中、804甕は中央穴から出土した。口縁~胴部5分の1に復元された。土器の特徴から、竪穴住居15の時期は百・古・Iと考えられる。(物部)



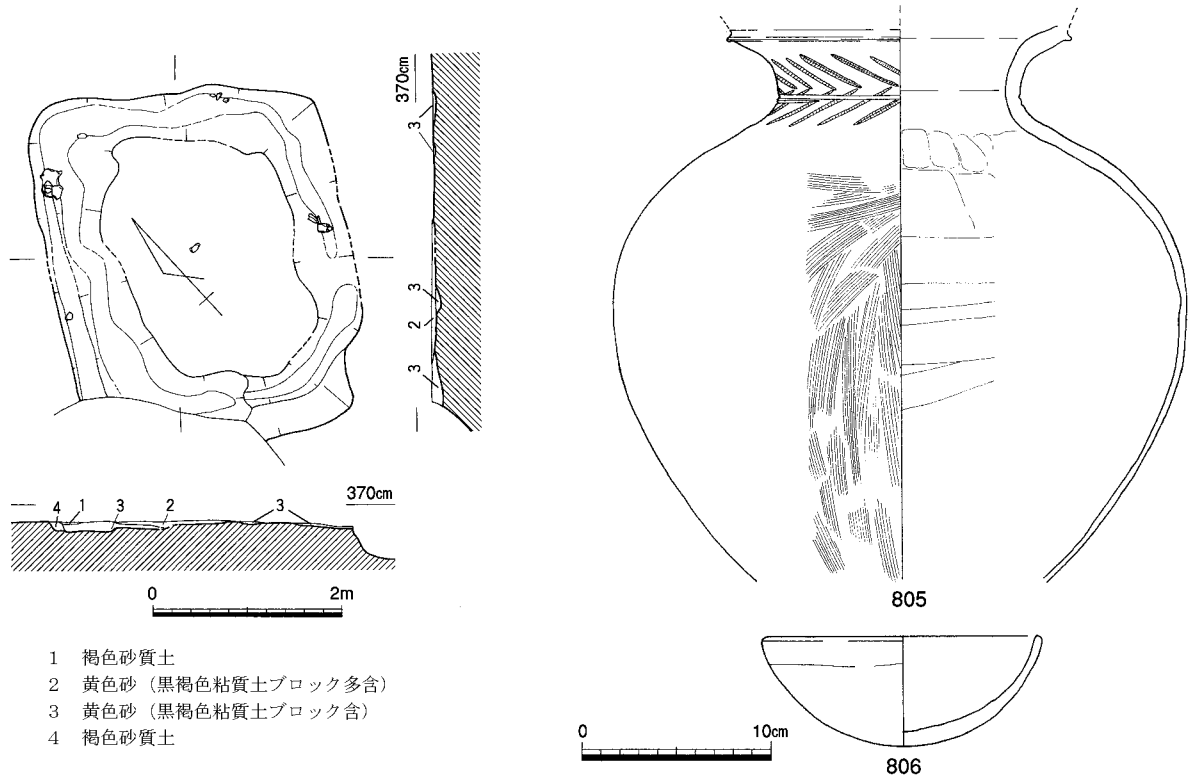
第225図 竪穴住居15 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

竪穴住居16 (第222・226図、図版32-3・77)

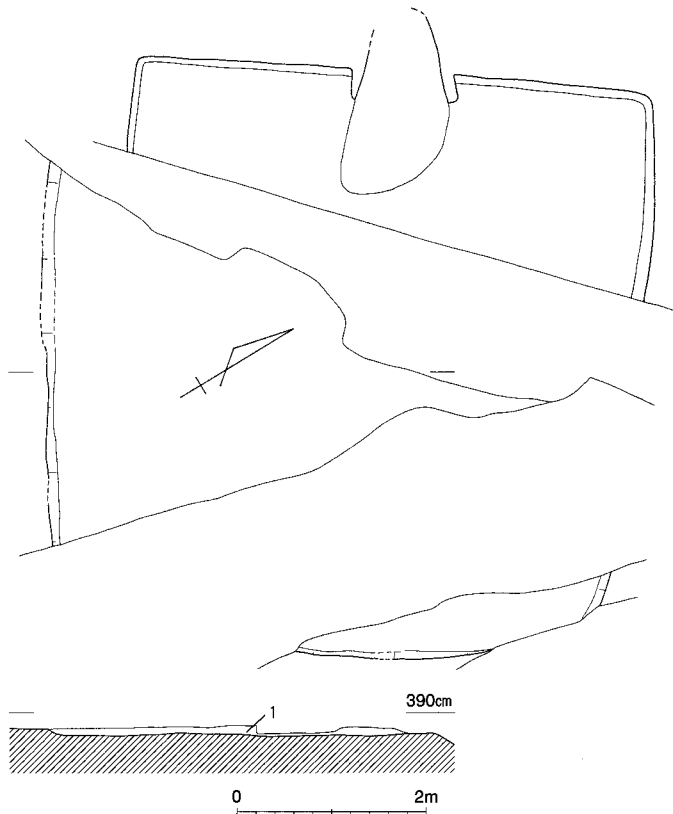
竪穴住居16は11B区、竪穴住居15の西約5mに位置する。380×320cmの方形を呈する小形の住居と考えられる。埋土は竪穴住居13と同様な黄色砂で、弥生後期終わり頃の水田を覆った洪水砂とよく似た印象を受ける。床面がほとんど露出した状態で検出した。壁沿いには、幅50~80cmの浅く不整形な溝が巡る。柱穴などは確認されなかった。遺物は埋土中から弥生土器から土師器の小片が多数出土した。溝の部分には比較的大きな破片が見られた。805は二重口縁の壺で、頸部にハケメ調整具による施文がある。頸~胴部2分の1ほどに復元された。806椀は口径14.2cm、器高5.9cmを測り、外面下半はヘラケズリ後ナデ調整である。

竪穴住居16の時期は土器の特徴から百・古・Iと考えられる。

(物部)



第226図 竪穴住居16 (1/80) ・出土遺物 (1/4)



第227図 竪穴住居17 (1/80)

竪穴住居17 (第222・227図)

調査区の西隅で検出した方形の竪穴住居である。遺構の東部は近世の水路によって掘削され、調査区北西端もやや損壊を受けているため遺存状態は良くない。

北西辺にカマドをもつ住居で、その部分については報告済みである(『百間川原尾島遺跡5』「竪穴住居20」)(第227図上部)。南東辺はそれとやや食い違いを示しているが、この付近は中世の土壌等の掘削がかなり多く、やや外側に誤認した可能性もある。

検出面からの深さは10cmと浅い。また、柱穴は認められなかった。

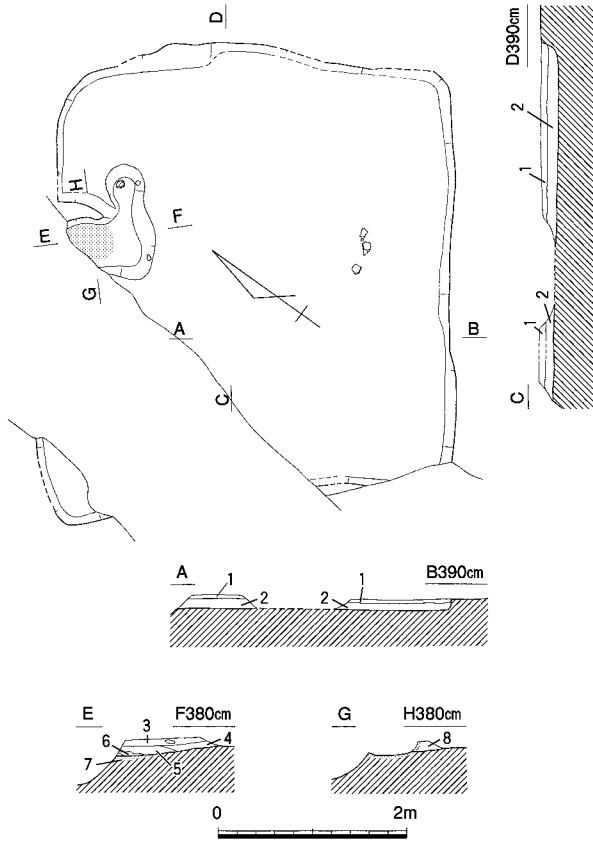
覆土中には須恵器・土師器小片が含まれており、古墳時代後期と判断できるものの詳細な時期決定は困難で、前調査以上に時期を絞り込むことはできなかった。(宇垣)

竪穴住居18 (第222・228図)

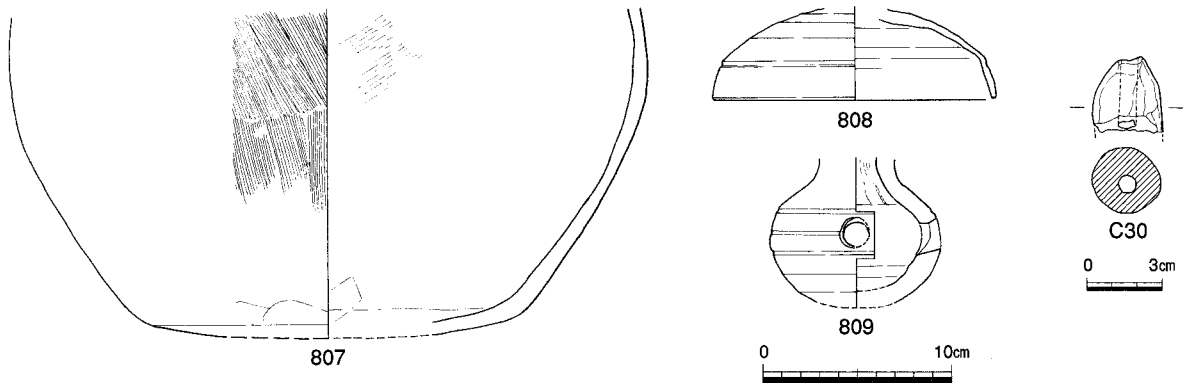
調査区の北東隅、竪穴住居17の東側で検出した方形の竪穴住居である。住居の西隅は近現代の用水路によって掘削されている。北西-南東方向420cm、北東-南西方向450cm、検出面からの深さ18cmを測る。北西辺中央やや北寄りにカマドが設けられており、焚き口を含めた残存長さ92cm、幅60cmを測る。底面は被熱によって焼土化していた。

壁体溝および柱穴は認められなかったが、本来なかったのかどうか判断しがたい。

床面上に土師器破片少量が散布しており、覆土中には須恵器破片も含まれていた。須恵器甕809から6世紀末の住居と考える。土師器甕底部807はやや平底気味である。C30は土錘である。(宇垣)



- |                     |             |
|---------------------|-------------|
| 1 黄灰褐色微砂質土 (炭・焼土少含) | 5 暗黄褐色砂質土   |
| 2 灰褐色微砂質土           | 6 赤色焼土ブロック  |
| 3 黄灰褐色砂質土           | 7 明橙色焼土ブロック |
| 4 黄灰色砂質土            | 8 黄褐色砂質土    |

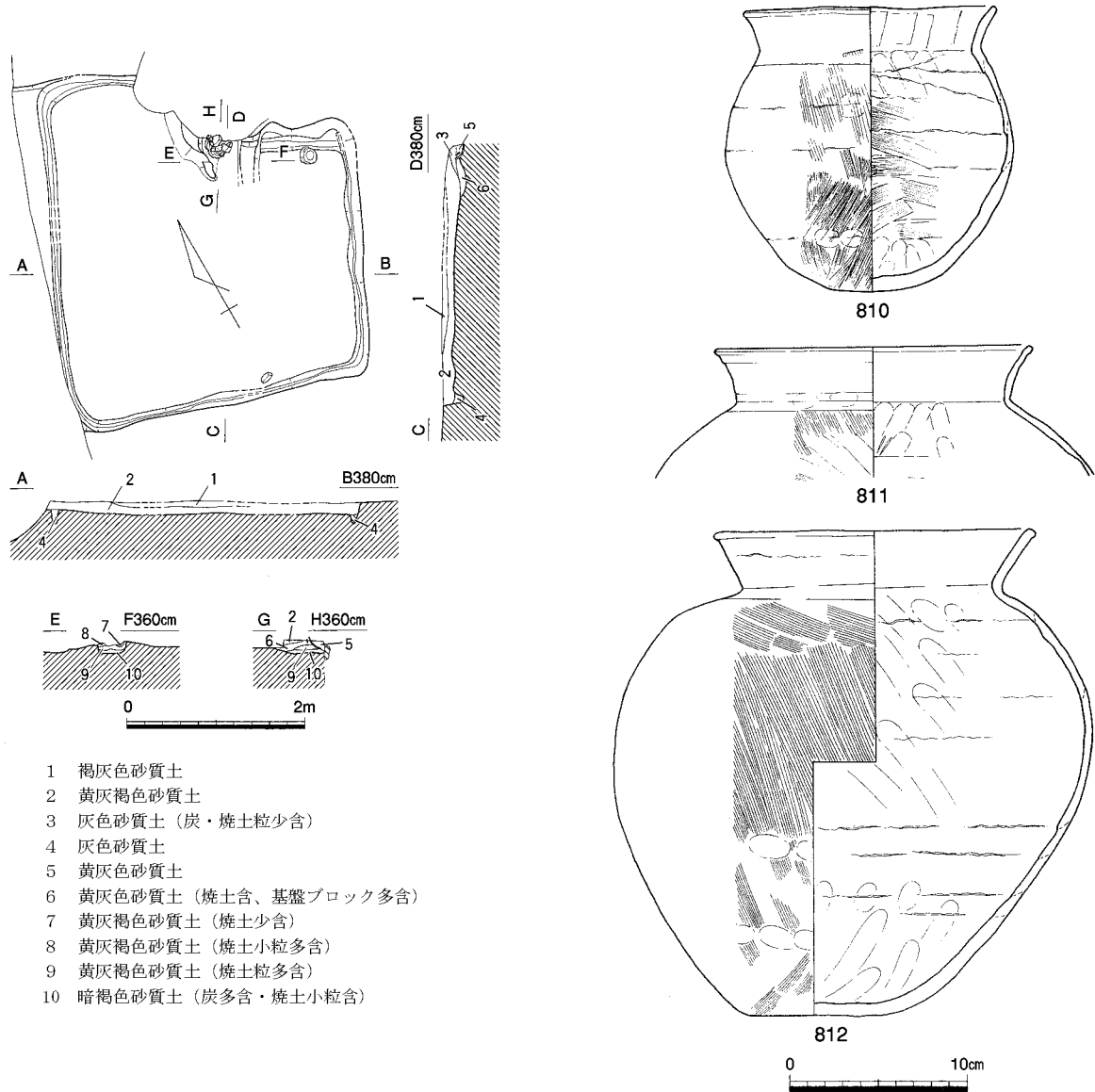


第228図 竪穴住居18 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居19 (第222・229図、図版33-1.77)

竪穴住居群のほぼ中央、12B区で検出した、北辺中央にカマドをもつ住居である。カマドの焚き口よりも北側は中世の井戸21の掘削のため遺存していない。また、そのため北辺の形状がわかりにくくなっているが、北辺はカマド部分で屈曲を示し東西両辺の長さが異なると判断した。南北400cm、東西350cm、検出面からの深さ14cmを測る。

精査したが柱穴は検出できなかった。北辺東半部、カマドの東部分の壁溝は他よりも幅広く浅くなり、カマドの袖部に入り込んでおり、若干の改修がなされた可能性が考えられる。カマド内から土師



- 1 褐灰色砂質土
- 2 黄灰褐色砂質土
- 3 灰色砂質土（炭・焼土粒少含）
- 4 灰色砂質土
- 5 黄灰色砂質土
- 6 黄灰色砂質土（焼土含、基盤ブロック多含）
- 7 黄灰褐色砂質土（焼土少含）
- 8 黄灰褐色砂質土（焼土小粒多含）
- 9 黄灰褐色砂質土（焼土粒多含）
- 10 暗褐色砂質土（炭多含・焼土小粒含）

第229図 竪穴住居19 (1/80)・出土遺物 (1/4)

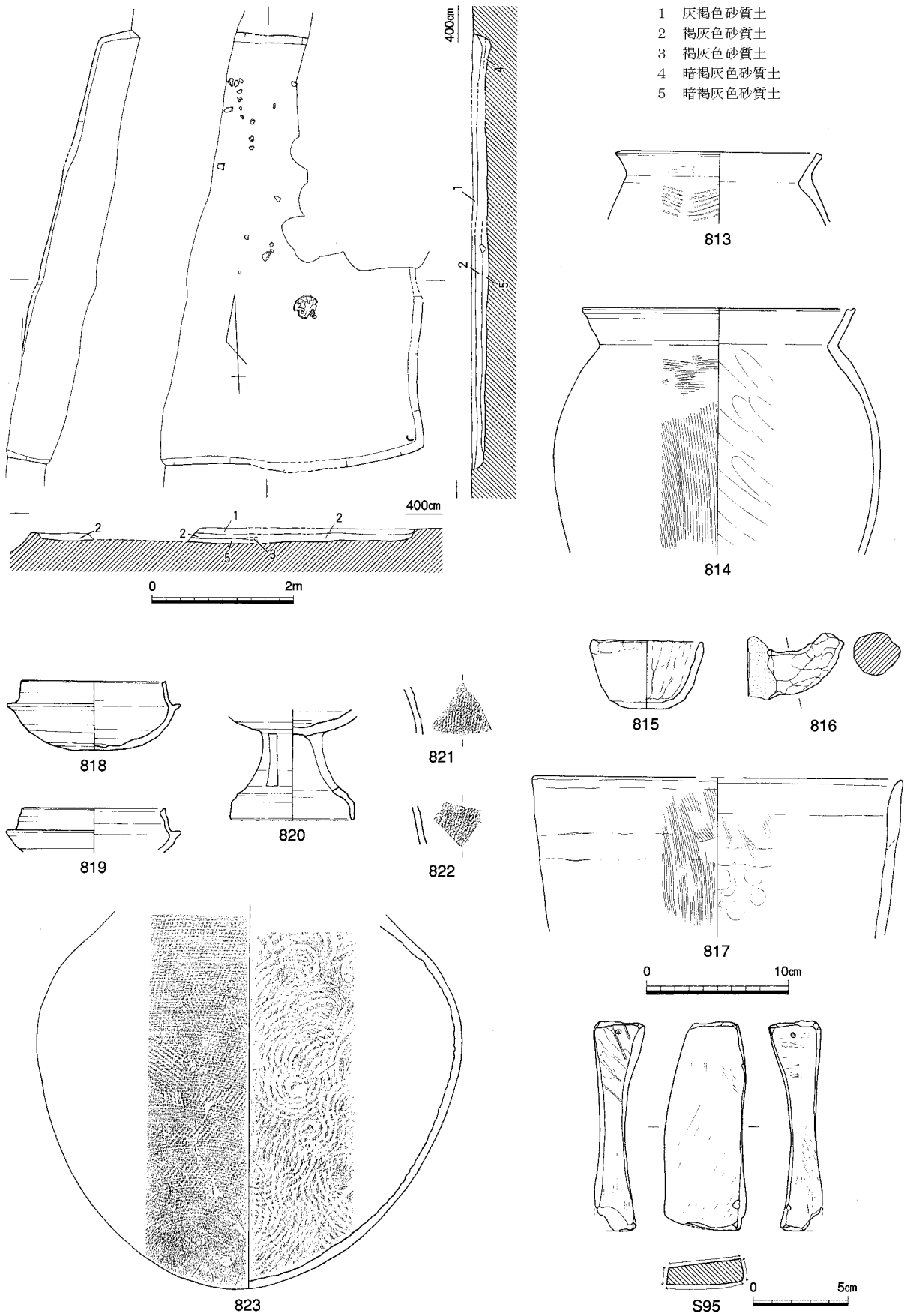
器甕811・812が出土した。支柱転用とするには大きく、落ち込んだものとみられる。

須恵器は小片が出土したのみで時期を限定しにくいだが、住居の年代は出土土師器から5世紀中葉前後と推定される。 (宇垣)

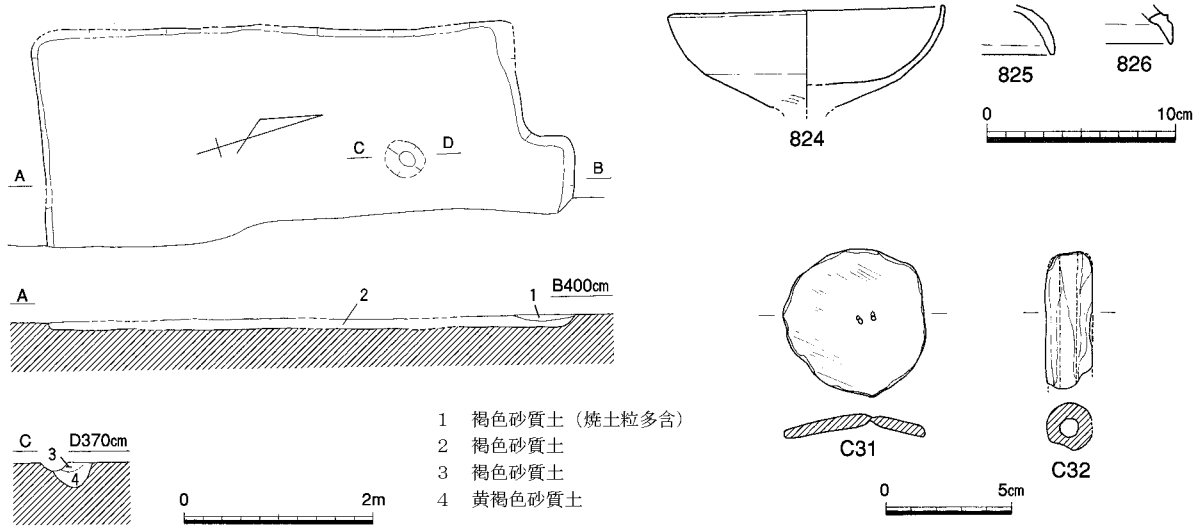
竪穴住居20 (第222・230図、図版33-2・3, 78-1)

竪穴住居群のほぼ中央、上記の住居19の上側に重複して所在する住居である。南北方向に軸線を持ち、北東隅部分は中世の長方形土壙109によって掘削され、中央部と西端部は近現代の水路によって掘削されている。東半部は方形をなすが西辺がそれらに対して斜めになっており、住居全体の平面形は台形となる。南北610cm、東西580cm、検出面からの深さ18cmを測る。精査したが柱穴は認められなかった。床面縁辺はやや深くなるが、明確な壁溝の状態は示さない。カマドも認められなかったが、これは北辺ないし東辺に所在していたと推定される。覆土には比較的多くの遺物が含まれていたが、床面出土と言えるのは中央部南東側からまとまった状態で出土した須恵器甕823のみである。

出土遺物は須恵器のほか土師器甕813・814、甑816・817、手づくね土器815などがあり、概ね5世



第230図 竪穴住居20 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

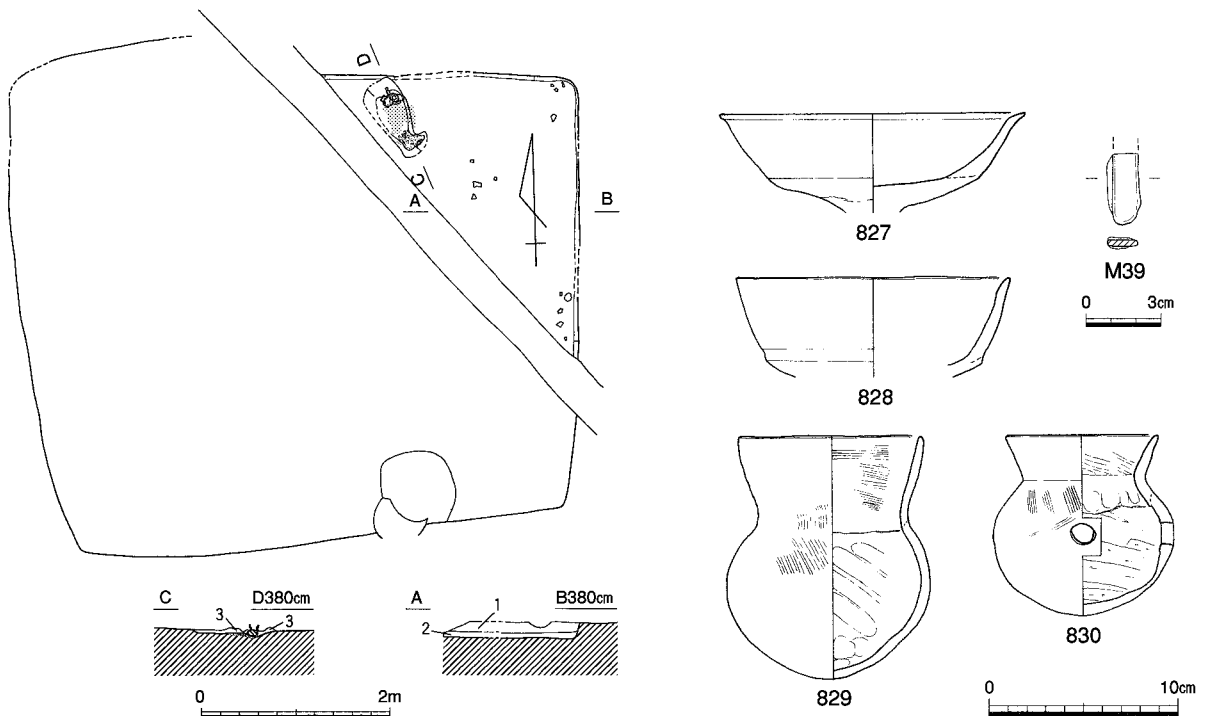


第231図 竪穴住居21 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

紀末の年代を示すが、須恵器甕823はそれらよりも新しいとみられる。多くが竪穴住居19覆土の遺物で、住居自体は6世紀代になると考える。821・822は縄蓆文が施された破片である。(宇垣)

竪穴住居21 (第222・231図、図版77)

竪穴住居群中央のやや南西部、住居19・20の南西で検出した。焼土混じりの褐色砂質土の広がりから竪穴住居の存在を想定したものであるが、平面形の把握がきわめてむずかしく、検出部分東側に所在する近現代水路を越えた東側部分では形状を把握するに至らなかった。平面形に不明確な部分があるが、須恵器杯蓋825から6世紀後半のごく浅い住居が所在したと判断する。(宇垣)



1 灰褐色砂質土 2 褐色砂質土 3 灰色砂質土 (焼土多含)

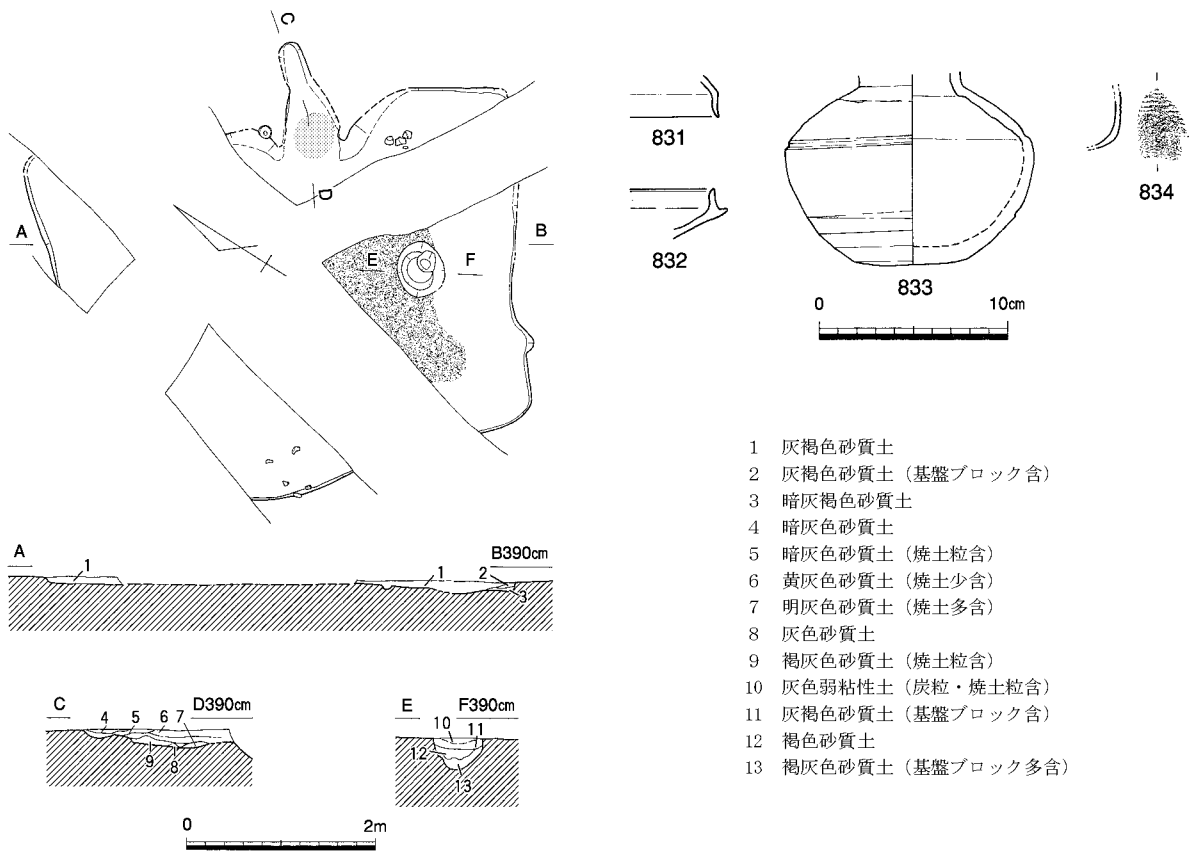
第232図 竪穴住居22 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居22 (第222・232図、図版34-1. 77)

竪穴住居22は12C区の南西側調査区境に位置する。『百間川原尾島遺跡4』において鉄剣形銅剣を検出し、古墳時代初頭と推定された「竪穴住居9」の北東部分にあたる。カマド内には倒れた支柱石があり、その直上に830小形丸底の壺、その周囲から827・828高杯片が出土した。830は胴部に焼成前の円孔がある。これらの土器は百・古・Ⅲの時期の特徴を持ち、前回調査の推定と食い違う。別々の住居の可能性もあるが、東壁の一致と床面高の一致から、同一の百・古・Ⅲの住居と考えたい。北壁のカマドの左右での食い違いも類例がある。鉄剣形銅剣は伝世を推定したい。(物部)

竪穴住居23 (第222・233図、図版34-2・3. 78-3)

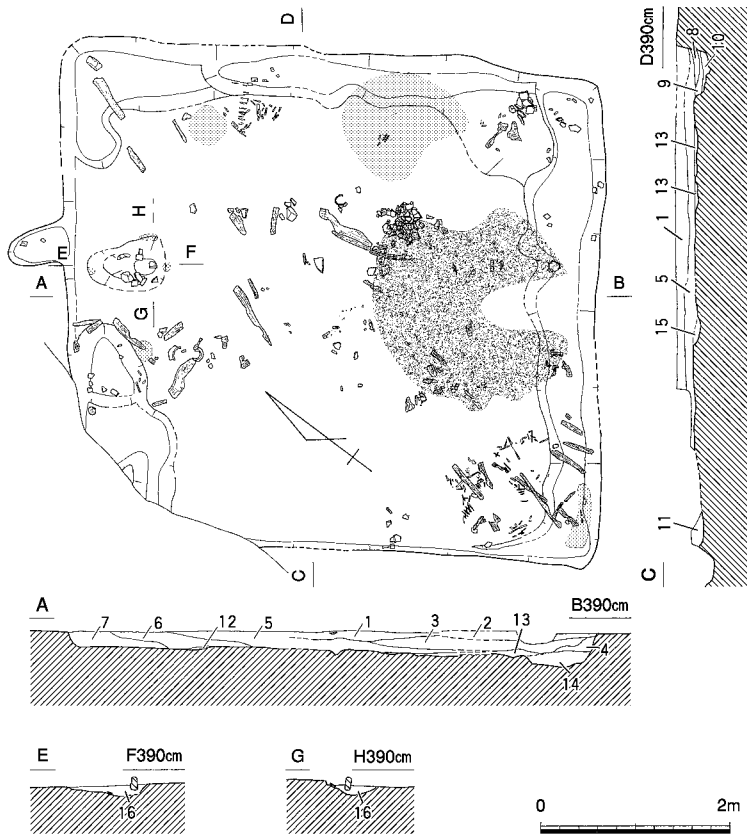
竪穴住居群の南部で検出した住居で、後述の住居24の埋没後に設けられている。東西方向が長く、また南辺よりも北辺が広がっているため住居の平面形は台形を呈する。東西560cm、南北390cmを測り、深さは8cmと浅い。北東辺中央にはカマドが設けられており、焚き口部分幅60cm、長さ1.2mを測る。床面中央には炭層の広がり認められた。また、床面南東部では柱穴を検出しており、2本柱であった可能性が考えられる。覆土中からは須恵器831~833、製塩土器834などが出土している。これらの遺物から6世紀末の住居とみられる。(宇垣)



第233図 竪穴住居23 (1/80)・出土遺物 (1/4)

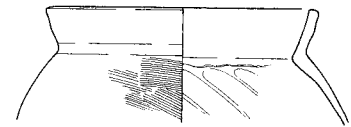
竪穴住居24 (第222・234図、図版35. 36-1. 78-2)

住居23の東側に所在する方形の竪穴住居で、西隅を近現代水路に掘削され、また西部には住居23が設けられたため掘削を受けているが、総じて遺存状態は良い。北東-南西530cm、北西-南東560cm、深さ20cmを測る。焼失住居であり覆土中には焼土、炭片が多量に含まれていた。床面直上では南隅、

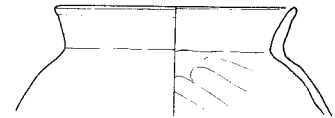


- |                        |                     |
|------------------------|---------------------|
| 1 灰褐色砂質土               | 9 褐色砂質土             |
| 2 灰褐色砂質土               | 10 褐灰色砂質土 (炭含)      |
| 3 灰褐色砂質土               | 11 灰褐色砂質土           |
| 4 暗灰色砂質土 (炭・焼土粒多含)     | 12 褐色砂質土            |
| 5 褐色砂質土 (炭粒・焼土粒・焼土塊含)  | 13 黄灰色砂質土 (炭・焼土粒少含) |
| 6 灰褐色砂質土 (焼土粒多含、下層に炭含) | 14 暗褐色砂質土 (基盤ブロック含) |
| 7 褐色砂質土                | 15 褐色砂質土            |
| 8 灰褐色砂質土               | 16 灰色砂質土 (焼土ブロック含)  |

北東縁辺近くに焼土が集中し、南東部には炭層の広がり認められた。覆土下面には炭化材が散在していた。長さ50cm前後の大きさで、南隅部では住居の内側にむかって並列した状態が認められ、焼け落ちた垂木材とみられる。また、床面には須恵器器台835が破碎されたとみられる状態で散在していたが、被熱の痕跡は認められなかった。精



843



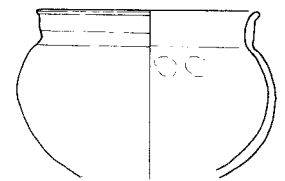
844



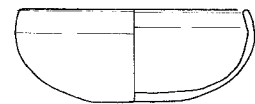
845



846



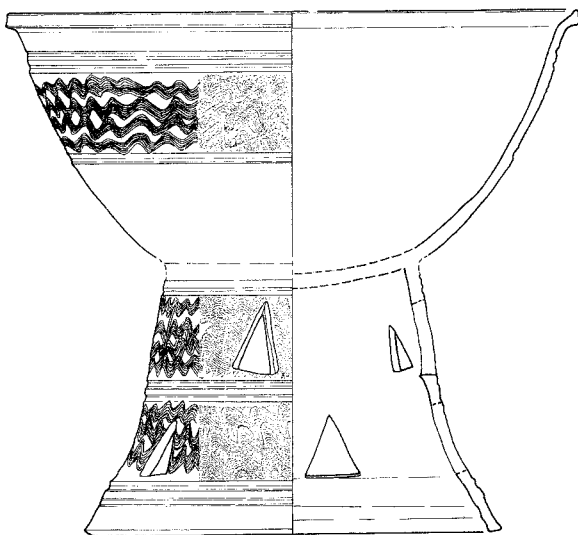
847



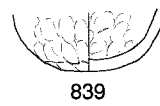
848



849



835



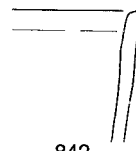
839



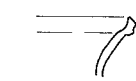
840



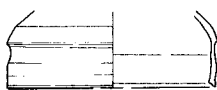
841



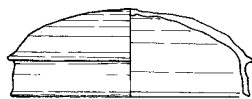
842



838



836



837

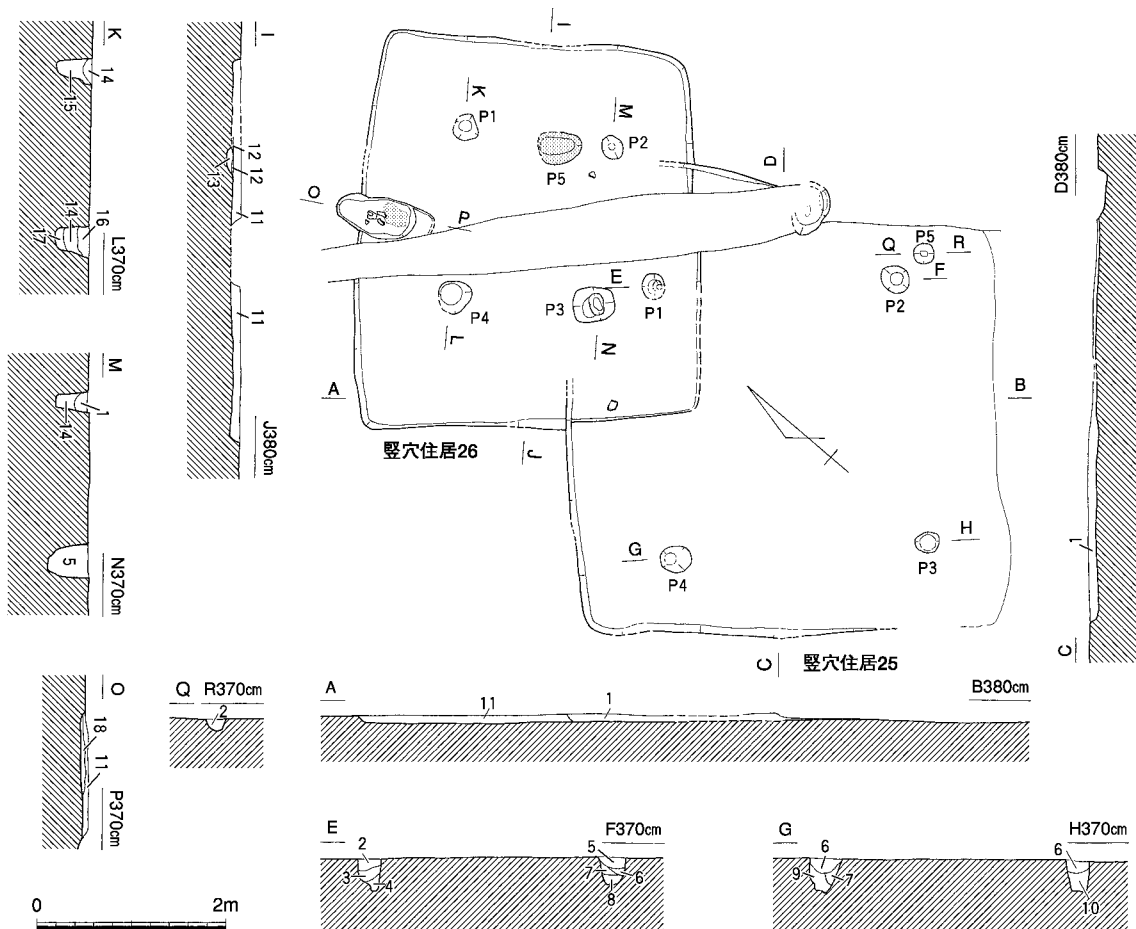


第234図 竪穴住居24 (1/80)・出土遺物 (1/4)

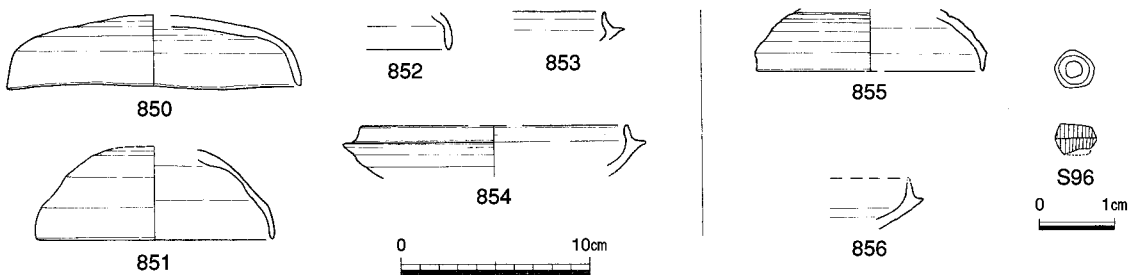


査したが柱穴および壁溝は検出できなかった。壁際の床面下には幅50cm、深さ16cm前後の浅い不整形な溝状を呈する掘り込みが設けられ、それを埋め戻して床面が形成されていた。カマドは被熱が弱くあまり明瞭ではなかった。やや住居内に入り込む形となるが北西辺の内側に土壇状のくぼみがあり支柱とみられる円礫が立っていたことから、この部分をカマド、その外側を煙道と判断した。

出土遺物には須恵器杯・壺838・器台、土師器壺・碗・甑・製塩土器840などがあり、住居の年代は5世紀末と推定される。(宇垣)



- |                    |                     |                       |
|--------------------|---------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色砂質土           | 7 淡褐色砂質土 (基盤ブロック含)  | 13 灰褐色砂質土 (焼土粒多含)     |
| 2 灰褐色砂質土           | 8 暗褐色砂質土 (基盤ブロック含)  | 14 灰褐色砂質土             |
| 3 黄褐色砂質土 (基盤ブロック含) | 9 灰褐色砂質土 (基盤ブロック含)  | 15 淡褐色砂質土             |
| 4 褐灰色砂質土 (基盤ブロック含) | 10 淡灰褐色砂質土          | 16 褐色砂質土 (基盤ブロック含)    |
| 5 褐色砂質土            | 11 暗褐色砂質土 (基盤ブロック含) | 17 褐灰色弱粘性砂質土          |
| 6 褐色砂質土 (基盤ブロック含)  | 12 暗褐色砂質土 (貼床)      | (焼土粒含、基盤ブロック含)        |
|                    | (基盤ブロック含)           | 18 褐灰色砂質土 (炭少含・焼土粒多含) |



第235図 竪穴住居25・26 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/1)

竪穴住居25 (第222・235図、図版36-2)

住居群の南端で検出した方形の住居で、北側の住居26を一部掘削する。北東-南西方向496cm、深さは数cmと浅く南部はかろうじて遺存する。4本の柱をもつ。削平のためほとんど遺存していないが、北東辺にカマドをもつようである。須恵器杯855から7世紀前半の住居と判断される。(宇垣)

竪穴住居26 (第222・235図、図版36-2・3)

竪穴住居25の北に重複して所在する方形の住居で、北東-南西方向420cm、深さ8cmを測る。北西辺にカマドをもち、床面北東部には焼土の入る浅い土壙が設けられている。南隅の柱穴は検出できなかった。覆土中から須恵器杯が出土している。杯蓋850と851のように時期差が大きい、851以下は住居25に帰属する可能性が考えられ、杯850から6世紀前半の住居と推定する。(宇垣)

竪穴住居27 (第220・236図)

微高地の中央、18B区で検出された竪穴住居で、4本の主柱穴と中央穴がかろうじて検出できた。柱間は280cmを測り、中央穴は南東寄りに位置する。柱穴掘り方は平面楕円形で、径は70cm前後、検出面からの深さは50~60cm程度である。いずれの柱も径25cmの柱痕跡が確認できた。中央穴は平面楕円形で、炭が堆積している。

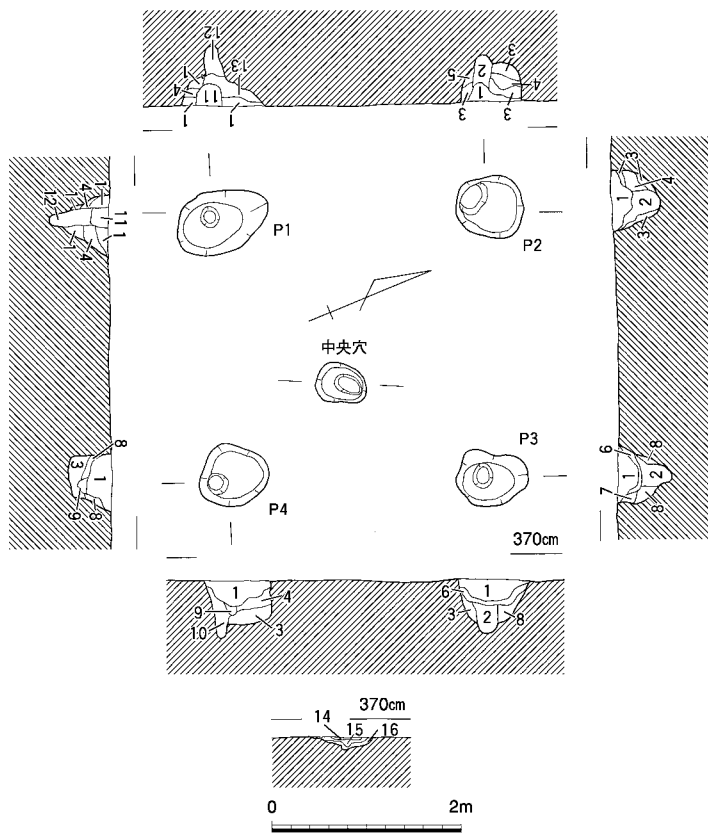
出土遺物としては、柱穴や中央穴から土師器細片などが出土している。遺構の詳細な時期は不明であるが、古墳時代初頭の可能性がある。

(柴田)

竪穴住居28 (第220・237図、図版37-1, 78-3)

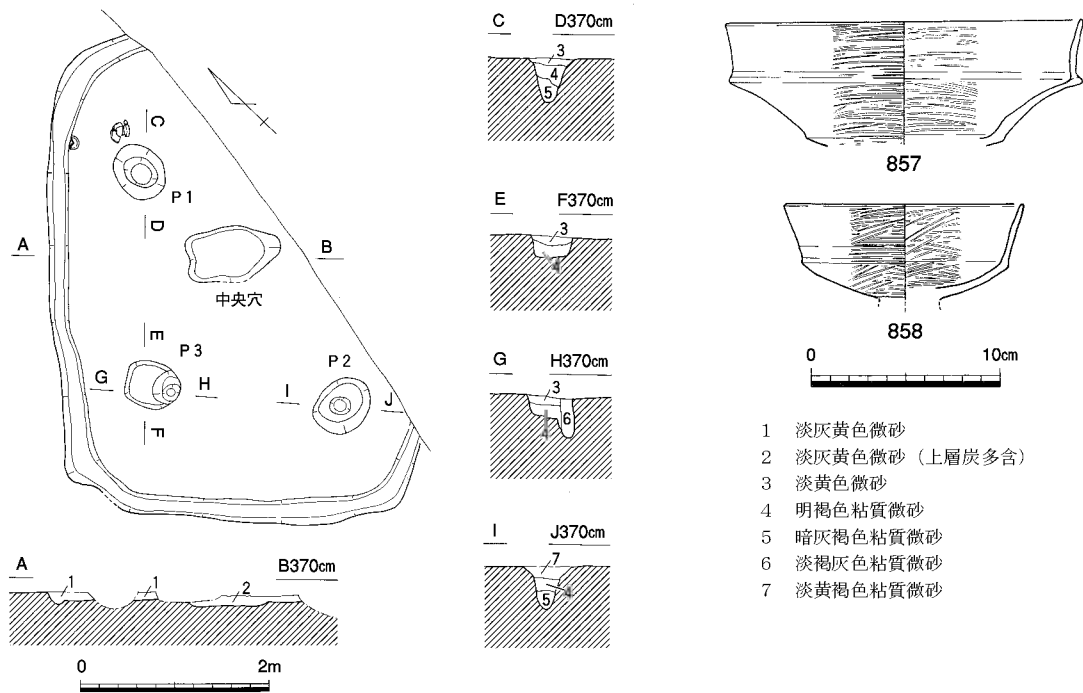
微高地の中央、18C区で検出された竪穴住居で、西側は後世に削平されている。洪水砂と思われる砂層が薄く残存しており、それを切っていることが確認できた。検出面からの深さは10cm程度で残存状態はあまりよくない。

平面形は長方形で、規模は推定で長辺540cm、短辺420cmを測る。主柱穴は3本検出され、掘り方平面形は円ないしは楕円形である。径20cm前後の柱痕跡が確認できた。平面楕円形の中央穴は北隅寄りに位置している。覆土中から高杯857・858、柱穴から土師器の甕片が出土している。出土遺物から、遺構の時期は百・古・Iと考えられる。(柴田)



- |             |                   |
|-------------|-------------------|
| 1 淡黄灰色細砂    | 9 淡灰褐色粘質細砂        |
| 2 淡灰茶褐色粘質微砂 | 10 暗灰茶褐色粘質微砂      |
| 3 暗褐色粘質微砂   | 11 暗黄色細砂          |
| 4 暗黄褐色粘質微砂  | 12 淡黄灰色細砂         |
| 5 暗褐色粘質微砂   | 13 淡黄灰色細砂         |
| 6 暗灰色細砂     | 14 灰黑色粘質微砂 (下面炭層) |
| 7 淡黄褐色細砂    | 15 灰黑色粘質微砂 (下面炭層) |
| 8 淡黄褐色粘質微砂  | 16 暗赤褐色粘質微砂       |

第236図 竪穴住居27 (1/80)



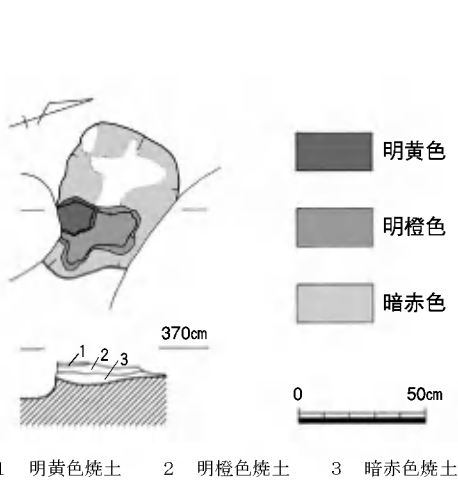
第237図 竪穴住居28 (1/80)・出土遺物 (1/4)

カマド1 (第222・238図)

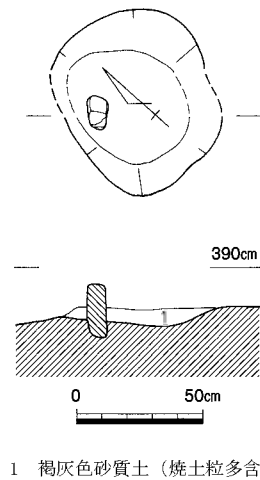
カマド1は11C区東角に位置し、竪穴住居16の南西約2mにある。中世の柱穴と井戸19によって一部切られているが、60×40cmの範囲が被熱により変色している。南寄りの径10cmの範囲は明黄色に変色し、被熱が強い。被熱面直上から土師器小片が出土している。支柱石の痕跡はなく、竪穴住居に伴う作り付けカマドとするにはやや躊躇する。(物部)

カマド2 (第222・239図)

カマド2は12C区、カマド1の南約10mに位置する。直径約70cm、検出面からの深さ約7cmを測る浅い土壇の北西寄りに長さ約20cmの柱状の石が直立した状態で検出された。石は被熱し、ほぼ全面赤化している。竪穴住居のかまどの可能性が高く古墳時代後半期の竪穴住居を想定したい。(物部)



第238図 カマド1 (1/30)

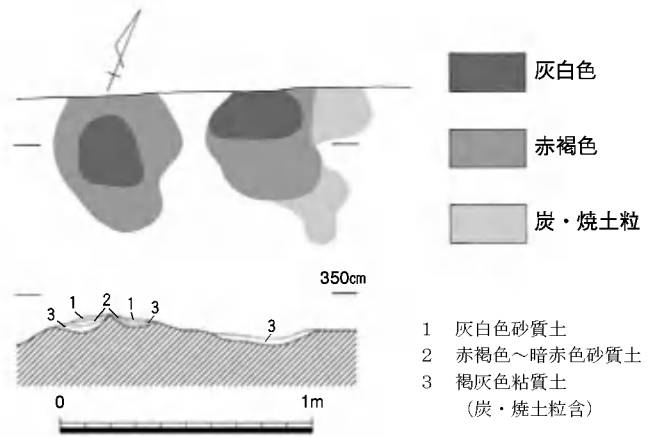


第239図 カマド2 (1/30)

カマド3 (第220・240図)

16B区に位置し、溝80の北西肩部の弥生末の洪水砂上面で検出した火処である。2カ所の被熱面からなり、いずれも径50cm前後の不整形形の範囲に熱変化がみられる。東側のものについては、被熱面の外側に炭と焼土が分布している。

時期を決定する遺物はないが、検出状況から古墳時代初頭に属するものと考えられる。(高田)

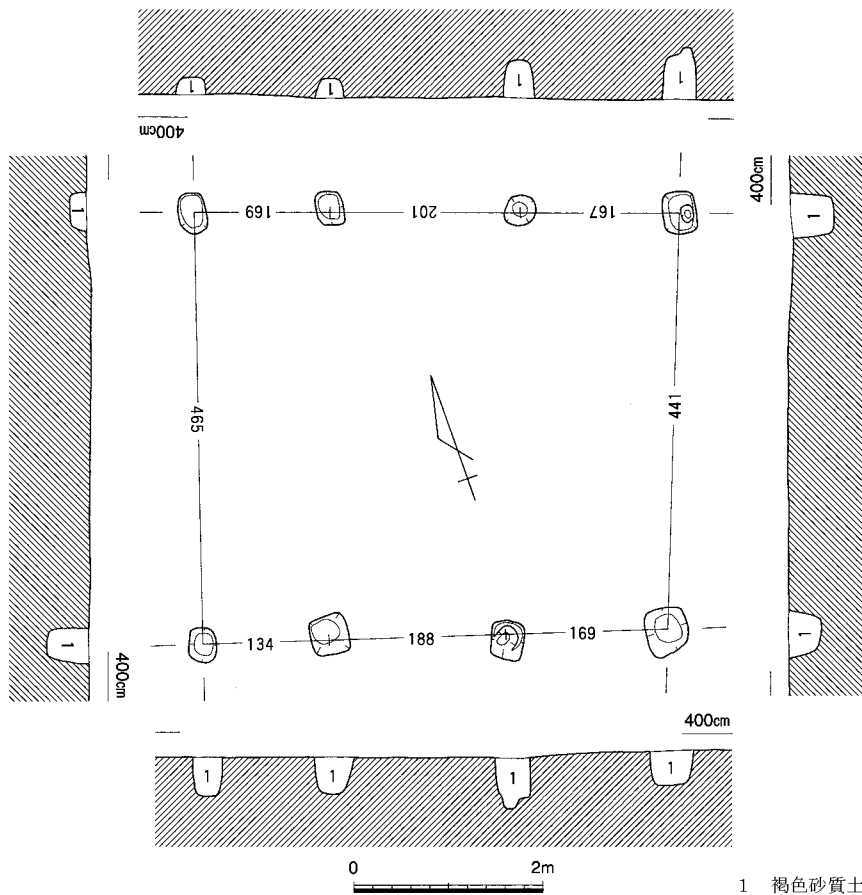


第240図 カマド3 (1/30)

2 建物・柱穴列

建物2 (第222・241図)

13ラインの北部にかかる形で検出した3×1間の建物で、軸線は東西方向に近い。正方形に近い平面形で、東西537cm、南北455cmを測る。東西両辺は4.5m前後の長さをもつが、この部分に柱穴は設けられていない。また、南北両辺は柱間3間で構成されるが、柱穴間の距離は201~134cmとばらつく。



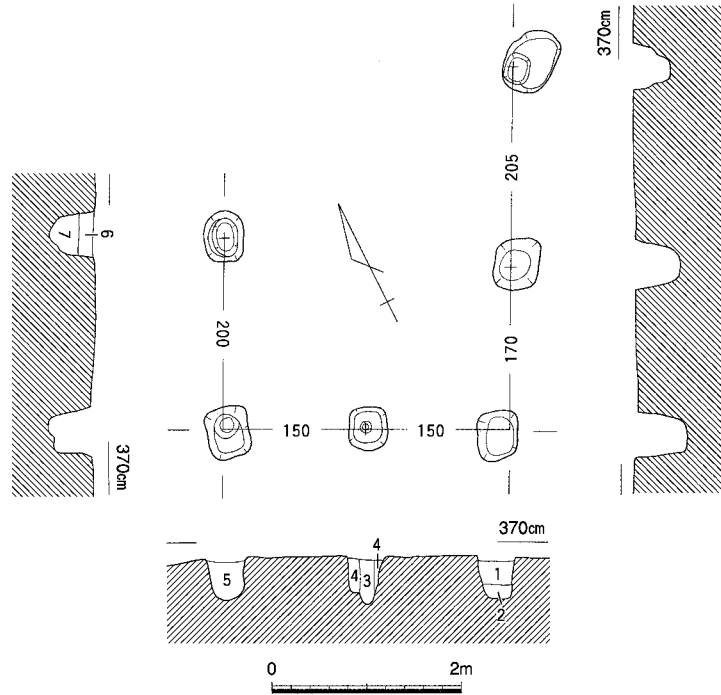
第241図 建物2 (1/80)

遺物を伴わないため古墳時代という以上には時期を限定できない。可能性として古墳時代後半期が考えられる。(宇垣)

建物3 (第220・242図)

18・19C区で検出したが、その北側については該当する柱穴を検出できていない。

梁行2間、桁行2間以上と推察される。梁行の柱穴間距離は150cmと規則的で、全長は300cmを測る。一方、桁行の柱間距離は170~205cmで、やや不規則である。柱穴掘り方は方形を呈し、長軸は45~53cm、短軸は45~50cmを測る。出土遺物は柱穴から土師器の細片が出土しており、それらの示す時期や検出面・柱穴の埋土等から古墳時代と考えられる。(松尾)



- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1 黄灰色砂質土 (炭多含) | 5 褐灰色粘質土 (灰少含) |
| 2 褐灰色粘質土       | 6 黄褐色粘質土 (炭含)  |
| 3 黄灰色砂質土       | 7 暗褐色粘質土 (炭少含) |
| 4 淡灰色砂質土 (灰含)  |                |

第242図 建物3 (1/80)

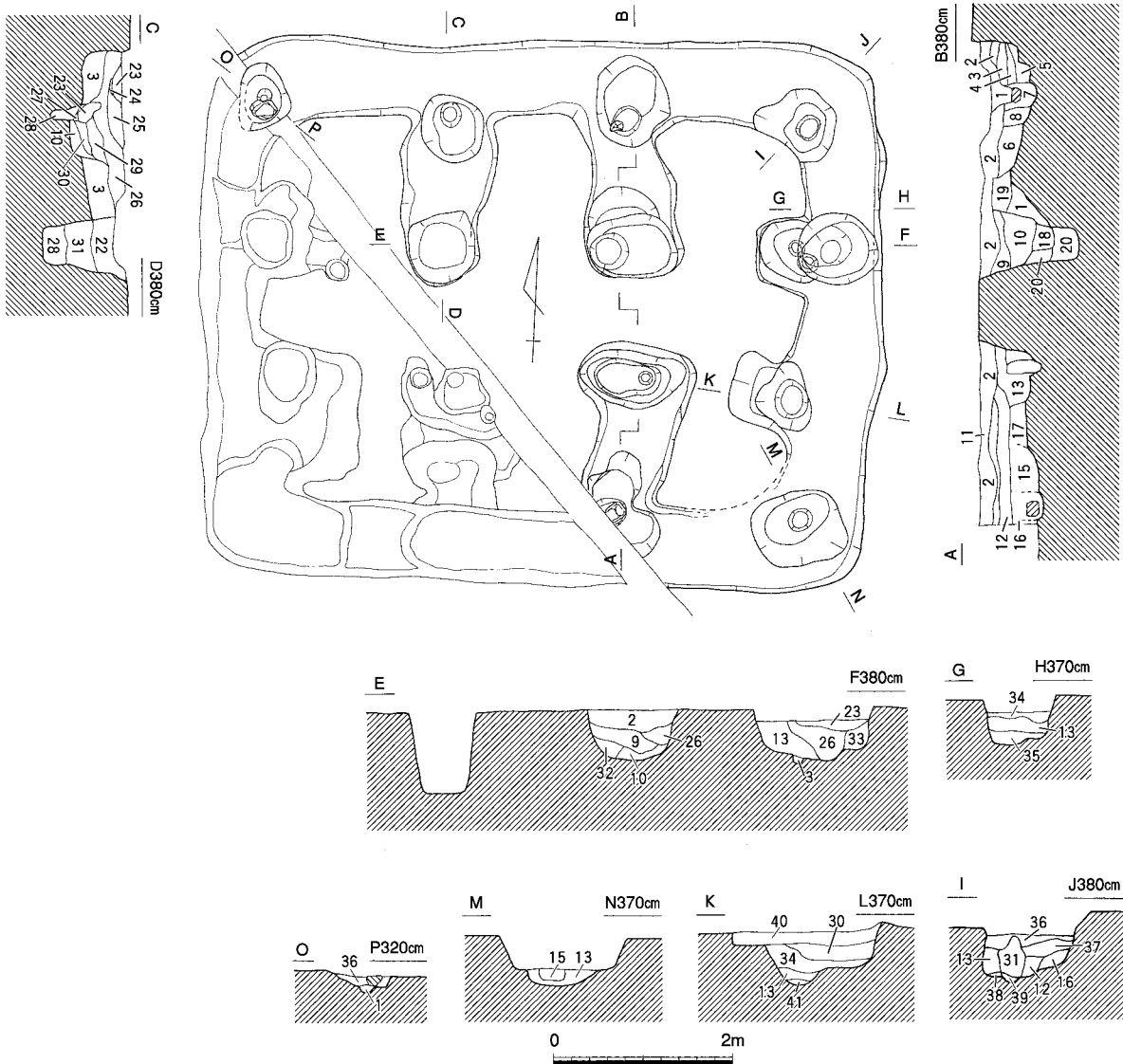
建物4 (第220・243・244図、図版37-2)

19C区で検出した建物で、『百間川原尾島遺跡5』『建物12』の続きである。図243・244に過去の調査時の建物と合成した図面を掲載した。それによると、東西に主軸をもつ3間×3間の布掘り総柱建物であることが判る。柱間距離は桁行が184~234cm、梁行が135~172cmを測る。柱穴間での建物規模は南辺が581cm、北辺が609cm、東辺が435cm、西辺が465cmで、若干のゆがみがある。

布掘りは幅が100cm前後を測り、内部の柱4本に続く部分も布掘りが行われている。布掘りの深さは検出面から50~60cmで、断面形は検出面から底面までほぼ直角に落ち込み、その底は比較的平坦である。布掘り部分での建物規模は長辺が760cm、短辺が600cmを測る。柱穴掘り方は楕円形や隅丸方形を呈するものが多く、直径60~100cm前後で、その深さは検出面から測ると60~100cmと多様である。また、P1・P8・P9・P11・P12の5基の柱穴底には自然石や角材が認められ、これらは柱の沈下を防止するなどの用途を有していると考えられる。これらの柱穴の内いくつかは重複しており、最低でも1度は立て替えが行われた可能性を指摘できる。

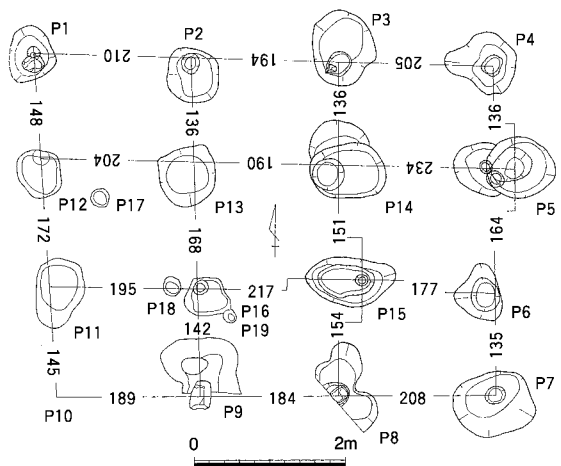
柱穴あるいは布掘りの埋土断面から推察すると、この建物は布掘りを掘削した後に柱の掘り方部分を掘り込み、柱を立てると同時に布掘り部分を埋め戻したものと考えられる。このような構造を有する建物は珍しく、百間川遺跡群では『百間川原尾島遺跡4』『建物8』や『百間川沢田遺跡3』『建物5』などに類例があるのみで、特殊な建物であるといえよう。また『百間川沢田遺跡3』『建物5』では、柱と柱を布掘り部分に埋めた横木で固定するとの推定をされているが、今回検出した建物についてはそのような構造を有していたかは不明である。

時期は前回の調査成果等から6世紀中頃と考えられる。(松尾)



第243図 建物4 (1/80)

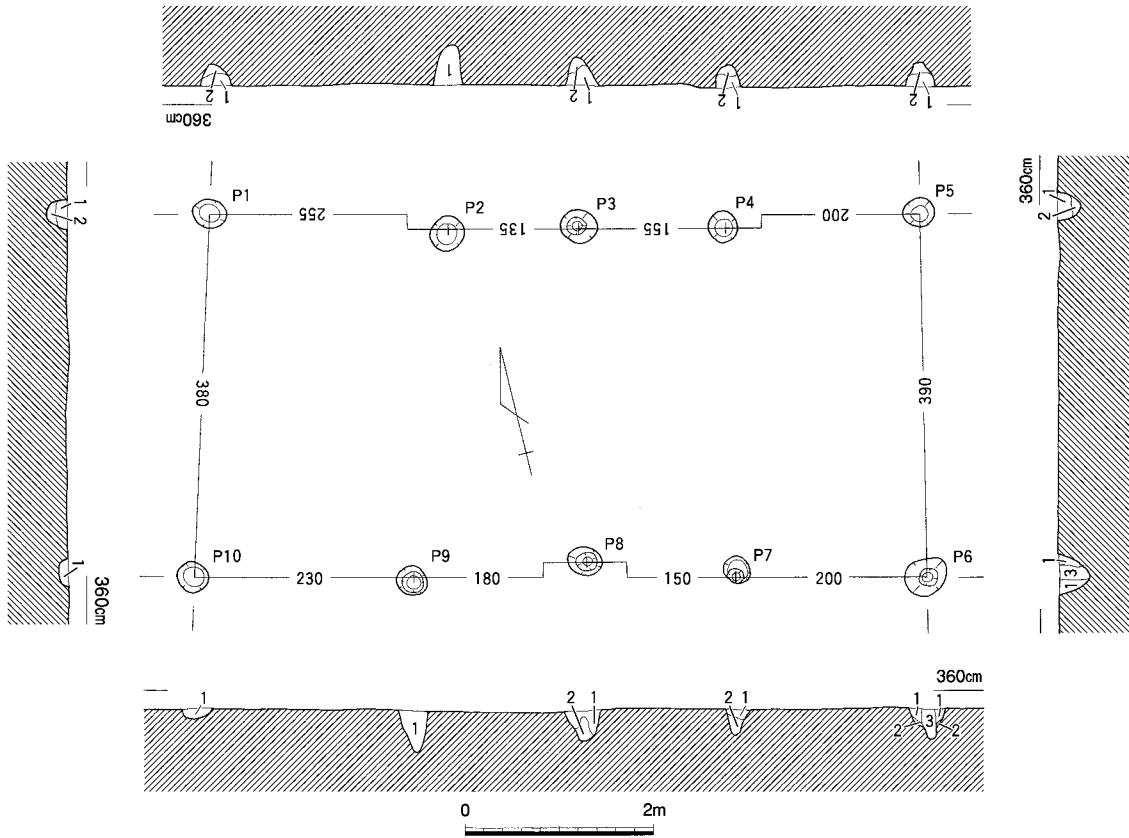
- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1 黄灰色粘質土    | 22 黄灰色粘質微砂  |
| 2 淡灰黄色砂質土   | 23 暗灰褐色砂質土  |
| 3 黄褐色粘質土    | 24 灰色微砂     |
| 4 黄褐色粘質土    | 25 暗灰色粘質微砂  |
| 5 暗黄褐色粘質土   | 26 灰褐色粘質微砂  |
| 6 淡黄褐色粘質土   | 27 灰黄色粘質微砂  |
| 7 橙褐色粘質土    | 28 淡灰黄色粘質微砂 |
| 8 橙褐色粘質微砂   | 29 灰褐色粘質微砂  |
| 9 暗褐色砂質土    | 30 暗灰黄色粘質微砂 |
| 10 淡黄褐色砂質土  | 31 淡黄褐色粘質微砂 |
| 11 黄褐色粘質土   | 32 灰褐色粘質微砂  |
| 12 淡褐色粘質微砂  | 33 褐色砂質土    |
| 13 褐色粘質微砂   | 34 白黄灰色粘質微砂 |
| 14 暗褐色粘質土   | 35 暗褐色粘質微砂  |
| 15 淡灰黄色粘質微砂 | 36 黄灰色砂質土   |
| 16 暗灰色粘質土   | 37 灰黄色砂質土   |
| 17 黄灰色粘質微砂  | 38 褐色粘質土    |
| 18 淡灰黄色粘質土  | 39 灰黄色粘質土   |
| 19 淡黄灰色粘質土  | 40 淡黄灰色砂質土  |
| 20 淡黄褐色砂質土  | 41 橙褐色粘質土   |
| 21 淡灰黄色粘質土  |             |



第244図 建物4 柱穴間距離 (1/100)

建物5 (第220・245図、図版37-3)

20B・C区で検出した。北東・南西方向に主軸をもつ1間×4間の掘立柱建物である。柱間距離は桁行が135~255cm、梁行が380~390cmを測る。建物規模は西側が380cm、南側が760cm、東側が390cm、



1 暗灰黄色微砂 2 暗褐色粘質微砂 3 暗黄褐色粘質微砂

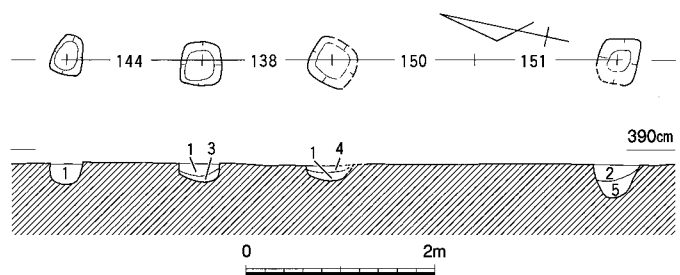
第245図 建物5 (1/80)

北側が745cmで総床面積が29.96㎡となる。

柱の掘り方は円形で、直径が36~40cmを測る。断面形はU字形のものが多く、埋土は全て微砂である。建物の時期を示す遺物は、図化不可能な土器片が数点柱穴から出土している。それら土器片や検出面および柱穴埋土等から古墳時代前半であると考えられる。(松尾)

柱穴列1 (第222・246図)

建物2に重複する形で検出した柱穴列である。ほぼ南北方向をとり、延長580cmにわたって4基の柱穴が並ぶことを確認したが、建物を復元するに至らなかった。この部分に限らず微高地上には隅丸方形の柱穴が散漫に分布しており、把握はできなかったが、不整形な建物が、ある程度の数所在した可能性が考えられる。(宇垣)

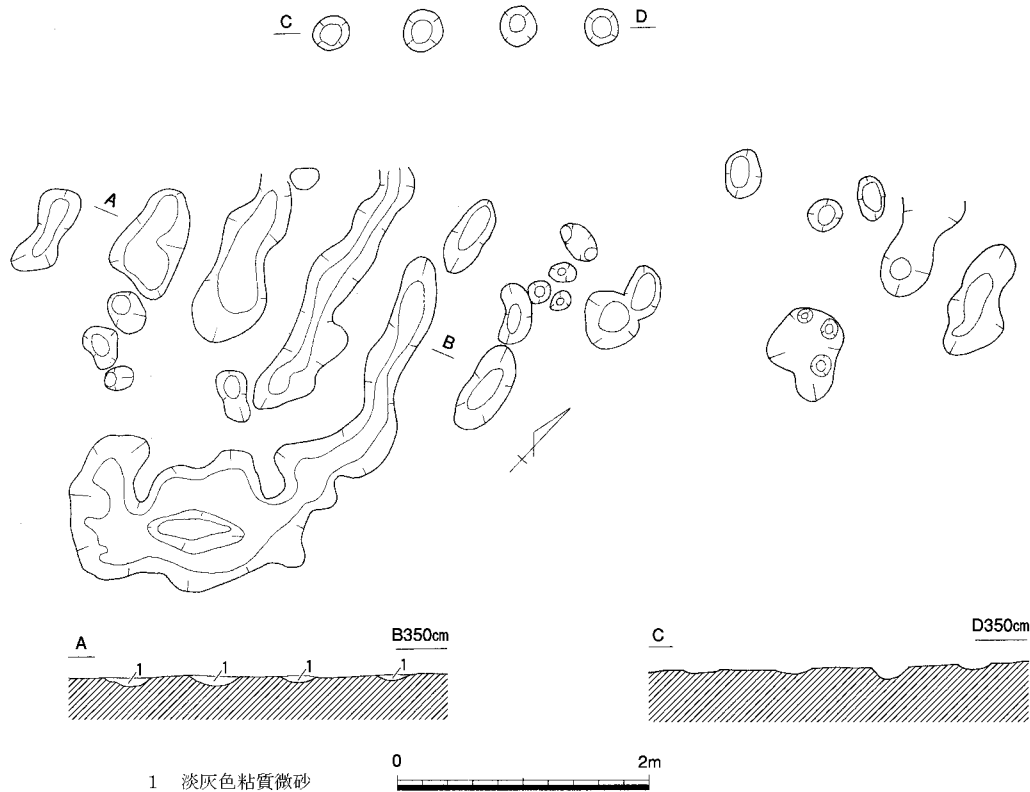


1 褐色砂質土 3 褐色弱粘性砂質土 5 暗褐色粘性砂質土  
2 褐色砂質土 4 暗褐色砂質土

第246図 柱穴列1 (1/80)

柱穴列 2 (220・247図)

21C・22C区境の弥生時代後期末洪水砂上面で検出した。不定形の窪みが比較的狭い範囲に集中して分布していることから、柱穴列として掲載した。東南方向の一群は、個々の柱穴の平面形は不定形であるが、その深さは5～8cmと比較的浅い。北西方向の一群は、個々の柱穴の平面形が円形で、直径は20cm前後である。深さは東南の一群と同様5cm前後で浅い。遺構の埋土はいずれも淡灰色粘質微砂である。遺物は図示不可能な土器の細片ばかりであるが、百・古・Iの時期を示す。(松尾)



第247図 柱穴列 2 (1/80)

3 井戸

井戸14 (第222・248・249図、図版38-1. 79. 80-1)

井戸14は13B区の東端に位置し、建物2と重複する。平面形は直径約210cmの円形で、検出面からの深さは約120cm、底面海拔高は241cmを測る。断面形は底面から上に30cmほどは垂直な壁であるが、それより上は逆「ハ」の字状に開いてゆく。底面での直径は50cm前後である。埋土は砂質土で下層ほど粘性を帯びる。

遺物は埋土中層に集中してみられた。全体的に壺と甕が大半を占め、その他の器種は小さな破片が多い。859～862は壺で、口縁部が外傾して拡張されるものと、そのまま収まるものと二種類ある。859壺胴部には1.5cm大の穿孔がある。862壺は橙色を呈し、胴部外面にはヨコ・ナナメ方向のタタキメが残る。863～866は甕。863甕の肩部には楕円形の刺突文がある。855甕は完品に近い。867・870・871は鉢で、870鉢の底部外面には木葉痕がみられる。外面には成形時に出来たと考えられる縦方向の無数のひび割れが残る。底部外面はヘラケズリがみられる。871鉢外面はヘラケズリ後簡単にナデ調整を行う。内面は板状工具によるナデである。868は橙色を呈する直口壺で完形に近い。869は灰白色



を呈する小形の甕で完成である。この甕には870鉢と同様な小さなひび割れが胴部外面に認められ、外面底部付近にはヘラケズリが施される。焼成・色調とも類似する。M40・41は鉄釘と考えられる。

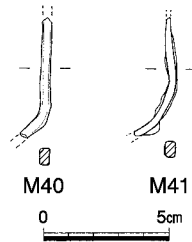
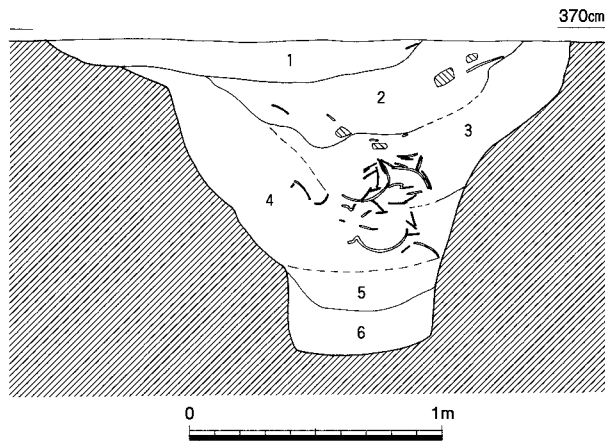
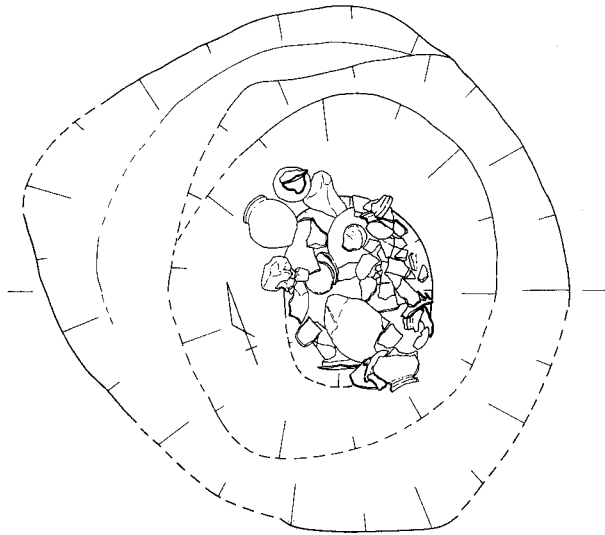
出土土器の特徴から井戸14の埋没時期は百・古・Iと推定される。 (物部)

井戸15 (第222・250・251図、図版38-2. 80-2)

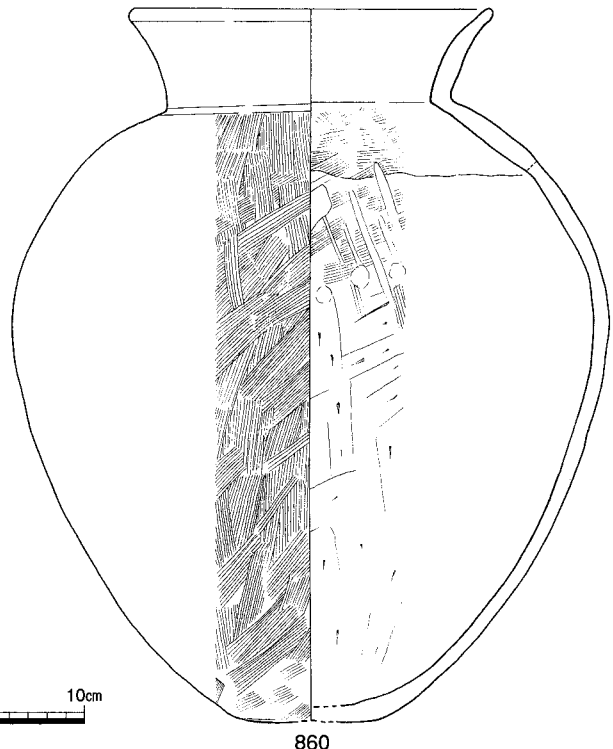
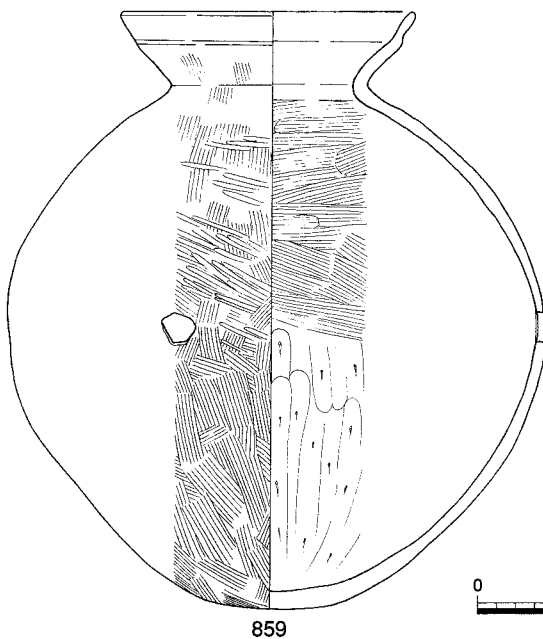
竪穴住居群のほぼ中央、13ラインとCラインの交点付近で検出した古墳時代後期の井戸である。

検出面での平面形は一辺125cmの方形を呈し、軸線は方位に対して斜めとなる。中部以下の平面は円形に変わり、断面に示す

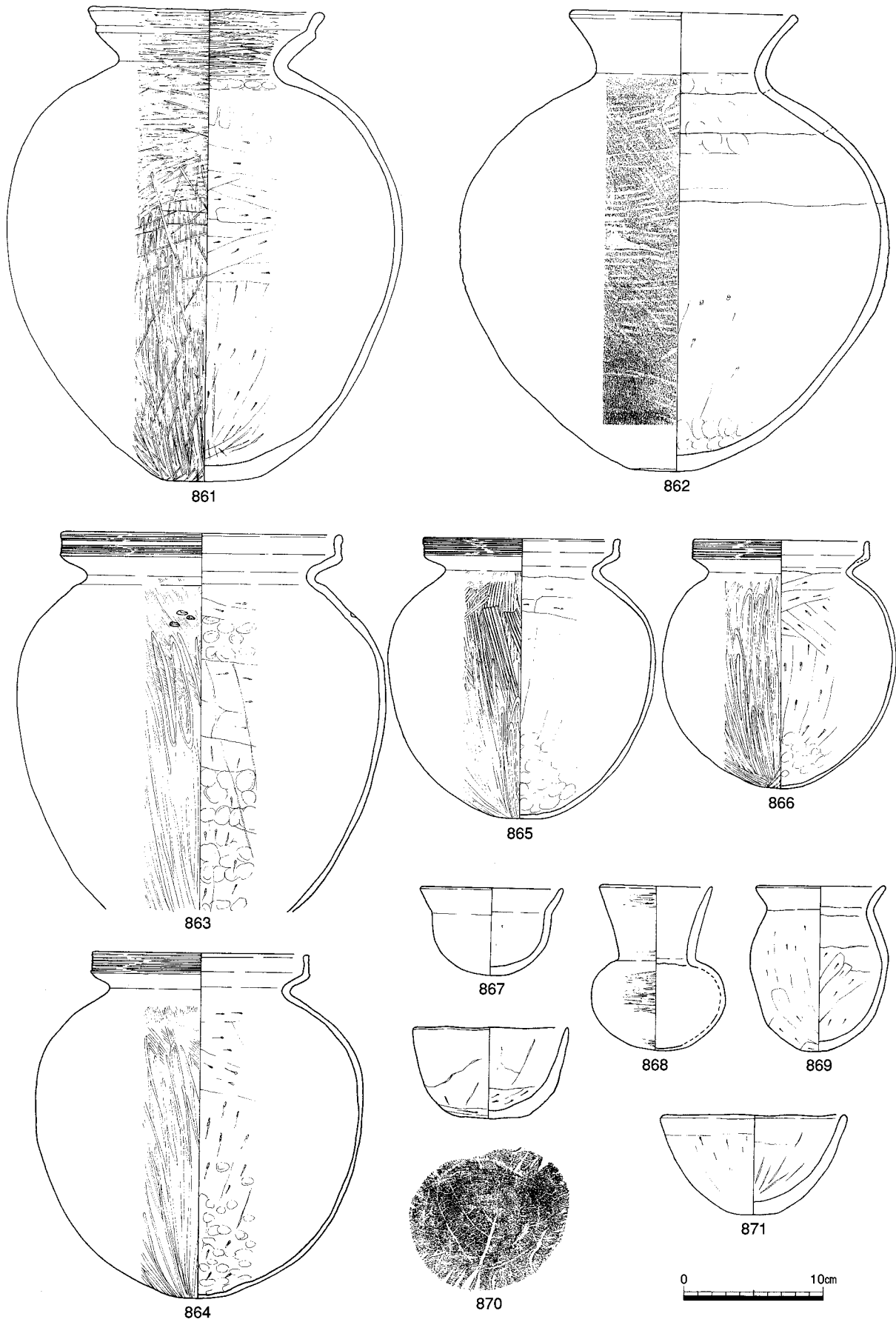
ように下部は球形に広がっている。これは滞水によって形成された可能性がある。検出面



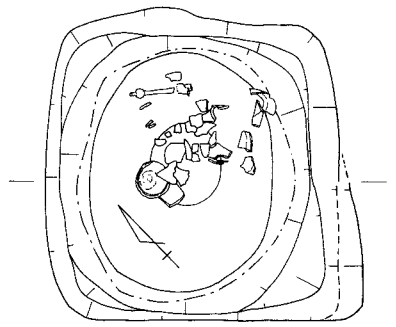
- 1 灰褐色砂質土 (炭粒含)
- 2 灰褐色砂質土
- 3 暗灰褐色砂質土 (炭粒含)
- 4 淡灰褐色砂質土 (炭粒少量含)
- 5 淡灰褐色粘性砂質土
- 6 淡灰色粘性砂質土



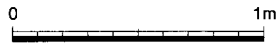
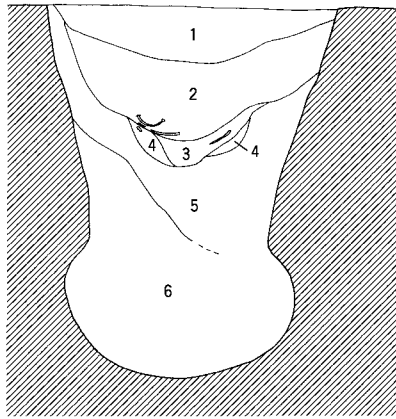
第248図 井戸14 (1/30)・出土遺物① (1/4・1/3)



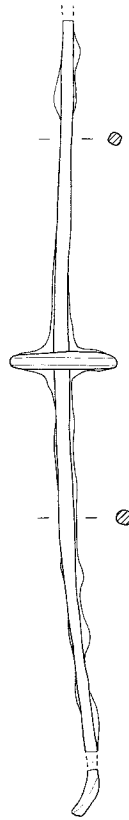
第249図 井戸14出土遺物② (1/4)



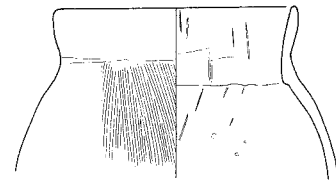
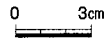
390cm



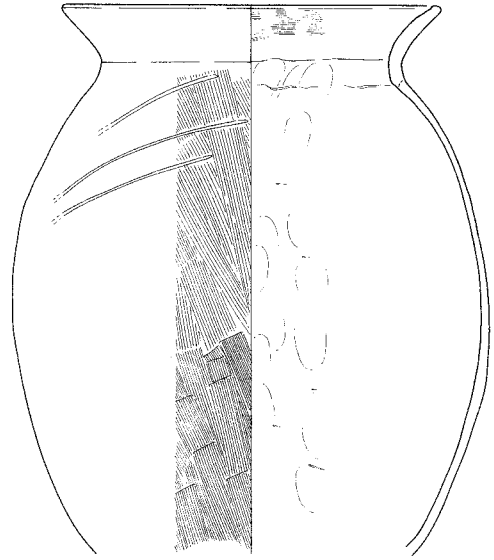
- 1 灰褐色砂質土
- 2 褐黒色砂質土 (炭片・焼土多含)
- 3 暗褐色砂質土 (炭片焼土含)
- 4 暗褐色粘性砂質土
- 5 暗褐色粘性砂質土
- 6 暗灰褐色砂質土



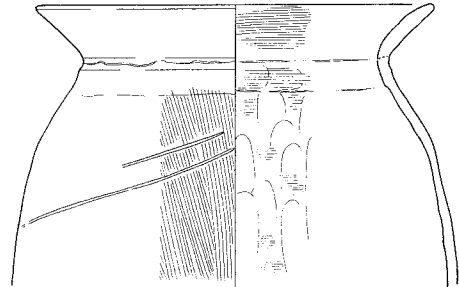
M42



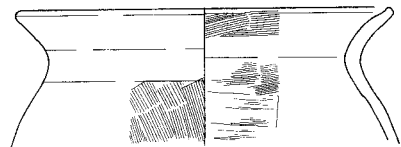
872



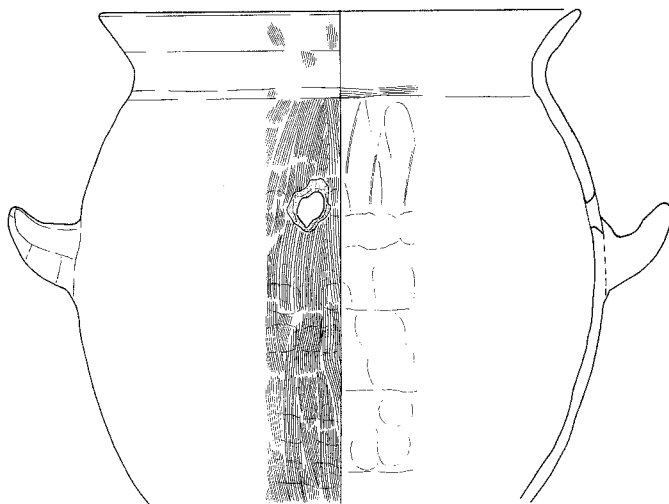
873



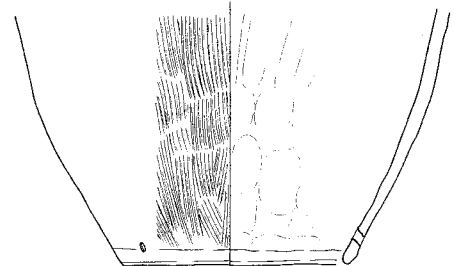
874



875



877



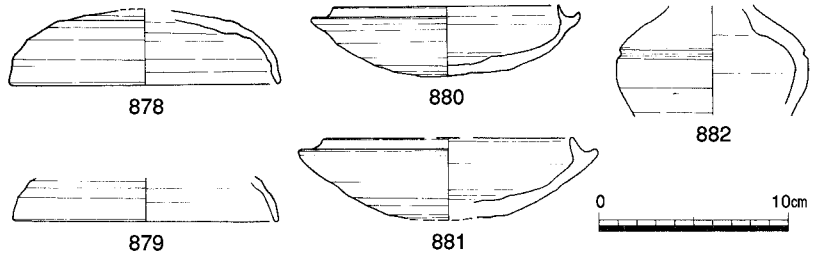
876

第250図 井戸15 (1/30)・出土遺物① (1/4・1/3)

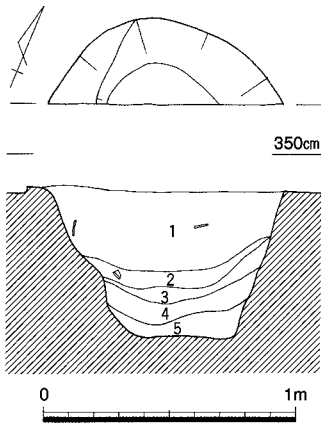
からの深さは148cmと比較的浅い。

上層下部から中層にかけて(2~3層)は炭片・焼土が多く含まれ、小規模な土器溜まりが形成されていた。遺物は基本的にこの部分からの出土である。

出土遺物は土師器、須恵器、鉄器である。土師器は甕・甌からなるが、そのうちの甕873、874はよく似た個体で、それぞれ肩部にヘラ描きの平行沈線が刻まれている。甕877は胴部に2個の把手をもつ特異なもので、胴部上方に穿孔がみられる。鉄製紡錘車M42は端部を一部欠損するもののほぼ完形で全長31.8cm、円盤部分の径43mmを測る。出土の須恵器878~882からこの井戸の年代は6世紀末と判断できる。



第251図 井戸15出土遺物② (1/4)



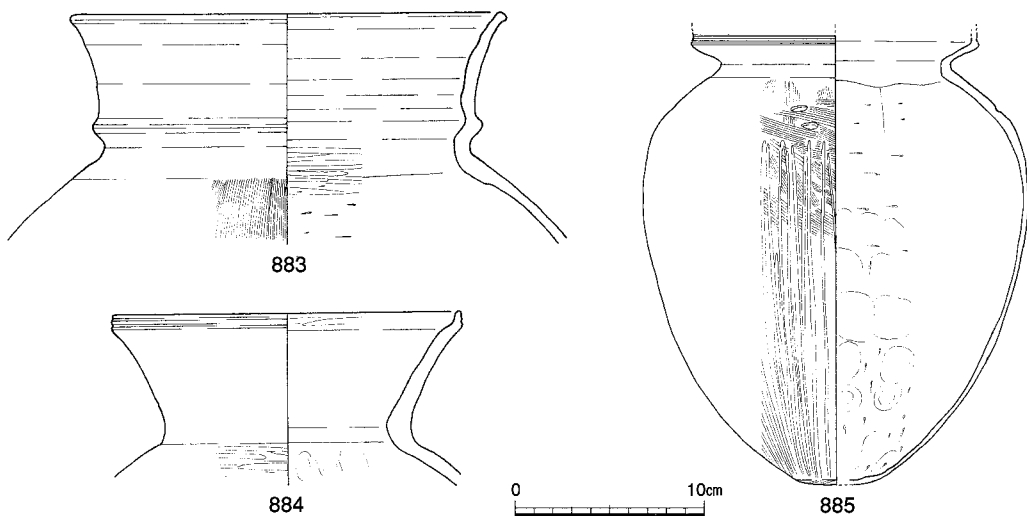
- 1 淡黄褐色粘質微砂
- 2 灰色微砂
- 3 褐灰色粘質微砂
- 4 白灰色微砂
- 5 暗灰色粘質微砂

井戸16 (第220・252図. 81-1)

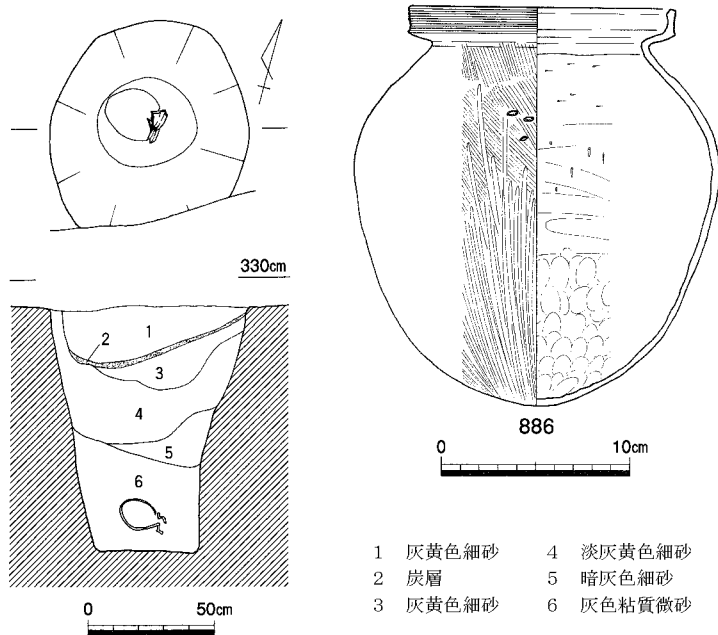
微高地の中央、19C区で検出された井戸である。ほとんどの部分が後世に削平されており、北側の掘り方上部のみが確認された。平面形は円形と推定されるが、底面は残存していない。埋土は洪水によると思われる砂層が認められる。井戸17・18同様、井戸の廃棄後、洪水に見舞われ埋没していると思われる。埋土中から、二重口縁の壺883や広口壺884、甕885が出土している。出土遺物などから、遺構の時期は百・古・Iと考えられる。

井戸17 (第220・253図、図版38-3. 81-1)

微高地の中央、20C区で検出された井戸である。南側の一部は後世に削平されている。掘り方平面形は円形で、径は80



第252図 井戸16 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第253図 井戸17 (1/30)・出土遺物 (1/4)

cm、深さは80cmを測る。掘り方は上方がわずかに開くが、下半は垂直に近くなる。底面は平坦で、海拔222cmまで達している。6層の上部に堆積している1・3～5層は洪水によると思われる砂層で、2層は炭層である。井戸の廃棄後、複数回の洪水に見舞われ埋没していると思われる。

6層の底面付近で完形の甕886が口縁部を斜め下に向けて出土している。この他にも甕や壺の破片も認められる。

出土遺物から、遺構の時期は百・古・Iと考えられる。(柴田)

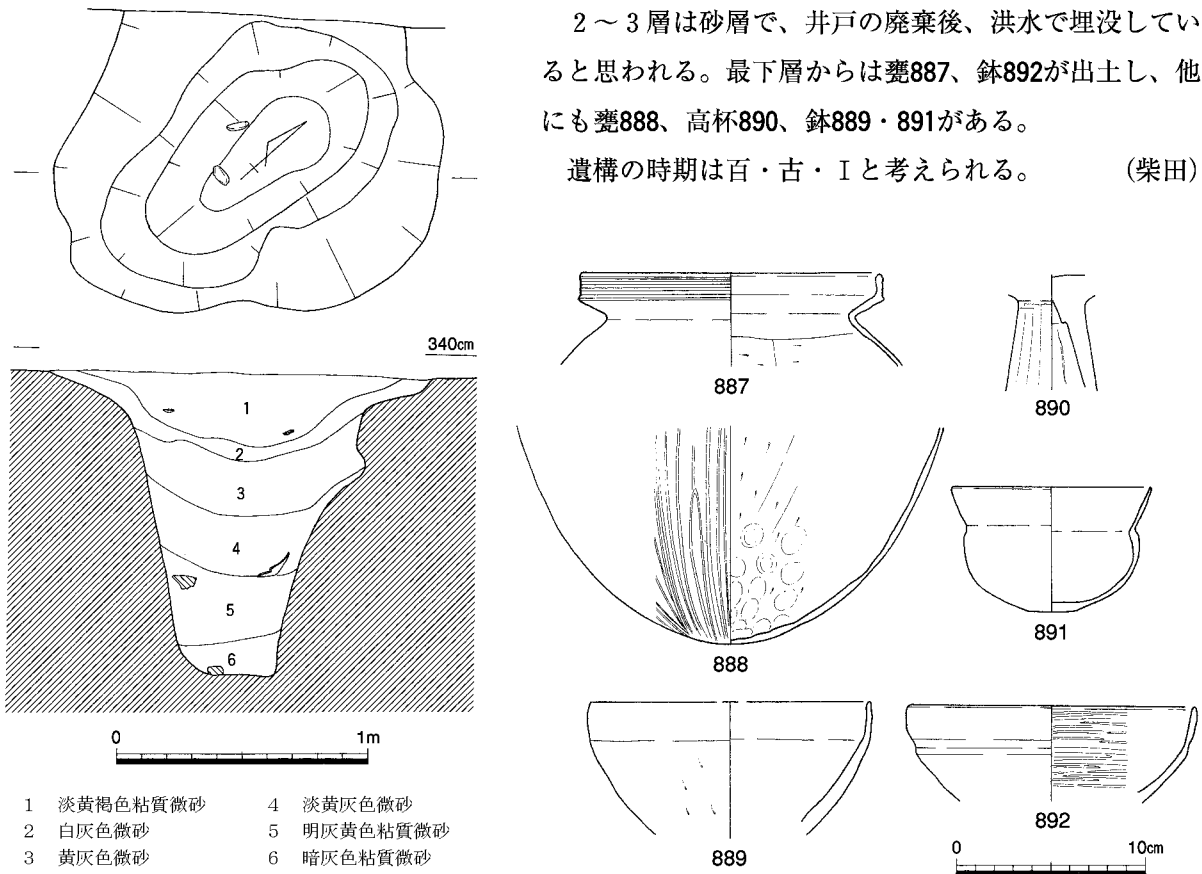
井戸18 (第220・254図)

微高地の中央、20C区で検出された井戸で、北西側の一部は後世に削平されている。平面形は不整形円形で、長径163cm、短径150cm、深さ120cmを測る。上端は大きく開くが、下半は垂直に近くなる。

底面は平坦で、海拔212cmまで達している。

2～3層は砂層で、井戸の廃棄後、洪水で埋没していると思われる。最下層からは甕887、鉢892が出土し、他にも甕888、高杯890、鉢889・891がある。

遺構の時期は百・古・Iと考えられる。(柴田)



第254図 井戸18 (1/30)・出土遺物 (1/4)

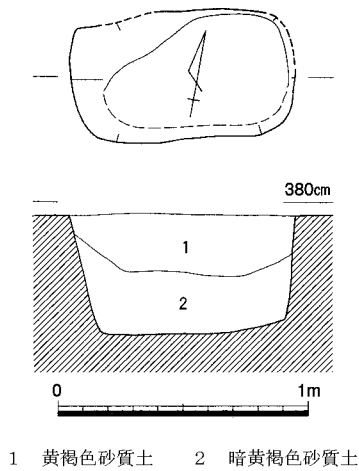
## 4 土壙

### 土壙65 (第222・255図)

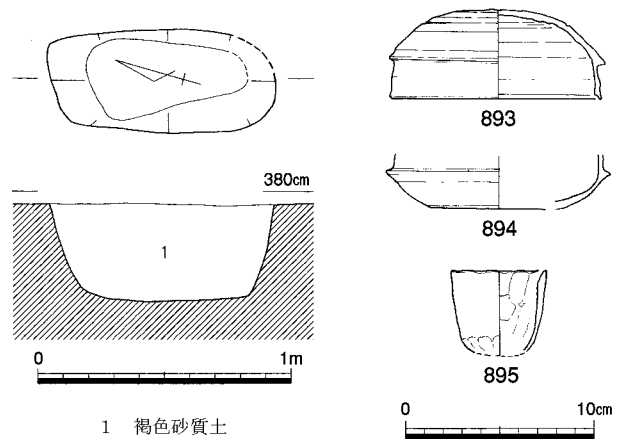
土壙65は11B区の南東、竪穴住居13の南東約4mに位置する。平面形は約90×50cmの長方形を呈し、検出面からの深さは、約50cmを測る。壁は垂直に近い。埋土中には土器小片が十数片混入していた。その中に須恵器甕胴部片が確認されたが、時期を特定しがたい。(物部)

### 土壙66 (第222・256図)

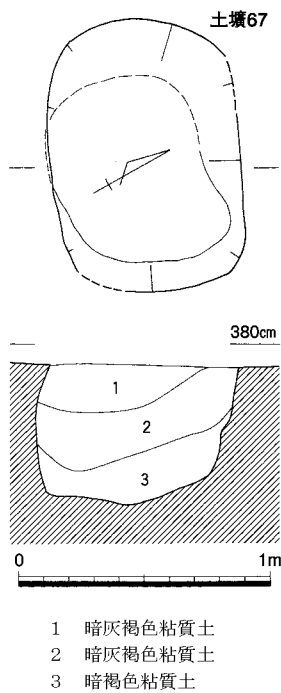
土壙66は土壙65の南約7m、12B区に位置する。竪穴住居15の埋土を切る。平面形は約90×40cmの長方形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る。埋土中には893・894の須恵器蓋杯や895製塩土器などが混入し、それらの特徴から土壙66の時期は5世紀末～6世紀初めと考えられる。(物部)



1 黄褐色砂質土 2 暗黄褐色砂質土  
第255図 土壙65 (1/30)

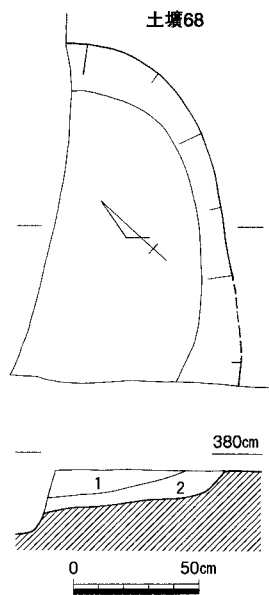


1 褐色砂質土  
第256図 土壙66 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 暗灰褐色粘質土  
2 暗灰褐色粘質土  
3 暗褐色粘質土

第257図 土壙67・68 (1/30)



1 褐灰色砂質土  
2 褐色砂質土

### 土壙67 (第222・257図)

土壙67は土壙66から西に約5m、12B区に位置する。平面形は110×75cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは約50cmを測る。埋土の粘質土からは弥生時代後期の土器小片しか出土しなかったが、土質から古墳時代に下るものと考えられる。(物部)

### 土壙68 (第222・257図)

土壙68は11C区、調査区の端に位置する。土壙北側を竪穴住居18によって削平されているが、長径が1.7m程度の楕円形を呈する、浅い土壙と推定される。出土遺物はないが、切り合いから、古墳時代後期以前であり、土質から弥生時代までは遡らないと考えられる。(物部)

**土壙69** (第222・258図)

土壙69は11C区に位置する。竪穴住居18の掘り方をとばした段階で検出した。平面形は約340×100cmの長方形を呈し深さは20cm弱と浅い。竪穴住居18の下部構造と考えたが、両者を図上合成すると、主軸と短辺は一致するものの、長辺がずれた。埋土中から須恵器甕小片が2点出土。(物部)

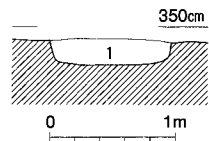
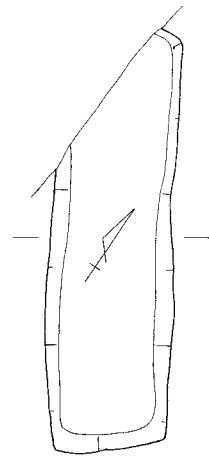
**土壙70** (第220・259図)

17B区に位置する土壙である。平面形はやや歪な円形を呈し、長径92cmを測る。検出面からの深さは10cmで、断面形は浅い皿状である。埋土は褐灰色粘質土である。出土遺物は土師器片と製塩土器片がある。

土壙の時期は、古墳時代と考えられる。(高田)

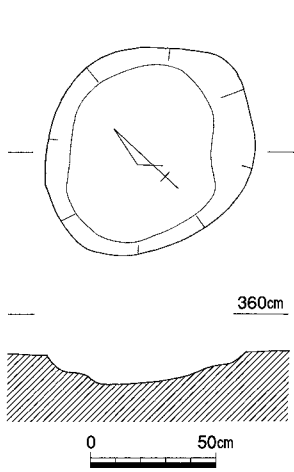
**土壙71** (第220・260図)

19B区に位置する土壙である。溝88を完掘した後に、やや北側の肩よりで検出した。平面形は円形で、直径約85cmを測る。断面形はバケツ形を呈し、検出面から底面まで46cmの深さがある。埋土の1・2層に焼土および炭を含んでいた。出土遺物には896~898などの土器がある。時期は古墳時代後期と考えられる。(松尾)

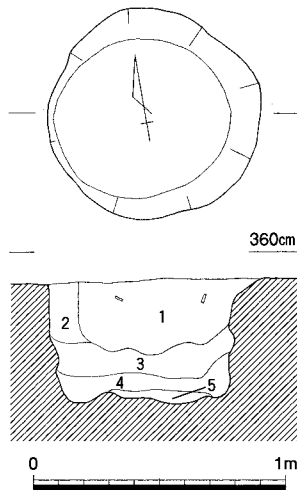


1 褐灰色砂質土

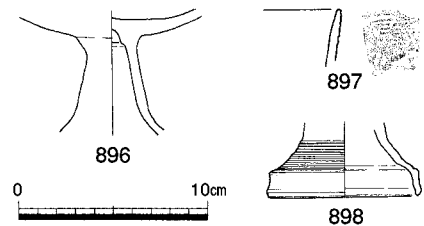
第258図 土壙69 (1/60)



第259図 土壙70 (1/30)



第260図 土壙71 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 暗灰褐色粘質微砂 (焼土・炭含)
- 2 淡灰茶褐色粘質微砂 (炭含)
- 3 暗灰茶褐色粘質微砂
- 4 暗灰色粘質土
- 5 淡灰色粘質土

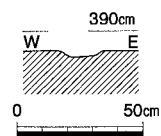
**5 溝**

**溝75** (第222・261図)

溝75は11D区に位置し、検出幅16cm、深さ2cmで、直線状にのびる。北側を竪穴住居18により削平。遺物は土師器小片4点のみ。(物部)

**溝76** (第222・262図)

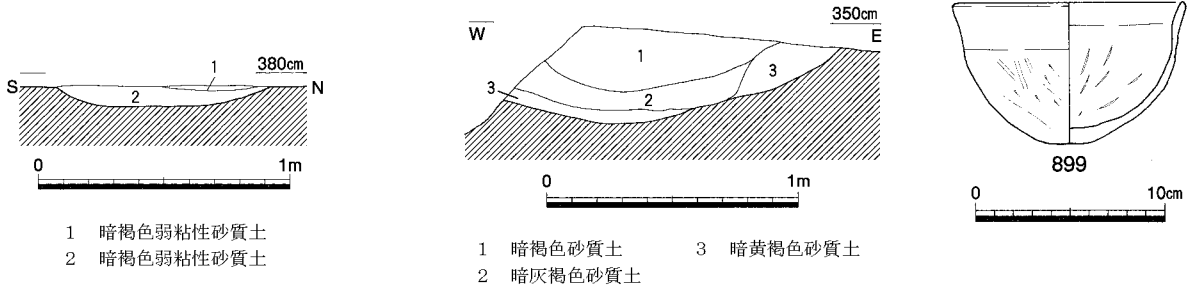
溝76は13C区、竪穴住居26のすぐ北側に位置し、僅かに弧を描くようにのびる。検出幅約80cm、深さ10cm弱である。出土遺物に須恵器の小片があり、時期は6世紀後半より新しいと考えられる。(物部)



第261図 溝75 (1/30)

溝77 (第222・263図)

13B・C区で検出された溝で、溝78に切られている。微高地と低位部との境に位置しており、北東から南西方向に真っ直ぐ掘削されている。幅は140cm程度と推測され、深さは40cmを測る。断面形は皿状を呈する。鉢899が出土しており、遺構の時期は百・古・Iと思われる。(柴田)

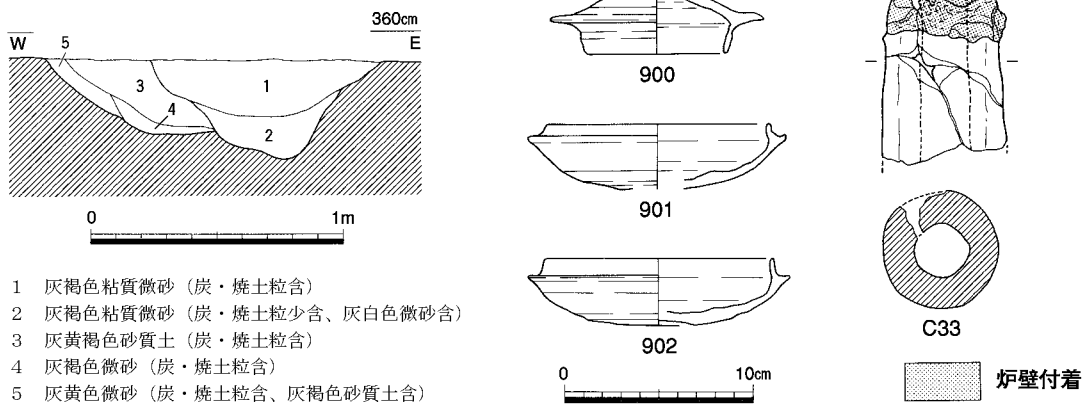


第262図 溝76 (1/30)

第263図 溝77 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝78 (第222・264図)

13B・C区で検出された溝で、溝77を切っている。微高地と低位部との境に位置しており、北東から南西方向に流走する。掘り替えが認められ、断面は台形を呈する。幅は90cm程度で、深さは30~40cmを測る。北半の一部では杭列の痕跡が認められた。図示した須恵器の蓋900、杯身901・902、羽口C33の他に鉄滓なども出土している。遺構の時期は6世紀後半と思われる。(柴田)



第264図 溝78 (1/30)・出土遺物 (1/4)

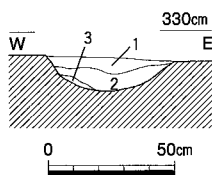
溝79 (第220・265図)

15B・C区を北東—南西方向に直線的に流走する溝である。中央付近で溝80に切れ、南端は『百間川原尾島遺跡5』の「溝28」につながる。検出時の規模は幅50cm、深さ12cmを測る。断面形は碗形を呈する。

時期は検出状況から古墳時代後期と考えられる。(高田)

溝80 (第220・267~277図、図版39. 81-2~85-1)

16B・C区で検出された大溝で、微高地間を北東から南西方向に真っ直ぐ掘削されている。埋没過程で大きく4時期の流路が存在した可能性が考えられ、最終段階では北西に大きく膨らんでいる。断面はU字形な



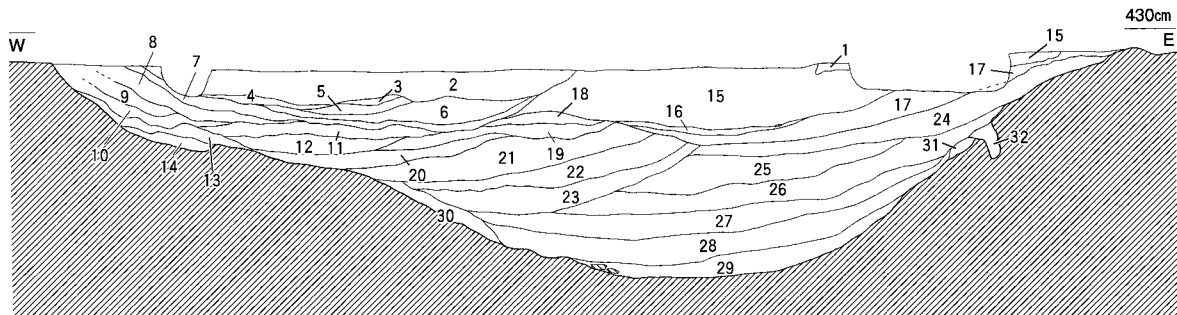
- 1 淡灰黄色粘質微砂
- 2 灰黄色粘質微砂
- 3 暗褐色粘質微砂

第265図 溝79 (1/30)



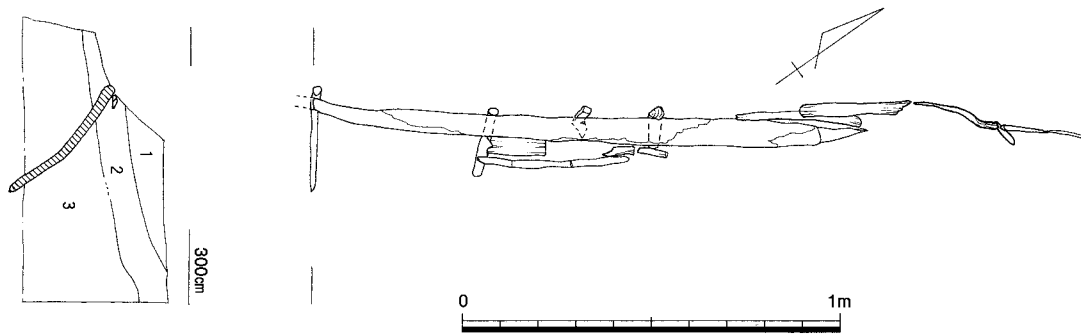
いしは皿状を呈する。掘削当初の溝幅は7m程度と推測され、深さは1.8mを測る。南西部では杭と横木を使用した簡易な護岸施設が認められた。杭は、厚さ4cmのミカン割材1本と径2～3cmの枝杭3本が打ち込まれている。埋土からは須恵器や土師器などの土器や木製品、鉄器などが出土している。最終流路を中心とする上層からは須恵器の杯蓋916・931、高杯939・940、短頸壺943、台付長頸壺944、甕946・947・950、土師器の甕957・962、杯980などの6世紀末から7世紀の遺物が多く認められる。また、ウシやウマの歯や骨なども出土している。下層では5世紀後半から6世紀前半の土器が多く、底面付近の28・29層からは木製品やU字形鋤先M43などが出土している。

出土土器には、須恵器や土師器、軟質土器がある。須恵器甕948は中でも最も古い時期を示す。口縁端部は丸くおさめ、胎土には砂粒を含まない。軟質土器982は外面に平行タタキが認められ、口縁



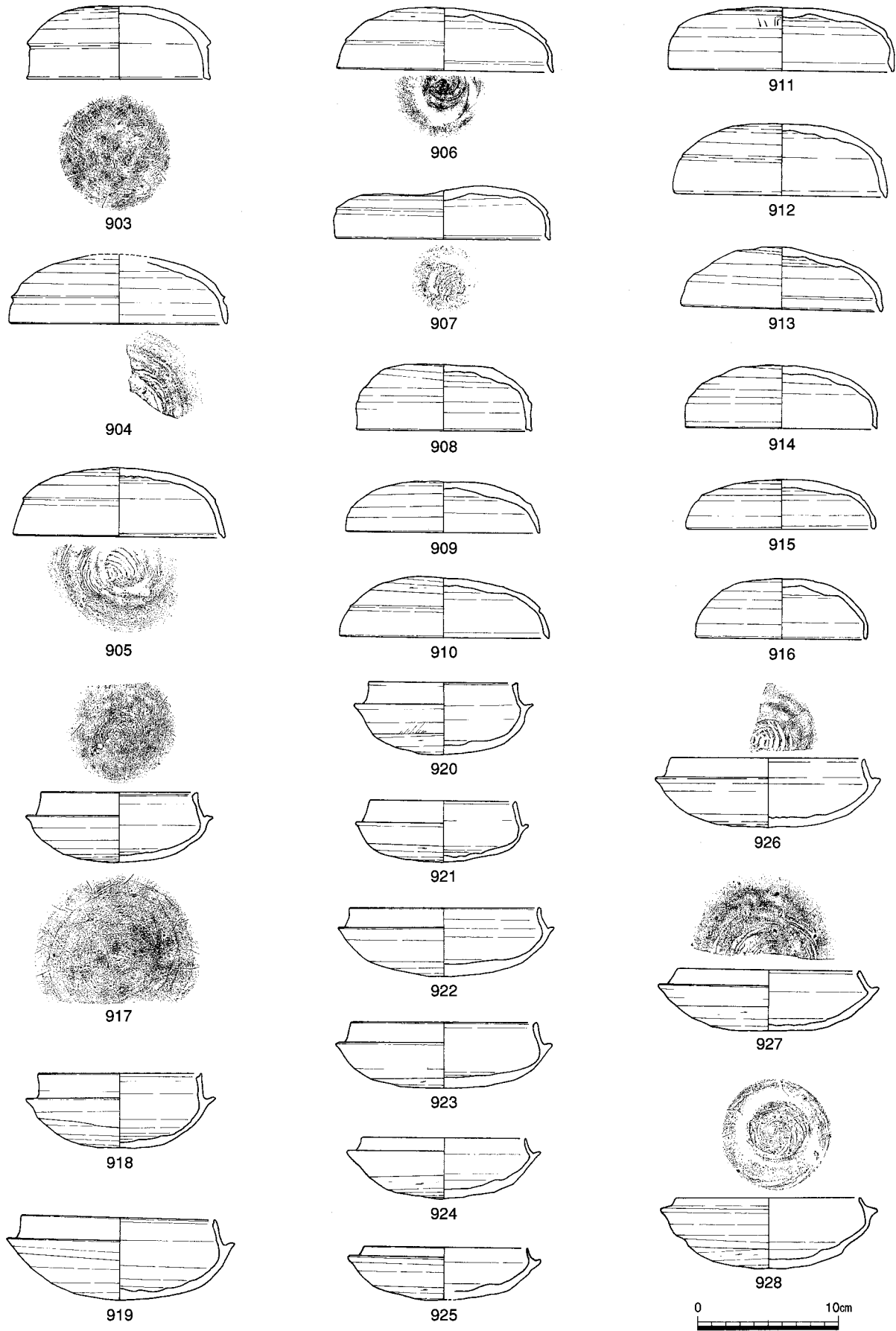
- |                             |   |
|-----------------------------|---|
| 1 灰オリーブ色微砂                  | 17 灰黄褐色砂質土 (灰オリーブ色微砂斑少含)                |
| 2 灰黄褐色砂質土 (灰オリーブ色微砂斑含)      | 18 明灰褐色微砂 (灰白色微砂斑含)                     |
| 3 赤褐色～黄色微砂～粗砂の薄い互層          | 19 明灰オリーブ色微砂 (灰色微砂と粘質微砂薄層含、炭粒含)         |
| 4 灰褐色粘質微砂 (灰白色微砂斑含)         | 20 青灰色～灰色粘土 (灰色微砂薄層、にぶい黄色粗砂斑含、鉄分沈着、炭粒含) |
| 5 灰褐色微砂 (灰白色微砂斑少含)          | 21 灰白色～灰色微砂と灰色粘質微砂の薄互層 (炭粒含)            |
| 6 灰褐色～灰オリーブ微砂               | 22 灰色粘質微砂と灰色微砂の薄互層 (上部に微砂顕著、炭粒含)        |
| 7 暗灰褐色粘質微砂 (上面鉄分沈着、灰白色微砂斑含) | 23 オリーブ灰色粘質微砂 (灰色微砂薄層と斑含、植物遺体含)         |
| 8 暗灰褐色粘質微砂～微砂 (灰白色微砂斑含)     | 24 灰色粘質微砂 (鉄分沈着)                        |
| 9 暗灰褐色粘質微砂 (灰白色微砂斑含)        | 25 灰色粘土 (植物遺体少含)                        |
| 10 暗灰褐色粘質微砂～微砂 (灰白色微砂斑含)    | 26 暗灰色粘土 (植物遺体多含)                       |
| 11 灰色微砂～粗砂 (鉄分沈着)           | 27 暗灰色粘土 (植物遺体多含)                       |
| 12 灰色～赤褐色粗砂 (鉄分沈着)          | 28 オリーブ黒色粘土 (植物遺体多含)                    |
| 13 暗灰褐色粘質微砂 (鉄分多沈着、灰白色微砂斑含) | 29 オリーブ黒色粘質微砂 (植物遺体含)                   |
| 14 暗灰褐色粘質土 (オリーブ灰色微砂斑含)     | 30 灰色粘土 (青灰色粘土斑多含)                      |
| 15 灰褐色砂質土 (灰オリーブ色微砂斑少含)     | 31 にぶい黄褐色微砂                             |
| 16 灰黄色砂質土 (灰オリーブ色微砂斑少含)     | 32 灰褐色粘質微砂                              |

第266図 溝80 (1/60)

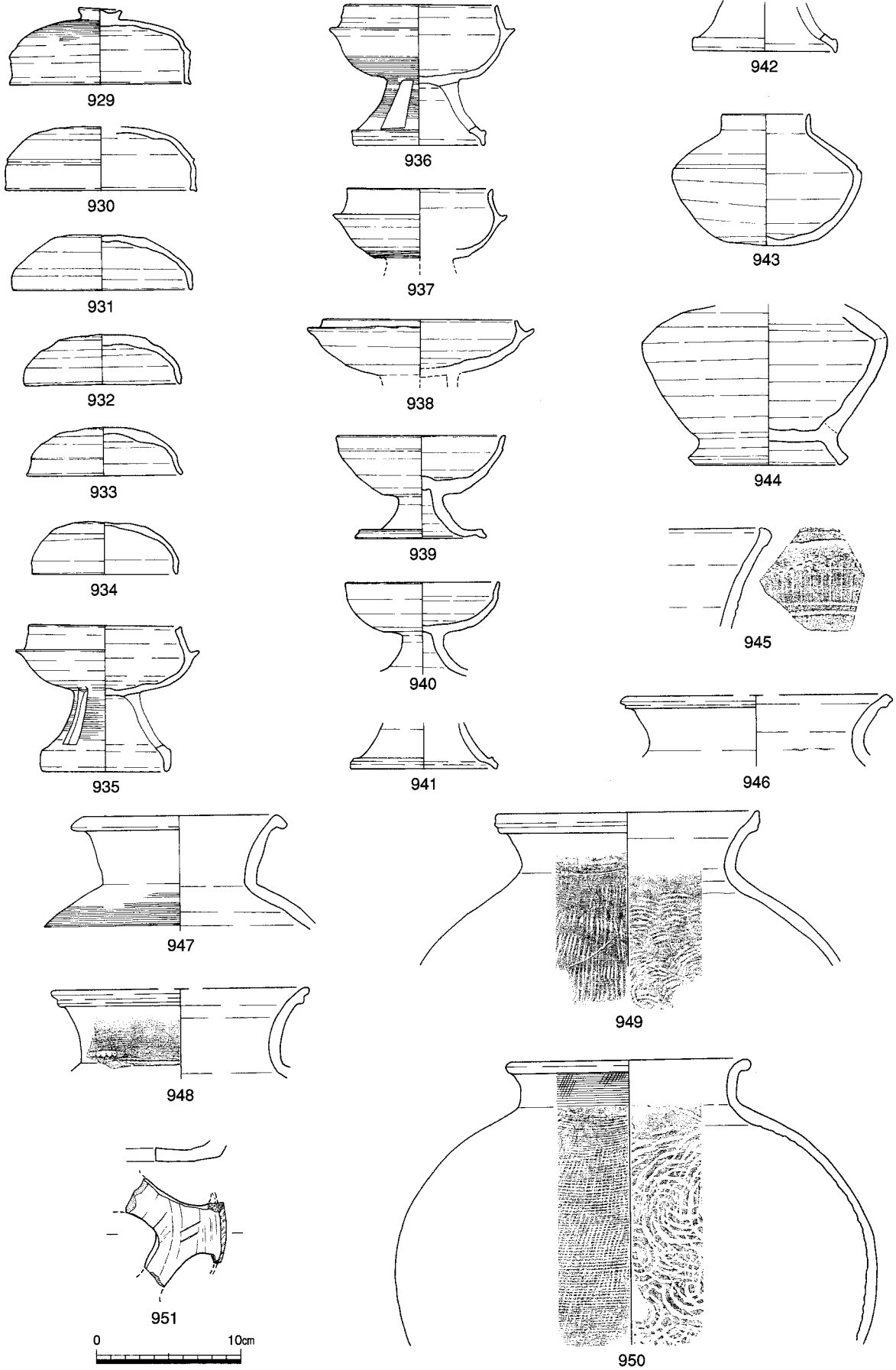


- |                             |                     |
|-----------------------------|---------------------|
| 1 灰黄色微砂・暗灰色粘質微砂互層 (炭・植物遺体含) | 2 暗灰色粘質微砂 (炭・植物遺体含) |
| 3 緑灰色粘質土 (炭・植物遺体含)          |                     |

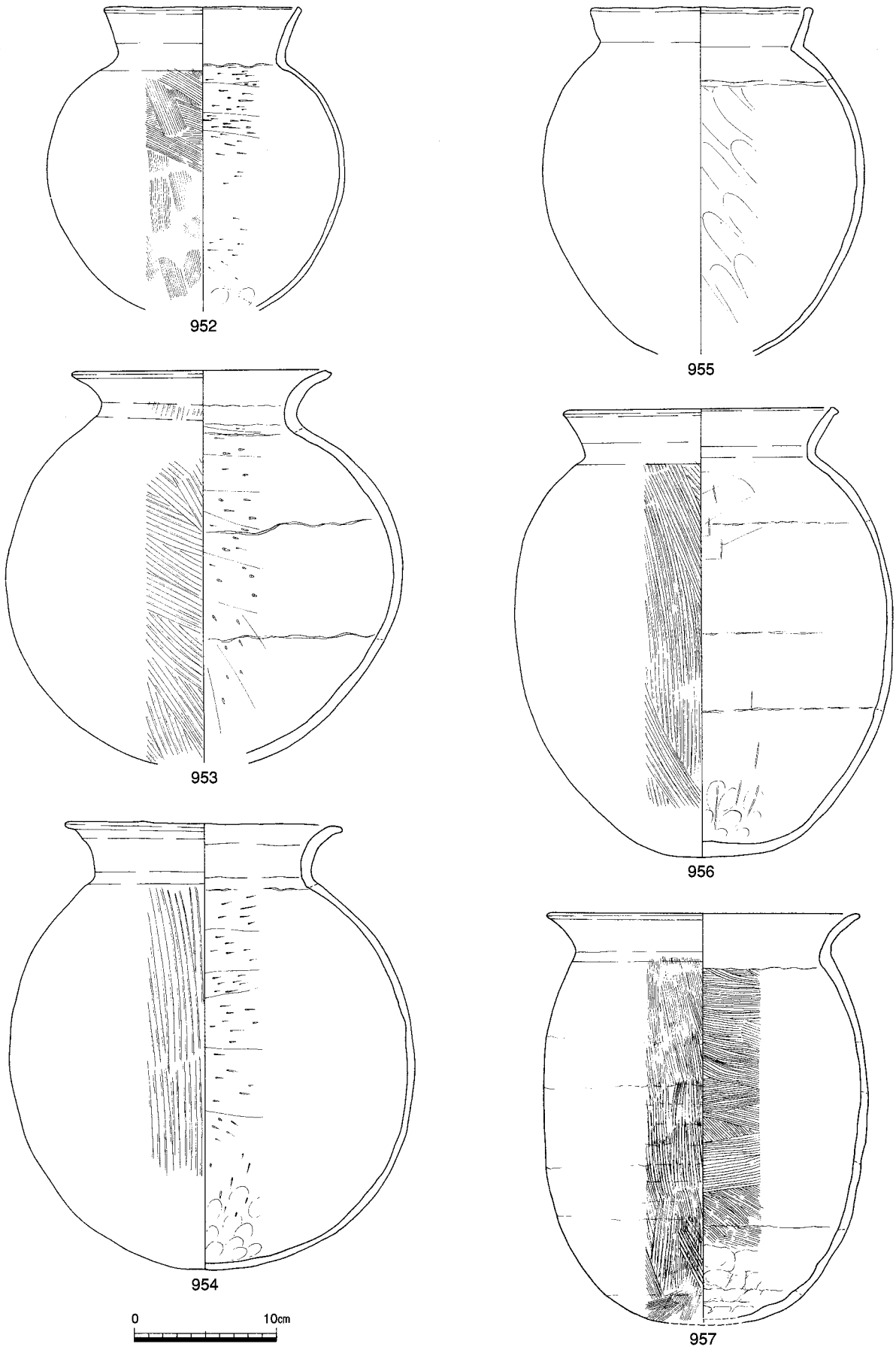
第267図 溝80しがらみ (1/20)



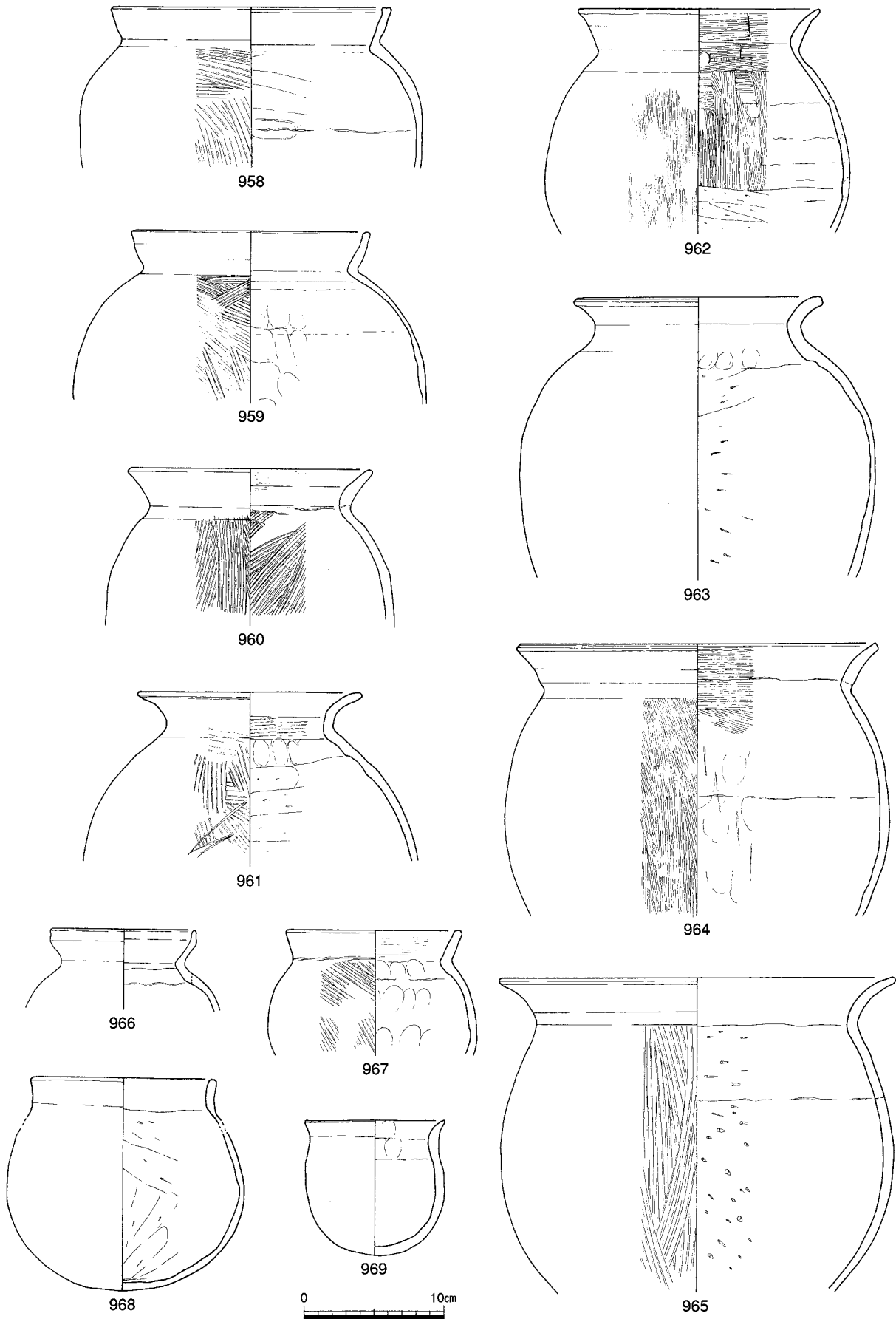
第268図 溝80出土遺物① (1/4)



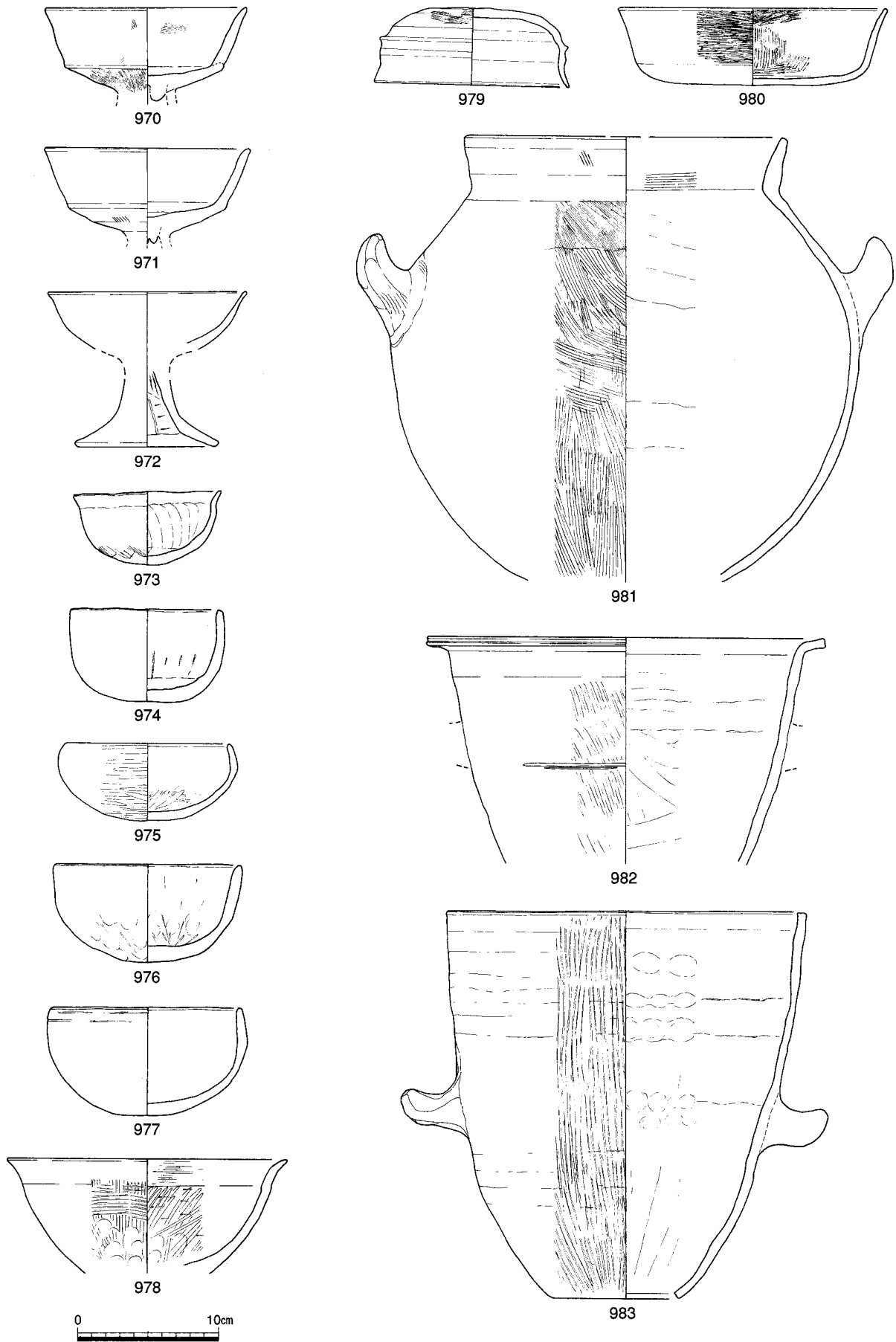
第269図 溝80出土遺物② (1/4)



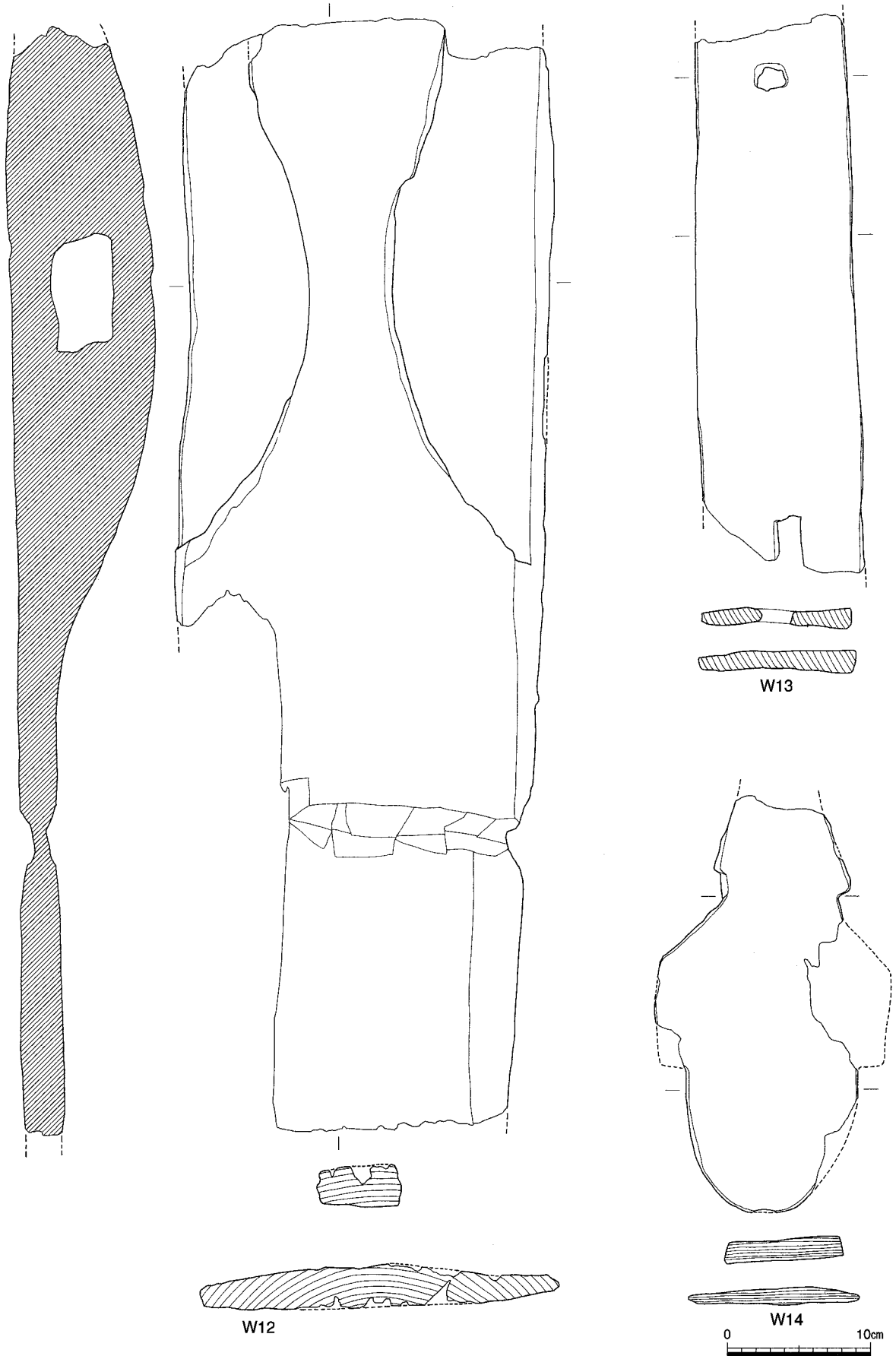
第270図 溝80出土遺物③ (1/4)



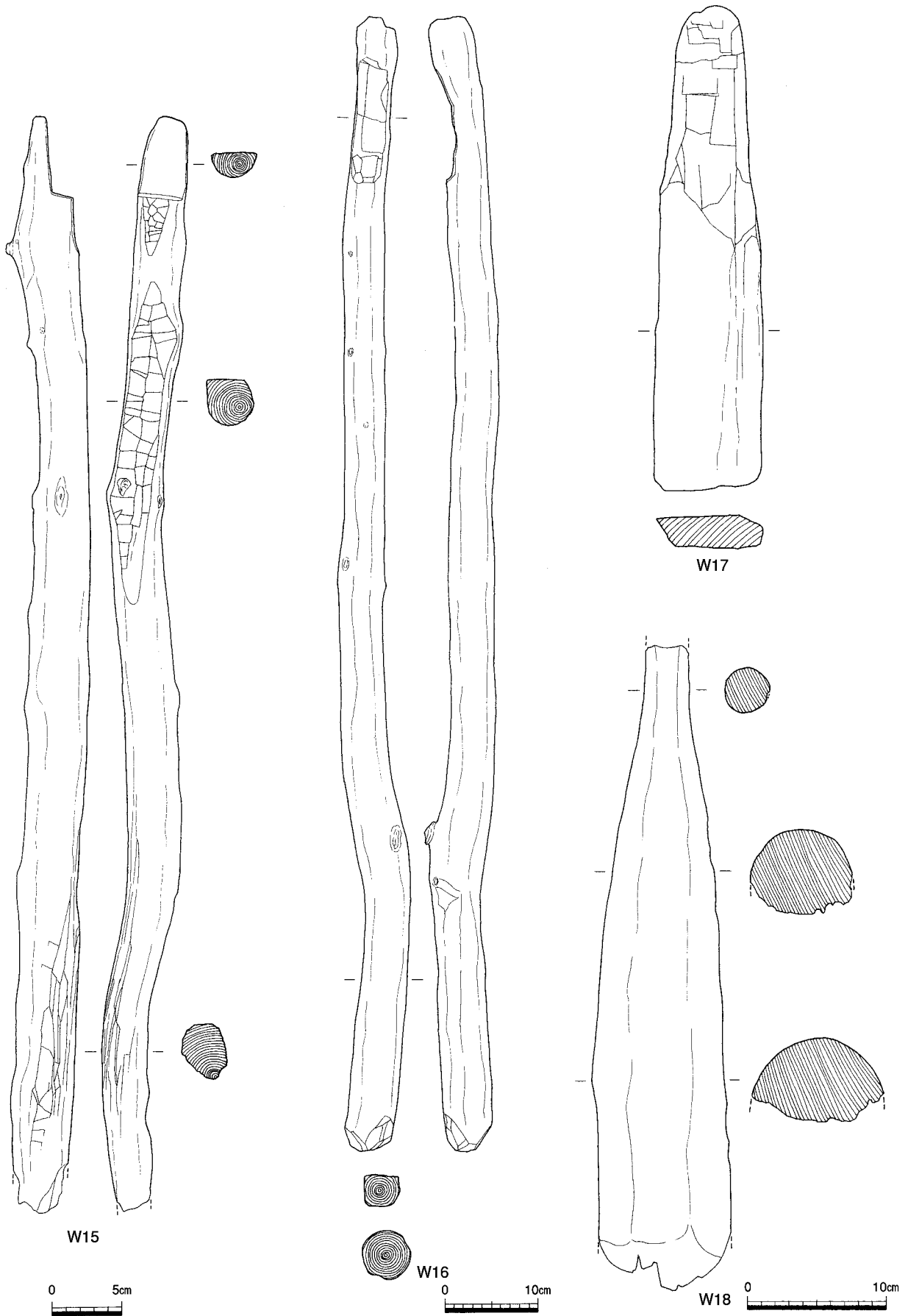
第271図 溝80出土遺物④ (1/4)



第272図 溝80出土遺物⑤ (1/4)

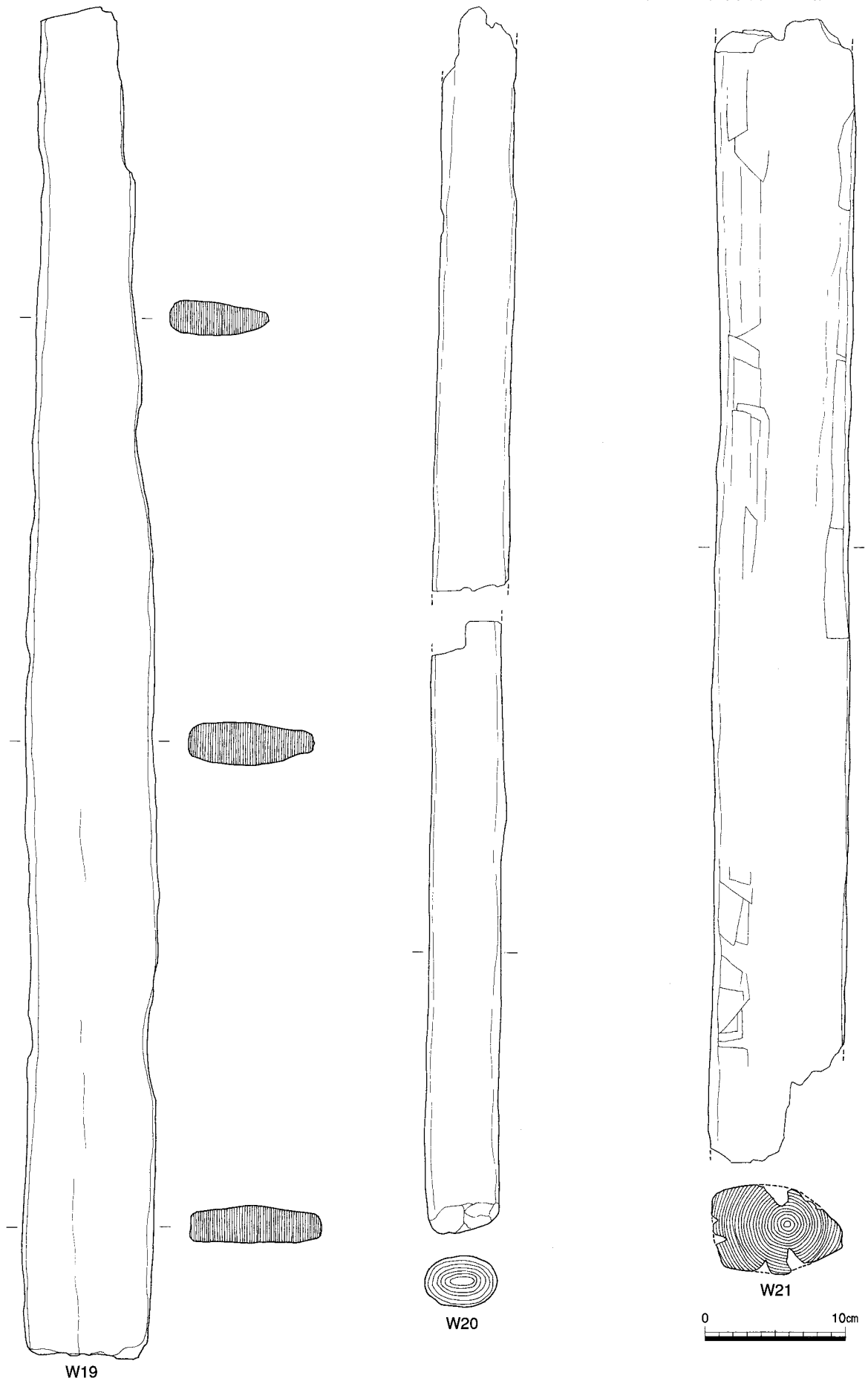


第273図 溝80出土遺物⑥ (1/4)

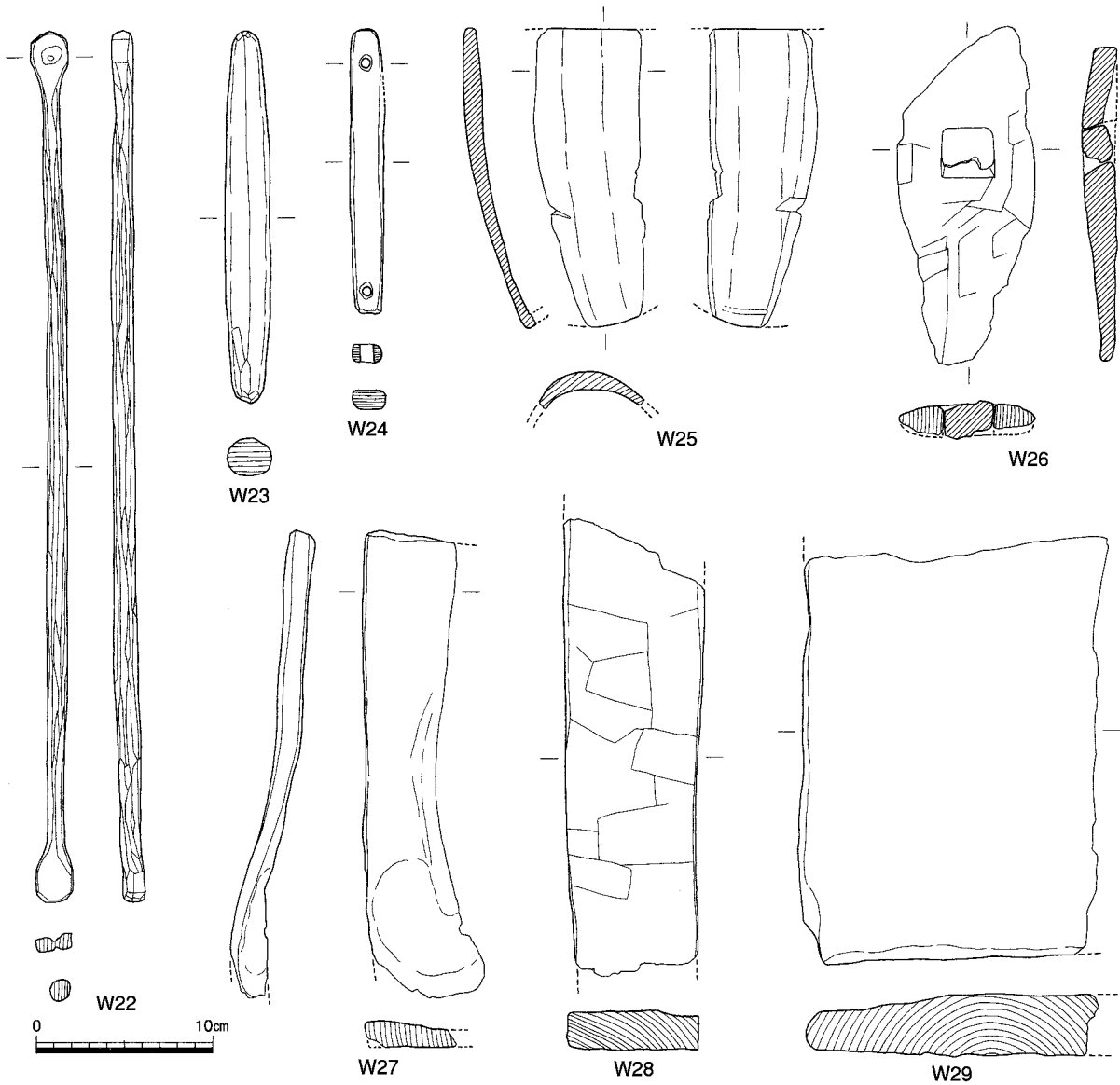


第274図 溝80出土遺物⑦ (1/8・1/6・1/4)

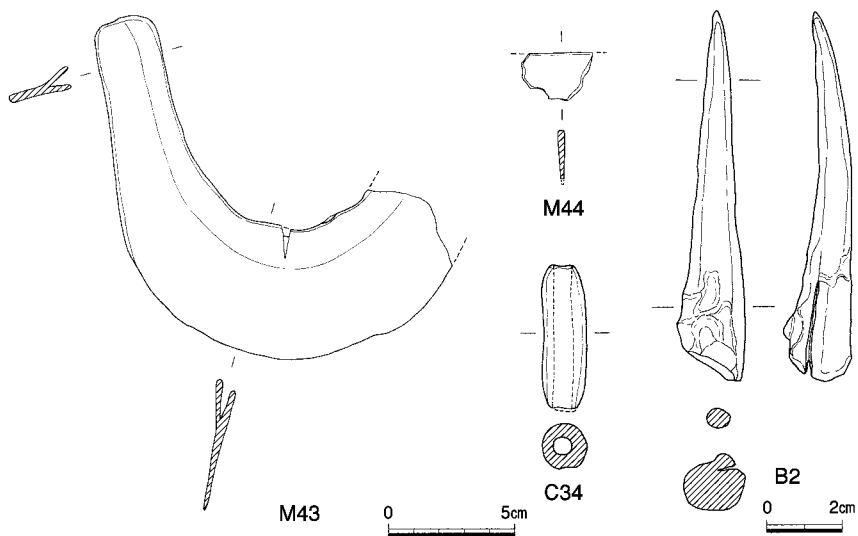




第275図 溝80出土遺物⑧ (1/4)



第276図 溝80出土遺物⑨ (1/4)



第277図 溝80出土遺物⑩ (1/3・1/2)

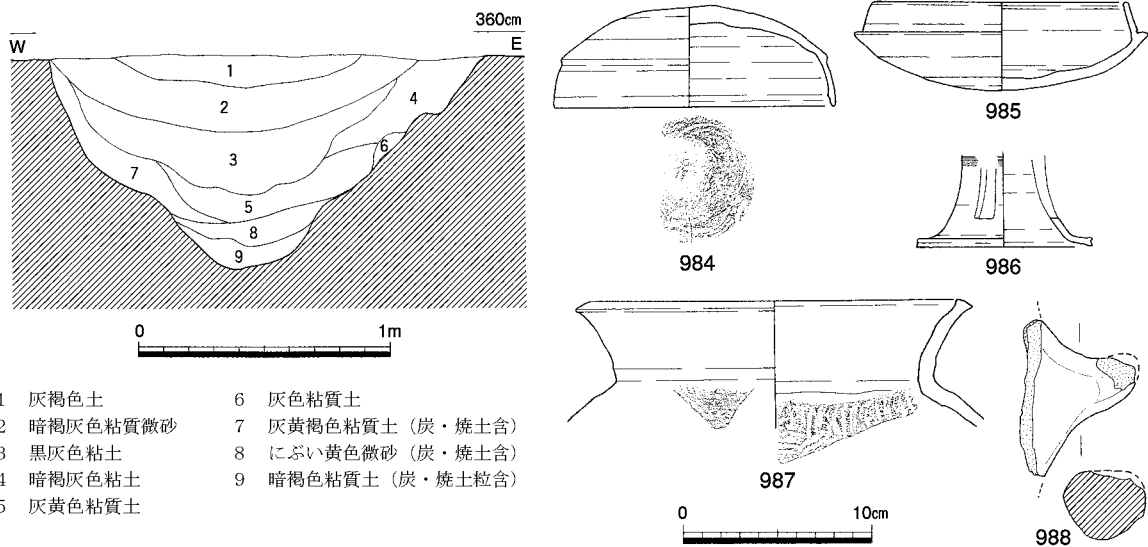
端部には面を形成している。把手は剥がれており、貼り付け面には線刻が施されている。

出土木製品には、農具や各種部材、容器などが認められる。農具には曲柄鋏W14、直柄鋏W26、堅杵W18、柄W20などがある。建築部材と思われるものは、扉板のほかにW13・15~17・19・21などがある。W12はヒノキ垂科の板目材を使用した扉板である。現存部分の長さは77.2cm、幅は25.8cm、板部の厚さは3cm程度を測る。ほぼ中央には高さ7cmの把手を削り出しており、4×7cmの門穴も施されている。材を横断するように工具痕を残す溝がめぐっているが、扉構造に関するものか廃棄後の転用に伴う切断過程を示すものかは不明である。W14は出土位置や形態から、M43が取り付けられていた可能性がある。W22は両端が膨らむ棒状製品で、表面は平滑に仕上げられている。W23は紡錘形を呈し、W24は両端に穿孔が施されている。W25は容器と思われ、漆が塗布されている。また保存状態が悪く、図示していない遺物として、杭や二股杭なども出土している。

この他にU字形鋤先M43、刀子M44、土錘C34などが出土している。なお、B2は鹿角で、縄文時代晩期の遺物の可能性がある。(柴田)

溝81 (第220・278図)

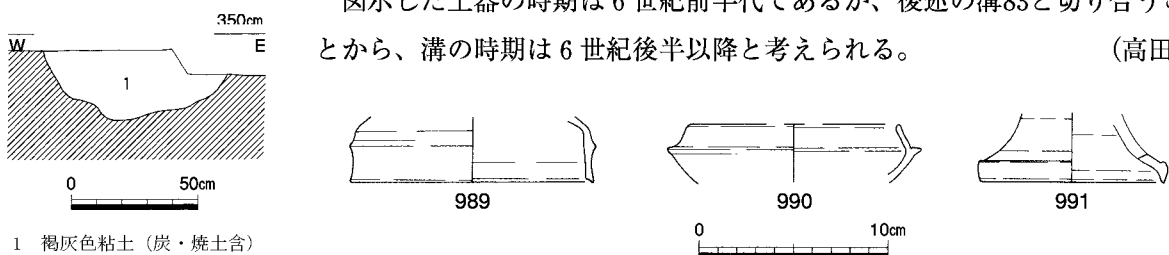
17・18B・C区を南北方向に直線的に流走する溝である。弥生時代後期末の溝55と流路がほぼ重なり、第278図の第8・9層は溝55の埋土である。検出時の規模は幅170cm、深さ65cmを測る。断面形は



第278図 溝81 (1/30)・出土遺物 (1/4)

碗形を呈し、壁は段を持ちながら急斜に立ち上がる。埋土は比較的締まった粘土を基調とする。出土遺物は、須恵器と土師器片のほか下層遺構の混入と考えられる弥生土器片がある。

図示した土器の時期は6世紀前半代であるが、後述の溝83と切り合うことから、溝の時期は6世紀後半以降と考えられる。(高田)

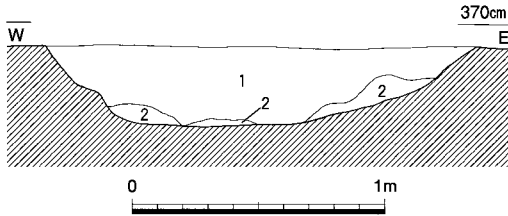


第279図 溝82 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝82 (第220・279図)

17・18B・C区を南北方向に直線的に流走する溝で、溝81の東側に並行する。検出時の規模は幅70cm、深さ28cmを測り、断面形は椀形を呈する。溝の肩口から中ほどに杭列状の小穴が重なる。

出土遺物は土師器片と6世紀代の須恵器がある。溝81との関連が考えられる。 (高田)

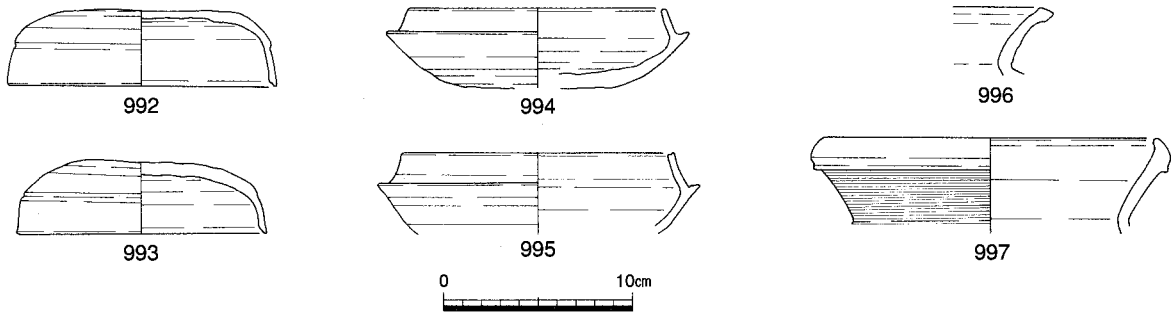


1 暗灰茶褐色粘質微砂 2 暗灰黄褐色砂質土

溝83 (第220・280図)

17・18B・C区を北東—南西方向に直線的に流走する溝である。規模は幅170cm、深さ32cmを測り、断面形は皿形を呈する。底面は平坦となる箇所が多いが、南側が数段に浅くなる。

時期は出土遺物から6世紀中葉か。 (高田)



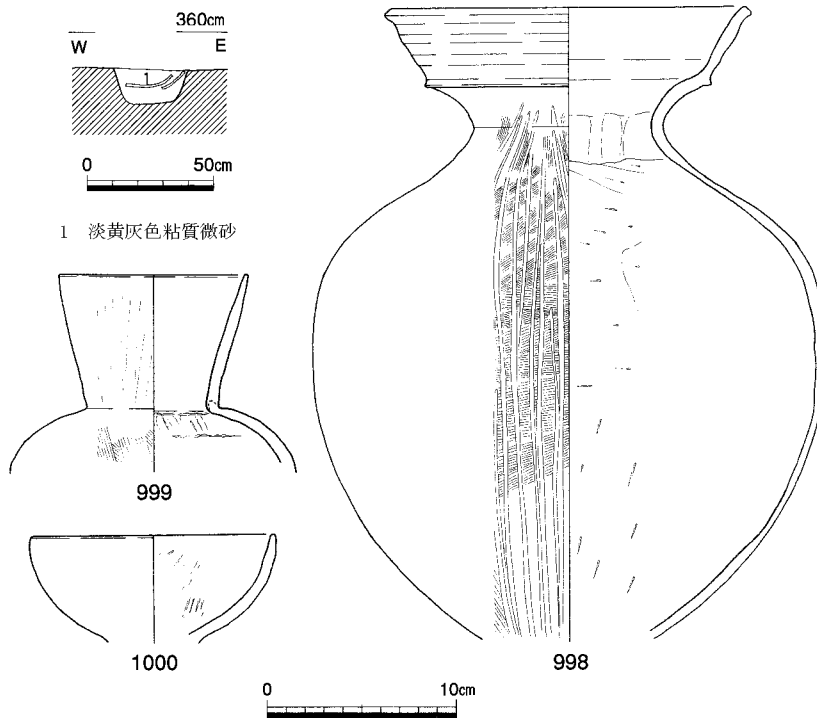
第280図 溝83 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝84 (第220・281図)

18・19C区で検出した溝で、『百間川原尾島遺跡5』「溝31」の続きである。18区から19区にかけて

弧を描くように流れる。

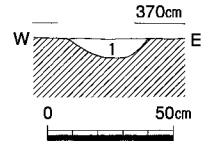
東端は中世の遺構である溝131の影響で明確でない。規模は幅30~40cm前後で、深さは約10cmを測る。断面形は「U」字形を呈する。出土遺物は土器のみ。998~1000に図示した二重口縁壺・直口壺・高坏の他に、図化不可能な甕の細片がある。土器は溝の底面よりやや浮いた状態で出土している。998・999の土器の諸特徴から、遺構の時期は百・古・Iと考えられる。 (松尾)



第281図 溝84 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝85 (第220・282図)

19B区で検出した溝で南北方向に流れる。南端は中世の溝131に切られ、北端は調査区外にのびるため全体像は不明瞭。規模は幅が約30cm深さは約10cmを測る。断面形は皿状を呈する。時期は古墳時代。(松尾)



1 明黄褐色砂質土

第282図 溝85 (1/30)

溝86 (第220・283図)

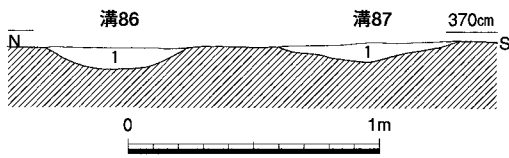
19B区で検出した東西方向に流れる溝。東・西端は溝85と同様の理由により不明瞭。規模は幅が約50cm、深さは約10cm。時期は古墳時代と推察される。(松尾)

溝87 (第220・283図)

19B区で検出した東西方向に流れる溝。東端は調査区外に延びる。規模は幅が約70cm、深さは約5cmと浅い。時期は、検出面および埋土等から古墳時代と推察される。(松尾)

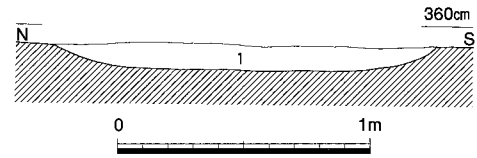
溝88 (第220・284図)

19B区で検出した東西方向に流れる溝。西端は近代の溝により切られ、東端は調査区外に延びる。規模は幅が150cm、深さは10cmを測る。土器の細片や検出面から古墳時代後期と推察される。(松尾)



1 明黄褐色砂質土

第283図 溝86・87 (1/30)

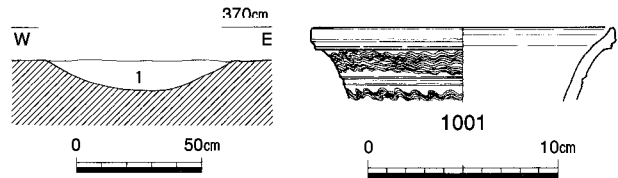


1 淡黄灰色粘質微砂

第284図 溝88 (1/30)

溝89 (第220・285図)

19B区で検出した溝である。西端は近代の溝により切られ、北東端から約300cmのあたりで一端深くなる。規模は幅が約70cm、深さは約10cmを測る。出土遺物は1001をはじめとする須恵器・土師器の土器のみで、これらの土器から5世紀末～6世紀初めの時期を当てはめることができる。(松尾)

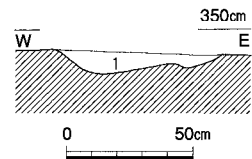


1 淡黄灰色粘質微砂

第285図 溝89 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝90 (第220・286図)

建物5の東側、20・21B・C区で検出した東北-南西方向に流れる溝である。『百間川原尾島遺跡4』「溝59」の続きである。北端は近代の溝に切られており検出できなかった。規模は幅50cm～100cm、深さは8cm程である。底面は凸凹しており、数カ所ピット状に窪んでいる所がある。遺物は土器の細片ばかりであるが、検出面や埋土等を考えあわせて古墳時代後半に属するものと考えられる。(松尾)

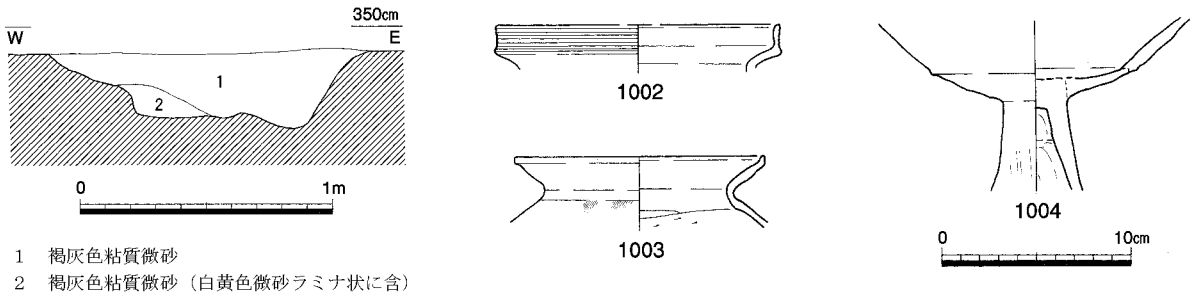


1 暗茶褐色粘質土

第286図 溝90 (1/30)

溝91 (第220・287図)

21B・C区で検出した溝で、『百間川原尾島遺跡4』「溝61」および『百間川原尾島遺跡2』「溝78」に続くものと考えられる。21C区までは調査区を縦走するが、21B区あたりで北方向にその流路を変える。

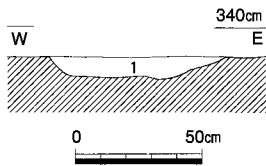


第287図 溝91 (1/30)・出土遺物 (1/4)

規模は幅約150cm、深さ約30cmで底面は凸凹している。過去の調査成果等から6世紀後半の溝であると思われるが、今回の調査では1002～1004など古墳時代前期の様相をもつ土器のみ出土しており、須恵器の出土はなかった。(松尾)

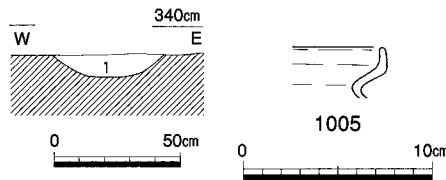
溝92 (第220・288図)

21C区で検出した溝である。『百間川原尾島遺跡4』「溝60」の続きで、溝91に切られていることもあり、調査区内での状況は判然としない。規模は幅約70cm、深さ約10cmで、底面は凹凸がある。時期



1 淡黄灰色粘質微砂

第288図 溝92 (1/30)



1 淡灰色粘質微砂

第289図 溝93 (1/30)・出土遺物 (1/4)

は出土している土器の細片や、過去の調査成果から百・古・Iに属すると考えられる。(松尾)

溝93 (第220・289図)

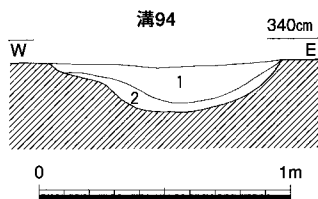
21区と22区の境で検出した北-南に流れる溝である。溝91・95・96に切られている。規模は幅約40cm、深さ約10cmで断面形は皿状を呈している。出土遺物は1005をはじめとする土器の細片が主であり、百・古・Iに属すると考えられる。(松尾)

溝94 (第220・290図)

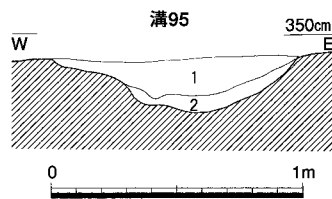
21区から22区にかけて検出した北-南に流れる溝である。北端は調査区外に延びており、溝95・96を切っている。規模は幅が約80cm、深さは約20cmで、埋土はレンズ状に堆積している。検出面や埋土から古墳時代の範疇であると推察される。(松尾)

溝95 (第220・290図)

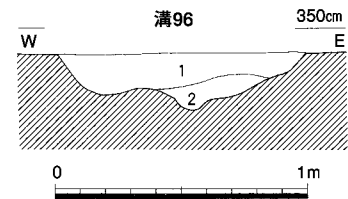
21・22区の境で検出した溝で、調査区を縦断するように流れ、B・C区境で北へと流路を変える。その流れ方は溝91と似ている。『百間川原尾島遺跡4』「溝63」につながるものと考えられる。規模は



1 淡黄灰色粘質微砂  
2 灰黄色粘質土 (白黄色微砂含)



1 淡黄灰色粘質微砂  
2 灰色粘質土 (白黄色微砂ラミナ状に含)



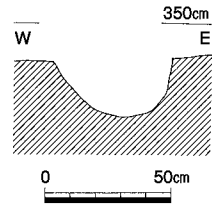
1 淡黄灰色粘質微砂  
2 褐灰色粘質土

第290図 溝94～96 (1/30)

幅が100cm前後、深さは約20cm。図示できる遺物はないが、出土した土器や過去の調査成果から6世紀後半に属すると思われる。(松尾)

**溝96** (第220・290図)

21B、22B・C区を北東-南西方向に流れる溝である。その流れは不規則で、22B区で2つに枝分かれし、分流の方は溝95に切られる。本流と考えられる流れも22C区で枝分かれする。規模は幅が100~140cm、深さは約20cm。出土した土器の細片や検出状況から、古墳時代後期と推察される。



第291図 溝97 (1/30)

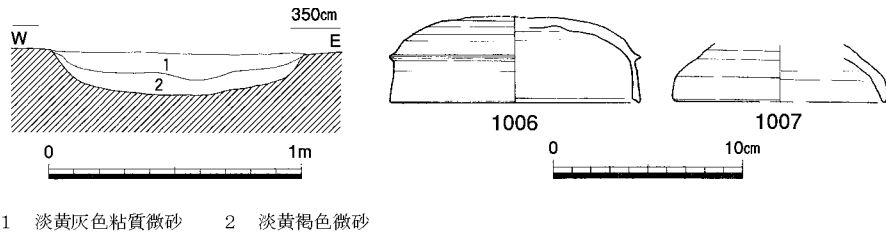
(松尾)

**溝97** (第220・291図)

22B・C区で検出した溝で、蛇行しながら調査区を縦断する。『百間川原尾島遺跡4』「溝65」の続きと考えられ、溝98に切られている。規模は幅40~100cm、深さ約20cm。今回の調査では遺物の出土はないが、過去の調査成果から古墳時代後期に属すると思われる。(松尾)

**溝98** (第220・292図)

22B・C区で検出した溝で、調査区を縦断するように流れる。『百間川原尾島遺跡4』「溝66」につながる。規模は幅70~100cm、深さ約15cmで、埋土はレンズ状に堆積する。遺物は1006・1007など時期幅のある須恵器が出土している。過去の調査成果と照らし合わせて古墳時代後期に属すると思われる。(松尾)



1 淡黄灰色粘質微砂 2 淡黄褐色微砂

第292図 溝98 (1/30)・出土遺物 (1/4)

(松尾)

**溝99** (第221・293図)

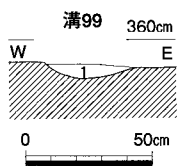
22・23B区境で検出した東西方向に流れる溝である。東側は調査区外に延びると思われる。規模は幅約30cm、深さ約6cmと浅い。検出面および埋土から古墳時代と考えられる。(松尾)

**溝100** (第221・293図)

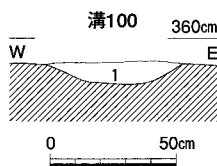
23B・C区で検出した東西方向に流れる溝で、溝101と併走している。規模は幅約50cm、深さ約10cm。土器細片が出土しており、それらの帰属する時期と検出面から、古墳時代と推察される。(松尾)

**溝101** (第221・293図)

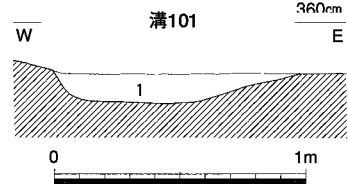
23B区で検出した溝で、北肩を溝100に切られている。たわみ状になっており、不定形ではあるが幅約100cm、深さは10cm内外である。出土遺物はないが、弥生後期末の洪水砂上面で検出していることや、埋土等から古墳時代と思われる。(松尾)



1 暗褐色粘質微砂 (Mn含)



1 暗灰黄色粘質微砂

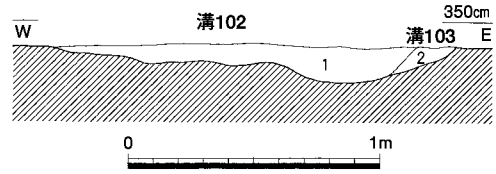


1 灰色粘質微砂 (Mn多含)

第293図 溝99~101 (1/30)

溝102 (第221・294図)

24B区で検出した北東-南西方向に流れる溝で、溝103を切っている。南西端から先は検出できなかった。規模は幅約150cm、深さ10~15cmで底面は凸凹している。遺物の出土はないものの、検出面や埋土から古墳時代後半に属すると推察される。(松尾)



1 灰色粘質微砂 (Mn含) 2 暗褐色粘質微砂

第294図 溝102・103 (1/30)

溝103 (第221・294図)

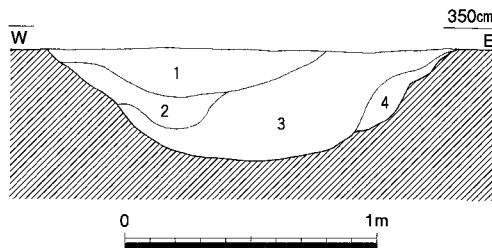
24B区で検出した溝で、調査区を縦断するように流れるが南西隅から先は検出できていない。また北西側は調査区外に延びているようである。規模は幅約100cm、深さ約10cmを測る。遺物の出土はないものの、検出面や埋土から古墳時代前半であると思われる。(松尾)

溝104 (第221・295図)

25B・C区で検出した溝で、調査区をゆるやかに蛇行しながら縦断する。溝の西端は近代溝により切られているために明確でない。断面形はゆるやかに傾斜し、底面は幅広い。規模は幅120~160cm、深さ約40cmを測る。出土遺物は1008などの須恵器片が主で、これらの帰属時期や検出面から古墳時代後期と推察される。(松尾)

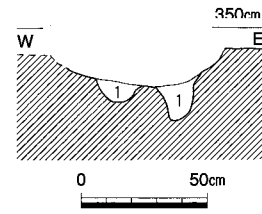
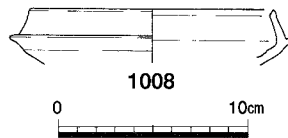
溝105 (第221・296図)

25B・C区で検出した溝で、溝の中央付近にピット状の窪みが2対4列で並んでいるなどの特徴から『百間川原尾島遺跡3』「溝80」につながるものと考えられる。須恵器の小片が出土しており、それらの諸特徴から古墳時代後期に属すると思われる。(松尾)



1 淡灰褐色粘質微砂 2 灰褐色粘質微砂  
3 灰茶褐色粘質微砂 4 淡灰褐色微砂

第295図 溝104 (1/30)・出土遺物 (1/4)

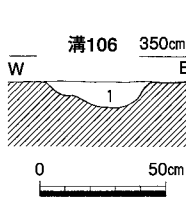


1 暗灰色粘質微砂

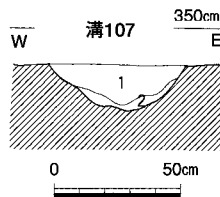
第296図 溝105 (1/30)

溝106 (第221・297図)

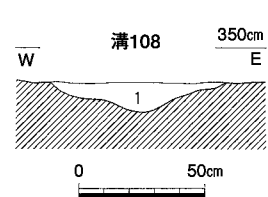
25・26B区で検出したほぼ南北に流れる溝である。南端は洪水砂上の古墳時代後期のたわみによっ



1 褐色粘質微砂 (黄色ブロック含)



1 淡灰褐色粘質微砂  
2 灰黄色粘質微砂



1 淡灰褐色粘質微砂 (黄色微砂混)

第297図 溝106~108 (1/30)



て切られている。規模は幅約40cm、深さ約10cmを測る。出土遺物はないが、検出面や埋土から古墳時代前半と思われる。(松尾)

**溝107** (第221・297図)

26B・C区で検出した北-南に流れる溝である。『百間川原尾島遺跡3』「溝83」に続くと考えられる。土器の細片と検出面、埋土から古墳時代と推察される。(松尾)

**溝108** (第221・297図)

26区から27区にかけて検出した溝で、溝107同様北-南に流れる。規模は幅約70cm、深さ約10cmで、底面は凸凹している。『百間川原尾島遺跡3』「溝84」に続く。古墳時代である。(松尾)

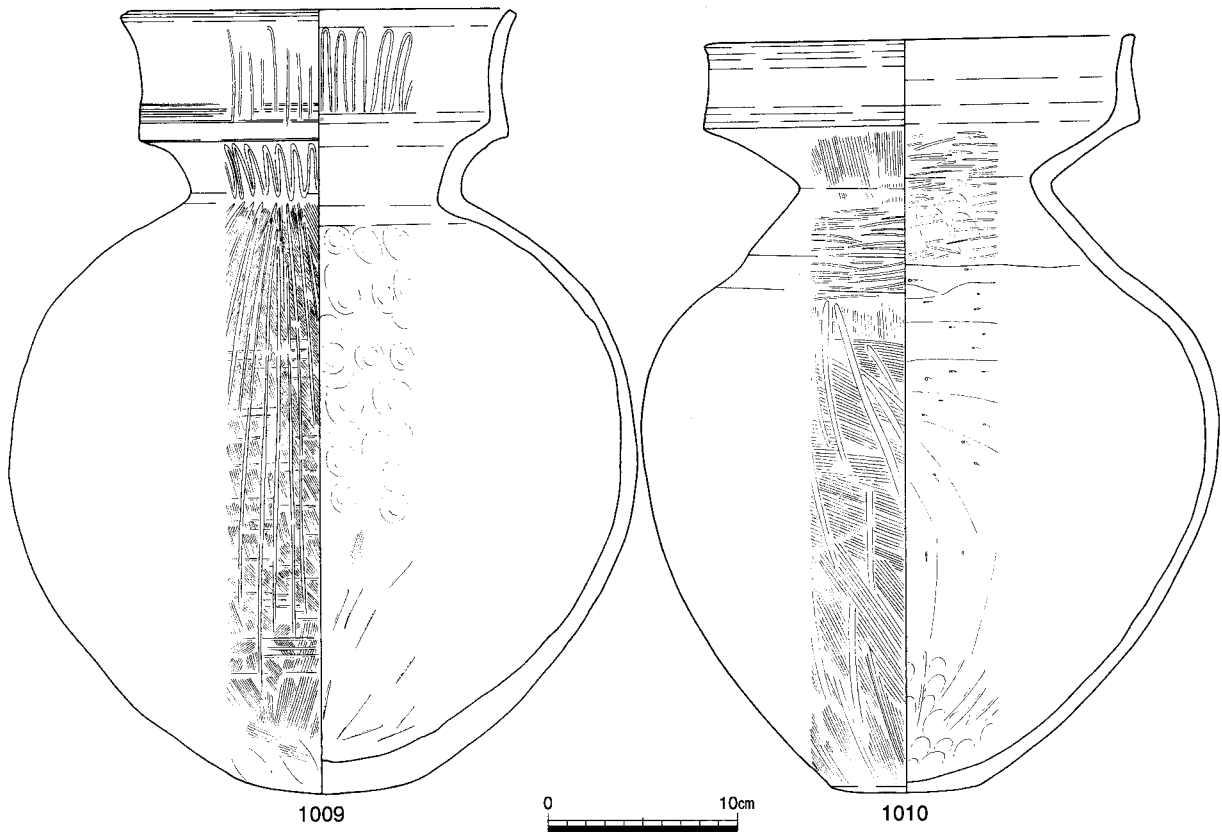
## 6 土器溜り

**土器溜り2** (第298~301図、図版88. 89)

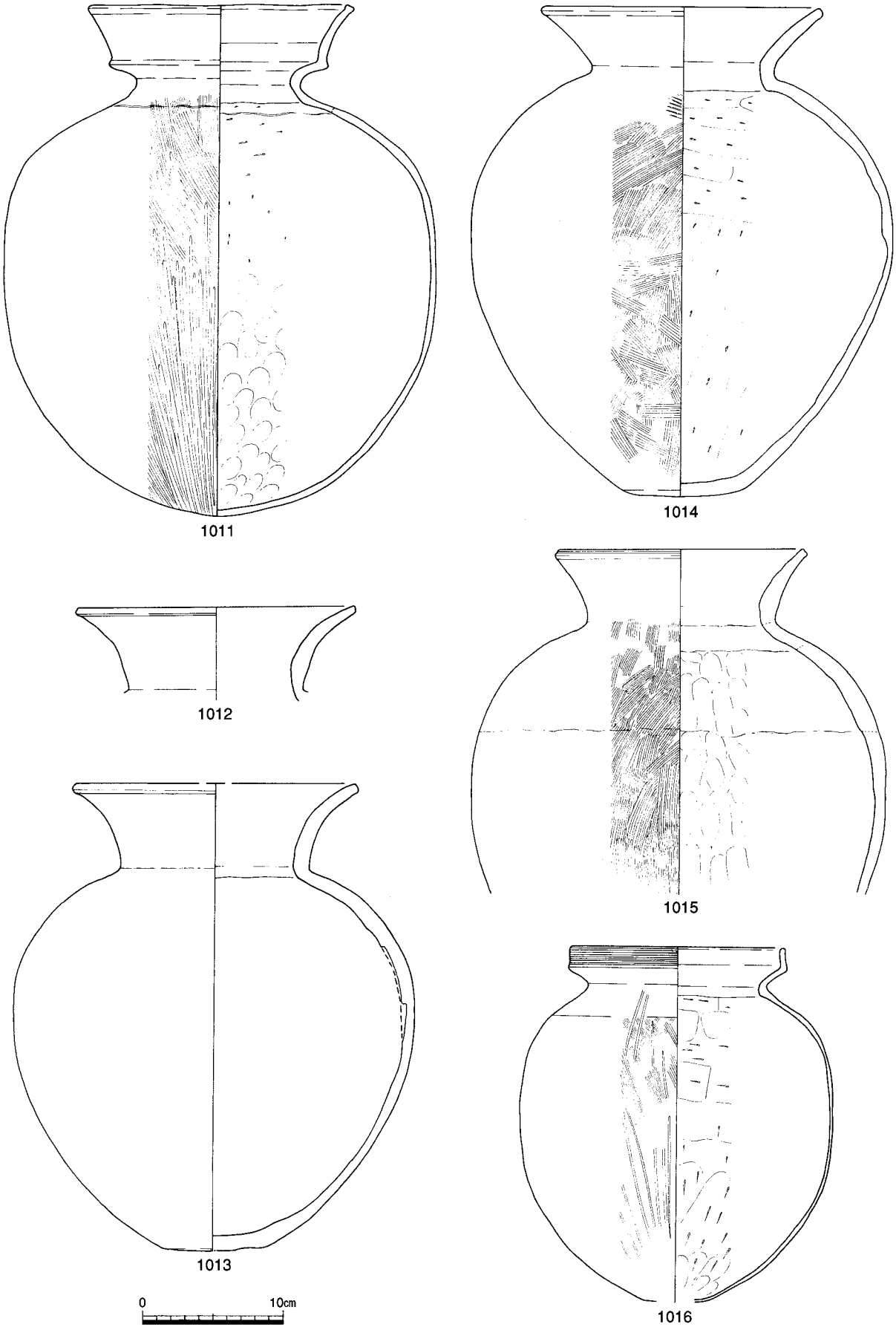
壺1009・1011~1015・1038、甕1016~1024、高杯1025~1032、鉢1034・1036・1037・1039は13B区で検出された古墳時代初頭の土器溜まり出土の土器である。溝77の肩口東側に沿うように検出され、大小あわせて5つの群が認められた。土器は弥生時代後期の水田を覆った洪水砂層の上ののっており、平面的に検出された。

14C付近に認められる三角形の高まりに位置する群は、径2m程度の範囲に土器が分布しており、標高340cmを測る。ここからは壺1011~1015、高杯1032・1031、鉢1036・1039の他に甕の破片や図示以外で高杯5個体程度も出土している。他の群と比べて、壺と高杯の割合が多く特徴的である。

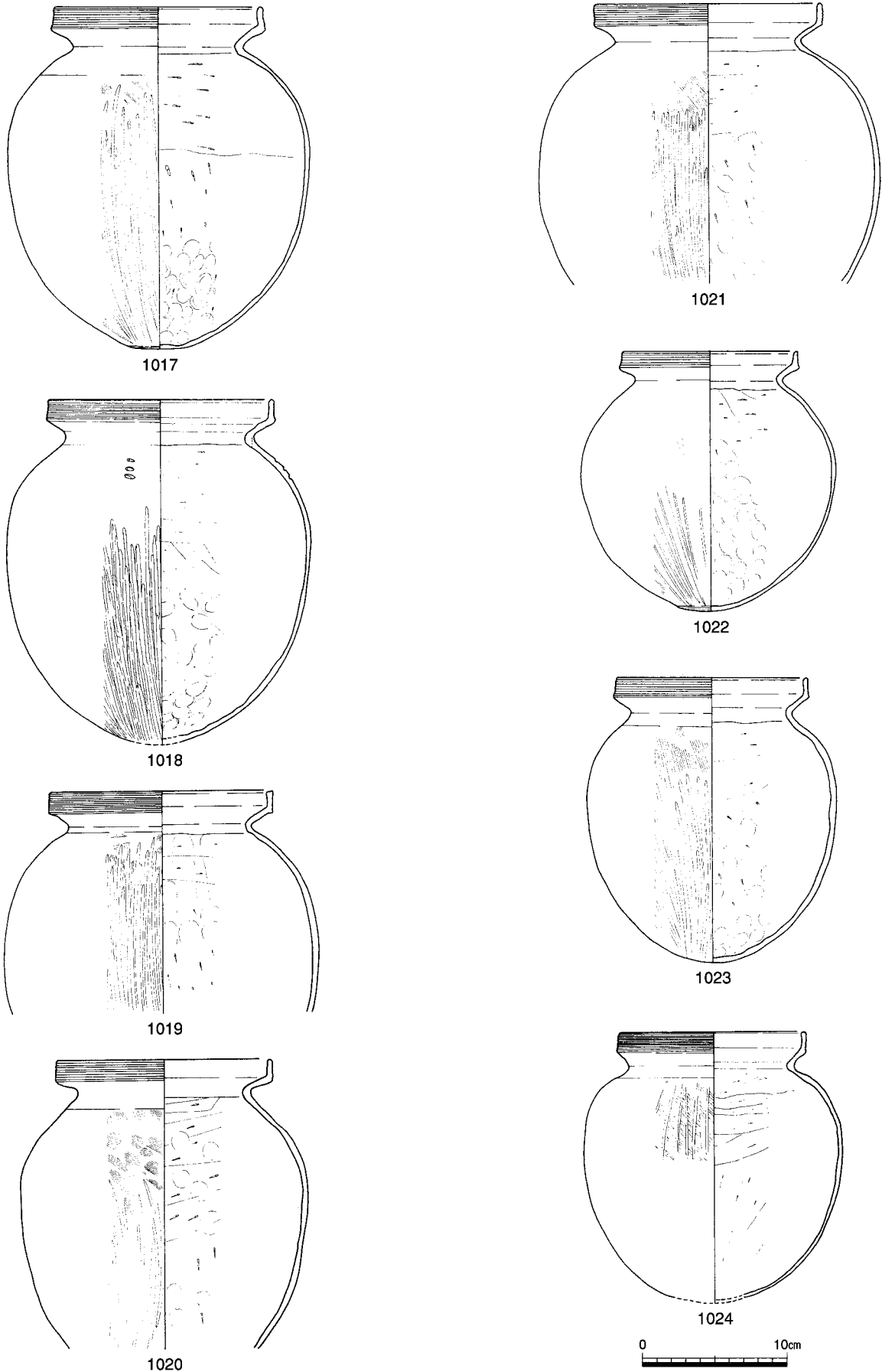
この1m北東の群はやや小さな範囲で、甕1019・1022・1023、高杯1026などが出土しており、甕の割合が多い。さらに1m北東の群は2×3mの範囲に土器が分布し、標高は330cmを測る。ここから



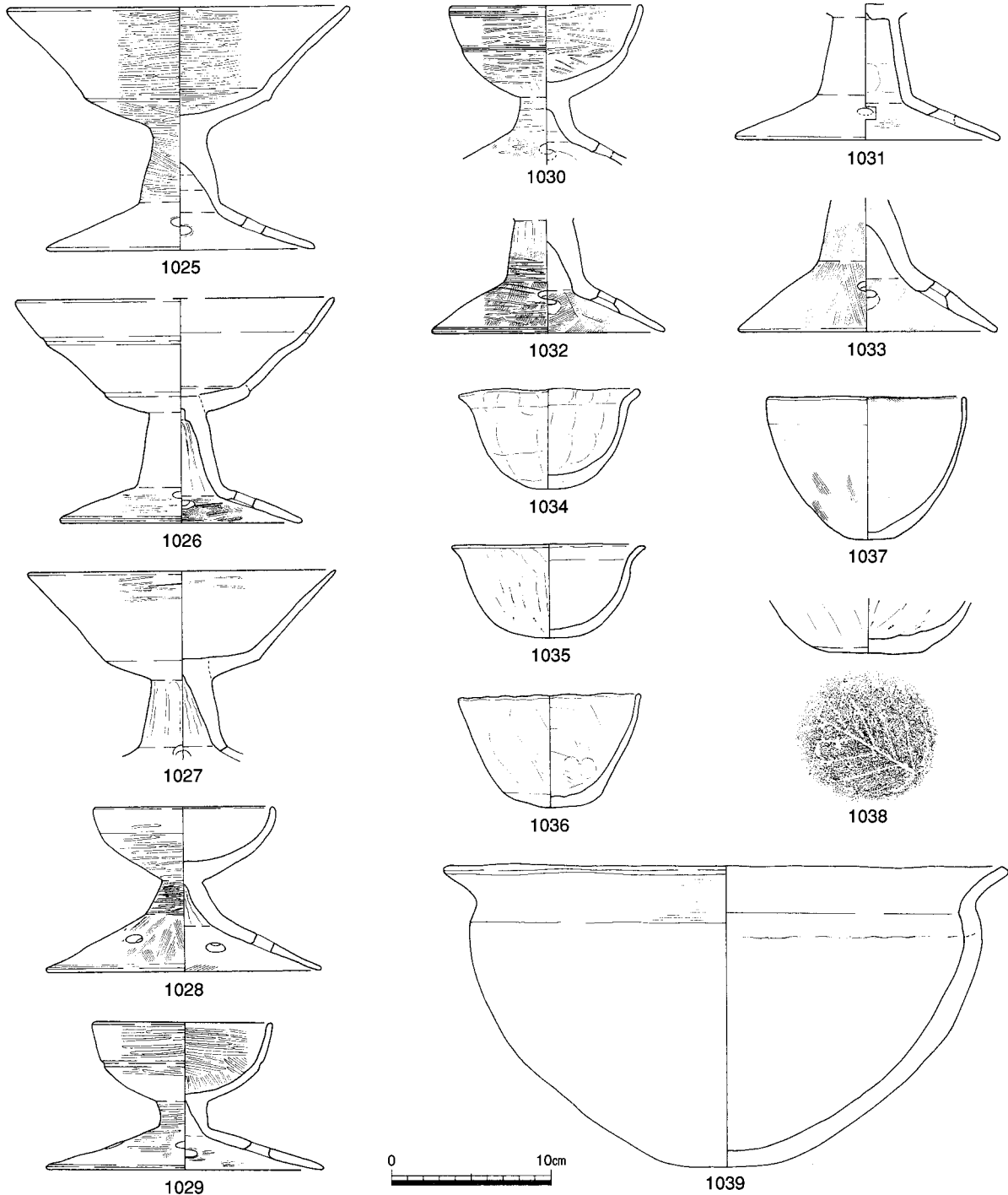
第298図 土器溜り2出土遺物① (1/4)



第299図 土器溜り2出土遺物② (1/4)



第300図 土器溜り2出土遺物③ (1/4)



第301図 土器溜り2出土遺物④ (1/4)

は壺1009、甕1016~1018・1020・1024、高杯1025・1027・1028・1030・1033、鉢1034・1037が出土しており、甕が多く認められる。また、壺1009は胴部外面にタタキメが残っており、胎土中にウンモ片が多く含まれている。残りの2群の範囲はともにごく小さく、壺1038、甕1021、高杯1029を図示できる程度である。

以上のようにこの土器溜りでは、各小群の器種構成において相違が認められることは注意すべき点である。

壺1010と鉢1035は弥生後期の溝44の上層に形成された土器溜まり出土の土器である。 (柴田)

## 第6節 古代以降の遺構・遺物

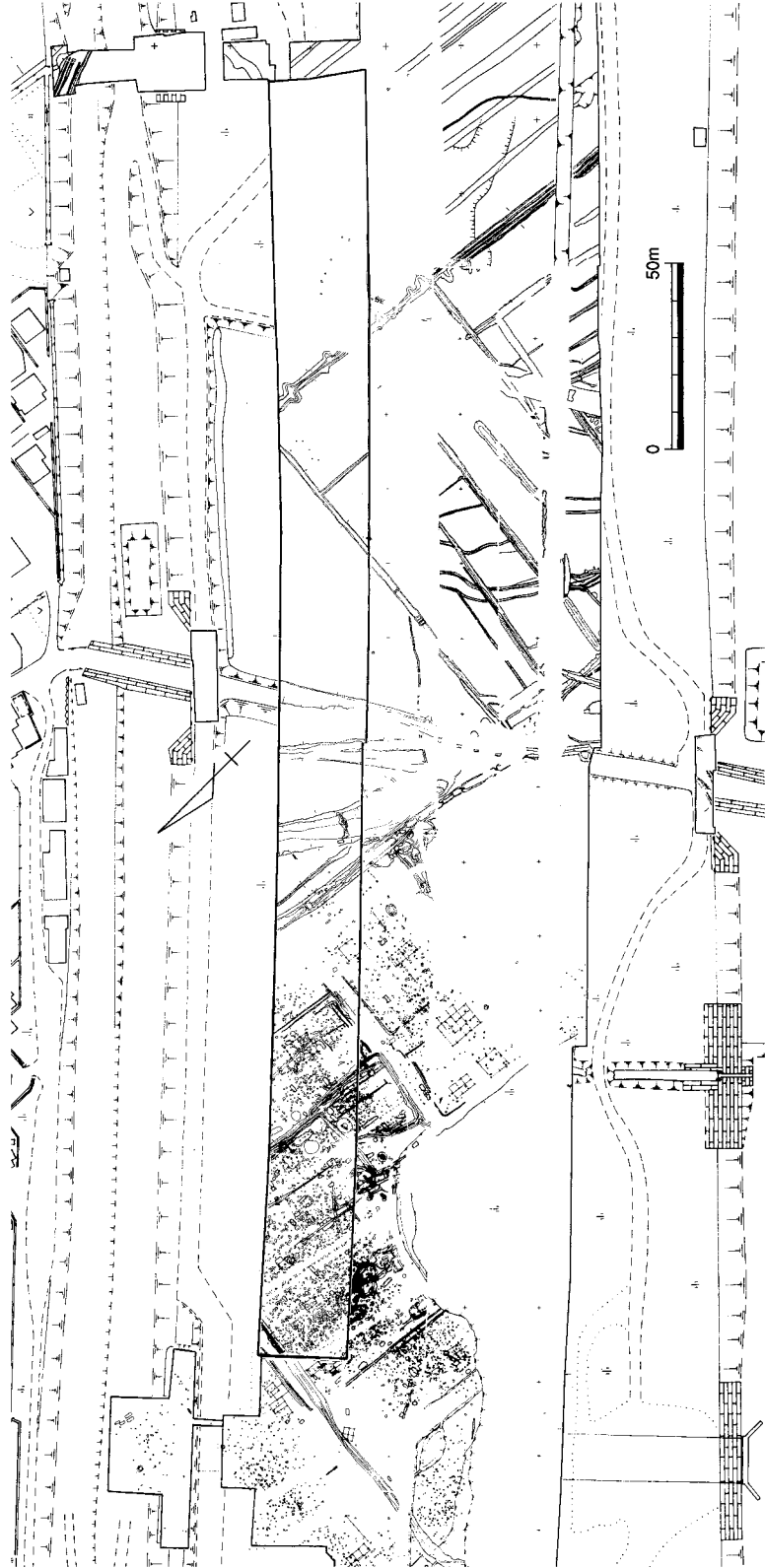
### 古代以降の概要

当該期は弥生時代後期に  
ならび遺構密度が高い集落  
であるが、明確な古代の遺  
構については溝1条に過ぎ  
ず、中世の遺構がすべてと  
いっても過言ではない状況  
である。なお、古代の溝は  
かつての調査で大祓の遺物  
がまとまって出土している  
が、今回の調査では杭列を  
検出ただけで、大祓の遺  
物は皆無であった。

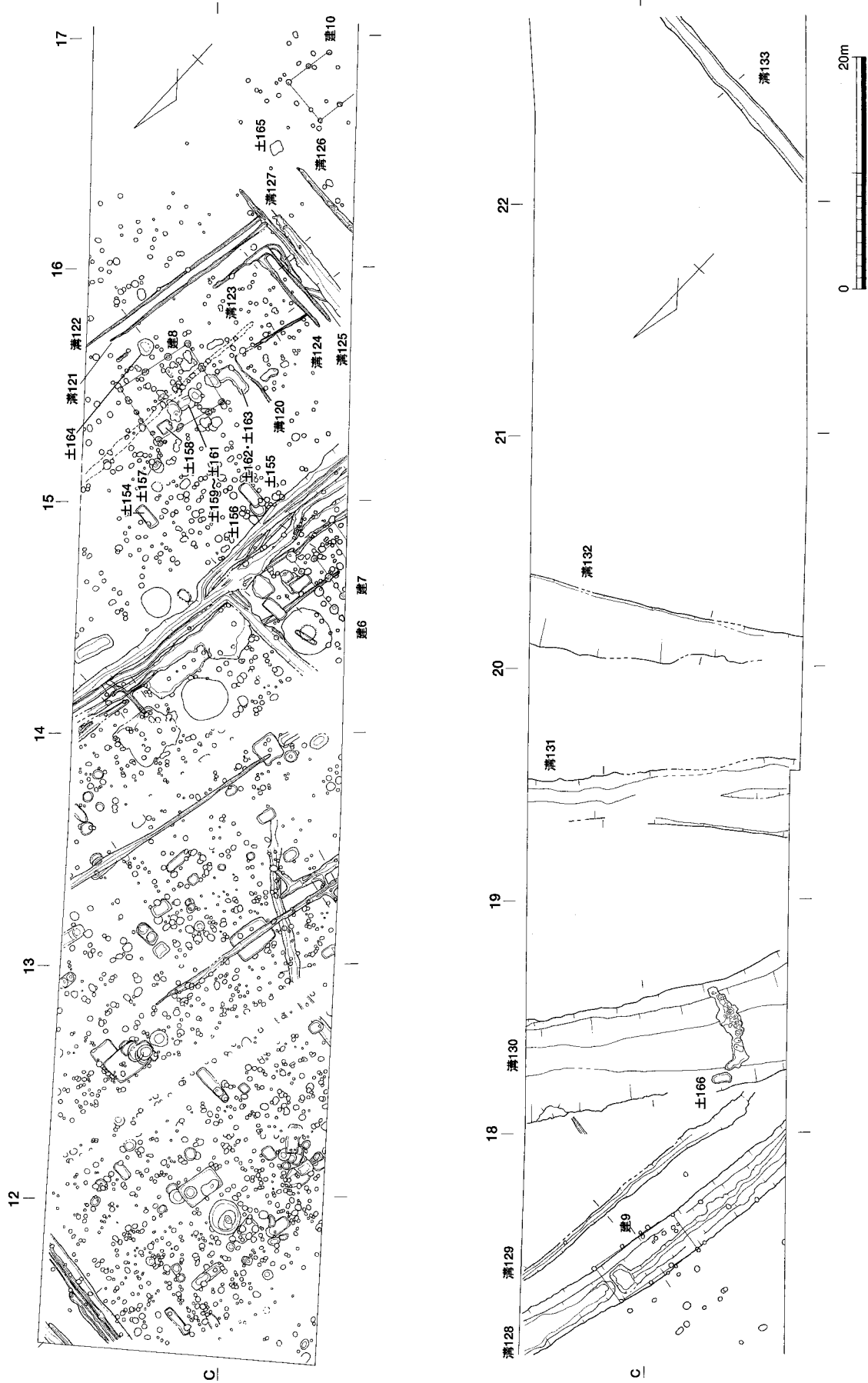
弥生時代から古墳時代にか  
けて河道や水田などの低位  
部であった場所は、中世  
段階には屋敷地となっている  
が、東側の微高地では目  
立った遺構は認められなく  
なっている。また、これに  
続く東の低位部についても  
同様である。

集落は1町四方程度を溝  
で囲まれていると想定され  
ており、さらにその内側も  
溝によって7つ以上に区画  
されていることが確認され  
た。検出された遺構は掘立  
柱建物5棟、井戸6基、土  
壙45基、溝26条、道など  
である。

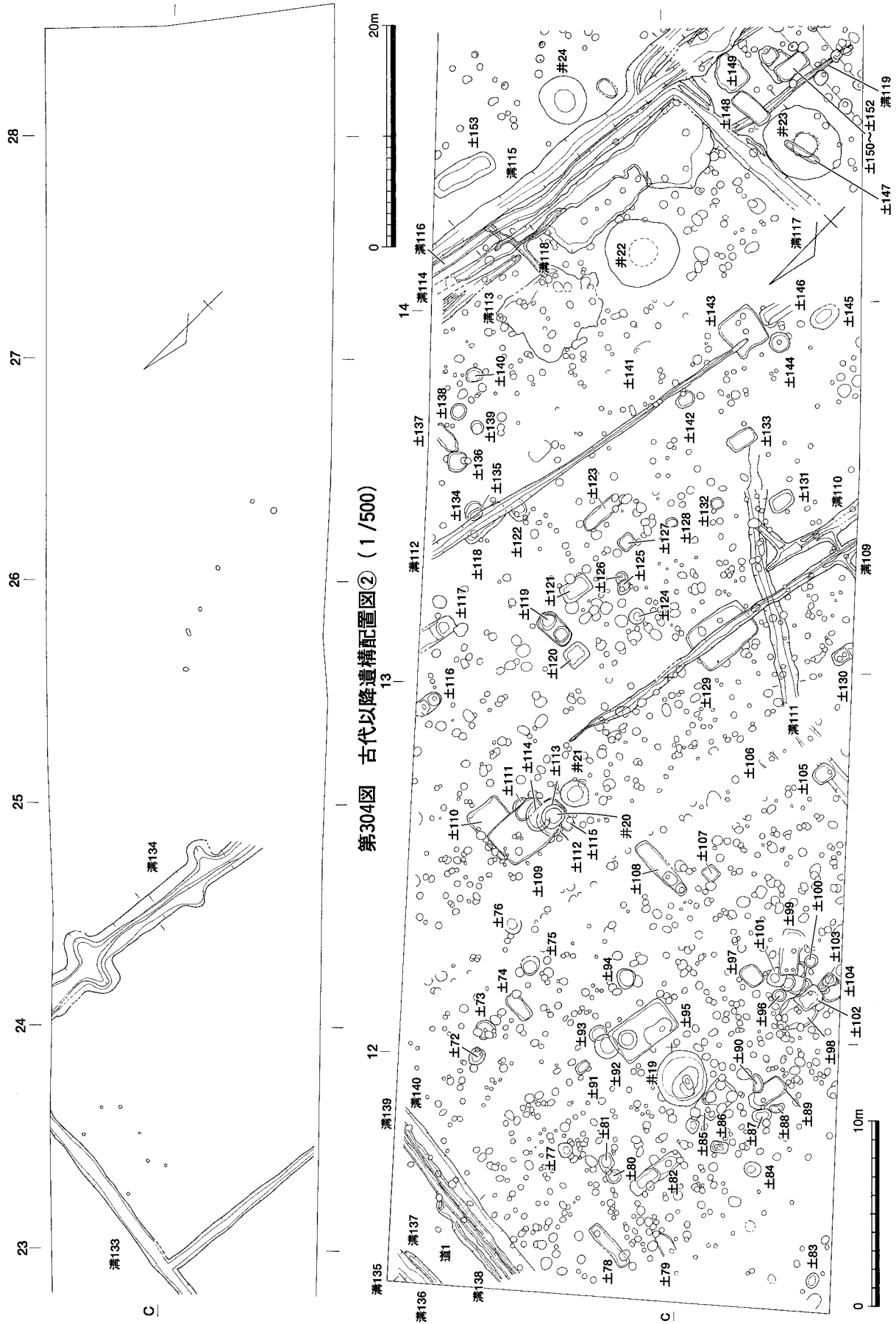
掲載した遺物は、土器336  
点、石製品6点、金属製品  
35点、土製品35点、木製品  
7点などである。（柴田）



第302図 対象調査区および周辺遺構配置図（古代以降、1/2,000）



第303図 古代以降遺構配置図① (1/500)



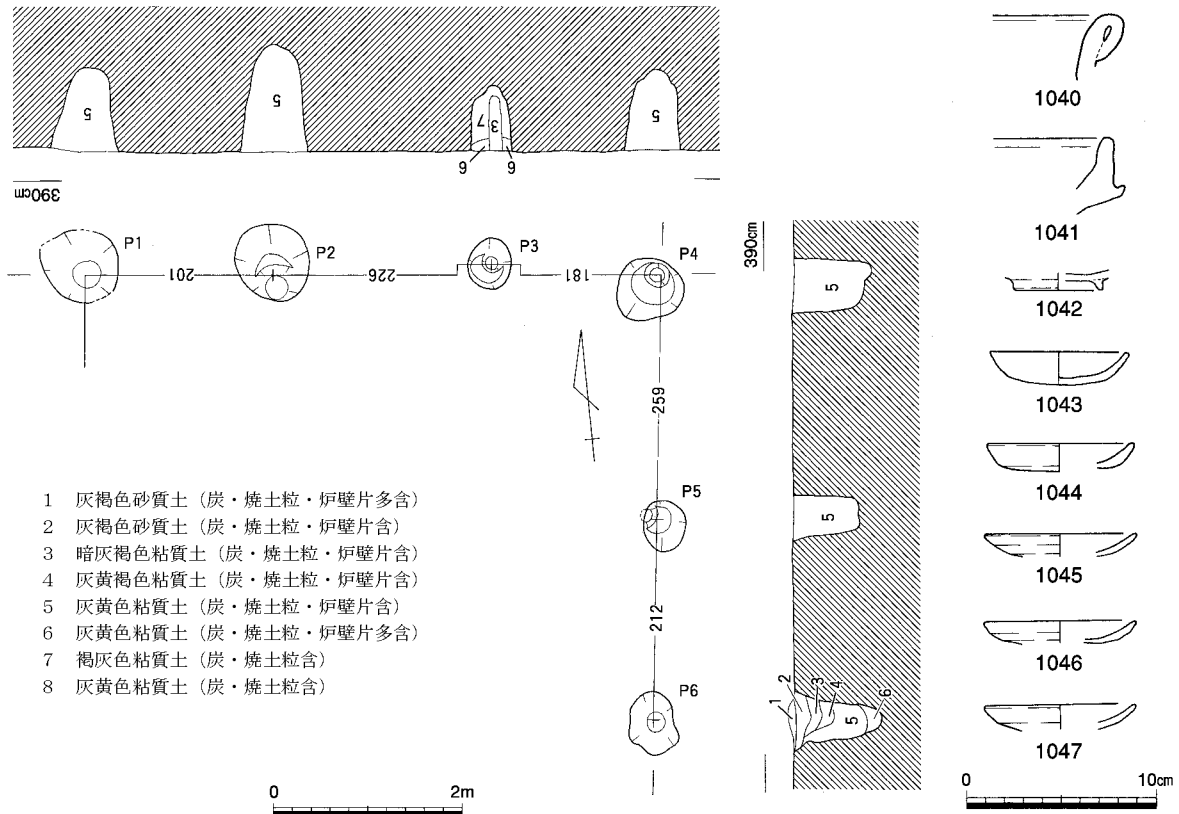
第304図 古代以降遺構配置図② (1/500)

第305図 古代以降遺構配置図 (11~14B・C区) (1/300)

# 1 建物

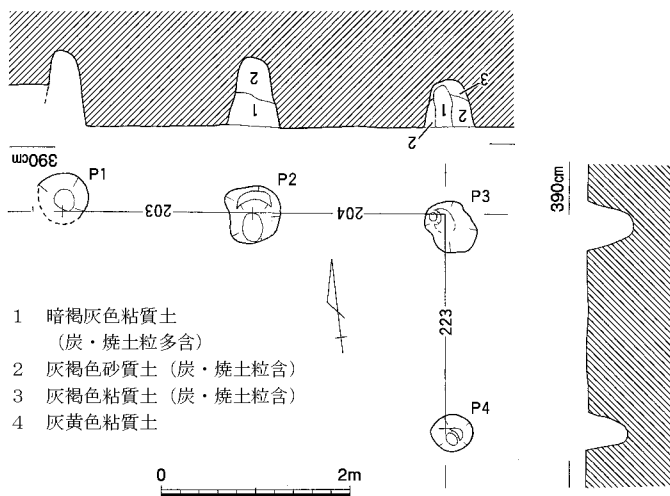
## 建物6 (第303・306図、図版41-1)

14C区の南端に位置し、既報告調査区にまたがって検出した。溝等で区画される屋敷地内の3間×2間の東西棟と考えられる。桁行全長608cm、梁間は259・212cmを測り、各柱間は一定しない。柱穴の長径は54~90cm、深さ70~112cmと規模が大き。P3で柱痕跡を検出したほかは、埋め戻しによる埋土と考えられ、特にスサ入り炉壁片を顕著に包含する。時期は室町時代と考えられる。(高田)



- 1 灰褐色砂質土 (炭・焼土粒・炉壁片多含)
- 2 灰褐色砂質土 (炭・焼土粒・炉壁片含)
- 3 暗灰褐色粘質土 (炭・焼土粒・炉壁片含)
- 4 灰黄褐色粘質土 (炭・焼土粒・炉壁片含)
- 5 灰黄色粘質土 (炭・焼土粒・炉壁片含)
- 6 灰黄色粘質土 (炭・焼土粒・炉壁片多含)
- 7 褐灰色粘質土 (炭・焼土粒含)
- 8 灰黄色粘質土 (炭・焼土粒含)

第306図 建物6 (1/80)・出土遺物 (1/4)



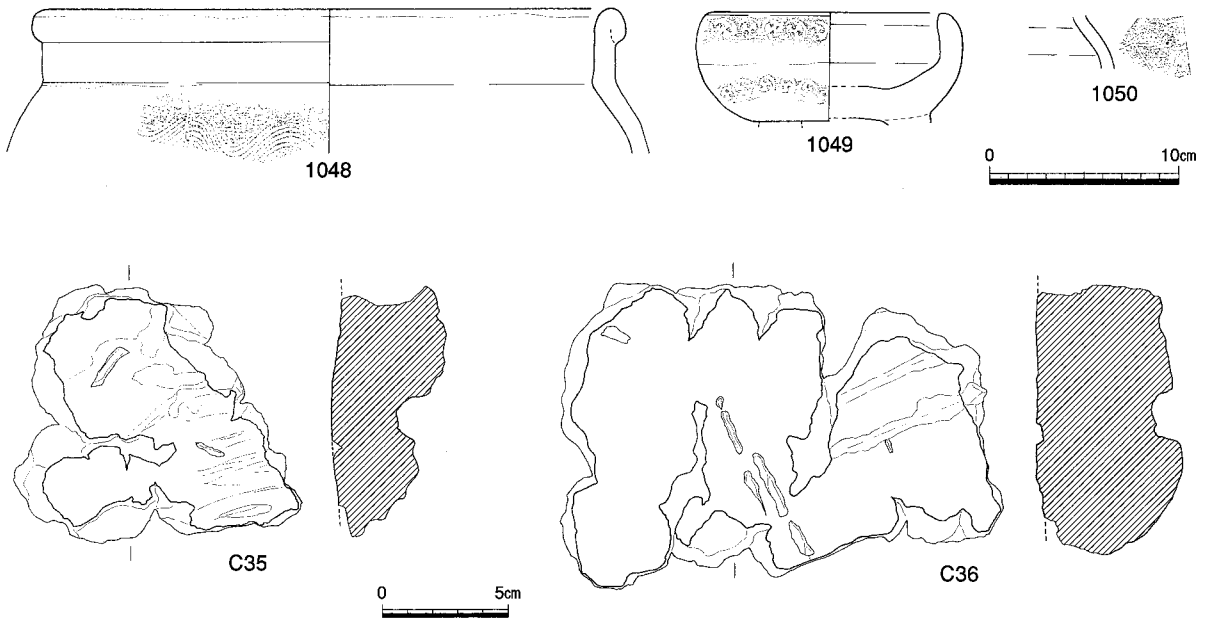
- 1 暗褐灰色粘質土 (炭・焼土粒多含)
- 2 灰褐色砂質土 (炭・焼土粒含)
- 3 灰褐色粘質土 (炭・焼土粒含)
- 4 灰黄色粘質土

第307図 建物7 (1/80)

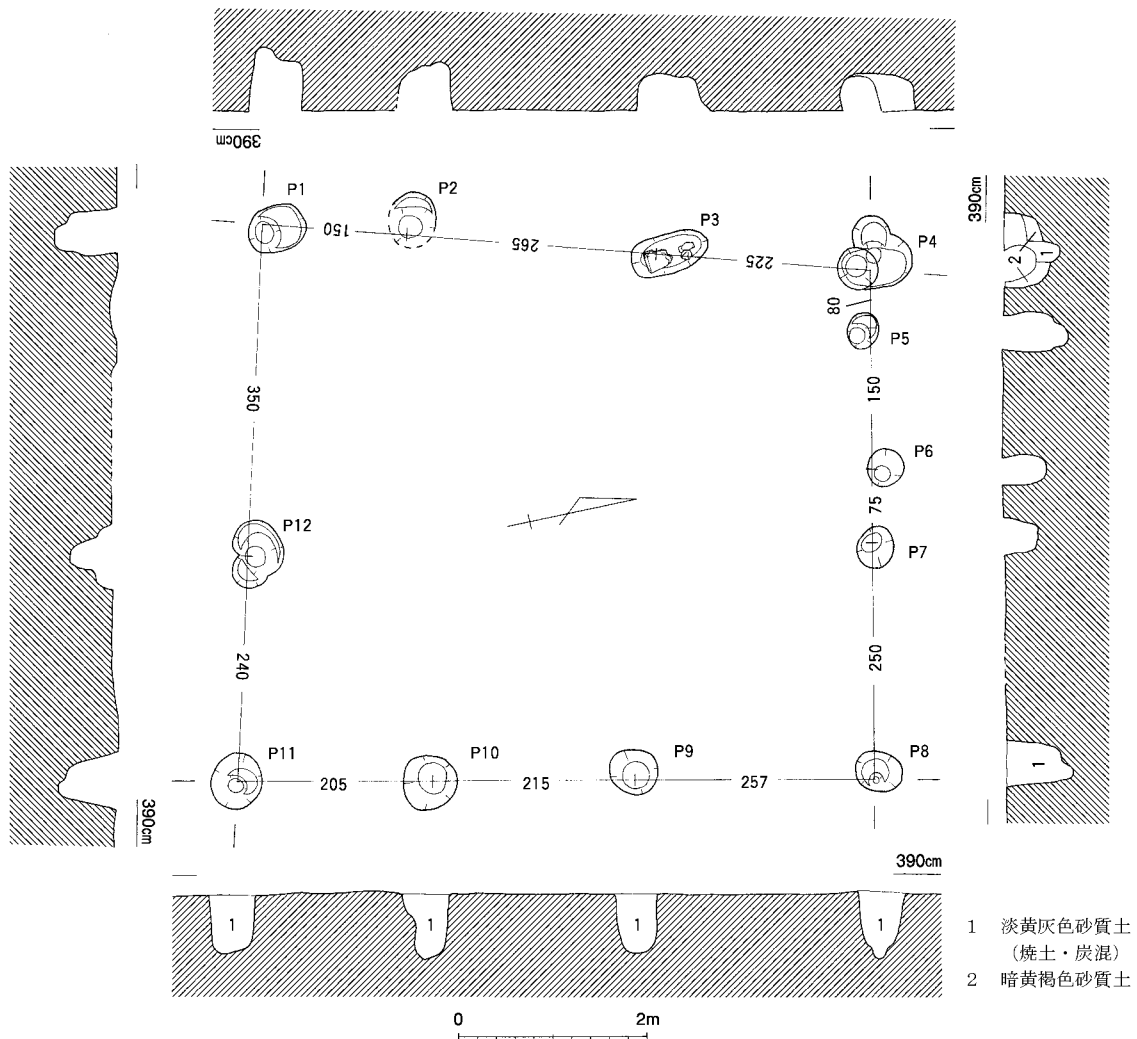
## 建物7 (第303・307・308図、図版41-1)

建物6と重複する掘立柱建物で、既報告調査区と合わせて3間×2間の東西棟と考えられる。柱間は203~223cm、柱穴の長径45~64cm、深さ42~80cmを測る。建物6と同様にスサ入り炉壁片を顕著に包含する。C35・36は、炉体側を平滑に仕上げる。建物の規模や柱穴の埋土から、建物6との類似性が指摘され、建て替えの関係にあるものと考えられる。(高田)





第308図 建物7出土遺物 (1/4・1/3)



- 1 淡黄灰色砂質土 (焼土・炭混)
- 2 暗黄褐色砂質土

第309図 建物8 (1/80)

建物8 (第303・309・310図)

15B・C区に位置する3間×2間の掘立柱建物である。桁行全長645・670cm、梁間540・590cmで南側が広い。柱間は桁行で150~265cm、梁間240~350cmと不揃いである。柱穴の長径は45~84cm、深さは36~72cmを測る。建物周辺には多くの柱穴が存在するが、建物を構成する柱穴の規模が大きい。P3は底面に礎石をもち、P3・4・12は建て替えによる柱穴の重複がみられる。

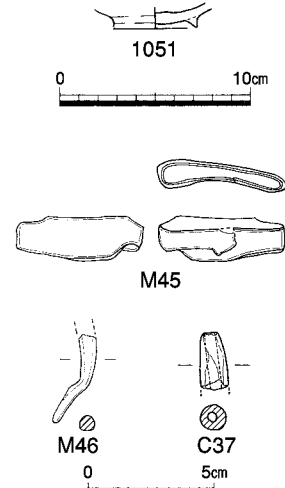
時期は室町時代以降と考えられる。(高田)

建物9 (第303・311図、図版41-2)

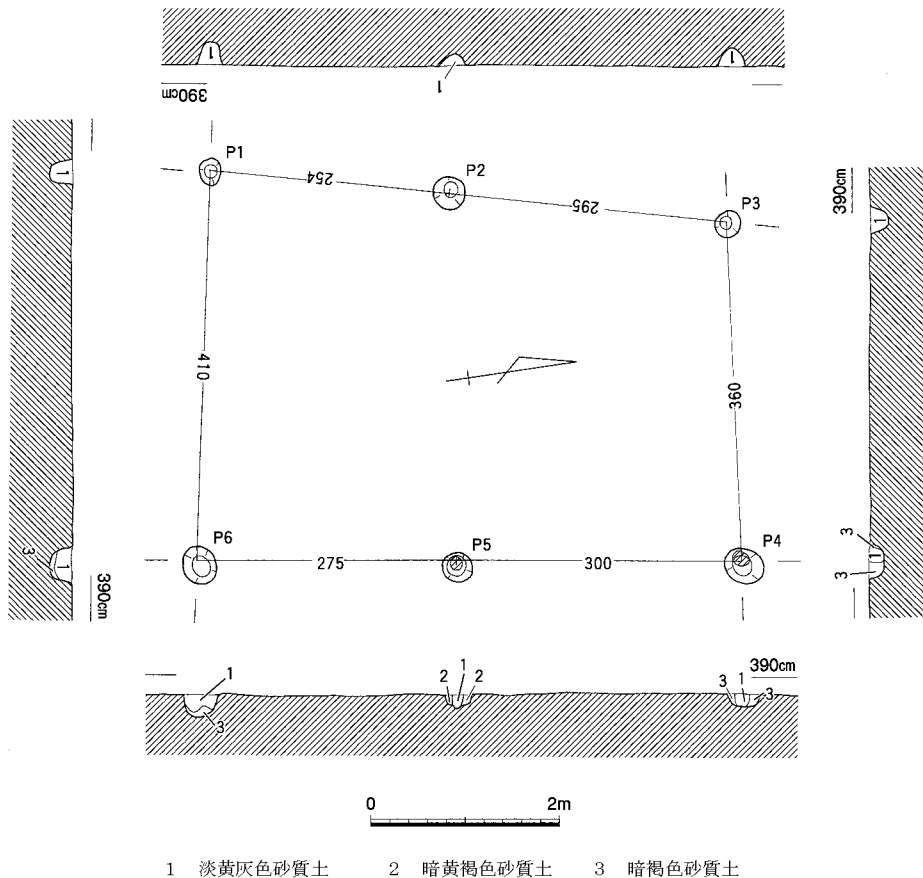
17B・C区で検出された2×1間の掘立柱建物で、溝128を切っている。主軸はほぼ南北方向である。桁行は550~575cmで、柱間距離は245~300cmを測る。梁間は360~410cmである。

柱穴掘り方の平面形は円形で、径は25~40cm、検出面からの深さは20cm前後を測る。東側の柱穴では、径12~16cmの円形の柱痕跡が確認された。

各柱穴埋土からの出土遺物については、土器の細片のみであるが、土師質高台付椀や土鍋の破片が認められている。これらの出土遺物では遺構の詳細な時期は不明であるが、遺構の切り合いなどから中世以降と思われる。(柴田)



第310図 建物8出土遺物 (1/4・1/3)

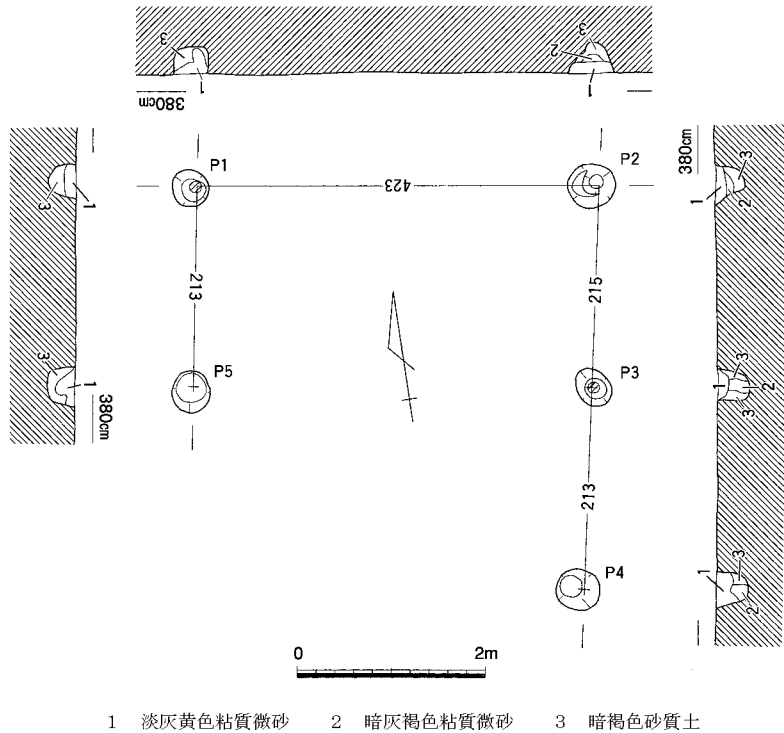


第311図 建物9 (1/80)

建物10 (第303・312図、図版41-3)

16C区に位置するもので、調査区境で検出したことから、南西隅の柱穴を失った可能性があり、本来は2間×1間と考えられる。

南側の『百間川原尾島遺跡5』の「建物27」とは、本建物の梁間が423cmを測るのに対し、「建物27」の東西方向で362cmと狭いことや、柱痕の有無から別棟と考えた。本建物の柱穴掘り方は円形を呈し、径40~45cm、深さ30前後を測る。桁行きの柱間は213~215cmとほぼ揃う。(高田)



第312図 建物10 (1/80)

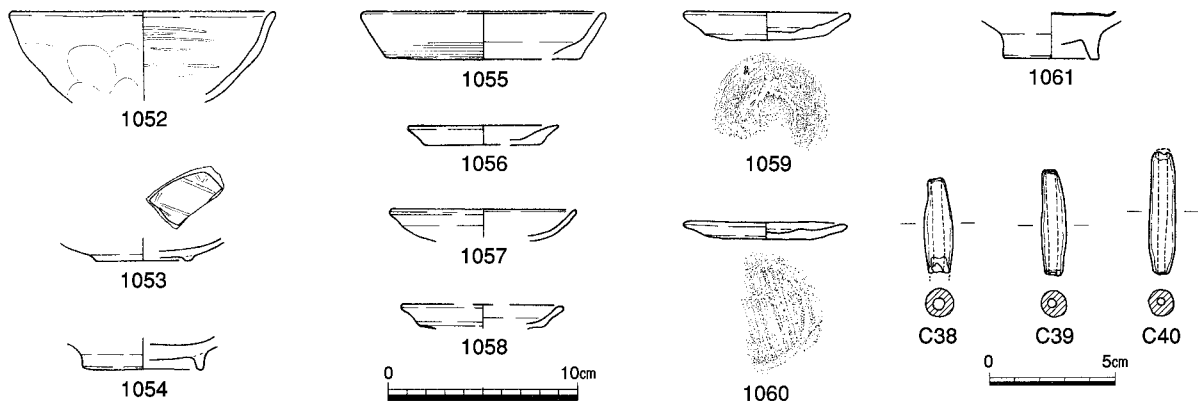
2 井戸

井戸19 (第305・313~315図、図版42-1・2、85-2)

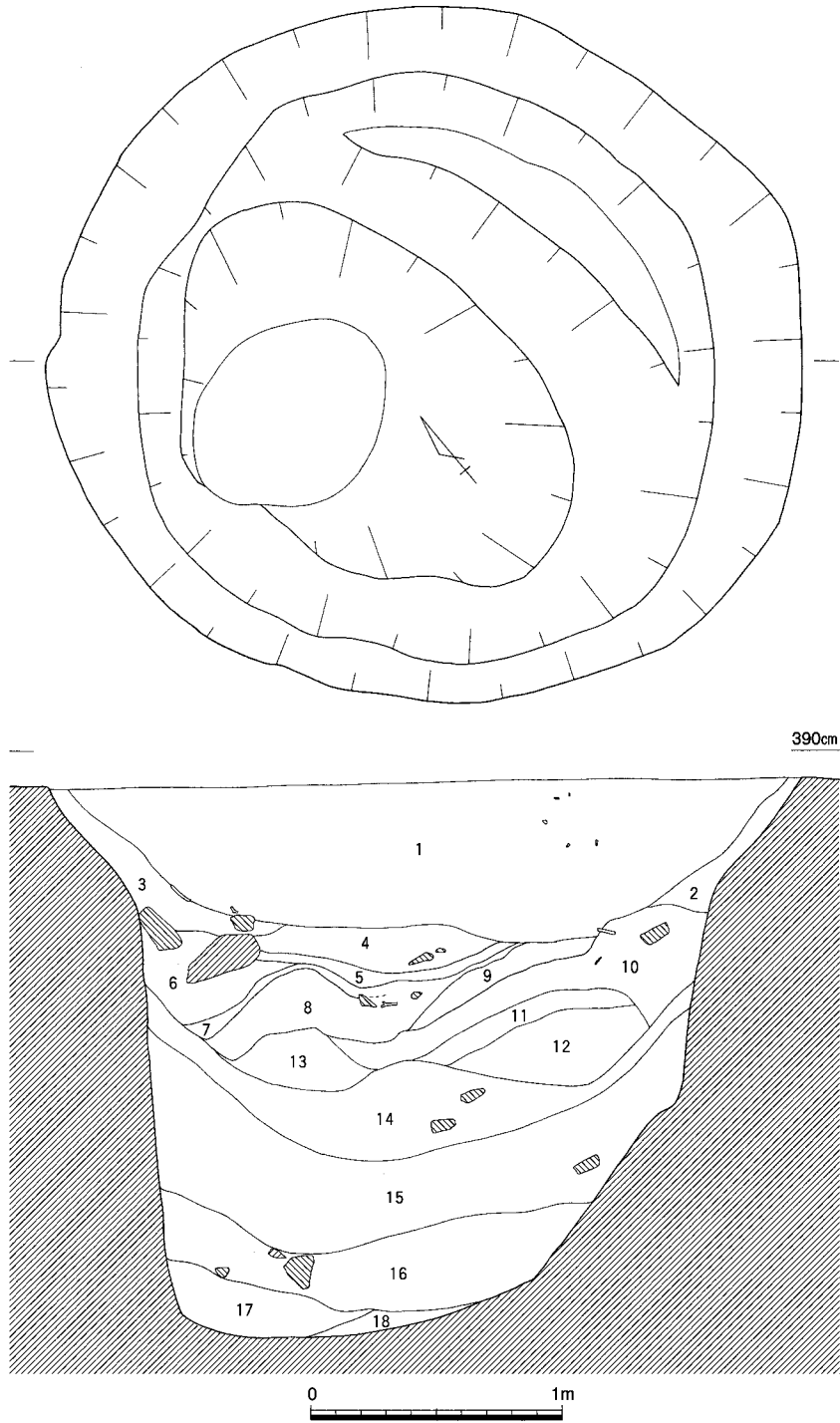
調査区の東端、11C区で検出した。上面径301cm、深さ222cmを測る大規模なものである。

掘り方底面まで埋土で木組みや井筒などの構造は認められなかった。多くの埋土に地山ブロックが含まれており、木組み等の撤去を行った後埋め戻されているとみてよい。なお、埋土のうち1層には地山ブロックが含まれておらず、2~4層上面まで埋めて窪地が残されていたのか、埋め戻しの後沈下したかのいずれかであろう。

遺物は各層に含まれていたが、最下層からの出土が多かった。瓦器椀、土師質皿、青磁碗、土師質鍋、外耳付き鍋、羽釜、備前焼播鉢、土錘などがあり、他に最下層から小形の曲げ物2点が出土した。これらの遺物からこの井戸の廃絶時期は15世紀末頃とみられる。(宇垣)

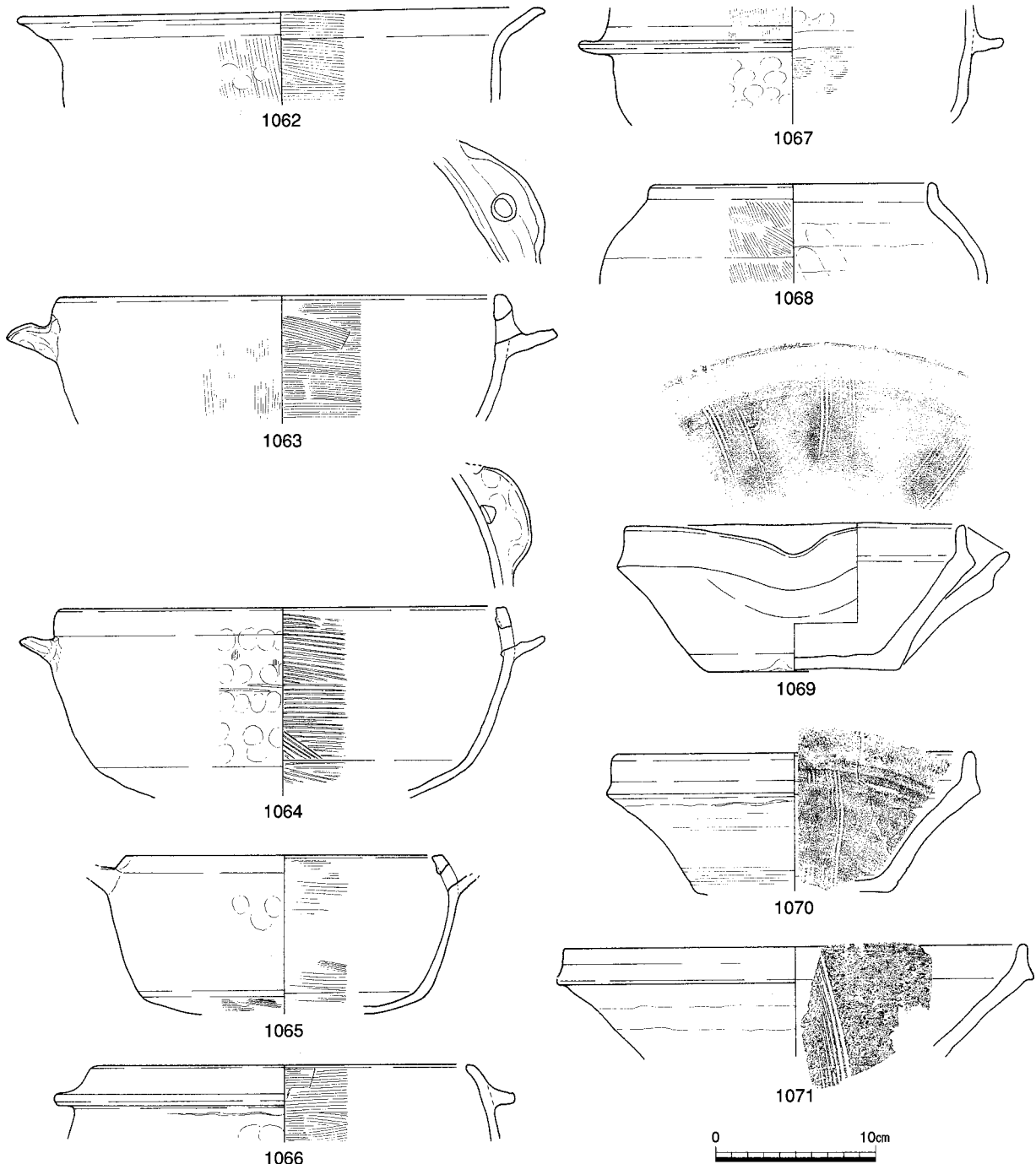


第313図 井戸19出土遺物① (1/4・1/3)



- |                        |                           |
|------------------------|---------------------------|
| 1 褐色砂質土                | 10 褐灰色粘性砂質土（基盤ブロック含）      |
| 2 黄褐色砂質土               | 11 黄灰色粘質土（基盤ブロック多量含）      |
| 3 暗褐色砂質土               | 12 黒灰色弱粘性砂質土（基盤ブロック粒含）    |
| 4 褐灰色弱粘性砂質土（基盤ブロック小粒含） | 13 暗灰色弱粘性砂質土（基盤ブロック粒含）    |
| 5 灰色粘性砂質土（基盤ブロック多含）    | 14 灰色粘質土（基盤ブロック小粒少含）      |
| 6 灰色粘性砂質土（基盤ブロック多含）    | 15 青灰色粘質土（基盤ブロック多量含）      |
| 7 灰色粘質土                | 16 暗青灰色粘質土（暗青灰色砂質土ブロック多含） |
| 8 灰色粘質土（基盤ブロック含）       | 17 暗緑灰色粘質土（暗緑灰色砂質土ブロック含）  |
| 9 黄灰色粘質土（基盤ブロック多量含）    | 18 黄～緑灰色砂質土～粘質土           |

第314図 井戸19 (1/30)

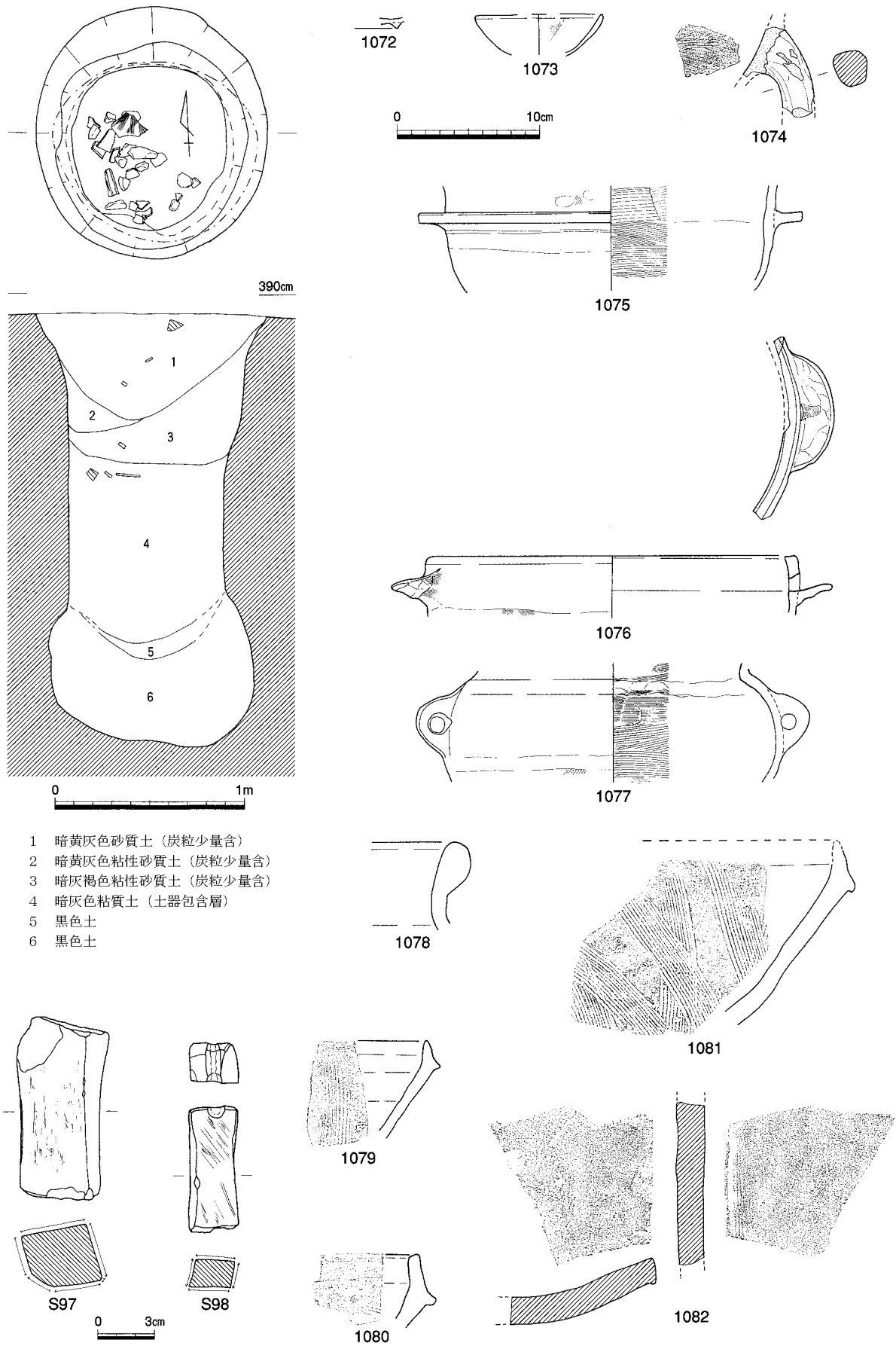


第315図 井戸19出土遺物② (1/4)

井戸20 (第305・316図、図版42-3. 43-1)

12B区に所在する円形の井戸で、重複して切り合う土壌109~113を掘削している。上面径132cm、深さ228cmを測る。円筒状にほぼ垂直な壁面をもち、下部は球形気味に広がる。確認はできなかったが、本来は曲げ物等の井筒によって壁面が保護されていた可能性も考えられる。

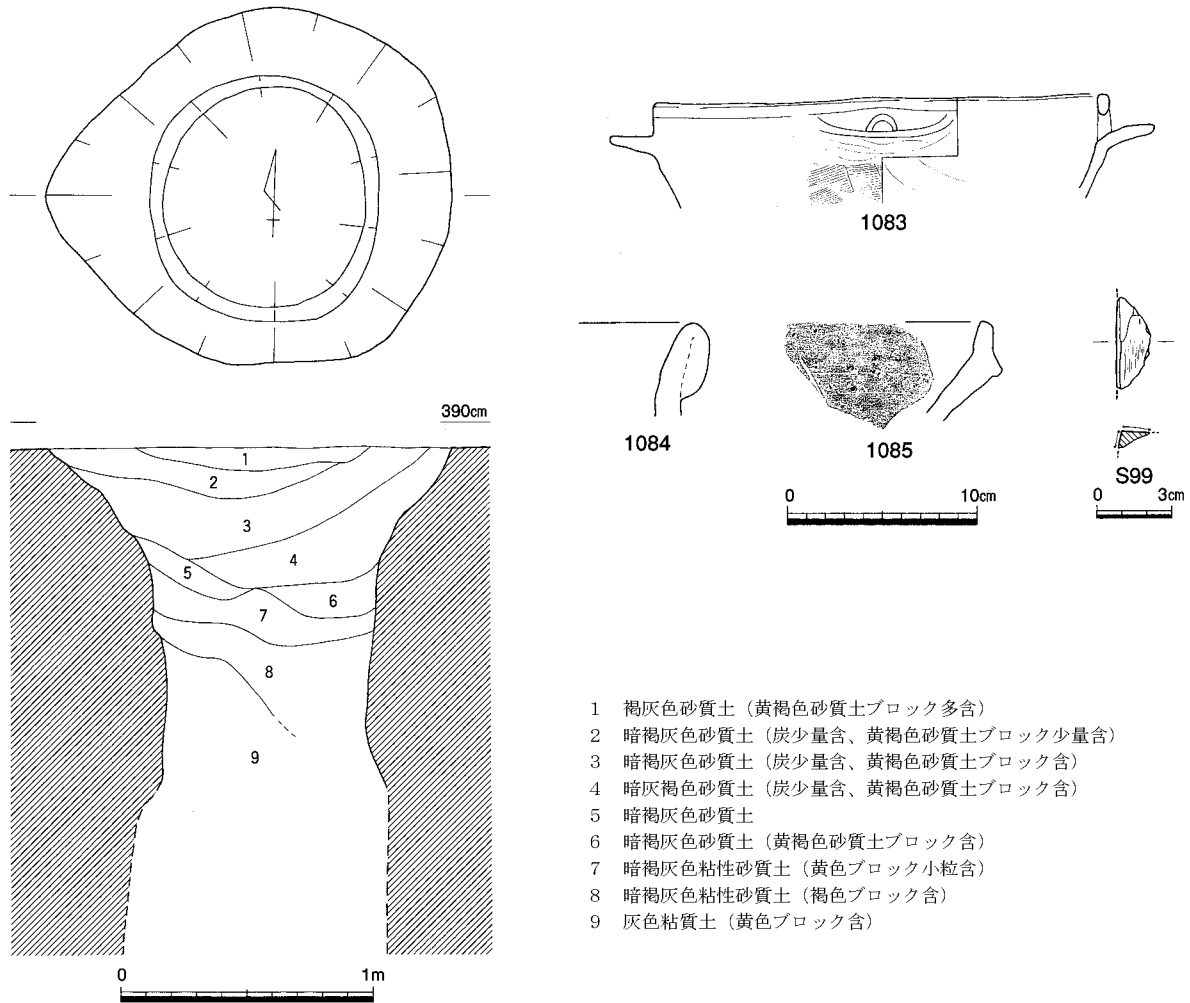
遺物は4層上部からまともに出土しており、下層からの出土は少ない。土師質碗、三足鍋破片、羽釜、外耳鍋、備前焼壺・播鉢、瓦、砥石などからなる。土器類のうち1074~1077はいずれも瓦質である。これらのうち砥石S98は小口に溝状の削り込みが見られる。瓦1082は上面両面ともナデ調整である。出土遺物から井戸の廃絶は15世紀末頃とみられる。(宇垣)



第316図 井戸20 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

井戸21 (第305・317図、図版42-3. 43-2)

井戸20の南側で検出した円形の井戸で、上面径160cmを測る。検出面から2mまで掘り下げた時点で掘り下げを断念せざるをえなかったが、まだかなり深くなるようである。井戸20と近接しており、一方の廃絶後に他方が掘り直された可能性が考えられる。井戸21の埋土中遺物は鍋、備前焼壺・播鉢、砥石などであるが量は少ない。井戸20の出土遺物と大きな時期差は認められないが、井戸21埋土の多くには基盤層とみられる黄褐色砂質土のブロックが含まれ、埋め土と推定されることから、この井戸が15世紀代に埋められ、新たに井戸20が掘削されたと考える。(宇垣)



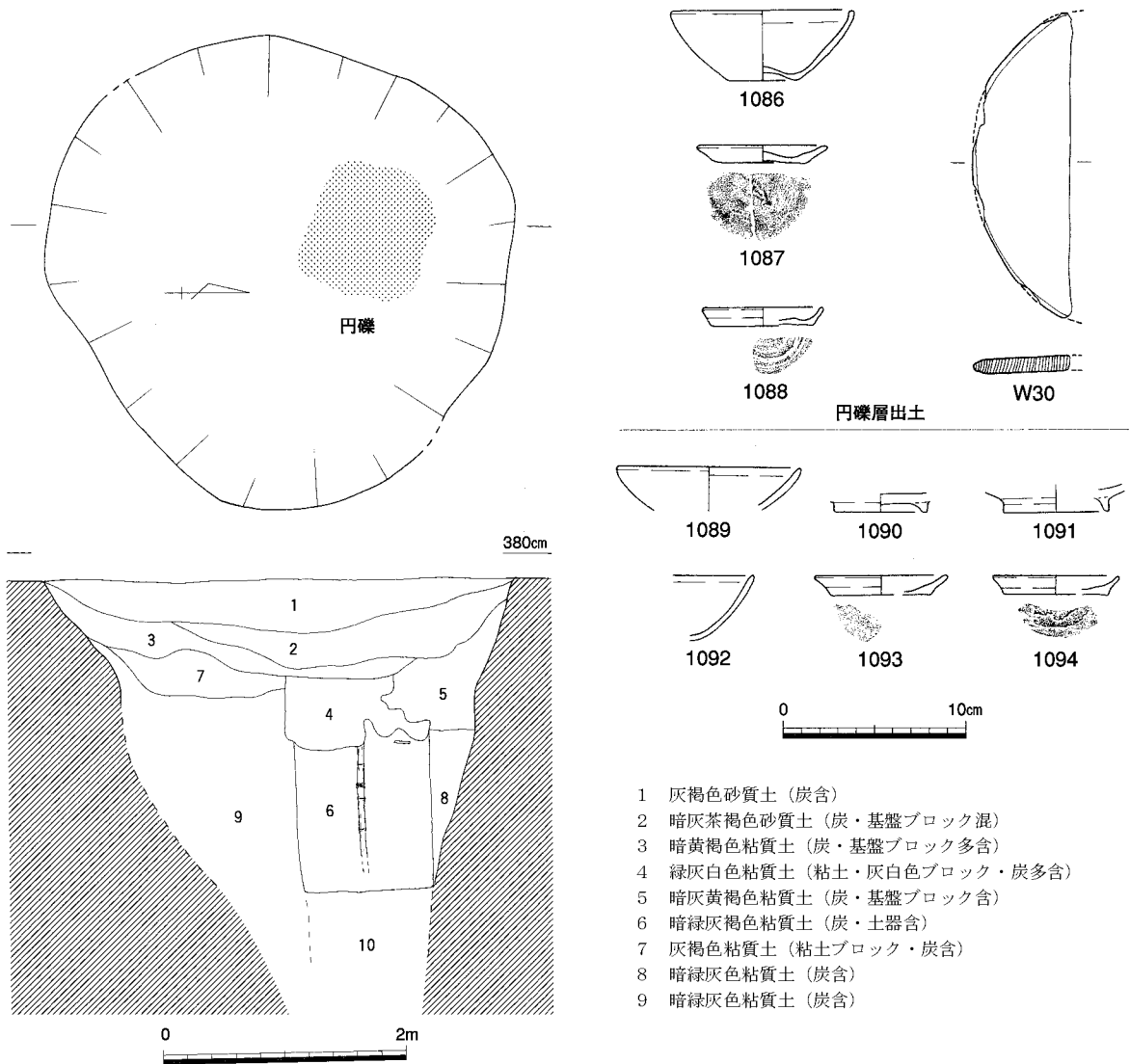
第317図 井戸21 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

井戸22 (第305・318図、図版43-3. 44-1. 85-2)

14B区で検出された井戸である。この井戸の付近は、屋敷境の溝を隔てて井戸23・24が近接している。遺構の記録については、湧水などによる崩落で十分に行えなかった。

掘り方平面形は円形で、径360~390cmを測る。北寄りに井戸枠を設置していたと見られるが、廃棄の際に抜き取っていると思われる。さらに井戸枠の撤去後、竹を中央に刺して埋め戻していることも確認された。井戸の外径は56cmを測り、深さ310cm付近で径2~3cm程度の円礫の堆積が薄く認められる。さらに下層は標高40cm程度まで砂層が卓越しており、底面は確認できなかった。

出土遺物には椀、小皿、曲げ物底板などがあり、遺構の時期は室町時代前半と思われる。(柴田)



第318図 井戸22 (1/30)・出土遺物 (1/4)

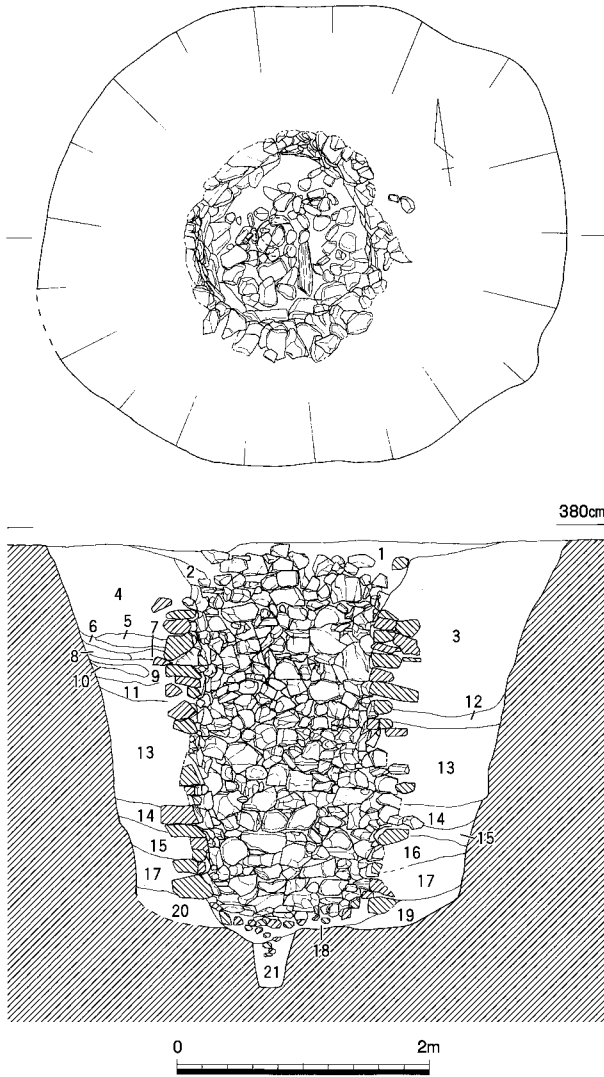
井戸23 (第305・319・320図、図版44-2・3)

14C区に位置する石組みの井戸である。北側は溝117に接し、南側は建物6・7に近接する。また北側の約6.5mには井戸22がある。井戸の掘り方は楕円形を呈し、東西長411cm、南北長362cmを測る。検出面からの深さは300cmで、断面形は逆台形を呈する。底面のほぼ中央に径30cm、深さ45cmのピットを検出した。石組みは底面より10~20cm上部から積まれ、ほぼ垂直近くに立ち上げている。その内法径は140cmを測る。石は基本的に直方体の石を用い、小口を面にする。石の大きさは10~20cmのものが主体で、その隙間をさらに小さな石で埋めている。掘り方と石組みの間は、第1~6層・第7層・第8~13層の3層に大別され、石組みの構築段階を示すものと考えられる。

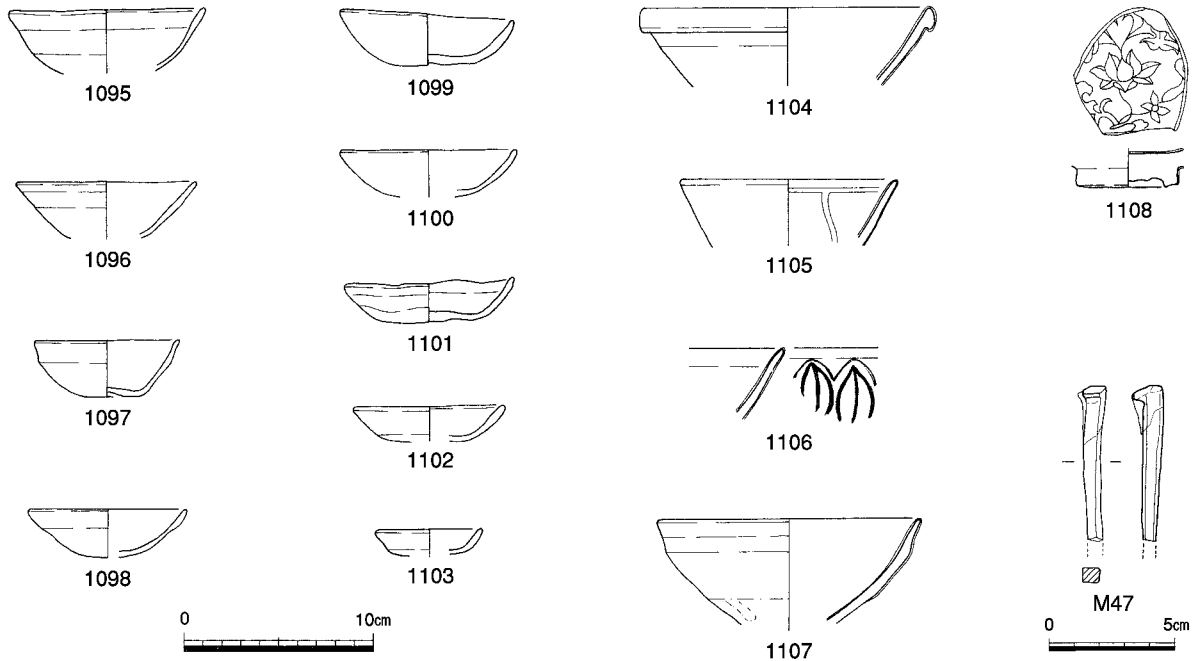
遺物はほとんどが井側内で出土し、掘り方内のもは少量である。土師器、青磁、白磁、備前焼、金属器、木器などがある。1095~1103は土師器の椀と皿、1104は白磁碗、1105~1108は青磁碗である。1109~1111は土師器の土鍋、1112~1114は備前焼で、1112は壺、1113・1114は播鉢である。また、M47は鉄釘、W31・32は曲げ物の底板か蓋、W33~35は同一個体の折敷と考えられ、綴じ皮が残る。W36は加工板材で、表裏に墨書による文様がある。

井戸の時期は室町時代前半代と考えられ、原尾島遺跡では石組みを残す唯一の例である。(高田)

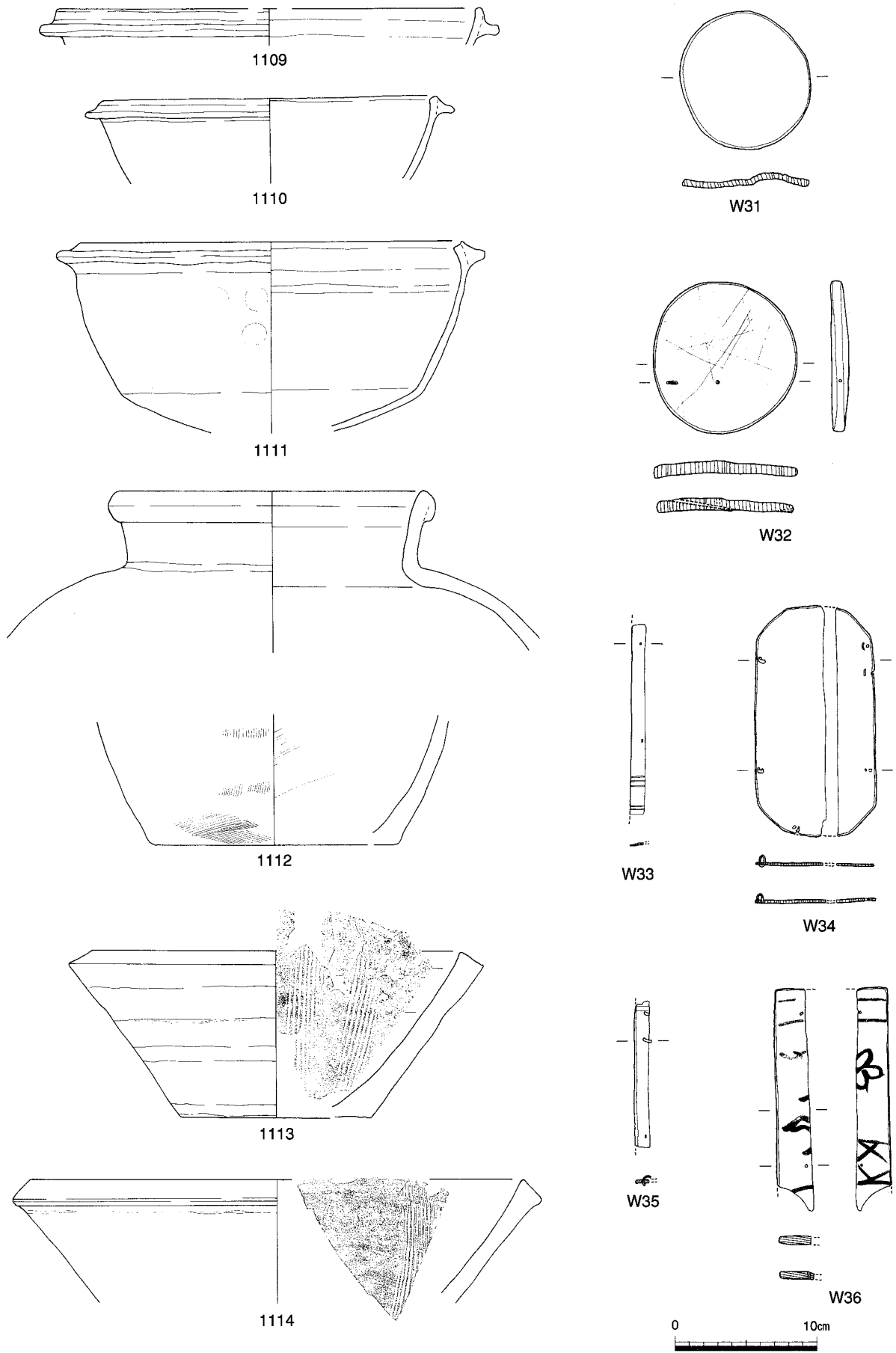




- 1 灰黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 2 にぶい黄色粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 3 暗灰色砂質土 (炭多含)
- 4 暗灰黄褐色砂質土 (炭含、基盤ブロック混)
- 5 淡黄褐色粘質土
- 6 暗灰色砂質土 (炭多含)
- 7 にぶい黄色粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 8 淡黄褐色粘質土
- 9 暗灰色砂質土 (炭多含)
- 10 淡黄褐色粘質土
- 11 淡黄褐色粘質土
- 12 暗黄褐色砂質土
- 13 暗緑灰色砂質土 (炭含)
- 14 灰色粘土 (暗緑灰色粘質塊、炭粒含)
- 15 暗緑灰色粘土  
(灰色粘土、暗緑灰色砂質土塊、炭粒含)
- 16 灰色粘土・緑灰色粘土・暗茶灰色粘質微砂塊充填  
(炭粒含)
- 17 灰色粘土 (炭粒含)
- 18 暗緑灰色砂質土 (植物遺体多含)
- 19 暗灰色粘土 (暗茶灰色粘質微砂塊含)
- 20 暗灰色粘土 (暗茶灰色粘土塊含)
- 21 暗緑灰色粘土 (植物遺体多含、礫多含)



第319図 井戸23 (1/60)・出土遺物① (1/4・1/3)



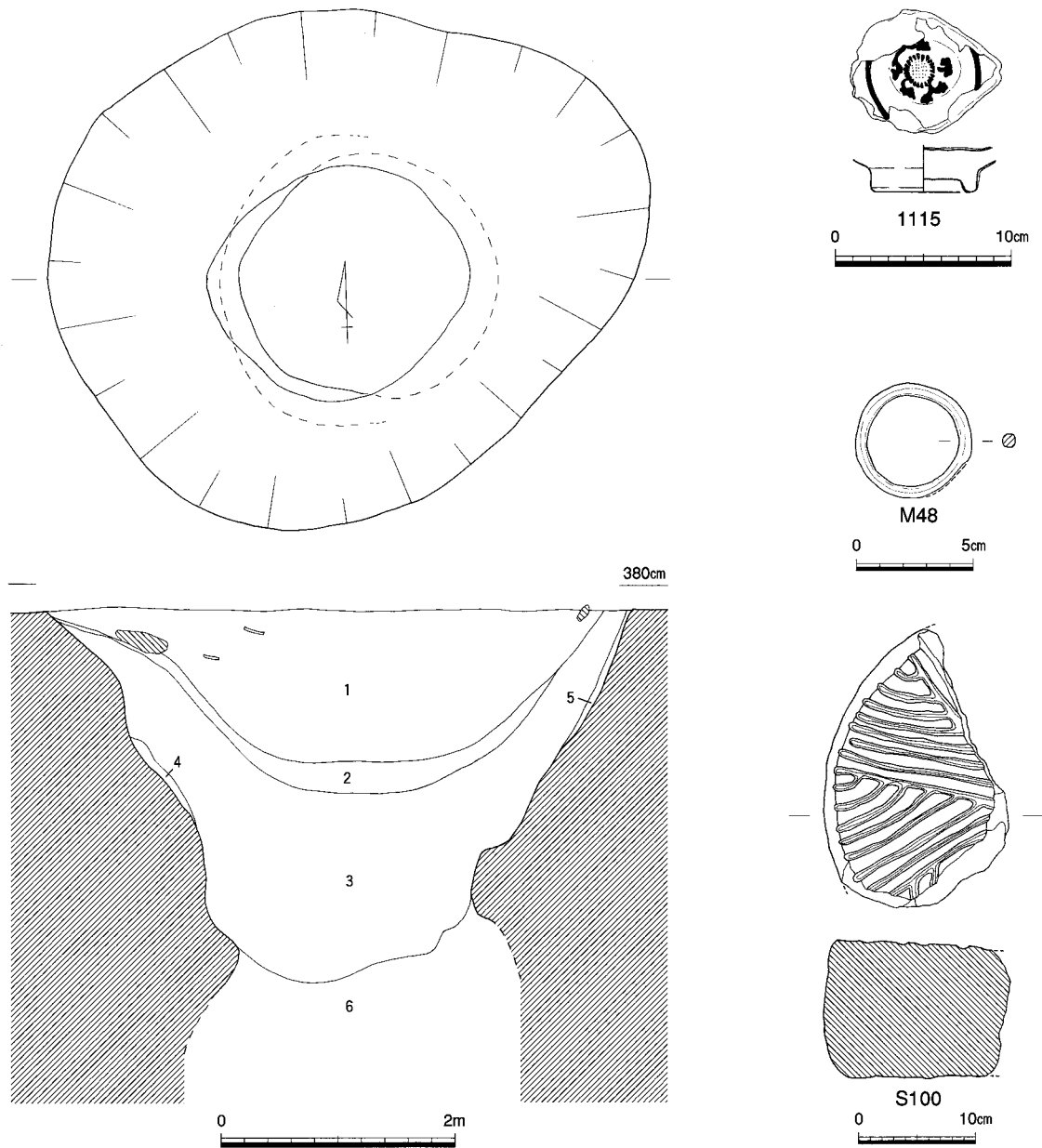
第320図 井戸23出土遺物② (1/4)

井戸24 (第305・321~324図、図版45-1・2、85-2)

14B区で検出された井戸である。この井戸の付近は、屋敷境の溝を隔てて井戸22・23が近接している。遺構の記録については、湧水などによる崩落で十分に行えなかった。

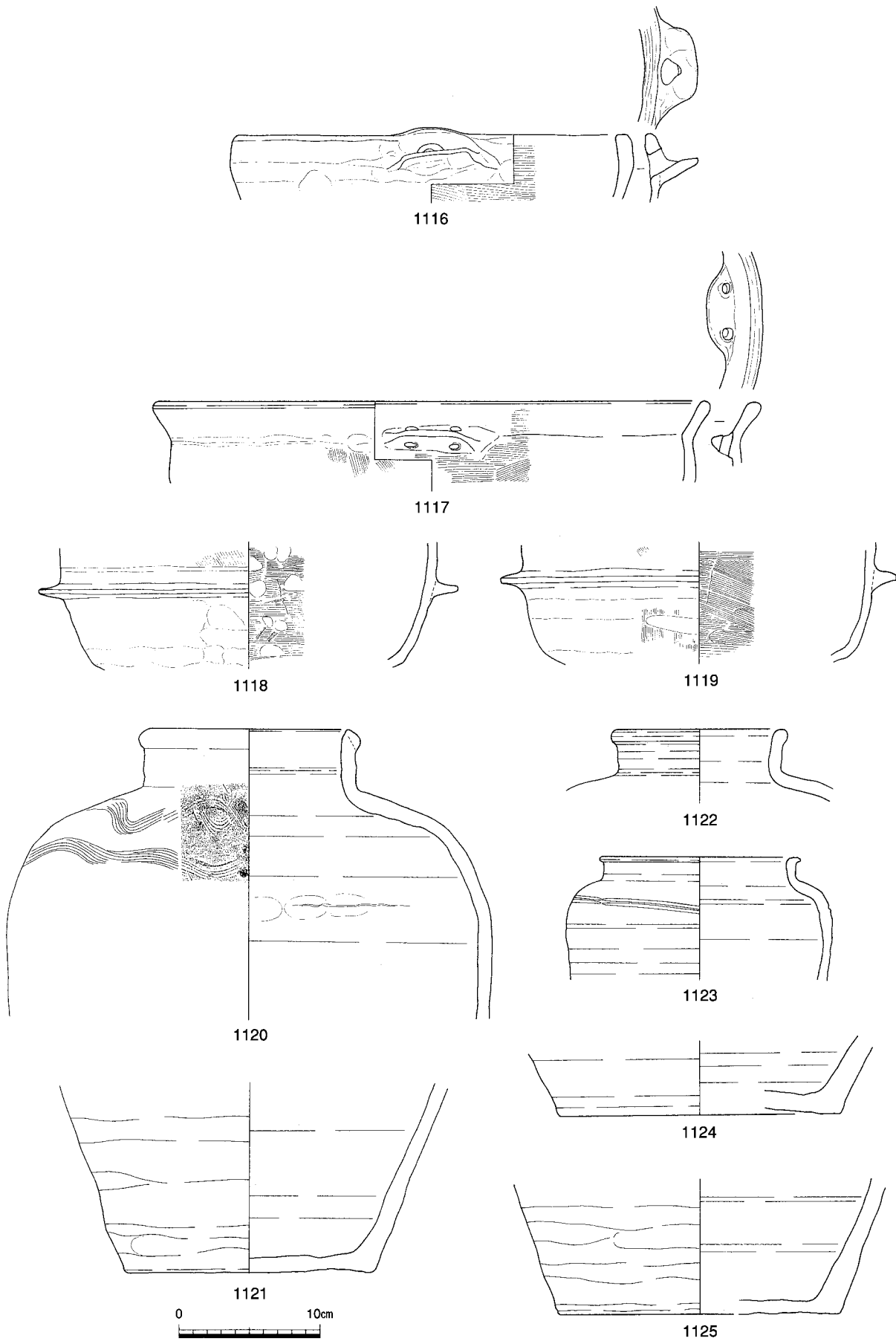
掘り方平面形は検出面では楕円形であるが、下半では円形である。検出面での径は220~260cm、下半では径110cm前後を測る。検出面からの深さは165cm以上で、底面は弥生時代前期の河道に堆積した砂層の中でおさまると思われる。

出土遺物には、青磁碗1115、土師質鍋1116~1119、備前焼壺1120~1125、備前焼甕1126~1129、備前焼播鉢1130~1139、平瓦1140、環状鉄製品M48、石臼S100などがある。これらの遺物などから、遺構の時期は室町時代前半と思われる。(柴田)

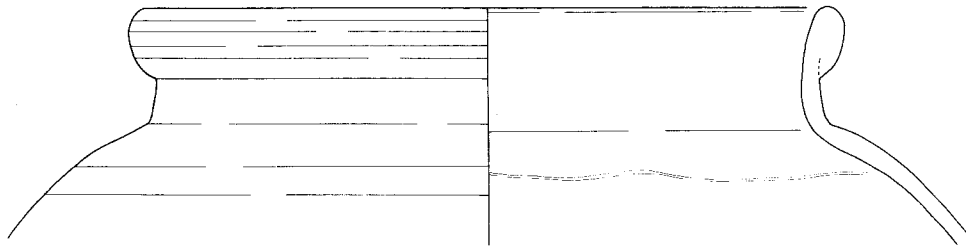


- |                    |          |           |
|--------------------|----------|-----------|
| 1 明褐色砂質土 (炭・焼土粒少含) | 3 暗灰色粘質土 | 5 黄褐色砂質土  |
| 2 黒灰色砂質土 (炭・焼土粒少含) | 4 灰色砂質土  | 6 暗緑灰色粘質土 |

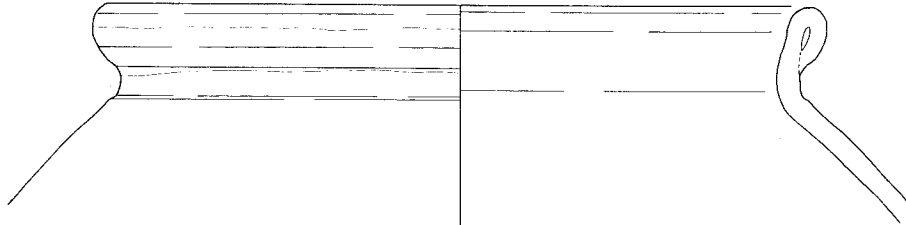
第321図 井戸24 (1/60)・出土遺物① (1/6・1/4・1/3)



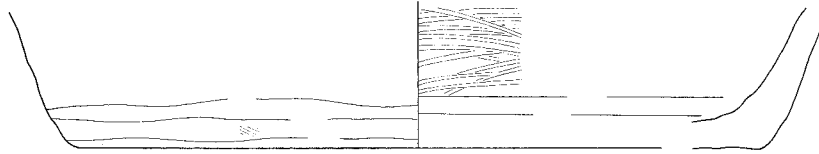
第322図 井戸24出土遺物② (1/4)



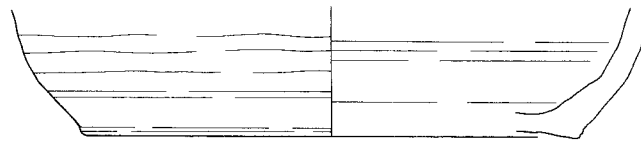
1126



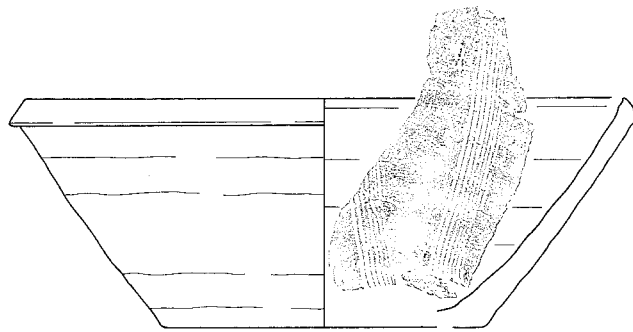
1127



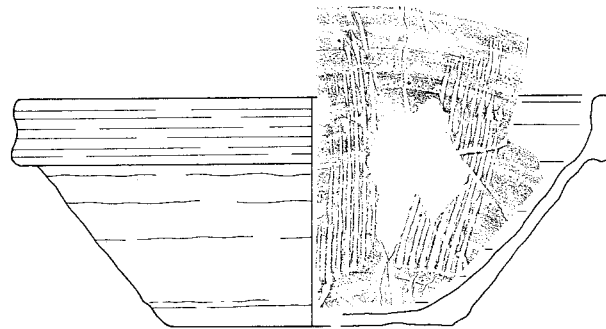
1128



1129



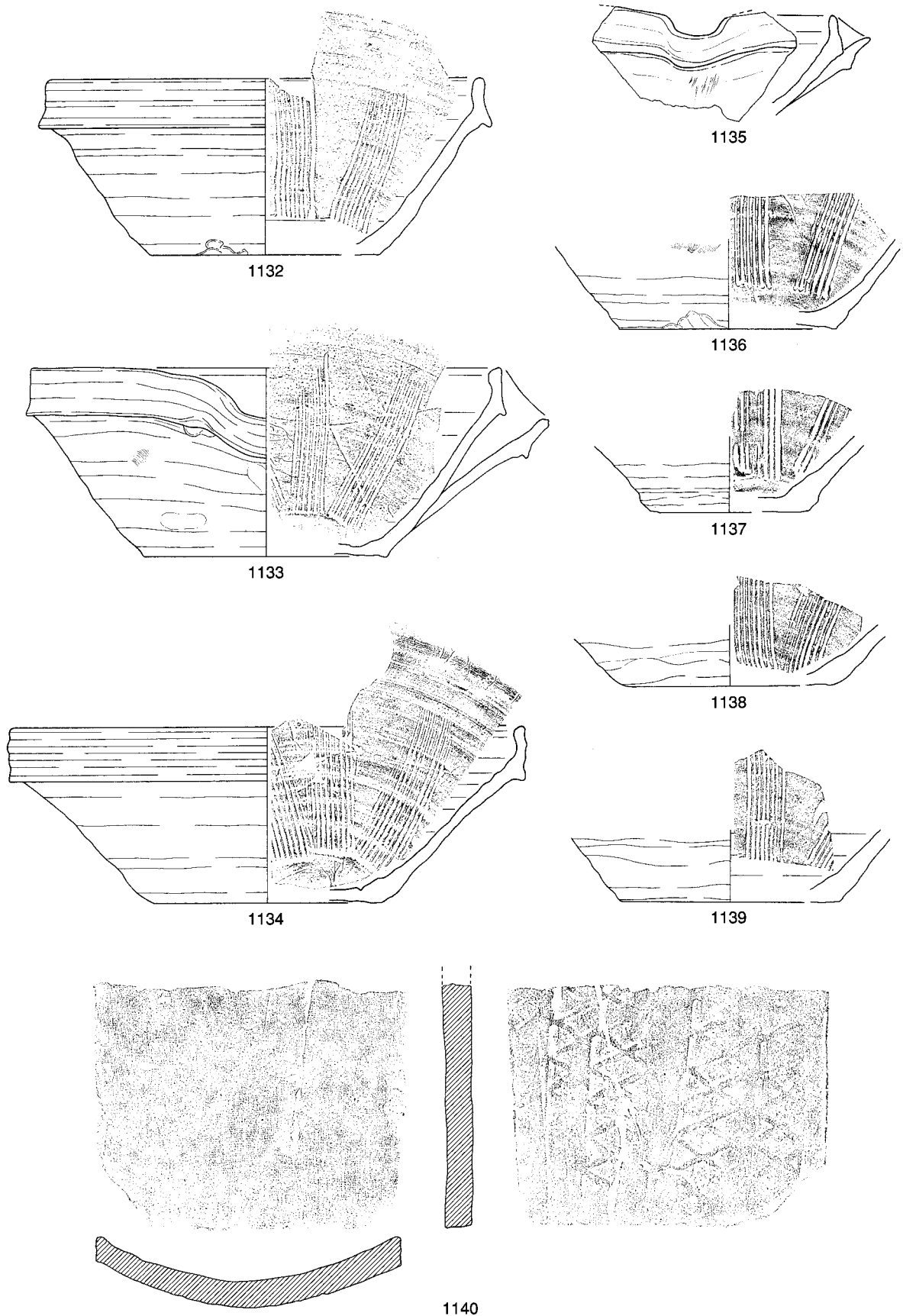
1130



1131



第323図 井戸24出土遺物③ (1/4)



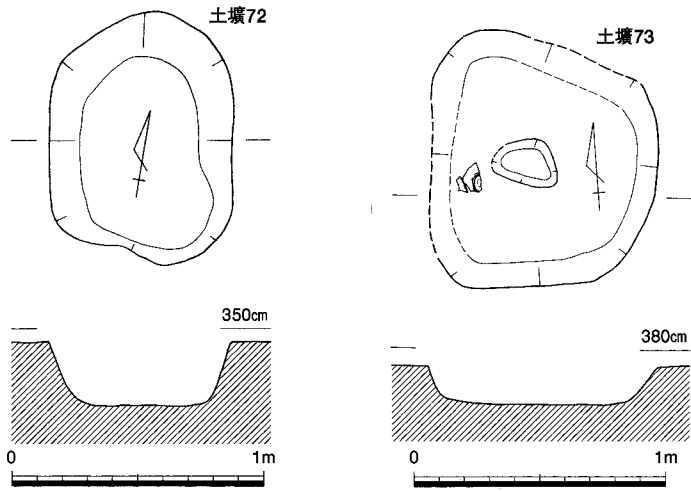
第324図 井戸24出土遺物④ (1/4)

### 3 土壙

#### 土壙72 (第305・325図)

土壙72は11B区に位置する。平面形は長径約100cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは約25cmを測る。

埋土中に弥生土器や土師器、土師質土器の小片が少量混入する。時期は中世と考えられる。(物部)



第325図 土壙72・73 (1/30)

#### 土壙73 (第305・325図)

土壙73は12B区に位置し、土壙72の南東に隣接する。平面形は1辺100cmの不整形を呈する浅い

土壙である。底面中央に浅い窪みが見られた。埋土中に早島式土器碗の破片が十数片混入している。

時期は中世である。

(物部)

#### 土壙74 (第305・326図)

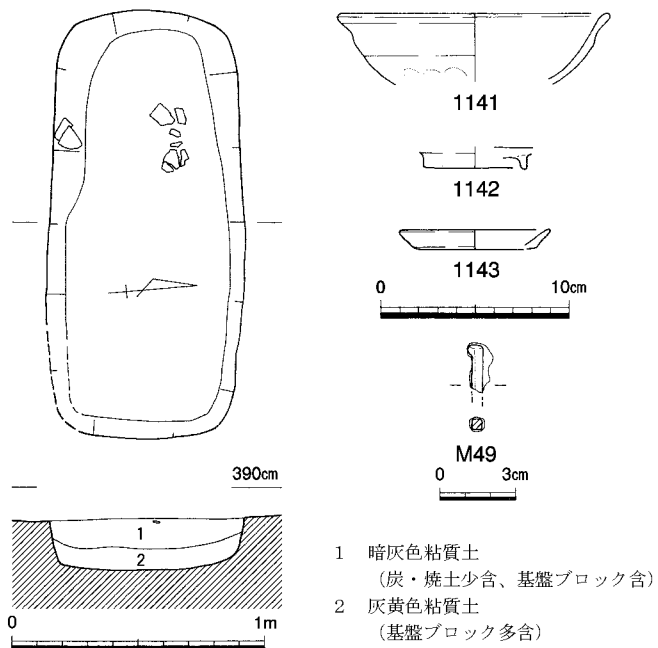
土壙74は12B区、土壙73の南約1mに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は検出面で東西170cm、南北約70cm、深さ約20cmを測る。埋土は基盤土の小塊を含む粘質土で、その中には、弥生土器や須恵器、早島式土器碗、瓦器、土師質土器鍋や小皿などの破片が混入している。1141・1142は早島式土器碗で、口径14.0cm、高台径5.4cm。1143は土師質土器小皿、M49は釘である。土壙墓とも考えられたが、骨片、木棺痕跡等確認されず、性格は不明。時期は鎌倉時代と考えられる。(物部)

#### 土壙75 (第305・327図)

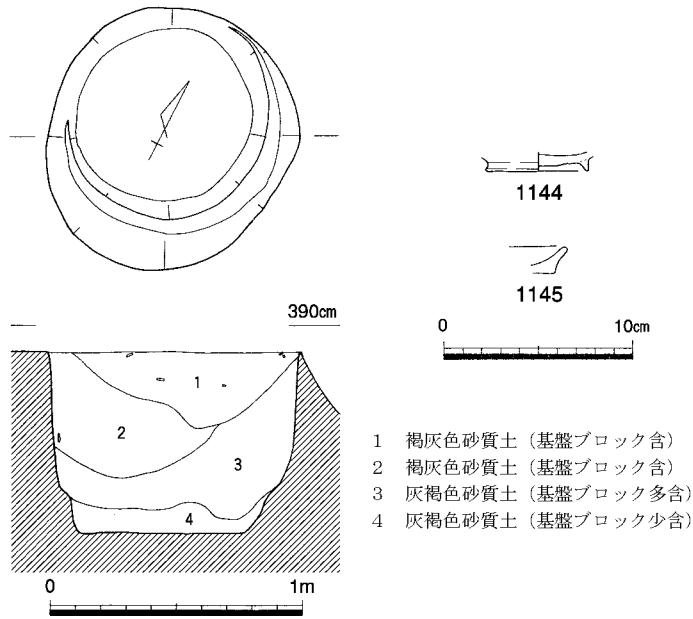
土壙75は12B区、土壙74の南約1mに位置する。平面形は直径約100cmの円形で、検出面からの深さは約70cmを測る。壁は垂直に近い。埋土は4層に分層されるが、いずれにも基盤土の小塊が含まれる。また、弥生土器や須恵器、中世土器などの小片を多く混入している。1144は早島式土器碗、1145は土師質土器小皿で、時期は中世。(物部)

#### 土壙76 (第305・328図)

土壙76は12B区、土壙25の東約1mに位置する。径約120cmの円形を呈する土壙で、検出面からの深さは約70cmを測る。壁は上方に向かって開くが、埋土は基盤土小塊を含む砂質土で、土壙75と類似す



第326図 土壙74 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



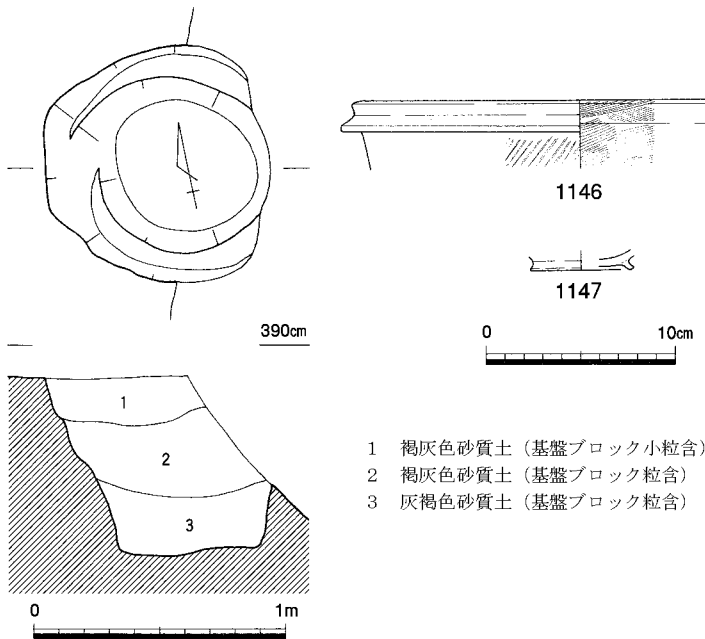
第327図 土壌75 (1/30)・出土遺物 (1/4)

る。遺物も同様に土器小片を多く混入する。1146は土師質土器羽釜、1147は早鳥式土器椀である。時期は中世である。 (物部)

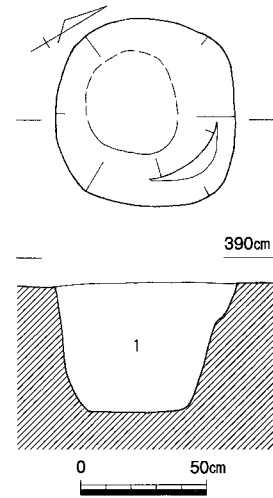
**土壌77 (第305・329図)**

土壌77は11B区に位置する。平面形は直径約75cmの円形を呈し、検出面からの深さは、約50cmを測る。埋土は基盤土小塊を含む粘質土で、弥生土器、須恵器、早鳥式土器椀、瓦器、土師質土器小皿・鍋、備前焼などの細片を200片近く混入する。この土壌の時期は、早鳥式土器椀の小さな高台から14世紀以降である。

(物部)



第328図 土壌76 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 灰色粘質土 (基盤ブロック含)

第329図 土壌77 (1/30)

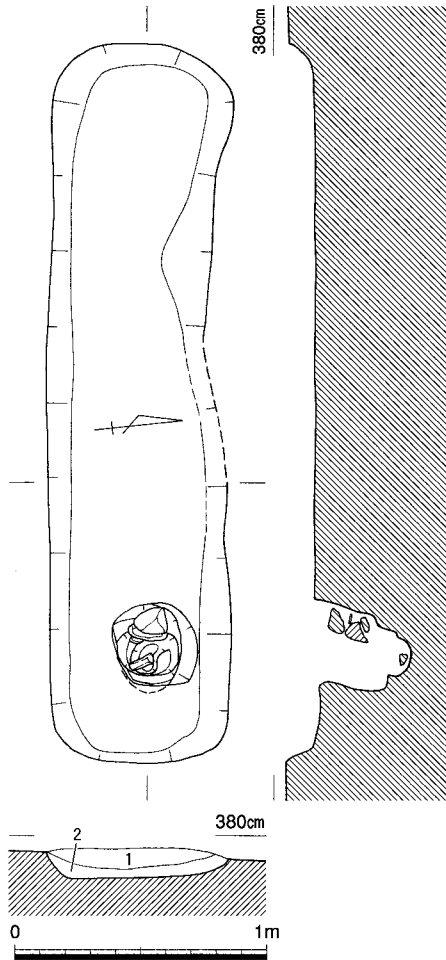
**土壌78 (第305・330図)**

土壌78は11B区の北西部に位置し、平面形は主軸を東西にとる長方形を呈す。東西長3m弱、南北幅約70cm、深さは約10cmを測る。底面はほぼ平らで、東部に径35cm、深さ約40cmの穴を掘削している。この穴は柱穴と考えられる。遺物には1148・1149早鳥式土器椀、1150土師質土器小皿、1151・1152瓦器椀・小皿、1153白磁碗などの混入とみなされる土器小片が多くある。早鳥式土器椀の高台に小さく退化したものが見られないことから、この土壌の時期は鎌倉時代と推定される。 (物部)

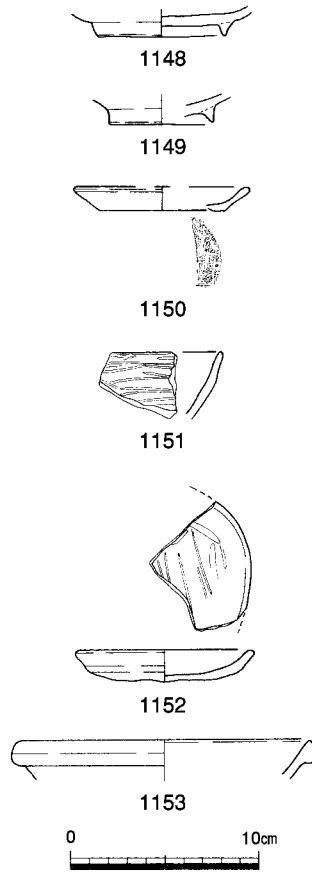
**土壌79 (第305・331図)**

土壌79は土壌78の南約2mに位置する。検出面からの深さは約4cmと浅い。埋土中に土師質土器細

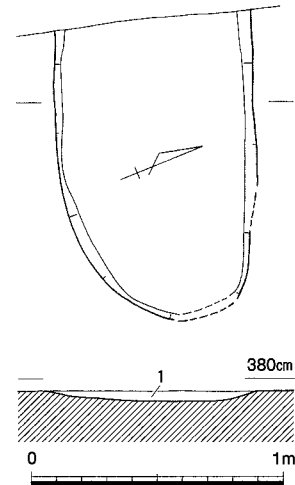




第330図 土壙78 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰色砂質土 (基盤ブロック多含)
- 2 灰色砂質土 (基盤ブロック少含)



第331図 土壙79 (1/30)

- 1 灰色砂質土 (炭・焼土粒含)

片が混入している。時期は中世。

(物部)

**土壙80** (第305・332図)

土壙80は11B区、土壙79の東約4mに位置する。平面形は直径約80cmの円形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。埋土中に弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器、瓦器、備前焼等の小片が混入する。1154は早鳥式土器椀、1155は土師質土器小皿である。時期は中世と推定される。

(物部)

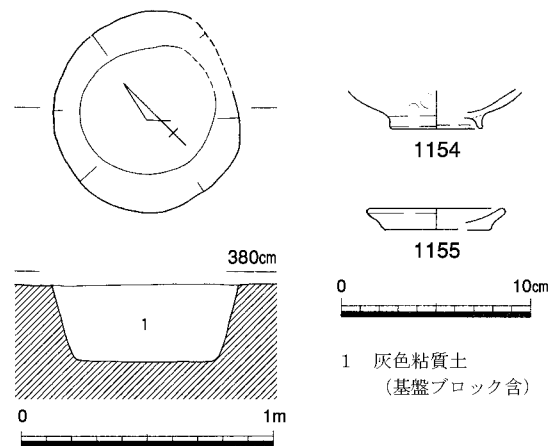
**土壙81** (第305・333図)

土壙81は11B区、土壙80の東に接して所在し、土壙80を切る柱穴を切っている。平面形は不整形方形を呈す。埋土中には高台のしっかりした1156早鳥式土器椀や1157瓦器椀などのほか、弥生土器、須恵器、土師質土器鍋・小皿などの小片を混入している。時期は中世。

(物部)

**土壙82** (第305・334図、図版45-3)

土壙82は11B・C区、土壙78の南約3mに位置する。平面形は長軸を南北にとる長い長方形を呈する。南北長325cm、東西幅90cm前後、深



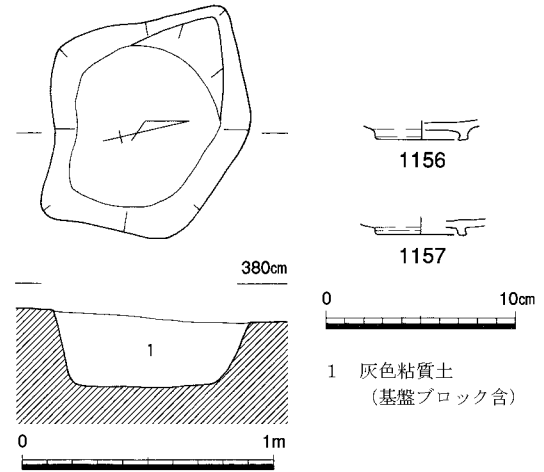
- 1 灰色粘質土 (基盤ブロック含)

第332図 土壙80 (1/30)・出土遺物 (1/4)

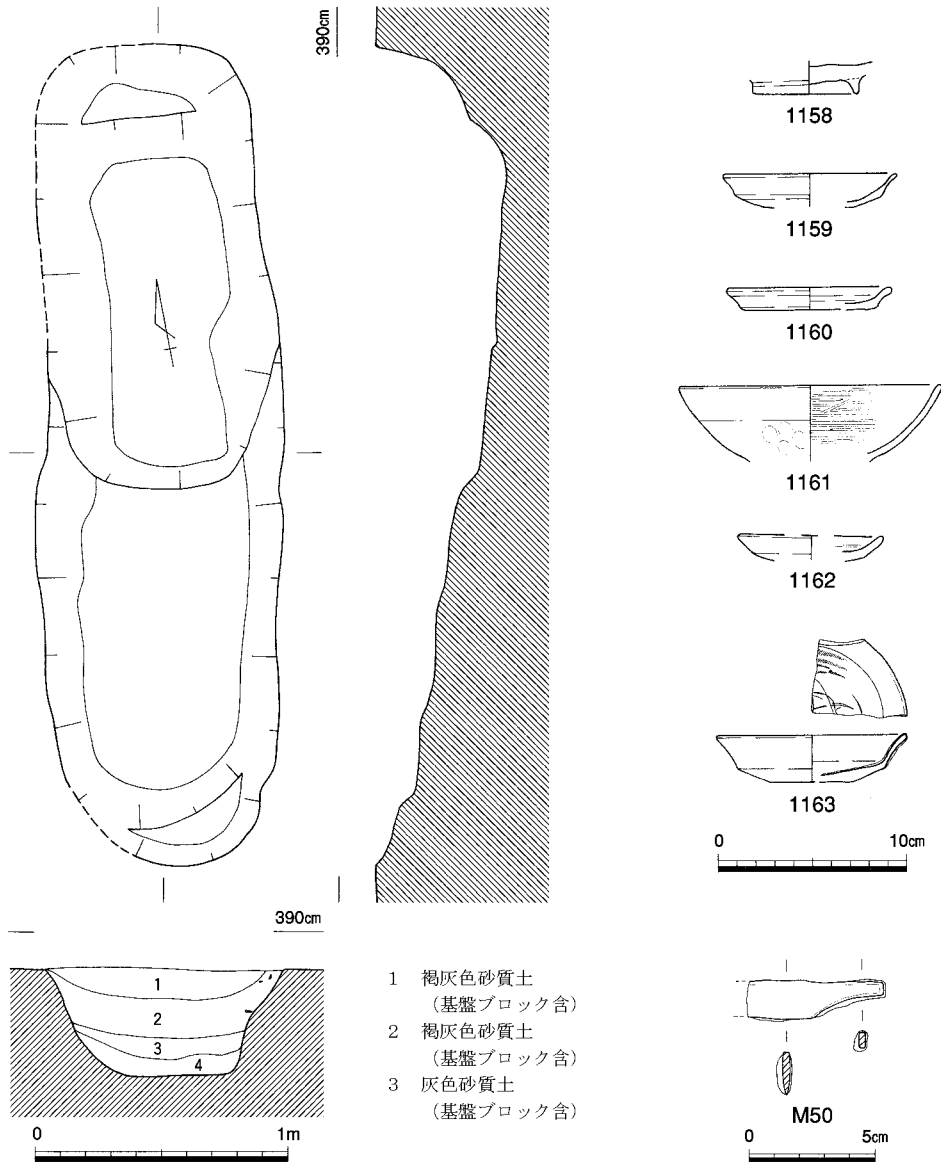
第3章 発掘調査の概要

さは深いところで約50cmを測る。底面は中央付近で段を持つが、全体に北に向けて徐々に傾斜し深くなっている。埋土は4層に分層されるが、基本的に基盤土小塊を含む砂質土である。

埋土中から混入遺物と考えられる弥生後期土器、須恵器、土師器、早鳥式土器碗、瓦器、土師質土器小皿・鍋・カマド・青磁の土器片が500片近く出土した。1158は早鳥式土器碗、1159・1160は土師質土器小皿、1161和泉型の瓦器碗、1162瓦器小皿、1163は青磁皿である。M50は刀子と考えられる。時期は瓦器碗のヘラミガキの状況などから、鎌倉時代と推定できる。(物部)



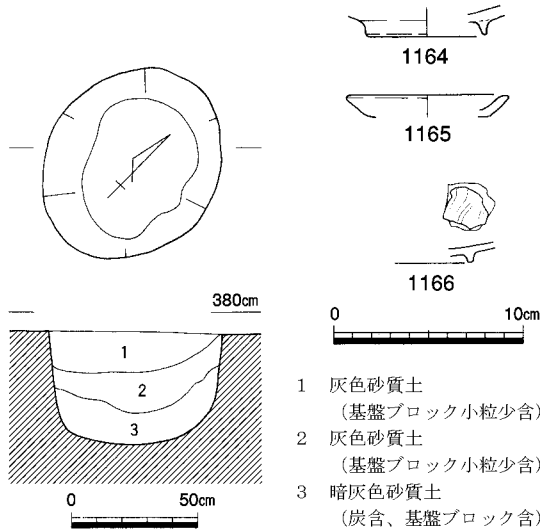
第333図 土壌81 (1/30)・出土遺物 (1/4)



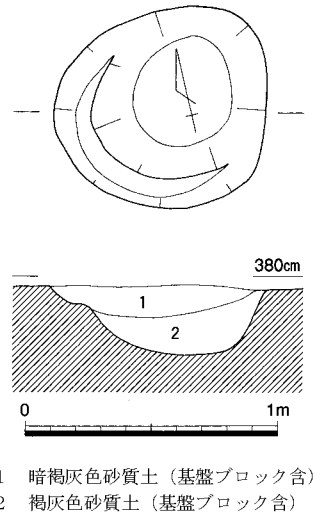
第334図 土壌82 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

**土壙83** (第305・335図)

土壙83は11C区の西角に位置する。平面形は直径70cm前後の円形を呈し、検出面からの深さは約45cmを測る。埋土は基盤土の小塊を含む砂質土で、弥生土器、土師器、須恵器、早鳥式土器椀、瓦器、土師質土器、備前焼等の小片を200片近く混入する。1164は早鳥式土器椀、1165土師質土器小皿、1166は瓦器椀である。時期は中世。(物部)



第335図 土壙83 (1/30)・出土遺物 (1/4)



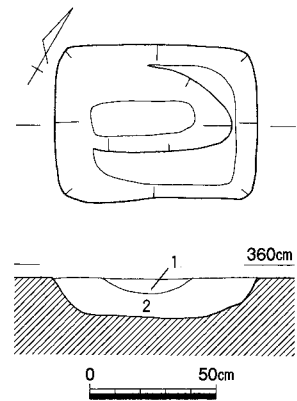
第336図 土壙84 (1/30)

**土壙84** (第305・336図)

土壙84は11C区、土壙83の東約6mに位置する。平面形は直径85cm前後の円形を呈す。検出面からの深さは27cmを測る。埋土中に早鳥式土器椀などの小片が混入しており、時期は中世。(物部)

**土壙85** (第305・337図)

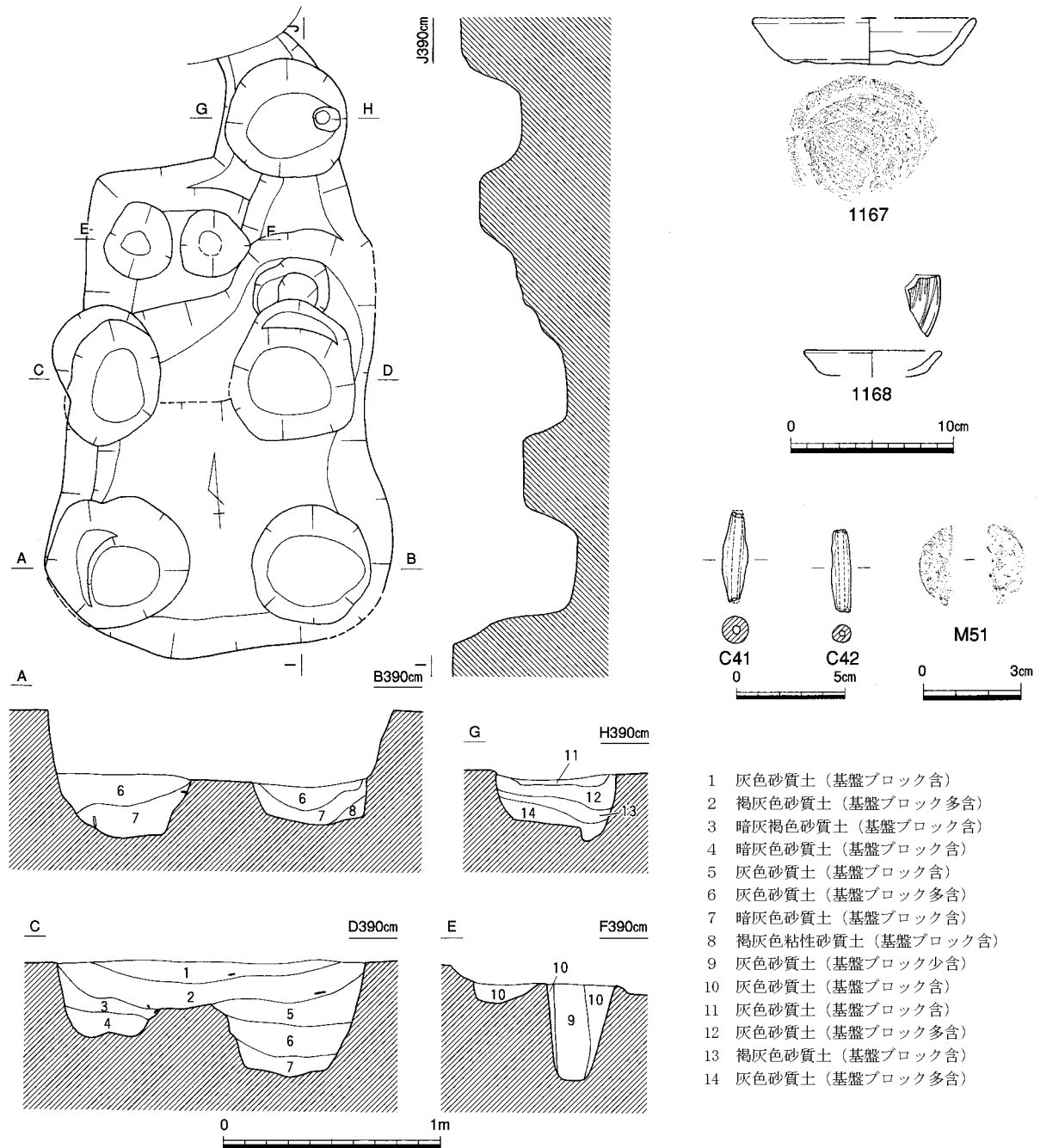
土壙85は11C区、土壙84の東約1mに位置する。平面形は約80cm×70cmの方形を呈する。底面中程が5cmほど窪む。弥生土器、土師質土器鍋などの混入土器片があり、時期は中世。(物部)



1 褐色砂質土 2 灰褐色砂質土  
第337図 土壙85 (1/30)

**土壙86** (第305・338図、図版46-1)

土壙86は11C区に位置し、井戸19の西に隣接する。平面形は長軸を南北にとる長方形を呈する。南北長約220cm、東西幅約140cm、深さ10~30cmを測る。掘り方の北東角から北方向に延びる浅い溝が付属する。また、土壙内に、直径50~60cm、土壙底面からの深さ10~30cmを測る円形小土壙を5基検出した。そのうち4基は土壙南半部に位置し、ちょうど一辺約85cmの正方形の四角にあたる場所に配置され、もう1基も東辺の延長線上にあり規則的な位置関係にある。土壙北部は底面が一段高くなり、北西部に直径30cm前後の柱穴状の掘り込みが東西に2個並ぶ。東側は柱痕が確認され柱穴であるが、西側は浅く柱穴ではない。遺物は、1167土師質土器杯、1168瓦器小皿、C41・42土錘、M51銅銭のほか早鳥式土器椀などを含む土師質土器の小片などが多数混入する。時期は中世。この土壙は広島県福山市草戸千軒町遺跡で貯蔵施設と考えられている「埋甕遺構」の複数埋設例に類似する。(物部)



第338図 土壙86 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

**土壙87** (第305・339図)

土壙87は11C区、土壙85の南約2mに位置する。平面形は、約110×70cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは約40cmを測る。埋土中に炭粒や焼土粒が混入する。また、弥生土器から須恵器、土師器、早鳥式土器碗、土師質の皿や鍋の小片など50片、および鉄滓が1点混入している。時期は限定できず、中世である。 (物部)

**土壙88** (第305・339図)

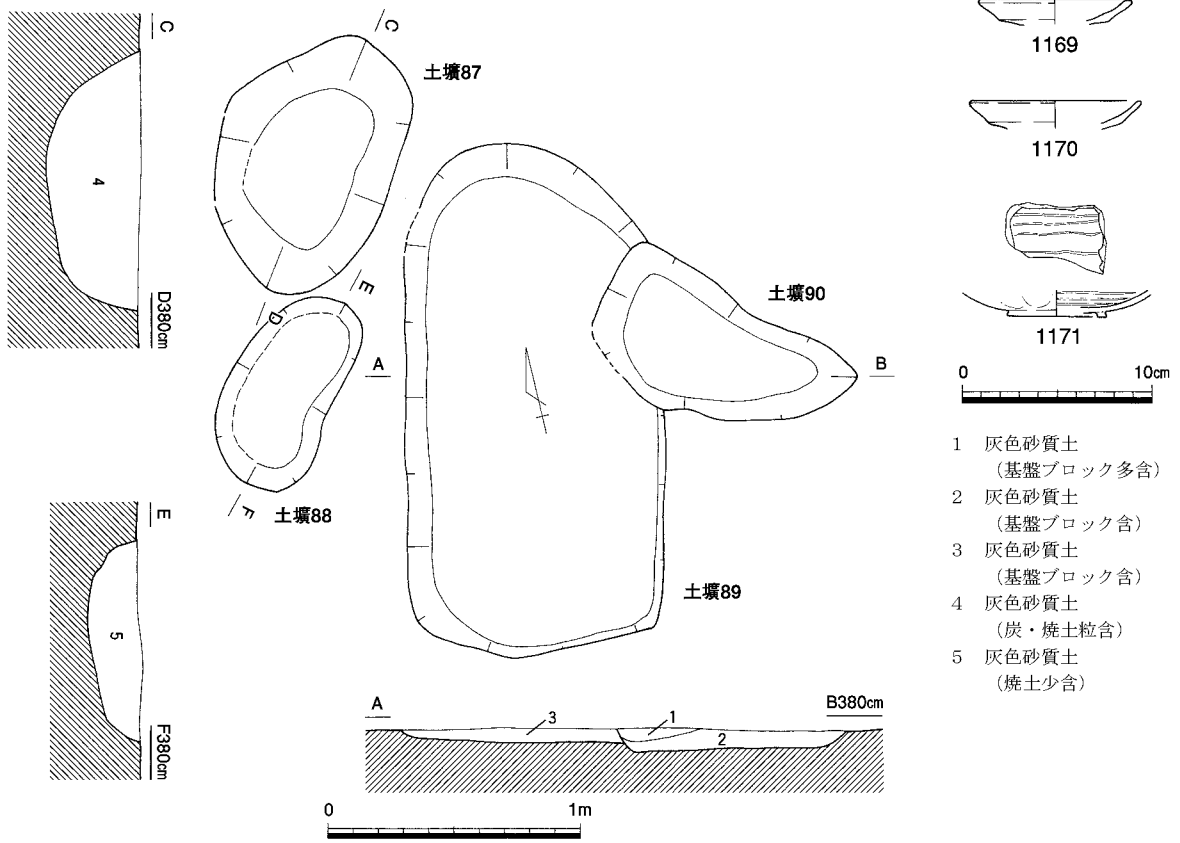
土壙88は土壙87の南に接して所在する。平面形は、約80×40cmの不整楕円形を呈し、埋土中には焼土粒が見られる。土壙87と類似した状況がある。時期は中世。 (物部)

**土壙89** (第305・339図)

土壙89は土壙87・88のすぐ東隣にある。平面形は長軸をおおよそ南北にとる長方形を呈す。南北長約200cm、東西幅約100cm、検出面からの深さは6cm前後と浅い。埋土は基盤土小粒を含む砂質土で土器小片を少量混入している。主に埋土の特徴から時期は中世と考えられる。(物部)

**土壙90** (第305・339図)

土壙90は土壙89の東部を切っている。平面形は不整形で、約100×50×9cmを測る。埋土は基盤土小粒および土器小片を少量含む。1169・1170の土師質土器小皿と1171瓦器碗は土壙89・90いずれに属するか不明である。時期は中世。(物部)



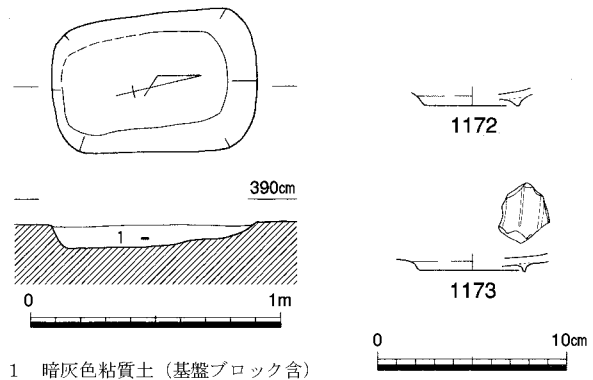
第339図 土壙87~90 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壙91** (第305・340図)

土壙91は11B区の北角に位置する。平面形は長軸を南北にとる長方形を呈す。南北約80cm、東西約55cm。埋土中に弥生土器、須恵器、早島式土器碗、土師質土器鍋などの小片が80片ほど混入する。時期は1172の橙色を呈する早島式土器碗に小さな高台が見られることから14世紀以降。(物部)

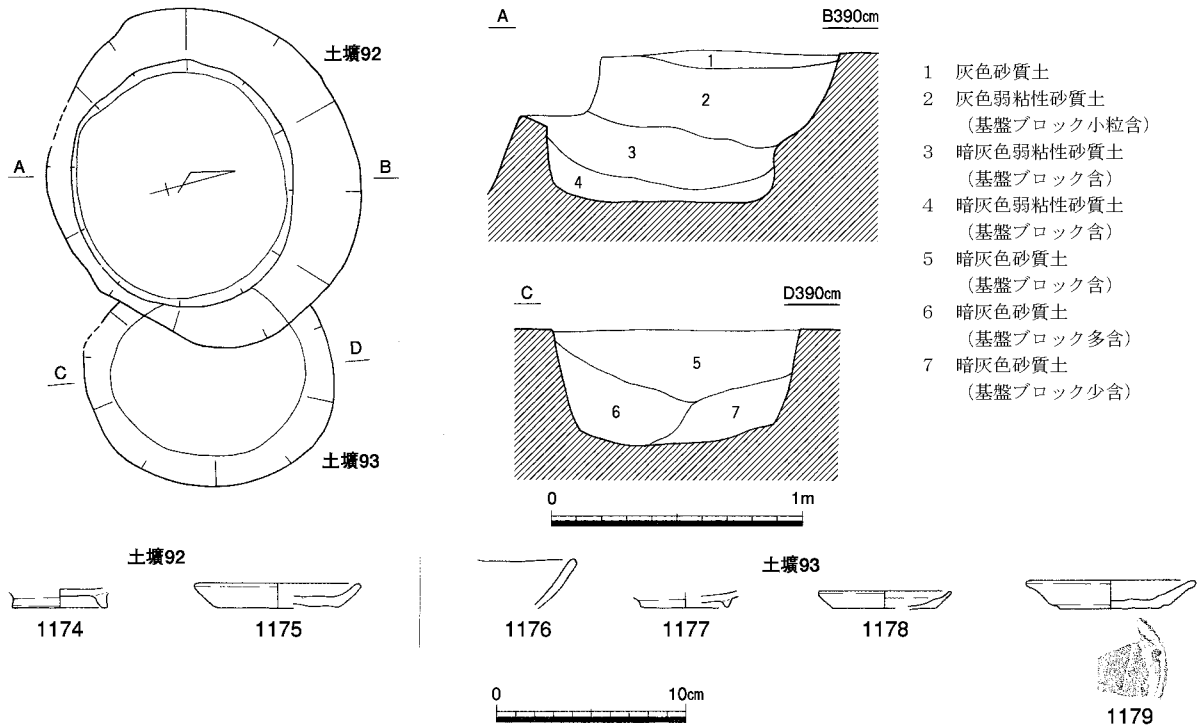
**土壙92** (第305・341図)

土壙92は11・12B区に位置し、土壙95によって、南の肩を削平されている。平面形



1 暗灰色粘質土 (基盤ブロック含)

第340図 土壙91 (1/30)・出土遺物 (1/4)



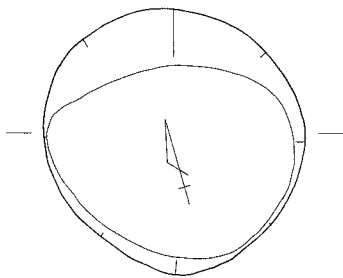
- 1 灰色砂質土
- 2 灰色弱粘性砂質土  
(基盤ブロック小粒含)
- 3 暗灰色弱粘性砂質土  
(基盤ブロック含)
- 4 暗灰色弱粘性砂質土  
(基盤ブロック含)
- 5 暗灰色砂質土  
(基盤ブロック含)
- 6 暗灰色砂質土  
(基盤ブロック多含)
- 7 暗灰色砂質土  
(基盤ブロック少含)

第341図 土壌92・93 (1/30)・出土遺物 (1/4)

は、直径130cm前後の円形を呈し、検出面からの深さは60cmを測る。底面は直径約85cmの円形で、ほぼ平らである。壁は底面から20cmほどは垂直に立ち上がる。埋土中には1174・1175の土師質土器碗と皿以外にもカマドや鍋、瓦器、青磁などの小片を130片ほど混入している。時期は中世。(物部)

**土壌93** (第305・341図)

土壌93は土壌92によって西部を切られている。平面形は約100cm前後の円形を呈すると推定され、検出面からの深さは45cmを測る。埋土中には土器小片が多く混入している。1176・1177の早鳥式土器碗のように高台の小さなものが多い。時期は中世。(物部)

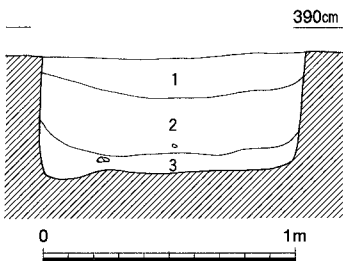


**土壌94** (第305・342図)

土壌94は12B区、土壌93の南約2mに位置する。直径約105cmの円形を呈し、深さは約50cmを測る。壁は垂直気味である。時期は混入する早鳥式土器碗の特徴から14世紀以降。(物部)

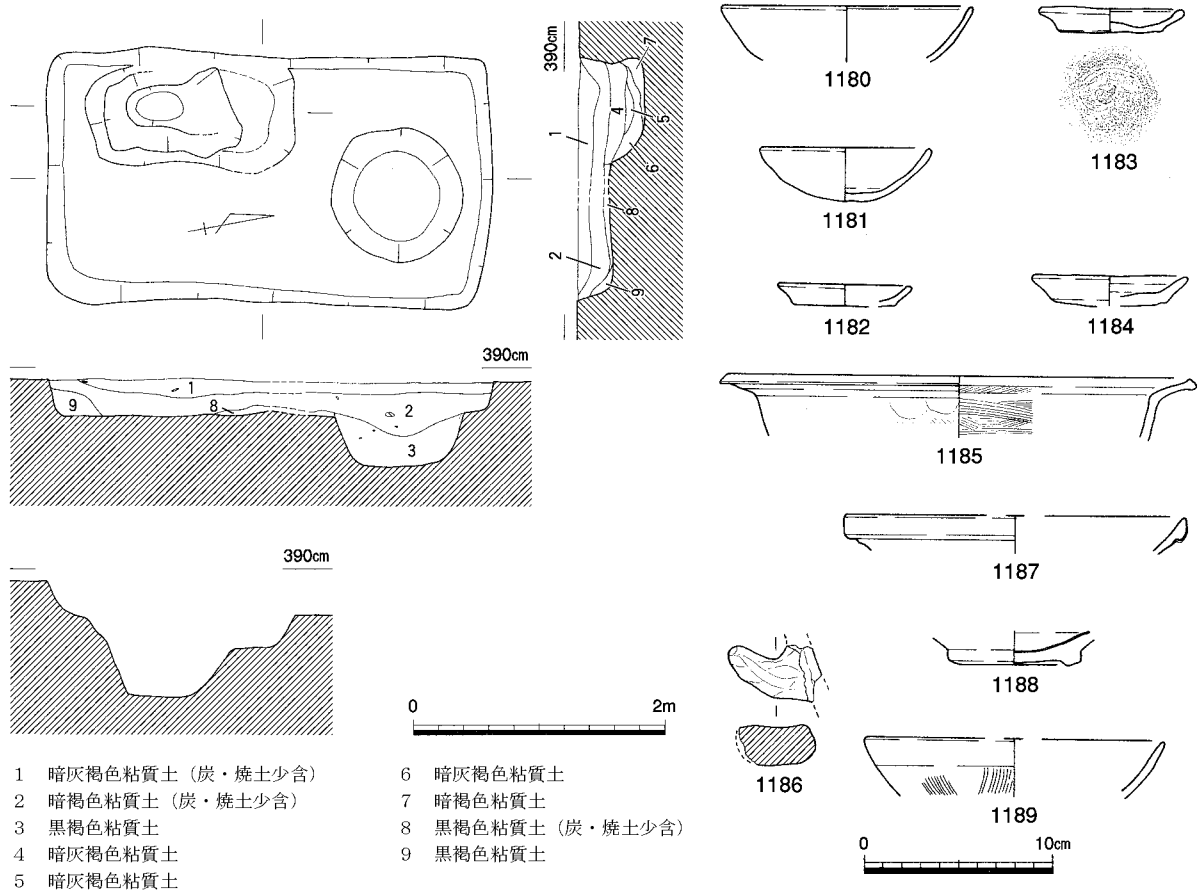
**土壌95** (第305・343図、図版46-2)

土壌95は12B区の西角に位置する。平面形は長方形を呈し、長軸をほぼ南北にとる。土壌内には南西部に長方形、北半中央やや東寄りに円形の掘り込みがある。これらは土壌底面直上にある炭・焼土粒を少し含む黒褐色粘質土(第8層)上面から掘り込まれているように観察された。遺物は1180・1181早鳥式土器碗や1182~1184土師質土器小皿、1185・1186鍋、1187・1189白磁碗、1189青磁碗のほか2000片を越える土器細・小片が混入する。時期は早鳥式土器碗の特徴から14世紀以降。(物部)



- 1 灰色砂質土 (基盤ブロック含)
- 2 褐灰色砂質土 (基盤ブロック小粒含)
- 3 褐色弱粘性砂質土 (基盤ブロック含)

第342図 土壌94 (1/30)



- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 1 暗灰褐色粘質土 (炭・焼土少含) | 6 暗灰褐色粘質土         |
| 2 暗褐色粘質土 (炭・焼土少含)  | 7 暗褐色粘質土          |
| 3 黒褐色粘質土           | 8 黒褐色粘質土 (炭・焼土少含) |
| 4 暗灰褐色粘質土          | 9 黒褐色粘質土          |
| 5 暗灰褐色粘質土          |                   |

第343図 土壇95 (1/60)・出土遺物 (1/4)

土壇96 (第305・344図)

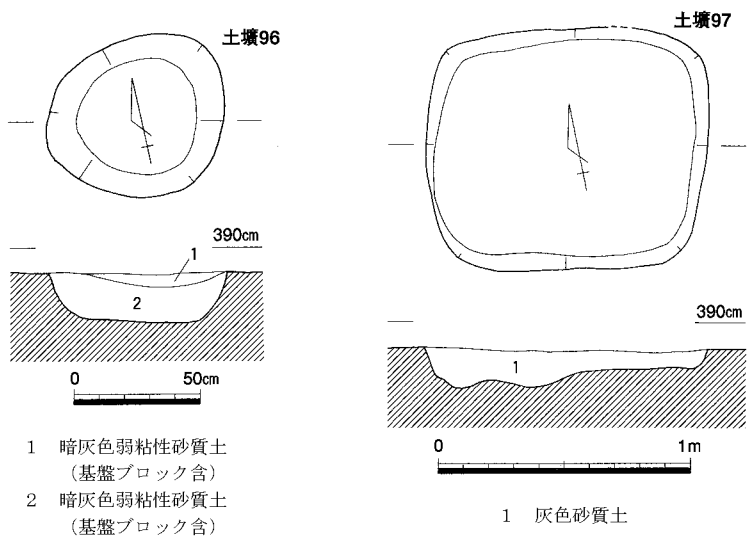
土壇96は12C区の西部に位置する。平面形は直径約70cmの円形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。埋土は基盤土小塊を含む砂質土で、弥生土器、須恵器、土師器、早鳥式土器碗、瓦器、土師質土器小皿など土器小片が30片ほど混入している。時期は中世。(物部)

土壇97 (第305・344図)

土壇97は12C区、土壇96の東約1mに位置する。平面形は主軸を東西方向にとる方形を呈し、1辺約100cm前後、深さは約15cmを測る。内部には灰色砂質土が堆積しており、混入遺物は、須恵器小片1片、土師質土器小片が9片あり、比較的少ない。時期は中世。(物部)

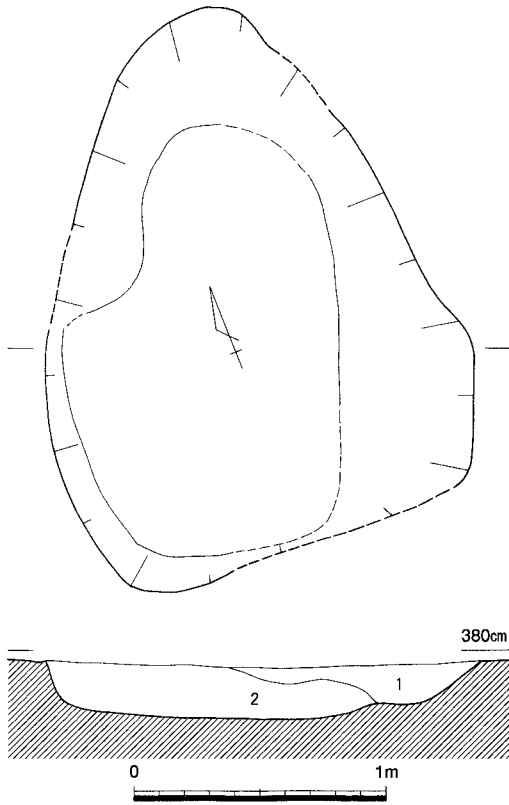
土壇98 (第305・345・346図)

土壇98は12C区、土壇96の西に接してあり、平面形は、不整形で、規模はおよそ230×170cm、



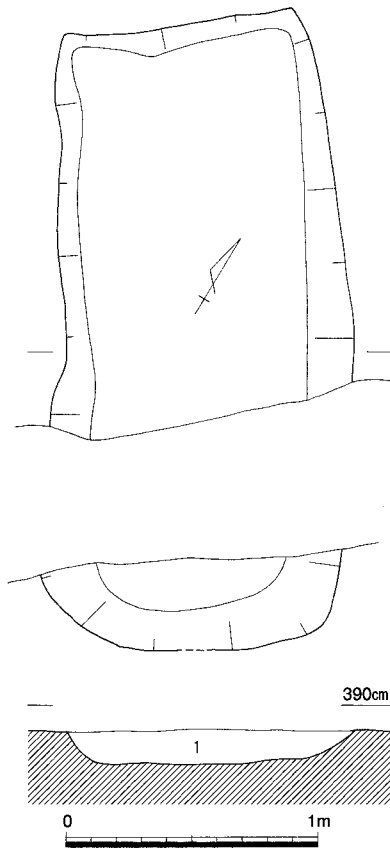
- |                       |         |
|-----------------------|---------|
| 1 暗灰色弱粘性砂質土 (基盤ブロック含) | 1 灰色砂質土 |
| 2 暗灰色弱粘性砂質土 (基盤ブロック含) |         |

第344図 土壇96・97 (1/30)

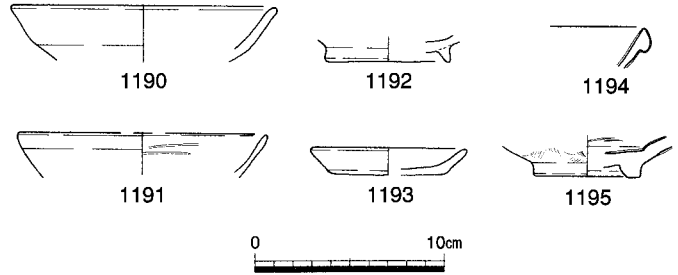


1 黄灰色砂質土 2 灰色砂質土 (基盤ブロック多含)

第345図 土壙98 (1/30)



第347図 土壙99 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第346図 土壙98出土遺物 (1/4)

深さは約20cmを測る。埋土中の混入遺物として弥生土器、須恵器、早鳥式土器椀、瓦器、土師質土器鍋・カマド、青白磁などの小片約230片がある。1190・1192は早鳥式土器椀、1191瓦器椀、1193はにぶい橙色を呈する土師質の小皿、1194白磁碗、1195は青磁碗である。時期は中世。(物部)

土壙99 (第305・347図)

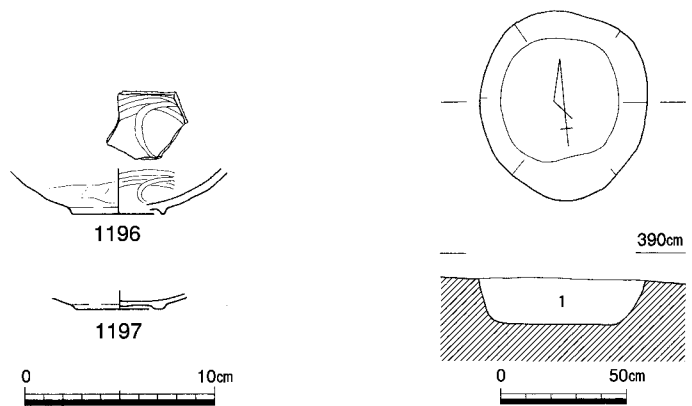
土壙99は12C区、土壙98の南東約1mに位置する。土壙101を切っている。平面形は長軸250cm、短軸120cmほどの長方形を呈し、検出面からの深さは、約14cmを測る。主軸は方位と一致せず、大方の土壙とは区別される。底面はほぼ平らである。埋土中には1196・1197瓦器椀のほか、弥生土器、須恵器、早鳥式土器椀、土師質土器小皿・鍋などの小片が混入する。時期は中世。(物部)

土壙100 (第305・348図)

土壙100は12C区、土壙99の南西に位置する。平面形は直径70cm前後の円形を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は弱粘性の砂質土であった。

時期は中世。

(物部)

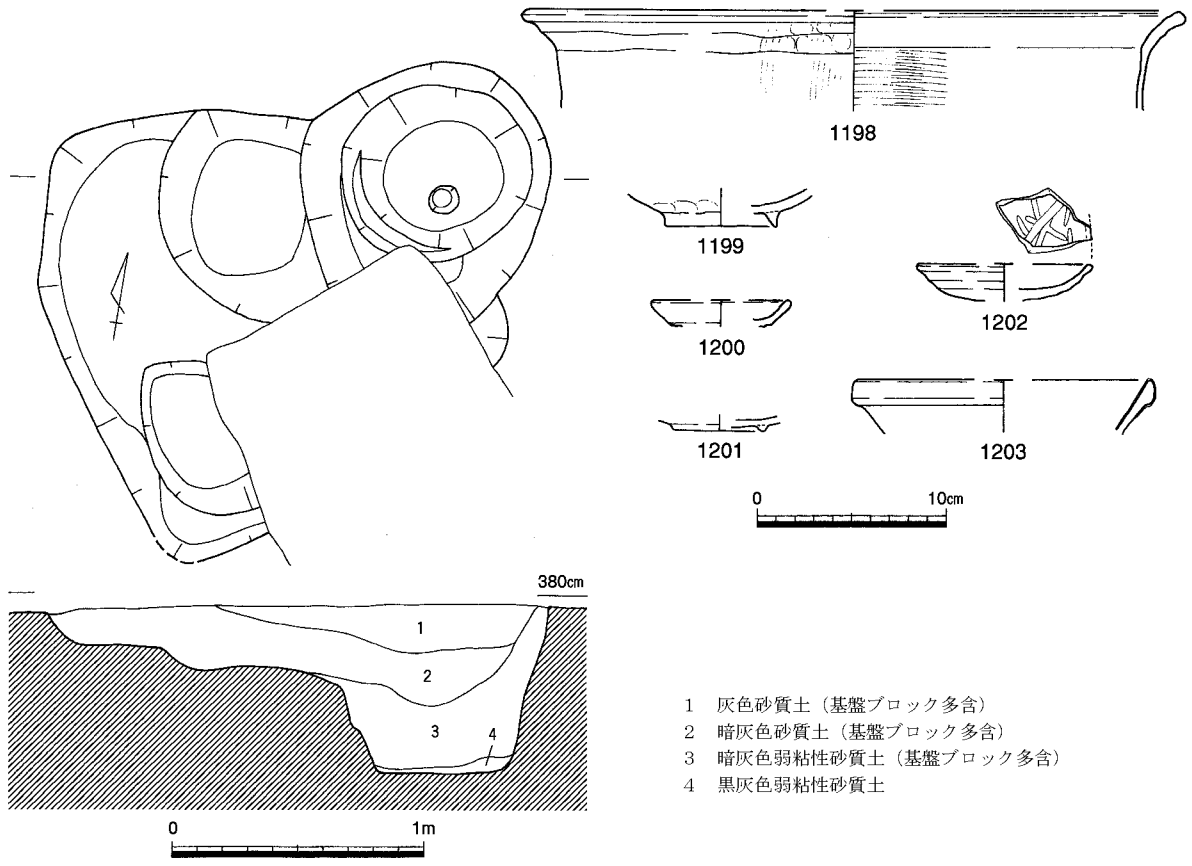


1 灰色砂質土 (基盤ブロック含)

1 暗灰色弱粘性砂質土

第348図 土壙100(1/30)





第349図 土壙101 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙101 (第305・349図)

土壙101は12B区に位置し、土壙99に南東側上部を削平されている。検出面での平面形は不整形で、形状は、径170cm前後の浅い土壙底面に、南北に並ぶように方形気味の浅い掘り込みがあり、北東部には直径約100cm、深さ約65cmの円形の掘削がある。調査時において、この円形部分とそのほかとは、埋土の粘性に若干違いが見られたが、明瞭なものではなかったので、一連のものと考えた。しかし、円形の輪郭が北東方向に突出するようになっていることから、円形の土壙が浅い土壙に切られている可能性も否定しきれない。埋土中から1198土師質土器鍋、1199早鳥式土器椀、1200土師質土器小皿、1201・1202瓦器椀と皿、1203白磁碗等が出土した。時期は中世。(物部)

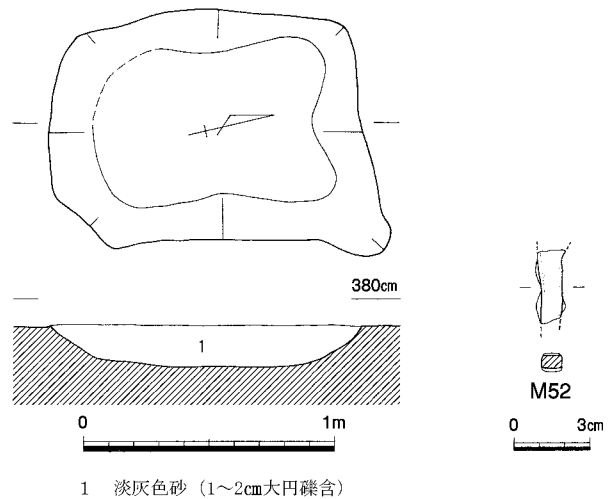
土壙102 (第305・350図)

土壙102は12C区に位置し、土壙98の南辺を切り込んでいる。平面形は長軸を南北方向にとる長方形を呈し、120×90cm、深さは17cmを測る。埋土は他の中世遺構とは異なり、円礫を含む砂である。M52は釘の破片。

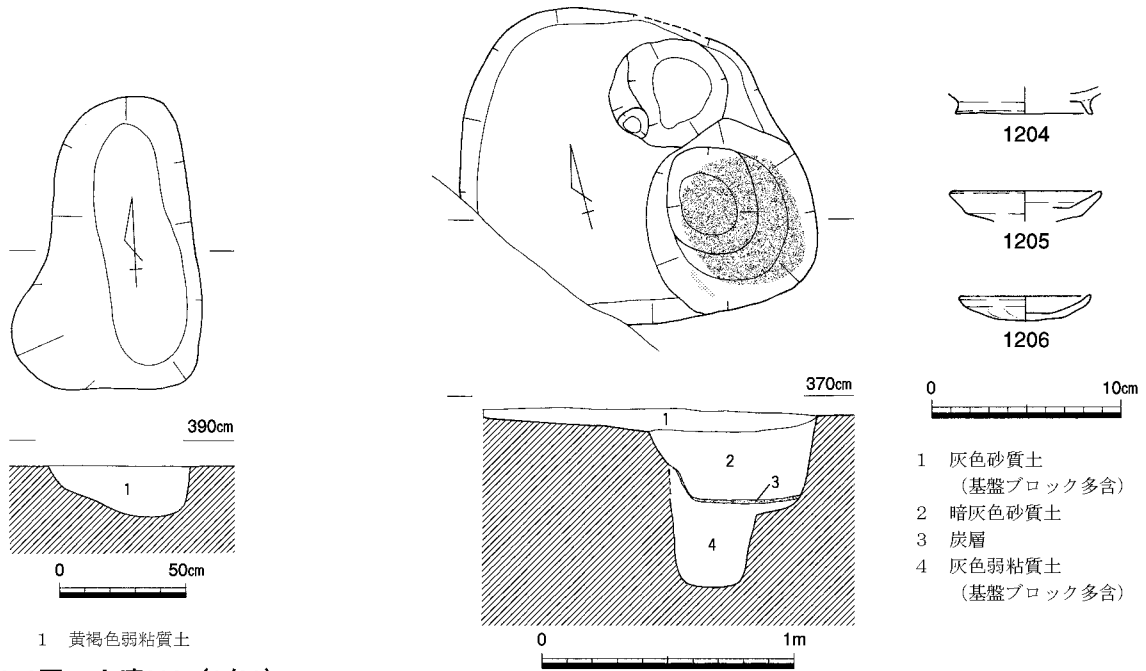
時期は中世。(物部)

土壙103 (第305・351図)

土壙103は12C区に位置し、土壙104を切っ



第350図 土壙102 (1/30)・出土遺物 (1/3)



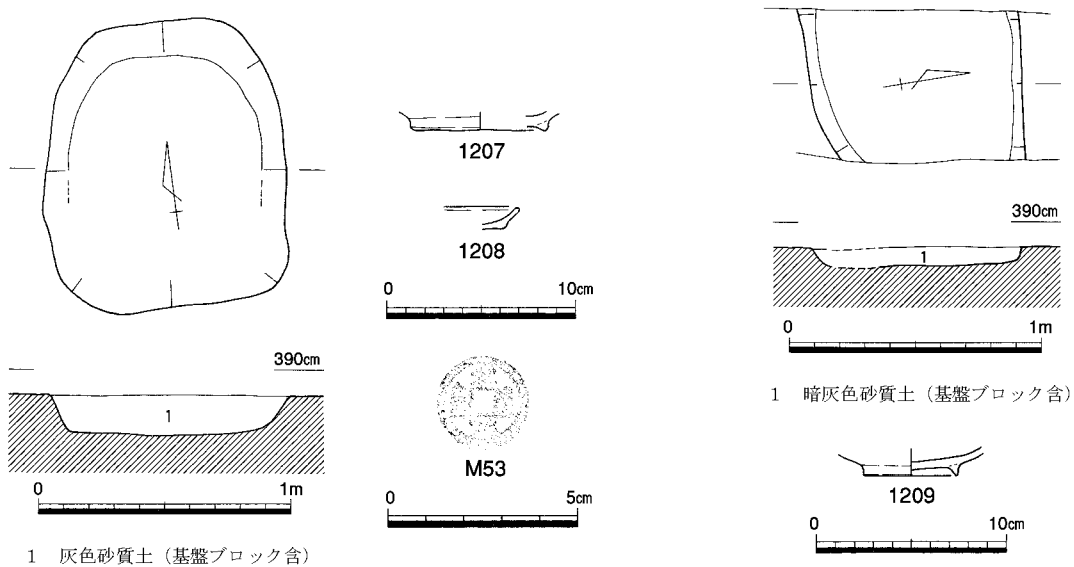
第351図 土壇103 (1/30)

第352図 土壇104 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ている。平面形は長軸を南北方向にとる不整楕円形を呈し、南北116cm、東西60cm前後、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は黄褐色粘質土で特異である。弥生土器、須恵器、備前焼の小片が少量混入しており、時期は中世と考えられる。(物部)

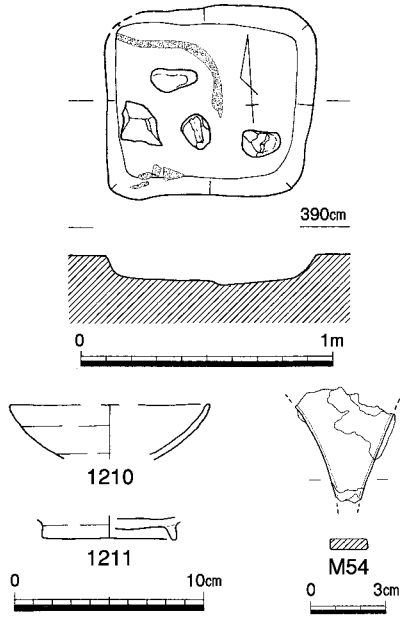
土壇104 (第305・352図)

土壇104は土壇103に上部を削平されている。当初、約140×130cmの方形掘り形を呈したが、少し下げると、東半部に径約45cmと約70cmの2つの円形掘り形を検出した。前者は深さ約30cm。後者は2段に掘り込まれ、深さ約60cmあるが、底面から30cmほどのところに、しっかりした炭層がみられる。性格は不明。埋土中に早島式土器碗や土師質土器小皿などの小片が混入する。時期は中世。(物部)



第353図 土壇105 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

第354図 土壇106 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第355図 土壇107 (1/30)  
・出土遺物 (1/4・1/3)

**土壇105 (第305・353図)**

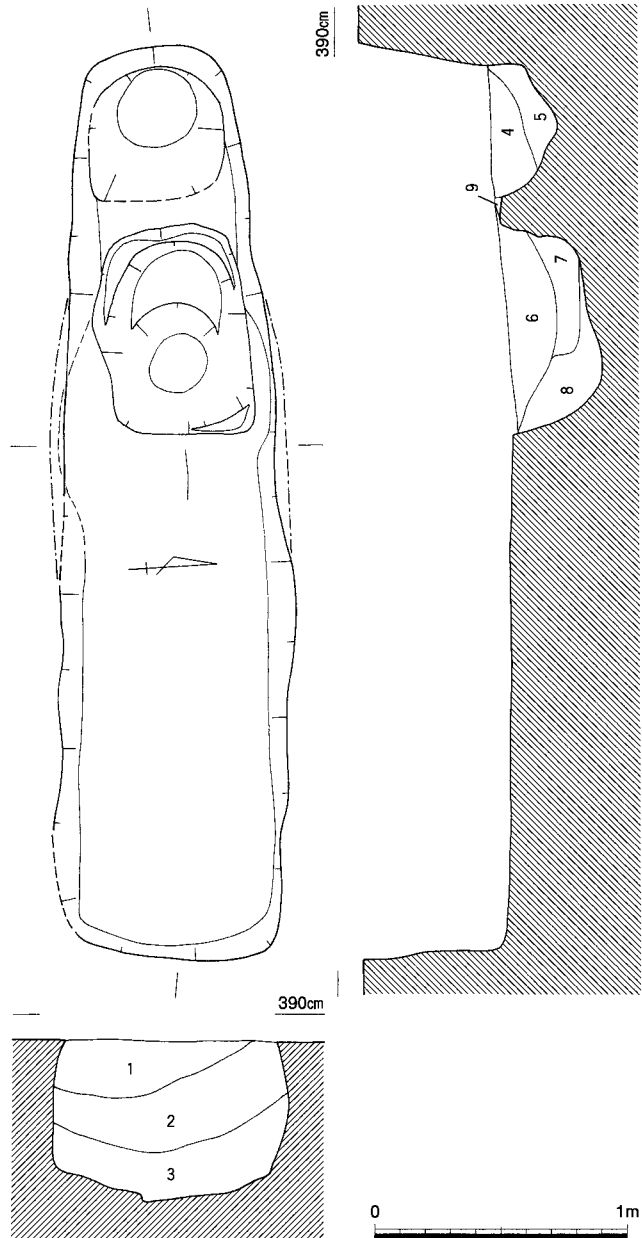
12C区に位置し、土壇104から南東に約10m離れる。平面形は南北約120cm、東西約100cmの隅丸長方形を呈す。埋土中には1207早鳥式土器碗、1208土師質土器小皿、M53「宋通元寶」のほか土器小片多数混入。時期は中世。(物部)

**土壇106 (第305・354図)**

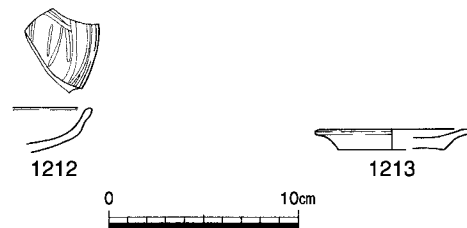
12C区、土壇105の北東約2mに位置する。両端を現代用水路により削平を受けているが、東西に長軸をとる長方形もしくは楕円形の土壇と推定される。埋土中に1209早鳥式土器碗など土器小片が混入する。時期は中世。(物部)

**土壇107図 (第305・355図、図版46-3)**

12C区、土壇105の北約7mに位置する。一辺80cm前後の方形を呈す。底面は若干の段差をもつ。内部に15cm大の石が4個配置されているが性格は不明。遺物は1210早鳥式土器碗やM54雁股形式?の鉄鎌等が出土している。時期は早鳥式土器碗の特徴から14世紀以降。(物部)



- 1 褐灰色砂質土 (基盤ブロック少含)
- 2 褐灰色砂質土 (基盤ブロック含)
- 3 暗灰褐色砂質土 (基盤ブロック含)
- 4 褐灰色砂質土 (基盤ブロック多含)
- 5 暗灰色砂質土 (基盤ブロック含)
- 6 褐灰色砂質土 (基盤ブロック多含)
- 7 黒灰色砂質土 (基盤ブロック含)
- 8 黒灰色土 (基盤ブロック多含)
- 9 褐灰色弱粘性砂質土 (基盤ブロック多含)



第356図 土壇108 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壙108** (第305・356図)

12区のCラインにかかる位置に所在する大形の土壙である。軸線を東西にとり、長さ362cm、幅95cm、深さ60cmを測る。断面は中央でやや袋状をなす。西端には2基の土壙状の掘り込みが設けられており、それを含めた深さは95cmを測る。埋土はいずれも基盤層のブロックを多量に含んでおり、遺構の機能を終えた後に埋め戻されたとみられる。

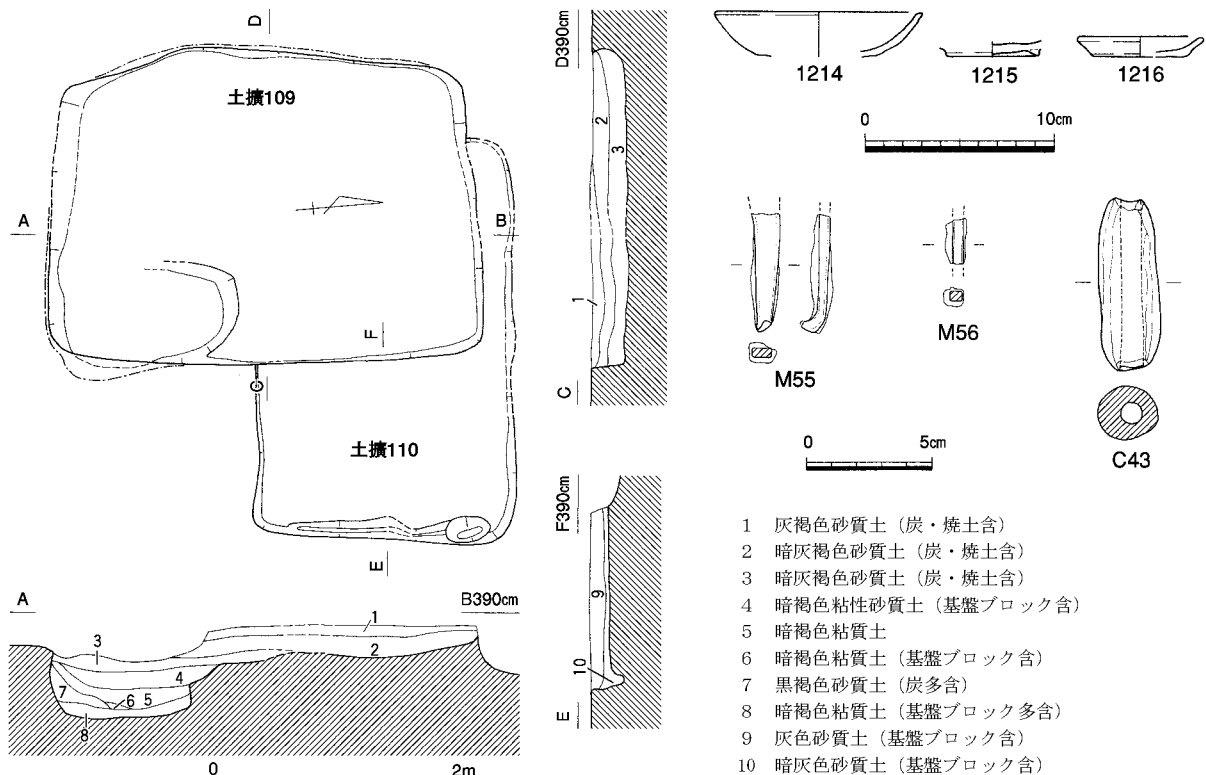
遺物は少なく、瓦器、土師質皿の小片があるにすぎないため、中世という以上に時期を限定することは困難である。 (字垣)

**土壙109** (第305・357図、図版47-1)

12B区に所在する長方形の土壙で、南小口部は井戸20および土壙110ほかの土壙によって掘削されている。軸線を南北にとり南北長さ341cm、東西幅249cm、深さ14cmを測る。南東隅には長さ77cmの土壙が設けられている。若干袋状をなし上側の方形部分よりも若干外側にふくらむが、位置がほぼ合致することから一連の遺構と考えた。土壙部分は埋め戻されている可能性がある。出土遺物は少ないが14世紀代の遺構と推定する。 (字垣)

**土壙110** (第305・357図、図版47-1)

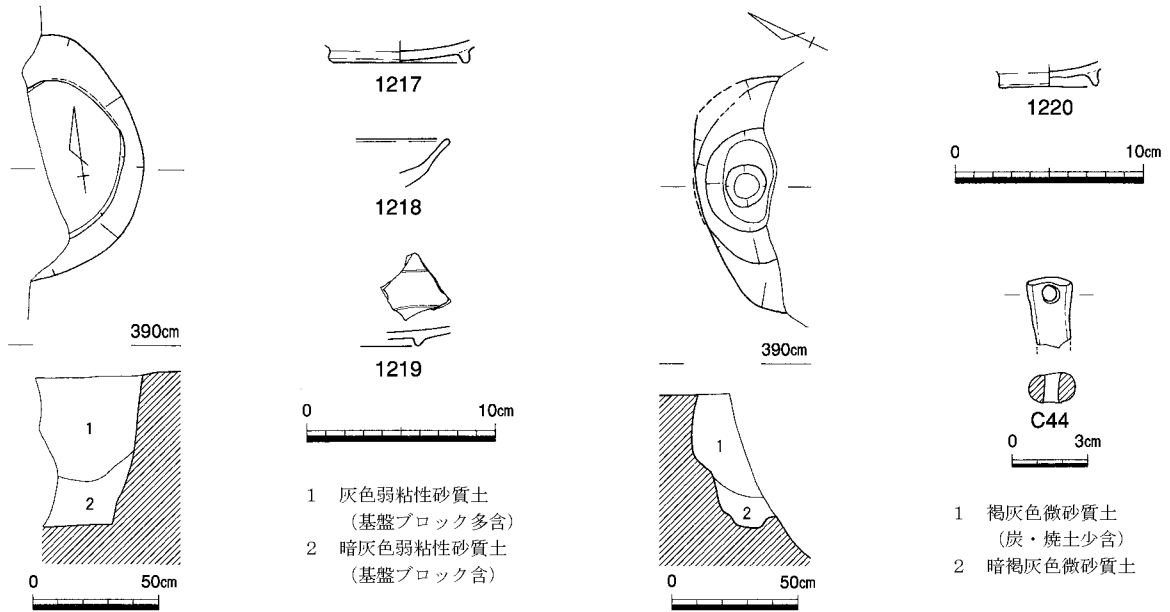
土壙109と直交し、それによって切られる土壙である。東西長さ323cm、幅202cm、深さ18cmを測る。埋土には基盤層のブロックを含んでおり、埋め戻された可能性が考えられる。時期を判断できる遺物が出土していないが、土壙109に近い時期と推定される。 (字垣)



第357図 土壙109・110 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

**土壙111** (第305・358図)

土壙109の東側に所在する土壙で、それによって掘削されているため遺存状態はよくない。他と同



第358図 土壌111 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第359図 土壌112 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

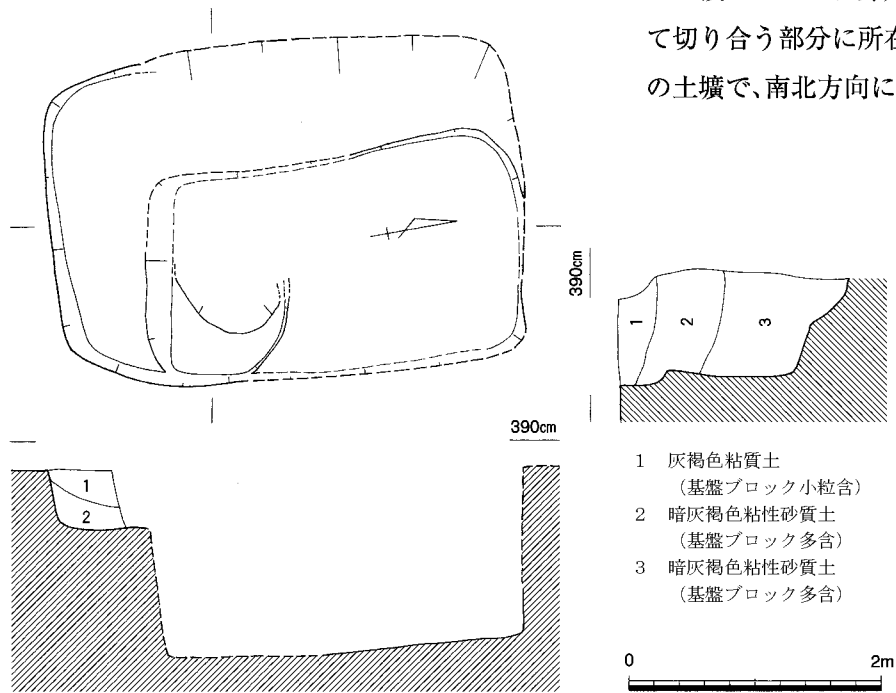
様に埋め戻されている可能性がある。出土の遺物は13世紀代とみられるが、小片であり遺構年代の上限を示すとしたほうがよい。(字垣)

土壌112 (第305・359図)

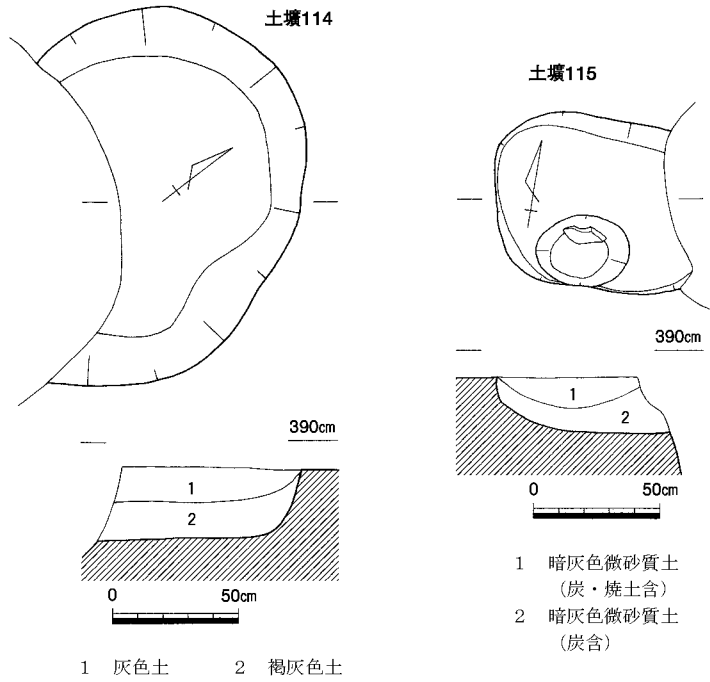
井戸20の北西側に所在し、井戸20および土壌109によって掘削される土壌で、北側の一部を残すにすぎない。端部に土壌状に一段深くなる部分が見られ、これは土壌107、116などと共通する形状である。13世紀以降に位置付けられる。(字垣)

土壌113 (第305・360図)

土壌109～114、井戸20が密集して切り合う部分に所在する長方形の土壌で、南北方向に軸線をとる。



第360図 土壌113 (1/60)



第361図 土壌114・115 (1/30)

井戸20によって中央を掘削されているため他の土壌との切り合いは明確でないが、この一群の中ではかなり早い段階で設けられたものようである。(宇垣)

**土壌114** (第305・361図)

井戸20、土壌109に掘削される土壌で、土壌109の底面下で検出した。井戸20の北側に土壌の北半が遺存し、長さ150cm、深さ29cmを測る。(宇垣)

**土壌115** (第305・361図)

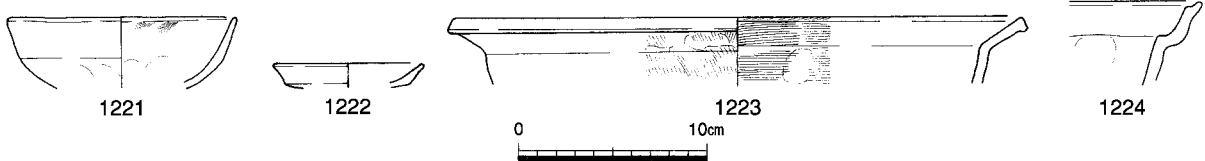
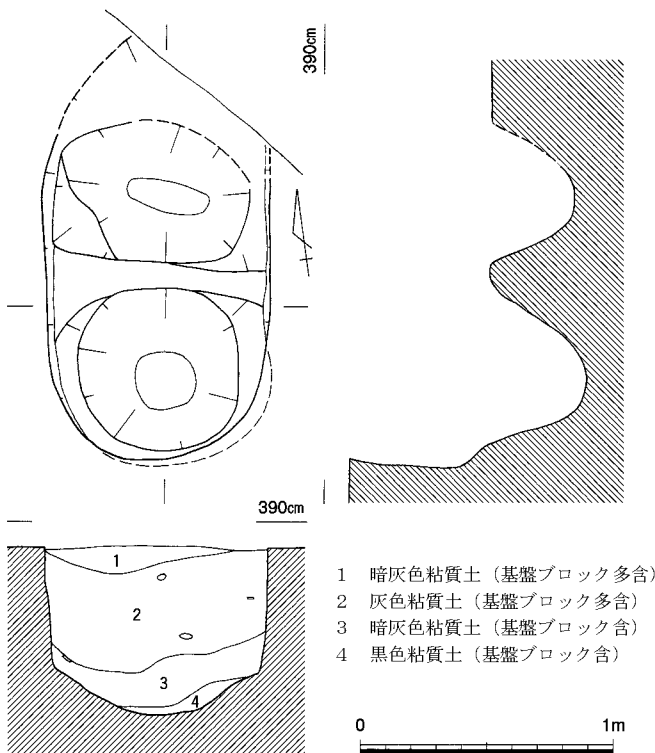
井戸20、土壌112に東端を掘削された小形の土壌で、南北の幅71cm、深さ22cmを測る。西端部には径37cmの小規模な土壌が設けられている。埋土中には炭片、焼土が入っており、埋め戻されたとみられる他の大形の土壌の埋土とは異なっている。(宇垣)

**土壌116** (第305・362図、図版47-2)

12B区の東端で検出した土壌で、南北方向に軸線をもつ。土壌の北部は側溝にかかり、端部は調査区外に出るが、それほど大きくはならないとみられる。

上面幅88cm、推定長さ172cmを測る。検出面から55cmの深さで底面をもち、中央を掘り残して南北両側に円形の土壌状の掘り込みが設けられている。

埋土には基盤ブロックが多量に含まれており、最終的に埋め戻されているとみられる。量は多くないが遺物が含まれて



第362図 土壌116 (1/30)・出土遺物 (1/4)

おり、それらからこの遺構の時期は14世紀代と推定される。

(宇垣)

**土壙117 (第305・363図)**

土壙116の東側で検出した土壙である。北端部は調査区外に出る。他の土壙と同様南北方向に軸線をとっており、南端には土壙状の一段深い掘り込みをもつ。土壙の規模は幅109cm、検出長さ247cm、深さは中央部で30cm、掘り込み部分を含めた深さは66cmを測る。このタイプの土壙は遺物を伴わないことが多いが、本例では埋め土下層に鍋破片が含まれていた。14世紀前後の遺構と推定される。

なお本土壙と土壙95埋土で花粉・寄生虫卵の分析(トイレ分析)を行い、付載4にその結果を掲載している。

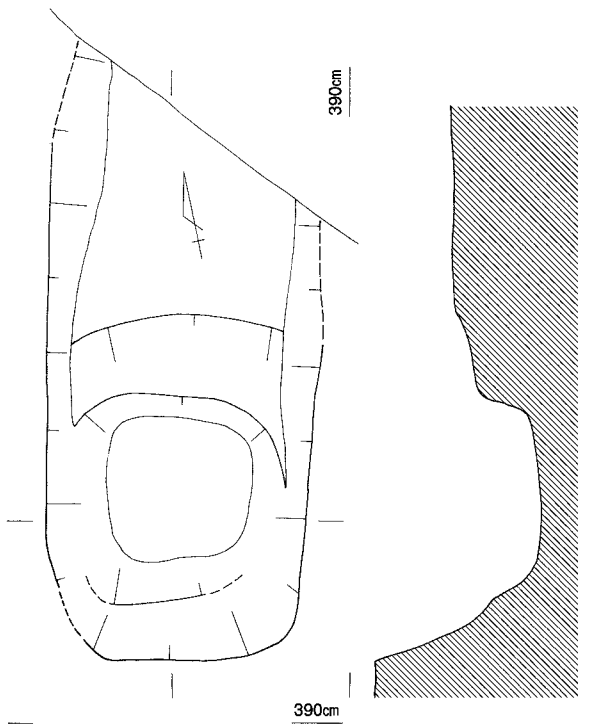
(宇垣)

**土壙118 (第305・364図)**

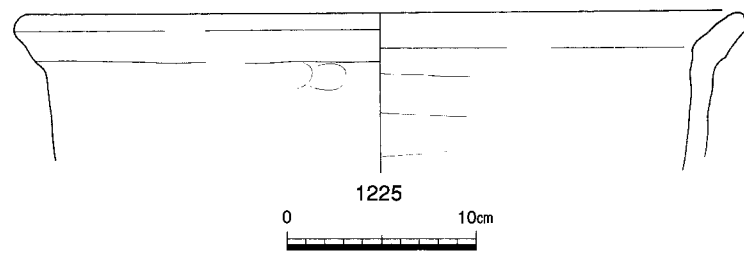
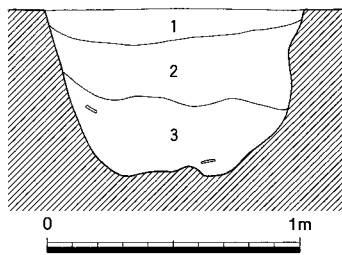
13B区、土壙117の南東で検出した長方形の土壙である。遺構の中央に溝112が重複し、削平を受けている。他と同様、遺構の軸線は南北方向をとる。残存部で長さ275cm、幅120cm、深さ33

cmを測る。土壙は116、117のように両端に掘り込みをもつ例が多いが、本例にはそうした掘り込みは認められない。

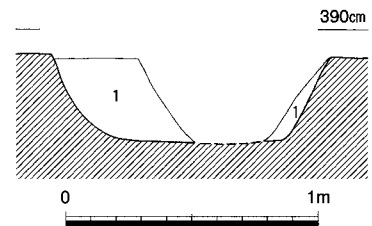
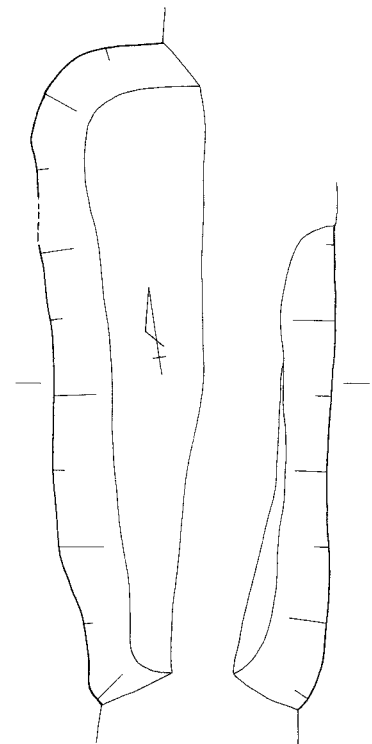
(宇垣)



- 1 褐灰色砂質土  
(基盤ブロック小粒含)
- 2 褐灰色砂質土  
(基盤ブロック多含)
- 3 灰褐色砂質土  
(基盤ブロック多含)

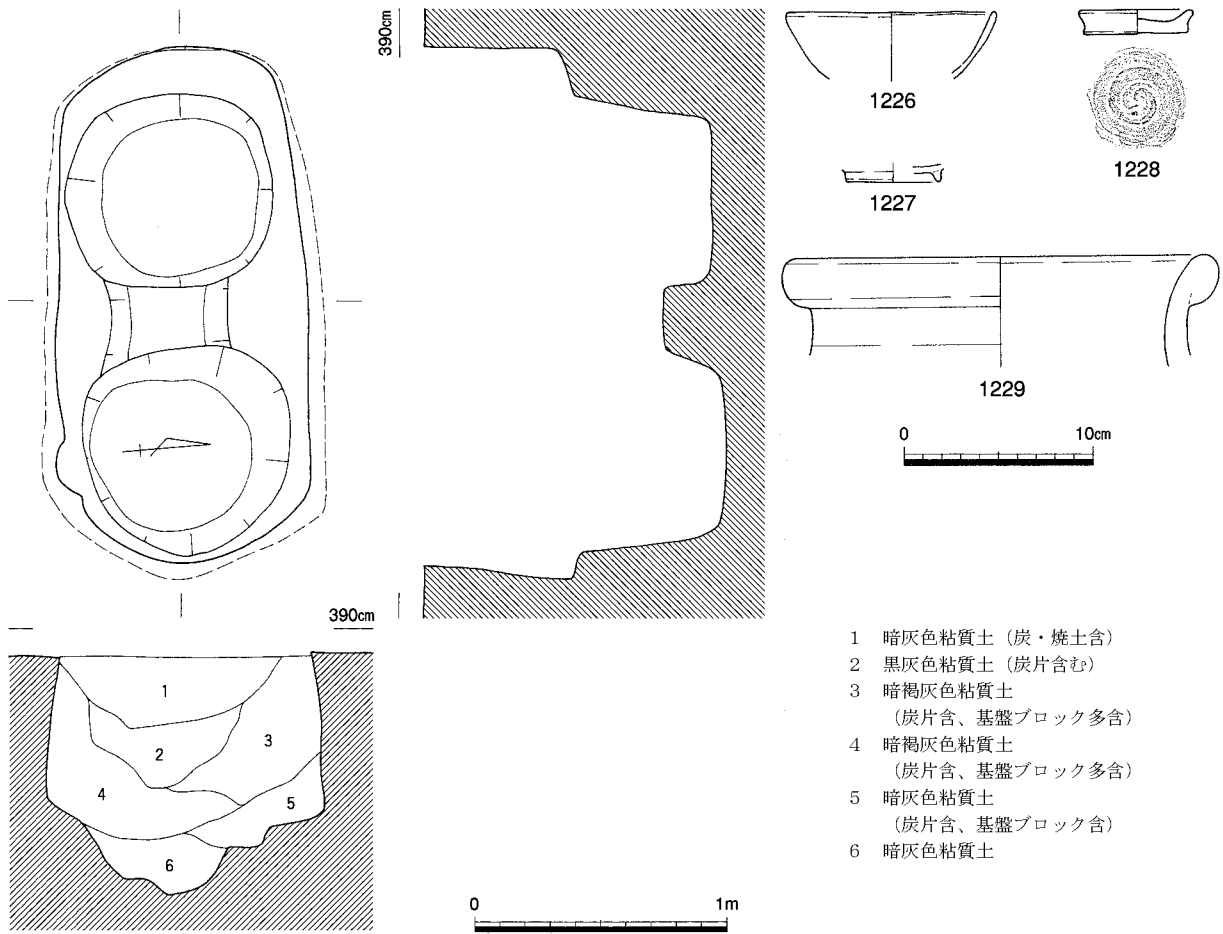


第363図 土壙117 (1/30)・出土遺構 (1/4)



- 1 黄灰褐色粘質土(炭・焼土含)

第364図 土壙118 (1/30)

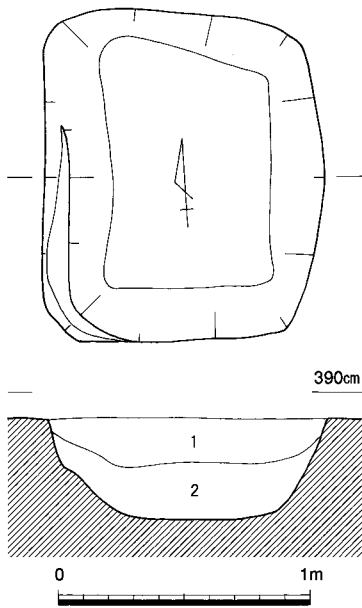


- 1 暗灰色粘質土 (炭・焼土含)
- 2 黒灰色粘質土 (炭片含む)
- 3 暗褐色粘質土 (炭片含、基盤ブロック多含)
- 4 暗褐色粘質土 (炭片含、基盤ブロック多含)
- 5 暗灰色粘質土 (炭片含、基盤ブロック含)
- 6 暗灰色粘質土

第365図 土壙119 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙119 (第305・365図、図版47-3)

13B区西部で検出した土壙で、東西方向に軸線をとる。袋状に下部が広くなり、その下面に円筒形に近い形状の掘り込みが2基設けられている。この点は他の多くの土壙と同様であるが掘り込み部底面までの深さ119cmときわめて深い。埋土は他と同様、埋め戻された状況を示しており、土壙が機能していた時点で堆積したとみられる土層は確認できなかった。可能性として柱穴の一種とも考えられたが、そうした状況は認められなかった。土師質碗、備前焼壺の破片が出土しており14～15世紀の遺構とみられる。(宇垣)



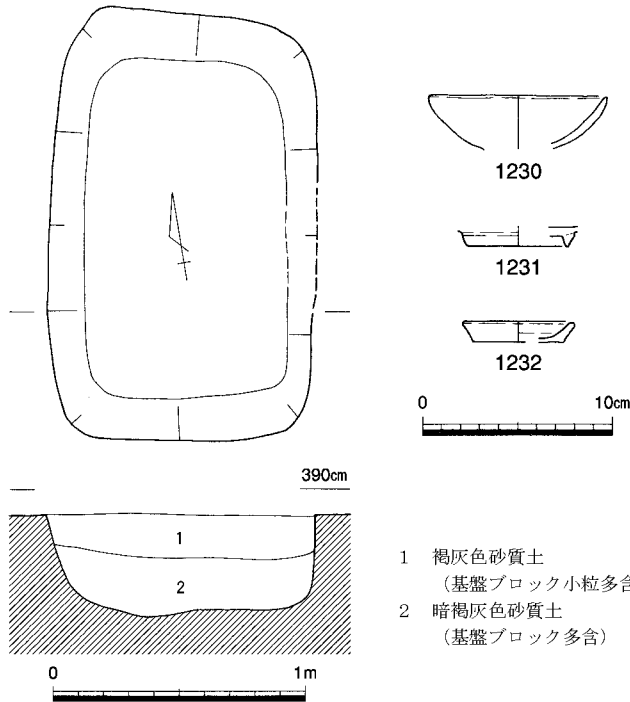
- 1 灰色粘質土
- 2 暗褐色砂質土 (基盤ブロック含)

第366図 土壙120 (1/30)

土壙120 (第305・366図)

土壙120は13B区に位置し、土壙119の西に隣接する。平面形は長方形で、長軸を南北にとる。南北約130cm、東西約110cmを測る。検出面からの深さは約40cmで、上部に粘質土、下部に砂質土が堆積する。埋土中には弥生土器、土師器、須恵器、早鳥式土器碗、土師質土器鍋、備前焼、青磁碗などの小片が混入する。早鳥式土器碗の小さな高台から時期は14世紀以降。(物部)





第367図 土壙121 (1/30)・出土遺物 (1/4)

**土壙121 (第305・367図)**

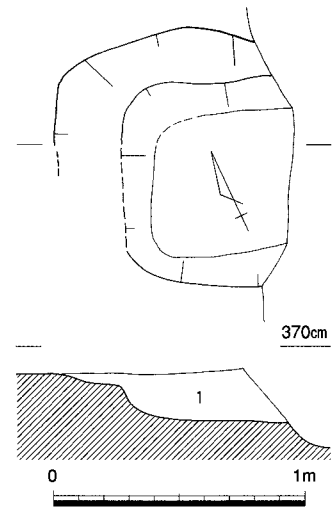
土壙121は13B区、土壙121の南東約3mに位置する。平面形は南北に長軸をとる長方形を呈する。検出面での規模は南北約170cm、東西約100cm、深さ約40cmを測る。埋土中には1230・1231早島式土器碗や1232土師質土器小皿のほかにも弥生後期土器、須恵器、早島式土器碗、瓦器、土師質土器小皿・鍋・カマド等の小片が100片以上混入していた。時期は出土土器の特徴から14世紀以降。(物部)

**土壙122 (第305・368図)**

土壙122は13B区、土壙121の東約5mに位置する。土壙東側は溝112によって削平を受けている。この溝の東側までは土壙122の掘り形は延びていないことから、平面形は約130cm前後の方形を呈すると推定される。また、土壙肩部から約20cm内側で一段深くなる。検出面からの深さは約20cm。埋土中には土器小片が多く混入している。時期は、早島式土器碗の小片が交じることから中世。(物部)

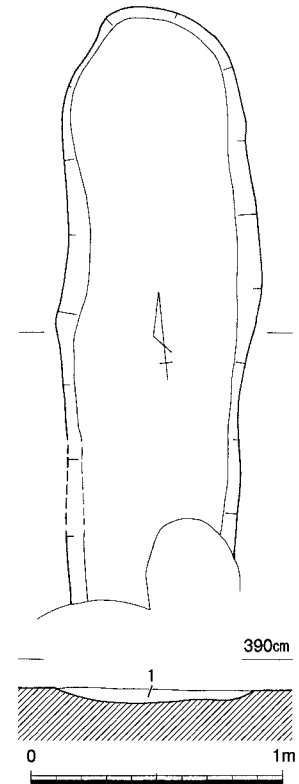
**土壙123 (第305・369図)**

土壙123は13B区に位置する。主軸を南北にとる長い土壙である。北端部を中世の柱穴群によって削平されている。検出面での規模は南北推定250cm、東西約80cm、深さ6cm前後を測る。埋土中には炭粒や焼土粒が混入し、鉄滓、炉壁状の小片も見受けられた。土器では須恵質の捏ね鉢、土師質の鍋、瓦質の土器などの小片が僅かに混入する。時期は中世。(物部)



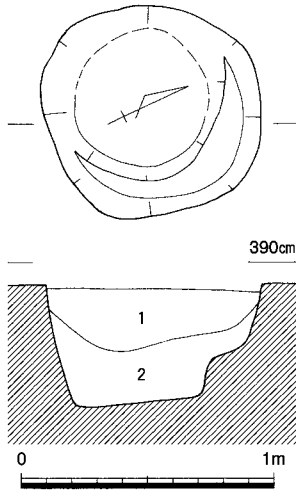
1 褐灰色粘質土 (炭・焼土含、骨片含)

第368図 土壙122 (1/30)



1 暗灰色微砂質土 (炭・焼土含)

第369図 土壙123 (1/30)



- 1 灰色砂質土（基盤ブロック含）
- 2 暗灰色砂質土（基盤ブロック含）

第370図 土壌124 (1/30)

1235は土師質土器小皿である。時期は14世紀以降。

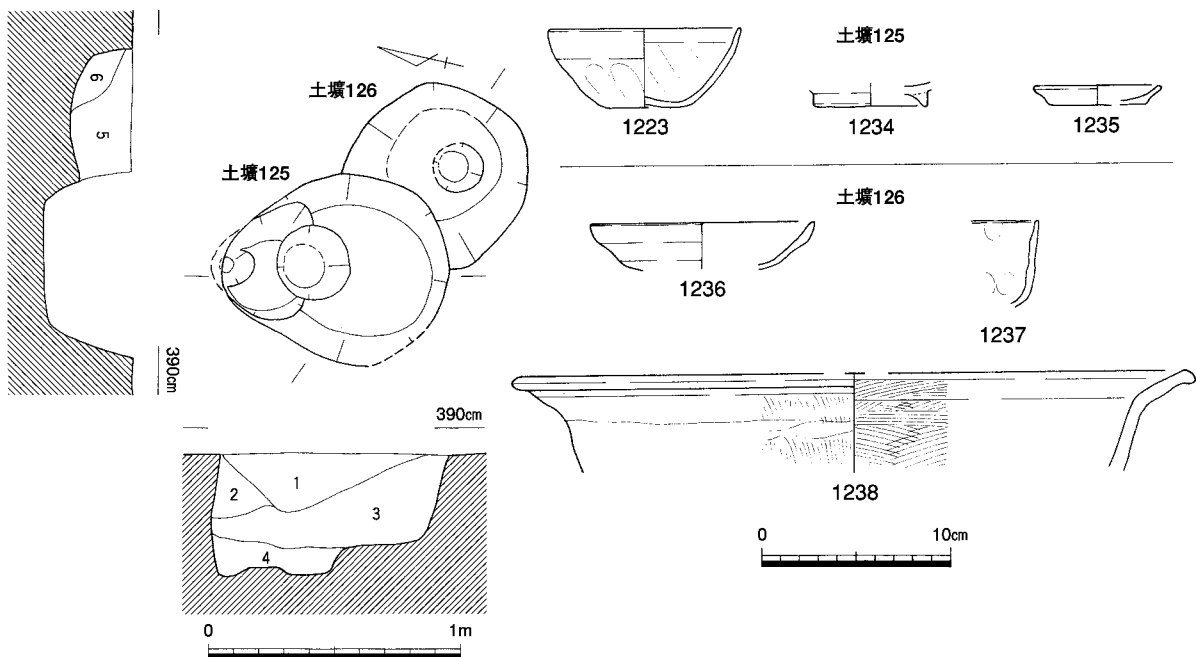
(物部)

土壌126 (第305・371図)

土壌126は土壌125によって西端部を削平されている。平面形は直径約70cmの円形を呈すると推定され、検出面からの深さは25cmを測る。底面中央やや南寄りに直径20cmほどの浅い掘削がある。埋土は若干粘性をもつ砂質土で、土師器、早鳥式土器碗、土師質土器小皿、瓦器の小片が40片ほど混入している。1236早鳥式土器碗、1237灰白色の製塩土器、1238土師質土器鍋。

時期は14世紀以降。

(物部)



- 1 灰色砂質土（基盤ブロック含）
- 2 灰褐色砂質土（基盤ブロック含）
- 3 灰色砂質土（基盤ブロック含）
- 4 灰褐色砂質土（基盤ブロック含）
- 5 灰色弱粘性砂質土（基盤ブロック小粒多含）
- 6 褐灰色弱粘性砂質土（基盤ブロック小粒多含）

第371図 土壌125・126 (1/30)・出土遺物 (1/4)

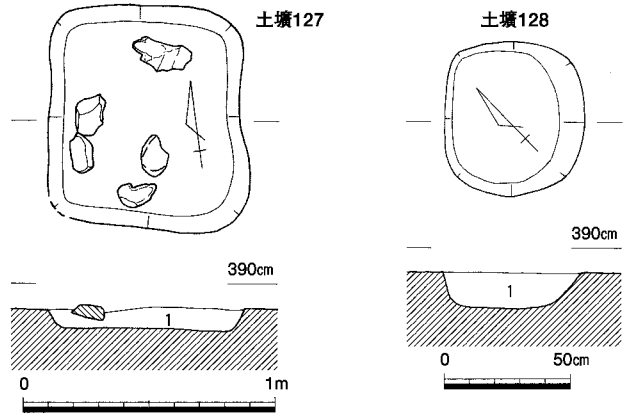
**土壙127** (第305・372図、図版48-1)

土壙127は13B区、土壙126の南東約1mに位置する。主軸を南北にとる方形を呈する土壙で、規模は南北約90cm、東西約80cm、深さは8cmと浅い。底面は平らで、10~15cm大の石を5個配置しているようである。規模、形状、配石の状況は12C区で検出された土壙107に類似する。埋土中には早島式土器碗でもやや小振りなものの破片が見られる。

時期は中世。 (物部)

**土壙128** (第305・372図)

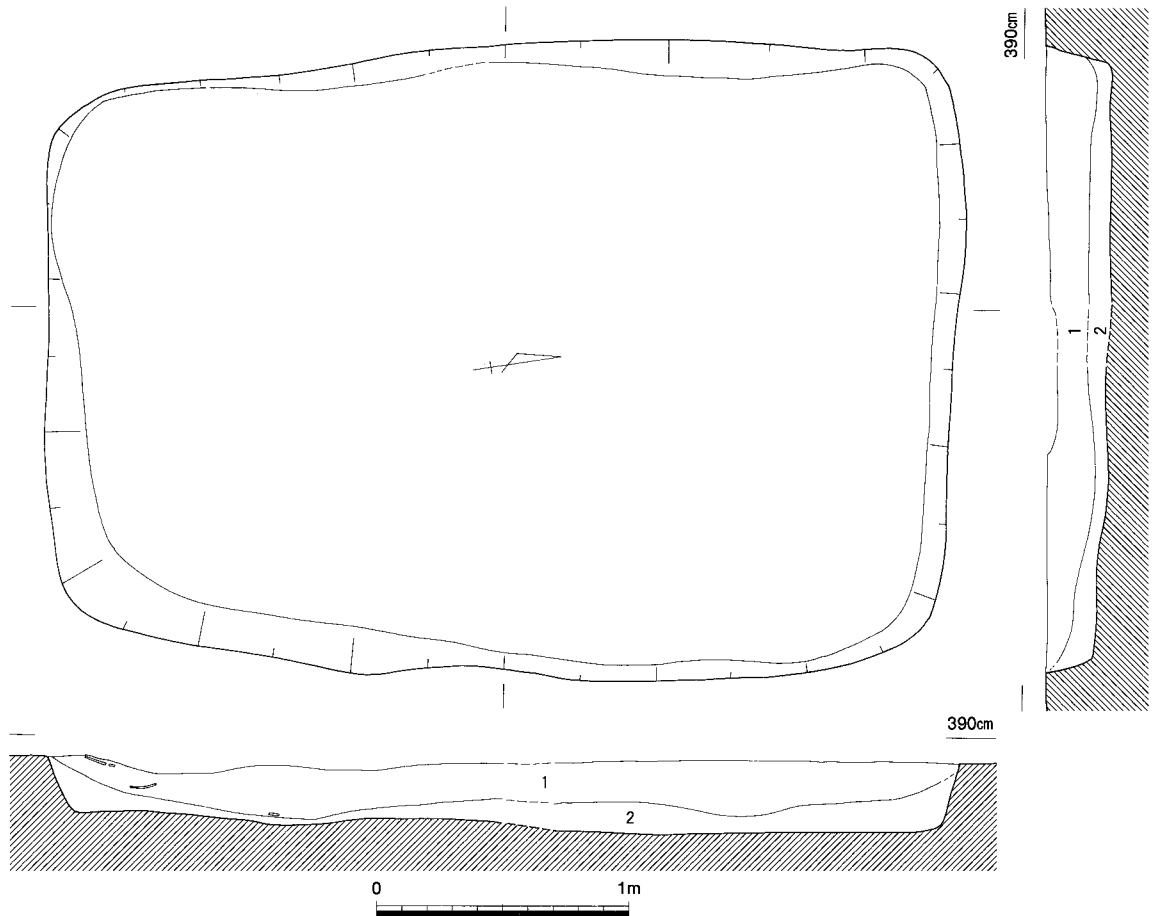
土壙128は13B区、土壙127の南約2mに位置する。平面形は一辺60cm前後の方形を呈し、検出面からの深さは14cmを測る。土壙の主軸は南北方向と一致しない。埋土は粘質土で炭粒、焼土粒を含む。やや小振りと考えられる早島式土器碗の小片が混入する。時期は中世。 (物部)



1 灰色砂質土

1 暗灰色粘質土 (炭・焼土含)

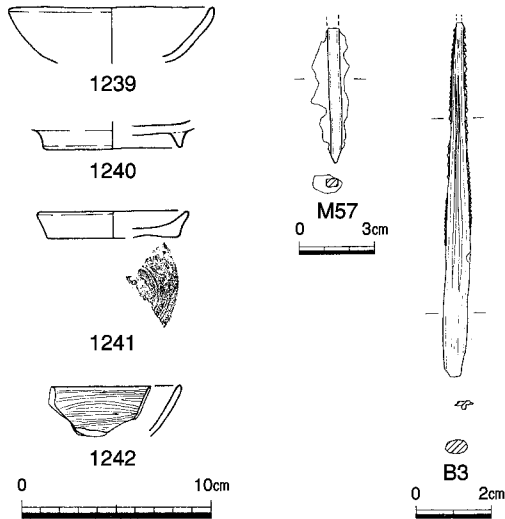
第372図 土壙127・128 (1/30)



1 褐灰色砂質土 (炭・焼土含、基盤ブロック多含)

2 褐灰色砂質土 (基盤ブロック少含)

第373図 土壙129 (1/30)



第374図 土壌129出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

土壌129 (第305・373・374図、図版48-2)

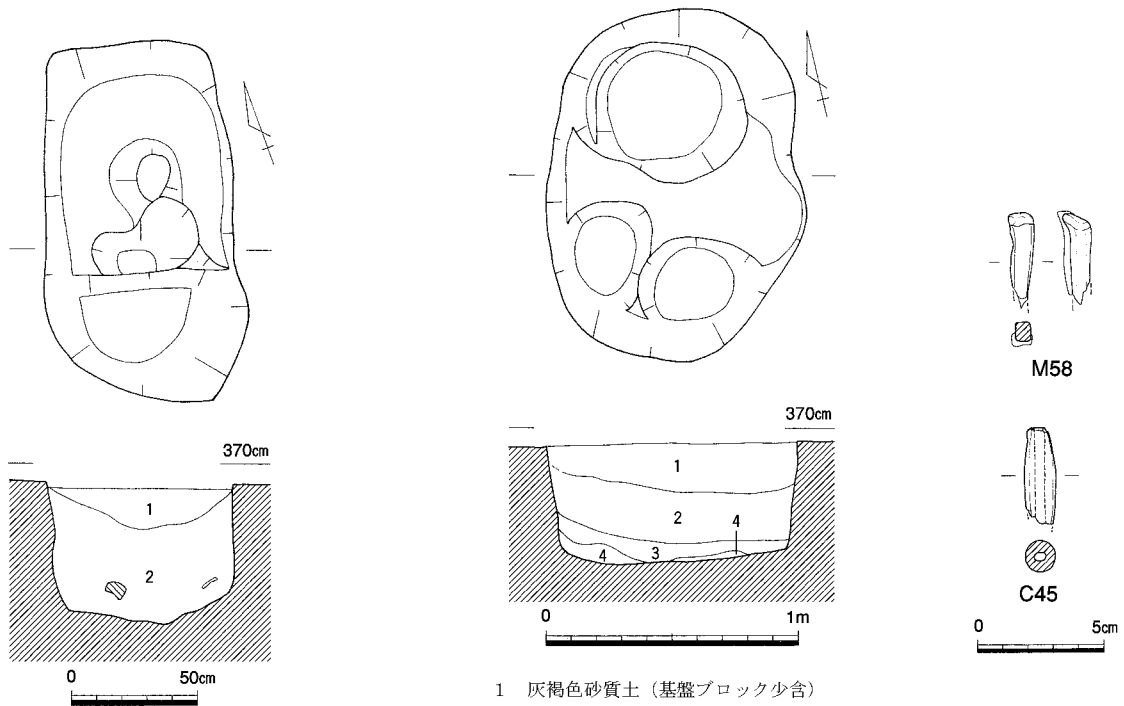
13C区の13ライン近くにある大形の土壌で、埋没後中央上部を溝109によって掘削される。他の大形方形の土壌と同様、軸線を南北に取り、南北362cm、東西256cm、深さ29cmを測る。埋土上層には基盤ブロックを多く含み、埋め戻された可能性がある。土師質の椀、皿の破片が出土しており14~15世紀の遺構とみられる。なお、B3はエイの尾棘を加工して作られた尖頭利器である。(宇垣)

土壌130 (第305・375図)

土壌130は13C区の西端部に位置する。平面形はほぼ南北方向に長軸をとる長方形を呈する。検出面での規模は、南北長約140cm、東西幅約80cm、深さ約50cmを測る。底面中央部は低い隆起や浅い窪みが見られる。土壌南部はさらに10cmほど深く掘り込まれている。埋土は砂質土で基盤土小塊を多く含む。早島式土器椀の小片が混入していることから、時期は中世である。(物部)

土壌131 (第305・376図)

土壌131は13C区、土壌131の東約8mに位置する。平面形は長軸をほぼ南北にとる楕円形を呈する。検出面での規模は、長軸約140cm、短軸約100cm、深さ約50cmを測る。土壌底面には北部に1つ、南部に2つの円形を呈する掘り込みがある。前者は直径約50cm、深さ約30cm。後者は直径40cm前後、深さ



- 1 灰色砂質土 (基盤ブロック多含)
- 2 灰色弱粘性砂質土 (基盤ブロック多含)

- 1 灰褐色砂質土 (基盤ブロック少含)
- 2 褐灰色砂質土 (基盤ブロック少含)
- 3 灰色砂質土 (基盤ブロック多含)
- 4 灰褐色砂質土 (基盤ブロック多含)

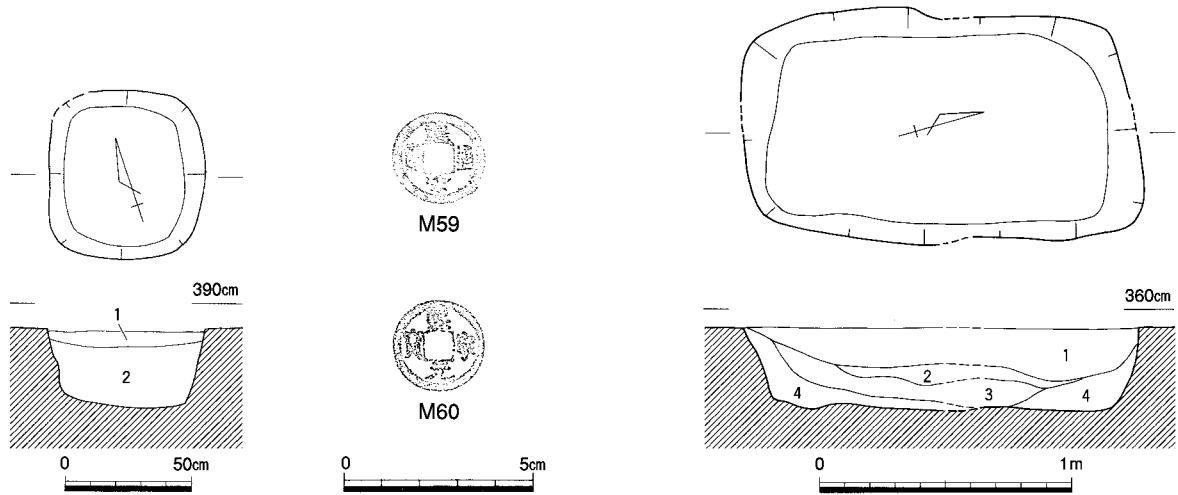
第375図 土壌130 (1/30)

第376図 土壌131 (1/30)・出土遺物 (1/3)

20～10cmを測る。埋土は砂質土で基盤土小塊が多く混じる。また、埋土中には早鳥式土器椀や備前焼などの小片や、M58鉄釘、C45土錘の破片が混入する。時期は中世。 (物部)

土壙132 (第305・377図)

土壙132は13C区に位置する。平面形は一辺約70cmの方形を呈する。埋土中にM59「皇宋通寶」、M60「熙寧元寶」や、早鳥式土器椀、土師質土器などの小片が混入している。時期は中世。 (物部)



- 1 暗灰色粘性砂質土 (基盤ブロック多含)
- 2 暗灰色粘質土 (炭・焼土少含、基盤ブロック多含)

- 1 灰褐色粘質土 (褐白色ブロック含、基盤ブロック多含)
- 2 暗灰褐色粘質土 (炭少量含、基盤ブロック含)
- 3 灰褐色粘質土 (褐白色ブロック含、基盤ブロック多含)
- 4 暗褐色粘質土 (基盤ブロック含)

第377図 土壙132 (1/30)・出土遺物 (1/2)

第378図 土壙133 (1/30)

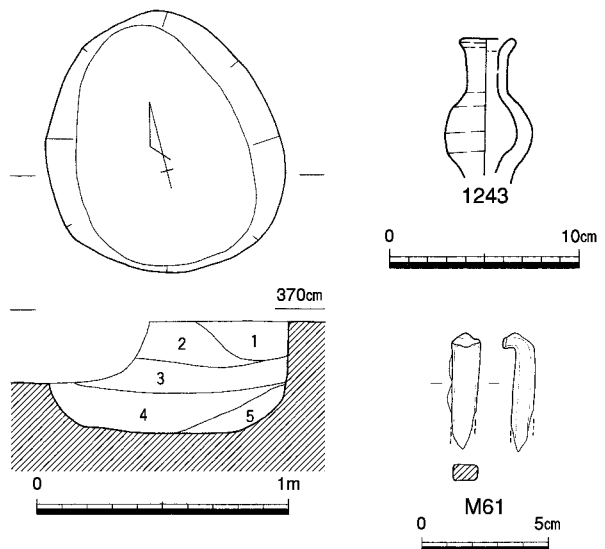
土壙133 (第305・378図)

土壙133は13C区、土壙131の東約3mに位置する。平面形は長軸をおおよそ南北方向にとる長方形を呈する。規模は南北長約160cm、東西幅約90cm、深さ約30cm。埋土は四層に分層され、いずれも粘質土で基盤土小塊を含む。また、中央部に向けて落ち込むように堆積しており、木棺墓の可能性もあるが、確証はない。土器小片の混入が多く、高台の小さな早鳥式土器椀片がみられる。時期は中世。 (物部)

土壙134 (第305・379図)

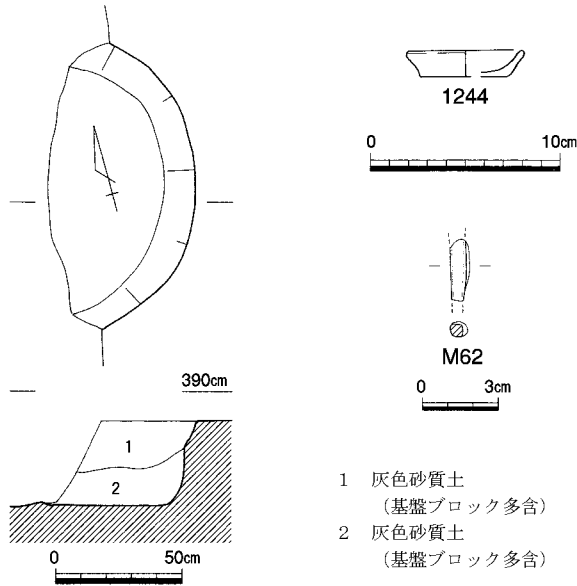
土壙134は13B区に位置し、土壙135に西部を切られている。平面形は長軸を南北にとる楕円形を呈する。

埋土中に1243須恵質壺、M61鉄釘のほか、口縁端部が玉縁を呈する備前焼甕が混入している。時期は、室町時代と推定される。 (物部)



- 1 淡褐色砂質土
- 2 灰褐色砂質土 (炭粒・焼土粒含)
- 3 褐灰色砂質土 (炭粒多含)
- 4 淡灰褐色砂質土 (暗灰色粘質土ブロック含)
- 5 褐灰色砂質土

第379図 土壙134 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



第380図 土壙135 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

式土器碗、土師質土器、亀山焼など約80片を混入する。時期は中世である。

(物部)

**土壙137 (第305・381図)**

土壙137は13B区に位置し、土壙136の東に隣接する。平面形は長軸を東西方向にとる不整長方形を呈する。規模は東西長約170cm、南北幅約80cm、検出面からの深さ約10cmを測る。埋土は基盤土小塊を多く含む粘質土で、須恵器、早鳥式土器碗、土師質土器、亀山焼、瓦質土器などの小片を35片混入する。時期は中世。

(物部)

**土壙138 (第305・382図)**

土壙138は13B区、土壙137の南約1mに位置する。平面形は直径約85cmの円形を呈し、検出面からの深さは約60cmを測る。壁は比較的垂直に近い。埋土中に早鳥式土器碗や土師質土器鍋・カマド、備前焼などの小片約40片を混入する。時期は中世と考えられる。

**土壙139 (第305・382図)**

土壙139は13B区、土壙138の南約1mに位置する。平面形は直径約70cmの円形を呈し、検出面からの深さは約37cmを測る。壁は垂直に近い。埋土は粘質土で、やや小振りな早鳥式土器碗や土師質土器など土器小片が混入する。時期は中世。

(物部)

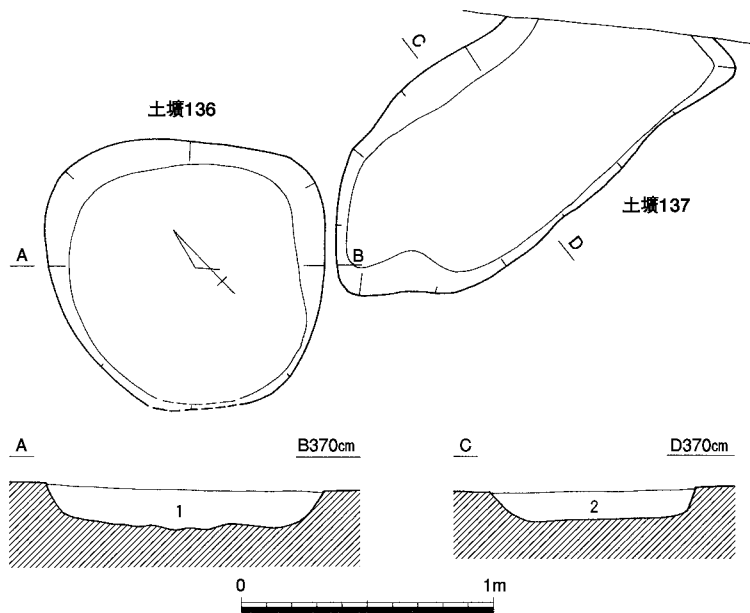
**土壙135 (第305・380図)**

13B区に位置する。土壙134を切っているが、溝112によって土壙西半分を削平されている。平面形は直径120cm前後の円形を呈すると推定される。検出面からの深さは34cmを測る。埋土は砂質土で、1244土師質土器小皿、M62鉄釘のほか、弥生土器、須恵器、土師質土器皿・鍋・カマド、瓦器、早鳥式土器碗、炉壁塊などを混入している。時期は中世。

(物部)

**土壙136 (第305・381図)**

土壙136は13B区、土壙135の東約2mに位置する。平面形は直径110cm前後の不整円形を呈する。検出面からの深さは約15cmを測る。埋土は粘質土で、弥生土器、須恵器、土師器、早鳥

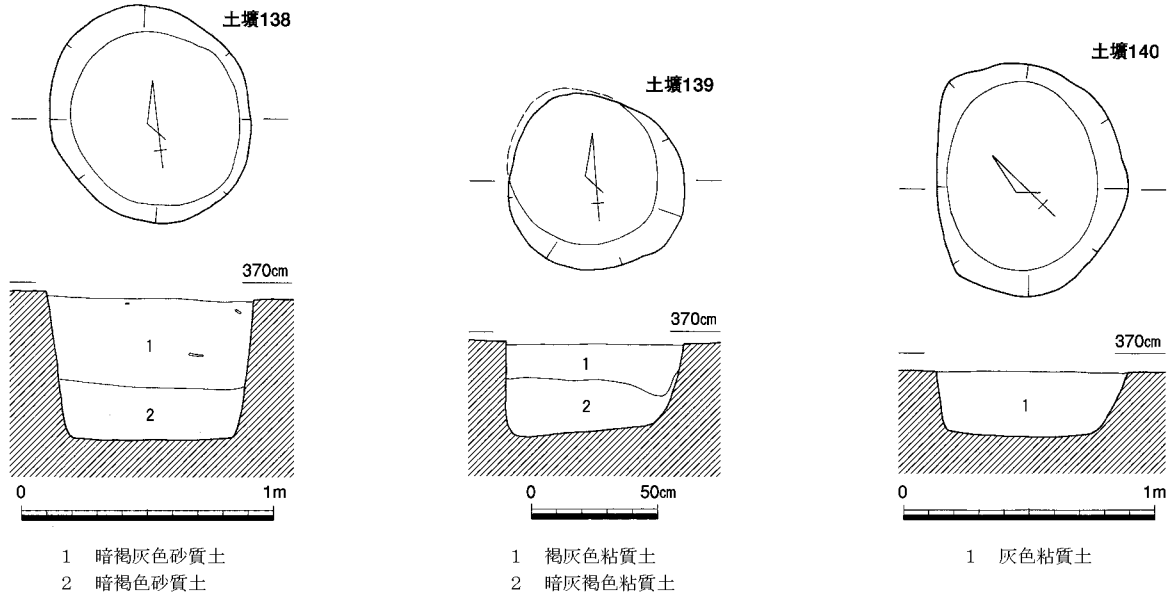


1 暗褐色粘質土 (基盤ブロック多含)      2 暗灰色粘質土 (基盤ブロック多含)

第381図 土壙136・137 (1/30)

土壙140 (第305・383図)

土壙140は13B区、土壙138の南約2mに位置する。平面形は約90×70cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは26cmを測る。埋土は灰色粘質土で、須恵器、土師器の小片のほか、早鳥式土器碗の小片が1点混入する。時期は中世と推定される。(物部)



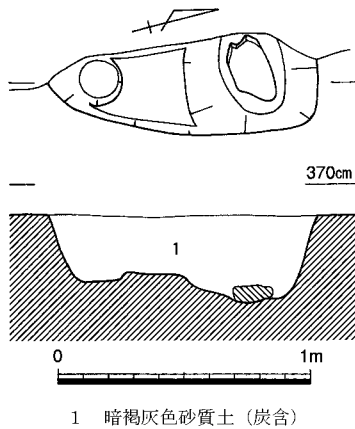
第382図 土壙138～140 (1/30)

土壙141 (第305・384図)

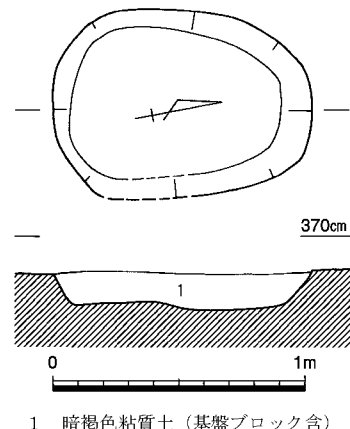
土壙141は13B区に位置する。土壙西半部を現代用水路によって削平されている。当初、長軸110cm、短軸50cmほどの長方形を呈する土壙と推定したが、土壙底面の南北両端に円形を呈する窪みが確認され、北側の窪みには20cm大の平石が検出された。このことから柱穴が2個隣接してあるものと考えた。時期は、埋土中に早鳥式土器碗の小片が2片あり、中世である。(物部)

土壙142 (第305・384図)

土壙142は13C区に位置する。平面形は長軸を南北方向にとる楕円形を呈する。規模は、南北約100cm、東西約70cm、深さ約15cmを測る。時期は埋土に土師質土器小皿が1片あり、中世である。(物部)



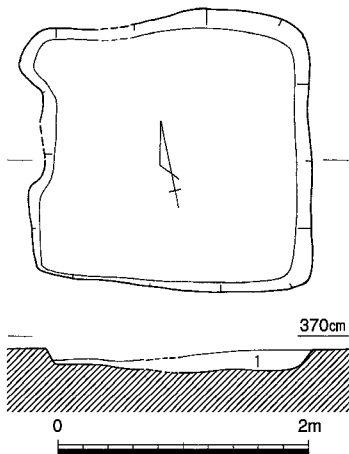
第383図 土壙141 (1/30)



第384図 土壙142 (1/30)

土壙143 (第305・385図)

土壙143は13C区に位置し、溝112によって上部を切られている。平面形は主軸をおよそ南北にとる一辺約230cmの方形を呈する。検出面からの深さは17cm前後を測る。底面はほぼ平らである。埋土中に備前焼甕の玉縁口縁部や早島式土器椀、土師質土器のほか弥生土器、須恵器、土師器などの小片が多数混入している。時期は備前焼の特徴から14世紀以降である。(物部)



1 褐灰色砂質土 (炭少含、基盤ブロック少含)

第385図 土壙143 (1/60)

土壙144 (第305・386図)

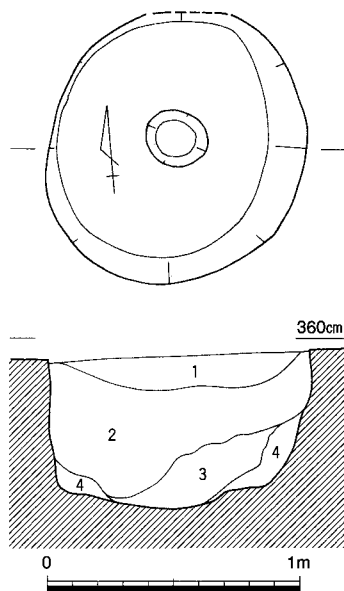
土壙144は13C区に位置し、土壙143の西側に隣接する。平面形は直径100cm前後の円形を呈し、検出面からの深さは約60cmを測る。壁面は垂直に近く、底面は中央に小さな窪みがある。埋土は基盤土小塊を多く含む。中世。(物部)

土壙145 (第305・387図)

土壙145は13C区、土壙144の南約2mに位置する。平面形は長軸をほぼ南北方向にとる楕円形を呈する。規模は南北約170cm、東西約120cm、深さ約50cmを測る。底面直上にはには黒灰色粘土が堆積している。埋没後、埋土を切る柱穴が確認される。時期は中世。(物部)

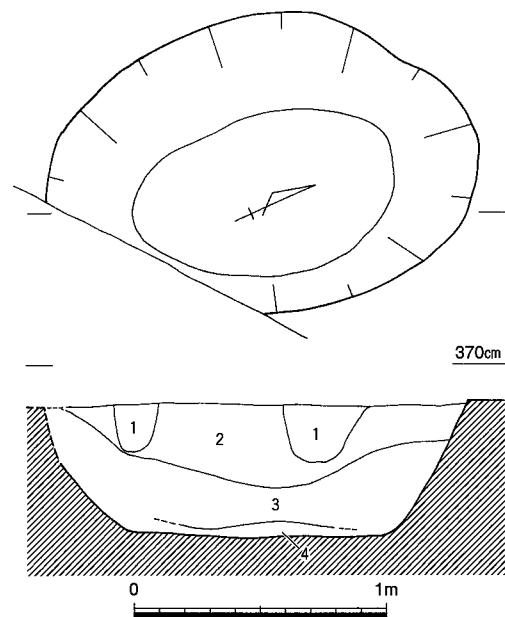
土壙146 (第305・388図)

土壙146は13C区に位置し、土壙143の南に隣接する。土壙南端部は後世の削平を受ける。平面形は長軸をおよそ南北方向にとる長方形を呈すると推定される。規模は南北長約220cm以上、東西幅約90cmを測る。埋土中に備前焼甕体部片や早島式土器椀片などを少量混入する。時期は中世。(物部)



- 1 暗褐色粘質土 (基盤ブロック多含)
- 2 褐色粘質土 (基盤ブロック多含)
- 3 黒褐色粘質土 (基盤ブロック多含)
- 4 褐色粘質土 (基盤ブロック多含)

第386図 土壙144 (1/30)



- 1 灰色砂質土
- 2 褐灰色砂質土
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 黒灰色粘土

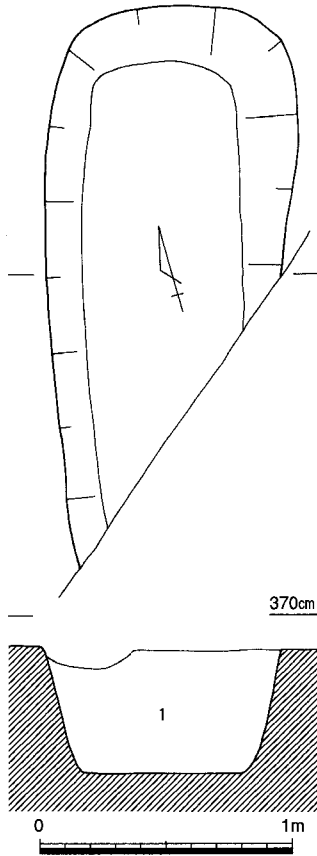
第387図 土壙145 (1/30)



土壙147 (第305・389図)

14C区で検出された土壙で、井戸23を切っている。掘り方平面形は長楕円形で、長軸方向はほぼ東西方向である。長さは210cm、幅は40cmを測る。底面は緩やかにくぼみ、検出面からの深さは18cmである。

埋土中から土師質高台付椀や皿の小片などが出土しているが、遺構の切り合いなどから、時期は室町時代以降と思われる。(柴田)



第388図 土壙146 (1/30)

土壙148 (第305・390図)

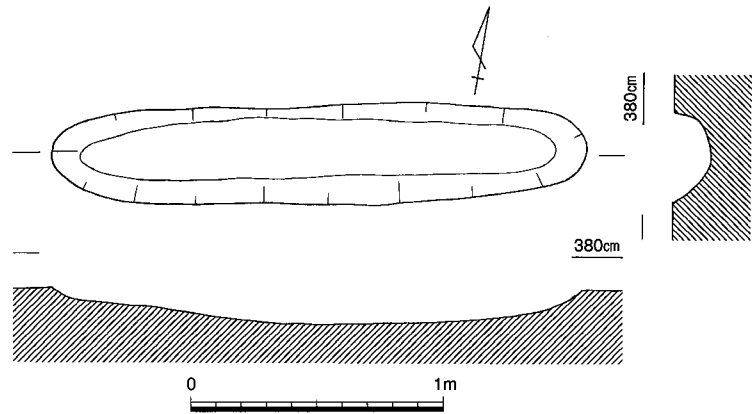
14C区で検出された土壙で、井戸23の東に隣接する。掘り方平面形は長方形で、長軸方向はほぼ東西方向である。長さは220cm、幅は100cmを測る。断面形は箱形で、底面はほぼ水平である。検出面からの深さは36cmである。

埋土中から備前焼や瓦質捏ね鉢の小片、図示した鉄器M63~66などが出土しており、また遺構の切り合いなどから、時期は室町時代後期以降と思われる。(柴田)

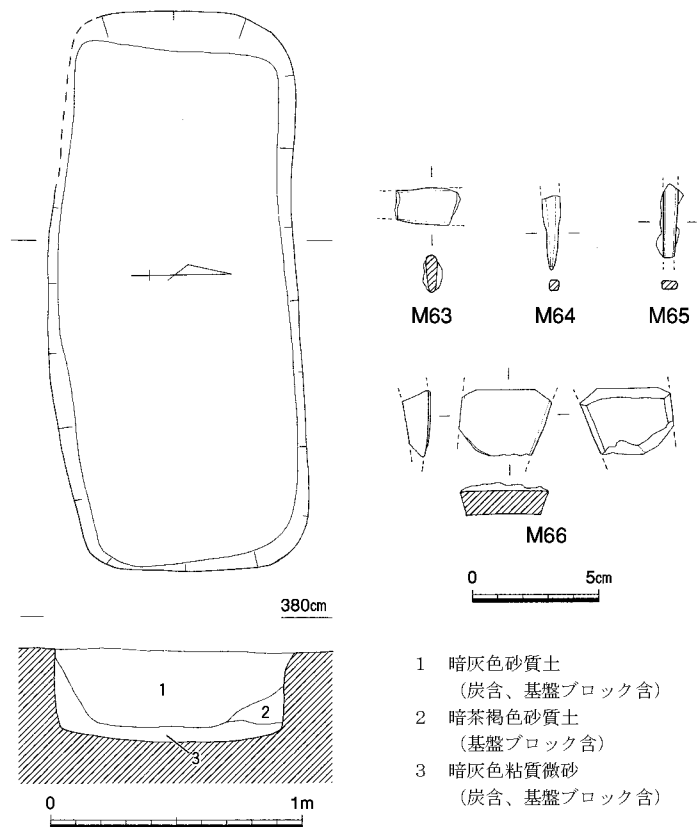
土壙149 (第305・391図)

14C区で検出された土壙で、土壙148の東に隣接する。

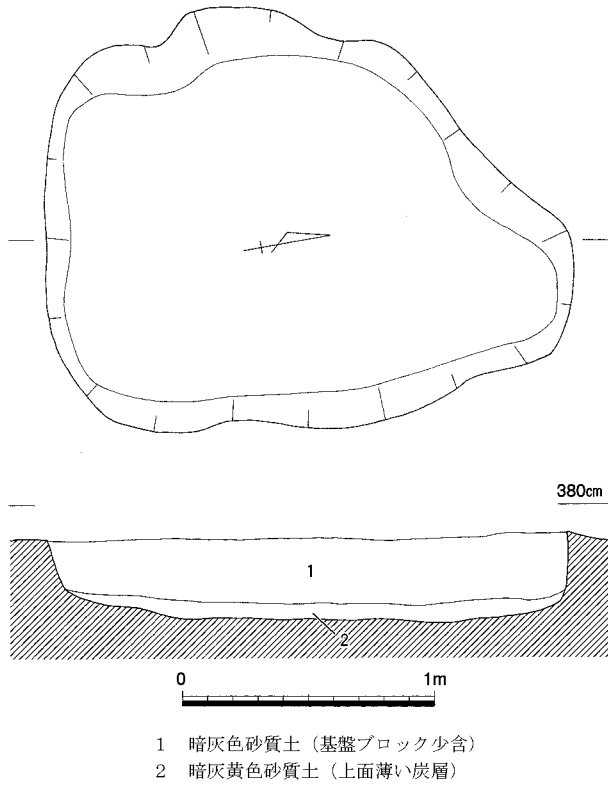
掘り方平面形は不整楕円形で、



第389図 土壙147 (1/30)



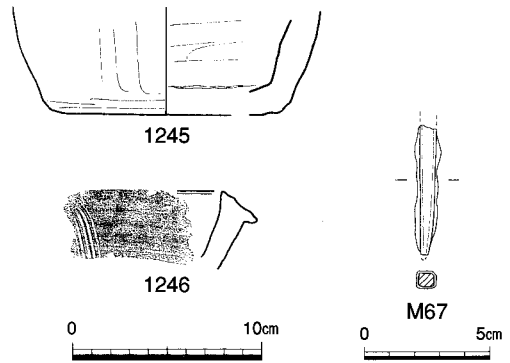
第390図 土壙148 (1/30)・出土遺物 (1/3)



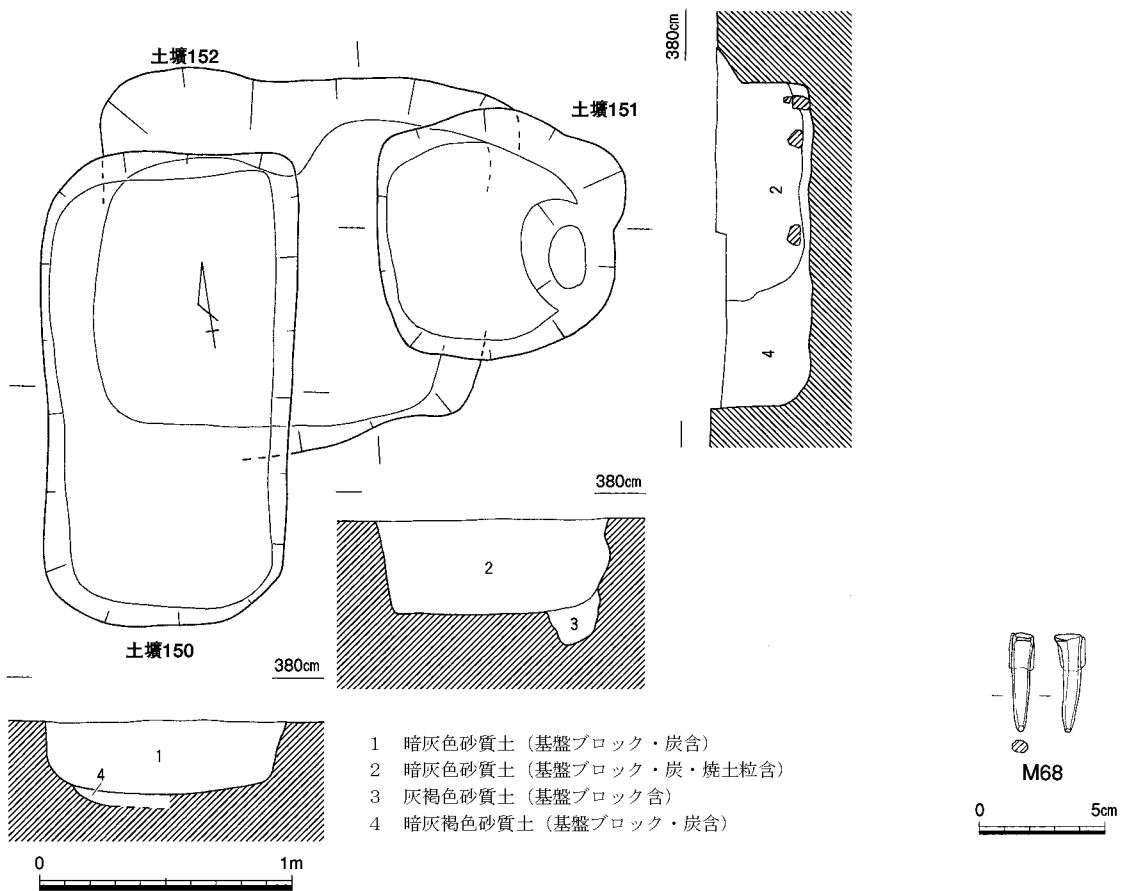
- 1 暗灰色砂質土（基盤ブロック少含）
- 2 暗灰黄色砂質土（上面薄い炭層）

長さは207cm、幅は162cmを測る。断面形は箱形で、底面はほぼ水平である。検出面からの深さは32cmである。

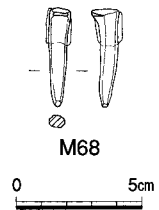
埋土中からは須恵質の壺1245、備前焼挿鉢1246や釘M67のほかにも、亀山焼や土鍋などが出土している。これらの出土遺物や遺構の切り合いなどから、時期は室町時代後期以降と思われる。（柴田）



第391図 土壙149 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



- 1 暗灰色砂質土（基盤ブロック・炭含）
- 2 暗灰色砂質土（基盤ブロック・炭・焼土粒含）
- 3 灰褐色砂質土（基盤ブロック含）
- 4 暗灰褐色砂質土（基盤ブロック・炭含）



第392図 土壙150～152 (1/30)・出土遺物 (1/3)

**土壙150** (第305・392図)

14C区で検出された土壙で、土壙152を切っている。掘り方平面形は長方形で、長さは190cm、幅は95cmを測る。断面形は箱形で、底面はほぼ水平である。検出面からの深さは27cmである。

土器片や釘M68のほかに炉壁などが出土しており、時期は室町時代後期以降と思われる。(柴田)

**土壙151** (第305・392図)

14C区で検出された土壙で、土壙152を切っている。掘り方平面形は不整形で、長さは98cmを測る。断面形は箱形で、底面はほぼ水平である。検出面からの深さは37cmである。出土遺物は認められないが、周囲の遺構の状況などから、時期は室町時代後期以降と思われる。(柴田)

**土壙152** (第305・392図)

14C区で検出された土壙で、土壙150・151に切られる。掘り方平面形は長方形で、長さは160cm程度、幅は138cmを測る。断面形は箱形で、底面はほぼ水平である。検出面からの深さは38cmである。出土遺物は無いが、時期は室町時代と思われる。(柴田)

**土壙153** (第305・393図)

14B区で検出された土壙である。掘り方平面形は長楕円形で、長さは365cm、幅は135cmを測る。底面はほぼ水平で、検出面からの深さは48cmである。

砥石S101や土錘C46のほかに土器片などが出土しており、時期は中世前半と思われる。(柴田)

**土壙154** (第303・394図)

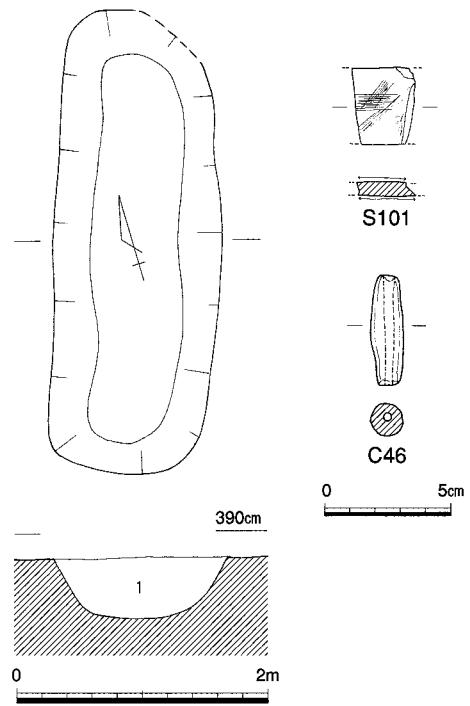
14B区で検出された土壙である。掘り方平面形は長方形で、長さは215cm、幅は95cmを測る。断面形は箱形で、底面はほぼ水平である。検出面からの深さは12cmである。

少量の土器細片が出土しており、時期は室町時代後期以降と思われる。(柴田)

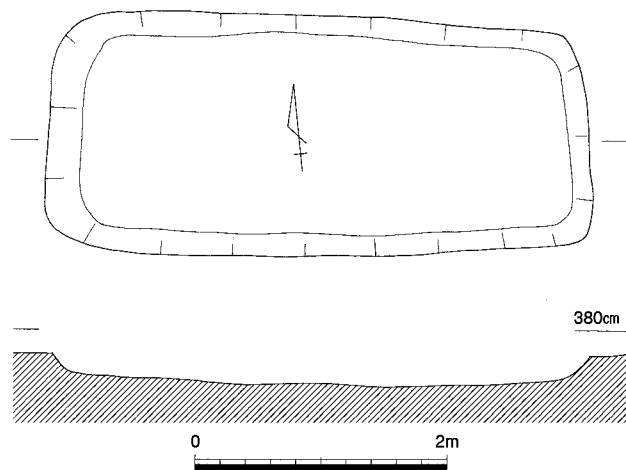
**土壙155** (第303・395図)

15C区で検出された土壙で、土壙156を切っている。掘り方平面形は長方形で、長さは230cm、幅は105cmを測る。断面形は箱形で、底面は周囲のほうがわずかに低くなっている。検出面からの深さは30cmである。

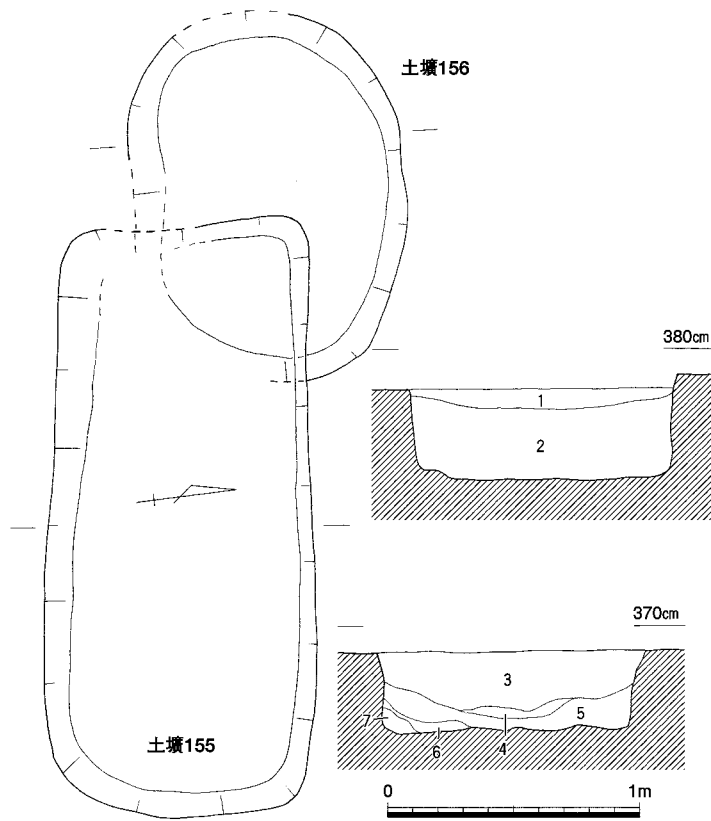
出土遺物は認められないが、周辺の遺構の状況などから、時期は室町時代後期以降と思われる。(柴田)



1 灰褐色砂質土  
第393図 土壙153 (1/60)・出土遺物 (1/3)



第394図 土壙154 (1/60)

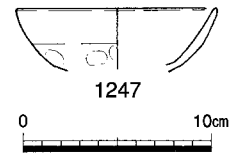


第395図 土壌155・156 (1/30)・出土遺物 (1/4)

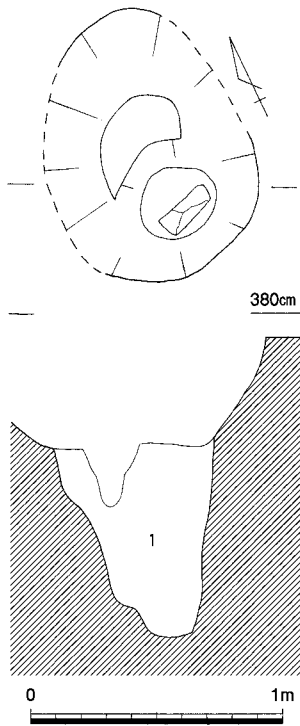
土壌156 (第303・395図)

14C区で検出された土壌で、土壌155に切られている。掘り方平面形は楕円形で、長さは140cm、幅は100cmを測る。断面形は箱形で、底面はほぼ水平である。検出面からの深さは35cmである。

椀1247のほかにも備前焼や土師器などの破片が出土しているが、時期は室町時代後期以降と考えられる。(柴田)



- 1 灰黄褐色砂質土
- 2 灰黄褐色砂質土 (炭多含)
- 3 灰黄褐色粘質微砂
- 4 灰茶色砂質土
- 5 灰黄褐色粘質微砂
- 6 灰黄褐色粘質土 (炭・焼土粒含)
- 7 灰黄褐色粘質微砂



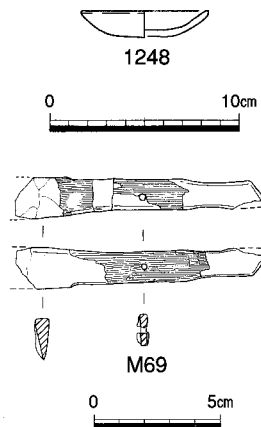
- 1 淡黄褐色粘質微砂

第396図 土壌157 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土壌157 (第303・396図、図版48-3)

15B区で検出された土壌であるが、柱穴の可能性はある。掘り方平面形は楕円形で、長さは124cm、幅は100cmを測る。検出面からの深さは118cmである。

埋土中からは、小皿1248や刀子M69のほかにも備前焼播鉢の破片などがわずかに出土しており、時期は室町時代後期以降と思われる。(柴田)



土壌158 (第303・397図)

15B区に位置し、建物8の北西隅に重なるが新旧等は不明である。平面形は一辺100cm前後のほぼ正方形を呈し、壁が垂直近くに落ち込む。底面は平坦で、深さ30cm、海拔高330cmを測る。

図示した出土遺物は土師器椀である。時期は室町時代以降と考えられる。(高田)

土壌159 (第303・398図、図版49-1)

15B区に位置する土壌である。後述する土壌160・162とは形態や規模・埋土等に類

似性がみられる。南側の土壌161とは120cm離れる。平面形は不整楕円形を呈し、底面の西側が一段深い。その規模は長軸140cm、短軸100cm、深さ72cmを測る。

遺物は少量の中世土器細片のみである。

時期は室町時代と考えられる。(高田)

**土壌160** (第303・398図、図版49-1)

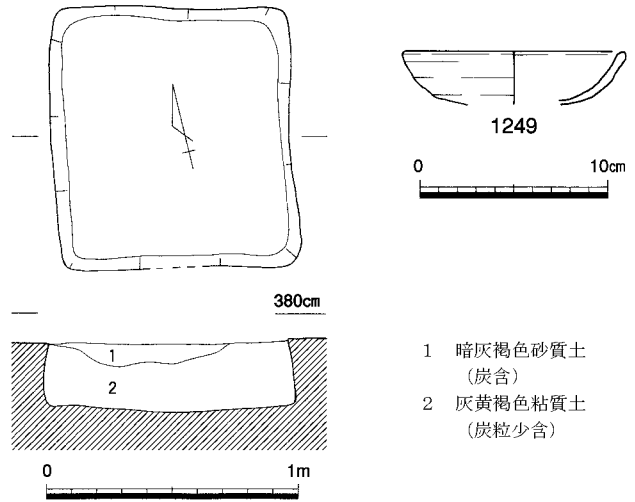
土壌159・161間に位置し、両者に切られる土壌である。平面形は長楕円形を呈するものと考えられ、長さ118cm以上、幅86cmを測る。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。

時期は室町時代と考えられる。(高田)

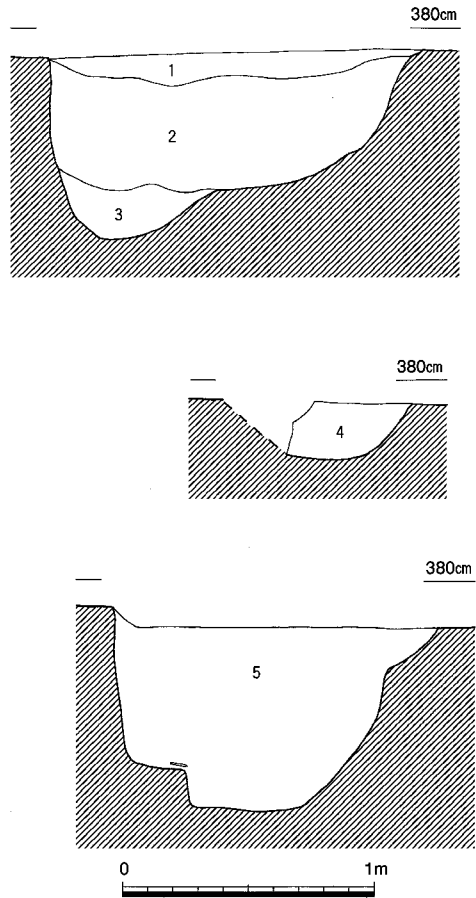
**土壌161** (第303・398図、図版49-1)

平面形は楕円形を呈し、長軸135cm、短軸104cm、深さ70cmを測る。壁は急斜に落ち込み、ほぼ平坦な底面は2段となる。出土遺物は少量の中世土器細片と土錘C47がある。

土壌の時期は、検出状況等から周辺の遺構と同様に室町時代と考えられる。(高田)

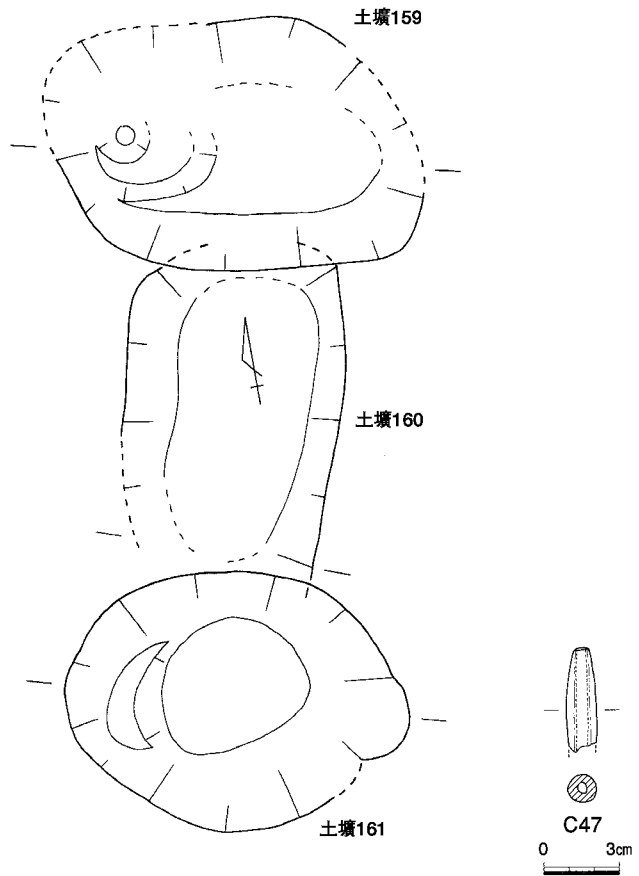


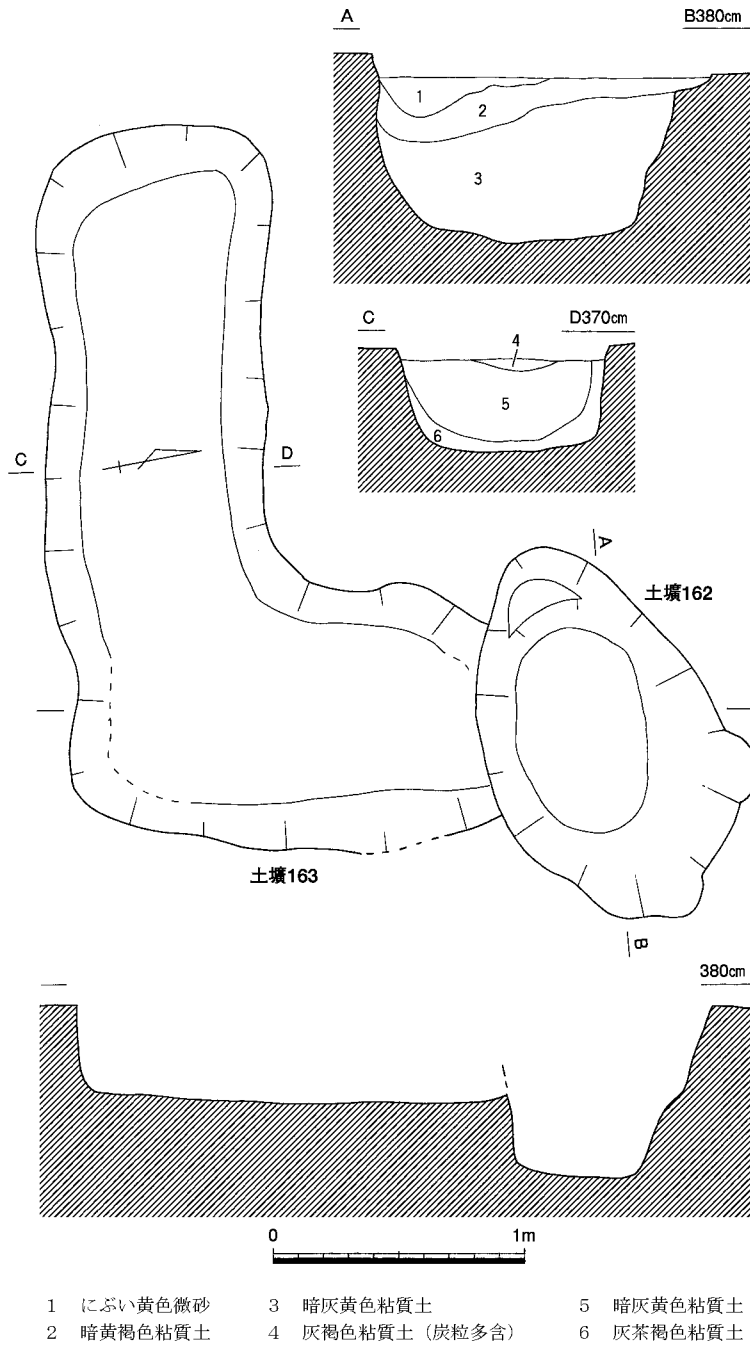
第397図 土壌158 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰黄色砂質土
- 2 暗灰黄色粘質土
- 3 褐灰色粘質土
- 4 暗灰黄色粘質土 (炭・焼土含)
- 5 灰黄褐色砂質土 (炭・焼土粒含)

第398図 土壌159~161 (1/30)





第399図 土壙162・163 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第400図 土壙162出土遺物 (1/3)

土壙162 (第303・399・400、  
図版49-1・2)

土壙161の約70cm南側に位置する土壙で、土壙163を切る。平面形は歪な楕円形を呈し、長軸150cm、短軸93cm、深さ64cmを測る。壁は急斜に落ち込み、北側に段をもつ。出土遺物は少量の中世土器細片と円板状土製品C48である。時期は室町時代と考えられる。(高田)

土壙163 (第303・399図、図版49-1)

15B・C区に位置し、北端を土壙162に切られる。平面形は「L」字状を呈し、東西長280cm、現存する南北長160cmを測る。幅は南北で87cm、東西でやや広くなり100cmを測る。底は平坦で、断面形は箱形を呈する。

出土遺物は少量の中世土器細片のみである。検出状況等から周辺の遺構と近い時期と考えられる。(高田)

土壙164 (第303・401図)

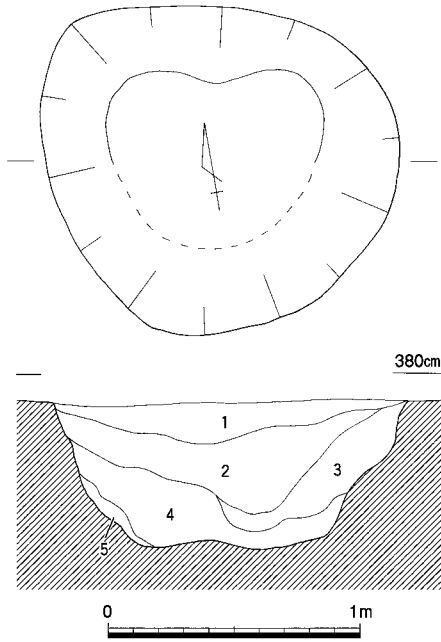
15B区に位置し、建物8と溝122の間で検出した土壙である。平面形はやや歪な円形を呈し、径140cm前後を測る。断面形は逆台形を呈し、深さは58cmを測る。埋土は周辺の遺構に酷似する。

出土遺物はないものの、検出状況から室町時代に属するものと考えたい。(高田)

土壙165 (第303・402図)

16C区で検出された土壙である。掘り方平面形は長方形で、長さは106cm、幅は89cmを測る。断面形は箱形で、底面はほぼ水平である。検出面からの深さは10cmである。

須恵器蓋1250が出土しているが、時期は中世と思われる。(柴田)



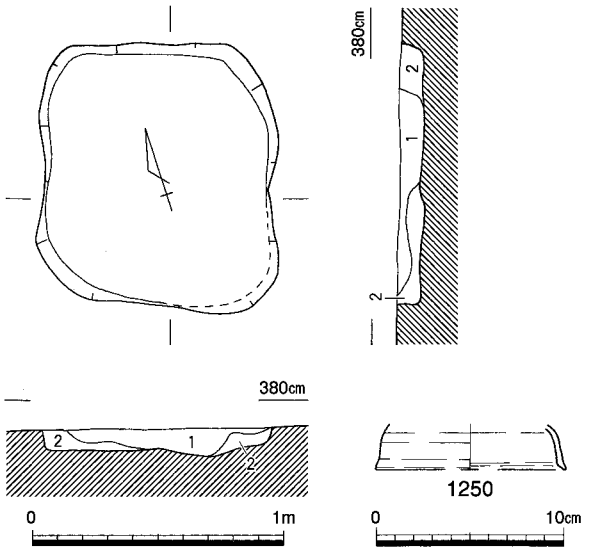
- 1 暗灰黄色砂質土
- 2 灰黄色砂質土
- 3 暗灰色砂質土
- 4 暗褐色砂質土
- 5 灰色粘質土

第401図 土壌164 (1/30)

土壌166 (第303・403図)

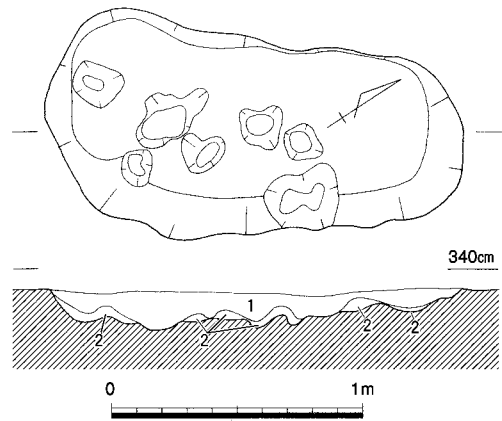
18C区に位置する土壌で、溝130を掘り上げた後にその西肩で検出した。平面形は不定形で、長辺160cm・短辺約80cmを測る。底面は凸凹しており、数カ所小穴が存在する。

埋土は1層に鉄分を多く含む褐灰色粘質微砂。遺物は須恵器の小片が数点出土しているが、時期を明確に示すものはなかった。検出状況から古代に帰属すると思われる。(松尾)



- 1 淡灰黄色砂質土 (炭・焼土多含)
- 2 暗灰褐色砂質土 (炭・焼土少含)

第402図 土壌165 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 褐灰色粘質微砂 (鉄分多含)
- 2 暗茶褐色粘質土

第403図 土壌166 (1/30)

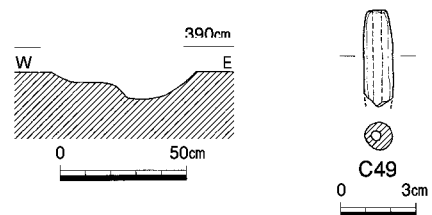
4 溝

溝109 (第305・404図)

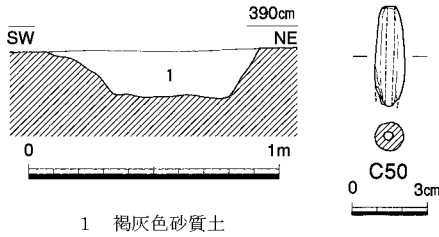
12B区南端からはじまる溝で、南北方向の軸線をもち南側が深くなる。幅57cm、深さ11cmを測る。出土遺物が少なく時期を判断しがたいが、土壌129を掘削しており中世の遺構のなかでもかなり新しい段階に属するとみられることや、東側の溝115・116とわずかに軸線方向がずれることなどから、中世集落廃絶後の水田に伴う可能性も考えられる。南端では直交する細い溝が分岐する。(宇垣)

溝110 (第305・405図)

溝109の東に平行して所在する溝で、幅83cm、深さ19



第404図 溝109 (1/30)・出土遺物 (1/3)



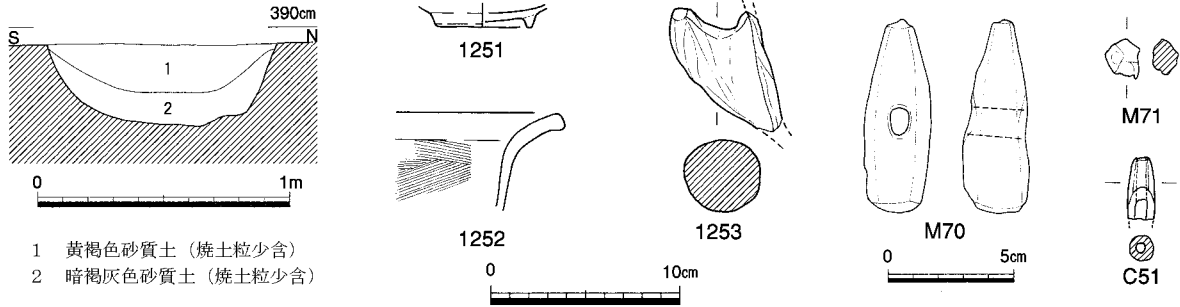
第405図 溝110 (1/30)・出土遺物(1/3)

cmを測る。

軸線に直交し東西方向をとる溝によって溝109に接続するほか、北端でも東側に浅い溝が分岐する。(宇垣)

溝111 (第305・406図)

溝109・110に斜交し北西-南東方向をとる溝で、幅92cm、深さ32cmを測る。出土遺物から中世前半の遺構と判断されるが、中世の遺構の南北方向の軸線とは異なって



第406図 溝111 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

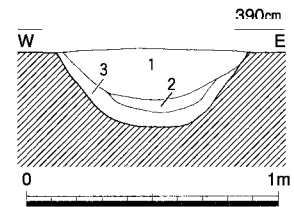
おり、遺構は古代で埋土に重複した中世の遺構の遺物が混入している可能性も否定できない。須恵器もかなり含まれており、M70・71は時期を中世に限定することはむずかしい。(宇垣)

溝112 (第305・407図)

南北方向をとる幅76cm、深さ31cmの溝で断面は逆台形をなす。中世の他の遺構を掘削しており溝109と同様の時期とみられる。南部が細くなるのは削平のためであり、南に流下するとみられる。(宇垣)

溝113 (第305・408図)

14ライン北東端にかかる位置で検出した小規模な溝で、溝114~116に平行する。幅48cm、深さ9cmを測る。溝114~116と一連の遺構である。(宇垣)



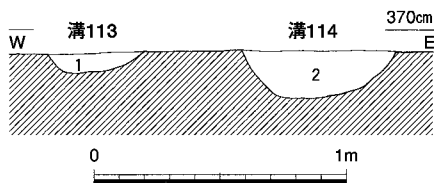
第407図 溝112 (1/30)

溝114 (第305・408・409図)

14B・C区に位置する南北溝である。北側は調査区外になり、南端は溝117に接する箇所であって浅いたわみ状に広がって終わる。溝118と重複し、本溝のほうが新しい。溝幅は60~120cmで、たわみ状の部分で400cmを測る。深さは20cm前後を測り、断面形は逆台形を呈する。

図示した遺物は、土師器鍋、瓦質鍋と砥石である。このほかに鉄滓が出土している。(高田)

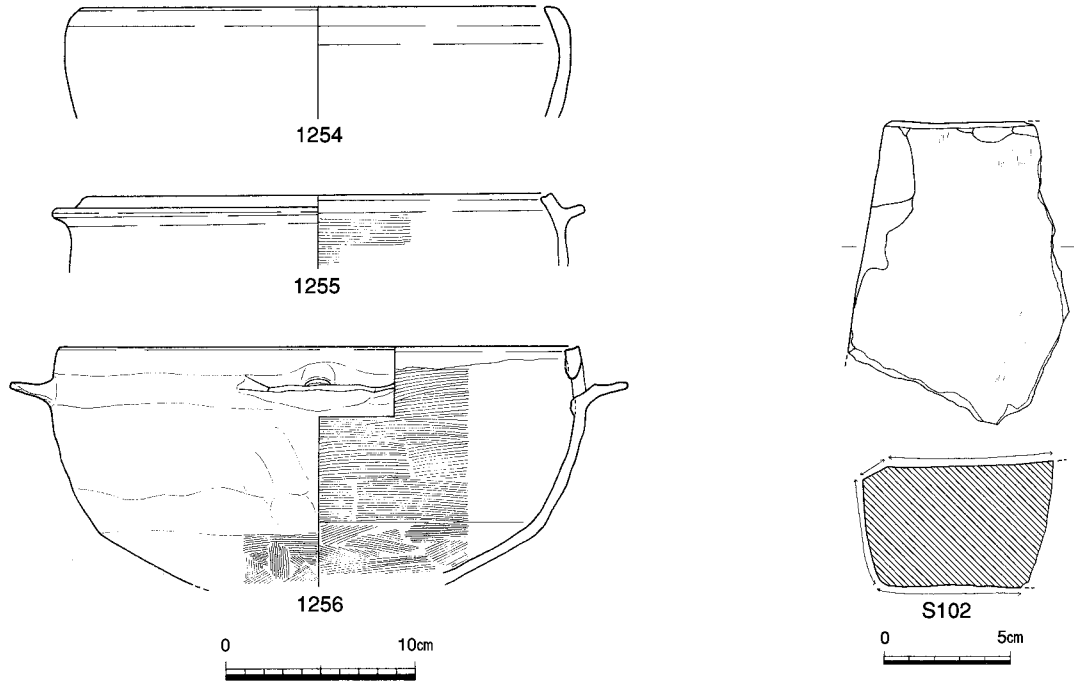
溝115 (第303・305・410~414図、図版49-3, 86-1)



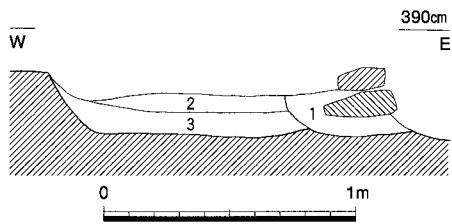
第408図 溝113・114 (1/30)

14B・C区に位置する南北溝で、北側は調査区外となる。Cライン付近で3条に分岐し、南側の「百間川原尾島遺跡4」の「溝89~91」に接続すると考えられる。3条の溝は時期差で東側が順次新しくなる。最も東側の溝肩口の一部には石組みがみられ、西側の溝は建物6に切られる。周辺の溝群と同様、屋敷地の東端を画する溝と考えられる。



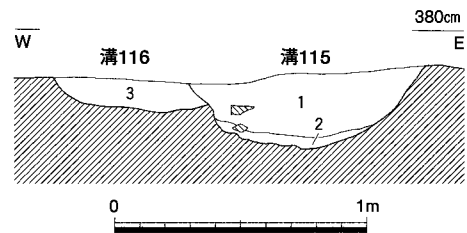


第409図 溝114出土遺物 (1/4・1/3)



- 1 にぶい黄褐色粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 2 にぶい灰色粘質微砂
- 3 灰黄色粘質微砂

第410図 溝115 (1/30)

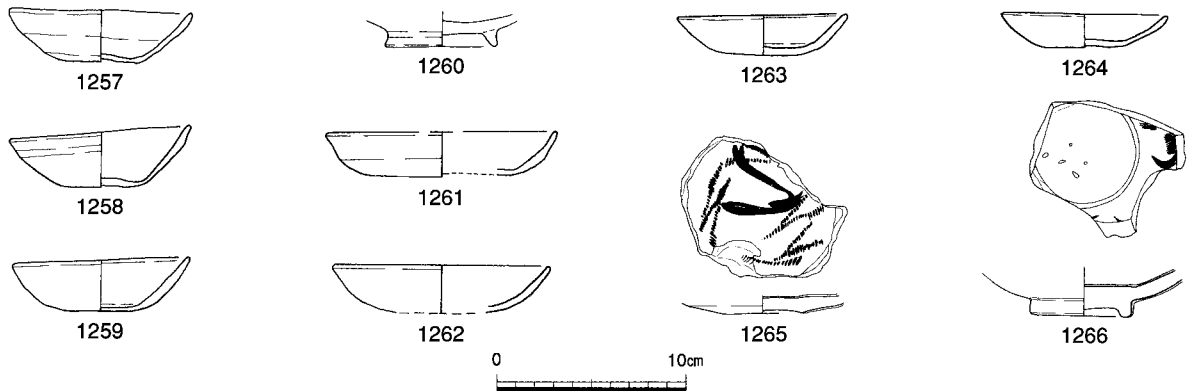


- 1 褐灰色微砂
- 2 暗灰色微砂
- 3 灰褐色微砂

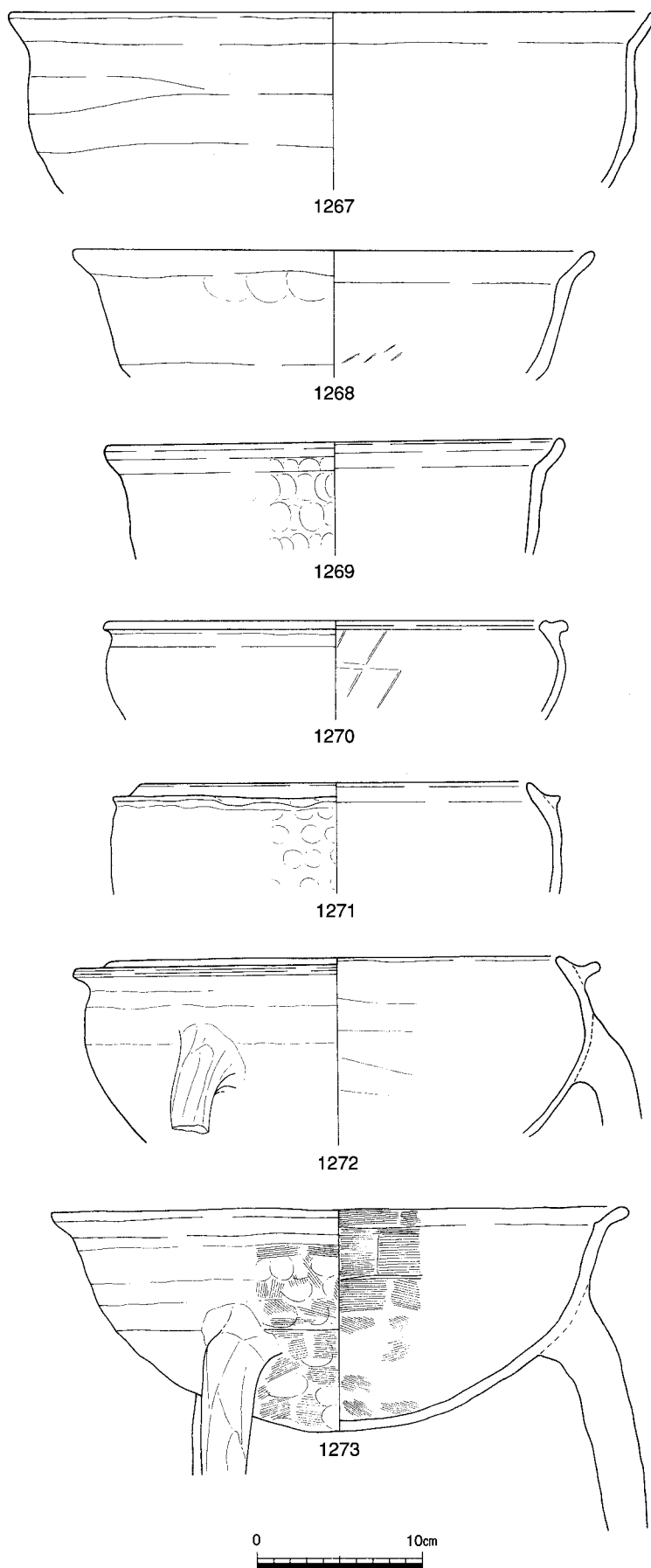
第411図 溝115・116 (1/30)

出土遺物は多様なものがある。土器は土師器の椀・皿・鍋、瓦質の壺・捏鉢・火鉢、青磁碗・皿、備前焼の甕・壺・播鉢である。M72～76は鉄釘、C52～54は備前片焼転用の円板状土製品である。

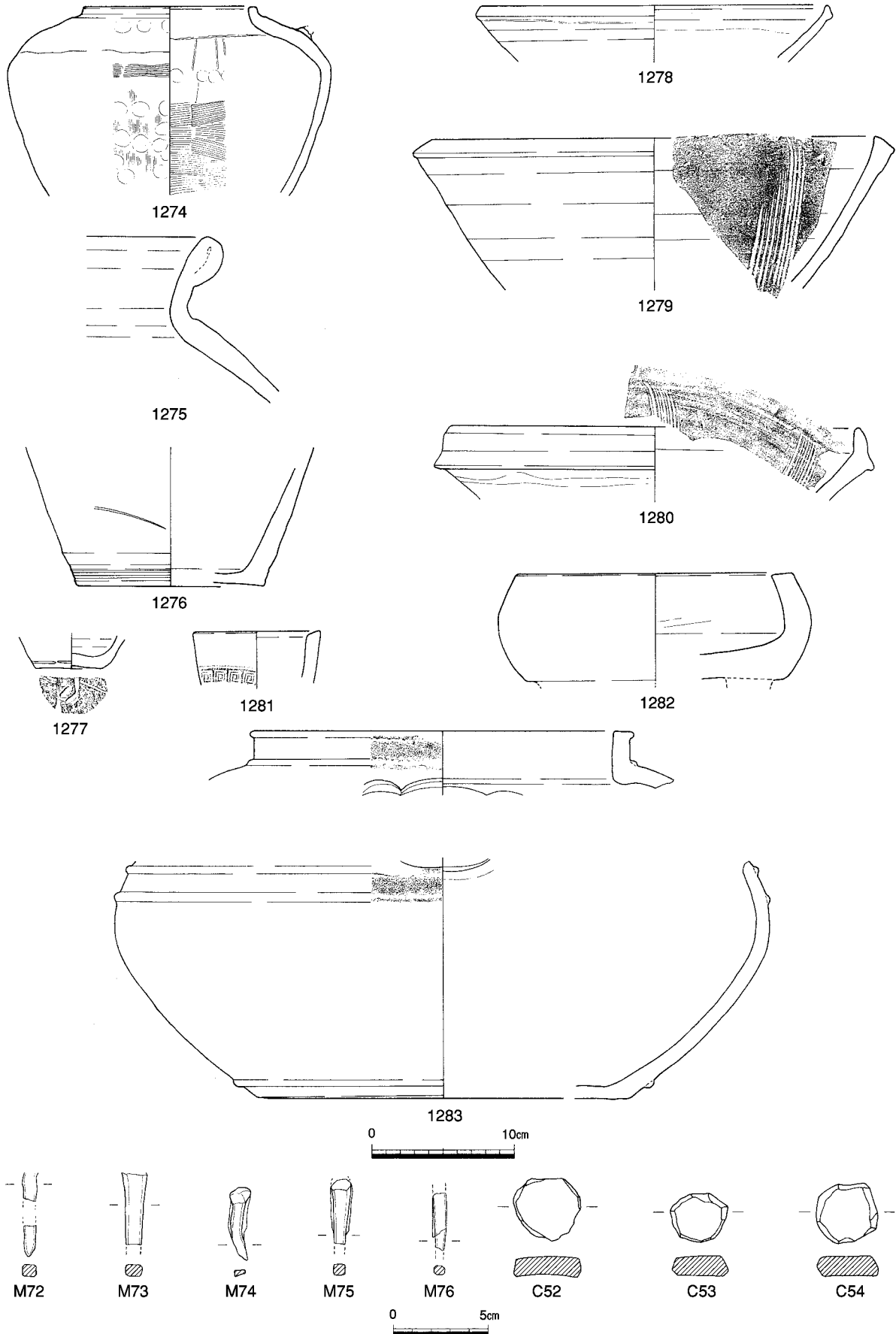
出土遺物は時期幅があるが、溝の最終的な埋没は室町時代後期と考えられる。 (高田)



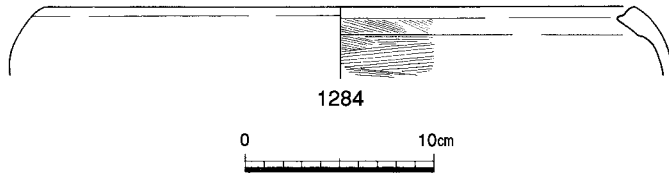
第412図 溝115出土遺物① (1/4)



第413図 溝115出土遺物② (1/4)



第414図 溝115出土遺物③ (1/4・1/3)



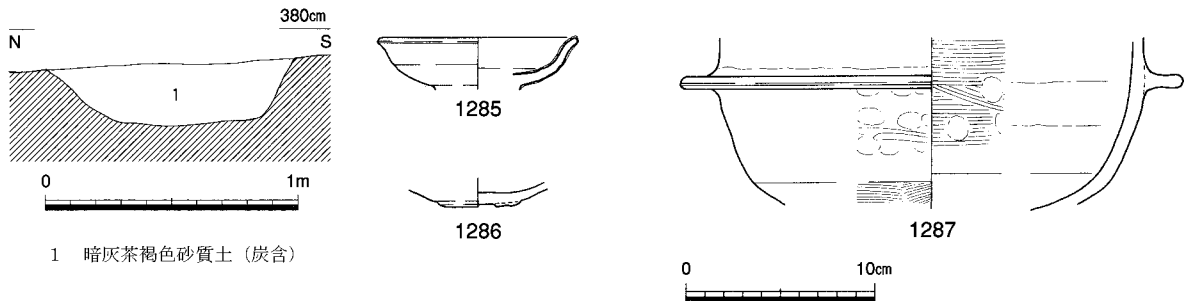
第415図 溝116出土遺物 (1/4)

の幅は65cm、深さ15cmを測り、断面形は皿形を呈する。溝底のレベルは溝117の方が深い。

図示した遺物は瓦質鍋である。時期は室町時代と考えられる。(高田)

溝117 (第305・416図)

溝116から西に延びる東西溝である。幅100cm、深さ24cmを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物は白磁碗1285、土師質高台碗1286、瓦質土器鍋1287である。溝の時期は室町時代か。(高田)

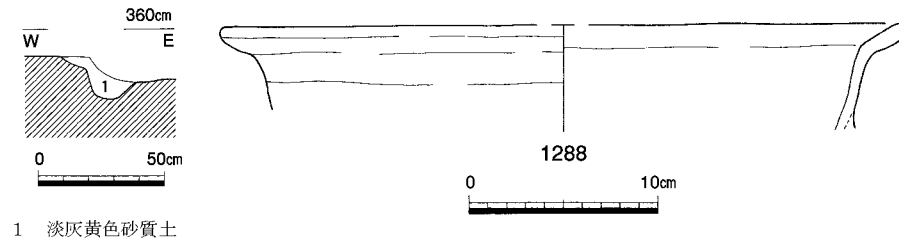


1 暗灰茶褐色砂質土 (炭含)

第416図 溝117 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝118 (第305・417図)

14B区に位置する「T」字形の溝である。溝114・116に切られ、東端は溝115で終わる。西端は浅いたわみ状で途切れ、南側は浅い土壇状の落ち込みに注いでいる。溝幅は30cm前後、深さは10~15cmと浅い。



1 淡灰黄色砂質土

第417図 溝118 (1/30)・出土遺物 (1/4)

出土遺物は中世土器細片である。

1288は土師器の土鍋である。

時期は中世と考えられる。(高田)

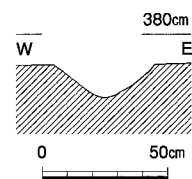
溝119 (第305・418図)

14C区に位置する南北溝で、北端は溝117に接し、南側は『百間川原尾島遺跡4』の「溝88」に接続すると考えられる。また建物6・7、土壇148等に切られる。

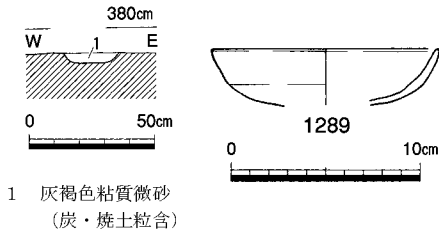
出土遺物は中世土器細片である。時期は中世と考えられる。(高田)

溝120 (第303・419図)

15C区に位置し、「L」字形に折れ曲がる溝である。南端は溝124に接し、西端は後世の削平で不明となる。幅22cm、深さ10cm、断面形は皿~碗形を呈する。出土遺物は中世土器細片がある。(高田)



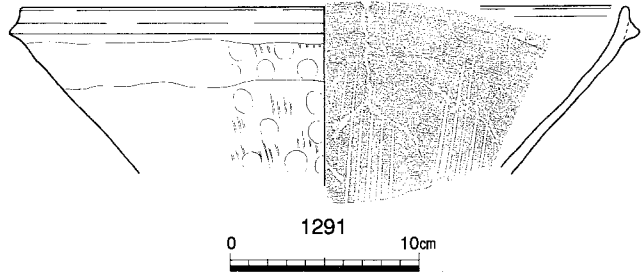
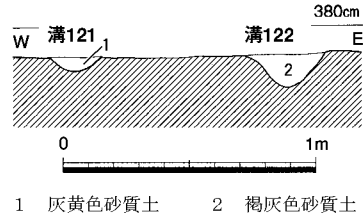
第418図 溝119 (1/30)



第419図 溝120 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝121 (第303・420図)

15・16B・C区に位置する南北溝で、東側の溝122と約60cmの間隔をおいて平行する。北端は浅くなり途切れるが、南端は東西方向の溝127に取り付く。溝幅20cm、深さ5cmを測り、断面形は碗形を呈する。出土遺物には1291の瓦質の挿鉢がある。溝の時期は室町時代か。(高田)



第420図 溝121・122 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝122 (第303・420図)

溝121の東に平行する。北端は調査区外に延び、南端は東西方向の溝127に取り付く。幅32cm、深さ12cmを測り、溝121よりやや深い。断面形は「V」字形ないし碗形を呈する。出土遺物には1290の青磁碗のほか中世土器細片がある。溝の時期は周辺の遺構同様に室町時代と考えられる。(高田)

溝123 (第303・421図)

15・16B・C区に位置する「L」字形に折れ曲がる溝で、溝124を切る。幅45cm、深さ6cmを測る。断面形は皿形を呈する。出土遺物は中世土器細片等で、溝の時期は室町時代と考えられる。(高田)

溝124 (第303・421図)

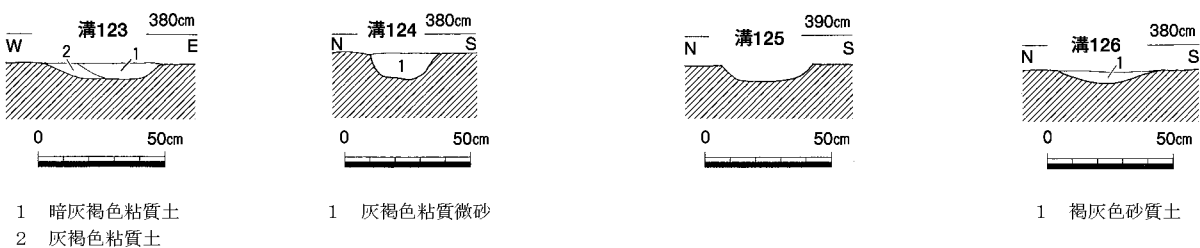
溝123の東西溝に平行し、東端を切られる。溝の規模は幅25cm、深さ10cmを測り、断面形は逆台形を呈する。出土遺物は中世土器細片のみで、溝の時期は室町時代と考えられる。(高田)

溝125 (第303・421図)

15C区に位置し、東西方向の溝124・127間で検出した。周囲の中世遺構が東西あるいは南北方向に揃うのに対し、主軸がそれと異なる。遺物はないが、埋土は中世遺構のものに類似する。(高田)

溝126 (第303・421図)

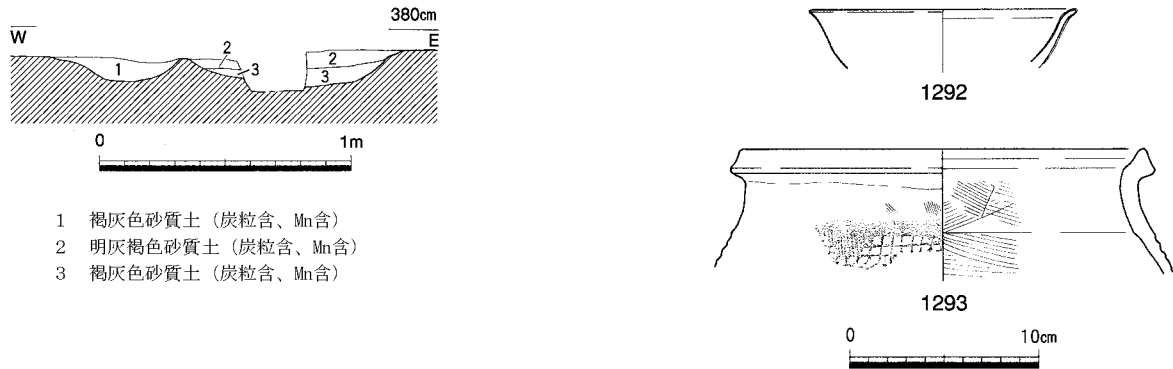
16C区に位置する東西溝である。東端は浅くなって途切れ、西端は『百間川原尾島遺跡5』の「溝40」につながると考えられる。断面位置の幅40cm、深さ4cmで、西に向かって深くなる。(高田)



第421図 溝123~126 (1/30)

溝127 (第303・422図)

15・16C区に位置する東西溝である。新旧2条の溝が重複し、南側が深くて新しい。溝幅135cm、深さ20cmを測り、西に向かってさらに深くなる。南側に平行する溝126とは約3.5mの間隔にあり、この間に遺構はほとんどなく、通路のような機能が想定される。時期は室町時代後期か。(高田)



- 1 褐灰色砂質土 (炭粒含、Mn含)
- 2 明灰褐色砂質土 (炭粒含、Mn含)
- 3 褐灰色砂質土 (炭粒含、Mn含)

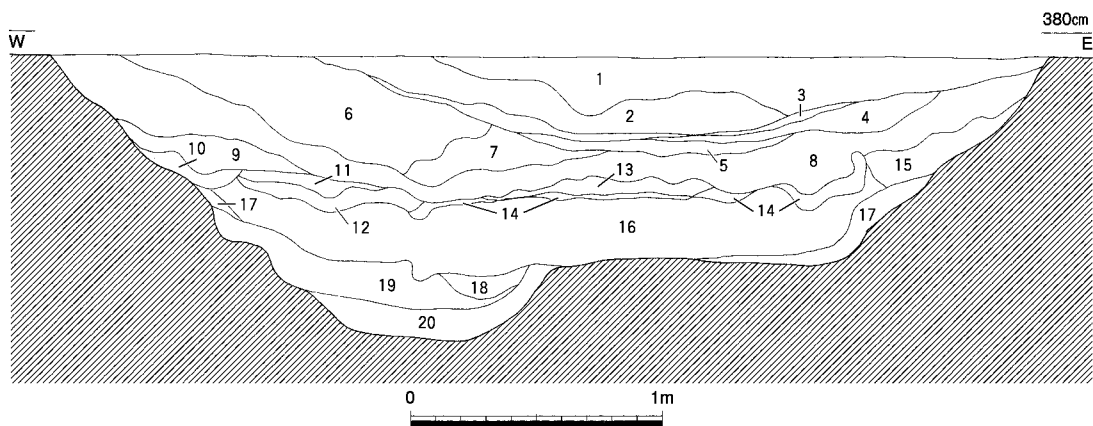
第422図 溝127 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝128 (第303・423・424図、図版50-1. 86-1)

17B・C区で検出された溝で、ほぼ南北方向に真っ直ぐのびている。上端幅は350~400cm、深さは100~110cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈するが、底面には凹凸などが認められる。

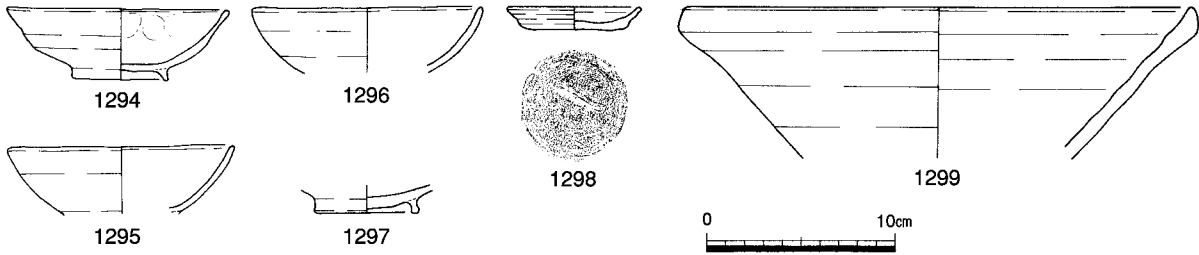
堆積土の観察では、大きく4時期の底面が想定された。底面の高さは時期を追って高くなり、流路も東側に偏っていることが確認された。

出土遺物としては、土師質高台付椀1294~1297、小皿1298、東播系の捏鉢1299などがあるが、これまでの調査などから、遺構の時期は14世紀以降と思われる。(柴田)



- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 暗灰茶褐色砂質土 (暗茶褐色ブロック多)       | 11 暗灰茶褐色砂質土                  |
| 2 暗灰褐色砂質土 (暗茶褐色ブロック含)        | 12 灰黄色微砂 (鉄分沈着、流滞水の互層)       |
| 3 灰黄褐色砂質土                    | 13 暗茶褐色砂質土 (粗砂多くまじる)         |
| 4 暗灰色粘質微砂 (下面にマンガン沈着)        | 14 暗灰色粗砂                     |
| 5 暗灰褐色粘質微砂 (下面にマンガン沈着)       | 15 暗灰褐色粘質微砂                  |
| 6 暗灰茶褐色粘質微砂 (鉄分沈着、下面に灰白色砂層)  | 16 暗灰色砂質土 (粗砂~シルトの互層、3面の粗砂層) |
| 7 暗灰茶褐色粘質微砂 (鉄分沈着、下面にマンガン沈着) | 17 暗灰茶褐色粘質微砂                 |
| 8 暗灰茶褐色粘質微砂                  | 18 明黄灰色粘質微砂                  |
| 9 暗灰黄褐色粘質微砂 (鉄分沈着)           | 19 暗灰色粘質微砂                   |
| 10 灰白色微砂 (流滞水の互層)            | 20 暗灰色砂質土                    |

第423図 溝128 (1/30)

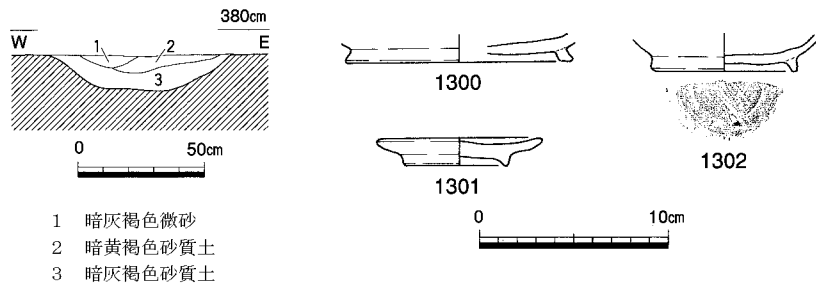


第424図 溝128出土遺物 (1/4)

溝129 (第303・425図)

17B・C区で検出された溝で、ほぼ南北方向に真っ直ぐのびている。上端幅は70cm、深さは13cmを測り、断面形は概ね逆台形を呈する。

出土遺物としては、須恵器杯1300・1302、土師器皿1301などがあるが、中世の土器などは認められない。ただし、これらが遺構の時期を示すかどうかは明らかではないと考えられる。



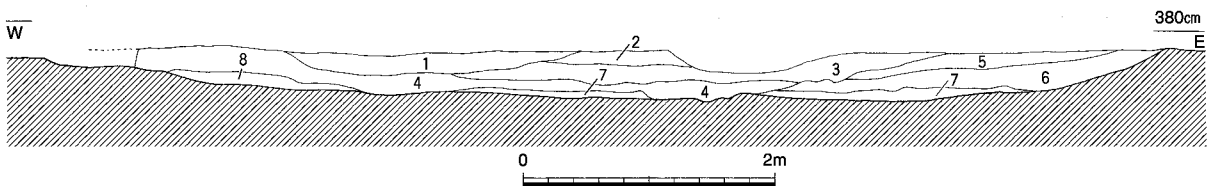
第425図 溝129 (1/30)・出土遺物 (1/4)

(柴田)

溝130 (第303・426～430図、図版50-2・3、86-1)

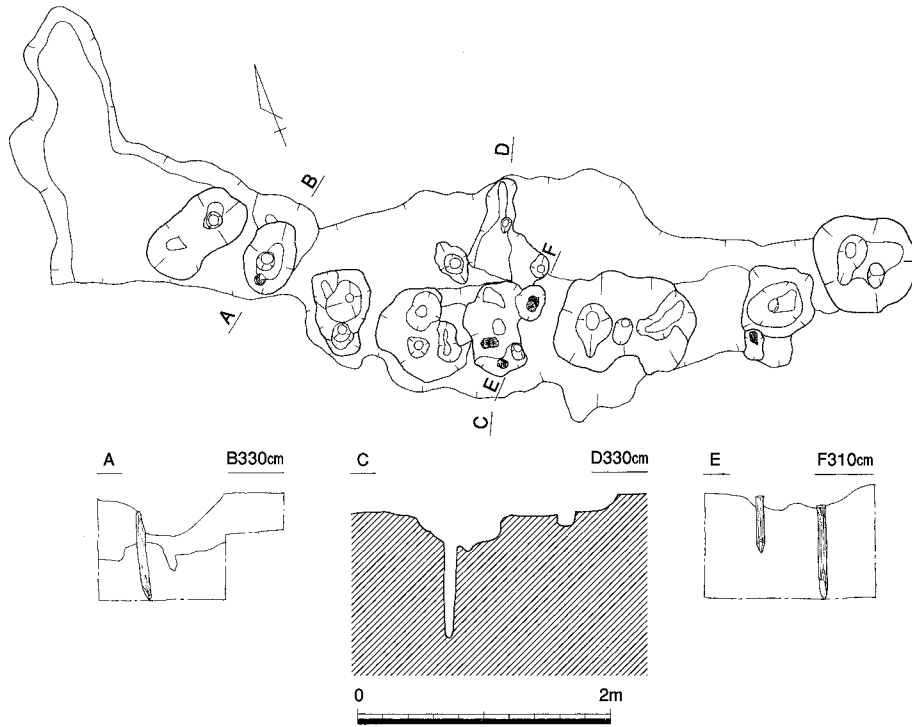
18B・C区で検出した北から南に流走する溝である。『百間川原尾島遺跡5』「溝35」の続きで、古代の祓所に近接した溝との評価を得ている。溝の規模は上幅で9～10m、深さは検出面から40cmを測る。断面形はゆるやかに傾斜し底面は凹凸が激しい。溝の埋土は大きく上・中・下の三層に大別できる。上層は第426図の1層で、最終流路と考えられる『百間川原尾島遺跡5』「溝47」に対応し、13世紀後半の時期に属す。中層は2～6層に対応し、ラミナ状に埋土が堆積していることから、ある程度の流水を伴いながら埋没していった過程を想定することができる。下層は7・8層で埋土は鉄分の沈着が著しい。なお、ほとんどの土器がこの下層からの出土であった。

溝の下流側の河床には、第427図に示すような溝を横切る施設が存在した。この施設は『百間川原尾島遺跡5』において「落ち込み列」と称されるものと酷似しており、『百間川原尾島遺跡5』「溝35」の「落ち込み列1」から約5m上流側に位置する。この施設は幅50～110cm、深さ約20～30cmの落ち

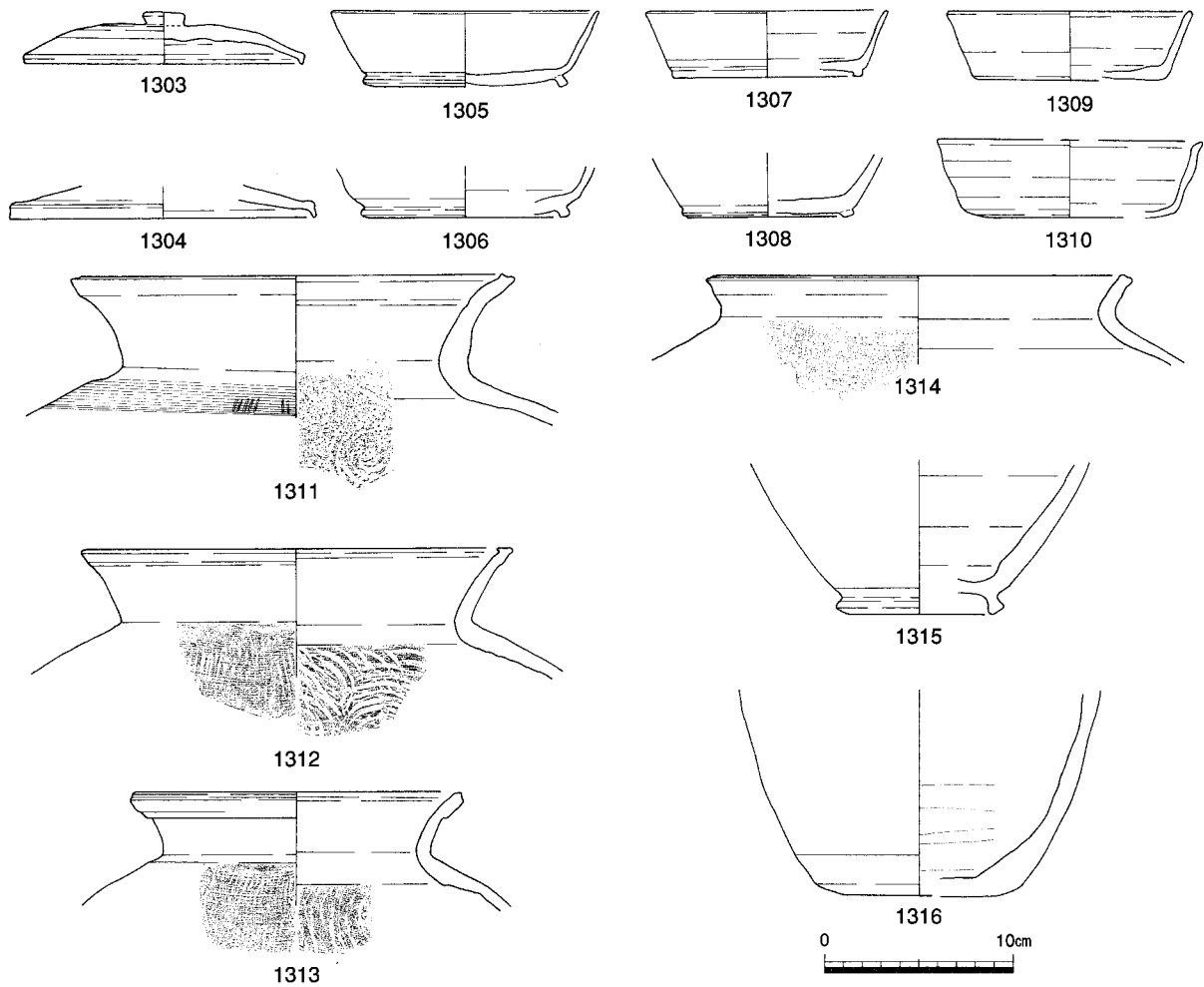


- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 黄灰色粘質微砂 (炭・Fe多含)      | 5 黄灰色微砂 (白～赤黄色微砂ラミナ状に含) |
| 2 白灰色粘質微砂 (白黄色微砂ラミナ状に含) | 6 灰色粘質微砂 (Fe沈着多)        |
| 3 白灰色微砂 (Fe多含)          | 7 褐灰色粘質微砂 (Fe含)         |
| 4 白灰色微砂 (赤黄微砂ラミナ状に含)    | 8 暗褐灰色細砂 (Fe沈着多)        |

第426図 溝130 (1/60)

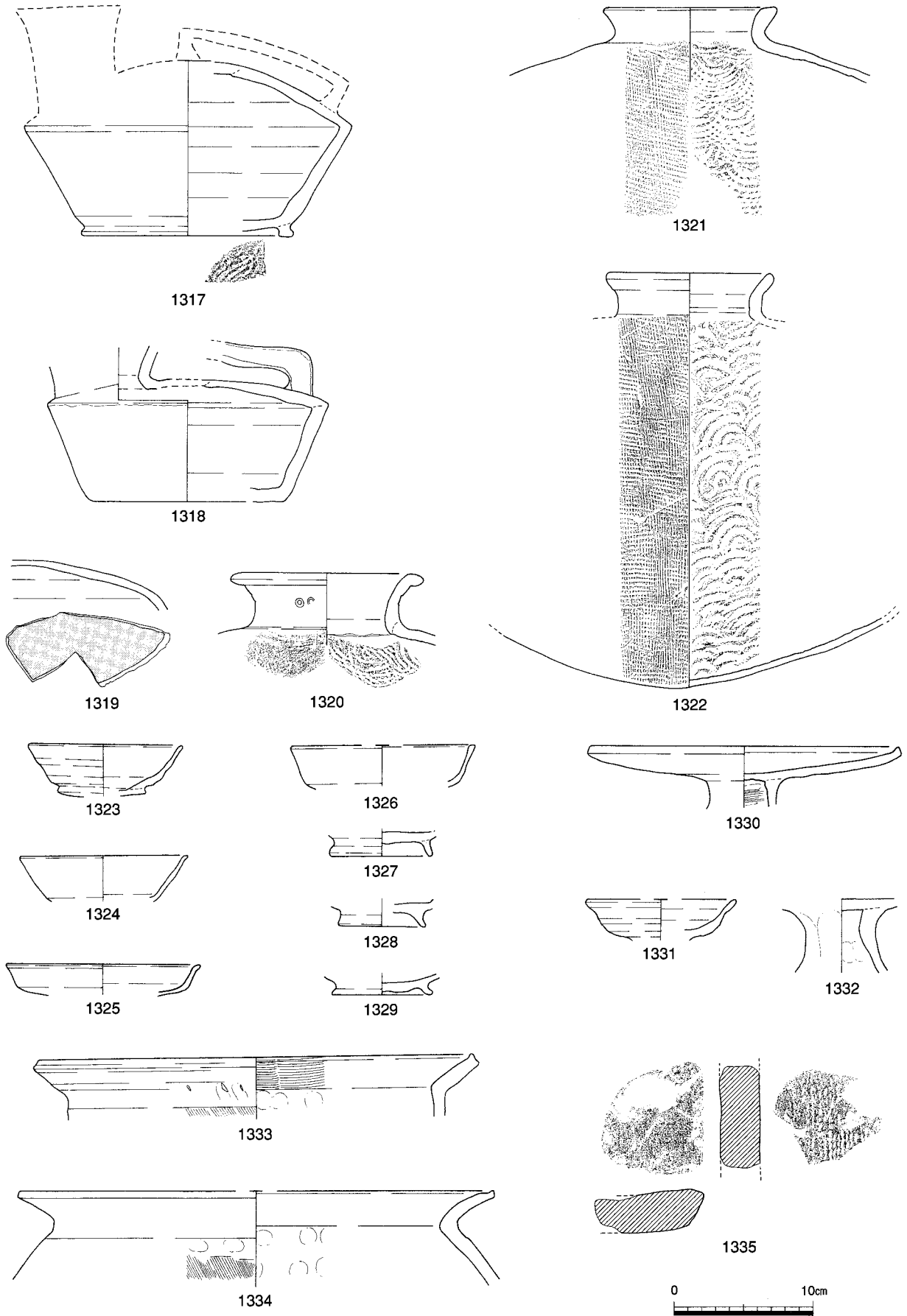


第427図 溝130杭列 (1/60)



第428図 溝130出土遺物① (1/4)





第429図 溝130出土遺物② (1/4)



写真5 溝130 作業風景（南西から）

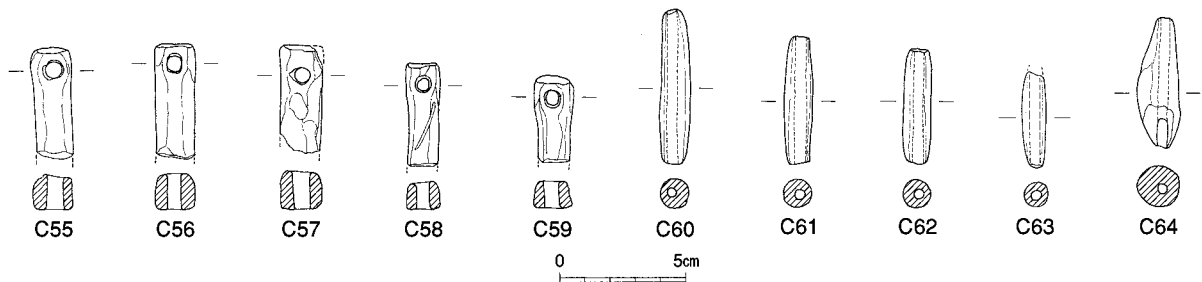


写真6 溝130 杭列断面（南東から）

込みが連なり、数基の木杭・杭穴がみられる。杭は直径60cm位の丸杭で、先端を加工し尖らせ、樹皮が残っている。杭は海拔高2.1m～2.5mまで打ち込まれ、上端は海拔高3.0m付近から上が欠損している。杭穴は流水によって杭が流された結果残ったものと考えられ、内部に自然石が埋没している例も散見できる。落ち込み列全体の規模は、東西長6.8m、南北長1.7mを測る。平面形態は単純な直線ではなく、弓状に若干の弧を描き、上流側に開く。

この落ち込み列は『百間川原尾島遺跡5』で指摘されているように、杭の上端がほぼ下層の上半にあたる高さで欠損していることから、下層段階で廃絶したと考えられ、『百間川原尾島遺跡5』「溝35」で検出している落ち込み列および井堰とそう変わらない時期に機能し、廃絶したものと思われる。

出土遺物は1303～1335までの土器および瓦、C55～C64の土錘がある。1303～1322が須恵器。1303・1304は杯蓋。1305～1310は杯で、底部にヘラ切り調整を行う。1311～1314は甕で、胴部の外面は平行タタキ後にカキメがみられ、内面は同心円文の当て具痕が観察できる。1315・1316は壺であると思われる。1317・1318は平瓶で、1317は有高台、1318は無高台である。1317は粘土円板の充填痕が明瞭に観察でき、底部内面には同心円文の当て具痕がみられる。1319は杯蓋の破片であるが、内面に墨が付着している。この様な土器は『百間川原尾島遺跡5』「溝35」からも出土していて、摩耗痕がみられないことから墨入れと考えられている。1319にも摩耗痕は認められない。横瓶（1320～1322）は口縁端部を外側へ若干折り曲げているもの（1320）とそのまま素直に終らしているもの（1321・1322）とがあるが、どちらも胴部外面は平行タタキ後にカキメ、内面は同心円文の当て具痕がみられる。なお、1320の頸部には竹管文が2か所認められた。1323～1334の土師器には、杯（1323～1329・1331）と高杯（1330・1332）、甕（1333・1334）がある。1325・1326の内外面には赤色顔料が塗布されており、破片なので明瞭でないが、おそらく底部押圧技法により成形されたものと思われる。杯部が浅い高杯（1330）は内外面に赤色顔料が塗布されており、1323同様脚部は面取りがなされている。1335は一枚



第430図 溝130出土遺物③ (1/3)

造りの平瓦破片で、凹面は布目、凸面には縄目タタキが観察でき、端部は凹・凸面共に面取り調整がなされている。このような瓦類はこの溝に伴う一連の調査で出土していて、軒先瓦の出土はないものの、古代の瓦が出土することの意義は大きいと思われる。

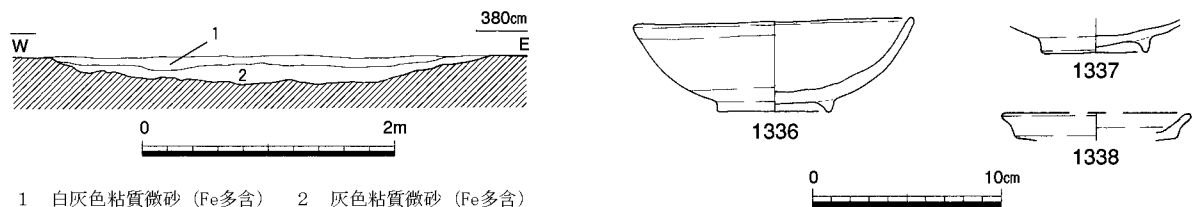
これら出土遺物の年代観は、1323・1324・1327～1329・1331が若干新しい様相を有しているものの、これは13世紀後半まで機能する同溝の年代幅を示す資料の一端であり、これ以外の土器はおおむね9世紀第1四半期を下限として、長岡京遷都から平安時代初期の時期を指し示しており、『百間川原尾島遺跡5』で示された年代観とも符合する。

以上、溝130から出土した遺物について詳述してきた。今回の調査で出土した遺物には土器・墨入れ・土錘があるものの、『百間川原尾島遺跡5』「溝35」から出土した遺物とはその構成が全く異なる。すなわち、墨書土器・木製品・金属製品、特に律令的祭祀に伴うと考えられている遺物の欠落を指摘することができる。このような状況は、これらと一連の溝であると思われる『百間川原尾島遺跡2』「溝87」でもいえることである。すなわち、『百間川原尾島遺跡5』「溝35」井堰1・2周辺における遺物（特に律令的祭祀に伴うもの）の集中度の高さを指摘できる訳で、これは大祓による祭祀具が二次的に溝へ祓い流されているとはいえ、祓所は基本的にその付近と思われることから、『百間川原尾島遺跡5』「溝35」の近くに臨時の祓所があった可能性が高いと推察される。（松尾）

溝131（第303・431図、図版86-1）

19B・C区で検出された浅い溝で、北東から南西へのびている。中央部は後世の削平によって失われている。上端幅は2.5m、深さは20cmを測り、断面形は皿状を呈する。19C区では上幅が広がっているが、流路部分の幅はあまり変わらない。

出土遺物としては、土師質の高台付椀1336・1337と小皿1338を図示している。これらの出土遺物から、遺構の時期は13世紀以降と考えられる。（柴田）



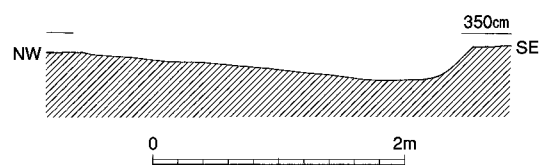
第431図 溝131 (1/60)・出土遺物 (1/4)

溝132（第303・432図）

20B・C区で検出された溝で、後世の削平によってほとんど失われている。上端幅は3～6m、深さは13cmを測る。北西側の肩は緩やかな傾斜である。出土遺物には備前焼小片があり、遺構の時期は近世以降と思われる。（柴田）

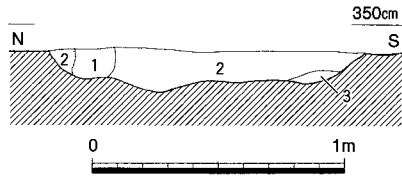
溝133（第303・304図）

22～23B・C区で検出された東西方向の溝1条と南北方向の溝1条によって、T字形を呈する溝である。この溝には平行する溝が確認されており、掘り替えが行われていることが判明している。端幅は



第432図 溝132 (1/60)

第3章 発掘調査の概要



- 1 淡黄灰色粘質微砂
- 2 白灰色粘質土
- 3 淡黄灰色微砂

第433図 溝133 (1/30)

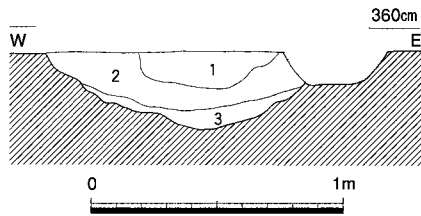
100~140cm、深さは15cmを測り、断面形は皿状を呈する。図示できる遺物は無いが、遺構の時期は近世~近代と考えられる。(柴田)

溝134 (第304・434図)

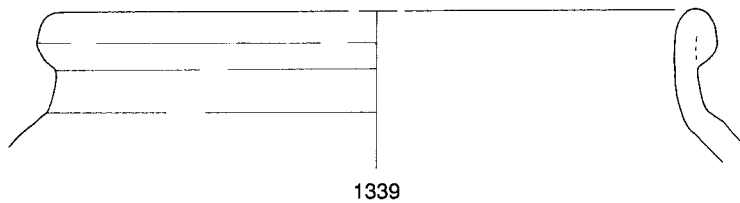
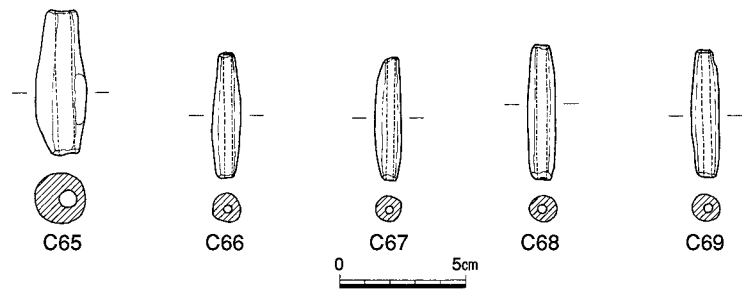
24B・C区で検出された溝で、南北方向に真っ直ぐのびているが、24B区と24C区で膨らむ箇所がある。この溝は丸田と川内との小字境となっている。南端は、西大寺轻便鉄道敷

設工事によって削平されている。上端幅は240cm、深さは60cmを測り、断面形は皿状を呈する。北側の膨らんだ部分では上端幅650cmを測り、土器片や土錘などが出土し、溜まり状になっている。また、この地点では人骨(頭骨片)の小片が出土しているが、埋葬遺構は認められなかった。

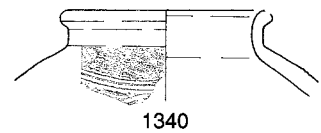
下層の出土遺物としては、備前焼甕1339・壺1340・播鉢1341・碗1342、土錘C65~69を図示している。出土遺物から、遺構の時期は15世紀以降と考えられる。(柴田)



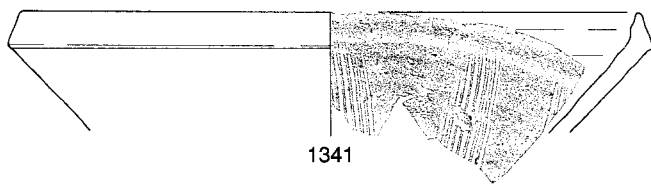
- 1 暗灰黄色粘質微砂
- 2 淡灰褐色粘質微砂
- 3 暗灰色粘質微砂



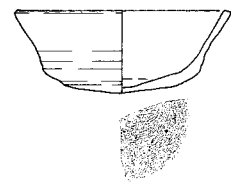
1339



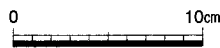
1340



1341



1342

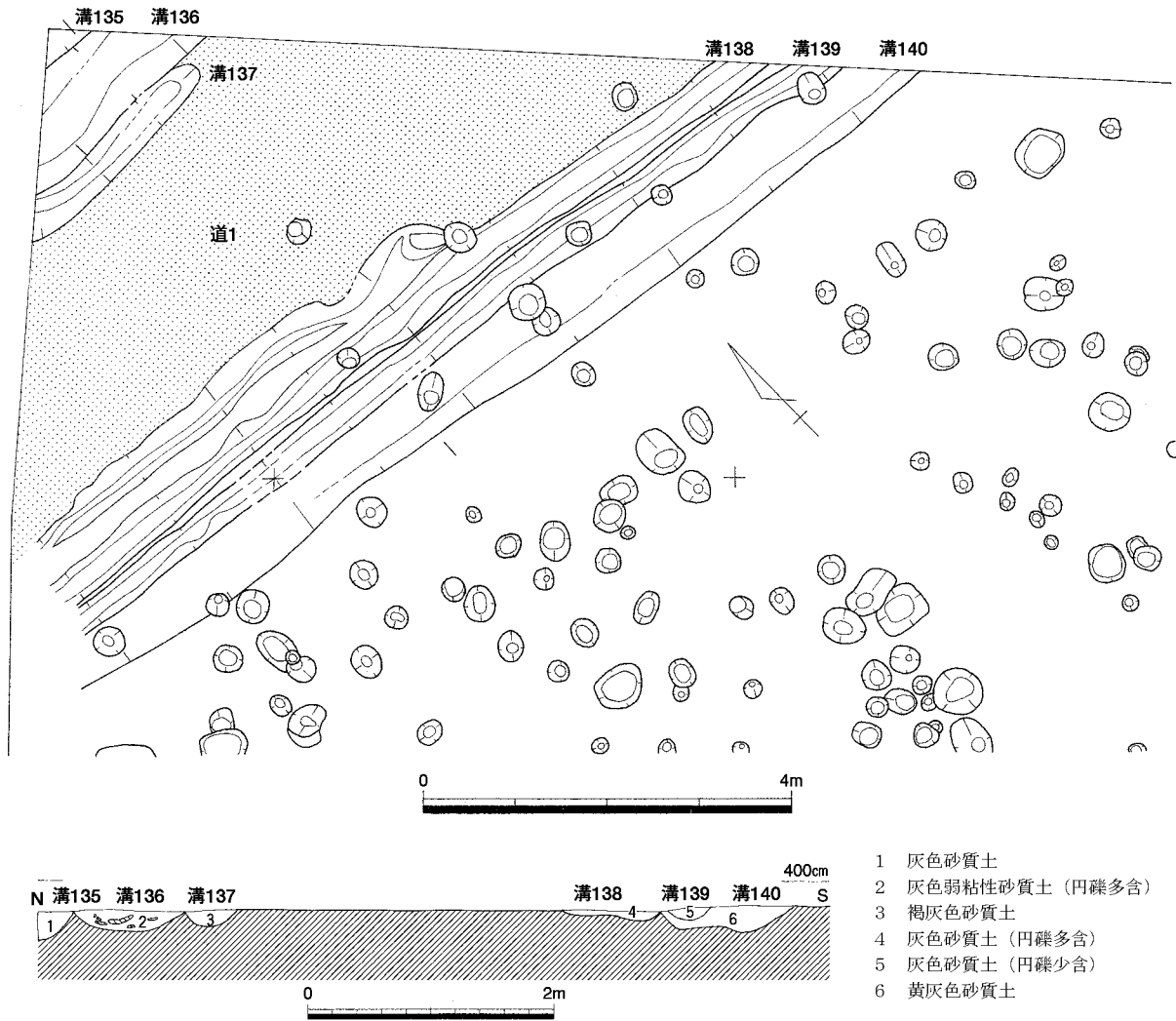


第434図 溝134 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

5 道および溝

道1、溝135~140 (第305・435~438図、図版86-2)

調査区の北端、11B区で検出した。遺構の状態としては平行する溝群であるが、南北2つの溝群の間ではほとんど柱穴が認められず、それらの両側に柱穴群-集落が広がることからこの部分を集落内の道遺構と判断した。



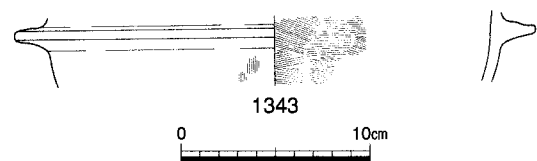
第435図 道1・溝135~140 (1/80・1/60)

南北それぞれに3条の溝があり、側溝が改修され掘り直された結果とみられる。ほとんど切り合いをもたないため溝の掘削順や対応関係の把握はむずかしいが、断面形からすれば溝136と140が対になるとみられる。路面の幅はこの場合で3.85m、溝136と138で3.4mとなり、約2間の幅であった可能性が考えられる。

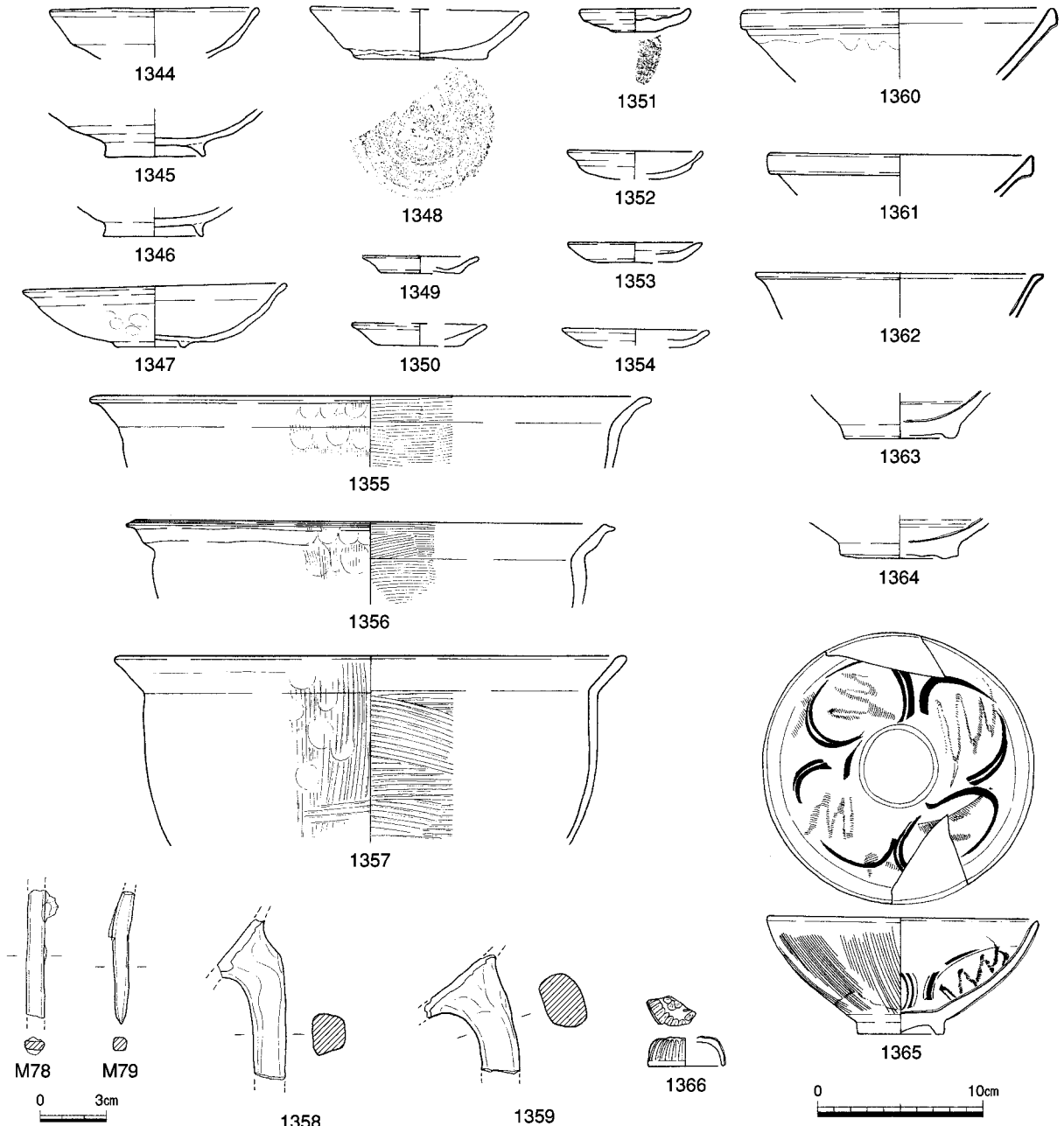
出土遺物は他の溝にくらべて多く、とりわけ溝139から多量に出土した。土師質碗、杯、皿、土鍋、三足鍋、白磁碗、青磁碗、青白磁合子などからなり、13世紀代に位置づけられる。溝139の廃絶の段階で遺物が投棄されたとみられるが、溝139は溝140の埋没後に設けられており溝底の位置も高く3条の溝のうち最も新しい可能性が強い。また、溝138の遺物も大きな時期差を示さず13世紀とみられる。

したがって、これらの溝は13世紀に継続して掘削され埋没したとみることができるが、他の遺構から明らかなように集落は15世紀まで継続しており、13世紀以降は側溝をもたない道に変わったと考える。

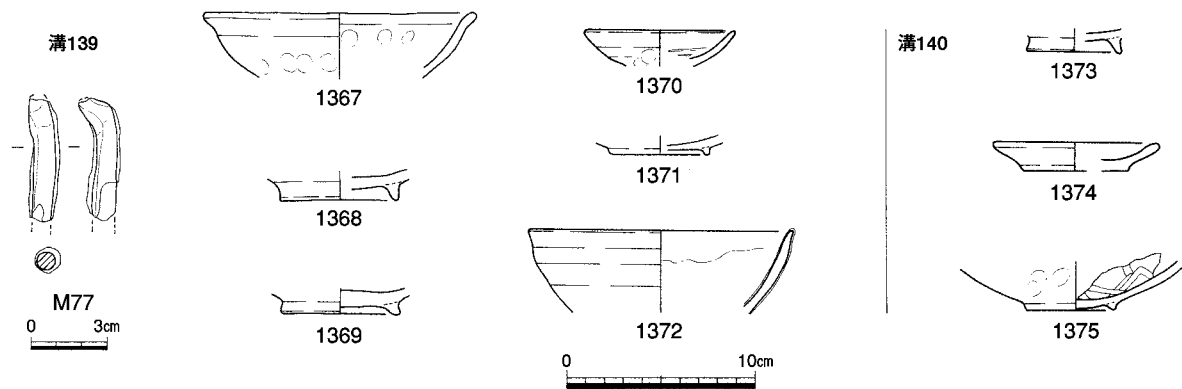
(宇垣)



第436図 溝136出土遺物 (1/4)



第437図 溝138出土遺物 (1/4・1/3)



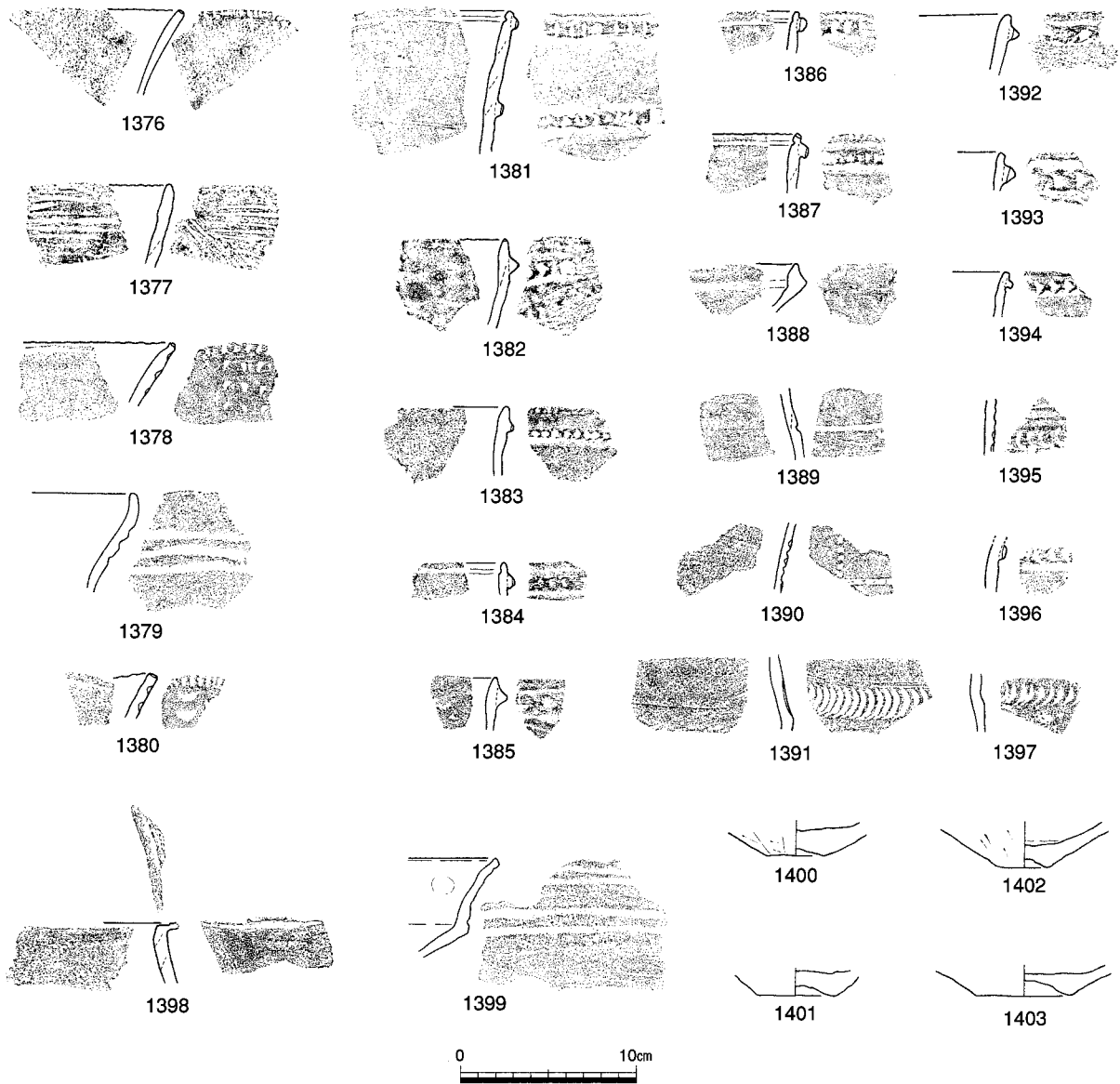
第438図 溝139・140出土遺物 (1/4・1/3)

## 第7節 包含層出土遺物

この節で取り扱う遺物は、おもに包含層や現代溝などからの出土遺物であり、それらのうち図示可能な、または所属時期決定が可能なあるいは特殊な、そして特徴的な形態・胎土をもつ遺物について取り上げた。

縄文土器（第439図）は晩期のもと考えられ、刻み目貼付突帯や爪形文のある深鉢、浅鉢1388・1398・1399などである。溝80からの出土が多く、この期の遺構が存在した可能性もある。

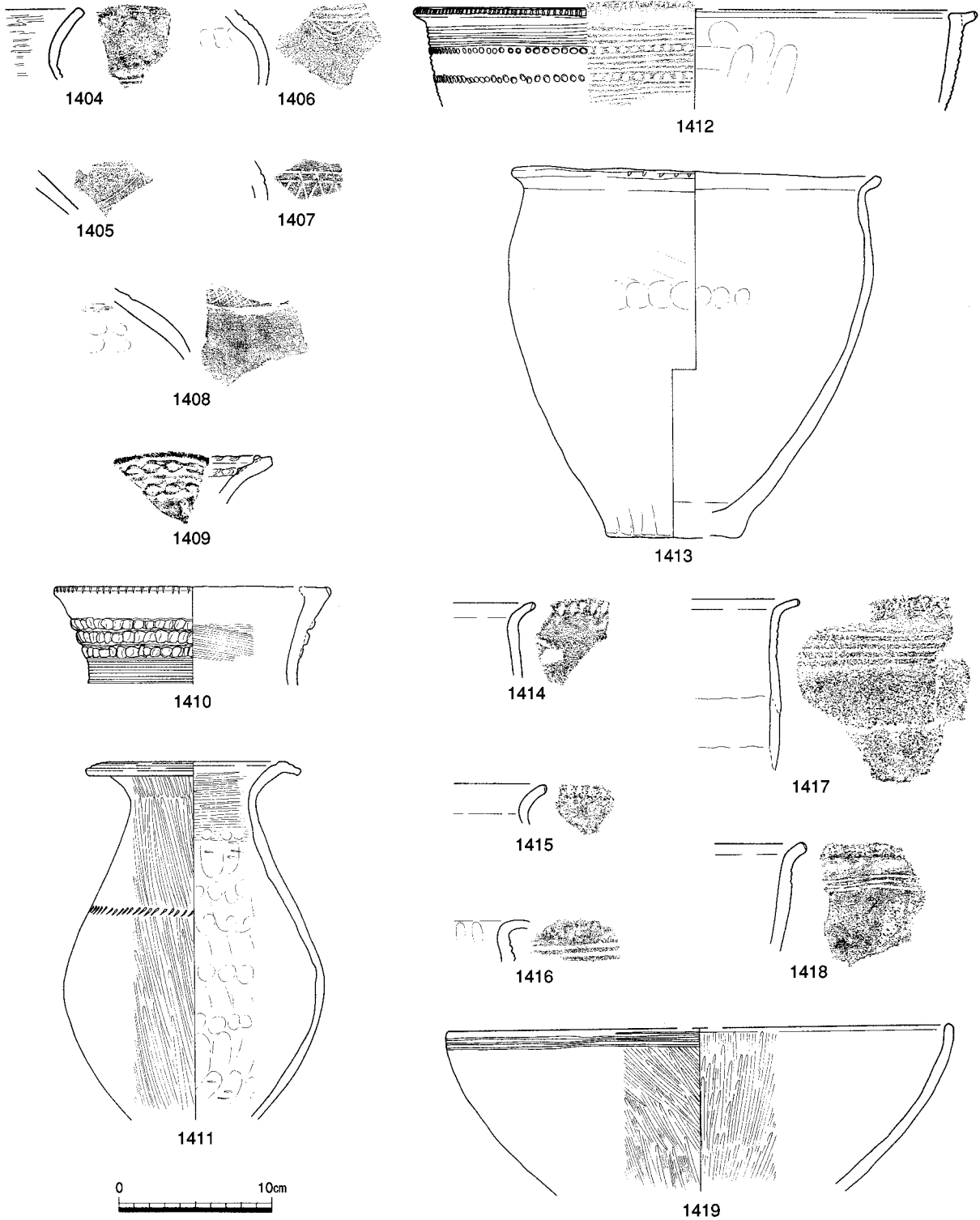
弥生土器（第440図）は前・中期を示している。このうち1412は金雲母を多く含んだ赤褐色を呈し、西部瀬戸内から搬入された可能性がある。第441・442図の弥生後期の土器は多く、壺・甕・高杯・鉢・ミニチュア・器台等が揃っている。1420壺には籠目が残る。1426はS字状浮文を施す器台である。1433は庄内河内型甕で、角閃石を多く含み暗褐色を呈す。1447高杯と1449鼓形器台には内外面に赤色



第439図 包含層出土遺物① (1/4)

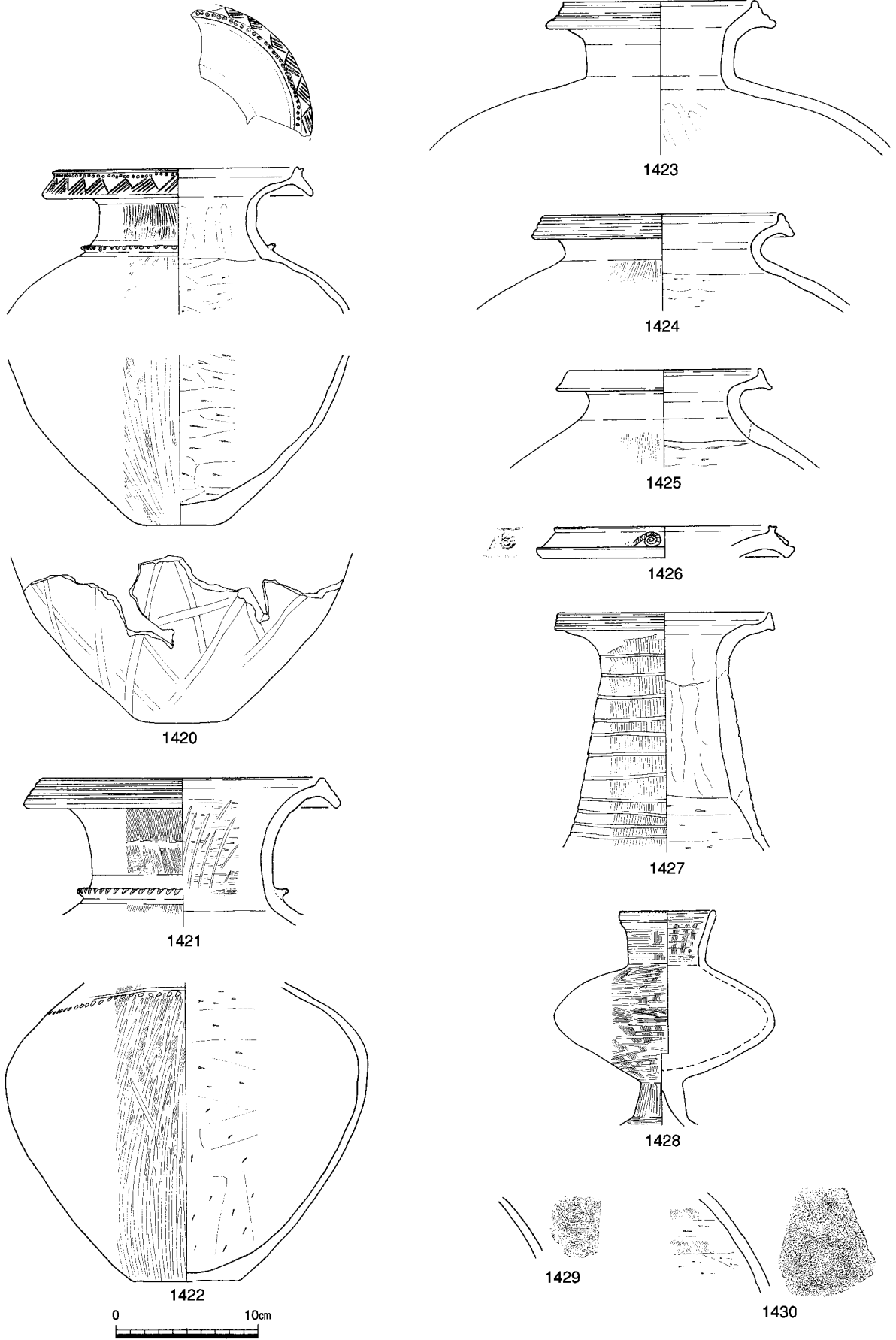
顔料が塗布されている。1450の脚端部は乾燥後粘土で補修したものか。

第443図は古墳時代以降のもので、1454は縄蓆文の施された陶質土器である。1455は須恵器碗で、高台の付け根に突帯が廻る。土師質の皿・杯1456～1458は古代、1459～1462・1465瓦器は13～14世紀にかけての和泉型と考えられる。1462の底部にはヘラ記号が残る。土師質皿1463・1464・1466、土師質鍋1477も13世紀代か。青・白磁1467～1474は11世紀後半～14世紀末頃にかけてとみられる。1475・

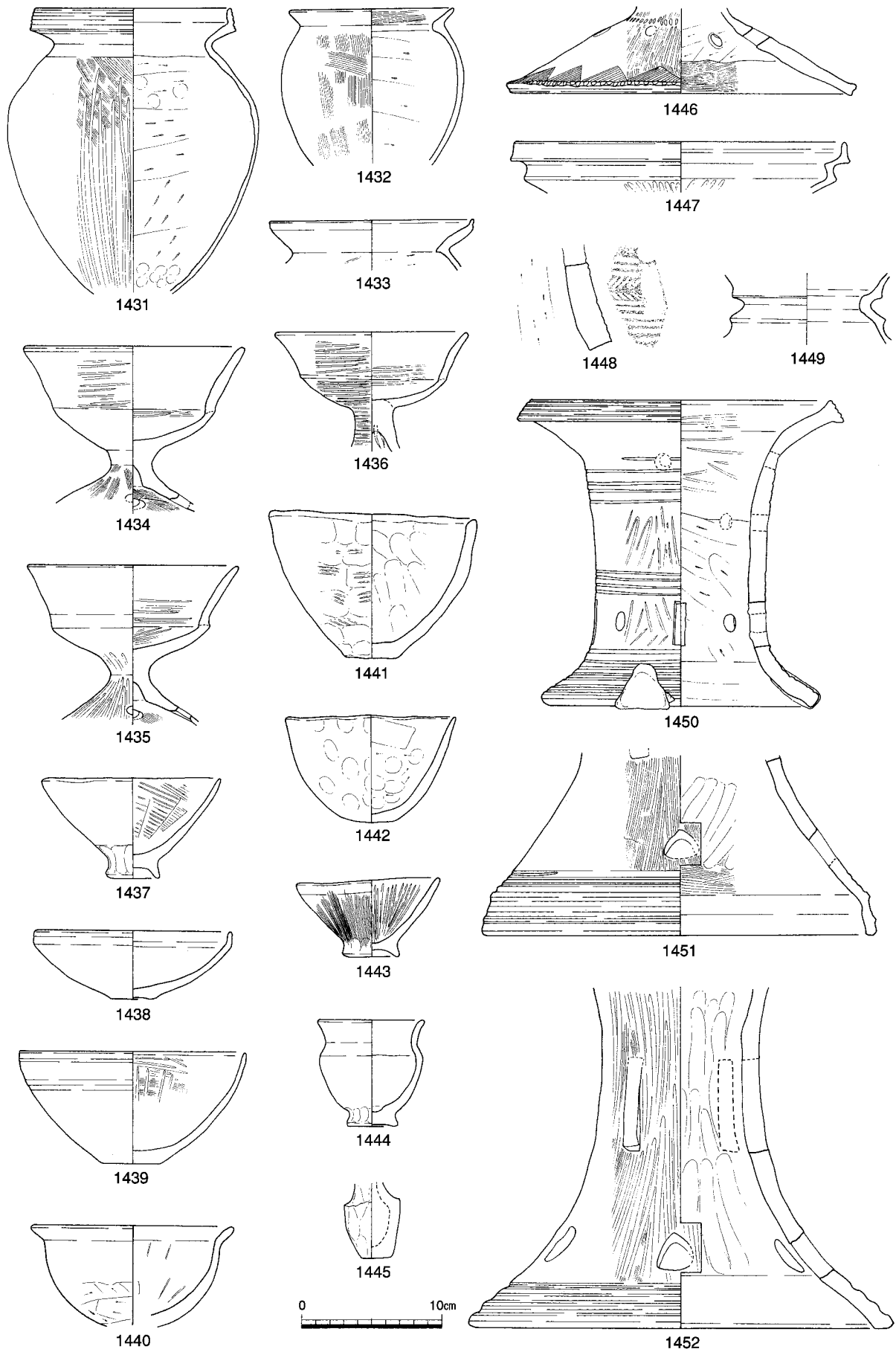


第440図 包含層出土遺物② (1/4)

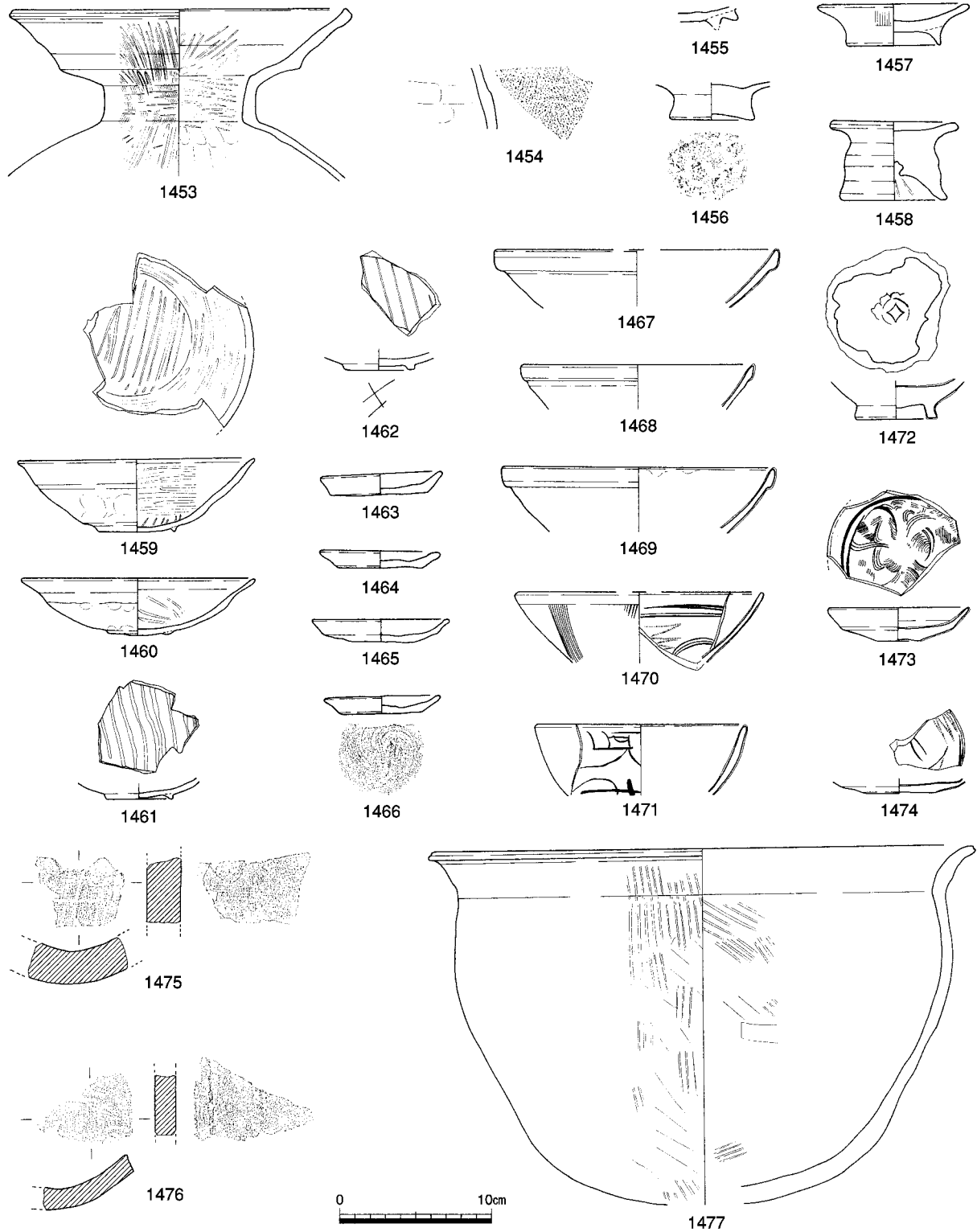




第441圖 包含層出土遺物③ (1/4)



第442図 包含層出土遺物④ (1/4)

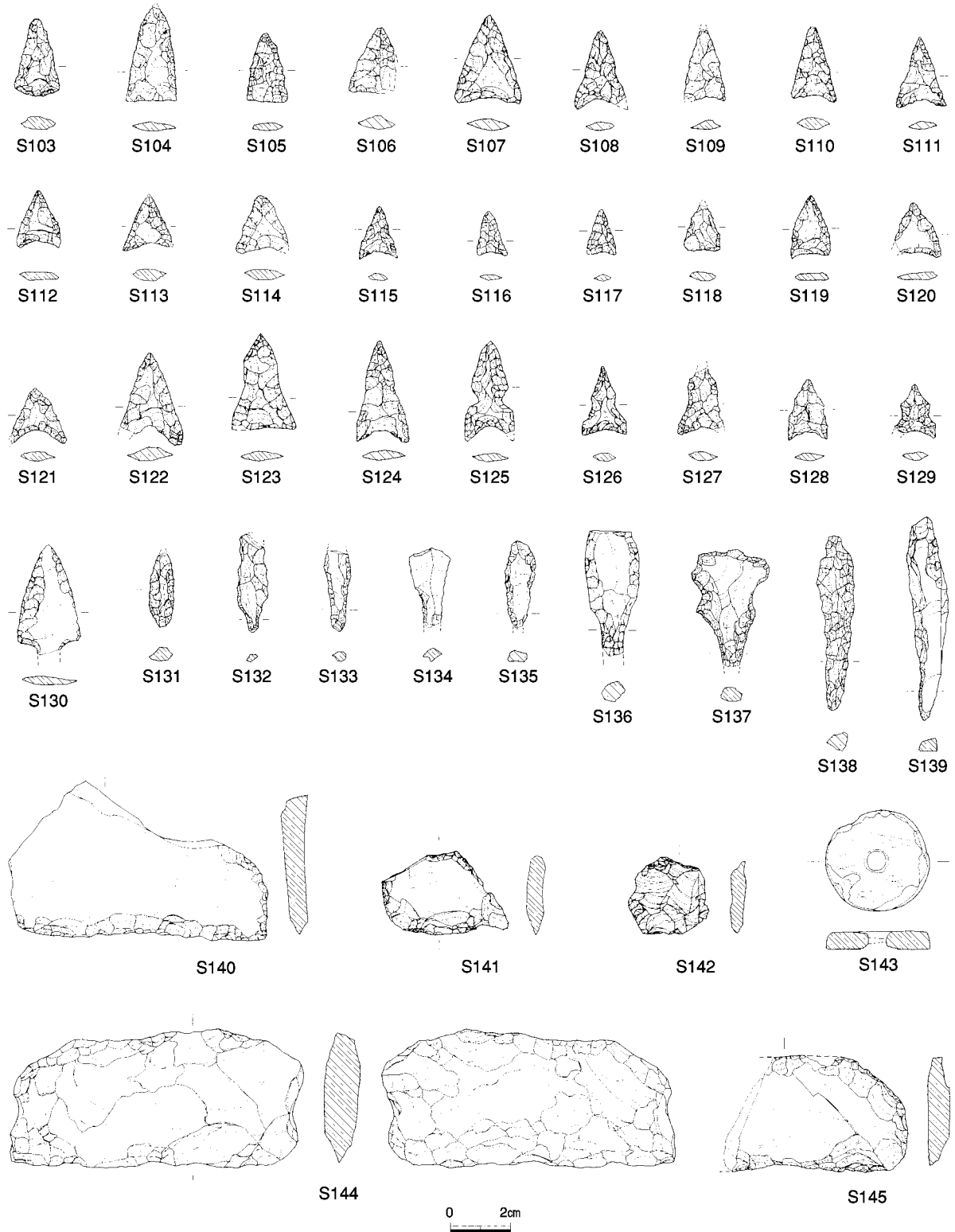


第443図 包含層出土遺物⑤ (1/4)

1476は平瓦で凹面は布目、凸面は工具等でナデである。

第444・445図には石器・石製品を図示した。S103～S131はすべてサヌカイト製の石鏃で、様々な形態のものが出土している。基本的に弥生時代に属していると考えられるが、縄文時代のものも見られる。S132～S139は石錐としているが、S136は先端部を欠損している茎をもつ石鏃とも捉えられ、またS138・139は石錐よりもほかの器種を想定した方がよいのかもしれない。S140・141はサヌカイ

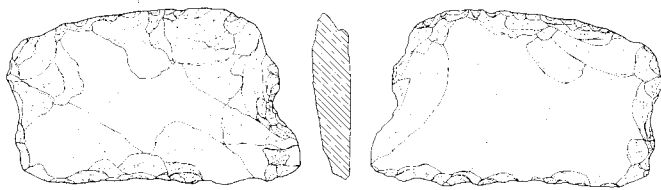
ト製のスクレイパー。S142は黒曜石製の楔形石器であり、旧石器時代に属する可能性が指摘できる。S143は滑石製の紡錘車であり、表裏両面には研磨時の擦痕が顕著に認められる。S145は石鎌の先端部と考えられ、現状の形態から内湾刃を想定したい。石包丁はS144・S146～S151で、S150が磨製のほか、すべて打製である。使用石材は打製がサヌカイト、磨製のS150は砂質変岩である。粘板岩



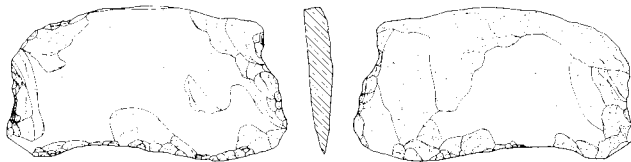
第444図 包含層出土遺物⑥ (1/2)



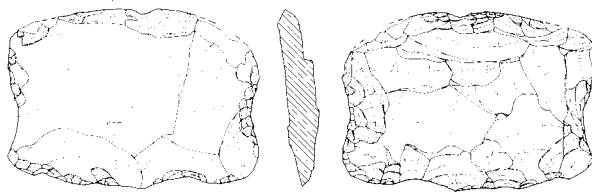
S146



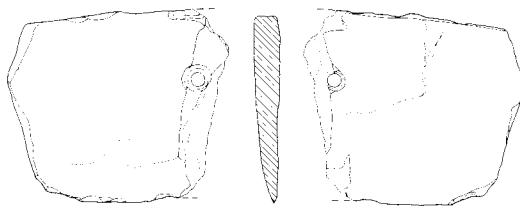
S147



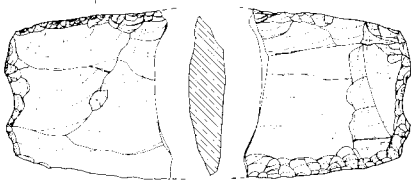
S148



S149



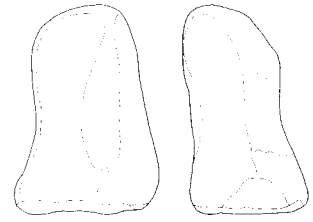
S150



S151



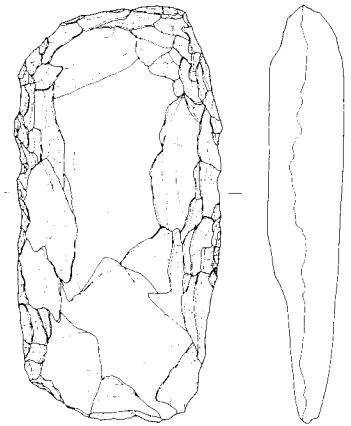
S152



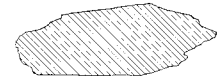
S153



0 3cm



S154

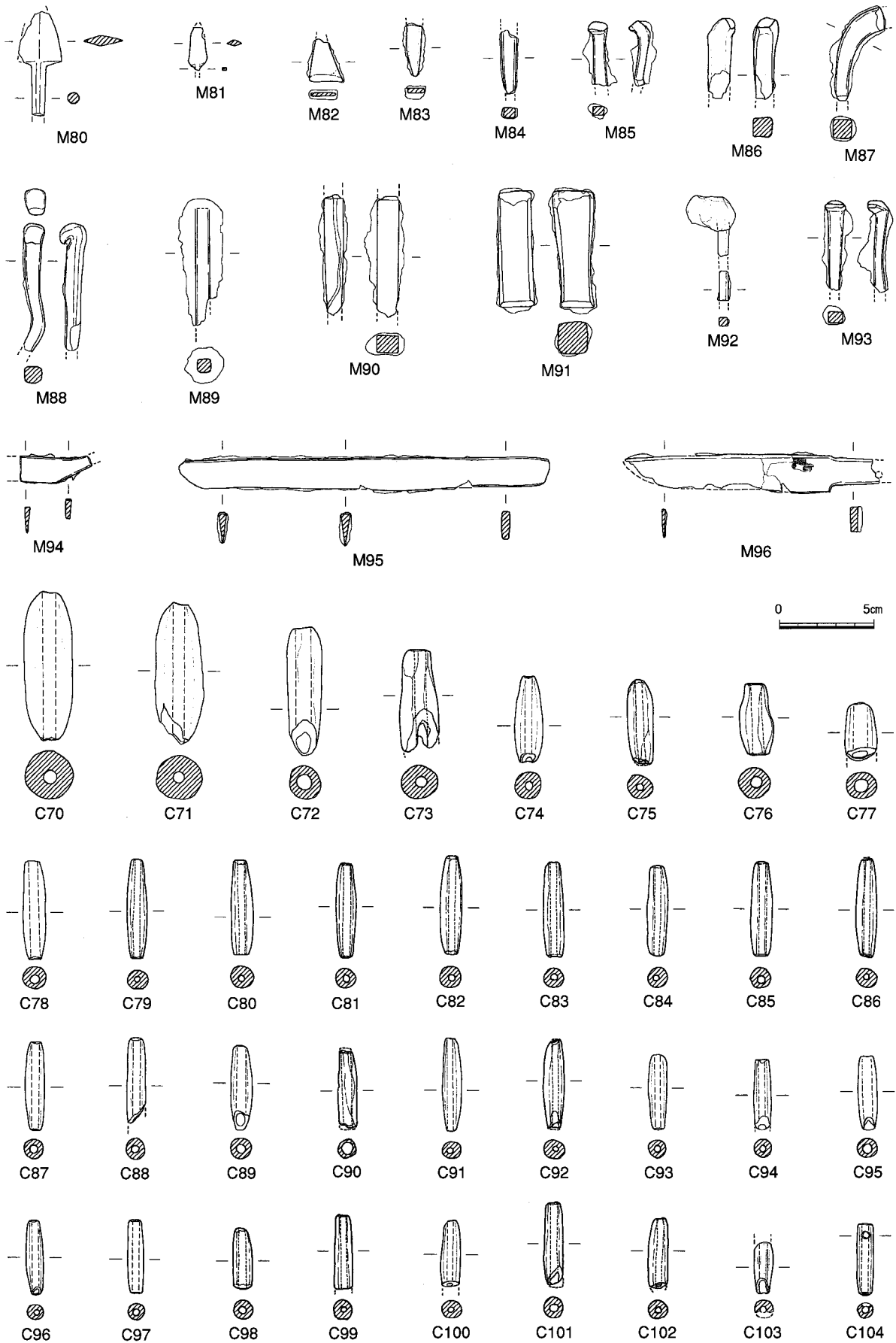


S155

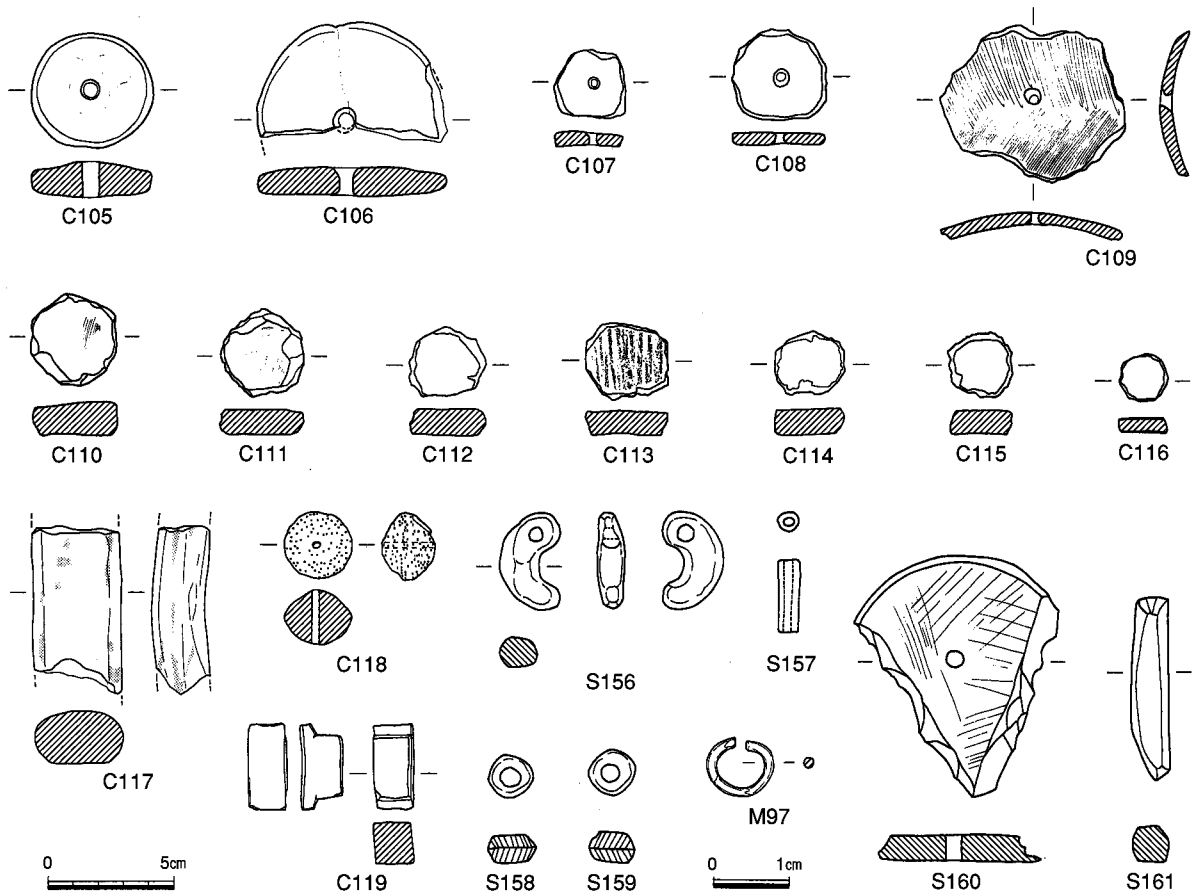


0 2cm

第445図 包含層出土遺物⑦ (1/3・1/2)



第446図 包含層出土遺物⑧ (1/3)



第447図 包含層出土遺物⑨ (1/3・1/1)

製のS152は器種不明であるが、穿孔が1か所認められる。S153は石杵であり、赤色顔料等の付着物は認められなかった。石鋏（打製石斧）は2点（S154・155）図示した。両者とも短冊形を呈しているが、S155の方が若干刃部側が広がっている。

金属器（第446図）はM80・81が銅製で、その他はすべて鉄製である。銅鏃M80・81、鉄鏃M82・83、釘M84～90・92・93、刀子M94～96などが出土している。M91は器種・用途不明であるが、幅と厚さ2cm前後、長さ7cm弱の角柱状を呈している。M96の刀子は鞘の木質が一部残存し、さらに茎の部分に目釘穴が認められた。

土製品は土錘C70～C104・紡錘車C105～C109・円板C110～C116などが出土している。土錘は管状のもののみを図示しているが、そのほかに棒状のものも出土している。C104は管状に製作された後、さらに円孔を一か所穿っている。紡錘車は初めから紡錘車として製作されたものC105・C106と土器片を転用して紡錘車としたものC107～C109の二者が認められる。円板は土師器・須恵器・備前焼・青磁を転用して製作されている。C117は幅約3cmほどの扁平な棒状のもので、赤色顔料が付着している。C119は凸状を呈した土製品であるが、器種・用途などは不明である。

装身具としては勾玉・管玉・白玉・耳環などが出土している。S160は双孔円盤を転用した滑石製の剣形模造品である。百間川原尾鳥遺跡では初めての出土例となり、岡山県下でも津寺遺跡・菅生小学校裏山遺跡・すりばち池2号墳に続き4例目に数えられる。S161は蠟石製の管玉未製品。M97の銅製の耳環には金ないし銀が塗布されていた痕跡は認められなかったが、最初からされていないのか剥落したのかは不明である。

（稲谷・小嶋）

## 第4章 まとめ

### 第1節 遺構・遺物の概要

平成10年度から13年度にかけての百間川原尾島遺跡の発掘調査は、幅約25m、長さ約340mにおよび、それぞれ2つの微高地と低位部を横断する調査となった<sup>(1)</sup>。古墳時代までの地形で言うと、14ラインより西に広がる微高地（以下、微高地1-1と称する）<sup>(2)</sup>、14～16ラインの河道や水田などの低位部（以下、低位部1-2と称する）、16～22ラインの微高地（以下、微高地1-2と称する）、22ライン以東の水田を中心とした低位部（以下、低位部1-3と称する）である。

遺跡全体の概観や遺物の各論、分析・鑑定結果などの詳細については別稿が用意されているが、本節ではこの4ヵ年度の調査対象地を中心にして遺構・遺物の概要をまとめ、中でも注目されると思われる点について調査担当者としての見解を示すことにする。なお、本書で報告している遺構・遺物についてはゴシック体で表記し、本書以外のものと区別した。

#### 1 縄文時代

当遺跡では、微高地1-1で焼土土壙、1-2で晩期の土壙（「百間川原尾島遺跡4」収載）、1-3で後期の土器溜りや焼土面（「百間川原尾島遺跡5」収載）等が確認されているが、今回の調査では遺構は検出されなかった。一方、遺物については、微高地1-1で少量の土器片、低位部1-2の**旧河道2**東岸周辺からは比較的多くの土器片などが出土した。

なお、微高地1-2では長さ約30mのトレンチを設定し、標高50cmまで掘り下げを行った。その結果、遺構や遺物は認められなかったが、16ラインと17ラインの間、ほぼ古墳時代の**溝80**東肩の下層で自然堤防と河道の境界を確認することができた。これは弥生時代前期以前と推測され、堆積を繰り返しながらも位置を大きく変える様子はないが、弥生時代前期で報告している低位部1-2**旧河道2**の時期には大きく西に寄っている。この**旧河道2**東岸に集中して晩期の土器片が出土していることは、「百間川原尾島遺跡5」でも同様の報告がなされており、**溝80**下層からも土器片や鹿角**B2**が出土している。おそらくこの間には本来一定の斜面堆積あるいは遺構などが存在しており、後世の水田や溝の開削によってそれらが失われている可能性が高いと考えられる。

#### 2 弥生時代前期

当遺跡では微高地1-3で竪穴住居3軒や土壙35基などが調査されているが、他の微高地では比較的希薄である。微高地1-1ではこれまで土壙などが検出されているが、今回の調査では確認されなかった。微高地1-2では竪穴住居2軒や土壙6基、溝4条が検出された。「百間川原尾島遺跡2」では低位部1-3で竪穴住居1軒が報告されているが、構造の詳細が把握できたのは微高地1-1・2付近では初めてである。

微高地1-3の竪穴住居はいずれも壁体溝などは残存せず、中央穴と柱穴のみ確認されている。径



6～7m程度の平面円形の住居と推測され、主柱穴は6～8本である。中央穴は径70～90cmの楕円形を基本とし、深さは30～40cm程度で埋土に炭が含まれる。一方、**竪穴住居2**は径5.75mの平面円形の住居で、確認できる主柱穴は4本であるが、6本の可能性もある。中央穴は径90cmの楕円形、深さは40cmを測り、下層埋土は炭層である。このように両者には共通点が認められる。**竪穴住居1**は推定2本柱の小規模な円形住居で、**竪穴住居2**と同じく明確な壁体溝は認められない点は総社市南溝手遺跡の竪穴住居などとも共通する<sup>(3)</sup>。なお、中央穴の脇に2本の小さなピットが確認されているが、松菊里型住居との関係は明らかではない。

土壌では、**竪穴住居2**内で検出された方形土壌3基が注目される。これらは、建築当初の住居に伴うものではなく、途中段階あるいは居住機能停止後に柱の間に掘り込まれたと考えられる。掘り方はあまり袋状を呈さないものの壁面が垂直近く立ち上がり、深さは60cm以上を測る。これらに類似する土壌は微高地1-3で住居周辺を中心に検出されており（方形9基・楕円形2基・円形3基）、特に方形土壌は南北方向を指向し、一定の法則に基づいて配置されている可能性が看取され土壌墓との見方もある。さらに総社市南溝手遺跡でも同様の土壌が多数検出されており、土壌墓の可能性も考えられている<sup>(4)</sup>。この土壌が貯蔵穴あるいは土壌墓であるかどうかの判断は困難であるが、当該期の遺構組成のひとつであることには間違いはない。

低位部1-2では河道と溝1条が検出された。**旧河道1・2**は当初比較的流速があったと推測され、下層の堆積物では砂層が卓越している。中層になると植物遺体などを含む黒色の粘質土が厚く堆積しており、この時期に著しく流れが滞っていると思われる。この層からは木製高杯や広鋏素材、広鋏未製品、諸手鋏、竪杵、布巻具？、食物残滓などが出土しており注目される。

低位部1-3では水田と溝7条とピット群が検出された。水田は以後の開墾のためか微高地からかなり離れた26ライン以東でしか認められなかった。この田面は東西に細長い区画であることが以前の調査で判明しているが、今回は部分的な検出に終わった。これは地形が北西方向だけでなく、北東方向にかけても高くなっていることが一因であると思われる。27ライン付近では、水田域の北端が近づいているのか、土地利用の違いが存在するのかは不明であるが、ピット群が検出されている。

**W1**は全体の形態がわかる当該期の木製高杯としては中・四国以西において初例で、全国的に見てもこれを含めて16遺跡（35点）程度の出土が知られるだけである<sup>(5)</sup>。岡山県内では調査地の環境条件などの制約もあるためか、木製高杯の出土例は中期までの3遺跡に過ぎないが<sup>(6)</sup>、他地域では後期でも木製高杯が出土している。

弥生時代までの「ものを盛る器」の代表器種は、高杯・鉢である。これらは木製品など植物素材を利用したものや、土器では縄文時代以降の鉢などが認められる。しかし、浅い鉢ないし皿状の杯部に高い脚部が取り付け土器の高杯は中期中葉頃からようやく普遍的に製作・使用されるようになる<sup>(7)</sup>。前期の土器における器種構成に占める高杯の割合が極めて低いことはすでに指摘されており、岡山県内において器形の判明する百間川沢田遺跡の高杯78でさえも杯部がかなり深く、「台付鉢」とでもいうべき形であり<sup>(8)</sup>、高杯はほとんど存在しないとも思える。また、前期の木製高杯や「百間川原尾島遺跡4」の旧河道2から出土した浅鉢W15と中期の土器の高杯では、口縁端部を水平方向に拡張することが多い点が共通しており、木製品の形態が土器に影響している可能性ひいては木製品を祖形として土器の高杯が出現する可能性が考えられる。やはり、高杯は土器における器種構成の中では後期の器であると考えらるべきであろう。これに対して、当期には**W1**のように木製高杯が創出され、各地

で使用されていたことになる。ここに高杯自体の特異性があり、木製品として始まることは注目すべきであろう。さらに中期以降は高杯でも土製と木製で用途の違いが存在する可能性も考えられる。

鉢と高杯では、傾向として容器部分の深さが異なるが、決定的な違いは高い脚部の有無である。この器形から内容物や具体的な使用方法の相違を明らかにすることは困難であるが、仕上がりや装飾性など視覚的観点から捉えると、鉢よりも高杯のほうが日常雑器とは異なる要素が多いと感ぜられる。

次に木製高杯と土器の高杯との相違点をあげるとするならば、木製では漆や顔料を使用する黒色と赤色を基調とした彩色や文様装飾が施され、土器ではそれとは異なる発色や質感を持ち、スカシ・線刻・ミガキ等による装飾効果が顕著である点である。また、土器は木製品より衝撃によって壊れやすいという耐久性の差、一方、可塑性に富む粘土から製作する土器では変化に富む器形の創出のしやすさがあげられる。古代中国の「高杯」は竹製を「籩」、木製を「豆」と称し、内容物による使い分けが行われたようである。『魏志』『倭人伝』では倭人が「籩豆」を使用し、手づかみで食事をするのが記されており、これが中～後期の倭における普遍的な「豆」の使用法であると仮定すると、土器の高杯にはこれとは異なる使用方法が存在するのかもしれない。以上の点が両者の使い分けを検討する上で重要な視点であると考えられるが、出土状態など使用方法を示す例が皆無であり、今後の研究に期待したい。

### 3 弥生時代中期

この時期の地形は基本的に前期と大きな変化はないが、低位部1-2については、かつての河道低水路部はほぼ埋没し、氾濫原になっている可能性がある。

微高地1-1については前期同様に明確な遺構は確認されなかった。微高地1-2では溝7条が検出された。遺構の検出状況を見ると、少なくとも調査範囲では微高地の土地利用に変化がうかがえ、遺物の出土量もそれを示唆している。河川など環境の変化も集落動向に影響を及ぼしたことも推測される。低位部1-3では水田と溝4条が確認された。

### 4 弥生時代後期

当該期は最も遺構密度が高く、微高地1-1では顕著である。ここでは堅穴住居8軒や掘立柱建物1棟、井戸9基、土壙21基、土器棺墓3基、炉3基、溝24条などが検出された。微高地縁辺で大形堅穴住居と一般的な堅穴住居などが継続的に建てられていたことが明らかとなり、この調査区内で概ね単位集団のありかたと変遷について推測が可能である。特に住居の排水溝として検出された溝群は、住居・建物相互の時間的な関係などを知る手がかりとなり注目される。

後・I～II古段階では顕著な大形堅穴住居は認められず、2棟程度の堅穴住居と1～2基前後の井戸が主要遺構である。後・II～IIIでは各時期において、大形堅穴住居が核となり、それぞれ1～2棟程度の堅穴住居、井戸は住居と同数から2倍程度の数となっている。後・IVでは堅穴住居7が存続した可能性もあるが明言はできない。大形住居が存在しないとすれば、この地点では、1棟の堅穴住居と1基の井戸で構成されていることになる。また今回、掘立柱建物は1棟しか認識できなかったが、各時期で主要な遺構のひとつとして存在すると思われる。住居出土の遺物を見ると、鉄鏃や銅鏃、玉類が高い割合で出土していることは重要である。住居間の格差では、大形住居で種類、数量とも一般住居より豊富であることは注目されるが、大形住居の性格を明確にするには至らなかった。

この他に注目される遺構としては、土壙7、炉1～3がある。土壙7は「百間川原尾島遺跡3」の土壙1と同じ土器焼成土壙と想定される。炉1は特に残存状態が良好で、焚口から燃焼部の構造が明らかとなった。しかし、これに関連する出土物はまったく無く、周辺土壌などにも特別な鉱物の存在などは認められなかったため、その性格は判明しなかった<sup>(9)</sup>。規模の差はあるがほぼ同時期の「百間川原尾島遺跡4」炉1が近くで検出されており、古墳時代ではあるが鹿田遺跡1号炉などの類例も確認されている<sup>(10)</sup>。また隣接する炉2では土器が置かれ、炉の廃棄に伴う祭祀行為の可能性が考えられる。

微高地1-2では堅穴住居2軒や土壙37基、溝27条が検出されたが、既報告の同じ微高地南側に比べると遺構密度は希薄である。しかし、土壙53から2点のファイアンス状物質の玉F1・2が出土したことは特筆すべきであり、科学分析結果などについては肥塚氏による詳細な報告がなされている。ファイアンスはヨーロッパから西アジアにかけての地域以外に中国でも存在するようである。日本では唯一福岡県三雲遺跡出土の丸玉があるが成分分析は実施されておらず<sup>(11)</sup>、科学分析によってファイアンス状物質の玉と認定されたものとしては、本例2点が初めてである。F1・2の製作地は不明であるが、現時点では海外からの移入品の可能性が高い。このような文物の入手経緯や技術移入の可能性など解明されるべき課題は多い。いずれにせよ海外との繋がりを強く示す貴重な遺物である。

また後・Ⅳになると畿内系土器や淡路型甕などの非在地系土器が認められる。このような状況は、他の調査区や同時期の津島遺跡などでも確認されており<sup>(12)</sup>、その背後に国内における頻繁で密接な地域間交流が推測される。これは、弥生時代後期末において広範囲で観察される洪水被害の痕跡と集落・集団動向の関係についての評価にも関わる。一般的にはこの時期に衰退傾向にあった集落が、水田だけでなく微高地上まで覆うほどの土砂をもたらした大規模な洪水によって壊滅したと評価されており、これは最も妥当な考え方である。しかし、洪水までの後・Ⅳの存続期間の長短によっては、必ずしも集落の衰退傾向は言えず、災害復旧をなし得た可能性が残される。また、その集落規模とも関連するが、直接洪水被害を受けたと思われる微高地上の遺構が少ないことも気になる点である<sup>(13)</sup>。洪水による集落の壊滅という観点以外にも、洪水時に集落は既に放棄され、その結果水田の復旧も行われなかったということもひとつの考え方として視野に含める必要がある。

中期まで河道あるいは氾濫原であった低位部1-2はこの時期までに水田が営まれ、低位部1-3では継続して全面で水田が検出されている。いずれも最終的には洪水砂で覆われ、良好な状態で畦や水路、「稲株痕跡」、足跡などが検出された。区画や水路、島状高まりなどの詳細については前節で報告しているが、低位部1-2の田面に残された「稲株痕跡」とその検出状態については集落動向と合わせて再検討も必要ではないかと思われる<sup>(14)</sup>。

## 5 古墳時代

弥生時代終末の洪水後どれだけの時間が経過したかは明らかではないが、再び集落が営まれる。前期の主要遺構としては、微高地1-1で堅穴住居3軒、掘立柱建物1棟、井戸1基、微高地1-2で堅穴住居2軒、掘立柱建物1棟、井戸3基などが検出されている。後者の井戸3基については埋土の一部に洪水によると思われる砂が認められ、弥生時代の井戸より検出頻度が高く思われる。弥生時代の洪水砂の再堆積である可能性もあるが、洪水発生頻度あるいは集落動向を示すとも考えられる。

中期の主要遺構としては、微高地1-1で5軒の堅穴住居が検出されたが、微高地1-2では確認

できなかった。しかし、微高地1-2の西肩には溝80が開削されていることが注目される。この溝は7世紀には完全に埋没するようであるが、用排水だけでなく一定の舟運も可能な基幹水路として長期間にわたり機能していたと思われる。下層からはこれまでも農具や建築部材など多くの木製品などが出土している。この他には数量は少ないが、初期の須恵器と思われる甕948、平行タタキを施す軟質土器甌982、竪穴住居20からは縄蓆文タタキを施す甕片821・822なども認められる。

W12は扉板で、「百間川原尾島遺跡2」の溝-73で報告されている木製品47は同一建物の蹴放しである可能性がある。弥生時代から古墳時代の扉板については、全国で20を超える遺跡から出土している。そのほぼ半数が古墳時代中期～後期のものとされており、中でも門受けの付いた削り出しの把手が確認されているのは8遺跡で、時期不明を除きほとんどがこの期に該当する<sup>(15)</sup>。現段階では資料数が少ないため断言はできないが、古墳時代中期に朝鮮からもたらされた建築様式の一部であるのかもしれない。扉構えの良好な一括資料である大阪府大東市北新町遺跡出土例を参考にすると、W12を取り付けた出入り口の高さは約120cm、幅は両開きであれば80cm程度、片開きであれば幅40cm程度と推測される。ただし内開きか外開きかは不明である<sup>(16)</sup>。

弥生時代から古墳時代の住居や建物の出入り口、特に扉については木製遺物以外では不明な点が多い。埴輪をはじめとする土製品ではほとんどが出入り口や窓を開口させるだけであり、扉のわかる例として弥生時代では熊本県山鹿市の方保田東原遺跡、埴輪で9遺跡が知られるに過ぎない<sup>(17)</sup>。一方絵画などでは、家屋文鏡（佐味田宝塚古墳）と太刀環頭（東大寺山古墳）に竪穴住居の突上げ戸の側面観が見られるだけで、ほとんど皆無である。こうした状況では、出入り口に開き扉を持つ建物が当時一般的であったのかどうか<sup>(18)</sup>、さらに門受けを有する扉がいつから、どれだけ普遍的に採用されるのかなどについてはあらためて検討を要すると思われる。また、出入り口に関しては、建物の機能や構造との関係、結界意識など検討すべき課題が多く残されている。

後期の主要遺構としては、微高地1-1で竪穴住居6軒、井戸1基、微高地1-2で掘立柱建物2棟がある。建物4は布掘り溝を有する総柱建物であり、特異な構造である。微高地1-2のほぼ中央に位置し、周囲には時期を同じくする遺構が認められない点においても特徴的であり、一般的な建物以外の性格を考える必要があるのかもしれない。これに近い時期と考えられている「百間川原尾島遺跡4」の建物8や津寺遺跡の掘立柱建物-54（古墳前期）は総柱建物ではないが布掘り溝があり<sup>(19)</sup>、立地条件に類似する点や特殊性が認められることもあり注目される。

弥生時代の水田域であった低位部1-2・3には洪水砂が厚く堆積し、その上部に形成された不定形なくほみには黒色粘質微砂が堆積している。この層が水田層である可能性も残されるが、それを示す積極的な証拠は見出せなかった。

## 6 古代～中世

当該期は弥生時代後期にならび遺構密度が高い集落となっているが、明確な古代の遺構については溝1条に過ぎず、11世紀後半～16世紀前半の遺構がすべてといっても過言ではない状況である。なお古代の溝130はかつての調査で大祓の遺物がまとも出土し、「百間川原尾島遺跡5」で報告されているが、今回の調査では杭列が検出できただけでそうした遺物は皆無であった。これを裏返すと、大祓の儀式がほぼこの調査地の南で行われた可能性が高いとすることができよう。

弥生時代から古墳時代にかけて河道や水田などであった低位部1-2は、微高地1-1とともに中

世段階には屋敷地の一角となっているが、微高地1-2では目立った遺構が認められなくなっている。さらに、これに続く低位部1-3についても同様であり、畑や水田、墓地などに利用されたと考えられる。今回検出された遺構は掘立柱建物5棟、井戸6基、土壙45基、溝26条、道などである。井戸22は竹筒を刺し込んで埋め戻していることが確認され、現在も行われる井戸廃棄時のこのような慣習が当地域では遅くとも室町時代に遡ることがわかる<sup>(20)</sup>。

集落は東西・南北方向に開削された溝や道路でさまざまに区画されている。条里制地割との関係から大きな区画は1町四方程度と考えられており<sup>(21)</sup>、北は溝135~137と溝138~140を側溝とする道1、南は「百間川原尾島遺跡5」溝42~44、東は溝128、西は「百間川原尾島遺跡4」溝76~78をもって区画されている。さらにこの中もいくつか区画されており、溝124・127と溝126の間は道1と同じような性格と考えられる。南北に掘削された区画溝には溝109・110、溝113~116、溝121~122があり、前2者は南側にもほぼ同一方向の溝が認められる。これらにより、北西隅と南東隅には比較的大きな区画が形成され、その他は南北に細長い区画が中心となるが、一部小さな方形の区画も形成されている。各区画では1~2基の井戸が検出され、また土壙墓を伴うものもあり、それぞれがある程度独立した機能を有する単位であると考えられる。なお溝115・117で北側と東側を区画された方形の区画については井戸3基が認められ、中でも井戸23は当遺跡では珍しい石組み井戸である。この区画内の建物6・7の柱穴内や溝、周辺からは炉壁や鉄滓、炭や焼土が比較的多く出土していることは、この区画地の性格を考える上で注目される。

当遺跡では結果的に、一定範囲の中世集落についてそのほとんどの部分を調査することになった。この集落が当地域でどのような位置付けにあり、また、この中のそれぞれの区画がどのような機能を果たし、相互に関連しながら集落を形成していたかを検討する良好な資料を提供している。

(柴田英樹)

#### 註

- (1) 既刊の百間川原尾島遺跡の発掘調査報告書は以下のとおりである。
- |                                      |              |          |      |
|--------------------------------------|--------------|----------|------|
| 江見正己ほか「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』  | 建設省岡山河川工事事務所 | 岡山県教育委員会 | 1980 |
| 正岡睦夫ほか「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』  | 建設省岡山河川工事事務所 | 岡山県教育委員会 | 1984 |
| 宇垣匡雅ほか「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88』  | 建設省岡山河川工事事務所 | 岡山県教育委員会 | 1994 |
| 平井勝ほか「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97』   | 建設省岡山河川工事事務所 | 岡山県教育委員会 | 1995 |
| 柳瀬昭彦ほか「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106』 | 建設省岡山河川工事事務所 | 岡山県教育委員会 | 1996 |
- (2) 微高地と低位部の呼称は本書第4章第4節に従った。
- (3) 平井泰男ほか「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107』 岡山県教育委員会 1996
- (4) 平井泰男ほか「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』 岡山県教育委員会 1995

(5) 一覧を掲げるが、この他にも収集できていないものがあるかもしれない。

遺跡名	所在地	出土遺構等	出土点数
百間川原尾島遺跡	岡山県岡山市	河道	1
南溝手遺跡	岡山県総社市	河道	1
納所遺跡	三重県津市		2
川崎遺跡	滋賀県長浜市	環濠	1
安満遺跡	大阪府高槻市	環濠ほか	2
高宮八丁遺跡	大阪府寝屋川市	溝	2
山賀遺跡	大阪府東大阪市	河川・井戸ほか	4
池島・福万寺遺跡	大阪府東大阪市・八尾市		1
恩智遺跡	大阪府八尾市	河道	1
池上曾根遺跡	大阪府和泉市・泉大津市		1
唐古・鍵遺跡	奈良県磯城郡田原本町		12
坪井・大福遺跡	奈良県橿原市		2
丁・柳ヶ瀬遺跡	兵庫県姫路市		1
拾六町平田遺跡	福岡県福岡市	溝	1
拾六町ツイジ遺跡	福岡県福岡市	土壌	2
石木中高遺跡	佐賀県小城郡三日月町	包含層	1

- (6) 中期の木製高杯は岡山市南方（済生会）遺跡から出土している。  
『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1994（平成6）年度』 岡山市教育委員会 1996
- (7) 一概に「高杯」と言っても、①「台付鉢」と称するほうが適切と思われる器形、②深い杯部に高い脚部の付く器形、③浅い鉢ないし皿状の杯部に比較的低い脚部の付く器形、④浅い鉢ないし皿状の杯部に高い脚部の付く器形などさまざまである。ここでは④に限定して記述している。
- (8) 二宮治夫ほか「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59』 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1985
- (9) 白石純氏に炉壁、炉床土壌、周辺土壌について蛍光X線分析を依頼したが、特別な鉱物の存在や偏りなどは確認されなかった。一般的な煮沸のためのカマドあるいは金属やガラスの溶解炉などを想定しているが、分析では後者の可能性は著しく低いと思われる結果となっている。
- (10) 山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (11) 馬田弘稔ほか「三雲遺跡Ⅱ」『福岡県文化財調査報告書 第60集』 福岡県教育委員会 1981
- (12) 島崎東ほか「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173』 岡山県教育委員会 2003
- (13) 今回の微高地上の調査において洪水砂が流入している遺構としては、微高地1-1では溝43・44、微高地1-2では溝51・53の水路があるが、住居や井戸などでは皆無であった。微高地1-2では古墳時代の竪穴住居28周囲で洪水砂が確認された。周辺では「百間川原尾島遺跡2」の竪穴式住居-1、「百間川原尾島遺跡3」の竪穴住居5・7や井戸5・6、土壌53などで上層埋土に洪水砂が確認されている。これらすべてが同時期の洪水による砂であるかどうか、また、遺構が洪水時に機能していたかどうかは厳密に検討する必要があるが、いずれにせよ微高地上にまで砂が堆積した割には住居内や井戸内への砂の流入が少ないことは否めない。少なくとも今回の調査区で確認された単位集団は洪水時には存在していない可能性が高いと考えられる。
- (14) 検出された小穴すべてあるいはその多くが「稲株痕跡」であり、残存条件が同じであると仮定すれば、埋没直前の水田区画利用は様ではなく、イネの生育は微高地に沿い、区画を無視した栽培も認められることになる。これが休耕田を設けていた結果なのか、人口減少による栽培面積の減少であるのかは慎重に検討する必要がある。また、小穴がイネ以外の植物に由来するかどうか、小動物の巣穴である可能性はないのかなどの検討、田面から形成されたものか洪水砂上から形成されたものかについての詳細な確認作業が今後も重要である。

第4章 まとめ

- (15) 一覧を掲げるが、この他にも収集できていないものがあると思われる。

遺跡名	所在地	時期	備考
百間川原尾島遺跡	岡山市原尾島地先	古墳時代中～後期	蹴放し出土
長須賀条里制遺跡	千葉県館山市	古墳時代後期	
和爾・森本遺跡	奈良県天理市	古墳時代中期	完形
谷遺跡	奈良県宇陀郡榛原町		
北新町遺跡	大阪府大東市	古墳時代中期	完形2点、扉構え一括
中沢遺跡	滋賀県栗東町	古墳時代前期	
惣利遺跡	福岡県朝倉郡夜須町		完形、10点以上
福岡狭川遺跡	福岡県	古墳時代中期	

- (16) 扉の開き方については、弥生時代では津島遺跡出土の蹴放しから内開きが想定され（前掲註12）、埴輪では3遺跡で内側片開きの扉、1遺跡で外開き扉が確認されている。また、現存建築では東大寺正倉院をはじめとする奈良時代の校倉建築が内開きであり、奈良時代以前の扉がわかる出入り口では内開きが主である。高床建築では作業効率を考慮すると内開きが適当であるが、埴輪の平屋建物でも内開きであり、別の要因を考える必要がある。一方、平安時代以降の社寺建築や絵巻などの絵画資料においては、建築物の開き扉はほとんどが外開き構造である。ただし、「門」については7世紀以後ほぼ一貫して内開きの構造が主流であることは注目される。
- (17) 扉板が表現されている埴輪は以下のとおりである。また、門受けを有する両開きの扉を表現する遺物は確認されないが、陶質土器に認められるようである。

遺跡名	所在地	時期	備考
下総片野23号墳	千葉県	古墳時代後期	外開き扉
山崎山	埼玉県岡部町		内開き扉
赤堀茶白山古墳	群馬県佐波郡	古墳時代中期	嵌め込み2点、把手
豊城町	群馬県伊勢崎市	古墳時代後期	扉と把手の線刻
登山1号墳	神奈川県厚木市	古墳時代後期	内片開き扉
木の下古墳	三重県	古墳時代中～後期	扉と把手の線刻
寺口和田1号墳	奈良県北葛城郡	古墳時代中期	特殊建物
美園遺跡	大阪府八尾市	古墳時代前期	扉軸穴と軸受け（内片開き）
長原84号墳	大阪府大阪市	古墳時代中期	嵌め込み、把手剥離

- (18) 宮本氏は古墳時代の扉は内開きが一般的としているが、開き扉自体が一般的かどうかなどの検討も必要と思われる。  
宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1996
- (19) 高畑知功ほか「津寺遺跡5」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127」日本道路公団中国支社津山工事事務所 岡山県教育委員会 1998
- (20) 井戸を埋めて廃棄する際に竹筒を差し込む慣習は、平安時代末まで遡るようである。  
久世康博「井戸はどうして埋められたのか（筒を入れる）」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』 2002
- (21) 岡本寛久「百間川原尾島遺跡5 第4節中世の村落」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106』建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会 1996

## 第2節 弥生土器焼成土壙について

今回報告した遺構のうち土壙7は、記載において述べたように弥生土器焼成土壙と考えられる。百間川原尾島遺跡においては土壙1（『百間川原尾島遺跡3』<sup>(1)</sup>）に続いて2例目であり、他に県下では総社市南溝手遺跡土壙215（『南溝手遺跡2』<sup>(2)</sup>）があるにすぎない。

大阪府喜志遺跡例以外確実な資料が知られていなかったため『百間川原尾島遺跡3』においては土壙1が焼成土壙であることの証明に重点を置いてまとめ、別にその後、土壙1出土遺物を中心に焼成時破損土器の特徴を整理し弥生時代の土器生産について小論<sup>(3)</sup>を記した。

ここでは、少数とはいえ事例が増加したことをふまえ、遺構の諸特徴について簡単に整理しておく。

### 1 遺構の特徴

土壙7は楕円に近い隅丸方形で長さ94cm、幅82cmを測る。深さは41cmであるがこれは当初掘削された深さであり、遺構が機能した深さは22cmである。遺構の軸線は方位に対して斜交する。

他の2例の規模・形状は以下のとおりであり、

土壙1（原尾島3）：隅丸長方形 長さ124cm、幅78cm、深さ13cm、方位に平行

土壙215（南溝手遺跡2）：隅丸長方形 長さ285cm、幅190cm、深さ18cm、方位に平行

遺構の共通点は以下のようにまとめることができる。

平面形 隅丸方形を基本とする。同時期の土壙は不整形であったり全くの不定形であることが多いが、それらと異なり整った形状である。

深さ いずれも20cm前後の深さである。

焼土化 壁面が焼土化するが、すべての壁ではなく南側の壁が良く焼ける。これが焼成時の風向きを反映しているとすれば、土器焼成は一定の季節になされたとみることができる。

遺物 いずれも焼成時破損土器片を遺構埋土に含む。このことによって土器焼成土壙と判断できるわけであるが、焼成時に土器の破損がある程度の比率で生じていたことを示している。

一方、異なるのは規模であり、土壙7は土壙1よりも一回り小さい。土壙215が4.74、土壙1が0.93、土壙7が0.69㎡で、土壙215が格段に大きい。土壙215が後期1、百間川原尾島遺跡の2例は後期3である。地域は異なるが規模が大きい焼成土壙として中期の大阪府喜志遺跡例（3.7㎡）があり、後期のなかで焼成土壙が小形化する可能性が考えられるが、これについては類例の増加を待たざるをえない。

また、土壙1、土壙215、喜志遺跡例が遺構の主軸を方位に合致させているため、焼成土壙は方位を念頭において掘削されそれは呪的な意味にもとづくと考えたが、土壙7は主軸が方位と斜交しており、方位を念頭におかない場合があることが明らかになった。

### 2 出土土器の構成

土壙7と土壙1は同じ百間川原尾島遺跡に所在するというだけでなく、遺構の時期もともに後期3である。この二つの遺構を比較した場合、上記のように面積の大小があるが、それ以上に出土土器の器種構成に大きな相違がある。土壙1からはきわめて良好な状態で土器が出土しているが、それらは



#### 第4章 まとめ

大形の壺や長頸壺などからなり、とりわけ長頸壺の比率が顕著である一方、高杯などの小形器種は全く認められず、大形器種にほぼ限って焼成がなされた可能性が考えられた。それに対して土壙7出土の土器には中形の鉢や甕も含まれてはいるが、高杯や脚付直口壺といった小形器種が半数を占めている点に特色がある。

2例のみであるため、この器種構成の相違について細かい評価を下すことはむずかしいが、少なくともこのことは、土器の焼成・生産は一様ではなく、いくつかの構成パターンに分類されうるものであった可能性を示しているとみることができよう。製作や使用の単位に基づく、あるいは器壁の厚さが近いものをまとめて焼成するという技術的な側面に基づくといった要因を想定することができ、今後類例の増加を待って検討したい。 (宇垣匡雅)

#### 註

- (1) 宇垣匡雅ほか1994『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 岡山県教育委員会
- (2) 大橋雅也ほか1996『南溝手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107 岡山県教育委員会
- (3) 宇垣匡雅1997「弥生土器の焼成杭－百間川原尾島遺跡検出例について－」『古代の土師器と焼成遺構』 窯跡研究会

## 第3節 淡路型甕について

竪穴住居7土器溜りより出土した土器の中に、岡山県南では特異な器形・器面調整・胎土・色調を有する一群がある。具体的な器種は、二重口縁壺（203・204）、甕（211～214）、高杯（217・221～224）で、総じて細粒を多含する橙色の胎土を有する。これらの土器は、百間川原尾島遺跡において通常使用される土器とは様々な点でその属性が異なり、一見するだけで当地の土器ではなく、搬入されたものである可能性が考えられた。特に甕は口縁端部に刻み目状の施文を施しており、近年森岡秀人氏が提唱された「淡路型甕」の特徴を示している。以下、淡路型甕の諸特徴を述べた後に、今回出土した搬入土器についての位置付けを行いたい。

### 1 淡路型甕

#### 名称について

淡路型甕という名称は、森岡秀人氏によりV様式系タタキ甕の一類型として近年提唱されたものである<sup>(1)</sup>。氏によると、その存在には30年ほど前に気付いていたものの、『纏向』<sup>(2)</sup>において触れられているように、当時は紀伊南部生産の甕と認識されていた。その後、淡路島内での発掘調査事例が増えていくにしたがい、この甕を高い割合で使用している遺跡の数が特に南淡路の三原郡内で多いことや、紀伊の事例を考慮しても比較的古い段階より淡路島内でみられることから、「淡路型甕」の設定を提唱されたということである。

淡路型甕には、「淡路産」と「淡路系」があり、淡路島内で製作されたものを「淡路産」、淡路島外で製作され、技法の模倣がみられるものを「淡路系」と大別できる。

淡路型甕の最大の特徴は、口縁端部を胴部のタタキ調整と同一原体で縦方向に叩くことにより、刻み目状の施文を施す点で、この施文により口縁端部下端が波打っていることが多い。このほかの特徴としては、口縁部成形時に行われる縦方向の板目調整痕で、この調整痕は淡路型甕でも古い様相のものには顕著に残っているが、新しくなるにつれてヨコナデ調整を加えることにより、消えてしまう傾向がある。また、口縁部外面や体部外面に粘土帯の接合痕が明瞭に残っているものが多く、総じてその製作技術の水準は低いと考えられている。

#### 淡路島内での状況

淡路島における弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての集落の様相が、発掘調査によって明らかになってきたのは最近のことである。それに伴って当時期の土器編年が、遺跡ごとあるいは地域ごとに提示されている<sup>(3)</sup>。

これらの報告によると、淡路島で製作および使用されている甕形土器はいわゆるV様式系甕で、おもに器形や調整手法の変化によって時期変遷が追えるようである。細かい説明は各報告書に譲るとして、おおまかには外面の調整が「タタキのちタテハケ」→「タタキのみ」に、内面の調整は「ハケのみ」→「板ナデおよびナデ」へ、全体のプロポーションは「胴部最大径が上位」→「胴部最大径の位置が下降、球形化」へと変化する。これら甕形土器の変遷は、畿内特に摂津地域とその変化の方向性が類似していることが指摘されている。また、畿内において一般的に分布しているV様式系甕とは異なる、淡路島独自ともいえる特徴が認められるようで、それは口縁部途中の粘土接合痕・口縁部外面

のタテハケ調整・口縁部の歪み・口縁端部の刻み目状タタキなどである。口縁端部の刻み目状タタキは、すべての甕形土器に施されているものではないが、弥生時代後期後半でも早い時期から出現し、同様の施文を行う紀伊地域よりは確実に古い段階からみられる<sup>(4)</sup>。しかし、口縁端部の刻み目状タタキの出現がどういった系譜によって出現したのか、また、各遺跡においてどの程度の割合でみられるのかといった具体的な論証はなされておらず、今後の課題と思われる。

#### 淡路島外での状況

淡路島外における淡路型甕の出土状況は、今のところそれほど多いものではない。また、出土していても数個体に収まる程度で、集落内において使用する甕形土器の主要な構成要素にはなり得ていない。おもな出土遺跡は第448図のようになり、西摂津・東播磨を中心とした瀬戸内沿岸および紀伊地域に分布している<sup>(5)</sup>。これらの遺跡は比較的海辺に位置するか、もしくは主要河川に面して立地している点が注目される。また、時期の明確な一括資料には恵まれていないものの、淡路型甕の出現は淡路島内のものに比べると1段階遅れて分布している点が指摘できる。これらの点から、淡路型甕は淡路島を中心とし、海路を通じて拡散している可能性を示唆することができよう。

## 2 百間川原尾島遺跡例について

### 「竪穴住居7土器溜り」出土土器

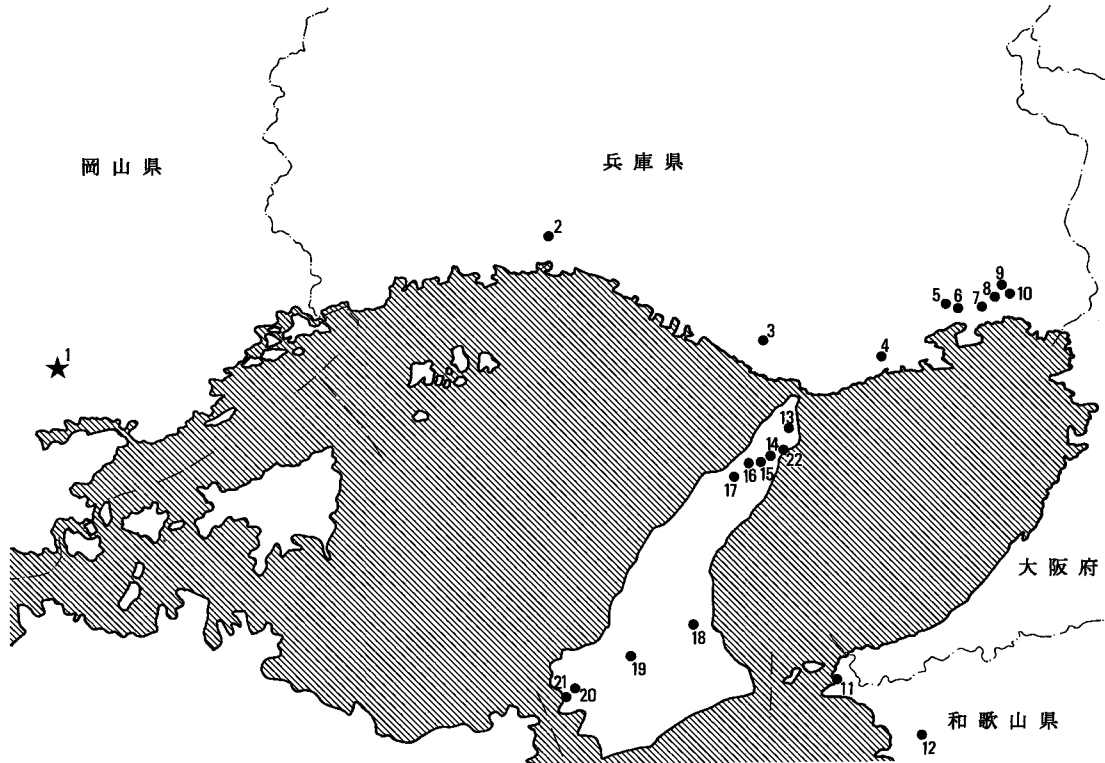
「竪穴住居7土器溜り」から出土しているタタキ甕は少なくとも7点確認でき、これら全個体において、器形・調整手法・胎土の類似性を認めることができる。胴部外面は右上がりあるいは平行のタタキ調整が行われ、内面は板状工具および指頭によるナデ調整が観察できる。タタキの原体幅は3～4 cm程度で、一原体内に3～4 mm幅のタタキ目が8～10本みられる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を行っているが、214のみ口縁部外面に縦方向の板目調整痕が残っている。口縁部のヨコナデ調整は比較的丁寧に行われているようで、屈曲部は明瞭な稜をなしている。口縁部外面および胴部外面に粘土接合痕を残す個体がある。口縁端部には刻み目がみられるが、胴部で使用されているタタキ原体と同一であるかどうかは明確でない。しかし、口縁端部下半が波打っているため、タタキ原体による施文である可能性は高い。全体のプロポーシオンは、胴部と底部が直接接合する個体がないので完全には復元しがたいが、口径よりも胴部最大径が大きく球形化し、底部は直径4 cm程と小さい。胎土は細粒を含む橙色の色調を有している。以上のような器形・調整手法の特徴から、これらの甕形土器は淡路型甕であると思われる。

なお、竪穴住居7土器溜りから出土している土器の内訳は、壺35 (15%) : 甕107 (47%) : 高杯32 (14%) : 鉢47 (20%) : 製塩土器4 (1%) となっている。また器種ごとの搬入土器の割合は、淡路型甕7 (7%) : 在地産甕100 (93%)、畿内系二重口縁壺4 (11%) : 在地産壺31 (89%)、畿内系高杯5 (15%) : 在地産高杯27 (85%) である。

### 時期と類例

「竪穴住居7土器溜り」から出土した淡路型甕の時期について述べたい。

竪穴住居7土器溜りからはやや時期幅のある土器が出土しているが、おおよそ百・後・Ⅳ(オノ町Ⅰ～Ⅱ式併行)である。竪穴住居7土器溜りから出土し、その胎土から淡路型甕と同時期に搬入されたと思われる畿内系の二重口縁壺・高杯が庄内式期前葉の様相を示していることから、この年代観は大きくはずれたものではないと推察される<sup>(6)</sup>。また、淡路島の編年観から導かれるタタキ甕の時



- 1 百間川原尾島遺跡 (岡山市) 2 播磨・長越遺跡 (姫路市) 3 玉津田中遺跡 (神戸市)  
 4 長田神社境内遺跡 (神戸市) 5 郡家遺跡 (神戸市) 6 住吉宮町遺跡 (神戸市) 7 深江北町遺跡 (神戸市)  
 8 寺田遺跡 (芦屋市) 9 月若遺跡 (芦屋市) 10 打出岸造り遺跡 (芦屋市) 11 西ノ庄遺跡 (和歌山市)  
 12 井辺遺跡 (和歌山市) 13 塩壺西遺跡 (淡路町) 14 尼ヶ岡遺跡 (東浦町) 15 禿山遺跡 (東浦町)  
 16 舟木遺跡 (北淡町) 17 久野々遺跡 (北淡町) 18 下内膳遺跡 (洲本市) 19 幡多遺跡・若宮地区 (三原町)  
 20 淡路・志知川沖田南遺跡 (西淡町) 21 谷町筋遺跡 (西淡町) 22 楠本下林遺跡 (東浦町)

第448図 主な淡路型甕出土遺跡 (1/100万)

表3 百間川遺跡群出土の搬入土器

百間川原尾島遺跡

	百・後・Ⅲ	百・後・Ⅳ	百・古・Ⅰ	百・古・Ⅱ	時期不明
讃岐	2	9	1		
四国系			1		1
畿内系		13	1	1	3
山陰系			1		
淡路型甕	2	6			
西部瀬戸内系		1			

百間川沢田遺跡

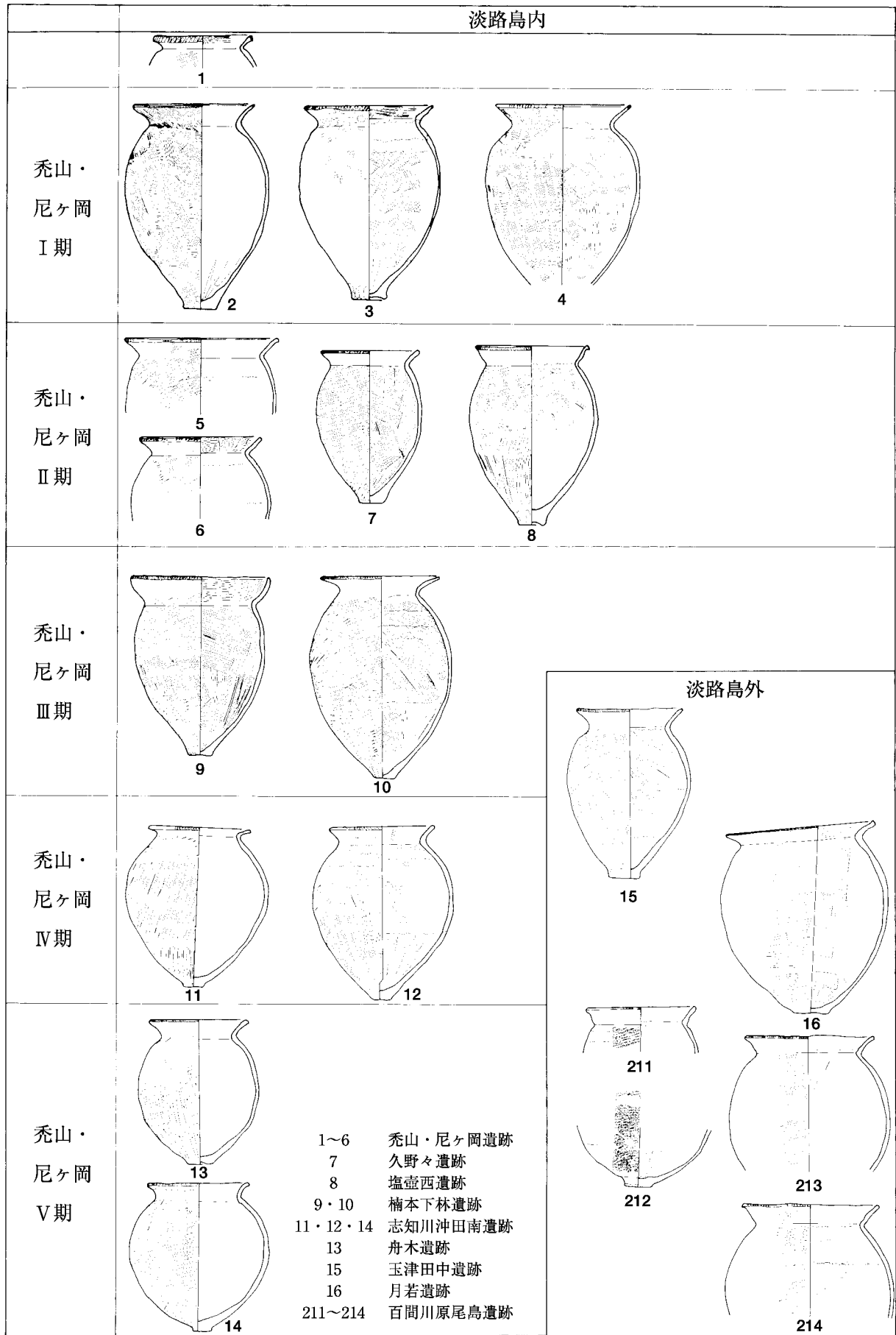
	百・後・Ⅲ	百・後・Ⅳ	百・古・Ⅰ
讃岐		3	3
畿内系			6
山陰系			2

百間川米田遺跡

	百・後・Ⅲ	百・後・Ⅳ	百・古・Ⅰ
讃岐	1		
畿内系			1
山陰系			2

百間川兼基・今谷遺跡

	百・後・Ⅲ	百・後・Ⅳ	百・古・Ⅰ
讃岐	1	9	
畿内系		1	
不明	1		



第449図 淡路型甕変遷図 (1/8)

期（禿山・尼ヶ岡編年のⅣ～Ⅴ期）とも大幅な齟齬はないものと思われる（第449図）<sup>(7)</sup>。

では、百間川原尾島遺跡において出土したこの淡路型甕が、淡路島から直接もたらされたものであるのかという疑問、すなわち「淡路産」であるのか「淡路系」なのかという疑問が生じてくる。明確な答えは胎土分析などの科学的な検証を経なくては行けないが、今のところ積極的に淡路産であるという確証がないため、淡路系としておくのが無難であると考えられる。ただし、胎土や色調あるいは同時期に搬入されたと思われる二重口縁壺の属性（文様の施文方法）などから西摂津的であるという指摘も受けており<sup>(8)</sup>、間接的に当地へ搬入されたとも考えられる。

今回、畿内系の土器と一緒に出土したタタキ甕が、口縁端部の刻み目状タタキなどの属性から、淡路型甕であると確認できたのだが、岡山県南においてこれに類する土器は管見の限り百間川原尾島遺跡の過去の調査で数点出土している。『百間川原尾島遺跡2』「堅穴住居4」58・「土壙5」662<sup>(9)</sup>、『百間川原尾島遺跡3』「土壙40」357<sup>(10)</sup>の3点を数えるが、時期は当地の編年観から、百・後・Ⅲの新しい段階から認められるようである。これら3点の土器は、口縁端部の刻み目状タタキや外面・内面の調整手法から、淡路型甕であると思われる。しかし、今回出土したものに較べると、いずれも胎土は砂粒が少なく、色調は灰褐色から灰黄色を呈するなど、様相を異にしている。

また、口縁端部の刻み目状タタキはみられないものの、胎土・色調の点から『百間川原尾島遺跡3』「井戸5」出土の甕形土器155<sup>(10)</sup>との類似を指摘できる。なお、155は播磨地域からの搬入品の可能性が指摘されている。

### 3 百間川原尾島遺跡における搬入土器の様相（表3・第450図）

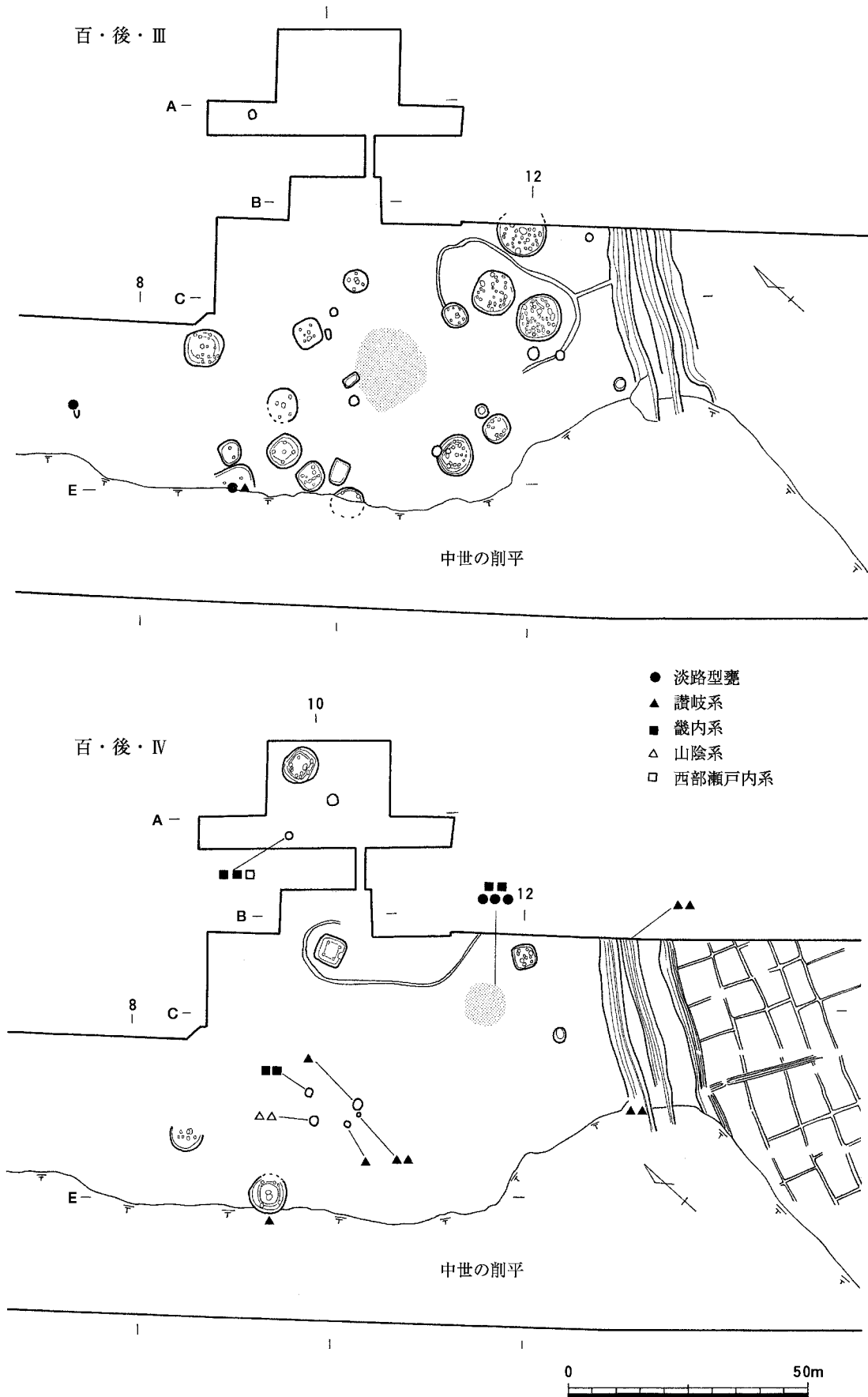
ここで、百間川原尾島遺跡における搬入土器の様相について触れてみたい。

百間川原尾島遺跡のみならず百間川遺跡群全体においても、その搬入土器の割合は少ないと認識されている<sup>(11)</sup>。今回、百間川原尾島遺跡のみを取り扱い、その分布状況を図示した（第450図）。本来ならば、過去に出土した対象遺物全てを実見し数値化するのが望ましいが、それは不可能に近いので、今回はこれまで刊行された同遺跡の調査報告書を頼りに、遺構出土土器のみを取り扱った。その結果、百・後・Ⅲの新段階から讃岐および淡路の土器を散見することができ、搬入土器がある程度増加するのは、百・後・Ⅳからであることがわかる。

搬入土器が比較的多く入ってくる時期とされる百・古・Ⅰの段階では、百間川原尾島遺跡よりもむしろ百間川沢田遺跡の方に搬入土器の比重が増える。とはいえ、全体の土器量からいうと数%であり、同時期から搬入土器の割合が増えていく足守川流域の諸遺跡とは、対照的であるといえよう<sup>(12)</sup>。また、百間川遺跡群出土の搬入土器のなかで、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて一定量の出土がみられ、かつその搬出先が特定されているのは讃岐のみである。

### 4 おわりに

今回、百間川原尾島遺跡「堅穴住居7土器溜まり」から出土した、特異な甕形土器の出自を中心に論を進めてきた。その結果、淡路地域を中心に分布する「淡路型甕」であることが判明し、時期もおおよそ百・後・Ⅳ（オノ町Ⅰ～Ⅱ式）≒庄内式期前葉であると推察される。これは、淡路島以外から出土する淡路型甕の出土傾向（出土点数が少なく、主要な構成要素をなさない。時期は淡路島内のものよりも下降する。海辺に位置する遺跡から出土。）とほぼ一致するものである。



第450図 百間川原尾島遺跡出土搬入土器出土状況（遺構出土土器のみ）（S=1/1,250）

また、百間川遺跡群から出土する搬入土器の割合から、今回出土した淡路型甕および畿内系の壺・高杯がセットとして搬入されていることは注目すべきことと考えられ、今まで岡山県南への搬入土器として特定されてこなかった淡路・西摂津地域との交流が明らかになったといえよう。（松尾佳子）

この節に関しては、森岡秀人氏（芦屋市教育委員会）にご教示頂いた内容を多く含んでいる。氏に深く感謝するとともに、筆者の理解不足から十分に生かしきれなかった点をお詫びしたい。

遺物実見に際しては、兵庫県教育委員会、芦屋市教育委員会、三原郡埋蔵文化財調査事務所の諸機関にお世話になった。また、当センター職員諸氏には有益なご助言を頂いた。末筆ながら感謝の意を表します。

## 註

- (1) 森岡秀人「摂津における土器交流の性格－真正弥生時代と庄内式期を比べて－」『庄内式土器研究』XXI 庄内式土器研究会 1999
- (2) 関川尚功「第2章 畿内地方の古式土師器」『纏向』奈良県桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1976
- (3) 主なものを以下にあげる。  
山田清朝「洲本市下内膳遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第155冊 兵庫県教育委員会 1996  
岸本一宏「禿山遺跡他発掘調査報告書」『兵庫県文化財報告』第177冊 兵庫県教育委員会 1998  
なお、三原郡内に関しては、坂口弘貢ほか『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ 三原郡広域事務組合2001を参考にさせて頂いた。
- (4) 土井孝之「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社 1989
- (5) 図1に関しては、註(1)を基にして以下の報告書を参考に加筆をし、作成を行った。  
松下勝「播磨・長越遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第12冊 兵庫県教育委員会 1978  
篠宮正ほか「玉津田中遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第135冊 兵庫県教育委員会 1996  
黒田恭正「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1990  
古川久雄「郡家遺跡－篠坪地区第10次調査」六甲山麓遺跡調査会 1995  
丸山潔「住吉宮町遺跡 第11次調査」神戸市教育委員会 1990  
山下史朗「深江北町遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第54冊 兵庫県教育委員会 1988  
山田清朝「寺田遺跡（第117～124地点）発掘調査概要報告書」『芦屋市文化財調査報告』第39集 芦屋市教育委員会 2001  
土井孝之「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社 1989  
吉田昇「塩壺西遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第160冊 兵庫県教育委員会 1997  
岸本一宏「禿山遺跡他発掘調査報告書」『兵庫県文化財調査報告』第177冊 兵庫県教育委員会 1998  
別府洋二「北淡町久野々遺跡－一般農道整備事業（仁井Ⅱ期地区）に伴う発掘調査報告書－」『兵庫県文化財調査報告』第167冊 兵庫県教育委員会 1997  
山田清朝「下内膳遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第155冊 兵庫県教育委員会 1996  
坂口弘貢ほか『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ 三原郡広域事務組合 2001  
別府洋二・松下勝「淡路・志知川沖田南遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第40冊 兵庫県教育委員会 1987  
吉識雅仁「谷町筋遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第73冊 兵庫県教育委員会 1990  
伊藤宏幸「楠本下林遺跡」『東浦町埋蔵文化財調査報告書』第1集 東浦町教育委員会 1997
- (6) 岡山県南部地域と畿内（中河内）との併行関係については、以下の文献を参考にした。  
平井典子「中・四国から見た併行関係と実年代資料」『日本考古学協会2002年度橿原大会研究発表資料集』日本考古学協会2002年度橿原大会実行委員会 2002
- (7) 現在のところ、淡路地域の弥生後期土器編年は確立していない。しかし近年、岸本一宏「禿山遺跡他発掘調査報告」『兵庫県文化財調査報告』第177冊 兵庫県教育委員会 1998において、当地域の土器編年案が示され、おおその見通しは可能になってきている。ここでは一応の目安として、禿山・尼ヶ岡遺跡の編年案を基軸とし、甕形土器（淡路型のみ）の変遷を図示することによって、百間川原尾島遺跡出土淡路型甕の位置づけを行う。
- (8) 森岡秀人氏のご教示による。
- (9) 正岡陸夫「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 岡山県教育委員会・建設省河川工事事務所 1984



#### 第4章 まとめ

- (10) 宇垣匡雅「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 岡山県教育委員会・建設省河川工事事務所 1994
- (11) 草原孝典「吉備における庄内併行の土器」『庄内式土器研究』IX 庄内式土器研究会 1995
- (12) 百・古・I に入ってからからの搬入土器の少なさは、百・後・IV末に旭川下流域集落を襲った、大規模洪水による水田域の壊滅的被害により、集落の発展が損なわれたことも要因の一つにあげられている。  
下沢公明「弥生時代後期末の吉備南部社会について—百間川遺跡群を通じて—」『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会 2000  
重根弘和「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内の考古学—平井勝氏追悼論文集—』上巻 古代吉備研究会 2002  
草原孝典「集落遺跡の変遷からみた水田経営の画期—岡山県南部の弥生時代中・後期を中心に—」『環瀬戸内の考古学—平井勝氏追悼論文集—』上巻 古代吉備研究会 2002

## 第4節 弥生～古墳時代の集落変遷

### 1 はじめに

百間川原尾島遺跡における弥生～古墳時代の集落の構造・変遷については、それまでの調査成果をもとに検討を加え、本報告書シリーズの「百間川原尾島遺跡5」（以下「報5」）の第4章まとめ（第1・2節）でその概要を報告した<sup>(1)</sup>。その後6年を経て、おもに平成10年度から13年度にかけて発掘調査を実施した調査区（11～28BC）が本報告書の掲載対象となり、個々の遺構・遺物の概要を第3章、調査区のまとめを第4章第1～3節で示した。それらの成果が加わったことで、「報5」の段階で考察した内容に基本的な点に大きな違いはない。ただ、より具体性をもつあるいは蓋然性が高くなった事象と、逆に推察の修正に至ったあるいは不明材料が増加した点などが多少ある。そこで、「報5」の内容を基調にして、おもにそれらの点を中心に弥生時代後期集落・弥生水田・古墳時代集落のそれぞれの変遷を概観したい。

なお、以下の記述にあたっての地形上の区分名称（例えば微高地1-1・低位部1-2など）と遺構名（6住-8・4井-6・5溝-29などの略称）は、「報5」を踏襲する。さらに、文中に使用する時期分類のⅠ～Ⅳ期（弥生後期）・Ⅰ～Ⅶ期（古墳時代）も同様である。そして、本節で使用する第451～453図は、それぞれ「報5」の第343～345図に本報告対象調査区全体または部分の遺構を加筆し、部分的に修正を加えた。また、第451・453図中の堅穴住居に付した三桁の番号は、簡略のため先頭の数字をシリーズ番号、あとの二桁を遺構番号（例えば608は百間川原尾島遺跡6の堅穴住居8、文中で使用する略称6住-8と同）とした。

### 2 弥生時代後期の集落構成

#### Ⅰ期（百・後・Ⅰ新～Ⅱ古）

微高地1-1では堅穴住居2軒（6住-3・9）と井戸2基、小児棺3基を新たに加えた。これにより堅穴住居は7軒となり、占地的には中央に近い4軒+ $\alpha$ と東に40～50m隔てて3軒+ $\alpha$ の、2グループに分かれる蓋然性が増した。さらに、居住域の空白地点ともいえる12C付近で新たに複数の土器棺墓が見つかったことにより、これまでⅡ期にのみ伴うと考えられていたこの種の墓がⅠ期に始まり、地点を移動してⅡ期まで続いたと看取されるとともに、集落の中で居住域と隔てる意識のもとに墓域が構成されていた可能性が強くなった。

微高地1-2では、当期の堅穴住居・井戸の数の増加はない。全体に削平頻度が高いため、確実になかったとはいえないが、少なくとも粗であったことは確かである。

溝（水路）は後期末水田層下の2条が、それぞれの微高地に挟まれた低位部1-2側の肩部で継続して検出されている。しかし、遺構の分布状況に特別の変化はない。低位部1-2での水田域は、両水路の位置関係などからそれらに挟まれた範囲で存在したに違いないが、綿密に開始期を特定できる証拠を掴むには至っていない。また、低位部1-3の微高地側の肩部も、Ⅱ～Ⅳ期の開田状況からすれば24あるいは25ライン辺りに想定されるが、今回のⅠ期の図には入れていない。

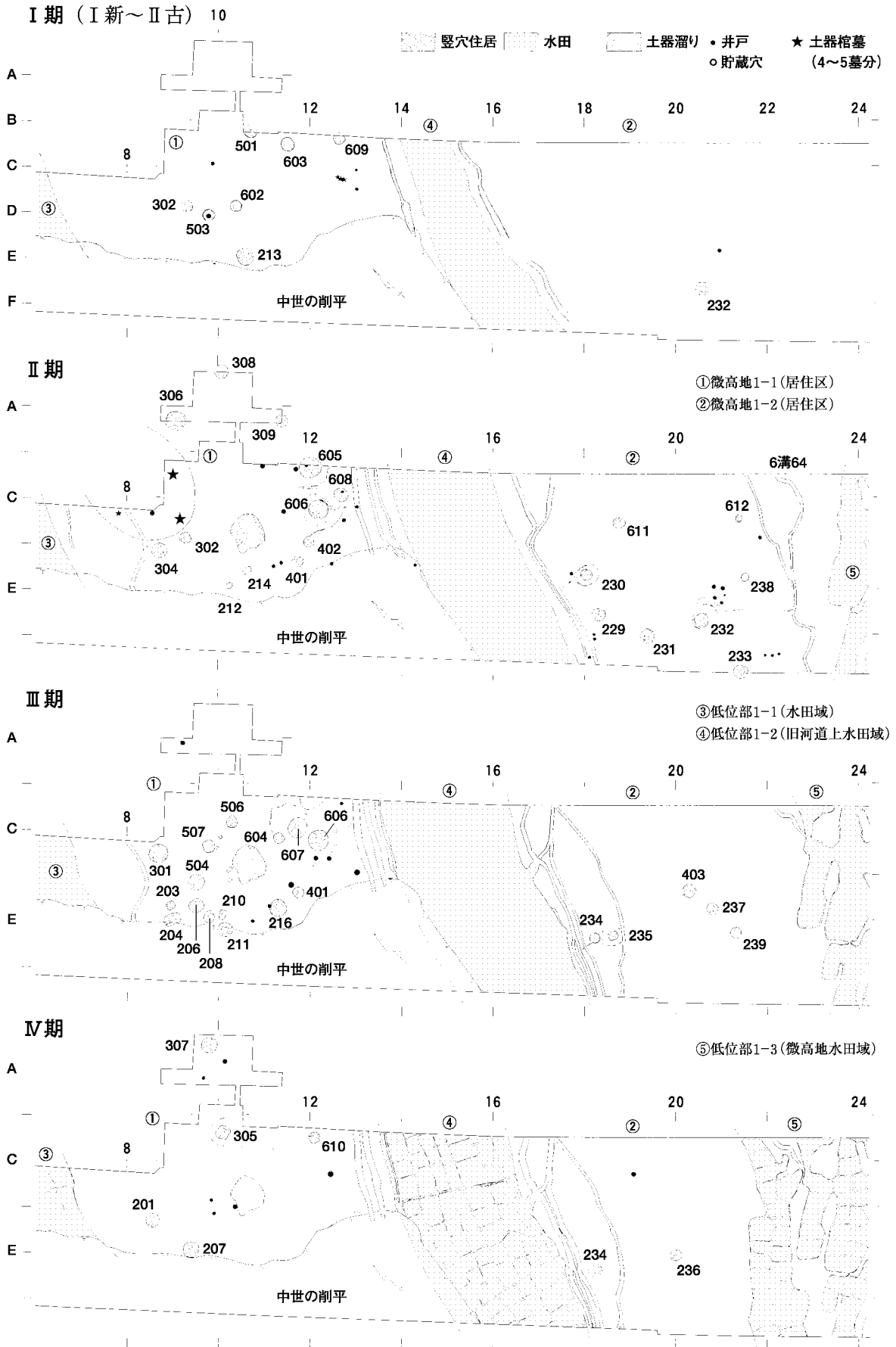
#### Ⅱ期（百・後・Ⅱ）

微高地1-1は、竪穴住居3軒（6住-5・6・8）とそのうち大形住居2軒（同5・6）に伴う外周溝、井戸5基、既調査区につながる溝3条などを加えた。「報5」の段階では、微高地のほぼ中央部の土器溜り周辺の住居は、それを避けるように中小が配置されている状況のみを指摘したにとどまったが、今回の大形住居等を加えることによって、位置関係と住居規模にいくらかの法則性を認め得た。つまり、土器溜り周辺の大中小の住居群がそれぞれ近接する2軒をペアと考えると、25m前後の間隔で大きく4か所に位置していることになる。そして、近接するペア同士の同時性がないとすれば、土器溜りを中心とする半径20~30mの半円形の弧上に、ほぼ等間隔で4~5軒の住居が同時に、かつ2期に渡り存在していた可能性を指摘できる。したがって、位置関係からすれば6住-5・同8・4住-2・同14・3住-2の5軒と、6住-6・4住-1・2住-12・3住-4の4軒の2グループに分かれ、それぞれ大形1・中形1・小形2~3<sup>(2)</sup>の住居構成が捉えられる。また、井戸5基のうち3基は6住-5・8と重複または近接しており、少なくとも前者グループのなかでの同時性はない。

微高地1-2では、今回調査で竪穴住居2軒（6住-11・12）と既調査区から継続する溝4条（6溝-52・53・63・64）を加え、竪穴住居の総数は8軒になった。「報5」では、6軒のうちの5軒の住居が広場の周りに半円状に配置されていたことから、未調査部分を含めると6~8軒位の一集団の存在を想定していた。結果的にはほぼ想定どおりに7軒の住居の存在が明らかとなり、具体的にはそれぞれの住居が15~20m間隔で長軸約70m・短軸約50mの楕円上に配置され、大形1・中形3~4・小形3~2の構成が看取される。中形と小形の数の違いは、同一住居の拡張により4m台と5m台になるものがあり、多少の増減が見込まれるためである。この住居群が7軒一集団のまま一定期間、同時に存在した確証はないものの、個々の住居が中央広場の周囲に等間隔に配置され、さらに大半の住居にその位置での1~2回の拡張がみられ、伴出土器はそれぞれほぼ同一型式の範疇にある。したがって、状況的にはⅡ期を通じて住居のほとんどが継続するなかで同時存在していた蓋然性は高く、比較的整然とした集落構造を示す好例として注目されよう。

### Ⅲ期（百・後・Ⅲ）

微高地1-1は、新しく竪穴住居3軒（6住-4・6・7）と井戸1基、それにⅡ期と重複する溝を加えた。「報5」ではⅡ期に増して住居・建物・井戸・貯蔵穴などが集中する状況や、継続して土器の廃棄場所となった溜りを中心として同心円状に中・小規模の住居が配置され、各住居の位置関係などからそれらの同時存在は多くても6~7軒が想定されることなどを指摘した。そして、既存の大形住居（3住-1）は、土器溜りを中心とする中・小形住居のまとまりからいけば北西位に分離した位置にあり、さらにその北側は未調査区であるため、北に予想される別群に属すのかそれとも土器溜り周辺の群に属すのかの判断はつかなかった。今回の住居3軒のうち、とくに大形住居2軒（6住-6・7）の加増により、住居の規模・位置関係などから、土器溜り周辺グループの集落構造がいくらか明確になった。つまり、同集団が規模的にも大・中・小形住居を満たすことになり、Ⅱ期と同様に近接するペア同士の同時性がないとすれば、それらの位置関係から6住-6（大）・4住-1（小）・2住-11（小）・3住-3 = 5住-5（中）・5住-6（小~中）・6住-4（小）の6軒+ $\alpha$ のグループと、6住-7（大）・2住-16（中）・2住-11（中?）・6（小~中）・5住-7（中）の5軒+ $\alpha$ のグループが想定される。しかしながら、この想定は前グループがある時期、同時に後グループに入れ替わったのではなく、住居の大半に拡張が行われていることやその拡張時期幅が特定できない状況のもとでは、南西部の近接する小住居群を含めて、かなり複雑な過程を経ながら徐々に



第451図 弥生時代後期集落の変遷 (1/2,500)

継続を繰り返すなかで後者に推移したと捉えるしかない。

微高地1-2では新たな竪穴住居の検出はなく、5軒のままであった。住居の規模は中形2軒・小形3軒であり、微高地西寄りの2軒(2住-34・35)が接した位置関係にあるので、同時に存在したのは多くとも4軒にとどまる。ただ、中央部の3軒はそれぞれの間隔が10m未満であり、Ⅱ期の例が15m以上離れていることからすれば、同時存在の可能性は3軒のうち隣り合わない2軒(4住-3、2住-39)と西寄りの2軒のうちのどちらか1軒とで、最大でも3軒となる。

水田関係では、重複する溝(6溝-51・53・64など)が数条あり、そのうち新たな6溝-64の検出により、当微高地の東側肩部の開田状況がより具体的に推測できることとなった。「報5」では、Ⅱ期は水路が微高地の肩部に存在することを前提に、Ⅲ期はⅣ期により近いところまで開墾されていたと推測して、微高地と水田域の境をそれぞれの時期の集落の変遷図(「報5」第343図のⅡ・Ⅲ期)に示した。しかし、6溝-64の時期幅と鳥状高まり縁辺の出土土器の時期などから、とくにⅢ期での段階的な開墾状況を予測し、第451図(Ⅲ期の⑤部分)のように改めた。また、低位部1-2の水田域および肩部の水路は、Ⅳ期に踏襲されたことに大きく違いはないと思われるが、Ⅳ期に示した弥生終末の廃絶時の畦畔区画はそのまま同じとは思えず、Ⅲ期では範囲のみを示した。

#### Ⅳ期(百・後・Ⅳ)

微高地1-1では、竪穴住居1軒と井戸1基、3住-5の外周溝の一部と洪水砂に埋もれた用水路2条の延長部等を加え、竪穴住居総数でいえば5軒となった。しかし、Ⅲ期と比べ住居が激減し、さらに散在する状況にとくに変化はない。この状況は新たな住居の検出がなく、住居総数が2軒のままの微高地1-2も同様である。ただ、微高地1-1での各住居が同時存在の可能性があるとすれば、そのうちの4軒は、土器溜り(この時期には痕跡としてのみ存在していたと思われる)を中心とする広場の周囲に配置されていたことになる。そしてその基本構成は、集団規模は別にしても、少なくとも後Ⅱ期以降、Ⅳ期まで踏襲されていた可能性を示唆する。

ともあれこのⅣ期は、「報5」で推察したように、粗の状況が周辺の水田の可耕地化が飽和状態になったための単なる移動・移住によるものなのか、古墳出現前夜にあたるこの時期における共同体の変質過程の一現象なのかの判断はつかないが、結果的に今期末にこの一帯を襲った大洪水で微高地上も壊滅的な打撃を被り、その後の復興過程での集団再編成に拍車をかけ、新しい時代へ向かう胎動があったことだけは間違いない。

水田と水路は、既刊報告でたびたび触れているように、この時期にこの一帯を襲った洪水砂で厚く覆われさらにその後改修が成されなかったために、その当時のままの水田景観を現代に蘇らせた。つまり洪水砂をていねいに取り去ることによって、同時存在の水田の拡がりはもとより、水路との同時性や水田への配水状況、水田畦畔の規模・区画・水口の位置、さらに部分的にはあるが水田面の稲株や足跡の蓋然性の高い痕跡などについての具体的な資料が得られたわけである。低位部1-2では調査区の幅(約23m)分の新たな水田の拡がりが見出され、畦畔で囲まれる中小の水田区画17を加えた。基本的には既調査部分の状況と大差のない展開を示すが、両微高地に直交する大畦畔に接する両側の水田区画が他よりも広い点が注目される。低位部1-3でも既調査部分と同様、鳥状高まりとその間に小区画の水田が展開する。そして、鳥状高まりの一つにⅡ期以降踏襲して使用された水路(6溝-64)が、最終的に洪水砂で埋没する直前まで機能していたことも判明している。

### 3 弥生水田の展開

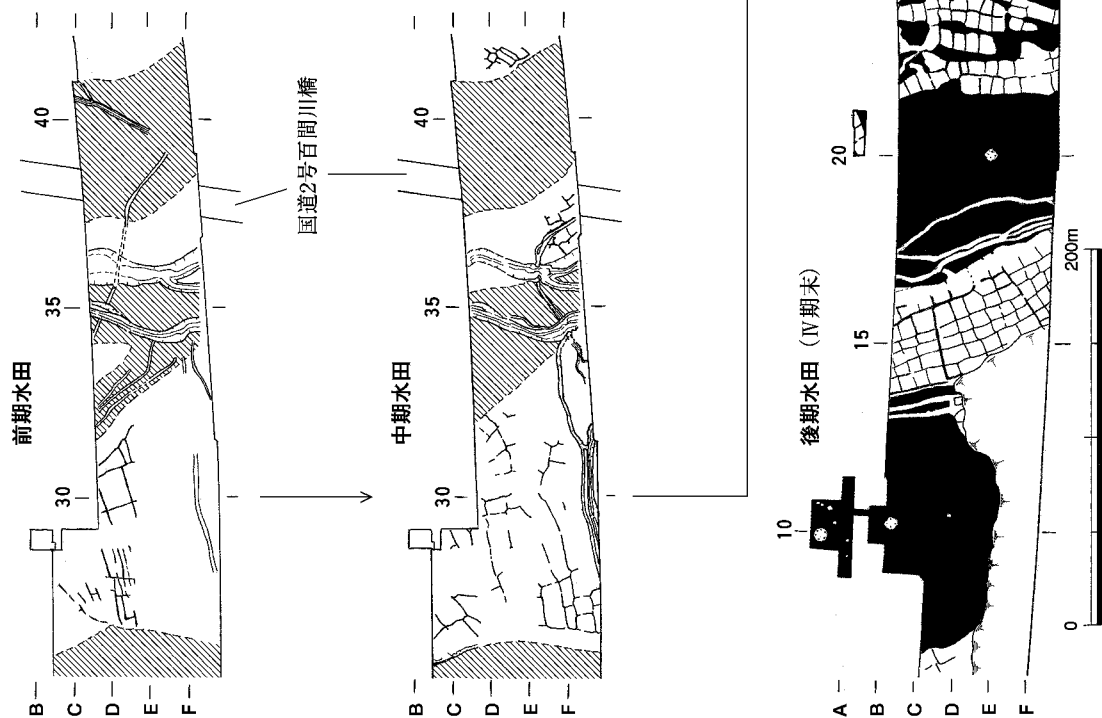
#### 前期水田

この時期の水田は、今回調査では26～27 B・C区にわずかながら数条の畦畔の痕跡として加えた。畦畔はおもに長辺側が途切れ途切れに4条検出されており、その間隔が約2.5～3.5mであるところから、それが短辺側の区画規模と考えてよい。これは、南西側に隣接する調査区(26～28 C・D区)の短辺長と大差がなく、水田一区画の平面形は長辺10～15m位の短冊形であった可能性が高い。ただ、今回報告部分では長辺の方向が北に行くほど南に振れ、隣接調査区とは最大で約30°のズレがある。これは水田の推定肩部(水田層の途切れる境)が隣接調査区と比べて約35°西に振れることを考慮すれば、地形に則した畦畔配置(北へ行くほど一区画の形状が短辺の一方が少し長めの長台形を示す)がなされていたと解釈されよう。

水田の時期も百・前・Ⅲとみてよい。

#### 中期水田

今回調査では、この時期の水田も前期水田とほぼ同範囲の25～29 B・Cで認めた。畦畔は一区画の形態・規模が正確に捉えられるほどの残存状況は示さないが、亀甲形を基調とする方形または長方形を呈す隣接調査区と大差はないと思われる。また、今回調査部分では畦畔の方向が前期水田と近似していて、地形的にも前期とあまり変化がなかったことがうかがえる。なお、時期も中期前半の範疇を覆す資料は見つかっていない。



第452図 弥生水田の変遷 (1/4,000)

### 後期水田

この時期の水田は、前項でも触れたように、水路の位置や時期から前葉のある時期に開田され、徐々にあるいは急激に耕地面積を増加させ、最終的には終末に至って大洪水を被り第452図のⅣ期末の状態で放棄されたわけである。今回調査区で、新たに低位部1-2及び低位部1-3の水田面の拡がりに加え、基本的には既調査部分の状況と大差がないものの、全体的な水田単位の把握や灌漑機能をより具体的に捉える資料の増加をみた。

既調査区の水田遺構の評価は、「報5」の時点である程度整理して提示<sup>(3)</sup>し、その見解等は現時点でも変更はない。

## 4 古墳時代の集落構成

### Ⅰ～Ⅱ期（百・古・Ⅰ～Ⅱ）

微高地1-1では、今回調査でこの時期の竪穴住居2軒（6住-15・16）を加え、住居総数11軒+ $\alpha$ となった。なお、「報5」ではこれらの時期をⅠ～Ⅱ期の間に大きく捉えていたが、再検討の結果3住-10のほかは、井戸を含めてⅠ期の範疇の可能性が高いとの結論を得た。また、同様に12C区の4住-9もⅠ期の可能性が高く、したがって「報5」で想定したように、全体的に微高地の中央から北側に集落の中心があったと推定した点に大きな違いはないものの、今回調査の2軒に4住-9を加えた3軒が他のグループと30m以上離れて存在することになり、この3軒が未調査区の+ $\alpha$ 分と一つの集団を形成していた可能性も生まれた。

微高地1-2には、1軒の竪穴住居（6住-28）と2棟の掘立柱建物、及び3基の井戸を加えた。6住-28は既存の3軒の住居群とは30m以上の距離をもつので、それらと同じ集団であったかどうかの判定はむづかしく、むしろ北東側の未調査区に予想される住居群に属するのかもしれない。ただ、当微高地は既存住居もかろうじて床面ないし壁帯溝の残存で確認されるなど、全体的に後世の削平頻度が高く、「報5」でも触れたように、既存住居と井戸との距離が遠過ぎることなどからも、ほかに数軒の住居が存在していた可能性を捨てきれない。

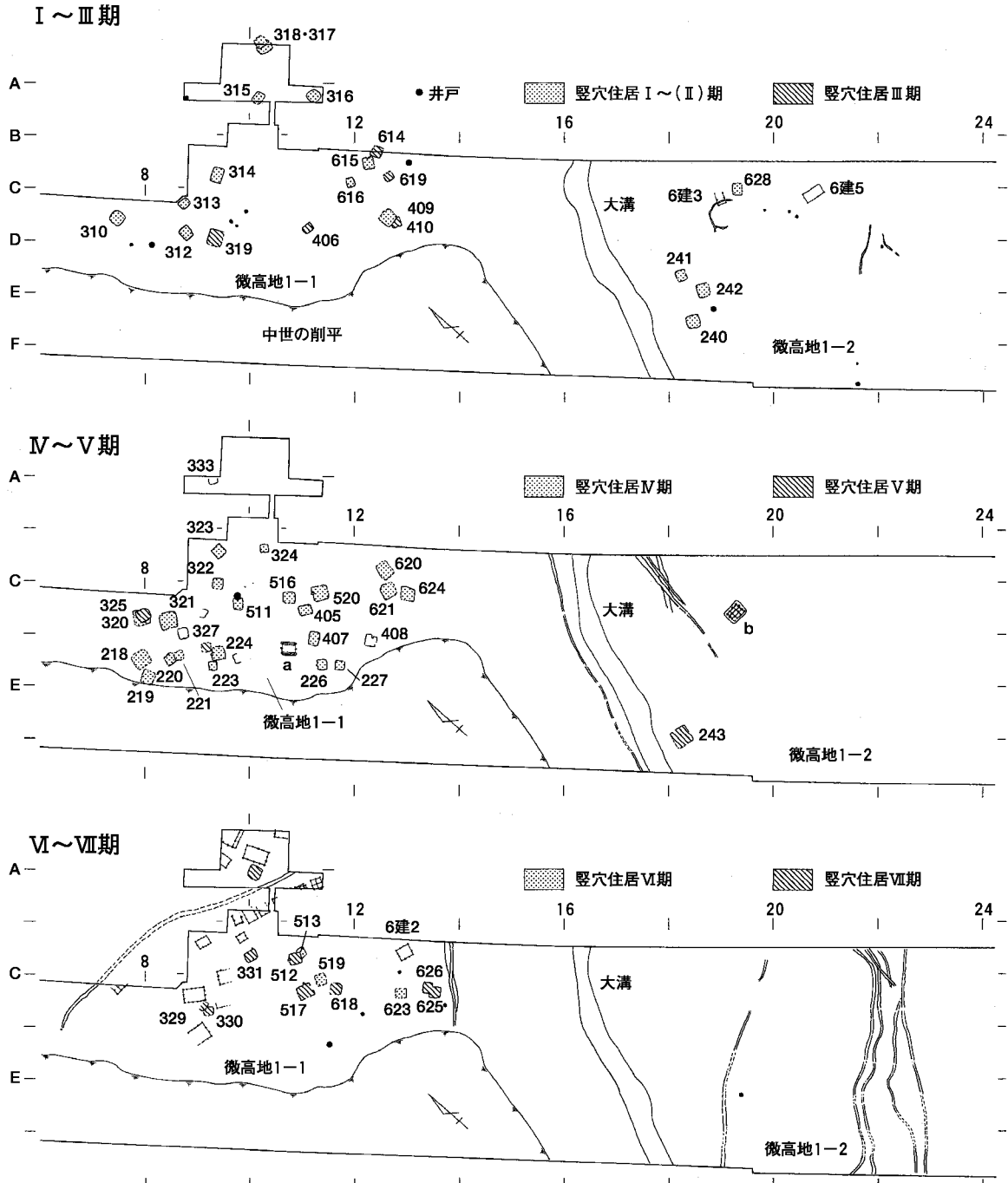
### Ⅲ期（百・古・Ⅲ）

この時期の微高地1-1での住居は、新たに2軒の竪穴住居（6住-14・19）を加え5軒となった。北側部分に未調査区が拡がるので何ともいえないが、現状では他の集団とは多少分離された形で、この5軒+ $\alpha$ でまとまっていた可能性がある。また、微高地1-2では既調査区と同様、今回調査区にも当時期の住居・井戸の遺構はなく、削平頻度を加味しても集落が存在していなかった蓋然性が高い。したがって、「報5」でも指摘したように、この時期の集落の中心は、当微高地の別地点または別の微高地に移ったと考えてよい。

### Ⅳ期（5世紀後半～6世紀初頭）

この時期は、微高地1-1で新たに3軒の竪穴住居（6住-20・21・24）が加わり、住居総数21軒+ $\alpha$ を数える。Ⅲ期から急激に増加するだけでなく、古墳時代のなかでの最大のピークを迎える。

「報5」では、8～9軒の住居が2期あるいは3～5軒の単位で3～2グループが2期にわたって営まれた、との考えを提示していた。新たな近接した3軒の増加により、5住-16・同20（=6住-17）・4住-5、4住-7・2住-26・同27の3軒3グループが、位置関係でいえば、同様の近接度および配置を示して存在することとなった。また、3住-20と同21、2住-18と同19、2住-20と同



第453図 古墳時代集落の変遷 (1/2,500)

21、2住-23と同24などの2軒が近接あるいは重複する数グループもあり、同時に存在した集団は、未調査区のαを加味して、3～5軒の単位で2～3グループが3期にわたった可能性も出てきた。いずれにしても、今のところ一辺8m以上の大形住居はなく、有力者の居館の存在を想起させる濠や柵などの施設も見つかっていない。なお、この時期唯一の掘立柱建物であり、3間×2間で桁行柱が布掘り掘り方をもつ4建-8(図中ではa)は、隣接する堅穴住居との位置関係からすれば、少なくとも2期にわたり堅固な倉として存在していたらしい。

一方、微高地1-2では今回調査区にも堅穴住居・井戸は確認されていない。

V期(6世紀前半～中頃)・VI期(6世紀後半)



今回調査区では、V期は16区の大溝を除いて、微高地1-2で掘立柱建物（5建-12）の延長部分（6建-8）を検出したほかは、堅穴住居・井戸とも皆無であった。この掘立柱建物（図中ではb）は、「報5」の部分検出時点での見解では棟持柱建物の可能性が推測されていた<sup>(4)</sup>が、今回の調査で全体規模等が把握され、4間×3間の総柱建物であること等が判明している。これにより、微高地1-2では、削平頻度にもよるが、中形堅穴住居1軒（2住-43）と倉庫1棟（b）の組み合わせのみが存在することとなる。その場合には、小形堅穴住居2軒+αと井戸1基の存在する微高地1-1とは大溝によって隔てられた形の微高地1-2のあり方は、何か特殊な区域（例えば有力者の居館の一部）の可能性もなくはない。

VI期は、微高地1-1で堅穴住居1軒（6住-23）を加えたのみで、小形堅穴住居総計3軒にとどまる。また、微高地1-2では今回調査区でも継続する溝のほかには堅穴住居等は確認されていない。

#### Ⅶ期（6世紀末～7世紀初頭）

この時期は、微高地1-1で一辺4m前後の方形堅穴住居3軒（6住1-18・25・26）と掘立柱建物1棟（6建-2）、井戸1基（6井-15）を加えた。これにより、総計は堅穴住居9軒、建物19棟、井戸2基となった。堅穴住居はそのうちの2軒に重複が認められ、建物も桁行の軸線の方位の違いにより3グループ+その他で構成されるので、もちろんそれらがⅦ期を通じて併存したわけではない。また、この時期は既調査区の北及び東側の未調査区に居住域が大きく広がっていて、堅穴住居と建物ともに多くの存在が想定されるため、一時期の同時存在の軒・棟数などのグループ分けや構成の推定を困難にしている。ただ、現状では微高地の東端近くに新たに掘立柱建物（6建-2）が確認されたことにより、中央の約100m四方の区域がおもに堅穴住居区であった可能性は指摘できよう。

あえて、現状でこの区域に限定して同時存在の集落構成を推測するならば、少なくとも3期にわたり堅穴住居3～4軒と建物3～5棟、それに倉庫1～2棟の組み合わせ（建物の比率が徐々に高くなっていった可能性もある）で推移し、微高地1-1全体でいえば数集落が存在したと考えておく。

一方、「報5」でも指摘したように、この時期は建築様式の違う建物を居住に採り入れ、堅穴住居の消滅に向かう一大画期として捉えられよう。

## 5 おわりに

以上、おもに弥生時代後期から古墳時代を通じて、百間川原尾島微高地での集落変遷を概述した。今回「報5」を基調にし、本報告書掲載調査区の成果を加えて段階的な記録を留める意味で再編したが、各時期の集落構成や消長などに関わる基本的な評価は、前報告書の段階と変わっていない。

百間川原尾島遺跡では、6～8・A～C区の辺りが平成14・15年度に調査または調査予定であり、とくに集落構成については、その成果を加味してもう一度検討し直す考えである。（柳瀬昭彦）

#### 註

- (1) 「百間川原尾島遺跡5」 pp. 263-271。なお、p. 267の第344図中の前・中期水田のグリッドB～Eを、C～Fに訂正願いたい。
- (2) 大きさの基準は、大形を径（一辺）8m以上、小形を径（一辺）5m以下とし、その間を中形とした。
- (3) 「百間川原尾島遺跡5」 pp. 267-268
- (4) 「百間川原尾島遺跡5」 p. 119

## 付載1 岡山県原尾島遺跡出土ファイアンス状玉について

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 肥塚隆保

ガラスの起源については諸説様々であるが、顔料や釉薬、そしてファイアンスから誕生したと考えるのが一般的である。ファイアンスは西アジア・北アフリカなど“西の地域”で発達したが、中国でも紀元前10世紀頃にはファイアンスが誕生している。中国においてファイアンスがいつごろまで続くのかは明らかでないが、漢代頃にも存在したようである。日本において、ガラスが紀元前3世紀頃に伝えられたと考えられており、それより以前や以降にファイアンスが伝えられていたのかは明らかではない。日本において唯一、三雲遺跡（福岡県前原市）からの出土が報告されている。今回の岡山県原尾島遺跡の発掘調査によって、従来の遺物には見られない砂粒を固めたような小型立方体のいわゆるサイコロ状の玉が出土したので調査をおこなった結果、ファイアンスもしくはそれに類する物質の可能性が示唆された。以下、その概略について記す。

### 1. 試料および観察

実体顕微鏡およびイメージングプレートを用いたCR（Computed Radiography）法による観察調査をおこなった。CR法はフィルムに代わってイメージングプレート（二次元の蓄積型放射線検出器）を用いるデジタルラジオグラフィである。今回は内部の状態および構造を精密に調べるため、微焦点X線管を用いた拡大投影をおこなった。

調査した試料は図1に示す2点である。いずれもサイコロのような小型立方体状を呈し、各角および稜線は丸みを帯びている。玉類の一種と考えられ、中央には穿孔されたか、もしくはあらかじめ何らかの芯に原料を巻きつけたり、成型された製品に芯を挿入して孔を作り芯をとりはずした後に焼成

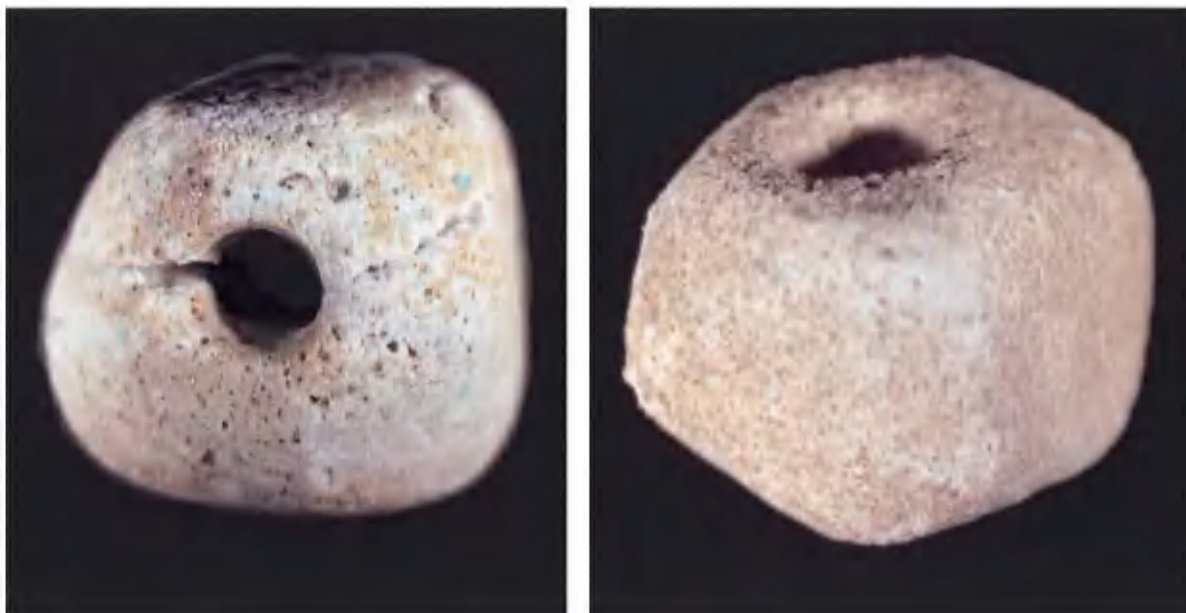


図1 調査試料の写真（1辺がほぼ6mmから10mm）  
試料は白っぽく粒状を呈するが、比較的よく固化している

固化したのかもしれない（図4参照）。遺物の表面は茶褐色を呈するが、これは埋蔵していた土の付着によるもので、遺物自身は灰白色ないし白色である。一見、風化が進んでいるようにも見られるが、保存状態は良好である。顕微鏡観察の結果、粒状物質の集合体でこの粒子のなかには淡青色ないし淡青緑色の丸みを帯びて溶融したように観察されるガラス物質が散在しているのが観察される（図2）。また、粒子には石英のような鉱物が殆どを占め、その形状は角（礫）状を示しかつ淘汰は良好であり、自然に堆積した石英砂というより粉碎された石英粒の集合のように観察される（図3）。また、比較



図2 試料のなかには最大1mm大におよぶ淡青緑色のガラス片が混入している。大小のガラス片が多数散在する



図3 破碎されたと考えられる角のある石英が多数観察される。また、粒子の淘汰は良好である

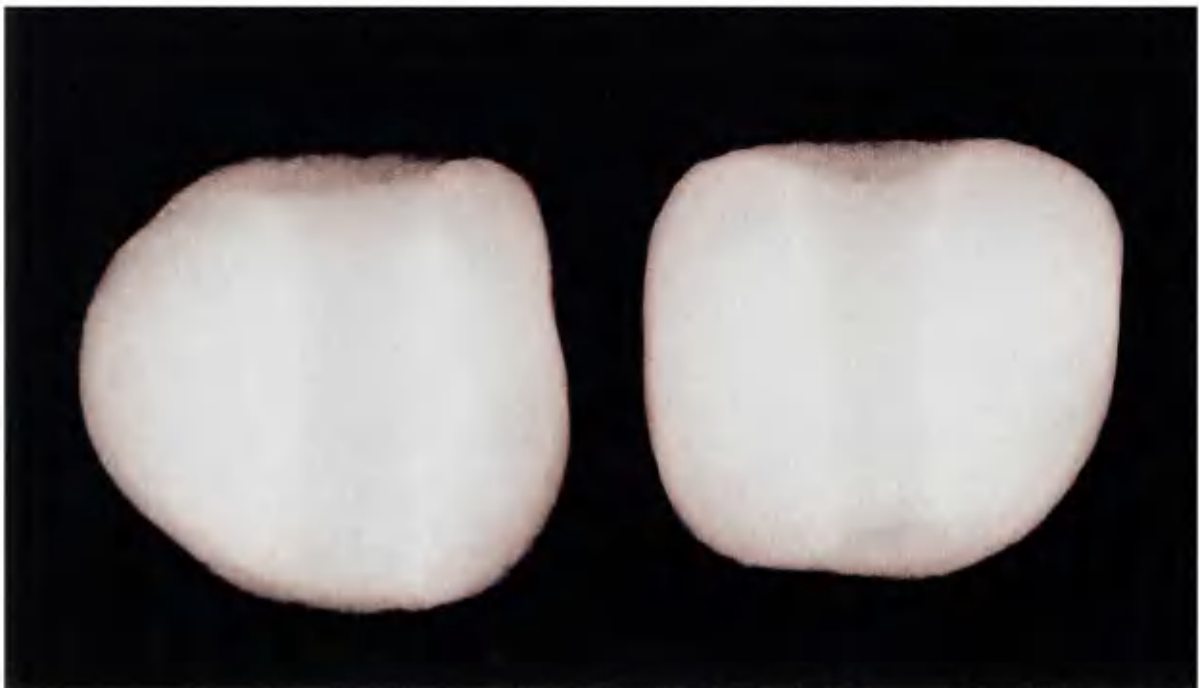


図4 CR画像による内部構造

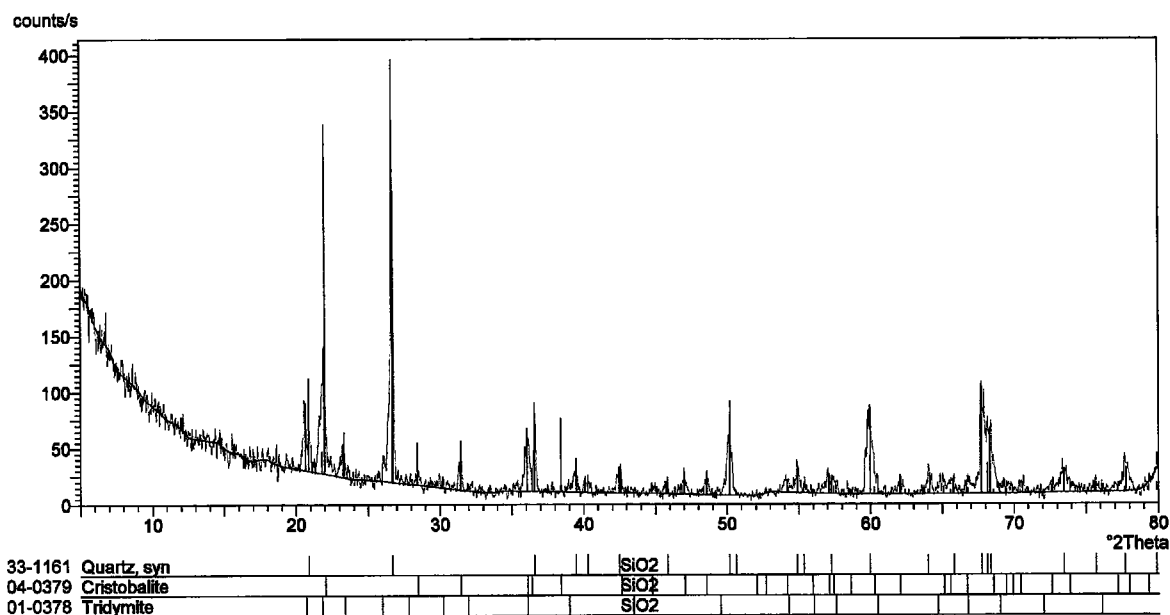
的粒子間の結合状態は良好である。また、表面全体には幾分か、ガラス光沢を呈し薄くガラス層が形成されていたのかもしれない。

## 2. 分析調査

蛍光X線分析およびX線回折（平行ビーム）法による分析調査をおこなった。当初、分析試料の採取を試みたが、微量では不均一すぎることや、遺物が小さいため形状を大きく損なう恐れがあったので、試料の採取はせず、非破壊測定法により測定をおこなった。

青色ガラス状物質とマトリックスの白色部分を蛍光X線分析により測定したところ、いずれも二酸化珪素（ $\text{SiO}_2$ ）の含有量は多く、酸化ナトリウム（ $\text{Na}_2\text{O}$ ）や酸化カリウム（ $\text{K}_2\text{O}$ ）、あるいは酸化鉛（ $\text{PbO}$ ）、酸化バリウム（ $\text{BaO}$ ）など融剤となる成分はきわめて少なく、古代のガラスとは化学組成は明らかに異なっている。また、青緑色部分は白色部分に比べて酸化銅含有量は多く、2 - 3（wt %）もしくはそれ以上におよぶが、白色部分は0.6（wt %）以下である。酸化鉛は青緑色部分には0.1%前後もしくはそれ以上含まれるのに対して、白色部分には0.05%前後もしくはそれ以下しか含まれない。いっぽう、酸化鉄は両者とも0.3%前後で、含有量に差がない。また、倉敷芸術科学大学国際教養学部の妹尾先生によって測定されたデータもほぼ同じ傾向を示していた。青緑色ガラス部分の酸化銅含有量はかなり多く、古代ガラスのなかにこれだけの酸化銅が入ることはありえないと考えられた。また、倉敷芸術科学大学国際教養学部の妹尾先生のデータではコバルトも0.03%という高濃度が検出されていた。一般に、ケイ酸塩ガラス中にコバルトが入った場合には、濃青色のガラスに着色されるが、顕微鏡で観察するかぎりコバルトイオンによって着色されたガラス物質は見当たらない。何かほかの物質に由来するのかもしれない。以上の結果から、青緑色ガラス状物質は弥生時代や古墳時代の遺跡から発見されるガラスとは異なり、むしろ銅の精錬時に生じるガラス物質とも考えられ、これらを粉砕して石英粒に混ぜて過熱固化した可能性が考えられた。

試料の構成鉱物を調べるため、X線回折（平行ビーム法による非破壊法）によって測定した結果、



Philips Analytical

図 5 非破壊 X 線回折スペクトル図

石英・クリストバライトを検出したが、他の鉱物、例えば角閃石族や輝石族は検出されなかった。長石類も検出されないことなどから考えると、この物質は成型された後、ほぼ1,100℃～1,200℃程度の温度で加熱されたと推定される。顕微鏡観察でも確認できるが、粘土物質はないためムライトは生じていない。

### 3. まとめ

以上の結果をまとめると、

- ① 二酸化珪素含有量がきわめて多い。
- ② 遺物は粒状物質で構成されている。とくに石英粒子が顕著で、青緑色ガラス粒子が散在して含まれている。また、一部の鉱物は溶食されたような痕跡を示すものもある。
- ③ 石英粒子間の結合は、何によっているのか現状では確定できないが、マトリックス部分と青緑色ガラス状物質の測定値から推定すると、ガラス物質が膠着剤となっていることが推定される。
- ④ ①②③などから、この物質は石英粒子をシントリング（焼結）することによって作られたファイアンスの一種と考えられる。つまり、粉碎して粒度をある程度ととのえた石英粒、粉碎されたガラス物質を混合して焼結した可能性はきわめて高い。微細な粉末になったガラス物質は石英粒子間を充填溶解して固着したものと思われる。また、大粒のガラス物質は急冷されたため、ガラス内部に微細なひびが生じていることから、ガラス転移点付近における除冷などはされていない。このファイアンス状物質と推定される遺物に用いられたガラス物質がいかなるものであったのかは推定の域をでないが、鉛バリウムガラスやカリガラス系・ソーダ石灰ガラス系とは考えにくく、銅鉱石などの金属の精錬のときに生じるケイ酸塩ガラス物質とも考えられるが、酸化カルシウムや酸化マグネシウムの含有量が低いように考えられる。三雲遺跡で出土しているファイアンス？と言われている遺物とはかなり異なっている。今後、このような遺物がどこで出土しているのか類例等もあわせて検討すると同時に、精密な分析が必要であることはいうまでもない。今回の報告では「ファイアンス状の物質」という推定をおこなった。ファイアンスは、ガラスが出現する以前やそれ以降にも西アジア・北アフリカ・ヨーロッパで流通しており、これらの技術が中国へ伝えられ、紀元前10世紀頃にはファイアンスが製造されており、それは戦国から漢代頃にも作られていたようであるが、ガラスの製造法が確立するようになり、ファイアンスは衰退した。今回、発見された遺物が、弥生時代の日本で作られていたのかは不明であるが、もし、この遺物が日本で作られていたとすると、当時すでに銅の製錬がおこなわれていた可能性はきわめて高くなる。

## 付載2 百間川原尾島遺跡の花粉分析・プラントオパール分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回の百間川原尾島遺跡（岡山市原尾島所在）の発掘調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡、水田跡が確認されている。弥生時代後期の水田は、住居域と溝を画して隣接して検出されており、整然とした区画が確認されている。今回の分析調査では、弥生時代後期の水田とその前後期の堆積物について、花粉分析・植物珪酸体分析を行い、弥生時代後期の水田形成期と、その前後期における古植生および、栽培種イネ属の産状について検討する。

### 1. 試料

試料は、弥生時代後期の水田域に設定された15Bトレンチ北壁断面（サンプルA採取地点）、14Cトレンチ北壁断面（サンプルB採取地点）の2カ所から採取された。両地点の断面図および試料採取位置を図1に示す。各調査地点の状況を発掘調査所見に基づいて、以下に記載する。

15Bトレンチ北壁断面（以下、サンプルA採取地点とする）の堆積物は、1層～15層に分層されている。各層は、1層が中世の柱穴を埋積する堆積物、2層が灰黄色粘土、3層がにぶい黄色粘質微砂、4層が褐灰色粘質微砂、5層が暗赤褐色粘土、6層が暗黄褐色粘質微砂、7層がにぶい黄～黄褐色微砂、8層が明黄褐色微砂、9層が暗灰色粘土、10層が灰色粘土、11層が灰褐色粘土、12層が黒灰色粘土、13層が灰黄色粘土、14層が暗灰褐色粘土、15層が黄灰色粘質砂とされている。このうち7層・8層が洪水性堆積物、9層が弥生時代後期末の水田耕土、10層も弥生時代後期末の水田耕土の可能性のある堆積物、14層が弥生時代前期の土器細片を多量に含む包含層とされている。分析試料は、7層から4点（試料名：A-1～A-4）、9層～12層から各層1点（試料名：A-5～A-8）の合計8点が採取された。

14Cトレンチ北壁断面（以下、サンプルB採取地点とする）の層

14Cトレンチ北壁断面（以下、サンプルB採取地点とする）の層

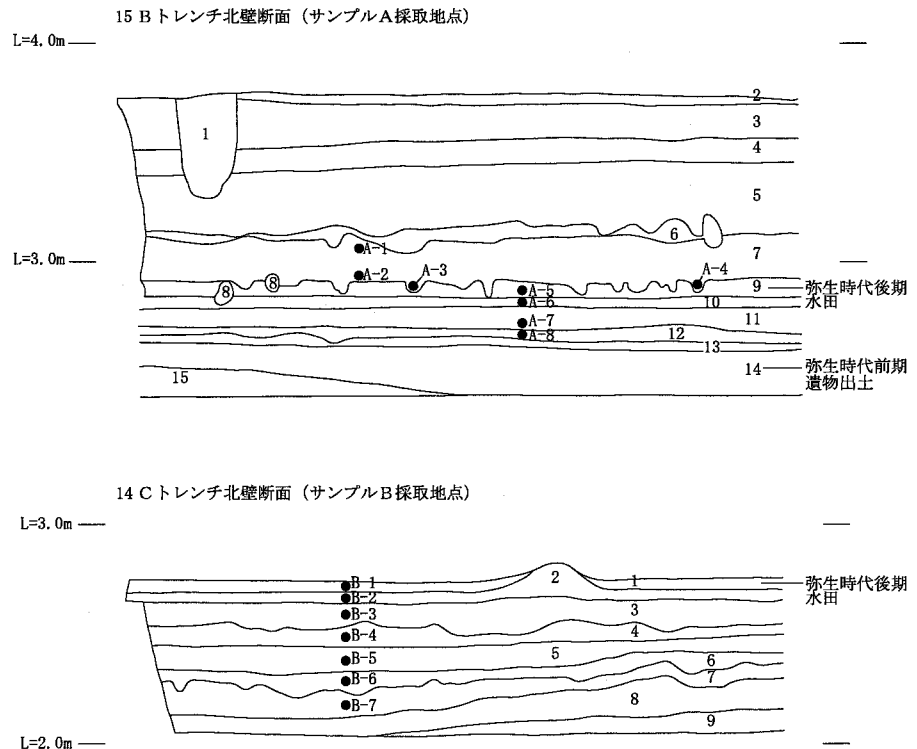


図1 試料採取地点の土層断面および試料採取位置

序は、1層～9層に分層されている。各層は、1層が暗灰色粘質微砂、2層が灰色粘質微砂、3層が暗灰褐色粘土、4層が灰黄色粘質微砂、5層が灰褐色粘質微砂、6層が黒灰色粘土、7層が灰黄色粘土、8層がにぶい黄褐色粘質土、9層が暗黄褐色粘土とされている。このうち、1層・2層がサンプルA採取地点の9層・10層にそれぞれ対応しており、弥生時代後期末の水田層、あるいはその可能性がある堆積物とされる。その他の層位は遺物が検出されず、年代は不明である。分析試料は、1層～7層まで各層、計7点（試料名：B-1～B-7）が採取された。

以上、サンプルA・B採取地点から採取された計15点の土壌試料について、花粉分析と植物珪酸体分析を実施する。

## 2. 分析方法

### (1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。また、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

### (2) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。なお、分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量する。

結果は、検出された植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。これは、同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算して表現したものである。

## 3. 結果

### (1) 花粉分析

結果を表1、図2に示す。サンプルA採取地点の試料8点は、いずれの試料も花粉化石の保存状態

が悪く、検出される化石数が少ない。検出された種類は木本花粉のマツ属・ツガ属、草本花粉のイネ科・カヤツリグサ科などである。シダ類胞子はいずれの試料からも産出し、特に試料A-5～A-8で多産する。

サンプルB採取地点では、試料B-1～B-4で花粉化石がほとんど検出されないが、試料B-5～B-7では比較的多産する。ただし、いずれの試料も化石の保存状態は悪い。

試料B-5～B-7の花粉化石群集は層位的に変化する。試料B-7では、木本花粉のアカガシ亜属が高率に出現し、モミ属・ツガ属・マツ属などを伴っている。草本花粉ではイネ科・カヤツリグサ科・サナエタデ節-ウナギツカミ節が比較的多く出現し、オモダカ属・ヒシ属・ガガブタ・サンショウモといった水生植物を伴う。

試料B-6になると、木本花粉ではアカガシ亜属が低率となり、針葉樹のモミ属・ツガ属・マツ属や

表1 花粉分析結果

種 類	試料番号	サンプルA採取地点								サンプルB採取地点						
		A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	A-7	A-8	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7
木本花粉																
モミ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	8	20	12
ツガ属		-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1	15	7
マツ属		-	4	-	1	2	-	2	-	1	-	-	1	9	19	15
スギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	7	5
ヤマモモ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	-	4
サワグルミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	-
クマシデ属-アサダ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	10	2
カバノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	2
ハンノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1
ブナ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	3	13	-
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	5	3	3
コナラ属アカガシ亜属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	9	5	54	10	67
クリ属-シイノキ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	4	-	5
ニレ属-ケヤキ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	8	1
エノキ属-ムクノキ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
トチノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ウコギ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	4	2
ガマズミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
草本花粉																
オモダカ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
イネ科		-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	4	1	45	44	25
カヤツリグサ科		-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	3	7	18
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	6	34	28
アカザ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
マメ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヒシ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
セリ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3
ガガブタ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	3
キク亜科		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	5	1
不明花粉		-	-	1	-	-	2	1	-	-	2	7	4	15	14	16
シダ類胞子																
ヒカゲノカズラ属		-	-	1	-	2	2	4	3	-	1	3	3	22	8	3
イノモトソウ属		-	-	2	-	5	1	5	11	2	2	18	16	77	28	14
サンショウモ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
他のシダ類胞子		7	7	24	9	87	69	131	115	41	51	108	93	609	710	79
合 計																
木本花粉		1	4	2	2	2	1	4	1	1	0	18	7	108	116	128
草本花粉		1	1	0	0	0	4	3	0	0	0	5	2	56	93	81
不明花粉		0	0	1	0	0	2	1	0	0	2	7	4	15	14	16
シダ類胞子		7	7	27	9	94	72	140	129	43	54	129	112	708	746	100
総計 (不明を除く)		9	12	29	11	96	77	147	130	44	54	152	121	872	955	309
その他																
Pseudoschizaea		4	4	-	3	3	2	1	3	1	-	-	-	1	14	-



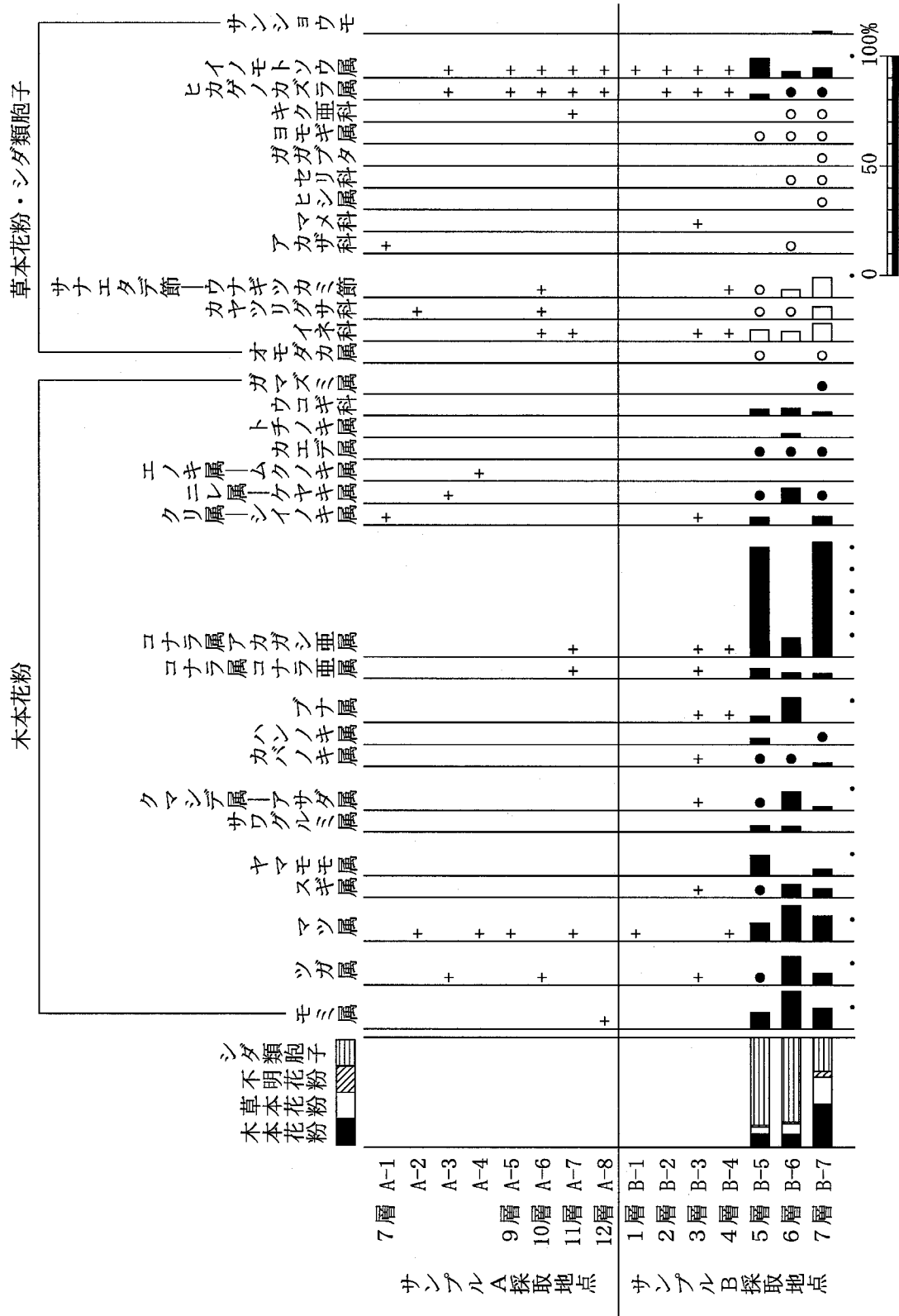


図 2 主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

落葉広葉樹のクマシデ属-アサダ属・トチノキ属などが増加する。草本花粉・シダ類孢子ではカヤツリグサ科や水生植物の種類が減少し、シダ類孢子が増加する。なお、本試料中の花粉・孢子化石は、上・下の試料B-7・B-5に比較して、保存状態が極めて悪い。

試料B-5になると、木本花粉ではアカガシ亜属が増加し、再び高率出現を示す。ヤマモモ属も草本花粉・シダ類孢子ではイネ科や水生植物のオモダカ属などが産出し、シダ類孢子が多産する。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、全体的に保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。各地点の産状を以下に示す。

・サンプルA採取地点

植物珪酸体含量は、試料A-1~A-4が約8000~13000個/g、試料A-5・A-6が約20000~30000個/g、A-7・A-8が約17000個/gである。栽培植物のイネ属短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体が全ての試料から検出される。その含量密度は、試料A1~4に比較して、試料A-5・A-6・A-7で高く、機動細胞珪酸体で約2000~3000個/gである。また、各試料からはネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やウシクサ族(ススキ属を含む)、イチゴツナギ亜科が認められる。

・サンプルB採取地点

植物珪酸体含量は、サンプルA採取地点試料に比較して、数倍~十倍の含量値を示す。試料B-3で約90000個/gと最も多く、試料B-1・B-2・B-5~B-7で約60000~80000個/g、B-4で約50000個/gである。

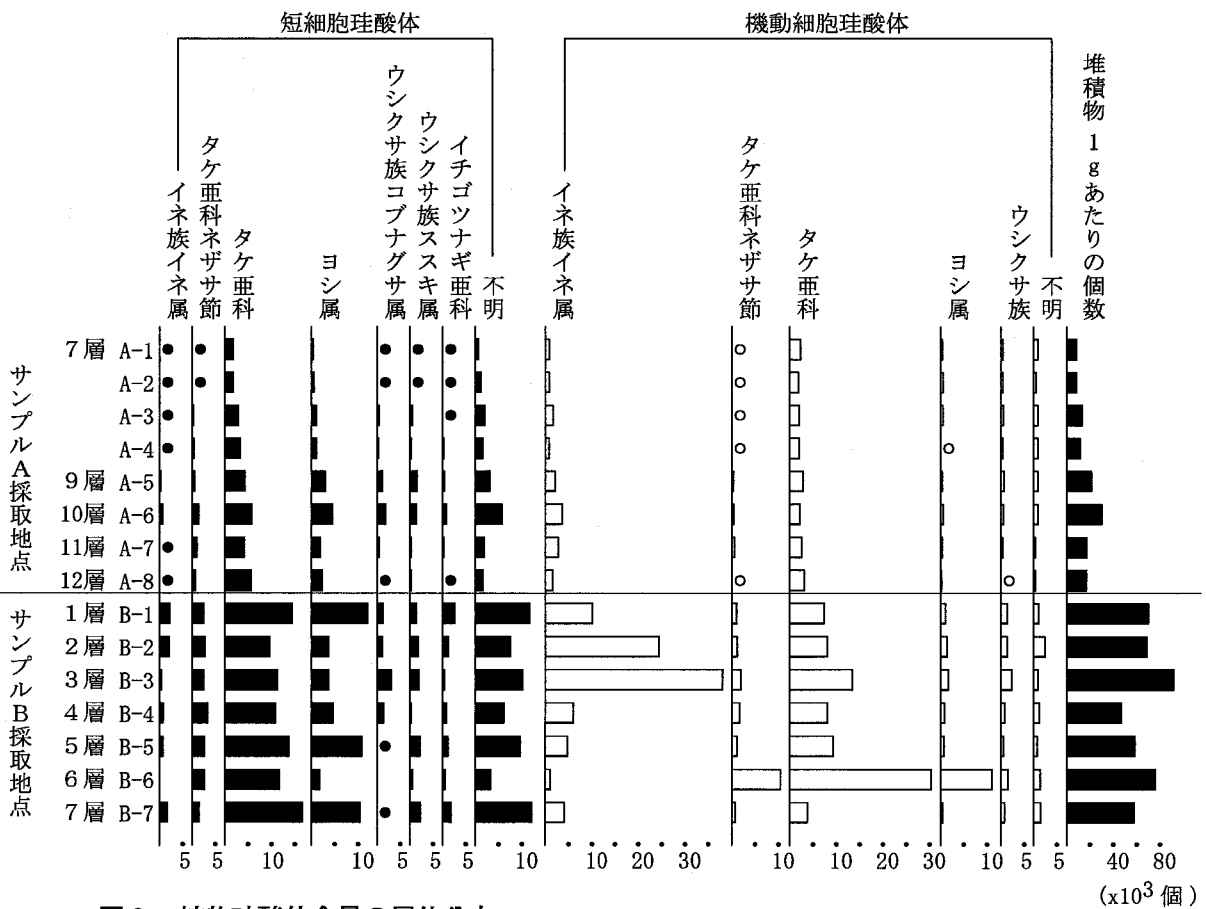


図3 植物珪酸体含量の層位分布  
堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●○は250個未満で検出された種類を示す。

B-6で短細胞珪酸体が検出されない以外、全試料から検出される。層位的な含量の変化は、機動細胞珪酸体で試料B-7が4000個/g、試料B-6で減少し1000個/g、試料B-5～B-4で増加し4800～6000個/gとなり、試料B-3で急増し約40000個/gとなり、試料B-1・B-2が約10000～20000個/gである。イネ属以外の種類構成はサンプルA採取地点と類似し、タケ亜科の産出が目立つ。層位的には、短細胞珪酸体でヨシ属が試料B-1・B-5・B-7で増加する。機動細胞珪酸体ではネザサ節を含むタケ亜科とヨシ属機動細胞が試料B-6で増加する。

表2 植物珪酸体分析結果(1)

種 類 試料番号	サンプルA採取地点							
	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	A-7	A-8
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ族イネ属	49	86	188	65	299	620	207	77
タケ亜科ネザサ節	195	129	282	304	434	1418	1008	696
タケ亜科	1707	1715	2865	3175	4288	5732	4163	5673
ヨシ属	415	579	1057	1087	3012	4491	1836	2346
ウシクサ族コブナグサ属	49	64	376	304	1140	1743	388	232
ウシクサ族ススキ属	98	150	517	348	1547	1330	310	284
イチゴツナギ亜科	73	171	235	283	380	857	310	103
不明	659	1265	1973	1566	3094	5673	1836	1650
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	878	772	1621	805	2062	3575	2689	1573
タケ亜科ネザサ節	220	214	235	196	326	384	595	206
タケ亜科	2317	1822	1973	2022	2849	2186	2637	3146
ヨシ属	390	493	493	174	353	591	388	258
ウシクサ族	390	386	493	435	651	502	336	155
不明	854	493	893	848	868	975	310	335
合 計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	3244	4158	7492	7133	14193	21863	10059	11061
イネ科葉身機動細胞珪酸体	5049	4180	5707	4480	7110	8214	6956	5673
総 計	8293	8338	13199	11613	21303	30077	17015	16734

表2 植物珪酸体分析結果(2)

種 類 試料番号	サンプルB採取地点						
	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	2124	1974	441	762	761	0	1639
タケ亜科ネザサ節	2529	2787	2535	3333	2608	2680	1513
タケ亜科	14365	9524	11241	10856	13691	11650	16513
ヨシ属	12038	3717	3637	4571	10757	1748	10336
ウシクサ族コブナグサ属	1315	1161	3086	1333	217	0	126
ウシクサ族ススキ属	1416	1742	1984	286	2173	583	2269
イチゴツナギ亜科	2630	1278	441	857	1195	583	1891
不明	11634	7549	10139	6095	9670	3262	12101
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	10015	24390	38020	6000	4781	1049	4034
タケ亜科ネザサ節	1012	1161	1873	1619	1087	10369	756
タケ亜科	7385	8014	13445	8095	9344	30291	3782
ヨシ属	1012	1394	1653	857	761	10951	504
ウシクサ族	1315	1394	2314	762	543	1515	756
不明	1012	2439	882	1143	761	1398	1513
合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	48053	29733	33502	28093	41072	20505	46387
イネ科葉身機動細胞珪酸体	21750	38792	58187	18475	17276	55573	11345
総 計	69803	68525	91689	46568	58348	76078	57732

## 4. 考察

### 4-1. 遺跡周辺の森林植生

弥生時代後期の水田が構築以前のサンプルB採取地点5層～7層（試料B-7～5）の花粉化石群集は、暖温帯性広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素であるアカガシ亜属の多産が特徴である。随伴種にはヤマモモ属・クリ属－シイノキ属などの暖温帯林要素のほか、モミ属・ツガ属・スギ属といった温帯性針葉樹の種類、クマシダ属－アサダ属・サワグルミ属・トチノキ属など河畔林の構成要素、二次林構成要素でもある針葉樹のマツ属などを伴っている。なお、6層（試料B-6）ではアカガシ亜属が多産しなかったが、これは結果で述べたように本層準の花粉化石の保存状態が著しく悪かったこと、花粉の風化に対する抵抗性が種類によって異なることから、堆積後の風化作用の影響により偏った組成になっている可能性が強いと判断される。一方、本遺跡の東側に位置する百間川沢田遺跡では縄文時代後期～弥生時代後期の花粉化石群集が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993）。その花粉化石群集は、今回の5～7層の花粉化石群集と類似するものである。

今回のBサンプル採取地点5～7層の時代観は不明であるが、以上のことから、縄文時代後期以降から弥生時代後期にかけては、遺跡周辺の操山丘陵や竜の口丘陵にアカガシ亜属・ヤマモモ属・シイノキ属などからなる暖温帯性常緑広葉樹の林分が存在したことが推定される。ただし、今回の5～7層では陽樹であるマツ属が比較的多く出現しており、周辺林分において、林冠ギャップが生じ、二次林が成立していた可能性も考える必要がある。今後の情報の蓄積を待って総合的に判断していきたい。また、モミ属・ツガ属は、現在では暖温帯から冷温帯の推移帯に成立する中間温帯林を構成する要素であり、当時も後背山地地域での分布が想定されるが、低地周辺の丘陵部に分布していた可能性も否定できないため、旭川水系での調査成果の蓄積を待って評価していきたい課題である。本遺跡では、弥生時代前期の木製品に暖温帯性の木材が利用されていることが確認されている（能城, 1995；パリノ・サーヴェイ株式会社, 1995）。弥生時代前期には、木材の利用が活発になってきていることは確実であるが、照葉樹林が壊滅的に破壊されることはなかったようである。三好（1988）によれば、岡山平野や倉敷平野近辺の丘陵地は、近世になるまでシイ・カシを中心とした照葉樹林が優占していたと推定している。

今回の分析では、サンプルA採取地点試料A-1～A-8、サンプルB採取地点試料B-1～B-4では、花粉化石がほとんど検出されなかった。これは、わずかに認められた花粉化石の保存状態が悪かったこと、産出した化石がマツ属などの針葉樹やシダ類胞子など風化に対する抵抗性の強い種類である（中村, 1967；徳永・山内, 1971）ことから、堆積時・後に分解・消失したものと考えられる。弥生時代後期以降に花粉化石が残存しにくい環境（例えば、湿地でも土壌化作用が行われる期間が多い場所など）になっていたことは、調査区内の環境を考える上で重要である。

### 4-2. 調査地点の植生と栽培種のイネ属の産状について

調査地点が位置する場所の植生については、調査区内の堆積物の累重状況をふまえて評価する必要があるが、現時点では弥生時代後期の水田より下位層準については、サンプルA採取地点とサンプルB採取地点の層序関係が不明であるため、地点別に考察を行うようにする。

#### (1) サンプルB採取地点

7層は灰黄色粘土からなる。本層からは抽水植物のオモダカ属、浮葉植物のヒシ属やガガブタ属、

浮水性シダ類のサンショウモなど、水生植物の花粉やヨシ属の植物珪酸体が認められる。調査地ないし集水域には、これらが分布する水湿地が存在したことが窺える。また、本層準では、栽培種のイネ属の植物珪酸体が検出されている。その含量は機動細胞珪酸体で約4000個/gであった。過去の水田調査において、イネ属機動細胞珪酸体個数が1 gあたり5000個を超えれば、水田耕作土として利用されていたと推定している例が多い（古環境研究所，1993，1994など）。本層準の結果は、この値に近似する値となっている。過去の堆積物における稲作の可能性の検証は、耕作土の存在を確認することが重要な課題となる。例えば、洪水などの一過性の氾濫堆積物でも、その集水域の水田耕土を取り込んで堆積したものであれば、イネ属由来の植物化石が多数混入している場合がある。そのため、堆積物の微細構造を観察し、人為的擾乱の影響を評価することが重要な課題となり、調査地域の地形、それと植物珪酸体などの植物化石の産状とを総合的に評価することで検証していくことが大切と考える。今回の結果でも、現時点で7層が水田耕作土として利用されていたか言及するに至らないが、調査地点ないし、その集水域において稲作が行われていた可能性があることの指摘に止めておく。

6層（試料B-6）は黒灰色粘土からなり、腐植が集積している状況が想定される。花粉化石は、保存状態が著しく悪くなり、水生植物の種類がほとんど認められなくなる。植物珪酸体では開けた乾いた場所に生育するネザサ節を含むタケ亜科が急増する。これらのことから、本時期には調査区の環境が変化し、土壤の発達が行われるような湿地へと変化した可能性がある。本層ではイネ属の機動細胞珪酸体が1000個/gと減少するが、これも堆積場の環境変化に起因する可能性がある。本時期には、ヨシ属やイチゴツナギ亜科などのイネ科植物、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属などの草本類が分布していたと考えられる。

5・4層は灰褐色～灰黄褐色粘質微砂からなる。植物珪酸体含量は減少し、組成も変化する。イネ属機動細胞珪酸体は4800～6000個/gと増加する。上述の過去の水田におけるイネ属機動細胞珪酸体の密度と比較しても高い値であり、7層と同様のことが推定される。

3層は暗灰褐色粘土からなり、腐植の集積が認められる。植物珪酸体含量は急増する。その中でイネ属珪酸体が最も顕著に増加し、機動細胞珪酸体で約40000個/gを示すようになる。この値は、本地点の弥生時代後期水田耕作土である1層の約4倍の値となっている。以上のことや、花粉化石の保存が悪く、ほとんど検出されなかったことから、本層準では安定した土壤発達の行われる期間が長い場所になった可能性が考えられる。イネ属の植物珪酸体の産状から本層準での稲作の存在も想定される。

2層は灰色粘質微砂からなる。植物珪酸体含量は3層に比較して減少する。本層準でもイネ属機動細胞珪酸体が多産し、約25000個/gを示した。これらのことから、本層では3層に比較して、堆積速度が速くなるなど、堆積環境が変化した可能性がある。栽培種のイネ属の産状からは3層と同様な状況が想定される。

1層は弥生時代後期の水田耕作土であり暗灰色粘質微砂からなる。本層準では栽培種のイネ属が約10000個/g産出し、稲作を裏づける結果となっている。

## （2）サンプルA採取地点

本地点の植物珪酸体含量はサンプルB採取地点と比較して極端に少ない。距離的に近い地点における植物珪酸体の産状の違いは、堆積物の層相は本地点の方が細粒であることから、地点間での堆積物の成因の違いや堆積後の植物珪酸体の保存状態の違いに起因するなどの理由が想定される。この点については、現地調査時の堆積物の累重状況を合わせて再評価するようにしたい。

12層は黒灰色粘土からなり、腐植が集積する状況が想定される。植物珪酸体含量は約10000個/gであった。検出された種類はサンプルB採取地点と類似しており、同様な植物種の分布が推定される。栽培種のイネ属は、機動細胞珪酸体で約1500個/gであり、この値は本地点の弥生時代後期の水田耕作土の値に近似する。

11層・10層は灰褐色～灰色粘土からなる。植物珪酸体含量は11層で約10000個/g、10層で増加し約20000個/gである。イネ属の植物珪酸体含量は、いずれの層位も弥生時代後期の水田耕作土である9層より高い密度であった。これらの堆積物に人為的擾乱の影響が及んでいるとすれば、稲作の存在が想定される。

9層は弥生時代後期の水田耕作土であり、暗灰色粘土からなる。植物珪酸体含量は15000個/gであり、栽培種のイネ属の密度は約2000個/gであった。イネ属の産出は水田での稲作を裏づける。

7層は洪水堆積物からなる。植物珪酸体含量は3000～7500個/gとバラツキがあるが、下位の粘土層の層準に比較して減少する。堆積物の成因を考慮すると、堆積速度が速く取り込まれる化石数が少なかったことに起因するものと思われる。栽培種のイネ属の産状も試料によって異なるが、全般に少なく、これも堆積物の成因や、試料の採取位置の違いによる、植物珪酸体の密度の分布の違いに起因するものと思われる。

### (3) 弥生時代後期の水田のイネ属の産状について

弥生時代後期の水田耕作土における植物珪酸体の産状は、上記したように地点間で大きく異なっていた。この違いの原因については、調査区内の堆積物の累重状況と合わせた解析が必要である。ここでは、同様な成因のもとで堆積し、その後の土壌化作用の過程も同様であるとして、弥生時代後期水田のイネ属の産状について考えてみる。

今回の調査結果をみると、イネ属機動細胞珪酸体の含量密度は、サンプルA採取地点が約2000個/g、サンプルB採取地点が約10000個/gであり、大きな違いが認められる。両地点とも水田区画内の耕作土について実施した結果であり、畦と耕作地との違いを示しているものではない。2ヶ所のデータではあるが、水田区画によって、イネ属の産状にバラツキが生じている可能性を想起させる。弥生時代の稲作の様態を考える上で重要な結果である。休耕田のような耕作を行っていない水田面の存在など、当時の人間の水田に対する活動状況を知る手がかりとなる可能性がある。実際に地域は異なるが、河内平野に位置する池島・福万寺遺跡では、弥生時代中期の水田区画ごとの植物珪酸体の産状が、区画によって産状に大きなバラツキを生じるものであり、その後の古墳時代や中世のものとは異なるものであった(印刷中)。各時代・時期の稲作の様態は地域間でも異なっている可能性があり、今後、そのことを前提とした自然科学分析調査成果の蓄積と、岡山平野における各時期の水田における地理的条件を含めたデータベースの整理を行い、考古学調査成果との総合化の中で評価し地域的傾向を捉えていくようにしたい。

### 引用文献

- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.  
 古環境研究所 (1993) V区における植物珪酸体(プラント・オパール)分析. 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第156集「元総社寺田遺跡I 1級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集<遺構・遺物編>」, p.217-221, 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団.  
 古環境研究所 (1994) 塚田遺跡付近のプラント・オパール分析. 「塩野西遺跡群塚田遺跡-長野県北佐久郡御代田町塚

- 田遺跡発掘調査報告書-」, p.356-358, 長野県御代田町教育委員会.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 276 p., 東京大学出版会.
- 三好教夫 (1988) 岡山県の植生変遷史. 岡植研, 7, p.1-9.
- 能城修一 (1995) 百間川原尾島遺跡から出土した弥生時代前期橋脚列の柱の樹種. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 「百間川原尾島遺跡4 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査X」, p.266-274, 岡山県文化財保護協会.
- 中村 純 (1967) 花粉分析. 232 p., 古今書院.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1993) 植物化石分析報告. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 「百間川沢田遺跡3 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅷ(本文)」, p.405-417, 岡山県文化財保護協会.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1995) 百間川原尾島遺跡出土の木器樹種同定、種子同定. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 「百間川原尾島遺跡4 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査X」, p.290-301, 岡山県文化財保護協会.
- 徳永重元・山内輝子 (1971) 花粉・胞子. 「化石の研究法」, p.50-73, 共立出版株式会社.

## 付載3 百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

### 分析の目的

百間川原尾島遺跡の竪穴住居9および土壙24内からは、弥生時代後期の土器焼成に使用されたと考えられる粘土が確認されている。この胎土分析では、これらの粘土が同遺跡内の土器焼成用粘土として使われたのか、理化学的な分析をおこない、胎土的に類似しているかどうか検討した。

### 分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による砂粒観察の二つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA 2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は13元素で、そのうちK（カリウム）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し、胎土の差異について検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、含有量について調べた。

分析した土器は、第1表に示した13点の土器、粘土である。

### 蛍光X線分析法による分析結果

第1図 K-Ca、第2図 Sr-Rb の両散布図より土器および粘土の比較を行った。その結果、粘土が2つにわかれる傾向がみられた。それは試料番号2（竪穴住居9）、5（粘土配置）、6（土壙24）と1（竪穴住居9）、3（粘土配置）、4（粘土配置）のグループである。また、同遺跡の土壙7内より出土した甕、高杯の土器類は前者の粘土と胎土的に近い分析値を示した。

原尾島遺跡4（1995年度）・5（1996年度）で分析した土器と今回出土した土器、粘土との比較を行ったところ、原尾島遺跡4・5出土土器と違いはほとんどみられなかった。

### 実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察で胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察方法は土器の場合、表面を観察し、粘土の場合は、水洗選別より岩石・鉱物のみを抽出し観察した。観察倍率は10倍～30倍で随時観察した。その結果、粘土は2種類に分類でき、土器に関しては1種類のみであった。

#### 《粘土の観察》

- ・1mm～3mmの石英・長石を多く含む（写真2）。

試料番号1、3、4の粘土

- ・1mm～3mmの石英・長石を多く含み、少量の黒雲母（1mm前後）も含む（写真3）。

試料番号2、5、6の粘土。

#### 《土器の観察》



・ 1 mm～ 3 mmの石英・長石を多く含み、0.5mm以下の角閃石を少量含む。また、まれに閃緑岩の岩片が観察される（写真1）。 試料番号7、8、9、10

### まとめ

原尾島遺跡出土の粘土と土器の胎土分析（蛍光X線分析、実体顕微鏡観察）を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

遺跡内出土の粘土との比較では、2つの胎土に分類が可能であった。胎土的にみると、Ca（カルシウム）およびSr（ストロンチウム）の含有量が多い粘土は、石英・長石以外に黒雲母が観察された。それに比べCa、Srの含有量が少ない粘土は、石英・長石の鉱物が主体をしめていた。このように、同じ遺構内から出土した粘土でも胎土的に検討すると、砂粒構成が異なっている。これは、粘土の採集地が異なっていることが推測される。

また、同遺跡内より出土した甕・高杯と粘土を比較したところ、これら土器とも胎土が一致しなかった。土器には、角閃石が含まれ、閃緑岩系起源の岩片もまれに含まれていることから、遺跡内出土の粘土とは異なっていることが考えられる。

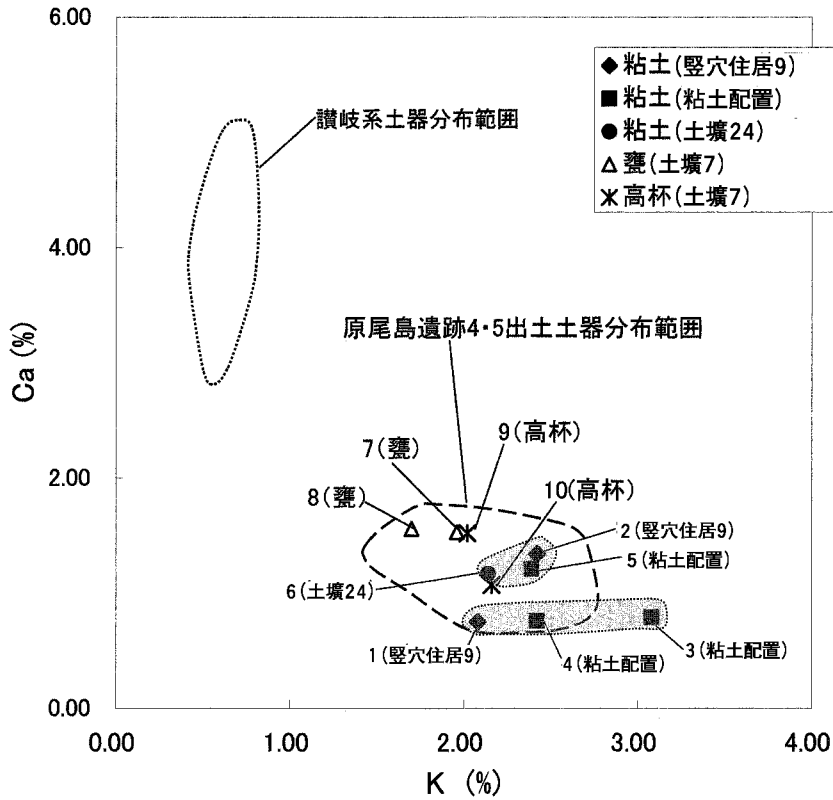
原尾島遺跡4・5（1995年度・1996年度）で分析した土器との比較では、これら土器の分布範囲が広いこともあり、今回分析した土器・粘土とも、この分布範囲にほぼ収まっている。

以上のように、この遺跡内出土の粘土でも複数の粘土を使用して土器を製作していたことが、今回の分析で明らかになった。今後、粘土採集地などを調べる必要がある。

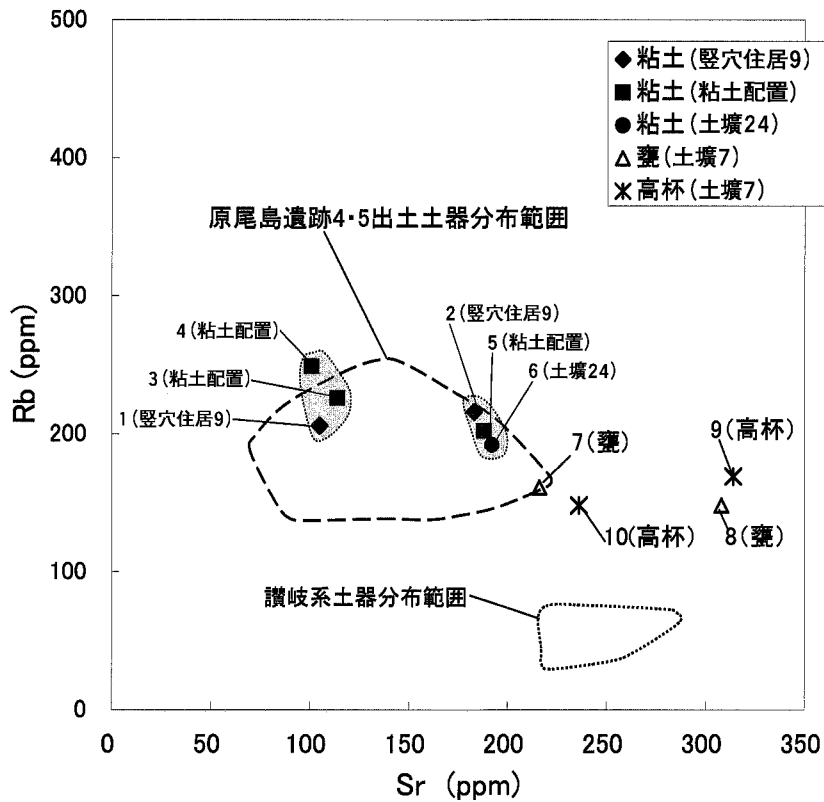
この分析の機会を与えていただいた、小嶋善邦氏をはじめ、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

第1表 百間川原尾島遺跡出土遺物の胎土分析一覧表（%） ただし、Rb・Sr・Zrはppm.

番号	遺構名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	備考
1	竪穴住居9	粘土1	65.78	0.67	21.88	4.31	0.06	1.37	0.75	2.72	2.08	0.21	206	105	314	後期Ⅱ期
2	竪穴住居9	粘土2	67.77	0.74	17.58	5.13	0.17	1.44	1.34	2.84	2.42	0.31	216	183	266	後期Ⅱ期
3	粘土配置	粘土	70.85	0.59	16.91	4.01	0.08	1.25	0.79	2.04	3.08	0.26	226	114	286	後期
4	粘土配置	粘土	66.59	0.82	21.22	4.27	0.07	1.23	0.76	2.27	2.42	0.17	249	101	317	後期
5	粘土配置	粘土	68.86	0.77	17.61	4.40	0.08	1.42	1.21	2.93	2.39	0.17	202	188	243	後期
6	土壇24	粘土	66.11	0.79	20.70	4.70	0.09	1.46	1.17	2.49	2.14	0.17	192	192	342	後期Ⅲ期
7	土壇7	甕	62.83	0.81	19.10	8.29	0.10	1.39	1.53	2.46	1.96	1.30	161	216	431	後期Ⅲ期
8	土壇7	甕	63.04	0.92	16.89	8.49	0.08	1.34	1.56	2.84	1.70	2.91	148	308	345	後期Ⅲ期
9	土壇7	高坏	63.88	0.82	17.06	7.29	0.08	1.63	1.52	3.32	2.02	2.00	169	314	308	後期Ⅲ期
10	土壇7	高坏	68.90	0.70	16.75	5.12	0.06	1.12	1.07	2.20	2.16	1.66	148	236	369	後期Ⅲ期



第1図 遺跡出土粘土と土器との胎土比較 (K-Ca 散布図)



第2図 遺跡出土粘土と土器との胎土比較 (Rb-Sr 散布図)

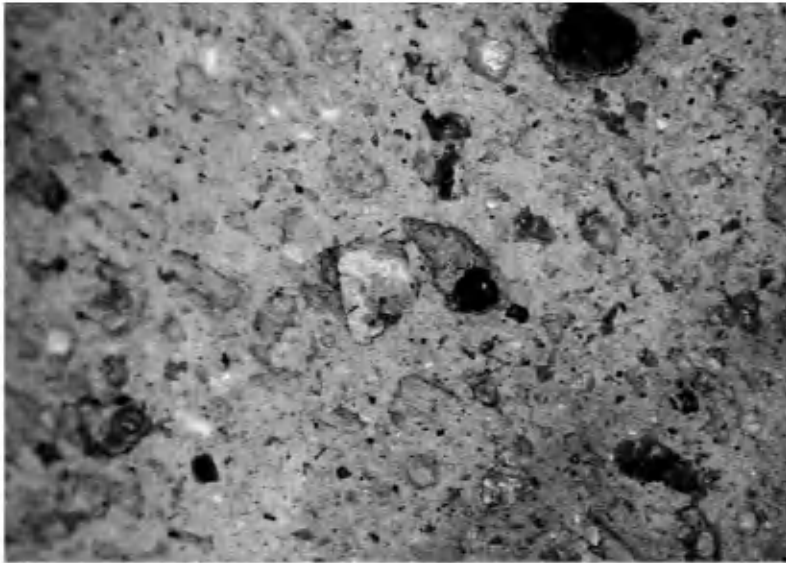


写真 1  
番号 7 土壙 7 出土 (甕)

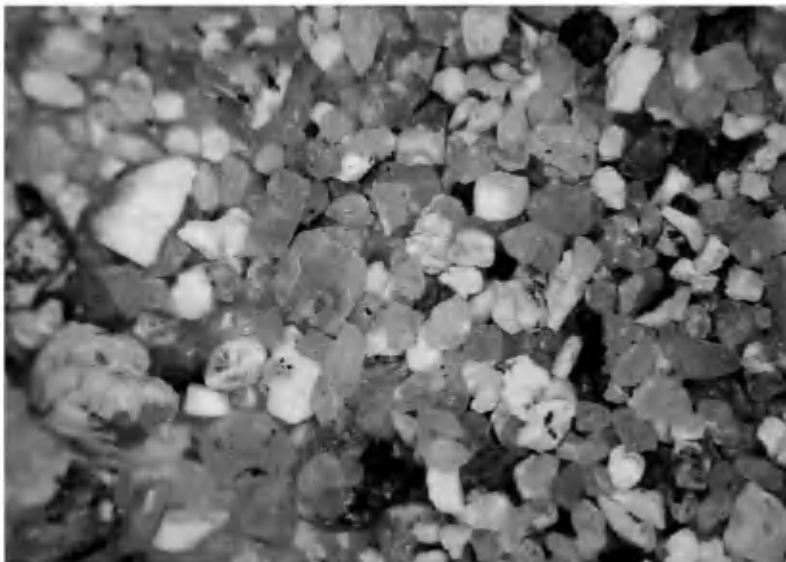


写真 2  
番号 1 竪穴住居 9 出土 (粘土)

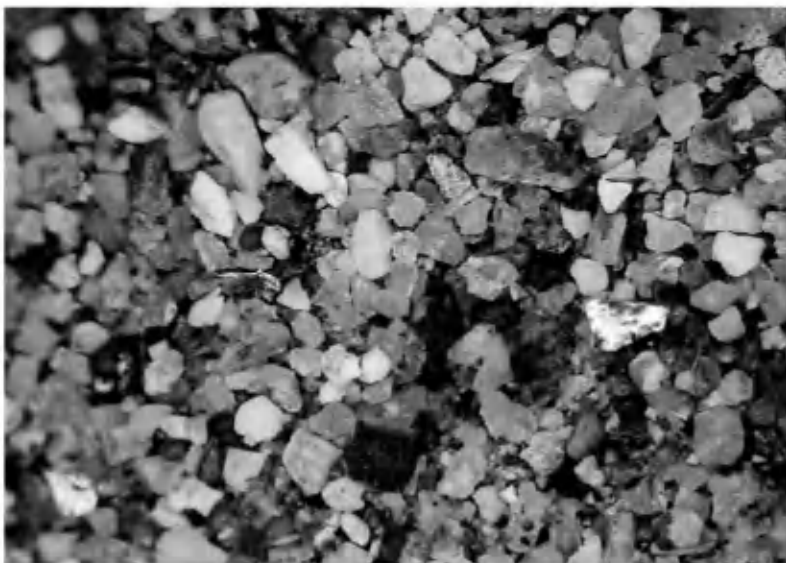


写真 3  
番号 2 竪穴住居 9 出土 (粘土)

土器・粘土の実体顕微鏡写真 (10倍)

## 付載4 百間川原尾島遺跡における環境考古学分析

環境考古研究会

### 1. 試料について

試料は、百間川原尾島遺跡の11B区の土壌95北側埋土サンプル1点、13B区の土壌117埋土上半サンプルと床直上サンプルの2点の計3点である。ここでは、植生および環境の検討を行い、試料となった堆積物および遺構の性格について検討を行う。

### 2. 花粉分析

#### (1) 原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壌中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

#### (2) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学的各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300・1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（?）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることから

イネ属型とした。

### (3) 結果

#### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 6、草本花粉 6、シダ植物孢子 2 形態の計 14 である。これらの学名と和名および粒数を表 1 に示し、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

#### 〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、シイ属、コナラ属コナラ亜属、サンショウ属

#### 〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、アカザ科？ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属

#### 〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

#### 2) 花粉群集の特徴

##### ・ 11B 区土壌 95 北側埋土サンプル

花粉密度が極めて低い。イネ科が他より多い。

##### ・ 13B 区土壌 117 埋土サンプル

埋土上半サンプルと床直上サンプルは花粉密度が極めて低い。

### (4) 考察

11B 区土壌 95 埋土および 13B 区土壌 117 埋土は花粉が極めて低密度であり、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境であったか堆積速度が速かったことが推定される。11B 区土壌 95 埋土ではイネ科の多い植生が示唆される。

## 2. 寄生虫卵分析

### (1) 原理

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。

### (2) 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

1) サンプルを採量する。

2) 脱イオン水を加え攪拌する。

3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。

4) 25%フッ化水素酸を加え 30 分静置。(2・3 度混和)

- 5) 水洗後サンプルを2分する。
- 6) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300・1000倍で行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

### (3) 結果と考察

出現した寄生虫卵は、土壌95埋土より1分類群で、鞭虫卵であった。その密度も1cm<sup>3</sup>中6個と非常に低く明らかな消化残渣も認めなかった。同時に行った花粉密度も極めて低く、分解された可能性もあるが、居住域周辺の生活汚染と考えられ、トイレ遺構の可能性は低い。

### 3. まとめ

11B区土壌95北側埋土および13B区土壌117埋土の花粉分析と寄生虫卵分析を行った結果、花粉および寄生虫卵が極めて低密度であり、これらの有機質遺体が分解される乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境および堆積速度の速い環境が推定された。11B区土壌95北側埋土ではイネ科の多い植生が示唆された。明らかな消化残渣も検出されず、居住域周辺の生活汚染とみなされ、これらの土壌がトイレ遺構である可能性は低い。

#### 参考文献

- 中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60 p.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91 p.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構? 藤原京7条1坊?, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.
- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.
- 金原正明 (1999) 寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

百間川原尾島遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵

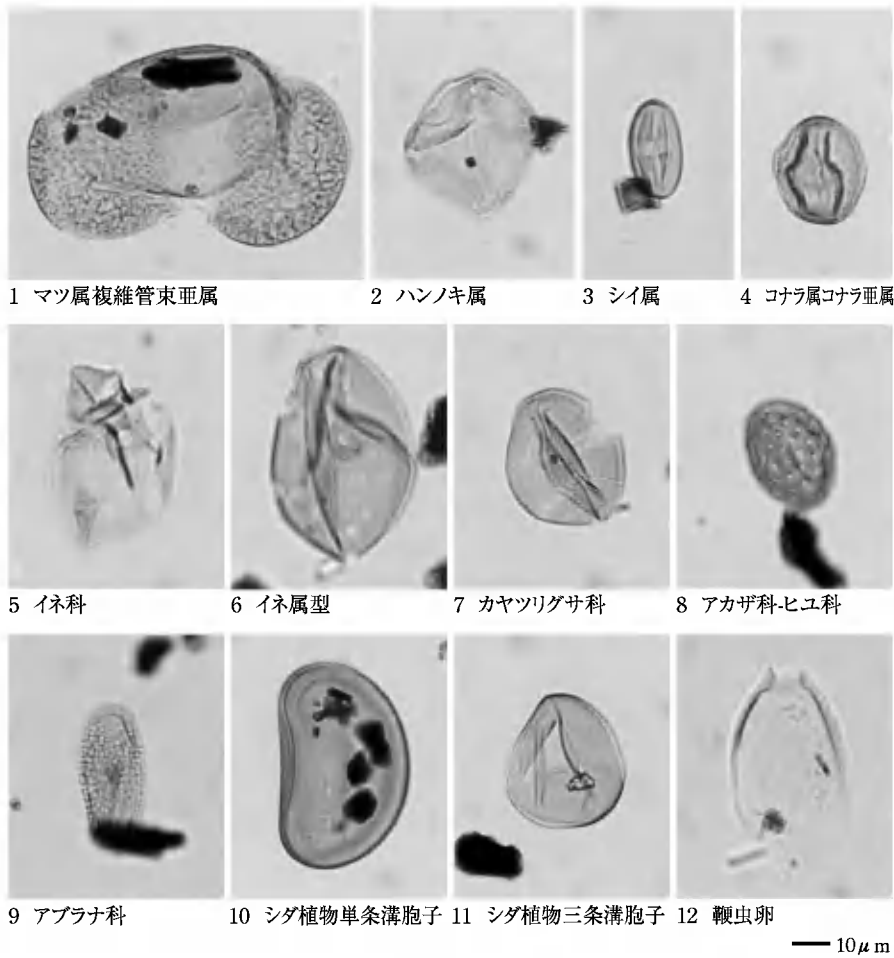


表 1 百間川原尾島遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	土壌95		土壌117	
			1	2	3	
Arboreal pollen		樹木花粉				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複維管束亜属			1	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ		1		
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	1			
<i>Castanopsis</i>		シイ属			2	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属			1	
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属			1	
Nonarboreal pollen		草本花粉				
Gramineae		イネ科	5		1	
<i>Oryza type</i>		イネ属型	1		1	
Cyperaceae		カヤツリグサ科			1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	1			
Cruciferae		アブラナ科	2			
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属			1	
Fern spore		シダ植物孢子				
Monolate type spore		単条溝孢子	2		1	
Trilate type spore		三条溝孢子	1			
Arboreal pollen		樹木花粉	1	1	5	
Nonarboreal pollen		草本花粉	9	0	4	
Total pollen		花粉総数	10	1	9	
		試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	100以下	100以下	100以下	
Unknown pollen		未同定花粉	1			
Fern spore		シダ植物孢子	3	0	1	
Helminth eggs		寄生虫卵				
<i>Trichuris</i>		鞭虫卵	1			
		計	1			
		試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度	6			
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	

## 遺構一覽（觀察）表

- 1 竪穴住居一覽表
- 2 建物・柱穴列一覽表
- 3 土器棺墓一覽表
- 4 土壙・カマド・炉一覽表
- 5 溝・水路・旧河道一覽表
- 6 井戸一覽表

## 遺物一覽（觀察）表

- 1 土器觀察表
- 2 木製品一覽表
- 3 石製品一覽表
- 4 動物遺存体一覽表
- 5 金屬製品一覽表
- 6 土製品一覽表
- 7 裝飾品一覽表

## 新旧遺構名称对照表



### 1 竪穴住居一覽表

遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴 (cm)			方形土壁 (cm)		焼土面	壁体溝	カマド	
						形状	長×短	深さ	長×短	深さ			有無	位置
竪穴住居 1	不整円	290	255	10.44	2	不整	-	4	-	-	-	-	無	-
竪穴住居 2	円形	575	-	26.58	5	不整円	90×70	54	-	-	-	○	無	-
竪穴住居 3	不整円	524	-	27.36	4/4	不整形	80×54	20	-	-	-	○	無	-
竪穴住居 4	円形	495	324	20.92	4/4	円形	79×68	29	-	-	-	○	無	-
竪穴住居 5	円形	1024	-	-	52	不整	175×145	62	-	-	○	○	無	-
竪穴住居 6	円形	905	-	(66.64)	105	不整円 不整円	45×35 46×46	83 45	-	-	-	○	無	-
竪穴住居 7	円形	930	862	-	27	円形	105×100	48	-	-	○	-	無	-
竪穴住居 8	円形	643	-	-	8	不整	-	33	-	-	-	○	無	-
竪穴住居 9	円形	597	-	-	3/4	不整円	107×98	39	-	-	-	○	無	-
竪穴住居10	隅丸方形	484	466	19.5	6	不整	73×55	40	-	-	-	○	無	-
竪穴住居11	不整円	482	386	-	4	長楕円 長楕円	114×63 137×70	20 45	-	-	-	○	無	-
竪穴住居12	円形	333	325	-	4/4	円形	40×38	2	-	-	-	-	無	-
竪穴住居13	方形?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	無	-
竪穴住居14	方形	397	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	無	-
竪穴住居15	方形	480	440	21.06	4/4	不整円	58×52	8	-	-	○	○	無	-
竪穴住居16	隅丸方形	381	324	11.21	-	-	-	-	-	-	-	○	無	-
竪穴住居17	方形?	550	-	37.39	-	-	-	-	-	-	-	-	有	北西
竪穴住居18	隅丸方形	450	421	20.26	-	-	-	-	122×-	18	○	-	無	-
竪穴住居19	不整方形	402	349	13.18	-	-	-	-	-	-	-	○	有	北東
竪穴住居20	不整方形	609	-	(33.28)	-	-	-	-	-	-	-	-	無	-
竪穴住居21	不整方形	558	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	無	-
竪穴住居22	方形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	有	北西
竪穴住居23	不整方形	564	392	-	1/2	-	-	-	-	-	○	-	有	北東
竪穴住居24	方形	562	527	(30.03)	-	-	-	-	-	-	○	○	有	北西
竪穴住居25	方形	496	455	(20.95)	4/4	-	-	-	-	-	-	-	有	北東
竪穴住居26	方形	424	358	14.31	3/4	-	-	8	-	-	○	-	有	北西
竪穴住居27	-	-	-	-	4/4	不整円	50×40	12	-	-	-	-	無	-
竪穴住居28	方形	-	-	-	3/4	不整楕円	100×60	12	-	-	-	○	無	-

### 2 建物・柱穴列一覽表

遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方	時期
		桁	梁						
建物 1	3	170~220	293~318	563~565	293~318	17.33	N-78° -W	不整円	弥生
建物 2	3 × 1	134~201	441~455	338~537	441~455	23.01	N-70° -W	円形~隅丸方形	古墳
建物 3	2 × (2)	150~250	150	375	300	11.71	N-24° -E	方形	古墳
建物 4	3 × 3	185~208	140~150	600	435	45.36	N-90° -E	楕円~隅丸方形	古墳
建物 5	4 × 1	135~255	380~390	752~772	380~388	29.96	N-79° -W	円形	古墳
建物 6	(3) × (2)	181~226	212~259	-	-	-	N-6° -E	円形	中世
建物 7	(2) × (1)	203~204	223	-	-	-	N-6° -E	不整円	中世
建物 8	(2) × 3	150~265	80~350	645~670	540~590	24.99	N-16° -E	円形	中世
建物 9	2 × 1	254~300	360~440	550~575	360~410	22.87	N-10° -E	円形	中・近世
建物10	(2) × 1	213~215	423	-	423	18.55	N-10° -E	円形	中世
柱穴列 1	3	138~151	-	582	-	-	N-12° -W	隅丸方形	古墳
柱穴列 2	-	-	-	-	-	-	-	不定形	古墳

### 3 土器棺墓一覽表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	器種		時期
						棺身	棺蓋	
土器棺 1	楕円形	U字形	84	-	25	壺	鉢	弥・後
土器棺 2	不整円	逆台形	77	-	25	壺	壺	弥・後
土器棺 3	不整円	逆台形	107	84	43	壺	壺	弥・後

## 4 土壙・カマド・炉一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期
土壙 1	不整形	逆台形	140	50	10	325	弥・前
土壙 2	隅丸長方形	皿状	115	87	8	322	弥・前
土壙 3	楕円形	逆台形	152	115	35	310	弥・前
土壙 4	不整形	U字形	126	48	74	250	弥・前
土壙 5	楕円	方形	-	74	38	300	弥・前
土壙 6	隅丸長方形	皿状	97	34	10	313	弥・前
土壙 7	方形	凸状	94	84	38	305	弥・後
土壙 8	長方形	皿状	132	70	9	341	弥・後
土壙 9	楕円	逆台形	-	-	27	317	弥・後
土壙 10	方形?	皿状	-	102	13	332	弥・後
土壙 11	楕円	凸状	231	187	79	270	弥・後
土壙 12	長方形	逆台形	125	55	21	318	弥・後
土壙 13	長方形?	逆台形	-	147	26	317	弥・後
土壙 14	不整形	逆台形	80	88	46	289	弥・後
土壙 15	不整楕円	凸状	204	139	63	271	弥・後
土壙 16	楕円	方形	125	109	35	309	弥・後
土壙 17	不定形	凸状	140	116	52	301	弥・後
土壙 18	楕円	逆台形	94	68	23	321	弥・後
土壙 19	長方形	方形	211	150	38	298	弥・後
土壙 20	不整形	皿状	-	153	15	314	弥・後
土壙 21	不整形	凸状	129	78	46	296	弥・後
土壙 22	円?	逆台形?	92	-	31	308	弥・後
土壙 23	楕円	逆台形	141	118	46	291	弥・後
土壙 24	楕円?	逆台形	-	62	19	337	弥・後
土壙 25	不整形	逆台形	126	120	62	286	弥・後
土壙 26	不整形	凸状	192	181	37	314	弥・後
土壙 27	円	凸状	121	138	41	328	弥・後
土壙 28	円	U字形	-	-	52	205	弥・後
土壙 29	円	U字形	70	70	74	182	弥・後
土壙 30	不整形	不整形	118	55	-	308	弥・後
土壙 31	円	方形	75	67	28	280	弥・後
土壙 32	円形	方形	82	64	33	298	弥・後
土壙 33	不整楕円	皿状	235	70	20	296	弥・後
土壙 34	不整円	逆台形	128	-	49	295	弥・後
土壙 35	円	逆台形	110	105	31	321	弥・後
土壙 36	不整円形	逆台形	130	100	17	329	弥・後
土壙 37	不整円	U字形	220	190	37	248	弥・後
土壙 38	不整形	皿状	244	117	6	330	弥・後
土壙 39	不整楕円	U字形	121	83	24	320	弥・後
土壙 40	隅丸長方形	皿状	138	48	10	314	弥・後
土壙 41	不整形	皿状	264	-	11	324	弥・後
土壙 42	不整楕円	逆台形	278	134	26	300	弥・後
土壙 43	楕円	逆台形	100	74	11	329	弥・後
土壙 44	不整楕円	U字形	136	61	15	310	弥・後
土壙 45	円	U字形	75	73	18	309	弥・後
土壙 46	長方形	皿状	125	90	5	326	弥・後
土壙 47	不整楕円	皿状	200	110	15	305	弥・後
土壙 48	楕円	逆台形	68	35	4	336	弥・後
土壙 49	円	U字形	51	49	14	313	弥・後
土壙 50	楕円	逆台形	74	50	29	301	弥・後
土壙 51	円	逆台形	70	59	14	315	弥・後
土壙 52	円	逆台形	72	64	15	316	弥・後
土壙 53	不整楕円	逆台形	-	140	23	255	弥・後
土壙 54	不整形	逆台形	65	62	30	240	弥・後
土壙 55	円?	方形	-	-	15	218	弥・後
土壙 56	不整楕円	逆台形	110	53	23	245	弥・後
土壙 57	円	方形	80	75	17	276	弥・後
土壙 58	不整形	凸状	132	88	23	298	弥・後
土壙 59	円	逆台形	60	50	42	250	弥・後
土壙 60	円	V字形	86	81	42	242	弥・後
土壙 61	円形	碗形	54	-	14	261	弥・後
土壙 62	円形	逆台形	53	-	26	253	弥・後
土壙 63	円形	碗形	40	-	14	258	弥・後
土壙 64	不整円	碗形	52	46	14	262	弥・後
土壙 65	長方形	逆台形	89	53	48	327	古墳
土壙 66	長方形	逆台形	91	41	40	336	古墳
土壙 67	隅丸長方形	方形	109	75	55	316	古墳
土壙 68	長楕円?	皿形?	-	-	17	356	古墳
土壙 69	長方形	逆台形	338	96	20	319	古墳
土壙 70	円	皿状	92	80	10	333	古墳
土壙 71	円	方形	84	84	47	300	古墳・後
土壙 72	楕円	逆台形	101	72	26	319	中世
土壙 73	方形	逆台形	103	89	13	358	中世
土壙 74	長方形	逆台形	170	72	21	356	中世

## 4 土壙・カマド・炉一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期
土壙75	円	方形	100	104	73	307	中世
土壙76	不整形	逆台形	94	90	72	306	中世
土壙77	隅丸方形	逆台形	75	72	51	329	中世
土壙78	長方形	凸状	286	72	50	325	中世
土壙79	長楕円か?	皿状	—	—	4	371	中世
土壙80	円	逆台形	79	75	31	344	中世
土壙81	不整形	逆台形	89	77	31	348	中世
土壙82	長方形	逆台形	325	99	52	324	中世
土壙83	楕円	U字形	75	70	46	327	中世
土壙84	円形	碗形	85	81	27	349	中世
土壙85	方形	逆台形	81	63	15	339	中世
土壙86	不整形	凸形	—	161	57	323	中世
土壙87	不整形楕円	碗形	107	73	3	338	中世
土壙88	楕円	碗形	82	42	21	355	中世
土壙89	長方形	皿状	205	101	6	369	中世
土壙90	不整形	皿状	107	53	9	366	中世
土壙91	長方形	皿状	82	56	9	371	中世
土壙92	円	凸状	125	135	60	320	中世
土壙93	円	逆台形	99	79	45	333	中世
土壙94	円	方形	104	105	49	328	中世
土壙95	長方形	凸状	352	194	93	287	中世
土壙96	円	逆台形	70	65	20	359	中世
土壙97	方形	皿状	112	95	15	363	中世
土壙98	不整形楕円	皿状	235	170	21	353	中世
土壙99	長方形	皿状	251	119	14	366	中世
土壙100	円	逆台形	76	67	19	361	中世
土壙101	不整形楕円	凸状	213	177	67	309	中世
土壙102	不整形	皿状	126	98	17	353	中世
土壙103	不整形楕円	U字形	116	75	20	360	中世
土壙104	楕円	凸状	142	127	70	294	中世
土壙105	長方形	逆台形	116	97	16	364	中世
土壙106	長方形?	皿状	—	—	9	371	中世
土壙107	方形	逆台形	83	75	12	367	中世
土壙108	長方形	凸状	362	95	95	284	中世
土壙109	長方形	凸状	341	249	74	306	中世
土壙110	方形	逆台形	323	202	26	353	中世
土壙111	円?	方形	97	49	59	336	中世
土壙112	楕円?	凸状	—	—	54	325	中世
土壙113	長方形	方形	192	135	74	300	中世
土壙114	楕円?	逆台形	150	—	29	350	中世
土壙115	隅丸方形?	碗形	—	71	22	356	中世
土壙116	長楕円	凸状	—	88	95	286	中世
土壙117	長方形	凸状	247	109	66	314	中世
土壙118	長方形	逆台形	275	120	33	346	中世
土壙119	長方形	凸形	205	100	119	259	中世
土壙120	方形	碗形	132	111	41	39	中世
土壙121	長方形	逆台形	171	106	41	339	中世
土壙122	方形?	皿状	—	—	20	340	中世
土壙123	長方形	皿状	—	80	6	373	中世
土壙124	円	凸状	86	85	48	333	中世
土壙125	不整形円形	凸状	91	75	48	332	中世
土壙126	円	逆台形	70	—	25	354	中世
土壙127	方形	逆台形	90	76	8	371	中世
土壙128	方形	逆台形	63	55	14	366	中世
土壙129	長方形	逆台形	362	256	29	351	中世
土壙130	長方形	方形	144	81	54	306	中世
土壙131	不整形楕円	方形	140	103	48	316	中世
土壙132	方形	逆台形	67	62	30	348	中世
土壙133	長方形	逆台形	162	94	33	319	中世
土壙134	楕円	碗形	96	104	44	340	中世
土壙135	円?	逆台形?	—	—	34	345	中世
土壙136	円	皿状	111	110	19	351	中世
土壙137	不整形	皿状	—	81	11	55	中世
土壙138	円	方形	81	88	57	307	中世
土壙139	円	方形	70	70	37	328	中世
土壙140	楕円	逆台	93	76	26	337	中世
土壙141	方形?	凸	—	—	35	313	中世
土壙142	楕円	逆台形	103	74	15	341	中世
土壙143	方形	皿状	231	225	17	342	中世
土壙144	円	方形	108	103	60	292	中世
土壙145	楕円	碗形	—	118	53	302	中世
土壙146	長方形	逆台形	—	94	49	307	中世
土壙147	長楕円	U字形	210	40	18	353	中世
土壙148	長方形	方形	220	100	36	331	中世

## 4 土壇・カマド・炉一覽表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期
土壇149	不整形	碗形	207	162	32	334	中世
土壇150	長方形	方形	190	95	27	324	中世
土壇151	不整形	方形	98	94	37	333	中世
土壇152	不整形	方形	—	138	38	328	中世
土壇153	隅丸長方形	逆台形	365	135	48	322	中世
土壇154	長方形	皿状	215	95	12	360	中世
土壇155	長方形	方形	230	105	30	330	中世
土壇156	楕円	方形	—	100	35	330	中世
土壇157	不整形	?	124	100	118	261	中世
土壇158	方形	方形	103	95	30	330	中世
土壇159	不整形	不整形	—	100	72	296	中世
土壇160	楕円	逆台形	—	86	24	340	中世
土壇161	不整形	逆台形	135	104	70	307	中世
土壇162	不整形楕円	逆台形	150	93	64	294	中世
土壇163	L字形	方形	280	87	34	282	中世
土壇164	円形	逆台形	—	130	58	310	中世
土壇165	方形	方形	106	89	10	357	中世
土壇166	楕円	凹凸	167	75	14	318	古代・中世
かまど1	不定形	皿状	64	—	10	356	古墳
かまど2	隅丸長方形	皿状	70	60	6	366	古墳
かまど3	不定形	皿状	—	—	6	343	古墳
かまど3	不定形	皿状	—	42	2	330	古墳
炉1	柄杓形	U字形	58	26	24	316	弥・後
炉2	不整形楕円	方形	50	38	13	319	弥・後
炉3	柄杓形	U字形	91	38	13	318	弥・後

## 5 溝・水路・旧河道一覽表

遺構名	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	断面形	深さ (cm)	時期	備考
溝1	40	25	皿形	5	弥・前	
溝2	100	40	碗形	26	弥・前	
溝3	30	10	碗形	9	弥・前	
溝4	60	15	碗形	16	弥・前	
溝5	—	—	—	35	弥・前	
溝6	100	30	逆台形	55	弥・後	
溝7	80	40	皿形	13	弥・前	
溝8	30	5	U字形	13	弥・前	
溝9	125	40	皿形	8	弥・前	
溝10	30	15	皿形	4	弥・前	
溝11	70	30	皿形	7	弥・前	
溝12	45	30	皿形	6	弥・前	
溝13	—	10	柄杓形	12	弥・中	
溝14	230	80	皿形	30	弥・中	
溝15	145	45	皿形	22	弥・中	
溝16	55	40	皿形	4	弥・中	
溝17	55	25	逆台形	30	弥・中	
溝18	80	20	碗形	27	弥・中	
溝19	216	70	皿形	34	弥・中	
溝20	195	110	皿形	4	弥・中	
溝21	30	15	皿形	4	弥・中	
溝22	30	—	不整	8	弥・中	
溝23	35	—	不整	12	弥・中	
溝24	63	35	逆台形	22	弥・後	
溝25	37	21	皿形	5	弥・後	
溝26	25	10	U字形	35	弥・後	
溝27	150以上	75以上	皿形	38	弥・後	
溝28	74	27	逆台形	39	弥・後	
溝29	70	27	逆台形	32	弥・後	
溝30	76	13	U字形	53	弥・後	
溝31	—	19	逆台形	36	弥・後	
溝32	83	25	逆台形	38	弥・後	
溝33	195	39	碗形	44	弥・後	
溝34	49以上	19以上	碗形	20	弥・後	
溝35	103以上	28	U字形+碗形	36	弥・後	
溝36	83	12	碗形+U字形	34	弥・後	
溝37	87	32	U字形	51	弥・後	
溝38	40	16	U字形	30	弥・後	

## 5 溝・水路・旧河道一覽表

遺構名	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	断面形	深さ (cm)	時期	備考
溝39	20	10	U字形	19	弥・後	
溝40	16	9	碗形	6	弥・後	
溝41	46	36	逆台形	20	弥・後	
溝42	190	20	碗形+U字形	66	弥・後	
溝43	205以上	80以上	碗形	112	弥・後	
溝44	321	53	碗形	110	弥・後	
溝45	205	25	U字形+碗形	110	弥・後	
溝46	110以上	70	不整形	13	弥・後	
溝47	155	50	皿形	15	弥・後	
溝48	85	55	碗形	16	弥・後	
溝49	100	5	V字形	10	弥・後	
溝50	48以上	30	不定形	21	弥・後	
溝51	275	50	V字形	115	弥・後	
溝52	260	20	V字形	105	弥・後	
溝53	235	10	V字形	95	弥・後	
溝54	270以上	10	V字形	95	弥・後	
溝55	170	20	V字形	85	弥・後	
溝56	110	5	皿形+V字形	32	弥・後	
溝57	45	15	皿形	6	弥・後	
溝58	40	20	皿形	5	弥・後	
溝59	50	20	皿形	10	弥・後	
溝60	35	5	V字形	14	弥・後	
溝61	28	6	皿形	10	弥・後	
溝62	90	25	逆台形	20	弥・後	
溝63	40以上	25	U字形	20	弥・後	
溝64	180	20	V字形	50	弥・後	
溝65	90以上	10	V字形	25	弥・後	
溝66	45	5	U字形	23	弥・後	
溝67	100	30	逆台形	55	弥・後	
溝68	-	15	V字形	30	弥・後	
溝69	40	8	U字形	12	弥・後	
溝70	120以上	10	柄杓形	16	弥・後	
溝71	56	25	逆台形	22	弥・後	
溝72	113	2	柄杓形	7	弥・後	
溝73	110	50	U字形	44	弥・後	
溝74	180	90	皿形	48	弥・後	
溝75	16	6	皿形	2	古墳	
溝76	85	46	皿形	8	古墳	
溝77	-	-	皿形	38	古墳	
溝78	110	40	逆台形~V字形	40	古墳・後	
溝79	50	20	碗形	12	古墳	
溝80	840	120	碗形	165	古墳・中~後	
溝81	170	20	V字形	85	古墳・中	
溝82	70以上	20	碗形	28	古墳・中	
溝83	170	65	皿形	32	古墳・中	
溝84	30	15	U字形	15	古墳・前	
溝85	31	5	U字形	9	古墳	
溝86	54	18	皿形	8	古墳	
溝87	70	4	皿形	8	古墳	
溝88	150	100	皿形	8	古墳	
溝89	75	20	皿形	10	古墳	
溝90	70	20	皿形	8	古墳	
溝91	125	70	逆台形	30	古墳・前	
溝92	70	40	皿形	8	古墳	
溝93	45	20	皿形	10	古墳・前	
溝94	91	30	不定形	18	古墳	
溝95	95	30	不定形	20	古墳	
溝96	95	40	皿形	22	古墳	
溝97	45	15	U字形	20	古墳	
溝98	100	50	皿形	18	古墳・中	
溝99	35	15	皿形	4	古墳	
溝100	50	25	皿形	8	古墳	
溝101	95	40	皿形	12	古墳	
溝102	75	65	皿形	2	古墳	
溝103	70	30	皿形	20	古墳	
溝104	160	50	逆台形	42	古墳・中	
溝105	100以上	30	皿形~U字形	15以上	古墳	
溝106	40	15	皿形	10	古墳	
溝107	65	25	U字形	22	古墳	
溝108	68	10	皿形	8	古墳・前	
溝109	57	13	不定形	11	中世	
溝110	88	46	逆台形	19	中世	
溝111	92	58	逆台形	32	中世	
溝112	76	30	逆台形	31	中世	

## 5 溝・水路・旧河道一覽表

遺構名	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	断面形	深さ (cm)	時期	備考
溝113	48	29	皿形	9	中世	
溝114	34	10	U字形	13	中世	
溝115	90	50	碗形	30	中世	
溝116	65	40	皿形	15	中世	
溝117	100	60	逆台形	24	中世	
溝118	26	10	U字形	16	中世	
溝119	40	5	V字形	13	中世	
溝120	22	10	碗形	10	中世	
溝121	20	5	皿形	5	中世	
溝122	32	8	V字形	12	中世	
溝123	45	25	皿形	6	中世	
溝124	26	12	U字形	50	中世	
溝125	35	25	皿形	7	中世	
溝126	40	10	皿形	4	中世	
溝127	135	70	皿形	20	中世	
溝128	400	50	碗形	110	中世	
溝129	170	30	碗形	13	古代	
溝130	900以上	620	皿形	40	古代	
溝131	250	170	皿形	20	中世	
溝132	106	30	柄杓形	12	中世	
溝133	125	90	逆台形	15	中世	
溝134	220	80	V字形	60	中世	
溝135	30以上	-	碗形	23	中世	道の側溝
溝136	91	42	皿形	16	中世	道の側溝
溝137	42	20	碗形	14	中世	道の側溝
溝138	35	19	碗形	11	中世	道の側溝
溝139	81	65	皿形	8	中世	道の側溝
溝140	110	61	逆台形	22	中世	道の側溝
水路1	231	75	碗形	128	弥・後	溝43上層洪水砂
水路2	170	70	U字形	35	弥・後	溝45上層洪水砂
水路3	110以上	70	不整形	13	弥・後	溝46上層洪水砂
水路4	85	55	碗形	16	弥・後	溝53上層洪水砂
水路5	235	10	V字形	95	弥・後	溝68上層洪水砂
水路6	90	10	V字形	25	弥・後	溝106上層洪水砂
水路7	214	68	U字形	44	弥・後	
旧河道1	315	40	皿形+逆台形	75	弥・前	旧河道2の分流
旧河道2	1700	1480	逆台形	290以上	弥・前	

## 6 井戸一覽表

遺構名	構造	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
井戸1	素掘り	円	170	160	201	145	弥・後	
井戸2	素掘り	円	125	123	151	184	弥・後	
井戸3	素掘り	円	75	66	65	179	弥・後	
井戸4	素掘り	円?	115	-	160	200	弥・後	
井戸5	素掘り	円	79	60	40	229	弥・後	
井戸6	素掘り	円	83	78	127	188	弥・後	
井戸7	素掘り	楕円	-	-	210	141	弥・後	底面に完形の壺廃棄
井戸8	素掘り	円	136	131	142以上	200以下	弥・後	底面まで掘りきれず
井戸9	素掘り	円	270	260	119	231	弥・後	中位付近に完形の壺
井戸10	素掘り	円	98	90	112	233	弥・後	
井戸11	素掘り	円	143	134	176	179	弥・後	底面付近に壺
井戸12	素掘り	円	75	65	57	228	弥・後	
井戸13	素掘り	方	84	69	74	211	弥・後	
井戸14	素掘り	不整形円形	217	209	125	241	古墳・前	中位から遺物多数
井戸15	素掘り	方	125	125	148	231	古墳・後	
井戸16	素掘り	-	-	-	-	278	古墳・前	底面調査区外
井戸17	素掘り	円	95	80	98	222	古墳・前	底面付近に壺
井戸18	素掘り	不整形円	163	150	120	212	古墳・前	
井戸19	素掘り	円	301	278	222	156	中世	
井戸20	素掘り	円	132	122	228	151	中世	
井戸21	素掘り	楕円	160	143	201以上	178以下	中世	底面まで掘りきれず
井戸22	素掘り	円	390	360	310以上	40以下	中世	底面まで掘りきれず
井戸23	石組み	円	411	362	355	15	中世	
井戸24	素掘り	円	260	220	165以上	225以下	中世	底面まで掘りきれず

# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			特徴・備考	実測番号
				口径	底径	器高		
1	竪穴住居 1	弥生土器	甕					653
2	竪穴住居 1	弥生土器	壺		8.6			650
3	竪穴住居 1	弥生土器	甕		9.0			652
4	竪穴住居 1	弥生土器	壺		7.6			651
5	竪穴住居 2	弥生土器	壺				トレンチ、624と同一個体	623
6	竪穴住居 2	弥生土器	壺				上層、623と同一個体	624
7	竪穴住居 2	弥生土器	壺				土壘上層	706
8	竪穴住居 2	弥生土器	甕				土壘	704
9	竪穴住居 2	弥生土器	甕				土壘、口縁端部に刻み目	705
10	竪穴住居 2	弥生土器	甕				土壘下層	707
11	竪穴住居 2	弥生土器	壺		8.4		上層	625
12	竪穴住居 2	弥生土器	壺		9.0		中央穴内炭層	626
13	土壘 1	弥生土器	壺					648
14	土壘 1	弥生土器	甕		8.0			649
15	土壘 3	弥生土器	壺	23.0				605
16	土壘 3	弥生土器	壺		17.5			608
17	土壘 3	弥生土器	壺		12.0			612
18	土壘 3	弥生土器	壺				口縁端部に刺突文	601
19	土壘 3	弥生土器	甕		7.2		底部穿孔	607
20	土壘 3	弥生土器	甕				底部穿孔	611
21	土壘 3	弥生土器	蓋	頂径0.5	11.0	3.1		600
22	土壘 3	弥生土器	蓋	頂径4.8	21.6	8.0		599
23	土壘 3	弥生土器	甕	20.6	6.85	20.0		613
24	土壘 4	弥生土器	甕				口縁端部刻み目	620
25	土壘 4	弥生土器	甕				口縁端部刻み目	621
26	土壘 4	弥生土器	甕				口縁端部刻み目	617
27	土壘 4	弥生土器	甕?		8.0			615
28	土壘 4	弥生土器	甕				口縁端部刻み目	616
29	溝 5	弥生土器	壺		8.4			629
30	溝 6	弥生土器	壺		5.7			619
31	旧河道2	縄文土器	深鉢	37.6			最下層、口縁端部に刻み目、屈曲部に刻み目	1292
32	旧河道2	縄文土器	深鉢				東肩、口縁端部に刻み目、貼付突帯上に刻み目	1266
33	旧河道2	縄文土器	深鉢				東肩、口縁端部に刻み目、貼付突帯上に刻み目	1268
34	旧河道2	縄文土器	深鉢				東肩、口縁端部に刻み目、貼付突帯上に刻み目	1271
35	旧河道2	縄文土器	深鉢				東肩、口縁端部に刻み目、貼付突帯上に刻み目	1269
36	旧河道2	縄文土器	深鉢				東肩、貼付突帯上に刻み目	1273
37	旧河道2	縄文土器	深鉢				東肩、貼付突帯上に刻み目	1272
38	旧河道2	縄文土器	深鉢				東肩、口縁端部に刻み目、貼付突帯上に刻み目	1267
39	旧河道2	縄文土器	深鉢				東肩	1270
40	旧河道2	縄文土器	浅鉢				最下層、口縁端部内面・外面に沈線 1 条 屈曲部に沈線 1 条	1294
41	旧河道2	縄文土器	深鉢				中層、貼付突帯上に刻み目	1295
42	旧河道2	縄文土器	深鉢				中層、刺突文	1296
43	旧河道2	縄文土器	深鉢				最下層、刺突文	1293
44	旧河道2	弥生土器	壺	16.9			中層	1197
45	旧河道2	弥生土器	壺	13.0			中層、頸部ヘラ描き沈線 1 条、胴部ヘラ描き沈線 2 条	1195
46	旧河道2	弥生土器	壺	18.4			中層、頸部削出し突帯上にヘラ描き沈線 1 条 外面黒色物質塗布	1213
47	旧河道2	弥生土器	壺	12.0			下層、頸部に削出し突帯	1221
48	旧河道2	弥生土器	壺	14.8			下層・最下層、頸部にヘラ描き沈線 2 条	1238
49	旧河道2	弥生土器	壺	13.3			下層、頸部にヘラ描き沈線 3 条残、内外面黒色物質塗布	1241
50	旧河道2	弥生土器	壺	11.8			最下層、口縁部に穿孔 1 残 頸部削出し突帯上にヘラ描き沈線 2 条	1257
51	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、頸部貼付け突帯上に刻み目、ヘラ描き沈線 4 条、内外面黒色物質塗布	1240
52	旧河道2	弥生土器	壺				下層、頸部に貼付け突帯、内外面黒色物質塗布	1208
53	旧河道2	弥生土器	甕	16.0			下層、頸部にヘラ描き沈線 2 条	1205
54	旧河道2	弥生土器	壺	15.4			中層、頸部削出し突帯上にヘラ描き沈線 3 条 胴部ヘラ描き沈線 1 条残 頸部と口縁部内面に彩文あり	1199
55	旧河道2	弥生土器	壺	16.8			最下層、内外面に黒色物質塗布、口縁部内外面に彩文	1297
56	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、頸部削出し突帯上にヘラ描き沈線 5 条 外面黒色物質塗布、彩文あり	1222
57	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、内外面に黒色物質塗布、頸部内外面に彩文	1298
58	旧河道2	弥生土器	壺	7.1	4.7	8.1	下層	1214
59	旧河道2	弥生土器	壺	3.8	3.3	6.2	最下層	1226
60	旧河道2	弥生土器	壺	9.5	5.7	15.35		631
61	旧河道2	弥生土器	壺				中層、胴部外面に赤色顔料付着	1235
62	旧河道2	弥生土器	壺				下層・最下層、胴部削出し	1210
63	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、削出し突帯上にヘラ描き沈線 1 条、外面黒色物質塗布	1229
64	旧河道2	弥生土器	壺				下層、削出し突帯上にヘラ描き沈線 2 条、貼付け突帯上に刻み目	1209

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
65	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、削出し突帯上にヘラ描き格子文	1223
66	旧河道2	弥生土器	壺		7.7		下層・最下層胴部にヘラ描き沈線3条	1245
67	旧河道2	弥生土器	壺		7.3		中層	1186
68	旧河道2	弥生土器	壺or鉢		7.6		最下層	1246
69	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、外面黒色物質塗布、胴部に赤色顔料塗布	1299
70	旧河道2	弥生土器	壺				下層、内外面に黒色物質塗布、胴部に赤色顔料塗布	1300
71	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、胴部にヘラ描き文・ヘラ描き沈線2条	1254
72	旧河道2	弥生土器	壺				下層・最下層、胴部にヘラ描きの有軸木葉文	1301
73	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、ヘラ描き沈線2条の間に刺突文、内外面黒色物質塗布	1219
74	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、ヘラ描き沈線1条残、ヘラ描き文あり	1225
75	旧河道2	弥生土器	壺				最下層、削出し突帯上にヘラ描き沈線4条	1228
76	旧河道2	弥生土器	壺				東肩、外面に黒色物質塗布、胴部削出し突帯上にヘラ描き沈線2条	1289
77	旧河道2	弥生土器	壺		6.3		東肩、底部側面ヘラ描き沈線3条、底部十字のヘラ描き文	1194
78	旧河道2	弥生土器	甕		11.2		上層、底部に粉痕3	1316
79	旧河道2	弥生土器	壺		8.4		最下層、底部に粉痕	1243
80	旧河道2	弥生土器	壺or鉢		9.4		下層	1215
81	旧河道2	弥生土器	大型甕	50.4			最下層、屈曲部に削出し段	1237
82	旧河道2	弥生土器	大型甕	44.3			最下層、屈曲部にヘラ描き沈線1条	1236
83	旧河道2	弥生土器	甕	18.0			中層、胴部内面に赤色物質付着	1200
84	旧河道2	弥生土器	甕	22.2			下層、屈曲部にヘラ描き沈線2条	1262
85	旧河道2	弥生土器	甕	21.0			下層、口縁端部に刻み目、屈曲部にヘラ描き沈線3条	1263
86	旧河道2	弥生土器	甕	23.6			最下層、口縁端部に刻み目、頸部にヘラ描き沈線2条	1242
87	旧河道2	弥生土器	甕	2.7			最下層、口縁端部に刻み目	1256
88	旧河道2	弥生土器	甕	21.2			口縁端部に刻み目、屈曲部にヘラ描き沈線2条	1250
89	旧河道2	弥生土器	甕	21.0			最下層、口縁端部に刻み目、屈曲部貼付け突帯上に刻み目	1244
90	旧河道2	弥生土器	甕		6.9		中層	1191
91	旧河道2	弥生土器	甕		7.8		東肩	1315
92	旧河道2	弥生土器	甕		6.1		東肩	1312
93	旧河道2	弥生土器	甕				東肩、屈曲部に刺突文	1308
94	旧河道2	弥生土器	甕				最下層、口縁端部に刻み目	1252
95	旧河道2	弥生土器	甕				東肩、口縁端部に刻み目、屈曲部にヘラ描き沈線3条、屈曲部内面に粉痕	1311
96	旧河道2	弥生土器	甕				下層、口縁端部に刻み目、屈曲部ヘラ描き沈線2条の間に刺突文	1249
97	旧河道2	弥生土器	甕				最下層、口縁端部に刻み目、屈曲部ヘラ描き沈線2条の間に刺突文	1253
98	旧河道2	弥生土器	甕				東肩、胴部にヘラ描き沈線14条	1303
99	旧河道2	弥生土器	甕				最下層、口縁端部貼付け突帯上に刻み目	1251
100	旧河道2	弥生土器	鉢	10.5			下層	1258
101	旧河道2	弥生土器	鉢	10.5	5.1	6.2	最下層、内面に赤色顔料付着	1230
102	旧河道2	弥生土器	手づくね土器	6.3	3.5	3.2	下層	1207
103	旧河道2	弥生土器	把手付鉢				上層	1306
104	旧河道2	弥生土器	手づくね土器	4.2	3.4	2.9	中層、内外面に赤色顔料付着	1198
105	旧河道2	弥生土器	高杯	6.4	5.4	6.4	最下層、杯部内面と口縁一部に赤色顔料付着	1227
106	旧河道2	弥生土器	鉢				外面に黒色物質塗布	1261
107	旧河道2	弥生土器	鉢	38.2			下層	1265
108	旧河道2	弥生土器	甕				胴部内面に粉痕	1275
109	旧河道2	弥生土器	蓋	11.4		3.5	最下層、頂部に穿孔1	1224
110	旧河道2	弥生土器	壺蓋	13.7			下層	1259
111	旧河道2	弥生土器	蓋		6.4		最下層	1255
112	旧河道2	弥生土器	壺蓋				上層	1319
113	旧河道2	弥生土器	蓋		5.5		最下層	1247
114	旧河道2	弥生土器	蓋		7.0			1234
115	旧河道2	弥生土器	壺	14.0			上層、頸部に指頭圧痕文突帯1条	1282
116	旧河道2	弥生土器	無頸壺	8.2			上層、頸部に円孔2	1281
117	旧河道2	弥生土器	壺				上層、頸部・胴部に12条1単位の波状文と沈線文	1277
118	旧河道2	弥生土器	甕	31.0			上層	1283
119	旧河道2	弥生土器	甕	18.0			上層	1278
120	旧河道2	弥生土器	壺				上層、口縁端部に刻み目、頸部に指頭圧痕文突帯3条、クシ描き沈線4条	1276
121	旧河道2	弥生土器	高杯	2.0			上層	1279
122	旧河道2	弥生土器	甕		5.4		上層、底部穿孔	1284
123	溝13	弥生土器	甕	20.0			Nq702と同一個体 703を図化	703
124	溝14・15	弥生土器	壺	10.2				641
125	溝15	弥生土器	甕	17.4				644
126	溝15	弥生土器	甕					645
127	溝14・15	弥生土器	甕		5.4			642
128	溝14・15	弥生土器	壺		8.0			643
129	溝15	弥生土器	壺		5.3			646
130	溝19	弥生土器	甕				口縁端部刻み目	618
131	溝19	弥生土器	甕		6.0			619
132	溝19	弥生土器	壺		8.8		底部に粉痕	618'



# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
133	溝18	弥生土器	甕		6.0			622
134	竪穴住居 3	弥生土器	甕	14.6	4.8	17.9	土器 A	453
135	竪穴住居 3	弥生土器	甕	12.6	4.9	16.35	土器 A	452
136	竪穴住居 3	弥生土器	高杯	13.7	10.8	11.8	床面、円孔 3 方向、円孔 2 対が 3 方向	458
137	竪穴住居 3	弥生土器	台付鉢		8.6		P 4、円孔 4 方向	455
138	竪穴住居 3	弥生土器	高杯		9.1		P 4、円孔 4 方向が 4 段	454
139	竪穴住居 3	弥生土器	製塩土器		4.5		P 4	456
140	竪穴住居 3	弥生土器	鉢	14.9			覆土、屈曲部に円孔 1	457
141	竪穴住居 4	弥生土器	直口壺	5.8				281
142	竪穴住居 4	弥生土器	甕	17.0				282
143	竪穴住居 4	弥生土器	甕	17.0				284
144	竪穴住居 4	弥生土器	高杯	14.9			円孔 4 方向	285
145	竪穴住居 4	弥生土器	高杯	16.8	11.0	9.2	円孔 4 方向	283
146	竪穴住居 5	弥生土器	長頸壺	14.0			P33	443
147	竪穴住居 5	弥生土器	壺		2.3		土器 5、胴部に竹管文	446
148	竪穴住居 5	弥生土器	甕	11.9	4.8	14.9	土器 1	450
149	竪穴住居 5	弥生土器	甕	16.4				433
150	竪穴住居 5	弥生土器	甕	17.6				432
151	竪穴住居 5	弥生土器	鉢	9.5			P16	442
152	竪穴住居 5	弥生土器	甕	9.1	2.4	9.8	覆土	438
153	竪穴住居 5	弥生土器	高杯	10.3			覆土	445
154	竪穴住居 5	弥生土器	高杯	9.9	6.0	7.8	壁体溝	449
155	竪穴住居 5	弥生土器	高杯				円孔 4 方向	435
156	竪穴住居 5	弥生土器	製塩土器		3.6		P17	437
157	竪穴住居 5	弥生土器	台付鉢	13.4			土器 3	447
158	竪穴住居 5	弥生土器	鉢	16.9	4.8	9.5	土器 4	448
159	竪穴住居 5	弥生土器	甕	17.0			土器 2	431
160	竪穴住居 5	弥生土器	鉢	28.0	8.3	20.0	土器 2	451
161	竪穴住居 6	弥生土器	甕	15.1			貼り床	422
162	竪穴住居 6	弥生土器	甕	17.8			覆土	428
163	竪穴住居 6	弥生土器	鉢	15.3	6.4	16.2	№ 6 土器	419
164	竪穴住居 6	弥生土器	高杯	17.7			№ 5 土器	406
165	竪穴住居 6	弥生土器	高杯	17.4		8.5	№ 7 土器、円孔 4 方向	407
166	竪穴住居 6	弥生土器	高杯		12.4		№ 2 土器、円孔 4 方向	417
167	竪穴住居 6	弥生土器	高杯		9.3		壁体溝、円孔 4 方向	410
168	竪穴住居 6	弥生土器	高杯		11.5		№ 1 土器、円孔 4 方向	418
169	竪穴住居 6	弥生土器	鉢	10.7	3.4	6.0	貼り床	425
170	竪穴住居 6	弥生土器	鉢	14.5	5.3	6.9	壁体溝	424
171	竪穴住居 6	弥生土器	甕	14.0			中央穴 2	430
172	竪穴住居 6	弥生土器	甕	14.2	4.4	14.55	P44	416
173	竪穴住居 6	弥生土器	甕	17.0			P27	429
174	竪穴住居 6	弥生土器	鉢	16.9	6.6	6.1	P1	412
175	竪穴住居 6	弥生土器	高杯	21.4				427
176	竪穴住居 6	弥生土器	高杯	21.0			P18	414
177	竪穴住居 6	弥生土器	鉢	29.6			P25	413
178	竪穴住居 6	弥生土器	台付鉢		6.2		P10、円孔 4 方向	408
179	竪穴住居 6	弥生土器	台付鉢	8.3	3.4	6.2	P15	426
180	竪穴住居 6	弥生土器	台付鉢	10.7	3.8		中央穴 2	423
181	竪穴住居 7	弥生土器	長頸壺	19.7				359
182	竪穴住居 7	弥生土器	直口壺	7.8				364
183	竪穴住居 7	弥生土器	直口壺	7.4				393
184	竪穴住居 7	弥生土器	直口壺		4.6			374
185	竪穴住居 7	弥生土器	甕	12.6			P14	368
186	竪穴住居 7	弥生土器	甕	14.9				350
187	竪穴住居 7	弥生土器	甕	15.5				351
188	竪穴住居 7	弥生土器	甕	14.1			P14	369
189	竪穴住居 7	弥生土器	甕				P14	367
190	竪穴住居 7	弥生土器	甕	14.0			P9、胴部穿孔	395
191	竪穴住居 7	弥生土器	高杯		9.9		円孔 4 方向	392
192	竪穴住居 7	弥生土器	高杯				円孔 4 方向	397
193	竪穴住居 7	弥生土器	高杯		12.6		円孔 4 方向	391
194	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	15.5				363
195	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	15.3			P19	370
196	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	13.7				390
197	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	19.3	11.5	11.15	№ 2 土器	360
198	竪穴住居 7	弥生土器	鉢	20.8	6.6	13.6	№ 1	348
199	竪穴住居 7	弥生土器	鉢		3.6			358
200	竪穴住居 7	弥生土器	製塩土器		3.9			357
201	竪穴住居 7	弥生土器	鉢	9.0	2.2	7.7		373
202	竪穴住居 7	土師器	小型壺	13.4	1.8	10.2	№ 3 土器	349
203	竪穴住居 7 土器溜まり	土師器	二重口縁壺	24.0			口縁部外面に波状文・円形浮文、畿内系	389
204	竪穴住居 7 土器溜まり	土師器	二重口縁壺	24.6			口縁部外面に波状文、畿内系	388

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
205	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	甕	15.8				355
206	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	甕	14.7				356
207	竪穴住居7 土器溜まり	土師器	壺	10.4				354
208	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	甕	16.7				362
209	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	甕	15.6				398
210	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	甕	14.8				352
211	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	甕	15.4			口縁端部に叩き目、波路型	400
212	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	甕		4.0		波路型	402
213	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	甕	18.2			口縁端部に叩き目、波路型	405
214	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	甕	19.2			口縁端部に叩き目、波路型	404
215	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	高杯	18.7				371
216	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	高杯	19.0				379
217	竪穴住居7 土器溜まり	土師器	高杯	18.8				375
218	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	高杯	10.7			円孔1 残存	361
219	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	高杯	11.0				380
220	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	高杯		12.4	7.4	円孔4 方向	396
221	竪穴住居7 土器溜まり	土師器	高杯				畿内系	387
222	竪穴住居7 土器溜まり	土師器	高杯					383
223	竪穴住居7 土器溜まり	土師器	高杯				円孔2 残存	376
224	竪穴住居7 土器溜まり	土師器	高杯				円孔2 残存、畿内系	385
225	竪穴住居7 土器溜まり	弥生土器	鉢	34.8				353
226	竪穴住居8	弥生土器	壺	12.7			土器1	335
227	竪穴住居8	弥生土器	高杯	11.7			覆土	337
228	竪穴住居8	弥生土器	高杯	29.3			覆土	332
229	竪穴住居8	弥生土器	高杯	16.2			P5	333
230	竪穴住居8	弥生土器	製塩土器		5.0		覆土	334
231	竪穴住居9	弥生土器	長頸壺	16.7	7.2	31.5	土器2	301
232	竪穴住居9	弥生土器	直口壺	9.1			土器9	296
233	竪穴住居9	弥生土器	壺	13.1			土器9、肩部にヘラ描きあり	287
234	竪穴住居9	弥生土器	甕	14.4	5.4	23.5	土器1、底部穿孔	302
235	竪穴住居9	弥生土器	甕	12.4	6.0	15.6	土器8	288
236	竪穴住居9	弥生土器	甕	16.0			上層(土手) 土器溜まり	291
237	竪穴住居9	弥生土器	高杯	18.4			上層(土手) 土器溜まり、円孔4 方向	290
238	竪穴住居9	弥生土器	高杯		10.5		円孔3 方向、円孔4 方向	289
239	竪穴住居9	弥生土器	台付鉢	10.9	5.9	12.6	土器溜まり 土器1 1 土器5 胴部に刺突文	286
240	竪穴住居9	弥生土器	鉢		5.0			299
241	竪穴住居9	弥生土器	手づくね土器	4.2			上層(土手) 土器溜まり	293
242	竪穴住居9	弥生土器	手づくね土器	6.2		2.9		298
243	竪穴住居9	弥生土器	製塩土器		5.0		土器3	295
244	竪穴住居9	弥生土器	製塩土器		5.0		中央ビット	294
245	竪穴住居10	弥生土器	長頸壺	19.1				327
246	竪穴住居10	弥生土器	甕					328
247	竪穴住居10	弥生土器	高杯	19.4			円孔推定4 方向	326
248	竪穴住居10	弥生土器	高杯		9.6		円孔4 方向	324
249	竪穴住居10	弥生土器	高杯	11.1				323
250	竪穴住居10	弥生土器	高杯	11.1	11.5	9.95	円孔2 残存	322
251	竪穴住居10	弥生土器	鉢	14.4	3.2	6.6		330
252	竪穴住居10	弥生土器	鉢	17.1	6.0	6.25	底部穿孔	331
253	竪穴住居10	弥生土器	高杯	13.1	15.5	12.7	土器1、円孔推定6 方向	962
254	竪穴住居10	弥生土器	甕					961
255	竪穴住居10	弥生土器	製塩土器		3.2			960
256	溝26	弥生土器	高杯				上面南区、円孔2 残存	469
257	溝26	弥生土器	鉢	17.8			上面南区	466

# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
258	溝26	弥生土器	台付鉢		10.2		円孔5方向	468
259	溝26	弥生土器	鉢	6.7	2.8	8.35		467
260	溝27	弥生土器	台付直口壺	7.8				471
261	溝27	弥生土器	長頸壺	17.6			北土手	473
262	溝27	弥生土器	壺	21.2				475
263	溝27	弥生土器	台付鉢		14.2		円孔4方向	472
264	溝27	弥生土器	鉢	17.8	6.4	9.6		470
265	溝28	弥生土器	長頸壺	18.2	6.6		東端上層土器だまり	567
266	溝28	弥生土器	壺	15.7			東端上層	561
267	溝28	弥生土器	甕	15.6				564
268	溝28	弥生土器	高杯		18.4		円孔4方向	562
269	溝28	弥生土器	台付鉢		4.3			563
270	溝28	弥生土器	台付鉢		11.0			565
271	溝28	弥生土器	鉢	45.4	12.0	18.25		566
272	溝29	弥生土器	壺	23.7				568
273	溝29	弥生土器	壺	12.6			上層	574
274	溝29	弥生土器	甕	18.0			西半	573
275	溝29	弥生土器	鉢	12.3	4.1	9.4	上層	578
276	溝29	弥生土器	高杯				東半	583
277	溝29	弥生土器	台付鉢		9.0		西半	582
278	溝29	弥生土器	製塩土器		3.2		西半	585
279	溝32	弥生土器	甕	16.0				481
280	溝32	弥生土器	高杯				円孔4方向	504
281	溝33	弥生土器	壺	14.2			北区焼土下	538
282	溝33	弥生土器	壺	16.6	6.6	32.55	上層(焼土上)土器3	551
283	溝33	弥生土器	甕	14.6			北区土手	529
284	溝33	弥生土器	甕	12.0			東部	530
285	溝33	弥生土器	甕	15.1	4.6	21.1	下層北区 北区焼土下	531
286	溝33	弥生土器	高杯	31.3			北区焼土下	546
287	溝33	弥生土器	台付鉢		10.6		北区焼土下、円孔4方向が2段	543
288	溝33	弥生土器	鉢	18.6	4.2	7.4	下層北区	535
289	溝33	弥生土器	鉢	11.6			東部	547
290	溝33	弥生土器	台付鉢		10.7		北区焼土下、脚柱部を貫く穿孔	540
291	溝33	弥生土器	鉢	38.8			北区上層土器1	533
292	溝33	弥生土器	裝飾高杯	39.5			北区上層土器3	536
293	溝34	弥生土器	甕	17.8				1982
294	溝34	弥生土器	甕	17.0			C溝	483
295	溝34	弥生土器	鉢	20.0				484
296	溝35	弥生土器	壺	23.8			北土手	506
297	溝35	弥生土器	甕	15.0			端部(土手)	478
298	溝36	弥生土器	長頸壺	18.4				514
299	溝36	弥生土器	長頸壺	15.6			東周溝	485
300	溝36	弥生土器	長頸壺	14.8			土器だまり	486
301	溝36	弥生土器	壺		8.8		北土手土器2	553
302	溝36	弥生土器	甕	15.0				479
303	溝36	弥生土器	甕	15.7			南区	509
304	溝36	弥生土器	甕	12.2			土器だまり	480
305	溝36	弥生土器	甕	15.5				516
306	溝36	弥生土器	鉢	13.4				494
307	溝36	弥生土器	鉢	15.6				519
308	溝36	弥生土器	甕	12.8			上層	558
309	溝36	弥生土器	高杯	8.5				499
310	溝36	弥生土器	甕	22.9				488
311	溝36	弥生土器	手づくね土器	2.3	2.5	4.05	円孔2対が7方向	523
312	溝36	弥生土器	台付鉢	9.7	4.2	6.8		518
313	溝36	弥生土器	鉢	7.9	2.8	7.15	東周溝	502
314	溝36	弥生土器	高杯		11.5		円孔4方向	500
315	溝36	弥生土器	高杯	10.7	9.0	8.8	円孔4方向	491
316	溝36	弥生土器	高杯	17.6				521
317	溝36	弥生土器	高杯	17.8				501
318	溝36	弥生土器	鉢	27.8				493
319	溝37	弥生土器	長頸壺	17.0				556
320	溝37	弥生土器	長頸壺		7.8		上層	560
321	溝37	弥生土器	甕	15.6			上層	554
322	溝37	弥生土器	甕	14.8				555
323	溝37	弥生土器	鉢	20.8	6.5		土器3	511
324	溝37	弥生土器	高杯	18.0			最下層	557
325	溝37	弥生土器	高杯	18.6	11.7	10.6	上層、円孔3残存	559
326	溝37	弥生土器	高杯	16.1			土器1	508
327	溝37	弥生土器	高杯	14.2	12.5	9.7	土器1、円孔4方向	507
328	溝37	弥生土器	裝飾高杯	26.8			南区	510
329	溝38	弥生土器	甕	10.7			外面赤色顔料塗布	801
330	溝38	弥生土器	高杯					802
331	建物1	弥生土器	甕	12.9				1969

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
332	建物 1	弥生土器	鉢		4.1			1968
333	建物 1	弥生土器	甕		5.2		上部	1970
334	建物 1	弥生土器	高杯				円孔 2 残 (推定 4 方向)	1971
335	井戸 1	弥生土器	長頸壺	19.1	7.3	36.5	中層 (炭層)	67
336	井戸 1	弥生土器	長頸壺	16.8			中層 (炭層)	44
337	井戸 1	弥生土器	壺	14.1	9.0	31.7	中層 (炭層)	61
338	井戸 1	弥生土器	壺	13.2			下層	56
339	井戸 1	弥生土器	長頸壺	18.2			下層、口縁部に円孔 2 対	46
340	井戸 1	弥生土器	壺	16.3	9.4	40.3	中層 (炭層)	93
341	井戸 1	弥生土器	壺	11.9	8.8	27.2	中層 (炭層)	72
342	井戸 1	弥生土器	壺	22.3			下層、胴部に籠目	60-1
342	井戸 1	弥生土器					下層	60-2
343	井戸 1	弥生土器	壺	11.6			中層 (炭層)	64
344	井戸 1	弥生土器	細頸壺	13.6			中層 (炭層)	49
345	井戸 1	弥生土器	細頸壺	9.3	3.0	24.5	下層	30
346	井戸 1	弥生土器	壺	8.5			中層 (炭層)	85
347	井戸 1	弥生土器	壺	16.6	6.6	31.7	中層 (炭層)	91
348	井戸 1	弥生土器	甕	23.5	10.0	39.7	中層 (炭層)	33
349	井戸 1	弥生土器	壺	14.8	7.6	28.5	中層 (炭層)	71
350	井戸 1	弥生土器	甕	18.0			下層	54
351	井戸 1	弥生土器	甕	17.1	6.0	27.15	下層、底部穿孔	45
352	井戸 1	弥生土器	甕		4.7		中層 (炭層)、底部穿孔	82
353	井戸 1	弥生土器	甕	14.7	4.4	23.6	中層 (炭層)	94
354	井戸 1	弥生土器	甕	14.8	4.7	25.3	中層 (炭層)	43
355	井戸 1	弥生土器	甕	15.8			中層 (炭層)	90
356	井戸 1	弥生土器	甕	13.5	4.4	21.9	下層	31
357	井戸 1	弥生土器	台付鉢	11.6	7.5	13.6	中層 (炭層)	27
358	井戸 1	弥生土器	甕	9.7	4.2	15.6	下層	14
359	井戸 1	弥生土器	甕	11.2	5.1	16.75	下層	32
360	井戸 1	弥生土器	甕	11.5	9.85	16.6	中層 (炭層)	29
361	井戸 1	弥生土器	高杯	11.7			中層 (炭層)	23
362	井戸 1	弥生土器	高杯	11.6			中層 (炭層)	10
363	井戸 1	弥生土器	甕	8.8			中層 (炭層)	22
364	井戸 1	弥生土器	甕	11.3	4.2	12.2	中層 (炭層)	26
365	井戸 1	弥生土器	高杯	23.4	15.0	14.4	中層 (炭層) 円孔 4 方向	21
366	井戸 1	弥生土器	高杯	25.5	17.4	16.6	中層 (炭層) 円孔 4 方向	38
367	井戸 1	弥生土器	高杯				中層 (炭層) 円孔 4 方向	96
368	井戸 1	弥生土器	高杯	28.6		17.2	中層 (炭層) 円孔 4 方向	95
369	井戸 1	弥生土器	高杯	26.6	17.9	15.3	中層 (炭層) 円孔 4 方向	70
370	井戸 1	弥生土器	高杯	26.4	17.3	17.0	中層 (炭層) 円孔 4 方向	69
371	井戸 1	弥生土器	台付鉢	17.7	11.1	18.1	下層	57
372	井戸 1	弥生土器	台付鉢	14.4	6.0	15.35	中層 (炭層) 底部穿孔	28
373	井戸 1	弥生土器	台付鉢	17.8	7.5	11.9	中層 (炭層)	18
374	井戸 1	弥生土器	鉢	16.2	4.4		中層 (炭層) 屈曲部に円孔 1	7
375	井戸 1	弥生土器	製塩土器		3.35		下層	73
376	井戸 1	弥生土器	製塩土器		4.0		下層	53
377	井戸 1	弥生土器	鉢	15.2	6.95	15.65	中層 (炭層)	2
378	井戸 1	弥生土器	鉢	15.5	6.0	15.3	中層 (炭層)	1
379	井戸 1	弥生土器	鉢	19.8	6.4	8.4	中層 (炭層)	41
380	井戸 1	弥生土器	鉢	18.5	4.9		中層 (炭層) 屈曲部に円孔 1	4
381	井戸 1	弥生土器	鉢	12.7	4.8	6.4	下層	16
382	井戸 1	弥生土器	鉢	11.5	3.8	8.7	中層 (炭層)	9
383	井戸 1	弥生土器	鉢	13.9	4.5	8.4	中層 (炭層)	15
384	井戸 1	弥生土器	台付鉢	10.7	3.0	7.0	中層 (炭層)	11
385	井戸 1	弥生土器	鉢	14.7	4.35	5.3	中層 (炭層)	6
386	井戸 1	弥生土器	鉢	12.0	4.8	9.35	下層	13
387	井戸 1	弥生土器	台付鉢	10.6	5.3	7.8	中層 (炭層)	8
388	井戸 1	弥生土器	器台	14.4	15.9	12.15	最下層、円孔 4 方向	12
389	井戸 1	弥生土器	器台	16.8	18.75	16.7	中層 (炭層) 円孔 4 方向	68
390	井戸 1	弥生土器	鉢	36.4	10.4	16.1	中層 (炭層)	59
391	井戸 1	弥生土器	器台	20.3	25.2	17.9	中層 (炭層) 円孔 3 方向が 2 段	35
392	井戸 2	弥生土器	壺	12.7				143
393	井戸 2	弥生土器	甕		7.2			145
394	井戸 4	弥生土器	壺	14.7			下層	141
395	井戸 4	弥生土器	長頸壺	14.4			下層	132
396	井戸 4	弥生土器	甕	17.4			下層	140
397	井戸 4	弥生土器	甕	15.3			下層	138
398	井戸 4	弥生土器	甕	11.2			下層	131
399	井戸 4	弥生土器	壺	5.1	2.4	7.4	下層、ミニチュア	139
400	井戸 5	弥生土器	壺	11.0		5.3	中層	172
401	井戸 5	弥生土器	鉢	12.3		5.5	中層	173
402	井戸 5	弥生土器	壺		19.3		下層 土器溜まり	171
403	井戸 6	弥生土器	甕	16.4				146
404	井戸 6	弥生土器	台付鉢	18.8	12.3	19.8		142

# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
405	井戸 6	弥生土器	高杯	36.6				147
406	井戸 7	弥生土器	長頸壺	11.6	5.4	23.5	下層	99
407	井戸 7	弥生土器	壺	10.9	6.3	26.7	下層	97
408	井戸 7	弥生土器	壺	10.8	6.5	19.8	下層、頸部に円孔 2 方向	125
409	井戸 7	弥生土器	壺	12.0	7.0	21.4	下層	98
410	井戸 7	弥生土器	長頸壺	13.5	8.5	28.7	下層、口縁部内面に竹管文	116
411	井戸 7	弥生土器	壺	16.5			中層 (炭層より下)	129
412	井戸 7	弥生土器	壺	18.3		15.1	中層 (炭層より下)	115
413	井戸 7	弥生土器	甕	14.7	6.4	31.5	中層 (炭層より下)	119
414	井戸 7	弥生土器	甕	14.5			下層	126
415	井戸 7	弥生土器	甕	12.5	5.6	18.4	中層 (炭層より下)	111
416	井戸 7	弥生土器	甕	15.3			下層	127
417	井戸 7	弥生土器	甕	13.2		8.2	上層	105
418	井戸 7	弥生土器	甕	13.8			中層 (炭層より下)	121
419	井戸 7	弥生土器	甕	16.8		17.9	下層	122
420	井戸 7	弥生土器	高杯				上層、円孔 4 方向が 3 段	106
421	井戸 7	弥生土器	高杯		14.8		下層、円孔 2 方向、円孔 4 方向	100
422	井戸 7	弥生土器	高杯	26.2			中層 (炭層より下)、円孔推定 3	114
423	井戸 7	弥生土器	鉢	15.7		10.1	下層	123
424	井戸 7	弥生土器	鉢	12.0	6.5	15.6	中層 (炭層より下)、屈曲部に円孔 1	109
425	井戸 7	弥生土器	台付鉢	21.6	10.6	18.0	下層	112
426	井戸 7	弥生土器	鉢	25.3		15.3	上層	104
427	井戸 7	弥生土器	器台	18.3	15.9	13.6	中層 (炭層より下)、円孔 3 方向、円孔 2 対が 3 方向	102
428	井戸 7	弥生土器	製塩土器		5.3		下層	128
429	井戸 7	弥生土器	製塩土器		4.5		上層	110
430	井戸 7	弥生土器	台付鉢	16.4			上層	108
431	井戸 7	弥生土器	鉢	34.8	10.4	19.9	下層	117
432	井戸 7	弥生土器	器台	35.4		25.2	中層、長方形透し孔 3	130
433	井戸 7	弥生土器	器台		30.0		下層、円孔 4 方向 (補修痕あり)、円孔 5 方向	101
434	井戸 8	弥生土器	壺	14.0	8.5	34.2		163
435	井戸 8	弥生土器	台付鉢	28.8	13.2	18.95	円孔 4 方向	148
436	井戸 8	弥生土器	甕	16.0		6.2		149
437	井戸 8	弥生土器	甕	15.6		7.0		150
438	井戸 8	弥生土器	高杯	12.0	12.3	10.2	円孔 4 方向	151
439	井戸 9	弥生土器	甕	10.2	3.6	8.4		174
440	井戸 9	弥生土器	壺	17.6	7.65	29.1	肩部に貝殻による刺突文	175B
441	井戸 11	弥生土器	壺	20.4				858
442	井戸 11	弥生土器	甕	16.0	6.3	26.6	土器 6	844
443	井戸 11	弥生土器	甕	14.1	4.5	23.8	土器 4	856
444	井戸 11	弥生土器	甕	14.5	4.0	17.1	土器 1	842
445	井戸 11	弥生土器	高杯	16.4				843
446	井戸 11	弥生土器	甕	15.8	6.0	26.1	土器 2	857
447	井戸 11	弥生土器	甕	16.4				845
448	井戸 11	弥生土器	鉢	40.4	12.0	22.8		855
449	土壌 7	弥生土器	長頸壺	23.5			№ 5	460
450	土壌 7	弥生土器	甕	16.9			№ 2, 3, 5, 6	461
451	土壌 7	弥生土器	台付直口壺				№ 2、円孔 4 方向	463
452	土壌 7	弥生土器	高杯		11.2		円孔 4 方向	464B
453	土壌 7	弥生土器	高杯	11.0	10.7	9.0	円孔 4 方向	464
454	土壌 7	弥生土器	高杯	19.4	11.2	10.2	円孔 4 方向	462
455	土壌 7	弥生土器	鉢	38.0				459
456	土壌 8	弥生土器	台付直口壺	5.8			円孔推定 3 方向	303
457	土壌 8	弥生土器	鉢	43.4				309
458	土壌 9	弥生土器	甕	15.0				276
459	土壌 9	弥生土器	台付鉢		10.6			275
460	土壌 11	弥生土器	製塩土器		4.7		炭層より上層	268
461	土壌 11	弥生土器	製塩土器		3.0			270
462	土壌 11	弥生土器	製塩土器		3.6			263
463	土壌 11	弥生土器	製塩土器		4.3		炭層以下	265
464	土壌 11	弥生土器	製塩土器		3.9		炭層以下	264
465	土壌 11	弥生土器	製塩土器		3.9		炭層以下	266
466	土壌 11	弥生土器	製塩土器		4.6		炭層以下	267
467	土壌 11	弥生土器	長頸壺	19.9			口縁端部に刻み目	274B
468	土壌 11	弥生土器	甕	10.6			炭層より上層	273
469	土壌 11	弥生土器	台付鉢		7.8		炭層以下、竹管文 1 残存	274
470	土壌 11	弥生土器	製塩土器		4.4		炭層以下	269
471	土壌 12	弥生土器	壺	10.7				200
472	土壌 12	弥生土器	甕	12.6	4.2	18.4		215
473	土壌 12	弥生土器	甕	15.0	4.9	20.5		216
474	土壌 12	弥生土器	甕	14.7	3.7	16.0		199
475	土壌 12	弥生土器	甕	12.1	3.65	12.9		204
476	土壌 12	弥生土器	甕	12.5	4.0	17.3		203
477	土壌 12	弥生土器	高杯	11.3	12.0	9.1	円孔 4 方向	214
478	土壌 12	弥生土器	高杯	16.3	11.5	10.5	円孔推定 4	205

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
479	土壇12	弥生土器	高杯	16.2		9.8	円孔4方向	201
480	土壇12	弥生土器	鉢	13.2	3.5	11.1		198
481	土壇12	弥生土器	鉢	11.1	3.7	9.4		213
482	土壇12	弥生土器	鉢	13.5	4.2	6.0		211
483	土壇12	弥生土器	鉢	12.2	3.1	7.75		207
484	土壇12	弥生土器	高杯	8.4		6.7		206
485	土壇12	弥生土器	鉢	11.9		8.0		209
486	土壇12	弥生土器	鉢	13.4	3.8	6.3		210
487	土壇13	弥生土器	長頸壺	17.5				224
488	土壇14	弥生土器	甕	14.8				231
489	土壇14	弥生土器	甕	13.5				228
490	土壇14	弥生土器	鉢	12.2	4.2	6.5		227
491	土壇14	弥生土器	台付鉢	9.8	5.0	7.7		226
492	土壇14	弥生土器	高杯	17.3	10.6	9.4	円孔4方向	230
493	土壇14	弥生土器	高杯	19.0	12.5	11.2	円孔推定4	229
494	土壇15	弥生土器	長頸壺	17.6				218
495	土壇15	弥生土器	甕	14.5				219
496	土壇15	弥生土器	高杯		10.6		円孔4方向	220
497	土壇15	弥生土器	製塩土器		4.0			222
498	土壇15	弥生土器	手づくね土器	6.4				221
499	土壇17	弥生土器	甕	14.8				314
500	土壇17	弥生土器	鉢	16.0				315
501	土壇17	弥生土器	高杯	11.1				313
502	土壇17	弥生土器	高杯		11.3		円孔3方向	320
503	土壇17	弥生土器	鉢	29.4				319
504	土壇19	弥生土器	壺	12.5	65.0	25.0	上層、口縁部内面に竹管文	232
505	土壇19	弥生土器	甕	13.6	4.7	17.6	上層 北半	243
506	土壇19	弥生土器	甕	16.0	6.3	27.25	上層 南半	245
507	土壇19	弥生土器	甕	10.6	4.4	13.9	下層	239
508	土壇19	弥生土器	甕	14.4	4.4	23.6	上層 南半	238
509	土壇19	弥生土器	甕	13.2	5.1	17.7	下層	237
510	土壇19	弥生土器	甕	12.9	5.1	20.5	底部穿孔、胴部に靨痕	233
511	土壇19	弥生土器	甕	14.1	5.7	19.7	上層	234
512	土壇19	弥生土器	高杯	27.2	17.3	14.1	上層北半、円孔4方向	242
513	土壇19	弥生土器	高杯	25.8	18.4	17.2	上層北半、円孔4方向	244
514	土壇19	弥生土器	高杯	13.9	13.2	10.0	上層南半、円孔4方向	235
515	土壇19	弥生土器	台付鉢	9.9	4.0	9.5		236
516	土壇20	弥生土器	鉢	24.6				225
517	土壇21	弥生土器	甕	17.0				272
518	土壇21	弥生土器	高杯	18.5				271
519	土壇21	弥生土器	高杯	33.2				277
520	土壇22	弥生土器	甕	14.7	4.85	20.65		278
521	土壇22	弥生土器	甕	14.7				279
522	土壇22	弥生土器	甕	16.8				280
523	土壇23	弥生土器	高杯		15.8		円孔3方向	217
524	土壇25	弥生土器	壺	14.4			上層、肩部にヘラ描きあり	186
525	土壇25	弥生土器	壺	12.6	5.5	20.15	上層	177
526	土壇25	弥生土器	長頸壺	16.8	7.6	32.3	上層	176
527	土壇25	弥生土器	台付直口壺		13.4		下層、円孔4方向	179
528	土壇25	弥生土器	甕	14.8	6.5	27.6	上層、底部穿孔	181
529	土壇25	弥生土器	甕	13.1	4.4	13.6	上層	189
530	土壇25	弥生土器	甕	14.6	6.4	25.3	上層	180
531	土壇25	弥生土器	高杯	11.5		6.0	上層	196
532	土壇25	弥生土器	高杯	19.3	15.6	11.5	上層、円孔4方向	193
533	土壇25	弥生土器	高杯	19.3	15.6	11.5	上層	194
534	土壇25	弥生土器	鉢	16.7	4.4	13.5	上層	185
535	土壇25	弥生土器	鉢	19.1	7.2	9.7	上層	195
536	土壇25	弥生土器	高杯	16.7		13.1	上層、円孔3方向	197
537	土壇25	弥生土器	鉢	10.3	3.65	7.2	上層	184
538	土壇25	弥生土器	鉢	13.3	5.8	10.35	上層	191
539	土壇25	弥生土器	鉢	24.0	7.5	10.4	上層、底部穿孔	187
540	土壇26	弥生土器	甕	12.7	4.1	17.05		261
541	土壇26	弥生土器	甕	15.4	6.2			256
542	土壇26	弥生土器	甕	15.3	5.65			257
543	土壇26	弥生土器	甕	15.1	5.85	23.0	底部穿孔	260
544	土壇26	弥生土器	甕	14.9				251
545	土壇26	弥生土器	製塩土器		3.4			247
546	土壇26	弥生土器	製塩土器		3.5			248
547	土壇26	弥生土器	鉢	17.0	6.3	7.7		246
548	土壇26	弥生土器	鉢	15.5	3.9	10.7		253
549	土壇26	弥生土器	高杯	12.8	13.6	11.9	下半、円孔2対が3方向	249
550	土壇26	弥生土器	高杯	23.5	16.0	14.7	円孔4方向	262
551	土壇26	弥生土器	台付鉢	16.2	8.7	15.45	胴部に打ち欠き	255
552	土壇27	弥生土器	壺		3.4			733

# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
553	土壇27	弥生土器	甕	14.0	7.1	(24.4)		710
554	土壇27	弥生土器	甕	17.0	7.3	(26.9)		736
555	土壇27	弥生土器	甕	15.2				712
556	土壇27	弥生土器	甕	14.4	5.3	16.1		732
557	土壇27	弥生土器	甕	13.1	5.1	(17.2)		708
558	土壇27	弥生土器	甕	13.9				723
559	土壇27	弥生土器	甕	12.9	5.0	(16.5)		709
560	土壇27	弥生土器	甕	15.0	5.4	16.4		727
561	土壇27	弥生土器	甕	15.8				725
562	土壇27	弥生土器	甕	14.0				721
563	土壇27	弥生土器	甕	15.8				711
564	土壇27	弥生土器	甕	15.8				716
565	土壇27	弥生土器	甕	14.4				713
566	土壇27	弥生土器	甕	16.0				735
567	土壇27	弥生土器	甕	15.8				734
568	土壇27	弥生土器	甕	12.6				714
569	土壇27	弥生土器	甕	10.0				722
570	土壇27	弥生土器	鉢	8.4				719
571	土壇27	弥生土器	高杯	15.8	10.4	11.4	円孔4方向	720
572	土壇27	弥生土器	高杯		8.4		円孔4方向	731
573	土壇27	弥生土器	高杯		11.9		円孔4方向	717
574	土壇27	弥生土器	鉢	12.0	3.5	(7.5)	底部に木葉痕	726
575	土壇27	弥生土器	鉢					729
576	土壇27	弥生土器	鉢		4.9			718
577	土壇28	弥生土器	甕	12.2				659
578	土壇34	弥生土器	甕	14.0				849
579	土壇34	弥生土器	手づくね土器	2.6		2.7		847
580	土壇34	弥生土器	鉢	17.4				846
581	土壇35	弥生土器	甕		4.9			854
582	土壇35	弥生土器	鉢		3.6			853
583	土壇35	弥生土器	製塩土器		2.6			851
584	土壇36	弥生土器	甕	17.1				870
585	土壇36	弥生土器	甕		6.7			872
586	土壇36	弥生土器	高杯					871
587	土壇36	弥生土器	器台	35.5	32.7	40.6	長方形透し孔4方向が2段、胴部にヘラ描き	873
588	土壇36	弥生土器	器台	31.4	29.6	27.2	円孔3方向、円孔2対が3方向	869
589	土壇39	弥生土器	甕	14.8	4.8	23.7	土器3	859
590	土壇39	弥生土器	製塩土器		3.6			865
591	土壇46	弥生土器	甕	14.9	4.9	(24.1)	土器群	879
592	土壇46	弥生土器	甕	16.4			土器群1	876
593	土壇46	弥生土器	甕	14.3				877
594	土壇46	弥生土器	甕	15.0				882
595	土壇46	弥生土器	甕		5.9		底部穿孔	883
596	土壇46	弥生土器	高杯				土器群4	881
597	土壇46	弥生土器	壺		4.3			874
598	土壇46	弥生土器	鉢	13.9	5.0	9.2		875
599	土壇46	弥生土器	鉢	22.1	6.2	13.5	土器群3	880
600	土壇46	弥生土器	台付鉢	17.4	12.5	16.7		878
601	土壇53	弥生土器	壺	22.0			上層、口縁部外面にヘラ描き鋸歯文・S字状浮文、口縁部上部端面に竹管文	950
602	土壇53	弥生土器	壺				上層、口縁部外面にヘラ描き鋸歯文・竹管文口縁部上部端面と内面に櫛状工具による刺突文、杯部内面に竹管文4	955
603	土壇53	弥生土器	甕	15.0			上層	952
604	土壇53	弥生土器	甕		3.2		上層	945
605	土壇53	弥生土器	鉢	8.4			上層	948
606	土壇53	弥生土器	鉢		8.2		上層	954
607	土壇53	弥生土器	甕	16.3			下層	931
608	土壇53	弥生土器	甕	14.8			下層	930
609	土壇53	弥生土器	甕	11.0			下層	932
610	土壇53	弥生土器	高杯	12.3			下層	937
611	土壇53	弥生土器	甕	14.7			上層	943
612	土壇53	弥生土器	高杯		10.6		下層	936
613	土壇53	弥生土器	高杯		12.4		下層、円孔4方向	940
614	土壇53	弥生土器	台付鉢	10.4	4.6	6.4	下層	939
615	土壇53	弥生土器	台付鉢		5.0		下層	926
616	土壇53	弥生土器	甕		5.2		上層	947
617	土壇53	弥生土器	鉢	11.6			下層	938
618	土壇53	弥生土器	甕	15.0			上層	944
619	土壇53	弥生土器	製塩土器		3.8		下層	928
620	土壇53	弥生土器	製塩土器		4.8		下層	925
621	土壇53	弥生土器	製塩土器		3.6		下層	929
622	土壇53	弥生土器	製塩土器		3.4		下層	927
623	土壇53	弥生土器	鉢	31.1			上層	953
624	土壇53	弥生土器	手づくね土器	3.6	1.9	5.2	下層	934

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
625	土壇53	弥生土器	手づくね土器	2.0	2.1	5.8	下層	935
626	土壇53	弥生土器	手づくね土器				下層	933
627	土壇54	弥生土器	高杯	27.0				918
628	土壇54	弥生土器	高杯	13.0				920
629	土器棺墓1	弥生土器	鉢(土器棺)	39.9	8.2	20.0	土器棺蓋に転用	346
630	土器棺墓1	弥生土器	壺(土器棺)		11.5		土器棺に転用	344
631	土器棺墓2	弥生土器	壺(土器棺)				土器棺蓋に転用	340
632	土器棺墓2	弥生土器	壺(土器棺)	20.6	11.4	49.7	№5、土器棺に転用、胴部穿孔	343
633	土器棺墓3	弥生土器	鉢(土器棺)	42.2	10.6	20.6	2土器、土器棺蓋に転用	342
634	土器棺墓3	弥生土器	長頸壺(土器棺)		12.0		№3土器(棺本体)、土器棺に転用	347
635	土器棺墓3	弥生土器	壺(土器棺)	19.3	10.6	44.7	土器棺に転用	341
636	土器棺墓3	弥生土器	壺(土器棺)	18.8			№5土器、土器棺に転用	345
637	炉2	弥生土器	長頸壺	13.2	6.0	23.3	炉内、H596頸部と胴部境に竹管文	799
638	炉2	弥生土器	高杯	24.7			炉内	800
639	炉2	弥生土器	鉢	31.0	8.0	18.8	炉内	798
640	溝41	弥生土器	高杯					513
641	溝42	弥生土器	台付鉢		16.4		円孔2対が4方向	803
642	溝42	弥生土器	製塩土器		3.8			805
643	溝43上層	弥生土器	壺					748
644	溝43上層	弥生土器	甕	12.2			南端上層	759
645	溝43上層	弥生土器	甕	13.9	3.4	15.1	南端上層	761
646	溝43上層	弥生土器	壺		4.0		西テラス上	749
647	溝43上層	弥生土器	甕	12.6			南端上層	760
648	溝43上層	弥生土器	甕	17.0			西テラス上	754
649	溝43上層	弥生土器	甕	14.6			西テラス上	752
650	溝43上層	弥生土器	甕	14.6			西テラス上	753
651	溝43上層	弥生土器	甕	14.3			西テラス上	751
652	溝43上層	弥生土器	甕	12.4				742
653	溝43上層	土師器	甕	14.0	3.8	23.8	上半	762
654	溝43上層	弥生土器	甕	14.5		24.3	南端上層、胴部中央に打ち欠き	756
655	溝43上層	土師器	高杯	19.6			上半	763
656	溝43上層	弥生土器	高杯	21.6			西テラス上、円孔1残存	755
657	溝43上層	弥生土器	高杯		12.8		上層、円孔4方向	741
658	溝43上層	弥生土器	高杯		9.8		上層、円孔4方向	743
659	溝43上層	弥生土器	鉢	13.6	(2.6)		南より上層	757
660	溝43上層	弥生土器	鉢	16.0			上層	746
661	溝43上層	弥生土器	鉢	40.4	9.7	23.1	上半	764
662	溝43上層	弥生土器	壺				頸部ヘラ描き沈線7条、貼付突帯上に刺突文	1372
663	溝43上層	弥生土器	長頸壺	15.5			北東肩部	790
664	溝43上層	弥生土器	長頸壺	17.3				796
665	溝43上層	弥生土器	台付壺	10.1		19.2	脚部に円孔5方向2段、内外面所々に赤色顔料付着	1364
666	溝43上層	弥生土器	台付直口壺	6.7				786
667	溝43上層	弥生土器	台付直口壺		10.1		上層、円孔4方向	740
668	溝43上層	弥生土器	壺	13.4	9.0	37.5		792
669	溝43上層	弥生土器	甕	18.6				797
670	溝43上層	弥生土器	壺	14.6	8.8	27.05		1366
671	溝43上層	弥生土器	壺					1365
672	溝43上層	弥生土器	甕	12.6				780
673	溝43上層	弥生土器	甕	15.0				793
674	溝43上層	弥生土器	高杯				脚部に2条沈線・3条沈線、脚裾部に円孔2対3方向	1368
675	溝43上層	弥生土器	高杯		12.7		円孔2対が3方向	788
676	溝43上層	弥生土器	台付鉢	(8.2)	4.8	(8.1)		785
677	溝43上層	弥生土器	鉢	12.7	5.4	10.2	底部穿孔	787
678	溝43上層	弥生土器	鉢	18.9	6.0	8.8		1371
679	溝43上層	弥生土器	鉢	18.3	5.7	12.5		795
680	溝43上層	弥生土器	鉢	9.2		8.2	上部	1367
681	溝43上層	弥生土器	鉢	31.4	9.4	19.8		791
682	溝44	弥生土器	器台	29.0			下層(粘質土)、円孔1残存	772
683	溝44	弥生土器	長頸壺	21.0			上層(洪水砂)	773
684	溝44	弥生土器	壺	13.5			下層(粘質土)、頸部に刺突文	771
685	溝44	弥生土器	壺	10.0	3.5	11.9	下層(粘質土)	768
686	溝44	弥生土器	直口壺	12.0			下層(粘質土)	769
687	溝44	弥生土器	甕	16.0			上層(洪水砂)	777
688	溝44	弥生土器	甕	19.4			下層(粘質土)	767
689	溝44	弥生土器	甕	15.6			上層(洪水砂)	775
690	溝44	弥生土器	甕	13.6			下層(粘質土)、讃岐系(下川津B類)	770
691	溝44	弥生土器	高杯	15.8			上層(洪水砂)	776
692	溝44	弥生土器	高杯	15.6			下層(粘質土)	766
693	溝44	弥生土器	鉢	15.4	6.2	7.4	下層(粘質土)	765
694	溝45上層	弥生土器	甕	12.0	4.4	18.3	上層(洪水砂)	829
695	溝45上層	弥生土器	甕	14.0	5.0	21.9	上層(洪水砂)	831
696	溝45上層	弥生土器	甕	12.4			上層(洪水砂)、肩部に刺突文	830
697	溝45上層	弥生土器	壺		4.0		上層(洪水砂)	828



# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
698	溝45上層	弥生土器	甕	13.0	4.0	15.8	上層 (洪水砂)、胴部~底部被熱によるハジケあり	815
699	溝45上層	弥生土器	甕	11.2			上層 (洪水砂)	813
700	溝45上層	弥生土器	甕	11.2			上層 (洪水砂)	812
701	溝45上層	弥生土器	甕	13.8	5.2	(13.1)	上層 (洪水砂)	814
702	溝45上層	弥生土器	高杯	16.5	12.1	11.4	上層 (洪水砂)、円孔4方向	827
703	溝45上層	弥生土器	高杯	15.8	12.9	12.6	上層 (洪水砂)、円孔4方向	823
704	溝45上層	弥生土器	高杯	13.5	11.2	10.8	上層 (洪水砂)、円孔4方向	825
705	溝45上層	弥生土器	高杯	16.6	12.2	12.8	上層 (洪水砂)、円孔4方向	822
706	溝45上層	弥生土器	高杯	12.6	10.6	(7.7)	上層 (洪水砂)、円孔4方向	824
707	溝45上層	弥生土器	高杯	15.1	12.7	12.7	上層 (洪水砂)、円孔4方向	826
708	溝45上層	弥生土器	鉢	15.6	6.4	6.5	上層 (洪水砂)	809
709	溝45上層	弥生土器	鉢	14.0	3.6	7.7	上層 (洪水砂)	810
710	溝45上層	弥生土器	鉢	12.0	(2.8)	7.4	上層 (洪水砂)	811
711	溝45下層	弥生土器	甕	12.5			中層	817
712	溝45下層	弥生土器	甕	14.0			下層	819
713	溝45下層	弥生土器	高杯	19.3			中層	818
714	溝45下層	弥生土器	器台	21.0			上層 (洪水砂)、楕円形透し孔6、長方形透し孔6	821
715	溝45下層	弥生土器	器台	28.0	28.6	34.5	上層 (洪水砂)、口縁部端面と裾部に竹管文	808
716	溝46	弥生土器	高杯	21.8				841
717	溝46	弥生土器	鉢	20.0				840
718	溝47	弥生土器	長頸壺	11.4				835
719	溝47	弥生土器	甕	12.7				833
720	溝47	弥生土器	壺		6.4			834
721	溝47	弥生土器	甕		4.2			832
722	溝48	弥生土器	甕		3.6			657
723	溝48	弥生土器	甕		5.95			655
724	溝48	弥生土器	甕		5.8			656
725	溝48	弥生土器	鉢	19.7	(6.2)	15.8		658
726	溝51	弥生土器	壺	16.0			上層	663
727	溝51	弥生土器	甕	19.6			上層	662
728	溝51	弥生土器	甕	11.8			下層	664
729	溝51	弥生土器	高杯	17.0			上層	660
730	溝51	弥生土器	高杯		12.7		下層、円孔4方向	665
731	溝53上層	弥生土器	壺	27.2	7.65	45.1	下層	681
732	溝53上層	弥生土器	甕	15.4			上層	677
733	溝53上層	弥生土器	甕	14.8			上層	678
734	溝53下層	弥生土器	長頸壺	22.0			下層	670
735	溝53下層	弥生土器	甕	14.8			下層	666
736	溝53下層	弥生土器	甕	11.0			下層	667
737	溝53下層	弥生土器	甕	17.5			下層	669
738	溝53下層	弥生土器	甕	17.0			下層	668
739	溝53下層	弥生土器	高杯				下層	671
740	溝53下層	弥生土器	高杯				下層	672
741	溝53下層	弥生土器	高杯				下層	673
742	溝53下層	弥生土器	器台				下層、円孔推定5方向が2段	674
743	溝53下層	弥生土器	器台		15.2		下層	675
744	溝53下層	弥生土器	甕		6.6		下層	700
745	溝53下層	弥生土器	壺		8.5		下層、底部に貝殻痕	680
746	溝54	弥生土器	長頸壺	16.7			下層	693
747	溝54	弥生土器	裝飾高杯				下層	696
748	溝54	弥生土器	壺	16.0			下層	689
749	溝54	弥生土器	壺	5.8			下層、実測番号682とセット	684
750	溝54	弥生土器	甕		7.0		下層	697
751	溝54	弥生土器	壺	13.0			下層	694
752	溝54	弥生土器	甕	15.0			下層	686
753	溝54	弥生土器	甕	16.0			下層	685
754	溝54	弥生土器	甕	13.0			下層	687
755	溝54	弥生土器	甕	24.4			下層	683
756	溝54	弥生土器	甕	14.0			下層	688
757	溝54	弥生土器	甕		5.0		下層	698
758	溝54	弥生土器	壺		3.4		下層、実測番号684とセット	682
759	溝54	弥生土器	高杯				下層	691
760	溝54	弥生土器	鉢	13.2	3.7	8.35	下層	695
761	溝58	弥生土器	短頸壺	10.0				860
762	溝58	弥生土器	甕	14.9	8.4		口縁部と底部が直接接合しない	863
763	溝58	弥生土器	甕	15.0				861
764	溝58	弥生土器	壺	14.3	7.6		口縁部と底部が直接接合しない	862
765	溝61	弥生土器	製塩土器		3.2			866
766	溝62	弥生土器	甕	16.8				911
767	溝62	弥生土器	甕		6.7			912
768	溝62	弥生土器	高杯	27.6				914
769	溝62	弥生土器	台付鉢	12.6			屈曲部に円孔1	913
770	溝62	弥生土器	鉢	8.1	2.7	6.0	底部穿孔	910
771	溝62	弥生土器	製塩土器		4.5			907

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
772	溝64	弥生土器	甕	15.2				922
773	溝64	弥生土器	台付鉢		12.0			923
774	溝68	弥生土器	高杯	17.0	9.4	9.1		924
775	水田耕土	弥生土器	高杯	13.0				867
776	水田耕土	弥生土器	高杯		11.6		円孔4方向	868
777	土器溜り1	弥生土器	壺				頸部にヘラ描き沈線13条、刺突文	1385
778	土器溜り1	弥生土器	壺	14.9			頸部ヘラ描き沈線5条、ヘラ描き文	1370
779	土器溜り1	弥生土器	壺	10.5	5.1	19.3		738
780	土器溜り1	弥生土器	壺				頸部に刺突文	1384
781	土器溜り1	弥生土器	長頸壺	18.0				737
782	土器溜り1	弥生土器	細頸壺				土器溜まりE	598
783	土器溜り1	弥生土器	壺				口縁部・把手にクシ描き波状文	1374
784	土器溜り1	弥生土器	壺	15.6			壺の北	587
785	土器溜り1	弥生土器	甕	13.0			土器溜まりE	588
786	土器溜り1	弥生土器	甕	15.0				1591
787	土器溜り1	弥生土器	甕	16.3				1590
788	土器溜り1	弥生土器	高杯	27.1			上段・中段に円孔3、下段に円孔推定9	739
789	土器溜り1	弥生土器	高杯		12.6		1377と同一の可能性あり、脚部にヘラ描き沈線4条・3条・4条	1378
790	土器溜り1	弥生土器	台付鉢		17.9	12.0	脚部にヘラ描き沈線7条、円孔2段推定5方向	1373
791	土器溜り1	弥生土器	鉢	14.5	6.5	13.8	屈曲部に円孔1残	1375
792	土器溜り1	弥生土器	器台	20.0			長方形透し3残（推定4方向）、円形透し2対2残（推定4方向）	1380
793	土器溜り1	弥生土器	器台		(26.2)		土器溜まりF、長方形透し孔4方向が3段	597
794	竪穴住居14	土師器	甕	19.2			ひずみ大きい	1019
795	竪穴住居14	土師器	甕	18.2			床面②	1018
796	竪穴住居14	土師器	壺				床面③	1022
797	竪穴住居14	土師器	鉢	13.8			埋土上層	1017
798	竪穴住居14	土師器	製塩土器				埋土上層	1024
799	竪穴住居14	土師器	製塩土器				埋土上層	1023
800	竪穴住居14	土師器	甕				埋土上層	1020
801	竪穴住居14	須恵器	杯蓋				埋土上層、ロクロの方向：反時計回り	1027
802	竪穴住居14	土師器	鉢					1021
803	竪穴住居15	土師器	甕	15.0			埋土	1041
804	竪穴住居15	土師器	甕	14.8			中央ビット	1042
805	竪穴住居16	土師器	壺					1039
806	竪穴住居16	土師器	椀	14.2		5.9		1040
807	竪穴住居18	土師器	甕?		19.0		床面土器No1	976
808	竪穴住居18	須恵器	杯蓋	15.0			ロクロの方向：時計回り	975
809	竪穴住居18	須恵器	はそう				床面土器No2、円孔1	974
810	竪穴住居19	土師器	甕	14.0				1037
811	竪穴住居19	土師器	甕	17.6			カマド内	1036
812	竪穴住居19	土師器	甕	17.6	8.6	27.2	カマド内、ひずみ大きい	1038
813	竪穴住居20	土師器	甕	13.6			外面タタキ調整	994
814	竪穴住居20	土師器	甕	19.1			床面土器	1010
815	竪穴住居20	土師器	手づくね土器	7.6	3.6	4.8		993
816	竪穴住居20	土師器	甕					992
817	竪穴住居20	土師器	甕	25.6				995
818	竪穴住居20	須恵器	杯身	10.1		12.2	ロクロの方向：時計回り	990
819	竪穴住居20	須恵器	杯身	10.0			ロクロの方向：時計回り	989
820	竪穴住居20	須恵器	高杯		8.5		長方形透し推定3方向	991
821	竪穴住居20	須恵器	甕?				縄文	988②
822	竪穴住居20	須恵器	甕?				縄文	988①
823	竪穴住居20	須恵器	甕					1011
824	竪穴住居21	土師器	高杯	14.6				979
825	竪穴住居21	須恵器	杯蓋					977
826	竪穴住居21	須恵器	高杯					978
827	竪穴住居22	土師器	高杯	16.0				1015
828	竪穴住居22	土師器	高杯	14.4				1016
829	竪穴住居22	土師器	壺	9.6		12.9	床面	1013
830	竪穴住居22	土師器	はそう	8.1		9.5	胴部に焼成前の円孔1	1014
831	竪穴住居23	須恵器	杯蓋					985
832	竪穴住居23	須恵器	杯身					984
833	竪穴住居23	須恵器	壺				床面土器、ロクロの方向：時計回り	987
834	竪穴住居23	土師器	製塩土器					986
835	竪穴住居24	須恵器	器台	30.0	22.0	27.5	三角形透し5方向2段	1012
836	竪穴住居24	須恵器	杯蓋	11.0			炭・焼土層中層、ロクロの方向：反時計回り	1009
837	竪穴住居24	須恵器	杯蓋	12.4		4.6	ロクロの方向：反時計回り	1004
838	竪穴住居24	須恵器	壺?					1008
839	竪穴住居24	土師器	壺					999
840	竪穴住居24	土師器	製塩土器	3.0				1007
841	竪穴住居24	土師器	甕					996
842	竪穴住居24	土師器	甕					1026
843	竪穴住居24	土師器	甕	14.2			焼土層土器No6	1002

# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
844	竪穴住居24	土師器	甕	12.4				997
845	竪穴住居24	土師器	甕	14.0				1006
846	竪穴住居24	土師器	甕	13.8				1025
847	竪穴住居24	土師器	壺	11.5			床面・土層土器No 5	1003
848	竪穴住居24	土師器	椀	12.0		4.9		1000
849	竪穴住居24	土師器	椀	13.0		5.0	底部打ち欠き	1001
850	竪穴住居26	須恵器	杯蓋	15.6			床面、ロクロの方向：時計回り	1031
851	竪穴住居26	須恵器	杯蓋	12.4			床面	1030
852	竪穴住居26	須恵器	杯蓋					1032
853	竪穴住居26	須恵器	杯身					1034
854	竪穴住居26	須恵器	杯身	14.0			ロクロの方向：反時計回り	1033
855	竪穴住居25	須恵器	杯蓋	12.0				1028
856	竪穴住居25	須恵器	杯身					1029
857	竪穴住居28	土師器	高杯	12.6			土器 1	1051
858	竪穴住居28	土師器	壺	18.9			土器 2	1052
859	井戸14	土師器	壺	15.2		31.5	胴部打ち欠き	164
860	井戸14	土師器	壺	14.8	7.4	37.5		170
861	井戸14	土師器	壺	16.2	6.7	33.9		153
862	井戸14	土師器	壺	15.9	5.1	32.9		167
863	井戸14	土師器	甕	19.5			胴部に刺突文 3	168
864	井戸14	土師器	甕	15.0	4.0	24.7		169
865	井戸14	土師器	甕	13.7		20.1		165
866	井戸14	土師器	甕	12.4		17.7		166
867	井戸14	土師器	鉢	10.1		6.2		155
868	井戸14	土師器	壺	8.0		11.9		161
869	井戸14	土師器	甕	9.2		11.85		154
870	井戸14	土師器	鉢	10.9		5.5	底部に木葉痕	160
871	井戸14	土師器	鉢	13.1		7.1		156
872	井戸15	土師器	甕	12.5			上層②	963
873	井戸15	土師器	甕	19.4			上層、胴部にヘラ記号	966
874	井戸15	土師器	甕	21.0			上層、胴部にヘラ記号	965
875	井戸15	土師器	甕	19.6			上層	964
876	井戸15	土師器	甕		11.8		上層、底部に円孔 4	972
877	井戸15	土師器	甕	25.0			3層・炭焼土、胴部に打ち欠き	973
878	井戸15	須恵器	杯蓋	14.0			ロクロの方向：反時計回り、頂部にヘラ記号	967
879	井戸15	須恵器	杯蓋	13.7			下層粘土	968
880	井戸15	須恵器	杯身	11.7			上層、底部に敲打痕	971
881	井戸15	須恵器	杯身	13.0			ロクロの方向：反時計回り	970
882	井戸15	須恵器	はそう				中層 3層以下	969
883	井戸16	土師器	壺	22.3				1048
884	井戸16	土師器	壺	18.4				1049
885	井戸16	土師器	甕		4.2		肩部に刺突文	1050
886	井戸17	土師器	甕	13.7		21.2		891
887	井戸18	土師器	甕	15.6			最下層	884
888	井戸18	土師器	甕					886
889	井戸18	土師器	鉢	14.6				888
890	井戸18	土師器	高杯					890
891	井戸18	土師器	鉢	10.5	2.4	6.6		889
892	井戸18	土師器	鉢	15.0			最下層	887
893	土贖66	須恵器	杯蓋	11.0		4.8	ロクロの方向：時計回り	981
894	土贖66	須恵器	杯身					982
895	土贖66	土師器	手づくね土器	5.0				983
896	土贖71	土師器	高杯					1056
897	土贖71	土師器	製塩土器					1055
898	土贖71	須恵器	高杯		7.8			1053
899	溝77	土師器	鉢	12.0		7.5		839
900	溝78	須恵器	蓋	7.3		3.5	ロクロの方向：反時計回り	837
901	溝78	須恵器	杯身	11.7		3.4		838
902	溝78	須恵器	杯身	12.0		3.5	ロクロの方向：時計回り	836
903	溝80	須恵器	杯蓋	12.7		5.2	下層 (東肩)、ロクロの方向：時計回り、内面に当て具痕	1095
904	溝80	須恵器	杯蓋	15.4			上層、ロクロの方向：時計回り、内面に当て具痕	1089
905	溝80	須恵器	杯蓋	14.6		4.4	上層 (東肩)、ロクロの方向：反時計回り、内面に当て具痕	1068
906	溝80	須恵器	杯蓋	15.0		4.4	下層 (東肩)、ロクロの方向：時計回り	1111
907	溝80	須恵器	杯蓋	15.2		3.5	下層 (東肩)、ロクロの方向：反時計回り、内面に当て具痕	1113
908	溝80	須恵器	杯蓋	12.4		4.6	上層 (下層)、ロクロの方向：反時計回り	1069
909	溝80	須恵器	杯蓋	13.7		3.6	上層 (下層)、ロクロの方向：時計回り	1072
910	溝80	須恵器	杯蓋	14.5		4.4	下層、ロクロの方向：時計回り	1110
911	溝80	須恵器	杯蓋	15.8		4.4	上層 (下層)、ロクロの方向：時計回り	1071
912	溝80	須恵器	杯蓋	14.8		5.2	上層、ロクロの方向：時計回り	1096
913	溝80	須恵器	杯蓋	14.2		4.4	上層 (下層)、ロクロの方向：時計回り	1070
914	溝80	須恵器	杯蓋	13.5		4.5	下層 (東肩)、ロクロの方向：時計回り	1067
915	溝80	須恵器	杯蓋	13.4		3.5	上層、ロクロの方向：時計回り	1087
916	溝80	須恵器	杯蓋	12.0		4.3	上層	1086
917	溝80	須恵器	杯身	11.0		5.0	下層 (東肩)、内面に当て具痕、底部にヘラ記号	1074

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
918	溝80	須恵器	杯身	11.4		5.3	下層、ロクロの方向：反時計回り	1114
919	溝80	須恵器	杯身	12.3		5.9	下層、ロクロの方向：時計回り	1115
920	溝80	須恵器	杯身	10.4		5.1	上層（東肩）、ロクロの方向：時計回り	1108
921	溝80	須恵器	杯身	10.2		4.4	下層（東肩）・最下層ロクロの方向：時計回り	1107
922	溝80	須恵器	杯身	13.3		4.9	上層、ロクロの方向：時計回り	1076
923	溝80	須恵器	杯身	13.0		4.7	下層（東肩）、ロクロの方向：時計回り	1105
924	溝80	須恵器	杯身	11.5		4.4	下層（東肩）、ロクロの方向：時計回り	1117
925	溝80	須恵器	杯身	11.5			上層、ロクロの方向：時計回り	1075
926	溝80	須恵器	杯身	13.6		4.9	下層、ロクロの方向：時計回り、内面に当て具痕	1094
927	溝80	須恵器	杯身	12.8		4.4	下層（東肩）、ロクロの方向：時計回り、内面に当て具痕	1106
928	溝80	須恵器	杯身	11.6		5.0	下層、ロクロの方向：時計回り	1118
929	溝80	須恵器	高坏蓋	12.4		5.3	下層	1090
930	溝80	須恵器	高坏蓋	13.0		4.4	最上層、ロクロの方向：反時計回り	1093
931	溝80	須恵器	杯蓋	12.2		3.8	上層	1073
932	溝80	須恵器	杯蓋	10.6		3.5	上層（下層）、ロクロの方向：反時計回り	1064
933	溝80	須恵器	杯蓋	10.5		3.4	上層（下層）、ロクロの方向：時計回り	1066
934	溝80	須恵器	杯蓋	9.9		3.6	上層（下層）、ロクロの方向：時計回り	1065
935	溝80	須恵器	高杯	10.5	8.6	10.2	最上層・下層、ロクロの方向：時計回り、長方形透し3方向	1091
936	溝80	須恵器	高杯	10.6	9.0	9.7	下層（東肩）、ロクロの方向：反時計回り、長方形透し3方向	1092
937	溝80	須恵器	高杯	10.0			下層	1116
938	溝80	須恵器	高杯	13.2			上層、ロクロの方向：反時計回り	1082
939	溝80	須恵器	高杯	11.4	8.7	7.1	上層、ロクロの方向：反時計回り	1063
940	溝80	須恵器	高杯	10.6			上層、ロクロの方向：時計回り	1077
941	溝80	須恵器	高杯		10.0		上層（西肩）	1101
942	溝80	須恵器	高杯		9.8		上層、長方形透し1残	1102
943	溝80	須恵器	無頸壺	6.0	6.2	9.1	上層	1079
944	溝80	須恵器	壺		9.9		上層、ロクロの方向：反時計回り	1062
945	溝80	須恵器	甕				上層	1103
946	溝80	須恵器	甕	18.0			上層	1099
947	溝80	須恵器	甕	13.4			上層、胴部にカキ目	1098
948	溝80	須恵器	甕	17.8			下層	1097
949	溝80	須恵器	甕	17.95			上層	1573
950	溝80	須恵器	甕				上層	1574
951	溝80	須恵器	甌				タタキ残、底部円孔3残存	1181
952	溝80	土師器	甕	13.4			下層	1164
953	溝80	土師器	甕	17.4			下層	1166
954	溝80	土師器	甕	18.4		31.5	下層	1147
955	溝80	土師器	甕	15.6			下層、器表面に二次焼成によるハジケあり	1146
956	溝80	土師器	甕	27.0		31.4	下層	1165
957	溝80	土師器	甕	21.3		28.8	上層	1141
958	溝80	土師器	甕	19.8			下層（東肩）	1180
959	溝80	土師器	甕	16.8			下層（南肩）	1155
960	溝80	土師器	甕	17.0			下層	1178
961	溝80	土師器	甕				上層（東肩）	1131
962	溝80	土師器	甕	17.2			上層	1123
963	溝80	土師器	甕	17.0			上層（東肩）	1143
964	溝80	土師器	甕	25.4			上層	1122
965	溝80	土師器	甕	28.0			下層	1145
966	溝80	土師器	甕	10.2			下層	1173
967	溝80	土師器	甕	12.3			下層	1177
968	溝80	土師器	甕	12.7		15.2	上層（東肩）	1144
969	溝80	土師器	鉢	9.9		9.8	上層	1120
970	溝80	土師器	高杯	14.0			下層（東肩）	1150
971	溝80	土師器	高杯	14.3			最下層	1151
972	溝80	土師器	高杯	14.0	9.6		下層（東肩）	1159
973	溝80	土師器	鉢	10.4		5.3	下層	1152
974	溝80	土師器	鉢	10.3		6.7	下層	1154
975	溝80	土師器	碗	11.5		5.5	下層（東肩）	1158
976	溝80	土師器	鉢	13.0		7.0	下層、内外面赤色顔料塗布	1153
977	溝80	土師器	鉢	13.3		7.8	下層	1119
978	溝80	土師器	高杯	19.7			下層	1176
979	溝80	土師器	杯蓋	13.7		5.5	上層（東肩）、須恵器模倣	1112
980	溝80	土師器	杯	18.8	12.0	5.5	上層、内面に暗文	1121
981	溝80	土師器	甌	22.8			上層	1142
982	溝80	軟質土器	把手付鉢	28.0			下層・上層（東肩）、胴部に平行タタキ、把手の接合部分にカキメあり	1163
983	溝80	土師器	甌	24.8		27.5	下層（東肩）	1148
984	溝81	須恵器	杯蓋				ロクロの方向：時計回り	1334
985	溝81	須恵器	杯身	13.6			ロクロの方向：反時計回り	1335
986	溝81	須恵器	高杯			4.8		1336
987	溝81	須恵器	甕	19.6				892
988	溝81	土師器	甌			8.3		1340

# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
989	溝82	須恵器	杯蓋	13.0			ロクロの方向：反時計回り	1342
990	溝82	須恵器	杯身	11.0		3.1		1343
991	溝82	須恵器	高杯			3.6	長方形透し2残(推定3方向)	1341
992	溝83	須恵器	杯蓋	14.2		4.05	ロクロの方向：反時計回り	1331
993	溝83	須恵器	杯蓋	13.2		4.0	ロクロの方向：時計回り	1330
994	溝83	須恵器	杯身	13.5		4.25	ロクロの方向：時計回り	1328
995	溝83	須恵器	杯身	14.4		4.3	ロクロの方向：時計回り	1329
996	溝83	須恵器	甕			3.6		1333
997	溝83	須恵器	甕	17.4		5.0		1332
998	溝84	土師器	壺	18.6				1058
999	溝84	土師器	壺	9.9				1043
1000	溝84	土師器	高杯	12.6				1057
1001	溝89	須恵器	壺	15.6			口縁部にクシ描き波状文	1059
1002	溝91	土師器	甕	15.0				1044
1003	溝91	土師器	甕	13.0				1046
1004	溝91	土師器	高杯					1047
1005	溝93	弥生土器	甕					850
1006	溝98	須恵器	杯蓋	13.0				1061
1007	溝98	須恵器	杯蓋	11.0				1060
1008	溝104	須恵器	杯身	12.6				904
1009	土器溜り2	土師器	壺	20.0		41.4	口縁部内外面に波状ミガキ、胴部タタキ残、胴部一部に丹塗り残	1184
1010	土器溜り2	弥生土器	壺	21.8	7.9	39.8		778
1011	土器溜り2	土師器	壺	19.0		36.4		1182
1012	土器溜り2	土師器	壺	19.6				1363
1013	土器溜り2	土師器	壺					1360
1014	土器溜り2	土師器	壺					1362
1015	土器溜り2	土師器	壺	17.45				1361
1016	土器溜り2	土師器	甕	15.0	(4.0)	(25.3)		1629
1017	土器溜り2	土師器	甕	14.0		(23.7)		1630
1018	土器溜り2	土師器	甕	15.3			口縁部にクシ描き沈線8~9条、胴部上半に刺突3	1359
1019	土器溜り2	土師器	甕	15.3				1636
1020	土器溜り2	土師器	甕	15.0		19.5		1627
1021	土器溜り2	土師器	甕	15.5		(19.5)		1633
1022	土器溜り2	土師器	甕	12.0	(4.4)	18.0		1628
1023	土器溜り2	土師器	甕	13.4		19.8		1637
1024	土器溜り2	土師器	甕	12.3			口縁部にクシ描き沈線8~9条	1354
1025	土器溜り2	弥生土器	高杯	21.2	16.55	(15.1)	脚部凹孔4方向	1381
1026	土器溜り2	土師器	高杯	(19.7)	14.8	(14.0)	脚部に凹孔4方向、内外面に赤色顔料塗布	1638
1027	土器溜り2	土師器	高杯	19.2		(12.0)	脚部に凹孔4方向	1632
1028	土器溜り2	土師器	高杯	11.0	17.0	10.3	凹孔3残(推定6方向)	1358
1029	土器溜り2	弥生土器	高杯	11.1	17.0	9.25	脚部凹孔4方向	1382
1030	土器溜り2	土師器	高杯	11.7			凹孔推定4方向	1357
1031	土器溜り2	土師器	高杯		16.25		脚部に凹孔推定4方向	1708
1032	土器溜り2	土師器	高杯				脚部に凹孔4方向	1634
1033	土器溜り2	土師器	高杯				脚部に凹孔4方向	1635
1034	土器溜り2	土師質	皿	7.0		1.5		1656
1035	土器溜り2	弥生土器	鉢	11.9		5.9		774
1036	土器溜り2	土師器	鉢	11.3	8.1	7.0		1631
1037	土器溜り2	土師器	鉢	12.10	3.0	9.0		1355
1038	土器溜り2	弥生土器	甕		6.0		底部に木葉痕	1383
1039	土器溜り2	土師器	鉢	34.5	4.3	18.9		1183
1040	建物6	備前焼	甕					1563
1041	建物6	備前焼	播鉢					1562
1042	建物6	土師質	椀		4.4		早島式土器	1571
1043	建物6	土師質	皿	7.4		1.8		1541
1044	建物6	土師質	皿	7.8		13.5		1540
1045	建物6	土師質	皿	7.8				1570
1046	建物6	土師質	皿	7.8				1569
1047	建物6	土師質	皿	7.8				1568
1048	建物7	備前焼	甕	30.0		7.7	櫛描き波状文(7条1単位)	1535
1049	建物7	瓦質土器	火鉢	12.7		6.0	三つ巴文あり	1534
1050	建物7	備前焼	壺				外面にヘラ描き文	1566
1051	建物8	土師質	椀		4.5	1.7		1546
1052	井戸19	土師質	椀	13.8		(4.8)	上層、早島式土器	1756
1053	井戸19	瓦器	椀		5.0	(1.2)		1758
1054	井戸19	土師質	椀			1.7	早島式土器	1740
1055	井戸19	土師質	皿	12.8	10.2	2.5	上層	1752
1056	井戸19	土師質	皿	7.8	5.8	1.1	上層	1751
1057	井戸19	瓦器	皿	9.7			下層	1761
1058	井戸19	瓦器?	皿	(8.4)			中層	1760
1059	井戸19	土師質	皿	8.6	6.3	1.5	中層下手、底部ヘラ切り、板目	1902
1060	井戸19	土師質	皿	8.2	6.5	0.9	中層下手、底部ヘラ切り、板目	1901
1061	井戸19	青磁	碗		5.0	2.5	中層下半	1690

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
1062	井戸19	土師質	鍋	32.0			上層	1747
1063	井戸19	瓦質土器	鍋				上層、口縁部外面に耳2、円孔2	1749
1064	井戸19	土師質	鍋	27.8			中層土器だまり、口縁部外面に耳2・穿孔2	1906
1065	井戸19	瓦質土器	鍋	19.8		9.9	上層、口縁部外面に耳1残る、穿孔1	1914
1066	井戸19	瓦質土器	鍋	(23.2)		4.8	下層	1737
1067	井戸19	瓦質土器	鍋				胴部外面に突帯	1750
1068	井戸19	瓦質土器	鍋	17.4		(6.2)	上層	1753
1069	井戸19	備前焼	播鉢	21.2	11.9	9.2	中層土器だまり	1908
1070	井戸19	備前焼	播鉢	(22.1)	(12.4)	8.8	下層、卸目8条1単位	1736
1071	井戸19	備前焼	播鉢	(28.6)			上層	1759
1072	井戸20	土師質	碗				早島式土器	1729
1073	井戸20	土師質	碗				下半粘土	1730
1074	井戸20	瓦質土器	三足鍋				下半粘土	1728
1075	井戸20	瓦質土器	鍋				上半、胴部外面に突帯	1727
1076	井戸20	瓦質土器	鍋	24.8			上半、口縁部外面に耳2、円孔2	1725
1077	井戸20	瓦質土器	鍋				上半、口縁部外面に耳2、円孔2	1726
1078	井戸20	備前焼	壺				上半、口縁部に自然付着	1721
1079	井戸20	備前焼	播鉢				上半、卸目10条1単位	1723
1080	井戸20	備前焼	播鉢					1722
1081	井戸20	備前焼	播鉢				卸目12条1単位	1724
1082	井戸20	瓦	平瓦	幅:10.2	長:11.4		粘土、凹凸面ナデ	1720
1083	井戸21	土師質	鍋	23.8		(5.6)	下半粘土、口縁部外面に耳2、穿孔2	1714
1084	井戸21	備前焼	壺					1581
1085	井戸21	備前焼	播鉢				下半粘土	1580
1086	井戸22	土師質	碗	9.8		3.85	砂利層、早島式土器	1490
1087	井戸22	土師質	皿	6.7	4.6	9.5	砂利層、底部ヘラおこし	1492
1088	井戸22	土師質	皿	3.3	5.6	1.05	砂利層、底部ヘラ切り	1491
1089	井戸22	土師質	碗	10.1		2.3	裏込埋土	1500
1090	井戸22	土師質	碗				裏込埋土、早島式土器	1495
1091	井戸22	土師質	皿			1.5	裏込埋土、底部ヘラ切り	1496
1092	井戸22	土師質	碗			3.6	裏込埋土	1499
1093	井戸22	土師質	碗	7.3	5.4	1.1	裏込埋土、早島式土器	1494
1094	井戸22	土師質	皿	3.4	2.9	1.05	裏込埋土、底部ヘラ切り	1493
1095	井戸23	土師質	碗	5.2				1504
1096	井戸23	土師質	碗	9.4		2.9	最下層、口縁部内面煤付着	1509
1097	井戸23	土師質	碗	7.4		3.0	最下層	1510
1098	井戸23	土師質	碗	4.2		2.5		1503
1099	井戸23	土師質	碗	9.1			内面煤付着	1507
1100	井戸23	土師質	碗	9.1		2.5		1508
1101	井戸23	土師質	皿	4.5				1502
1102	井戸23	土師質	皿	8.0				1506
1103	井戸23	土師質	皿	5.4				1505
1104	井戸23	白磁	碗	15.4		4.15		1511
1105	井戸23	青磁	碗	11.3		3.5	最下層	1512
1106	井戸23	青磁	碗				最下層、外面に連弁文	1513
1107	井戸23	陶磁器	碗	6.9		5.6	底面付近、唐津?	1514
1108	井戸23	青磁	碗			2.0		1501
1109	井戸23	土師質	鍋				口縁部外面に突帯巡る、外面煤付着	1472
1110	井戸23	土師質	鍋				口縁部外面に突帯巡る、外面煤付着	1470
1111	井戸23	土師質	鍋				口縁部外面に突帯巡る、外面煤付着	1471
1112	井戸23	備前焼	壺				自然釉付着、底部外面にハケメあり	1474
1113	井戸23	備前焼	播鉢				底面、卸目8条1単位	1460
1114	井戸23	備前焼	播鉢	34.6			卸目8条1単位	1473
1115	井戸24	青磁	碗			2.55	上層	1459
1116	井戸24	土師質	鍋				上層、口縁部外面に耳あり(1残存)	1456
1117	井戸24	土師質	鍋				上層、口縁部内面に耳あり(1残存)	1457
1118	井戸24	土師質	鍋			6.65	上層、胴部に突帯が巡る、底部煤付着	1455
1119	井戸24	土師質	鍋			7.35	上層、胴部に突帯が巡る	1454
1120	井戸24	備前焼	壺				上層、肩部に波状文(8条1単位)2帯	1453
1121	井戸24	備前焼	壺		17.0	13.4	上層	1444
1122	井戸24	備前焼	壺	12.0		5.1	上層	1451
1123	井戸24	備前焼	壺	14.0		8.75	上層、肩部に沈線2条	1452
1124	井戸24	備前焼	壺		20.0	5.4	上層	1450
1125	井戸24	備前焼	壺				上層、内面自然釉付着	1443
1126	井戸24	備前焼	壺				上層	1447
1127	井戸24	備前焼	壺				上層	1448
1128	井戸24	備前焼	壺				上層	1449
1129	井戸24	備前焼	壺				上層、内面自然釉付着、底部付近に沈線2条	1445
1130	井戸24	備前焼	播鉢	15.8	17.0	12.5	上層、卸目8条1単位	1430
1131	井戸24	備前焼	播鉢	15.5	15.0	12.05	上層、卸目7条1単位	1432
1132	井戸24	備前焼	播鉢	30.0	16.0	12.2	上層、卸目8条1単位	1433
1133	井戸24	備前焼	播鉢	16.2	17.0	13.0	上層、卸目6条1単位	1434
1134	井戸24	備前焼	播鉢	17.7	7.5	12.2	上層、卸目10条1単位	1431
1135	井戸24	備前焼	播鉢				上層、卸目8条1単位	1435

# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
1136	井戸24	備前焼	播鉢		15.0		上層、卸目6条1単位	1428
1137	井戸24	備前焼	播鉢		11.0		上層、卸目8条1単位	1429
1138	井戸24	備前焼	播鉢		7.0	4.1	上層、卸目8条1単位	1437
1139	井戸24	備前焼	播鉢		7.5	5.0	上層、卸目8条1単位	1439
1140	井戸24	瓦	平瓦	幅：21.0	厚：1.8		上層、凸面Xタタキ、凹面布目残る、燻瓦	1458
1141	土壌74	土師質	椀	14.0			早鳥式土器	1683
1142	土壌74	土師質	椀		5.4		早鳥式土器	1680
1143	土壌74	土師質	皿	7.8	6.6	1.0		1681
1144	土壌75	土師質	椀				早鳥式土器	1703
1145	土壌75	土師質	皿					1702
1146	土壌76	土師質	鍋	23.0		(3.5)		1696
1147	土壌76	土師質	椀		5.0	(1.1)	早鳥式土器	1697
1148	土壌78	土師質	椀		6.6		早鳥式土器	1800
1149	土壌78	土師質	椀			(1.55)	早鳥式土器	1764
1150	土壌78	土師質	皿	9.0	6.6	1.3	底部板目痕	1799
1151	土壌78	瓦器	椀					1801
1152	土壌78	瓦器	皿	9.0		1.7		1802
1153	土壌78	白磁	碗			(2.1)		1765
1154	土壌80	土師質	椀				早鳥式土器	1700
1155	土壌80	土師質	皿	6.9	5.6			1699
1156	土壌81	土師質	椀		4.8		早鳥式土器	1684
1157	土壌81	瓦器	椀			8.5		1691
1158	土壌82	土師質	椀		1.55		早鳥式土器	1641
1159	土壌82	土師質	皿	9.3		1.25		1643
1160	土壌82	土師質	皿	8.8		1.2		1642
1161	土壌82	瓦器	椀	14.0		4.0		1639
1162	土壌82	瓦器	皿	7.8		1.3		1640
1163	土壌82	青磁	皿		4.2	2.5		1616
1164	土壌83	土師質	椀		6.0		早鳥式土器	1839
1165	土壌83	土師質	皿	8.2	6.4		底部ヘラ切り	1838
1166	土壌83	瓦器	椀					1840
1167	土壌86	土師質	皿	13.5	9.4	2.85	底部ヘラ切り、板目	1909
1168	土壌86	瓦器	皿	8.0				1685
1169	土壌89・90	土師質	皿	8.0	5.8	(1.3)		1772
1170	土壌89・90	土師質	皿	8.9	7.0	(1.5)		1773
1171	土壌89・90	瓦器	椀		5.2	(1.5)		1771
1172	土壌91	土師質	椀				早鳥式土器	1701
1173	土壌91	瓦器	椀		5.6			1675
1174	土壌92	土師質	椀			1.05		1689
1175	土壌92	土師質	皿	(8.4)		1.3		1688
1176	土壌93	土師質	椀				早鳥式土器	1796
1177	土壌93	土師質	椀		4.7		早鳥式土器	1769
1178	土壌93	土師質	皿	7.0	5.4	0.9		1767
1179	土壌93	土師質	皿	8.6	5.2	1.5	底部ヘラおこし	1797
1180	土壌95	土師質	椀	(13.0)		(2.9)	早鳥式土器	1649
1181	土壌95	土師質	椀	8.8		2.9	早鳥式土器	1904
1182	土壌95	土師質	皿	7.0	5.4	1.1		1651
1183	土壌95	土師質	皿	7.4	5.4	1.3	底部ヘラ切り	1903
1184	土壌95	土師質	皿	7.9	6.2	1.6		1905
1185	土壌95	土師質	鍋	(24.3)		(3.2)		1648
1186	土壌95	土師質	鍋					1647
1187	土壌95	白磁	碗	(18.0)		2.0		1644
1188	土壌95	白磁	碗		7.0	(1.8)		1646
1189	土壌95	青磁	碗	(15.8)		(3.1)		1645
1190	土壌98	土師質	椀	14.0		(2.8)	早鳥式土器	1788
1191	土壌98	瓦器	椀	(13.1)		(2.4)		1789
1192	土壌98	土師質	椀		6.4	(1.4)	早鳥式土器	1791
1193	土壌98	土師質	皿	8.0	6.5	1.4		1790
1194	土壌98	白磁	碗			(2.1)		1787
1195	土壌98	青磁	碗		5.5	(1.2)		1786
1196	土壌99	瓦器	椀		4.9	(2.4)		1792
1197	土壌99	瓦器	椀		4.4	(0.8)		1793
1198	土壌101	土師質	鍋					1779
1199	土壌101	土師質	椀		6.0		早鳥式土器	1780
1200	土壌101	土師質	皿	(7.0)				1778
1201	土壌101	瓦器	椀		4.8			1775
1202	土壌101	瓦器	皿	(9.2)				1776
1203	土壌101	土師質	皿					1777
1204	土壌104	土師質	椀		7.2	(1.4)	早鳥式土器	1830
1205	土壌104	土師質	皿	7.8	6.1	(1.6)		1829
1206	土壌104	土師質	皿	7.0		1.3		1828
1207	土壌105	土師質	椀		6.9		早鳥式土器	1816
1208	土壌105	土師質	皿				底部板目痕	1817
1209	土壌106	土師器	椀		5.0			1035

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
1210	土壙107	土師質	椀	(10.4)			早鳥式土器	1814
1211	土壙107	土師質	椀		7.0		早鳥式土器	1815
1212	土壙108	瓦器	椀					1679
1213	土壙108	土師質	皿	7.9	5.6	1.1	底部糸切り	1698
1214	土壙109	土師質	椀	11.0		2.35	早鳥式土器	1695
1215	土壙109	土師質	椀			0.75	早鳥式土器	1693
1216	土壙109	土師質	皿	6.8		1.05		1694
1217	土壙111	土師質	椀			(1.2)	早鳥式土器	1824
1218	土壙111	土師質	皿			(2.5)		1823
1219	土壙111	瓦器	椀			(1.3)		1825
1220	土壙112	土師質	椀				早鳥式土器	1734
1221	土壙116	土師質	椀	12.0		(3.8)	早鳥式土器	1719
1222	土壙116	土師質	皿	7.8	6.6	1.3		1715
1223	土壙116	土師質	鍋	(30.1)		(3.5)		1716
1224	土壙116	土師質	鍋			(3.8)		1717
1225	土壙117	土師質	鍋	39.9			内外面煤付着	1602
1226	土壙119	土師質	椀	11.0		(3.5)	早鳥式土器	1711
1227	土壙119	土師質	椀	4.8		(1.0)	早鳥式土器	1713
1228	土壙119	土師質	皿	6.0	5.3	1.3		1712
1229	土壙119	備前焼	甕	21.6		(5.8)		1710
1230	土壙121	土師質	椀	(9.1)		2.8		1704
1231	土壙121	土師質	椀	(5.2)		1.1	早鳥式土器	1706
1232	土壙121	土師質	皿	(5.8)		1.1		1705
1233	土壙125	土師質	椀	10.0	4.3	4.2		1819
1234	土壙125	土師質	椀		6.0	(1.3)	早鳥式土器	1821
1235	土壙125	土師質	皿	6.6	5.0	1.0		1822
1236	土壙126	土師質	椀	11.8		(2.5)	早鳥式土器	1768
1237	土壙126	土師器	製塩土器			4.6		1344
1238	土壙126	土師質	鍋	(35.2)		(5.2)		1766
1239	土壙129	土師質	椀	10.6			早鳥式土器	1805
1240	土壙129	土師質	椀				早鳥式土器	1807
1241	土壙129	土師質	皿	7.8	7.0	1.4	底部ヘラ切り	1806
1242	土壙129	瓦器	椀					1803
1243	土壙134	須恵質	壺	2.6				304
1244	土壙135	土師質	皿	6.0	4.8	1.4	底部ヘラ切り	1832
1245	土壙149	須恵質	壺		12.2	5.7		1544
1246	土壙149	備前焼	插鉢			4.1	早鳥式土器	1543
1247	土壙156	土師質	椀	10.4			早鳥式土器	1559
1248	土壙157	土師質	皿	6.8		1.85		1542
1249	土壙158	土師質	椀	11.8				1560
1250	土壙165	須恵器	杯蓋	10.0				1324
1251	溝111	土師質	椀			1.2	早鳥式土器	1784
1252	溝111	土師質	鍋			(5.4)		1785
1253	溝111	土師質	鍋					1783
1254	溝114	瓦質土器	鍋					1520
1255	溝114	土師質	鍋	24.6			口縁部外面に突帯巡る	1487
1256	溝114	瓦質土器	鍋	27.5		12.5	口縁部外面に耳2	1519
1257	溝115	土師質	椀	9.5	3.6	2.75		1528
1258	溝115	土師質	椀	9.4		3.3		1550
1259	溝115	土師質	椀	9.1		2.9		1549
1260	溝115	土師質	椀				早鳥式土器	1481
1261	溝115	土師質	皿	12.0		2.3		1551
1262	溝115	土師質	皿	11.3		2.5		1552
1263	溝115	土師質	皿	8.8		2.2		1547
1264	溝115	土師質	皿	8.6		1.9		1548
1265	溝115	青磁	皿					1482
1266	溝115	青磁	椀			2.5	上層	1486
1267	溝115	土師質	鍋				内外面煤付着	1478
1268	溝115	土師質	鍋				外面煤付着	1479
1269	溝115	土師質	鍋	13.6		7.0	外面煤付着	1524
1270	溝115	土師質	鍋	25.4			口縁部外面に突帯巡る	1477
1271	溝115	土師質	鍋	23.4			上層、口縁部外面に突帯巡る、外面に煤付着	1515
1272	溝115	土師質	三足鍋	27.0			石組付近、外面煤付着	1533
1273	溝115	土師質	三足鍋	34.5		19.5	内外面に煤付着	1572
1274	溝115	瓦質土器	壺	12.0			上層、把手1残る	1517
1275	溝115	備前焼	甕				外面自然釉付着	1531
1276	溝115	備前焼	壺		13.2	9.8	胴部外面にヘラ記号	1527
1277	溝115	備前焼	壺		5.0		底部工具痕	1480
1278	溝115	須恵質土器	控鉢	(12.0)			重ね焼き痕あり	1483
1279	溝115	備前焼	控鉢	31.1		10.6	鉦目9条1単位	1526
1280	溝115	備前焼	控鉢	28.6			鉦目10条1単位、重ね焼き痕あり	1476
1281	溝115	瓦質土器	器種不明	8.8			上層、雷文あり	1485
1282	溝115	瓦質土器	火鉢	19.1			上層、内面と口縁部端面に煤付着	1518
1283	溝115	瓦質土器	火鉢				花菱形文あり	1484



# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
1284	溝116	瓦質土器	鍋	31.2				1489
1285	溝117	白磁	碗			2.7		1522
1286	溝117	土師質	碗			1.2	早鳥式土器	1521
1287	溝117	瓦質土器	鍋				胴部外面に突帯巡る、外面に煤付着	1516
1288	溝118	土師質	鍋	25.6				1536
1289	溝120	土師質	碗	11.6				1561
1290	溝122	青磁	碗	13.9			外面に印刻文あり	1564
1291	溝121	亀山焼	插鉢	31.6			鉗目6本1単位	1558
1292	溝127	青磁	碗	14.0		3.1		1557
1293	溝127	亀山焼	甕	21.2		6.7	外面格子タタキ	1555
1294	溝128	土師質	碗	11.6	5.05	3.75	早鳥式土器	1913
1295	溝128	土師質	碗	11.7		3.0	早鳥式土器	1576
1296	溝128	土師質	碗			2.5	早鳥式土器	1577
1297	溝128	土師質	碗		5.4	1.5	早鳥式土器	1584
1298	溝128	土師質	皿	7.0	5.35	1.25	底部ヘラおこし	1912
1299	溝128	須恵質土器	插鉢	26.8			束播系、口縁部に重ね焼き痕あり	1579
1300	溝129	須恵器	杯					1325
1301	溝129	土師器	皿	8.8			上層	1327
1302	溝129	須恵器	杯				底部にヘラおこし痕	1326
1303	溝130	須恵器	杯蓋	14.6				1406
1304	溝130	須恵器	杯蓋	16.0				1409
1305	溝130	須恵器	杯	14.2		4.0		1400
1306	溝130	須恵器	杯		10.0		外面自然釉付着	1410
1307	溝130	須恵器	杯	12.6	10.0	3.5	外面自然釉付着	1411
1308	溝130	須恵器	杯			3.35		1401
1309	溝130	須恵器	杯	12.7	9.6	3.15		1413
1310	溝130	須恵器	杯	16.8	10.4	3.1	重ね焼き痕あり	1412
1311	溝130	須恵器	甕	22.4				1386
1312	溝130	須恵器	甕	22.6				1348
1313	溝130	須恵器	甕	17.0				1349
1314	溝130	須恵器	甕	21.6				1389
1315	溝130	須恵器	壺			8.0		1347
1316	溝130	須恵器	甕	8.2				1350
1317	溝130	須恵器	平瓶		15.0	12.4	底部内面に同心円の当て具痕	1392
1318	溝130	須恵器	平瓶		13.5	11.3	頸部内外面と把手に自然釉付着	1394
1319	溝130	須恵器	墨入れ				墨付着、摩耗なし	1950
1320	溝130	須恵器	横瓶	12.2			頸部に竹管文2	1391
1321	溝130	須恵器	横瓶	12.0				1390
1322	溝130	須恵器	平瓶					1352
1323	溝130	土師器	碗	10.90	6.3	(3.6)		1398
1324	溝130	土師器	碗	11.8				1425
1325	溝130	土師器	杯	13.8			内外面赤色顔料付着	1399
1326	溝130	土師器	杯	13.2			内外面赤色顔料付着	1422
1327	溝130	土師器	碗			1.85	上層	1583
1328	溝130	土師器	碗			1.75	上層	1417
1329	溝130	土師器	碗			1.5	上層	1419
1330	溝130	土師器	高杯	22.0			内外面赤色顔料付着	1397
1331	溝130	土師器	皿?	8.6				1420
1332	溝130	土師器	高杯					1415
1333	溝130	土師器	甕	31.0			外面煤付着	1395
1334	溝130	土師器	甕	33.9			外面煤付着	1396
1335	溝130	瓦	平瓦		厚:2.9		凸面縄タタキ、凹面布目残る	1426
1336	溝131	土師質	碗	14.5	6.0	(4.6)	早鳥式土器、内面に重ね焼き痕	1911
1337	溝131	土師質	碗			1.7	早鳥式土器	1782
1338	溝131	土師質	皿	(9.9)		(1.45)		1781
1339	溝134	備前焼	甕	34.0			下層	895
1340	溝134	備前焼	壺	10.2			下層	893
1341	溝134	備前焼	插鉢	32.4			下層	896
1342	溝134	備前焼	碗	11.3	6.0	4.4	下層、底部に糸切り痕	894
1343	溝136	瓦質土器	鍋					1625
1344	溝138	土師質	碗	12.4			早鳥式土器	1662
1345	溝138	土師質	碗		6.0		早鳥式土器	1603
1346	溝138	土師質	碗		6.1		早鳥式土器	1606
1347	溝138	瓦器	碗	16.0		3.9		1593
1348	溝138	土師質	皿	13.05	8.2	(2.9)	底部ヘラ切り	1910
1349	溝138	土師質	皿	7.0		1.0		1692
1350	溝138	土師質	皿	8.90	(5.20)	(1.35)		1664
1351	溝138	土師質	皿	6.5	3.0	1.4	底部糸切り	1665
1352	溝138	瓦器	皿	(8.2)		1.7		1595
1353	溝138	土師質	皿	9.7	6.0	1.2		1663
1354	溝138	瓦器	皿	8.9		1.1		1596
1355	溝138	土師質	鍋	16.7		4.3		1601
1356	溝138	土師質	鍋			5.0		1599
1357	溝138	土師質	鍋	30.4		11.4		1600

## 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
1358	溝138	土師質	鍋					1673
1359	溝138	土師質	鍋					1674
1360	溝138	白磁	碗	18.4		4.3		1611
1361	溝138	白磁	碗	15.8		2.5		1612
1362	溝138	白磁	碗	17.3		2.6		1610
1363	溝138	白磁	碗		6.5	2.8		1614
1364	溝138	白磁	碗		7.1	2.5		1613
1365	溝138	青磁	碗	16.2	5.2	7.1		1907
1366	溝138	青白磁	合子蓋	4.6		2.3		1615
1367	溝139	土師質	椀	14.0			早島式土器	1617
1368	溝139	土師質	椀				早島式土器	1618
1369	溝139	土師質	椀				早島式土器	1619
1370	溝139	瓦器	皿	7.9				1624
1371	溝139	瓦器	椀					1622
1372	溝139	白磁	碗	13.9				1620
1373	溝140	土師質	椀				早島式土器	1669
1374	溝140	土師質	皿	8.5	5.15	1.5		1668
1375	溝140	瓦器	椀					1672
1376	包含層	縄文土器	深鉢				口縁端部に刻み目	1943
1377	包含層	縄文土器	深鉢					1944
1378	包含層	縄文土器	深鉢				口縁部外面に刺突文、口縁部内面に沈線1条	1871
1379	包含層	縄文土器	深鉢				沈線3条	1938
1380	包含層	縄文土器	深鉢				口縁端部に刻み目、外面に爪形文	1872
1381	包含層	縄文土器	深鉢				口縁部外面と胴部貼付突帯上に刻み目、口縁部内面に沈線1条	1863
1382	包含層	縄文土器	深鉢				口縁部外面、貼付け突帯上に刻み目	1942
1383	包含層	縄文土器	深鉢				口縁部端部に刻み目、口縁部下に貼り付け突帯、上に刻み目	1125
1384	包含層	縄文土器	鉢				口縁部下に貼り付け突帯、上に刻み目	1124
1385	包含層	縄文土器	深鉢				口縁部外面貼付突帯上に刻み目	1893
1386	包含層	縄文土器	深鉢				口縁部外面貼付突帯上に刻み目、内面に沈線1条	1875
1387	包含層	縄文土器	深鉢				口縁端部に刻み目、口縁部外面貼付突帯上に刻み目、口縁部内面に沈線1条	1865
1388	包含層	縄文土器	浅鉢					1867
1389	包含層	縄文土器	深鉢				胴部に沈線1条	1877
1390	包含層	縄文土器	深鉢				胴部に刺突文	1866
1391	包含層	縄文土器	深鉢				胴部に爪形文	1895
1392	包含層	縄文土器	深鉢				口縁部外面貼付突帯上に刻み目	1891
1393	包含層	縄文土器	深鉢				口縁外面貼付突帯上に刻み目	1860
1394	包含層	縄文土器	深鉢				口縁部外面貼付突帯上に刻み目	1876
1395	包含層	縄文土器	深鉢				胴部外面に爪形文	1862
1396	包含層	縄文土器	深鉢				口縁部貼付突帯上に刻み目	1861
1397	包含層	縄文土器	深鉢				胴部に爪形文	1894
1398	包含層	縄文土器	浅鉢				口縁部上端を削出し	1126
1399	包含層	縄文土器	浅鉢				口縁部沈線4条	1928
1400	包含層	縄文土器	鉢		3.2			1873
1401	包含層	縄文土器	鉢		4.1			1870
1402	包含層	縄文土器	鉢		2.7			1868
1403	包含層	縄文土器	鉢		5.4			1869
1404	包含層	弥生土器	壺				頸部に削出し突帯上に沈線1条	1128
1405	包含層	弥生土器	壺				ヘラ描き沈線1条、弧文	1856
1406	包含層	弥生土器	壺				削出突帯上にヘラ描き沈線2条残、ヘラ描き弧文	1880
1407	包含層	弥生土器	壺				沈線1条、ヘラ描き斜格子文	1896
1408	包含層	弥生土器	壺				削出突帯上にヘラ描き鋸歯文	1878
1409	包含層	弥生土器	壺				口縁部内面に貼付突帯上押圧2条	1947
1410	包含層	弥生土器	壺	17.6			口縁端部に刻み目、貼付突帯上に押圧3条、櫛描直線文	1946
1411	包含層	弥生土器	壺	11.4		24.0	口縁部に凹線3条、胴部に列点文	1939
1412	包含層	弥生土器	甕	36.1			他地域産(搬入品?)	1882
1413	包含層	弥生土器	甕	(23.2)	8.1	(23.7)	口縁端部に刻み目	1887
1414	包含層	弥生土器	甕				口縁部端部に刻み目	1127
1415	包含層	弥生土器	甕				口縁端部に刻み目	639
1416	包含層	弥生土器	甕				ヘラ描き沈線3条残	1927
1417	包含層	弥生土器	甕				口縁端部に刻み目	636
1418	包含層	弥生土器	甕				口縁端部に刻み目	635
1419	包含層	弥生土器	鉢	32.8			口縁部に沈線3~4条	1899
1420	包含層	弥生土器	壺	16.6	6.2		口縁部に竹管文・鋸歯文、屈曲部に貼付突帯上に刻み目、胴部下半に籠目痕あり	1898
1421	包含層	弥生土器	壺	19.6			口縁部凹線5条、頸部貼付突帯上に刻み目	1886
1422	包含層	弥生土器	壺		7.5		頸部にヘラ描き沈線1条残、屈曲部に刺突文	1883
1423	包含層	弥生土器	壺	13.5		(10.8)	口縁部に凹線3条	1961
1424	包含層	弥生土器	甕	16.7		7.0	口縁端部に凹線3条	1958
1425	包含層	弥生土器	甕	13.35		7.0		1959
1426	包含層	弥生土器	器台	15.5		(2.3)	口縁部にS字状浮文1	1852
1427	包含層	弥生土器	壺	14.9		(16.7)	口縁部に凹線5条、頸部にヘラ描き沈線1条	1960
1428	包含層	弥生土器	台付壺	6.6		(15.0)	口縁端部に刻み目	1952

# 1 土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考	実測番号
				口径	底径	器高		
1429	包含層	弥生土器	壺				口縁部内面にクシ描き波状文 (3条1単位) 2帯か?	1857
1430	包含層	弥生土器	壺				ヘラ描き文あり	1879
1431	包含層	弥生土器	甕	13.7			口縁部擬凹線5条	1979
1432	包含層	弥生土器	甕	11.6		(11.0)		1980
1433	包含層	土師器	甕	(14.3)			庄内河内型甕	1889
1434	包含層	弥生土器	高杯	15.3			円孔4方向	1973
1435	包含層	弥生土器	高杯	14.6			円孔4方向	1972
1436	包含層	弥生土器	高杯	13.4				1974
1437	包含層	弥生土器	鉢	12.4	3.5	7.15		1977
1438	包含層	弥生土器	鉢	13.8	3.0	4.85		784
1439	包含層	弥生土器	鉢	16.0	4.0	8.0		1978
1440	包含層	弥生土器	鉢	14.0				758
1441	包含層	弥生土器	鉢	13.8	3.85	(9.9)	タタキ残る	1884
1442	包含層	弥生土器	鉢	12.0	4.0	7.6		1948
1443	包含層	弥生土器	鉢	9.9	3.55	(5.1)		1940
1444	包含層	弥生土器	鉢	7.7	3.3	7.6		1376
1445	包含層	弥生土器	壺		2.2	(5.4)	ミニチュア	1922
1446	包含層	弥生土器	高杯		24.2		刺突文、ヘラ描き鋸歯文、刻み目、円孔推定6方向	1859
1447	包含層	弥生土器	高杯	23.4			内外面赤色顔塗布	1941
1448	包含層	弥生土器	器台				穿孔2カ所、ヘラ描き沈線、綾杉文、1936と同一個体	1935
1449	包含層	弥生土器	鼓形器台				内外面赤色顔料付着	1890
1450	包含層	弥生土器	器台	21.2	18.5	21.9	口縁端部凹線4条、胴部に円形と長方形透しあり、胴部～脚部にかけてヘラ描き沈線4条・4条・7条、脚裾部に補修痕?	1851
1451	包含層	弥生土器	器台		29.8		凹線3条、三角形透し1残、方形透し1残	1917
1452	包含層	弥生土器	器台		29.0		長方形透し3残、三角形透し4方向、脚裾部凹線3条	1916
1453	包含層	土師器	壺	21.7				1915
1455	包含層	須恵器	椀					1881
1456	包含層	土師質	皿		5.25	2.5	底部ヘラおこし	1925
1457	包含層	土師質	皿	9.6	6.0	2.7		1923
1458	包含層	土師質	杯	8.0	6.8	(5.1)		1885
1459	包含層	瓦器	椀	15.5	5.0	4.8		1920
1460	包含層	瓦器	椀	15.2	4.1	3.7		1919
1460	包含層	青磁	碗	16.0				1934
1461	包含層	瓦器	椀					1844
1462	包含層	瓦器	椀					1858
1463	包含層	土師質	皿	7.7	6.3	1.35	底部ヘラ切り	1845
1464	包含層	土師質	皿	7.4	5.4	1.1		1847
1465	包含層	瓦器	皿	8.9		1.5		1843
1466	包含層	土師質	皿	7.2	1.2	5.3	底部ヘラ切り	1924
1467	包含層	白磁	碗	18.4				1929
1468	包含層	白磁	碗	15.2		(3.0)		1854
1469	包含層	白磁	碗	17.6				1949
1470	包含層	陶質土器	壺?				外面に細席文	1937
1471	包含層	青磁	碗	13.8		(4.7)		1853
1472	包含層	青磁	碗		5.3	12.7		1918
1473	包含層	青磁	碗	9.1	3.0	2.2		1921
1474	包含層	青磁	皿		4.1			1933
1475	包含層	瓦	平瓦	幅: 4.4	厚: 2.2		凹面布目、凸面ナデ	1849
1476	包含層	瓦	平瓦	幅: 5.1	厚: 1.1		凹面布目、凸面工具ナデ	1848
1477	包含層	土師質	鍋	35.4		23.4		1888

## 2 木製品一覧表

掲載 番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			樹種	備考	実測 番号
			最大長・径	最大幅・径	最大厚			
W1	旧河道2	高坏	口径：185	脚径：174	器高：135	ケヤキ	ほぼ完存	A46
W2	旧河道2	平鉢	467.5	236	58	アカガシ亜属	未製品	A29
W3	旧河道2	堅杵	192.5	77		イヌガヤ	全面炭化	A25
W4	旧河道2	堅杵	931	72	55	アカガシ亜属		A45
W5	旧河道2	諸手鋏	662	76	44	アカガシ亜属	1/2 残存	A20
W6	旧河道2	諸手鋏	666	112	50	アカガシ亜属	1/2 残存。W7とセット	A18
W7	旧河道2	柄	504	33		コナラ属アカガシ亜属	W8とセット	A19
W8	旧河道2	柄	846	40	10	散孔材	9点の破片	A35
W9	旧河道2	経巻き具	670	81	22.5	サカキ	機織り具	A24
W10	旧河道2	加工材	1101	301	79	コナラ属アカガシ亜属	粗削した状態のもの	A37
W11	井戸1	加工材	787	70	27	カヤ	保存状況悪い	A36
W12	溝80	扉板	772	258	100	ヒノキ亜科	一部炭化、門受け部残存	A38
W13	溝80	部材	388.5	114	16.5	ヒノキ亜科	円形と方形の「ほぞ穴」あり	A10
W14	溝80	曲柄鋏	291	120	15.5	コナラ属アカガシ亜属	曲柄鋏「ナスビ形」	A9
W15	溝80	加工材	1577	91		イヌガヤ	丸太であるが加工部分多し	A43
W16	溝80	加工材	1238	66		コナラ属クヌギ節	丸太。先端部に杭状の加工、反対側に扶 り状の加工を施す	A41
W17	溝80	加工材	347	79	24.5	スギ	上部炭化、板状	A11
W18	溝80	容器？	462	95		コナラ属アカガシ亜属	半分欠損	A40
W19	溝80	加工材	961	94	31	クリ	板状	A44
W20	溝80	柄	412・436	54	39	クマシデ属	2つに折れている	A39
W21	溝80	加工材	813	99	63	タブノキ	板状	A42
W22	溝80	経巻き貝か 布巻き貝	492	12.5		ヒノキ亜科	機織り具	A13
W23	溝80	加工材	211	24	22	スギ	棒状を呈す機織り具か？	A7
W24	溝80	舟？	162	19	12	スギ	機織り具	A12
W25	溝80	容器？	170	60	12	ノグルミ	コップ状（1/4残存）炭化部有り	A17
W26	溝80	直柄鋏？	193	78	18	コナラ属アカガシ亜属	ほぞ穴部分のみ残存	A16
W27	溝80	加工材	265	60	14.5	ノグルミ	匙状になっている	A6
W28	溝80	加工材	258	80	23	スギ	板状。小口面炭化	A34
W29	溝80	加工材	237	169	38	ネムノキ	板状	A14
W30	井戸22	曲げ物・底板	166	53	9	スギ		A3
W31	井戸23	曲げ物 底板か蓋	97		5	スギ		A4
W32	井戸23	曲げ物・底板	106		8		線刻状のもの有り	A1
W33	井戸23	曲げ物・側板	133	10.5	1.5	ヒノキ	線刻有り・穿孔有り	A2③
W34	井戸23	曲げ物・底板	161		2	ヒノキ	金属の環残存。取り上げ時には完存だ たと思われるが現状では途中の板無し。	A2①
W35	井戸23	曲げ物・側板	103	10.5	3	ヒノキ	金属の環残存	A2②
W36	井戸23	墨書板	158	25	6	スギ	墨書解読不能	A33

## 3 石製品一覧表

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石 材	実測番号	出土地区
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	竪穴住居 1	石鎌	20	18	3.5	1.14	サヌカイト	A27	16・17B・C
S2	竪穴住居 1	石鎌	17.5	14	2.5	0.47	サヌカイト	A25	16・17B・C
S3	竪穴住居 1	石鎌	16	10.5	2.3	0.26	サヌカイト	A23	16・17B・C
S4	竪穴住居 1	石鎌	14	7	2.3	0.16	サヌカイト	A30	16・17B・C
S5	竪穴住居 1	石鎌	14	18.5	2.3	0.51	サヌカイト	A29	16・17B・C
S6	竪穴住居 1	石鎌	23.5	16	2.8	0.85	サヌカイト	A28	16・17B・C
S7	竪穴住居 1	スクレイパー	66	38	8	12.47	サヌカイト	A32	16・17B・C
S8	竪穴住居 1	R F	33	26	7	5.98	サヌカイト	A33	16・17B・C
S9	竪穴住居 1	楔	16.5	21.5	6	2.96	サヌカイト	A24	16・17B・C
S10	竪穴住居 1	石鎌	20	16	4.5	1.04	サヌカイト	A25	16・17B・C
S11	竪穴住居 1	凹石	119	101	48	849.4	花崗閃緑岩 (細粒)	A34	16・17B・C
S12	竪穴住居 2	石鎌	22	16.5	3.4	1.16	サヌカイト	A3	17B
S13	竪穴住居 2	石鎌	18	15.5	3	0.52	サヌカイト	A10	17B
S14	竪穴住居 2	石鎌	32.5	17	3	0.68	サヌカイト	A5	17B
S15	竪穴住居 2	石鎌	27.5	20	5.3	1.83	サヌカイト	A7	17B
S16	竪穴住居 2	石鎌	36.5	13.5	6	3.06	サヌカイト	A11	17B
S17	竪穴住居 2	スクレイパー	36	26	7	6.74	R F	A12	17B
S18	竪穴住居 2	楔	35	27.5	4.5	6.1	サヌカイト	A4	17B
S19	土壌 1	石鎌	12.5	14.5	1.7	0.26	サヌカイト	A40	17B
S20	土壌 3	楔	31	24	8	5.96	サヌカイト	A15	17B
S21	土壌 3	スクレイパー	33	22	5	4.49	サヌカイト	A16	17B
S22	溝 2	石鎌	28.5	15.5	3	0.95	サヌカイト	A17	16B・C
S23	溝 2	石鎌	24	11.5	4.7	1.16	サヌカイト	A18	16B・C
S24	溝 5	楔	17	28	10.5	5.56	サヌカイト	A41	17C
S25	旧河道	石鎌	53.5	19	8.5	7.14	サヌカイト	A48	15B・C
S26	旧河道	スクレイパー	48.3	56	10.9	41.78	緑色片岩	A115	15B・C
S27	旧河道	スクレイパー	71.5	52	12	31.9	サヌカイト	A49	15B・C
S28	旧河道	ハンマー?	108	47.5	22	116.4	サヌカイト	A45	15B・C
S29	旧河道	石剣	156	46	12	132.4	サヌカイト	A52	15B・C
S30	旧河道	凹石兼叩き石	96.2	88.1	37.7	463.59	花崗岩	A117	
S31	旧河道	投弾?	47.5	47.5	29.5	101	花崗閃緑岩 (細粒)	A45	15B・C
S32	旧河道	砥石	1800	980.1	620.3	1591.54	花崗斑岩	A118	15C
S33	溝14	石鎌	20.5	10	2.5	0.5	サヌカイト	A35	16・17B・C
S34	溝15	石鎌	18.5	15	3	0.68	サヌカイト	A37	16・17C
S35	溝15	楔	31	30	6	6.47	サヌカイト	A38	16・17C
S36	溝19	石鎌	16	17	4	1.24	サヌカイト	A19	17B・C
S37	溝18	石鎌	29	25.5	4.5	2.6	サヌカイト	A41	17C
S38	溝19	スクレイパー	48	42	10	25.06	サヌカイト	A22	17B・C
S39	溝19	スクレイパー	70	69	9	50.38	サヌカイト	A20	17B・C
S40	竪穴住居 4	石鎌	47	24	4.4	5.95	サヌカイト	A92	11C
S41	竪穴住居 5	石鎌	28.5	18	2.8	1.11	サヌカイト	A87	11・12B
S42	竪穴住居 5	石鎌	30.5	15.5	3.5	1.73	サヌカイト	A86	11・12B・C
S43	竪穴住居 5	打製石包丁	51.5	33	9.7	24.9	サヌカイト	A88	11・12B
S44	竪穴住居 5	打製石包丁	73.5	40.5	9.5	41.05	珩岩	A58	12B
S45	竪穴住居 6	管玉	20	5.4	2.1	0.9	碧玉	A10	11・12C
S46	竪穴住居 6	石鎌	36.5	13	4	1.76	サヌカイト	A77	11・12C
S47	竪穴住居 6	打製石包丁	81.5	41.5	19	79.37	ホルンフェルス	A78	11・12C
S48	竪穴住居 6	砥石	101	23	23	127.73	流紋岩	A79	12C
S49	竪穴住居 6	叩き石	119.5	48	26	240.05	ホルンフェルス	A55	12C
S50	竪穴住居 6	石鎌	78.5	60	67	484.6	閃緑岩	A80	11・12C
S51	竪穴住居 7	勾玉	14	8.1	4.2	0.5	翡翠	A5	11B・C
S52	竪穴住居 7	スクレイパー	62	38	11	26.54	サヌカイト	A84	11・12B・C
S53	竪穴住居 8	楔	27	17.5	4.5	3.21	サヌカイト	A90	12B・C
S54	竪穴住居 8	石包丁転用楔	47.5	25	8.5	6.85	サヌカイト	A902	12B・C
S55	竪穴住居 8	砥石	54	26	12.5	27.38	流紋岩	A89	12B・C
S56	竪穴住居 8	石鎌	82.5	66.5	77	540.46	花崗岩	A91	11~13B・C
S57	竪穴住居 9	砥石	38.5	19	10	8.45	流紋岩	A60	12B
S58	竪穴住居 9	スクレイパー	60	34	7	13.04	サヌカイト	A94	12B
S59	竪穴住居 9	石鎌	23.5	13	4.5	1.24	サヌカイト	A59	12B
S60	竪穴住居 9	石鎌	41.5	15	6	3.03	サヌカイト	A93	12B
S61	竪穴住居10	砥石	110.5	30.5	27	177.6	流紋岩	A57	12B
S62	溝27	打製石包丁	46	51.5	8	28.07	サヌカイト	A68	11B
S63	溝27	打製石包丁	72	41	11	38.1	サヌカイト	A66	12B
S64	溝27	打製石包丁	85.5	41.5	9	42.44	サヌカイト	A67	12C
S65	溝33	勾玉	15	8	3.6	0.5	翡翠	A9	12B
S66	溝33	管玉	9.5	4		0.2	碧玉	A8	12B
S67	溝36	石鎌	22.5	16.5	2.7	0.56	サヌカイト	A72	11B
S68	溝36	石鎌	29.5	12.5	3.5	1.23	サヌカイト	A71	11B
S69	溝36	楔	18	23.5	3.5	2.02	サヌカイト	A69	12B
S70	溝36	打製石包丁	77	49.5	8	29.83	サヌカイト	A70	12B
S71	溝36	砥石	89.5	41.3	22.3	145.65	珩質岩 (長石)	A111	12C
S72	溝37	楔	45	30	6.5	8.69	サヌカイト	A74	12B・C
S73	土壌11	叩き石	88	61	32	293.31	花崗閃緑岩 (細粒)	A63	11B
S74	土壌12	叩き石	71.5	72	47.5	313.26	半花崗岩	A100	11C

## 3 石製品一覧表

掲載番号	遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	実測番号	出土地区
			最大長	最大幅	最大厚				
S75	土壇19	石錘?	66.5	50	39	164.28	半花崗岩	A101	12C
S76	土壇25	石槍	40.5	24	9	7.34	サヌカイト	A97	12B
S77	土壇25	石錘	42	38.5	26	56.43	花崗岩(優白質)	A98	12B
S78	土壇25	打製石包丁	84	47.5	20.5	80.9	サヌカイト	A99	12B
S79	土壇32	石鎌	26	20.5	5	2.07	サヌカイト	A50	18B
S80	土壇53	砥石兼凹石	85	91	43	467.8	砂岩(細粒)	A108	21C
S81	溝43	打製石包丁	42.5	45	6.5	17.59	サヌカイト	A121	13B・C
S82	溝43	打製石包丁	77	45.5	9.5	38.76	サヌカイト	A73	13B・C
S83	溝43	打製石包丁	75	40	11	26.9	サヌカイト	A75	12B・C
S84	溝43	石錘	100	90	71	941.92	花崗斑岩	A75	12B・C
S85	溝44	石鎌	141.7	51.7	14	126.93	流紋岩	A122	13B・C
S86	溝44	石鎌	20.5	14.5	3.7	0.7	サヌカイト	A102	13B
S87	溝45	楔	38.5	17.1	5	4.01	サヌカイト	A123	13B・C
S88	溝45	石鎌	21.5	14	3.5	1.02	サヌカイト	A103	13B・C
S89	溝54	石鎌	27	17	3	2.01	サヌカイト	A9	17C
S90	溝64	楔	45	39.5	8.5	20.5	サヌカイト	A110	22B
S91	水田耕土	楔	31.5	21.5	8	6.93	サヌカイト	A2	16B・C
S92	水田耕土	石鎌	36	11.5	4	1.77	サヌカイト	A104	25C
S93	土器溜り1	打製石包丁	60.5	43	9	29.32	サヌカイト	A64	12B
S94	土器溜り1	不明	72	114	40	231.7	凝灰岩	A124	13B
S95	竪穴住居20	砥石	110.5	43.5	27.5	125.23	流紋岩	A53	12B
S96	竪穴住居26	白玉	5.1		3.8	0.1	滑石	A5	13C
S97	井戸20	砥石	98	47	43	227.35	流紋岩	A61	12B
S98	井戸20	砥石	66.1	25.3	19.3	45.34	流紋岩	A119	12B
S99	井戸21	砥石	35.5	12.9	8.8	2.83	流紋岩	A120	12B
S100	井戸24	石臼	238	157	118	6500	結晶質流紋岩	A114	
S101	土壇153	砥石	30.8	24.7	4.7	6.36	頁岩	A115	
S102	溝114	砥石	120	87	55	641.7	流紋岩	A1	14B・C
S103	包含層	石鎌	26	15	4.5	1.41	サヌカイト	A174	18B・C
S104	包含層	石鎌	31.5	16	3.5	1.76	サヌカイト	B31	17B・C
S105	包含層	石鎌	23	13.5	3	0.84	サヌカイト	B108b	18B・C
S106	包含層	石鎌	22	8	5	1.21	サヌカイト	B118	18B・C
S107	包含層	石鎌	29.5	22	4	1.98	サヌカイト	B138	26C
S108	包含層	石鎌	24	16.5	3	0.91	サヌカイト	B144	22B
S109	包含層	石鎌	23.5	13.5	4	0.93	サヌカイト	B21	17B・C
S110	包含層	石鎌	25.5	15	4	0.97	サヌカイト	B139	24B・C
S111	包含層	石鎌					サヌカイト	B24	17B・C
S112	包含層	石鎌	19	14.5	3	0.65	サヌカイト	B118b	18B・C
S113	包含層	石鎌	18	16.5	3.8	0.75	サヌカイト	B108c	18B・C
S114	包含層	石鎌	19.5	17	4	0.89	サヌカイト	B108d	18B・C
S115	包含層	石鎌	15	12.5	2.5	0.37	サヌカイト	B60	17B・C
S116	包含層	石鎌	14	10.5	1.9	0.22	サヌカイト	B98	19C
S117	包含層	石鎌	14	9.5	2.5	0.29	サヌカイト	B140	24B・C
S118	包含層	石鎌	15.5	12	3.5	0.64	サヌカイト	B23	17B・C
S119	包含層	石鎌	21	13	3	2.04	サヌカイト	B141	23B
S120	包含層	石鎌	18.5	15	2.8	0.7	サヌカイト	B118c	18B・C
S121	包含層	石鎌	18.5	18.5	3	0.64	サヌカイト	B108	18B・C
S122	包含層	石鎌					サヌカイト	B123	26B・C
S123	包含層	石鎌	32	21	3	1.7	サヌカイト	B145	23C
S124	包含層	石鎌	33.5	17.5	3.5	1.34	サヌカイト	B83	12C
S125	包含層	石鎌	33	16	3	1.34	サヌカイト	B163	21B・C
S126	包含層	石鎌	23	15	3	0.62	サヌカイト	B136	26B
S127	包含層	石鎌	22	15	3	0.92	サヌカイト	B15	16B・C
S128	包含層	石鎌	32.5	24.5	4.8	6.82		B300	14B
S129	包含層	石鎌	18.6	14	3	0.49	サヌカイト	B55	16C
S130	包含層	石鎌	31.5	21	3	2.04	サヌカイト	B142	23B
S131	包含層	石鎌	31	21	4.5	1.59	サヌカイト	B121	18B
S132	包含層	石鎌	31.5	10.5	3	1.33	サヌカイト	B55	17C
S133	包含層	石鎌	27	8.5	4	1.05	サヌカイト	B111	18B・C
S134	包含層	石鎌	27	13.5	5.7	1.5	サヌカイト	B25	17B・C
S135	包含層	石鎌	29	10	4.3	1.46	サヌカイト	B26	17B・C
S136	包含層	石鎌	41.5	18	7	5.72	サヌカイト	B161	24B・C
S137	包含層	石鎌	39	26	7	6.34	サヌカイト	B111a	18B・C
S138	包含層	石鎌	58	12.5	7	4.65	サヌカイト	B102	18C
S139	包含層	石鎌	68	13.5	9	6.67	サヌカイト	B11	16C
S140	包含層	スクレイパー	86	53	6.5	39.95	サヌカイト	B152	18C
S141	包含層	スクレイパー	41.5	27.5	6.5	7.84	サヌカイト	B164	20B・C
S142	包含層	楔形石器	27	26	6	4.08	黒曜石	B62	17C
S143	包含層	有孔円板	径34.5	孔径6.5	6.5	12.26	滑石	B78	12C
S144	包含層	石包丁	97	46	11.5	75.55	頁岩	B150	22・23B・C
S145	包含層	石鎌?	60	37.5	8.5	25.34	サヌカイト	B75	12B
S146	包含層	石包丁	8	39	8.5	29.28	サヌカイト	B137	27B
S147	包含層	石包丁	74.5	46.5	10.5	55.54	サヌカイト	B77	12B
S148	包含層	石包丁	73.5	40.5	8	28.73	サヌカイト	B148	18B

### 3 石製品一覧表

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	実測番号	出土地区
			最大長	最大幅	最大厚				
S149	包含層	石包丁	66	47.5	11	36.07	サヌカイト	B115	18B・C
S150	包含層	磨製石包丁	58.5	51	7	28.86	砂質変岩	B17	16B・C
S151	包含層	石包丁	44	45	11	24.14	サヌカイト	B95	11・12B
S152	包含層	不明	36	27	3	5.13	粘板岩	B167a	18・19B・C
S153	包含層	石杵	83	57.5	50	241.83	流紋岩	B2	16B・C
S154	包含層	石鎌	110	50	20	141.79	砂質変岩	B28	16C
S155	包含層	石鎌	135	55	18	121.83	サヌカイト	B1	14C
S156	包含層	勾玉	12.7	7.9	3.6	0.5	翡翠	B2	11C
S157	包含層	管玉	9	2.8		0.1	碧玉	B1	12C
S158	包含層	白玉	5.5		3.6	0.2	滑石	B4	18B・C
S159	包含層	白玉	5.8		4	0.2	滑石	B5	18B
S160	包含層	剣形模造品	32	26.1	3.6	4.2	滑石	B3	12B・C
S161	包含層	管玉未製品	24.4	5.1	4.7	1.1	蠟石	B6	27・28B・C

### 4 動物遺存体一覧表

掲載番号	品種類別	出土遺構・層位ほか	備考	遺物番号
B1	管玉	溝27 上部	骨	7
B2	鹿角	溝80 最下層 (底直上)	ニホンジカ 角 (前顎骨角突起)	19
B3	骨	土壌129	エイ尾棘 モリ・ヤス・鎌の可能性有り	29
	骨	井戸22 裏込埋土	ブタ/ウシ 上腕骨L 切創あり	1
	骨	溝115	ウシ/ウマ 白歯破片 L・R不明	2
	骨	溝113	哺乳類 目不明 部位不明	3
	歯	土壌151	ウマ/ウシ 白歯破片	4
	骨	溝80 上層	目不明 上腕骨 L・R不明	5
	骨	溝80 下層		6
	骨	溝115		7
	骨	包含層 L=3.5m 990706		8
	骨			9
	貝	旧河道2 下層		10
	骨	溝80 上層 (東肩)	ウシ 白歯 上下不明	11
	貝	溝80 最下層	オオクニシ 殻皮残	12
	骨	溝128	ウマ 下顎白歯 同一個体のまとまり Lを中心としている	13
	骨	溝80 上層最下層	ウマ 上顎 白歯L・R	14
	骨	溝130 (微砂)	ウシ 白歯 L・R不明	15
	骨	溝130	哺乳類 目不明 部位不明	16
	骨	旧河道2 下層	イノシシ類 基節骨1	17
	骨	旧河道2 下層	偶蹄目 肋骨R	
	骨	旧河道2 下層	イノシシ類 下顎M3R 破片	
	骨	旧河道2 下層	鳥類 (チドリ目?) 上腕骨L 近位端+骨幹部	18
	骨	井戸20 上半	哺乳類 目不明 部位不明	20
	貝	井戸20 下層	アカニシ 殻体	21
	貝	井戸20 下層	アカニシ 殻体	22
	骨	井戸20	哺乳類 目不明 部位不明 遠位端	23
	骨	井戸20 下半粘土	ウシ 上腕骨L	24
	骨	井戸20	カエル類 (無尾目) (大小様々なタイプあり)	25
	骨	井戸19 上層	ウシ 距骨L・R 完形	26
	骨	井戸19 中層	ウシ/ウマ 腰椎M 椎体	27
	骨	井戸14 上層	ニホンジカ? 肩甲骨破片	28
	骨	溝113	哺乳類 目不明 部位不明	30
	歯	溝139 南・新	ウマ 切歯 (上下L・R不明)	31
	骨	溝139	哺乳類 中~大型 部位不明	32
	骨	溝139	ウシ/ウマ 上腕骨L 遠位端	33
	歯	溝136	ウマ 白歯R	34
	骨	溝136	哺乳類 目不明 部位不明	35
	骨	溝136		36
	骨	溝43 西テラス上	哺乳類 目不明 部位不明	37
	骨	P56 981102		38
	歯	包含層 L=3.8 981109		39
	歯	近・現代溝	ウシ? 白歯破片 L R不明	40
	歯	溝130 上層	ウシ 上顎白歯L	41
	骨	溝130	ウマ/ウシ 上腕骨	42
	骨	溝130	ウシ? 上腕骨 骨幹部	43
	骨	溝130 杭列周辺	哺乳類 (大型) 四肢骨	44
	歯	包含層 L=3.4m 000728		45
	骨	包含層 L=3.4m 000829		46
	貝	旧河道2 下層		47
	貝	旧河道2 下層・最下層		48
	貝	旧河道2 中層		49

## 5 金属製品一覽表

掲載 番号	掲載遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	実測 番号	出土地区
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	竪穴住居 4	銅鏃	26	21	2.5	3.55	鉄	A75	11C
M2	竪穴住居 5	銅鏃	42	21	5	9.45	銅	A73	11・12B・C
M3	竪穴住居 5	ヤリガンナ	28	20	6	8.55	鉄	A72	12B
M4	竪穴住居 5	鉄鏃?	39	6	2	2.08	鉄	A32	11・12B・C
M5	竪穴住居 6	鉄鏃	47	23	5	11.55	鉄	A23	12C
M6	竪穴住居 6	鉄鏃	42	21	4	7.47	鉄	A25	12C
M7	竪穴住居 6	鉄鏃	25	16	4	2.72	鉄	A21	12C
M8	竪穴住居 6	ヤリガンナ	50	16	4	13.1	鉄	A26	12C
M9	竪穴住居 6	ヤリガンナ	35	17	2	4.95	鉄	B15	12C
M10	竪穴住居 6	茎	27	8	4	3.09	鉄	A24	12C
M11	竪穴住居 6	茎?	21	8	5	1.6	鉄	A68	12C
M12	竪穴住居 6	ヤリガンナ	59	9	4	5.28	鉄	A64	11・12C
M13	竪穴住居 6	ヤリガンナ	42	9	4	3.77	鉄	A67	11・12C
M14	竪穴住居 6	茎	30	10	4		鉄	A81	11・12C
M15	竪穴住居 6	茎	31	13	3	4.27	鉄	A22	12C
M16	竪穴住居 6	ヤリガンナ?	45	14	2	6.07	鉄	A61	12C
M17	竪穴住居 6	ヤリガンナ?	45	8	3	7.87	鉄	A66	12C
M18	竪穴住居 6	鋤(鏃)先	107	45	5	52.4	鉄	A62	11・12C
M19	竪穴住居 7	銅鏃	21	7	3	0.97	銅	A70	11C
M20	竪穴住居 7	銅鏃	20	12	2.5	0.92	銅	A71	11C
M21	竪穴住居 7	鉄鏃	30	16	2	3.93	鉄	A29	11B・C
M22	竪穴住居 7	茎?	30	10	5	3.97	鉄	A69	
M23	竪穴住居 7	茎?	43	2	4	3.09	鉄	A28	11C
M24	竪穴住居 8	鉄鏃	33	13	2	2.27	鉄	A74	12B・C
M25	竪穴住居 9	鉄斧	30	24	4	7.35	鉄	A33	12B
M26	竪穴住居 9	鉄片	35	11	4	3.39	鉄	A75	12B
M27	竪穴住居10	銅鏃	23	14	2	1.44	銅	A31	12B
M28	竪穴住居10	銅鏃	16	5	2	0.55	銅	A30	12B
M29	竪穴住居11	鉄片	36	13	2	2.12	鉄	A80	18C
M30	溝27	鉄片	22	7	7	0.95	鉄	A55	12C
M31	溝35	ヤリガンナの柄?	76	14	6	18.26	鉄	A58	11B
M32	溝36	鉄(棒状)	53	14	13	22.69	鉄	A57	12C
M33	溝36	鉄鏃	34	12	3	3.39	鉄	A56	12C
M34	溝37	ヤリガンナ?	32	12	8	5.78	鉄	A59	12B・C
M35	土壙19	ヤリガンナ	78	13	3	5.07	鉄	A78	12C
M36	土壙19	銅鏃	78	13	3	5.07	銅	A79	12B・C
M37	土壙22	刀子	52	12	3	5.49	鉄	A49	12B
M38	土器溜り (弥生後期末)	ヤリガンナ	100	12	3	12.7	鉄	A50	13B
M39	竪穴住居22	ヤリガンナ?	28	10	3	3.5	鉄	A34	12C
M40	井戸14	釘	47	4	4	2.16	鉄	A37	13B
M41	井戸14	釘	46	3	4	2.62	鉄	A36	13B
M42	井戸15	紡錘車	318	43	7	53.67	鉄	A35	12B
M43	溝80	U字形鏃(鏃)先	137	55	4	142.16	鉄	A18	16C
M44	溝80	刀子?	25	19	2	2.36	鉄	A17	16B・C
M45	建物 8	鉄輪?	5	18	2	6.61	鉄	A16	15B
M46	建物 8	釘	35	6	6	2.67	鉄	A15	15B
M47	井戸23	釘	61	7	6	7.09	鉄	A2	14C
M48	井戸24	鉄輪	50	50	6	19.5	鉄	A1	14B
M49	土壙74	釘	19	5	4		鉄	A83	
M50	土壙82	刀子	56	16	3	8.65	鉄	A41	11B
M51	土壙86	錢	26	26	1	1.28	銅	A42	11C
M52	土壙102	釘	28	9	5		鉄	A86	12C
M53	土壙105	錢	25	25	1.5	3.19	銅	A45	12C
M54	土壙107	鉄鏃	45	36	4		鉄	A84	13C
M55	土壙109	釘?	47	11	4	8.2	鉄	A40	12B
M56	土壙109	釘	18	4	4	1.85	鉄	A39	12B
M57	土壙129	釘	53	4	3	6.29	鉄	A43	13C
M58	土壙131	釘	35	9	9	4.85	鉄	A48	13C
M59	土壙132	錢	25	25	1.5	2.83	銅	A44	13C
M60	土壙132	錢	24	24	1.5	3.16	銅	A45	13C
M61	土壙134	釘	46	12	7	9.96	鉄	A77	13B
M62	土壙135	釘	24	6	6	1.81	鉄	A47	13B
M63	土壙148	鉄片	26	15	4	4.03	鉄	A10	14C
M64	土壙148	釘	29	7	4	1.7	鉄	A11	14C
M65	土壙148	釘	29	6	3	1.96	鉄	A12	14C
M66	土壙148	鉄片	26	35	9	15.61	鉄	A9	14C
M67	土壙149	釘	52	6	5	6.51	鉄	A13	14C
M68	土壙152	釘	39	6	4	4.95	鉄	A8	14C
M69	土壙157	刀子	98	16	5	7.14	鉄	A14	15B
M70	溝111	鉄鏃	77	26	26	125.07	鉄	A54	13C
M71	溝111	鉄片	15	13	15	2.11	鉄	A53	12B
M72	溝115	釘	19	7	6	1.95	鉄	A4	15C
M73	溝115	釘	41	12	6		鉄	A82	14B・C



### 5 金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	実測番号	出土地区
			最大長	最大幅	最大厚				
M74	溝115	釘	38	6	3	4.66	鉄	A6	14C
M75	溝115	釘	35	6	6	6.07	鉄	A5	15C
M76	溝115	釘	30	6	5	4.91	鉄	A7	14C
M77	溝138	釘	50	8	7	10.01	鉄	A52	11B
M78	溝139	釘	58	8	4	8.52	鉄	A51	11B
M79	溝139	釘	60	6	6		鉄	A85	11B
M80	包含層	銅鏃					銅	B20	12C
M81	包含層	銅鏃	15	6	2	0.56	銅	B51	11C
M82	包含層	鏃						B79	27B・C
M83	包含層	鏃						B78	11C
M84	包含層	鉄釘						B80	14B
M85	包含層	鉄釘						B82	12C
M86	包含層	釘	43	13	10	11.43	鉄	A38	11C
M87	包含層	鉄釘						B83	12C
M88	包含層	鉄釘						B84	11B
M89	包含層	釘	(61)	7	7	32.4		B77	11C
M90	包含層	釘?	(62)	11	10	28.1		B76	12C
M91	包含層	?	67	21	17	72.73		B75	11C
M92	包含層	釘	15	6	5	16.37	鉄	A19	14C
M93	包含層	鉄釘						B81	11B
M94	包含層	刀子	(38)	13	3	3.12		B74	11B
M95	包含層	刀子	159	16	5	49.28		B73	18C
M96	包含層	刀子	135	20	4	18.57	鉄	A20	15B
M97	包含層	耳環	26	23	4	7.2	銅	B19	12C

### 6 土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	実測番号	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
C1	溝 5	円板	29.4	30.6	9.6	9.3	2.5Y5/4黄褐	A111	弥生土器転用
C2	旧河道	紡錘車	50	16.7		42.2	2.5Y6/2灰黄	A112	弥生土器転用
C3	竪穴住居 5	紡錘車	52.5	4	6	12.1	10YR6/3にぶい黄橙	A34	
C4	竪穴住居 6	土玉	22.7		17.9	8.2	7.5Y7/1灰白	A90	
C5	竪穴住居 6	人形土製品	27.5	14		4.7	10YR7/3にぶい黄橙	A13	
C6	竪穴住居 6	紡錘車	34.5	5	3	3.6	7.5YR6/4にぶい橙	A12	弥生土器転用
C7	竪穴住居 7	土玉	26	29	4	21.9	10YR7/3にぶい黄橙	A33	
C8	竪穴住居 7	土玉	18.1	10.2		1.8	10YR6/4にぶい黄橙	A97	
C9	竪穴住居 7 土器溜り	紡錘車	59.1		17.6	50.7	10YR8/3浅黄橙	A92	
C10	竪穴住居 7 土器溜り	紡錘車	62.5	34.8	4.3	11	10YR6/2灰黄褐	A93	弥生土器転用
C11	竪穴住居 7 土器溜り	紡錘車	47	5.5	4.5	12.3	10YR6/2灰黄褐	A21	弥生土器転用
C12	竪穴住居 7 土器溜り	紡錘車	22.6	31.8	4.2	2.9	10YR6/4にぶい黄橙	A101	弥生土器転用
C13	竪穴住居 7 土器溜り	紡錘車	44.4	23.1	6.2	7.8	2.5Y6/2灰黄	A99	弥生土器転用
C14	竪穴住居 7 土器溜り	紡錘車	18.9	44.2	5	4.3	10YR7/4にぶい黄橙	A104	弥生土器転用
C15	竪穴住居 7 土器溜り	紡錘車	22.1	35	3.2	3.1	7.5YR6/4にぶい橙	A103	弥生土器転用
C16	竪穴住居 7 土器溜り	紡錘車	44.2	27.1	4.3	5.3	7.5YR5/4にぶい褐	A100	弥生土器転用
C17	竪穴住居 7 土器溜り	紡錘車	26.1	43.9	6	7.7	2.5Y8/2灰白	A102	弥生土器転用
C18	溝27	土玉	25	25	4	13.8	5Y4/灰	A28	
C19	溝27	不明	29.5	26.5	11.5	7.5	7.5YR6/3にぶい橙	A29	
C20	溝27	紡錘車	38	4.5	7	8.3	7.5YR7/3にぶい橙	A25	弥生土器転用
C21	溝27	紡錘車	50.8	46.3	6	17.5	10YR7/4にぶい黄橙	A95	弥生土器転用
C22	溝27	紡錘車	71	10.5	13	55.2	2.5Y7/2灰黄	A27	弥生土器転用
C23	溝29	分銅形土製品	29	11		6.1	7.5R7/4にぶい橙	A35	
C24	溝36	紡錘車	38.4	54.1	6.1	13.4	7.5YR5/4にぶい褐	A91	
C25	溝37	土玉	28	33.5	2.5	27.5	2.5Y6/1黄灰	A30	
C26	井戸 1	紡錘車	25	4	3.5	2	7.5YR6/3にぶい褐	A36	弥生土器転用
C27	土壇17	土錘	51.5	72		197.9	7.5YR6/6橙	A32	
C28	溝53	砥石	70.5	50.7	51.3		7.5YR6/4にぶい橙	A115	高杯脚部利用
C29	溝53	紡錘車	41	3.5	8.5	17	10YR6/3にぶい黄橙	A9	弥生土器転用
C30	竪穴住居18	土錘	30.5	27	7	19.3	10YR7/4にぶい黄橙	A10	
C31	竪穴住居21	紡錘車	59	5.5		20.5	10YR6/1褐灰	A31	土師器転用
C32	竪穴住居21	土錘	54	19	7	15.8	10YR7/2にぶい黄橙	A11	
C33	溝78	羽口	95	66		249.6		A117	
C34	溝80	土錘	57	18	7	20.9	2.5Y7/2灰黄	A7	
C35	建物 7	壁材?	108	103	49.5	271.93	7.5YR7/6橙	A119	
C36	建物 7	壁材?	174	123	56	822.56	10YR7/4にぶい黄橙	A118	
C37	建物 8	土錘	23	10.5	3	2.6	7.5YR7/1灰白	A3	
C38	井戸19	土錘	37.5	11.5	4	3.7	10YR6/3にぶい赤橙	A16	
C39	井戸19	土錘	42	10	35	3.7	2.5YR6/4にぶい橙	A14	
C40	井戸19	土錘	48.5	11	25	4.6	7.5YR6/2灰褐	A15	
C41	土壇86	土錘	41.5	12.5	3.5	4	10YR6/4にぶい黄橙	A19	

## 6 土製品一覽表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	実測番号	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
C42	土壇86	土錘	37.5	9	2.5	3.2	7.5YR6/4にぶい橙	A18	
C43	土壇109	土錘	68.5	24	8	38.6	10YR7/1灰白	A17	
C44	土壇112	土錘	29	15.7		7.2	10YR6/4にぶい黄橙	A113	
C45	土壇131	土錘	39	12.5	4	5.6	2.5YR7/4淡赤橙	A20	
C46	土壇153	土錘	44	13	3.5	6.7	2.5Y7/4浅黄	A1	
C47	土壇161	土錘	41.3	11.8		4.5	2.5Y7/3浅黄	A107	
C48	土壇162	土錘	31	31	8	12	5YR7/1灰褐	A2	
C49	溝109	土錘	38	12	3.5	5.3	2.5Y7/2	A23	
C50	溝110	土錘	40	12	3	4.7	2.5YR7/4淡赤橙	A25	
C51	溝111	土錘	24.5	11	4	2.2	10YR6/2灰黄褐	A24	
C52	溝115	円板	34	35.2	9.5	14.1	2.5Y8/2灰白	A108	土師器転用
C53	溝115	円板	25.9	30.1	10.5	10.2	7.5YR5/1褐灰	A106	備前焼転用
C54	溝115	円板	31	32.9	10.6	15.1	5YR4/2灰褐	A105	備前焼転用
C55	溝130	土錘	44.5	16.5	7.5	12	2.5Y8/1灰白	A65	
C56	溝130	土錘	45.5	16	5.5	14.6	2.5Y8/2灰白	A82	
C57	溝130	土錘	43	17	7	14	2.5Y8/1灰白	A72	
C58	溝130	土錘	40.5	14	6	7.9	2.5Y8/2灰白	A81	
C59	溝130	土錘	34.5	15.6	6.5	7.6	10YR8/2灰白	A74	
C60	溝130	土錘	61	12.5	4	8.4	2.5Y8/1灰白	A75	
C61	溝130	土錘	50.5	11.5	4	6.6	7.5YR5/4にぶい褐	A79	
C62	溝130	土錘	45.5	11	4	5.9	10YR5/3にぶい黄橙	A80	
C63	溝130	土錘	38	10	10	3.4	5YR4/1	B95	
C64	溝130	土錘	51.5	17	4	9.4	10YR7/4にぶい黄橙	A69	
C65	溝134	土錘	57.5	20.5	6.5	20.4	10YR7/3にぶい黄橙	A51	
C66	溝134	土錘	49.5	11.5	3	6	2.5YR5/6明赤褐	A40	
C67	溝134	土錘	49	10.5	3	4.4	2.5YR5/6明赤褐	A44	
C68	溝134	土錘	53.5	11	3.5	5.8	2.5YR6/6橙	A45	
C69	溝134	土錘	51	11	3.5	5.6	5YR6/4にぶい橙	A42	
C70	包含層	土錘	78	25	25.5	59.3	2.5Y8/2灰白	B61	
C71	包含層	土錘	75	25	23	49.6	10YR4/2灰黄褐	B67	
C72	包含層	土錘	68.5	19	19	23.7	2.5Y7/3浅黄	B91	
C73	包含層	土錘	54	21	6	16.4	10YR4/1褐灰	A49	
C74	包含層	土錘	46	15	15	0.6	10YR7/4にぶい黄橙	B94	
C75	包含層	土錘	45	14	3.5	6.5	2.5Y8/2灰白	A22	
C76	包含層	土錘	38	18	6	10.2	2.5Y7/3浅黄	A4	
C77	包含層	土錘	30.5	16	16	7	10YR7/4にぶい黄橙	B103	
C78	包含層	土錘	52	12	11.5	7.1	2.5YR6/2	B85	
C79	包含層	土錘	52.5	11	3	5.2	2.5YR6/6橙	A57	
C80	包含層	土錘	50	12.5	3	6	10YR5/4赤褐	A59	
C81	包含層	土錘	50	10.5	3.5	4.8	5YR5/4にぶい赤褐	A37	
C82	包含層	土錘	52	11.5	3.5	6.4	5YR6/4にぶい橙	A50	
C83	包含層	土錘	50	11	3.5	5	2.5YR5/4にぶい赤褐	A56	
C84	包含層	土錘	47.5	11	3	5.2	2.5YR6/6橙	A47	
C85	包含層	土錘	50	11	4	5.3	2.5YR6/6橙	A58	
C86	包含層	土錘	52	11	3	5.2	10YR8/2灰白	A45	
C87	包含層	土錘	47	10	11	4	2.5Y6/4	B69	
C88	包含層	土錘	45	10	11	4.7	7.5YR5/2灰褐	B70	
C89	包含層	土錘	45	11	5	4	5YR6/6橙	B90	
C90	包含層	土錘	41	10	5	3	7.5YR5/1褐灰	A5	
C91	包含層	土錘	49	10	9	4.1	5YR5/6	B68	
C92	包含層	土錘	48	11.5	3	4.4	2.5YR6/6橙	A43	
C93	包含層	土錘	40	9	9	3.4	2.5YR7/4淡赤橙	B97	
C94	包含層	土錘	32	9	10	3	2.5Y4/4オリブ褐	B81	
C95	包含層	土錘	39.5	10	10	3.3	5YR5/3にぶい赤褐	B63	
C96	包含層	土錘	39.5	8.5	8.5	2.6	10YR7/4にぶい黄橙	B102	
C97	包含層	土錘	39	8.5	9	3.3	5Y6/2	B60	
C98	包含層	土錘	32	10.5	4	2.7	2.5YR5/6明赤褐	A53	
C99	包含層	土錘	39	10	3	3.5	2.5YR5/6明赤褐	A52	
C100	包含層	土錘	35	11	3	4	10YR7/4にぶい黄橙	B89	
C101	包含層	土錘	44	11	4	4.1	5YR6/6橙	A41	
C102	包含層	土錘	37.5	10.5	3	3.6	5YR7/6橙	A48	
C103	包含層	土錘	28	10	18.5	1.7	7.5YR4/8	B86	
C104	包含層	土錘	37	8	8	3.5	7.5YR4/2	B72	円孔1
C105	包含層	紡錘車	46	48	14	33.5	10YR6/3にぶい黄橙	B95	
C106	包含層	紡錘車	74	43	12	43.5	10YR7/2にぶい黄橙	B57	
C107	包含層	紡錘車	29		6	1.4	7.5YR6/4にぶい橙	B53	土師器転用
C108	包含層	紡錘車	40		5	7.3	10YR6/4にぶい黄橙	B54	土師器転用
C109	包含層	紡錘車	73	60	5	24	5YR6/6橙	B49	土師器転用
C110	包含層	土錘	47.5	11	3	4.6	5YR6/4にぶい橙	B5	
C111	包含層	円板	33		10	3.3	2.5YR7/2	B56	土師器転用
C112	包含層	円板	25	25.5	11	12.2		B88	土師器転用
C113	包含層	円板	37		10	9.6	N7/	B51	須恵器転用
C114	包含層	円板	25.5	27	10	10.2	2.5YR5/4にぶい赤褐	B84	備前焼転用
C115	包含層	円板	27		10	13.5	5YR5/2灰褐	B50	備前焼転用

## 6 土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	実測番号	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
C116	包含層	円板	19		6.5	13.9	5Y7/2	B52	青磁転用
C117	包含層	不明土製品	65	53	22	66.6	7.5YR7/4にぶい橙	B59	
C118	包含層	土玉	27	27	22	12.3	2.5Y7/1灰白	B58	
C119	包含層	不明土製品	34	16	16	11.1	N4/	B65	

## 7 装飾品一覧表

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	材質	色調	実測番号
			最大長 (径)	最大幅 (径)	穿孔径	最大厚				
S45	竪穴住居 6	管玉	20	5.4	2.1		0.9	碧玉		A10
S51	竪穴住居 7	勾玉	14	8.1		4.2	0.5	翡翠		A5
S65	溝33	勾玉	15	8	1.4	3.6	0.5	翡翠		A9
S66	溝33	管玉	9.5	4	2		0.2	碧玉		A8
S96	竪穴住居26	白玉	5.1		2.1	3.8	0.1	滑石		A6
S156	包含層	勾玉	12.7	7.9	1.5	3.6	0.5	翡翠		B2
S157	包含層	管玉	9	2.8	1.3		0.1	碧玉		B1
S158	包含層	白玉	5.5		2.4	3.6	0.2	滑石		B4
S159	包含層	白玉	5.8		2.2	4	0.2	滑石		B5
S160	包含層	剣形模造品	32	26.1	1.6	3.6	4.2	滑石		B3
S161	包含層	管玉未製品	24.4	5.1		4.7	1.1	蠟石		B6
G1	竪穴住居 7	小玉	3.6		1.2	2	0.1	ガラス	明緑青色	A2
G2	竪穴住居 8	小玉	3.2			3	0.1	ガラス	明緑青色	A3
G3	竪穴住居 9	小玉	4.6		1.8	2.7	0.1	ガラス	明緑青色	A4
G4	溝33	小玉	6.7		2.7	4.4	0.2	ガラス	明緑青色	A1
F1	土壙53	玉	7.8	7.4	2	7	0.4	ファイヤンス珪質		A12
F2	土壙53	玉	7.5	8.1	2	7.4	0.4	ファイヤンス珪質		A11
B1	溝27	管玉						骨		A7

新旧遺構名称対照表

報告書 遺構名	調査 年度	調査時 No	調査時 遺構名	地区	報告書 遺構名	調査 年度	調査時 No	調査時 遺構名	地区
竪穴住居 1	H11	104	住居	16・17C	土壇 8	H10	156	土壇	11B
竪穴住居 2	H11	95	住居	17B	土壇 9	H10	185	土壇	11B
竪穴住居 3	H10	219	住居	11B	土壇10	H10	186	土壇	11B
竪穴住居 4	H10	168	住居	11C	土壇11	H10	176	土壇	11B
竪穴住居 5	H10	154	住居	11・12B	土壇12	H10	209	土壇	11C
竪穴住居 6	H10	130	住居	12C	土壇13	H10	217	土壇	11C
竪穴住居 7	H10	144	住居	11B・C	土壇14	H10	224	土壇	11C
竪穴住居 8	H10	167	住居	12B・C	土壇15	H10	211	土壇	11C
竪穴住居 9	H10	169	住居	12B	土壇16	H10	166	土壇	11C
竪穴住居10	H10	153	住居	12B	土壇17	H10	172	土壇	12B
竪穴住居11	H12	66	住居	18C	土壇18	H10	158	土壇	11B
竪穴住居12	H12	69	住居	21C	土壇19	H10	213	土壇	12C
竪穴住居13	H10	110	住居	12B	土壇20	H10	223	土壇	11・12C
竪穴住居14	H10	119	住居	12B	土壇21	H10	146	土壇	12B
竪穴住居15	H10	114	住居	12B	土壇22	H10	189	土壇	12B
竪穴住居16	H10	113	住居	11B	土壇23	H10	210	土壇	13B
竪穴住居17	H10	82	住居	11C	土壇24	H10	159	土壇	12B
竪穴住居18	H10	83	住居	11C	土壇25	H10	207	土壇	12B
竪穴住居19	H10	117	住居	12B	土壇26	H10	165	土壇	12B
竪穴住居20	H10	90	住居	12B	土壇27	H10	105	土壇	12C
竪穴住居21	H10	86	住居	12C	土壇28	H11	55	土壇	15B
竪穴住居22	H10	118	住居	12C	土壇29	H11	56	土壇	15B
竪穴住居23	H10	99	住居	12・13C	土壇30	H12	113	土壇	18B
竪穴住居24	H10	100	住居	12・13C	土壇31	H12	114	土壇	18B
竪穴住居25	H10	151	住居	13C	土壇32	H12	115	土壇	18B
竪穴住居26	H10	152	住居	13C	土壇33	H12	78	土壇	18C
竪穴住居27	H12	34	住居	18B	土壇34	H12	42	土壇	18B
竪穴住居28	H12	35	住居	19B・C	土壇35	H12	38	土壇	18B
カマド 1	H10	126	焼土面	11C	土壇36	H12	44	土壇	19B
カマド 2	H10	91	かまど	12C	土壇37	H12	76	土壇	18C
カマド 3	H11	63	火処	16B	土壇38	H12	54	土壇	18B
建物 1	H10			11B	土壇39	H12	45	土壇	18B・C
建物 2	H10			12B	土壇40	H12	64	土壇	18C
建物 3	H12	8	建物	18・19C	土壇41	H12	71	土壇	19B
建物 4	H12	9	建物	19C	土壇42	H12	72	土壇	19B
建物 5	H12	25	建物	20B・C	土壇43	H12	46	土壇	19C
建物 6	H11	15A	建物	14C	土壇44	H12	70	土壇	19B
建物 7	H11	15B	建物	14C	土壇45	H12	63	土壇	21B
建物 8	H11	37	建物	15B・C	土壇46	H12	60	土壇	21C
建物 9	H11	59	建物	17B・C	土壇47	H12	68	土壇	21C
建物10	H11	51	建物	16C	土壇48	H12	26	焼土壇	21C
柱穴列 1	H10	97	柱穴列	12B	土壇49	H12	55	土壇	21C
柱穴列 2	H12	41	柱穴列	22C	土壇50	H12	56	土壇	21C
井戸 1	H10	111	井戸	12B	土壇51	H12	58	土壇	21C
井戸 2	H10	225	井戸	11C	土壇52	H12	57	土壇	21C
井戸 3	H10	181	井戸	13C	土壇53	H12	104	土壇	21C
井戸 4	H10	205	井戸	12B	土壇54	H12	102	土壇	21C
井戸 5	H10	178	井戸	12C	土壇55	H12	97	土壇	23B・C
井戸 6	H10	212	井戸	12B	土壇56	H12	109	土壇	23B・C
井戸 7	H10	206	井戸	12C	土壇57	H12	111	土壇	24C
井戸 8	H10	161	井戸	12B	土壇58	H12	99	土壇	24B
井戸 9	H10	128	井戸	12C	土壇59	H12	125	土壇	25C
井戸10	H11	73	土壇	17B	土壇60	H12	126	土壇	27B
井戸11	H12	37	井戸	19C	土壇61	H13	15	土壇	28C
井戸12	H12	108	井戸	23B・C	土壇62	H13	11	土壇	28C
井戸13	H12	112	井戸	24C	土壇63	H13	14	土壇	28C
井戸14	H10	137	井戸	13B	土壇64	H13	13	土壇	28C
井戸15	H10	18	井戸	12B	土壇65	H10	88	土壇	11B
井戸16	H12	51	井戸	19C	土壇66	H10	92	土壇	12B
井戸17	H12	67	井戸	20C	土壇67	H10	87	土壇	12B
井戸18	H12	61	井戸	20C	土壇68	H10	127	土壇	11C
井戸19	H10	25	井戸	11C	土壇69	H10	187	土壇	11C
井戸20	H10	14	井戸	12B	土壇70	H11	78	土壇	17B
井戸21	H10	13	井戸	12B	土壇71	H12	33	土壇	19B
井戸22	H11	5	井戸	14B	土壇72	H10	157	土壇	11B
井戸23	H11	6	井戸	14C	土壇73	H10	89	土壇	12B
井戸24	H11	3	井戸	14B	土壇74	H10	38	土壇	12B
土壇 1	H11	103	土壇	17B	土壇75	H10	27	土壇	12B
土壇 2	H11	112	土壇	17B	土壇76	H10	28	土壇	12B
土壇 3	H11	83	土壇	17B	土壇77	H10	37	土壇	11B
土壇 4	H11	105	土壇	17C	土壇78	H10	59	土壇	11B
土壇 5	H11	107	土壇	16C	土壇79	H10	70	土壇	11B
土壇 6	H12	73	土壇	19C	土壇80	H10	36	土壇	11B
土壇 7	H10	175	土壇	11B	土壇81	H10	41	土壇	11B

新旧遺構名称対照表

報告書 遺構名	調査 年度	調査時 No	調査時 遺構名	地区
土壘82	H10	35	土壘	13B・C
土壘83	H10	75	土壘	11C
土壘84	H10	48	土壘	11C
土壘85	H10	49	土壘	11C
土壘86	H10	51	土壘	11C
土壘87	H10	93	土壘	11C
土壘88	H10	94	土壘	11C
土壘89	H10	96	土壘	11C
土壘90	H10	95	土壘	11C
土壘91	H10	39	土壘	11B
土壘92	H10	33	土壘	11・12B
土壘93	H10	58	土壘	12B
土壘94	H10	40	土壘	12B
土壘95	H10	26	土壘	11・12B・C
土壘96	H10	55	土壘	12C
土壘97	H10	57	土壘	12C
土壘98	H10	103	土壘	12C
土壘99	H10	52	土壘	12C
土壘100	H10	53	土壘	12C
土壘101	H10	104	土壘	12C
土壘102	H10	56	土壘	12C
土壘103	H10	54	土壘	12C
土壘104	H10	106	土壘	12C
土壘105	H10	74	土壘	12C
土壘106	H10	108	土壘	12C
土壘107	H10	71	土壘	12C
土壘108	H10	32	土壘	12C
土壘109	H10	34	土壘	13B
土壘110	H10	80	土壘	12B
土壘111	H10	81	土壘	12B
土壘112	H10	24	土壘	12B
土壘113	H10	67	方形土壘	13B
土壘114	H10	31	土壘	12B
土壘115	H10	23	土壘	12B
土壘116	H10	6	土壘	12B
土壘117	H10	29	土壘	13B
土壘118	H10	122	土壘	13B
土壘119	H10	8	土壘	13B
土壘120	H10	19	土壘	13B
土壘121	H10	30	土壘	13B
土壘122	H10	121	土壘	13B
土壘123	H10	85	土壘	13B
土壘124	H10	76	土壘	13B
土壘125	H10	77	土壘	13B
土壘126	H10	78	土壘	13B
土壘127	H10	124	土壘	13B
土壘128	H10	69	土壘	13C
土壘129	H10	64	方形土壘	13C
土壘130	H10	135	土壘	13C
土壘131	H10	134	土壘	13C
土壘132	H10	68	土壘	13C
土壘133	H10	3	土壘	13C
土壘134	H10	148	土壘	13B
土壘135	H10	125	土壘	13B
土壘136	H10	16	土壘	13B
土壘137	H10	17	土壘	13B
土壘138	H10	10	土壘	13B
土壘139	H10	9	土壘	13B
土壘140	H10	15	土壘	13B
土壘141	H10	199	土壘	13C
土壘142	H10	5	土壘	13C
土壘143	H10	200	土壘	13C
土壘144	H10	4	土壘	13C
土壘145	H10	202	土壘	13C
土壘146	H10	201	土壘	13C
土壘147	H11	4	土壘	14C
土壘148	H11	19	土壘	14C
土壘149	H11	20	土壘	14C
土壘150	H11	16	土壘	14C
土壘151	H11	18	土壘	14C
土壘152	H11	17	土壘	14C
土壘153	H11	8	土壘	14B
土壘154	H11	7	土壘	14B
土壘155	H11	21	土壘	15C

報告書 遺構名	調査 年度	調査時 No	調査時 遺構名	地区
土壘156	H11	39	土壘	14C
土壘157	H11	30	土壘	15B
土壘158	H11	27	土壘	15B
土壘159	H11	26	土壘	15B
土壘160	H11	33	土壘	15B
土壘161	H11	32	土壘	15B
土壘162	H11	29	土壘	15B
土壘163	H11	28	土壘	16・17C
土壘164	H11	22	土壘	15B
土壘165	H11	52	土壘	16C
土壘166	H12	6	土壘	18C
土器棺墓1	H10	194	土器棺	12C
土器棺墓2	H10	195	土器棺	12C
土器棺墓3	H10	196	土器棺	12C
炉1	H10	214	炉	11C
炉2	H10	216	炉	11C
炉3	H10	221	炉	12C
道1	H10			11B
溝1	H11	93	溝	17B
溝2	H11	87	溝	16B・C
溝3	H11	81	溝	16B・C
溝4	H11	89	溝	17B
溝5	H11	97	溝	17B・C
溝6	H12	105	溝	21B・22C
溝7	H12	143	溝	26C
溝8	H12	144	溝	27B・C
溝9	H12	140	溝	27B・C
溝10	H12	139	溝	27C
溝11	H12	141	溝	27C
溝12	H12	142	溝	27C
溝13	H11	72	溝	16C
溝14	H11	102	溝	16・17B・C
溝15	H11	101	溝	16・17B・C
溝16	H11	99	溝	17B
溝17	H11	92	溝	17B
溝18	H11	94	溝	17B
溝19	H11	91	溝	17B・C
溝20	H12	135	溝	25B・C
溝21	H12	136	溝	25B
溝22	H12	137	溝	27B・C
溝23	H12	138	溝	27B・C
溝24	H10	220	溝	11B
溝25	H10	215	溝	12C
溝26	H10	138	溝	12C
溝27	H10	139	溝	12C
溝28	H10	179	溝	12C
溝29	H10	204	溝	12C
溝30	H10	140	溝	12C
溝31	H10	140	溝	12C
溝32	H10	140	溝	12C
溝33	H10	147	溝	12B
溝34	H10	140	溝	12C
溝35	H10	140	溝	12C
溝36	H10	155	溝	11・12B
溝37	H10	173	溝	12B
溝38	H10	182	溝	11B
溝39	H10	208	溝	11B
溝40	H10	162	溝	11B
溝41	H10	142・143	溝	11B
溝42	H10	218	溝	11・12B
溝43	H10	163・174	溝	12・13B・C
溝44	H10	191	溝	13B
溝45	H10	197	溝	13B・C
溝46	H10	512	溝	13B・C
溝47	H10	510	溝	13B・C
溝48	H11	53	溝	15B・C
溝49	H11	57	溝	16B
溝50	H11	75	溝	16B・C
溝51	H11	66	溝	16B・C
溝52	H11	67	溝	16B
溝53	H11	68	溝	17B・C
溝54	H11	70・74	溝	17C
溝55	H11	65	溝	18C
溝56	H11	82	溝	17B

新旧遺構名称対照表

報告書 遺構名	調査 年度	調査時 No	調査時 遺構名	地区
溝57	H12	53	溝	18B
溝58	H12	43	溝	18B・C
溝59	H12	74	溝	18C
溝60	H12	75	溝	19C
溝61	H12	59	溝	21C
溝62	H12	101	溝	21B・22C
溝63	H12	100	溝	21B・22C
溝64	H12	103	溝	22B・C
溝65	H12	106	溝	22B
溝66	H12	107	溝	22B・C
溝67	H12	114	溝	25B・C
溝68	H12	113	溝	25C
溝69	H12	127	溝	27B
溝70	H12	129	溝	27B
溝71	H12	128	溝	27B
溝72	H12	130	溝	27B
溝73	H12	131	溝	27C
溝74	H12	132	溝	27C
溝75	H10	98	溝	11C
溝76	H10	123	溝	13C
溝77	H10	507	溝	13B・C
溝78	H10	501	溝	13B・C
溝79	H11	45	溝	15B・C
溝80	H11	44	溝	15・16B・C
溝81	H11	65	溝	17B・C
溝82	H11	77	溝	17B・C
溝83	H11	64	溝	17B
溝84	H12	36	溝	18・19C
溝85	H12	10	溝	19B
溝86	H12	11	溝	19B
溝87	H12	12	溝	19B
溝88	H12	31	溝	19B
溝89	H12	32	溝	19B・C
溝90	H12	23	溝	20B・C
溝91	H12	18	溝	21B・22C
溝92	H12	39	溝	21C
溝93	H12	40	溝	21B・22C
溝94	H12	15	溝	22B・C
溝95	H12	19	溝	21・22B・C
溝96	H12	20	溝	22B・C
溝97	H12	21	溝	22B・C
溝98	H12	22	溝	22B・C
溝99	H12	81	溝	22・23B
溝100	H12	82	溝	23B・C
溝101	H12	93	溝	23B
溝102	H12	94	溝	24B
溝103	H12	95	溝	24B
溝104	H12	115	溝	25B・C
溝105	H12	118	溝	25B・C
溝106	H12	116	溝	25B・C
溝107	H12	117	溝	26B・C
溝108	H12	123	溝	26・27B・C
溝109	H10	65	溝	13B・C
溝110	H10	79	溝	13C
溝111	H10	66	溝	13C
溝112	H10	2	溝	13B・C
溝113	H10	11	溝	13B
溝114	H10	12	溝	13B
溝115	H11	9	溝	14B・C
溝116	H11	10	溝	14B・C
溝117	H11	13	溝	14C
溝118	H11	42	溝	14B
溝119	H11	41	溝	14C
溝120	H11	38	溝	15C
溝121	H11	24	溝	15B・16C
溝122	H11	25	溝	15B・16C
溝123	H11	23	溝	15C
溝124	H11	34	溝	15C
溝125	H11	35	溝	15・16C
溝126	H11	48	溝	16C
溝127	H11	36	溝	15・16C
溝128	H11	58	溝	17B・C
溝129	H11	62	溝	17B・C
溝130	H12	110	溝	18B

報告書 遺構名	調査 年度	調査時 No	調査時 遺構名	地区
溝131	H12	5	溝	19B・C
溝132	H12	13	溝	20B・C
溝133	H12	17	溝	22B・C
溝134	H12	85	溝	24B・C
溝135	H10	45	溝	11B
溝136	H10	46	溝	11B
溝137	H10	47	溝	11B
溝138	H10	43	溝	11B
溝139	H10	42	溝	11B
溝140	H10	44	溝	11B
水路1	H10	163	溝	12・13B・C
水路1	H10	174	溝	12C
水路2	H10	197	溝	13B・C
水路3	H10	512	溝	13B・C
水路4	H10	53	溝	15B・C
水路5	H11	68	溝	17B・C
水路6	H12	106	溝	22B
水路7	H12	49	溝	22B・C
水田1	H12	134	水田	25~27B・C
水田2	H12	133	水田	25~27B・C
水田3	H11~13	47・48	水田	13~28B・C
旧河道1	H11	98	溝	14B・C
旧河道2	H11	54	河道	14・15B・C
土器溜り1	H10			13B・C
土器溜り2	H10			13・14B
粘土配置	H10			12B

1 14～18B・C区  
弥生時代前期  
遺構全景  
(西上空から)



2 16・17B・C区  
弥生時代前期  
遺構全景  
(上空から、上が北東)



3 竪穴住居 1  
(南西から)



図版 2



1 豎穴住居 2  
(南東から)



2 土壇 3  
(北東から)



3 溝 6  
(北東から)





1 旧河道1・2 (上空から、上が北東)



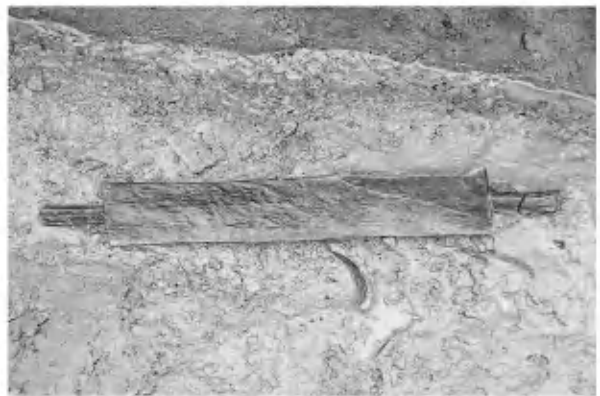
2 W1 出土状況



3 W2・4 出土状況



4 W5・8 出土状況



5 W9 出土状況

図版 4



1 弥生時代前期水田  
(上空から、上が北東)



2 溝 8～12  
(東から)



3 弥生時代中期水田  
(南東から)



1 11~15B・C区弥生時代後期遺構全景（上空から、上が北東）



2 21~25B・C区弥生時代後期遺構全景（同上）

図版 6



1 竪穴住居 3  
(東から)



2 竪穴住居 3 P 4  
(南から)



3 竪穴住居 4  
(南西から)



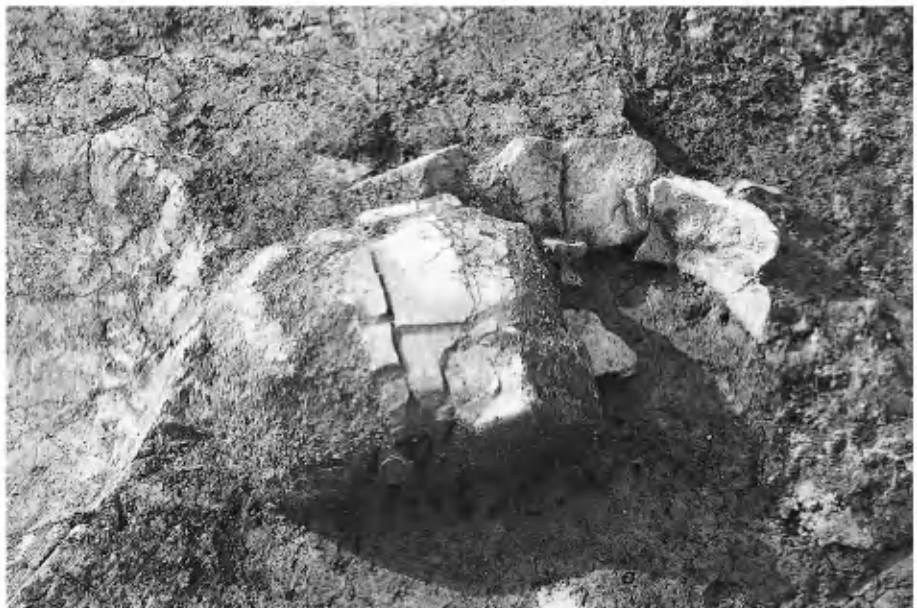
1 竪穴住居 5  
(北東から)



2 竪穴住居 5  
(南西から)



3 竪穴住居 5  
作業台出土状況  
(北東から)



図版 8



1 豎穴住居 5  
作業風景  
(南から)



2 豎穴住居 5  
壁面被熱状況  
(南東から)



3 豎穴住居 5  
炭化材出土状況  
(北から)



1 豎穴住居 6 (南から)



2 豎穴住居 6 遺物出土状況 (東から)



3 豎穴住居 6 P 96 鋤先出土状況 (東から)



4 豎穴住居 6 P 85 (南西から)

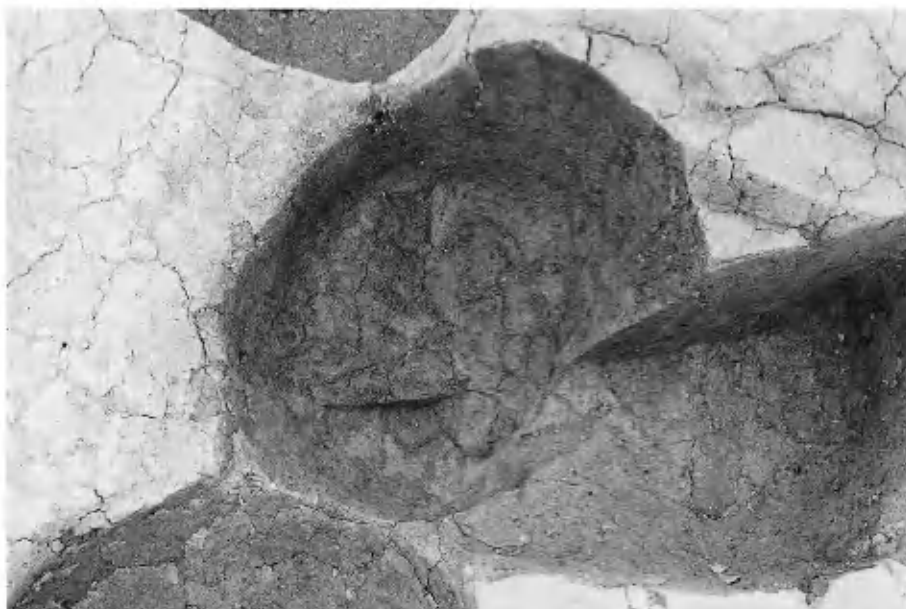


5 豎穴住居 6 P 91 (南西から)

図版 10



1 竪穴住居 7  
(南西から)



2 竪穴住居 7P4  
(南西から)



3 竪穴住居 7P16  
(南から)



1 竪穴住居 7  
遺物出土状況  
(南東から)



2 竪穴住居 7  
土器溜り  
(東から)



3 竪穴住居 7  
土器溜り  
(北東から)



図版 12



1 竖穴住居 8  
(南西から)



2 竖穴住居 9  
(南西から)



3 竖穴住居 9  
遺物出土状況  
(南東から)

1 竪穴住居 10  
(南東から)



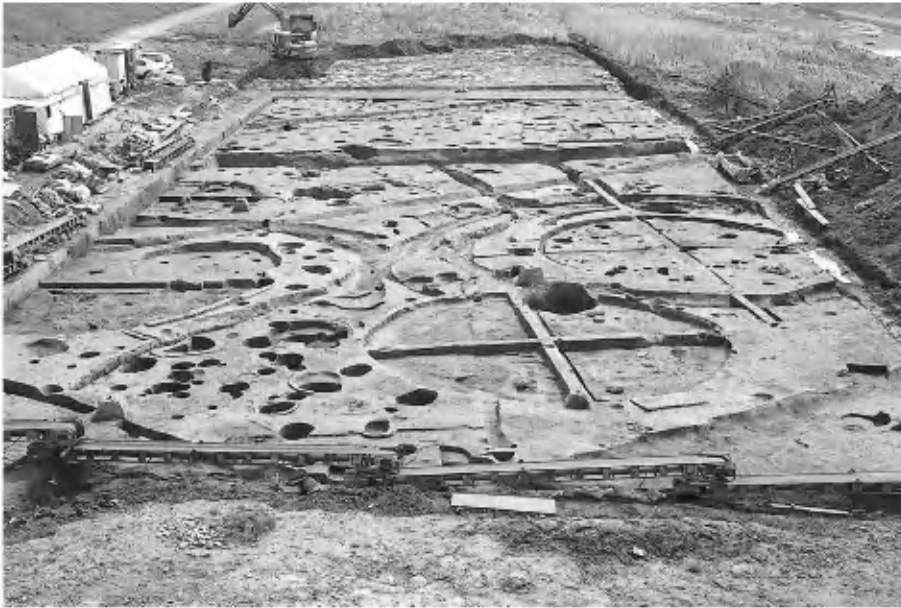
2 竪穴住居 10P4  
(南東から)



3 竪穴住居 11  
(南東から)



図版 14



1 豎穴住居排水溝  
および周溝  
(北西から)



2 豎穴住居排水溝  
および周溝  
(豎穴住居 5 付近)  
(北西から)



3 豎穴住居排水溝  
および周溝  
(豎穴住居 6 付近)  
(北西から)



1 竪穴住居排水溝  
および周溝  
(C-D断面北側)  
(南から)



2 竪穴住居排水溝  
および周溝  
(E-F断面付近)  
(南西から)



3 竪穴住居排水溝  
および周溝  
(A-B断面南西側)  
(南西から)



図版 16



1 溝 27 遺物出土状況  
(南西から)



2 溝 29 遺物出土状況  
(西から)



3 溝 37 遺物出土状況  
(北から)

1 井戸 1  
第 5 層遺物出土状況  
(南西から)



2 井戸 1  
木製品出土状況  
(南西から)



3 井戸 1  
遺物出土状況  
(南西から)





1 井戸 2  
(東から)



2 井戸 4  
(北東から)



3 井戸 6  
(西から)



1 井戸 7  
炭層検出状況  
(南西から)



2 井戸 7  
(北東から)



3 井戸 7  
(南西から)





1 井戸 9  
(西から)



2 井戸 11  
(南西から)



3 井戸 13  
(南から)

1 土壇 7  
(南西から)



2 土壇 7 断面  
(南西から)



3 土壇 12  
(南東から)





1 土壙 11  
炭層検出状況  
(東から)



2 土壙 11  
製塩土器出土状況  
(東から)



3 土壙 14  
(南西から)

1 土壙 19  
(南西から)



2 土壙 25  
(南西から)



3 土壙 26  
(西から)





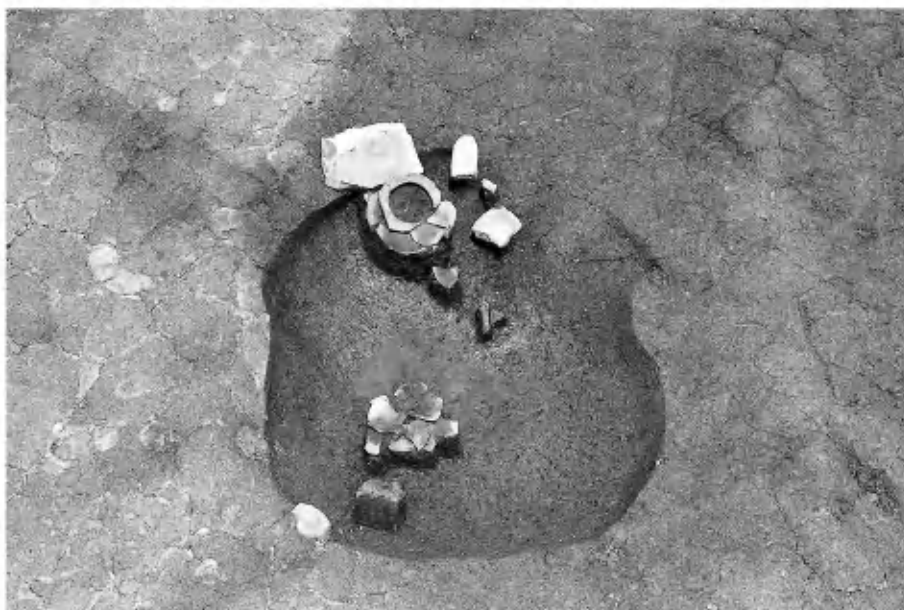
図版 24



1 土壙 27  
(南東から)



2 土壙 36  
(南西から)



3 土壙 39  
(東から)

1 土壙 46  
(北から)



2 土壙 53  
(南東から)



3 土壙 53  
玉出土状況  
(南東から)





1 土器棺墓 1～3  
(北東から)



2 土器棺墓 1  
(東から)



3 土器棺墓 3  
(南西から)



1 炉1・2  
検出状況  
(南西から)

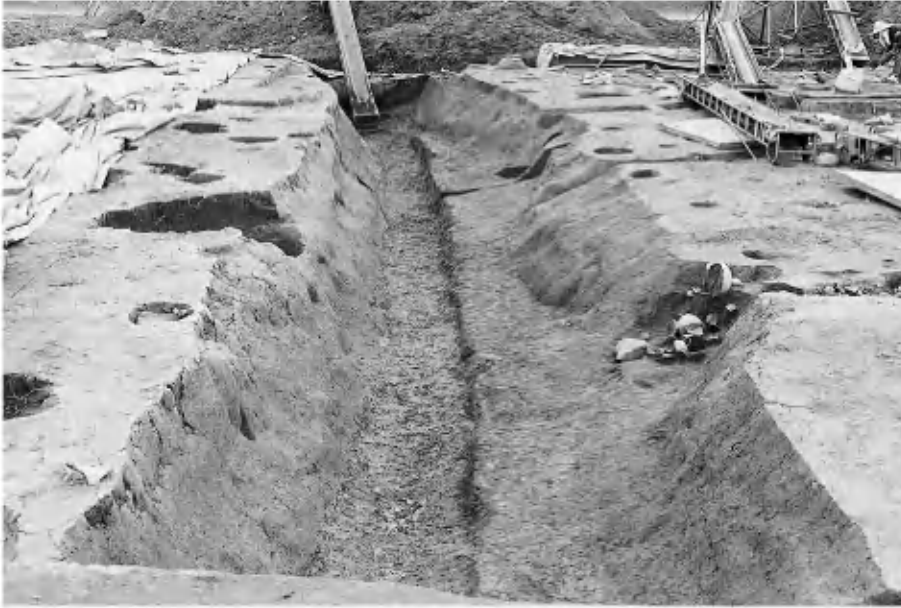


2 炉1・2  
(南西から)



3 炉3  
(南から)





1 溝 43  
(北東から)



2 溝 43  
土器出土状況  
(北東から)

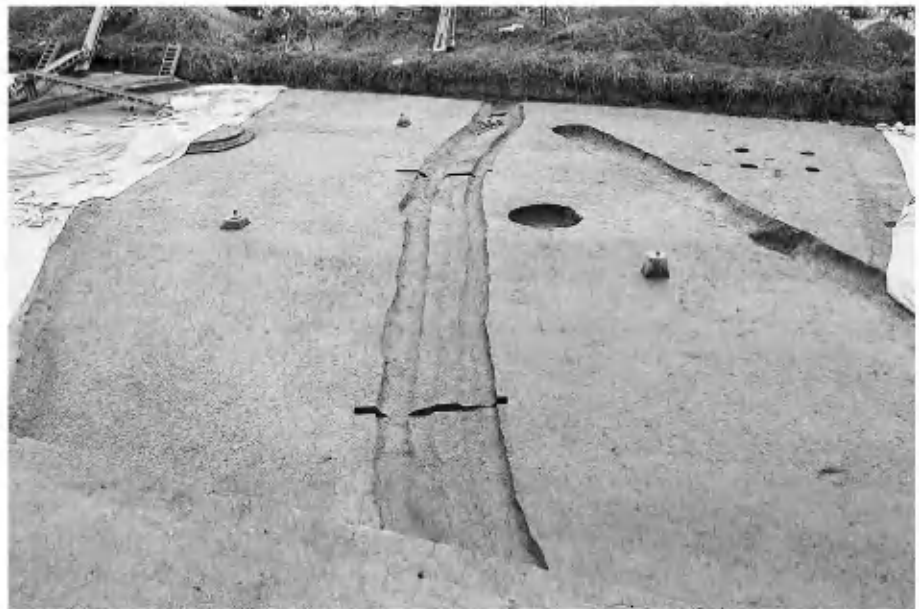


3 溝 44  
(北東から)

1 溝 51 ~ 53  
(南西から)



2 溝 62・63  
(北東から)



3 溝 70 ~ 72  
(南から)



図版 30



1 13 B・C区弥生時代後期末水田（北から）



2 13 C区微高地と水田境（南西から）



3 14・15 B・C区弥生時代後期末水田（西から）



4 21～25 B・C区弥生時代後期末水田（北西から）



5 22・23 B・C区弥生時代後期末水田（北東から）



6 22～24 B・C区弥生時代後期末水田（南東から）



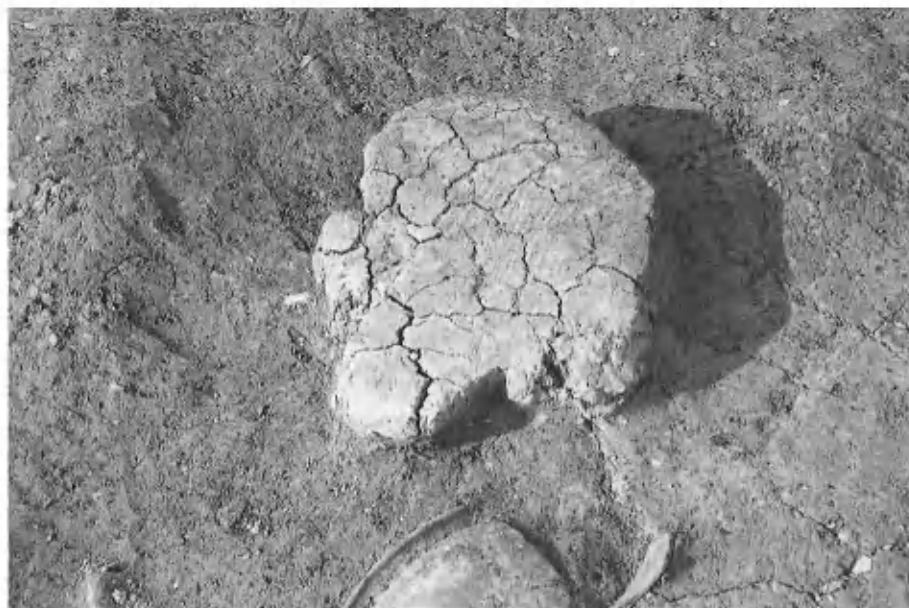
7 22・23 B・C区弥生時代後期末水田（北東から）



8 27B・C区弥生時代後期末水田（北東から）



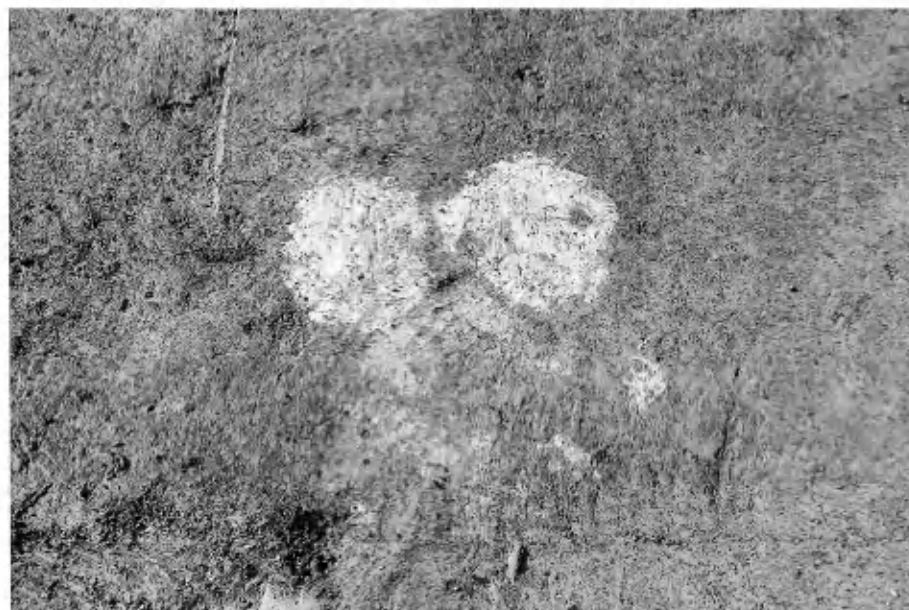
1 竪穴住居9  
粘土塊出土状況  
(南から)



2 土壌24  
粘土塊出土状況  
(南から)



3 粘土配置  
(南西から)



図版 32



1 11～13B・C区  
古墳時代全景  
(北西から)



2 竪穴住居 15・16  
(西から)



3 竪穴住居 15  
(北東から)

1 竪穴住居 19  
(北西から)



2 竪穴住居 20  
(南から)



1 竪穴住居 20  
土器出土状況  
(南から)





1 竪穴住居 22  
カマド  
(南東から)



2 竪穴住居 23  
(南東から)



3 竪穴住居 23  
カマド  
(南西から)



1 竪穴住居 24  
(北東から)



2 竪穴住居 24  
カマド  
(東から)



3 竪穴住居 24  
遺物出土状況  
(南から)





1 豎穴住居 24  
炭化材  
(東から)



2 豎穴住居 25・26  
(北東から)



3 豎穴住居 26  
カマド  
(南西から)

1 竪穴住居 28  
(北西から)



2 建物 4  
(南から)



3 建物 5  
(南から)





1 井戸 14  
(南西から)



2 井戸 15  
(北西から)



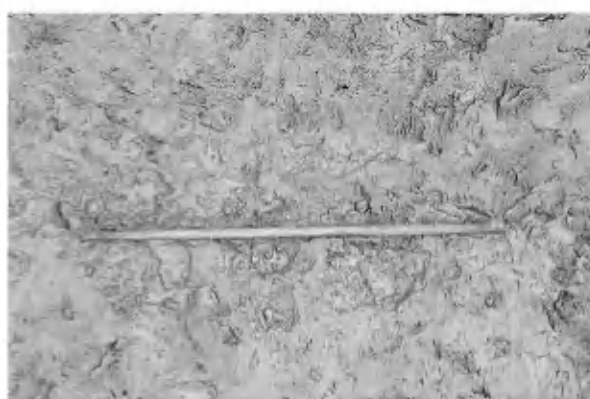
3 井戸 17  
(北から)



1 溝 80 (南から)



2 溝 80 木製品出土状況



3 溝 80 W 22 出土状況



4 溝 80 W 26 出土状況



3 溝 80 M 43 鋤先出土状況



図版 40



1 11～13 B・C区古代以降遺構全景（北西から）



2 13～15 B・C区古代以降遺構全景（北から）

1 建物 6・7  
(西から)



2 建物 9  
(南から)



3 建物 10  
(北から)



図版 42



1 井戸 19 上層  
(西から)



2 井戸 19  
曲げ物出土状況  
(東から)



3 井戸 20・21  
(北から)



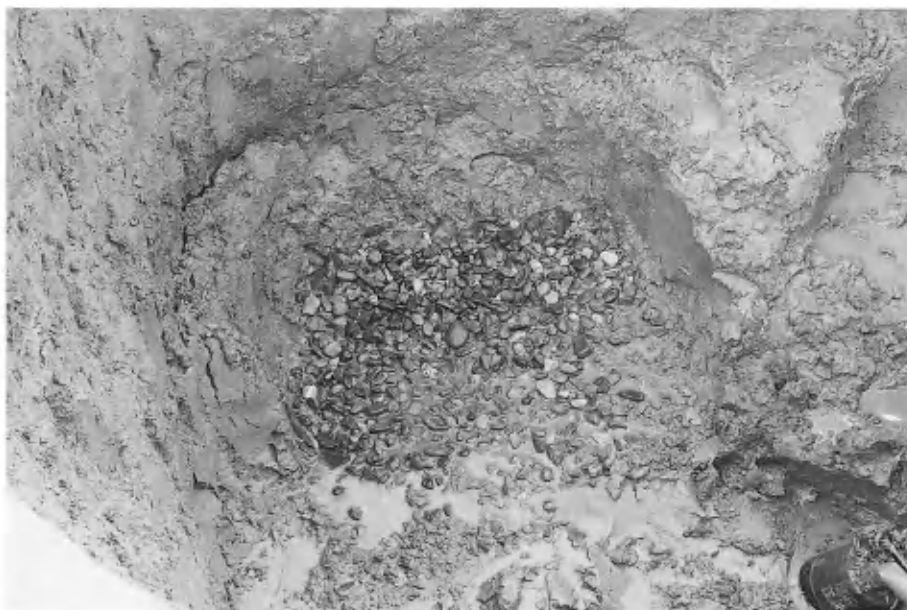
1 井戸 20  
(東から)



2 井戸 21  
(東から)



3 井戸 22  
砂利敷き  
(南東から)



図版 44



1 井戸 22 断面  
(東から)



2 井戸 23  
(北から)



3 井戸 23 断面  
(北から)



1 井戸 24 上層  
(南から)



2 井戸 24  
(南から)



3 土壌 82  
(南西から)



1 土壌 86  
(西から)



2 土壌 95  
(東から)



3 土壌 107  
(南西から)

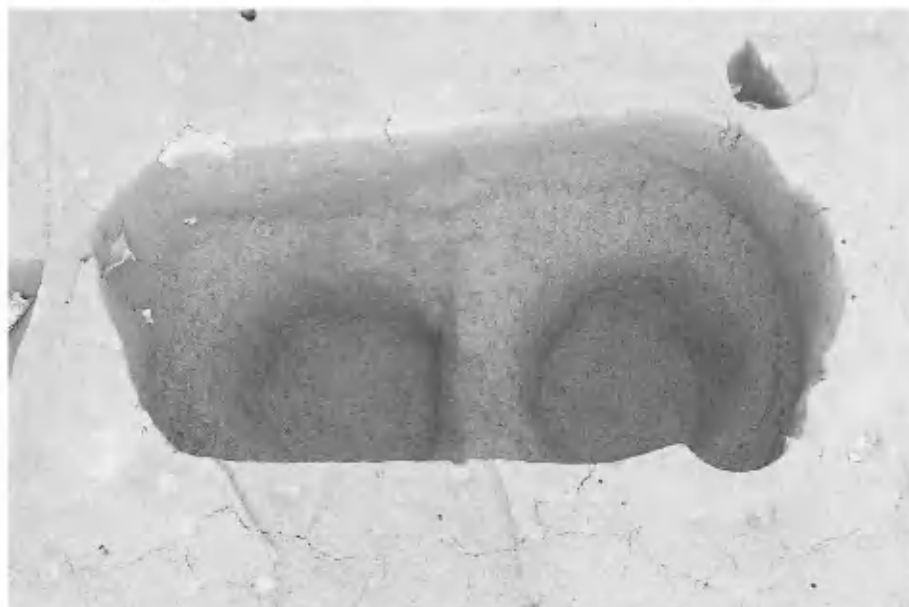
1 土壇 109・110  
(南東から)



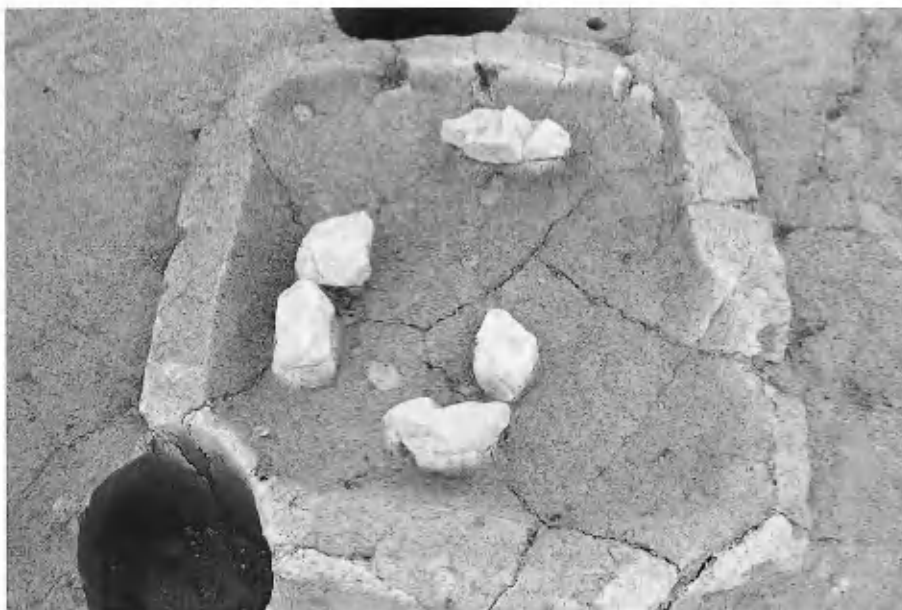
2 土壇 116  
(北東から)



3 土壇 119  
(南から)







1 土壙 127  
(南から)



2 土壙 129  
(南西から)



3 土壙 157  
(南から)

1 土壌 159～163  
(東から)



2 土壌 162  
(北から)



3 溝 115 石組み  
(東から)



図版 50



1 溝 128  
(北から)

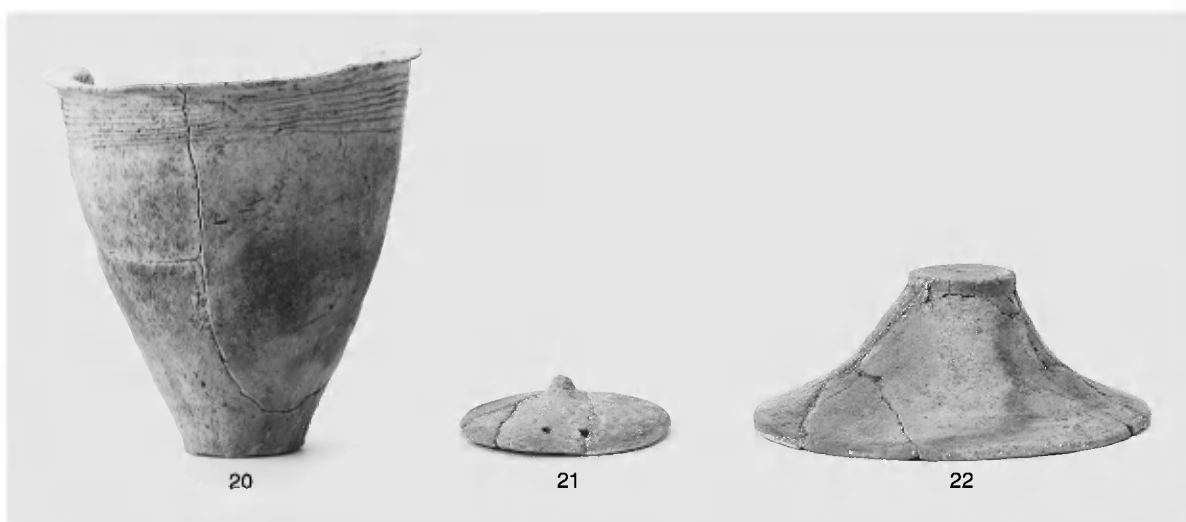


2 溝 130  
(南西から)

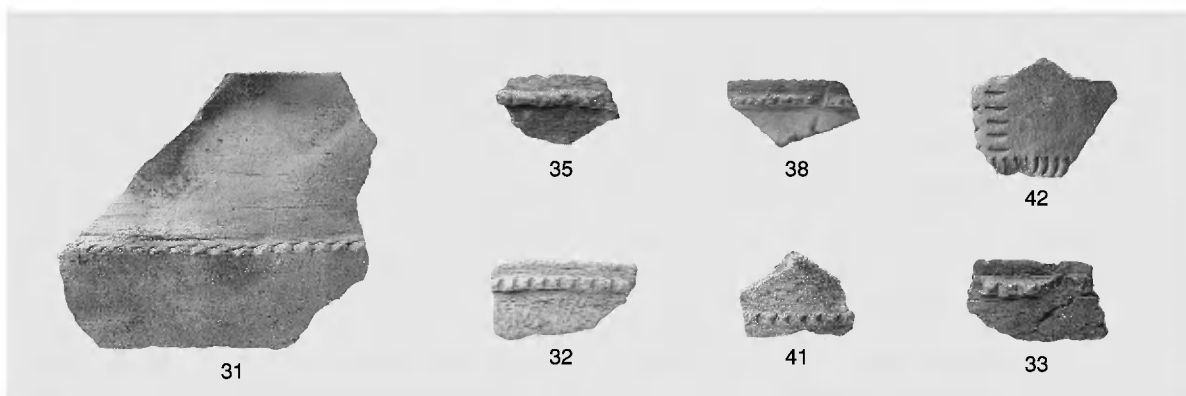


3 溝 130 杭列  
(南東から)

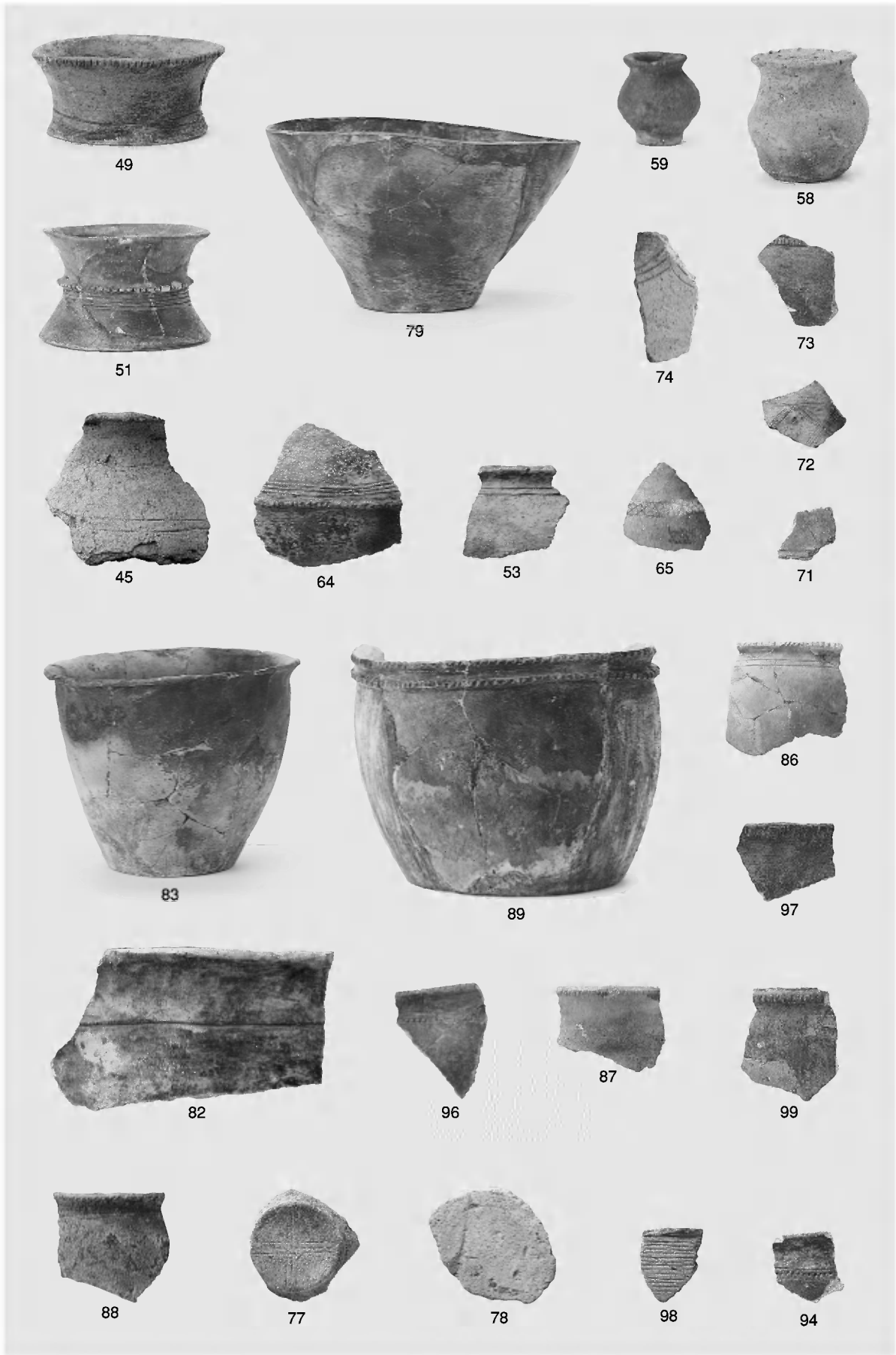




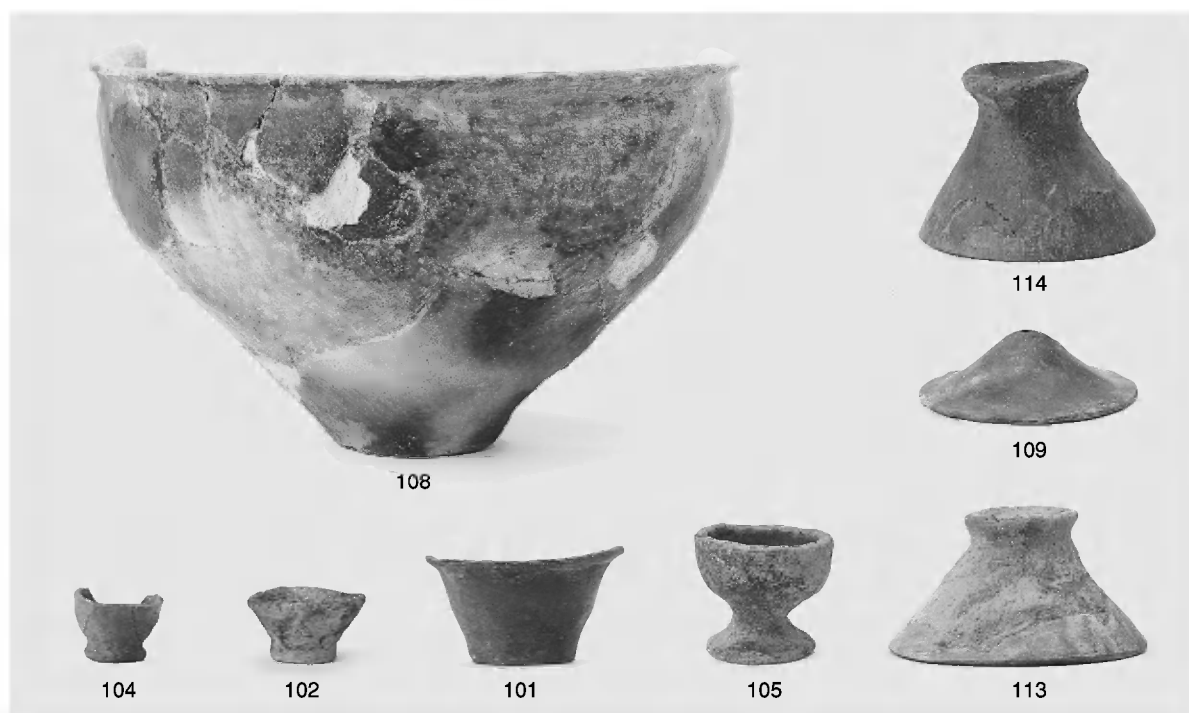
1 土壤3出土遺物



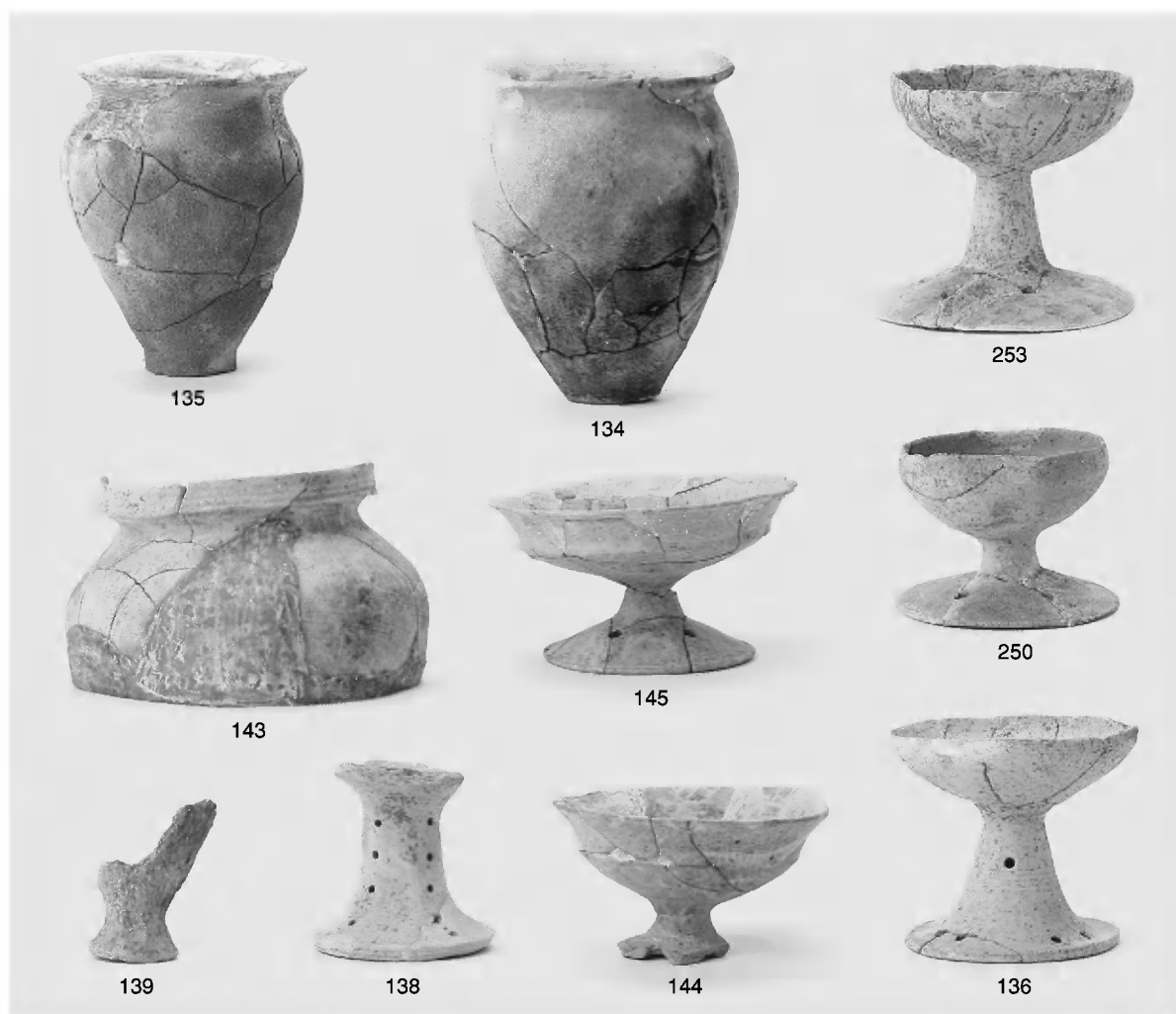
2 旧河道出土遺物①



旧河道出土遺物②



1 旧河道出土遺物③

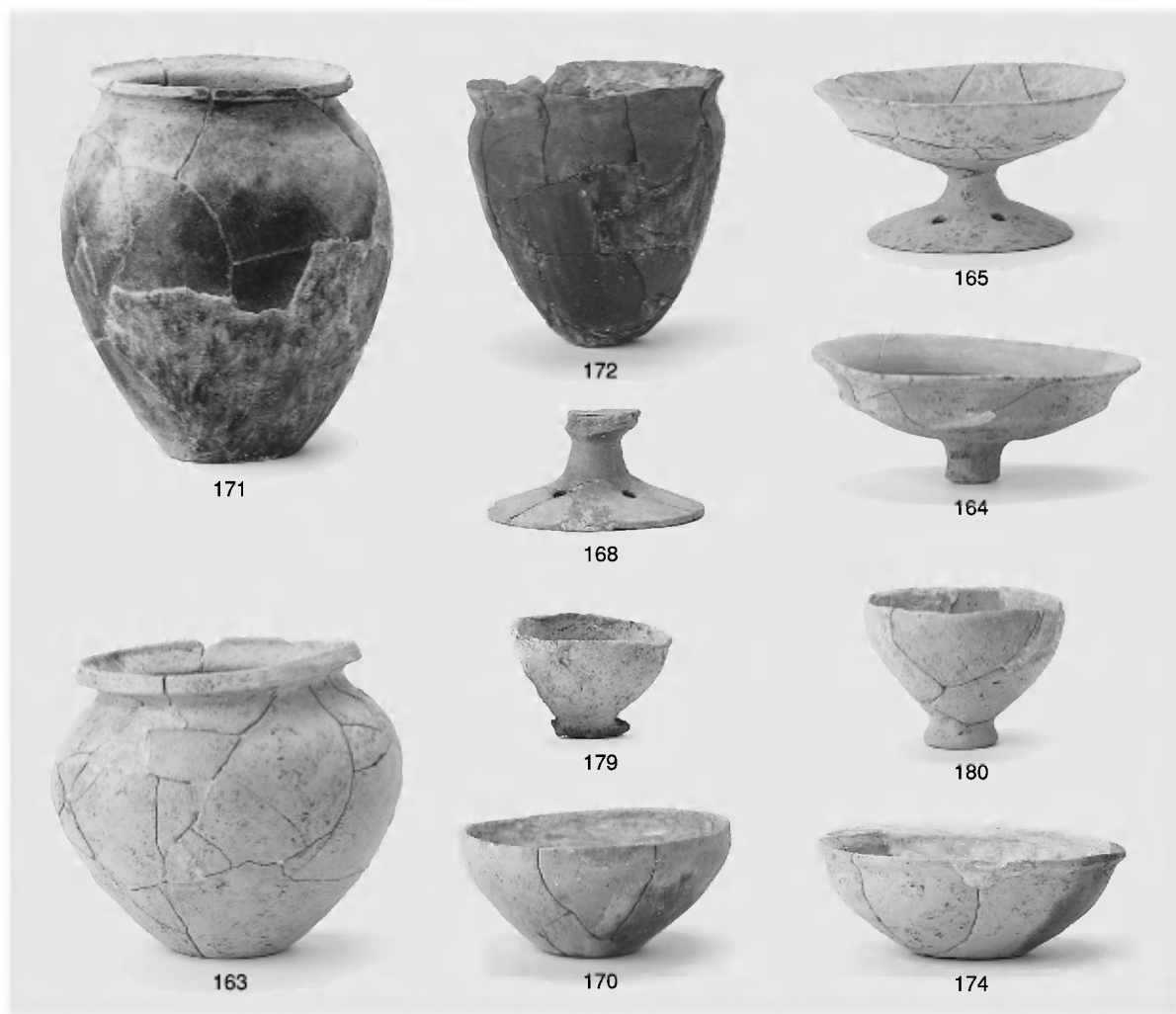


2 竖穴住居 3・4・10・11 出土遺物

图版 54



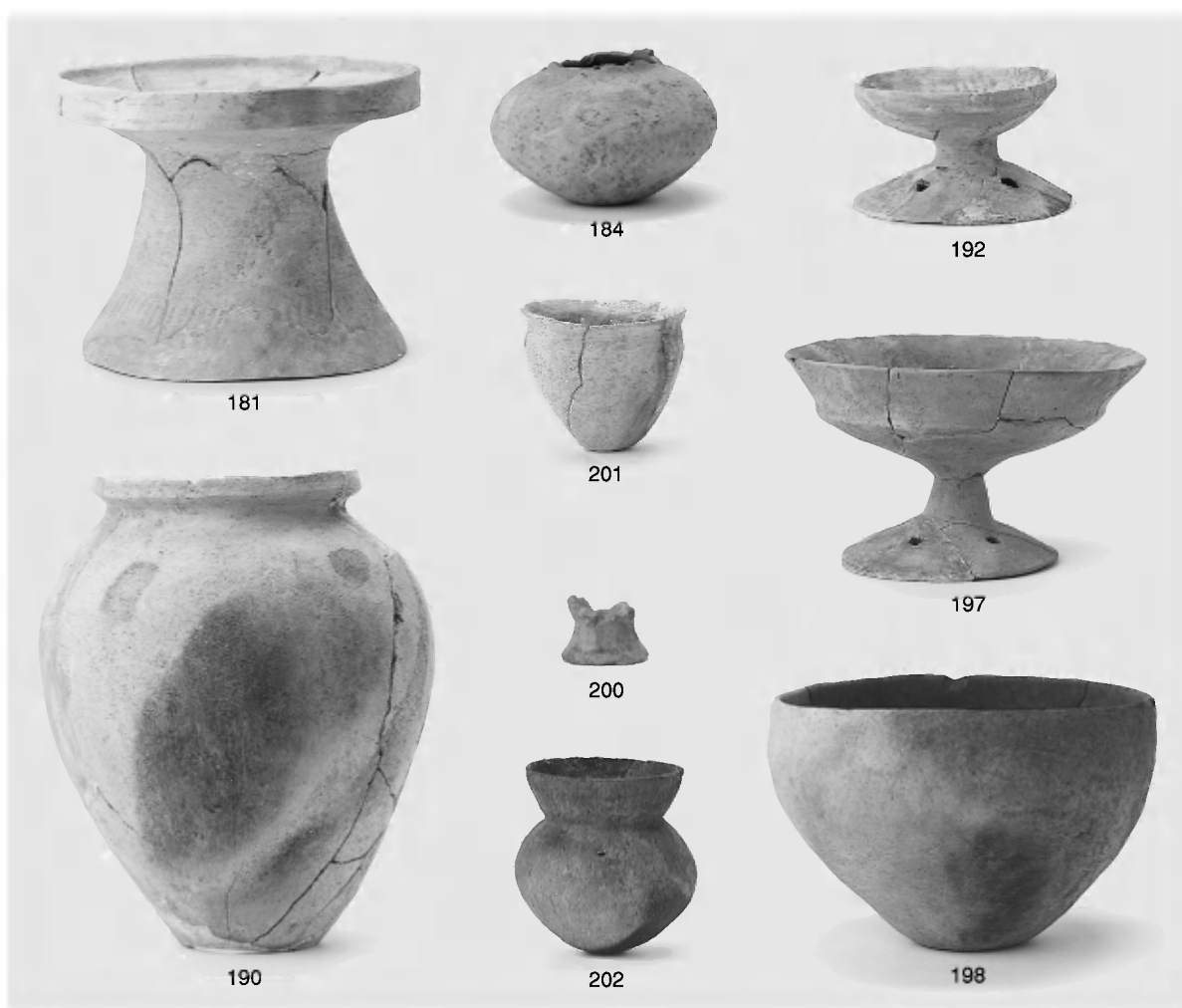
1 豎穴住居 5 出土遺物



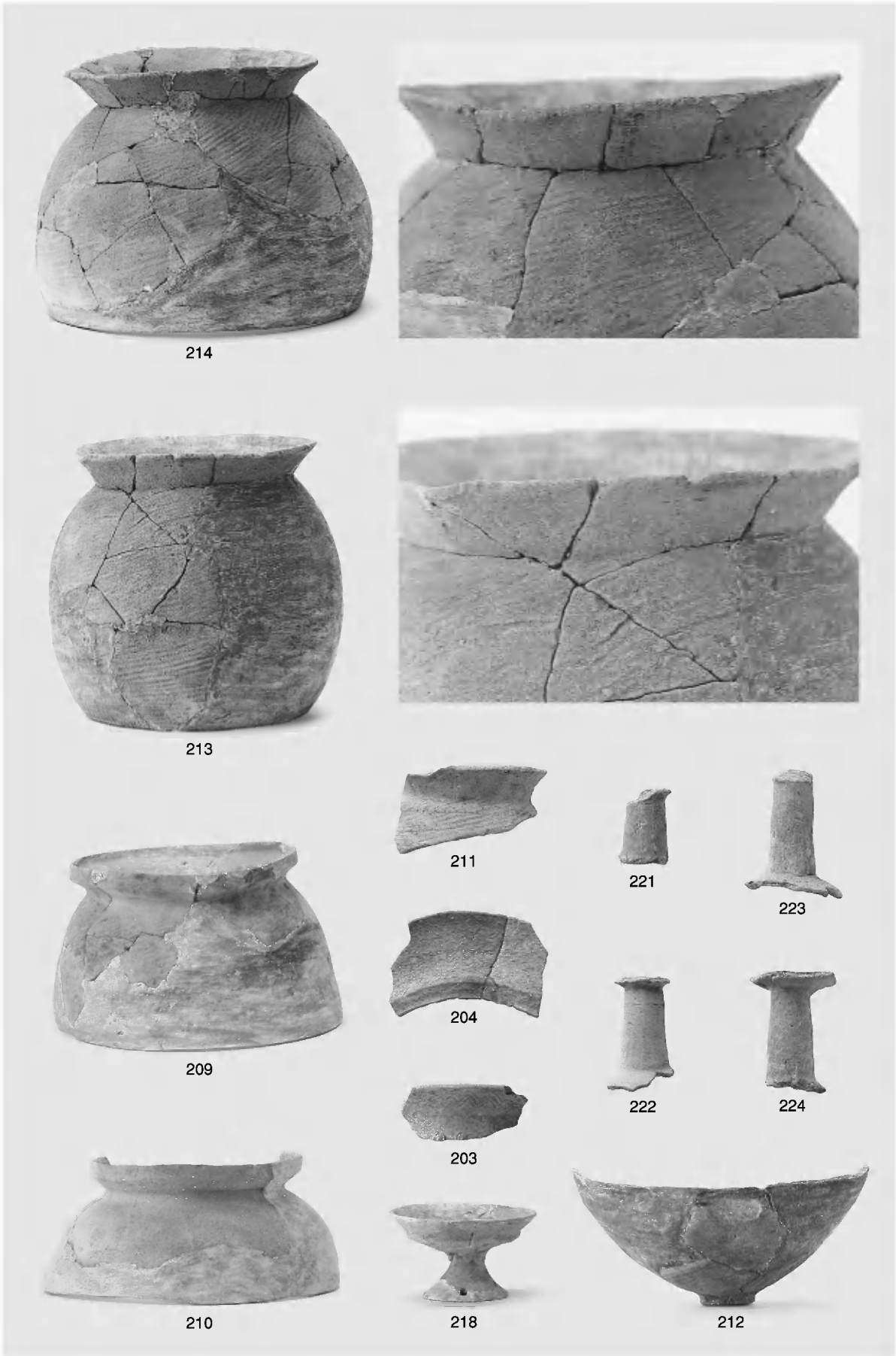
2 豎穴住居 6 出土遺物



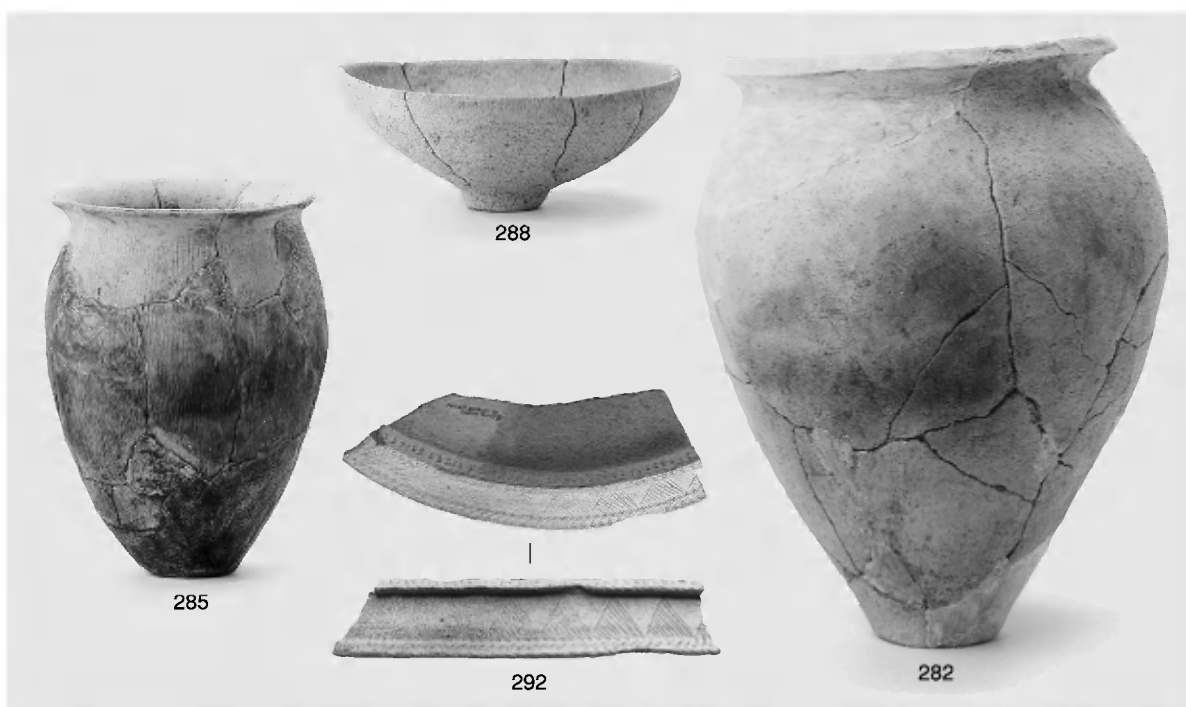
1 豎穴住居 9 出土遺物



2 豎穴住居 7 出土遺物



竖穴住居7土器溜り出土遺物

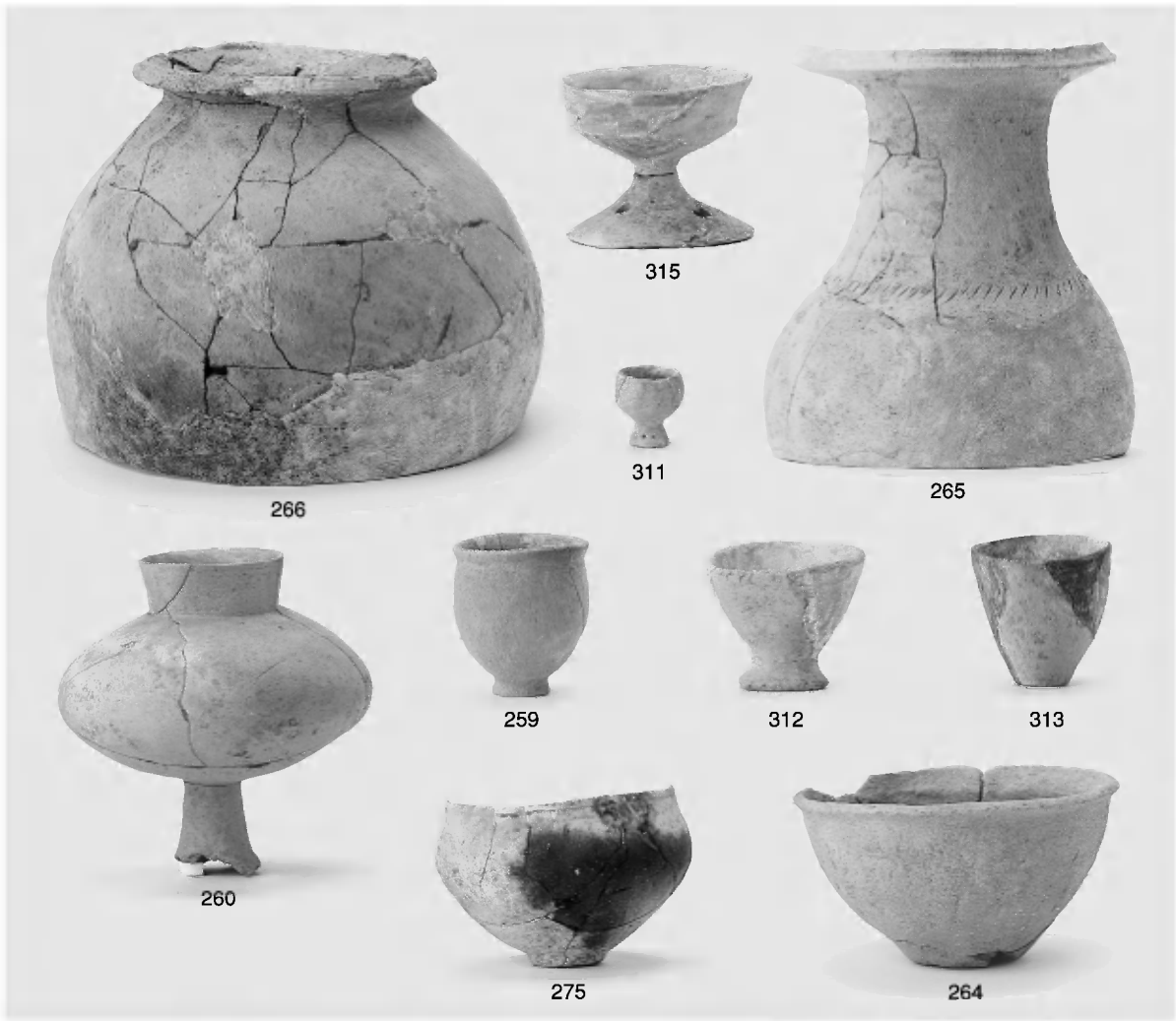


1 溝33出土遺物



2 溝37出土遺物





1 溝26 ~ 29・36出土遺物



2 井戸1出土遺物①

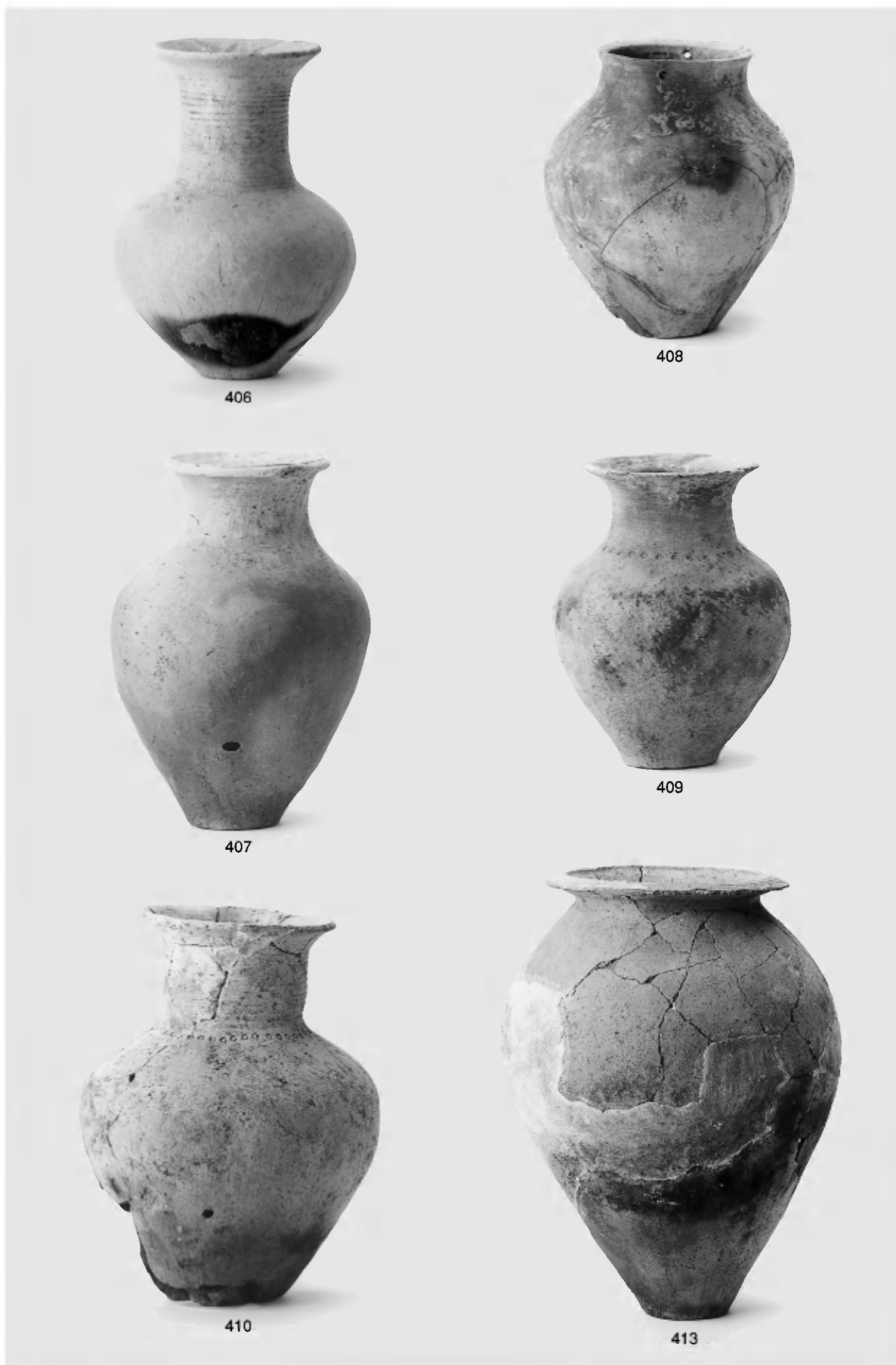




井戸1出土遺物②



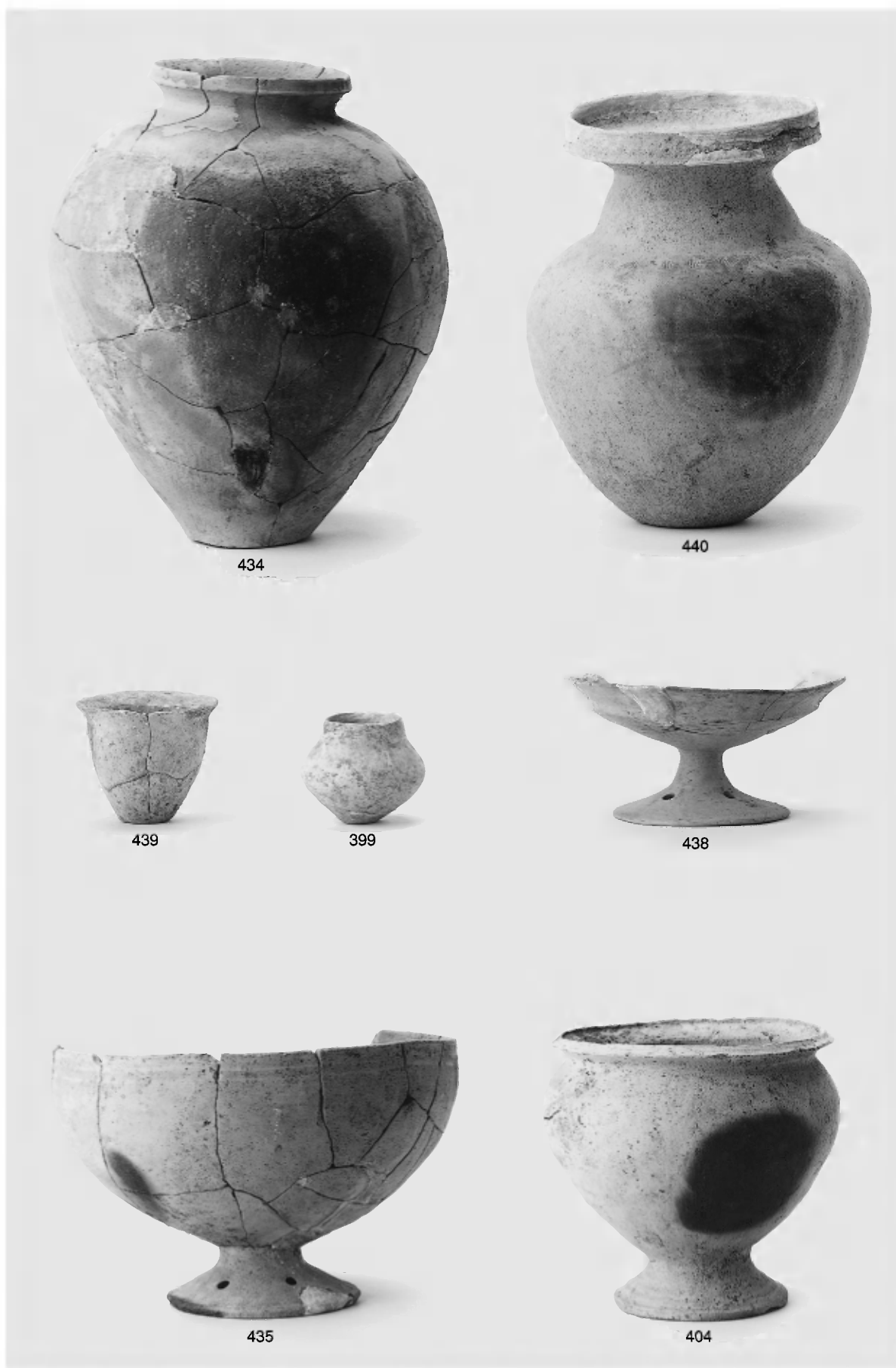
井戸1出土遺物③



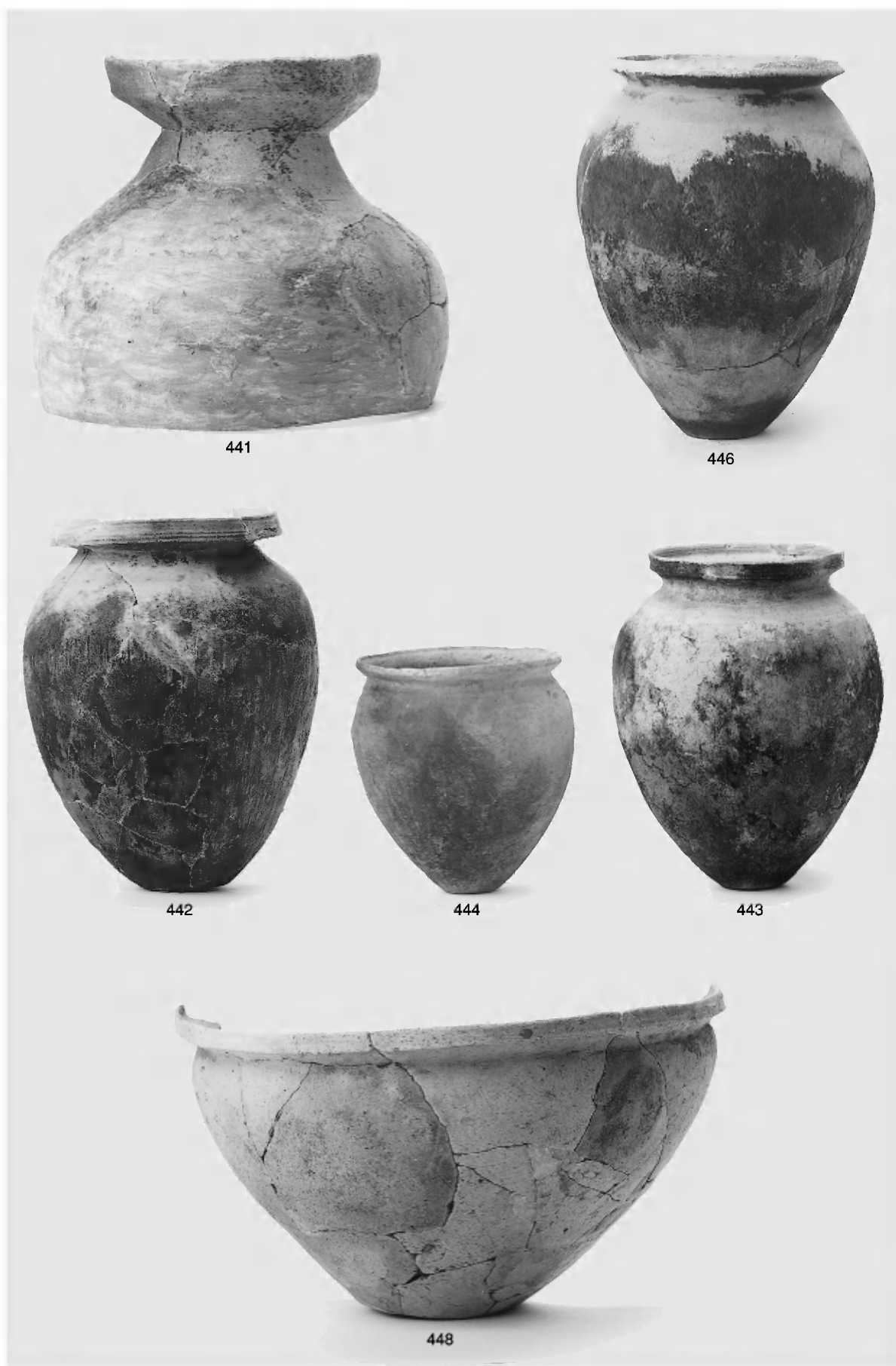
井戸 7 出土遺物①



井戸7出土遺物②



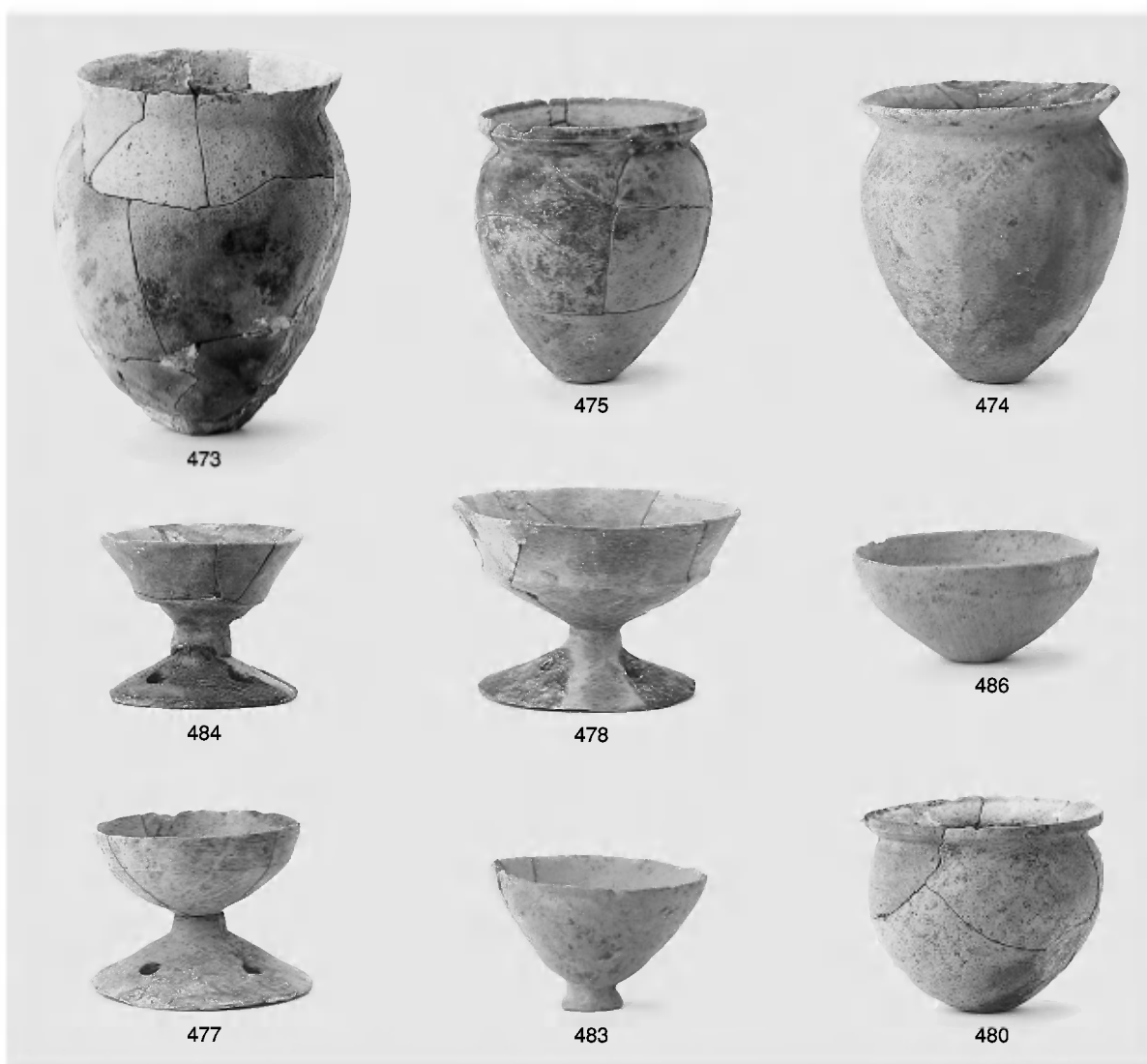
井戸 4・6・8・9 出土遺物



井戸 11 出土遺物



1 土壤7出土遺物

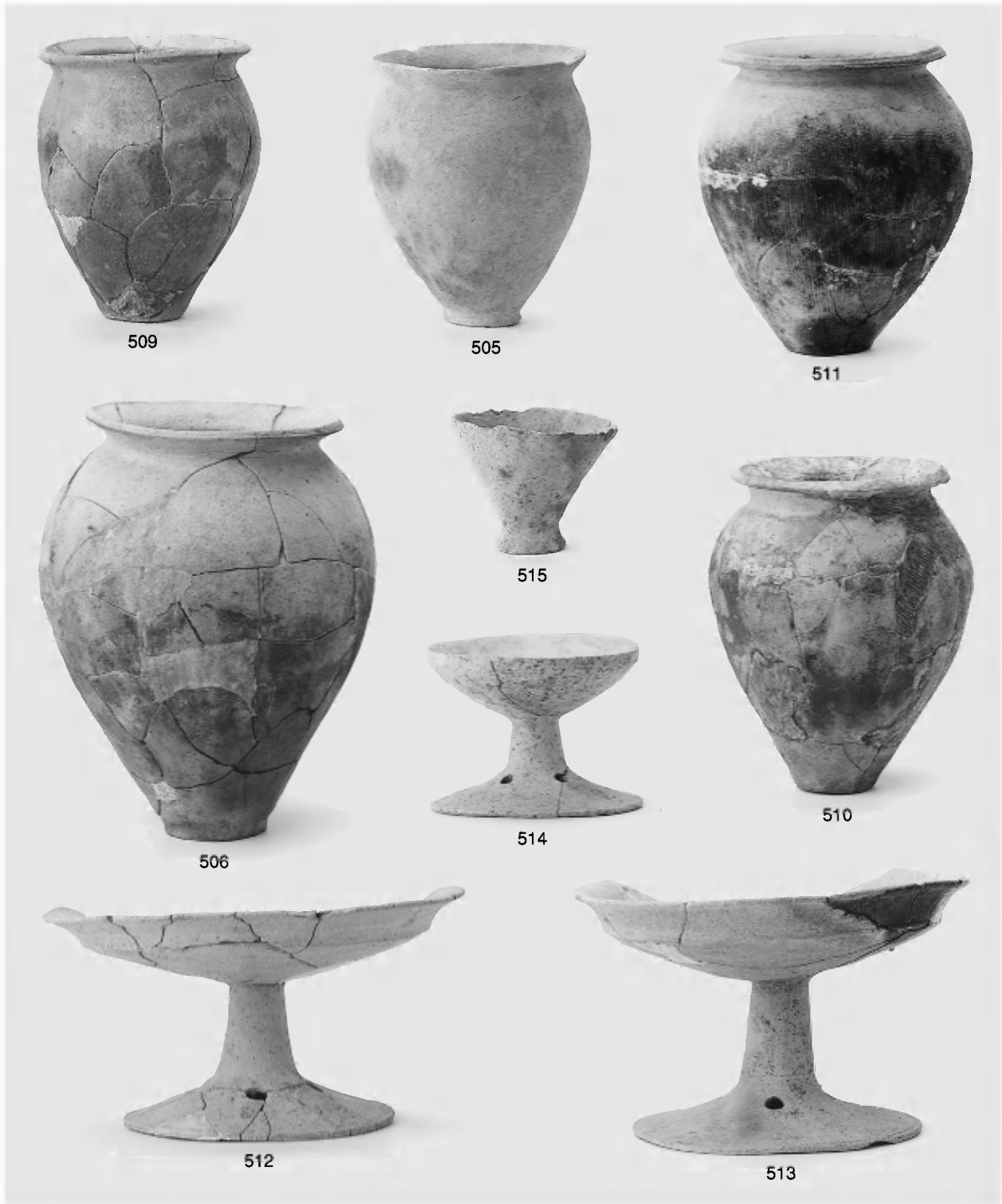


2 土壤12出土遺物



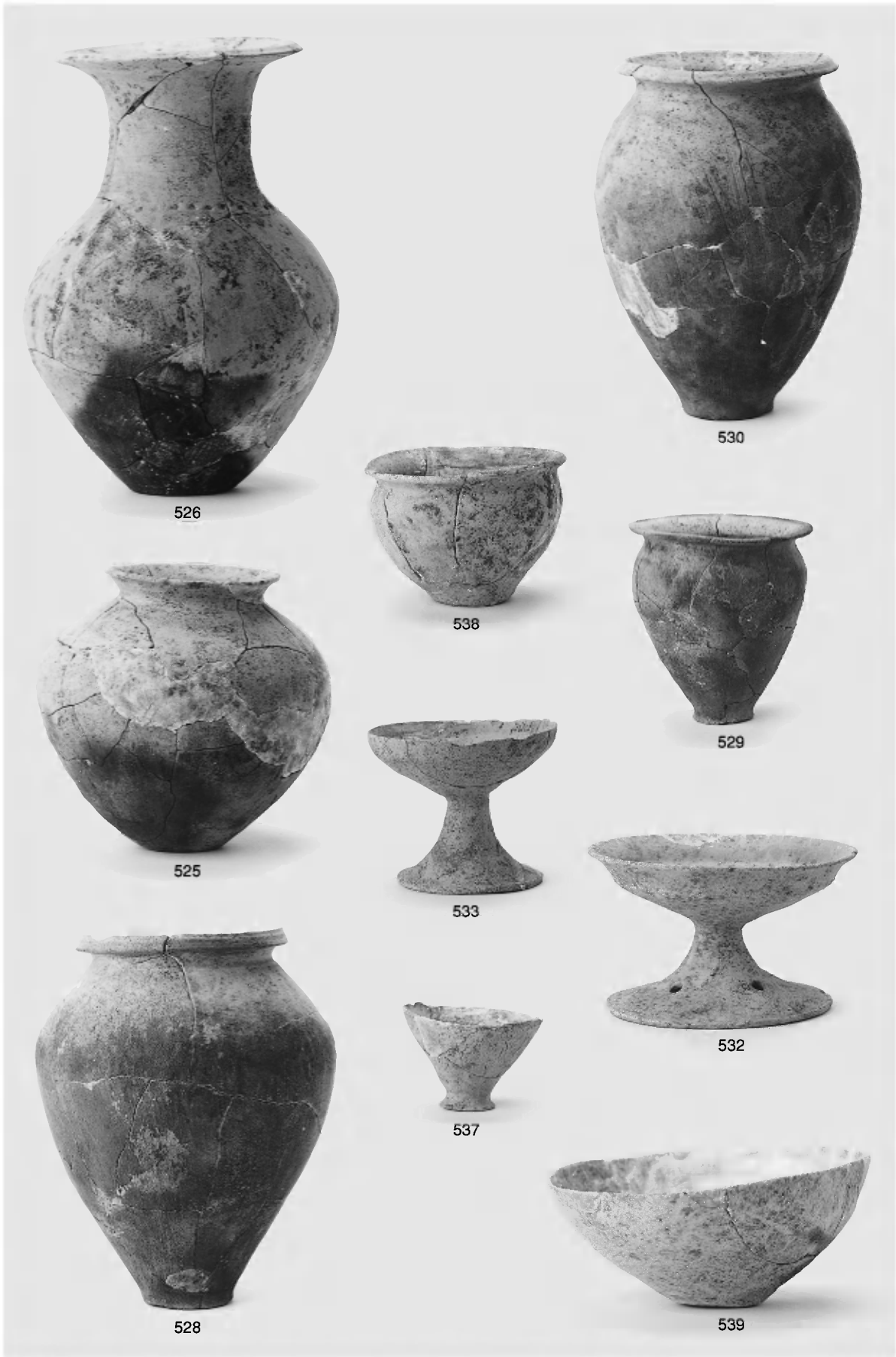


1 土壤14出土遺物

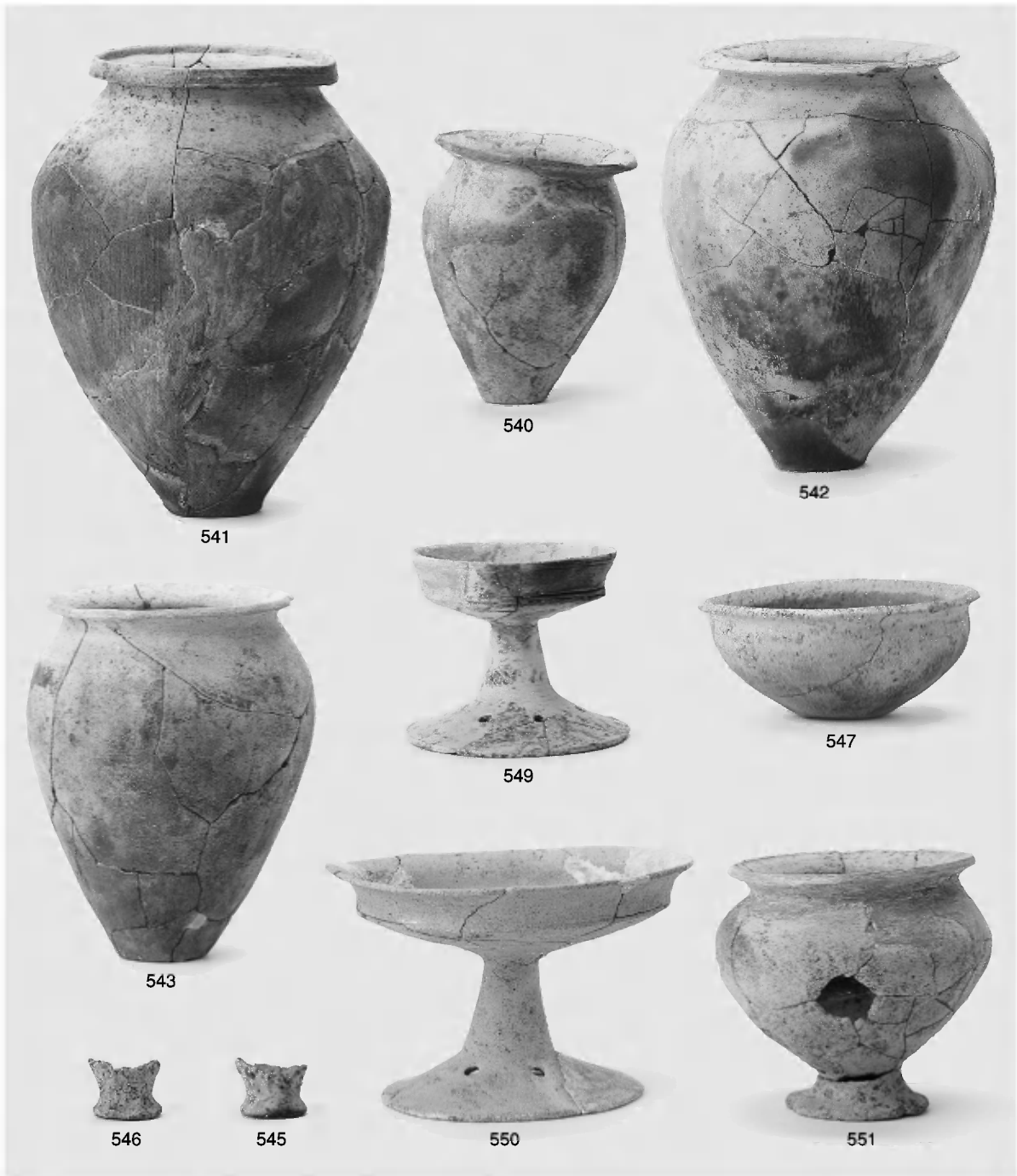


2 土壤19出土遺物





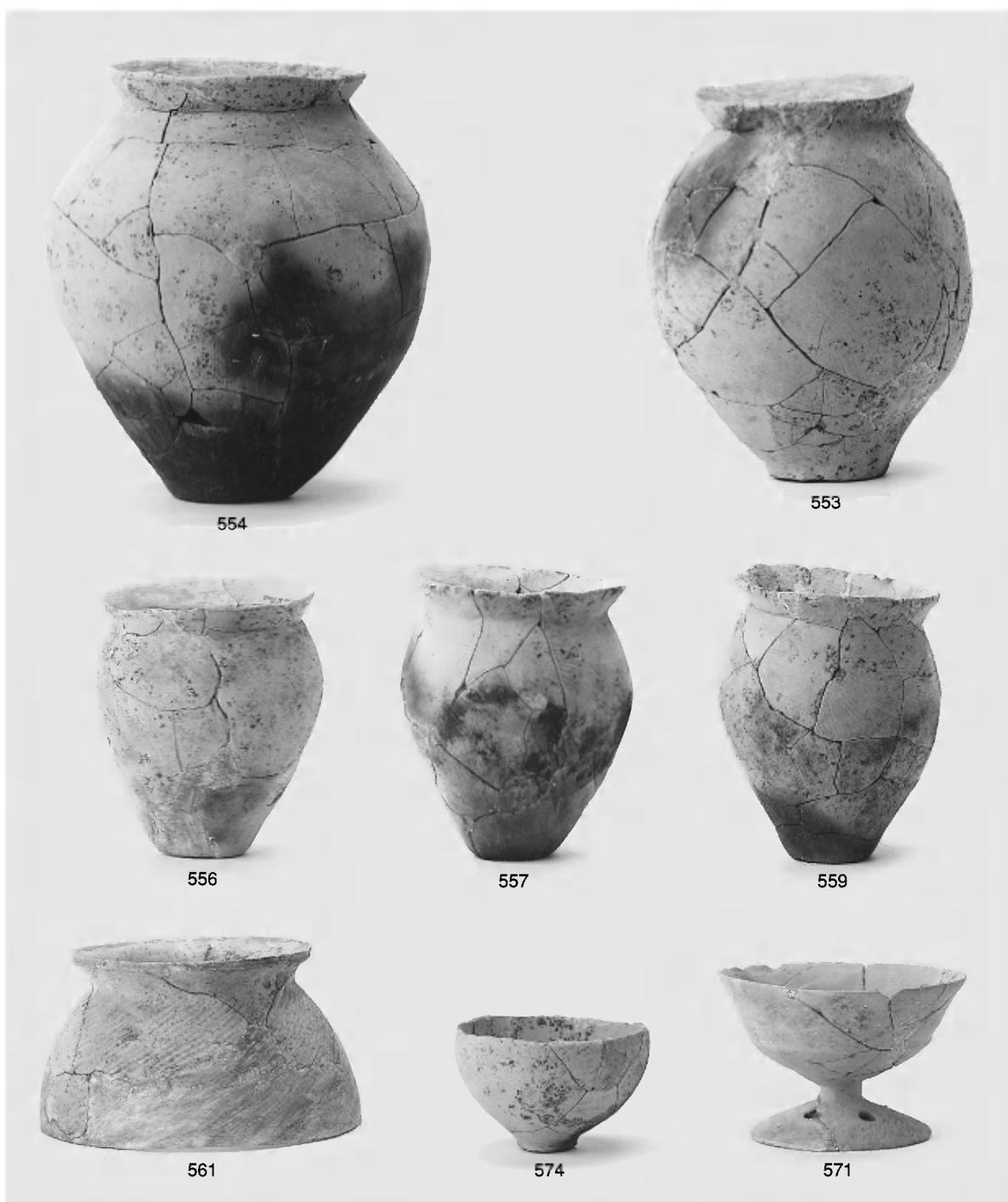
土壤25出土遺物



1 土壤26出土遺物



2 土壤8・11出土遺物



1 土壤27出土遺物



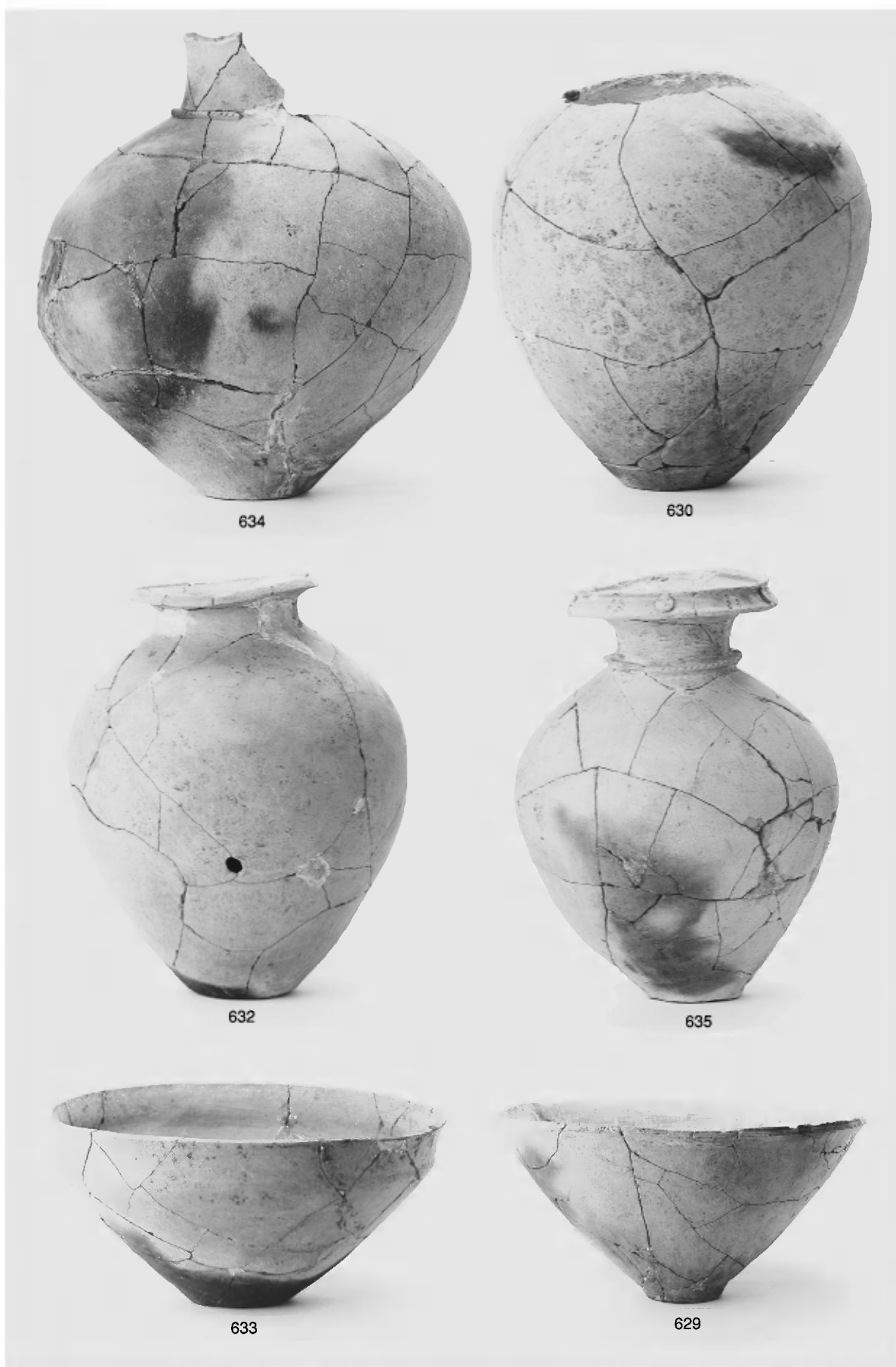
2 土壤53出土遺物



1 土壤36出土遺物



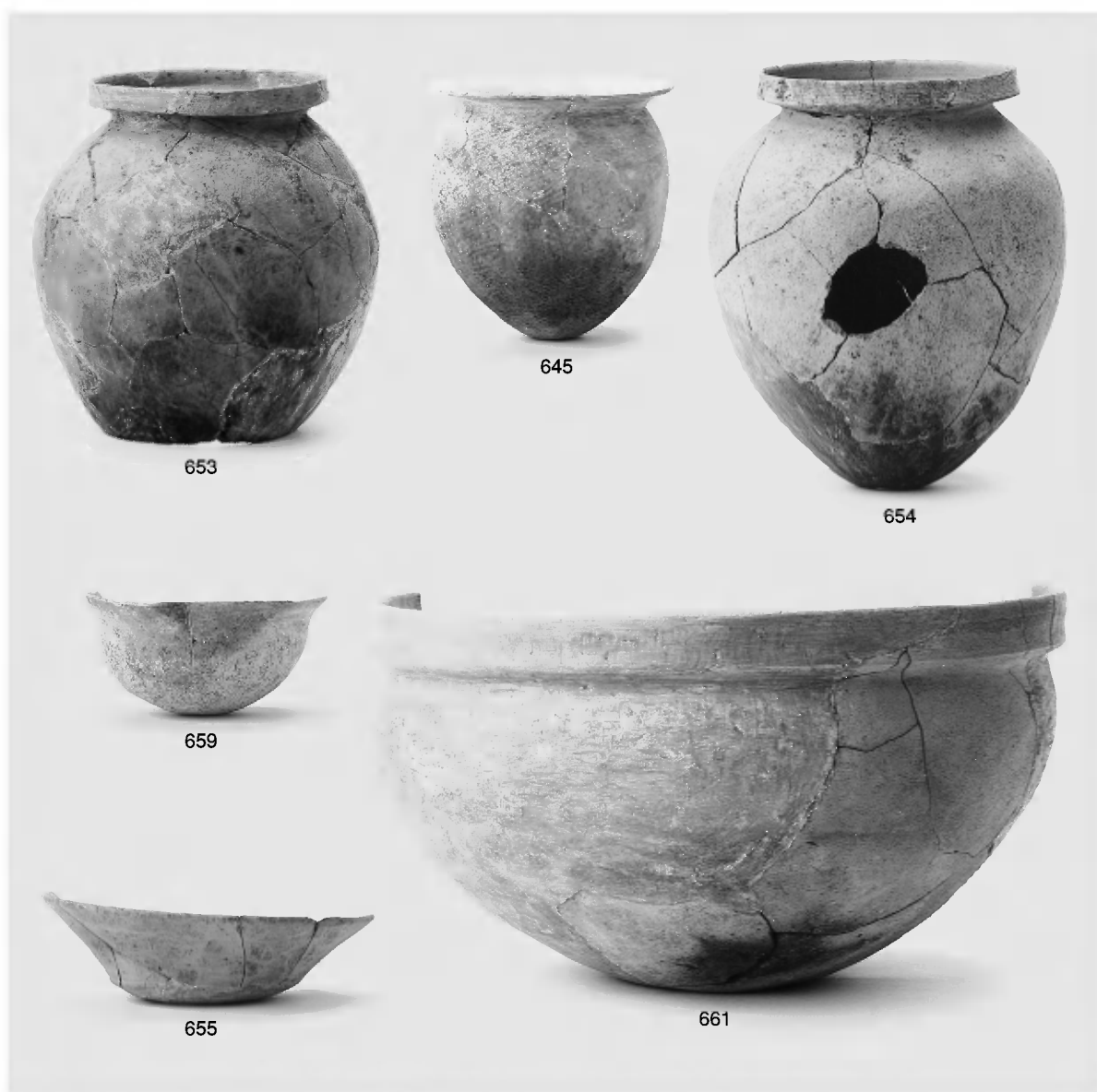
2 土壤46出土遺物



土器棺墓1~3土器遺物



1 炉 2 出土遺物



2 溝43 (上層) 出土遺物

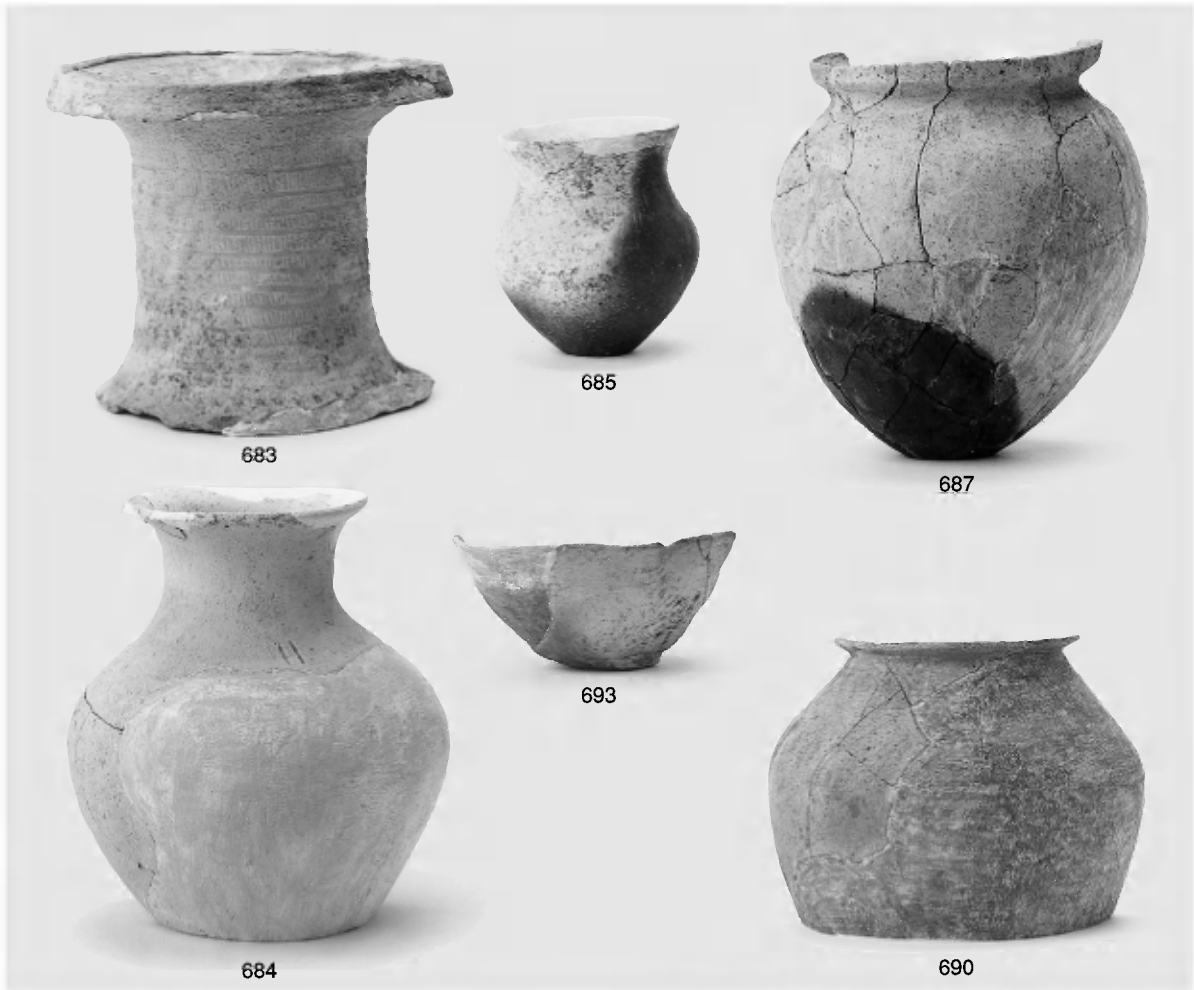


溝43 (下層) 出土遺物①



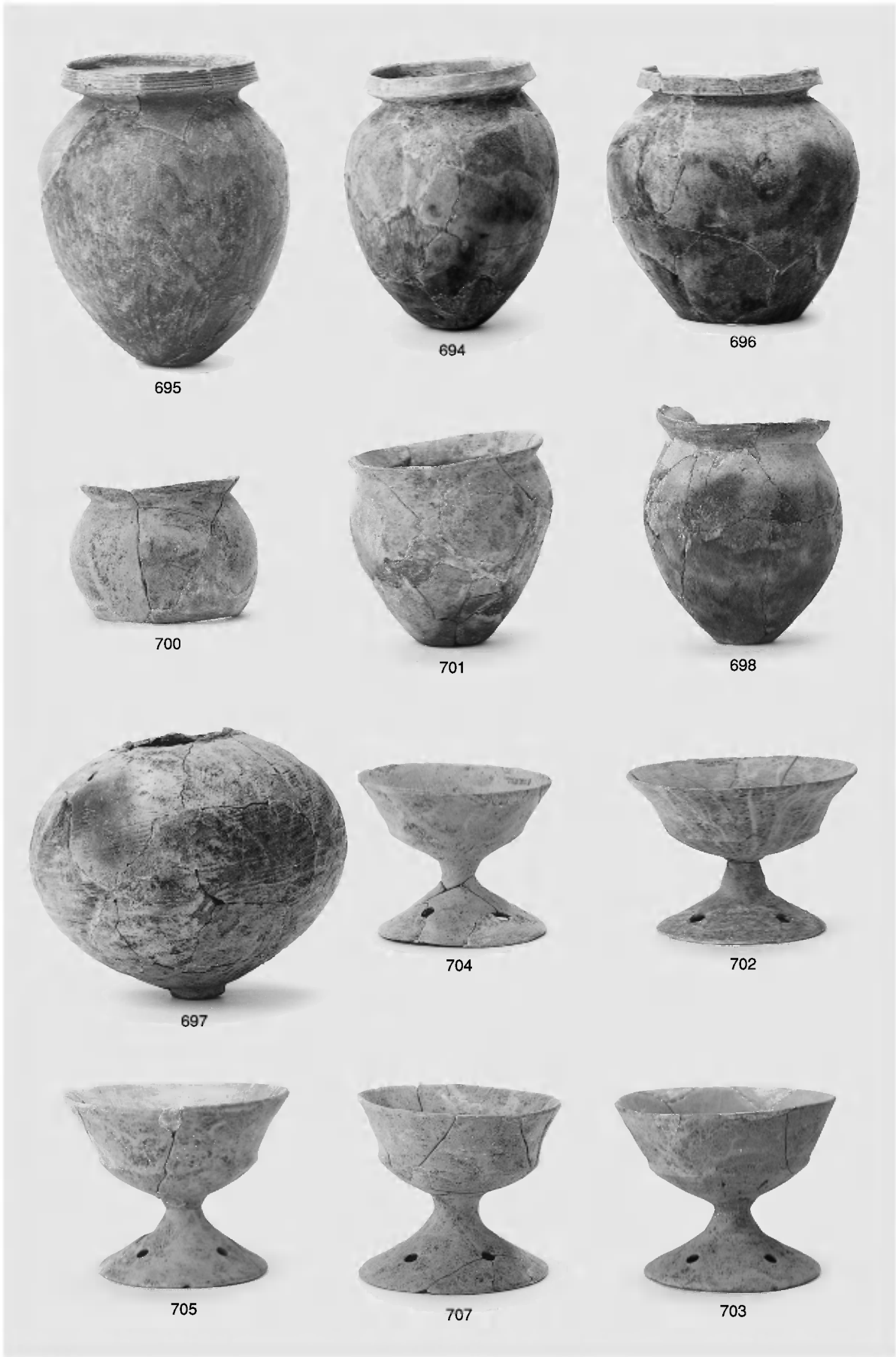


1 溝43(下層)出土遺物②



2 溝44出土遺物



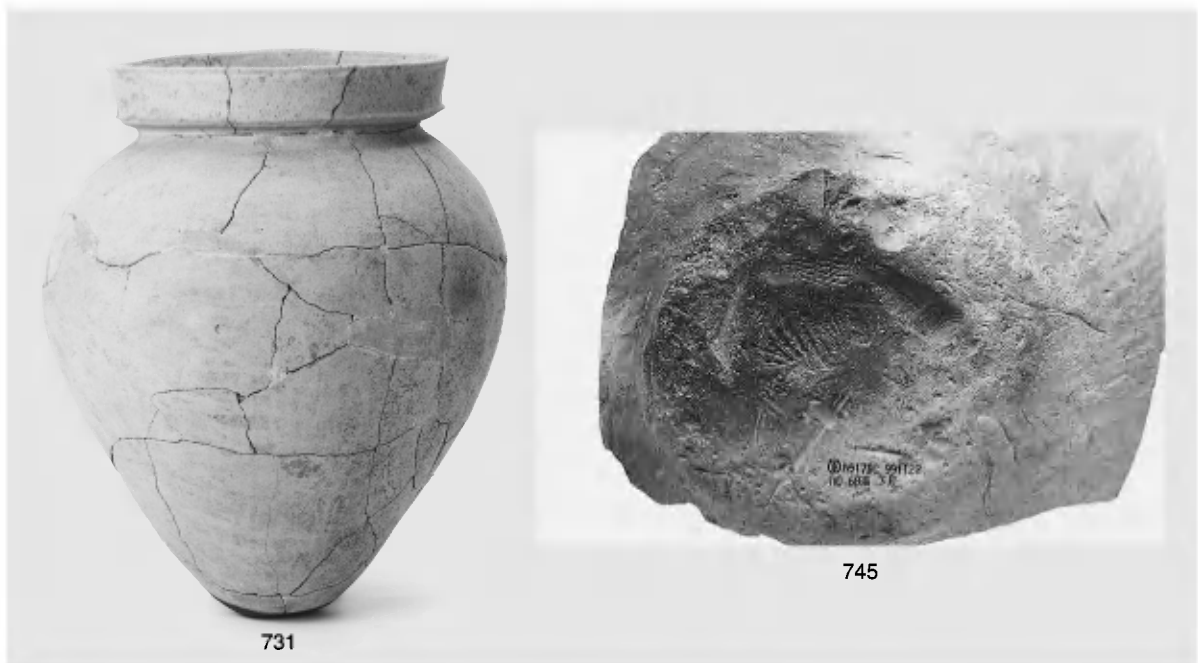


溝45（上層）出土遺物①

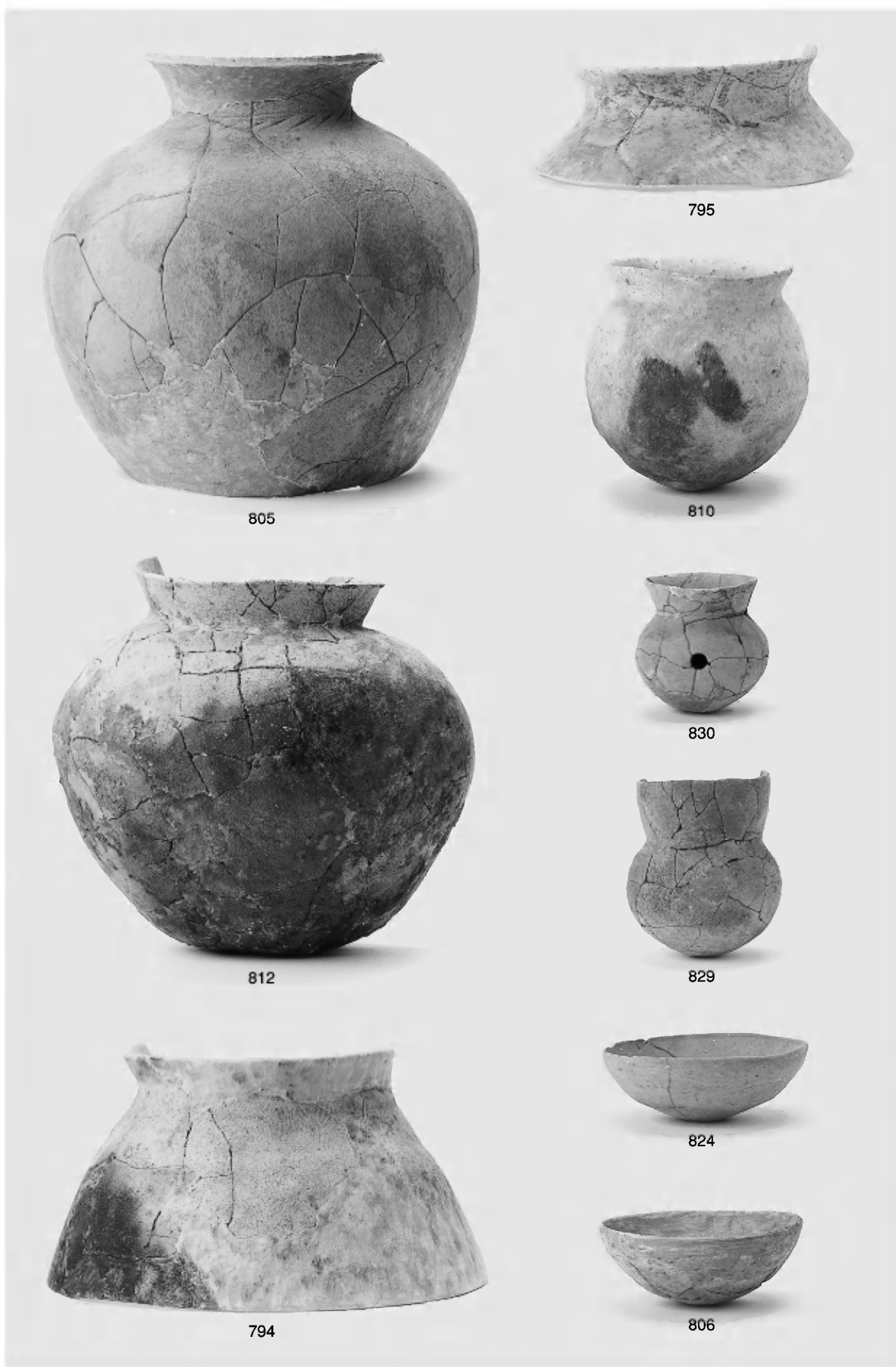
図版 76



1 溝45（上層および下層）出土遺物



2 溝53出土遺物



豎穴住居14・16・19・21・22 出土遺物



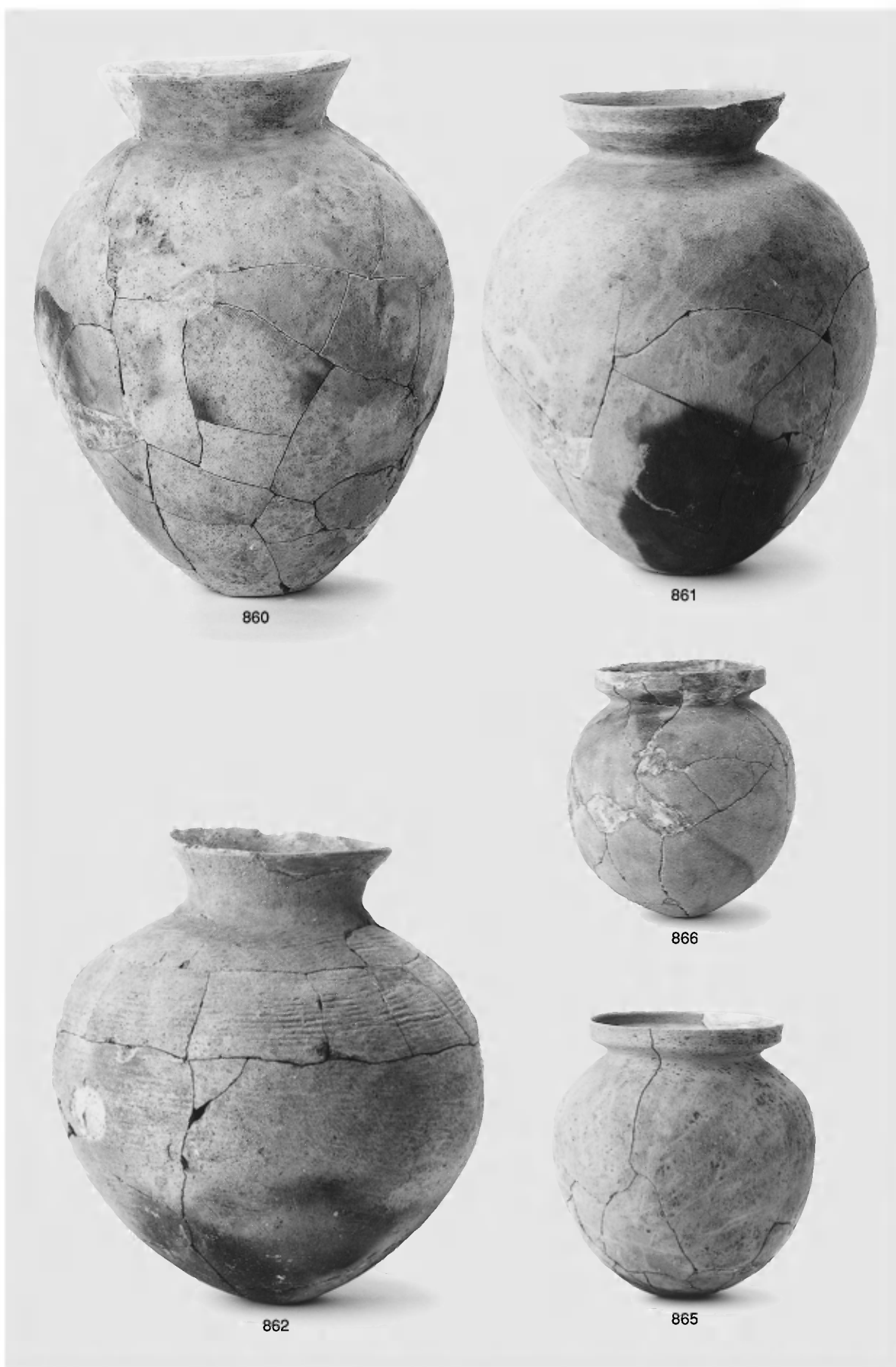
1 豎穴住居20出土遺物



2 豎穴住居24出土遺物



3 豎穴住居23・28出土遺物

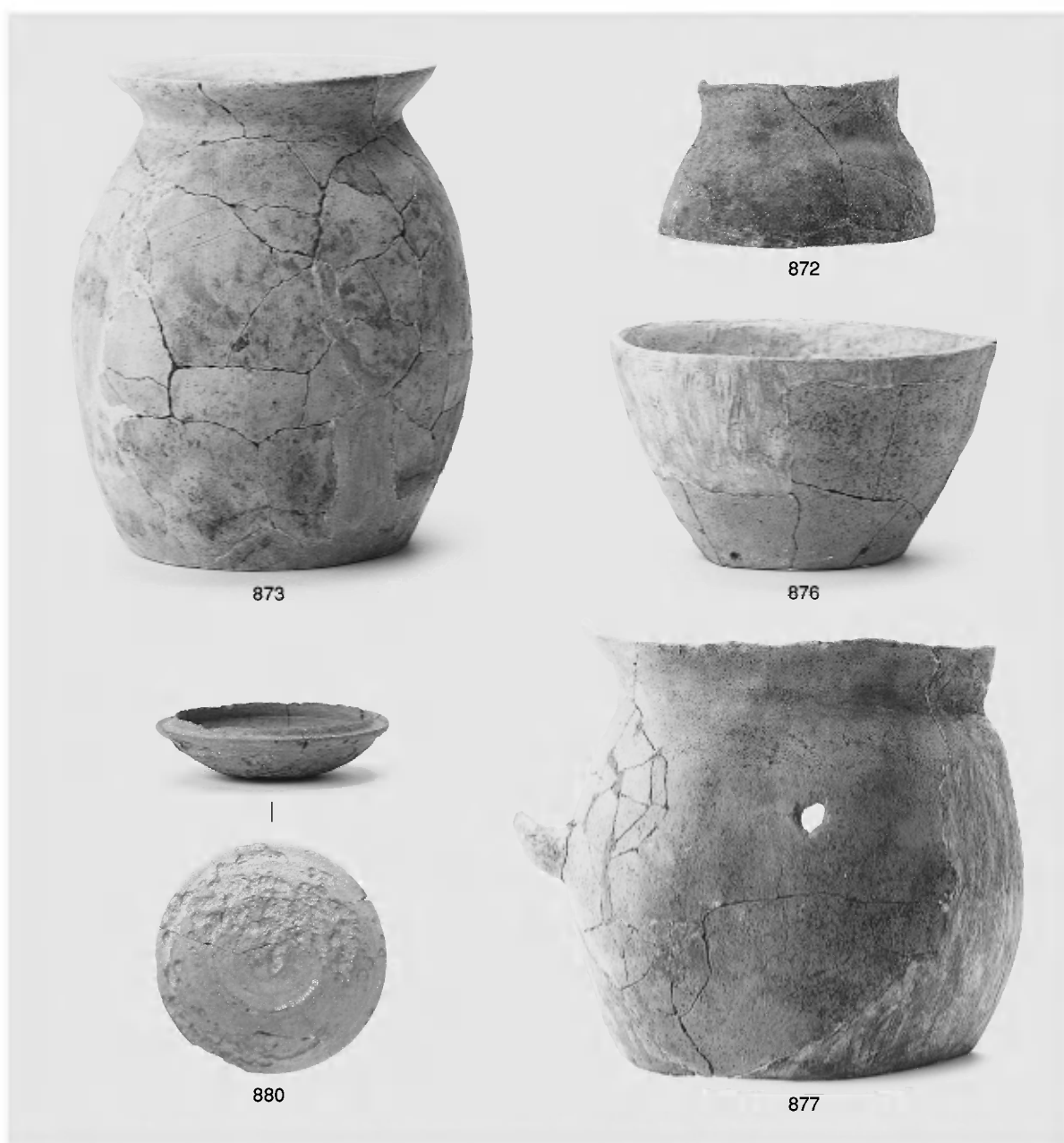


井戸14出土遺物①

图版 80



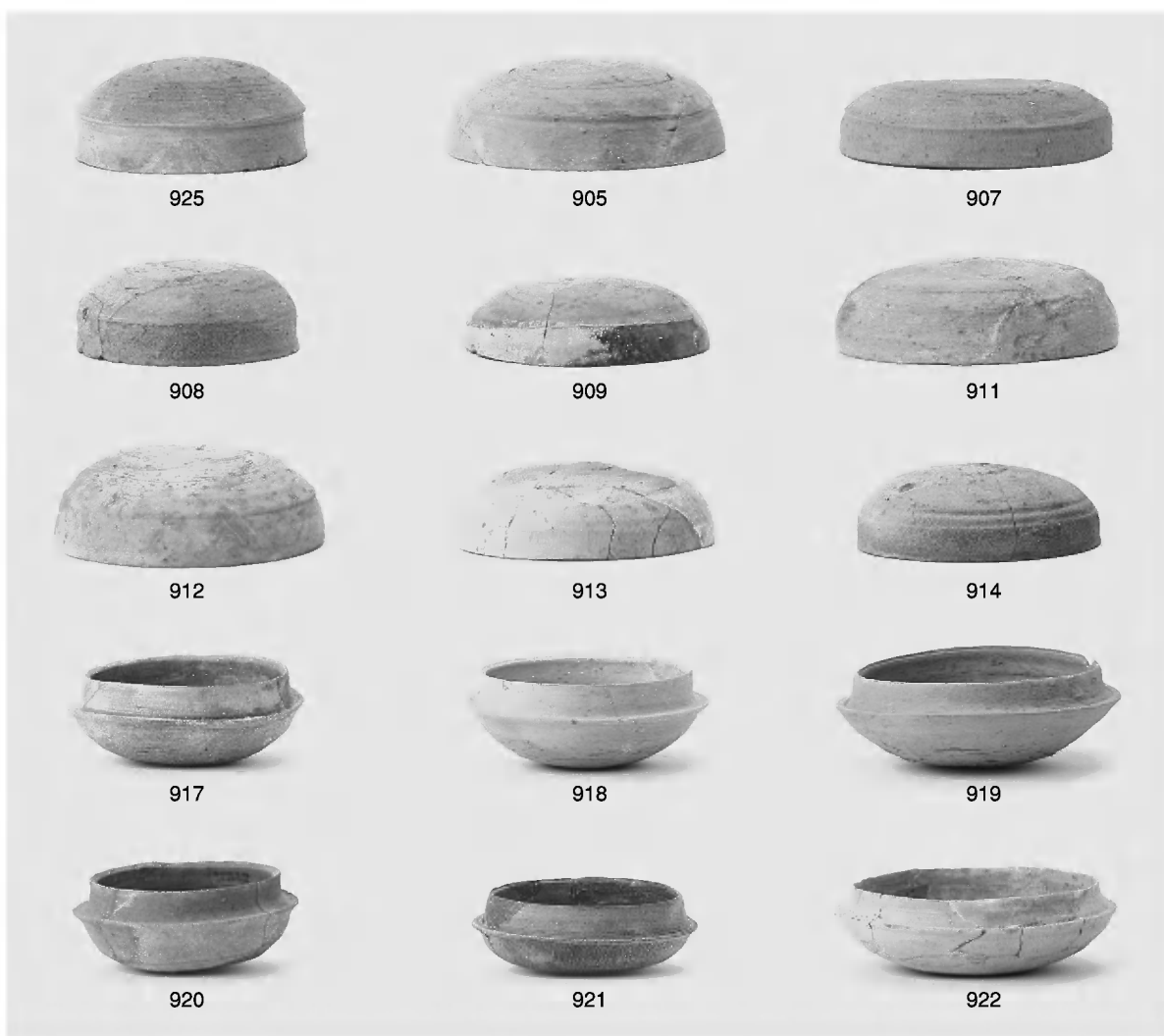
1 井戸14出土遺物②



2 井戸15出土遺物

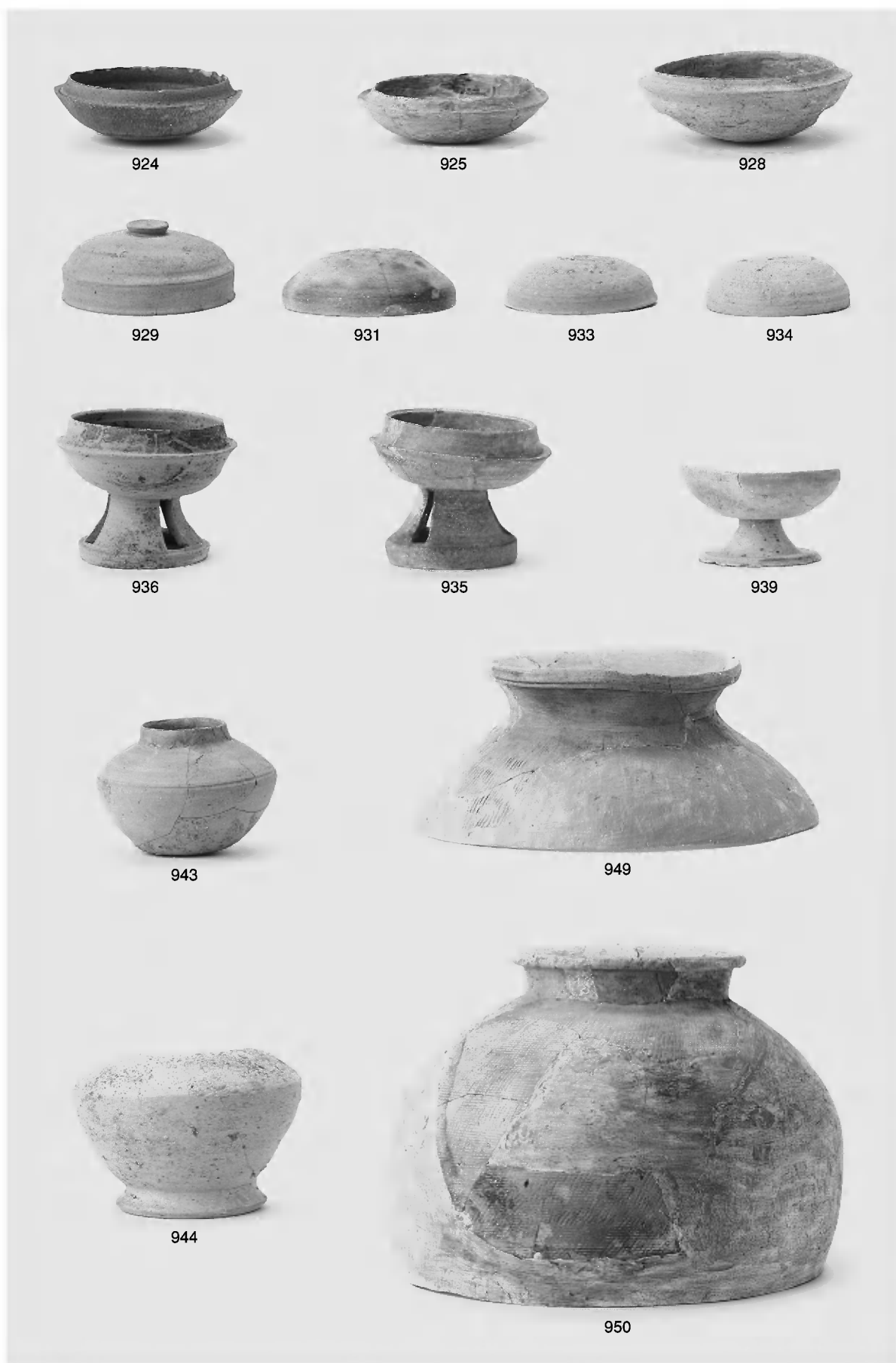


1 井戸16・17出土遺物



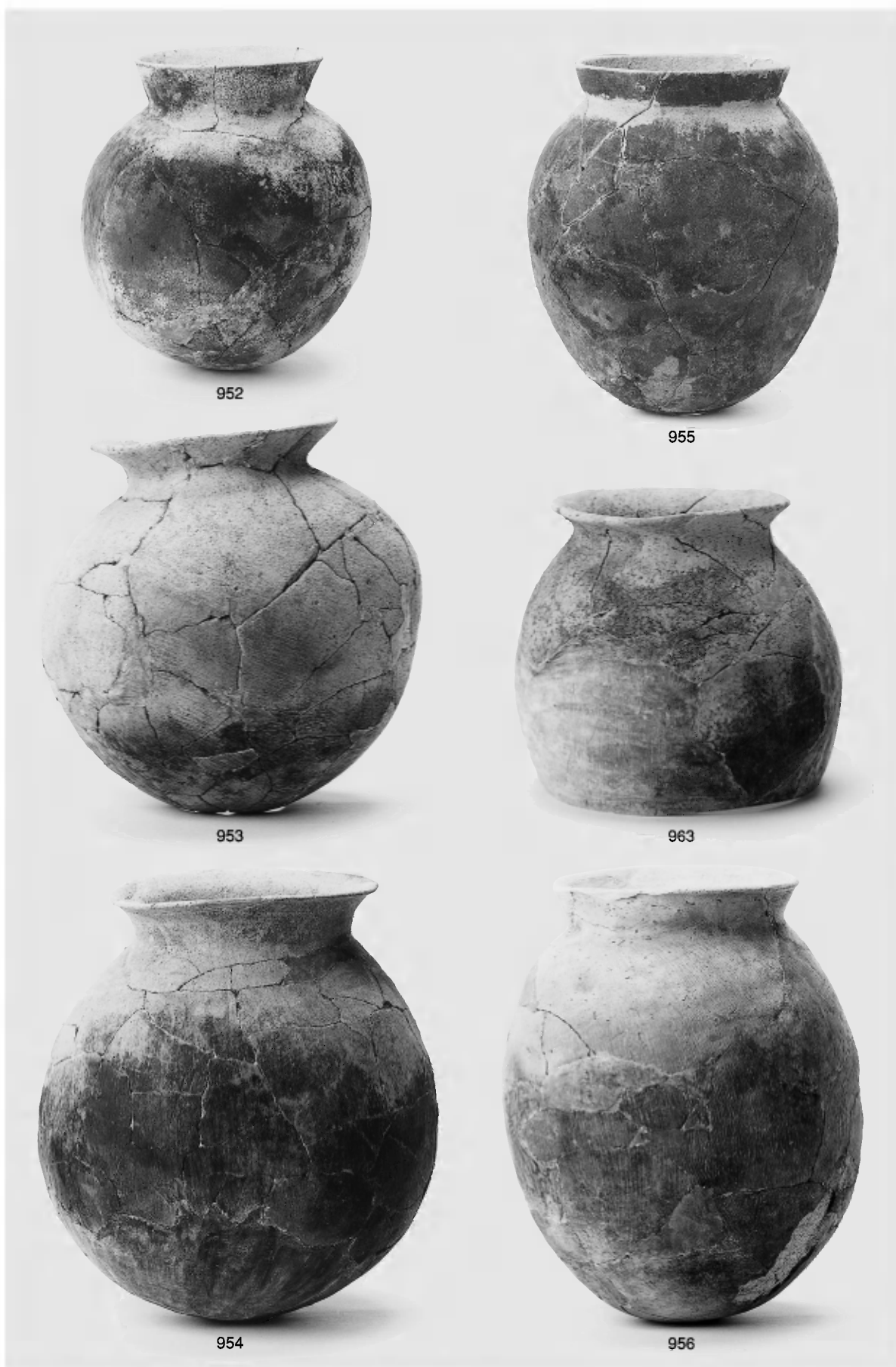
2 溝80出土遺物①



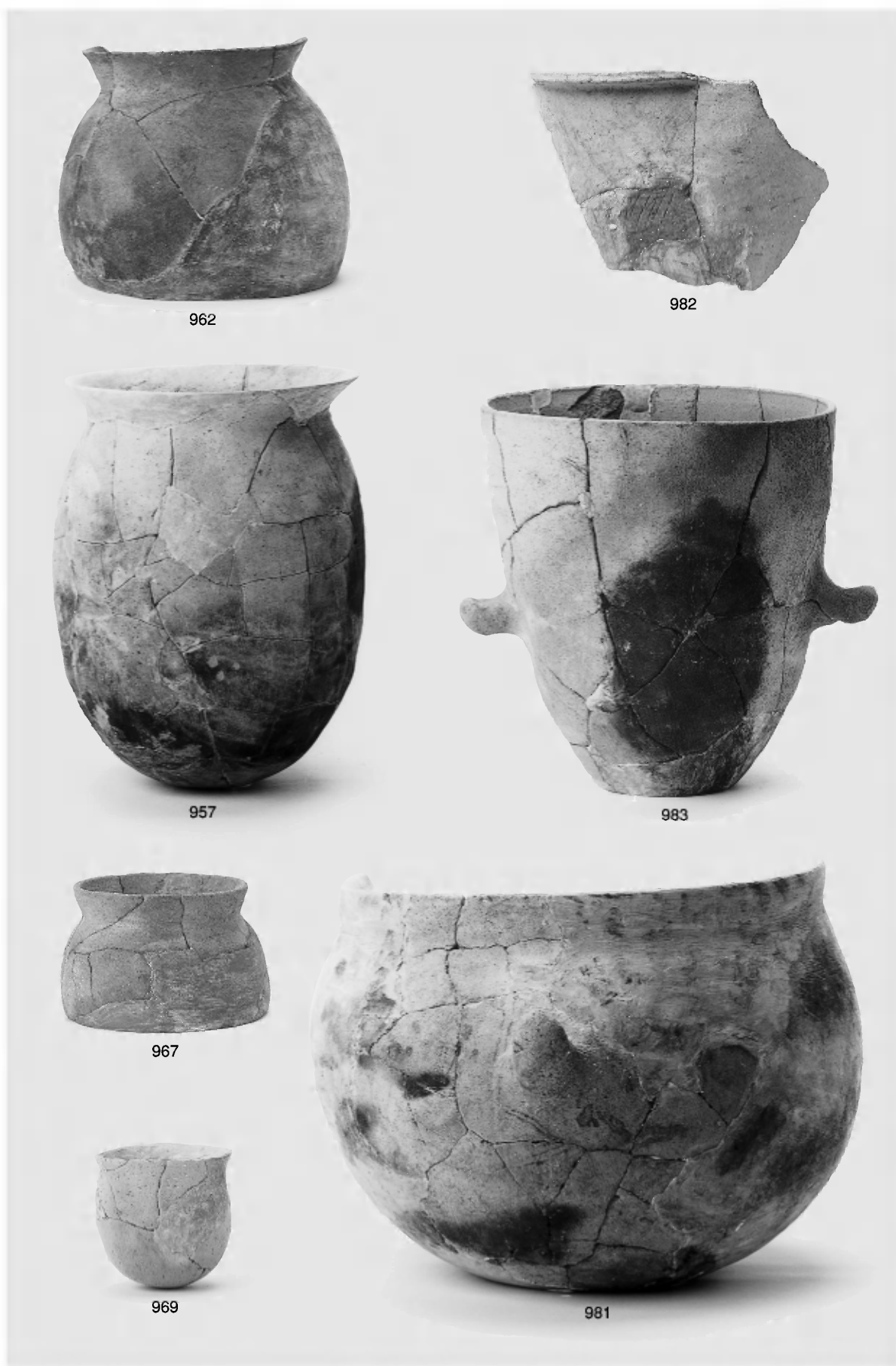


溝80出土遺物②





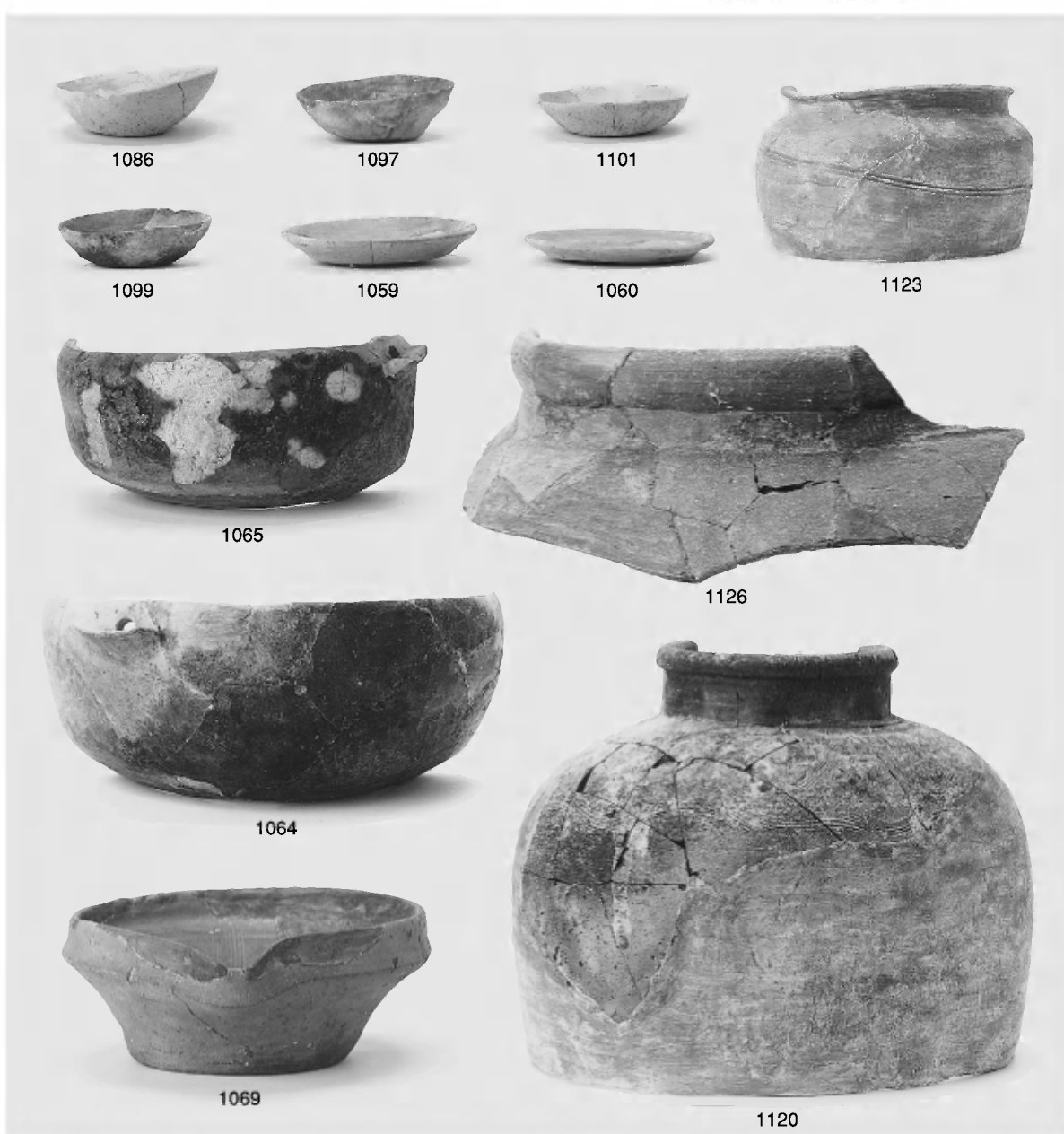
溝80出土遺物③



溝80出土遺物④

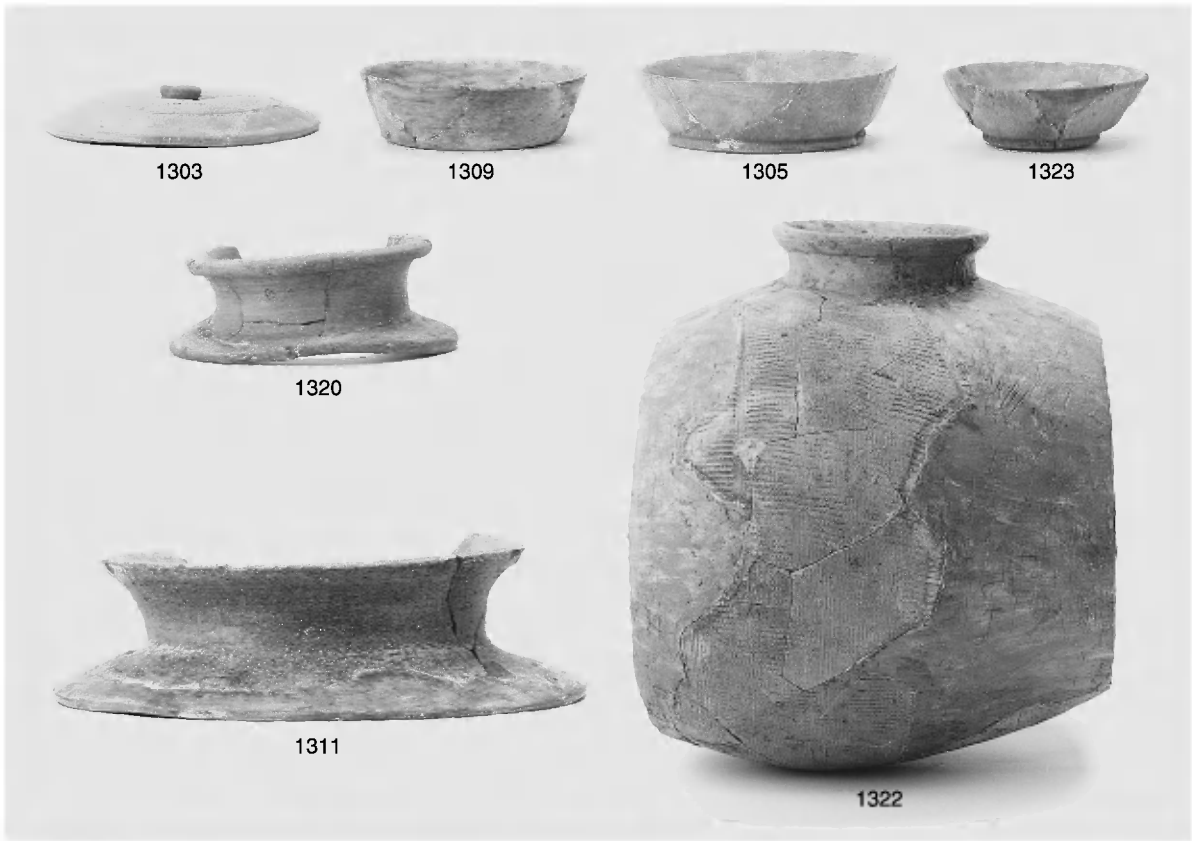


1 溝80出土遺物⑤



2 井戸19・22・24出土遺物

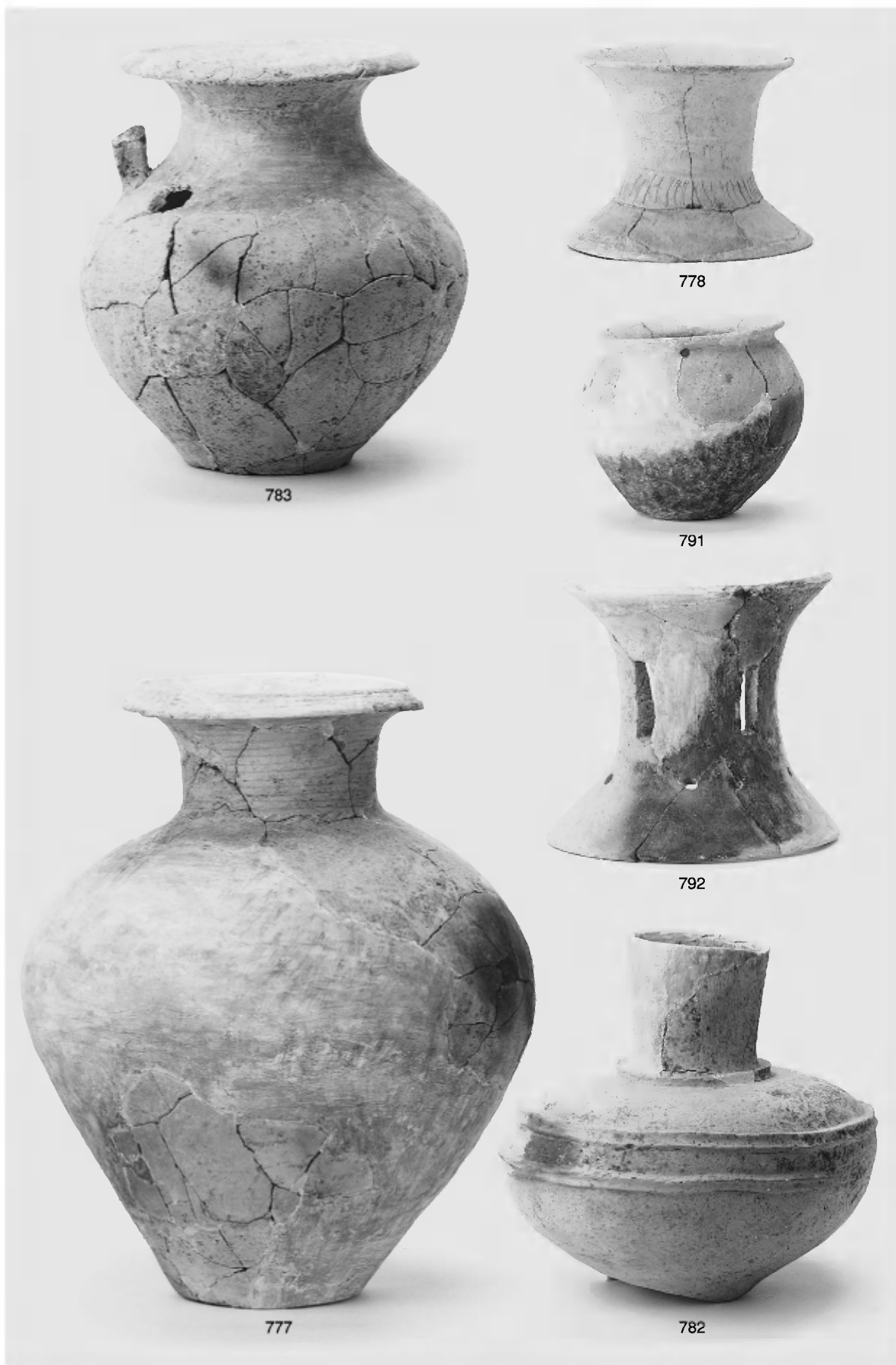
图版 86



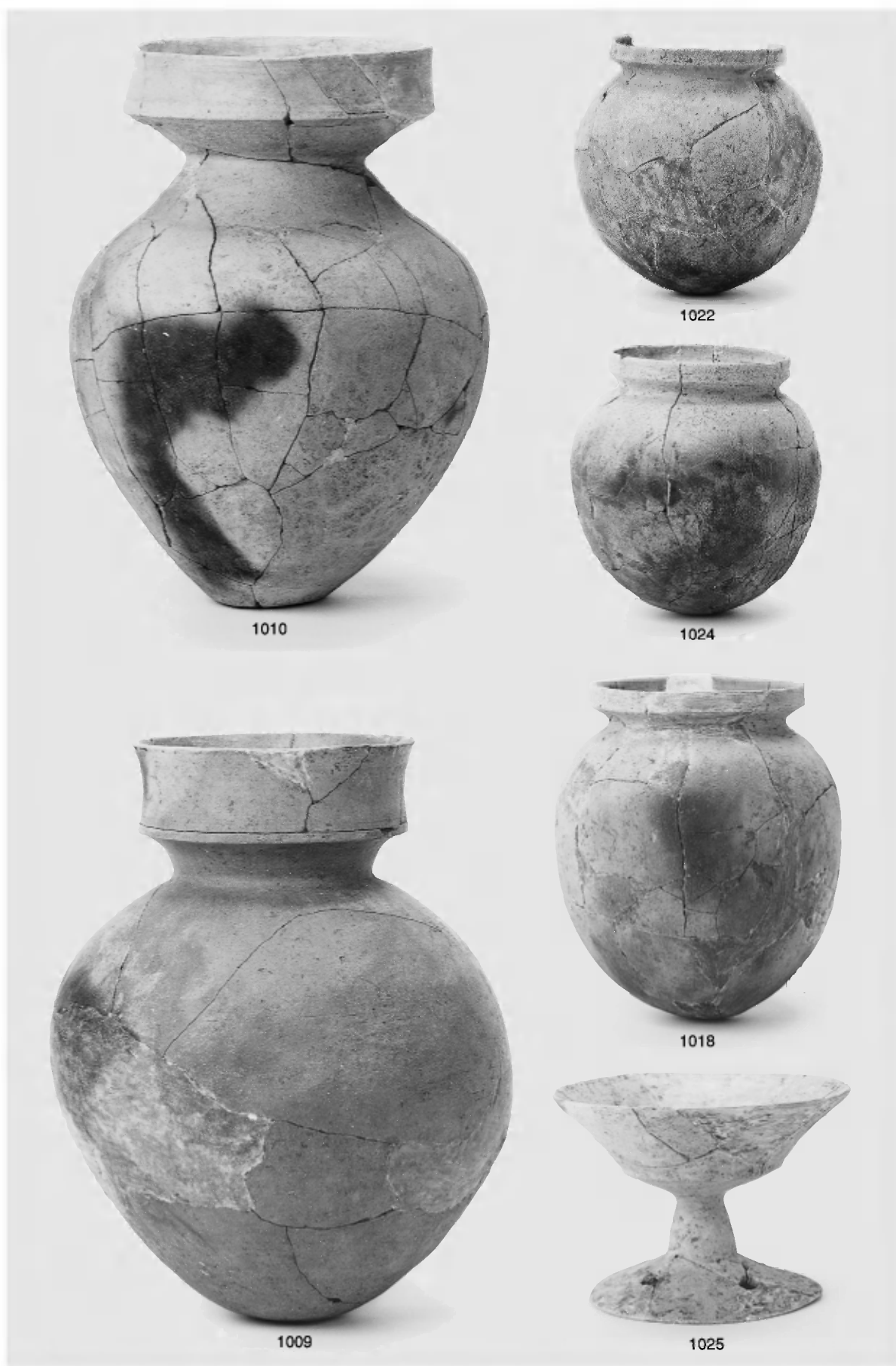
1 溝130出土遺物



2 溝115・128・131・139出土遺物

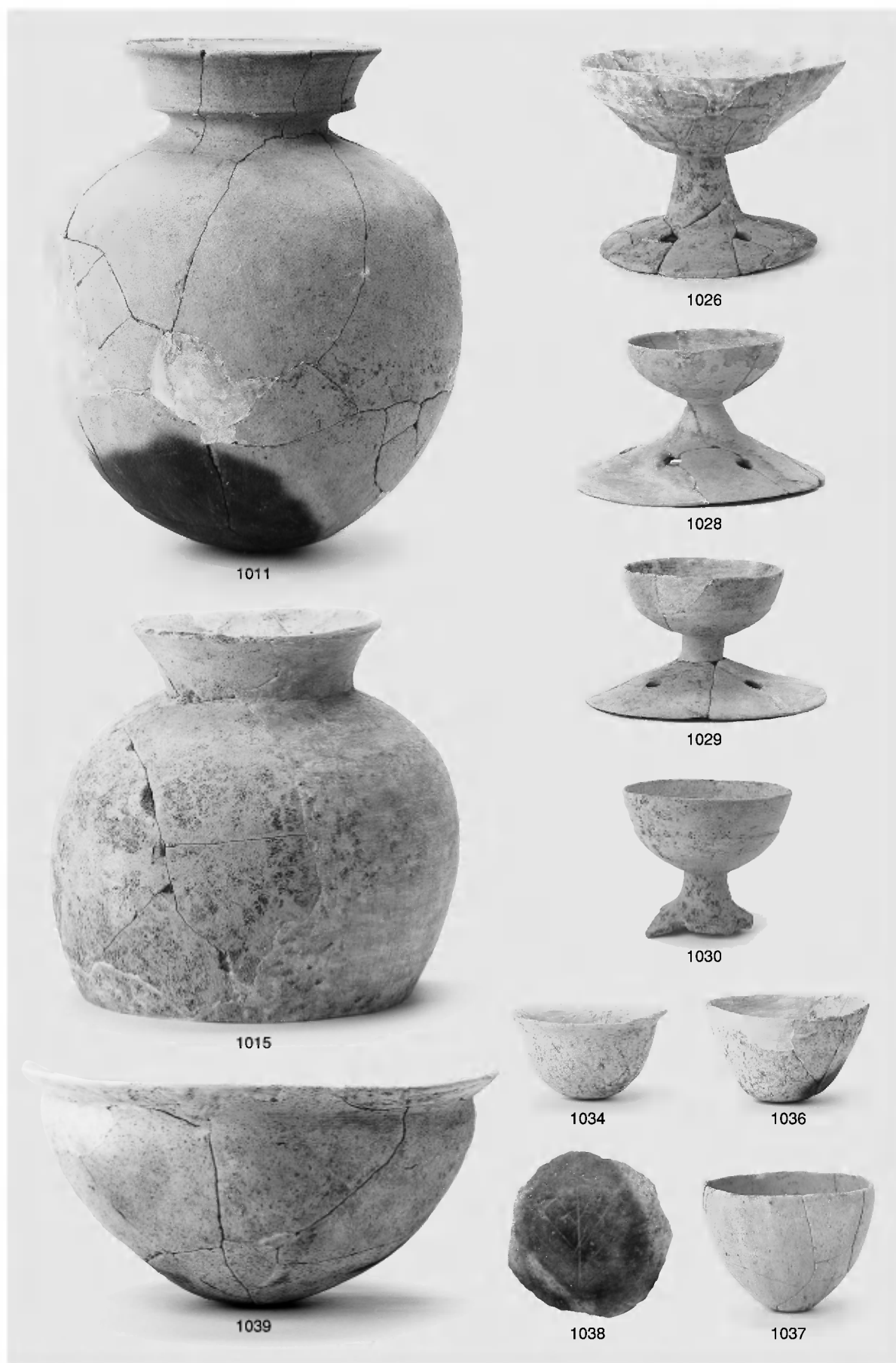


土器溜り1 出土遺物



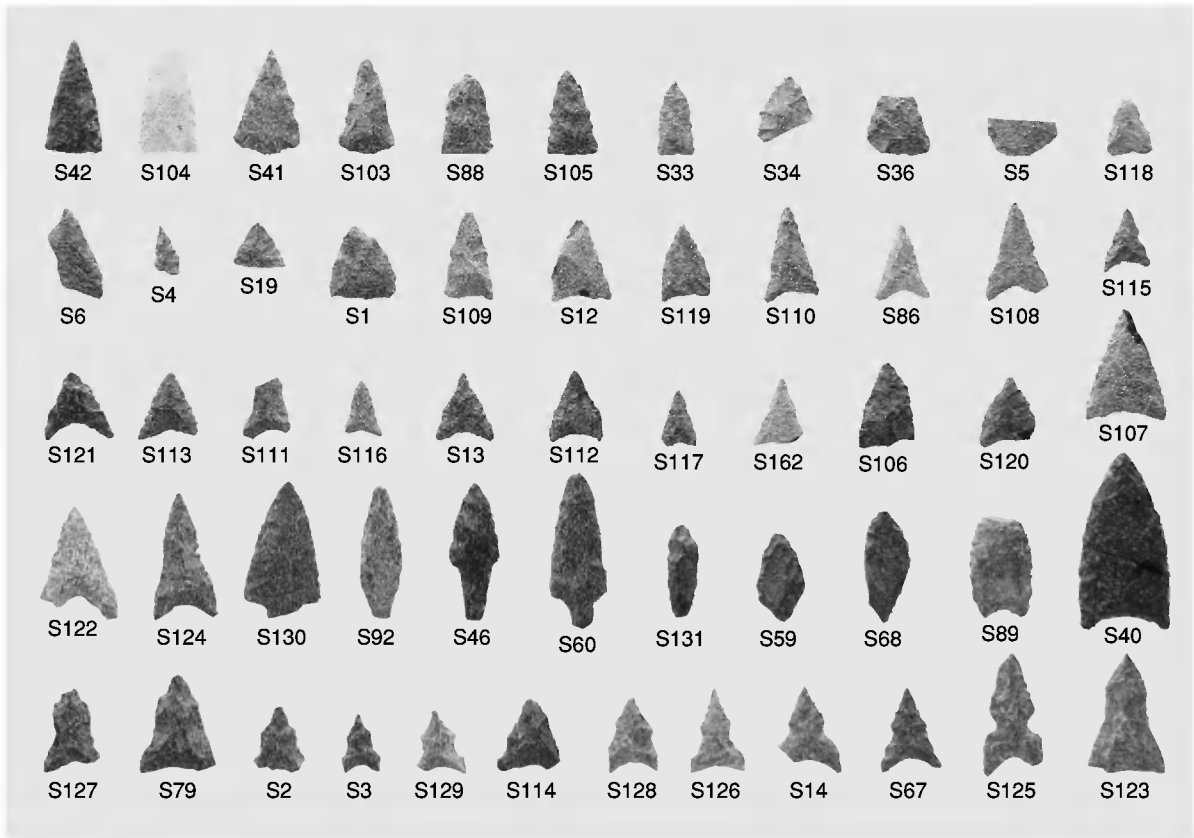
土器溜り 2 出土遺物①



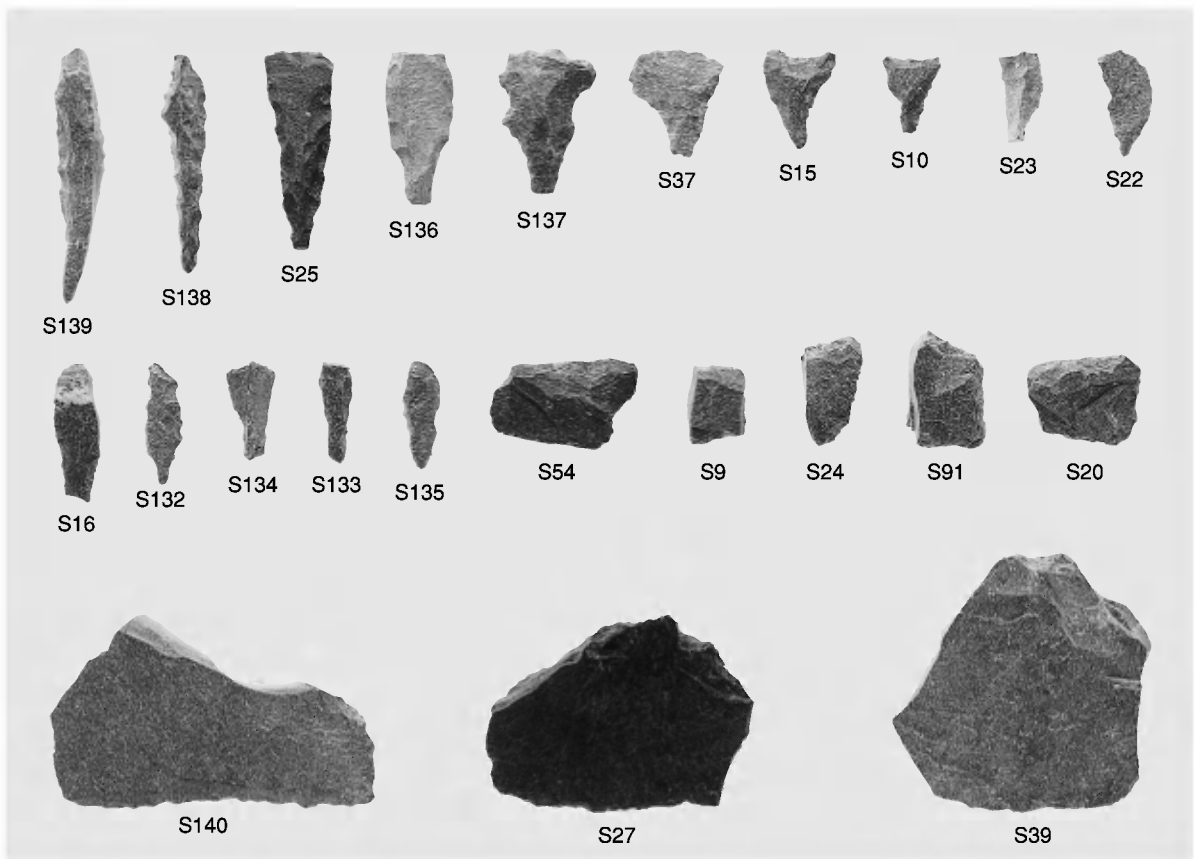


土器溜り 2 出土遺物②

图版 90

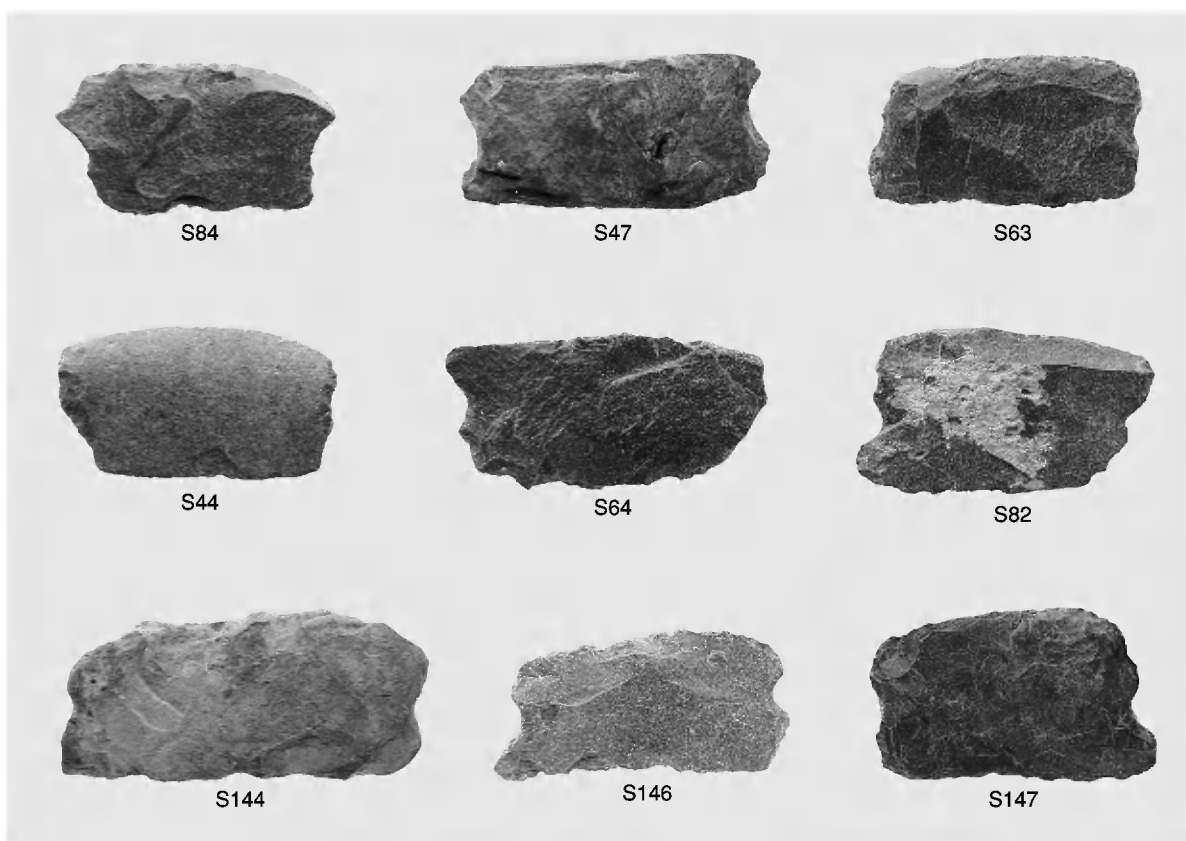


1 石製品①

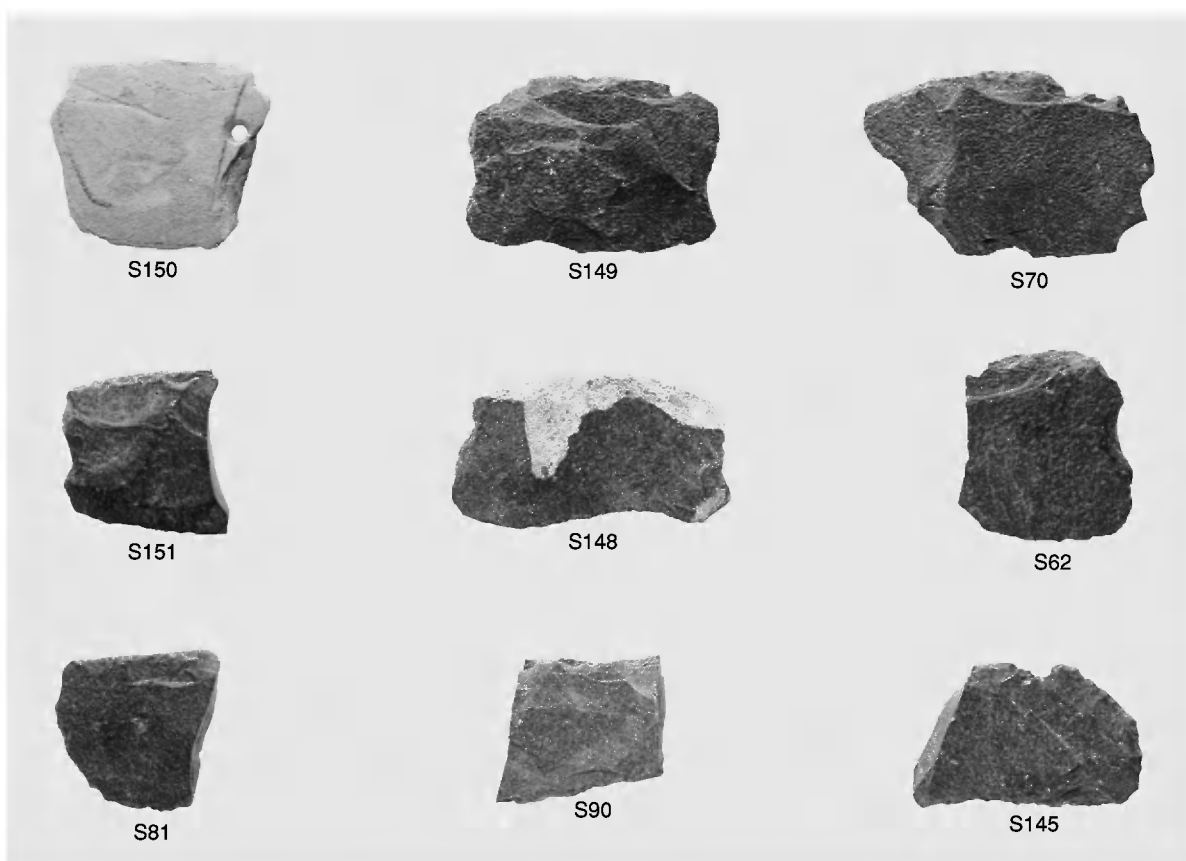


2 石製品②

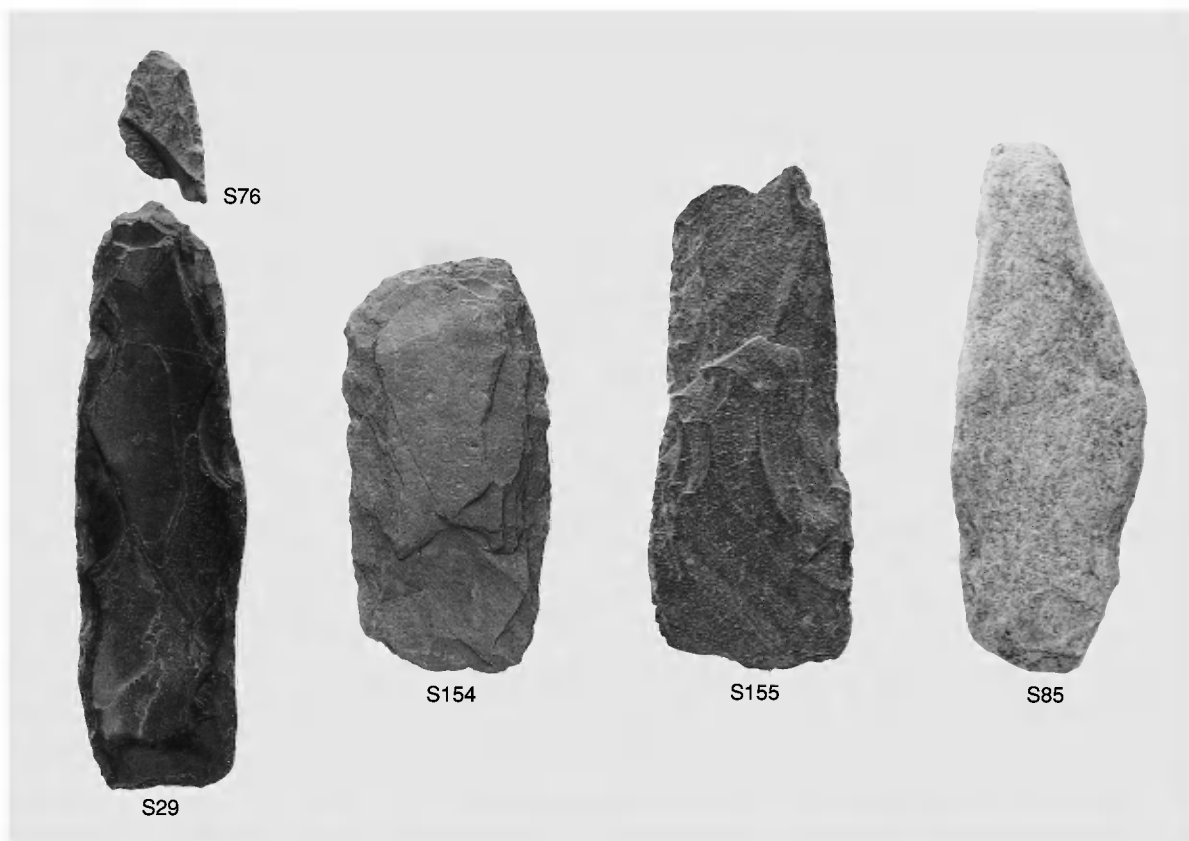




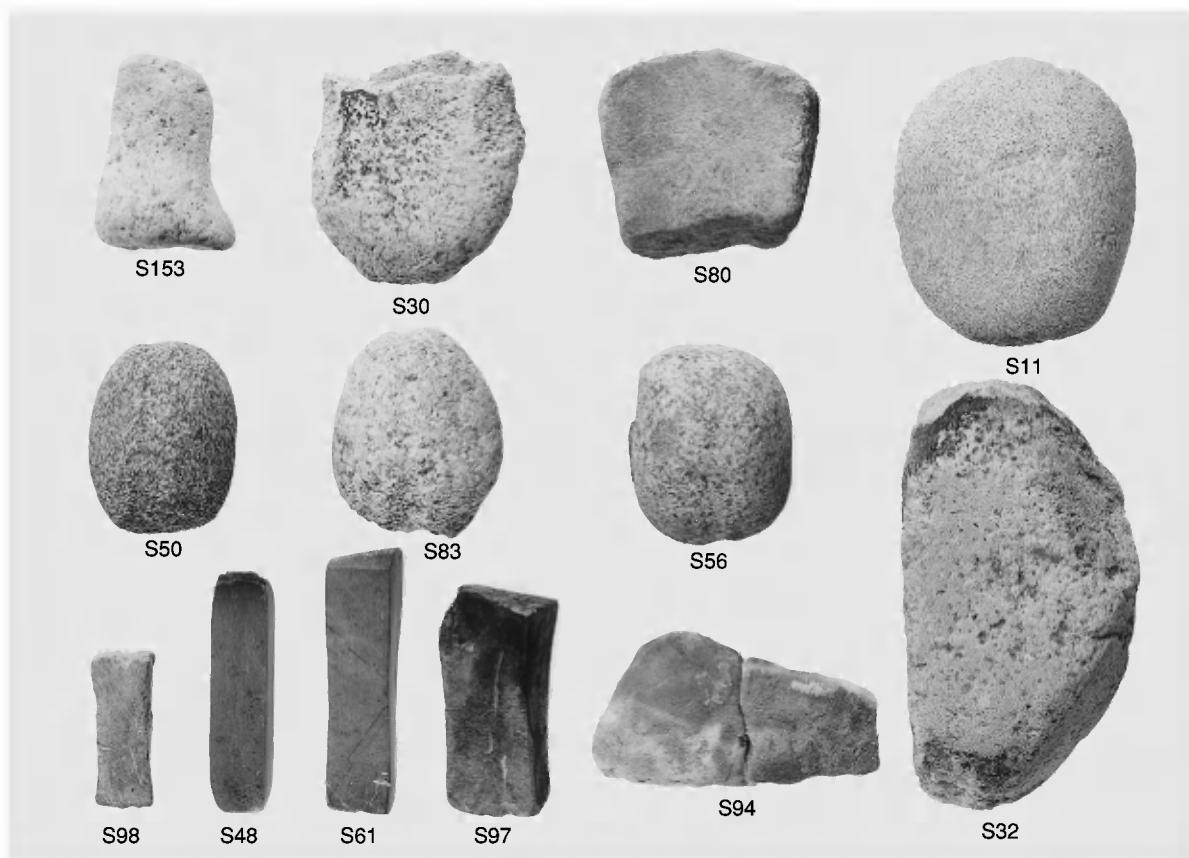
1 石製品③



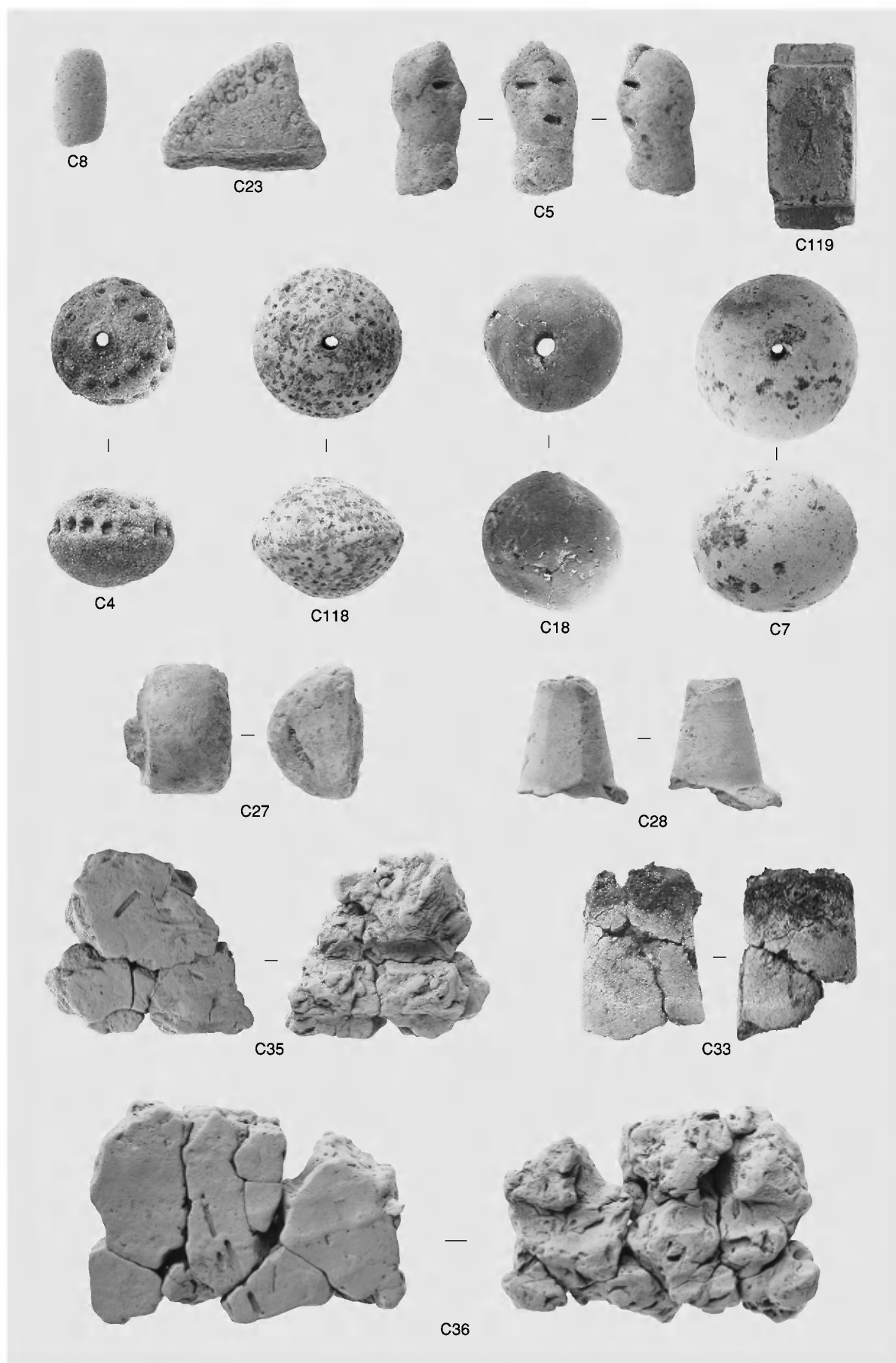
2 石製品④



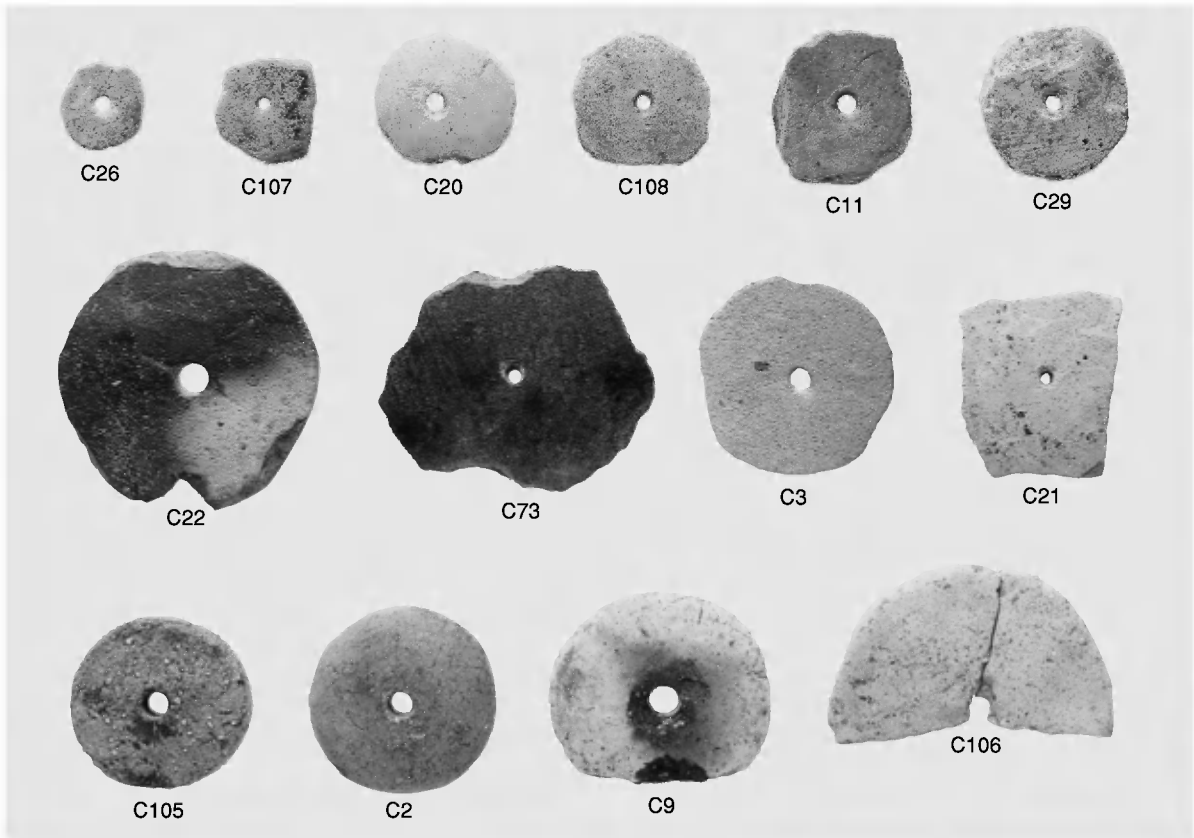
1 石製品⑤



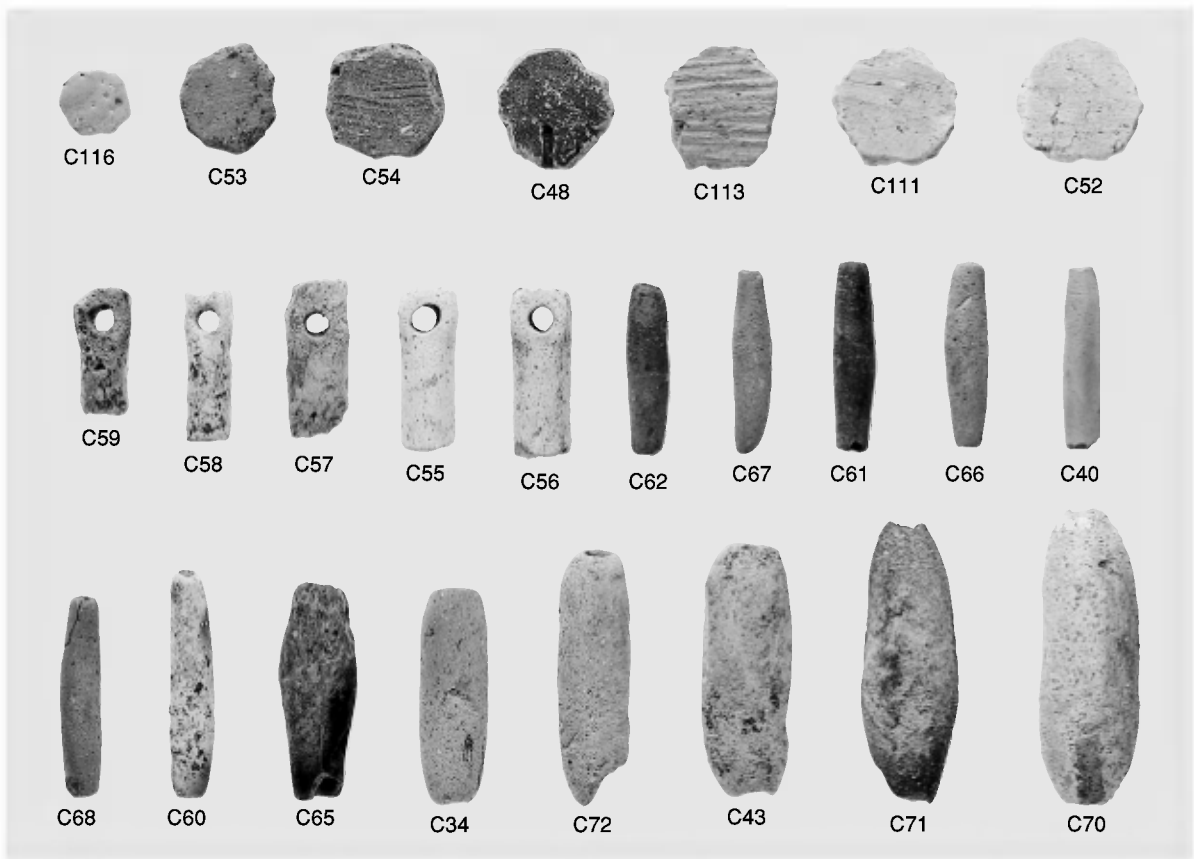
2 石製品⑥



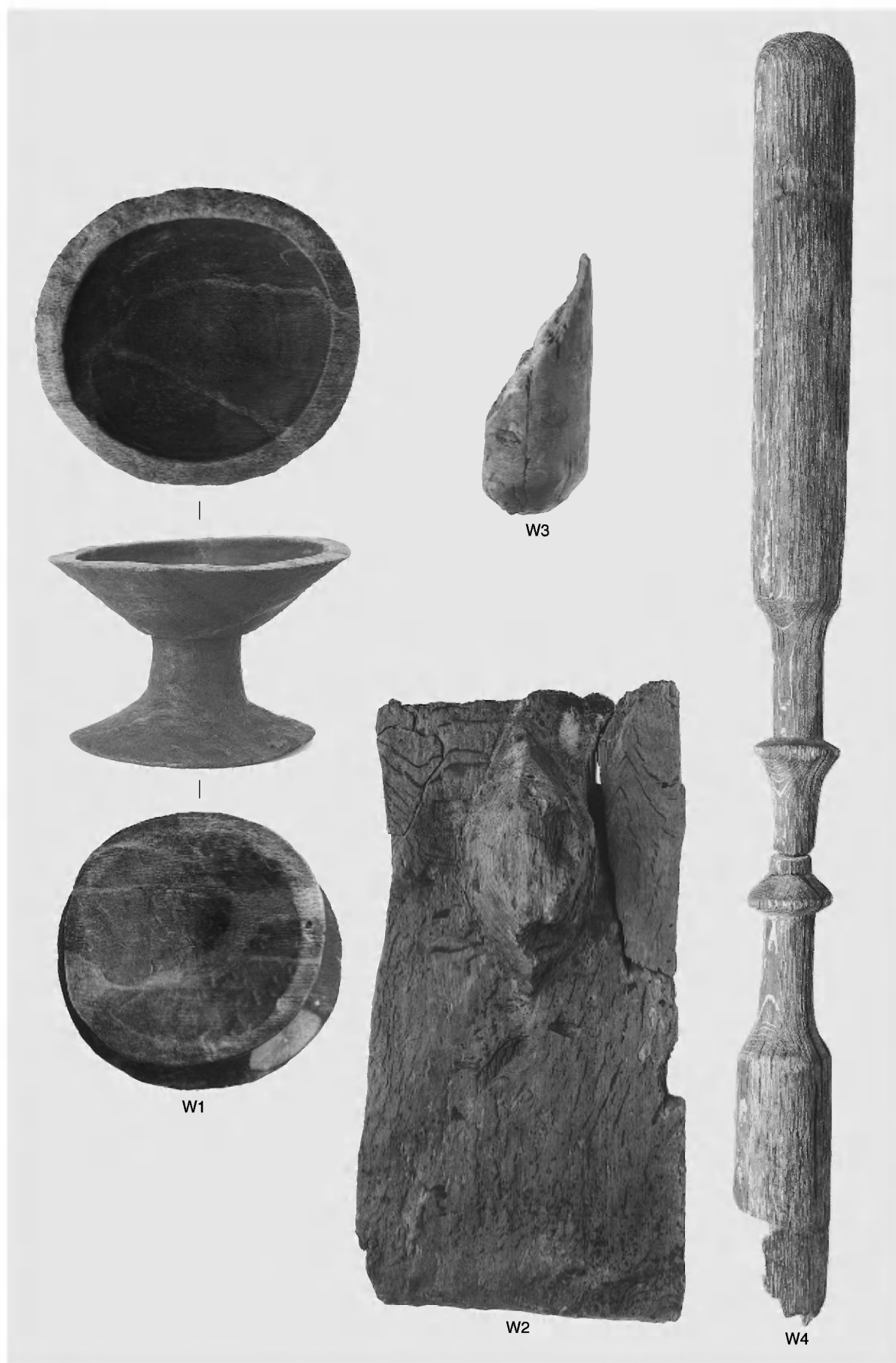
土製品①



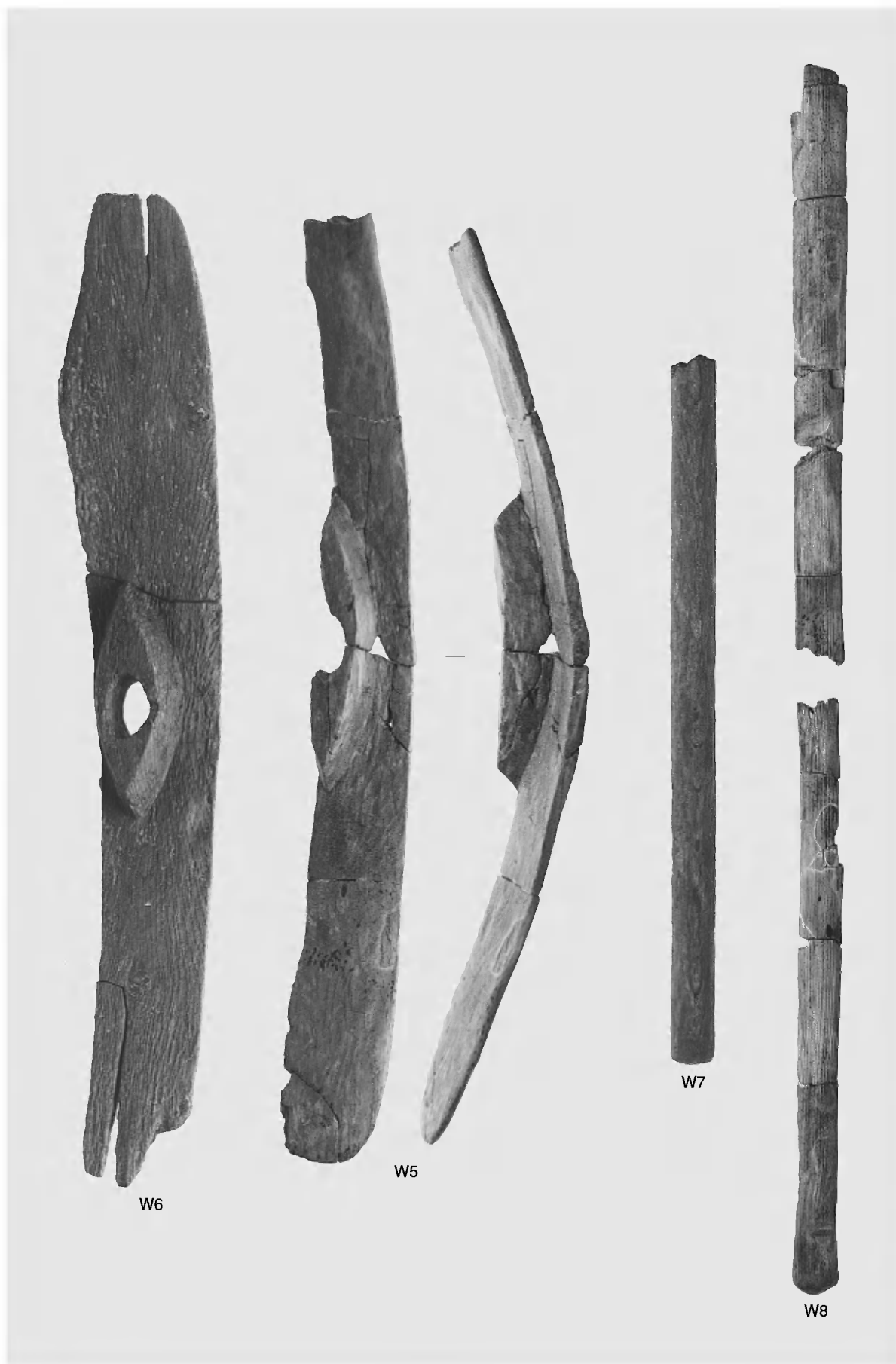
1 土製品②



2 土製品③



木製品①



木製品②

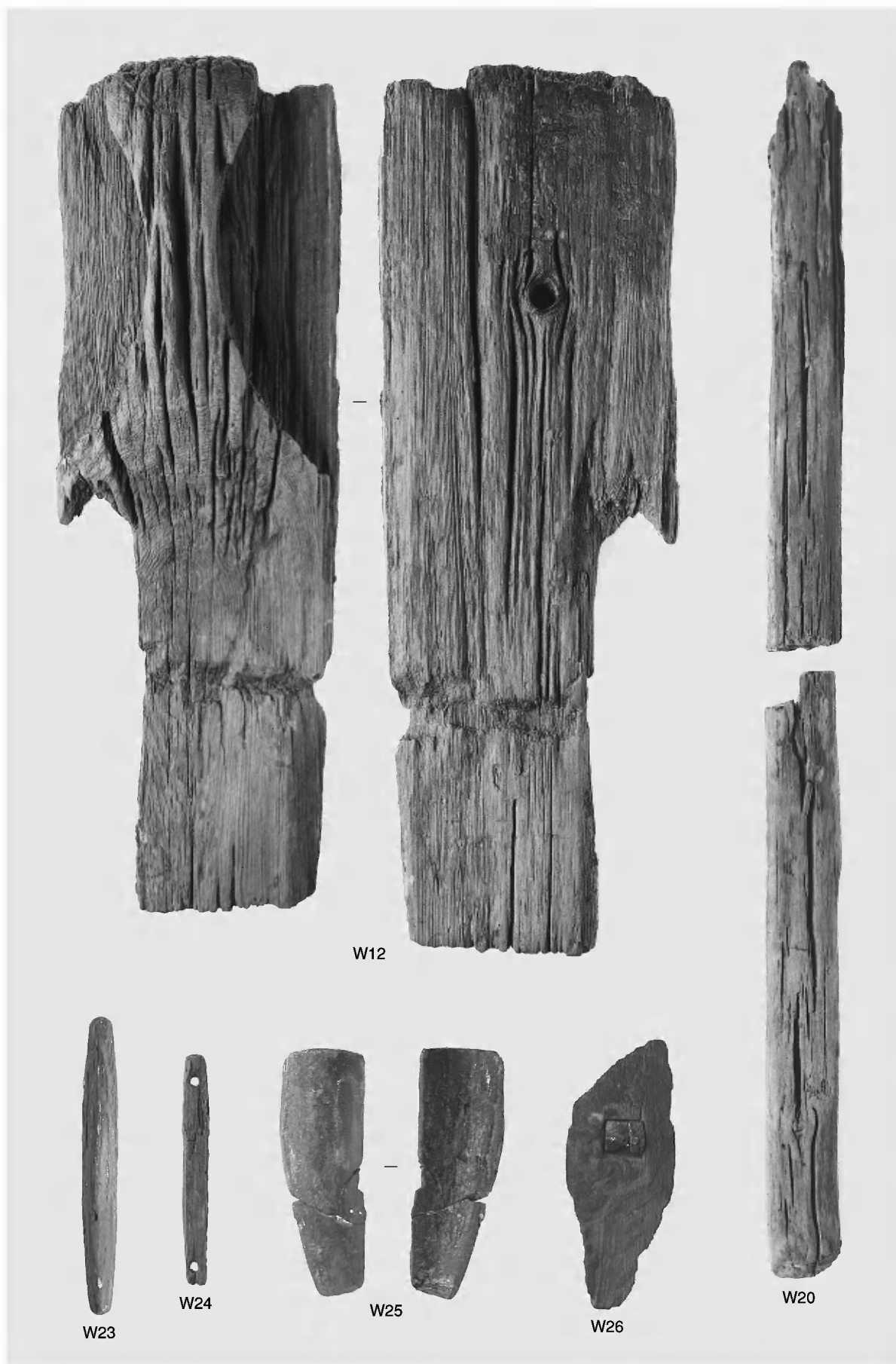


W9

W10

W11

木製品③



木製品④





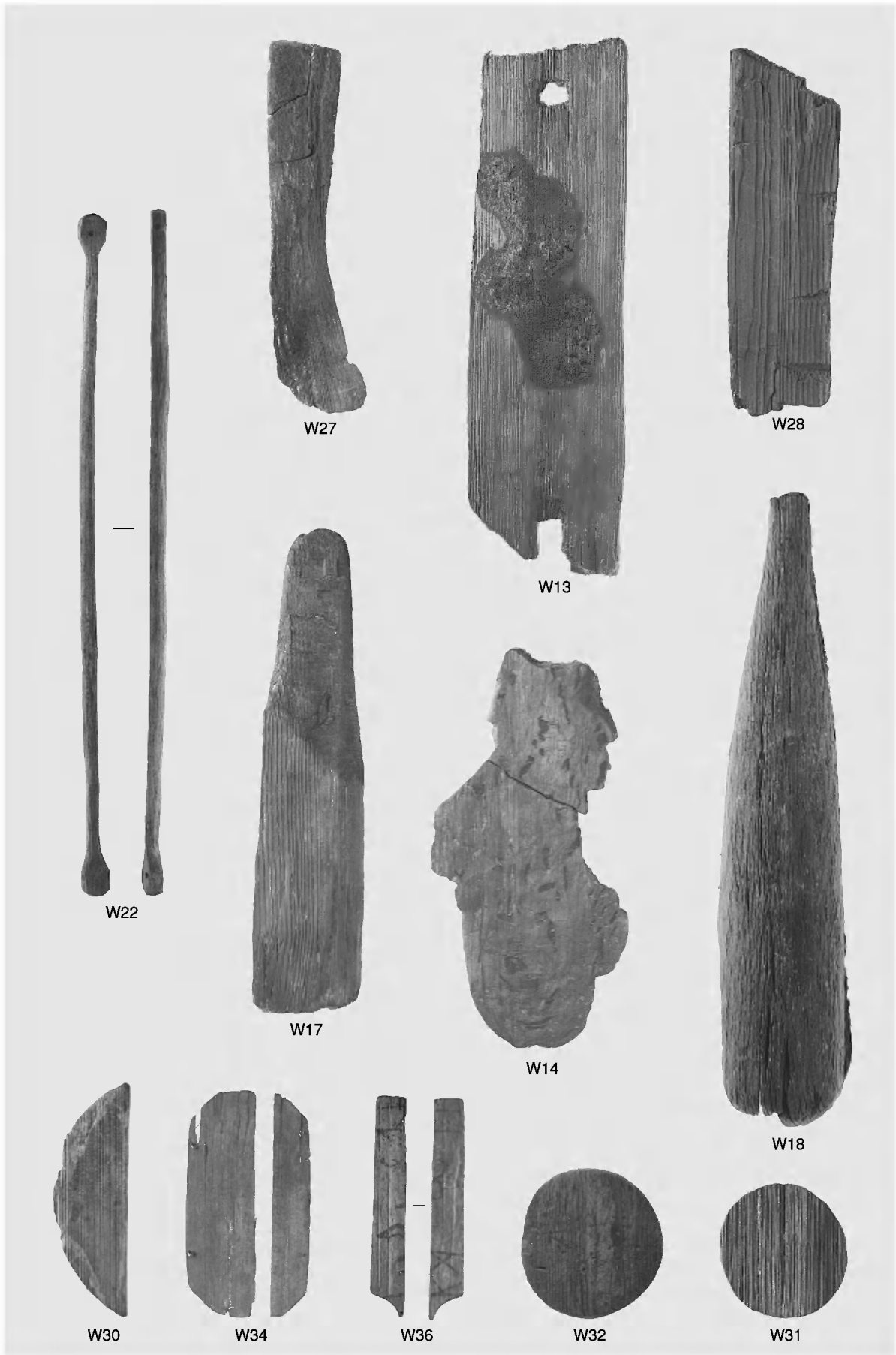
W19

W15

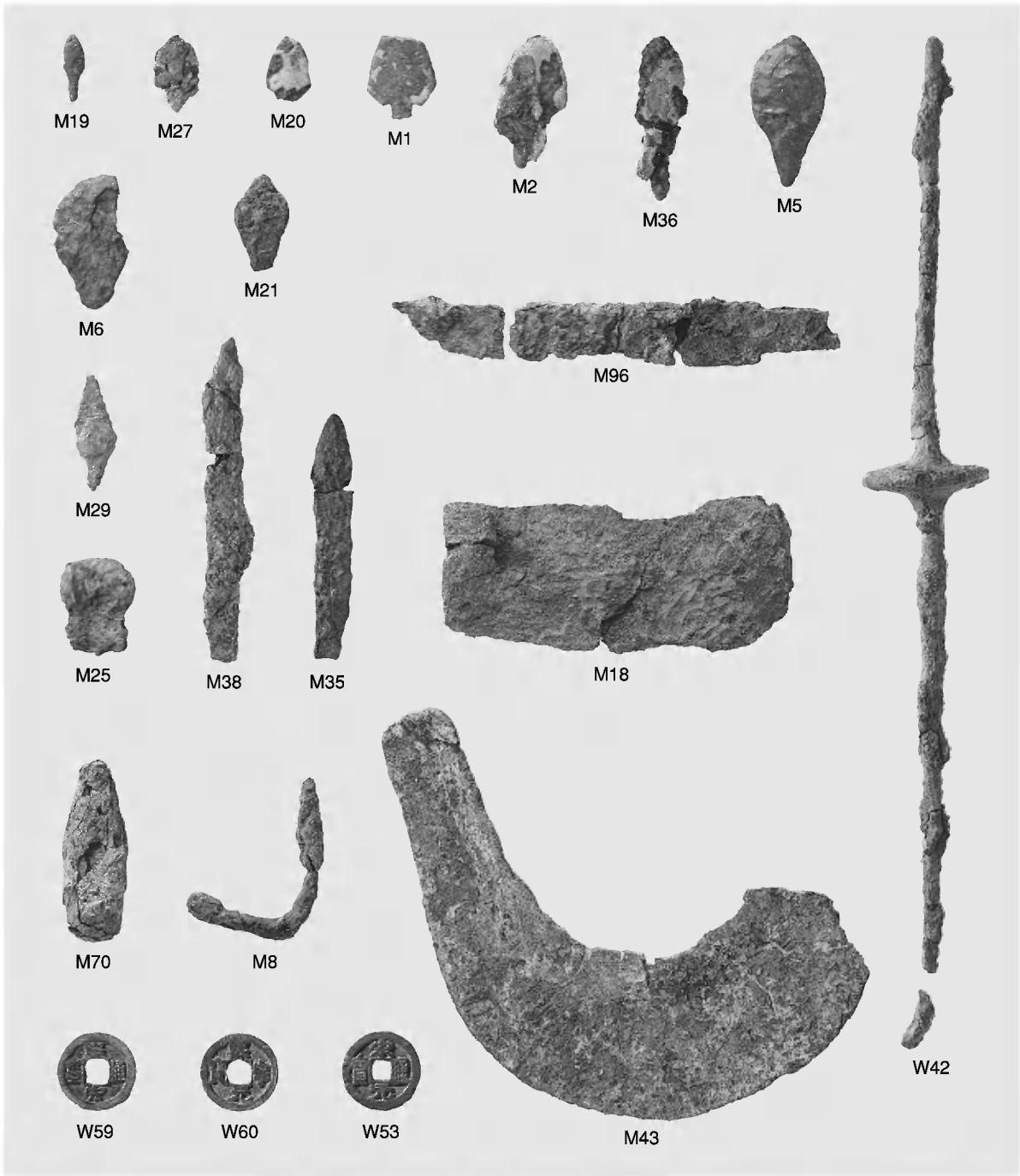
W16

W21

木製品⑤



木製品⑥



1 金属製品



2 玉類

## 報告書抄録

ふりがな	ひゃっけんがわはらおじまいせき							
書名	百間川原尾島遺跡 6							
副書名	旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査							
巻次	XV							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	179							
著者名	小嶋善邦・宇垣匡雅・高田恭一郎・柴田英樹・物部茂樹・松尾佳子・柳瀬昭彦・稲谷知子・肥塚隆保・白石 純							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3			TEL 086-293-3211				
発行機関	国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会							
所在地	〒700-0914 岡山県岡山市鹿田町2-4-36			TEL 086-223-5101				
	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6			TEL 086-224-2111				
発行年月日	西暦2004年 2月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひゃっけんがわ 百間川 はらおじまいせき 原尾島遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 はらおじま 原尾島	33201		34°	133°	1195.11.15~17 1998.10.2~ 1999.3.31	8,160	旭川放水路 (百間川) 改修工事
				40'	57'	1999.4.1~ 2000.3.31 2000.4.1~		
				12"	23"	2001.3.31 2001.4.1~27		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
百間川 原尾島遺跡	集落 水田 生産 遺跡 河道	弥生時代	竪穴住居・掘立柱 建物・井戸・土壇 ・土器棺墓・炉・ 溝・水田・土器溜 り・粘土配置	弥生土器・石製品・木製 品・土製品・金属製品・ 玉類・動物遺存体		幾重にも巡る竪 穴住居排水溝お よび周溝が調査 される。前期の 旧河道から大量 の木器が出土		
		古墳時代	竪穴住居・掘立柱 建物・井戸・土 壇・溝・土器溜り	須恵器・土師器・石製品 ・木製器・土製品・金属 製品・玉類・動物遺存体		溝から大量の木 器が出土		
		古代	溝	須恵器・土師器				
		中世	掘立柱建物・井戸 ・土壇・道・溝	須恵器・土師器・瓦器・ 磁器・木製品・土製品・ 動物遺存体				

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告179

## 百間川原尾島遺跡6

旭川放水路（百間川）改修  
工事に伴う発掘調査 XV

平成16年2月27日 印刷

平成16年2月29日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 国土交通省岡山河川事務所  
岡山市鹿田町2-4-36  
岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 山陽印刷株式会社  
岡山市富吉3098-1